
幕末奇譚 『志士 狂桜の宴』

夏月左桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幕末奇譚 『志士 狂桜の宴』

【Nコード】

N7031P

【作者名】

夏月左桜

【あらすじ】

村木和奈は、維新を目指す志士達や武士であろうとする新撰組の生きる動乱の世へと迷い込んだ。武市半平太や桂小五郎と過す中、共に歩む事を決意した和奈は、やがて【狂気】によって戦いへと導かれ始める。一方、和奈と共に幕末へと迷い込んでしまった赤井修吾もまた、土方歳三との出会いにより、新撰組として生きる道を選択する。歩む道を別った二人が、それぞれの想いを紡ぎながら動乱を駆け巡る物語。※史実にほぼ則り進行します。フィクションである為、歴史の事象が異なっている部分や登場する人物の生死が逆転

している場合がある事ご了承下さい。幕末史に興味を抱いて頂ける事を願って。

時渡り

昭和四十四年七月。

第二次世界大戦が終結して二十余年。欧米の文化が日本文化を押す勢いで流れ込む時代となり、古きとされる和の文化は次第に洋式文化へと変貌し始めていた。復興の勢いにあわせ、違った意味での混乱が日本を駆け巡り、古くから培われて来た日本人の心もまた、欧米化の波に飲まれつつあった。

組太刀を終え、始めの立ち位置に位置に戻った村木和奈は、息を一つ小さく吐いてから一礼した。

竹刀稽古が連日あったせいか、組太刀が思いのほかきつかったせいなのか、足全体に痺れるような感覚が広がっている。だからとふらつく事はできない。

呼吸を整え、正面に座している師範の桂木正太郎に一礼を送ると、姿勢を正したまま剣道場の隅へと移動して行く。

和奈が通っているのは、古流武術剣術心形刀流しんぎようとうりゅうを教える道場「練武館」だ。

心形刀流は伊庭秀明いば ひであきが本心刀流を元とに天和二年（1682年）に開いた流派で、一刀、二刀技法、居合術、薙刀術なぎなたを教え、桂木の練武館もこの剣術の伝承を目的として門下生を集めている。

江戸時代末期頃に於いて、江戸の三大道場で名高い玄武館、練兵館、士学館に並ぶ道場として練武館の名もあり、これを含め四大剣術道場とされた。

ある日、父村木耕造を訪ねて来た桂木が、女性と言っても礼儀作法は必要であり、稽古を通し精神面を強くする武術は得はあれど損はしないと道場通い勧めてきた。旧友であるにも関わらず、耕造に

は剣術を教えているくらいの知識しかなかった。しかし、礼儀作法は封建社会に育った構造にとっては重要なもの一つであり、それならばと、当事者となる和奈の意志を確かめぬまま入門を快諾してしまった。

渋谷通い出して十年の月日が過ぎた。

桂木の指導は言葉で言うよりも厳しい。常日頃から、養う努力を積み重ねる事こそが大事であると、道場に入った時だけでなく平素の生活に於いても、道場に居ると同じ心構えを要求する。云わば一日二十四時間が修練であり、鍛錬だと言うのである。それに堪え切れず根を上げ辞めていく門下生も少なくなかった。

辛いと言っても、仕事のストレスや時折襲われる不安感を沈めるには、道場の凜とした空気が欠かせなくなっている。決して家で作り出せる空間ではない。父が出した決断だったが、良い判断であった事は和奈も認めている。他の女学生とは違った思春期だったが、それはそれで十分楽しい時期となった十年間である。

門下生の組太刀を横目に、桂木は和奈の横へと立った。

「相変わらず、組太刀は不得手てと見えるな」

「はい」

「太刀を振るう者は、一手二手と先の太刀筋を読まなくてはならんのだが、それが君にはできてない。技の鍛錬はもちろんの事だが、精神の修練もそれ以上に積みなくてはいかん」

「努力してるつもりなんですが・・・」

恐縮してしまっている和奈を見下ろした顔が笑みを浮かべる。

「よく着いて来ていると、感心はしているのだがな」

道場通いを勧めたが、正直言ってここまで続けられるとは桂木も予想していなかった。十二歳と言えば何事にも多感になる時期である。まして女性ともなれば色々な面で変化の起こる年代だ。一年続けば良い方だと思つての勧めであった。

「勧められたからと来る者や、健康にと通ってくる者にとって、私

の稽古は随分厳しいものだろう。だが武術を続ける事は良いものだ。心を澄まして座せば周りが見え、己の心も次第と観えて来る」

「あ、なんとなく解ります」

「ほう」

意外だと言わんばかりの顔が和奈を覗き込む。

「道場の雰囲気が好きなんです。この雰囲気ってなかなか味わえませんか」

「嬉しい事を行ってくれる。そう言って貰えると誘った甲斐もあるな」

「実技の方はからつきしですけど」

緩んだ桂木の顔が厳しく引き締まった。

「何かに打ち込むというのは決して無駄な事ではないよ。結果が良くても悪くても重要となるのは、そこに至る努力を積み重ねる経緯過程だと私は思ってる。辛くとも、何かを成した後の爽快感を私は忘れる事ができない。だから今もこうして毎日剣に心を通わせるのを怠ってはいない」

剣に心を通わせる。

これまでに何度となく桂木が口にして来た言葉である。

「心で振る剣は、その心のあり方に沿って応えてくれるものなのだよ」

心のあり方。と、胸に何か刺さったような痛身を覚えた。

（なんだろう。何かがー）

「そうだ。今度の土曜だが、予定はあるか？」

一瞬戸惑った奇妙な感覚は、その言葉で消されてしまった。

「父から本の整理を手伝うよう言われていますが」

「耕造には私から連絡を入れておこう。一緒に京都へ来なさい」

「交流試合ですか？」

いい機会だと笑う桂木は、腕組を解いたかと思うと組太刀の終わった門下生に怒声を飛ばした。

「先生！」

背は余り高くはなかったが、均整のとれた体格と、少年のあどけなさが残る顔立ちの赤井修吾は、道場に通う門下生の中でたった一人、桂木が良い剣士と褒めた人間である。

和奈と同じ高校に通う同級生だった。クラスが別だった赤井と接する機会も無く、よって会話は交わした事がない。先に道場通いを始めたのは和奈の方で、赤井は一年遅れてこの道場の門下に入ってきた。

二人の前へ立った赤井はまず桂木に一礼し、和奈には一瞥をくれただけで視線を戻してしまった。

「今度の土曜の日程を確認したいのですが」

「後で私の部屋に來なさい。ああ、そうだ。村木君も同行する事になったから、旅館の方に連絡しておいてくれるか」

「え？ あ、はい。解りました」

ちらりと怪訝そうに自分を見た赤井が、ふん、と鼻を鳴らしたように和奈には見えた。

（やな奴）

ムツとする和奈を気にするでもなく、赤井は軽やかな足取りで道場から出て行った。

「彼とは高校が同じだったね」

「はい。でもよくは知りません」

「いい腕をしているよ」

（腕が良くても性格が悪くちゃあねえ）

「今の時代、剣氣を読むのに長けている者に出会うのは中々無いものだ。いい手本となるだろうから、彼の組太刀をよく見ておくといい」

そう言って、桂木は集まっている門下生の所へと歩いて行った。

土曜は良く晴れた天気となった。

朝五時に起床した和奈は稽古道具を持ち、集合場所となっている大阪駅南口へとやって来た。

桂木の長身はよく目立っており、週末で人で溢れ返っている中でも探す手間はかからなかった。

「おはようございます！」

「やあ、おはよう」

桂木の後ろに赤井を見つけた。輪から少し離れた所で、誰と話しをするでもなくただぼうっと立っている。

「さあ、行こうか」

電車に乗り込んだ桂木は、手にした紙を見ながら一人一人の名前を呼び席を示して行く。

自由席なのでどこに誰と座ろうが関係ないように思えるのだが、こういう所でもきちっと仕切らないと気がすまない性格なのだ。

「うっ・・・」

村木と指された席には赤井が座っていた。

一瞬、体が後ず去りしそうになったのを必死と耐え、荷物を棚に乗せ空いた席に腰を落ろした。

（選りにも選って赤井修吾の横なんて）

これは誰も居ないと思い込むしかない。そう思いつつも、右ひじを窓枠に乗せ頬杖をついている赤井をちらりと見る。

（うわあ、気まずいというか、寧ろ私が居心地悪い）

「居心地が悪いのは俺も同じだから、我慢しろ」

ビクッと和奈の背筋が伸びた。

鳴り響く発車のベルを合図に、ゆっくりと電車が動き出す。

握った両手を揃えた膝の上に置き、視線を真っ直ぐ向ける。京都へ着くまでの四十分は、長くなると、和奈は小さくため息をついた。

「あのさ」

その声にまた背筋が伸びる。

「あのなあ。話しかける度にそうやって背筋伸ばすのかよ。失礼な奴だなおまえ」

おまえ呼ばわりされるほど、仲が良かったのかと思うが口にはしない。

「失礼してごめんなさい」

変な日本語を口にし、笑顔を作ろうとした努力は頬を引き吊らせた形になり徒労に終わった。

「なんで剣術続けてるの？」

「はっ？」

いきなりの質問に答えを窮し、無言のまま前の背もたれを見める。

「理由、ないの？」

しつこい。

「ありますけど、話す必要ある？」

赤井がやっと窓の外から視線を和奈へと向けた。

「・・・ないけど。二十を超えた女が、わざわざ休日交流試合見に来るなんて珍しいと思ったから」

途中、年齢のところで和奈は手を一段と握り締めた。

「すいませんね、デートの予約もありますんで」

「あ・・・いや、そういう意味じゃなくて」

「じゃあどう言う意味なんでしょうか」

ニコツツと笑ったつもりだが、やはりヒクヒクと頬が攣った顔は笑顔にならなかった。

「ごめん、言葉が悪かった」

素直に謝られてしまい、ついと出かかった言葉を和奈は慌てて飲み込んだ。

居場所のなくなったこの腹立たしさを、一体何処に向けたらいいのか判らず無言になるしかない。

「集まってくる流派は頭に入れたか？」

話の矛先を変えられ、肩透かし状態のまま顔を赤井に向ける。ここで蒸し返しても仕方がないと肩の力を抜いた。

「名簿はもらってるけど」

それは今、棚に置かれた鞆の中にある。

呆れた様子の赤井は、窓の外から和奈へと視線を移した。

「心形刀流からは俺と榎木稔てんねんりんりゅうさんがでる。天然理心流てんねんりんりゅうからは緒方貢

さんと高崎司くん。北辰一刀流ほくしんいつとうりゅうから杉本透哉さん。神道無念流しんどうむねんりゅうからは佐々木晋一さんと朔月惣太郎さん。鏡心明智流きょうしんめいちりゅうからは・・・確か武本達也さんと桜井慎吾くんだったな。天心鏡智流てんしんきょうちりゅうからは萩原隆利さんが参加して来る。ちゃんと暗記しとけ」

はつきり言って他流派の人など覚えてない。とは今更言い出せる筈もなかったので、和奈は苦笑するしかなかった。

「おまえ、とことん勉強する気ないだろ」

「そんな事はありません」

剣術は覚えようと思わなくても自然と体や頭に入るのだが、流派は極意はとなると覚えようにも記憶しようという脳の活動がぱったりと止まってしまうのだ。

「他流の人相手に、流派間違えたらどうすんだよ」

そんな馬鹿な真似などできないとも解っている。解ってはいても一度に覚えきれるものではない。

「流派は口にしないようにしておきます」

そういう問題ではないのだがと、赤井は呆れて突っ込む氣力を失ってしまった。

「だから未だに伝書も貰えないんだよ」

痛いところを突いてくる。

今回、他流試合に参加して来るのは伝書を貰った者のみである。

赤井は切紙を貰っているので試合に参加となっていた。

伝書とは師範が師弟に授けるもので、習得した技の名前や武芸の意味、流派の由来やその精神が記された書付書である。剣道のような段位制とは異なる。心形刀流の伝書は、下から切紙、初目録、中目録、高目録、免許、印可となり、印可を得たものは独立を許される。この伝書は各流派によって若干の差異があり、心形刀流で目録を得ても、北辰一刀流の目録と一緒にレベルとは限らない。

見学だけの自分と伝書を貰っている赤井。その差に劣等感を抱い

た事はない。稽古に出る回数は赤井の方が断然多かったし、自宅に小さいな稽古部屋も在るらしいので差がつくのは当然と思っている。

「あのさ。あ、背筋伸ばすなよ」

そう、伸ばしかけたのだ。

「敬語はいいからさ、普通に話せば？」

「はあ」
片手で顔を覆う赤井を見て、同じ年なのにと自分が情けなくなってくる。

「ともかく、錬兵館に着くまでに頭へ入れておけよ」
上着のポケットから折りたたんだ紙を取り出し、和奈に差し出す。
「ありがとう」

赤井は口数は少ないが、細かい事によく気がつき面倒見も良いと、年下の門下生からは人気がある。急遽きまった和奈の同行でも、旅館への連絡、切符の手配と手間を掛けてくれていた。

「赤井くん」

「修吾でいいよ」

これまでの状況からして、いきなり名前でもいいと言われても呼べるものではない。

「色々手配してくれてありがとう」

和奈はそれとなく話を逸らした。

「まったくだ」

やはり赤井という男は嫌な奴だ。

「なにに。修吾ってば、和奈ちゃんにちよっかい出してるの？」

突然の声に横へ振り向くと、榎木稔がニコニコ顔で立っていた。

「ちよっかいって、榎木さん誤解してます！」

「慎吾でいいよ。なんて、僕からしたらもう告白に聞こえるね！」
顔を赤らめ、赤井は半開きの口のままだ榎木を見上げている。

「いいねえ青春ってやつは。もっと楽しみたまえ」

誤解を解く暇を与えないまま、榎木はさっさと自分の席へと戻って行ってしまった。

困り過ぎて話しずらくなったのは和奈も同じで、窓枠に肘を付き外の景色へと視線を向けた赤井を横に気にしながら、京都に着くまで落ち着かない時間を過ごす羽目になった。

初夏の京都は、すでに暑い日差しが町に蒸した空気を漂わせていた。

宿は三条駅を西に出て、三条通りに面して建っている加茂川館となっていた。ここは桂木が合宿をする際にいつも使う旅館である。試合の行われる練兵館は、河原町通りを下った祇園四条に在る滅光院の側で、観光地として名高い八坂神社や祇園、円山公園も近くにあった。

加茂川館の表戸を潜ると、飛石の敷かれた細い小道が奥へ連なっていた。

桂木を先に榎木が続き、他の者も連なって入って行く。

「ようお越しやす、桂木はん」

薄紫色の着物を纏った女性が、板の間に手を付き頭を下げた。

この旅館の女将、武上八重子である。

「久しぶりだな女将、また世話になる」

「楽しみにしておりましたさかい、どうぞゆっくりして行っておくれやす。榎木はんも、お達者そうでなによりどすな」

「お久しぶりです。今回もよろしく願います」

榎木は一步進み出て軽く頭を下げると、それぞれが脱いだ靴を綺麗に並べ、お世話になりますと各々挨拶をしながら奥へと入って行く。

「村木さんはうちどうぞ」

男性陣とは反対にある細い廊下へと歩き出した八重子の後を、和奈は急いで追いかけた。

「すべりますさかい、気をつけておくれやす」

磨かれた廊下は確かにすべりが良さそうだった。

歩く廊下の左手に、小さな庭が広がっている。

苔がびっしりと敷き詰められた庭の中央に小さな池が設えられ、周りで花菖蒲が花を咲かせている。池の左右には桜と橘が一本ずつ、青々とした枝を空に向けて伸ばしていた。

「綺麗ですね」

名勝とまではいかないまでも、庭園として鑑賞するには十分な景色に見えた。

「おおきに。庭の手入れは欠かせまへんさかい、庭師に頼んで毎日来てもらってます」

二日、いや三日に一回でも十分綺麗だろうと思う。

近年、京都へは外国からの泊り客も多く訪れるようになっていて。和を好む客に対する持成しには、大変でも毎日の手入れは必要となるのだろう。

六畳一間の和室へと和奈を案内した八重子は、トイレや風呂等の位置を伝えると部屋を出て行った。

井草の良い香りに、大きく深呼吸をする。

道路に面して建っているにも関わらず、部屋は静かだった。車の音もここには届いてこない。

りいーん。

静寂の中、突然鈴の音が小さく響いた。

「へ？」

首を傾げて部屋を見回す。が、掛け軸と花瓶以外の装飾品だけで鈴の音が出る物ではない。風鈴かとも思ったが、窓は閉まっていたし軒下に風鈴は付けられてはいなかった。

暫く耳を澄ませていたが、もう鈴の音は聞こえてこなかった。

鈴の音の探索を諦めた和奈は、ボストンバックから道着・角帯・袴を取り出すと麻袋に詰めかえ、木太刀が入っている布袋を手にすると部屋を後にした。

試合開始までまだ小一時間あると言うのに、練兵館にはもう人が集まっていた。試合に臨む前に精神を整えようと、早い者は二、三時間前からやって来るのだ。

和奈も道着に着替えると急いで道場へと戻り、邪魔にならないよう壁沿いに座る。試合が始まれば板張りの床に正座にならねばならない。

正面の神座に目をやると、神道無念流の流儀四ヶ条が書かれている幕に目が止まった。

- 一、兵は凶器といえ、その身一生持ちうることなきは大幸といふべし。
- 二、これを用うるは止むことを得ざる時なり。
- 三、わたくしの意趣遺恨等に決して用うるべからず。
- 四、これ、すなわち暴なり。

神道無念流は「力の剣法」とも呼ばれ、略打を良しとせず真を打つ渾身の一撃を強く勧めている剣術だ。

剣術とは、禅など心法に重きを置きながら真剣を用い、相手を殺傷するための武術とされる。ゆえに兵法が数多く存在している。兵法とは、剣術を中心とする相手を殺傷する為の武術で、実技・学問から成る。

流儀を持つ剣術が現われ始めたのは安土桃山時代にまで遡るが、禅など心法に重きを置く流派が現われたのは江戸時代に入ってからで、柳生宗矩が『兵法家伝書』に、禅とは違う解釈を用いている。

【一人の悪に依りて、萬人苦しむ事あり。しかるに、一人の悪をころして萬人をいかす、是等誠に、人をころす刀は人をいかすつるぎなるべきにや。人をころす刀、却而人をいかすつるぎとは、夫れ亂れたる世には、故なき者多く死する也。亂れたる世を治めむ爲に、殺人刀を用ゐて、已に治まる時は、殺人刀即ち活人劔ならずや。こゝを以て名付くる所也】

悪に打ち勝ち確実に滅す殺人剣であり、その悪を滅した事によって万人が救われ活きるのが活人剣であると言う。流派によって殺人剣と活人剣の解釈は異なる。

剣を振るう者はこの両面を持ち合わせなければならぬと解く事が、剣術を殺人技法に留まらせず、武術としての位置を獲得できる事になった所以であり、禅の思想を取り入れることで広まったとも言える。

【なんで剣術続けてるの？】

気が休まる。自分にはそれしかない、と和奈は赤井に問われた言葉に答えた。

様々なストレスから精神が疲れると体にも影響が開始する。その前に、和奈は静寂と張り詰めた空気が存在する剣道場へと足を運ぶのだ。

「君は参加しないの？」

えっ、と視線を上げた先に見知らぬ男性がニコニコと立っていた。

「いえ、私は見学です」

「あ。そうなの？　どこの流派なんだい？」

「心形刀流です」

「ああ、赤井くんのところか。僕は神道無念流の朔月惣太郎、よろしくね」

「あ、私は村木和奈です」

「村木和奈さん・・・か。うん、いいね」
なにが いいのやら。

「惣太郎！」

別の男性が息せき切って駆け寄って来る。

「お？　なにに、おまえ試合前に女の子くどいてんの？」

また、このパターンかと、和奈は興味津々と身を乗り出している男性を見た。

「君じゃあるまいし、一緒にしないでくれないか晋一」

どこかで聞いたことのある名前だ。朔月と親しいそうなので同じ流派だろう。

「佐々木さん・・・」

名前を呼ばれた晋一は、さらに和奈へ顔を近づけた。

「おお、そんなに俺って有名？」

すぐく嬉しそうに、鼻の頭を人差し指で掻きながら顔を突き出してきたものだから、上半身が仰け反ってしまう。

「えっ、いえ、あの名簿にあったのを思い出して・・・」

「ちえっ、なんだ」

朔月は邪魔だと佐々木を横へと押しのける。

「君も参加できるようにならないとね」

「え、まあ、はい」

「剣術はいいぞ。毎日に張り合いがでるからな」

「張り合いですか？」

「ただ時間に追われ、意味もなく過すだけの人生なんて、なんの面白みもないだろ？」

「面白みですか」

桂木もそんな事を言っていた。

意味を考えながら毎日を過してはいない。道場通いも剣術を極めたいと続けているのではなく、ストレスを解消する手段として生活の中に組み込まれているだけなのだ。

「剣術に限った事ではないよ。何か目的を見つけてそれに進むのはいい事だと、晋一は言いたいんだよ」

「なるほど」

「さて、時間だ。行くよ晋一」

「おう。じゃまたな！」

元気活発が服を着て跳ねていると、思わずくすりと笑いが零れた。「へえ。和奈ちゃんて、案外もてるんだね」

へっ？ と横を向くと、これまたニコニコとした榎木が膝を抱え

て座っていた。

「・・・時間、そろそろらしいですよ」

苦笑しながら、人が集まっている方向を指差す。

「はいはい、じゃ行つて来るから応援しててね」

榎木の場合は疲れる人だった。

ざわついていた道場内が静かになり、それぞれの流派に分かれて剣士が並び出すと、徐々に空気が張り詰め出した。

体に纏わりつく緊張感。澄んでいく心。現実から隔絶される瞬間だった。

りいーん。

「えっ？」

また鈴の音が聞こえてきた。しかし、どれだけ耳を済ませても鈴の音は響かなかった。

赤井は高校生と見える桜井と、後は年長組みらしく緒方と朔月、杉本と萩原、佐々木と武本、高崎と榎木となり、組太刀の組合わせが決まると試合が始まった。

和奈が一番に惹きつけられたのは、緒方と朔月の組太刀だ。緒方の雰囲気が只ならぬ殺気を帯び、相手を打ち負かそうと先手を取って行く。我武者羅な攻め方に見えるが、朔月の二の太刀はちゃんと読みかわしているの、考え無しと言うわけではなさそうだ。

その他の組合は、稽古で養った実力の出し合いを手習い通りやる感じである。それが面白くないと言う訳ではないが、他の組太刀を見ていても、いつの間にか朔月と緒方の組太刀に目が戻ってしまっていた。

仕掛ける緒方に受ける朔月。必死なまでに攻める緒方の腕も凄い、余裕を見せて交わして行く朔月が一枚上手のように見えた。

ほんの一瞬の事だった。

受手だった朔月が緒方の攻めを受け流しつつ攻めに転じ、勝負がついた。

「さすがだよなあ」

その声に横を向くと赤井が座っていた。どうやら先に試合が終わっていたらしい。

「朔月さん強いよなあ。俺としては緒方さんより、武本さんか杉本さんとやってほしかったな」

「どして？」

呆れ顔をまた和奈に向ける赤井。

「力の剣法、立の剣法、技の剣法、どれが一番になるか見たくないか？」

「ああ、そういうこと」

「・・・俺にはおまえがわからん」

「赤井！」

桂木に呼ばれた赤井は真顔に戻り、試合を終えて集まる輪へ小走りで駆けて行った。

試合が終り、主催者である桂木が訓示を言い終えた頃には、傾き出した太陽のが放つ朱色の光が道場の中を一杯に満たしていた。

夜が近づく、加茂川館のある三条界限は祇園に近いせいもあり一層賑やになる。

「食事まで一時間ほどある。散策したい者は自由にしていゑ」

そう許可されて部屋に籠っていられるほど、皆大人ではない。急げとばかりに、皆外へと繰り出して行く。

和奈も荷物を部屋に置きに行き、玄関へと戻って来る。玄関の脇の窓際で、赤井が庭を眺めながらぼつんと座っていた。

「外、行かないの？」

「行きたい所もないからな」

和奈を見ようともせず、そう答える。

「祇園だよ？ 京都の夜だよ？ 二十超えた健全な青少年がなにジジくさい事いつてんの」

「おまえなあ！」

どうだと言いた気な和奈の含み笑いに、赤井は拳を握り腰を浮かせた。

「仲がよろしおすなあ」

うっ、と動きを止めて振り返ると、女将がくすくすと笑っていた。

「仲良くなんでありません！」

同時にそう叫ぶと、ほら息もぴたりと女将は笑い続ける。

「外に出はらんのでしたら、飲み物を持ってきますさかい」

きっかけを失ってしまった和奈は、赤井の前の椅子に腰掛け、女将が持つて来てくれたお茶を啜ることになった。

「そっくりそのまま、さっきの言葉返してやる」

「へ？」

「ババくさい」

その顔は笑っている。馬鹿にした笑いではなく、優しい微笑みだった。

「今日の試合、どうだった？」

「もうすごい一言しか出てこないよ。特に朔月さんと緒方さんの試合は見ごたえあったなあ。ほら、ずっと守りに徹していた朔月さんが出した最後の一手。あれはさすがに緒方さんでもかわしきれないよね」

うんうんと頷く和奈に、赤井はまた呆れ顔を浮かべた。

「その試合だけ見てたってことか」

「えっと・・・いえ。ちゃんと他のも見えました」

実を言うと全部は見えていなかった。それを隠したところで、赤井の顔を見れば嘘がばれていると判る。

「高校生っぽい子もいたね」

だから話をそらしてみた。

「それ、天然理心流の高崎くん」

榎木を相手に引けを取っておらず、押す場面さえあった。

「私もいつか参加できるのかなあ」

「無理！」

即答されて落ち込むしかない和奈だったが、今の腕ではそう言われても仕方ないと反論すら出来ない。

「練兵館に行ってみるか？」

「今から？」

「一太刀、付き合ってやる」

赤井は玄関横の小部屋に入り、頭だけ暖簾から出すと用意して来いと言いい中へ姿を消した。

練兵館にはまだ明かりが灯っていた。

二人がそっと中を覗くと、正面を向いて座している朔月の姿があった。

「邪魔しちゃ悪いんじゃない？」

その声が聞こえたのか、朔月が振り向く。

「おや、君は昼間の」

太腿に両手をつけて立ち上がり、二人の所へとやって来る。

「どうしたの？」

「夜分に申し訳ありません。良ければ道場を使わせて頂けないかと伺いました」

「これからかい？」

「はい。村木が見学だけだったんで、忘れないうちに剣捌きの一つでも覚えてもらおうと思って」

和奈は、真剣な眼差しで朔月に頭を下げる赤井に感心した。そういう事を考えれる赤井だからこそ、年下の門下生達が集まってくるのだろ。

「で、そういう君は和奈さんの彼氏？」

二人は言葉を失って朔月を見つめた。

「な、なんで、そういう事になるんですか!？」

「いや、ただの友人にしては面倒見が良過ぎるからね。邪推し過ぎたかな、ごめんね和奈さん」

「い、いえ!」

「僕ももう少し稽古がしたいから、道場は使ってくれて構わないよ。ああ、そうだ。良ければ太刀筋を見てあげるよ。二人とも早く着替えて来なさい」

朔月の指導は判りやすかった。

流派が違うというのに心形刀流の技も勉強しているらしく、赤井の太刀にアドバイスを加えて行く。だが、指摘されるのはやはり和奈の方が多い。稽古不足だと否むしかなかった。

「重心はもっと前足に置くんだ」

言われたまま、体重を前に出した右足に乗せていく。

「もっと、倒れるかって位までね。だが、かけ過ぎて上半身が前に出てはだめだよ、動けなくなるからね」

「はい」

腰から前へ体重をかける。

「赤井くんが切りかかる」

上段から木太刀をゆっくり振り下ろす。

「左足を蹴る感じで、同時に切っ先は下へ移動させる」

手が下段になり左肩が後ろに向き、半身をとる。

「刃を返して上段に振り上げる」

カン!

赤井の振り下ろした木太刀が上へと弾かれた。

「右上から相手の懐へ斬り込む」

脇の空いた箇所につっ先が滑り込む。

「重心はとても大切だから、自然と体重移動ができるようにしておくといいよ」

確かに足捌きは楽にできた。

「一刀はどうしても隙がでやすい。一太刀振るう前に相手がどう振ってくるか、振られた剣をどう防いで、どこへ斬り返せばいいのか体で覚えておくことだ。形どおりに相手が切って来るとは限らないからね。相手に付け入る隙を与えてやる必要は無いだろ？」

桂木にも言われたことである。

十年続いている。十年と一言で言っても、稽古に参加した日数だけ足したら三年にも満たない。桂木から良しの言葉をもらえないのも頷けるのだ。

「和奈さんは筋がいいみたいだし、稽古すればもっと上手くなるよ」

「ありがとうございます！」

「じゃ、手合わせと行こうか」

えっ？ と朔月を見る。

「赤井くんとね」

ちらりと赤井を見て朔月は笑った。

「さあ、位置について」

困惑していた赤井だが、頷くと立ち位置へと歩いて行った。

「いいかい、剣に心を委ねてごらん。そしたら剣は答えてくれる」
耳元で朔月はそう囁いた。

桂木が言っていた言葉と同じだ。

「では、始め！」

落ち着いて平常心のまま心を乱さず、気を吞まれないこと。

和奈は、精神を集中させながら中段に木太刀を構え、赤井が間合いを計るように一歩利き足を前に出したのを見て、前へと飛び出した。

「！」

左から打ち上げられる和奈の木太刀を、詰めの早さに驚きながらぎりぎりの所で受け止め、後ろへ下がった。すぐに和奈が上段から斬り込み、それを受け流すと体勢を戻して和奈の左脇へと打ち込む。
カン！

振り向きざまに和奈がその一手を止め、身を返して対峙する。

（これが村木？ さっき朔月さんがなにか囁いていたけど、なんだ？）

床を一蹴りし和奈との間合いを詰め、振り下ろされる木太刀をかわし右脇へと木太刀を滑らせる。

「！」

和奈の体に付く寸前で、赤井は手にした木太刀を止めた。

やはり赤井は強い。

「無理、無理すぎですよ朔月さん」

「こらこら、ちゃんと挨拶をしなさい」

あ、と慌てて立ち位置に戻り、相手に一礼を送る。

（赤井くんから一本でも取るくらいになりたいな）

和奈は初めて強くなりたと思った。

「ありがとうございました」

「ありがとうございます」

放心したように床に目を落とす赤井のところへ、朔月が近づいて来た。

「師範の桂木さんだが」

「はい？」

「彼女にも君と一緒に稽古をしてたのかい？」

「え？ はい、そうです。俺より先に道場へ通い出しているので、その時はどうかわかりませんが」

「そう・・・」

呟く朔月の顔が一瞬、哀しんでいるように見えた。

「二人とも、こちらへ来てごらん」

言われるままに後をついて行き、庭の方へと出て行く。

月明かりが庭を照らしていた。

「剣術は力があればいい、技があればいいというものではない。両方とも欠かせないものだ。上達したいと願うならほんの一時でもいい

い、毎日剣と向き合いなさい」

それをしてこそ、剣は自分の一部になり心のままに振るうことが出来るのだと、月を見上げながら朔月は言う。

「和奈さん、心を迷わせてはいけないよ」

「え？」

朔月の言葉に首を傾げ、何に心を迷わすかと問いかけようとした時、また鈴の音が響いた。

りいーん。

今度は確りとした音色だった。

「鈴の音？」

そう言った瞬間、地に着いていた足が心なしかふわりと浮いたような気がした。

「剣を振るう身になったとしても、決して心を惑わすな。己の信じた想いを捨ててはいけない」

次第に朔月の声が次第に小さくなって行く代わりに、葉の擦れ合う音が大きくなり、景色の輪郭が歪み徐々に曖昧になって行く。その歪んだ景色の中で、白い大きな物がゆらりと揺れた。

りいーん。

鈴の音は段々遠くに聞こえ、大きくなった月だけが鮮明に残り、周りの景色は波紋が広がるように弛んだ。

「・・・お・・・な・・・！」

意識が遠のき、赤井の叫び声を最後に思考が途絶えた。

其之一 出逢い

自室で本に目を落としていた武市半平太は、誰かに呼ばれた気がして顔を上げた。しかし、いくら耳を済ませても、聞こえるのは風の音だけだった。

本を閉じ、庭へと下りてみたが、やはり人の気配はなかった。

武市は小野派一刀流麻田堪七の下で剣術を学び、安政元年に免許皆伝を得た二年後、藩命で臨時御用として江戸に出た。桃井春蔵が師範の鏡心明智流【士学館】に入門、免許皆伝を得て塾頭を任される程の腕前を持つ。

「空耳か」

空気がよく澄んでいるせいか、空に浮ぶ月が一際輝いて見える。

「良い月夜だ」

こういう夜は無性に人肌が恋しくなると、一人笑う武市の前に、ひらひらと桜の花びらが舞い下りて来た。

「桜か」

手を差し出したその上に、ひらりと静かに花びらが落ちた。

元治元年四月。

土佐に戻って来てからというものの、武市は時間が許す限り仲間との談義を重ねていた。

「京はそればあ治安が悪くなっちゅうのか」

京と江戸の情勢を聞いた坂本龍馬は、暗い面持ちでそう呟く。

小栗流目録を得た嘉永元年、江戸に出た龍馬は千葉定吉が師範の北辰一刀流【玄武館】の門を叩き、安政五年に兵法目録を得ていた。が、剣を抜くのは良しとしない性格から、武市とその事で幾度となく口論となっている。

「長州が京を追われ、前にも増して志士の動きが活発となっている

のは事実。それに漬け込んで、尊皇攘夷を語り金品を目当てに狼藉を働く浪人も出始めた。その中に土佐者も居ると言うから、余計に始末が悪いのだ」

浪人となった土佐藩士の多くは、弾圧を逃れて脱藩した土佐勤王党員だった。潜伏して武市達と共に活動する者もいれば、思想よりも貧困が勝り金品強奪に走る者もいた。

国事周旋に駆け回る日々を送る中、長州藩尊皇攘夷派の中心人物とされていた桂小五郎と出会った武市は、高杉晋作や久坂玄瑞などとも交流を深めて行った。そんな中、長州藩の兵学者吉田松陰の言葉に多大な影響を受けた武市は、尊王攘夷を掲げる土佐勤王党を創った。

一時は土佐藩の主導勢力となった土佐勤王党だが、吉田東洋の政権復帰で情勢が一変。公武合体を唱え、前藩主である山内容堂の信頼を得た東洋は、土佐勤王党の弾圧に乗り出した。

東洋が法律書「海南政典」を定めた事により、勤王党の反感を一気に煽り立ててしまった。富国強兵へ繋がる東洋の政策全部が勤王党員の意味にそぐわなかった訳ではない。武市も、門閥打破、殖産興業、軍制改革などには同意をしていたが、開国貿易については否定的意見だった。幾度も開国の危険性を説きに出向いたが、東洋は一切聞く耳を持たなかったばかりか、武市に対し誹謗を浴びせ、郷士やそれ以下の身分の者をあざけり笑った。

勤王党内に【東洋討つべし】との声が上がリ、文久二年四月、自宅へ帰る途中の帯屋町に於いて勤王党員によって暗殺は実行された。

この東洋の暗殺で、甥の後藤象二郎も失脚となったが、今は藩政に復帰し、容堂の信頼を得て大監察に就き、公武合体を国是とした土佐に於いて、土佐勤王党の弾圧に乗り出していた。

「公武合体はもはや時代遅れの政策と薩摩も動き出している。なの
に後藤殿はその廃れる政策を敷くと言う。はっ！ 笑いが出て止ま

らん！」

「おんしの気持ちは解るが、もうちつくと折り合いをつれられやせんか？」

「それが出来ていたら、東洋殿も死なず、勤王黨員を脱藩に追い込んでしまい」

「ほりゃあそうけんど」

いかにも不満があるという顔の龍馬は、以前土佐勤王党の一人だった。加盟については自ら望んでのものではなく、武市の遠縁なら参加して当然だろうと押し切られてのものだった。だからと言って、藩を上げての尊王攘夷について反論はなく、暫くは黨員として駆け回る日々を送っていた。

ある日、異国に被れたと有名になっていた幕臣勝海舟を斬りに出かけた龍馬は、勝の語る「開国による富国強兵」の必要性に共感を覚え、そのまま弟子入りしてしまい、土佐勤王党を抜け脱藩してしまった。

富国強兵を敷き、諸外国に負けない国づくりを成す。この思いは、黒船を始めてその目にしてから更に強くなり、これが龍馬の根本的な幕政改革思想となった。

「明日、土佐を発つ」

「おんし一人でか？」

「いや、以蔵も連れて行く。備前国から長門国へ向かうつもりだ。まあ武者修行とでも思ってくれ」

部屋の隅で座る岡田以蔵を、龍馬はちらりと見やった。

「なんだ？」

「いつ見ても無愛想な面構えやき」

「斬られたいのか？」

以蔵は【人斬り】の異名を持つ土佐の足軽である。

土佐の海岸防備に足軽が徴兵され、父折義平が志願した。それに

よって郷士と足軽二つの身分を持つ事になった義平は、以蔵に足軽を継がせて弟に郷士の身分が継がせた。父がなぜ以蔵に足軽を継がせたかは知る由も無いが、これが以蔵の性格を歪に曲げる原因となった。岡田以蔵に声をかけたのは武市の方からである。

荒削りな我流の剣の裏に、潜む才能を見て取った武市は自分の道場へ入門させ、江戸へ連れ出すと以蔵を士学館に入れ剣術を学ばせ、遊説に訪れた豊後国岡藩で直指流が師範の中尾直勝の許で修行させた。

中尾は武芸だけでなく学問にも長けている上、岡藩は他藩との交流も多い藩だ。色々な者と接する事で、以蔵に見識を広く持たせ、柔軟な精神を培わせようとの思いがあつての残留申し渡しだった。しかし、師に見限られたと受取った以蔵は、学問に手をつけるどころか人斬りとしての道を歩む暴拳に及んでしまった。初めて人を斬ったのはこの時である。

武市はそれ以来、以蔵を袂から放さず、尊王攘夷運動に不要とした者の暗殺を命令するようになったが、桂達と談義を重ねる回数が多くなるにつれ、暗殺で人を殺したところで打開策にはならないと悟り、人斬りとしてではなく尊攘派の要となる人物の護衛をさせるようになった。

「この時勢に武者修行出るより、花見の方がよくないがか？」

「・・・なぜそう暢気でいられるんだおまえは」

「実のところは、西国諸藩を渡り歩いて視察するのが目的じゃろ？」

「！ 解っているなら茶化すな」

悪戯っ子の様に笑いながら武市を指でつつく龍馬。

「五月蠅い」

指を叩かれ、しょぼんと肩を落とした龍馬にため息を漏らす。

「まったく。京では宮部くん達が動いていると知っているだろうが」
長州藩の久坂玄瑞と薩摩藩の樺山三円らと談義を江戸で行った折、

本藩土宮部鼎蔵達が、中川宮朝彦親王と禁裏御守衛総督の一橋慶喜、京都守護職松平容保の暗殺を計画している事を知らされた。その計画とは、風が強い日を選んで、京に火を放ち、その混乱に乗じて孝明天皇を長州へ連れ出すというものである。一橋慶喜、松平容保の暗殺はその過程で行われる算段だと聞いた武市は、幾度となく久坂と共に説得を試みていたが、宮部達を押し留めるには至っていなかった。

土佐から来客があると報せに來た桂は、部屋の入口で寝そべっている友を見下ろした。

「なにもこんな所で寝なくてもいいんじゃないか？」

京長州藩邸詰となり京に滞在していた桂は、情勢を藩主に報告するため萩へ戻って來ていた。

「何処で寝ようが俺の勝手だろうが」

障子を開けて入ろうとして、もう少しでその体を踏みつけてしまう所だったのだ。

「だからと入口で寝る奴があるか。さっさと起きてくれ」

ぶつぶつと小声で文句を言いながら、高杉は体を起こした。

和田家から桂家へ養子に入り、養父の死去に伴い七歳の時に大組士の身分を継いだ桂小五郎は、藩主毛利敬親の親試では二度の褒賞を得たこともあり、剣術修行で江戸に出た時に、江戸三大道場の一つ斎藤弥九郎が師範の神道無念流”鍊兵館”へ入門して、一年足らずで塾頭を任された腕前を持っている。

その桂に踏まれそうになった高杉は、内藤作兵衛の下で柳生新陰流剣術を学び免許皆伝を得ている。やがて久坂玄瑞の紹介で松下村塾に入門する事になり、久坂と共に松下村塾の双壁と称さる人物になっていた。また、奇兵隊を創設した男でもある。

文久三年に設立された奇兵隊は、赤間関で勃発した米英仏蘭の四

国艦隊との戦後、藩政に起用された高杉が、身分に囚われない自国を守る志を持つ者達を集めた軍隊を創る必要があると藩主毛利敬親に進言し、敬親が「そうせい」とこれを許可し、赤間関の廻船問屋白石正一郎という男の資金援助を得て創設された。この奇兵隊の創設に呼応し、長州藩各地では同じ様な身分不問の隊が結成されている。

「宮部くん達の説得をしなくてはならないんだ。もう少し真剣に打開策の一つでも考えてくれると嬉しいんだがな」

部屋へ入り、腰を落ち着けた桂は、背中を向けたままの高杉に言った。

「・・・桜が」

「えっ？　桜？」

返事になっていない言葉に首を傾げる。

「満開だ」

庭を見ると、普賢象桜が枝一杯に花を咲かせていた。

「ああ、かなり白くなったな」

咲き始めは薄紅色だった花びらが、日が経つにつれ白へと色を変えて行く。最盛期を過ぎると中心から赤に染まり始めた花卉がすべて赤になると、花は地面へと落ちる。

高杉は数ある桜の中で、この普賢象桜が一番好きだった。

「・・・」

風に乗った花びらが、座る高杉の膝へと舞い落ちて来る。

花びらを手に取った高杉は、しばらく見つめた後桜へ視線を戻した。

「随分と冷えてきた。春とは言え、夜風に当たりすぎるのは良くない。そろそろ戸を閉めて中へ入るといい」

手の平に乗せた花びらに息を吹きかけると、くるくると舞った桜が、風に乗る舞い上がって行く。

「晋作」

「解ったからそうせつくな」
立ち上がって障子に手をかけた高杉は、もう一度桜を見てから静かに戸を閉めた。

以蔵を伴い土佐を立った武市は、長門国へと入っていた。それまでに通過して来た町は平穩そのものに見えたが、京の情勢不安による米の相場は高騰しており、税として米を納めている農民への負担は酷くなっているのが現状だった。武士になれば楽になると京へ出ても、そう簡単に武士にはどなれぬと解らぬ者が多い。運良く藩に召抱えられ、農民や庶民出の者が手柄を立てたところで、足輕に引き上げられるのが関の山なのだ。

「いい天気ちや」

青空を見上げて鼻歌を鳴らしていた龍馬が、嬉しそうな顔で振り返る。

「見れば判る」

「こればあ桜が咲いちゅうんだ、ちつくと花見をしたち誰も文句は言わんぜよ」

その言葉に武市の肩がつり上がった。

「だから花見をする為に発ったのではない！ 勝手に付いて来て文句を言うな！」

友とは言え、本気で斬ってやろうかと思う事が時々あった。

「そう怒る事fないろう。長い道中、楽しみの一つでもないと思屈やか」

龍馬の調子に乗っては駄目だと、武市は握った拳から力を抜く。

「おまえとの問答が、いつも無駄に終ると解っているのに」

「無駄とはなんぜよ、無駄とは」

「無駄でなければなんだ？」

「確かに相手にするだけ無駄だ」

無駄扱いされた龍馬は、拗ねた様に口を尖らせた。

萩に入った武市達は、城下町の菊屋横丁にある高杉の家へとその足を向けた。

「よく来られた」

出迎えた桂は、武市達を奥の座敷へと案内してくれた。

「疲れただろう？　まずはお茶でも飲んで落ち着かれるといい」

「忝い。五月蠅い男が一緒なもので、いつもより数倍は気疲れ致しました」

ちらりと龍馬を睨みつける。

「坂本くんが静かで居る方が、余程疲れると思うのだが」

「桂さんまで何をゆうんなが」

そこへ盛大な足音を立て、満笑を浮かべた高杉が入って来た。

「よく来た！」

「五月蠅い男が一人増えたが、気にせず居てくれると助かる」

「おまえなあ！」

「客人に失礼だろう。黙って座わらないか」

「気にしのうていいよ桂さん」

「おまえが言うな！」

武市の一言で首を窄めた龍馬と、桂に睨まれて仕方なく座った高杉を見て、以蔵が思わず笑いを零した。

「遠路はるばる来たんだ、ここは一つ酒といこうじゃないか」

湯呑を手にした龍馬が嬉しそうに、それはいい、と同意すると、それを武市が諫める。

「遊びに来たのではないと解っているんだろうな？」

「阿呆をゆうな。誰が遊ぶとゆうたんだ。酒はほら、口の滑りを良くしてくれるやか」

「ほう、極意を極めてるな」

「どこが極意なんだ？」

「ふん！　お堅い小五郎くんには話し合いというものが判らんらしい」

「だれが堅い！」

「なら酒を持ってこさせろ！」

収拾をつける側の武市と桂までが、二人の調子に乗せられてしまっている、以蔵はその場を見てため息を吐くいた。

「いい加減に黙れ龍馬！」

「何をほがーに怒っちゅう、以蔵は」

そんな事も解らんのかと、鞆に手を当てる。

「ちつくと待たんか。乱暴はいかん、乱暴は！」

「だったら話を始めろ、遊びに来た訳じゃないだろうが！」

目を丸くしていた桂が笑い出し、高杉も鳩が豆鉄砲くらったような顔で以蔵を見ている。

「まっこと、おんしは武市に似て堅物でいかんき」

「誰が堅物だ」

矛先を振られた武市が受けて片膝立てた。

「あーもう！ 先生もいい加減にして下さい」

「面白いから続けていいぞ！」

「晋作！」

これでは、話しも禄に出来ないまま夜になると悟った桂は、徐に上洛の言葉を口にした。

「事が起きる前に、何としても宮部さん達を止めたい」

武市も同じ思いで説得を続けているが、どう論じても彼らの意思は固いと苦渋を見せる。

「彼らは自分達がやろうとしている事が如何に無謀であるか、解っていないんです」

波に乗ってしまった流れを止める事は容易ではない。だが無理だと諦めては多くの無駄な命が消える事になってしまう。

「その為に上洛するがか」

「ええ」

出来る限りの協力はさせてもらおうと、龍馬は桂達の上洛を歓迎した。

陽が落ちると、行灯に火が灯された。

「今日は泊まって行かれるといい。晋作、いいね？」

「おう！」

遠慮する龍馬達を相手にする事なく、床の用意をさせると席を立てて行った。

「申し訳ないのう」

「小五郎と二人きりだと退屈するどころか、説教三昧でな。そろそろ我慢の虫が暴れそうになっていから遠慮はいらん」

コンッコンッと、高杉が小さなや咳をした。

「っ・・・」

「やれやれ。馬鹿は風邪を引かないと言うのは嘘みたいだな」

戻って来た桂は、自分の湯呑みを手に取ると高杉に差し出した。

「いらん世話を焼くな」

にっこりと笑みを浮かべた桂は、高杉の頭を押さえると無理矢理その口にお茶を流し込んだ。

「ゲホッ！ ゲホッ！ おい、小五郎！ 俺を窒息させる気か！？」

「窒息死したくなければ素直に飲めばいいじゃないか」

「ふん！ 俺は先生の仇を取るまでは、殺されても死なん」

高杉の口にした先生と言うのが、安政の大獄によって処刑となった吉田松陰の事だと、龍馬達もよく知っていた。

松陰は号であり、生前は寅次郎と言った。松陰はわずか九歳で、藩主毛利敬親と多くの家老を前に動じる事もなく堂々と武教全書戦法篇を講義し、賞賛を受けた松陰は藩校明倫館の兵学教師として出仕した。

幕府が勅許を待たず、日米修交通商条約へ調印した事によって、諸藩大名や尊攘派からこの条約調印に対し非難が上る。大老についた井伊直弼は、将軍後議問題を抱えており、一橋慶喜を押す大名や公卿、尊攘論者の弾圧を行なった。【安政の大獄】である。この大

獄で、松陰も投獄となった。悪くて遠島。高杉はその言葉を信じ長州へ発ったが、その翌日、松陰は斬首されしまった。

「まったく困った男だ」

ふんっ、とそっぽを向いた高杉を横目に、桂は詫びの言葉を口にした。

「高杉くんが仇を討ちたいと言うのは、よう解ちゅうよ桂さん」
高杉の肩をポンと叩いて、龍馬は耳元で囁くように言った。

「じゃが体も大切にせんと、これからの世、悲願の一つも果たせん
き」

「！」

風の音が庭を駆け抜け、さわさわと葉の擦れ音が快く響いている。

「さあ、もう夜も遅い。皆も休まれるといい」

床の用意も出来ていると、桂は皆を部屋へと案内した。

長州を訪れた二ヵ月後の六月。

京に居た武市達の所へ、朝早くに桂が顔を見せた。

「高杉くんは一緒じゃないのか？」

「長旅の疲れが出てしまつてね。藩邸で休ませている」

「あの高杉くんが体調壊したのか」

「僕もちよつと吃驚したよ。まあ、一晩寝たら元気になるだろうから、ご心配なく」

どうしても行くと言う高杉に、寝込まれては困ると同行を許さず一人で来たのだ。

「ここへ来るまで、二回ほど新撰組の見回りを見たが、以前より行動範囲を広げている様だね」

「お陰で体に苔が生えそうぜよ」

過激派を蝦夷地へ逃がす計画を練っていた龍馬は、新撰組の動きが活発となの下手に動けず悶々とした日々を送っていた。

「僕はこれから池田屋に行ってくる。蝦夷地へ逃がす算段が立っているかも確かめてこよう」

「考えるって、考える頭が彼らに在るものか！」

武市がこれとばかりに声を荒げた。

「武市！」

「動くなら既に動いているだろう。なのに肝心な事は端に置き、己が思惑を先にと考えているではないか！」

「それは違うぜよ」

「違わん！」

「そこまで。ここで討論しても詮無きこと」

そう言い、桂は腰に鞘を収めると部屋を出で行ってしまった。

「桂さんで宮部さん達を止められればいいが」

今日は祇園の宵山だ。

大通りは祭りを見に来る者で溢れ返っていた。空は冬の様に空気が澄み渡り、浮かぶ月の光りも一段と増している様に見えた。

討論に巻き込まれまいと寺田屋を出たが、寄り道せず行くとなると、池田屋にはかなり早く着いてしまう。

桂は吐息を漏らす。

「仕方ないな」

月夜の散策も悪くないと、高瀬川沿いを北へ向い加茂川へと足を進めた。

「ん？」

手前の小さな竹林に差し掛かったところで、何やら言い争う声が聞こえてきた。

京では素行の悪い浪士が多くなっており、新撰組が治安維持にと不逞浪士らを取り締まっているが、完全に対応し切れていないのが現状だった。斬り合いや喧嘩も、日常茶飯事になってしまっている。（人助けでもないが）

気配を消し、声のする方へと歩みを進めと、竹の合間から三人の影が見えた。少し離れた位置に、月明かりに照らし出されるように、木太刀を構えている若い男の姿を見つける。

(なぜ・・・木太刀なんだ)

さっきまで赤井や朔月と練兵館の庭で話していたはずだった。それなのに。

「竹林？」

あたり一面、竹が天まで伸びている中に、なぜか立っていた。一体どう言う事だろうと記憶を辿り、眩暈を覚えて意識が遠のいたの思い出す。

「んー」

辺りを見回したが他に人の気配はない。そればかりか、後ろに建っているはずの練兵館までもが無くなってしまっていた。

「どういうこと？」

自分の置かれている状況を把握せず、足元の見えない中、視線を巡らせつつ歩き出した。

「竹しか・・・ない」

練兵館の庭には竹などなかったはずだ。

宛てもなく歩いていた和奈は、視線の届く先に人影を見つけた。もしかしたら赤井か朔月かも知れないと、歩む足が速くなる。

「赤井くん!？」

その声に、一つだった影が三つになり、何やら話を交わした後、大きく腕を振って和奈の方へと歩き出して来た。

「えっ？」

人影が持つて入る物が、月明かりにキラリと照らし出される。それは見間違え事なく、刀だと判った。

大きく腕を振ったのは、刀を抜く動作だったのだ。

(なんで刀を!?)

「そこで何をしている!」

男だと判断でる距離まで近づいてくると、人影の一つがそう声を上げた。

何をしていると聞かれても、尋ねたいのは和奈の方なので答える事ができない。

「言えぬのか!？」

三人は距離を取り、和奈を半円に囲む形を取る。

(それにこの人達の格好・・・)

月の光りで見えたのは半着に袴姿、後ろで一つに束ねた髪。そして手に持つ刀。それは、時代劇などで良く見る侍の姿と同じだった。男達は抜いた刀を手に、さらに間合い詰めて来た。

「!」

和奈は思わず木太刀を構えてしまった。

「怪しい奴。名を名乗れ!」

男も下げていた刀を構える。

(冗談じゃない!)

相手が構えた刀が本物で、打ちかかって来られたら怪我ではすまない。

「おまえ、志士か!？」

「しし?」

その言葉が何か解らなくても、隙を作れば掛かって来だろうと言う事は判った。

浪士の一人が前足を出し、斬り込める間合いに入った瞬間、男の体が動いた。

「くっ!」

斬りかかって来た男の刀を受け止めたが、光りを放つ刃に背筋が凍ってしまった。

(か・・・体が・・・)

両腕を突っ張って後ろへ飛び退いたが、恐怖に硬直した四肢は和奈の思考から冷静さを?ぎ取り、間合いを取る事を失念させた。

男が再び地面を蹴った。

（斬られる！）

目を閉じ、両腕を突き出して防御に出るが、手にした木太刀に衝撃が走る事はなかった。

「ぐふっ！」

聞こえたのは苦悶の声。

「何奴！」

そろりと目を開けたその先に、影が立っていた。

「退けばよし。退かねば、斬る」

影の主が立つその足元に視線をやると、打ちかかって来た男が倒れている。

ぞくり、と背筋が凍る。

（この・・・剣気・・・）

刀を抜いたまま、地面に切っ先を下げた影が半身を取った。

三人とは比べ物にならない剣気に、再び体が固まる。

「くっ」

後の二人もその剣気に押されているのか、構えた剣を振り上げられないで居る。

「大丈夫か？」

後ろを見ず、影が問いかける。

「あ・・・はい」

気が一瞬逸れた隙を狙い、二人の男が動いた。と同時に、影がゆらりと前へ動き、刀を返して男の腹部へと刀身を叩き込んだ。

（速い！）

「ぐはっ！」

うめき声を上げながら男の体が地面へと沈み込む。

「退け」

「くっ！」

相手の力量が判っていないのか、退きもせず男は突っ込んで来た。風を斬る音が鼓膜を揺さぶる。

最後の男も苦悶の声を漏らし、顔から地面に突っ伏した。

(すごい)

ぞくぞくと、体が打ち震えるのが判る。

月を背に立つその姿は、今の和奈にとって恐れでしかない。

この人には敵わない。

「難儀な目にあったね」

ゆるりと体を和奈へ向けた桂は、半ば放心状態で座っている和奈の側へと歩いて行った。

「怪我はないか？」

声を出すのを忘れ、こくりと頷いた和奈は、倒れている男に視線を向ける。が、どれも動く気配はない。

(あれは・・・死んでいるんだろうか)

「君は馬鹿か？」

「は？」

意識を男に戻した和奈は、発せられた言葉の意味を考える。

「そんな木太刀で斬り合いをするつもりだったのかと、聞いているんだ」

手にした木太刀を見る。

「いえ！ その、つい・・・」

「つい？」

「構えてしまっって」

木太刀で真剣を受け止めた一瞬、感じた気が妙に気になった。殺気とも違うそれは、今まで感じた事のない気だと桂は眉を顰めた。

「間合いは悪くなかったが、腕が立つ、という選択は捨てさせてもらった」

「う・・・ですよね」

許可を一つも貰っていない腕なのは百も承知していた。だが、見も知らない人にまでさらっと言われては、肩を落とすしかなかった。

刀を鞘へ収め、桂は辺りを見回した。

「とにかくここを離れる。付いて来なさい」

「でも、あの・・・」

「君をどうしようと言うのではないから、心配なく」

和奈の疑心を感じ取った桂が竹林の中を歩き出すと、和奈は倒れた男達をもう一度見てから、その後を追って走り出した。

月明かりが有ると言っても辺りは闇だ。足元もよく見えないと言うのに、まるで見えていいるかの様にすすいと進んで行く。

（この人も着物か・・・）

腰には大小二本の刀を帯びている。

（まさか・・・ね）

二本の剣はそれぞれ長さが違い、片方は脇差と判る。

大小を帯刀できるのは武士だけである。武士の身分にないものは、大刀しか差す事はできない。

竹林沿いの道へ出てた桂が右へと曲がり、その後をそろりそろりと和奈は着いて行く。

錬兵館の庭とは全く異なる景色と、侍姿の男達。それだけでも疑問しか浮かばないと言うのに、歩けど歩けど馴染みの無い景色に、今度は戸惑うばかりだった。

まるで時代劇の中に居る気分だと、和奈は肩を落とす。

「早く来なさい」

それに明かりが無い。夜の闇がこれほど深い場所を歩いた経験などないのに、急かされても見えない地面が恐怖となり、足が思うように進んでくれない。

「夜目が利かないのか？」

不思議そうな声を出し、立ち止まったのが判った。

「すみません」

桂に追いついた和奈は、人の気配がこれほど安心できるものなのだと初めて知った。

「変わってるな」

歩く速度を落とした桂は、落ち着かない様子で辺りを見回しながら着いて来る男に、何か言いようのない違和感を感じていた。

（街灯がない、なんて事あるのかな）

京都がいくら景観を重んじる街だとは言っても、夜になれば外灯の一つくらいはあるだろう。それなのに、歩く道にはそれもなく、舗装もされていない土道だ。

それに雑音が聞こえてこない。

車の音、人の行き交う足音、人の声。その他、様々な音が混ざった空気がここにはない。

（虫の音と葉の音）

あぜ道から家並みのある方へ出ると、漸く人の声が聞こえて来た。灯りもいくつか見える。

近づくにつれて囃子の音や太鼓の音も耳に届くようになり、聞きたれた音に和奈は安堵する。

（祭りかな？）

前方に通りが見えた。が、そこに行きかう人の姿に和奈は再び面食らった。

（・・・みんな着物だ）

形こそ違うが、鬘を結った男女の姿が見える。その光景は慣れ親しんだ物であるが、祖母や母が良く見る時代劇の中でのことなのだ。

「こっちだ」

近くの路地へと曲がり、何本か通りを越えた所で桂はまた左へと曲がった。その先に寺院があるのを思い出したのだ。

夜更に寺院へ来る者は少ない。話を聞くにはいいだろうと考えた桂は、その寺院へと入って行く。

遠くに祭りの喧騒が聞こえる。寺院の中にはその音よりも大きく風に揺れる木の音が流れていた。

リンリンと、大きくなったり小さくなったりする鳴く虫の声もする。

木木刀を手にしたまま、とぼとぼと歩いて来る姿に桂はため息をついた。

（治安の悪いこの時期、あんな場所でうろうろして居るとは）

京へ出てきて間もないのだろう、そう桂は思った。刀も持たず闇夜を歩いていたら、本当の馬鹿と言う事になる。

「さて、君はどこの藩なんだい？」

身につけている着物は丹念に整えられている。浪士ではないと思つての質問だった。

「はん、ですか？」

「ええ」

「はん・・・」

「脱藩しているのか？」

脱藩者となれば、捕縛となれば極刑は免れない。よって、見も知らぬ相手にそう簡単には素性を明かしはしない。

「だっぱん？」

話が噛み合わない、桂は目を細めた。

小ぶりの顔立ちに、顎から首へかける線も細い。小柄な体格に、不似合いな木太刀を持っている。

「その、だっぱん、とか言うのが解らないんですが」

「君・・・女子か？」

剣士の中には、女性と見紛う者は幾らでも居るが、立ち振る舞いで男か女の区別はつけられる。

「はい、一応。あの、ここは何処なんですか？」

桂は関わったことを後悔した。しかし手を出してしまった以上、聞く事は聞いとおかなければならない。

ややこしい事情を抱えていない様にと、桂は祈った。

「京だよ」

「ですよね」

「うん。で、あんなところで何をしていたんだい？」

何をと聞かれても、こうだと答えられる状況にはない。

「それが、判らないんです」

判らないから事を聞いたのに、判らないと答えられるのは困る以外にない。

「どこから来たのかくらいは判るよね？」

そうであって欲しいと内心で呟いた。

「あ、大阪からです」

「大坂？」

「はい。剣術の試合があったので、今日の朝、大阪から来たんです」
剣術の試合に参加するのなら、木太刀を持っていってもおかしくはない。

「また遠い所から来たんだね。で、その試合はどこで？」

「練兵館です」

「え？」

桂は眉間を寄せた。

練兵館があるのは江戸だ。それなのに京に来て試合があると言う。
(辻褄が合わない)

懸念が首を擡げ始める。

「君は、誰なんです？」

「あ、私は村木和奈といいます」

「いや、そうじゃなくて・・・」

名前を尋ねたつもりではなかったのだと判り、和奈は焦った。だが、誰だと聞かれても、名前を口にする以外に返す言葉などないのだ。

「練兵館で試合か・・・大坂から来たなら宿をとっているよね？」

「はい。加茂川館と言う所です」
腕を組み、さらに考え込む。

京に加茂川館という旅籠屋や料亭が在った記憶は無い。

江戸にあるはずの練兵館に試合をしにやって来たと言うだけでも十分怪しい。この情勢下で剣術の試合を行うなどあるはずがないのだ。

「あの、もしかして、加茂川館がないとか・・・」

「いや。私が知らないだけかも知れない。もっと話を聞いてあげたい所だが、今は暇がない。取り合えず私について来てくれるかな

？」

間者かも知れない者を池田屋に連れて行くのは危険極まりないが、だからと夜更けに女子を一人で置き去りにする事も桂にはできなかった。

「はい、解りました」

悪い人間には見えなかったし、襲うつもりがあるのならすでに斬られていただろうと、和奈は言われた通りに従う事に決めた。

其之二 池田屋事件

長州藩が京から追放され、在京の藩士達が長州へ下ることになってからも、政権への復帰を目指しながら各藩の同志らと色々な活動を行っていた。志士らの不穏な動きに、京の治安維持を任された松平容保は、会津藩預かりとなっている新選組を、尊攘派の志士や不逞浪士の取り締まりに当らせていた。

不安な気配が取り巻く京に於いて、幕府から要注意人物として耳目を集める者はまだ数少なかった。

新撰組や見廻組が動向に注意を向けていたのは長州藩の桂小五郎、久坂玄瑞、吉田稔麿、肥後藩の宮部鼎蔵らで、捕縛対象として手配書が付いているのは”人斬り”の異名を持つ、土佐の岡田以蔵、薩摩藩の田中新兵衛と中村半次郎、肥後藩の河上彦斎の四名だ。

河上は八月十八日の政変後、七卿と共に長州へ落ちて三条実美の警護に付いているので京には不在だった。

武市については、躍起になって居場所を特定されるほど幕府からは注意されていない。どちらかと言えば土佐藩内の方が動向に注意を向けている。

尊王派の志士らが会合を行う。市中に放っていた間者からそう報告を受けた新撰組局長近藤勇は、旅籠屋や庄屋、料亭の御用改めをせよと全隊に命を下した。

新撰組二番隊の伍長島田魁らが、宮部鼎蔵の下僕である忠蔵を尾行して枳屋へと踏み込んだのは、元治元年六月五日の子九つ（午前十二時）の事だった。

宮部自身は不在だったが、枳屋の蔵には大量の武器火薬の類や、長州浪人らが遣り取りした文書などが見つかったため、枳屋の主人古高俊太郎を捕えて屯所へと連行した。

副長の土方より手酷い拷問を受けた古高の自白により、今夜池田

屋及び四国屋重兵衛方で会合が行われることを知った近藤は会津藩と桑名藩に事を知らせた後、土方を四国屋へ向かわせると、自らは池田屋へと走った。

古高が捕縛されたとの報せが届いたのは同日の夕刻だった。

「新撰組め」

宮部鼎蔵はそう言って拳を握った。

肥後藩で山鹿流軍学を学んでいた宮部の下へ、松陰が訪ねて来た事をきっかけに付き合いが始まり、共に東北遊学に出かけるほどの仲になる。八月十八日の政変で長州へ落ちていたが静観できずに上洛。古高俊太郎の屋敷に逗留していた。

「ちよつと出てくる」

この日、門番を任された杉山松介は、藩邸からは一人も外に出すなど桂から命を受けていた。だから止めなければならぬのだが、松介には出来なかった。

杉山松介は松下村塾の門下生の一人で、松陰が計画した間部詮勝の暗殺に関与していたが、松陰が獄送りとなって計画が頓挫。藩命で京に上洛すると久坂らの運動に加わった。

「気をつけて」

「すまん」

松介の肩をぽんつと叩いたのは、同じ松下村塾の門下生の吉田稔麿である。久坂より一つ年下だったが、塾に入ったのは久坂や高杉達よりも早い。秀逸の人物と松陰から可愛がられた稔麿と、双璧と謳われる久坂、高杉の三名は松陰門下の三秀と呼ばれ、これに入江九一を加え四天王と言われている。

その稔麿の後から出て行くのは有吉熊次郎だ。文久元年、高杉に随行という形で江戸に出た有吉は、高杉と久坂が結成した御楯組に加入し、「品川御殿山の英国公使館の焼き討ち」に参加したいいわゆる過激派の一人だ。

二人は宮部と共に長州藩邸から出てると、それぞれ道を違えて池

田屋へと急いだ。

今夜池田屋に集まるのは、全国の藩から選ばれ作られた”勤王党親兵”の同志と談義を行うためだったが、古高が捕縛されたとの報告が入り、急遽奪還策を講じなければならなかった。

「遅くなった」

遅れて池田屋へとやって来た肥後藩士松田重助は、八月十八日の政変で公卿達と長州へ下ったが、長州藩の再挙を謀るため上洛し、兵学を学んでいた宮部らと合流し共に潜伏活動に行っていた。

日が暮れる頃には、長州や土佐、肥後などの志士二十数人が池田屋に集まり、二階の一室で、宮部、望月亀弥太を始め一同が座した。望月は土佐勤王党員の一人である。神戸海軍塾で航海術を学びながら尊王派の志士らと交流を持っていたが藩命により帰藩。土佐藩に見切りをつけ脱藩してしまった。

「幕吏ならいざ知らず、新撰組に捕縛されてはどんな拷問を受けるか」

悲痛の色を浮かべた望月の顔が歪む。

新撰組が恐れられてるのは、容赦なく人を斬るからでもあるが、捕縛された後に待っている拷問の酷さが最たる理由だった。それは役所で受ける拷問の比ではない。

責め苦を受け自白した者は、その殆んどが即刻斬首となり河原に晒される。どれ程の苦痛が与えられて斬首されたか、苦痛に酷く歪んだ顔を見れば語らずとも判る事だった。

「どうする宮部さん」

「我らで乗り込み、古高さんを助けるべきだと思うんだが」

松田も稔麿と有吉の言葉に頷いた。

「新撰組を襲撃し古高さんを奪取したら、混乱を誘うため京に火を放つ。その後は計画通りに事を進めて行く。それでいいか？」

一同は無言で頷いた。

その時、池田屋主人入江惣兵衛が一階から大声を張り上げた。

「各方、御用改めで御座る！」

直後、一階に居た土佐藩士石川潤次郎が部屋へと飛び込んて来た。

「新撰組だ！！！」

宮部達は一斉に剣を帯びて立ち上がった。

「大変だ！」

乱暴に障子を両手で開けながら、青ざめた中岡慎太郎が部屋に飛び込んで来た。

「い・・・池田屋に新撰組が集まり始めてます！」

龍馬が立ち上がり、武市と以蔵は剣を取った。

「慎太郎、高杉くんどこへ行け！」

「承知っ！」

こけそうになりながら中岡が部屋を駆け出すと、その後を三人も続いて飛び出して行った。

桂は路地の角からちらりと顔を覗かせ、通りを窺った。

（くそっ！）

集まる人ごみの中に、山形の模様を染め抜いた水浅葱の羽織を見つけたのだ。

（宮部さん達はもうすでに集まっている頃か）

志士達にとって、新撰組の羽織は騒ぎで混雑となった中でも見逃す事の出来ない物だ。

（どうしたものか）

桂は背後に居る和奈に顔を向けた。

普段なら通り過ぎていたのに、何故か首を突っ込んでしまった。

「その木太刀を寄越しなさい」

通りから来た道へ少し戻ると、桂は手を差し出して言った。

「あ、はい」

差し出された木太刀は、滑らかに反っており、丹念に作り上げられた物だ。これ程の造りの物を見たのは初めてだった。

自分の腰の脇差抜いた桂は、それを和奈に手渡した。

「木太刀を持つよりはましだろう」

和奈は真剣の重みをずしりと手の中に感じ取った。

（これが・・・剣）

大通りがにわかに騒がしくなり、視線を戻した桂は、ぞくぞくと池田屋の周りに集まって来る新撰組を見て舌打ちする。

まずい状況なのは明白だった。

新撰組が御用改めと中に入れば、集まった者達は躊躇なく剣を抜くだろう。かと言って自分一人が飛び込んで行っても、状況を好転させるのは難しいと判断できた。

腰に差した鞘を握り締める手に力が籠る。

（行くしかないか）

高杉の顔が一瞬浮かんだが、このまま見過ごす事はできなかった。

「あの・・・」

その声に、和奈の存在を忘れてしまっていた自分に舌打ちした。身を返した桂は、和奈の腕を掴み、通りとは反対の方向へと走り出した。

桂と入れ替わるように池田屋に着いた龍馬達も、新撰組の数隊がすでに集まってしまっていると知った。

固まりとなりつつあるその中に、近藤勇と沖田総司の姿を見止める。

程なくして、隊士達が池田屋を囲む中、近藤が池田屋へと入って入った。

「！」

飛び出そうとした龍馬の腕を、武市が掴んで引き戻した。

「駄目だ龍馬、見ろ」

人並みを掻き分け、隊士を連れた土方が姿を見せた。

見張り役となっていた隊士が土方へ駆け寄り、何事か告げた後、土方は頷き連れて来た隊士らに池田屋の周りを固めさせてしまった。これでは助太刀と、四人だけで池田屋へ駆け込むのは無理に等しい。

「ここは退くぞ」

「しかし・・・」

形勢の不利は明らかだ。そう武市の顔が龍馬に言っている。

「藩邸へ急ぐぞ」

悔しそうに前を見つめる龍馬を以蔵と中岡が路地の奥へと引き戻し、駆け出した武市の後を追って走り出した。

亥四つ（午後十時）。

池田屋へと近藤が飛び込むと、続いて沖田、永倉、藤堂が続いて入った。

「御用改めである！ 手向かいなる者は容赦なく切り捨てる！！」
女将や仲居達が右往左往する中、近藤は二階へ一気に駆け上がり、一つ一つ部屋を開け放って行く。

「近藤さん！！」

一階から藤堂が声が響いて来た。

とって返して一階に降りると、鉢金を二つに割られ、額から血を流し座り込んでい藤堂が居た。

「一体なんの理があって、我らに斬りかかる！」

「しらばっくれるんじゃないよ。おまえ達の企みなんざっちはお見通しなんだ。大人しく捕らえられるか、ここで斬られるか、好きなほうを選べ」

やがて奥からも剣戟の音が聞こえて来た。

「望月！ 逃げろ！」

激しい打ち合いをしながら、沖田が背中から土間へと姿を現す。

「宮部さん！」

望月と近藤の顔が二人に向けられた。

「奥沢が殺られました！ 永倉さんが裏口で奴らと戦ってます！」

宮部を相手にしながら沖田が叫ぶ。

注意を逸らした瞬間を見逃さず、宮部は沖田の腕へと太刀を振り下した。

「ぐっ！」

近藤が沖田へ視線を流した隙をつきいて、脇を抜けた望月は階段横の中庭へと走り出た。

「よくも」

宮部と対峙していた沖田は、斬られた腕をそのままに間合いを取ろうと後ろへ下がったが、壁に背をぶつける形になり身を屈めた。

「ゴホッ！ ゴホッ！」

「どけ、沖田。あんたは逃げられんぞ」

咳込んだ沖田の前に立ち、刀を握り直した近藤は宮部へと打ちかかった。

一度、二度と剣戟が響き、両者が鏢を離す。

「斬り捨てるにはいい腕をしている」

次の構えに移ろうと剣を握り直した宮部の肩へ、近藤の剣が走った。

「ぐっ・・・くっそ・・・」

「大人しくお縄になれ。少しは命を永らえる事ができるぞ」

「俺は武士だ。捕まるくらいならば死を選ぶ」

刀を逆手に持った宮部は、迷う事なく腹に突き立てると一気に横へと引割った。

「！」

苦悶の声を上げながら蹲ったその背中を見て、近藤はその首を切り落とした。

宮部鼎蔵、享年四十五歳。

「介錯なんて・・・しなくていいのに・・・」

藤堂は額の傷を押さえつつ、咳き込んで止まらない沖田へと駆け寄る。

「そうも行かん。武士としての最後を貫いた相手に無礼など出来ん」
沖田は藤堂の手を払いのけ、自力で腰を上げる。

「逃げた奴は土方に任せるか。藤堂、二階を調べてから沖田を連れて屯所へ戻れ。俺は裏から奴らを追う」

「僕はまだ大丈夫です」

「病人があんまり無理すんじゃない」

苦渋の面持ちを近藤に投げかけた後、すいません、と消える入る様なか細い声で謝った。

池田屋の中も外も、そして駆け回る志士や新撰組隊士の体も、皆血で真っ赤に染まっていた。

幕府の援軍会津藩・桑名藩・彦根藩兵七百人が池田屋に到着したが、池田屋を囲んだ時には全てが終っていた。

加勢に來た会津藩士らに後を任せた近藤達は、日が変わった六月六日、屯所へと引き上げた。

藩邸に着いた桂は、和奈を女中に預けると、池田屋に戻るため藩士に声をかけて行く。

「小五郎！」

騒ぎを聞きつけた高杉が、中岡を伴って出て來た。

「中岡くん？　なぜ君がここに居るんだ？」

「坂本さん達が池田屋に向かった」

「なっ！　なぜ行かせた！」

藩士が集まるのを待たず、身を翻して飛び出そうとする桂の腕を高杉が掴んで引き寄せた。

「今行けば長州藩の関わりを知られる事になる！」

「判っている！　だからと、彼らまで見殺しには出来ん！」

「落ち着け！」

そこに数人の足音が響いて来た。

「無事だったか」

暗闇から姿を現したのは龍馬だった。続いて武市と以蔵が息咳切って入って来る。

「皆も一緒か」

「すまん。わしらにはどうする事もできなかった」

池田屋に新撰組が突入したと、沈痛な面持ちで龍馬が告げた。

「待て小五郎！ 犬死したいのか！」

動揺した桂は必死で高杉の手を振り解こうともがく。

「池田屋に入ったのは近藤、沖田、永倉達だ。土方も駆けつけて来ている」

組長格の名前を聞いた桂の腕から力が抜けた。

「彼らをもっと早く説得できていれば・・・」

「今言った所で、仕方ないだろうが」

九腸寸断の想いは、掴んだ手を離れた高杉とて同じだった。

「とにかく、皆上へあがれ」

桂の肩を叩いき、龍馬達を中へ招き入れると、高杉は集まって来た藩士に外を警戒するよう指示を出した。

その後、池田屋から逃れて来た者達が次々に藩邸へと入って来た。高杉は眉間に皺を寄せたまま、皆の手当てをと走り回っている。

「桂殿」

桂と同じ留守居役の乃美織江が白い顔で現れた。

「ご無事でなりよりです」

「私の事はいい。逃げ入って来る者を頼みます」

記録所出頭役見習として江戸に出た乃美は、文久二年に京長州藩邸の京都留守居役を仰せつかった。以来、この藩邸を守って居るのは乃美と桂の二人である。

頷いた乃美は、門番に付いている杉山の許へ急いだ。外の状況を把握しておきたかったのだ。

「何をやっておる！」

そこには、槍を片手にした杉山が、今にも門を飛び出さんとしていたのだ。

「加勢に向かいます！」

そんな許可など与える訳には行かなかった。それでなくとも、池田屋には長州の者が多く詰めかけているのだ。

桂から自重を言い渡されていた稔麿達も姿を消してしまっている。これ以上、藩邸から人を出す琴は出来ない。

「ここは堪えてくれ」

桂に報せに走るか迷ったが、その間があれば杉山は飛び出して行くだろう。

「皆を出したのは俺です」

乃美が躊躇した一瞬の隙を逃さず、杉山は門を駆け出してしまった。

案内された部屋にぽつんと座っていた和奈は、騒がしくなった外が気になり障子を開け様子を伺った。

数人の声が聞こえて来たが、話しの内容までは聞き取る事はできない。

「なんでこんなところに居るんだろう」

それに、と。ここに来るまでに見てきた景色や人の姿を思い起す。どれも馴染みのものだ。それから判断すると、自分の知る京都ではないと言う事だ。

（あの人、強かったな）

長い堀に取り囲まれた中に立つこの立派な屋敷は、武家屋敷と呼ばれる建物に違いない。だとすれば、自分を助けてくれたのはやはり武士と言う事になる。

自分の置かれた状況を考えるにしても、理論的に説明できる情報があまりに少なかった。

「あの髪型って、島田髷って言うんだっけ」

芸子や舞妓ならそんな髪型を今でも結うが、京都を歩く女性が全

てそうではない。

木造建ての町屋が残って居ると言っても、連なるほどに現存して場所があると聞いた事など無い。仮に、ここが太秦の映画村の中と言うなら説明も付くが、竹林から町に入るまでの景色はそれを完全に否定している。

和を基調とする部屋など別段珍しくもなんとも無い。町屋を買い、当時の風情を楽しむためそのままの部屋を残す人も居るのだ。そう、加茂川館がそうだった。

だが、いくら当時のままを残すと言っても明かりは必要だ。加茂川館の天井にはちゃんと電灯がぶら下がっていた。ここにはそれが無い。在るのは部屋の隅に置かれた行灯だけである。

「テレビは、まあ無くてもいいでしょう。コンセントだって、動く物がないんだから必要なし」

加茂川館にはあったではないか。

「コンセントも無い家って、どうなんだろう」

深いため息を吐いて、正座していた足を崩す。

「街灯もなし、車もなし、ネオンもビルもない。どころか洋服を着た人が見当たらない。ないない尽くしだね」

肯定を探すはずが、否定的な言葉しか出で来なかった。

街の明かり。繁華街という景色も欠落している。京都だから、そんな理由で片付ける事は出来るはずもない。

在り得ない答えを思いついた和奈は、慌てて首を振る。

「ないない」

錬兵館の庭で、朔月が妙な事を口走った。

【剣を振るう身になったとしても、決して心を惑わすな。己の信じた想いを捨ててはいけない】

そう言われた直後、朔月の声が遠のいて行き、意識がぼやけて大きな月が見え、次に気付いた時には、竹林の中に立って居た。

在り得ない出来事が脳裏を掠め、数には体を抱え込んだ。

「そんな事・・・あるはずがない」

そうは考えても、頭に浮んだ答え以外に今の現状を説明する術を見つけられない。

「タイムスリップ・・・した？」

一番しつくりと馴染む言葉のような気がした。本当に時間を越えたとしたら、これまでの様子にすべてに説明が付く。

「もし、そうだとして」

男達を武士だと肯定すれば、過去に違いはないだろう。

「戦国じゃないみたいだし、江戸時代かな」

ふと、和奈は動揺もしていない自分に気付く。普通なら、慌てふためいて混乱するのだろうが、不安は感じていない。それどころか、なぜ懐かしい気持ち胸の辺りに湧いているのだ。

首を捻るしかない感情に、和奈は戸惑った。

「はいっ？」

一瞬、誰かに呼ばれた気がして、障子へと顔を向けたが、人が居る気配はなかった。

「ああ、もう！　なんだっての！」

途方に暮れるのはこう言う事だと、和奈は考える事を止めた。

加勢にと駆け出した杉山は、加賀藩邸まで行った所で会津藩に見つかり、腕を切り落とされ、命からがら藩邸に戻って来ると、

「大変！　御門差し留めえ！」

と一声を上げた。

乃美は、緊迫した杉山の声を聞きつけて来ると、血で真っ赤に染まり地面に蹲る杉山を認め、慌てて走り寄った。

「守護職配下が・・・すでに、市中を固めています」

息も絶え絶えに、杉山はそう告げた。

それまで乃美には事の重大さが解っていなかった。

杉山が腕を無くし、藩邸に逃げ戻って来て漸く、市中は只ならぬ

事態になっているのだと気付いたのだ。
そして乃美は門を閉ざしたのである。

池田屋から逃れる事ができた稔麿は、長州藩邸へとたどり着いた。
門に向けて開門を叫ぶが、中からの返答はない。

稔麿が門を叩いた時には、門はおろか、声の届く範囲から人影が
なくなってしまっていたのである。

運が悪かった。としか言いようが無かった。

市中には既に守護職配下が警備を敷いている。これ以上逃げて捕
縛される屈辱を受ける気にはならなかった。

稔麿は笑みを浮かべると、半着を両手ではだいた。

松陰亡き後、その意志を継ぐと駆け回ってきた。志も遂げられ
ず死ぬのは不本意だったが、後に続く者が居る。松陰の残した種は
誰かの胸に必ず芽吹く。それにまだ、長州には久坂も、高杉も居る
のだ

（何を恐れる事もあるまい）

稔麿は脇差を抜くと、一気に腹へ突き立てた。

吉田稔麿、享年二十四歳。松陰門下の三秀の一人がここに生を終
えた。

中庭の塀を這い登って来た望月は、新撰組の目を避けながら路地
の暗がりへと身を躍らせた。

巧みに路地を利用し、長州藩邸へと急ぐ中、会津藩から出て来た
藩兵に見つかり、手負いとなったが、それでもなんとか切り倒し先
を急いだ。

長州藩邸の塀が目の前に迫り、背後を気遣いながら門のある方へ
と駆け出して行く。

黒い固まりが見え、近づくにつれそれが人であると認識できると、
望月は走る速度を上げた。

「吉田!？」

血溜まりの中でうつ伏せとなっている稔麿は、すで事切れた後だった。

その姿から想像できるのは、藩邸の門が開けられる事はないと言う事だった。だから稔麿は割腹したのだ。

土佐藩の者とは言え、やはり幕府などに捕まる訳には行かない。そんな恥さらしをするくらいならと、望月もその腹を割いた。

望月亀弥太、享年二十七歳。

松田も池田屋から逃れる途中、新撰組と出くわし格闘の末捕縛された。その翌朝、隙を見つけ脱走する事に成功したが、河原町で見廻りをしていた会津藩士に見つかり、その場で斬り殺された。

松田重介、享年三十五歳。

藩邸へと逃げ帰ってきた杉山も、手当を受けたが大量の出血により翌日に息を引き取った。

杉山松介、享年二十七歳。

外は静かな月夜だった。

「今度の一件で、幕府が監視を強めるのは間違いない」

円陣で座をす一同を前にして、腕を組んで座る高杉はそう言った。

「会合の中身を知られている、と思った方がいいか」

思案に暮れながら、武市の横顔に高杉が頷いた。

ただ攘夷派が集まっているだけで乗り込むほど、新撰組も馬鹿ではない。何かしらの情報を得てのご用改めなのは一目瞭然だった。

「ところでおまえ、なんで池田屋に居なかった？」

てっきり池田屋に桂が居るだろうと、武市達も思っていた。藩邸に駆け込めば、間違いなく高杉は助けに飛び出すだろう。縄で括つても止めるつもりで来たのに、何故か桂は藩邸に居た。

「・・・早く着いたから散策でもと。河原近くで浪士と斬り合いになっちゃった」

「珍しいな。おまえが刀を抜くとは」

「そんなつもりなど・・・なかったさ。事を済ませて池田屋に向かったが、新撰組が集まって来ていて」

「加勢をと、戻って来たのか」

「ああ」

和奈の事を、何故か口にする事ができなかった。人助けに時間を取られ、仲間の所へ行くのが遅れた後ろめたさからなのか、人助けをしたと知られたなかったのか、桂には解らなかった。

「幸いと、言うべきなんだろうな。たとえおまえが居たとしても、土方や沖田まで居たんじゃ結果は見えている」

きつと高杉を睨みつける。

「おまえの腕は知ってる、吉田も宮部さんの腕も確かだ！　だが、新撰組の隊長格にも剣豪はいる！」

苦汁の面を作り、今にも泣きそうな表情で拳を握りしめる。

「おまえ一人がどう頑張ったところで、全員を助け出すのは無理だ。今は一人でも池田屋から逃げ出してくれと祈るしかない」

桂の無念は、その場に駆け込めなかった武市達の無念よりも強いだろう。

「よし！　皆、今日はもう寝ろ。うだうだ考えるより、よく寝て、よく食べて、確りした頭で動く方が良い！」

「・・・朝一で斥候を出す。きつと、皆どこかに隠れて居るだろうから」

平静を装った声色で、視線を畳に落としながら言った。

「それでいい、小五郎」

「まっこと、高杉くんの言うことは明快じゃ」

そうだろう、と腰に両手を添えて笑う高杉は、さっさと部屋を出て行ってしまった。

「悔しいのは高杉くんもじゃ。もちろん、わしらも同じぜよ」

桂の肩を、龍馬はポンと叩いた。

「申し訳ない。土佐者も居たと言うのに気が逸ってしまった。床の用意はすぐさせるので、晋作の言う通りさっさと寝てしまおう」

其之三 時越えの後

朝早く、桂の声が藩邸に響き渡った。

「門を閉ざすなら、なぜ見張りを置かなかった!」

乃美を前に、憤怒の形相の桂が仁王立ちになっている。

「一度閉じた門は開けられませぬ、おわりであります? 留守

居役として、私の責任で門を閉ざしました。これも長州のためを思えばこそ……」

「っ!」

桂の背後に座る高杉の傍らには、朝になって発見された稔麿と望月の遺体が横たえられている。その周りに、武市、以蔵、中岡、龍馬も座って居た。

「幕吏が居たならともかく、追っ手もなく逃げて来た者を入れる事くらいでしようが!」

「某は止めた! 会合に出るなど忠告もした! だが出たのは一」

「やめんか!」

一声を上げたのは高杉だ。

「小五郎も引け」

「しかし!」

「しつこい!」

「くっ……」

下げた目に、眠るように横たわっている稔麿の顔が映る。

「くっ……そっ!」

桂の気持ちは武市達にも十分理解できる。同じ様に、門を開けていれどと叫び出したいのは山々だった。だが、池田屋で行なわれた会合は非公式のものだ。

藩邸は治外法権とされ、幕府と言えど許可なく簡単に中へは入れない。池田屋に集まった面々が逃れる先に藩邸を選ぶのは至極当然と言えた。また、池田屋からはこの長州藩邸が一番近い位置にある。

そのため負傷した志士達が一番多く逃げ込んできた。

藩邸が一度閉ざせば、おいそれとその門を開ける事はない。よって、志士達を助けるために開けたのを幕吏にでも見られれば、藩の一大事ともなる。

京都守護職に付いている会津藩から、罪人を匿った咎を詮議され、幕府から睨まれれば藩御取潰しとなるやも知れない。それだけは何としても避けねばと対応した乃美を責める事はできないのだ。

「武市さん」

高杉は桂が落ち着いたと見ると、膝を対面に座る武市へと向けた。
「申し訳ない」

そして頭を布団に擦り付けるように下げた。

「こうなったのは私の責任でもある。高杉くんが頭を下げる必要はない」

「門が開いていれば望月は逃げ込めたかも知れん。それだけは、どうしても謝っておきたい」

「土佐藩であっても、同じ事をした」

今も土佐藩邸留守居役に付いているのは、公武合体派の乾退助だ。長州が門を閉ざすよりも早く、その門を閉じている事だろう。その現実があるから、武市達は逃げ込んだ者が無事であるか気掛かりとなっていた。

「ともかく、斥候を出す。潜伏している者がいたらここへ連れて帰らせる。それでいいな？」

桂も乃美も頷いた。

指示をしに部屋を出て行った高杉の後を追ひ、斥候を出した高杉に付いて来てくれと桂は言った。

「どうした？」

「いいから来てくれ」

高杉を連れ、藩邸の一番端にある部屋へとやって来た桂は、一度

高杉を見てから障子に顔を戻した。

「？」

「入りますよ？」

その声に、何をするでもなく、ただ部屋の中で座っていた和奈は慌てて姿勢を正した。

「はい」

すっ、と障子を開けて桂が中へ入って行くと、その後から室内を見た高杉の顔が不思議そうな表情を浮かべる。

「誰だ？」

和奈の前に座った桂は、いいから座れと畳を指差した。

ぶつぶつ言いながら障子を閉めると、借りてきた猫のように行儀よく桂の隣に座った。

「池田屋に行けなかったのは・・・絡まれていたこの子を助けていたからだ」

高杉は驚いた顔を桂に向けた。

「得にもならない人助けをしたのか？」

「失礼な、損得で人助けなどしないさ。時間もあつたから、川辺を歩いていたら声が聞こえてね。気になったから足を向けたら、この子が居たんだ。あろう事か、真剣を手にした男三人を相手に、木太刀で渡り合おうとしてた」

今度は和奈を見てびっくり顔の高杉は、

「おまえすごいな」

と嬉しそうに笑った。

「褒めてどうする。一つ間違えば死体となっていたんだぞ？」

「すまん、すまん。で？」

頭を掻きながら桂の顔を覗き込んだ。

「聞けば大坂からやって来て、剣術の試合を練兵館でしたと言う。ここでの宿は加茂川館だそうだ。おまえ、知っているか？」

「うーん」

顎を押さえて考える高杉にも、心当たりがないのだ。

「僕も知らない。しかも練兵館で試合があるなど聞いていないし、大坂から江戸へ出るなどこの時期に考えにくいだろ？ 話ししても会話がかみ合わずに困って、仕方ないと一緒に連れ行く事にした」高杉の顔から笑みが消えて、真剣だが後悔の色を混じらせた表情の横顔に見入る。

着いた時にはすでに新撰組が池田屋を取り囲み、連れて行けないと考えた桂は慌てて帰って来たのだろう。冷静で滅多に慌てる事のない男が、人の目も気にせず取り乱した様子で藩士を集めていた理由なのだ。

「おまえは誰なんだ？」

桂にされた同じ問いかけに、和奈は俯くしかない。誰だと聞かれても、やはり名前を口にする以外ないのだ。

人の気配に気づいた桂は、戸口へ顔を向けると静かに声を発した。「入って来ていいですよ」

「ん？」

高杉が後ろを振り返ると障子が開いた。

「いや、まっことすまん。立ち聞きするつもりはなかったがじゃ」
「ばつが悪そうに頭を掻きながら入って来た龍馬は、高杉の横へと腰を落ち着けた。」

「君にも話を聞いてもらった方が良くかも知れない」

高杉はこの状況を楽しんでいる。故意ではないのだが、見も知らぬ人間が語る言葉をそのまま鵜呑みにしてしまう事も多々ある。自然と人の良し悪しを判断してしまふ男だ。理由を聞いて良しとすれば何を言っても受け入れてしまふと解っていた。

龍馬の登場は損ではないと、この時は考えたのだ。

口を開きかけた高杉を制し、和奈に初めから話しをしてほしいと頼んだ。

どこから話すべきなのか。竹林からか、それとも練兵館からか。ちらりと桂へ視線を送る。

きっとこの人には隠し事などできない。そう和奈は直感した。

ゆっくりと息を吸うと、言葉を選びながら練兵館に行った所から、竹林で桂に助けられるまでを説明して行った。

三人は言葉もなく、呆然とした顔を浮かべている。

ちよつとやそつとの事で驚かない高杉も、この時ばかりはそうもしてられないと、桂と龍馬の顔を交互に見た。龍馬ですら何をどう言えばいいのか困惑している様子だ。

自分の連れて来た娘が、突拍子も無い事を口にしたのだから、一番に困ったと思ったのは桂だろう。

「私が知ってる京都の町とは全然似てなくて・・・それに在るはずの物がここには見当たらないんです」

「なにが似ず、なにが見当たらないのかな？」

「何もかもです・・・そりゃ、木造の家くらいあります、日本なんですから。でも造りが微妙に違うし、どこを見てもビルもないし、ネオンとか街灯もない。車の音もしない・・・」

「びる？　ねおん？　くるま？」

桂にはなにをどう聞けばいいのかすら思い浮かばなかったが、高杉は新しい言葉に即座に反応を示した。

「ビルは・・・石で造った四角い家みたいな建物です。ネオンは電球が一杯付いてる看板で、車は道を走る物です」

和奈は両手で長方形を形作って見せた。

「石の四角い家！？　でんきゅう？？　道を走るくるま？？」

これでは堂々巡りになると、桂は前のめりになり始めた高杉の襟を持つと後ろへ引き戻した。

「晋作、話しの腰を折るな」

桂に諫められ、仕方なさそうに高杉は黙った。

「それで？」

「着てる服も洋服なんです」

説明して行く間に、気持ち次第と沈んできた。

普段は気にもせず使う言葉がここでは通用しない。それは、時を越えたのではないかという答えを肯定し得るものだ。

「ようふくは、夷人が着ちゅうあれなが？」

桂がため息を吐いたので、龍馬はさっと首を引っ込めた。

「山奥とか行けば、ビルとかネオンがなくても不思議じゃないと思いますけど・・・それでも電気くらいあると思うんですね」

確かめに行った事もないのだから、はっきりそうだと肯定できるものではない。

「それに、機械という物がここには一つも見当たらないんです」

それは昨日確かめていた。

疲れたように肩を落としている桂を見て、やはり時を越えたのだと確信した。

「機械は解りますが、でんき、が解りませんね」

「えっと、機械を動かす為のエネルギー？　　と言えいいのかね？」

説明していると言うより、自問自答になってしまってる。

「・・・・・・」

さすがの高杉も簡単に突っ込めなくなっているようだ。

「何が違うのか聞いたが、何もかもが違う、そう言う事か」

「はい、そうです」

有るべき物がない代わりに、在っては行けない物がある。

剣だ。

現代でも居合抜きには真剣を使うが、それは人を斬るための道具としてではなく、技を競い合うためだけに用いられる物だ。決して人の体に走らるものではない。そんな事をすれば犯罪だ。相手が死に至ってしまえば殺人者となり、裁きを受け罪を償わなくてはならない。

右手に剣の重みが蘇ってきた。

桂に渡された剣の重みは真剣のものだ。そして、三人の男が手にしていたのも間違いなく真剣だろう。

目の前で困り果てた様子で座る桂は、人に剣を振るった。

ぞくりと体を震わせた和奈は、自分の腕を抱いて側に置いてある

脇差に視線を落とした。

「どうかしたのかい？」

桂が助けに来てくれなければ、斬られて死んでいたかも知れないのだと、やっと考える事ができた。

手が、体が震えるのが判る。

「おやおや」

桂の声と共に、大きな手がポンツと頭に乗せられた。

見上げると、そこにはにこにここと笑う男の顔が在った。

「恐ろしかったんじゃないのう」

「今頃か、と言いたいところだ」

【君は、馬鹿か】

今感じたのが死の恐怖で、それを判っていなかった自分に発せられた言葉なのだ。

「それで、現状をどう考えているのかな？ 残念だが、僕達には想像もつかない話しだから、こうだろうと示唆してあげる術がないだよ」

「解ります・・・」

タイムスリップしたかも知れない。その言葉を口にして、果たして桂達が理解できるだろうか。

しかし話さなければ、何も前には進まない。

自分の身に起きた事を話し、なぜこんな事になってしまったのかその原因を探さす必要が在る。一人で考えても、この時代の事を知らないのでは到底原因など探れるはずもない。

正直に全てを語るしか方法はなかった。ならば出した答えが正しいのかを確かめなければならぬ。

「あの、今は何時なんでしょうか」

「いつ？」

三人は顔を見合わせた。

「何時代でも、年号でも日付でもなんでも。今が何時なのか知りたんです」

「・・・元治元年六月六日ですよ」

明治以降に元治の年号はない。

覚悟を決めたつもりだったが、頭のどこかで否定していた自分が落ち込くのが解った。しかしどうにもならない。違うとち否定しても現実目は目の前にあるのだから。

「信じてもらえるかどうか・・・」

「信じるか信じまいかは、君の考えを聞いてからしか言えないね」
「私・・・」

ごくりと唾を飲み、意を決して声を出した。

「タイムスリップしたんだと思います」

きょんとした顔が三つ、和奈をただ見つめている。

「夢じゃないとしたら、それしか考えられないんです」

「たいむすりっぷ？」

漸く三人が声を上げ、同時に問いかけた。

桂はちよつと考える仕草をしてから、ああ、と言った。

「亜米利加の言葉だね。たいむは、時間」

「すりっぷは、滑るじゃのう」

桂は長府での戦争の折、龍馬は神戸に居た時に英語を習っていたのだ。簡単な英語なら訳することができる。

「おまえ、時間を滑ったのか!？」

直訳し過ぎだったが、あながち間違いではない。

「時間を越えるって事です」

「時間を超えられるのか!？ どうやってだ!？ なにかカラクリを使ったのか!？」

もう和奈がどこの誰で、なぜ時間を越えて来たのかという問題は、高杉にとって関係がなくなってしまうていた。

「話の矛盾を変えるな、晋作」

頭痛の種を一つでも取り除いておかないと、増えるばかりで収集が付けられなくなる。高杉の好奇心を満足させてやる訳にはいかない。

「到底信じてあげれるものではないね」

「私もそう思います」

「さて、どうしたものやら。正直、問者という線は捨て切れない。そう、何か、君の話しを裏付ける物などはないかい？」

聞かれても着替えはロッカーに入れたまま、鞆も同じくだし身につけている物も着物だけしかない。

「持ち物はありません」

桂は和奈が持っていた木太刀の事を思い出した。

「・・・君の木太刀だが、すばらしい造りだね。刃と峯（棟）の削り方、切先の切り様も申し分ない。しのぎ（鎬）は柞の木のスヌケ（老木の芯の部分）だろうか。柄から刃先にかけての反りの滑らかさといい角度といい、かなり腕の立つ木刀匠が手がけた物と思うが」「父から譲り受けた物です。若い頃に知り合った刀工の方に造ってもらったと言っていました」

「ほう。さぞ名の有る方なんだろうね」

「詳しい事は良く解りませんが。道場に通う人の半分は手製の木太刀を持っています」

「半分？ 手作りでない物もあるのかい？」

「はい。木製なら手製じゃなくてもいいと言う人は既製品を買います」

「きせいひん？」

「注文されてから作るのではなく、出来上がっている物です」

話しは通じるが、説明する言葉の所々で聞いた事も無い言葉が出てくる。返えされる答えにも戸惑いは見受けられない。

（そんな事があるはずもないだろう）

納得しかけた自分を、桂は否定した。

「おい。今着ている物も機械で作ってるのか？」

考えを巡らせていた間に、高杉が和奈の近くに擦り寄ってしまった。

「あ、はい。既製品ですから工場で作ります」

すまん、と断ってから袴の裾を手にとった。

「見てみる、小五郎」

振り返られ、側まで膝で寄った桂は、高杉が掴み上げている袴の裾へと顔を近づけた。

「人の技でこの細かさは無理だぞ」

「確かにそうだが・・・」

「英吉利人の着ている着物でも、こう正確に測って縫うのは無理だろ」

確かに布の合わせ部分はしっかりと、計ったように縫い合わせられている。

「やっぱり時を越えて来たんだ、こいつは！」

ああ、駄目だ。ここで納得してはこの男を調子に乗せてしまうと、桂はこめかみを押さえた。

「縫い目だけで決めつけてどうする。夷人ならばこの手の仕事は得意だろうが。英吉利の貴族り着物は」

「こいつは日本語を喋ってる！」

「そんなの、おまえに怒鳴られなくても解っている」

桂は泣きたい心境になった。

「そのたいむすりっぽとかで、おまえさんがここへ来てしもうたとして、その理由は判るのか？」

やれやれと、桂はこの二人の男が有る意味似た者同士であると知った瞬間になってしまった。

「それは判りません」

また高杉がうずうずしてるのを見て、桂は半目で睨みつけた。

「そう怒るな」

「おまえが口を出さなければ怒らずにすむ」

厳しい口調で言われた高杉は、和奈から離れると元の位置に座りなおした。

「鈴の音が聞こえたと言ったね？」

「はい。でも、鈴なんて持ってませんでした。聞こえたのも、こう、

耳の内側で聞こえた感じで」

長いため息がまた喉の奥からついて出た。それだけでは何の意味も汲み取れない。

「ずっと先の世界から来たちゅう事は、これから起こる事を知っちゃう、と言う事か」

はっとした桂が龍馬を見た。

龍馬は胡坐をかいたまま、体を少し和奈の方に傾ける。

「おんし、名前はなんと言うんじゃ？」

「村木和奈といいます」

桂から逃れるように龍馬の横へ落ち着いた高杉は、女なのかと嬉しそうに身を乗り出した。

「一応・・・」

髪は短いし声も低い。化粧もしていない上に袴姿では間違われても仕方ないと言うところだか、女性としては喜ばしいものではなかった。

「わしは」

コホンと、桂が一つ咳払いをする。

「大丈夫じゃ、桂さん」

しかしと続けようとした桂を他所に、龍馬は自分の名前を語った。こめかみを押さえるしかなく、龍馬の自信がどこから来るものなのか知りたかった。

「・・・さかもと・・・りょうま？」

坂本龍馬と言えば幕末で偉業を成した人物だ。それくらいの知識しかなかったが、和奈にとっては驚くべき事である。歴史の中に紹介される人間が目の前で動いているのだから。

「なんじゃ、知らんがか」

落ち込んでしまった龍馬は頭を垂れ、代わって高杉が身を乗り出してきた。

「俺は高杉晋作だ！」

と嬉しそうにそう叫ばれても、和奈の記憶の中には幕末に生きた

人すべてが入っている訳ではない。

「俺も知らないのか」

落ち込んでいる二人を目の前に、桂は突っ込む氣力を削がれた。

「僕は長州藩藩士桂小五郎です」

「え!?! 桂さん? あ、剣豪の桂小五郎さんですか?」

この反応で二人は更に落ち込んだ。

「未来じゃー桂さんのが有名なのか」

「俺を知らないのに、小五郎を知っているのは納得いかん!」

「いえ、坂本龍馬さんも名前は知ってます」

手を振りながら慌ててそう言うのと、龍馬は嬉しそうに、ほうかと笑った。

やはり俺は知らんのかと膨れっ面になる高杉に慌てると、いい葉ですから放っておいていいですよと桂が言った。

「私、剣術を習っているんです。だから剣豪と言われた方の名前を知ってただけで・・・その、すみません」

「気にしないでいい。僕達を知っているのなら、君はこれから起こる事も、知っているのかな?」

「え? これから、起こる事ですか?」

うん、と桂は頷いた。

「すいません。歴史は苦手で、坂本龍馬さんも何かを成した人、という程度しか分からなくて。ってことは、ここって江戸時代後半!」

後の言葉は自問だった。そうだとしたら、幕末の動乱期に来てしまったのだ。

「江戸時代・・・ですか」

嘘を並べたてている様には見えない。着物も夷人ならばと言ったが、実際に袴を作っているのかは判らないのが事実だった。

それに、持っていた木太刀の素材となっている柞の木は、そこらで手に入れられる代物でもない。スヌケとなれば尚更希少となる。よって高価であるから武士と言えど易々と手に入れるのは難しくな

る。

「剣術を習っているんだったね。どこの流派なんだい？」

「心形刀流です」

「ほう、心形刀流ねえ。どうだ、晋作。やはり幕府の手の者の線はあるだろう？」

「幕府の者？」

「心形刀流の後継者伊庭八郎は幕府の人間だ。その流派を習っていると言うなら、幕府の者という可能性が高くなる」

「ちょっと待て小五郎！ こいつは時を越えたと言っただろうが！」

「そんな事、信じられるものではないだろう」

「俺達を騙そうと嘘を並べて、ここに座って居るなら大したもんだ」「だから褒めてどうする」

「正直に、ただ自分の身に起きた事を話したんだ。それをくどくど考えて否定しても仕方ないと言ってるんだよ、頭の堅い小五郎くんにな」

「堅いは余計だ。否定するもなにも、物事には必ず理由がある。必然はあるけど偶然はない」

「なら、認める。こいつが時を越えたとな」

「どうしてそうなるんだ。確証など有りはしないんだぞ？」

困ったと言わんばかりの顔で、和奈の話を既に受け入れてしまっている高杉に面と向かう。

「ちつくと待っとおせ」

龍馬は相変わらずにここに顔である。

「わしらが揉めても仕方ないじゃろ。困ちゅうのは、この和奈さんじゃろからのう」

龍馬は和奈の見て笑った。

「困るというか、なぜこんな事になったのか判らなくて」

「おんしがどうやってここへ来たのか、調べる必要もあるじゃろう」
龍馬も高杉と同様、話しを受け入れてしまっていると、桂は苦笑する。

「それにしても、突拍子もない状況に置かれているのに、えらく落ち着いているね、君は」

「え……」

確かに最初は不安を感じていた。だが、桂にこの屋敷へと案内されから不安がなくなっている。むしろ、安堵感を抱いている自分が居る。

考えを巡らせていた時も奇妙に思ったのだ。それを改めて指摘されて和奈は答えに困ってしまった。

「不思議なんですが、なぜか気が落ち着くんです、ここ」

「前にも来た事があるのか!？」

「そんな! 全くありません! ただ、懐かしいようななんというかその……変ですよ?」

体を縮こまらせ、俯いた和奈から視線を桂へと向けて龍馬が聞く。

「桂さんはどう考えちゅう?」

「何度も言わせないでほしい。時を越えたなど、確たる証拠もなしに受け入れる道理はない。しかも池田屋の件が起こった日に現れたんだ。僕らの動向を探るべく送り込まれた間者の可能性を捨て切れないだろ? もし間者ならばお粗末だが、それも一手だと考えると

—

「ああもう! 小五郎は細かい事を気にし過ぎる!」

「それが僕だから仕方ないだろう!」

結局、和奈も含め皆が判らない、と言う状況なのは確かだった。

「どうじゃろ、桂さん。ここは一つ、時を越えたちゅうのはおいて、今後を考えてやりゃあせんか?」

「置いておけるものではないんですが……」

視線を高杉に向けるが、拗ねてしまった高杉は後ろでゴロンと寝っ転がってしまった。

「……分かりました。取り合えず話しを進めましょう」

「その方がいいき」

うな垂れている和奈に、優しい口調で桂は話しかける。

「君は今、身を置く所がないんだね？」

「身を置く？」

「宿だよ、寝起きする」

「あ！」

そんなものある筈もなかった。

「君の言う加茂川館という旅籠屋は残念ながらこの辺りにはない」

「そうですか・・・」

時間を越えているなら、加茂川館が在ったとしても赤井達が居るとは限らない。

そう思った途端、家族の心配そうな顔が浮かんできた。連絡を取りたくても、伝達手段がない。

「ここで面倒を見てあげると言いたい所だが、慌しくなりそうなのでまずは抛り所を探すことにしよう」

できれば手元に置いて、間者として送り込まれたのでないのか探りたいのが本音だった。

「のう、桂さん。この子んこと、わしに任せてはくれんか？」

これには難色を示さざるを得ない。

「坂本くんと居る方が危険だと思うが？」

「なあに、ちつくといい処を知っちゅうき。しばらく武市と以蔵をつれて行こうと考えちよったから心配はいらん。それにいい足掛りになりそうやきのう」

何か考えあつての事だと言う事だ。

「・・・解った。和奈さんもそれでいいね？」

「お断りできる立場じゃないので、言われた通りにします」
いい子だと桂は笑みを零した。

「ああ、そうそう。一つして貰わなければならない事がある」
皆の視線が桂に集まった。

「君にはこれより男になってもらう」

「はい！？」

「女子になんちゅうことを言うんじゃ」

「この子は竹林で浪士相手に剣気を出したんだ。京に居るなら町に出る事もあるかも知れない。万が一、新撰組に出くわして剣気など出したら・・・無作法者も居るんだ。斬られるならまだしも、捕縛され責め苦を受けた後に何をされるか位、坂本くんにも察しがつくだろう。そんな事になるより、その場で斬り捨てられる方がましだと思うが」

女とばれてされる事ぐらい、和奈にも想像はつく。斬り捨てられるのも嫌だし、そんな事になるのも御免こうむりたい。

「そういう事か」

寝そべって背中を向けていた高杉も、話をちゃんと聞いていたようだ。

「そうじゃのう。なんちゃーじゃ知らん、で通る相手でもないき」

「なら決まりだ。それと、剣術の指南を武市くんにお願いできるかな。どう見ても剣術に長けているとは言いがたい」

「優しいのう、桂さんは」

「えっ？」

久しくそんな言葉を聞いた事はなかった。

「理論的に考えて、得策な事を指示しただけですよ、坂本くん」
ほうかほうかと龍馬は笑った。

「剣は君の背丈に合ったものを用意するので、男らしく皆の前に出るように」

「えっと、男らしくって、どうすりればいいんでしょうか・・・」

「そんなもの、なんとかなる！」

「だそうだよ」

笑った桂は楽しそうだった。

「名前は、そう、村木和太郎でいいね。僕の甥と言う事にしておう。晋作、解ったか？」

「村木和太郎だな、解った！」

「おまえが一番口を滑らしそうだから、気をつけるように」
思わず和奈は笑ってしまった。

「ん、笑えるならなんちゃーないがじゃ」

「ありがとうございます」

とりあえず落ち着く所がでた様だ。なら、なぜ時を越えてこの時代に来たのかゆっくり考える時間ができる。それに、感じた安堵感がどこから来るものなのか、和奈は知りたかったのだ。

其之四 志

朝の食事の時間となった頃、三人は和奈を置いて部屋から出た。四半刻（三十分）ほど経って戻ってきた桂は、桔梗色の半着と濡羽色の馬乗袴の上にさらしを畳に置いた。その上に一振りの剣が乗せられる。

「体格に合いそうな物を見繕った、これに着替えなさい。剣の方は少し重いかもしれないが、今はこれで我慢するよう」

「色々、その、ありがとうございます」

「僕が面倒を見ると言っただ、気にする事はない」

優しい笑顔は気持ちを楽にしてくれた。

「着替えた頃にもう一度来る」

すっと立ち上がって廊下へ出ると、桂は後ろ手で障子を閉めて行った。

置かれた着物を、ため息混じりに見下ろす。

男として振舞えと言われても自信などあるはずもない。だが拷問されて辱めを受ける事を考えたら、できませんと諦めて居られない。やるしかないと思えた。

ずれない様に肩からさらしを回し、きつめに幾重にも巻いて端を織り込む。半襦袢の上に半着を着てから袴を穿く。

「あれ」

微かに桜の花の匂いがした。

「桂さんの匂いかな」

男性なのに立ち振る舞いが柔らかく、その顔も丹精で、スカートを履いていたら女性に見えるだろうなど、和奈はくすりと笑った。しばらくして、桂が戻って来た。

「剣の差し方は、ちゃんと習ったようだね」

真剣の差し方には色々あったが、江戸時代後期は刃を上にし帯刀するのが一般的で、道場でもその差し方を教えられていたのだ。

「さて、朝餉の用意が整っているよ。みな在所へ行こう」

「あさげって・・・」

「朝のご飯だよ」

その口調は、どこからかい気味だった。

「皆の前へ出たら、話を合わせてくれるかな」

「解りました」

部屋を出て、右手に続く廊下を行くと、突き当たりで左右に分かれており、そこを右に曲がってすぐ右手の部屋へと、桂は入って行った。

「待たせてすみません。甥を起こしに行っていて遅れました」

続いて部屋に入ると、膳を前にした武市達がすでに座って居て、一斉に視線が向けられたものだから、和奈は頭を下げて謝った。

「昨晚騒がせてしまったから、謝るのはこちらの方です」

武市がにこりと笑みを浮かべる。

「村木和太郎と言います。よ、よろしくお願いします」

「不肖な甥でね。躰も兼ねて、母元からしばらく預かってほしいと頼まれたんです」

それぞれ挨拶しながら名前を覚えてくれた。

武市半平太と岡田以蔵の名前は剣客名簿で見た事があった。岡田以蔵は四大人斬りの一人だったはずだが、その容姿からは人斬りを生業している人物には見えない。中岡慎太郎は、高杉と同じく和奈の記憶には名前が乗ってなかった。

桂から席を指され、高杉の横にちよこんと座った。

目の前の膳にはご飯と味噌汁、芋の煮付けに豆腐、小魚の焼いたものと漬物のが並んでいる。

空腹を感じ、昨日は晩御飯を食べていなかったのを思い出した。

「頂きます」

それぞれ何を喋るでもなく、食事に手を伸ばしている。

「・・・こんなに人が居るのに、暗いぞおまえら」

高杉は静かにする、という言動が苦手な人らしい。

「おまえが五月蠅すぎるんだ。食事時くらい静かに食べたらどうだ？」

高杉と甥、二人の面倒を見るのは疲れます、と桂が文句をこぼすと、武市がそれは大変だと相槌を打つ。高杉は一緒にするなと吼えたが、以蔵と中岡は我関せずで食を進め、龍馬はけたけたと笑っている。

「和太郎くんをこのまま置いておくがか、桂さん」

龍馬がさっそく切り出して来た。

「斥候の情報を聞いてからだな。できるなら長州に帰す方がいいだろう」

高杉が茶碗にお茶流し入れ、漬物を箸で押さえながらくると回す。

頷きながら、昼には出した斥候も戻って来るだろうから、それから考えると桂は言った。

「わしに出きる事があつたらんちやーするき、言うとおせ」

「龍馬に任せると、余計危ない気がするの俺だけか？」

武市が睨みながら絡む。

以蔵が俺もですと続け、中岡もうんうんと頷く。

「おんしら、酷い言いようやき」

「その時はご助力を願います」

おう、と嬉しそうに龍馬は胸を叩いた。

池田屋から逃げ出し、身を潜めていた九名が長州藩邸へと駆け込んで来たのは、和奈達が朝食を済ませ、今後の事を話し始めようとしていた時だった。

高杉は玄関に倒れ込んでいる者達に駆け寄り、傷の手当てが先と座敷に皆を上げた。

「有吉、大沢、高木、よく無事で戻った！」

沈痛な顔で高杉が三人の前に膝を付く。

「すいません、逃げるのが精一杯で」

それ以上嗚咽で言葉が続かない大沢逸平は、乾いた血がついた袖で顔を拭った。

「馬鹿野郎！ 死んだら意味ないだろうが！ 生きていてくれた、それで十分だ！」

龍馬は一番後ろに居る野老山吾吉郎の方へと下りて行く。

「野老山は、会合に行かんはずじゃなかったが」

会合が開かれるのは知っていたが、詳しい日時を聞いていた訳でいなく、野老山は偶然、池田屋の前を通っただけだと言った。

「新撰組が居たがやき、土佐藩へ行こうとその場から離れたち。しだで、幕吏に追われちゅう望月さんが見えたき後を追いかけたんけど、見失ってしもうた」

それ以後は号泣と嗚咽で言葉にならなかった。

斥候で出ていた藩士達も、市中に身を隠していた宮部の弟春蔵を見つけ、共に藩邸へと戻って来た。

高杉は春蔵の手当てをと叫ぶ。

「悲惨だった以外に・・・出す言葉がない・・・」

春蔵は手当てを受けながらそう言った。

桂は斥候に調べた事を話すよう促した。

新撰組が逃走した尊攘過激派を捜すべく、会津・桑名藩らと連携し市中掃討に繰り出ていたらしく、その搜索によって見つかった志士達と切り合いになり、修羅場と化したらしい。

もう一人の斥候が進み出ると、新撰組が古高を捕縛し、拷問を受けた末に中川宮邸放火計画を自白させられたのだと告げた。

古高は、熊本藩士宮部の同志として古道具馬具を扱いながら、長州間者の大元締として情報活動と武器調達に当たっていた。

近江国の栗太郡生まれで、大津代官所の手代古高周蔵の嫡子である。文久元年、京の河原町にある諸藩御用達問屋枡屋を受け継ぎ、枡屋喜右衛門と名乗って攘夷志士達とともに日々活動を行なう傍ら、武器などの作成、調達を行なっている商人だ。

「古高さんは!？」

苦渋の面持ちで高杉が問う。

「拷問の後・・・斬首に!」

捕えられた古高は、新撰組から激しい拷問を長時間受け、耐え切れなくなり襲撃を自白してしまったらしいと、斥候は続けた。

高杉顔には怒り浮かび、桂も憤怒の形相で斥候を見つめている。

「京から脱出した者も数名居るようですが、安否は判りません」

「昨晚と今朝の襲撃で十四名が死亡。十三名が捕縛に至っています。入江屋、近江屋、和泉屋、丹波屋それぞれの主人と身内も同じく捕縛。町人にも何名か斬られた者が居るとの事です。池田屋主人も投獄の身となりました」

語られる内容に、暫く誰も口を開こうとはしなかった。

「おめおめとわしだけ生き残って・・・」

そうつづいた野老山は、剣を抜くと止める間もなく自分の首に刃を突き立てた。

血飛沫が人の首から放たれるのを、和奈はその目に捉えた。

「野老山!!!!」

龍馬が振り返り、武市が崩れる野老山の体に手を伸ばす。

「馬鹿が!!!」

どくどくと、刃先の刺さった首から血が溢れ出るのを、武市は必死で押さえる。

「生き残った命をなぜ無駄にするか!」

武市の腕の中で、野老山は口をぱくぱくと動かすが声にはならず、ただひゅーひゅーという音だけが漏れた後、顔が落ちた。

「馬鹿者が・・・」

手当てを受けた志士達は、部屋を用意された後、絶対に自害するなと高杉に念を押された。

夕刻になり、陽が沈むと行灯に火が灯された。

奥の部屋に夕食が用意されたが、朝とはうって変わって静かな食事となり、さすがの高杉も真面目な顔で白飯を口に運んでいる。

（人が、死んだ）

目の前の食事に手を付ける事ができなかった。鮮血が飛んだ光景が目には焼きついて離れないのだ。

「大丈夫かい？」

桂が優しく問いかける。

「あ、はい・・・」

「無理してでも、食べれる時にはちゃんと食べておきなさい」

そう言われ、箸を手にしたが、なかなか口にご飯を運ぶ事ができない。

「後で握飯でも作ってやるから、無理に食うことはない」

「晋作」

「慣れないもん見たんだ、仕方ないだろう？ 無理して食う必要はないって言ってるんだ」

「それはそうだが」

「すいません、と和奈は呟いた。

「食えるようになったら食え、いいな和太郎」

「はい」

桂は何も言わなかったので、その言葉に甘える事にした。

また沈黙が続いた。

「慎太郎を京から出したい」

静かに龍馬が切り出した。

「中岡くんを？」

「のう、桂さん、高杉くん。このままじゃわしらは多勢に無勢、ななぼ藩士らがわしらに賛同してくれたとしても、幕府を相手にするがは無茶と言うものぞよ」

確かに、高杉の奇兵隊も幕府と佐幕派藩を前に単独で攻め込めるほどの兵力はない。長州に下った藩士らも、七卿と共に沈黙したまま動かないのが現状である。戦力が乏しいのは重々承知しているこ

とだ。

「わしに考えがあるき。ただ、おまんさんらにとっては、はいそうですか、と快諾できる内容やないが」

話の内容が飲み込めず、二人は顔を見合わせた。

「ここらで、薩摩と折り合いをつけやーせんか」

これには流石の桂も憤慨の表情を見せた。高杉とて同じである。

「薩摩が長州にした事を、無しにしろと言うのか！」

「そうは言うとらんし、無しにする必要はない。ここで考えてほしい。桂さんやき、解ると思っちゅう」

龍馬が人差し指で頭をトントンと突付く。

「慎太郎を薩摩へやったところで、事がすんなり行くとは考えちゃーせん。けど、やれる可能性があるのなら、わしは動いてみたいぜよ」

幕府との兵力差は桂や高杉にとって懸念材料であるのは確かだったが、薩摩との和解を受け入れる理由にはならない。

「薩摩と長州は攘夷思想では共通しちゅう。なら、それを上手く利用する手立てもあるんじゃないか？」

「薩摩が和解に乗り出すとは、僕には考えられない」

桂の政治的思想で物事を考える性質に、龍馬は一矢を投じたようである。

「市中討掃に薩摩が参加しちやーせんがは、新撰組と会津の横行に嫌気がさしちゅうからと、わしは見た。ならば付け入る隙はあるぜよ」

「・・・とんでもない事を思いつくものだ」

桂は呆れるしかない。

「色々な可能性があるんじゃないや、その道理を考えて行くのは無駄ではないがよ」

「その話は一応頭の隅に置いておく。が、今はそれよりも他にしなければならぬ事が山ほどある」

「おう、冷や汗もんじゃった。出で行けと言われたらどうしようか

と、はらはらしたぜよ」

高杉がふっと笑みを零す。

「いや、出てってもらおうぞ坂本さん」

「晋作？」

この言葉には武市らの血相も変わらざるを得ない。

「おまえらは出て行け、桂の甥っ子も連れて薩摩でも逃げ込め」
言葉の意味を理解した桂は苦笑する。

「そうですね、出て行って頂こう。和太郎を今、長州に帰すのは危険だしね」

おうおう、出で行ってやるわいと、龍馬は高らかに笑った。

部屋へ戻った和奈は、気が抜けたように座り込んでいた。

ただ呆然とあの場に居るしかなかった。話の内容はよく判らなかったが、人が沢山死んだ事は解った。

本当に幕末の時代に来てしまった、その現実が目の前に突きつけられる。

おめおめと生き残って。そう呟いて剣を自分の首に突き立てて死を選び取った。それは現実離れた光景にしか思えず、なぜ助かったのに、自分を殺すような真似をしたのかが解らなかった。

自ら命を絶つのは正しい事ではないと頭を振る。生きるためならば、どんな無様な姿を晒してでも生きて行くべきではないのかと。

ふと気配を感じ、和奈は横を見た。そこには心配そうな表情の桂が座っていた。

「声をかけたんだが、返事がなかったから入らせてもらった。大丈夫かい？」

大丈夫かと聞きたいのは和奈の方だった。桂の目の下に、少し陰りがさしているのが判ったからだ。

「はい、なんとか」

それは良かった、と桂は言う。

「さっきはすまなかった」

「いいえ。桂さんが言った事は理解できました。でも・・・」
「あれは僕も悪かった。晋作の言う通りだから、気にしないでいいよ」

優しく笑ってくれる人だった。すごく辛い気はずなのに、自分を心配して無理に笑顔を見せてくれていたのだ。

「あの、ありがとうございました」

「ん？」

「助けて頂いたお礼を、まだ言ってなかったの」

小首を傾げていた桂は、視線を和奈から逸らした。

「助けられる命もあれば、助けられない命もある」

一瞬、その端正な横顔がくしゃりと歪んだ。

「私、人があっても簡単に死ぬのを初めて見ました。せっかく助かったのに、どうして死ぬ必要があったのか、考えてたんです」

「一言で答えて上げられるものではないね」

「ですよ。でも、それはいけない事だと思うんです」

「君の言いたい事は判る。無駄に散らす命ほど、哀れなものはないのだから」

自分の生まれた時代にも、自ら命を絶つ人はいる。その理由は様々あるだろうが、この時代の人達が自ら死に赴く理とは、ひどくかけ離れている気がした。

「命を賭けて立てた志を貫き通さねばならない。その志も貫けぬまま、自ら死を選ぶのは武士としてやってはならない事だ。けどね、彼の気持ちは良く判るんだ」

「仲間だった人が・・・死んだからですか？」

「それだけでは無い」

「命をかけて何かをする。それは大切だと思います。私の時代にも危険な仕事をする人は居ますから。でも、武士だから志に命をかける理由が・・・判らないんです」

「君には、理解しきれないと思う」

「はい・・・」

そうなのだ。志など教えられて学べるものではない。

「武士が掲げた志に一度でも背いてしまったら、それまで刻んできたすべてが無意味なものになってしまふ。仲間と共に築き上げたものならば、尚更その無念は大きいものだ・・・仲間が死に、自分だけが置き去りにされる」

今にも消え入りそうな声だった。

「それが、怖かったのかも知れない」

「桂さん、泣いてる」

目を大きく開いて和奈に視線を向けると、そっと自分の頬を触る。その手に、涙が伝わり落ちた。

「・・・・・・・・」

見られまいと下を向き、膝について座ると、ことん、と額を和奈の肩に乗せた。

「無様な姿を・・・見せてすまない」

そのまま声も出さず泣く桂を横に、言葉も探せないまま、和奈はただ黙って座っている事しかできなかった。

近藤勇に呼ばれた土方歳三は、稽古を終えてから部屋に足に向けた。

武蔵国多摩郡石田村の豪農土方隼人の十男として生を受けた土方は、少年時代から武士になるのが夢だった。しかし思いとは裏腹に、江戸上野の呉服問屋松坂屋へ十四歳から二十四歳の十年間を奉公に費や事になる。その後帰郷した土方は、実家で作る薬を売り歩きながら様様な道場に通う日々を送っていた。日野宿名主（村役人）佐藤彦五郎が自邸東側に日野では初めての出稽古用の道場を作り、この道場で試衛館から剣術指南に来ていた近藤勇と出会い、安政六年に試衛館へ入門した。文久三年、浪士組へ加わった近藤らと共に上洛して来た。壬生浪士組から新撰組と名を改めた後、新見錦を切腹に追い込み、芹沢鴨を暗殺した後、総長山南敬助、局長近藤勇、副

長土方歳三の新撰組を作り上げた。

この二日間で、新撰組隊士にも多く被害が出た。思った以上に尊攘派の抵抗が強かったのと、潜伏を手助けしていた町人からの不意打ちも、被害が拡大した原因だった。

「土方です」

「おう、入れ」

入って来た土方に席をすすめると、手入れをしていた剣を鞘にしまう。

土方と同じ国の農民の三男として生まれた近藤勇は、当時宮川勝五郎という名で、天然理心流剣術道場試衛館を開いた近藤周助の門下となり、二度の養子縁組を経て近藤家の養子となり、近藤勇と名乗る。万延元年清水徳川家家臣松井八十五郎の長女と結婚、翌年天然理心流宗家を継ぎ四代目となる。文久三年、清河八郎が將軍護衛のための浪士組を募集していると総長山南敬助から聞き、門下数名と共にこれに参加、上洛を果たした。壬生郷士八木源之丞邸宅を宿所として借受、会津藩御預かりとなった壬生浪士組時、芹沢鴨と新見錦と連名で局長として届け出た男だ。現在は新撰組の看板を掲げ局長を務めている。

「沖田はどうだ？」

頓服を処方してもらい今落ち着いて部屋にいと聞き、近藤は安堵の笑みを浮かべた。

「無理をさせるつもりはないが、あいつの事だ。残れと言っても居る場所がないと言ひ張るだろうな」

それは土方も同じ意見だった。

「剣を振るってこそその武士、沖田は人一倍その思いが強い」

それはここに居る他の隊士も同じだと、近藤は思う。武士が剣を振るえずして、何をもって武士とするのか。

「・・・武士が活きにくい時代になってきたもんだ」

「それをさせない為に、俺達は」

みなまで言うな、と近藤が片手で制した。

二人は試衛館に入門した頃からの付き合いである。その縁もあって、幕府が浪士組を募った時に試衛館から近藤、土方を含む八人が参加していた。

「朝廷と幕府から、感状と褒賞金が届くそうだ」

「少しの間はこの生活も楽になるか」

新撰組として活動していたが、その待遇は決して良いものとは言えなかった。

農民が、武士になれば楽な生活を送れると武士を目指したところで、藩士や武家出の者ほどに楽ができる訳ではない。幾許か楽になる、その程度なのである。残してきた家族を養う余裕などないのが現状である。

「それも一時、厳しい事には変わりはない」

寄せ集めの浪士がいくら頑張ったところで、濡れ手に粟とはいかない。

新撰組の創設は文久三年、庄内藩清河八郎の提案で、幕府が徳川家茂の警護に浪士組織「浪士組」を募った事に遡る。

元々清河は尊王攘夷志士である。桜田門外の変でもはや幕府に義はないと考えた清河は、この事件後、自ら開いた清河塾に幕臣山岡鉄太郎、薩摩藩伊牟田尚平、彦根藩士石坂周造などの尊攘派が集り始め、山岡ら十五名が発起人となり、清河を盟主として虎尾の会が結成された。横浜外国人居留地焼き討ち実行し、尊攘を盛り立てるため倒幕を計画するが、文久元年刃傷沙汰を起こし幕府から追われる事になり数名が捕縛、残った清河らは京に潜伏し尊攘運動を続け、九州遊説の折筑後国水田天満宮に蟄居している真木和泉と知り合う。山岡鉄太郎を介し松平春嶽に急務三策として「攘夷断行」「大赦発令」「天下英材教育」を上書。尊攘志士の過激な行動に頭を悩ませていた幕府はひの上書を採用、長沢松平家第十八代当主松平上総介のもとに浪士組が結成された。

上洛した清河達は浪士組を幕府から切り離し、急進的尊皇活動に

利用すべく、浪士組全員の署名の入った建白書を朝廷へ提出しよう
と動き出すが、清河が江戸へ戻り攘夷を唱えると言う行動に不信感
を持った芹沢鴨と、清河の身边を調べいた近藤の知り所となり計画
は頓挫する事になる。

東下命令が出でると、清河ら一部の浪士組は江戸へ戻る事になっ
たが、浪士三番隊と近藤や土方、山南敬助ら十三名はそのまま京に
残る事を決意する。その彼らを、市中に潜伏する志士達の検挙に使
うため京都守護職松平容保が会津藩預かりとしたのである。

残留した浪士組の局長の一人芹沢は、庄屋に対して金策の横行を
重ね始め、一部の隊士達と共に生糸問屋大和屋土蔵を放火するとい
う事件を起こす。会津藩のお抱えとなった浪士組の狼藉は瞬く間に
京に悪評を広げる始めた。これに懸念を抱いた会津藩は、近藤らに
芹沢の粛清を命令し、当時局長の座の一人に就いていた新見錦を切
腹させ、芹沢の寝込みを遅い暗殺すると、前川邸を松平肥後守御領
新選組宿とし新体制の新選組の看板を掲げた。

「そうそう、清河さん達だが。江戸に戻った後幕臣の手で麻布一ノ
橋で斬殺されたそうだ」

「ほう？」

「清河さんと共に行動していた同志達も捕縛されたらしい」

意見の相違はあったが、同じ浪士組として共に京へやって来た仲
間の訃報に土方は眉をひそめた。

「幹部はどうだっていいが、下の浪士達は怎么样了んだ？」

「江戸市中取締役の庄内藩預かりとなり、新徴組名乗っているとの
事だ」

土方は安堵の吐息を一つ吐いた。

普段は感情をあまり出さないおまえがと、土方を見て近藤は笑っ
た。

これで、浪士組の名前は完全に消えてしまった。

「たまに忘れそうになるな、おまえも人の子だと言うのを。だが、
危惧だったようだな」

表情を見られまいと横を向いた土方に、近藤はあまり気張るなど言う。

「俺は、別に・・・新撰組のために働けるなら文句は言わん」

こう出ると、もう先に続く会話は決まっていたので、それ以上近藤はなにも言わず部屋に戻れと告げた。

其之一 薩摩藩邸

三条の長州藩邸を後にした和奈は、龍馬達と一緒に京都御所の北に位置する二本松薩摩藩邸へとやって来ていた。

門を潜ると、女中が和奈達を出迎えるために待っており、龍馬が挨拶を述べると知らせてきますと奥へ姿を消した。

武市はその間を逃すまいと、和奈の腕を自分の方へ引き寄せた。

「私達はここにしばらく厄介となる。事を荒立てる様な言動は慎むように」

真剣な顔で和奈にそう注意する。

「はい、気をつけます」

「なんも心配はいりやーせん」

「相手が相手だ。忠告は必要と思うが？」

「なに、話しは判る人やき、なんちゃーがやないちや。武市は心配性やき」

「あの人に突っかかれては困るから言っている。能天気なおまえには判らんだろうがな」

「あとう」

龍馬と武市が和奈に顔を向ける。

「そんなに怖い人が居るんですか？」

「そうだな。今、この藩邸には薩摩藩の上役が滞在して居るんだ。何事かしでかして怒らせては、今後に差支えがあるゆえ、大人しくして居てくれればいい」

「解りました」

「いい子だ」

にこりと笑った武市を見て、龍馬が目を大きく見開いた。

「なんだ？」

「いや、なんちゃーない」

話が纏まったところで、龍馬達の後から玄関へと入った和奈は、

不機嫌そうな顔で腕組したままの男性を見つけ、この人がそうかとその顔を見上げた。

「大久保さん、久しぶりやか。出迎えてくれるとは申し訳ないがで」「誰が好き好んで出迎えなどするものか。桂くんから連絡があつては致し方ないゆえ、用も断り待ってやっていただけだ」

その言葉にカチンと来た和奈は、偉そうにこちらを見下ろしている大久保に口を尖らせた。

背後に立つ和奈の気を悟った武市が、後ろを振り返る。

「言ってるそばから・・・」

武市の言葉に、しまったと首をすくめても後の祭りだった。

「すいません」

ある種の貫禄を漂わせている男の名は大久保一蔵と言い、薩摩藩藩主の御側役兼御小納戸頭取である。

前藩主島津斉彬の時代は記録所書役助に就いていたが、お由羅騒動とよばれる後継ぎ問題に巻き込まれ、お役御免を言い渡され謹慎となっていた。時期藩主久光の時、その側役にまで返り咲いた英才だ。

大久保は、一瞬自分を睨みつけた和奈へ視線を投げる。

「見かけない顔だが、後ろに居る貧相な奴は誰だ？」

頭からつま先待て見流した大久保に、和奈はついムツとした表情を浮かべてしまう。

「桂さんの甥っ子ぜよ。訳あってわしが預かることになっちゅう」
「・・・」

沈黙がしばし時を支配した。

武市の手で背中を少し前へと押し出されると、様様な音が和奈の耳に飛び込んできた。

「よろしく願います」

ニコリとも笑わない大久保に、和奈は頭を下げる。

「・・・人数分の部屋は用意させよう」

それだけ言うと、大久保は背中を向けて左の廊下へと入って行っ

た。

龍馬が玄関を出て屋敷の横手へと足を進めた。その後を追おうとした和奈の腕を、また武市が引き寄せた。

「どこへ行く？」

「えっと、龍馬さん達と一緒に」

不思議そうな表情を浮かべた武市は、次に困ったという顔で草履を脱いだ。

「俺達はこちらから」

武市と上へ上がり、龍馬達の声が聞こえてくる妻側へと歩いて行く。

そこへ先ほどで玄関に居た女中が水の入った桶を運んで来て、縁側に座った龍馬達の足元へと置いた。

「こっちだ」

武市に言われ、大きな部屋へと入って行く。

足を洗った龍馬に続き、中岡、以蔵も足を洗うと部屋へと上がって来た。

「しかし、忠告したにも関わらず、あんな態度をとるとは。桂さんが困ると言うのも領けるな」

「仕方なからう」

「いえ。武市さん達が困る相手と判っていたんです、僕が悪いです」

「以後気をつけてくれ」

「はい」

「大久保さんは無愛想じゃが、人はいいいちや」

和奈の側へと来た龍馬は、心配してか笑いながらそう言った。

「いい人・・・」

無愛想どころではないと、和奈が抱いた大久保の第一印象は決して良いものではなかった。

部屋の用意が整うまでと通された広間に、女中達が昼の膳を運んで来た。

「さすが大久保さん。俺達の腹の具合まで判ってますね」

池田屋での騒動があった時、寺田屋に駆け込んできた中岡慎太郎は嬉しそうに膳の上を見回す。

中岡は龍馬達と同じ土佐の人間で、武市の掲げる思想に共鳴するところがあり門下に入った。それから志士として西国を飛び回っていたが、八月十八日の政変で、都落ちした公卿らに付き添い長州に亡命した。龍馬と同じく、土佐藩からは脱藩者として手配が回っている志士の一人となっている。

「和太郎くんも早く座りなよ」

屈託の無い笑顔で、中岡は自分の横の席を指し示す。

「はい」

座ると、鰹のいい匂いが鼻をくすぐってきた。

「頂きます」

武市の言葉で皆が一斉に箸を取った。

出される食はここでも至って質素なものだ。無駄な贅を凝らし、箸をつけられることなく捨てられてしまうより、一人が食べるのに余らない量だったが、その方が正しい食のあり方だろう。

「そや、武市。桂さんから頼まれ事があったき」

「俺に？」

「おう。和太郎に手解きをして欲しいとゆうちよったが」

「剣術の？」

「ああ、頼まれてくれやーせんか」

「桂さんの頼みとあれば、断るわけにはいかんだろう」

ちらりと左手に座る和奈を見る。

「宜しく願います」

ああ、と武市は答えると、黙々と膳に箸を戻した。

「ほんなら明日からしごいてもらうといい」

「しごきですか・・・」

「ちつくときつかも知れんがのう」

「覚悟しときます」

週に一二度通うだけだったが、桂木の厳しい稽古を朝から昼過ぎまでこなして来たのだ。しごかれると聞いても不安に思わず箸を進めて行く。

食事を終えた頃、おみつと言う女中が部屋の用意が整ったと知らせに来てくれた。

「暁七つ半には起きて来なさい」

五人の中で一番に食事を終えた武市は、部屋を出る間際にそう和奈に声を掛けてから出て行く。

暁七つ半と言われても、それが何時なのか和奈に判るはずもない。

「和太郎、一緒に来いや」

「え？」

和奈を連れて広間を出た龍馬は、時間について説明を始めた。

江戸時代での時間はまだ時法を元にしており、朝・昼・晩を分けると次のようになる。

「暁」夜中の零時から六時まで。

「明」八時まで。

「朝」十二時まで。

「昼」十六時まで。

「夕」十八時まで。

「暮」二十時まで。

「夜」零時まで。

二十四時間を二時間ごとに分ける場合は、「九つ」の零時から始まり「八つ」「七つ」と四つまで数え、十二時からまた「九つ」と数えていく。

合間の一時間は「半」を用いる。

「九つ半」なら一時、「八つ半」は三時となる。

九つから四つが朝なのか夜なのかを判別するのに、明六つ、夕六

つと言います。

更に細かく時間を使う場合は、二時間を四十分ごとに分ける。

「上刻」 零分から四十分。

「中刻」 四十分から二十分。

「下刻」 二十分から零分。

和奈を悩ませたのは、更に三十分ごとに分かれた読み方がある事だった。

この場合は二時間ごとに振り分けられた干支を四つに分ける。

「子一つ」 零時から零時半。

「子二つ」 零時半から一時。

「子三つ」 一時から一時半。

「子四つ」 一時半から二時。

二十四時間を十二等分するだけならば「刻」を用いる。一刻は二時間、半刻は一時間、四半刻は三十分となる。

ややこしい事この上なかいが、覚えておいた方がいいと龍馬は半紙に円を描き、それぞれの時間を書き込んで渡してくれた。

「ありがとうございます」

「覚える事が多うて楽しいじゃろ」

そう言う龍馬の方が楽しそうに見える。

「少しずつしか覚えれませんよ。で、暁七つって」

指で円を辿っていく。

(午前五時・・・)

時計という便利な物は見当たらず、よって「目覚ましを合わせる」事が出来ない。果たして目覚ましもなく起きてくれるのだろうかと不安になった。

「その顔じゃあ、寝坊は確実じゃのう」

「あはははっ・・・自信あります」

「わしが起こしに行っちゃるから、心配しなうていい」

「お手数をおかけします」

翌日から、毎朝龍馬が和奈を起こし、早朝と昼、夕方の三回、武市から剣術の手ほどを受ける日々が始まった。

一日三回の稽古で筋肉痛に苛まれ、龍馬が心配そうにしていた理由を身をもって知る事となったのである。

「道場の稽古よりきつい」

二時間ほど竹刀を振り、朝食をすませて部屋に戻って来ると敷いたままの布団にどっと倒れ込んだ。

一日のうち、これほど稽古に時間をかけた事があっただろうかと考える。週末に道場へ出向くだけの十年間だ。桂木がいくら厳しい稽古を強いていたとは言え、他の門下生に比べれば自分の稽古など稽古の内に入るものではない。

辛かったが、稽古を止めたいとは思わなかった。練兵館で赤井に一本を取られた時、強くなりたいたいと思った感情は、本人が気付かなくても心の中に小さな火種となって残っていたのだ。

「取れるようになるのかなあ」

ここで稽古を重ねたとしても、時を隔て帰る術を見出せないのであれば、赤井との手合わせなど出来るはずもない。

ふと、和奈は自分の中に「帰りたい」と思っていない自分に気付いた。

帰る術を探すどころか、ここに適用しなければと、必要と思われるものは何でも受け入れている。

ぶんぶんと首を振る。

「いやいや違う。帰るまで、帰るまでの事だし・・・」

その言葉は言い訳の様な気がした。

長州藩邸で感じた懐かしいという感情も、やはりおかしい。何かで見た事のある家に似ているのだろうかと考えを巡らせる。

【前にも来た事があるのか!？】

「絶対にそれはないって・・・」

頬に伝わる布団の心地よさに、いつのまにか和奈は眠りへと堕ち

て行った。

桜の花の匂いが鼻をくすぐる。

桂が用意してくれた着物から漂ってきた匂いと同じだった。

白く濁った景色の中、縁側で座っている人影が庭に咲く桜を見上げています。

（父さん？）

だが、家に縁側などはない。

（ここは何処なんだろう）

知らない景色のはずなのに、和奈には何処だか分かっている気がした。

太陽が頂点を過ぎた頃。

庭に立ち、和奈を待っていた武市は、やって来ない気配に、廊下が続くその向こうへと視線を投げた。

「さては、寝たか」

それも仕方ないと、握った竹刀を肩に担ぐ。

正直、よく続くものだと思市は感心している。熱心と言うだけでは、自分の稽古にこうも喰らいついて来れるものではない。それに、教えた事を素直に受け入れ吸収してしまう早さにも驚くものがある。

「すみません！」

ようやく姿を見せた和奈は、庭へと走り下りて行く。

「一日三度の稽古は辛いのか」

「体も慣れてきましたので、平気です」

「ならば、今後は遅れるな」

「気をつけます！」

自分でも厳しすぎる言葉だと思市が、質を備えていると見た者には皆同じ稽古をしてきた。それに、桂が自分で稽古をつけず、自分にと頼んだ訳も汲み取らなければならぬ。

（女子に剣術など不要なものだが）

甥と紹介されて、そこに気付いたのは龍馬と自分だけだろう。以蔵も中岡も和奈が男だと信じて疑ってもいないはずだ。

「武市さん？」

苦笑を浮かべ、始めるぞと、武市は竹刀を構えた。

竹刀を振るう腕には、確かに剣術を習っていた筋肉を見て取れた。だが、振り下ろされる力は弱わく、何よりも肝心な体力が付いてない。

腕、肩から胸、背筋、腹筋の筋力が未熟であれば、相対せる時間は少なくなる。事実、力を抜いて打ち合っても、竹刀を握る和奈の腕は四半刻と持たなかった。

和奈の腕が落ち、竹刀の先が地面に付く。

「もう終わりにするか？」

「いえ、まだ。もう少しやれます」

向かって来る意気込みも以蔵と中岡によく似ている。

「問題は体力か」

今の世、刀を持てば斬るか斬られるかの二つに一つだ。技を身につけさす事も然る事ながら、肝心となる体力、筋力双方もつけさせねばならない。

「せいがでるのう」

縁側に出て来た龍馬は、そう二人に声をかけた。

「龍馬さん」

横を向いた和奈の頭に、バシッ！ と竹刀が振り下ろされる。

「ったああ！」

「こら、稽古中に余所見とはなんだ」

頭を抱えて蹲ってしまった和奈を見て、龍馬が慌ててその傍らへと走り寄った。

「おんし、乱暴はいかんぜよ」

「乱暴？ 今が稽古中だと言うのを忘れてはいまいな？」

「阿呆ゆうがやない。おんしなら止めれたぜよ」

「斬り合いとなった時に、知り合いに声をかけられたからと気を殺

ぐのは、命取りしかならん。今のが真剣ならば、間違はなく和太郎は即死しているぞ？」

剣の事となると融通が利かなくなる男にの解っていた。それは武市なりの、弟子に対する思いやりなのだと思つてはいたが、もう少し臨機応変に処する術を持ってないのかと、龍馬は口に出した。

「常日頃からの心構えがある無しで、生きるか死するかが決まる」それが剣士である武市の心構えなのだ。

「だがのう」

「稽古は遊びなどではないと、道場でもよく言われたんです。だから気にしないで下さい」

痛む頭をこすりながら立ち上がった和奈も、武市の言う事を理解しているらしい。

龍馬は一瞬目を細めて和奈を見た。

「今日の稽古はこれまでとしよう。和太郎、すまないが茶を入れて来てくれまいか」

「はい」

竹刀を立て掛けようとした和奈の手が止まると、竹刀を脇に挟み武市に向かって一礼した。

「ありがとうございます」

そうして竹刀を置き、廊下へ上がると小走りで奥に消えて行つた。

「剣術を習っちゃったがとゆうちよったが、どう思っちゃう」

武市は縁側に腰掛け、和奈の消えた方へ眼をやる。

「確かに刀を持つ者の心得は身につけている。素質はあるのだが、稽古不足であることは否めまい」

「けんど、武市。おんしが教えちゆうのは護身術じゃないが。剣術やか。それを判っておるかえ？」

「当たり前だ」

「桂さんから頼まれたのは、和太郎に護身術を教えてくれとゆうことじゃったろうが」

「桂さんが俺に頼んだ。だから俺はあいつに剣術を教えている」

「！」

「すぐに気づけ、阿呆が」

「油断したき」

「で、そんな事をわざわざ聞きに来たのではあるまい？」

「ほがな事でくるめるな」

だが武市はそれ以上、和奈への稽古について答える様子を見せなかったものだから、龍馬はしぶしぶと懷から出した文を渡した。

「おんしに渡して欲しいと、桂さんから言付かって来た」
文を開いて目を通す顔が、次第に険しくなっていく。

「高杉くんは今日にでも長州へ戻るとゆうちよったが」

「その様だな。これから桂さんと共に京を発つ」

「慎太郎の帰りを待てやーせんか」

「池田屋の件が長州に届くのも時間の問題だろう。報せを受けた長州兵が上洛するのも必至となれば、時を急ぐに越した事はない」

「止めに行くのか」

「血氣逸つての上洛は、時期尚早だ。その点で桂さんとも考えを一致させている。何千もの長州兵が京に雪崩れ込む事になれば、もはや止める手立てがなくなる。なんとしても久坂さんと真木さんを押し留めなければならん」

以蔵はここに置いて行くと武市は言った。

「長州が京に入れば否応なく薩摩も動く。両藩の和解を考えるおまえにとっては、厄介な火種となる」

「わしにとつてだけじゃのうて、薩摩との和解は長州にまっこといるな事ちや。抑えられるならそれに越した事はない。が、武市、無茶はしな」

「おまえに氣遣われるまでもない」

と、武市は空を仰ぐ。

お盆を抱え、戻って来た和奈は二人の座る間に湯飲みを置いた。

「私が戻るまで、稽古は以蔵につけてもらおうといい」

「武市さん、出かけるんですか？」

「ああ、江戸へ行く」

以蔵と喋る機会など殆んどなかった和奈は、その不安が顔に出てしまったのだろう、だから武市は、

「素っ気ない奴だが、悪い奴ではないから安心しろ」

と笑った。

「悪い奴とか、そんなじゃないです」

武市が居ない時は一人部屋に閉じこもったまま、皆の所へは顔を出さない。食事時ともなれば、呼ばれなくてもいつの間にか部屋に来て居るのだが、どこか近寄り難く、かける言葉も見つからないため、会話は皆無に等しかった。

「無口な男だが、剣の腕は俺が保証する。安心してしごかれておくといい」

「うへっ」

首を引つ込めた和奈に、くすりと笑った武市は、用意をして来ると腰を上げて部屋へと戻って行った。

「どうがな、ここでの暮らしは」

不自由などしていないだろうか、龍馬の気掛かりは尽きないものである。

「毎日、稽古稽古で、生活してる実感がないんですね」

「武市は厳しいからもう、疲れて何かをする前に寝ちゅうがやないがか」

「そのとおりです・・・でも、ここでの稽古は楽しいです」

「ほう。あっちとこっちじゃー、稽古が違うがか？」

「流派が違うので構え方とか立ち方は少し違いますが、稽古の内容はそう変わらないです」

「ほうか。ま、楽しいと思えるなら、なんちゃーがやないやき。困つとる事があつたら言うとうせ」

「困るというか・・・」

「なんじゃ？」

「手水は外にあるのがどうしても慣れなくて、夜なんか本当に大変

なんですから」

「未来には廁が無いがかえ!？」

「在ります在ります!」

廁は言わばトイレで、手水も同じ意味を持つ。あからさまに口にするのがはばかれるので、「はばかり」や「手水^{ちようず}」と口にする。

長州藩邸もこの薩摩藩邸もトイレは家屋の側屋に在った。

下に水を流す溝が作られて、川へ流れる仕組みになっているから衛生面は良かった。ただ、手燭^{てしよく}の小さな灯りで暗闇を廁へ歩くのは、闇に慣れていない和奈にとって骨の折れる事だった。

「ほりゃあ、わしではなんちゃあ出来んぜよ」

「ですよね。そのうち慣れると思います、はい。すいません、変な話で」

「いやいや、ほがな事で悩めるなら、なんちゃーがやない」

龍馬の笑顔は、桂の笑顔と同じで自然と心が落ち着く気がした。

「あの、龍馬さん」

「ん？」

「ずっと気になってたんですけど、私が居た所の話して聞かないんですか？」

初めて会った時に、これから起こることを知っているのかと聞いてきたにも関わらず、馬は一度としてどんな所なのだと聞いてこなかった。

「わしらがここで何をして、どうなっちゅうのかとかかの」

「はい」

龍馬は、いらんいらんと手を振った。

「結果なんぞ聞かえうても、いずれ判る事やき」

「でも、判っていたら……死ななくていい人も、死なずに済むんじゃないんですか？」

恐らく自分なら悪い結果にならないよう、結果を聞いて違う術を選んで進むに違いない。

「ほりゃあそうじゃが、わしは聞きたいとは思いやーせん。桂さん

と、何一つおんしに聞いたりもしせんじやろ」

「ええ・・・」

未来の事に興味ありそうだった高杉とて、聞きに来る事はなかった。

「これから何が起こるか判っちゃったたら、確かに思い通りの顛末を描けるじやろう。けど、ほいたら意味がないぢや。解らんからこそ、皆必至に生きようと努力する。それが一番大事やき、生きちゅう実感をこの手にできる。違うか？」

龍馬は和奈の顔の前で手を広げて見せた。その手には竹刀稽古でついたと思える肉刺が残るっている。

「じゃからおまさんも語らのうていいし、聞かれても答えんでええ」生きる努力をする。

果たして自分は生きようと努力して生きてきただろうか。

「よし、わしがちつくと稽古につきあっちゃる」

武市が置いて行った竹刀を手に取り庭へ下りた龍馬は、はよう来いと手招きをする。

「はい！」

二人が竹刀をあわせて少し経った頃、部屋から出て来た以蔵は庭へと視線を向けた。

「何をやってるんだ」

二人の稽古にもなっていない打ち合いにため息を吐く。

その気配に気付いた龍馬が、中段に構えたまま顔を横へと動かした。

「おう、以蔵」

横顔が見えた時にはもう、和奈の腕は上段から振り下ろされている。

止める技量など今の和奈にはない。

「あっ！」

その声に反応した龍馬の体が後ろへと一步退いたが、前に出されていむた腕はそのまま竹刀を受けてしまった。

「痛っ！」

「龍馬さん！」

駆け寄って来た和奈に、大丈夫だと笑いながら手の甲を摩る。

「馬鹿が」

「いかんいかん、これじゃー武市に怒られてしまう」

手を振り、申し訳なさそうにしている和奈にもう一度笑いかけた龍馬は、竹刀を手に縁側へと歩いて行く。

「ほれ」

竹刀の柄を差し出してきた龍馬に、以蔵の眉がつり上がる。

「なんのまねだ？」

「武市がのう、和太郎の稽古をおんしにさせろと言うちよった」

「先生が？」

「あ、こら、待ちやー」

踵を返した以蔵の背中に声を上げるが、聞く耳もなく以蔵は走って行ってしまった。

「まっこと、武市の事となると余裕のうなっていかん」

「岡田さんて、武市さんの側をあまり離れませんよね」

龍馬の横に立ってその顔を見上げる。

「武市もわりい」

早く手放してやらないと、死ぬ事になる。

これまで多くの命をその手にかけてきた。例えそれが命をかけることになったとしても、武市がやれと言えは躊躇いなくその剣を振るうだろう。

「ほがなこと、武市は望んでないんやけどのう」

「お弟子さんだからですか？」

「ん？ ああ。そうじゃな。中岡の様に、時間をもっと大切にしたらえいがやけど」

「中岡さんもお弟子さんなんだ」

「おお。話さんかったか。土佐におる頃は毎日の様に道場につとおておったが、今は別行動を取っちゅう」

明るい中岡に、影のある以蔵。対極を成す二人を弟子としている武市。

「明暗じゃのう」

けたけたと龍馬が笑い声を上げる。

「間におるおんしは、どんな色に染まるんかのう」

「色、ですか」

龍馬はそんな事を考えてそう言ったのだろうが、明の白と暗の黒の間ならば、どちらにもつかない灰色しかない。

「灰色もいいかも知れませんね」

「！ いや、そうゆうつもりでゆうたがやない。誤解しやーせんていとおせ」

「誤解してませんから、そんなに慌てないで下さい」

「おんしが大人で助かった。以蔵も、もうちつくと成長したらいいがやき」

二十二で大人扱いされるとは思いも寄らなかった。

「岡田さん、いくつなんですか？」

「二十六になるがで」

「えっ！？ 私より年下かと思ってた」

「中岡も二十六ちや」

「下に見える！」

中岡は背がちっこいから、と笑う龍馬だったが、年齢に背は関係ないだろうと和奈は思う。

「おんしはなんぼになるんだ？」

「二十二です・・・」

「ほう。おんし、見た目より若く見えるのう」

「何も出ませんよ？」

改めて皆の年齢を聞いた和奈は驚くばかりだった。

年長から並べると、三十五歳の武市、無愛想極まりない大久保は武市より一つ下の三十四歳。そして三十一歳になる桂。そして以蔵、中岡ときて、最後に二十五歳の高杉となる。

「桂さん若いっ！」

「確かに若いのう。高杉くんの二十五歳は間違いのような気がするがで」

「あの奔放ぶりですからね・・・」

どう見ても考えても年下にしか見えない男であると和奈は真面目に答えた。

「けれど、長州の上士にゃ変わらない」

「上士？」

藩士には上士と下士がある。上士は上級藩士を、下士は下級藩士を縮めた呼称で、最上格の家柄に生まれた者は上士となり、騎乗も許されている。

城下以外に住む武家が下士と呼ばれ、武士と同じく士分を持ち名字帯刀も許されている。

上士の身分の者には少ないが、名字帯刀と士分を持つと少なからず藩から給金が賄われ、職にもありつける事から、下士身分を買う農民や商人も多く居た。

「身分を買うんですか」

「安い買い物じゃないき、欲しがるもん全部が買えるとは限らんがのう」

「龍馬さんはどっちなんですか？」

「わしは郷士やか」

「ごうし？」

土佐藩に山内家が入封した時、山内家臣を上士とし、長宗我部氏の家臣や郎党等を郷士とした。土農工商の一角を占める士分より下の者である。下士と同じく城下には住まず、農村地帯などに居を持ち藩に仕えている。

土佐は、上士と郷士の身分差別が厳しい藩で名高い。名字帯刀は許されているが、上士とのその扱いには大きな違いがある。目通りや上申などは叶わず、足袋や下駄などは履く事を許されていない。

武市は足袋を履いているが、龍馬や以蔵は裸足で草履を履いてい

る。

他の三人が妻側へと回ったのは、そういう理由があったからなのだ。

「だから足を洗って？」

「汚れたまま畳にや上がれんからな」

身分差など考える必要のない環境で育った和奈にとっては驚くべきものである。足袋や下駄など、貧富の差があっても買えるなら誰しもが履く物だ。

「武市さんは上士なんだ」

「ちつくと違う。武市は郷士よりも上の白札やか。ただ扱いは上士と同じとされちゅう」

「・・・身分分けが一杯ある、ってことですね」

和奈の思考はすでに停滞しつつあった。一度に沢山聞いても覚える自信がなく、それ以上は身分について尋ねるのを止めてしまった。

「桂さんと高杉くん、大久保さんは上士ちや」

「大久保さんは、なんか納得・・・」

あの態度である。身分が低いと言われた方が不思議に思っただろう。

「三人とも国の政に意見出来る人物ちゅうことちや」

武市が忠告した理由は、だからなのだ。

政り事に関わるなら、国会議員のようなものなのだろう。和奈の知る年老いた国会議員とは随分と差があったのだが、そう考えるとすんなり頭の中に収まってくれた。

「大久保さんには絶対逆らったらいけん」

真剣な顔なのだが、真剣さが欠けていたものだから、和奈はつい噴出してしまった。

そう念を押されなくても、喧嘩を売ろうなどと思わない。売ったが最後、何をされるか判ったものではない。

そこに、拗ねた面構えで以蔵が戻って来た。

聞くまでもなく、連れて行けと懇願しに行ってあっさり断られた

のだろう。

「俺の稽古は先生ほど優しくはないから、覚悟しておけ」

八つ当たりになりそうな予感がし、和奈は引き返して行った以蔵の背中にため息をついた。

其之二 新撰組

屯所を出た土方は、沖田を伴って町へ来ていた。

二人とも今日は非番なので羽織を着ていない。

「甘いものでも食べますか」

嬉しそうに沖田がはしゃぐ。

「なんでおまえと並んで甘味屋なんぞ行かねえといけねえんだ」

「あれ？ 岡場所にでも行くつもりだったんですか？」

岡場所は今で言う遊郭だ。

公許の遊郭と違って、私娼が集るため呼び方が区別されている。身分を問わず、こへ通う者は多い。気に入った相手と一夜を過ごす事は、殺伐とした今の世を生きる者にとって欠かせぬ一時ともなっている。

「おまえの頭ん中には甘味か色しかねえのか！」

凄んでも沖田には通用などしない。

土方が一睨みすれば、大抵の者は猫を前にした鼠になってしまいろくに話しをすることもままらなくなる。普通に接して来る者と言えば、鼻歌交じりで横を歩く沖田を始めとする元浪士組三番隊に居た者くらいだった。

「いいじゃないですか。頭を使うには甘い物が一番なんです」

人当たりの良い男。沖田の第一印象は皆そう思う。事実、隊士から相談を持ちかけられる多さは隊で一番だった。その風貌からは、一番隊組長を勤め、撃剣師範の腕前を持つ剣客と知る事はできない。隊士達はその肩書きを嫌と言うほど思い知らされるのは稽古に出た時である。新米隊士はそこで始めて沖田への見方を一転させる。その稽古は隊に於いて一番厳しく、鬼の副長の異名を持つ土方よりも恐れられている。

剣で斬るな、体で斬れと、鬼の形相になる沖田を、猫の皮を被っ

た虎の子だと土方はよく言う。

「仕方ねえな、つきあってやるよ」

男と連れだって云々とブツブツ言いながら、沖田の後から甘味屋へと入って行った。

稽古が無い時になると、和奈は藩邸の雑用を手伝うようになっていた。

色々覚えなければならぬ用語や道具の使い方もあり、龍馬が
いい経験になると勧めてくれ、大久保も別に困る事はないと許可を
出してくれている。

「けれど、まだ一人じゃー出たらいかんちや」

そう言われ、藩邸からの外出は認めてもらえてはいなかった。

「どうして駄目なんですか？」

新撰組が町の警備と巡回していて、不審な人間と見ると片っ端か
ら捕まえて行くのだと龍馬は答える。

桂が、新撰組に出くわしたら、と言っていたのを思い出した。

「やき、まだ出してやれやーせん。出さないといかん時があつて、
新撰組と会ってしもうたら、迷わず逃げるちや」

「逃げるんですか？」

「ほうじゃ、必死でな」

龍馬は両腕を振り子のように振り、走るまねをして見せる。

「あはっ。判りました。逃げ出します」

「わりい人間ばかりがやないんけれど、中にゃ分別を知らん男もお
るからのう」

それはこの時代に限った事ではない。

「わしも出くわしたら、必死で逃げるぜよ」

「龍馬さんも？」

「ああ。ちつくと事情があつて、新撰組に見つかると怒られるちや」

「なんで怒られるんですか!？」

「おう！」

町の治安を守る新撰組に怒られるのは、何か悪い事をしたと言うのだろうか。

「わしからが成そうとしちゅう事を、今の幕府のもんは理解しようとしやーせん。やき新撰組のもんにとったら、わしらは敵という立場になってしまっちゅうちや」

「敵、ですか・・・」

「けんど、敵とゆうたち志が違うだけちや。それが原因でいがみ合っちゅう」

「桂さん達もですか？」

「うん。桂さんと高杉くんの長州藩は、薩摩藩と会津藩によって京から追われちゅう。藩邸こそ在るが、幕府からすれば厄介もんに違いはない」

「薩摩藩って、ここ、薩摩藩邸ですけど」

「確かに薩摩は長州にとったら敵も同然けんど、大久保さん個人はわしらと同じ志を持ちちゅう。まあ、表立って協力しちやーせんけど、手を出せる範囲の事にゃ協力してくれちゅうから心配はいらん」

藩と言うのが国の事だと名前から理解は出来たが、一つの国の中で幕府側とそれに敵対する側があるところで、和奈の思考は停止した。

「全部一度に理解しようとしのうていい。わしらとおる事を知られてはおんしの身が危険になる。やき新撰組は一番会っていかん相手だとゆうがを覚えておいとおせ」

「龍馬さんの土佐藩も、敵対してるのか」

「いや、土佐は幕府寄りだ・・・わしらは土佐を脱藩しちゅうから見つかれば大事になるき」

脱藩という言葉聞いた事がある。そう、桂と会った時、そう聞かれた。

「脱藩って？」

「許可を得ず、定められた期間を過ぎても戻らんと、藩を抜けたとされ手配書が出される。それを脱藩とゆうんだ」

「もし見つかったら？」

「藩によっては脱藩を黙認するところも多いが、土佐は厳しうてのう。見つかつて送還されたち、悪うて死罪になるき」

「死罪！？ 国を出ただけで！？」

「悪うてだ。やきおんしも、長州へ行ったら勝手に藩から出るのは止めとおせ」

「肝に銘じておきます」

大きな欠伸をしながら龍馬が背伸びをする。

「眠うていかん」

「って、あんだだけ寝るの早いじゃないですか」

「眠いものは仕方がないきね」

娯楽と呼べるものが少ない時代に、夜更かしなどできようはずもなく、夕食が終わり用も無ければさっさと寝てしまう。

それは和奈とて同じで、皆が寝てしまっではどうしようもなく、早々に布団へと潜り込んでいる。そのお陰もあり、半月も経った今では空が白み始めると自然に目が覚めるようになった。

「まあ、これだけ平らげたら眠くなりますよね」

出されたご飯だけでなく、残っていた三人分ほどの白飯を綺麗に食べてしまったのだ。

「じゃあ、これおみつさんに渡してきます」

膳を台所へ持って行くと、かまどを据えた土間の横で片付けも途中に、囲炉裏を囲んでいる女達が目に留まった。

「あの、すみません」

声をかれられ、女達の中からおみつが抜け出て来ると、和奈の手にあった膳を受け取る。

「おおきに」

「なにかあったんですか？」

おみつは上女中として、女中を取り仕切っている女性で、なにか

と和奈達の面倒を見てくれている。

「いえね、長州藩邸に使いに出かけたお京ちゃんとお宮ちゃんがまだ帰って来いひんのどす」

お宮という女中は知らなかったが、お京はよく部屋の掃除にと来てくれていた。

「時間がかかり過ぎてるさかい、捜しに行こうか話してとこなんです」

「いつ頃でかけたんですか？」

「昼餉のこしらえが終った頃やったさかい、未の上刻くらいかと思うて」

今は未八ツ（十四時）過ぎくらいだ。そろそろ二時間は経つ。女の足とは言え、藩邸まで遠い道のりではない。

「僕が見てきます。長州藩邸へ行っただんすね？」

「ええんでっしゃるか」

「おみつさんは忙しいでしょう？　もう用事がないし、ちょっとだけ行っって見てきますよ」

何か胸騒ぎを感じて、部屋に戻らず裏口へ向かうと藩邸を駆け出した。

（出るなって言われたけど、きっと駄目だった言われる）

龍馬に言えば自分が捜しに行くに違いない。

御所の近くでもあるために見廻組も警戒を強いている。手配が回っているなら、新撰組でなくとも見つければ危険となる。素性を知られていない自分なら、例え出くわしたとしても問題はない。もし二人が見つからなければ、その時に戻って相談すればいい。そう和奈は考えた。

まだ藩邸周りの地理しか頭に入っていないが、縦横の道が交差する京の町は時を経ても作りは然程変わっていない。三条大橋や、御所など有名な場所が判れば大体の位置は把握できる。わき道や小さな通りへ入りさえしなければ、道を間違える事はない。

長州藩邸は三条通りを歩き、川の手前を左へ曲がればすぐだ。念

のため、警戒が厳しい御所の周りは避けた。

昼時にも関わらず、町にあまり人影がなかった。

不安定な情勢もあり、京から出る町人や商人が多くなっているのが原因である。

三条通りに差ししかろうとした所で、左手の路地から聞きなれた女の声が耳に届いてきた。

(この声・・・)

「放してください!」

お京の声だと、声を便りに路地の奥へ走り一つ目の角を左へ曲がる。その先に、浪士に手を掴まれているお京と、長屋の壁に背をつけ立っているお宮の姿を捉えた。

「すいませんで済むのかと言ってるんだ!」

男は大きな声で怒鳴っている。

「お京さん!」

和奈は駆け寄り様に、お京の手を掴んでいた浪士の腕を思い切り払い退けた。

「和太郎さん!」

二人の間へ割って入った和奈は、お京の手を引いて背後へと下がらせる。

「なんだ、おまえは!」

何回聞かれた台詞だろうか、つい苦笑を浮かべてしまう。

馬鹿にされたと思ったのか、浪士が少し後ろへ下がりはじめ、手を治え身構えた。

「うちの女の子が何かしたんですか?」

「何かしただと? 聞きたいなら教えてやる。こいつわなあ、俺の脚を踏んづけて謝りもせず行こうとしやがったんだ。無礼も程があるだろう?」

この時代にもこういう馬鹿な輩がいるのだ。

「そんな事で女性に絡むなんて」

「そんなことお!？」

男が刀を抜こうと前屈みになり、和奈もお京を背にさらに後ろへと下がせた。

「謝りました私!」

お京の声に男が刀を抜く。

「謝ったと言ってるじゃないですか」

「女の前と、格好の一つもつけたくなるよなあ。なら、おまえから礼儀を教えてやるとしようじゃないか」

柄を握りしめ、間合いを測った和奈は利き足を少し前に出しつま先で袴の裾を踏む。こうすれば足先が見えず、剣閃を予測しづらくなるのだ。

「お京さん、もっと後ろへ」

はい、と震えた声がしてお京が離れるのを確認したと同時に、男の腕が動いた。瞬間、和奈は振り下ろされた刀を横に交わし男の腹へと足を蹴り込んだ。

「このくそが!」

上段から打ち下ろされてくる剣を抜刀しながら受けめたが、和奈の力では止めるのが精一杯で弾き返す事ができない。

(くそ・・・)

罅迫り合いを保ったまま、相手の押す力を利用して腕を突っぱね、後ろへ飛び退いた。

間合いを取れば、相手もそう簡単には懷へ飛び込んでこれない。

「きゃあああ!」

叫び声に、和奈は視線だけを横へと動かした。

「お宮ちゃん!」

もう一人の男が、お宮へ振り上げた刀を打ち下ろすのが映る。

「!」

ざわっ、と和奈の気が乱れた。

「おまええ!!」

目の前の男をそのままに、和奈は地面を蹴る。

走り来る和奈に気づいた男は体勢を変え、血に染まった刀を構えた。

腰の位置を低く取り、男が刀を振るその前に右脇から肩へと斬り上げる。

「がはっ！」

ビシャリッと、肉片が飛び散る鈍い音が耳に届き、脇腹を抱えその場に蹲った男の隆椎へと躊躇いなく刀を突き下ろす。

ドクドクと鼓動が耳の内側一杯に広がり、視界には首に刺さった自分の剣がある。

「きゃああ！」

お京の悲鳴で意識を外へ戻した和奈は、刺した刀を引き抜き体を返し駆け出す。

「死ね！」

頭上に掲げられた刀。

（間に合わない！）

和奈は脇差を左手で抜き取ると、男目がけて投げ放った。

「！」

お京を斬るはずだった刀は脇差へと目標を変え、懐へ和奈を滑り込ませる時間を男は作ってしまった。

切っ先を下から体へと滑らせる。

「ま・・・待てっ！」

半着の懐が割け、薄っすらと血が滲むのを手で押さえながら男は片手を突き出す。

動いていた和奈の足が止まった。

「甘いんだよ！」

咄嗟に刀を避けようとした体に剣先が掠る。

「っっ！」

右腕に痛みを感じ、ちらりと目線を落とす。

（斬られた・・・）

隙を逃すまいと男が斬り込んで来たのを、間合いを詰められてい

たため交わすことが出来ない。

（殺られる！？）

「そこまで！」

和奈の懷に届くはずの刀は、横から割り込んできた刀によって止められた。あと少しでも遅ければ、腸まで切り裂かれていただろう。

「邪魔をするな！」

いきなりの乱入者に驚いた男は、後へと下がった。

「承服しかねる。おまえこそ退け、退かねば斬る」

この剣気、と、和奈は体が萎縮して行くのが解った。これで二度目だ。

「青二才が偉そうなことを！」

「あんた、俺を知らないのか？」

そう発つせられた言葉に男の動きが止まる。

「新撰組一番隊組長、沖田総司」

剣気に圧されてしまった和奈は、新撰組と言う名を聞きながらその場へ座り込んでしまった。

「お・・・沖田だと？」

「いいところ取りじゃねえか」

もう一人、すでに抜いている刀を肩に置いてスタスタと路地から男が歩いて来た。

「あ・・・あんたは、土方」

「やだなあ。そう言うのを、無礼、って言うんですよ」

沖田は平然と男の腹に刀を突き出す。

「そっ・・・」

そのまま柄を返すと横へ一気に刀を引く。

和奈の目前に、男の体から離れた肉片と血が広がった。

「かはっ！」

息絶えながら男の身体が沈み、路地に転がる死体は二つとなった。腰が抜けたように座り込んでいる和奈の背中へ駆け寄って来たお京は、その肩に両手を置き沖田と土方を見上げた。

「おい」

びくっと、肩に置かれたお京の手が反応して漸く和奈は顔を上げた。

「あっちの女も知り合いか？」

「え・・・？」

和奈はゆっくりと倒れているお宮へ顔をやる。

「わ、私と同じ女中です。謝ったんです私、足を踏んでしまつて。謝ったんです！」

お京は背中に額を当て、泣き出してしまった。

「難儀な目にあつたな。おい、おまえ。女を助けに入るならもつとましな腕にしとけ」

睨むように土方を見上げたが手が、体が震えて止まってくれない。
「初めて人を斬ったのか。悔しいなら強くなるこつた。それから、助けられたらまず礼だ」

腕を掴み上げられ、土方に支えられる様にして立ち上がった和奈は頭を下げた。

「ありがとうございます」

声、足共に震える姿に土方は苦笑を隠し切れなかった。

「土方と聞いて俺を睨みつけて来る奴は少ねえ。いい度胸してると褒めてやる」

「睨む前に斬ってたら、睨みたくても睨めないですけどね」
うるせえ、と沖田に怒鳴る。

笑顔を浮かべ、土方と話す沖田からはすでに剣気が消えいた。

「おまえ、名前は？」

「村木・・・和太郎と言います」

「一応覚えといてやる。女を運んでやろうか？」

和奈は頭を振った。

「僕が・・・連れて帰ります」

「そうか。こっちは俺達がやっというてやる。後始末なんざ、出来ねえだろ？」

「・・・はい」

「沖田。近くを見廻ってる連中に始末させておけ」

はいはい、と刀を鞘に納めながら、沖田は出て来た路地へと入って行った。

「平気か？」

初めて人を斬った場合、大抵は平常に心を戻すまでに時間を要する。

「はい。もう、大丈夫です」

「・・・あちはそうもいかねえみたいだがな」

後ろに居たはずのお京は、いつの間にか倒れているお宮の側に蹲り、その身体をゆすりながら必死に名前を呼んでいた。

和奈はそれをただ見ている事しかできなかった。

「さつきも言ったが、女を守りてえならもつと強くなるんだな」

「強く・・・」

（なんだ？）

心ここに在らずと立ち尽くす和奈に違和感を感じると同時に、得体の知れない感覚が背筋を這い登ってきたのだ。

「なれるでしょうか」

稀に、蠅や蚊を叩き潰す時と変わりなく斬る者も居る。そう言っただけの多くは人斬りへの道を進む事が多いのだが、目の前に居る和奈の場合はそれともどこか違って思えた。

「なれるかなれないかは、おまえさん次第だろうな」

「僕次第・・・」

「こいつらは浪士だから大事にはならんが、どこぞの藩士相手だったら切腹もんになるかも知れねえ。喧嘩を買う相手は選べってことだ」

「気をつけます」

「いい心がけだ。じゃあ・・・気をつけて帰れよ」

「はい。本当に、ありがとうございます」

気にするなと言いつつ、沖田が消えて行った同じ路地へと消えて

行った。

泣き止まないお京の傍らへと歩いて行き、重くなったお宮の体を抱えあげる。後を泣き声が着いて来るのを気配で確かめながら、和奈はその場から離れた。

足を踏んだだけで人に刀を振り下ろす。命とはそんなに簡単に奪われていいものではない。理不尽な言い掛かりで奪われる物でもない。

「冗談じゃない」

抱えた身体の重さが悔しかった。

血にむせ返るのを堪えながら藩邸へと向かう足を速める。

幸運にも、誰に見つかる事なく二人は藩邸の門を潜ることが出来た。

「和太郎！」

その姿が見えず、邸内を捜していた龍馬は、おみつから事情を聞いて出ようとしていたところだった。

「おんし・・・」

和奈の全身に付いている血の跡を見た龍馬は、奥歯を噛み締め苦渋の色を浮かべた。その血が、お宮を抱えて付いたものではなく、人を斬った時の返り血だと判ったのだ。

絶句したままのおみつに以蔵を呼んで来くれと頼み、和奈にはお宮を下すように言った。

そつとお宮の体を床に置いた和奈は、乱れて目に掛かった前髪を丁寧直してやる。その顔は、寝て居るかのように見えた。

玄関へと下りて来た以蔵が、和奈を見て息を飲んだのが龍馬には判った。

「以蔵、はようお宮さんを奥へ運んでやってくれ」

声も出せず啞然としている以蔵に、龍馬が急かすように言う。

以蔵は小さく、ああ、と答えるとお宮を抱き上げ奥へと消えて行った。

「お京さん、無事でよかったのう」

優しい声に、しゃくり上げていたお京がまた涙を流した。

「・・・お宮ちゃんが、お宮ちゃんが」

繰り返すその肩を抱えたおみつは、その場からお京を連れて行った。

それを見届け、立ち尽くしたままで自分の手をじっと見ている和奈の前へと立つ。

「一人で行くと言ったがやき。なんでわしに知らせなかった」

「・・・大久保さんも居ないし、龍馬さんが出て新撰組に見つかっては駄目だと思って」

龍馬は和奈の頭に手を伸ばすと胸元に抱え込む。

「おんしはいらん心配はしのうていい」

すみませんと呟いた体は、腕の中で小刻みに震えている。

「とりあえず、その風体をなんらあせんとおう」

風呂場へ和奈を連れて行き、脱衣場へと放り込む。

「火を付けてきちやるき」

湯が沸くまで待てと言われ、壁に背をつける。ズルズルと腰が落ち、天井を見上げる。

やけに白い首元。少しせり出した骨。そこに突き刺さる刃。あふれ出す血。繰り返す同じ場面が頭に浮んでくる。

刃を伝い肉を突き刺した感触がまだ手の中に残っている。

自分は人を殺したのだ。

ギョツツと膝を抱える腕に力を込めた。

「沸いたぞ。ゆっくり浸かって出てこいや」

四半刻ほど経った頃、龍馬の声が耳に届いてきた。

のそりと立ち上がり着物を脱ぎ、血に染まったサラシをそのままにして中へ入ると、湯船から湯を汲み全身へと浴びせかける。

「つつ」

腕に痛みが走り、ぼやけていた意識がはっきりと戻ってきた。

「・・・痛いなあ」

理由はどうであれ人を殺したのだ。殺そうとして刀を振るったの

ではないが、刀を首に突き立てると言う事は確実に相手を死に追いやると解っていたはずだ。

再び柄から手に伝わって来た感触が蘇り、裂けた皮膚から流れる赤い血が脳裏に浮かび、説明しがたい恍惚感が一瞬心を支配した。湯に飛び込むようにして体を浸し、目を閉じて顔を半分だけ湯へ沈める。

（なんだと言うんだ）

理不尽な理由で人を斬る事など決してしてはならないと思っている。それなのに、人を斬った事に嫌悪さえ抱いていない自分に恐怖を覚える。

あれは、あの時は仕方がなかった。和奈はそう自分に言い聞かせた。

「大丈夫か？」

外で待っていた龍馬は、放心した様子で出て来た和奈の腕を掴み上げた。

「あつっ！」

声を上げ腕を引いた和奈から手を放すと、手首を持ち上げ袖を捲り上げる。皮膚が裂けて血が滲んでいる。

「斬られちゃったがか。まっこと、おんしはなんちゃー言わんのう」
消沈したままの和奈を部屋へと連れて行った龍馬は、自分の荷物から薬を取り出して来ると、傷口の手当てをしてやった。

「無理をしな。一人でおるがやないき、わしが側におる、以蔵もおる」

龍馬が怒っているのは声で判った。

「おんしは望んでここにおるわけじゃーないぜよ。いずれ帰る事になるかも知れん。いや、帰るべきじゃと思っちよる」

まるで自分に言い聞かせるかのように龍馬は続ける。

「人を斬ってしまったては戻った時辛かろうと・・・なのになにわしは武市に稽古を続けさせた。おんしに人を斬らせた責任はこのわしにあ

る」

「龍馬さんのせいじゃありません」

「・・・おんしは、帰る術があるなら帰りたいじゃろう？」

そう聞かれても、和奈にはすぐに答えられなかった。望んで来たのではない、それは確かだ。また、帰る事を望んでいないのも確かなのだ。

この時代に生まれた人間ではないのだから、帰れる術があるなら帰るべきなのだろう。

（でも私は人を殺してしまった）

その事実はなくなってくれない。

「帰る方が良いのは判っています」

「まさか、おんし」

「桂さんは言っていました。ここへ来たのは偶然などではなく必然なのだと。僕は、その理由を知りたい」

それが分かれば、一瞬感じた恍惚も何を意味するのか解る気がした。

「いえ。知らなければいけない気がするんです」

女子という身の安全を考えた桂は、和奈に男装を強要した。果たしてこれで良かったのかと龍馬は疑問に思い始めた。

「困った子じゃ。命を落とす事になるかも知れんと言うがやき」

武市も女子と知りながら剣術の稽古をつけているだろう。和奈を死なせないゆえのものだが、剣術は相手を殺す技ともなる。現に和奈は人に刀を振り下ろしてしまっている。

「ここに居させてもらっては、迷惑でしょうか？」

龍馬は深いため息をゆっくりと吐き出した。

「おんしがこれからを決めるちゅうならなんちゃー言わん。誰も迷惑とも思っちゃーせんから気にしな」

人を斬ったのにそれを咎めないで居てくれる。

嘘でもその場しのぎでもない言葉に安心し、そんな力を持っている龍馬に感謝した。

「今度からはちゃんと伝えに来ると、約束してくれるか？」

二階の端にある自分の部屋へと入った和奈に、龍馬は確認する。

「はい」

「よし。なら、ちつくと休むといい」

障子を閉め、階段の所で首だけを出して待っていた以蔵と共に一階へと下りて行く。

「和太郎は？」

「大丈夫じゃろう」

庭を見渡せる縁側へやって来ると二人はそこへ腰掛けた。

「おみつさんに事情を聞いてもらった」

「うん」

浪士とのやり取りから戻って来るまでの顛末を話す。

「ほうか。土方くんらに助けられたか」

「新撰組にあいつの面を知られた。どうする、龍馬」

「どうもこうも。わしらと繋がりとまでは知られちゃーせん。出入りもここ薩摩やき、心配はいらん」

「・・・先生はあいつに、人を斬る術を教え込んでいる」

そう言っ自分の腰にある鞘を手でなぞる。

「武市から聞いて知っちゃった。反対はしたが、護身だけでは己すら守れぬと言うてな。身を守るたー」

「理屈はどうでもいい！ あいつは人を斬ったんだぞ！」

人斬りと呼ばれる己は、武市の許で剣を振るうと心に決めているからいいが、あいつは攘夷に加わろうと里から上洛して来たわけではない、人を斬る覚悟があった訳ではない。

「珍しいのう。おんしが武市以外の心配をするとは」

「茶化すな！」

「死んだらそれで終わりじゃ、なんちゃーならん。武市はそう思っただから、おまえにも慎太郎にも剣を教えた。その剣をどう活かすかは己が決める事やき」

「！」

いきなり立ち上がった以蔵は、これ以上話しても無駄だと部屋へ戻って行ってしまった。

「できるならば、人なんぞ斬らせたくはなかった」

もっと自分を頼れと言うのだった。もっと強く一人で出るなど言えれば良かった。女子の身で、人を斬らせてしまった、なんと自分は不甲斐ないものか。

握り締めた拳を、龍馬は床へと思い切り叩き落とした。

布団に潜り込み震えの止まらない体を抱え込む。

【もっと強くなれ】

土方の声が幾度も頭の中で反芻される。

もっと剣の腕があればお宮を守れたのだろうかと自問するが、答えを得るはずもない。腕があつたとしても、人を斬るという結果は同じだろう。

護身のためと桂は武市に稽古を頼んでくれた。だが、護身は己の身を守る術であり、他人を助ける術ではない。そんなものが役に立たないのを、身をもって知ることになった。そう。殺伐としたこの時代で必要とされるのは、人を斬るという技に他ならない。

（人を守る為に人を斬る）

矛盾だった。

「和太郎さん」

お京の声にピクリと指が動く。

「少し、よろしいでしょうか？」

布団を抜け出した和奈は、躊躇いがちに障子を開けた。

「お礼を」

「いらない。僕は・・・お宮さんを助けられなかった。礼を言われる立場じゃない」

辛そうなお京の顔が目映り、言ってしまった言葉を後悔する。お京は剣士ではなく、ただの女中だ。刀を振らない身である方が、

術を知る自分よりも辛いに違いないだろう。

「すまない」

続く言葉を探すが、こんな状況になった経験が無い和奈には何を口にすればいいのかすら検討がつかない。

「私のせいで、関係のないお宮ちゃんが死んで・・・私だけ生き残ってしまいました」

「違う、あいつらが悪いんだ」

この世が悪いから理不尽な行いが横行する。それから身を守るため、誰かを守るためにその手を血に染めなければならぬのだ。

「僕がもっと強ければお宮さんを救えたかも知れない。お京さんのせいなんかじゃない」

強くなれば大切な人を失わなくて済むと、心の底からそう思った。

「やっぱり、お礼を言わせて下さい」

いらないと口を開きかけた和奈は、きつく口を閉じた。

お京は笑っていたのだ。

「お宮ちゃんがここにいたら、きっとそうします。捜しに来てくれて、ありがとうございます」

両手をつき、お京は頭を下げた。

「・・・ありがとう」

涙に視界が滲み、そう言うのが精一杯だった。

行灯を眺めながら、以蔵は刀の手入れを始めた。

刀を横にし目釘を抜き、刀を鞘から抜いて柄を外す。切羽と鐔、ばきも取り外し、刃の下拭いをした後、刀の表のはばき元から鋒へと打粉をかけ、裏は鋒からはばき元の方へと打粉をかける。そして棟に軽く打粉をかけて行く。

拭い紙で刃を拭い、刃毀れがないかを確かめる。

（人を斬る意味か）

油塗紙を刃へ滑らせ、ムラなく平らに塗れているか見てから刀を鞘に納める。切羽と鐔をかけてから刀を再び抜き、柄に入れ目釘を

打つ。

片手で握った刀を目線より少し高い位置へと上げる。

(あとどれほどの血を吸うのか)

武市の抱える夢のためと幾度も刀を振るっているが、武市の志が己の志となっていると気づいてからは、人を斬るのに躊躇を覚えなくなっていた。

「くくっ」

そんな自分でも、初めて人を斬った時はうなされる日もあつと笑いが込み上げる。

転がる体。流れる血。般若の形相で目を見開いたまま倒れていく姿。幾晩も悪夢に苛まれたが、数を重ねていくうちにいつしか観なくなってしまうていた。

人の気配に気付いた以蔵は、手入れを終えたばかりの刀を握り締める。

「岡田さん」

その声が和奈のものであると判ると、握った手から刀を離した。

「・・・どうした」

「明日の稽古から、剣術を教えて頂けませんか」

その言葉に、刀を鞘へ戻し、重くなった腰を上げると障子を開いた。

まっすぐ顔を上げた和奈と視線がぶつかる。

「おまえ、本気で言ってるのか？」

「はい」

「桂さんは、護身術の稽古をと先生に言ったんだぞ」

しかし現実には人を斬る技を教え込まれている。護身術などで浪士を斬った上、首に刀を突きたてる芸当など易々とできたものではないのだ。

(こいつはそれを気づいていない)

「駄目なんです、自分だけ守れても駄目なんです」

「龍馬には言ったのか？」

「いいえ、まだです。その、言えば反対されると思って」

「俺の独断で教えられるはずもないだろう。先生が帰るのを待て」

「武市さんには後で僕から謝ります！ だからお願いします！」

困り果て、龍馬を呼ぶべきかと考えた。自分は相談事に慣れていないし、すでに剣術の稽古をしていると言っても、和奈の申し出は武市の許可が必要となる内容なのだ。

「駄目なものにも、師匠は先生だ」

「解ってます」

すでに意志を固めている相手を退けるのは容易い事ではない。突っぱねても引き下がらないのはよく判って居る。自分がそうなのだから。

中途半端な稽古は余計身を滅ぼす原因ともなる。だから武市は、以蔵や中岡に教えたと同じ剣術を和奈にも教えているのだ。

淀みのない眼と握られた拳に意志の固さが現れている。

以蔵は折れるしかなかった。

「引くつもりはないんだな？」

「はい」

部屋に入ると、以蔵は障子を大きく開いた。

「失礼します」

入った部屋は、生活というものが全く感じられない空間だった。机の他に在るものと言えば行灯くらいで、私物は手にした刀くらいなものらしい。

「俺の剣術は人を斬るためのものだ。解っているんだろうな」

「はい」

「・・・人に剣術など教えた事はない。手加減なんぞできんぞ？」

「はい」

動揺も躊躇もない真っ直ぐな眼。人を斬った事で心に決めた何かがある眼をしている。

「おまえの志とはなんだ？」

「志ですか？」

志など必要としなかった時代に生きていたのだ。いきなりそう聞かれても答える言葉がない。

「なんだ？ 剣術を言う以上、心に思う事が有るんだろ？」

「志とか、そんな大層なものじゃないです。ただ側に居る人を守りたい。それだけです」

ふん、と以蔵は鼻をならした。

「それも立派な志の一つだと思うけがな」

「そうなんだ・・・岡田さんは、なぜ人を斬るんですか？」

いきなり核心に來たかと苦笑する。

「それ以外の生き方を知らないからな」

人斬りと呼ばれる人生がどんなものなのか和奈には判らない。人斬り以蔵だけでなく、幕末を知らない和奈にしてみれば、龍馬や桂の人生すらも解らないのだが。

「我流だった俺の剣は剣術と呼べる代物じゃなかった。ある日、先生が俺に声をかけた下さった。それだけじゃない。道場にも通えと言ってくれた。俺を一番の弟子とも言ってくれた。あの人だけが俺を一人の人間として扱ってくれたんだ。だから俺はこの腕を先生のために使うと決めた」

右腕を上げて左薙の型をして見せる。

誰かのため、志のためと剣を振るう。何かしらを守るため己を貫く、それは皆同じだと以蔵は笑った。

「今ならまだ取り返しがきく。止めておけ」

「決めたんです」

人を殺めた事が切欠となり、進まなくていい道を選んでしまったのだと以蔵は確信する。

「先生に叱責されるのは間違いないな。明日からの稽古で先にうさ晴らしさせてもらおうぞ」

「はい！」

これも運命だと以蔵は腹を決め、和奈が部屋を出て行った後、龍馬のところへと足を向けた。

其之三 長州藩

武市が江戸から戻って来たのは、夏の風が吹き、蟬の鳴く声が響き出した七月の初めだった。

「で、どうじゃった」

「悪い」

龍馬の部屋に入って来た武市は、壁にもたれ掛かり疲れた顔で話し始めた。

話しは公武合体を唱える薩摩と会津藩が、尊攘派を京から追放した事件よりも遡る。

長州藩は長井雅楽の「航海遠略策」を藩是とし、公武合体を推進めようとする長井派と、尊王攘夷を推す久坂、高杉らと激論になっていた。

日増しに激化する藩内の情勢に苦慮した桂は、高杉を一旦藩から遠ざけるため、幕府が募集を出していた上海視察に高杉を派遣してはどうかと藩庁に提出した。久坂と高杉を混乱を極める藩に留めて置いて、何かしら企てられては困る事態になると危惧しての事だった。

予てから海外へ行きたいと思っていた高杉は、この命令に反発するどころか、嬉々として承諾して上海へと旅発ってしまった。

高杉を欠いた攘夷派は、久坂を筆頭に藩政を許の尊攘へ戻すべく躍起になっていた。そんな折、江戸城の坂下門外に於いて、尊攘派の水戸浪士らが老中の安藤信正を襲撃する事件が起こる。暗殺こそ失敗したが、井伊直弼暗殺に続く事件で幕府の権威はさらに失墜の一途を辿ることになった。

この事件を切欠とし、京に於いて公武合体派が失脚すると、これを好機と取った久坂は、「航海遠略策」は朝廷を誹謗するものである

ると朝廷に働きかけた。

桂も、長井の策に賛成していた周布政之助の説得を試みようとして、久坂と共に周布の許へと来ていた。

「周布殿も破約攘夷には賛成を示されたではありませんか！」

桂の横から久坂がにじり寄る。

「それは・・・そうだが」

「長井殿の策は、幕府が朝廷の命も得ず締結した不平等条約を許に開国を是認するもの。策中にある「通商で国益を増加させる」。これについては私も意見を違えるつもりはありません。ですが、条約全体を見る限り、航海遠略策は我が藩ばかりでなく日本にとって後々大きな代償を支払うものとなるのは必至。夷国の民を日本に招き入れれば、いずれ自国の土地をも差し出す事にも成りかねない。現に幕府は和蘭だけでなく、仏蘭西にも膨大な借金を作ってしまった。現に幕府は和蘭だけでなく、その借金を楯に二国がどのような手段で出て来るか、見識ある周布さんならば想像がつくのではありませんか？」

借金の代わりに租借を持ち出されれば、幕府は否応なくどこかの土地を差し出さざるを得なくなる。恐らく二国が提示してくるのは神戸と横浜かのどちらかだろうが、悪ければ双方の可能性も否定できないのだ。

「もはや幕府に政事を任せているのは危険だと思いますれば、朝廷の御命を賜る以外にないのです」

苦渋で額に汗を浮かべている周布は、まだ首を縦に振ろうとはしなかった。二人の言いたい事も判るのだが、長井の策もまた領けるものであるのだ。

「長井殿は方針を航海遠略策として示したに過ぎず、それを実現させるための改革を示されてはおりません」

確かに策の内容には、長州藩を含めた幕府、諸藩の改革をどのように執っていくのかは明確に書かれていない。だが、吉田松陰も長井が書いた策と同様の事を過去に唱えている。それがあったからこ

そ、周布は長井の論に乗ったのだ。

「確かに先生も外国との交易による富国強兵を唱えておられました。しかし幕府存続あつてのものではありません！」

「吉田先生はその身を以って、国の在り様を私達に示された」

「では聞く。桂よ、おまえが井伊殿の襲撃に長州浪士を加担させなかったのは何故か^{なにゆえ}」

「水戸浪士からの懇願を・・・私が跳ね除けたのは事実。だが、それも長州あつての改革を思えばこそそのもの・・・万が一、井伊暗殺に失敗していれば、藩はお取り潰しとなりましょう。そうなれば、我々がこれまで積み上げてきたものが水の泡と消える事になる。それだけは絶対に避けねばならぬと考えたからに他なりません」

「おまえも薩摩も同じ穴の貉だな」

「周布殿と言えど、それは言葉が過ぎるのではありませんか!？」

「久坂、いいから」

片手で制した桂は、それでも周布から視線を外さない。

「私はどう言われ様と一向に構わない。大局を見定める目を持たなければ、世を変えるなどできるはずもない。だからこそ、薩摩もあの手この手を使い幕府に食い込んでいるのです」

「それは、薩摩藩が我ら長州と同じ目論見を抱いていると言う事になるぞ?」

「術は違えど、真意はそこにあると考えております」

袖に入れた腕を抜いた周布は、食って掛からんと身を乗り出したままの久坂をそのままに席を立つと、庭への障子を押し開いた。

「判った」

「周布さん」

「まったく。高杉が上海へ行つて安堵しておつたのに、桂までがこうして出てくるとはな」

「よく仰る。酒の席で暴れた方の言葉とは思えませんね」

「ここで酒をだすか・・・」

「土佐の容堂殿も大変だったと思いますが?」

何かを思い出した周布は大声を上げて笑い出してしまった。

「おまえ・・・それを言っちゃあいかん」

「原因を作ったのは周布さんでしょう？」

「まあ、爺さまもおったしのう」

何の事かと考えていた久坂も、心当たりを見つけたらしく笑いを堪えている。

「長井殿については力を借そう」

「心強い限りです」

こうして、長井の策を指示していた周布が反長井派に転じると、久坂は藩重役に対して十二箇条の弾劾書文を提出し、長井の失脚へ繋げるために走り回った。

以前から朝廷に働きかけた事も実を結び、長州藩に対し朝廷は遺憾の意を唱えた。

これを受けた藩主毛利定広は長井を江戸より帰国させ謹慎を言い渡した。

長井の免職へとこじつけた桂と久坂は、藩論を公武合体から尊王攘夷へと再び戻したのである。

それから二カ月後、上海に赴いていた高杉が帰国して来た。

「俺の居ぬ間に、と怒らないのか？」

友を出迎えた桂は、高杉の反応が予想とは違うものだったので拍子抜けしてしまった。

「俺達は阿呆な事ばかりやってる」

「おやおや。一体どういう風の吹き回しなんだ？」

「小五郎。このままじゃ日本も何れ清と同じ道を辿る」

語る双眸には今までに無い確りとした意思が感じられる。

「何を見てきたんだ？」

「阿片戦争で植民地と化した清さ。町の至る所に英吉利人が徘徊して、清の役人は英吉利人にへつらうばかりで足元を見ようともせん。阿片に体を蝕まれた者達が、薄暗い路地で屍と同じ有様で転がっていると言うのにだ」

膝に置いた手が力いっぱい握り締められる。

「賊として蛮族を英吉利人が殺す。清の役人は国を守るためだと英吉利に助力を申し出た結果だそうだ。あれが、日本の行く末だと俺は思いたくない」

「悲惨、と一言では片付けられない、そう言いたいのか」

「ああ。だから俺は幕府を討つ」

「もとよりそのつもりで動いている」

「徹底的に攘夷を推すしか道はない」

藩論が攘夷に転じていたのは高杉にとって好機となった。

高杉は長州と幕府の戦争へと繋げるため、江戸で英国公使館襲撃を企てたのだが、藩を以って攘夷に当たるべしと言う久坂と今度は激論となってしまふ。幾度も論を交え、とうとう折れた久坂は桂に知らせる事なく、長州藩志士十一名と共に襲撃を決定した。

攘夷断行を促す勅使が江戸に滞在する中、定広と勅使の一人公卿の三條實美の説得によって襲撃は中止となり、高杉らは謹慎を言い渡された。

ここで収まらないのが高杉という男で、勅使が江戸を去った後に品川御殿山に建設されている英国公使館を焼き討ちを計画。その実行部隊として御楯組を結成した。

隊長には高杉晋作、副将に久坂玄瑞が付き、火付け役は井上聞多、伊藤俊輔、寺島忠三郎の三名が選ばれた。見張り役と護衛役に品川弥二郎、堀真五郎、松島剛蔵が名乗りを上げ、有吉熊次郎、赤禰武人、白井小助ら四名は 英国公使館に居る幕吏の斬捨役となった。

焼き討ちの知らせは長州に居る桂の耳にすぐさま届けられた。

高杉が何事か起こすたびに工作に走る桂だったが、今回は走り回る必要はあまりなかった。幕府は長州藩士の仕業と見ていたが、確たる証拠も出ず、攘夷運動に活気つく長州藩をこれ以上刺激しては厄介な事になると、お咎めどころか追求すらなかったのだ。しかし、幕府に目を付けられてしまった事には変わりなく、長州藩が置かれた立場は危ういものになってしまった。

尊攘派の中心人物である久坂と久留米藩士真木和泉の朝廷に対する影響力の大きさを疎んじた会津薩摩両藩は、長州藩を主に朝廷における尊攘派の一掃に乗り出したのだ。桂も予測し得なかったこの件は、後に八月十八日の変と呼ばれるようになる。

桂と京都留守居役の乃美織江は、天皇に忠義を尽くす心は変わっていない事を沿え、藩主と公卿三條實美ら七名の復権と、何故京から追われる事になったかの真意を訴え続けた。

久坂も間京都詰の政務座役として在京し続け、失地回復を図ろうと駆け回っていた。

「久坂くんは止められなかったが」

「三條公と真木さんの説得に久坂くんが折れた」

久坂も桂と共に、武力進発すると言う三條と真木らを押し留めようとしていたが、薩摩藩島津久光と福井藩の松平春嶽らが京を離れたのを機と見て取り進発論に転じたのである。

長州へ帰藩した高杉も、藩主の命で周布と共に、久坂と来島に説得を続けていた。しかし、七卿の後押しがある久坂達は二人の説得に頑として応じる事はなかった。

来島は奇兵隊を作った高杉に触発され、自らも周防国宮市において、町人・農民・浪士からなる遊撃隊を作っており、進発に遊撃隊を加えるつもりでいる。高杉も共に戦うものと思っていたところへ反論を持ち出してきた高杉を反対に臆病者と罵ったが、高杉も反対意見を覆さなかった。

説得が難航する中、池田屋の件が長州藩へ伝わると、上へ下への大騒ぎとなった。

「長州尊攘派一掃で激発寸前となっていた状況で、池田屋の訃報は火種としかならん。来島殿は兵を率いて上洛してしまった。高杉くんが来島殿の説得は続けると京へ戻ったのだが、勢いづいた彼らの説得は徒労に終わっている」

「ほき、高杉くん桂さんはどうしたが」

「高杉くんは獄中の身となっている」

悔しいとばかりに顔を歪めた武市に、珍しく真剣に怒った龍馬の顔が近づく。

「どうしてほがな事になっておる！」

京入りの許可を得ていなかった高杉は、藩主から呼び戻されると脱藩の罪で野山獄へ収監されてしまったのだ。

「加えて周布殿も謹慎を申し渡されている」

「なにをやっちゅうんだ二人とも！」

高杉がいる野山獄へ、浴びるほど酒を飲んだ周布が抜刀したまま乱入したのだ。

獄で抜刀する事は主君へ立てつく所業として、“禁”となっている。その禁を犯してまでも高杉が軽率な行動を執って獄送りになった事を嘆いての、周布の行動である。それが藩に知られ謹慎を言い渡されたのだ。

「久坂くん達を説得し得る人物が二人も動けぬのでは、桂さんと言えど容易に説得などできようはずもない。長州から海路陸路を使い、久坂くんも上洛を開始してしまったと言う事だ」

「ほんで桂さんは？」

「久坂くん達をなんとか押し留め、退去させようと共に京へ戻って来たのだがな。動き出した幕府に対してどう動くかも考えねばならなり、長州へと戻った」

「高杉くんがおらんとゆうのは痛いなあ」

「分かれ間際に、高杉くんほどの人望があればと一言漏らしていた」
その切なる心は武市にもよく解る。

土佐に於いて剣術で名声を広げ、土佐勤王党も作り上げたが、人の心を芯から動かすのはいつも龍馬だ。脱藩すると言って来た時も多く勤王黨員が龍馬とともに土佐を去って行った。

「ああ、和太郎の事だが、桂さんからしばらく頼むと言われた」

「ほがな事はなんぼでも引き受けるが。しかし、なんら戦を避ける手立てはないんろうか」

「おまえが考えるより根深い事情も多い。簡単に止めますとはいかんだろう」

湯飲みを持ち、飲むでもなく手の中で器を揺らす。

「上の考える事が、必ず下へ通じるといふものやないきの」

「人を率いる者は、山の頂から麓まで視野を広くし、物事を思議策謀しなくてはならん。それが下に広がる者には解らんのだ」

「謹慎中だった久坂さんの時勢論を以って、藩論を尊王攘夷に転じさせた苦勞を思うとうのう」

とにかく、と武市は胡坐を組み直す。

「長州軍が京に入るまでの時間は残されていない。今は動きを見るしかあるまい」

ほうじゃの、と龍馬は膝の上に肘をつき頬杖をついた。

「・・・ここへ来る前、以蔵から話しは聞いた」

頬から手を放した龍馬は、座りなおすと頭を勢いよく下げた。

手にしていたお茶を飲み、脇へと置いた武市は困った顔を浮かべる。

「まっことすまん。わしがおったとゆうのに」

「関係なからう。俺が居ても、あれは一人で飛び出して行っただろうからな」

ほうほう、とニヤけた顔で身を乗り出す龍馬。

「なんなんだ」

「いや。おんし、ちっくと変わったのう」

片目を吊り上げて友を睨む。

「一生懸命な弟子は可愛いもんやきの」

「だから何が言いたいんだ！」

「ほっとけんのう」

「なぜおまえはいつもそうやってー」

「太刀を見れば振るうもんの心は解る」

ふん、と顔を逸らす。

「あの件の次の日から、以蔵の稽古が変わったが。のう武市」

「俺達がどうしろとは言えまい」

「けんど、やっぱりいかんと思うてしまう」

大きなため息が武市の口から漏れた。

「傍に俺達が居ると言えど安全は約束できん。身を守るの為と言うなら剣術を教えるしかない。それ以外の術を俺は知らん。納得してもらわねば困る」

「しかしのう」

「選ぶのは和太郎自身だろうが」

「だがのう」

「心配いらん・・・俺が守る」

「おんし、本気か」

いくら稽古をきつくしても和奈は弱音を吐かず必死に食らいついて来る。その姿はこれまでの弟子にも見てとれた。以蔵や中岡もそうだった。だが二人には抱かなかった想いが心の隅に在る。それに気付いたのは和奈の側を離れた時だ。

「長州に居た頃に出会っていれば、さぞ頼もしい剣士となっていただろうな」

「阿呆をゆうがやない」

「ともあれ、どう桂さんに詫びるか考えておかねばなるまい。まったく、頭が痛い事だらけで気も休まらん」

和奈が時の向こうから来たのを話すべきかと龍馬は一瞬迷ったが、今後の長州の行く末が不透明な今、悩みの種をわざわざ増やすのも気がひけ、出かかった言葉を飲み込むしかなかった。

「なに。わしとおんしの首持参で和太郎を帰せば、桂さんも怒らずに許してくれるじゃろ」

「おまえの首だけ持つ行くとするさ」

武市は笑いながらそう言うと、武市は稽古場へと足を向けた。

背中を伸ばすにはいられない掛け声が響いてくる。その声で稽古場の雰囲気を知る事が出来る。

「体力をもっとつけろ」

以蔵の稽古は、口にした通り厳しいものだった。加えて太刀を受け続けているため、和奈の腕にかかる負担は力をもぎ取り、木太刀を持っているのがやっとの状態にまで追い込んでいる。

「毛先にまで神経をやれ、気配で相手の動きを見極めろ、振るだけじゃ駄目だ刀と心を一つにしろ」

以蔵は容赦なく木刀を振り下ろす。

「ぐっ」

力はすでに尽き、肩の上に押し掛かった木刀が肉を骨を軋ませる。

「これでおまえは三度死んだぞ」

垂れ下がった腕を上げる余力はもうない。

「おまえが死ねばどうなる？」

「え？」

「見ろ。浪士はまだ他にも居るんじゃないか？」

対峙しているのは以蔵のはずだ。なのになぜあの男がいるんだろう。

「ここで俺に斬られたら、どうなる？」

地面に倒れるお宮の体が以蔵の後ろに浮かぶ。

（まだ居た、まだ誰かが）

「もう一人男が残っている。お京はおまえの後ろに居るんじゃないのか？　ここでおまえが倒れたら、お京も斬られるぞ」

柄を握っていた手に力がこもり、ゆらりと動いた体が前へと出る。

（唐竹から左切上）

振り下ろされて来る木刀をかわし、右脇から振り上げられる木太刀を受け流して薙ぎを払い斜めから打ち下ろした。

打ち込まれて来た木太刀の勢いを殺す事なく押し出し、間合いを取ろうと後ろへ飛んだ以蔵の懷へと飛び込んで行く。

（右薙！）

太刀筋は読まれ、以蔵の体に切っ先すら掠らなかった木刀が空を斬った。

勢いあまってバランスを崩した和奈は、膝についてすぐに後ろ足を蹴り出していた。

「なっ!？」

低位置からの薙ぎ払いを跳躍で後ろへとかわしたが、着地寸前の足元へ二太刀が振られて来た。

（低位置からの左薙に間髪入れず右薙だと!？）

足に届く寸前、木刀を縦に下ろした以蔵は和奈の木刀を止めた。

（こいつ!）

見上げてくる和奈の目にぞくりと背筋を凍らせる。

先ほどの一撃には正直驚いた。低姿勢のため爪先の位置が見えず、太刀筋を読むのが遅れただけでなく、和奈の気を読み取れなかったのだ。

（冗談じゃない。この俺が剣気を読めんなどと）

以蔵は間合いを一気に取る。

太刀筋が読めないのであれば、木刀の動きに意識を集中させるしかない。

和奈の肩がぴくりと動き、以蔵は前足に力を込めた。

「そこまでだ二人とも!」

その声で我に返った和奈は、声がした方へ顔を向けると、憤怒の形相で立つ武市の顔が見えた。

「武市さん」

自分の声が耳の奥で反響し痛みが走る。

「おい!」

和奈の手から木刀が滑り落ちるのと、体が崩れる落ちるのが同時となり、以蔵は床に転がる手前で和奈の体を受け止めた。

「加減を知らないのは判っているが、これはやりすぎだ!」

「申し訳ありません」

気を失った和奈を以蔵の腕から受け取った武市は、急いで二階へと駆け上がって行く。

「龍馬!」

武市のただならぬ声に部屋から顔を出した龍馬は、その腕に抱えらた和奈を見て飛び出して来た。

和奈の部屋へ向かった武市の前へ回り込み、障子を開け放つ。

「どうしたとゆうんだ」

「いいから布団を敷け」

龍馬は言われるままに布団を引っ張り出すと畳の上へ投げやるように広げた。

「大丈夫ながか？」

和奈を寝かた武市はその上に布団を被せる。

「以蔵の奴、加減を知らなさすぎる」

そう怒りながら武市に目をやった龍馬は、真剣な面持ちで和奈を見下ろしている武市の側へ座った。

「寝込みを襲うのはいかん、わしもおるんやき」

いつもなら食いついて来る言葉に反応せず、膝を付いたまま動こうとしない武市を怪訝そうに見る。

「何があった？」

「この子の流派、桂さんと同じか？」

「いや、心形刀流だ」

「伊庭の小天狗か」

講武所に出仕して教授方を務めている伊庭八郎の異名だった。

心形刀流は、江戸の三大道場である玄武館（北辰一刀流）、練兵館（神道無念流）、士学館（鏡新明智流）に並ぶ剣術流派であり、御徒町に練武館を構えている。

「抜刀術も教えているか」

「一刀の技法ばあでのもうて、二刀技法、枕刀（小薙刀術）も教えちゆう。で、抜合がどうしたがか」

「抜刀術は近間の飛び道具と同じだ」

刀を鞘に収めたまま帯刀し、鞘から抜き放ち一撃を加える。もしくは相手の攻撃を受け流して、二の太刀で相手にとどめを刺すのに卓越した剣術である。

「初撃にはかなりの速度が出るし伸びも出る。一撃必殺とされるがゆえに抜刀した後が問題となる」

心形刀流の極意は”捨て身”だ。

【剣にやぎらず物事二は、万策尽きて窮地二追ふ込まらるる事である。それが時は、瞬息二積極的行動二出で候、無茶と如何二も良き、捨て身が行動二でる事也。是即ち流儀であり極意なり】

初太刀の剣速よりも二太刀目の速度は普通なら落ちてしまう。しかし、以蔵がかわした後の斬り返しは初太刀と同等の速度を保っていた。

龍馬と武市は同時に眉間を狭めた。

「止めに入らなければ以蔵は一撃を食らっていた。下手をすれば骨の一本も折られていただろうな」

「和太郎はそれを教わっちゃったがか」

「俺は抜刀術など教えた覚えはない。ならば、それ以外にないだろうが」

稽古場に近づくと、以蔵のものではない剣気を感じた。相手が和奈であれば、その剣気は間違いなく和奈のものだ。

そうして稽古場に足を踏み入れた武市の目に映ったのは、本気となった以蔵と、熟練した太刀筋を繰り出した和奈だった。

「以蔵に向けた抜刀は・・・殺気を帯びていた」

自分が稽古をつけていた時には、微塵ほども感じられなかったと言っのに。

「先生」

障子を開けて立っている以蔵に気づき、中へと促す。

「おまえが本気で避けなければならんとはな」

返す言葉を見つけれられないのか、以蔵は黙ったままである。

「稽古を続けた事で術を引き出してしまった、というところか」

力が弱い、弱いがゆえに相手を剣気で制す抜刀術だったはずだ。だが、和奈は相手を確実に滅する剣技をやって見せた。

武市は目頭を押さえる。

「以蔵では駄目だ。明日からの稽古はまた俺がつける。いいな、龍馬」

「けんど」

「けんどもへたつくれもない。このまま人斬りにさせたいのかおまえは！」

いつもの武市らしくない剣幕で、龍馬の胸倉を掴み上げる。

「阿呆をゆうな、誰がほがなことを望むか！」

その手を払い退け殴り掛からんばかりに身を乗り出す。

「人斬りは俺だけでいい」

はたと二人の動きが止まり、和奈の側で呟いた男を見る。

言葉とは裏腹にその横顔は穏やかだった。諦めているのでもなく、かと言って納得している訳でもなく、ただ自分の立場を受け入れている。そう思える表情^{かお}だった。

人斬りと言う異名がどれだけ以蔵の心に影を落としているのかは、同じ人斬りにしか解らないだろう。人斬りへと育てたのは武市なのだが、そけを責めるつもりなど龍馬にはない。どういう形にしろ以蔵を土佐から連れ出さなければ、足軽のままの人生で生涯を終えることになる。家が郷土でも以蔵は足軽だ。そこから這い出すのは並大抵の努力だけでは難しい。まして土佐となれば他の藩よりも更に困難を極める。よって足軽の辿る道は殆んど決まっていると言って過言ではない。だから武市は、人斬りと恐れられることになっても、普通の生活が出来る場所へと以蔵を連れ出したのである。

「こいつに、人斬り家業をさせるつもりはない」

「おまえに言われずとも、桂さんから預かった身だ。そのつもりはない」

和奈が身じろぎ、喋るのを止めた三人は和奈の周りへと座った。

「気がついたか？」

ゆっくりと瞼が開き、視点が武市に定まると和奈は慌てて上半身を起こした。

「稽古！」

重い空気を漂わせたまま座る武市達は、呆気にとられて固まり顔を顰めた。

「えっと・・・」

「くっ・・・くっくっ」

笑い声を上げながら龍馬の背中を何度も叩く武市は、ついに腹を抱えて笑い出してしまふ。つられて龍馬も笑い始め、以蔵は肩から力を抜いて背中を丸めた。

「いや、まっことすまん。じゃが、とまらん」

「本当に、とまらん」

暫くの間笑い続けた武市は、

「呼ぶまで休んでいるといい」

そう言い残し、さっさと部屋を出て行ってしまった。

「あの・・・龍馬さん？」

「気にせんでええ。どれ、わしも下へいっちゅうき、もう少し寝るとええ」

以蔵も龍馬の後から部屋を出て行ってしまい、一人残された和奈は状況を掴めないまま、夕餉まで布団の中で惰眠を貪ることになった。

和奈の剣術の事は武市が責任もって考えると云ったので、その話しは一旦取り置かれた。

其之四 大津へ

中岡が急報を持ってやって来たのは、夕食を済ませて広間で寛いでいた時だった。

皆の前に正座する中岡の表情は暗い。

「ほき会合の件はどうなったがだ」

「どうもこうもないですよ」

西郷吉之助との面会が叶い、長州との和睦なくして日本が日本として生き残る手段はないと、江戸や兵庫における西欧諸国の干渉を論説した。だが西郷は大久保と違い、幕府あつての政策が必要だと中岡を突っぱねた。

「長州の遣い方は過激過ぎう。あれでは幕府だけでなく、徳川家を支えてきた諸藩をも敵に回す事になう。それでは駄目だ」

「確かに西郷さんの言う通りかも知れませんが、長州の立場も理解して頂きたい。関が原の合戦に於いて、敵対する東軍と内通していたは一族の吉川家ですが、その裏には徳川家との密約がある。その密約ゆえ、広家殿は東軍に頼ったに過ぎません」

吉川広家は毛利家に対し東軍への加勢を提言していた。だが石田三成の工作により輝元が西軍総大将とし担ぎ出されてしまい、広家も西軍として布陣する事になる。

広家は、従弟毛利秀元の出陣を妨害するように陣を敷き、再三に渡って戦への参加を拒否した。その強固な態度の裏には、名目上総大将として担ぎ上げられたに過ぎないとして、領土の安堵を約束した密約があった。しかし、いざ戦が終わってみると、徳川家との密約は無かったにも等しい扱いとなり、西軍の連判状に輝元の花押があったとして毛利家の所有する領土の没収されてしまう。

約束の反故があったのか、それとも広家の忠義を本当に認めたのかは今となっては知る由もないが、長門と周防の二国を広家に与え

るとの沙汰が出された。しかし広家は毛利の名を残そうと、輝元が万が一徳川家に弓引くような事があればその首を差し出すと言う起請文を送っている。その起請文を受け、家康は長門と周防を毛利宗家に安堵すると共に、輝元達の身の安全を約束した。

長防に転封した毛利家は萩に本城を築き、本家と直系の盾として萩よりも遠方の東地を岩国領とし広家に与えた。

「二百万石とも言われた長州が三十七万石に減封され、本城を築くにあたっては長府ではなく立地の悪い萩にと命じられた。だからと、長州がこれま徳川幕府に楯突いた事がありますまい。今日まで耐え忍んできた長州の心情も、どうかご理解頂きたい」

薩摩も似たような境遇だと、西郷は漏らした。

「じゃっで幕府に盾突くと言う理由にならんでしょうはいはんか」

「盾突くにはそれなりの理由があると言っているのです。京から追われる身となった長州が、薩摩との連携を考えているのは、保身によるものではないんです。西郷さんならお判りいただけると俺は信じております」

「中岡くんの粘り強さは誰譲いだろうか」

「粘りたくもなりません。薩長の連携が必要と思っているのは俺だけではないんですから」

中岡が公卿三條と懇意である事は大久保より聞いて知っていた。薩摩と会津が組み、京から落ちた公卿達が裏で暗躍しているだろう事も承知している。でなければ、中岡個人がこうも動き回れるはずがないのだ。

「解いもした。長州の意見をいっど聞いてみもそや」

欲しかった答えを得たというのに、中岡は呆けた顔で西郷を見つめている。

「いけんしたんですか。会う、とゆとうんですよ」

「あ・・・ええ、はい。えっと、あ、ありがとうございます！」

やっとの事で西郷を説得した中岡は、桂との会合を長府で行うところまで漕ぎ着け、西郷と共に薩摩を出立した。

ここまでは良かったのだが、長府へ向かうその途中で長州兵上洛の書簡が西郷の元に届けられ、西郷は大坂へと向かうと蒸気船の進路を変えてしまった。

「西郷さん！　桂さんが長府に居るんです、会ってからに願えませんか！？」

「そげん暇はあいもはん。直ぐに大坂へ上がってくわしか事態を聞かなくてはならん」

「だからこそ、先に長州の真意を聞いた方が―」

「一蔵からも長州の動きは届いとう。長を止むうために、京中へ入る前になんとか手を打たなくてはならん」

どう説得しても結局西郷の意志は変わらず、諦めた中岡は途中で船を降りて桂の待つ長府へと向った。

中岡が予想してた通り、西郷が来ないと知った桂は薩長との和解については是までと憤慨を見せた。

「我が長州を止めたいならば、ここへ来るべきだろう！　藩意を持ち、血気逸った者達を止める意外に手立はないと言うのが薩人には解らないんだ！」

「落ち着け小五郎」

部屋には高杉の姿もあった。久坂達を上洛してしまった事で藩政が乱れ、藩主敬親が高杉に事態の收拾を図るよう赦免を出したのだ。

「またそれか！　俺は至って冷静だ！」

桂が僕や私でなく俺と口にするのは珍しく、こうなった桂を止めるのは無理だと高杉は呆れかえってしまった。

「ここに桂さんと高杉さんが居るのは西郷さんも承知しています。それでも大坂へ向かうと決めたのは、戦の準備をするためではないんです。止めると、西郷さんは仰ってたんです」

「・・・・・・」

「影響力を持つと言っても、西郷さんも一介の軍人に過ぎん。その立場で藩政を動かす困難さは、おまえが一番良く知って居るだろうが」

「だが・・・」

「中岡」

「はい」

「必ず西郷さんを俺達の前につれて来い。いいか、坂本さんではなく、おまえがだ」

「高杉さん・・・すいません、俺は・・・」

「中岡くん？ まさか、君は」

俯いてしまった中岡に、憤怒の表情を見せる高杉を前にしては、桂も怒りを静めるしかなかった。

「阿呆が」

「それは駄目だ。君が長州の為と命を捨てる道理はない」

「誠に長州も土佐ありません。それに、まだ戦になると決まった訳ではありません」

「行かせてやれ、小五郎」

「しかし！」

「中岡。首だけになっても必ず西郷をつれて来い、いいな」

「無茶を言うんだから」

桂に詫びた中岡は西郷の許へ走ったのだが、何日待っても取り付く島などなく、会うのを断念し、長州の情報と幕府側の状況を持ってここへとやって来たのである。

「こりゃあ桂さんを宥めるがやき骨が折れるな」

「高杉さんですよ」

話し終えた中岡は、和奈が置いた茶に手を伸ばし一気に飲み干す。

「長州軍はじきに京へ入ります。龍馬さんも早く京から出て下さい」

「中岡」

龍馬のその声は、これまで聞いた中で一番はつきりとした響きがある。

「行くのか？」

「そうするつもりです・・・長州に対する幕府の弾圧をこれ以上黙

つて見ていられませんか」

「武力は怨恨しか残さん」

「解っています。だが、行かせて下さい」

すでに意を決している中岡に何を言っても無駄と判断した武市は、それ以上言うなと龍馬を遮った。

「死ぬなよ、慎太郎」

「すみません武市さん。中岡慎太郎、志を通して頂きます」

正座に戻って深く一礼をした中岡は、障子を閉める間際にもう一度小さく頭をさげると、藩邸を後にした。

「京を出る、と言ってもものう」

龍馬は長いため息を吐いた後、気配を感じて障子を振り返る。と同時に少し戸が開き、出て来た手がさらに障子を開け、大久保がやれやれと言った顔で入って来た。

「ばたばたと五月蠅い音が聞こえ、何事かとやって来てみれば、陰気な顔に揃って出迎えられるとは」

「慎太郎の馬鹿が飛び出して行ったがやか、陰気にもなるがでよ」

「ふん。吉之助からも話しは聞いている。屋敷を一つくれてやるから、君達は大津へ行け」

「大津？」

「生憎と他は埋まっておつてな。いいか、絶対に動くな。事が収まるまで京に戻って来るのも許さん」

「大久保さん」

「長州が退ぬとしたら戦になねのは必至。そうなれば吉之助も出ざるおえまい。君の推奨する和解にはまだ時間がかかるという事だ」

大久保は薩摩において精誠忠を西郷と造り上げ、推進派と共に攘夷を目指していた。しかし京の情勢を手取るようになってから、過激を押して事を急いでは倒幕などできないと見解を反転させている。

「そこの小僧」

大久保の視線を辿って行くと、部屋の隅に座っている和奈が居た。「己を制し力を己の物と成せ。成せぬなら、おまえは人斬りで生涯を終えることになるぞ」

武市が何を言うのかと立ち上がり、龍馬も真剣な顔で大久保を睨み上げた。

「あれがこの小僧の持つ力と言うならば、武市くん、君には責任があるな？」

ならば最後まで役目を果たせと笑う。

「何ができるのか、まだ自分でも判りません」

一同は静かに語りだした和奈に視線が集まる。

「龍馬さん達が掲げる志というものもよく解っていません。ですが知りたいと思っただけです。自分の事も、皆が目指す先も」

心の何処を探しても未来へ帰るといふ考えはすでにない。それを不思議に思う事もなく、今を受け入れている自分が居る。ならば成すべき事は一つと、和奈はこの時代で生きる術を模索し出したのである。

「それも志の一つだ。迷いがなければ、己の人生を心行くまで紡いでみせろ」

大久保の言葉に、はいと答える和奈を見て、ならば背負ってみせましょうと武市も笑みを浮かべた。

「と、言う事だ坂本くん。この小僧がどういう素性の者で、何故君達と居を共にする事になったか今は聞くまい。だが、こ奴を抱えた君達には責任がある。それを忘れずにおくといい」

時を超えて来たと言うのなら、和奈にはこの時代に身寄りも友人も全く居ないのだ。もし自分達が見放せば路頭に迷うのは間違いないと解っている。大久保に言われるまでもなく、龍馬はそれを知る者の一人として責任を負うと決めていた。

「和太郎が腹を決めたつちゅうならそれでええ。わしらが成すべき事をしっかとその眼で観とうせ」

「ありがとうございます」

「時は動き出してしもうた。その中で己の道を見つけるのは一苦劳
ちや」

「坂本くんが案ずるまでもない、なあ武市くん」

意味深な笑いを浮かべた大久保から、武市は視線を外す。

(まったく、嫌な男だ)

ある意味桂と似通った種の人間なのは解っている。それだけに厄
介と言える。

「おんしも行くとゆうかと思っちよったが」

「それが出来るならここには居まい」

これから起こるだろう事を考えると、今すぐにも中岡を追って
行きたいのが本音だ。だが和奈の件もある。長州の行く末も、和奈
の事も、幾多の紆余曲折を経た中から光明を見出さねばならないと
武市は逸る気持ちを抑えるしかなかった。

「色々あるようだが、すぐにでも発つといい。屋敷までの経路は
ここに書いておいたぞ」

「忝い」

差し出しされた紙を、深く一礼して受け取った龍馬は急いで旅支
度を整え、深夜になってから藩邸を出た。

五条大橋を東へ抜けて西国街道から東海道へ入ると近江国大津へ
続く道だ。

大津宿まで三里二十四町(十四・三キロ)の道のりだが、歩き詰
めに慣れていない和奈を氣遣った武市達の足は遅い。

武士の歩速は速く、普通に歩いても一日で十八里(六十キロ)を
歩く者もいるほどである。山道や獣道になると歩く距離は少なく
なるが、それでも和奈が武市達に付いて行くのは楽ではない。

三刻かけて半分の距離を進んだ所から、道の両側に木立ちが並ぶ
ようになった。入り組む幹で陽の光りが遮られ、太陽が昇っている
のにも関わらず辺りは薄暗く、夕方でも夜に近い暗さになる。

大気も冷え込み出し、最初は元気に歩いていた和奈も慣れない旅

で次第に歩みが遅くなっている。

「少し休むか」

後ろを振り返り、辛そうにしながら足を動かしている和奈を待つ。

「ほうじゃの。夜通し歩くのはきついじゃろう」

街道から外れた一行は、体を休める場所はないかと探しながら木立の奥へと入って行く。

「ここら辺りでいいじゃろ」

しばらく歩いたところに空き地を見つけると、以蔵が野宿の用意に取り掛かった。

辺りから拾い集めて来た小枝を山の様に盛り上げると、龍馬が懷から燐寸と半紙を取り出して丸め火種を作り、小枝の中へと押し込んだ。

「今怖いのは野犬やき」

龍馬が手にしていた燐寸は大坂海軍塾生だった頃、オランダ海軍と交流の深い勝海舟から賜ったものである。貴重だからと、湿気ないように紙に包み野宿の時などにしか使っていない。

小枝が火で熱せられ、パチパチと音を立てて煙を上げる。

「ここへ座れ」

窪みが出来た木の根元を指差され、言われるままに和奈は体をそこに沈めた。

腰に刺していた竹筒から水を一口飲み、鼻緒で擦れた親指の付け根へ視線を落とす。黒い足袋の間に血が滲んでいるのが、ねっとりとした指間の感触で解った。

（バンドエイド・・・なんてもんはないか）

足の痛みよりも、襲い来る睡魔の方が勝ってしまったのか、一息ついた安堵感からか、次第に意識がぼやけ出して行く。

ここへ来てまだ二ヶ月と経っていないのに色々な事があったと、揺れる火を見ながら思いを巡らすうちに和奈は眠りへと落ちた。

立ち上がった武市は、刀を杖にして寝入ってしまった和奈に、脱

いだ羽織りを肩に被せてやる。

少し引き摺り気味だった足には傷があるだろうと、草履を脱がせて指の間をなぞるとしっとりした感触が伝わって来た。

「足を痛めているだろうに、痛いとも言わない」

「まっこと、気丈じゃ」

「馬鹿なだけだろ」

「おんし、口まで武市に似てきちゅう」

顎を引いた以蔵は反論もせず火に視線を戻した。

「明日にでも長州は京に入るだろうな」

側に武市が戻って来ると、三人で火を取り囲んだ。

出ろと言われて発ったものの、事の成り行きが心配なのは皆一緒だ。大久保が言った通り、西郷は幕府側で動くだろう。新撰組を抱える会津藩も江戸から兵を上洛させている。

武市仕込みの中岡の腕は確かだ。しかし戦に出た経験などない上、乱戦ともなれば腕があっても生き残れる保証など一つもない。

ただ生き延びてくれと今は祈るしかないのだ。

「結果を待つ事しかできんとゆうのは、まっこと腹立たしいもんだ」
梟の鳴き声と羽ばたきが夜の闇に木霊し、パチリと火の中で木が弾ける。

「大久保さんも気づいちよった様だな」

「和太郎の事か？」

「ああ」

「その様だな。まったく、隙も何もあったものではない」

抜刀術を己の力としろと大久保から言われたその意味を、和奈は理解していないだろう。

「あのくそ狸め」

こらこら言葉を慎め、と龍馬。あいつは狸で十分だ、と以蔵が言う。

「今回ばかりは以蔵に同意する」

その言葉に以蔵は照れた表情になる。

「あの太刀を意のままに使えたとしても、辿る道は一つしかない」
好む好まないに限らず人を斬ることになる。人を斬る場面に出く
わすと言うのは、危険な場面に遭遇する度合いが増すという事に繋
がる。龍馬としては危険から遠ざけたい思いがある。刀を振わせる
のも願ひ下げにしたい。だが、刀を捨てると和奈が言ったとしても、
この先も共に過ごすのなら否応なく自分達と同じ道を歩む事にな
る。ならば長州へと帰したとしても、この動乱自体からその身を移
さない限り危険から遠ざけてやる事は叶わない。

（時を越えたという言葉を信じるなら、その術をさなぐすしかえい
けんど鈴の音しか手がかりが無いちゅうんじゃ、難しい事やか）

武市は笑うだろうか。それとも桂の様に黙認してしまうだろうか。
龍馬は迷った。

「自分の進む道を決めたと言ったんだ、ならば見守ってやるしかあ
るまい」

「覚悟をしたらしいがのう」

「あいつなりに、人を斬っては元には戻れぬと解っているんだ」
以蔵の言葉に武市が目を見開く。

「以蔵、まさかおまえ」

「はい？」

突然龍馬が笑い声を上げる。

「五月蠅い！」

「おまえもだ」

うっ、と押し黙った以蔵は龍馬を睨みつける。

「武市もいらん心配をしな。以蔵にとって和太郎は弟みたいなもん
やき」

「いらん心配とはなんなんだ」

「あんな弟が居たら苦勞が絶えん」

同時に言われては首をすぼめるしかない龍馬の頭から、和奈の素
性を話すべきかどうかという問題がきれいに消えてしまった。

地平線から太陽が光の腕を空へと放ち出す頃、寝静まっていた鳥達が、巢穴から飛び立って行く。

その音で目を覚ました和奈は、目の前で火に背にして寝転んでいる以蔵と、刀に抱き付いて眠っている龍馬の姿をぼんやりと眺めていた。

「ん？」

ふと自分の左腕に暖かさを感じ、横へと顔を動かす。

「うっ・・・」

すぐ近くに静かな寝息を立てている武市の顔がある。

（まつげ・・・意外と長いんだ）

そんな事を考えながら、一晩中武市にもたれ掛って寝ていたのかと焦りながら、そっと体を離れた。

朝の新鮮な空気を胸一杯に吸い込み、ゆっくりと吐き出す。

時折聴こえてくる鳥のさえずりに耳を澄ますと、葉が風にそよぐ音が交じり合っている。

焚き火の中で木がパチリと弾ける。

今にも消え入りそうな火に、消えては体も冷えると、立ち上がった瞬間つま先に痛みが走った。

「った！」

その声で武市は瞼を開き、龍馬も気がついて頭を上げた。

「すみません、起こしてしまって」

「いずれは起きねばならん。気にするな」

上半身を起こした龍馬は背伸びをする。

「以蔵」

武市に声を掛けられ、寝返りをうって身を起す。

「見せてみろ」

和奈が上げた声は足の痛みを感じたからだだと、座り込んだ和奈の前に屈むとその足から草履を取る。

「自分で」

和奈が足袋を脱ぐと足を取り、指の間を確認する。

「やはり水ぶくれになっていたか。なぜこうなる前になぜ言わない」
「迷惑かけまいと我慢しよったんじゃろ」

「怪我で歩けなくなる方が迷惑だと思うが？」

竹筒の水を指の間にかける。

「っ」

手ぬぐいを懷から出し、小さく引き裂き傷口に巻いて行く。

「今はこれで我慢しろ」

「ありがとうございます」

足袋を履き直して草履を履いて立ち上がってみる。布のお陰で鼻緒に当たる部分が妨げられ痛みもあまり感じない。

「どうだ？」

「はい、歩けます」

「無理をせず、のんびり行くとしよう」

和奈を気にしながらの道中となったが、昼過には大津宿へ着く事ができた。

大津は琵琶湖で取れる産物を集める港町として、東海道の宿場では一番の人口を有し賑わう宿場町だ。

不穏な噂が広まる京を離れこの大津へ逃れて来る者が多いのか、通りを行き交う人の数も多い。それは武市達にとって都合な状況であると共に、手配者を探す幕吏や捕方を見つけづらい状況とも言えた。どちらにせよ、長居は無用なのである。

蕎麦屋に入った和奈達は、少し遅い昼食を摂るため蕎麦をすすっていた。

「あとの位行くんだ？」

「まだ一里はあるな。人気の少ない場所でも良かったんだが。まったく、大久保さんは気を利かせすぎだ」

身元を悟られないよう、時と場合によって龍馬は土佐弁を一切使わなくなる。

「きつと、遊びほうけるだろうおまえを見越しての事だ」

爪楊枝を齒で遊んでいた龍馬は、口を尖らせるとブツブツと文句

を零した。

「和太郎はもう食べないのか？」

「一つで十分ですよ」

「おまえ達が食べすぎなんだ」

朝から何も口にせず歩いたのだ、龍馬と以蔵が空にする器の数は三つになっていた。

「そろそろ行くぞ」

お茶を飲んでからだど、急須から空になった湯飲みにお茶を継ぎ足す龍馬。

「気が済むまで待っていたら日が暮れる」

勘定を済ませてくると武市はが立ち上がった。

「先に出てますね」

「おう」

店を出た和奈は、往来する人の波にため息を吐く。

「どうした？」

後ろから出て来た以蔵は、聞こえたため息にそう尋ねる。

「人、多いなって」

「大津は西近江路、中山道、東海道の宿場だからな」

と説明されたところで、それらの街道が大津からどの方角へ伸びているのかさっぱり検討がつかない。

「ゆっくり茶ばあ飲ませてくれ」

勘定をすませ、席に座って急ぐ風でもない龍馬を連れ出してきた武市は、道の方へとその背中を押し出した。

「着けばゆっくり飲めるだろう」

「おんしはいられ過ぎでいかん」

「気を緩めすぎるのみな」

つい土佐弁を口にしてしまった龍馬を睨みながら、人ごみの中へと歩いて行く。

「きちっと過ぎる性格が苦にならんのかのう」

「丁度いいんじゃないですか？」

くすくすと笑いながら、龍馬と並んで歩き出す。

通りの両脇には魚屋や干物を軒下に吊るした乾物屋や、呉服屋、古着屋などが軒を連ねている。

（商店街みたい）

魚を入れた半台を、長い天秤棒の両端に付けて歩く男の姿もあった。

あちらこちらを身ながら歩く足はいつしか速くなり、追い越されてしまった龍馬は口元をほころばせた。

「京案内もしてやれんかったからのう、珍しいんじやろう」

袴姿で通りを忙しそうに見回す素振りには男のそれではない。

「龍馬、以蔵と先に行け」

「以蔵と？ 和太郎はどうする？」

「・・・大久保さんは屋敷に人を置いてくれていると言っただろう。着くのが遅れてはいらぬ心配をかける」

「で、おんしはどうする」

武市がどう行動するのか解った時の龍馬は本当にしつこい男になってしまう。

「時々、おまえを本気で斬ろうかと真剣に考える事がある」

くわばらくわばらと、以蔵の腕を引っ張って行く龍馬は手をひらひらさせて人ごみへと紛れて行った。

「和太郎」

名前を呼ばれ振り向いた和奈は、そこに龍馬と以蔵がいない事に気付いた。

「うわ！ まさか、迷子になってました？」

「龍馬達は先に行かせた」

「すみません、余所見し過ぎでしたよね」

「構わん。それより、町へ出て来る機会もあまりないだろうから、今のうちに見物しておくか？」

「いいんですか？」

「長居しなければ問題はないだろう」

男装しているのを忘れた和奈は、嬉しさのあまり組んだ両手を胸に飛び跳ねてしまう。

「まるで女子だな」

くすくす笑う武市に言われ、胃の辺りがひやりとする。

「や・・・あの・・・」

笑みを消した武市は、無鉄砲で思慮が浅い上に頑固と来た。これでは龍馬が二人いるようなものだと言った。

「反省してもしきれません」

肩をすぼめた和奈の背中を軽く叩き、行くぞと歩き出す。

「本当にいろんな物があるんですね」

路地の片隅には出来合の食べ物売、”振り売り”が出ている。今で言う屋台のようなものだ。

「萩の町も似たようなものだろう」

「あ・・・はい」

萩について全く知識のない和奈は、何か聞かれては困ると思い自然と口数が減ってしまった。

「すまん。思い出させてしまったな」

「いえ、そんなんじゃない」

「詫びの代わりに」

近くに在った茶屋を見つけた武市は、店先に設えてある長椅子へ和奈を座らせた。

「少しここで待て」

「はい・・・」

中から出て来た女中に団子を注文した武市は、来た道に戻って行った。

「武市さん、団子好きなんだ」

大津へ来たのは観光などではなく身を潜めるためだ。必要の無い行動を一切しない武市が、屋敷へ急ぐでもなく茶屋に寄り道をしているのが不思議でならなかった。

団子三つが刺さる串が二本と、いい香りがする緑茶が乗ったお盆

が二つ脇に置かれる。

「あら、お連れ様は？」

「あ、すぐ戻る」

ふう、と行きかう人をぼんやりと眺める。

かんざし

簪を着けた女性、飛脚、浪人に小さい子供の手を引く白髪頭の老人。服装や髪型を覗けば、昭和に生きる人と変わらない風景がある。

戻って来た武市は、団子も食べずにぼうっと通りを眺めている和奈にため息を吐いた。

「待っているとは言ったが、食べるなどは言っていないぞ」

蓬団子を頬張る和奈に、食べるかと自分の皿を差し出す。

「ふあべないんれふか？」

「・・・口に物を入れたまま喋るな」

「！」

恥ずかしい事この上なく、いつもの武市ではないのが悪いと他人のせいにしながらも、綺麗に二人分をたいらげた和奈は満足顔になった。

土産にと、龍馬達の分を注文することを武市は忘れなかった。

（手土産の一つも持って帰らんと龍馬の事だ。根掘り葉掘り聞いてくるに違いない）

しかし団子を渡しても聞かれるだろうとも思う。

なにやら考え込んだ武市の顔を覗きこむ。

「ん？」

「難しい顔で、どうしたんですか？ あ、もしかして、団子残すべきでした!？」

「おまえ・・・」

「食べ物への恨みは怖いとよく言いますけど・・・」

「断じて恨みなどせん！」

出て来た女中から持ち帰り用の団子を受取り、二人は再び通りを歩き始める。

「忘れる前に渡しておく」

袖から取り出した根付を和奈に差し出す。

「僕に、ですか？」

「他に誰が居る。さっさと受取れ」

黒檀でできた四角い箱が赤い紐の先に付いている。

”根付”は印籠や煙草入れ、皮袋等を紐で帯から吊るし持ち歩くのに用いられ、”差根付”や”形彫根付”など様々な種類があった。
「その箱を開けて見ろ」

良く見ると箱に筋があった。

左右に引いて開けると、丁寧に彩色された彫り物が出て来た。

「鶴!？」

珍しそうに鶴を見ている横顔に、武市は微笑んだ。

「ありがとうございます」

竹筒にでもつけておけと言われ、早速腰に差していた竹筒を抜く。

「カラクリ根付を見るのは初めてか」

「はい!」

「それは良かった」

帯の下から根付を引き出す。筒で窮屈となっていた腰周りがすつきりと楽になった。

(まさか、わざわざこれを買いに?)

と小首を傾げる。

「なんだ？」

「いえ、その・・・明日からの稽古に不安になって・・・少し・・・」

「!」

寄り道はするし根付を買ってくれるしと、腕を組んで首を傾げた和奈に顔を見られまいと、武市は歩調を速めた。

其之一 禁門の變

飛鳥川　きのうにかわる　世の中の
うき瀬に立つは　我身なりけり

国司信濃

元治元年七月十六日、和奈達が京を発った次の日。

来島率いる六百名が嵯峨天龍寺に、海路・陸路を使って久坂と真木和泉率いる約千名は山崎天王山へ、総大将福原越後、国司親相、益田右衛門介の三家老日率いる千六百名も伏見長州藩邸へと入った。

「福原殿」

留守居役乃美が険しい表情で福原達三人の前に座した。

「幕府からなにゆえの京入りかと、伺いがきております」

「我らは戦をしに参ったのではなく、朝廷に対し陳情を申し上げに参っただけだ。何を隠すでもない、そう伝えれば良い」

しかし、と乃美は眉を顰める。

「しかしこの数です。陳情しに上洛しただけとは信じてもらえますまい」

「会津が抱える新撰組とか申す集団、人斬り集団と京では恐れられているそうではないか」

「加え、商人を拷問した上、その証言を奉行所で詮議もせず池田屋へ御用改めと入った。そのような輩が居るがゆえの兵であると申せ」

「また無茶な事を。稔磨達の計画を記す品が、その古高という商人の屋敷から出たとの事ゆえ、新撰組が動くのも致し方ないかと」

「馬鹿を申すな！」

方膝を立てて顔を真っ赤にしてどなる益田の手は震えている。

「稔磨がおって、京を焼き帝を拐かす策など立てるものか！」

「証拠など、後からいくらでも作れよう。これは長州を陥れんとする会津と幕府の策略である。我が長州が朝廷に対し、弓引くような

所業をする道理はない」

国司の言葉に、福原も益田も頷く。

「貴殿は、我らの上洛を池田屋事件の取調べだと届ければよい。天王山に入った久坂も、朝廷に対し嘆願書を出しに行っておる頃だ」

「我等も御所のあるこの京で戦など起こす気は毛頭ない」

「・・・承知致しました」

しぶしぶといった様子で乃美が部屋を出て行くと、

「しかし、会津と薩摩が邪魔に入れば、久坂と来島も市中に入ざるを得まい」

と疲れた顔で福原が呟いた。

「何としても御所へ行き、我らの真意をお伝えねばならん」

福原達が甲冑姿で藩邸に入った事で、藩邸に居る藩士が我もと名乗りを上げた。加え、池田屋事件について疑問を抱く浪士達が続々と藩邸へとやって来たのである。その数五百名を下らず。

緊迫した空気が市中に漂い始めた。

提出された嘆願書を受けた朝廷では、長州藩への寛大な措置を要望する声が多く上がっていた。

薩摩藩大目付役吉井仁左衛門、土佐藩小目付役の乾市郎平、久留米藩徒目付大塚敬助らは、武力で制するより長州の意向を伺い立て、事を穏便に済ませたいとの意見で一致し、入京を阻止するため朝廷に対し建白書を提出した。

長州への追い討ちは後々大きな波乱を引き起こす火種となるのは明白であったが、吉井達の願いが通る事はなかった。会津や筑前、薩摩藩に押し切られる形となった朝廷は、長州軍に対し再度退京を命じ、従わない場合は追討令を出す事を決定を下したのである。

「んごて長州を敵に回すよな事をした」

伏見の薩摩藩邸に向向いてきた西郷は、大久保の顔を見るなり開口一番そう詰め寄った。

「なぜ私が責められねばならんのだ」

「一蔵どんが京に居て、んごて、こげん事になつとうのかと聞いと
うんだ」

「己の保身しか目に入っておらん馬鹿土もには、私や吉井くんの腹
の内など考えはせん。それにだ」

睨むように西郷へと視線を向ける。

「おまえが京に入れば、強気に出て来る事くらい考えたらどうだ」

「俺は幕臣じゃなかか。長州が上洛などちゅう軽はずみな行動を取
らなにゃ、俺が京へ入っ事もなかったんだ」

「原因を作ったのは、会津が抱える新撰組ではないか。強いて言う
ならば、会津がだがな」

「京守護職にあう立場では、しよがなか」

大久保が考えていた公武合体は、倒幕へ藩政を転換させる上での
通過点に過ぎず、本気で幕府と朝廷を頂いての国づくりではない。
会津と手を組み、長州を朝廷から遠ざけたのも、急進すぎる変革に
よってしこりを残したくないがゆえの策であったのだ。

「京に於ける地位が向上した会津は、幕府の意と独走を始めている。
面白くないのは、新撰組の存在だよ吉之助」

「京の治安維持は目下の課題だ。捕い方達では、京中に徘徊すう不
逞浪士をすっぱい取締うなどでけん」

「ふん。不逞浪士？ それだけではないではないか。攘夷派や尊攘
派の志士達までもが、幕府になす者としてその刃にかかっているの
を忘れてもらっては困る」

目を閉じたまま大久保の言葉を聞いている西郷の顔は厳しい。

「ともかくだ。入京を推し留めるに至らぬ結果となり、退京を迫ら
れた長州が動くのも時間の問題だ。吉之助、何としても御所への乱
入を防げ」

「言われうまでもなく、こん身を以って長州を止むうつもいでごわ
す」

もし防げず、朝敵となれば長州は京へ入る事は叶わなくなる。そ

れどころか、会津に藩取り潰しへと動く切欠を与えてしまう事になる。

（そんな事になれば、倒幕への道がまた遠くなる）

薩長の和睦をと動く龍馬や中岡の足をもぐ結果にもなる。

「桂くんの気苦労の少しも、野生児にも汲む心があれば良かったのだがな」

高杉が脱藩し、獄送りへとならなければ長州兵の上洛がこうも簡単に行なわれなかったのではないかと残念で仕方が無い思いだった。

追討令が出されたことにより、幕府の動きは慌しくなった。

御所守備軍総大将の任に就いた一橋慶喜は、松平容保、西郷吉之助率いる諸藩と新撰組を含む五万の幕兵を以って、京都御所の周辺を中心に警備を敷く事を決定した。

その決定がすぐさま薩摩藩邸に届けられると、西郷は思い足取りで藩邸を出たのである。

一方、退京命令を受けた福原達も、久坂の居る天王山へと足を運んでいた。

焚き火を囲み、退京命令を記した紙に目を通した久坂の顔は苦渋に歪んでいる。

「こうなれば、鷹司殿に謁見し、我らを連れて御所に参内してくれるよう頼むしか手はない」

この場に来島を呼ばなかったのは、武力を以ってではなく、話し合いで事を進めたい久坂の配慮からである。

「久坂よ、叶うと思うてか？」

「退京せねば、追討も止むを得ないとの判断を下したのは幕府が朝廷に圧力を掛けたからであります。我らに退く気がない以上戦となりましょう。もし戦になれば、鷹司殿とて危険を冒してまで我らの参内を取り持つとは思えませぬ。ならば僅かでも可能な道が残されている限り、試してみる価値はあるかと存じます」

久坂も福原達も戦を朝廷に仕掛けるつもりではなく、長州藩の本意を朝廷に直接伝える事にあり、会津や薩摩藩が邪魔に入るのを見越して兵を挙げての上洛なのである。

「ここで討論を重ねても仕方あるまい」

「ならば」

「夜明けを待ち御所へ向かう。国司は来島の爺さんを頼んだ」

「承知した」

入京決行の意を固め、福原と益田は伏見藩邸へ、国司は来島の居る天龍寺へと引き上げて行った。

擧姿たすきで刀の手入れをしていた中岡の元へ歩み寄る久坂は、安政の大獄で師松陰が斬首となった後より、攘夷活動の主導を担うようになった。高杉とは松下村塾の双壁と呼ばれている。

困窮する藩士や郷土、足輕等、同志の生活援助という名目で、松陰が書き残した著作本を写しそれを売って得た資金で補うと言う【一燈銭申合】を考え出した人物でもある。

この一燈銭申合には草案者久坂玄瑞の他、入江杉蔵、佐世八十郎、寺島忠三郎、品川弥二郎、山縣狂介、堀真五郎、檜崎弥八郎ら十九名を主とし、桂小五郎、高杉晋作、伊藤俊輔を含む五名も後に署名している。

「我々に付き合う必要もないだろうに」

「黙って見ていられますでしたから」

「だがな」

「幕府のやり方に、これ以上の我慢はできません」

何を言っても中岡が引き下がらないだろう事は久坂にも良く解っていた。かと言って、戦になる可能性もある御所行きに同行させたくもなかった。

「皆には挨拶を済ませてあります」

若者が生を急ぐ時代、と久坂は改めて今の世の正しさを探したものだ。だが幾度考えても正しき道など、今の幕府にないとの答えし

か出せない。

松陰の意思は色々な形で長州の若き者達の心に根付いている。

塾生の中でも久坂は取り分け尊王攘夷の思いが強い。朝廷に政権を戻し、天皇の采配による国政を敷き、その力添えに諸藩が足並みを揃えてこそ富国強兵が成せると信じている。

悲願となった志を遂げるためには、長州の汚名を返上し政権復古を果たさねばならない。ゆえ、高杉や桂の制止を振り切り上洛したのだ。

「死に急ぐなよ」

その言葉に中岡の返事はない。

志を貫く生き方の難しさと、久坂自身、己の成そうとしている事の難しさも痛感していた。

翌七月十八日になり、天龍寺、天王山から長州兵が洛内へ向け出立した。

同日に開かれた朝議に於いて、京守護職松平容保が武装を以って上洛しようとする長州兵に対し、討伐すべしとの強硬な態度を示していた。

共に長州を追放した薩摩は賛同もせず、この期になって日和見を決め込んでしまい、禁裏御守衛総督に就いていた一橋慶喜も薩摩寄りの意見を述べただけで、強硬派宥和派のどちらにも着く事はなかった。

事変を知った国事御用掛の有栖川宮熾仁と有栖川宮熾仁親王、議奏を辞職していた公家の中山忠能が参内して来ると、久坂が提出した嘆願書を退けた事に対する憤りを申し立て、松平容保の追放と長州入京を許可し平和的な解決をすべしとの意見を述べた。

深夜まで議論が交わされたが、有栖川らの陳情は朝廷に受け入れられず、朝議の結果は長州藩の討伐で決定した。

禁裏御守衛という立場もあり、慶喜は薩摩藩を主に、桑名、彦根、越前、淀、大垣諸藩に禁門の警備の強化を図らせ、各門の内側に篝

火が焚かれ夜通しの警戒が敷いた。その数は五万に上った。

十九日になって、心労からか容保が倒れる騒動が起こり、代わって慶喜が幕軍の総指揮に当たる事になった。

二度に渡る慶喜からの退京命令に応じぬまま、久坂や来島らが京へ足を踏み入れ御所を目指す中、伏見藩邸を出た福原隊が藤森まで来た所で大垣、彦根藩に行く手を阻まれていた。

「融通の利かぬ奴らよ」

そう笑った福原は、この場を何としてでも突破し、御所へ向かわねばと号令を出した。

「一人でも多く御所へ向かえ！」

刀の重なる音が絶え間なく聞こえ出すと、静かな町は怒声や断末魔に包まれた。

福原に刀を振り下ろしてきたのは、まだ元服間もない少年兵だった。若いとは言えど、刀を手にした時より武士となる。戦に出る覚悟の有無に関わらず、武士となればお上の命は守らねばならない。

若い藩士の腹を柄で殴ると、福原はその身体に躊躇なく刀を振った。

相手の数の多さが障壁となり一進一退を繰り返すだけで、大垣彦根藩を突破する事ができない。

「幕府も必死か」

一対三なのか、それ以上なのか。

時間が経つにつれ、一人、二人と地面に倒れて行く数が増えていく。形勢はすでに不利となり、壊滅に近い状況となってしまうている。もはやここを突破し御所に辿り着くのは不可能と判断した福原は、即座に撤退を決めた。

「皆、退け！ この場から退け！」

生き残りさえすれば次もあると伏見へ一旦退いた福原は、体勢を建て直し別の経路からの御所到達を試みる。だが、御所へ続く道はどこかしこも幕軍と諸藩の兵で埋め尽くされてしまっていた。

御所へ辿り着くどころか久坂達と合流するのも難しく、かと言って伏見藩邸にも追伐の手は伸びるだろう。

やむを得ずと、福原は京を出る決断を下した。

撤退を余儀なくされた福原の事を知る由もなく、天龍寺から戻橋に到着した国司と来島率いる隊は、中立売御門、新在家御門、下立売御門の三方へ分かれていた。

中立売御門の前に立った国司・来島隊は、守護に就いている筑前藩勢と緊迫した状況で対峙している。

双方とも相手の出方を伺い、一触即発の空気が漂う中、一発の銃声が空に響き渡った。

筑前藩と共に出陣していた幕兵が、緊張からか命令もなく火縄銃の引き金を引いたのである。その銃弾は、不運にも長州軍の一人へと命中してしまった。

「ここで撃つか！ もはや御所の御門とて遠慮は要らぬ。行け！」

来島の怒声を合図に、長州兵が門へとなだれ込む。

「臆するな！ 我らの志を敵に見せてやれ！」

攻め側となった長州の勢いに気圧された幕兵は、門前で堪える事なく内側へと後退させられ、先頭を切っていた来島らの禁裏内への進入を許してしまった。

「このままま一氣に押し進め！」

「爺さま、待て！」

来島が駆け出そうとしたその時、国司が後方の異変に気づいて肩を掴んで引き寄せた。

「何をしちよるか！」

「あそこを」

示された方へと目を向けた来島は、乱戦となっている門内に動じもせず、人を押しのながら進んでくる巨軀に目を細めた。

「西郷さんか！」

錦小路藩邸から天龍寺に向かおうとしていた西郷だったが、御所

方面で上がった砲声を聞きつけ駆けつけて来たのである。

「兵を退け！」

幕兵にでもなく長州兵にでもなくそう叫んだ西郷は、自分を見ている武士を見つけると歩みを速めた。

「ここを禁門と知って、なにゆえに武力を行使すう」

「先に禁を破ったのはそちら側ではないか」

「じゃっで、御所への乱入を許す訳にな行きません。直ちに兵を引いて退京されうが良か」

「出来ぬ相談だ！」

国司が握った刀を手により一歩前へと進み出た。

「これ以上進むと言うのなら、我は力を持ってそいを阻止すう所存じゃあと申し伝ゆ」

「我らとてここで退くわけには行かぬ！」

来島の言葉と同時に近くに居た幕兵へと斬りかかると、筑前と薩摩勢を相手に再び攻防が始まった。

言葉で説得できないのであれば、武力でもって長州を禁門から外へ追い出さなくてはならない。

西郷は小銃を構える一団の方へ下がると、長州兵の先頭に立って悪鬼の如き形相で剣を振るう来島の狙撃を命じた。

再び響いた銃声と共に、次の者へ斬り掛かろうしていた来島の胸を銃弾が貫いた。

「爺さま！」

膝を付いて蹲っている来島の元へと、幕兵を斬って駆け出す。

「ぐっ……」

胸を抑えていた血まみれの手を見下ろす来島の額にはすでに油汗が浮き出ている。体に打ち込まれた銃弾の傷みは、剣で斬られる比ではない。

激痛に顔を歪め傷の位置を見るが、受けた銃弾は致命傷と思えた。

「……武七……」

近くに居た甥の喜多村武七を呼ぶ。

「すまん・・・が、介錯を、頼む」

返事を待つ間も作らず、来島は手にした剣を両手で持つと自らの喉を突いた。

「叔父さん！」

叫び声に顔を向けた国司は、武七が振り下ろす刀が来島の首を刎ねるのを見た。

「爺さま！！」

国司のその叫び声が届いたのか届かなかったのか、叫んだ当人も首を落とされた来島にも判らなかった。

次々と仲間が倒れ行く中、ついに長州軍も銃撃隊を前進させると幕兵に向け発砲を開始した。

「敵将を狙え！」

それはすなわち指揮を執っていた西郷である。

何発もの銃声が起こると、騎乗していた西郷の体が馬上から地面へと転がり落ちた。その太股にみるみる血が広がって行く。

「わいの事はいい、長州をとめろ」

駆け寄ってきた兵にそう言うのと、負傷した足を縛り再び指揮を執った。

門内から、来島を失い勢いを殺がれた長州兵が次第に後退し始める。是が機と、西郷は隙間のない隊列を指示し紋の外へと追い出しに掛かった。

総崩れとならないまでも、形勢を立て直せなければ劣勢となるしかない。応戦するのが精一杯となった状況に、国司は已む無く撤退の声を上げた。

新在家御門では、到着した勢いのまま会津桑名藩を押し上げて門内部へ突入した長州だったが、後から後から沸いて来る敵に対してなす術がなくなり後退を強いられた。

下立売御門でも、門内で双方入り乱れる乱戦で、会津幕府間で同士討ちする者もあり戦況は長州側の有利となっていた。

各門での攻防が繰り広げられている中、前太政大臣鷹司政通の屋敷を占拠した久坂と真木達は門という門に兵を配置させ、鷹司を前に座していた。

「どうか、我々の御所参内にご助力を願えませぬか」

参内前の鷹司に自分達が上洛した理由を語ったが、鷹司は背を伸ばし首を横に振った。

「公武合体派の公卿らが政局の中心となつては、孝明天皇と言えど尊攘の意志を貫き通すのは至極難題である。しかも武装し兵を挙げの上洛と、二度に渡る退京命令に背いたそち達の嘆願は届かぬ。雪冤のためと嘆願しに来るのであれば、兵を上げる必要はなかったのではあるまいか」

「我らとて好んで兵を挙げたものではありません。元を正せば会津薩摩藩が政権を己が物と、朝廷に働きかけた事にございます。穏便に済ませられるのであれば、兵を立ててまで上洛など考えましようか！」

京での二代政権だった薩摩と長州。それが今や長州は京を追われる身なり、薩摩は大手を振って政権に参加している事態になっている。

「できぬものはできぬ。大人しく降伏する事を提言致す」
久坂は無念の形相で俯いた。

一橋率いる会津兵も到着し、屋敷の周囲を取り囲み突入の機会を伺っている。

「長州め。武力で幕府と遣り合えると本気で思ったのか」
馬上からそう呟いた一橋は、葵の紋を付けた陣羽織を羽織っていた。

会津藩主松平の様態が悪くなってしまった為、会津兵を率いて出陣して来たのである。

「包囲が完了しました」

一橋は暫し黙した後、上げた片手を振り下ろした。

「全軍、各門から突入せよ！」

外が徐々に騒がしくなり、中岡はそつと障子を開いて様子を伺った。視界に入る門から、幕兵と長州兵が斬り合う姿が見える。

「久坂さん」

中岡の横から外を見た久坂は、松下村塾から同士である寺島忠三郎に目を伏せて頷いた。

周防国に生まれた寺島は藩校である明倫館に通い、松下村塾で吉田松陰と出会うと門弟に下った。

文久二年に高杉や久坂らとは御楯組を結成した折りに知り会い、長井を暗殺する計画にも参加していた。

中岡の手を取った寺島は、部屋の隅に立つ入江九一の許へと引張って行く。

「二人に頼みがある」

その言葉に顔を見合わせる中岡と入江。

「この場を生き延び、事の顛末を長州へ報告してもらいたい」

ここから逃げ出せと言われたのだ。

「逃げろと!？」

入江はこれに猛反発した。

久坂も二人の前に立つと、ここを脱出するのも大事の一つ、死ぬばかりが戦ではない、と諫めた。

「中岡くんもどうか入江の脱出に助力をして頂きたい」

「しかし！」

「討論している時間はない！ 我ら長州の無念をおまえ達に託す！」
寺島が振り向き様に叫んだ。

外から聞こえる声はさらに近づいて来ている。この部屋に兵が突入して来るのは時間の問題と思われた。

「なに、我らとて無駄死にする気はござらん」

そう寺島が笑顔を見せ、中岡と入江に、行ってくれ、と叫ぶ。

障子を開け放った敵兵へ、久坂、寺島が斬りかかって行くのを中岡と炒りえは呆然と見つめていた。

「なにをぼやっとしている！ さっさと行かんか！」

部屋へ入ろうとする幕兵を一人二人と斬り捨てながら寺島が怒鳴った。注意を逸らしたその瞬間、肩に太刀が走り、寺島はその場に膝を付いた。

「寺島さん！」

走り出した中岡は、さらに斬り掛かろうとする幕兵の腕を切り落とす。

「ここで死ぬ事は我らが許さぬ！ 生き延びるのもまた戦と心得よ！」

「生きて志を継いでくれ！」

久坂も庭から怒鳴り声を上げた。

視界が緩むのを堪え、中岡は棒立ちになっている入江の手を掴むと、一気に部屋から駆け出した。

「追え！」

久坂は追わずまいと幕兵の前に進み出る。

「貴様らはの相手は我らだろうが！」

寺島も傷を押さえて立ち上がり、久坂に背を向けて再び幕兵に對峙した。

どこもかしこも修羅場だった。

久坂隊の総勢は千、対する幕兵はその倍以上は居るだろう。優勢劣勢は数を確認するまでもなく誰の目にも明らかだった。

中岡は幕兵の間を縫うように近くの門へ走って行く。

斬っても斬っても向かってくる兵の数は変わらない様に思えた。

その目の端々に倒れていく長州兵の姿が映る。

唇を噛みしめ、戦鬨の薄い場所を選びながら家屋の裏手へ走り、小さな門へに急いだ。

先を進んで行く入江の後ろで、追いかけて来る幕兵を斬り、門の

両壁に背をつけ息を整える。

扉の門を静かに抜き扉を少し開けて、その隙間から様子を伺った。外には幕兵五名が屋敷を背にし通りへと注意を配っている。

「ここを突破する」

顔を見合わせた後、外へ飛び出した二人に気付いた幕兵が振り返り、慌てて剣を抜く。

「邪魔をするなら斬る！」

背を合わせ幕兵との距離を保ちつつ、壁から少しずつ離れて行く。「ぐずぐずしてる暇はない」

入江が踏み出し、剣を振り下ろした。

二対五では相手に背を向ける事も出来ず、中岡も入江もお互いの背中を確かめながら幕兵と剣を交える。

膠着する時間が長引けば、剣戟を聞きつけた幕兵が出て来る。そうなればこの場から逃がれるのは無理に等しい状況になるだろう。

急を煮やした入江は間合いを一気に詰めた。

横薙ぎに払った剣が相手に届くよりも早く、幕兵の剣が入江の胸へ深々と突き刺さった。

「入江さん！」

口から血を吐き、刺された剣を引き抜かれぬよう握り締めた入江は、相手の喉へと剣を突き刺した。

「まだ・・・だ」

剣を引き抜き、もう一人の体へ刃を這わせたところで足が落ちた。「くそ！」

助けに行こうと身体を回した背後に剣が走る。

中岡は左手で抜いた脇差を後ろの幕兵に突き出し、その剣を引き抜きざま入江が斬った男へ右手の剣を薙ぎ払った。

「あとおまえらか！」

残る二人に中岡は駆け出す。

右の男の懐へ入り、脇差を腹に突き刺すとそのまま切り上げ、身体を回して左の男の懐へ薙ぎを払う。

「くっ・・・そ・・・」

倒れた入江の許へ急ぐと、体を担ぎ上げて後ろを振り返る。屋敷の中はまだ怒涛のように人が入り乱れていたが、門に気付く者は居なかった。

背後を気にしながら門から離れた路地へと向かい、肩に掛かる入江の重みを感じながらがさらに路地を進んで行く。

「もう・・・俺は・・・いい」

その言葉を見無視し、角を曲がっては進み、進んではまた角を曲り進んで行く。

次第に腕が痺れ、抱えている腕から力が抜けそうになるが構ってはいられなかった。今は少しでも鷹司邸から遠ざかるのが先決なのだ。

徐々に入江の足が中岡の歩みに追いつかなくなり、半ば引き摺られる形で前へ進んでいる状態になった。

「下ろして・・・くれ・・・」

そう言う顔から血の気を見て取れなくなった中岡は、追っ手が来てないこと確かめると、火消し用に置かれている石桶の陰に入江の体を下した。

「しっかりして下さい入江さん」

息遣いはすでに虫の息に近く、胸の膨萎も見取れない。

着物をはだくと、心の蔵の近くにあいた傷からは脈うつように血が出でいた。

中岡は歯を食いしばった。

「・・・久坂さん・・・た・・・ちと・・・死にたかった・・・なあ」

それが入江の最後の言葉となり、その身体を抱きながら中岡は声を殺して泣いた。

尽きるともなく溢れて来る幕兵に、絶望的な戦況を見て取った久坂は、戦っている者へ生きて逃れろと叫んだ。

「寺島よ、我らはここまでだな」

体中に切り傷ができてなお、必死で討ち掛かって来る幕兵に剣を振っている。

「新しき世を諦めておらぬ者達が居る。我らはその先駆けとなればいい」

じりじりと円陣が狭まって行く。

二人が剣に長けていると言っても、何百人を相手に勝算はない。だからと言って捕縛という屈辱を選ぶ事などできない。

「死んで逝った者達が待っている」

「ああ、逝かねばな」

久坂と寺島は、幕兵から向きを変え剣を構えた次の瞬間、笑顔を浮かべてお互いの胸元へと剣を突き刺した。

この二人の最後を看取った一橋は、逃れた長州兵の追伐を命じて後、鷹司邸を焼き払うよう指示を出した。

益田は五百人を率い、天王山へと軍を進めていた。最後に京へ入る手筈だったのだが、敗走して来る自軍を追う幕兵と戦闘となり、総崩れになると退却を命じた。たが鷹司邸から逃れて来た真木和泉ら十七名は、長州への敗走を拒否し、討死覚悟で天王山に立て籠ったのである。

真木は久留米藩士であるが、安政の大獄によって吉田松陰らを失った長州尊攘派を形而上下に渡って指導していた。

大久保らと薩摩藩島津久光を擁立して文久二年に上京し、長州藩士や志士と接触を取り活動が続けていたが、八月十八日の政変が起り七卿と共に長州へと逃れていた。

三條と倒幕の深意で共感する間がらであり、今回の上洛も長州の置かれている立場を不服とし自ら進んで参加していた。

幕兵の追撃を追い払う力も無くなり、なす術はもはやなしと悟った真木は、三條に和歌を届けてくれと大沢逸平に頼み、最後の宴をした後に自刃した。

上洛した長州軍は三千八百名。対した幕府・諸藩総勢五万。後に

禁門の変と呼ばれるこの戦いに於いて長州側は四百名近い死者を出した。これからの長州を担うべき若者の多くがこの戦で命を落とした。

幕府側の死者六十名に留まり、長州は幕府との攻防で惨敗を記したのである。

御門での戦に於いて内裏へ向け発砲したとして、朝廷は長州藩を朝敵とした。

長州藩が所有する長崎・大阪・京都藩邸・江戸藩邸はすべて没収となり、支藩の長府藩邸、徳山藩邸全部と岩国領吉川家江戸屋敷も没収の対象となった。

藩邸没収により拘禁されたのは百十八名、死者も四十三名が出るに至った。この内、士格以上は十七八名、以下足軽百余人、女三人。士格者は旧陸軍所に拘束される事となった。

鷹司邸を焼いた炎は北風に乗る、一条通から南は七条の東本願寺に至るまで広がり続け、奇しくも宮部達が市中に火を放つ計画通り、町の半分を焼き落とす惨事となった。

この大火を「どんどん焼け」呼ぶようになり、長州の怨念が火を広げたのだと語られるようになる。

大山の峰の岩根に埋めにけりわが年月の大和魂

真木和泉

其之二 千変万化

西近江に来て一週間が過ぎ、和奈は京に居た時と同じく稽古に暮れる日々を送っていた。

「あれ？ 龍馬さんがまた居ない」

何かしら理由をつけて町へと出かけて行き、夕暮れ時まで戻らない事もあった。結局、人気の少ない村であろうが町だろうが落ち着かないのだから、どこに住もうと関係がないと武市は笑う。

龍馬がじつとしていないのは、なにも退屈だからではない。京に長州軍が入るのは間近だと中岡は言った。すでに朝廷への申し立てを行っているはずなのだが、報せが届かない状況では居ても立ってもいられなかったのだろう。

武市とて焦燥に駆られているが、和奈の事がある。責任を持つと断言した以上、何かしら手を講じなければならいが、これと言った名案などすぐ思いつくものではない。その事に時に費やすことで、中岡の身を案じ、悶々と過ごさずに済んでいた。

「夕時になれば、腹が空いたと帰って来るだろう」

武市の言葉通り、座敷に膳が並ぶ頃になって龍馬が戻って来た。

「腹が空いてはなーんもできやーせん」

がつがつと出されたご飯を、ただひたすら腹へと収めて行く。

食事が終り、お京が酒を運んで来てくれた。いつも陽気な酒を飲む龍馬が、今夜は沈んだ顔でちびちびと酒を口にしている。

どうしたのかと和奈が聞くと、町で嫌な噂を聞いたと龍馬は言った。

「京の町半分が火事で延焼してしもうたと、町人が話しちゅうのを聞いた」

火事の原因は長州軍と幕府の衝突により、一所で上がった火は強風に煽られ、あっと言う間に町の半分を飲み込んでしまった。

鎮痛の面持ちで皆が口を閉じてしまい静かになった部屋に、パタと足音が近づいて来た。

「失礼します」

困った表情で入って来たお京は、客が来ていると告げた。

「客？」

自分達がこの屋敷に居る事は大久保しか知らない。訪ねて来るなら大久保が寄越した者に違いはないはずだが、お京は誰も伴って来ていない。

「石川が来たと伝えてくれと仰って。玄関で待ってもらっています
が、どう致しましょう？」

「石川？」

和奈は初めて聞く名前だったが、どうやら武市達は心当りがあるらしく、上げてでも大丈夫だと笑顔を見せた。

しばらくすると、石川と名乗った町人姿の男が部屋へと入って来た。

「確かに、その格好ではすぐにおまえだとお京さんも気付くまい」

頭にほっかむりをし、着物の左右の裾を端折って帯に挟んでいる。顔も腕もドロだらけとくれば、お京が訝しむのも当然と言えた。

「中岡さん？」

よく見ると、汚れた顔は確かに中岡だった。

「大久保さんからここだと伺って急いで来たのに」

「いいから、その顔をなんとかして来い」

武市に手拭を差し出された中岡は、汚れを井戸で落とすと着物を元に戻し、改めて皆の前へと座った。

「幽霊じゃないだろうのう」

体中をぼんぼん叩いて行く龍馬の手を、中岡はひっしと掴んだ。

「痛いですから叩かないで下さい龍馬さん」

うんうんと頷きながら、五体満足じゃ、と大きく笑い声を上げた。
一息ついて膝を正した中岡は息を吸い込んだ。

朝廷が嘆願書を受け取らず長州への追討を命じ、久坂達が軍議を経て挙兵の意を固めた事から淡々と、中岡は御門での事を語った。

長州の惨敗。その一言ではすまなかった。

圧倒的な戦力の差で、対等に戦うのは最初から無理に等しい状況だったのだ。もし薩摩と長州の同盟が先に成っていたらと、龍馬は齒を食いしぼり、武市は手を握り締め震わせている。

入江の体を抱えた中岡は、幕兵に見つかからない様に時間をかけて大久保の元に逃げ込み、傷の治療もそこにやって来たのである。

「御門での発砲に激怒した孝明天皇は、長州藩を逆賊として追討の勅命を出しました」

「逆賊じゃと!？」

それにより、桂と高杉も手配書に名を連ねる事になったと付け加えた。

「勅命を受けた幕府は、二十一藩に対し出兵命令を出したと大久保さんから聞きました」

「!」

幕府にとって長州の挙兵は、理由はどうあれ尊攘派の討伐を行うのにうってつけの件となってしまうたのだ。

「俺だけ・・・生き伸びてしまって・・・」

この言葉に、龍馬も武市も冗談ではないと怒鳴りつけた。

「あほうをゆうがやない! 生きてこそ次があるろうが!」

「おまえが死んで世の中が変わるでもなし! 死に急がせぬため、久坂さんはおまえと入江くんをと望んだのだろうか!」

「・・・入江さんの代わりに・・・長州へ行きます」

しばらく俯いていた中岡の体がやがて前へ屈むと、嗚咽を漏らしながら肩を震わせた。

「ん・・・」

目が覚めると、その場で眠っている皆が居た。

膳が片付けられ、皆に布団が掛けられている。お京達が寝入った後来てくれたのだろう。

（あのまま眠っちゃったんだ）

昨晩は中岡に言葉も掛けられず、ただ見ている事しかできなかった。

何の役にも立てない自分が情けなく悔しかった。少しでも皆の力になりたいと、寝入る皆を見て和奈は思った。

中岡が一頻り泣いた後、武市達は酒を浴びるように飲んだ。そうでもない、どこへ向けていいか判らない怒りを納められなかったのだと思う。

幕府が悪いのでも長州が悪いのでもない。皆国を良くしようと必死で自分の成すべき事をしているのだと、悔しそうな顔で龍馬は言っていた。

外では雀が鳴き出し、太陽の光りが障子越しに部屋を照らし始めている。

目を覚ました中岡は、和奈に気がつき恥ずかしそうに頭を掻いた。男泣きどころか号泣する様を見られては、照れるしかなかった。

「おはようございます」

ずりずりと、布団を被ったまま和奈の横へと這って来る。

「芋虫ですよ、それじゃ」

戦に参加すると、藩邸を飛び出して行った人と同人物には見えなかった。

「一緒に長州へいぬるか、和太郎」

「えっ？」

「桂さんも心配しちゅうやろうし、国に戻って安全な所へ行く方がいいがよ」

まだ寝ぼけているのか、珍しく土佐弁を喋っている。

「すいません。僕、帰るつもりはありません」

「えっ？ なき帰らん？」

そう言った瞬間、中岡の頭が後ろへ振り返った。

「あたたたっ！」

布団から伸びる手が、中岡の後ろ髪を引っ張っている。

「なにするがか！」

髪を押さえ、後ろでもぞもぞと布団から顔を出した武市に怒鳴る。その声で龍馬が飛び起き、以蔵も置いてあった剣に手を伸ばして立ち上がった。

「いったたたたっ！」

髪を引っ張り続ける武市の手、その手を振り解こうともがく中岡。「朝っぱらから何をやっちゅうんじゃ」

あほらしいと、龍馬はまた布団に潜り込み、以蔵は唾然とした表情を浮かべている。

「武市さん、髪引っ張るののやめとおせ！」

いきなり髪を放され、中岡は勢い良く後ろに倒れる格好になってしまった。

「和太郎がどうするか、おまえがとやかく言う事ではない」

「このまま俺達と一緒に置けないがやないかね」

「いらぬ世話だと言っている」

武市にそう凄まれて、中岡はぐくりと唾を飲み込んだ。

「武市さん、一体何なんなが。俺は状況を考えてその方が良いと言うただけやないかね」

確かに中岡の言う事は最もだと武市も判っている。自分の行動に驚きを感じながら、布団から完全に這い出し、そそくさと肌蹴た着物を直した。

「武市は和太郎を帰したくないんじゃ」

笑いながら、もう武市と言った龍馬に、何を言いかと龍馬を睨む。武市を交合に見た中岡は、次の瞬間、驚いた顔で武市からさっと距離を取った。

「武市さん、ほがな趣味があったがか？」

「はっ？」

「個人的志向をとやかく言うつもりはないがよ。けど、やっぱりほ

りゃあいかん」

「ちょ、ちよっと待て！ 何を誤解をしているか！ おい龍馬！ なぜいつもややこしい言い方をするんだおまえは！」

正直者は辛いわいと、どうしても話をややこしい方へと持って行くこうとする龍馬。

皆が話す内容を理解した和奈は視線を武市へと向ける。

「え？ ええ！？」

女子と知らない中岡が誤解してしまうのは仕方がないと思ったが、それよりも自分を帰したくないと武市が思っていると言う事が驚きだった。

「先生、そうなんですか？」

以蔵も龍馬の企みにはまってしまっている。

「いい加減にしないか！ 本気で斬るぞ！」

布団を蹴飛ばして脇に置いてあった鞘を取る武市に、おお、相手になるぞと龍馬が立ち上がり、中岡も間違いは正すべきですと武市に詰め寄る。以蔵はしばし呆然としていたものの、援護に回ろうと武市を庇うように間へと割り込んだ。

「先生の趣向を、おまえらごときが意見するな！」

「以蔵、おまえまで！」

今度は以蔵の髪を引っ張っばる武市。

「いったたっ。先生、髪引っ張らないで下さい！」

必死に笑いを堪えていたのだが、ついに我慢しきれなくなった和奈は笑い出してしまった。

「もう・・だめ・・すみません」

腹を抱え、笑いの止まらない和奈に一同の動きが止まる。

「ほれ、笑われてしもうた」

「おまえが言うな！」

笑いを収めた和奈が膝を向けると、中腰だった姿勢を正して中岡が座り直す。

「武市さんの趣味？ というか、それは誤解です」

「そうながか？」

「あたりまえだ！」

武市が胡坐をかいて座り、なんじゃもう終わりかと、つまらなさそうに龍馬もその場に落ち着く。

「長州へ行くのなら言伝を頼めませんか？ 色んな事があり過ぎて上手く説明できないんですけど、暫く皆さんと居ようと思うんです。それを小五郎さんに伝えてほしいんです」

「ほりゃあいけど・・・色んな事って何なが？」

「土方と沖田に顔を見られているんだ、和太郎は」
新撰組の文字が浮かび、中岡は眉を顰めた。

「何でもがな事になったがなが！？ じゃったら尚更やか、長州に連れて行くほうがいいがやないかね！」

安全を考えるなら、それが一番いい事くらい武市にも判っている。

「僕は残りたいんです！」

「なき残りたいんだ？」

皆と居たいから、と口を開きかけた時、すつ、と障子が静かに開いた。

「朝から賑やかだが、何かあったのか？」

「桂さん！？」

部屋に入り、真っ直ぐ和奈の前へ行くと、桂は膝を付いてその頭に手を置いた。

「皆に迷惑をかけているのではあるまいね？」

その言葉に和奈は戸惑いを隠せなかった。

「勝手に上がらせてもらったぞ」

龍馬達の間を通り過ぎ、和奈の横へと胡坐をかいて座った高杉は、その首に腕を回し勢い良く小脇に抱え込んだ。

「元気だったか小僧！」

「ちよっと、小僧って！ 年変わんないじゃないですか！」

首を抱え込まれ、三つしか変わらないのに小僧扱いされてはたまったものではないと、高杉を見上げながら怒鳴る。

「はん！ 小僧で十分だ」

口元を上げてにやりと笑う。

桂はあえて二人に割って入らず、龍馬に体を向けると手について頭を下げた。

「甥が迷惑をかけているようで、申し訳ない」

「いや、違うんじゃない」

「この子の事で揉めているのは、廊下にまで聞こえていたんです、隠さなくて結構だよ」

龍馬はぼつが悪そうに頭を掻いた。

「坂本くん達が良いのなら、暫く和太郎をお願いできるかな？」

「ほりゃあ構いやーせん。のう、武市」

「あ、ああ」

「では、宜しくお願い致します」

場を掌握した桂は、布団を片付けておいて下さいと、和奈を連れて出て行ってしまった。

「くそっ。なんで俺にも布団を片付けさすんだ小五郎の奴」

一緒に片付けろと言われた高杉が呟いた。

「馴染めている様だね」

「そうでしょうか・・・」

「僕としては少し淋しい事だけだね」

「すいません」

謝る和奈の肩をぽんぽんと叩いた。

台所へ入って行くと、お京とおみつが忙しそうに食事の用意をしているのが見えた。

「人はちゃんと居たか」

「え？ はい」

二人に気付いたお京が慌てて駆け寄って来て、桂にぺこりと頭を下げた。

「御出でになっていると存知上げなかったもので、お茶をお出しで

きずに申し訳ございません」

「いや。玄関で声を掛けたんだか、誰も出て来なかったので上がらせてもらった」

「え？ 入り口の小部屋に藩士の方が居るはずなのですが」

お京は後ろにやって来たおみつと顔を見合わせた。

「部屋を空けていたのかも知れません。お出迎えもせず申し訳ございませんでした」

おみつの言葉に笑みを消した桂は、踵を返すと玄関脇の小部屋へと走った。

「桂さん!？」

お京達に何も告げず姿を消した藩士。ここには京で手配となっている龍馬達が居るのだ。もし姿を消した藩士が誰かにそれを伝えに行っただとしたら、やがてここへ招かざる客が来る。

襖を開いた部屋の中には何も残されていなかった。

「和太郎、皆に間者が居たと知らせておいで」

後ろへ来た和奈に背を向けたまま言う。

「え？」

「早く!」

「は、はい!」

桂の緊迫した言葉に、和奈は急いで部屋へと取って返し、落ち着こうとしていた武市に藩士が居ないと告げた。

高杉が、勝手に上がった、と言ったのを思い出した武市は舌打ちをして立ち上がった。

「まさか大久保さんが間者を？」

「ほがな筈はない」

和奈は置いてあった自分の剣を取ると、中岡と以蔵も剣を腰に納めて立ち上がる。

「大久保さんの線は無いと思うよ」

「か、桂さん？」

女物も着物を纏い、帯を巻きながら入って来た桂の姿に和奈は呆

然としてしまった。

「町と反対の道は何処へ？」

「山岳に続いとる。京から来るなら町を通らんとここへは来る事をようせん」

龍馬はただ無駄に町へ出かけていたのではなく、周辺を色々と調べ回っていたようだ。

「ここへ来る途中、僕達は誰ともすれ違わなかった」

「ならば町へは戻ってないな」

「ちっくと言った先の横手の山に、捨てれた寺が一つ在るな」

「様子を見てくる」

桂が出ると言う事に、武市が難色を示した。

「桂さんと高杉くんが狙いでなければ、慎太郎が付けられたとしか考え難い。俺が出る」

「藩邸から出たのが知られちゅうことじゃの」

立ち上がった二人を、桂は待てと制する。

「君達が出ては、薩摩との繋がりを肯定する事になる。それは僕らにとっても君達にとっても得策ではない」

帯を器用に締め、袖口に手を入れて板紅を取り出した桂は、馴れた手つきで小指の先に紅を取ると唇へと這わせた。

「まさか、その格好で行くんですか？」

中岡は女性にしか見えなくなってしまった桂に聞いた。

「女子なら相手も少しは油断してくれるだろう？」

邪魔になるから預かってほしいと中岡に板紅を差し出す。

「僕も行きます！」

「足手まといだ」

桂はいつも単刀直入だった。

「足手まといにはなりません！」

「・・・和太郎の腕は私が保証する」

武市の言葉に、桂ではなく龍馬が何を言うかと怒鳴った。

「相手は何人なのか判らぬだろうが。桂さんの腕は承知しているが、

安全を取るに越した事はない」

冷たい目で武市を見ていた桂は視線を流し、引く様子を見せない和奈を見てため息を吐いた。

「数が僕の手に残るようなら、和太郎を言伝に戻す」

「武市の阿呆が・・・桂さん。左へ少し歩いて行くと、素通りしてしまうくらいの細い道があるき。そこを上って行った所に廃寺がある」

「わかりました」

屋敷を出て町と反対の方へ暫く歩いて行くと、山の上へ続く細い道を見つける事ができた。

「藩士が接触するのは、会津、大垣、桑名藩あたりの間者とみていか」

桂は急な坂道だと言うのに、息一つ乱す事なく登って行く。

「なぜですか？」

「藩邸を出た中岡くんが付けられたとしたら、薩摩藩の失脚を目論む藩の線が濃くなる」

「失脚・・・」

「新撰組の手の者でなければいいが」

脳裏に土方と沖田が浮かび、その剣気を思い出した。笑ってはいたが、二人の放つ剣気は体を竦ませるのに十分だった。

和奈はごくりと生唾を飲み込んだ。

【強くなれ】

その言葉に責めたてられる様に稽古を続けているが、二人を前にして剣を抜く事ができるのかと自問自答する。

「京が落ち着いていないこの時に、新撰組が出て来る事はないと思うけど」

桂の言葉は耳に届いていない。

「強くならないと」

あの剣気に対峙しても竦まない様にもっともっと。

「・・・何があったのか、戻ったらゆっくり武市くんに聞くとしよう」

何かを心に決めたのであろう表情に、桂は不安を覚えたのだ。

和奈と桂が部屋を出てた後、武市と龍馬は睨み合ったまま座っていた。

龍馬には、行くと言う和奈の後押しをした武市の考えが判らなかつた。行くと言い張っても、これまでの武市なら止めていた筈なのだ。

「二人とも、もういい加減にしてください」

耐え切れずに中岡が声を上げた。

「なんで止めなかった」

中岡の言葉が合図となった。

「あれは行くと言ったら聞かぬ。おまえもそれはよく解っているだろう」

「わざわざ人を斬らせに行かせたが、おんしは！」

険悪の様相を作り出した二人を、中岡はどうやって宥めるべきか検討が付かず、高杉に救いの眼を向けたが、焦るように手を振られてしまった。

「桂さんの言う通り、薩摩との繋がりを知られるのは得策ではない。慎太郎は脱藩しているとは言え土佐の人間だ、必然的に我々との繋がりに気づく輩も出てくる。和太郎が長人と間者に漏れていたら、長州藩との繋がりがりまで知られる事になる。そうなれば長州と同じ道を薩摩も辿る事になるかも知れんのだ」

「ほれと、和太郎を行かせた事となんの関係がある！」

「好きで出したと思うのか！」

いつもの喧嘩ではなかった。これでは中岡も笑いながら仲裁に入って行く事はできない。高杉は無言で二人のをやり取りを見ているが、止めに入る気配はない。以蔵も武市の後ろに座ったまま動く事はないだろう。

「手配書に桂さんが載ったのは和太郎も知っているだろうが！もし万が一、桂さんが捕縛されるような事になってみる！あいつは行くべきだったと絶対に自分を責める！」

桂と何の縁もゆかりもないどころか、この時代の者ではない。そう伝えるべきだったのかと後悔の念に駆られた。が、ここでそれを口にすれば、武市は飛び出して行くだろう。そんな事はさせられないと、龍馬は立てた膝を下ろした。

「まっこと、わしは頭が悪うていかん！おんしも腹を括った、わしも括った。けんど了見が狭すぎたがか」

何が辛いのか武市はよく解っている。だから和奈が負うだろう辛さを考え、その時に最善である手段を選んだだけなのだ。

「まっこと、おんしの言う通りわしは馬鹿もんだ」

「おまえが馬鹿なのはよく知っている」

龍馬は掛け替えのない友であり、仲間だ。その思いが有るから、武市はいつも気持ちるぶつける事が出来る。

「・・・おまえはそのままで居てくれ」

「わしは変わらんぜよ、ずっとな」

それが武市の救いになるならば守り通し、同じ道を行くと決めた和奈の事も変わらぬ思いで見守ろうと決めたのは、龍馬なりの、友への思いやりだった。

その様子を羨ましそうな表情で二人を見ていた高杉に、誰一人気付く者はいなかった。

其之三 予兆

道を登りきると奥に古びた寺が見えた。手入れも長い間されておらず、枯木や落葉で境内は散散つばらな状態になっている。

「さて、ここはやはり堂々と正面から行こうか」

度胸があるのか無謀なのか、和奈には桂の行動は読み切れるものではない。

「僕の後ろから離れないように。剣を入れた袋の紐は解いて、少し鞘を出しておいてくれ」

桂から預かった剣を、ぎりっと握り締める。

境内に入ると、桂の歩調が少し遅くなった。

ゆったりとした歩調で賽銭箱の前へ立ち、深く一礼して手を合わせる姿からは剣豪という二文字は浮かんでこない。

桂の太刀筋は、桂木の演舞で見る居合いとは全く異なっていた。機敏な動き、隙の無い立ち姿、漂わせる剣気。どれを比べても違うのだ。人斬りと言われる以蔵も、稽古をつけてくれる武市にしても並みの剣客ではない。

生と死がいつも背中合わせである時代と、武術として剣術を修めるだけを目的とした平和な世では、質が違ってしまふのは必然に思えた。

賽銭箱の横を通り、桂は本堂へ登る階段へと足を掛けた。

「待て！」

本堂の扉が開いて男が出て来る。

「何用か知らんが、早々にここから立ち去れ」

半着に紋はない。とは言え浪人でない事は袴の整え方を見れば判る。

「朽ちたとは言え、ここは寺院でございましょう？ お参りをするのに許可がいるのですか？」

につこりと笑った桂に、男が剣の柄掴んで腰から少し出して見せた。斬るぞと無言の威嚇をされたのだ。

「私を斬ると？」

男の後ろ側、本堂の暗闇にも数人の気配を伺う事ができた。

「ぞろぞろとむさ苦しい男が集まり、なんの悪巧みをしているのやら」

「貴様、何者だ!？」

その声で本堂の中に居た男達が戸口へと顔を出した。

「! 後ろの男は薩摩藩邸にいた奴だ!」

奥の男が叫ぶと、桂の肩が後ろへ下り、和奈の顔の横を剣閃が走った。

「お・・・まえ・・・」

相手に反撃する間も与えず、桂の剣が男の懷を斬っていた。

剣に付いた血を振り払った桂が階段を上って行くと、男達が中へと後ず去った。

「話を伺いたい」

暗闇へと入って行く桂に、和奈も剣を抜きながら戸口に倒れている男を飛び越え中へと入った。

剣を手にした三人の男の前に立っている桂と、右手奥に柄に手を添え身構えている藩士が居る。

「貴様、大久保の手の者か!？」

「答えて上げる義理はないね」

桂の剣気に圧され、三人の男は動く事ができず、和奈はすらりと抜いた剣の切っ先下に向け、藩士の方へと一步前へ出た。

「なにゆえ、我らを売る」

斜に構え、刃を上に戻す。

「なに、坂本の首は高く売れる、とだけ教えといてやる」

ざわっ、と気が揺れた。刹那、床を蹴った和奈の剣が振り上げられる。

「和太郎!？」

振り上げ太刀がかわされると、そのまま後ろに引いて藩士の腹へと和奈は躊躇いもなく剣を突き立てた。

「がっ・・・」

男の体から力が抜け落ちると剣を引き抜き、驚愕の面持ちで見ていた桂の方へと和奈が体を向けた。もうその目には”男”とそれが持つ”剣”しか映っていない。

「こいつ！」

桂から注意が逸れた事で、剣気の呪縛から解かれた男が和奈の方へ走り出し掛けた。「？」

男は自分の腕に感じた熱さに気付いて、足を止めると腕を見下ろした。

「がああああ！」

在るべき位置に、在るべき自分の腕は無かった。

「僕が行かせると思うか」

桂はそう言い、もう一人の喉元に剣を刺すと、引き抜き様にその横に居た男の首へ刃を払う。

「！」

殺気を背後に感じ、桂は横へ飛び退いた。

「おまえ・・・」

太刀を構えている姿に息を飲むのと同時に、和奈の剣が走った。

「我を・・・忘れているのか」

剣戟の音が本堂内に反響して行く。

「くっ・・・いい加減に・・・目を覚まさんか！」

桂は剣を押し出し刃を返し、峰で和奈の手首を打ち下ろした。

「っう！」

剣が落ち、和奈は手首を押さえて膝を付いた。

「あ・・・」

顔を上げた目の前に刃先が見え、そのまま刃を辿って視線を上げる。そこには怒気の混じった眼差しで自分を見下ろす桂の姿が在った。

「桂・・・さん？」

（なんだと言うのだこれは）

殺気を持って別人の如く人を斬った事に驚くしかなかった。身を守るためと武市に稽古を頼んだと言うのに、結果がこれでは人斬りにさせたと同様なものだ。

「敵味方の区別もつけられず剣を振るうは士として最低の愚行。いや、剣士と呼ぶに値すらせぬ！」

問うまでもなく、桂を斬ろうとしたのだとその言葉で知る事ができた。

戸口へ歩いて行った桂は、倒れている男の襟首を持つと中へと引き摺り込み、和奈を見る事なく、入口を指差して出て行けと指示した。

和奈が足を踏み出したその時、外で何かが落ちる音がした。

「まだ居たのか!？」

桂が走り出て行く後を追いかけて、寺の右側へと回ると、四つん這いで腰を摩っている男の姿が見えた。

「おまえも仲間か!？」

男が桂の声で顔を上げた。

「赤井くん!？」

桂は、えっ、と振り返る。

「知り合い、なのかい？」

桂はいつもの様子に戻っていた。

「えっと、あの、はい・・・」

「まさかとは思うが？」

「その、まさか、です」

厄介事ができたばかりだと言うのに、また一つ増えてしまったと額を押さえた桂は、艱苦するしかなかった。

「とりあえず、この場はおまえに任せよう。中で話しを聞いてくるから、絶対に来ないように。いいね？」

「はい」

後姿が角を曲がるのを待って、和奈は赤井へと向き直った。

「何がどうなってる？」

「赤井くんも来ちゃったのか」

「はっ？ 何訳の解んない事を言ってるんだよ。てか、ここ何処なんだ？ なんで太陽が出てんだ？」

「詳しい事は後でちゃんと説明するよ」

手にした剣を振って血を払うと、鞘へ納めて腰に差した。

赤井は土を見た。そこには黒い染みが点々と付いている。

今飛び散ったのは血だ、こいつは持ってた剣で人を、斬ったのか？

「おまえ・・・なにやってんだよ！」

「説明は後。ここでの私の名前は村木和太郎。その・・・女ではなく男だから忘れないように覚えておいて」

「はっ？」

「覚えてね！」

「解ったから怒鳴るな！」

「で、どうして赤井くんがここに居るの？」

赤井の姿はあの夜と同じ袴姿で、傍らには木太刀が落ちている。

その二つを持って考え出せる答えは、自分がこの幕末へやって来たあの夜、一緒に居た赤井も時間を越えてしまった、それしか無いように思えた。

「ここ？」

赤井は辺りを見回す。

「ここって、何処なんだよ。朔月さんは？ 俺、鍊兵館に居たんだよな？」

「それはそうなんだけど、ややこしい事になってるんだよ、私達「は？」

「時代は幕末、ここは元治元年の大津です」

一瞬、和奈の言った言葉の意味を理解できなかった。

状況が飲み込めない赤井の事よりも、和奈は本堂の方が気になった。気配を探ろうと意識を集中させても桂の気配は感じ取れない。

稽古を重ねる事により、幾分かは人の動きが判るようになって来た。とは言え、気配を自由に消せる桂の気を探るにはまだまだ修行不足という事なのだ。

「幕末って、坂本龍馬とか西郷隆盛とか新撰組の居る、あの幕末って事か？」

「うん」

「俺をおちよくって楽しいか？」

「だったら、ざまあみろ、って笑えるんだけどね」

「本当に、まじで話しをしてるのか？」

「大真面目です」

赤井は後ろに付いていた手を胡坐の上で組むと、じっと和奈を見た。

「でも、どうして赤井くんまでこっちへ来ちゃったんだろう」

「どうしてって、おまえが倒れそうになったから慌てて手を伸ばしたら、尻餅ついてたんだよ」

そしてその音を聞いて桂が飛び出し、和奈がやって来たのだ。

「巻き添えになったって事か」

時を超えようとしていた和奈に手を差し出した事により、赤井も時を超える羽目になってしまったのだ。そして同時に時を超えたはずなのに、二ヶ月経ってから赤井は現われた。

「僕がここへ来たのは二ヶ月前なんだ」

「一緒に着いたんじゃないって事は、おまえを見たら解るよ」

赤井は疲れたように顔を抑えた。

足音が聞こえ、振り返ると角から桂が姿を見せた。

「桂さん！」

心配そうに駆け寄ってきた和奈に、桂は険しい眼差しのままその額を小突いた。

「おまえの事は後で武市くんに聞くとして、そこに座って居る男はお仲間なんだね？」

「残念ながら・・・」

ふうっ、と長い息を吐く。

「ここに長居は無用だ。皆も心配しているだろうから、さっさと屋敷へ戻ろう」

道を取りながら、和奈はここが何時の何処なのかは話したと桂に伝えた。

「君はどう思いました？」

「どうって聞かれても、簡単に納得なんかできませんよ」

「道理だね。戻ったら取り合えず君の事を相談するとして、いらぬ事は口にしないと約束してほしい」

口調は柔らかかったが、拒めない気迫を感じ赤井は、はい、と答えた。

「時間が掛かり過ぎる」

武市はそう言い剣を手を取った。

「落ち着つきいや武市。出したがはおんしだとゆうがやき、もうちつくと待てないがか」

中岡はずっと姿勢を崩さない以蔵の傍に膝で這っていく。

「こんな武市さん初めて見る」

「あの馬鹿のせいだ。帰ってきたら、奴の頭を一発でも殴らんと気がすまん」

散散武市に当り散らされた以蔵は、本当に殴りそうな様子だった。「武市さん、やっぱりそっちの志向なのかな？」

拳を握り締めている武市を見る限り、中岡にはそうとしか思えなかった。

「気色の悪い想像をするな！」

そのやり取りが聞こえた武市は以蔵と中岡を睨んだ。

「はや当り散らすのはやめておけ」

「っ！」

そこへ桂の声が廊下から響いて来た。

武市と龍馬は慌てて廊下へ飛び出すと、前から来る二人を見て安

堵の息を漏らす。

「ただ今戻りました」

返り血を浴びていた和奈の体を、怪我をしていないかと武市が調べる。

「やっぱりそうなんだ」

うっ、と姿勢を戻した武市は、中岡に握った拳を見せた。

「すまないが、寺の片づけを頼みたい」

「俺が行ってきます」

これ以上、武市の不機嫌の解消道具になりたくなかった以蔵は、急いで部屋から出て行った。

「あ、俺も行ってきました!」

同じく矛先を向けられてはと、中岡も飛ぶようにして出て行ってしまった。

「坂本くん、晋作。ちょっと来てくれないか?」

武市に一瞥を投げかけた桂は、部屋から出て行ってしまった。

結果、二人きりとなってしまった和奈は困った。武市が怒っているのがぴりぴりと伝わって来たのだ。

「おまえは俺の弟子だ」

やはり怒っていると、姿勢を正す。

「今回出したのは、止むを得なかった事を忘れるな」

「はい」

意気消沈して縮こまってしまった和奈に、内心ではほっと胸を撫で下ろしている己がいる。

「で、どうなった?」

赤井の事もあるので、寺での事を話すのは桂を待った方がいいと和奈は思った。

「話を聞いたのは桂さんなんです」

呼ばれたのは龍馬と高杉だけなのも腑に落ちない。寺の件を話すなら場所を移す必要ないのだ。

「何か、あったのか?」

困った顔で俯いたが、それで誤魔化せる相手ではないのは承知している。

「僕、桂さんに斬りかかったみたいなんです」

武市の形相が青く変わった。

稽古の時と同じ事が起こったと聞くまでもない。行かせるべきではなかったと、武市は後悔の念に襲われた。

「分かった。話しは桂さんから聞こう。ともあれ、無事で良かった」
ふいに武市の手が頬に添えられてしまい、和奈は動けなくなってしまう。

「まったく。おまえも龍馬も、どれだけ俺に心配を掛けたら気が済むのか」

そう笑う武市の顔から、和奈は視線を外す事ができなかった。

高杉が真面目な顔で赤井を見ている。

一人ならいざ知らずもう一人未来から来てしまったのだ。いくら高杉が楽天家だと言っても笑って済ませられるものではない。

「けど、なんでこがーに人がほいほいここへ来るんじゃ」

「それが判ったら、気苦労しなくてすむんだけどね」

赤井は目の前に座す三人をじっと見る。

（坂本龍馬？ 桂小五郎だって？ 高杉晋作って奇兵隊を作った人だよな。てか、なんで村木がそんな偉い人物と一緒に居るんだ？）

歴史書に名を連ねる有名人が目の前に居る。時を超えたと和奈に言われても、信じる事ができないのは当然だろう。

「和太郎はいいとして」

「何がいいものか！」

その気迫に龍馬は苦笑いのまま肩を窄める。

「僕らの居ぬ間に何があったのか、ちゃんと聞かせて頂く」

「それは後だ小五郎。まずこいつの処遇をどうするかが先だ」

ああ、そうだった。と桂は赤井に向き直る。

「君は、僕達の事を知っているのかな？」

そう笑みを浮かべる桂はどう見ても女性だった。ついさっき名前を聞くまで、本当に女性だと思っていたのだ。

「あ、はい」

「では、これから何が起きて、どうなるかという事も詳しく？」
誤魔化しも嘘もこの人には通用しないだろう。

「一応。歴史は得意でしたから」

そうですかと桂が言うが早いのか、横に居た高杉が鞘に手に立ち上がった。

「斬る」

龍馬が慌てて高杉の前に立った。

「ちっくと待とうせ！」

「面倒だろうが、斬った方が早い」

事の展開に慌てたのは赤井も同じだった。

「おんしゃあ、男となると容赦ないがか」

「無論だ！」

龍馬は呆れるしかなく、桂は高杉の腕を引っ張り下ろした。

「どうしていつも、そう短絡的に物事を解決しようとするんだ、おまえは」

赤井は息を飲まざるを得なかった。

「じゃあ、こいつも置くのか？」

桂が彼が決めるだけだと笑ったので、高杉は黙ってしまった。

「坂本さん、俺よりこいつの方が怖いぞ」

言われるまでもなく、龍馬も桂の気質はよく理解している。

「和太郎は我が長州藩の者、という事になっている」

道筋を立てて話をすれば、桂は通じる相手だと赤井は思った。

「そして男として暮らしている。この二つを違えず、君が持ち得ている事を口外しないと約束できるなら、君の処遇も僕が預かろう」

「有利となる情報、だったとしてもですか？」

「有利不利は関係ない、口外するか否かだね」

雰囲気が一変し、背筋に冷たいものを感じて赤井は背筋を伸ばし

た。

「もし、万が一漏らしたら？」

すっと立ち上がった桂は、剣を抜き放った。

「この僕がおまえを斬る」

「やっぱり斬るんじゃないか！」

と高杉が怒りながら桂の横顔に怒鳴った。

龍馬は困ったと言わんばかりに顔を顰めるて赤井を見る。

「和太郎はここで生きると決めちゅう。おまさんにそれを勧めるつもりは毛頭ないが、いぬるまで桂さんとの約束を守ってはくれんか」
(帰らない？　なんでそんな事になってるんだ？)

「どうなんです？」

「俺に、選択権はありませんよね、この状況だと」

ええ、と桂は言う。問答無用の駆け引きに赤井の勝ち目はない。

「解りました。その約束、守ります」

「守らなくていいものを」

桂は高杉の頭に拳を振り下ろすと、両手で頭を抱えて転げまわる高杉をそのままに、剣を鞘へと納めた桂は赤井の前に再び腰を下ろした。

「本気で殴るか！？」

「僕はいつも本気だ。で、君の名を覚えてくれるかな？」

「赤井修吾と言います」

「宜しい。では今後は赤井修吾郎で通すこと。君は僕と晋作と共にここへ来た。これを忘れないように。ああ、あと一つ。くれぐれも和太郎の名前を言い間違えないよう気をつけてほしい。いいね？」

「初めて和太郎と会った日の様やき」

龍馬はあの時と同じく嬉しそうだった。違うのは高杉の行動だけだったのは言うまでもない。

「さて、皆の所へ戻ろう。和太郎の事を聞かねばならないからね」

頬に手を添えられたまま、じっと顔を見つめられていた和奈はど

うにも動く事がでず、とにかく何か理由を作って離れなければと焦っていた。

「た・・・武市さん？」

ふっ、と笑みを浮かべ、武市は漸く和奈の顔から手を離れた。

そこへ龍馬達が戻って来て、助かったと思ったのも束の間、桂の様子から緊張を解けない事を悟った和奈は、座る姿勢を崩す事ができなくなってしまった。

「ところで、武市くん」

尖った言葉に、武市は膝を揃えろと頭を下げた。

「まだ何も言っていないんだが、聞きたい事を解って貰えているように良かった」

「申し訳ありません。和太郎の件はすぐに伝ておくべきだったと、思慮の浅はかさを痛感しております」

桂、高杉が座り、その後ろに赤井が座った。

赤井と目が合ったが、どういう顔をすればいいのか解らず、和奈は視線を背けてしまった。

「わしからも、和太郎の事は桂さんに詫びないといかん」

「詫びる前に説明して頂きたい。あれは一体何なんだ？」

二人に頭を上げるように言うと、桂は寺での一件を伝えた。

武市の思った通り、和奈は我を忘れて剣を振るったのだ。

「あの抜刀には躊躇いも一切なかった。ただ人を殺める、その一点のみで振るった剣だった」

桂は眉間に皺を寄せたまま武市を見てから、驚いている和奈を見た。

「それは、わしも大久保さんも知っちゃうがよ」

「和太郎について何も伝えてはいない。大久保さんが止めずにおいたのも、致し方あるまい」

桂の驚愕が怒りへと変わった。

「だから、大久保さんはあんな事を僕に言ったのか」

「おまえに何と言ったんだ!？」

【己を制し力を己の物と成せ。成せぬなら、おまえは人斬りで生涯を終えることになるぞ】

「大久保さんまでも」

意に反して事態が進んで行く。道理を考え、最善を選んで策を練る桂にとつては好ましい展開ではない。

「で、おまえはそれをどう受取った？」

「我を忘れて刀を使ってるんですよ？ それって、ここに居る皆にも、刃を向けるかも知れない、そう言う事ですよね？」

「そうだね」

「なら、僕が刀を持つ以上、大久保さんの言う通り、受け入れてなくてはならないと思うんです」

誰も、桂さえも何も言わなかった。

「覚悟は、初めて人を斬った後にしました。だから、誰かを殺す剣ではなく、守る剣にしたいとそう思いました」

桂が刺すような視線を和奈に放った。

「どう綺麗に言葉を飾ったとしても、剣を振るう以上は人を斬るという事！ それに変わりはない！ 剣は盾ではなく人を殺める凶器だ！ それが解っているのか！？」

桂の怒声に、高杉が目を大きく開いた。

「はい」

意志を固めた眼差しを向て来る和奈の前に、短期間でこうも変わるものなのかと、桂は驚きを隠せなかった。

「桂さん」

二人の間に、武市が片手を付いて進み出た。

「和太郎が自分の進む道をと決めた時・・・これからの人生を共に背負ってみせると覚悟を決めた」

その言葉は桂にとって意外なものだった。人の目も憚らず、冷静沈着な武市が己を曝け出すなど予想もしていなかったのだ。

「虚礼ではないようだね」

桂に纏わり付いていた殺気が消えた。

「和太郎」

「はい」

「もう一つ確認しておくが、刀を捨てる、という選択肢はないのかい？」

「え？ 刀を？」

「なにも、無理して武士であろうとする必要はないのではないかと。ねえ、武市くん」

「・・・その選択肢も、あるとは思う」

桂が何を言いたいのか解った武市は顔を背けた。

「すいません。ぜんぜん考えてませんでした」

大きなため息を吐く桂は、和奈の頭をコツンと叩いた。

「解った。おまえが刀を持つと決めた意志、しかと聞き届けた。だが、先にも言った通り、敵味方無く刃を向ける者は剣士にあらず。きんこんいちばん緊禪一番、それを肝に銘じておきなさい」

うっ、と詰まる和奈を見て、桂はやれやれと優しい笑みを浮かべた。

「気持ちは今一度引き締め、覚悟を決めてかかる、という意味だ。語学の勉強も必要のようだな、これは」

すみません、と肩を窄めた和奈は、自分が知る子のものだった。

「おまえが残ると言うなら、僕がとやかく言う筋合いはない。迷わず決めた道を歩いて行くといい」

そう穏やかに語る桂の横で、高杉が疲れた表情を見せた。

「おい、いい加減に朝飯くらい食わせろ！」

元気がなく苛々しとしていたのは、そのせいだったかと龍馬が大きく笑いだした。

そこへ、片付けが終った二人も泥まみれとなって帰って来た。

「二人ともご苦労だったね。では、簡単に食事を作ってくれるよう伝えて来るよ。岡田くんも中岡くんも着替えて来るといい」

ついでに着替えて来ると、桂は部屋を出て行った。

「女装しちゅう桂さんも見ごたえがあったがやけど」

「あれが小五郎の十八番の一つ。」逃げの小五郎”と言われる所以が解ったか？」

誇らしげにそう言った高杉に、桂の事が大好きなんですと和奈は言った。

「気色の悪い言い方をするな和太郎！」

「そう見えます」

この餓鬼が、と首根っこを押さえ込む。

「じゃれ合わず、そこで居心地悪そうにしている者を紹介してくれないか？」

武市の言葉で、視線を向けられた赤井は緊張の度合いを深めた。

「こいつは和太郎の達だ。付いて来るなど言ったのに、付いてきやがった」

「赤井修吾郎といいます」

両手を突き頭を下げながら名乗る。

周囲の状況を見て取り、その場をどう対応すればいいのか把握している赤井を見て、和奈は感心するしかなかった。

「私は武市半平太と申す。そこに立っているのが弟子の岡田以蔵。その横ちっこいのが中岡慎太郎」

「ちよつと武市さん！　ちっこいは余計ですよ！」

「今更何を言うか」

「確かに中岡はこんまいが、ほりゃあ言うたらいかんぜよ」

「皆が人並み外れてるだけです！」

いつもの如く、ぎゃあぎゃあと言ひ合いを始めてしまった三人をそのままに、赤井が和奈の横へとやって来る。

「後でちゃんと説明しろよ」

「そうだね。上手く説明できるか判らないけど」

お京が膳を運んで来たので和奈が手伝いに立つと、高杉が赤井も手伝えと部屋から追い出してしまった。

「ほがな怖い顔はやめとうせ」

入口をじつと凝視していた武市に龍馬は囁いた。

「なにがだ」

低く抑えた声色で武市は言う。

「師弟関係と同じじゃ。一度出来た絆はそうそう壊れてしもうたりはしやーせんき」

ごつんと鈍い音がして、龍馬が頭を抱えて転がった。

「おんし本気で殴ることはないがやか」

「拳はいつも本気で出すものだ、坂本さんも殴り返してやれ！」

高杉と龍馬、武市の掛け合いは食事が運ばれて来るまで続き、膳が並び終える頃には三人とも気力を使い果たしてしまったので、静かな食事となった。

食事を終えた桂達は、これからの事を相談すると部屋を変えた。来るかと聞かれたが、気持ちを落ち付けたいと和奈は断り、縁側に赤井と並んで座って居た。

「どこでどう間違えてそんな事になったんだか」

桂に助けられ、龍馬達の世話になる事になった経緯を簡単に掻い摘んで話ただけで、詳しくは語らなかった。この時代に来たばかりの赤井には、理解できる内容ではないと考えたからだ。

「戻れるなら、赤井くんは戻った方がいい」

「おまえも戻れよ」

「残るよ」

そう言う和奈の顔に迷いは見えない。たった二ヶ月でどうしてここまで言い切れるのか不思議に思えた。

「やっぱり俺にはおまえが解かんねえ」

桂とどんな話しをしたのかと訊ねると、ある事を約束させられと答えが返ってきた。その約束を守らなければ斬り捨てると言われたとも。

「斬られなくても約束した事はきつと守るさ」

和奈の心配の種は一つ消えた。

あと一つ、消しさなくてはならない事がある。武市には教わらな

かったのに使う事のできた抜刀術だ。

大久保は抜刀を使いこなしてみろと言った。簡単にそう言われて出来るものではない。何も無い所で形のなすものを掴み取れと言われた様なものなのだ。どう己の物として剣を扱えばいいのか、さっぱり想像できなかった。

「毎日剣と向き合う事。心を剣に通わせる事・・・まずそれからか」「良く出来ました」

その声に振り返ると、桂が二人を見下ろしていた。

「基本はちゃんと解っているじゃないか」

「そうでもないです」

「何か、予感するものがあつたのかも知れない」

そう言った桂は、後ろ手に持っていた刀袋を差し出した。

「？」

「使ってもらおうと持って来たんだ。まさか、新しい人生への門出祝いになるとは思わなかったけどね」

受取った刀袋の紐を解いて布を下ろすと、見事な造りの柄が現れた。

「刀工源清麿殿が、渾身を込めて打った最後の刀と言われる【萩源清麿綾鷹】だ。帽子から伸びる刃文、互の目丁子の焼頭の揃いも申し分ない。平地の銀筋もまた、典雅といえる一品だ」

説明されたところで、剣の造りなど勉強した験しがない和奈にはとんと解らなかった。

固まっている和奈を見て、解らずともいいと付け加えた。

「源清麿殿は刀工で名高い方だ。萩に来た折に数本作刀され、この一本だけは持ち主が決まらぬまま、桂家の蔵に置き忘れられていた。蔵の掃除をした時に見つけたんだが、錆びれもせず刃毀も、錆の一つなかったので持って来た」

「そんな貴重な剣を頂くわけにはいきません。桂さんが持たれてた方がいいですよ」

余計な心配は不要と桂は笑う。

「人を斬るのは好まないが、僕にはこれがあれば十分だ」

腰に差す【鶴丸】と脇差【左行秀】のを指差す。

人を斬るのを好まない、と和奈の顔が曇った。

「心配無用。好まない、と言うだけで、斬らない、とは言っていないよ？ 銘を聞いた時におまえに譲りたいと思ったてね。手渡す経緯は不本意極まりないが、受け取ってもらいたい」

剣を鞘から抜くと、刃に光が当たり反射した。刃文とか言われてもさっぱりだったが、この剣が美しいと言うのは解った。

「で、受取ってくれるのかな？」

「はい。大切に使います。ありがとうございます桂さん」

「剣と心を通わせる。今おまえがするべき事はまずその一点。それに見合う剣を持って来て本当に良かったと思う」

そう言うのと、まだ話しの続きがあるからと、桂は廊下の向こうへ消えて行った。

赤井はたった二ヶ月の間に、どうやってあの桂から和奈が信頼を得れたのか気になった。

（まだ話してない事があるんだ。こいつはそれを俺に隠してる）

和奈は手にした剣をじっと見つめている。

「なあ」

返事はなかった。どうやら和奈は自分の世界に入り込んでしまっている様だ。

「おい！」

はっ、と横を向いた和奈は、怒り顔の赤井に両手を合わせて謝った。

「さっき話した内容だけじゃないよな？ 二ヶ月の間に何があった？」

「・・・簡単に説明できないよ」

「あの桂小五郎だぞ？ 怜悯冷酷と謂われた剣豪が、ぱっと現れた得たいの知れない奴を、こうも簡単に受け入れるか？」

「そんな事、僕に聞かれても知るものか」

雰囲気が変わってしまったている。男の格好だからではなく、内面的な性質が変わってしまったている様に思えた。

「とりあえず逗留は認めてもらえたんだ。考える時間も、話す時間もたっぷりある」

「そうだけどさ」

赤井の部屋の用意が出来たと、お京が知らせに来てくれた。

「ごめん。今は自分で手一杯なんだ。お京さん、こいつを案内してもらえるかな。僕は部屋に戻る」

はい、とお京は答える。

「とりあえずは、剣と向き合う事から」

手にした綾鷹に視線を落とした。

案内された部屋は六畳ほどで、行灯と小さな机が奥の窓辺に置かれている。

和奈が初めてこの時代の部屋を見て違和感を覚えた時と同じく、本来あるべき物のない部屋に赤井はため息を付いた。

「私は女中のお京と申します。何かお困りの事がありましたら仰って下さい」

「あ、ちょっといいかな」

はい？ と障子を閉めかけた手が止まる。

「和太郎の事、よく知ってる？」

お京は困った表情を見せた。

「京の藩邸に和太郎さんが来られてからなので、よく、とは申せませんが・・・助けて頂きました」

「助けた？」

京の町での事を赤井に話した。それが、和奈が初めて人を手に掛けた一件なのだ。

礼を述べると、お京は障子を閉めて廊下を戻って行った。

「人を・・・斬った」

振り払った剣から、地面に飛び散った血を思い出し、身震する。

ここは幕末、坂本龍馬や桂小五郎という著名人が、実写映画のよう動き回っている世界。人と人が斬り合う動乱の時代。

そんな所に残ると、和奈は言ったのだ。

「馬鹿かあいつは」

そうとは思えなかった。志士とどう過ごして来たのかまでは判らないが、好き好んで動乱に巻き込まれようとしている気が知れなかった。

其之四 捕縛

桂と高杉は取り乱すでもなく京で起きた顛末を聞き終えていた。

ほう、と桂がため息を吐く。

「多くの血が流れてしまった」

誰の姿もその目に入れず、桂は視線を泳がすのに任せたままそう
呟いた。

「こうなると予想していたのに、止める事ができなかった」

「その思いは中岡や武市さんも同じだろうが。済んだことを今更ど
うのこうの言っても始まらない」

顔を歪め、手を握り締めている武市と中岡を見て、消え入りそう
な声で、すまない、と桂は目を閉じた。

「今しなければならんのは、これ以上無駄な血を流させないために
は、どう動くか考える事だ」

「ああ。そうだ」

高杉は龍馬に向き直った。

「今回の件で、薩摩嫌いが助長するのは必至だ」

薩摩と長州の和解を推し進めたい龍馬にとって、同盟への足掛か
りがなくなる要因ともなる。

「薩長で和議を行う方向で僕も晋作も動いてはいるが、毛利公の説
得と、保守派排除に時間が掛かっているのは確かだ。だからと言っ
て足を止めるつもりはない」

「藩政の転換を計ると言うのか？」

「同盟の話しがなくとも、倒幕を掲げる以上必要な事だからね」

「藩論を討幕へと纏めるにしても、まずは眼前に置かれた厄介事を
片付けなくちゃあならん。そこでだ」

高杉が龍馬へと身を乗り出した。

「薩摩と長州の同盟締結に、再度動いてもらいたい」

「そのつもりでおるき、安心しとおせ」

「だが、今の状況で同盟を急いでも、上手く行くとは思えない」
武市の意見は尤もだもつとと高杉は言う。

「容易でないと百も承知している。だからこそ、下からの根回しが重要なんだ。官僚ばかりで話しを進めて手を結べたとしても、我々の真意が伝わらなければ皆は納得しない」

桂の言葉に強さが戻っている。

「俺も尽力致す事を約束します」

武市と龍馬に叱られても、最後まで共に戦いたかった無念は強いだろう。

「頼りにしているよ」

「大津まで来られたのは、その事を伝えるためなが」

「片付ける事が山ほどあると言うのに、自分の口から伝えると駄々を捏ねられてね」

「おい！ 誰が駄々を捏ねた！」

「和太郎の事が気になっていると判っていて、我俣を並べたのは何処の誰だい？」

叱るような目つきで高杉を見てから、武市にちらりと見た。

「まあ、僕の心配は不要だったようだけどね」

大久保と同じ、苦手な部類の男だと武市は思った。

「で、間者の件なんだが。君達が京を出るのを見つけた大垣藩の者が、この屋敷に回され来た藩士を道中で殺害し、摩り替わっていた」
「慎太郎が付けられた訳ではないのか」

「いや。間者が接触した男達だか、こちらは大垣藩の手の者だった。僕らがここへ来る前、京へ戻ろうと屋敷を抜け出した間者と、中岡くんを付けて来た男達は偶然出くわしたらしい。中岡くんに加え、君達もとくれば、彼らの欲を十分に膨らませるだけの価値はあるからね。報奨金欲しさに、彼らは全員を捕縛した後奉行所へ突き出す算段を立てたんだ」

【坂本の首は高く売れる】

あの男が言っていたのは報奨金の事だったのだと、和奈はやっと理解した。

「四人で報奨金を山分けする腹積もりだったか」

「だろうね。その腹黒い欲のお陰で、君達がここに居る事はまだ知られては居ない。が、油断するに越した事はない。次の逗留先を早々に決めておくことを提案する」

「長居するつもりはないき、心配いりやーせんよ」

「じゃあ坂本さん、同盟の件、よろしく頼む」

「任せておいておせ。この坂本龍馬が確かに引き受けちゅう」

それがものを頼む態度かと、桂は高杉の頭を押さえ付けながら一同に頭を下げた。

【毎日の稽古が無理でも、剣と向き合うことです】

朔月はそう言った。

剣と向き合い心を通わせる事は、言うほど簡単ではない。だからと、諦める事もまたできなかった。

綾鷹を抱き、壁にもたれていた身体を起こし庭へと下りて行く。

【いいかい、剣に心を委ねてごらん。そしたら剣は答えてくれる】

構えた手に伝わる剣の重みを感じながら、神経を刃から刃先へと集中させて行く。

晴眼の構えから、唐竹斬り。振り下ろした所から左斬り上。袈裟斬りした後、左薙から逆風突き。足を戻し、突き出した剣を鞘へ納めると、右肩を後ろへ引き、右足へ体重をかけてから地面を力一杯蹴り出し、左薙ぎへと払った。

空を斬る音が耳に届く。

手にした綾鷹は抵抗もせず、吸い付くように手の中に納まっている。

ざわっ、と微かに気が揺れた。

初めて人を斬った時と、以蔵との稽古、そして寺で感じたものだ。その気の乱れが一体何を意味するのか和奈には解らない。

揺らぐ心を抑え、平常心を保つ。

剣を振るっては、精神を集中させ心を落ち着ける。その繰り返しを和奈は幾度も繰り返した。

話を終え、一息入れようと縁側に出て来た武市達は、剣を振る和奈を眺めていた。

「こりゃあーさぼっておれんなあ、以蔵」

「ふん！ 青二才にこの俺が遅れを取ると思うのか」
不機嫌極まりない顔で以蔵は腕を組んだ。

「その青二才に、一本取られかけたのは誰だ？」
叱咤の声に、以蔵は口を噤んだ。一本取られたと思ったのは確かなのだ。

「鳶が鷹になるのか」

腹ばいになっている高杉は、楽しそうな様子で庭を見ている。

「いきなりそこまで化けるものか。まあ、剣客としては一人前に育ちそうだけどね」

「んじゃあ、一丁俺が相手になってきてやる」

そう言って起き上がろうとした高杉の耳を桂が引っ張った。

「痛いだろうが！」

「これから帰らなくてはならないんだ。そんな時間などあるものか」

「ゆっくりせられんか」

後片付けや懸念材料が他にもあるからと、高杉に念を押し桂は部屋を出て行った。

「仕方ないな。坂本さんに長州の端っこを任せるんだ。しっかり頼むぜ」

「高杉くんの頼みやき、大船に乗ったつもりで居とおせ」
小船だと撃沈だからなと笑い、庭で稽古している和奈の方へと歩いて行く。

「和太郎！」

構えを戻し、歩いて来る高杉の所へ駆け寄る。

「話は終わったんですか？」

「ああ。退屈だし欠伸が出まくるし肩も凝ったぞ。気分転換に稽古でもつけてやろうと思ったんだが、小五郎が帰ると言うからしてやれん」

「もう帰るんですか？」

うん、と頷く。

「そうですか・・・」

淋しそうに視線を落とした和奈の顔を、屈んで下から覗き込む。

「そんな顔するな。次に会うまでもっと腕磨いとけ」

「はい」

桂や高杉と、ゆっくり話す機会を作れなかった。最初に会った日も話しどころではなく、薩摩藩邸に移ってから大津に来るまで会う事もなかった。久しぶりに会えても、間者騒ぎと赤井の登場でばたばたと時間が過ぎてしまった。

「淋しいなら、一緒に長州へ帰るか？」

「いえ！ まだここに・・・皆さんのところに居たいと思います」
皆ではなく誰かだろうと、高杉は舌打ちしながら立ち上がった。

「面白くねえ」

「ご、ごめんなさい」

ごつん！ と和奈の頭に容赦なく拳を落とす。

「ったあ！」

「おまえがやりたいという様にすればいい。だが忘れるなよ、俺や小五郎も居るって事をな」

乱暴だが、優しい言葉に視界が緩みそうになり、和奈は顔を伏せた。

「幕府を打っ倒した後なら、長州見物に引っ張り回せたんだがな。来る時を間違えたな！」

白い歯を見せ、自分で殴った和奈の頭を優しく撫でた。

「次会うまでに死んでやがったら、地獄まで追いかけて行って、もう一発殴ってやるからな」

「まだ死にたくないですよ」

まだ、か。

高杉は帰るぞと言って歩き出す。

「見送ります！」

目を擦りながら、高杉の背中を追って走り出した。

西近江に土佐藩士平井収二郎と、間崎哲馬、弘瀬健太の三人が入ったのは、桂達が屋敷を発った翌日だった。

「どこか宿を取って足取りを調べるか」

「町にはおらんぜよ、あの人は」

「土佐弁はやめとけ、どこに耳が潜んでいるか知れたものじゃない」
平井が辺りを見回しながら言った。

「すまんすまん。では、まず逗留先を見つけよう」

町の端にある小さな宿を選ぶと、間崎が玄関へと入って行った。

「周りを確かめてくる」

弘瀬は宿の妻側へと入って行く。

幕府の手が延びていた事もあり、宿の位置と逃げ道を調べておくのは、土佐を経ってからの常套手段となっていた。

「宿は空いていたから部屋をとっておいた。ついでに聞いたが、ここから先に家はないそうだ」

「なら尚更、隠れるにはいい」

弘瀬が戻って来ると、通りを確認してから三人は宿へ入って行った。

いつもより早く目が覚めてしまった和奈は、着替えを済ませ朝靄が残る庭へと出て剣を振っていた。

「久しく稽古をしてなかったな」

「！」

振り返った先に、竹刀を手にした武市が立っていた。

「武市さんも桂さんも気配なさ過ぎです」

「おまえに悟られるようでは、この首が幾つあっても足りぬ。さあ、竹刀を構えろ」

武市は型から組み手まで、和奈の動きに一つ一つ指示を入れて行く。

相手の一挙一動に神経をやり、己の体に隙が出来ないように、無駄な動きを一つでも多く無くさなければならぬ。隙を作ると言う事は、相手に一撃を出す機会を与える事に繋がる。技を磨くと共に、精神の鍛錬も必要不可欠だと語る。

「抜刀は気の鬩^{せめ}ぎ合いだ。故に油断と躊躇は己を滅ぼす要因となる。腕の立つ者と対するなら尚更の事、相手を一撃で制す気構えが必要となる」

一撃の言葉に沖田総司の顔が浮かんだ。気圧される事なく、太刀を抜く事ができるようになるのだろうか。

「武市いー！」

背後から突き刺さる視線と共に、龍馬の声が響いた。

（しまった）

朝食の準備が整うまでと来たのに、稽古に集中し過ぎた様だ。

「朝餉の用意が出来たらしい。戻るぞ」

「あともう少しだけ」

一人で戻っては龍馬に何を言われるか判らないと、無言で和奈の襟を掴み引きずる様にして部屋へと戻って行く。

「おお、ようよう来たか。お腹が空いて死にそうじゃったが」

膳を前にして悲しそうな顔で座っていた龍馬は、二人が入って来るとそうばやいた。

「先に食べていれば良いだろうが」

「そうはいかん。頑張っちゅう和太郎を見捨てて、先にご飯が食べ

れる訳がないじゃろ」

うっ、とご飯に箸を運んでいた中岡と赤井の手が止まる。

「食事時にちゃんと来いや。こっちも心配でおちおちご飯も食べれんから」

「すいません。これから気をつけます」

「けれど、武市も悪りいぜよ。なかなか戻って来ないんやき、腹の虫が暴れてはやちつくつとで飛び出すところじゃったが」

俺のせいかと唸ると、龍馬がそうだと食って掛かる。

「いい加減にしてください。それじゃ和太郎も気にして食べれないじゃないですか」

そう出れば二人が止まると心得ていた中岡は、箸すら手にしていない和奈を指差しながら言った。

「すまんすまん。じゃー、しゃんしゃん食べてしまうぜよ」

箸を取ってから、そこに以蔵が居ないことに気が付いた。

「岡田さんはいいんですか？」

「町に出している」

中岡ばかりか自分達までもが付けられ、万が一を考えた武市は、幕府の者が町に来てないか調べると以蔵を町に出した。

「一人で大丈夫なんでしょうか」

「いらぬ心配だ」

確かに以蔵の腕は立つ。それは稽古をつけてもらって居る時に見知っているが、寺での一件は和奈の不安を増長させるのに十分な出来事になっていたのだ。

暗い影を落とした横顔に、和奈を出してしまった事への後悔が湧き上がる。

「そんな顔をするな。おまえが気に病んだところで、出したものは仕方あるまい」

「解っているんですけど・・・すいません」

「この先以蔵を出す度にそんな顔をされては、出すものも出せんではないか」

頷いて、和奈は何か思いついたらしく、武市に顔を突き出すように身を乗り出した。

「駄目だ」

「っ・・・まだ何もいつてないのに・・・」

おまえの考えなど直ぐに解ると言った武市に龍馬が食いついた。

「わしにゃ解らんけんどな、のう慎太郎？」

何を言うかと睨まれた龍馬は、横の中岡を肘で小突いた。

「俺に振らないで下さい。もう武市さんの趣味には口出ししないと決めたんですから」

「趣味？」

興味があると言わんばかりに赤井が会話に参加して来る。

「なんだか面白そうなんですが」

「駄目だよ赤井くん。斬られたくなかったら、この話しに首突っ込んで駄目」

箸を握る武市の手がわなわなと震えた。

「おまえのせいだからな、龍馬！」

一刻ほど丹念に町のあちこちを調べまわった以蔵は、その足を町外れへと向け歩いていった。

所々で見かけた武士は半着に佐野藩の紋を付けた者ばかりで、幕府から触書が来て出歩いている様子も見受けられなかった。監視も警戒も京よりはましに思えたが、だからと安心はできない。堀田は江戸幕府若年寄を勤めていた人間だ。今は亡き人となってはいるが、幕府側には変わりはない。

近江に佐野藩士が居るのは近江堅田が佐野藩の飛び地であるためだ。元禄十一年三月に佐野藩主だった堀田正高がこの地へ移封され、堅田藩を立藩したが、文政八年十月になって五代目藩主堀田正敦が、藩主として佐野へ移封となったため、堅田藩は廃藩となり、堅田藩

滋賀郡領はそのまま佐野藩が管轄する事になった。

浪人風情も何人か居たが、注意を向けてくる気配はなく、こちら
も気にする事はないと思えた。

「おまえ、岡田か？」

背後から声を掛けられ、即座に柄へと手を伸ばす。

真昼間に往来の多い町中で、まさか名前を呼ばれるとは思わず、
気配を悟るのが遅れてしまった。

「わしじゃ」

顔だけを後ろに向けた先に、見知った顔あった。

「平井さん？」

土佐者が近江に居る事を訝しむ間もなく、ついて来いと身を翻し
た平井の後を追った。

部屋で暑さを凌いでいた二人は、以蔵を見て、ほら居ただろう、
と嬉しそうな顔ず出迎えた。

「弘瀬さんに間崎さんまで。でもどうして大津に居るんですか」

ここへ来たのは大久保の指示だ。その大久保が面識のない平井達
に居場所を教えるはずはない。

「ちつくと用があつたき、おんしらを探しよつたがけんど、なかえ
か見つからん。どうしたもんか困ちよつたら、中岡を見つけたんだ」

「中岡に伝えとおせ。尾行ばあしつかと撒きーやと」

嬉しそうにそう言う平井を見て、以蔵は顔を片手で覆った。

「何をゆうちゅう、しだで撒かれたのはどこのどいつなんじゃ」

弘瀬が揚げ足を取ったものだから、平井は苦虫を食べた表情にな
ってしまった。

「三人一緒じゃったがだ。同じことじゃ。後を撒かれてしもうたが」
「なすり合いは後に願えませんか？ 間崎さん、なぜ俺達を探しに
京へ？」

「武市さんに会うためじゃ」

「・・・・・・」

「居場所を知っちゅうなら、連れて行ってくれんか」

「直ぐにでも会って伝えねばならん事がある」

だが以蔵は無言で視線を畳に落としたまま動かない。

「頼むからわしらを武市さんの所へ案内してくれんか」

「おんしが此処におると言う事は、ねきに武市さんがおるという事やき」

同じ土佐の人間とはいえ、そう簡単に案内など出来ない。この三人として付けられていない保証はないのだ。

「まず、会うかどうか聞いてきますから、しばらく時間を下さい」

三人は顔を見合わせた。

「そうならじき聞いて来てくれんか」

頷き、立ち上がるうとした以蔵は身を固まらせた。空気を伝ってくる嫌な気配に気付いたのだ。

「・・・平井さん、付けられたな」

その言葉で三人も剣を持つと窓、戸口へと走った。

「くそっ・・・囲まれてる」

以蔵は、そう言いながら剣を抜いた。

夕刻になっても以蔵は帰って来なかった。

「何かあったがやろか」

縁側座っていた龍馬が独り言のように呟いた。

「様子を見てくる」

「僕も行きます」

「来るな」

その言葉に反論できず、和奈は座り直した。

「一刻（二時間）経って戻らなければ、龍馬、ここを發て」

縁側に座る龍馬にそう囁いて、武市は廊下の向こうへと消えた。

「武市さん、大丈夫ですよね？」

胸騒ぎを覚えた和奈は、戸口ら顔を出して武市が消えた廊下を見る。

「武市はそう簡単に斬られやせんから心配しな。以蔵のことやき、きつといい女を見つけて道草くちゅうんじゃ」

女？ と和奈ばかりか赤井まで口を揃えて言った。

「感心ないように見えるだろ？ ところが以蔵は女子に目がないんだよな、これが」

中岡の言葉に二人が振り返った。

「はい??」

「って、女ったらしってことですか？」

「以蔵も立派な男だ！ 岡場所にも行くし、女子にうつつをぬかす事だってある！」

「岡場所？」

「あら？ 和太郎は知らないのか？ 綺麗なお姉さんが一杯居る所だぞ？」

「一杯!？」

「そうそう。行きたいと思うだろう、普通」

と言われても、女の身なのだから行きたいと思うわけではない。が、中岡の様子から、その内連れて行かれるのでないかと不安を覚えた。

「龍馬さんも岡場所は好きですよね」

和奈の驚いた顔が焦っている龍馬に向いた。

男性なのだから、女性と浮いた話しの一つくらいあっても不思議ではない。と、武市の顔が浮んで和奈も焦ってしまった。

「中岡、おんしいらん話をするががやない」

武市の頼みで出た以蔵が、用も終えず道草などするはずがない。和奈の気を紛らわせようと急場しのぎに振った話しが、藪から蛇になっちゃったと、龍馬は苦笑を浮かべる。

「そうそう、赤井くんも剣術を習っちゅうと聞いたが」

「あ、はい。まだ切紙ですが」

気を緩めていた赤井は、突然話しを振られて背筋を伸ばした。

「慎太郎、ちつくと茶を頼む」

「解りました」

部屋を出ていたのを見届けると、縁側から部屋の中へと入って来た。

「ちくたあ腕が立つようやき。けんど真剣は振るった事はないがか」

「ありません」

「なら、あえて持つ必死はないき」

ちらりと和奈へ視線をやる。

「僕もそう、思います」

ムツとした表情のまま、赤井は身を乗り出した。

「村木よりは腕が立ちます！」

「わざわざ持つ事はないと言ってるんだ！」

納まらない不安感に苛立ちを覚え、和奈はつい声を張り上げてしまった。

「おまえに言われる筋合いはない！」

「まてまて、喧嘩はいかん、喧嘩は。二人ともちつくと落ち着きーや」

お互いに背を向けてしまったその間で、龍馬はやれやれと膝を叩いた。

「赤井くんは、剣を持つ事にどがな意味を持ちちゅう」

「意味、ですか？」

考えた事もない質問に、赤井はすぐ答えを見つけられなかった。

「和太郎の帯刀を止めようと思えば出来た事けんど、わしらが不甲斐ないばかりに剣を持たせる事になってしまった」

「違います。龍馬さんの責任じゃありません」

「違いはしやーせん。けんど和太郎は自分の頭で考え、その目で見てそれを良しと心に決めた。責任があるからこそ、武市は剣の使い道をこの子に教えちゅう」

桂といい、武市といい、剣術に長けた者がなぜ和奈にそうも拘るのか、赤井にはさっぱり分からなかった。

「剣を持つとゆう事は人を斬るとゆうことだ。腕が立つ立たない以前に、持つ心構えがいるちや」

赤井には答えを出せる経験がまだこの時代ではない。ないが、女である和奈が剣を持っているのに、男の自分が持っていない事に納得が出来ないのだ。

「人を斬る心構えですか？」

和奈の手がぴくりと動いた。

「阿呆な事をゆうな。人を斬る心構えなんぞ必要ないき。ただ人を斬りたいばあとゆうのなら、持たせる訳にゃいかん」

お茶を持って戻って来た中岡は、一変して暗い空気になってしまっている三人を見て、眉を寄せる。

「また何かいらん事を行ったんですか、龍馬さん」

「容赦がないがか、おんしは」

「だって、この雰囲気、どう考えても龍馬さんが何かやらかしたか言っただけ」

途中で言葉を止めた中岡は、茶を乗せたお盆を畳に置き、自分の剣を取ると障子へと近づいた。

「どうしたんですか？」

「しっ。静かに。誰か来た」

人差し指を口に当てそう言うのと、左手に持った来た剣の鯉口を切って身構えた。

「お寛ぎの所、失礼致し申す」

近づいてきた気配が消え、静かな声が響いた。

「某は中村と申します。大久保さあから仰せつかい参いりもした」
障子が少し開き、顔が中を覗いた。

「半次郎殿か」

「御意」

中へと促されて姿を見せた半次郎は、入って直ぐの所へ座ると、失礼致します、と頭を下げた。

「大久保さんからは、一体またどがな用向きで来られたがかえ」

「は。先日、京からこん町へ侍が入ったはずです」

「ああ。招いたわけじゃないが」

「そんな侍とは別に、土佐から来た者も三名近江に入っというもす」

「土佐から？」

「おんし、付けられ過ぎじゃ」

「いえ、中岡さあにな途中で撒かれておいもす。そんな者達よい厄介な者が土佐から来ておいもす」

龍馬と中岡は顔を見合わせた。

「岡田さあは捕縛され、身柄は元堅田陣屋に置かれておいもす」

「捕縛だって!？」

「土佐にか!！」

「はい。吉田東洋縁の者だと大久保さあはゆておいました」

吉田の名前を聞たところで龍馬が激昂して立ち上がり、中岡の顔も厳しいものになっていた。

吉田東洋とくれば、土佐藩士が目的とするのは武市に相違なく、半次郎が言うように厄介な相手と言えた。

「もうすぐここへ大久保さあも来られもすで、それまで待つて下さい」

体を震わせていた龍馬は、拳を握ったままどすんと腰を落とし、自分を落ち着けるように大きな息を吐き出した。

「大久保さんまでも来ちゅうのか」

「町に入った所で分かれ、おいは一足先にこっちへ伺おいもした」

「土佐の人って龍馬さんの身内なんですよね?　なんで岡田さんを捕まえるんですか!？」

稽古に時間を費やし、武市や桂の事を詳しく尋ねる機会を逃していた和奈にとって、疑問しか頭に浮ばなかった。

「尊王を捨て、藩政改革と佐幕を唱えた吉田殿を敵対とした者によって、暗殺されてしまうた」

土佐勤王党が関わっているだけに、龍馬と中岡にとっても他人事ではない。

「けんど、以蔵は手を出しとらん・・・ほき、大久保さんが動きよったがか」

暗殺を実行に移したのは安岡嘉助、那須信吾、大石団蔵の三人である。

安岡と那須の二人は、天誅組の変と呼ばれる戦にてすでにこの世にはなかったが、大石は暗殺事件の後に土佐を脱藩して久坂の元に身を寄せ、今は薩摩藩士の養子として薩摩藩に居るのだ。

もし捕まった者が三人の名を知っており自白されでもしたら、大石の所在が明るみ出る。そうなれば薩摩にとって厄介な火種となり、土佐藩との確執を生む事態となってしまう。

それを懸念した大久保が手を講じるため大津に来たのだ。

「今お二人を失う事は今後の事いも影響すうだろうと、大久保さは言ておいもした」

気が乱れた和奈の腕を、龍馬は慌てて掴んで引き寄せた。

「落ちてつかんか、この馬鹿もんが！」

機械仕掛けの人形の如く動く和奈の目が、龍馬の顔を捉えた。

「・・・はい」

これでは武市が捕縛されていたら、止める事は叶わぬだろう。どうしたものかと龍馬は苦慮せざるを得なかった。

刻々と、ただ時間だけが過ぎて行く。

太陽が地平線へと堕ち、辺りに闇が広がり空に星が瞬き始めた頃、ようやく大久保が姿を見せた。

「大方の事情は半次郎から聞いたな？」

「しっかりと聞いちゅう」

「中岡くんが付けられたと新兵衛から聞きいて、足取りを探らせていたら土佐藩まで出てきたじゃないか。一体なんの冗談だと思ったが、京にある土佐藩邸の動きも妙だったゆえ調べさせた。公武合体を唱える山内公が後藤象二郎に圧され尊王攘夷派の弾圧に動いたからだ」

山内というところで龍馬の肩がぴくりと動いたのを、和奈は見逃さなかった。

「この期になって土佐勤王党への圧力か」

それだけならまだ手の打ち様があるが、と大久保は渋面を作る。

「後藤くんが、吉田東洋候の親族に対して土佐勤王黨員への捕縛許可を出した。故にわざわざこの私が来てやった由だ、坂本くん」

吉田の暗殺に携わったものが薩摩に居るとなれば、土佐藩との政治的摩擦を生む要因となる。

「京に潜伏している者達にもいずれ手が回るのは必至。そういう状況の中、中岡くんの登場だ。その影に必ず君達が居るだろう事は馬鹿でも思いつく。ここまででも難儀だと言うのに、土佐から来た馬鹿者三名が、同じく中岡くんの動向を探り出し途中まで付けた。撒かれたらしいが、行く先なぞ近場の町につけばおのずと知れよう」

「三人は、土佐の事を伝えるに来たが」

「だろうな。で、捕縛目的の土佐者は、その三名と岡田くんが接触した所へ踏み込んでいる」

「くっ！」

今や中岡も飛び出さんばかりの姿勢になってしまっている。

「捕縛された岡田くんの身柄は佐野藩本陣に在るが、近日中に土佐藩へ引き渡され送還されるのは必至だろう」

「佐野藩に協力を仰ぐことで、土佐は幕府に対して面子を保とうちゅうがか！」

「武市さんは！？ 武市さんは無事なんですか！？」

「五月蠅い奴だ」

袖に腕を入れて顎を少し上げ、和奈を見下ろした。帰ってこない身を案じる以上、止めても出て行だろうと言う事は判った。どうせ行かせるのなら、講じた策を説明してから出したほうが懸命だ大久保は判断した。

「町に出たところで土佐藩士に捕まっている」

言葉が終った瞬間、龍馬は和奈を懷に抱えると掴む手に力を込め

た。

「上士の武市くんを即座にどうする事はないだろう。しかし、吉田殿の件を持ち出しているのなら、岡田くんの方は」

待て、と龍馬が手で大久保を制した。

「岡田さんと・・・武市さんは、どうなるんですか？」

武市は切腹、以蔵は獄門の上斬首だなどと口が裂けても言えない。
「龍馬さん！」

沈痛な表情で自分を見ている皆を見れば、二人の身になにが起こるか大方の予想はついた。

「行きます！！」

「ちつくと待たんか！」

「行かせて下さい！」

手から逃れようともがく和奈を離すまいと、龍馬は掴んでいる手に更に力を込めた。

「静かにせんか！」

ふん、と大久保が鼻を鳴らし、暴れるのを止めた和奈に座れともう一喝した。

「そうやって飛び出す愚か者と知っているが故に、私が直々に説明してやる。だから馬鹿な頭を冷やして話を聞け」

大久保は紙を貸せと中岡に言う。

「佐野藩邸の大まかな見取り図を用意してやる。行くのは小僧と半次郎の二人。詰めている人数は多くて二十というところだ。手引きは潜入している者にさせる故、裏口から入って行け。いいか小僧、その後は半次郎の指示で動け。そこまで面倒は見切れぬからな」

「わしも行くぜよ、大久保さん」

俺もと中岡も身を乗り出すが、大久保は手を振った。

「何の為に私が苦労していると思っっているんだ、君達は絶対に出るな」

「しかし！」

「半次郎は薩摩自慢の剣士だ、二十名如きに遅れは取らん。小僧の

方は少々心配だがな」

そう言って不安そうに眉の端を下げる。

「行けます！」

はいはい、と書いた見取り図を二人に見せ、建物の位置を説明して行く。

「ちょっと待って下さい、二人って、そんな無茶な」

ん？ と見知らぬ男に一瞥をくれる大久保。

「坂本くん、誰だこいつは」

表情が一瞬にして冷たいものになり、赤井は身を引いた。

「ああ、赤井くんは和太郎の知り合いやき」

頭の天辺から下へと視線を移して行く。

「腕はあるのか？」

「いやあ、いかんと思うぜよ」

「なら黙っている」

見下したものの言い方に、赤井は頭に血が上ってしまった。

「これでも心形刀流切紙だ！ こいつよりは腕が立つ！」

呆然とした大久保は、赤井をしばらく見つめた後、大笑いを始めてしまった。

「心意気だけは立派なようだな。では聞こう。おまえ、これまで何人斬ってきた？」

えっ、と押し黙る。

「ないのか？ なら話しにならん、やはり黙っておけ馬鹿者が」

カチンツと頭の中で何かが割れる気がした。

「落ち着かんか赤井くん。こりゃあー稽古でもなんちゃーないんやき」

「だからって、村木が行くのに俺だって！」

やれやれと、大久保は腕を組んだまま立ち上がると赤井の前に立った。

「斬られる覚悟はあるか？」

腰に差した剣を抜き、赤井の横に振り下ろす。

「芝居小屋で捕り物語を観るのは訳が違う。斬られれば痛いし血もでる。無論命の保証はない」

「大久保さん、喉^{けしか}けてどうするが」

「馬鹿は口で言っても解らなんだろう。ならば少し斬ってやれば思い知ると言うものだ」

そう言った大久保に、慌てて龍馬と中岡が止めに入る。

「いかん、いかんぜよ！」

「剣を納めて下さい大久保さん！ 赤井くんも言葉に気をつけろ」
睨んだままの赤井、口の端で笑う大久保。

「和太郎、おまえはどう思う」

急に振られても言葉がすぐに出てはこないが、自分より腕が立つのは確かである。

「剣を持たせるのは・・・」

その言葉にとうとう赤井が切れた。

「おまえが言えた事か！ 組太刀すら先生に認めてもらっていないのに、なにを剣士ぶってる！」

言い返すことはできなかった、赤井が語った事は事実なのだ。

「もういい、好きにさせたまえ坂本くん。馬鹿は死なねば治らんと言うじゃないか」

「でも！」

和奈は行かせたくなかった。

「攪乱には丁度いいだろう」

捨て駒、そういう位置づけしをされ赤井はさらに怒気を高める。

「決行は今夜半。佐野藩邸への道は半次郎が知っている」

そう言う大久保は終りとばかりに、剣を鞘へ納めると部屋を出て行ってしまった。

「時間になったら迎えに来ます。それまでは休んでおいて下さい」

戸口に座ったまま終始顔色も変えずにいた半次郎が、では、と部屋を後にしたので、ため息をついて腰を下ろした龍馬は、難儀そうに赤井を見た。

「大久保さんに噛み付くとは、おんしはわしの寿命を縮めたいちゅうがか」

「俺も寿命、縮まった」

中岡はどつと疲れた顔でその場に寝転がってしまふ。

「連れて行く訳にはいかない」

まだ言うかと声を荒げる赤井を睨みつける和奈。

「捕まったら、赤井くんは皆の事を絶対に喋らないと約束できるか！？」

「捕まる前提で話をするな！」

「剣を持つなど、僕に言えた義理じゃない。僕より実力があるのは事実なんだから！　だけど、僕が心配なのはそれじゃなくて、捕まった時なんだ！」

「じゃあお前は喋らずに死ぬってか！？」

「絶対に喋らない！」

その声は凜としていて迷いなど感じられなく、赤井は押し黙るしかなかった。

「縁起でもない事で喧嘩をしな」

半次郎と二人で出すのも、捕まる事態にもなって欲しくないが、このまま武市と以蔵を見捨てる事もまた龍馬にはできない事なのだ。
「約束してやるよ」

「なんで龍馬さんの周りには頑固者しか集まらないんだろう」

そう言うおまえもだろうと龍馬が笑う。

「わしらの若い頃も、こうじゃったがか」

十分、龍馬もまだ若い。本当にこの人はと、和奈は笑みを浮かべた。

「連れて行ってやれ和太郎。おんしがそうじゃった様に、現実を見るうてはなんちゃあ見えんし、考える事も出来ん」

ここに来てしまった以上、戻れるという可能性は皆無だろう。それは赤井も同じであり、自らの道を選ぶのも赤井本人なのだ。

「僕ができる恩返しって……このくらいしかなくて……」

膝の上で握った手に涙が落ちる。

「恩返しがほしゅうて、おんしの世話を引き受けた訳がやないき」
大きな手が頭を撫でた。始めて会った時も頭を撫でてくれたのは
龍馬だった。

龍馬も中岡も、和奈に任せるのではなく、今直ぐに飛び出して行
きたいのが本音だった。

「きっと助け出します、武市さんも岡田さんも」
うんうん、と頷く龍馬の肩に頭を寄せた。

其之一 救出

夜四ツ半（午後十一時）。

半次郎と和奈、赤井の三人は屋敷を出て暗闇の中町へ続く道へと向かった。

捕縛後、以蔵は手枷足枷をされて一刻の間鞭打ちとなり、平井達とは別々の牢に収監されていた。

肘を付いて上半身を起こそうと力を入れたが、体中に激痛が走り、起き上がるのは無理とうつ伏せの体勢に戻る。

問われたのは、吉田東洋暗殺に関わった者の名だ。大津でその名を聞くとは考えて居なかったが、土佐弁を喋る男達に捕縛された事で、土佐藩が動いたのは明らだ。

暗殺者だけでなく、必ず武市や龍馬の居所も聞くだろう。平井達に居場所を告げずにおいたのは正解だった。

自分の帰りが遅ければ、武市は大津から出ることを考えてくれるはずだ。平井達がどこまで耐えられるかは予想できないが、それまでの時間は耐えてほしいと願うだけだ。

音を立て、戸が開いたので、痛む体を無理に起こし、戸口に視線を投げた。

「っ！」

戸を潜り入って来たのは、後手に縛られた武市だった。

驚愕の面持ちで絶句する以蔵に気づいた武市は、牢の前を通る間際、小さくにやりと笑みを浮かべた。

「中へ」

半ば突き飛ばしながら武市の背中を押した男は、鍵をかけ非番がどうのこうのと、ぶつぶつ言いながら牢屋を出て行った。

「ドジを踏んだものだな」

「申し訳ありません、注意を怠りました」

以蔵は自分を責めながら、悔しさに唇を噛み締めた。

「今言ったところでこの始末だ、気にするな」

壁に凭れ、背中の痛み顔に顔を歪める。

帰りの遅い自分達が捕まったと知れば、感情の抑えがきかない和奈の事だ、龍馬の制止も聞かず飛び出そうとするに違いない。是非でも止めてくれと武市は祈った。

「他の三人は別の牢か」

そう呟いた時、外から悲鳴ともいえぬ絶叫が響いた。

土佐勤王党が絡み、尚且つ吉田暗殺の実行犯を探しているとなれば、山内の許可を取り付けた後藤が動いたのは確かと思えた。吉田の暗殺は、甥の後藤にとって許しがたい逆藩なのだ。

だが、平井達は喋るまい。否、名前を知らないのに喋れないのだ。それは加担していない以蔵も同じだった。

しかし、後藤が動いているなら、知らないでは済まず、より酷い追求を受けることになるのは明白だ。

藩主山内豊熙の死去に伴い無役となった吉田が、その後藩政に復帰し改革意見書を建白した事に遡る。

意見書に記されている門閥打破は、武市の思想に適うものだったが、尊皇攘夷を唱える土佐勤王党にとって開国貿易はならない改革だ。

強行に幾つもの改革を急進させようと動く吉田の存在は、土佐勤王党のみならず門閥勢力の反感も招いていた。もはや論議で意見を変えさせるのは無理至極と考えた土佐勤王党は、その打開策として吉田の暗殺を実行に移したのである。

最後に見た顔は不安気だったと、武市は目を閉じ微笑んだ。

京へ戻ると言う大久保を、話しがあると龍馬は引き止めた。

「珍しいな、坂本くんのそんな顔は」

座布団から後ろへ下がり、両手について頭を下げる。

「乍恐、一つ是非容受頂戴したき事がある故、お引止め致しました」

仕方ないと大久保は座り、頭を下げたままの龍馬に対峙する。

「簡潔に願ひ申す」

「今一度、長州と折衝の席をば作りたいたと申し上げます。かは、某の所望なりと長州が訴願に御座います」

「京が出来事に於いて幕府との力が差、知り得たであると熟慮致す。先見も出来ぬに力に走るがは愚である。多くが血を流しても数多が兵力には遠く及ばぬ事。なれど先達て長府の折、西郷が振舞いには長州に対し遺憾をば覚えるに至りておる。其れは某が不徳であると仕る故、この大久保一蔵、この度のお主と長州が申出をば受諾致したい所存と申し上げる」

「有難う御座います！」

やれやれ肩が凝るではないかと、両肩を上げ下げしながら首を左右に振る。

「西郷にはこの私から話を通しておく、後は君達の手腕によると心してかかれよ」

「勿論そのつもりであります。それに大久保さんがここへ来ちゅう機会を逃せやーせん」

それではと、立ち上がりかけると手をだしてもう一つと龍馬は言った。

「先ほど一つと言ったばかりではないか」

「和太郎のこと、ちつくと尋ねたい事があるがじゃ。大久保さんはあれの太刀、どう思うちよたがが？」

ふむ、と顎に手を当て目を閉じる。

「数年、抜刀術だけを一通り教え込まれたのは確かだろう。本人が知らぬというのも解せぬ。なにか特別な仕組みにより記憶から欠落しているのか、別の理があるのかは私にも判らぬ」

決して天賦の才ではない、武市と龍馬の見解と同じだった。これ以上本人の知らないものを大久保から探るのは不可能だと、龍馬は改めて礼をのべた。

「手間をおかけしてしもうた。京への道、気をつけて帰りとうせ」

「心配無用、影は一人ではないゆえ。では、京か下関でな」
もう一度深く頭を下げ、大久保が部屋から退出して行くの見送った。

月が薄雲に隠れているお陰で、人目に付く事なく屋敷に辿り付くことができた。

壁伝いに裏口へ歩みを進め、戸口の手前で半次郎が両手を合わせて、ほおう、と鼻の鳴き声を真似た。

しばしの沈黙の後、戸に掛けられていた門の外れて戸が少しだけ開いた。

「目の前の家屋から左へ行けば牢屋へ行ける」

顔のない主がそう戸の裏から囁き、今一度、辺りを伺った半次郎は中へ身を滑り込ませた。

そつと家屋に近づき、格子窓から中の様子を伺う半次郎が行けと合図し、和奈は足音を立てないように左へと歩みを進めた。

家の壁に張り付くと、酒を飲んで談笑している声が聞こえて来た。酔いは動きを鈍らせ、気を散漫にしてくれる。和奈達にとっては有り難い事だった。

大久保が書いてくれた見取り図通り、大小の家屋が在った。

片方の小さい家の前には二人の見張りが立っていたが、大きい家の方は入口が見えなかった。

二人の背後に半次郎が近づいて来る。

「武市さあは小さい牢の方に入られておいもす。おはん達はそちらへやって下さい。おいは外の者へ向おいもす。お二方を連れ出せたら、おいを気にせず屋敷からでくうだけ遠ざかって下さい」

頷くと、半次郎は一気に右手へと駆け出して行った。

(速い！)

遅れまいと、和奈は戸口の二人に向かって足を蹴った。

「！ なんー」

振り向いた手前の男の腹に切り込み、血飛沫を浴びながらも一

人の男の右脇から肩へと剣を振り上げる。

その速さに、赤井は剣を鞘から抜く事が出来ず、呆然となる。

（これが、村木？）

戸口には門が下ろされ、大きな鍵がぶら下がっていた。

どちらかが鍵を持っている事を祈りながら、和奈は転がる男の身体を調べにかかると、赤井も片方の男へ駆け寄った。

早くしなければ、新手が来ては厄介どころか武市たちの救出が困難になる。

「あつた」

冷たい感触を手に感じ、赤井が声をあげた。

「こう一杯あっちゃあなあ」

鍵が付いた輪っかを顔の前でぶらぶらさせる赤井に駆け寄り、その手から鍵を？ぎ取ると、和奈は入り口へ立ち一つ一つ錠前に鍵を差しに行く。

外の騒ぎが聞こえた武市と以蔵は、顔を見合わせて格子戸へ這って行った。

一抹の不安を覚えた武市は、まさか、と眉間に皺を寄せる。

「動けるか、以蔵」

「はい」

返って来る声は弱かった。

小者への尋問は、上士が受けるものよりも過酷なものだ。以蔵が普段のように動ける状態でないのは見なくても解った。

鍵の開く音が聞こえ、門の擦れる音がして戸口が開いた。

「！」

隙間から顔を出した和奈を見て、息を飲んだ武市は肩を落とした。

「くそっ、龍馬の馬鹿めが」

赤井が見張りで戸口に立ち、中へ入った和奈は武市と以蔵を見つめ、牢へ駆け寄った。

「二人とも一緒に良かった」

手に持っていた鍵を、また一つずつ錠前へと差す。

「なんて無茶をするんだ」

「後で叱られますから、今は勘弁してください」

ガチャリと錠前が開き、格子戸を開け放つ。

「外は半次郎さん一人なんです」

そう言いながら以蔵の牢へと向かう。

中で膝を付いて座る姿は、和奈が見ても悪い状態だと判った。一人で運ぶ事は無理と判断した和奈は、外に居た赤井に助けを求めた。

「岡田さん掴まって下さい。武市さん、歩けますか？」

牢から出て来た武市に問う。

「なんとかな」

そう言って出て来た足取りは重く、普段のように武市も動けないと見た和奈は、一刻も早く牢から出る事だけを考えて。

「っっ！」

痛みで顔を顰める以蔵を赤井と二人で支え外に出ると、左の暗闇へと向かう。

怒声や悲鳴が表門の方から聞こえて来る。半次郎が派手に立ち回ってくれているらしく、まだ牢の方へ駆け付けて来る者はいなかった。

早く屋敷から出てなければと、和奈は裏口へ急いだ。

壁伝いに戸口へ辿り着くと、戸を少し開けて外に人影がないか確かめた。

「岡田さんを連れて外へ出て」

半次郎が手錠と言えど、多勢相手に長時間立ち回れるものではない。時間が経てば経つほど半次郎の身が危険となる。

「行って」

そう急かされた赤井は外へ足を踏み出した。

「貴様ら、そこで何をしている！」

振り返ると、三人の男達が走って来るのが見えた。

「武市さんも急いで下さい！」

武市の手を引っ張り、後手で背中を戸の方へと押した。

「佐野藩御用邸と知っての狼藉か！」

せっかく助け出したのだ、ここで捕まるわけにはいかない。

相手は三人、間合いは五歩ほど。

左肩を少し引き、柄を握ったまま和奈は真ん中の男へと走り、唐竹斬りを入れてそのまま右の者へと横薙ぎを払った。

「かはっ！」

風を斬る音と、肉が裂ける音が耳に届いた。

（次！）

だが、左を向いた先に男は姿はなかった。

「和太郎！」

はっ、と身を返した和奈は、視界一杯に広がる武市の背中に息を飲んだ。

鈍い音が聞こえ、武市の体が下へと落ちる。

「武市さん！！」

崩れて蹲る姿に、ざわりと気が乱れた。

「貴様ああ！」

斬りかかって来ようとした男の懐へ、和奈は剣を突き出した。

「ぐうっ！」

刺さった剣を抜き、男の懐を蹴って、屈んだ首もとへと太刀を振り下ろした。

ずるりと首が落ち、噴出す鮮血が顔や手に飛び散った。

和奈は血を気にする事なく、転がる首を目で追いかける。

「和太郎？」

剣気とは違う気を放つ和奈を見て、不安に駆られた武市は無意識にその手を掴んで引き寄せた。

「武市さん？」

目の前に武市の顔があり、片目を覆った手の合間からは血が流れている。

「そんな・・・」

「退くぞ」

今は傷の心配よりもここから出る事が先決だと思い出す。逃げ切らなければ武市の傷を手当てする事さえできなくなる。

和奈は蹲る武市の腕を抱え、戸口へと急いだ。

自分の腕を掴む赤井の手が、震えているのが伝わって来る。

首と胴体が別々の方向へ落ちたのに恐怖したのか、それをやってのけた和奈に恐怖したのかは以蔵にも判らない。

「くそがっ」

武市の所へ駆け寄りたいのに、体が動いてくれない。その悔しさに歯噛みしている間に、和奈が武市を支えて来た。

「先生！」

「早く、出る！」

武市の怒声で、赤井は以蔵を引き摺るように戸を潜り、和奈も武市と共に外へ出た。

「急ごう」

壁沿いに、来た道を戻り始める。

あとの三人を気にしている余裕はすでになかった。武市が斬られたことで、和奈も以蔵もそこまで頭が回らなかったのだ。

ほおう、ほおう。

壁が途切れた所で梟が二回鳴いた。

町外れまで来た所で、追っ手が来ていないか後ろを振り返る。

「川へ入れ」

痛みを我慢し、絞り出すような声で武市は指示した。

血の痕跡を少しでも消すため川へと入ったが、急な流れは以蔵にとって相当の負担を与えた。

「岡田さん」

「俺はいい、先を急げ」

頑張ってもらうしか術はなかった。

低い橋を潜り、そこから土手へと上がり町を出ると、山へ続く竹

藪へと入る。

「赤井くん、見張りをお願い」

「解った」

赤井が道の方へと戻って行く。

「俺も行ってきます」

「だめですよ岡田さん！」

心配いらんと、岡田は傷む体を押して戻って行った。

「動けるなら大丈夫だろう」

そう言われ、まずは武市の傷を見ようと、座りこんだその側へ座り込む。

「武市さん、手をどけー」

手を退けると、額から目の上を通して左頬に伸びる剣跡が見て取れた。

懷から手拭を取り、縦に引き裂いて帯を作る。

「痛むと思いますが、我慢して下さい」

震える声でそう言い、当て布をした上からそっと撒いていく。

「なぜ、来た」

「龍馬さんは来れませんから」

だからと、命を懸けてまで助けに来る道理はないと武市は言う。

「武市さんを見殺しにするなんて、できません」

「おまえまで捕まったら、俺は」

武市は和奈の頭に手を伸ばし、懷へと引き寄せた。

「武市さんが・・・死ぬんじゃないかと・・・そう思ったら我慢できなくて・・・」

腕の中でそう呟いた和奈の温もりを感じながら、武市は髪を優しく撫でた。

「追っ手はー」

和奈を胸元に抱いている武市を見て、以蔵は言葉を失った。

「追っ手がどうした？」

和奈を離し、固まったままの弟子にそう聞く。

「あ、はい。来てません」

「和太郎。血の跡を消して来い」

「はい」

棒の様に立ち尽くす以蔵の横を抜けて行く。

「何か言いたそうだな？」

「いえ・・・」

以蔵はしばらく立ったまま、和奈が消えた方を見ていた。

竹藪から道へた和奈は、地面に視線を落とし、残った血痕を見つけた。

「村木？」

血の付いた地面を足で均した和奈は、脇差を抜くと袖をめくり、左腕の内側を切った。

「なにやってんだ！」

「静かにして、誰かに聞かれたら困る」

傷口を抑えて反対側へ走ると、自分の腕から滴る血をそのままに、雑木林から町へと歩き出した。

追っ手が来たとしても、血の後につられて雑木林の中を探索してくれるだろう。

「急ごう」

袖口を噛んで引きちぎると、傷口を縛りながら急いで武市の所へと戻って行った。

屋敷へと戻った次の日の朝早く、半次郎が無事な姿で戸口へと入って来た。

「岡田さんと一緒に捕らえられた三人は、手遅れと申し上げます」
なんとか牢に入りたかったが、一人ではそれも難しく、申し訳ないと半次郎は頭を下げた。

「気にしやーせんでくれ。中村さんじゃおおごと感謝しちゅうが。どうか面を上げとおせ」

「これを渡しときます」

渡された四つ折の紙を開き、目を通してから龍馬は礼を述べた。
休む事を勧めたが、半次郎は着替えだけ済ませただけで、京へ戻ると屋敷を後にしてしまった。

「大津から出るき」

遅かれ早かれ、ここにも調べが来るのは間違いないと龍馬が告げた。

おみつが武市の手当てをし、お京が台所で握飯を作ってくれている間、動ける者で血のついた布や着物を竈で燃やし、畳は替えの物に取り替え縁の下へと隠した。

そして陽が落ちた頃、和奈達は屋敷を後にして如意ヶ岳が在る方角へと出立した。

「やはり京へ戻った方がえいがやないか？」

「私の事は心配いりませんから」

女手がないと不便だろうと同行を申し出たお京に、これ以上迷惑はかけれないと龍馬は丁寧に断りを入れた。だが、それでも行くと譲らず、渋々了承したのだ。

日が昇り、人目に付くのを避け歩く場所を森の中へと変えた。

龍馬と中岡は武市を抱えて先頭を行き、自力で歩けると、以蔵に介添えを断わられた和奈は、お京と並んで歩いていた。その後ろを赤井が付いて来ている。

「以蔵さん、大丈夫でしょうか」

以蔵の足取りは危うく、時々ふら付いてこけそうになる事もしばしばだった。

「私、ちょっと行ってきます」

お京は小走りで以蔵の横へ行く。焦った以蔵の横顔が見えたが、無碍に追い払う事はせず、なにやら話しながら一緒に歩き出した。

「あらま・・・」

意外だと言わんばかりに眼を丸くする和奈。

「へえ。あの二人、そういう仲なのか？」

「そんな事、僕が知る訳ない」

開けた合間に出ると、一息入れようと龍馬は腰を落ち着けた。

武市の前に座った和奈は、葉を塗ろうと目に撒かれた布を取って行く。

「酷いか？」

一瞬、手が止まってしまった和奈に武市は笑顔を浮かべた。

和奈は答えられず、無言で傷葉を塗って行く。

「っつ」

「すみません」

慌てて指を眼から離す。

「いや、大丈夫だ」

中岡に背中中の傷を見てもらっていた以蔵は、和奈と武市を見ながら言った。

「おまえの言ってたあれ」

「あれ？」

以蔵が、くいと顎を前に出したので、その先に視線を向ける。

「ああ、あれ」

「強ち、間違いとは言えん」

「あら。何か、あった？」

「・・・・・・」

「黙秘は駄目だよ」

興味津々となった中岡は、以蔵の背中から横へと場所を移し顔を覗き込む。

「先生が・・・・」

「武市さんが？」

「和太郎をだな」

「和太郎を？」

もごもごと口の中で何かを言ったが、はっきりと聞き取れなかった。

「じれったいなあ、何？　口吸いでもしてるのを観ちゃった？」

「どうしておまえはそう飛躍するんだ」

「違うのか。はっきり言わないから想像が膨らんだんじゃないか」

「その……こう胸に……抱きしめてた」

あちゃあ、と中岡は顔を手で覆った。

「和太郎は男にしちゃ線が細いし、顔立ちも華奢だから、武市さんがとち狂うのも解るんだけど、やっぱりなあ」

「いいか、絶対突っ込むなよ」

「できるわけないでしょ」

突っ込んで武市の叱責を買う気など中岡には更更無かった。

「あとどれくらい行くんですか？」

座り込んで膝を摩りながら、地面に体を横たえている龍馬に聞いた。

「夕刻くらいにや着くと思うよぜよ」

「まだまだありますね」

武市を龍馬と交互に支えながら山道を来たのだ、赤井の体力も限界に近かった。

怪我人が居ては無理強いはできないから、もう少し頑張ってくれと龍馬は笑う。

「どうぞ」

目の前に差し出された握飯を、ごくりと生唾を飲みながら受取る。

「ありがとう」

にこりと笑い、お京は持っている握飯を皆に配って回った。

「以蔵さんも食べてください」

「すまん」

握飯を受け取り、がつがつと口に放り込む。

「食べる気力があるならまずは安心やき、心配をしのうてもなんちやーがやないちや」

半刻ほど休んだ一行は、再び木々の間を歩き出した。休んだ分だけ歩くと、小さな道へと出た。

「まっこと大久保さんは凄いお人だ。ぎっちり先々を考え策を作っちゅうぜよ」

半次郎が差し出した紙には、これから向かう場所が書いてあったのかと尋ねる。

「ああ、そうじゃ。京から追っ手が来たらと用意してくれちよったらしい」

道の両側に森がある所に来ると、龍馬は左側の木立を丹念に調べ始めた。

「あったあった」

獣道を見つけた龍馬は、こっちだと歩き出す。

切り開けた場所にひっそりと建つ小さな家屋に着く頃には、すっかり陽が落ち暗闇が辺りを覆っていた。

「俺、道隠してきます」

中岡は一服つく間もなく来た道を戻って行く。

「さあ、入れ入れ」

真っ暗な中、龍馬が火を灯す。

「和太郎、布団を頼めるか？」

「はい」

奥にある部屋に入り、用意されていた布団を敷くと、武市を抱えるようにして龍馬が入って来た。

「これで一息つける。今お京さんが湯を炊いてくれちよるき、後で布を取り替えてあげや」

「分かりました」

布団に入った武市の横に座った龍馬は、変わり果てた友の顔に視線を落とした。

「わしは明日の朝、ここを発つき」

武市は片目を開け、黒目だけを横へ動かした。

「おんしはここでちくと休むがええ。それから以蔵と和太郎を連

れて長州へ行け」

「長州へ？」

和奈が答えた。

「桂さんにも助太刀は要るじゃろ。和太郎、赤井くんはわしが連れて行ってもいいがか？」

「えっ」

「なに、悪りいようにやしやーせんから、心配はいらんぜよ」

龍馬が出て行くその後姿を見つめていた武市は、静かに目を閉じた。

「長州へ行くか、和太郎」

「はい」

そうか、と武市は口元に笑みを浮かべた。

翌朝。土佐藩が動く中の上洛は以前よりも危険だが、会わなくてはいけない人が居ると、赤井と中岡を連れて龍馬は京へ戻って行ってしまった。

三人を見送った後、囲炉裏を囲んでお京が用意してくれた朝食を取ると、武市は傍らに置いてあった風呂敷を以蔵に差し出した。

「これは？」

「龍馬が置いていった着物だ」

「着物？」

「さっさと着替えて来い」

手にした風呂敷を抱え部屋へ戻って行った以蔵だったが、食事の片づけが終っても戻って来なかった。

「何やってるんでしょう」

「慣れぬ身繕いに、四苦八苦もあるまいが」

「着物って」

「袴だな」

以蔵はいつも着物の裾を上げて腰に挟み、動きやすい形にしている。その着物を下したところも、袴をはいている所も見た事がなか

った。

「そんなに難しいかな、袴はくのって」

「そんな訳ないだろうが！」

現われた以蔵は、何とも言いがたい表情で怒った。

「時間が掛かっていたのだ、そう思われても仕方あるまい」

「それは・・・」

「しかし、孫にも衣装だな」

「どうも、着心地が悪くて」

慣れれば問題ないと武市は一笑した。

「後で町へ行ってくれ」

「何用ですか？」

「これを買って来い。お京さんも連れてな」

「は？ いえ、一人で大丈夫です」

「夫婦ならば、疑いの目を向ける者は少かろう」

武市の言葉に絶句する以蔵の後ろで、お京は顔を赤らめて俯いた。

「お京さん、すまないがそういう事だ。以蔵をよろしく頼む」

「はい」

袴姿で髪を一つに纏め、お京と並んで立つ姿は別人に見えた。

「では、行って参ります」

武市を直視せず、視線を地面に落としたままそう言うと、以蔵は

さっさと出て行ってしまった。

「やれやれ」

お京もぺこりと頭を下げると、以蔵の後を追いかけて行った。

部屋に戻ろうと土間を出た武市は、ふと目をやった庭へと出ると、

青く晴れた空を仰いだ。

（土佐を発った日も、良く晴れた日だった）

あの時は片目を失い、仲間を失う事になるとは考えてもいなかった。

「静かな時間だな」

「あ、はい」

悟られないよう気配を消して近づいたつもりだったが、武市相手にそれは無理だった様だ。

「このままずっと静かな刻であればと、つい思ってしまう」

背中を見ている和奈は、どんな表情で武市がそう言ったのか見ることは出来なかった。

「傷の手当てを」

「ああ、頼む」

振り返った武市は笑みを浮かべ、先に部屋へと上がって行った。

身体の打身は数日で治るだろう。だが、瞼を切り割いた傷は眼球をも潰してしまっている。治るの事はもうないのだと、薬を塗る手が震えた。

「布はもういい。風に晒す方が治りも早い」

すでに血は止まっていたので、和奈は言われた通りにした。

「傷が塞がったら長州へ発つ」

「なら、ちゃんと身体を休めておいて下さい。途中で倒れられたら困りますから」

これはこれは、と苦笑する。

笑顔を見せるが、悲哀を含んだその顔を見ても掛ける言葉が浮んで来なかった。

（また、役に立てないんだ）

桂が泣いた時も、ただ側に居る事しかできなかったのだ。

（私は何もできない）

それが無性に悔しかった。

一刻半ほどして、以蔵とお京が戻って来た。

「着物？」

土間に広げられた風呂敷の中には、四人分の着物があった。

「古着にしては、質の良い物があったな」

手に取った着物を見ていた武市が感心したように言う。

「お京が、店に有る物手当たり次第に引っ張り出したんです」

それで時間が掛かったと以蔵はぶつぶつ文句を零す。

「それで、おまえは何をやっていたんだ？」

「俺は・・・」

「荷物運び、ですよね？」

そう言われ、以蔵は拳を丸めて和奈を睨みつけた。

「お京さんが共に行って助かったな」

この日から袴を着て髪も結ったままにしろと言われ、渋々だが、解りました、と答えた以蔵は、居心地悪そうに土間の端へと腰を下した。

「僕のは買わなくて良かったのに」

気持ちの切り替えは必要だと、武市は手にした着物を持って部屋へ戻って行った。

そうして以蔵は、それから毎日お京を伴い町へと出かけるようになった。

「大丈夫かなあ」

侍姿になっているとは言え、顔は変えられるものではない。岡田以蔵と判る者が出て来ないとは言えないのだ。

「お京さんも一緒だ、注意は怠らぬよ」

「それもびっくりなんですけどね」

「ん？」

「あんなに恥ずかしそうにしてた岡田さんが、毎日連れ出すんですから」

心配と付いて来たお京を労っての事だと、武市は嬉しそうに笑った。

「以蔵が他人の身を案じて動くとは、思ってもみなかったがな」

「武市さんの心配は一杯してるじゃないですか」

「師弟のそれではない。相手は女子、俺に対するものは違う」

「そうなんですか？」

「俺がおまえの身を案じるのと同じだ」

「えっ!？」

武市はそう言いながら、膝に肩肘を付いて和奈を見る。

「え・・・いあ・・・その、ほら、僕、その男ですし・・・」
顔を赤くして焦る和奈に、今更かと笑った。

京へ入った龍馬は、その足で伏見薩摩藩を尋ねていた。

ニコニコと座る龍馬に、不機嫌極まりない顔の赤井と、ハラハラした様子で自分を見上げて居る中岡を前に、大久保は腕を組み呆れ顔で立っていた。

「苦勞した甲斐を、なぜ君はこうも簡単に台無しにしてしまうのか聞きたいものだ」

「申し訳ない。けんど少しでも早う西郷さんに会って話しがしたかったんぜよ」

「なら、私に頭を下げる必要はなかっただろう」

「大久保さんの許しなしに、西郷さんへの話しは出来やーせんき」

「ふん！ まあいい。大津の事は半次郎から聞いた。で、武市くんの具合はどうなんだ？」

身体は大丈夫だが、と声が低くなる。

「眼は、もう見えんじやろう」

そうか、と大久保は珍しく顔に影を落とした。

「君が来ているのは吉之助にも伝達しておく。が、一筋縄ではいかん男だぞ」

「よう解つちります。じゃが、筋を通せば理解頂けると思うとりますき」

「賢明なことだ。では、逗留をしばし許可しよう。くれぐれも面倒だけは起こしてくれるなよ」

半次郎にも大津での礼を述べ、また厄介になると詫びる。

「酒でも運ばせるゆえ、ゆるりとするがいい。新兵衛」

「これに」

「町へ出ろ」

「御意」

龍馬が京へ入ったのを新撰組に悟られないか探るため、大久保は田中新兵衛を町へと放った。

岡田以蔵に中村半次郎ときて、今度は田中新兵衛が登場して来た。四大軒りとして名を残す三人に実際に会う事になるとは、ついこの間まで想像すらしなかった。

歴史が変わってしまったのだと、和奈は解って居るのだろうかと言ひしんだ。武市と以蔵を助け出さなければ、歴史の通り二人はそのまま土佐へ送還され、死ぬ運命だったのだ。

（多分、歴史は得意じゃないよな、あいつ）

幕末を駆け抜けた大物を前に、臆するどころか平気で居るのがそう思える根拠だった。

（大久保さんに啖呵切ったのはまずいよな）

中村半次郎は後の桐野利秋だ。その半次郎の上司で大久保とくれば、明治に最大の権力を手にした大久保利通だと言うのは幕末の歴史を知る者ならばすぐに解る。

龍馬と中岡が天津で肝を潰しかけたのも納得できた。

（俺、大変な相手に喧嘩をふっかけちまったなあ）

血が上ってしまったとは言え、今更ながら自分の取った行動に後悔するしかなかった。

（しかし・・・）

武市を救出してに行った時の和奈の姿が浮んだ。

男に斬り込んで行く速さには驚いた。加勢に動く間もなく、和奈は二人を斬り捨ててしまったのだ。

（切紙どころじゃないぞ、あの腕）

武市が斬られた時の変貌も、驚くより恐怖を感じた。一瞬で剣気を変えた和奈に、自分の腕では歯が立たないと悟ったのだ。

「あの、聞きたい事があるんですが」

どうして和奈がここに残ると言ったのか、その理由が知りたいと赤井は尋ねた。

龍馬は、それは和奈にしか分からない、と答えた。

「そうですか」

「その目で色々を見て一生懸命考え、決めたんじゃない」

それだけではあの太刀筋を理解する事はできない。稽古では一度して出した事のない剣気を放っていたのだ。

「あいつの太刀筋が・・・前と変わってました」

「ほうか・・・親しくしていたおんしなら、何かわかつちゅうやないが？」

「親しいとは言えませんが・・・ある人に、俺と一緒に稽古をあいっもしていたか、と聞かれました」

ほう、と興味津々に身を乗り出す。

「村木は俺より先に道場に通っていましたから、その時の稽古がどんなものかは知りません。いいえ、変わりないはずです。同じ師範なんだから」

やっぱり判らんのと肩を落とす。

「じゃが、心配することはないぜよ。和太郎には武市がついとるき、悪いようにはならん。和太郎の事より、まずおんしは自分の身を考える事じゃ。そうしやーせんとなんちゃー進まんき」

正論と思えた。こんな世だから進むべき方向を見定めないと、混乱はさらに大きくなり状況を把握するどころか暗闇で迷ってしまうことになる。

「太刀筋って、桂さんが言ってた、あれ？」

「あれです」

「桂さんも相当びっくりしてたけど、そんなにすごいのか？」

「以蔵が一本とられかけたぜよ」

「ええええええっ！」

中岡が驚くのも無理はない。本気でかかっても以蔵から一本取るのは中岡でも至難の業なのだ。

「稽古見たけど、あれで以蔵くんから一本とれるとは思えないんだけど」

「複雑な事情があるちゃ」

「龍馬さん。俺に剣術を教えて頂けませんか？」

おんしもか、とため息を吐く。

「まあ、これっちゃあ何かの縁、かまわんじやろ稽古を付けちゃるき」

「龍馬さんが指南するの！？」

剣を振る事の少ない龍馬が、人に剣術を教えると言ったのを初めて聞いたのだ。

「え？ 龍馬さん、剣の腕ないの？」

「馬鹿言うな！ 北辰一刀流免許皆伝の持ち主だって！」

「皆伝！？」

「まさか、大久保さんに噛み付いたのも、腕を知らなかったからとか？」

「え！ 大久保さんも皆伝？？」

「ああ見えて示現流師範だぞ」

抜いた剣を手にした大久保の姿を思い出した赤井は、喉を鳴らした。

「まあ長州から出て来たんじゃ、解らないのも無理ないか」

「生きてて良かった」

正直な気持ちだった。

「その、岡田さんと桂さんの腕前は聞いて知ってるんだけど、武市さんもやっぱりすごい？」

「たあ。武市さんは鏡心明智流皆伝。土学館塾頭を務めた方だよ」

「うへっえ。じゃあ、中岡さんも凄腕なんだ」

この言葉に中岡の頭が落ちた。

「俺は一番下っ端だよ」

「阿呆ゆうがやない。武市もその腕を認めちゅう、なかえか腕の立つ剣客ちゃ」

「これだけ並べ立ててそれじゃあ、説得力ないって龍馬さん」
けたけたと笑う龍馬。

「剣を振るう者の心得は、わしの持論じゃきおんしには納得できません
かもしれんが、まあ宜しゅう頼むぜよ」

「はい！」

また一つ道が前へと進み始めた。

動乱の世、異質な二つの道はどんな形で築かれて行くのかと、龍馬は喜色満面で酒を飲み干した。

其之二 戦の影

武市の目に出来た傷も塞がったので、いつ長州へ発つか相談しているところへ、大久保の命と半次郎がやって来た。

「その節はご尽力頂き、ありがとうございました」

丁寧な挨拶をされ、困った表情かおのまま、半次郎はこれまた丁寧にお辞儀をして礼を返した。

「皆さあが長州へ発たれるなら、必要だろうからこれを渡して来いと仰せつかって来ました」

そう言い、懷から出した手紙を武市に差し出す。

「忝い。必ずこのご恩はお返し致すと、大久保さんにお伝え下さい」
「頼まれてした事ではあいもはん。そげん心配は無用にございもす。道中、恙無い道にないもすごと、おしも祈っておいもす」

夕餉を共にと勧めたが、長居せず戻るよう言いつかっているからと、茶を一杯啜っただけで早々に帰ってしまった。

お京が茶を入れ直してくれている間、手にした手紙の封を開けた武市は、中に折り畳まれていた紙を取り読み始めた。

横に座っていた和奈は、興味をそそれ紙を覗き込んだのだが、書かれているのはミミズが這った様な字だったので読むのを諦め、お京が持つて来た茶に手を伸ばした。

武市がくすりと笑う。

「字は苦手か」

「はい・・・」

この時代の文字が読めないんです、とは言えず苦笑を返すしかない。

挟んであったのは手形だと武市は言った。

関所を通過する旅には手形の携帯が必須となる。これは旅人とする者の身分を証明するもので、名前の次に旅の目的を記す。書き付けて交付するのは、藩士ならば上役が、庄屋なら店主、僧侶なら高

位僧といったように、いわゆる上司となるものが手形を書き、最後に印を押す。この印がなければ、署名があっても関所を通過することはできない。よって、関所の役人は旅の目的よりも印の有無と偽造ではないかを厳重視し目を通す。

【手形の事】

一 山城国紀伊郡伏見桂木宗次郎、桂木京、同岩村新之助、村木和太郎出願御座候に付

此の度諸国神社へ参詣仕り候。往来の儀を願出し候

此の者共薩摩藩紛れ御座なく候、所々御関所異議なく御通し下さるべく候

伏見薩摩藩 薩摩藩徒目付 大久保一蔵

元治元年七月

所々御関所 御

役人衆中】

武市が声に出して内容を読んでもくれた。

「神社巡りするんですか!？」

「時期が時期だからな。剣術指南よりその方が注意を向けられにくい」

武市達は帯刀の身であるため、庶民の使う往来手形ではなく関所手形が大久保より交付されていた。しかも、堂々と自分の名を書き、印を押して保証人となっている。

「長州へ行くというのに、肝が座り過ぎだろう、これは」

道中騒動を起こすなど釘を刺しているのは明白だが、禁門の事件後に薩摩藩の者が長州へ行くとなれば、悶着を起こそうと思わなくても起きる可能性はある。

「桂さんに伝聞も出せたものではない」

大久保と桂が既知なのは一部の限られた者しか知らない。わざわざ桂が関所に出向いてくなくても、良しと通すのもこれまた問題と思えた。

「あれやこれやと考えて疲れるより、その場になって考える方が良

い」

「僕はそのままでけど、武市さん達は名前が違いますね」

「武市と以蔵はもう使えぬからな」

手紙を読みながら言った武市の顔が陰しさを増して行く。

「武市さん？」

しばらくの間黙って読んでいた武市の両手が、紙を持ったまま膝の上に着いた。

「予想はしていたが・・・」

「先生？」

脇へと腰掛けた以蔵は差し出された手紙を、不安そうに師の顔を見てから受取った。

「俺と以蔵はすでにこの世の者ではなくなった」

「えっ!？」

意味が解らず、中腰で武市の方へ身を乗り出しす。

「言葉通りさ」

悔しいそうに小さな息を吐いた以蔵は、すいませんと呟いた。

「おまえのせいではない。運が悪かった、それだけだ」

しかし、以蔵はその言葉を受け入れることが出来なかった。

自分の注意不足で捕縛されたばかりか、武市の体に鞭の跡を残してしまったのだ。悔いても悔い切れぬと歯を食い縛った。

「取り逃がしたと、御触れを出せばいいものを」

手配者が死罪となれば、幕府の出した手配書から名が削られる。

後藤象二郎が命を下しての土佐勤王党弾圧だったはずだ。それなのに虚偽を申し立て死罪と公表した。その真意が、武市には解らなかった。

「間崎さん達も、死罪でしょうか」

「恐らくな」

囚われた三人が逃れられなければ獄門死するか、土佐へ送り返され、拷問されて自白すれば死罪は確定される。

「本当に申し訳ありません」

「今後悔したところで、仕方あるまい」

暁七つ（午前四時）に大津を出た和奈達は、凸凹した小道を抜け街道を黙々と歩いた。

手甲と脚絆を付けるのは慣れていた以蔵だが、穿き慣れない切袴が落ち着かず、度々立ち止まっては草鞋と脚絆の紐を結び直している。

背負っていた大きな風呂敷包を掛け直し、駆け足で追いついて来た以蔵は頭を掻きながら頷いた。

「申し訳ありません、旦那さま」

「そこまで従者に徹しなくてもいい」

この時代、武士は一人で旅をする事はせず、必ず従者を伴う。

武市が従者になれと言うより前に、以蔵は用意された荷物を背負って歩き出したのだ。自然と自分の置かれている立場を判断し、勝手に体が動くのである。

大津宿から峠を越え逢坂辺りに差し掛かると、街道沿いに並ぶ茶店や土産物屋が目立つようになった。

追っ手を警戒していたが、同行するお京を気遣いながらの出立に自然と足が遅くなり、三条大橋に着いたのは昼八時半（午後三時）を過ぎてだった。

加茂川に出て下鴨神社の方角へ足を進めて行くと、風に乗って煤けた臭いが鼻を突いて来た。その臭いの元が焼けた家屋であるのは、眼前に広がる光景で否応なく知る事が出来る。

「酷いな」

暗い表情も晴れぬまま、京都丹波口から山陰道へ入った。

夜五つ（午後八時）迄に亀山宿へ着くのは無理だろう。そう判断した武市は、一つ目の宿場檜原宿で宿を取った。

どの宿場でも門限があり出入りは意外と厳しい。町の外にある木門が閉じるのは夜五つ、門が開くのは暁七つが通例である。入るのも出るのも、例えば参勤交代で往復する大名行列と言えど例外ではな

いのだ。その為、野宿となった場合に備えて、行列には料理の材料・道具一式から風呂桶、藩主用の便器など必要な物が全て整えられ荷物に必ず加えられている。

「夜は出歩かんと、部屋でゆっくりとしたほうがええですよ」

宿屋の主人が部屋へ案内してくれながら、そう小さな声で囁いた。

「何事かあったのか？」

「知らんですか？」

辻を警備する小浜藩士によって、京から落ち延びた長州藩士を討ち取ったのだと主人が耳打ちした。

「それでこの物々しい雰囲気か」

「へい。ああ、これを差し上げましょう」

懐から極本きわほんしらべ（かわら版）と書かれた紙を武市に手渡し、

食事の用意をさせて来ると一階へ下りて行った。

「京中の半分が焼亡したそうだ」

行灯の火でかわら版を見ていた武市は、はらりと畳に投げ捨てた。

【朝五ツ時川原町二条下長州御屋敷より焼失同四ツ時 堺町御門より出火いたし折節北風はげしく夫より四方へさかん二広かり 東は上にて川原町、下は加茂川、西は堀川、北は中立売南は野限り焼ぬけ申候。漸二十二日暮時火鎮り申候。又二十日九ツ時分、嵯峨天龍寺山、崎天王山両方共焼。遠国為御知らせ委敷相印候。凡家数二万五千計、凡かまど四万七千計、凡土蔵落千百ヶ所計、神社仏閣五百ヶ所計】

禁門の変に単を發した戦火によって木造の家は軒並み焼失。その数は二万八千件に上った。

「長州屋敷って、三条の・・・」

「ああ」

初めて武市達と会った屋敷が焼けたという喪失感より、郷愁を抱いた場所が無くなった事に悲哀を感じた。そう想った原因を知る事はもうできないのだ。

「鷹司殿の屋敷から出た火が風に煽られ、市中に広がったようだ。」

藩邸の火は逃げる時に火を放ったに違いない」

藩邸には藩士だけでなく、京で活動する浪士達の出入りもあったのだ。万が一屋敷を探されてそれらが幕府の手に渡れば、長州の立場はますます悪くなる。

沈んだ顔で手を握り締める和奈の頭を、武市はぽんつと叩いた。

「長州は、これからどうなるんでしょうか」

「わからん。今しなければならんのは、一刻も早く長州へ入ることだ」

「そう、ですね」

「ならさっさと寝ろ」

武市の一言で行灯の火が消された。

幕吏が居る夜だけに油断はできないと、外の様子を気にしながらの夜明かしとなり、眠気が冷め切らぬ中、朝靄の立ち込める檜原宿を後にした。

道は至って単調だった。野山を歩く苦労もなく、宿を取りながらの道中だったので、歩ける距離は長くなった。とは言っても、和奈とお京が武市達の足に合わせて昼夜歩き詰めるのは無理がある。

山陰道と北浦街道の分岐宿場である益田宿に着いたのは京を出て十四日目だった。

町に入り宿を探して歩き回ったが、どこの旅籠屋も一杯という状況だった。仕方ないと旅籠屋に頼み込み、納屋を寝る場所に提供してもらい、その夜は雑魚寝となった。

「せめて屏風を借りてこよう」

だがお京は必要ないと断り、以蔵の横に寝転がってしまった。

「なにもここで寝てなくてもいいじゃないか」

腰に伝わるお京の温もりに、ただ慌てるしかない。

「あら、夫婦なんですから隣でもいいじゃありませんか」

「おま・・・あれはだな」

「五月蠅い」

横になっていた武市の顔が振り向いたので、以蔵は口を閉じてお

京を背に身体を横たえ、まんじりともせず夜を明かすことになった。翌朝、和奈達は山陰道へは下らず北浦街道へ入った。一つ目の須佐宿を過ぎれば次は萩だ。

須佐でも益田と同様、旅籠屋は殆んど満員の状態だった。また納屋で寝るのはかなわんと以蔵が駆け回ったお陰で、小さな旅籠屋を見つけ雑魚寝には変わらなかったが、窮屈な思いをせず夜を明かすことができた。

「皆、早起きなんですね」

「だからと、こうも大勢が朝一で出るのはおかしい」

急ぎ旅でもない限り暁七つに出立する者は多くないというのに、宿の外には旅支度を調えた人の往来を見ている武市の顔は曇っていた。

不安を抱きながら街道を進んで行くと、萩が近くなるにつれて東へと歩みを進める者が増えてきた。中には農民らしい者も混じっている。

「先を急ぐぞ」

何事があったのではと、聞くまでもなかった。

長門国へ入る関所の木門が見え始めると更に人が増えた。進む先の門の奥には沢山の人影が見える。

関所は京から下って来る者達よりも、反対に上る者への方が厳しい検問を受ける。手形に書かれた内容を確認する時間も違う。

禁門の変で京から戻る者が多いのなら説明も付くが、門を潜った先には出国の順番を待つ長蛇の列しかない。

出国者の対応に追われている役人の顔は、そのどれにも疲労の色が伺える。中には怒気交じりで対応している役人も居た。

入国をと手形を出した武市達に、じろりとした目が向けられる。

「通っていい」

入国の検閲に時間を割いている余裕がないのか、役人は手形を流し読みしただけで通してくれた。

「危惧するまでもなかったが」

何事もなければ良かったと安堵するのだが、この状況を前にしては胸を撫で下ろせない。

「何か、あったんですよね？」

言わずとも、間違いないことだろうが、和奈は口にせずには居られなかった。

「そうとしか言えんな」

関所を抜けたところで、和奈の横から突然ぬつと影が出て来た。

「ひえっ！」

叫び声ともつかない声を上げた和奈は、剣に手を伸ばしながら横に視線を向ける。そこ立って居たのは、ニコニコと笑顔を浮かべて含み笑いを零す桂だった。

「桂さん！」

「よく来たね」

「びっくりしたあ」

「伝令が来てね、そろそろ着く頃だろうから脅かしてやろうと待っていたんだ」

悪戯っぽく笑っているが、その顔には疲れが見て取れた。この出国騒ぎが関係しているのは間違いないと思えた。

「酷いですよ」

「ごめんごめん。晋作も来たがっていたんだが手が空かなくてね。皆が来るのを心待ちにしていたよ」

「わざわざ出迎えて頂き忝いが、桂さんも多忙を極めているのではないのか？」

その話しは着いてからと、桂は馬が繋いである場所を指差す。

「俺は徒歩で行きます」

小者の身分で馬には乗れぬと、以蔵は断りを入れた。

「関係あるまい、気にせず乗れ」

武市に言われては断り通すこともできず、以蔵は素直に馬上の人となった。

「乗れって、言われてもなあ」

大きな足の栗毛の馬に近寄った和奈は、漆黒の目を覗き込んだ。
不安を抱いた心を馬も察したのか、鼻息を荒くすると和奈から数歩
後ず去ってしまった。

その様子を見ていた桂が側に馬を進めて来る。

「乗れないのかい？」

「その通りです」

「おいで」

手を差し出し、和奈を引っ張り上げると後ろへ座らせた。

「振り落とされないようしっかり掴まっておいで」

横を見ると、以蔵が慣れた手つきで手綱を捌きお京を前に横座り
させていた。

「へえ、しっかり乗れるんだ」

「おまえも練習しなくてはね」

剣術でも一杯一杯なのに、馬術まで追加されては寝る時間がな
くると泣き言を吐いた。

「コツを掴めば簡単だ」

さらっと言う桂は、簡単に乗りこなせたのだろうなと思う。

手綱を取った桂は、馬の腹を軽く蹴った。

「武市くんから文を貰った時は驚いたよ」

「た、大変そうですね、来ないほうが良かったでしょうか」

回した両腕に桂の体温が伝わってくるのが気になってしまい、答
えになってない答えを返す。速くなった鼓動を悟られないようにと、
和奈は後ろへ少し体を離れた。

「いや、京に居る方が危険だろうからね。良い選択だと思うよ」

変なところで女性に戻ってしまう和奈に気付いたが、桂は素知ら
ぬ振りで馬の速度を上げた。

萩城下町の馬屋で馬を下りた和奈達は、町中のそこかしこに怪我
をした者を見て息を飲んだ。

「これはなんと？」

まるで戦をした後だと言わんばかりの光景である。

「落ち着ってから説明するよ」

桂の家は白壁が連なる城下町東側の江戸屋横丁に在る。その通りを西側に二本戻った通りに高杉の家が在ると桂が説明した。

床の間の在る庭に面した部屋に通され、人手がなく茶の一つも出せずすまないと桂は謝った。

「私で宜しければ用を申し付けて下さい」

「君は、確か大津で」

「はい。女中をしておりますお京と申します」

「帰れと言ったのだが、女手がなくては困るだろうと付いて来てくれた」

「そうか。だが長旅で疲れているだろう。茶は我慢できるから、まずは体を休めなさい」

「お茶を入れた後でそうさせて頂きます」

「なら、頼もう」

お京が出て行くと、桂は疲れた顔を一層暗くした。

「折角来てくれたと言うのに、ちゃんとした持成しもできずに申し訳ない」

「気持ちだけ頂いておきます。それより、関所や町の様子はどうした事なのかお聞かせ願いたい」

「うん、そうだな。私が京から戻った翌月の事だ」

元治元年八月四日。

イギリス・フランス・オランダ・アメリカの四国連合艦隊の来襲が近いことを知った藩主毛利敬親は、海峡の通航許可を出して戦争を回避しようと、伊藤俊輔を交渉に向かわせたのだ。しかし時はすでに遅く、四国連合艦隊は陸軍千三百五十名の戦闘態勢を整えており、交渉は受け入れられず、翌日になって艦隊は長府城山から前田砲台、壇ノ浦砲台へと砲撃を開始した。

「応戦も空しく、上陸した敵兵に各地の砲台が占拠され数時間で陥落してしまった」

四国連合艦隊の砲撃と新式銃の威力を初めて知った、と桂は肩を

落とした。

二箇所の砲台を占拠した艦隊は、次に赤間関へ兵を上陸させた。結果は同じ。劣勢を強いられた長州軍は高地へ撤退し、彦島砲台は艦隊からの砲撃で壊滅に追い込まれた。

「夷国を追い返した経験もあり、藩庁は今回も勝てると高を括った。その結果がこの始末だ」

語る言葉に、いつもの覇気は感じなかった。

「高杉くんは用があると言っていたが」

「うん。状況の不利を見て取った重鎮らがね、晋作を呼び戻して四国との交渉に当たらせただ。尻拭いに担ぎ出されたと知っているだろうに、文句一つ言うでもなく嬉々として出て行った」

「高杉くんらしい」

「僕も共に行くと言ったんだが、こんな状況では君達が気を使い帰ってしまうと、追い返されてしまった」

それも理由だろうが、第一に桂の負担を少しでも少なくしたい高杉の配慮が大きいだろう。

「関所の騒動は、戦で逃げ出した者達のものか」

「うん。京や江州から来た商人が大半だ。店が閉まってしまい城下町に混乱が生じているが、出て行く商人から敬親公が物資を買い上げて下さったから、しばらくはなんとかなる」

大変でしたね。頑張って下さい。どんな言葉を口にしても気休めにすらならないだろう。だから和奈は目を閉じて話を聞くしかできなかった。

「砲塔の火力、飛距離、蒸気船の速度。どれをとっても凄いとしか言えない相手に、長州海軍も奮闘した。しかし敵艦を沈めるどころか撤退させる事も敵わなかったのに、我方は一隻を沈められ、残る二艦も大きな損傷を受けるに終わった。上陸戦も内地まで攻め込まれ砲台は破壊後に占拠された。そればかりか、奴らは民家までも悉く焼き払った。これを惨敗と言わずして何と言おうか」

「同盟を急いだ訳はこれか」

「夷国からの攻撃はある程度想定していたからね。一端だったのは確かだ。だが、薩摩が援軍をと兵を出してくれたとしても敵う相手ではなかっただろう」

たった四日間だと、桂は悔しそうに呟いた。

「後は交渉結果を待っての対応になる。だから晋作が戻って来るまでは、僕もここでゆっくりさせてもらおうよ」

そうそう、と桂は懷から紙を取り出すと武市の方へ差し出した。

「早速で申し訳ないが、これの説明を願えるかな？」

渡された紙に目を通した武市は、震える手で紙の両端を握り締めた。

「ここまで我らが憎いか」

土佐勤王党が辿った末路は哀れなものだった。

勤王運動のためだけに藩政改革を企てた罪で拷問された間崎哲馬、弘瀬健太は罪を認めて獄内に於いて斬首され獄門となった。その他二十二名も、それぞれ言い渡された罪状を認め上河原で斬首となり獄門の刑に処せられてしまっていた。

「郷土の者は・・・切腹すら、させてもらえなかったか」

唇を噛み締め拳を震わしている武市を見るに堪えなくなり、桂は視線を畳みへと落した。信じて進んできた道が悲惨な結末を迎えるのは、自分が死ぬ事よりも辛い。その辛さを桂は痛いほど理解できた。

「君の名もあったから肝を冷やしたよ」

武市は君主に対する不敬行為という罪状で、自白無しで南会所大広庭にて切腹。留守居組で上士に取り立てられていたため、一人だけ切腹となったのだ。以蔵は他の者と同じく河原で斬首と書かれている。

何故二人は逃げ出せたのかと問うと、武市が事の顛末を語って聞かせた。

「大久保さんが動いたか」

和奈が半次郎と共に救出へ出向いた事は、取りあえず端に置いた。

今回ばかりは良くやったとしか口にできず、そう褒めてしまうと今後の行動を容認する切欠となると思ったからだ。

「後藤殿が勤王党を弾圧し、反政派を一気に締め出しにかかったのだろう」

「そう考えるのが道理だね。ともあれ、君達が無事だったのはせめてもの救いだ」

「片目となったのは幸いだった。追っ手を撒くには都合が良い」

幸い、という言葉で和奈は息を飲んだ。自分のせいで片目を失ったのだ。責められこそすれ、幸いだと言われる事ではない。

和奈の顔を覗きこむ様に桂が体を前へ屈ませ、武市も下を向いた顔を見下ろす。

「そんな顔をするな。おまえの命の代わりだと思えば安いものだ」
「安くなってるんです！」

「甘やかしてもらっては困る。君が斬られたのは誰のせいでもない。和太郎の腕が至らなかったせいだ」

「そうです」

なにを言うのかと武市が桂を睨む。

「血気に逸って行動するのがおまえの欠点だ。大久保さんが助力がなければ彼を助ける事も叶わずに、おまえは闘死していた」

「はい・・・」

「そこを良く考えなさい」

小さく笑った桂は武市に向き直った。

「君達二人に提案があるんだが、聞いてもらえるかな」

「提案？」

「無事だと判った後、二人の身柄を長州で預かってはどうかと晋作と話をしたんだ」

土佐で人望を集め、策士として頭角を現した武市を抱えられるのは、これからを考える上で桂にとって得策以外のなにものでもない。
「長州で？」

「ああ。だが見ての通りこんな状況だ。付け加えるなら長州は朝敵

となつたままだ。だから君達の意見を聞いてからとまだ事を進めていない。安全を考えて大久保さんに頼む手もあるからね。どちらにせよ、尽力はさせて頂くよ」

「征伐を前にして薩摩には付きたくはない。長州には縁ある者も多いゆえ、これからを生きるに不便もなからう。桂さん達の申し出に甘えさせて頂きたいと思う」

「存分に甘えてもらつて結構だよ。和太郎も居ることだしね」

武市は顎を引きながら、ちらりと横を見てから桂に視線を戻した。
(なにを言い出すのやら)

「あの」

「ん？」

「西郷さんって人と、大久保さんて同じ薩摩なんですよね？」

幸い和奈は他の事を考えていたようで、武市の言葉には気づかなかつたようだ。

「敵同士なんですか？」

「敵、とは少し意味合いが違うな。どこ藩でも身内に保守派や改革派、過激派などと言つた思想を違える派閥ができるものだ。長州も俗論派と呼ばれる保守的思想を持つ派閥と、革新を考える者が集まる正義派とがある。思想が異なると言つても互いに敵だとは思っていない。薩摩も同じだ。西郷さんは倒幕には消極的意見を持つ佐幕派で幕臣だが、大久保さんは倒幕派だ。意見の対立もあるだろうが、二人は大の親友だと噂に聞こえてきている。ただ、自分の抱く意見が異なるだけ、互いに切磋琢磨しているだけだ」

国会でも幾つかの党があり、異なった主義主張を掲げ国政に携わっている。それを藩内部に置き換えて考えてみるとすんなり理解できた。

「なるほど」

意見の相違を力で解決するのではなく、話し合いの場を持つて互いの意見を受け入れ、最善策を導き出すのが大切なのだと説く。

「同じ日本人同士で争っている時ではないと、判る者が少ない現状

は悲しむべきものだ」

「だから、人が沢山死んで逝く」

「そうだね。僕達か目指す国作りは、地位身分を気にする者にとって不安材料でしかない。刀に頼って生る武士も然り。反感を抱くのは至極当然のことだろう。それが争いを生む要因となっているのも確かだ」

どちらが悪い訳ではない。命を懸けて自分が決めた志を貫ぬいて生きているだけなのだ。

少しずつではあるが、この時代の情勢が何とか見え始めた和奈は、自分で大した進歩だと嬉しくなった。

「さて、身の振り方も決まった事だし、硬い話しは是までにしておこう。お京さんに食事の用意を頼んでくるから待っていてくれ」

桂は、ポンつと武市の肩を軽く叩いてから障子を開けに立った。

「ああ、そうだ。お二方の名はどうすればいい？」

武市は手形に記された名を伝えた。

ありがとう、と返すと障子を閉めて行った。

「変名は使わないんですか？」

「変名で俺達だと知る者もいるからな。わざわざ危険の種を撒く必要もあるまい」

「ああ、そうか」

進歩したと自分で思ったのは束の間だったと、今度は肩を落とす。その様子を見ていた以蔵は、気付かれないように笑いを零した。

「長州から再出発も悪くないと二つ返事をしてしまったが、おまえも依存はあるまい？」

先ほどから様様な面相を作り出して居る和奈をそのままにして、武市は後ろで笑っている以蔵に確かめた。

「あなたの袂でこれからも刀を振るえるなら、依存などあろうはずありません」

「棲めば都。骨を埋める場所があるのは嬉しいものだ。とは言え、郷里でないと悔やむ心も捨て切れぬのも本音だがな」

眼を失ったあの日、どこでどう間違ったのかと真剣に考えたものだ。

己が信じて貫いてきた道は、土佐勤王党の壊滅よりも前に違えてしまっている。土佐から離れられない者に何を説いても、それは裏切りでしかない。だからと足を止めることはできなかった。

今回の事で死んで逝った者たちに報いるためには、足掻いてでも歩み続けて行くしかない。それが供養になり罪滅ぼしになると信じて。

日が沈み、薄闇が空を覆い出した頃、夕餉の支度が整った。

忙しく動き回るお京を、以蔵がおまえもここで食えと袖を引っ張って座らせた。

「隣家の方が手伝いに来てくれますし、私は台所ですませますから」

「手伝いが来たからいいと言ったんだけどね」

「旅の疲れもあるだろう。体を休める意味で、客人に甘んじではどうだ？」

武市も進めたが、お京は被りを振って断りを入れた。

「とんでもございません。お言葉だけ頂戴させて頂きます。あ、ご迷惑でなければですが」

「それこそとんでもない。人手がないから助かるよ」

それならと、お京は持って来た膳を皆の前へ並べ始めた。

膳には山の幸や魚、煮物など十分な料理がこしらえられていた。

材料も揃い難いのによく作れたものだと桂も感心している。

「これはりっぱなお嫁さんになるな。ねえ、岩村くん」

「なんで俺に聞くんですか・・・」

顔を真っ赤に染めた以蔵は、茶碗と箸を持つと黙々と食べ始めた。「おやおや」

人斬りの異名を持つ男の姿ではない。初めて以蔵と会った時の棘とげしさも今はすっかり消えている。武市にしても、天誅と反対勢力である幕臣の暗殺を企てた頃の面影はなくなっている。

小鉢の並んだ膳を二つも出され、残さずに全部食べた齒和奈は、箸を置くと根を上げた。

「もう、食べれません・・・」

「小食だな。しっかり食べないと育つものも育たないよ」

「もう無駄だと思います、はい」

食事が終ると今度は酒が膳に並び、和奈もたまにはと出された酒に口を付けた。

「賑やかな酒もいいが、知れた者だけで飲む酒もまた美味しいものだ」酒が苦手な武市は舌を濡らす程度に留め、代わりに以蔵が水のように銚子を空けていった。

長旅の疲れと、久しぶりの酒で心地よくなった和奈は、半刻（一時間）も経たないうちにうつらうつらと船を漕ぎ始めた。

「もう部屋へ行って休みなさい」

肩を揺すられ、どうにも眠気を払えないと思った和奈は桂の言葉に素直に従い、一礼してから覚束ない足取りで部屋を出て行った。

「俺もこれで下がります」

以蔵もそう言って部屋から出て行くと、急に静かになった席で武市と桂は膝を付き合わせて口に酒を運ぶ事になった。

武市は困った。酒の席とは言え相手は桂だ。気軽に談笑できる関係でもなく、かと言って時勢を論じ合えば夜が明けてしまいかねない。

桂も同じ事を思っていたのか、しばらくはどちらからも口を開かなかった。

手元の銚子を覗き込んだ桂が、くくつと笑った。

「大津での件で危惧を抱いたが、あの子はちゃんと自分の進む道を選んでいるようだね」

「そうしなければならなかったのだらう」

そうか、小さく呟くと止めた手を下ろした。

「だが、君が側に居てくれるのなら安心だ」

「私は」

「女子だと、君も判っているんだろう？」

その問いに、武市は桂から視線を外した。

「あの子も、君が気になって仕方がない様だしね」

「あれにとって、俺は師ですから」

「おやおや。そんな言い訳で誤魔化せると思っているのかい？」

前にも思ったが、やはりやりにくい相手なのは変わらないと苦笑する。

「君に指南を願ひ出たのは良かった。そう思う事しておく。あとは」

細めた目を武市に向けて、桂は静かに頭を下げた。

「桂さん!？」

「新しい時代を向かえることができた暁には、あの子を別な道へ導いてやてくれ」

言葉の意味を即座に理解した武市は、そ知らぬふりで何の事だと尋ねた。

「この僕が頭を下げているというのに、素直ではないね」

「心はすでに決めている」

「そうか。なら、要らぬ世話をやいてしまったようだね。すまない」
そう言つて困り果てている武市をそのままに、桂は手にした酒を飲み干した。

翌日の朝早く。四国連合艦隊との講和会議を終えた高杉が桂の家にやって来た。

「おう、元気だったか和太郎」

変わらぬ様子で入って来た高杉は、武市と以蔵を見て幽霊じゃないだろうなと喜んだ。

「事情は後で小五郎にでも聞くとして、とにかく誤報で良かった」

「色々と手間を掛けさせ、申し訳ない」

「気兼ねなどいらん。幸い、藩内はゴタゴタ続きなんだ。二人分の身元くらい小五郎が誤魔化してくれる」

それは戸籍を捏造すると同意である。公文書偽造に当たる事をやるにはそれ相応のリスクも伴うはずだと和奈は不安に思ったが、武市や以蔵は平然と座っているので問い詰めるのはやめにした。

「よく獄から出られたものだな」

「それよそれ。俺も今度こそ獄から出れんと腹括ってたんだがな。夷国と幕府を前にして、大殿様も困り果てたんだろう」

征伐は回避できない所まで来ており、幕軍を迎え討つなら諸隊を動かすのに欠かせぬ高杉を、獄に留めておくのは得策ではないと判断した重鎮達が恩赦を出したらしい。

「で、どうだったんだ？」

「どうもこうもないさ。最終的に彦島の租借を持ち出してきやがった」

「それ見たことか！ 領土が夷国の手に渡る政策はもつての他と注進したと言うのに！」

「俺に怒るな。下関海峡の通航と許可、船舶の安全の保証を確約したんだ。一部とはいえ、日本の土地を夷人にくれてやる道理なんぞない」

「で、どう交渉したんだ？」

「ふん。聞きたいか？ よく聞いとけよ」

ニヤリと高杉が笑う。

「臣安萬侶言す。夫れ混元既に凝りて、氣象未だ效れず。名も無く爲も無し。誰か其の形を知らん。然れども乾坤初めて分れて、參神造化の首と作り、陰陽斯に開けて、二靈群品の祖と爲りき。所以に幽顯出入して、日月目を洗うに彰れ、海水に浮沈して神祇身を滌ぐに呈れき」

「ちよつとまで・・・」

額を押さえた桂が朗々と語る高杉を止めた。

「おまえ、それ古事記だろう・・・」

「いかにも」

「本気で語ったのか？」

武市もあきれ果てている。

「俺はいつも本気だぞ！」

「・・・どうなったんだ、結果は」

「有耶無耶になった」

「だろうな・・・」

会話を付いていけない和奈は、とりあえず桂と高杉の位置と長州藩の現状を把握しようと思いを巡らせていた。

京都市に天皇が居て、東京都には総理大臣が居る。天皇を主とする新国家を作るために、山口県は鹿児島県と同盟を結んで、国会を潰そうとしている。その一方で外国を追い払うための努力をしたが、四外国相手に戦となり、一県で立ち向かった山口は結果、負ける事になった。そう置き換える事で、流れが掴めた。

「おい、なんて顰めっ面してるんだ」

「えっと、頭を色々整理してました」

何を整理するのかと問いかけようと、顔を和奈に向けた高杉は体を曲げると咳き込み出した。

「高杉さん!？」

口を押さえ、止まらぬ咳に付いた腕を折り前屈みなった高杉の脇に、血相を変えた桂が駆け寄って行く。

「大丈夫か？」

「・・・ああ・・・海風に・・・当たり過ぎた・・・」

「風邪を引いたんだな、阿呆が」

風邪にしては桂の慌て振りは普通ではないと、武市は顔を強張らせた。

「もう休め、晋作」

心配気になっている和奈に、大丈夫だよと言い、桂は高杉を連れて部屋から出て行った。

「風邪なら、数日安静にしていれば治る」

和奈の不安を和らげようと言ったが、桂の様子からではただの風邪ではないと判る。

咳を伴う病で、桂が慌てる程のもの。武市が思い当たる病は一つ
しかなかった。

其之三 接点

夏が終わり、季節は秋へと過ぎようとしていた。

長州征討の勅命が出されて間もなく、幕府は前尾張藩主徳川慶勝を総督に置き、福総督に越前藩主松平茂昭、参謀に薩摩藩士西郷吉之助を就かせた。

決定を受けた西郷は、征伐前に勝海舟に会う意向を固め、九月に入って神戸へと出向いた。

勝は薩摩のみならず、土佐やその他多くの脱藩者を塾生にし神戸で海軍塾作った幕臣だ。

神戸海軍操練所を設立させ、神戸を東洋で一の湾港にと画策した。しかし、勝を好まない幕臣からの横槍が入り、軍艦奉行を罷免されて今は塾居ちつきよの身となっている。

奥座敷に通されている西郷の所へ、勝海舟が遅くなったと姿を見せた。

「よう来なすった。某が勝海舟と申しやす」

畏まり頭を下げる勝に、西郷は起立し同じく頭を下げた。

「私は西郷吉之助と申します。こん度は是非ともご意見を拝聴致しと、ご無理を言うて時間を作って頂き、ありがとうございます」

「良かったら、堅苦しいのは抜きにしましょうや」

参謀として薩摩を率い長州へ向かうのだと西郷は言った。

「あんたが行かれるのかい。で、こんな塾居者になにが聞きてえと？」

「いけんお考えになっておいでになるか、です」

「考えねえ。なら、ちっと聞いてもらおうかね」

勝は腕を組み、目の前の巨軀な男に笑いかけた。

「おいらは、このしらけて来た国をなんとかせねばと考えてるんで

すよ」

「それはおいも同じです」

「幕府が夷国からの圧力を受け、対外政策の意見を諸藩に求めなかったのが、そもその間違いだったのよ。あれからこの日本は混乱を始めた、違ukai西郷さん」

井伊が起こした安政の大獄のことである。

「その国内の混乱を収むうが幕府と考えもうす」

「この期に及んで、権勢を取り戻そうと躍起になってみても、国内在藩一致の協力なくして事態の收拾は図れねえとおいらは思ってる。倒幕に傾く藩も出ているのは事実だろう？ 長州討伐は火に油を注ぐ事にしかならねえ」

長州と薩摩の密約を知っているのか、意味ありげな眼で西郷を見る。

「小せえ事にいちいち拘っているようじゃ、幕府も先が見えると言うもんだ。幕府だ、薩摩と言っても所詮同じ日本という国が在ってのものじゃないか、違ukai？ 長州との戦は夷国が介入する口実をあたえるだけだ。そうになったら、それこそ一大事というもんだ」

「仰う事はゆうと解いもうすが、幕府の建て直しを謀うのが目下の課題だと思っておいもうす」

それも間違いじゃないかと、勝は目を伏せ腕を袖に入れる。

「平和呆けた幕臣は役になんぞ立たないよ。国政そっち退けで、手前勝手な身の保身に走るばかりの馬鹿揃いときてる。倒幕と諸藩が騒げば、怠慢が過ぎたのを棚上げし戦をおっぼじめる。そんな役人が国を台頭してるのが今の日本なんだ。まったく、いつからこんな情けない国になっちまったんだろうなあ」

幕政批判を平然と言ったのける勝に、西郷は何と言えいいのか判らなかった。

だが、不思議と嫌悪感は沸いてこない。道理を考えれば、勝の喋る内容は間違っていない。幕臣として真剣に国の行く末を憂いている勝に、西郷は好意を抱いた。

「馬鹿共の為に命差し出すなんざしたくねえ。したくねえが、日本という国は守りたい。だから、長州を敵に回さず、話し合う余地があるなら説得し、他の諸藩も巻き込んで政を運び国を強くしなくちやいけねえ。それがおいらの本音だ」

諸藩による議会政治確立の必要がある、と勝は言ったのだ。

「話しはゆうと解いもした。おいに今回の討伐は回避しろと、勝さあは仰るのでしょうか」

勝はそうではないと笑った。

「西郷さんも持論はお持ちだろ？ 意見を聞きてえって言うから喋ったまです。おいらの意見とおまえさんの持論がどう噛みあうかなんざ解らねえが、一番いい解決策を考えてもらいたいんだよ」

西郷は考えを巡らせている。

「こんな機会なんてそうそうあるもんじゃない。西郷さん、あんたを見込んで言うんだが、一つ頼みごとを聞いちゃくんねえかい」

「勝さあがおいに頼み事ですか」

「なにね。征伐とは関係ないんだが、操練所がなくなったのは知っていなさるよな？」

「ええ」

「行き場をなくしちまった奴らが出てるんだが、そいつらの身を頼まれてやってくんねえかい」

海軍操練所には脱藩者が多いと知っていたが、薩摩の者もかなり在籍していた。

「頼みでなくとも、お引き受けしもうす」

「助かったよ。どうしたもんかと考えあぐねちまっただところなんだ」

「しかし、勝さあは多き事を考えとうんですな」

「やるだけの事はやって、後の事は心の中でそっと心配していたら良いんだよ。どうせなに考えたって、なるようにしかならないものだ」

そう言い、冷めたがお茶の一つでも飲んで行ってくれと湯飲みに

手を出した。

暫くはとりとめのない話をしてから、そろそろ帰りますと西郷は席を立った。

「色々ご意見を賜れたのは、こん西郷、本当に嬉しかちゅうこつでした。これから、いけん行動するかはおいの考で決め、日本のこれからを考えて行きたいと考えます。今日はありがとうございました」

それがいいよと勝は首を鳴らし、西郷を見送りに玄関へと出て行った。

幕府は諸藩に対し、出兵要請を含む御布令を出した。

いくら命とは言え、藩財政に圧迫をかける出兵要請と参勤交代、それに加え妻子の江戸在籍復活に腹を立てる諸藩が大部分であり、財政難を圧してまで出兵に応じ、長州討伐を断行して幕府の権勢を回復させてしまつては、更なる無理難題を押し付けられかねないとの懸念もある。

この状況下、將軍自ら兵を率いて出陣すると聞いて、士気を上げる藩は少なく、反対に、芸州や因州などからは、日本へ攻撃を開始した四国艦隊相手に長州藩のみが戦い、日本を守らなければならぬ幕府がこれに助力もせず、討伐に赴くとは仁後に落ちる愚行だと避難の声を上げていた。

薩長の同盟を一刻も早く締結させたい龍馬だったが、肝心の西郷とは長州征伐直前もあり会う事が叶わず、焦燥感にさいなまれながら薩摩藩邸に居座っていた。

西郷と会えるまでは動くなと釘を刺し、中岡が京を発った数日後、藩邸に神戸海軍塾の塾生達がやって来た。

「なぜ海軍塾生がここへ来るんですか？」

「吉之助が引き受け、私に押し付けたからに決まっているではない

か」

難儀だと言いたげな顔で、大広間に居並ぶ男達を見回す。

「西郷さんが？　なんでまた」

「薩摩出身の者も居るからだろう。脱藩している訳ではないゆえ、無下に断る事もできん」

それだけ言うと、むさ苦しい男の顔はもう見たくないと、自室へ引き上げて行った。

塾生が来た日から、龍馬は変名を通し土佐弁も使わなくなった。どこから情報が漏れるか判らないためである。

塾生の中には見知った顔も居たが、様様な者達が集まる場所で龍馬の名を口にする者は居なかった。土佐から塾に入っている者のほとんどは脱藩者だ。その変の配慮は心得えている。

「才谷さん」

赤井が廊下をやって来ると、縁側に足を下ろし、ぷらぶら揺らしている龍馬の横に腰を落ち着けた。

「修吾郎か、どうした？」

「塾生の方達とは知り合いなんですよ？　いいんですか、こんな所で油売ってて」

「油を売るなら長崎の方がいいに決まっとる」

赤井は、これは駄目だと肩を落とした。

気抜けした龍馬は性質が悪い。いつ何時自分の目を盗んで藩邸を飛び出して行くか知れたものではない。

実際に二度、龍馬は逃走を図っていた。いずれも藩邸の監視に付いていた新兵衛によって発見され、未遂となっていたが、三度目が無いとは言い切れない。

「西郷さんも戻って来ないしなあ」

事あるごとに、大坂へ出向くから会ってくれるよう伝えて欲しいと大久保に詰め寄ったが、西郷から会うとの返事が来なければ無理だと突っぱねられていた。

「慎太が消えて、おまえも暇になっただろ」

「稽古と読み書きを覚えるので手一杯なんです、暇なんてありませんよ」

「ほう」

最初に会った時より、幾分物腰が柔らかく丁寧になったなと龍馬は思った。同年代の者達と接することで、馴染み出しているのは確かだろう。礼儀作法も、大久保が近くに居るせいで、必要と覚えたに違いない。

「悩みといえば、大久保さんに啖呵切ってしまったじゃないですか。嫌われるのは解ってるんで、正直ここにいずらいと言うか」

廊下ですれ違って、挨拶をしても大久保は視線を合わせる事みなく素通りする。大広間に姿を見せる事はないが、その存在自体が赤井にとって悩みの種となっていた。

「あの人は誰にでもあだから、気にする事はない」

そんな事はないと、赤井は思った。

現に、和奈に対する態度は自分に対するものと違う。もちろん、龍馬に対しても同じだ。

大久保は自分が認めた者には誠意を持って事を運ぶが、関心のない者に対しては感情を見せないどころか、相手にすらしない。

それが赤井の抱く大久保像だった。

「いっそ、和太郎んとこへでも行ってみるか」

「駄目ですよ。ここから動かすなと慎太さんからきつく言われてるんです、見逃したとなったら、俺ぶっ殺されます」

泣き顔そうな顔でそう訴えられた龍馬は、ぶうと口を尖らせた。

「そんな顔しても駄目なのは駄目です」

「むう。しかしのう、柳川が気になって仕方ないんだ」

間崎らに下された処罰について、すでに長人の手で桂にも知らされていだろう。事を知った後、武市がどう動くのかが気掛かりでならなかった。

「心配ないですよ。あの桂さんも居るんですから」

それはそうだ、と龍馬は笑った。

「才谷様」

客が着ていると、おみつが知らせに来た。

「俺に？」

「はい。才谷様に会いたいと、勝海舟様がおいでになられております」

おみつは小声で耳打ちした。

「先生が！？」

「先に大久保様へは伺いを出しています。こちらにお通ししてもよろしゅうございますか？」

「おお、早く通してくれ！」

（勝海舟！？ また大物がでて来たよ）

次から次へと歴史上の偉人が現われる。

大業を成した男達が生きた時代で、その中心となった坂本龍馬の側に居るのだから仕方ない事ではあるが、赤井にしてみれば雲の上の人ばかりなのである。

（あいつには解らんだろうなあ）

勝と聞いても、誰？ と和奈は首を傾げるに違いない。剣術を習っているのに、半次郎の名前を聞いても驚く素振りを見せなかったのだ、歴史などほとんど覚えていないのは明らかだった。

「久しぶりだな」

部屋に入って来た勝に、お久しぶりですと、龍馬は頭を下げた。

「ああ、やめてくねえか、こそばくっていけねえや」

「あはははっ。先生は相変わらずですね。しかし、またなんで京へ？」

「いやなにね。西郷さんにちっと頼みごとをしたもんだから、気になってよ。おまえさんもここへ厄介になっていると聞いて、居ても立っても居られなくなって来たんだよ」

嬉しそうに身を乗り出して頷く龍馬は、まるで子供の様に見えた。「ああ、塾生の件ですか？ なぜ西郷さんがって思いましたが。会

われたんですね」

「一度ね。いい男じゃないか」

「一度？　それで塾生を引き受けたんですか。即断実行とは、さすが器の大きい人は違いますね」

何かを思い出した勝は手をぽんつと叩いた。

「そういや、西郷さんて人はよくわからん人物だと、おまえさんは言ったね。もし馬鹿なら大きな馬鹿で、利口ならば大きな利口の男だと。なんてことはない、利口の方の男だったよ。ちゃんと自分が進むべき道が見えていなさる。いや、なかなか大したものだよ」

そうでしょうそうでしょう、と肩を揺らして喜んでいる龍馬を見て、ふっ、と笑った後、視線を庭へと投げた。

「・・・間崎さん達の事は聞いたよ」

顔から笑みが消え、強張った体で悲壮に暮れた龍馬を見て勝は眼を細めた。

「ほんに、わしは力がのうていかん」

呟いた声は、その風体に似合わない弱い響きだった。

「大事を成すには命が長くなってはだめだ。おまえ達はその肩に死んだものの想いを背負ってるんだろ？　落ち込んで足を止めてては、先に逝った者達に申し訳がないじゃないか」

それは解っているんですけど、いつになく意気消沈している龍馬に、勝はいけねえいけねえと繰り返した。

「落胆するよりも、次の策を考える方の人間だ。そう言ったのはおまえじゃなかったのかい？」

はっ、と頭を上げて勝の顔を見た龍馬は、悪戯を見つけられた子供の様に頭を掻いて笑った。

「ええ、そうでした。申し訳ない」

「まあ、こんな世の中だ。知った顔が明日にはもうな居ないなんざ、ざらにあるこった。哀しい事だけどな。だが、おまえさんはそれを変えたいと言ったんだ。なら、躰つまついてちゃあいけねえよ」

「ぞうでした。まっこと、お恥ずかしい限りです」

幕臣である勝と、倒幕を目指す坂本龍馬の関係が赤井には不自然に見えた。敵同士である立場でどうやって信頼関係を保っているのか、それが理解できなかったのだ。

「ん？ その後ろの坊主は誰だい？ そう言や、慎太の顔も見えねえが、居ないのかい？」

「ええ、慎太は京を出ました。この男は赤井修吾郎と言って知人から預かってます」

ほう、と赤井へ向く。

「初めまして、赤井修吾郎です」

「おいらは勝海舟ってんだ、宜しくな。こいつとは海軍塾からの腐れ縁なんだ」

「海軍塾、ですか」

歴史を知っている。とは言え、細部に渡って学んだわけではない。大まかな流れと、大きな事件、それに関わった人物しか知りえていない。海軍塾と言われても、龍馬と勝の繋がりを連想させる知識はなかった。

「懐かしいねえ。あの日の事は、今でもよく覚えてるよ」

何を言い出すのかと、龍馬は慌てた。

「べつに疚しいことじゃないだろう」

「塾生だったんですか？」

「それはそうなんだが。最初はね、おいらを斬るつもりでやって来たんだよ」

「えっ？ ええ？ 斬りに！？」

斬りに来た相手とこうして談笑する仲になる経緯を、上手く片付けて収める事ができない。

「なぜ、斬りに行ったんですか？」

遣米使節の一員として海外に渡り、情勢を実際に見聞きした勝は、国内に広がる平明な攘夷論を批判した。列強国に対するには海軍創設の必要性和軍の強化、開国が必要であると説いていた。

勝の噂を聞きつけた龍馬は、交流のあった越前福井藩主松平春嶽に話しを是非とも聞きたいと、紹介状を書いてもらい勝を訪ねた。話しを聞いて、日本を外国へ売ろうとしている幕臣であれば、斬ってやろうとの心構えを持って。

「松平殿の紹介とあっちゃあ、会わないわけにはいかねえ。だから家に通した。話しを聞きたいと切り出したが、斬るつもりがあるのはすぐに解ったよ」

「ばればれじゃないすつか」

「阿呆いうな。気構えを見せたただけだ、気構えを」

大きな笑い声が響いた。

「いい目を持ってる男なんざそうはいない。だからよく覚えるのさ」
「でも、どうして勝さんを斬ろうとしたんですか？」

「相手を調べもせず、攘夷断行を国是にしようと動く者は、相手が如何に強大であるのかが解ってない。こいつもそんな一人だった。攘夷と駆け回る中、おいらの事を聞いて、西洋に骨抜きにされた幕臣と思って来たんだ」

「もうええ、よしとうせ」

「いいじゃねえか。ここに、おいらの話を聞きてえって奴がいるんだからよ」

そう言って、興味津々になっている赤井に笑いかけた。

「今の日本は海外に餌をタダでくれてやってようなもんだ。海外で金や銀と言えは驚くほどの価値がついてる。幕府や諸藩相手に商売をして金銀を手に入れ、海外で売る。奴らにとっちゃ、これほど旨い商売はない。その利益で奴らは新しい武器や軍艦を作り、国を強くしているんだ。なら日本も貿易を發展させ、日本を強くするため沿岸の強化、海軍の増強を必要不可欠な課題として見なくちゃならねえ。いい例が亜米利加だ」

渡米した時に見た大陸の近代化、沿岸に敷かれた砲台の堅固な砦は、勝にとって衝撃でしかなかった。アメリカに攻め込まれれば、

江戸も京も、一日として持ち堪えられないだろう。結果、日本は清国のように占領されてしまう。

勝が帰国後、富国強兵を基盤に、海軍強化に奔走したのは、至極当然の事だが、幕臣の多くは、絵空事として本気で知り合おうとはしなかった。たった一人、家茂だけは勝の意見を重要と考え、勝の望むままにさせた。

それも過去の話しである。既に海軍局は閉鎖となり、勝が目指していた日本海軍は夢と消えた。

「意見の食い違いなんざよくあることだ。肝心なのは、掛け違えたもんをどう上手く元に戻すのかって事なんだよ。だが、それができる者が少ねえ。少ねえから揉めちまって、諍いが起きる」

それがこの幕末を二分する事態を生んでいるのだと、勝は嘆いた。「一時の気紛れで来たんじゃないと解ってたから、話しても通じない時は、斬られてもいいさと思った」

「直心影流皆伝なのに、簡単に切られてどうするんですか」

もう勘弁と、手をすり合わせて懇願する龍馬を笑い飛ばした。

「その・・・」

赤井が何か言いたそうにしているのを、楽しそうな顔で見る。

「えっと、才谷さんは、その、敵側なんですよね？」

「敵？ ああ。幕臣のおいらがこいつの所へ来るのが不思議なのかい」

「はい」

「おいらの敵は、志士でも倒幕派でもない」

「えっ？」

「外国さ」

若い者が増えるのは、おまえにとってもいい刺激になるだろうと、勝はそれ以上語らなかった。

「おまえさん達とゆっくり酒でも飲みたいところだが、おいらもやる事があるんで今日はこんくれえで失礼させてもらうよ。時間を取らせてすまなかったな」

海軍塾はもう解散になったのに、何を急ぐのかと聞く龍馬に、いちちおまえに教える必要はないと勝は部屋を出て行ってしまった。二人が消えた部屋で一人、赤井は父親の事を思い出し、深いため息をゆっくりと吐き出した。

長州では、内政の混乱を収めようと俗論派が躍起になり、藩政を抑えたい桂達と対立する様相を見せ始めていた。

藩庁から戻って来た高杉は、桂が沢山居て意見が纏まらず困ったと愚痴を吐いた。

「そこまで僕は堅くなどないよ。一緒にされるのは、どうも気分が悪い」

桂はぼやいた。

「今回の惨敗で、棕梨が政権を持って行くのは間違いない」

すでに松下塾系の下級藩士らはその圧力に押され、藩政から後退させられてしまっている。

「俗論派の擡頭たいとうは幕府に恭順する事になりかねん。そうなれば幕府軍の進軍にどう出るか解ったもんじゃない」

薩摩との密約も、幕府軍参謀に西郷が就いているのでは会談どころの話ではない。

「あの時に会合が成っていれば、強硬手段を強いて藩政を手中に収められた」

「今更言ったところで、どうにもならん。俺はしばらく様子を見る。という事でだ、萩を出るぞ」

出てどうするんだと、気拔けた表情を浮かべる。

「機を待つ。お前もどこかに潜伏している。幕府が動き、戦を回避しよう」と棕梨が幕兵を受け入れれば、俺とおまえは斬首だ」

「縁起でもない」

「俺も斬首なんか願ひ下げにしたい。棕梨の出方によっては、奇兵隊を使ってでも藩を取り戻す。それまでの辛抱だ、小五郎」

「奇兵隊ね」

この男の頭の中には、何か策が構築されつつあるのかも知れないが、何も考えていない、という厄介な可能性もあるのは事実だ。

「俺が伝令を送るまで戻って来るなよ」

高杉の体調が気掛かりだったが、何かを決めて動き出した男に、何を言っても無理だと承知している桂は、言われた通りにすると答えた。

「そうだ、和太郎達は俺が連れて行くぞ」

「どうしてそうなんなんだ！」

「荷物が居ては厄介だろう？ お前の事だから、情報収集に駆け回らんと気がすまんだろうから、面倒は俺が見てやると言っているんだ」

そう言われしきっては、沸かした湯を冷ます他はない。

確かに、情報は集めておくに限る。

高杉の言うように、和奈が居たのでは思うように行動できないのは確かだった。

「逃げの小五郎の異名、存分に見せてもらおうぞ」

高らかに笑う声に、庭で稽古に励んでいた和奈と武市が動きを止め、二人の方を見た。

「その言い様だと、すぐなのか？」

「ああ」

「解ったよ。晋作のしたいようにするといい。今夜は和太郎と過ごすいい口実ができたよ、喜んでおく」

おまえ、それは駄目だと慌てる高杉に、それくらいの配慮はしてくれと突っ返す。

「おまえじゃないんだ、とって食おうなんて考えてない」

「あのなあ！」

「そろそろ、おのうさんに会いたくなっただんじやないか？」

「くそ！ 変な所で思い出させるな！」

そう言えばも幾松にも会っていないなど、桂は京に置いてきた女

を想った。

「悪いけど、僕はそうさせてもらうよ。さあ、和太郎に話ししに行こうじゃないか」

けっ、と不貞腐れ、飯の後にすると自室へ引き返してしまった。

「馬鹿な男だ、まったく」

風邪だと言ったが、咳の感じから労咳を患っているのは間違いないと思えた。でなければ、おのうを遠ざけてまで一人で居る理由が見当たらない。

労咳なら、数年後以内に高杉の命はこの世から消える事になるだろう。

踏み留まってはられないのだ。ならば、せめて高杉の志が叶うその日までは、病に息を静めてくれと、桂は願うしかなかった。

征伐を前に、征長総督に就いてた徳川慶勝への目通りが叶った西郷は、芸州や因州を始めとする西国の諸藩から、不満の声を伝える機会を得た。

「乍恐、この度の討伐に於いて、如何したものであるか艱苦致しており、ご説をば賜りたく、参上仕った次第にございます」

「して、我に口述をし、お主はどう挙止したいと申す？」

「是迄が経緯もあり、長州藩に恩顧する諸藩も数多く出ております。加え先の攘夷討の折、幕軍が上洛しておるにも関わらず危急にと出兵も致さず、無勢となった国へ大挙強行するのは、仁厚に凋落す行為であると諫言して来ております」

「お主は討伐をするなと申すのか」

「そうではございません。なれど、今一度、存念致し諸藩の説をば吟味するのも大切と申し上げております」

「諸藩の意向を汲めということか」

「幕政の回復に、寛大な措置も必要かと存じ上げますれば、長州への降伏提言を行って後、進軍の是非をご考慮致されるのも戦法の一

つかと」

慶勝は思案に暮れた。

西郷の言う道理も確かだが、ここで逆賊となった長州へ恩情をかけるのは、諸藩の増長の原因になるとの危惧の念も捨てられない。もしそうなるなら、このまま幕兵を進軍させるべきではないかと思案に暮れた。

「進軍にて情勢を悪化に導くより、降伏させた後、事態收拾を謀る方が西国諸藩の誹謗ひぼうも収まり尊厳も保たれましょう」

長州藩を取り潰す事には反対を提示し、降伏させてそのままの現状維持をと考える諸藩も多い。

攘夷遂行の為には、長府の地理的要所も必要なのである。西郷にとっては廃藩させるより攘夷戦略に取り込む方が、策も多種になるのだ。

「言い難い事を言いよる。よかろう西郷よ。お主に長州への降伏の交渉を任せよう。言うて傳かすくならそれも良し、断れば即座に攻め入れば良し」

「寛容なるご配慮、恐縮にございます」

とりあえず開戦を回避させた西郷は謝罪を引き出すべく、藩主毛利敬親に書簡を送る準備に取り掛かった。

其之四 離別

三条へと使いに出て来ていた赤井は、この時初めて新撰組の一行を見た。

水浅葱の羽織を纏い、町人らから冷たい視線を受けながらも、堂々たる振舞で道の真ん中を歩いている。

じっと見ていると、一団の先頭を歩く男が振り向いた。

（やばっ）

しかし、足は凍りついたように動かなかった。

殺気を感じてではなく、視線を感じて顔を向けた先に、一人の男がこちらを見て立っていた。

「どうしたんですか？」

「いや、ちょっとな」

目が合っても、動揺もせず、逃げる様子も見せない。

浅葱色の羽織を見て、なんの感情も表していない。それが気に障った。

「皆もう行きましたよ？」

「ん？ ああ」

「いい女の人でもいたんですか？」

くすくす笑う沖田を睨んだ土方の足は、前ではなく横へと動いていた。

（あれは・・・夏だ。初めて人を斬った奴がいたな）

「沖田、先に行ってる」

「やっぱり女の人なんだ」

黙ってると、踵を返し、人ばかりを見回す。

もう男の姿はそこになかった。

「ちっ」

急いで近くの路地へ駆け込んだ。

（女でもねえのに）

と、誰とも知らない男を必死に捜す自分が滑稽に思えた。

幾つか角を過ぎた路地の先に、捜していた背中を見つけた土方は、駆け寄り様にその肩を掴んで引っ張った。

「おい」

振り向いた男は驚いていたが、恐怖の色は浮んでいなかった。

（あの時の男に似ている）

土方はそう思った。

「さっき、俺達を見てただろう？」

土方と目が合い、一瞬だが体が縛られたように動かなくなった。威圧、と言うのだろうか。初めて体験した感覚に、背筋が凍る思いがした。

視線が逸れた隙に、その場から急いで離れたのだが、通り過ぎるまで待てば良かったと後悔する。

「新撰組の人を見るのは初めてだったので・・・失礼だったのなら、謝ります」

「見ただけで斬る訳じゃない。お前、どこのもんだ？」

薩摩は幕府側だったな、と思いながら、薩摩の者ですと答える。

「薩摩訛りがないが、京へは出て来たばかりか？」

「え・・・あ、はい。剣術詮議の許可を貰って来ました」

嘘を付いている様には見えない。しかし、土方の中で何かが引っかかった。

「あの、用事を言い付かっているんで、もう、行ってもいいですか？」

「ああ、呼び止めてすまねえな」

「いえ、俺の方こそすみませんでした」

ぺこりと頭を下げ、身を返した後姿に、土方はもう一度声をかけた。

「そうだ、おまえさん名は？」

「赤井修吾郎といいます。」

「赤井か。剣術詮議で出て来たって言ったな。にら、うちにも師範格が居る。これも何かの縁だ、気が向いたら屯所へ来るといい」

「え？」

「土方の知り合いだと言えぱ待たせてくれる」

追いかけられた相手が、よりにも寄って鬼の副長の異名を持つ土方歳三かと、また疲れを覚えた。

新撰組は幕府側であり、龍馬とは敵対の位置にいる。関わり合うべき相手ではないのに、関わられてしまった。

「顔色が変わったってことは、俺の名前は知ってるって事か」

「噂では・・・その、なぜ俺に？」

「稽古をする場所がないから、使いつ走りなんぞに甘んじてるんじゃないのか？」

そう言って、満足したのか土方は返事を聞く事なく来た道を戻って行った。

好きで使いをやっているのではない。居候でただ飯を食べているのは気が引けるので、できる用事は引き受けているだけだ。

その生活が退屈に思えてきていた。土方の登場は、赤井にとって新鮮な気持ちを抱かせるのに十分だった。

「新撰組か」

会津藩のお抱えの組織。京の治安を守っているのに、人斬り集団と恐れられている。

「土方さんて、若かったんだな」

テレビや映画の土方歳三はどれも四十を越した俳優が演じている。龍馬にしても、桂にしても同じだ。そんな印象が映像で記憶に刻み込まれている。

酷い詐欺だと、赤井は笑う。

治安を守るべき新撰組が、どういう理由で人斬り集団と呼ばれているのか興味を覚え、その理由を知りたくなった。

龍馬達との繋がりも知られていないし、鬼の副長直々に屯所に来いと言ってくれたのだから、一度くらい覗きに行くのも悪くないだろう、そう考えた。

藩邸に戻ると龍馬の姿はどこにも見当たらず、大久保も今日は出かけてしまって不在だと言う。

都合がいいと、おみつに頼まれ物を渡した赤井は、町へと取って返した。

「あの、すいません」

屯所の場所がどこに在るか土方に聞きそびれたので、軒先で箒を片手に掃除をしていた男に聞こうと近づいた。

「なんでっしょろ」

「新撰組の屯所へ行きたいんですが、道がわからなくて、教えていただけませんか？」

男は新撰組の名を聞いた途端、顔を顰め、じろじろと赤井を見た。「すんまへん、角の店で聞いておくれやす」

そう言い、あたふたと家の中へ入って行ってしまった。

仕方なく言われた店で道を聞き、忘れないよう反芻しながら歩き出す。

町人に嫌われるほどの集団なのかと訝しんだ。

土方と話したが、悪評に繋がる言動は出て来ない。

屯所まではかなりの距離があり、途中何度も道を尋ねたのだが、どの町人の反応も似ていた。中には新撰組に入りたいのかと、喧嘩をふっかけて来る者までいたのだ。

「もしかして俺、行かなくていい所に行こうとしてるんじゃないのか？」

【新撰組 壬生屯所】と書かれている札の掛かった門を見つけ、足を止めた赤井は一瞬迷った。

ここまで来たのだからと門の脇に立ち、様子を伺おうと中を覗き込んだ。

「何か御用ですか？」

息が止まる思いで後ろを振り返ると、人の良さそうな男が笑顔で立っていた。

「ええと、俺、赤井って言います！　その、土方さんから来るよう言われて」

「土方さんの知り合いですか」

男は不思議そうな顔で赤井を見た。

「土方くんはまだ戻っていませんから、中で待たれるといい」

「ありがとうございます」

屯所内に入ると、正面に大きな家宅があり、左右に小さな建物が建っていた。左手前には大きな蔵がある。門も騎乗したまま通ることが出来るほど大きく、敷地もかなりの広さがある。

客舎となっていた右家屋の一室に通された赤井は、しばらく待つように言われた。

「はあゝ」

とうとう来てしまったと、部屋を見回すうちに不安が徐々に沸き始める。

（帰る・・・のは今更できないよなあ）

人斬り集団と呼ばれるからには、剣を持った者が大勢いるはずだ。やっぱり帰りますで済むかどうか解らない。後戻りはできないと、腹を括るしかなかった。

半刻ほど経った頃、土方と案内をしてくれた男が障子を開けて入って来た。その後ろから土方がのっそりと姿を見せる。

「待たせたな」

「知り合いなのは間違いないようですね」

「すいませんでした、山南さん」

新撰組の総長山南敬助かと、その姿を見上げた。

紺色の着物に同色の羽織を纏っている姿は、剣を振るうような猛者には見えなかった。どちらかと言うと学者の風貌を備えている。

「では、これで失礼します」

山南はそう言い、障子を閉めた。

土方と二人になると、静まった空気が一気に身体を硬直させた。

「そう堅くなるなって、今から詰問責めにしようって言うじゃないんだ」

口から覗く白い歯が笑っている。

「すいません」

「剣術の修行だったよな。で、腕前はどうかんだ？」

切紙ですと告げると、伝書を貰っているのかと目を見開き、流派を尋ねられた。

「心形刀流です」

ほうっ、と土方は顎に手をやった。

「薩摩は薬丸やくまる自顕流じけんりゅうと聞いている」

しまった、と悔いても遅かった。

「なら、伊庭八郎は知ってるよな？」

「会ったことはありませんが・・・」

伊庭八郎は心形刀流宗家伊庭家の御曹司である。

元治元年、幕府に大御番衆として登用されるとその腕を買われ、奥詰となった。その後、講武所が創られて直ぐ伊庭はここで教授方を務めるようになり、幕臣師弟の武術指導を執っていた。

薩摩者にも幕府に使える者が居る。江戸へ上った折、心形刀流を習っていたとしても不思議ではない。だからか、土方はそれ以上詮索しなかった。

「新撰組の主流は天然理心流だが、神道無念流も居れば北辰一刀流の奴も居る。流派は違うが、支障はないだろう」

「はあ」

「今、隊士達が稽古してる刻だ。一緒に来い」

「参加するんですか？」

「修行しに来たんだろう？」

にやりと笑うと、返事も待たずに腰を上げた土方は、稽古場となつている棟へと赤井を連れて行った。

土方が入ると、一瞬で稽古場の空気が冷えたのが解った。

畏怖の眼差し、恐怖の眼差しが一点に集中している。土方歳三と言う男、一点に。

「楠」

名前を呼ばれて、広間の隅に居た男が振り向いた。

「こいつの相手をしてやれ」

やって来た楠は、その相貌からは新撰組隊士には見えず、女性だと紹介されても、納得してしまう程に華奢な体で美麗な顔立ちをしていた。

「この人は？」

「剣術修行に出て来たらしい。使いつ走りやってたから拾った」

「入隊希望者ですか？」

いいから相手してやれと土方が再度言うのと、楠はめんどくさそうに、解りました、と竹刀を取りに行った。

「あの、入隊希望って・・・」

いつ誘われて、いつ承諾したのかさっぱり検討が付かなかった赤井は、顔面を強張らせて尋ねた。

「まだ隊士に誘った訳じゃないから安心していい。だが、ここで稽古したって事は、そういう扱いを受けるかも知れない、とだけ言うておく」

嵌められたのだと、この時になって漸く解ったがすでに遅かった。もう、新撰組の稽古場に立っているのだから、どう言い逃れをしても、土方の追及を受けずここから出て行くのは不可能と思えた。

「楠小十郎といいます、よろしく願います」

竹刀を赤井に手渡しながら名乗った楠は、すたすたと広間の中央に歩いて行った。

「赤井修吾郎です、よろしくお願いします」

対峙した楠は、どう見ても十五、六くらいの若者にしか見えなかった。

「！」

楠の踏み込みは早く、交わすのが少し遅れていたら、打ち合う事なく面を一本取られていた。

今は余計な事を考えている場合ではないと晴眼に構え、間合いを保ちながら相手の隙を探す。

一瞬、楠の立ち姿に朔月が重なる。

主格は天然理心流だと土方は言った。構えね楠はどうやら神道無念流の様だ。力の剣法であるなら手加減はして来ないだろう。かと言って、力で打てば相手の思う壺になる。

赤井は懷へ踏み込む手前で利き足を軸に左へずれると、一気に薙ぎを払った。

「ぐっ！」

えっ？ と振り返ると、楠が腹を抱えて蹲っていた。

今の踏み込みならば、中段で構えた楠にも受けて交わす余裕はったはずだ。交わせなかったとしても、打ち込みを受け流す事くらいでそうなものだ。

楠を見ていた土方も、赤井と同じ疑問を持っていると、その横顔を見て思った。

「だらしのないな、楠」

土方は腕を組み、唸る楠を心配するよりも、そこに居た隊士全員に罵声を飛ばした。

「だらだら竹刀を振るだけじゃ自分の命なんぞ守れん！」

鍛錬が足りなければ、それだけ自分の命を縮める事になる。相手が手練れとなれば尚更である。

「一瞬の隙、気の迷い、躊躇は己を滅ぼす要因だ。志士を斬る前にてめえが斬られるような恥さらしは、新撰組に必要ないと思え！」
痛みを堪えながら立ち上がった楠は、土方に一礼すると脇へと下

がって行った。

「どうだ赤井。しばらく食客として扱ってやるから、来るか？」

静まり返っていた稽古場に、竹刀をあわせだした隊士達の掛け声が響き渡る。

「俺に、志なんてありませんが」

「じゃあ、なんで剣術の修行に出て来た？　なにか思うところがあって上洛しようと思ったんじゃないのか？」

巻き込まれてこの世界に來たから、志とか聞かれても困るしかなかった。

「ぬくぬくとした藩士のお前には、ここの生活は辛いだろうけど、その言葉の意味を理解できず、赤井は首を傾げた。

「なんで僕を？」

「・・・さあな。気が向いただけだ」

「やっぱり入隊・・・しなくちゃ駄目でしょうか」

それはお前が決めればいいと土方は言った。

汗を流し稽古に励む隊士達に、心惹かれてる自分が居る。塾生達との稽古では感じなかった気迫は伝わって来るのだ。

死と生の闘せめぎ合い、それがここにはある。

赤井は心が沸き立つのを感じた。

「・・・屯所へ行くと、誰にも告げずに出て来たんです。お世話になるにしても、一旦戻ってちゃんと話して来たいんですが」

「逗留先は薩摩藩邸か？」

「はい」

少し考えるように腕組みをすると、俺も付いていくと顔を上げて稽古場から出た。

「え！？　一人で大丈夫です」

慌ててその後ろを追いかけた。

藩邸には龍馬が居る。来られてはまずいどころか、厄介な事になってしまう。

「今薩摩藩邸には大久保が居るんだろう？」

「え、ええ」

「薩摩の大久保は厄介だと聞いてる。会津公だけじゃない、うちの大将の面子もある。義理を欠くより筋を通しておかないと、後が面倒なんだよ」

「大久保さんは出かけてます」

「そうか。なら謁見の願いをしに行こう」

「それなら俺からしておきます」

「行かれたら困る事でもあるのか？」

「観念するしかなかった。」

これ以上食い下がって疑われたら、この場で斬り捨てられる確立は高い。

「行くぞ」

町に出ると、道を聞いた時の反応以上に冷たい視線が突き刺さって来た。

羽織を着ていなくても、土方自身が新撰組の看板なのだ。だが当の本人は意に介す事なく、淡々と歩みを進めている。

町の治安維持と不逞浪士排除は、町人にとって都合が良い事であって悪い事ではない。現在にある警察機構と役目は一緒なのだ。それなのに、町人の大半は新撰組を毛嫌いしている。

その理由が赤井には判らなかった。

「なんだ、さつきからきよきよと。町人が気になるのか？」

「屯所の場所が判らなくて、聞きながら来ました」

「ほう。で、喧嘩でも売られたか？ お前も新撰組かと」

土方は他人事の様に笑った。

判っていて無視しているのだ。

「隊士の殆んどは農民の出だ。身分なんざあったもんじゃないが、帯刀を許可された俺達が幕府の為に働くのは当然の事。志士どもが会合を開くと密告があれば、時間なんざ気にせず殴り込んで捕まえる。まあ、殆んどが斬り合いになっちまうがな」

そう語る顔は、どこか凜としたものを感じさせる。

「奴らを匿ったり、俺たちの邪魔をする奴が居たら、誰だろうが遠慮なく斬り捨てる。それがお構いなく人を斬っていると、町人どもの目には映るんだろうさ」

「斬らずに、捕まえる事はしないんですか？」

「そいつが重要な情報を持ってるなら、捕縛して屯所へ連れ帰るさ」幕府が新撰組を容認している以上、町人は何も言えず現状を受け入れるしかないのだ。

「町人はどうもこいつも目先の事しか見てない。だが俺達は少なからず政に携わっている。幕府に反抗する奴らを取り締まり、京の、この国の明日を守るために命を賭けて走り回ってんだ。不平不満を並べる立てるしか能のない奴らの罵声なんぞ、一々気にしてられん」新撰組の副長に就いているだけあり、臆するところは一つもなかった。

話を聞く限り、義は新撰組にあると思える。

とするならば、政府の正式機関である新撰組に狙われている龍馬達は、治安を脅かす”犯罪人”の位置にあるのだ。

(違う)

志士達の志が途絶えなかったからこそ、昭和の世があるのだ。この時代の悪は、自分の知る悪とは性質が異なる。現代に当てはめて道理を考えるのは間違いだ。

藩邸が見えて来ると、心臓の鼓動が一気に速くなった。

龍馬がうろうろと歩き回って居ない事を祈りながら、木門の前に立った赤井は門番に扉を開けて欲しいと頼んだ。

いつもは声を掛けなくても直ぐに扉を開けてくれるのだが、赤井に一瞥をくれただけで門番は動こうとしなかった。

後ろから赤井を押しのように出て来た土方が門番の前に立ち、頭を軽く下げた。

「私は新撰組副長土方歳三と申します。大久保様に御目通りしたく

参りました」

「生憎、お屋方様は不在にしておりますゆえ、日を改めてお越し下さい」

「留守なのは存じ上げております。ご許可を頂きたい件があり、お目通り願いたいと大久保様にお伝え願えるでしょうか」

「確かに承った」

「では、夕刻にまた尋ねさせて頂きます」

土方は、それまでに荷物を纏めておけと言い残し、もう一度門番に頭を下げるべくると向きを変えて歩いて行ってしまった。

とりあえず、中に入らずにすんだと安堵の息を漏らす。

「中へどうぞ。ご自分の部屋からは出られないようお願いします」

門番は笑うでもなく、いつもと様子が違う門番の脇を通り、潜り戸抜けて中へ入った。

藩邸内は静かだった。

夕刻まで聞こえている稽古の掛け声は聞こえてこず、不思議に思いつながら廊下を行くと、静けさの原因を見つけた。

大きな広間に塾生らが集まり座禅を組んで居たのだ。

剣術には精神の鍛錬も必要となるため、禅を取り入れている道場も少なくはない。幕末であろうが現代であろうが、それは変わらないらしい。

龍馬の部屋を通り過ぎようとした時、中から声がした。

「戻ったか」

足を止め廊下に座ると、障子が開いて龍馬が顔を見せた。

「ちつくと中へ入らんか」

「はい」

障子を閉め、難しそうな顔つきの龍馬の前へ座る。

「おんし、新撰組に行っちゃったがか」

「えっ？」

土方は門を潜っていない。潜ったとしても、この部屋からは門を見る事が出来ないため、土方の来訪を龍馬が知る事はできないのだ。「おみつさんが、土方さんと歩いちゅうおんしを見たど、さつき知らせにきたちや」

「おみつさんが・・・」

おちおち歩く事もできないと、ため息を吐くしかなかった。

「話そうと思つて来ました」

「ほうか」

しばしの沈黙の後、胡坐をかけた膝の上に頬づいた龍馬は、厳しい目線を赤井に投げた。

「おんしが新撰組に行つちよつたが理由はあえて聞かん。ほりゃあ自分の意志ろう？」

「はい」

「なら、わしはなーんも言わん」

双方の立場を知っているだけに、詮索を受けるものとばかり思っていた赤井は、肩透かしをくうことになった。

「土方くんと知り合いじゃったがは吃驚したぜよ」

「知り合つたのは今日なんです。使いの途中、新撰組を見つけて・・・土方さんと目が合つて、まずいと視線がそれた隙に逃げたんですけど、後を追いかけられ呼び止められたんです。話しの流れでつい、剣術の修行に出て来たと言つたら、屯所に来いと言われたんで、その、興味半分で」

「行つたかが」

「はい。龍馬さんに言つてから出るべきかと思つたんですが、返つて心配をかけそうだったんで、黙つて出ました」

「ほれで、おんしは新撰組に行くがが」

「・・・成り行きでそうになりましたが。行つてみたいと思います」

龍馬がにっこりと笑顔を浮かべ、赤井の膝に両手を乗せた。

「わしらが正しく、新撰組が正しくないとは言わん。どちらも自分で決めた志を通そうと必死になつちゅうき、おんしも信じる道を進

めばええと思っておる」

「はい」

「けんど、あえて止めさせてもらうぜよ。今一度、よく自分の心と相談するがじゃ」

荷物をまとめると言っても着替えしかないと、部屋を見回して苦笑する。

「驚くだろうな、村木の奴」

新撰組に行ったと知ったら怒るだろうか。それとも、選んだ道ならと納得してくれるだろうか。

と、片付ける手を休めず考えた。

「あ・・・」

赤井は、まず先に考えるべきだった事を、行くとなってから思い出してしまった。

新撰組に行けば、龍馬達とは敵対の立場になる。必然と志士側に居る和奈とも敵対関係になる。

（あいつとやり合う・・・のか？）

新撰組としての自分が目の前に立てば、間違いなく和奈は剣を抜くと思えた。

武市を救いたいその一心だけでは、無謀な救出に飛び込んで行けはしない。和奈にもなにかしらの志があるのだ。

だが自分はどうか。土方の志を理解した訳でもない。かと言って、龍馬達の志も同じく理解していない。

どちらの意見が正しいのか判断もできず、宙ぶらりんな状態で道を選ぼうとしている。

「いや」

どういう経緯であれ、新撰組へ行くと決めたのは自分の意志だ。それに、土方の語る言葉が、龍馬が口にした言葉よりも心に響くものがあった。それだけで和奈の様に命を張れるかと聞かれても、判らないとしか答えられない。

判るのは、土方の志をもっと聞いてみたい、ただそれだけだった。

風呂敷に纏めた荷物を手に、つかの間の自室だった部屋を見回した。

「ほんと、何にもないな」

朱色に染まった障子を閉め、龍馬の部屋へと向かった。

「やはり、行くのか」

優しい声の中から聞こえたが、障子が開けられる事はなかった。

「はい。皆の事は何も話しません。桂さんと約束した通り、未来の事も語りません。一から、始めて見たいと思います」

「淋しくなるな」

「色々とお世話になったのにお礼もできず、こういう形で行く事を許して下さい」

「死ぬなよ修吾郎。生きて、生きて生き抜いてくれ。それだけがわしの願いぜよ」

「才谷さんも、どうかお氣をつけて」

両手を付き、深く頭を下げてから、赤井は部屋の前から立ち去った。

玄関に出ると、運悪く戻って来たばかりの大久保と鉢合わせしてしまった。

「お帰りなさい」

不機嫌そうに上がって来た大久保は、何を言うでもなく赤井を一瞥すると廊下の奥へと歩いて行った。

「相変わらず無愛想だな」

玄関で座って待つて居ると、門番に連れられて来た土方が姿を見せた。

「唯今大久保様にお伝えして参りますので、暫くここでお待ち下さい」

出迎えに出て来たおみつはそう言うと、踵を返して廊下へと消え

た。

「豪勢な屋敷だな」

ぐるりと玄関を見回した土方は、吐きすてるように言った。

仮住まいである屯所と比較するのは間違っているとは思いつつも、豪勢な欄間や磨き上げられた床、玄関から内部が見えないよう置かれて居る屏風等で、格の違いを見せ付けられている気分になった。

暫くしておみつが戻って来ると、土方に軽く頭を下げて手を斜め下に差し出す。

「大久保様がお会いになるとの事にございます」

失礼する、と上がった土方と赤井を、おみつは大久保の待つ部屋へと案内した。

通された部屋に入ると、下座に座して手を付いた土方が、腕組をしたまま座って居る大久保に向けて頭を下げた。

「卒爾そつじお伺いした非礼をお詫び申し上げます。私は新撰組が副長を務めさせて頂いております、土方歳三と申します」

丁寧な言葉だったが、大久保の表情は変わらない

「こが度は、如何ような用にて参ったのか」

「はっ。後ろに居ります赤井修吾郎を、私も新撰組にてお預かりしたく、お許しを頂きに参りました。局長近藤勇からもその旨許可を得ております」

「その者が行くと申すなら、止める由はないと申し伝える」

「ありがとうございます」

顔を上げた土方は、大久保を視線で捉えた。

たた座って居るだけなのに、何を言わせぬ気迫が全身に纏わり付いて来る。

（これが、薩摩の大久保一蔵か）

幕府寄りを示す薩摩の中に在って、尊王攘夷派である各藩士との連絡密度が高いのはこの大久保である。潜伏している志士達とも交流しているのではと懸念を抱いているが、確たる証拠がある訳では

ない。会津と手を組み、長州を京から追い出した相手だ。探りを入れたくとも、早々下手な動きなど出来ようもない。会津との繋がりを退けても、幕府と朝廷両方に人脈を持つ大久保が相手では、藩邸周辺に密偵を置くだけに押し留めなければならないのが現状だった。「それでは、確かに赤井修吾郎をお預かり致しました」

あっさりと許可された赤井は、呆氣に取られ、土方が立ち上がった。でも動こうとしなかった。

「おい、なに呆けて座ってるんだ？」

「えっ、あ！」

肩を叩かれて漸く我に返り、腰を上げようとして動きを止めた。座り直し、両手を畳に付けてゆっくりと大久保へ頭を下げた。

「色々とお世話になり、ありがとうございます」

「・・・堅忍不拔の心にて、日々精進するがいい」

「ありがとうございます。では、これにて失礼仕ります」

赤井はもう一度頭を下げると、土方と共に薩摩藩邸を後にした。

陽が落ち、夜の闇が幕を下ろしている。

龍馬の所へとやって来た大久保は、縁側で一人ぽつんと座るその姿にため息を吐いた。

「小僧が選んだと同じ、これもまた人の道の一つだ」

「行ってしもうたがか」

「ああ。願わくば、若者には未来に生きてもらいたいものだ。なあ坂本くん」

その為に、日本を洗濯しなければいかんだと、龍馬は背中越しに言った。

洗濯かと大久保は笑った。

「時は止まってはくれぬ。ゆえに、我らも足を止めてはおられぬ」

龍馬は、大久保の言葉に何度も頷いてから、庭に影を落とし始めた月を見上げた。

其之一 訃報

内憂外患我が州に迫る。正に是れ危急存亡の秋。
唯邦君のため邦国のため。降弾名姓また何ぞ愁えん。

高杉晋作

季節は師走。

萩から筑前国にある平尾山荘へと居を移して来てから一ヶ月が過ぎていた。

馬に乗れるよう稽古をつけておいてほしいと頼まれた高杉は、自分がすべき事をそっち退けにして毎日和奈の乗馬に付き合っていた。
「そんなにきつく手綱を持つな！」

「きつくって、言われても」

どこまでがきついのか、その力加減が掴めないのだ。

「こうだ、こう！ 判ったか！？」

見よう見まねで馬に乗れる様になるなら苦労はないと、端で見ていた武市は笑った。

「もう！ それで判からないから苦労してるんじゃないですか！」

「逆切れするな！」

「してません！」

侍姿の役者が馬に乗って浜辺を駆けるシーンをテレビで見たことがあったが、実際にそれをやれと言われても出来る訳などない。

「面倒だな」

「え？」

手綱捌きと鐙あぶみの扱い方を教えた高杉は、和奈の乗る馬の尻を思いっきり叩いた。

「え！ うわっ！」

慌てたのは武市もだった。

急いで繋がれている馬に駆け寄り、和奈を乗せて走り出した馬を追いかけた。勿論、高杉も自分の馬を走り出させている。

「無茶苦茶な稽古だな」

馬を併走させた武市は苦笑交じりにそう言い、手綱を打って前に出た。

「説明するより身体で覚え込むのが一番手っ取り早い！」

「まったく・・・和太郎、鎧を確り踏め！」

和奈が足に力を入れたのを確かめた武市と高杉は、同時に手綱を引けと叫んだ。

「手綱を放すなよ！」

上体を嘶かせて止まった馬の上で、馬の首に抱きついた和奈は大きな息を吐いた。

「やれば出来るじゃないか」

「そう言う問題か？」

これではおちおち見学してられない、と武市が不安氣に言う。

「心配はいらん！」

「心配してください・・・」

高杉の容赦ない指導はその後も続き、事あるごとに武市が飛び出す羽目になったのは言う間でもない。

数日の間は足腰が笑い続けてたが、四日も過ぎる頃にはこつを覚え、自由に手綱を操れるようになった。

「馬の扱いには慣れたようだな」

横でがつがつとご飯を食べていた和奈は、箸を銜えたまま振り向いた。

「待て。いいから、ちゃんと飲み込んでから答えろ」

物を食べながらでも喋るのは大津で経験済みだったので、武市はそうする前に釘を刺した。

「片手で馬を扱えるようになったんだ。特訓のし甲斐があったって

もんだろ？」

大飯を食らいながら、対面から高杉が楽しそうに声を上げた。

口いっぱいに頬張っていたご飯を飲み込んだ和奈は、茶碗を胸に抱え込み身を乗り出す。

「特訓って、身体は一つしかないんですから、壊れたらどうしてくれるんですか！」

「阿呆！ 小五郎みたいに、優しい口調で細かく丁寧になんぞやってられるか！」

「丁寧はいいとしても、説明だけはして下さい！」

「和太郎」

その声に振り向いた和奈の顔はしかめっ面のままだ。

「……」

「なんででしょう？」

「喋る前に、ちゃんと茶碗を置け」

はたと、手を見下ろす。

「あ、すいません」

「だああ！ せいせいしたと喜んで、桂木さんがそれじゃあ小五郎が居るのと同じじゃないか！」

「さて、そう言われても困るしかないが？」

矛先が高杉に向いたと胸をなでおろしながら、和奈は残っている食事を片付けにかかった。

萩をたつ前の夜。

食事を終えた桂は、寝る用意を済ませてから部屋に来るように和奈に告げた。

「なんの因果か」

浪士を斬り捨て、関わる事無くその場から立ち去れば良かったのだ。そうすれば池田屋に遅れる事もなく、宮部達を救い出せたかも知れない。

だが、桂は和奈を放置しなかった。因果と言わずして何を以って説明すべきか、桂には見当すらつかない。

「未来か」

この時代で生まれたのではないと和奈は言った。荒唐無稽なその事柄は、今でも心の底に引っかけたまま残っている。

真実か虚偽なのか確かめる必要があるにも関わらず、多忙さを理由に考える事すらなくなっていった。

その原因は和奈にもあった。

（彼女は、一度たりとも帰りたいと口にしてない）
思えばおかしい事である。

家族の元へ帰りたいと、原因を探すのが普通であろう。だが和奈は不安に駆られる様子も見せず、以前から居たかの如く平然と共に暮らして居る。

未来から来たと言うのは戯言と、桂が思っても仕方が無かった。

「桂さん」

「お入り」

「失礼します」

寝衣に着替えて座って居る桂は、入って来た和奈に敷かれた布団を指差した。

「えっと、あの？」

二つの布団がある。

と言う事は、ここで寝ろと言われたのだ。そう思った途端、顔が赤くなった。

「ぷっ！」

「か、桂さん？」

「いや、すまない。焦っている顔が面白くて、つい」

「面白いて・・・」

「ゆっくり話したいと思ってたんだが、機会がなかなかなくてね。こういう形になったが、どうこうしようとは思ってないから安心おし」

話をしながら寝るだけと、和奈は用意された布団に入れられてしまった。

「ここでの生活は慣れたかい？」

「はい。薪割りも、風呂焚きも楽しいものです」

「そんな事をしているのか！？ 藩士がいるだろうに、晋作は何をやっているんだ」

「いえ。僕、腕に筋力がないし、すぐ息があがるんで鍛錬にと」

「・・・女子だと言う事を忘れてはいまいね？」

「あ・・・考えてませんでした」

「あの時も、無謀な人間が居るものと呆れたものだが、どうやら君は、後先を考えない性質のようだね」

「そうみたいです、すいません」

「今更蒸し返しても仕方がないが、それでは心配が尽きないよ」

「反省しても仕切れません」

「僕のためを思ってくれるなら、少しは自重も覚えてくれると助かる」

「努力します」

忠告の言葉だけで和奈を抑制するのは無理だろう。何事か起れば駆け出して行ってしまうのは目に見えている。

「坂本くんに預けたのは失敗だった。袂で面倒を見てあげていたら、楽しい日々になって居たと悔やんで仕方がない」

「迷惑をかけまくってる姿か思い浮かびません・・・」

「あははっ。確かに教育も要るだろう。それも含めて楽しいだろうと思うんだ。氣遣う身内がいるというのは良いものだよ」

布団を引き寄せると、和奈は半分だけ顔を隠した。

「血生臭い現実泣いてやしないかと心配していたが、ちゃんと進むべき道を見つけて歩いてくれている」

「こんな私の事を真剣に考えてくれて、本当に感謝してます」

「それは僕も同じだ」

にっこりと桂は笑った。

「僕は早くに家族を亡くしていてね。優しくて、体の弱い僕をいつも気にかけてくれた長姉が亡くなった時は、僕も逝くと言って皆を困らせた。死に取り付かれた様に、義母が亡くなり、実の母も次姉もこの世を去ってしまった」

今は独りなんだと笑う顔を、和奈は直視できず目を閉じてしまった。

「家族という繋がりに執着している訳ではないが、心のどこかでは憧れていたのだろう。だからおまえを甥として皆に紹介してしまったのかも知れない」

行き場もない和奈を家族に仕立て上げ、側に置いて家族としておきたかったのではと、桂は話しながら自分の心に気が付いたのだ。

「利己主義と言われても仕方がないが、こうして過せる時間がある事を本当に嬉しいと思っている」

利己主義などではないと和奈は思う。

桂はいつも真剣に怒ってくれる。その理由は道理を得たもので、身内に対する愛情に他ならない。

自分にとっても桂は家族同然の存在になっている。

「僕も、桂さんの家族で居られるのを嬉しく思ってます」

「だが一つ、気掛かりな事がある」

それは和奈の素性だ。

未来から来たと、和奈は告げた。本当に時を渡ったのであれば、いずれ和奈は元の時代に帰ってしまうかも知れない。

「おまえは・・・帰りたくはないのかい？」

「え？」

「やれやれ。自分の言った事を忘れたのか？ 未来から来た、そう言ったじゃないか。ならば、帰りたいと考えても不思議はないだろう？」

改めてそう聞かれ、和奈は思案に暮れた。

「聞かれるまで、忘れてました」

「は？ 忘れてた？」

「はい」

「これは困ったな」

「自分でも驚いてます。ただ皆さんと一緒に居たい、それしか浮んでこなくて・・・」

「そう・・・なら、帰るまでで良い。正真正銘、家族になってもらってもらおう」

「え？」

「桂木くん達の事もあって、僕と晋作の親類を頼ろうと言う事になってね。色々調べていたら、母方の遠縁に村木氏があるのを思い出して。便りを出したら嫡子になれる養子を捜していると言う。女子でも良いと返事が来たから、おまえを養子に迎えてほしいと頼んでおいた」

ぽかんと口を開けてしまった和奈に笑みを浮かべる。

「優しい方達だよ。今は津和野へ逃れているから会えないが、萩へ戻って来たら連れて行くからそのつもりで」

「養子ですか」

「長州で庇護するにしても、身分どころか素性さえ知れないんだ。いらぬ詮索を避けるには確りとした家が必要になる」

この時代での身分がどういうものなのか、和奈にはまだはつきり解らなかったが、桂が手を講じると言う以上、断る事はできない。

「解りました」

「聞き訳がよいのは助かる。また当分、会えなくなるが、命を粗末にする行動は謹むと約束してくれるかい？」

「はい」

「・・・桂木くんの身に何があっても？」

「それは、その・・・」

からかう様に笑った桂は、困った顔でいる和奈の頭に手を乗せた。「常に後先を考えてから行動する事は大事だ。ああ、自分の太刀をもっと理解する事。これも追加しておこう」

「うっ・・・」

桂は楽しそうに、うんうんと納得してしまっている。

「いいね？」

「はい。無茶な行動は慎むようにします。大津でも龍馬さんに叱られましたから」

「ほう」

「簡単に命を捨てようとするのは、それまで生きて来た意味を無駄にすると同じだから、絶対にしてはいけない事なんだと」

「その言葉、大切にしなければね。ああ、それからあと一つ追加だ。これから僕の事を桂さんではなく、小五郎と呼んでほしい」

「え？　　いあ、あの、それは・・・」

困った表情を浮かべたのは桂の方だった。

「ずるいじゃないか。坂本くんは龍馬さんなのに、身内の僕が桂さん呼ばわりだなんて」

「へっ？」

「前から言おう言おうと思ってたんだ。いいね、これは絶対命令だ」
思わず和奈は噴出してしまった。

「解りました。じゃあ、そう呼ばせて頂きます」

「うん。そうしてくれると嬉しい。さて、時間も遅いし、そろそろ寝るとしよう。いつかまた、話し相手になってくれ」

「はい、もちろんです！」

桂と言う家族を得て、その存在がどれほど心を落ち着けてくれるものかを知った和奈は、時の彼方に居る父や母の事も思い出していた。

（私は元気でやってるからね）

桂が先ほど問いかけた質問は、すでに和奈の頭から消え、懐かしい母の笑顔を最後に眠りへと落ちて行った。

「箸が止まってるぞ？」

武市は、茶碗を片手に箸を持ったまま、動く気配を見せない和奈

を覗き込んだ。

「むう。おい和太郎！」

「は、はい？」

我に返ると、目の前に武市の顔があったので驚いて上半身を後ろへ反らした。

「あの夜、小五郎となんかあったな!？」

「えっ!？」

「あったのか!？」

手を振りながら、ないない、と否定する姿に、高杉は疑いの目を向けて逸らさない。

「いや、絶対にあった! なんで気付かなかったんだ、出かける時のあの嬉しそうな顔が証拠だ!」

激しく誤解して想像を膨らませてしまった高杉の言動が、段々と激しくなっていく。

「・・・まさか桂さんに限ってとは思うが」

「馬鹿野郎、小五郎が一番危ないんだ!」

「ちょ、ちょっと待ったあ! なんて勝手に二人してそういう方向に進めるんですか! 小五郎さんは叔父さんですよ? 僕、男ですよ!？」

「ぬう。小五郎さん・・・だったらあいつのあの顔はなんだ! 甥も叔父も男も女もへったくれもない! くそつ、なにが一晩過ぎすだ。俺とどこが違うっていうんだあの野郎!」

「まさか、桂さんの志向って、先生と同じなんですか？」

以蔵の発言に武市と高杉が顔を見合わせた。

「志向? あっー! 違う違う、それも絶対違う! もう高杉さん、変なこと言うから岩村さんまで誤解してるじゃないですか! 小五郎さんに言いつけますよ!」

「もういい、小五郎も変態にしておけ!」

「待て! 俺は変態などではない!」

龍馬達とのやり取りに似ていると、誤解を解かなくてはいけない

のに、和奈はつい笑ってしまった。

「ほら見ろ。和太郎も喜んでるし、もうそういう事でいい！いいか、昼餉までたっぷりしごいてやるから覚悟としけよ！」

誤解を解きたかったし、しごきも遠慮したいと思ったが、こうなつてはそう簡単に高杉を説得できたものではない。

以蔵も一人顔を下に向けてぶつぶつ何かを言っているし、武市も困り果ててしまっている。

「もう、なんだってそっちへ話しが行くかなあ」

ここで女だと知っているのは桂と高杉だけだ。以蔵が変に誤解するのは仕方ないと言える。だからと武市を変態にしておくのも心苦しく思うのだが、解決策など浮んではしなかった。

「それだけ元気なら、風邪はもういいですね」

だから、和奈は話しを変える事で逃げに回った。

「あ？　なに変な心配してんだ、見れば判るだろう！」

ここに来てから来高杉が咳き込む姿は見かけなかった。海風に当たって風邪を引いたのは本当だろうと、安心してしまった和奈は、武市が一瞬、気鬱な表情を浮かべたのに気付かなかった。

「片付けてきますね」

お京の居る台所へ皆の膳を持って席を立った。

二つ口のへっついに乗せた茶釜の中を見ていた京は、和奈に呼ばれて顔を向けた。

「お知らせ下されば取りに伺いましたのに」

「いや、僕は下っ端だからこれくらいはやらないと」

膳を受け取り、揃えられた皿や箸を桶へと移し変える背中を見つめる。

「小五郎さんと一緒に、京へ帰れば良かったのに」

「京に帰ってもする事は一緒です。女中さんも減ってらして、色々な事に手が回らないのに、帰るなんてできません」

手際よく片付け物を整理し、水瓶から水を組んで桶に入れる。

「今度は、ちゃんとお京さんを守る」

柄杓を持つお京の手が止まった。

「やっぱりずっと気になさってたんですね。実は、私もなんです」
その言葉に息を飲んだ。

目の前で同じ女中が斬られて死んだのだ、忘れられる筈はないと、お京から視線を逸らした。

「私が気をつけていれば、和太郎さんは人を斬る事にはなりませんでした」

検討違いな事を口にされ、和奈は次の言葉を必死に探さなくてはならなかった。

「だからお相子です。お宮ちゃんが・・・死んでしまったのは私のせいです。今でも時々、哀しくなる事があります。でも、私はお宮ちゃんの分まで、辛くても生きなくちゃいけません。そう思えるようになって、やっと笑えたんです。だから和太郎さんも、もう自分を責めないで下さい」

お京を見る度に罪悪感を抱き、避けて来た自分とは違って、お京は一生懸命前へ進もうと、悲しみや辛さを乗り越えて来ているのだ。
「和太郎さんに伝えたいとずっと思ってたんです」

和奈は、そう笑ったお京の頬に手を当てた。

「今度は僕がお礼をいう番だ。ありがとう、お京さん」

そう言った後、気配を感じて振り返った先に、眉を吊り上げた以蔵が立っていた。

「あ、新之助さん。お茶の用意できたので、運ぶのを手伝ってくださいますか？」

（はい?? 新之助さん??）

「なんだ? 和太郎」

「い、いえ。なんでもないです」

大津では夫婦として町へよく出かけていたなど、おもわず和奈はにやりと顔を崩してしまった。

「なんでもない顔には見えん!」

「本当にないです、はい！」

差し出されたお盆を受取り、連れ立ってお茶を運ぶ以蔵が別人の様に見えた。

「あ！ 岡田さん、完全に誤解したよね」

以蔵にとつて男である自分がお京の頬に手を添えた。怒り顔の原因はそこかと解ったが、笑いを止める事ができず、暫くその場で座り込む事になってしまった。

風が冷たくなり、時折雪が舞い散るようになった頃、萩から火急の用と、勇力隊総督伊藤俊輔、干城隊頭取佐世八十郎かんじょうたいが高杉の所へとやって来た。

伊藤俊輔は足輕身分だったが、桂の手附として江戸に詰めになり、安政の大獄以後、桂や久坂玄瑞や高杉晋作、井上聞多らの攘夷運動に加わっていた。しかし文久三年に入り、突如イギリス留学を考え、賛同した井上ら四名と共に、井上の金策によって渡英が実現したのだ。元治元年に、米英仏蘭四夷国連合艦による長州報復が近い事を知った伊藤は、井上と共に急遽帰国し戦に参戦した。高杉の決起を知り結成された隊を勇力隊とし、馳せ参じて来たのである。

大組佐世彦七の長男であった佐世八十郎は、文久二年の直目付長井雅楽の暗殺を計画に参加するが、翌年に入って情勢が変転し、藩主の命で長井が帰国謹慎となった事で未遂に終った。それ以後は右筆役として藩政に携わりながら干城隊の頭取を任されていた。

「なんだと！」

二人が持って来た報せを聞いた高杉の怒声が響いた。

稽古の途中だった和奈も、何事かと武市らと共に部屋に詰め掛けた。

「岩国にて協議の場が設けられ、交渉役に吉川経幹殿が当られました。提示された幕府の妥協案を、長州藩が受け入れれば幕軍を撤兵させるとの内容を、棕梨殿が受け入れ、長州藩は幕府に恭順する事

に・・・決定しました」

「っ！　で、妥協案はなんだ！？」

「山口城の破却。これを受け、毛利両公は萩城へすでに居を移しています。長州に留まって居る五卿に対して大宰府移転が命ぜられ、期日が決まり太宰府へと出立されます・・・国司殿、益田殿、福原殿三家老に対して・・・幕府は禁門の件の責任者として切腹を申しました！」

立ち上がって聞いていた高杉は拳を握り締めた。

「そればかりじゃない。棕梨は政敵と称し、妥協案にないにも関わらず、倒幕派の者の処刑を行った。無論、高杉と桂さんの捕縛命令も出した」

佐世が涙を滲ませながら語った。

「事態の收拾を図ろうと、周布さんが奔走してくれたんですが、吉富宅の・・・」

伊藤はそこで言葉を詰まらせた。

「おい、周布さんがどうした！」

「・・・松の木の下で・・・切腹されているのが見つかりました！」

怒りで真っ赤になった顔を伏せ、肩を震わす姿に誰も声を掛ける事が出来なかった。

政に携わる才を持つと吉田松陰が太鼓判をおした桂と、松下村塾の高杉を藩に登用したのは、財政改革と軍政改革に当たる事になった周布政之助である。

一度は長井雅楽の航海遠略策を受け入れた周布だったが、一方的な開国は日本を外国へ売り渡すものでしないと説得く久坂玄瑞らの説得により、攘夷論へと思想を転換させた。

京への出陣にも意義を唱え、久坂達を止めようと長州で駆け回って日々説得にあたったのも周布だった。

しかし謹慎となって抑える事が叶わなかった進発で、禁門の変が起こり、長州は朝敵とされてしまい幕府の征伐を受ける事となった。

周布の傍らにおかれていた書には、長州征伐となったのは己の不徳の致す所であり、その責任は自分にあると記されていた。

脱藩を繰り返す高杉を見捨てず、支えてくれた恩人でもある周布の死を、一番受け入れたくないのは高杉だろう。

「くそっ！　どこまで馬鹿が揃ってる！　もう我慢ならん！」

「我慢ならんて、どうするって言うんです？」

高杉が出すだろう答えを判っていて、伊藤はそう聞いた。

「打って出る！　これ以上長州を幕府のいい様にされてたまるか！　佐世も驚いてはいない。伊藤と同様、高杉がそう言うと言確信を持つて萩から出て来たのだ。」

剛毅果断な姿を見せる高杉に、伊藤と佐世は互いに顔を見合わせ頷き合う。

「俺達も行きます。幕府に恭順するなど以つての他ですからね。集められるだけ有志を集めます」

「すまんが、力を貸してくれ。決起の場所は追って伝える」

伊藤と佐世は、時間が惜しいと直ぐにその場を後にした。

桂にも伝えねば、しかし待つ時間がない、と言いながら部屋をうろうろと歩きだした高杉に武市が歩み寄る。

「我々も行く」

和奈も以蔵も、話を聞く途中からそう決めていた。

「命の保証はできんぞ？」

そう脅してたとしても、臆さないと判っている。

「微力だろうが、少しでも役に立つならば」

高杉はにやりと口端を上げた。

「新之助。おまえはお京さんを連れて京へ戻れ」

「はっ？　冗談じゃない。俺も行きます！」

「私の命が聞けぬと？」

押し黙る以蔵に、武市は変更はないと言い、直ぐに発てと命令した。

「師として最後の命だ。おまえはもう人斬り以蔵ではない。己が頭

で考え動いてゆけ」

それでも、和奈を行かせるべきだと以蔵は食って掛かった。

「問答無用だ。さあ行け」

「心を汲んでやれ」

動こうとしない以蔵に、静かに高杉が言葉を添える。

高杉の視線を受けながら、背を向けてしまった武市の姿に、以蔵は膝を崩して畳に座り込んだ。

「俺は・・・」

「心配するな。そう簡単に命をくれてやるつもりはない」

「先生・・・」

しばらく肩を振るわせていた以蔵は、深く一礼すると振り返る事なく部屋を出て行った。

「さて、俺達も行くか」

以蔵とお京が発った翌朝、和奈達も長府へ向かうため筑前を後にした。

十一月十一日深夜。

支藩である岩国領に身柄預かりとなっていた三家老の切腹が執行された。

惣持院において益田が、その後、澄泉寺ちようせんじにて国司が、総大将であった福原は周防国岩国領の龍護寺りゆうごじにて、それぞれ萩藩と岩国領の役人が見届ける中、切腹した。

三家老の首は、安芸国広島藩へと護送され、征長総督府において検分された。

高杉が立つと報せを受けた諸隊は、武器等の消耗が激しく補充もままならない現状での決起は無謀との意見が上がっていた。

「これは命令じゃない。意に沿わぬものは参加しなくていい」

佐世は集まって来た者達にそう告げる。

「俺は行く。遊撃隊にも声をかける。ああ、太田さんにも」

最後の部分だけ小さく佐世の耳元で囁いた石川小五郎は、周防国に生まれ萩の明倫館で学んだ後、文久二年まで先鋒隊に所属したが、元治元年に高杉らによって結成された御楯隊へ入隊する。禁門の変では蛤御門に進撃し、その時に闘死した来島又兵衛の後を継いで遊撃隊総督となっていた。

「ありがたい」

正義派とて、このまま俗論派が藩政を掌握するのを良くは思っていない。しかし、時期早々なのは誰の目にも明らかな挙兵に、我もと腰を上げるのを戸惑っているのだ。

駆け回る佐世も石川も、無理強いを敷かず、賛同する者だけを集める形を取った。

「参加せぬ者はくれぐれも捕まらないようにな」

佐世はそう言い残し、別れを告げて萩の町へと戻って行った。

棕梨は、目の前に迫る幕府軍との折衝で藩内部の粛清を続ける一方、主格となる桂と高杉の行方を必死に捜させていた。だが、長州を出て二人が何処へ向かったのか、その足取りはようとして知れなかった。

其之二 功山寺拳兵

元治元年十二月十四日。

陽が地平線に傾く頃、功山寺へ入った高杉は五卿の居る書院に足を運んでいた。

「お久しぶりにございます」

三條は何事かと、入って来た高杉に問いかけた。

「今回の討伐に際し、幕府が恭順を手に、降伏を申し出て来た事はすでにご承知の事と思います」

「ああ、毛利公から聞いておる」

三條も、他の四卿もこの条件に当惑していると言った。

「で、そなたが来た理由は如何とする？」

「は。国の御為、是より長州男児の腕前お目に懸け申すべく参った所存にございます」

「・・・拳兵いたすと申すのか」

「これは私利私欲によつての所業にあらず。このまま俗論派が長州掌握を続ければ、いずれ幕府に飲まれ、俗藩として幕政にすら意見できぬ立場となりましょう。そうなる前に我らは俗論派を討つ所存でございます」

「高杉よ。少数にての決起、勝機はあつての事か？」

「・・・戦は己が得意とするところ。勝機は戦場において掴み取つてご覧に入れます」

一度決めた事は、無謀と判つていても引き下げる高杉の氣質を知る三條は、うなり声を上げるしかなかった。

「では、これにて失礼仕ります」

「さて、高杉。大事は国の安泰。努々それを忘れるでないぞ」

「心得ております」

もう一度三條に頭を下げた高杉は書院を後にした。

功山寺境内に勇力隊が到着し、続いて遊撃隊がやって来た。

石川と伊藤、遊撃隊軍監所郁太郎が高杉の周りに集まり、和奈は少し離れた場所に腰を落ち着けて居た。

文久三年、京都長州藩邸内の医院総督だった所は、八月十八日の政変により七卿と共に長州に落ちると、元治元年藩領の吉敷郡で開業。刺客に襲われ他の医者がさじを投げた重傷の井上聞多を治療し、その一命を救った事ている。その翌年に遊撃隊軍監に就いていた。

「奇兵隊にも伝えたが、連絡はまだない。今集まってるのは勇力隊、遊撃隊からの有志総勢八十五名だ。挙兵には難しい数だと言える」

石川が苦渋の面持ちでそう呟き、伊藤と所は目を伏せた。

「多勢に無勢と言いたいのは良く判る。が、尻込みしても始まらない。断じて之れを行えば、鬼神も之れを避く。大事を断ぜんと欲せば、先づ成敗を忘れよ。そう先生も仰った！」

「それはそうですが・・・」

高杉の決意は人数では揺らがなない。

「先生に男子たる者の死はいつかと、問うた事がある。が、直ぐに答えを頂けなかった」

賑やかだった本堂内が、水を打ったように静かになった。

「死して不朽の見込みあらばいつでも死ぬべし！生きて大業の見込みあらばいつでも生くべし！最期を前にした先生からの・・・最後の教えだ」

松陰の志が高杉の言動の源になっているのだ。

「少数無勢なのはよく判っている。だからと、挙げた拳を下ろす事など俺にはできん！」

石川は笑みを浮かべると、黙ったまま所の肩を叩いた。

「俺達も腹を括って来たんだ。高杉が言う通り、引下がるは士の名に羞じる」

集った男達の眼に曇りは見えなかった。

「よし！じゃあ作戦を練るぞ！」

腕を捲くり上げた石川に、高杉は申し訳なさそうな顔で言った。

「練るものにも、もう決めてある」

「あ、そう」

高杉達を見ていた和奈は、聞こえて来る話の内容と、肩透かしを食った石川を見てつい噴出してしまった。

「こら」

武市に咎められ、口を窄めて必死に笑いを堪えた。

「まずは新地会所へ行く」

「軍資金は要るからな」

「食料も確保できるだろう？ 会所を占拠したらその足で海軍局へ乗り込む」

「軍艦か？」

「おう。この人数だ、軍艦の一隻や二隻持っておいても損はない」
けたけたと笑い声を上げる姿に、石川は額を押さえた。

「なんだってそう能天気で居られるんだか」

「阿呆！ こういう時だからこそ、うじうじしてはおられんだろうが。やると決めたら男は黙って飯を食う！」

「は？？？」

「ほっとけ。高杉の言葉を一々真に受けてたら神経が持たんぞ」

石川が呆れ顔で言う

「俺、すごく不安になって来た」

高杉に大丈夫だと、肩をぱんぱん叩かれた所は丸めていた背中を伸ばした。

「飯だ、飯を持って来い！」

「一気に場を持って行ったな」

「さすが高杉さん」

「お？ なんか褒めたか？」

握り飯を銜え、盆の上に乗っていた煮干を持って和奈の所へ行き、食えと差し出した。

「その二人は誰だ？」

石川が振り向いて、ずいっと身体を伸ばした。

「俺の舎弟だ！」

「なんで舎弟になるんですか！」

「それはそれで面白そうではあるな」

眉間を寄せ、大丈夫ですかと聞いた和奈は、高杉に向き直ると武市が壊れてしまったのは高杉のせいだと怒った。

「怒ってるこいつは小五郎の親類だ。そっちの御仁は京生まれだから、知らなくても仕方がない。どっちも小五郎の代わりにと来てくれない奴らだ」

「その説明で納得する奴が居たら教えてくれ」

輪から出て来た石川は、二人の前に膝を付いて軽く頭を下げた。

「お初に御目にかかります。俺は遊撃隊総督石川小五郎と申します。後ろに居るのは遊撃隊軍艦所郁太郎と、勇力隊の伊藤俊輔です」

二人もそそくさと出て来て頭を下げた。

「挨拶が遅れて申し訳ない。私は桂木宗次郎と申します」

「村木和太郎です、よろしく願います」

二人と三人、向かい合わせで頭を下げ合う格好が可笑しいと、高杉は腹を抱えて笑い出した。

「ここで引導を渡しておく方がいいか？」

満面に笑みを浮かべて剣の柄に手を置いた武市を見て、高杉が血相を変えた。

「おい、待たんか！ それは止めろ！ 笑う度に斬られてたら命がいくつ在っても足りんじゃないか」

「ほう、剣の腕は確かなのか？」

「確かも確か。二人で十数人分は働いてくれる」

「それは買かぶりだ」

「謙遜するな。腕は小五郎も認めている。小さい方はまだ心もとな

いがな」

「小さいって!」

「悔しかったらもっと育ってみろ」

「・・・もう好きに言っ下さい」

本気で相手にするのは疲れるだけだと、諦めるのが最善の方法だった。

「そんな細腕で剣を扱えるのか?」

興味を持ったらしい石川は、擦り寄って来ると和奈の腕を掴んで袖口を捲り上げた。

「一応は・・・」

「へえ。手合わせ願いたいな。どうだ、一本だけ俺とやってみないか?」

顔がずついと近づいてくる。

「申し訳ないが、こいつは俺の弟子だ。手合わせなら俺を通してさらに願いたい」

ちらりと武市を見た石川は、何を言うでもな後ずさりして戻ると、あの人怖いと小声で呟いた。

「冗談の半分も通じんから気をつけろ。優男に見えても腕は達人だからな」

高杉に言われるまでもなく、武市の気迫で並の剣客でない事は石川にも判った。

しかし、と石川は疑念を抱く。

京生まれの長州藩士を全部知っている訳ではなかったが、高杉が腕を認める程の剣客ならば、一度くらいは名前を耳にしてもよさそうなものだ。

桂木山の麓なら、その姓を頂く武士が居てもおかしくはない。しかし、京詰め役で上洛できるのは、萩城下に住む上士身分の者だ。仮に身分の低い者が京詰めになっていたとしても、それはそれで名知られる事になる訳だから、やはり聞いた事がないと言うのは道理に合わない、と、石川は首を捻るしかなかった。

「さて、飯も食ったし、そろそろ行くか」

腰に手を当てて立ち上がった高杉は、すたすたと仏殿を出て行く
と、境内に集った有志を見回した。

高杉に気付いた者の視線が高杉へと集まった。

「集まってくれた皆には心から感謝する！　これより我らは長州御
国のため決起する！」

静寂が支配する境内に、力強い声が響き渡った。

「皆肝に銘じておけ！　活路は生きていてこそ開けるものだ！　武
士の魂だと命を簡単に捨ててくれるな！　そんな奴が居たらこの俺
がぶっ飛ばすからな！」

言葉が終ると同時に、集まった者の口からは様様な声が大きく上
がった。

八十五名の有志達は、萩藩の長府における拠点である新地会所へ
と、功山寺を出た。

夜半の静けさに、幾多の足音だけが響き渡る。

その足音に目を覚まして外の様子を見に出た町人は、異様な光景
に慌てて家の中へと戻って行った。

新地会所の広さは五十八坪ほど。平屋造りの家屋を前に、高杉は
鉄砲隊を前に出して家屋への一斉砲撃を命じた。

闇夜の中に銃声が鳴り響くと建物に灯っていた明かりが消え、屋
内で喧騒が起こった。

「お出ましになるか。各個応戦で前進するぞ」

号令をかけようとした時、平屋から声が発せられた。

「某は寄組根来熙行が子息、根来上総である！　この度の狼藉は如
何なるものか聞きたいゆえ、砲撃を止められたし！」

伊藤が会所の奉行だと伝える。

「いきなり家老の出向かえか？」

「油断するなよ」

根来は一人で平屋から現れると、話しがしたいと再度叫んだ。

「全員動くな。俺が行ってくる」

俺も行く、と石川が後に続いた。

根来の前に出た高杉は名乗ると今回の襲撃の目的を伝えた。

「国に刃を向けるというのか！」

「向けるのかって、もう向けているだろうが。大勢が長州のために死んで逝ったのは、根来殿もよくご存知だろう。我らを逆賊とした幕府に降伏して、尻尾を振って恭順せんとする輩を許せんだけだ。

長州は我らが国、違いますか根来殿」

銃を構えた遊撃隊は、いつでも発砲できるよう陣形を整えている。「お主の言い分はよく解った。争いは国の損益となるがゆえ、時間をくれるならばここを明渡そう」

武力衝突をせず占拠できるのは、高杉にとっても都合のいい話しだった。

「嫌にあっさり引き下がりますな」

「無駄な戦をしたくはないのは同じだ。戦争の疲弊による皺寄せはここにも来ている。今戦うは容易だが、互いにこれ以上の損失を出すは無益にしかならぬと考えたまでだ」

ふむっ、と押し黙り考える。

「解りました。半刻（一時間）待ちます。支度が済んだら斥候を東光寺へ寄越して頂く、それでいいですか？」

承知したと、根来は慌てて平屋へと戻って行った。

「信用するのか！？」

都合が良すぎる状況に、疑心暗鬼になるのも頷ける。

「だから半刻だけだ。伊藤は東光寺へ、石川は了円寺へ行ってくれ」

「刻限前には戻る」

「頼む」

連れて来た兵に号令をかけると、それぞれ指定された寺へと別れて行った。

東光寺へ着くなり、剣を抱えて座り込んだ和奈の所へと高杉がや

って来る。

「なんでそんな暗い顔で座ってる？」

「暗くなんてありませんよ。気合入れて歩いたてたから、なんか疲れたと言うか」

「大丈夫か？」

「激しい斬り合いになると意気込んでいたからな。呆気なさに気が緩んだんだろう」

それが場慣れの違いだと和奈にも解っていた。

死線を乗り越え集まって来た者達とは、戦をする心構えが違うのだ。

「誰だって最初はある。おまえには、戦になんぞ慣れて欲しくはないがな」

その時、高杉が咳を二つした。

「まだ風邪が治ってないじゃないですか！」

季節は冬だ。暖もない夜空の下に居ては、風邪を拗らせるも知れない。だからと、帰って寝てくれとも頼めない。

齒がゆさを感じつつ、言葉を飲み込むしかなかった。

「いい事を教えてやろう。病気なんてものは気力でなんとかなるもんだ」

自分を心配している和奈に笑いかけながら、頭に置いた手を左右へと動かした。

「もう！ なにするんですか！」

「ふん！ 小五郎なら文句を言わんくせに、俺だけに怒るとは不公平だろうが！」

高杉が大人なのか子供なのか、時々判らなくなってしまう和奈だった。

空はまだ闇に覆われている。

指定した時刻が過ぎても、一向に根来からの伝令はやって来なかった。

「ちっ！ 信用した俺が馬鹿だったか。伊藤！ 会所へ戻るぞ！」
先に会所へ戻っていた石川は、高杉の姿を見つけて走り寄った。
「やられた！ 平屋は蛻もぬけの殻。蔵の軍資金や食料も殆んど残っていないぞ！」

「あんの野郎お。今度会ったらぶん殴ってやる！」

「乗ったのは俺達です。死者も出さず占拠できるなら、それだけでも良しとしましょう」

伊藤は事もなげなくさらっと言うと、功山寺へ戻るべく隊を先導して行った。

「あいつは大物かただの馬鹿だ」

立腹したままの高杉も、寒空にいつまでも突っ立ってられんと、隊に号令を出した。

功山寺総門と山門に見張りが立てられ、主だった者が仏殿の中央で集まり、次の行動の確認を始めていた。

「三田尻へは少数で行く。石川、十五名ほど腕の立つ奴と、銃が得意な奴を数名選んでくれ。伊藤は遊撃隊と勇力隊と共に赤間関へ下って、萩へ攻め込む下準備を頼む」

「承知」

「ああ、それと、銃器の確保もだ。できるか？」

「できずともやりますよ」

「軍艦を乗っ取ったら、萩へ向かうのか？」

「いや。三田尻から赤間関へ向かう。各軍は海軍局襲撃後に、陸地から萩を目指してくれ。こっちの用意が整ったら合流する」

これからが大仕事になるぞ、と言いながらその場へ寝転がってしまった。

その体の上に布団が乗せられる。

「なんだあ？」

「少しでも寝て下さい。風邪は万病の元！」

「布団なんぞ持って来るな」

「駄々を捏ねないで大人しく休む！ 僕は他を手伝ってきます」

小五郎が居ないのに小五郎が居ると、ぶつぶつ言いながらも布団を手繰り寄せる。

「正論だな」

石川が布団の主となった高杉に笑いかけた。

「五月蠅い！」

所と伊藤も少しの間だけと、布団を持って来ると高杉の横に連なって寝転がってしまった。

「俺も寝とくか」

しばらくの間仮眠を取った高杉は、遊撃隊十五名と和奈、武市を連れて海軍局へと発った。

翌十五日未明。

三田尻の海軍局へ乗り込んだ高杉は、癸亥丸艦長福原清介、きがいまる丙辰丸艦長松島剛蔵、こうしんまる庚申丸艦長山田鴻二郎を呼び出した。

長州藩で建造された最初の洋式軍艦丙辰丸は、船首両舷に大砲を一門ずつ装備した二檣スクーナーの帆船だ。長州藩士と水戸藩士の密約締結にも使われた船である。庚申丸も長州で建造された船だが、オランダ人から習得した技術を使っている。三十斤砲六門を装備した大型木造帆船で、丙辰丸より二倍近い大きさを誇る三本マストの縦帆装バーク型である。この二隻とは違って癸亥丸は商船だった。二本マストだが、一方のマストに横帆を張る二檣ブリッグ型で十八斤砲二門と九斤砲八門、計十門の大砲を装備させている。

一戦も交える事なく軍艦を確保をしたいと考えた高杉は、各艦長の説得を行っていた。

「幕府に恭順すると言う事は、攘夷を捨てるも同意。赤間関での戦で散った者達の死も、無駄なものとなってしまします」

「言わんとするところは判るが」

「ならば、同郷の者同士が戦う事に意味がないというのも、お判り頂けるはず」

「・・・しかし」

「丙辰丸は同意しよう」

松島は躊躇いなくそう口にした。

長州藩藩医だった松島剛蔵は、藩命で長崎海軍伝習所で航海術を学んだ。この時に勝海舟とも顔見知りとなって居る。帰藩後、洋学所や軍艦教授所を創立し、長州藩が自力で建造した丙辰丸の艦長となり、初代長州藩海軍総督に就いていた。

「松島さん？」

「周布さんの悲報は聞いている。国司殿達もだ。禁門への出陣を黙認した俗論派が、幕府が責めてと言って手の平を返した事に納得な
どできん」

藩論を統一させる事において、現藩政の対応に遺憾の念を抱いて
いるのは松島だけではない。

「ならば、我らも従おう」

福原と山田も、艦の使用を承諾した。

そればかりでなく、兵の提供と武器の補充を申し出てくれたので
ある。

「有り難い！」

遊撃隊一人を伊藤の元へ送り出した高杉は、三隻を赤間関へ向け
て出航させた。

十七日。

佐世の干城隊と、御公卿の護衛に当たっていた太田市之進率いる
御楯隊が長府へ集結した。

萩に生まれた太田は、十八歳の時に斎藤弥九郎の道場に入門し塾
頭を任される才能を持つ。長州藩が馬関で起こした米仏商船砲撃に
加わり、禁門の変にも参加したが破れて長州へ帰藩。今度は四国連
合艦隊との戦闘に参加する。今はこの戦の後に結成された御楯隊の
総督となっている。

長府新地会所の襲撃と、三田尻にて軍艦奪取の報告が長州全域に
渡ると、それまで沈黙していた山縣狂介率いる奇兵隊が決起し、堀
真五郎率いる八幡隊、赤川敬三率いる膺懲隊、隊長佐々木男也率い

る南園隊も合流して来た。

倒幕派主導の動きが各地で目立ち始めると、俗論派は藩庁に対する反逆行為だとして迎え撃つ決議を下し、前軍の将に粟屋帯刀、中軍の将に総奉行毛利宣次郎、後軍の将に陪臣児玉若狭をおき、先鋒隊を含めた部隊を編成した。

慌しさを極める中、高杉から戦争開始宣言とも取れる書状を受け取った棕梨は、見せしめとして前田孫右衛門、毛利登を含む倒幕派七人の処刑を遂行した。

長府へ向かう前夜、各隊の頭が集まり会議を開いていた。

「遊撃軍と勇力隊は赤間関にて集結している。奇兵隊、干城隊・八幡隊・膺懲隊・南園隊は先行した軍に合流後、伊佐から大田へ向かってくれ。指揮は奇兵隊の山縣が執る。御楯隊は遅れて四郎ヶ原から進軍する」

諸隊軍が集まる中、各地で息を潜めていた正義派が各地で動き出した。三田尻海軍局も、松島達に習うように、局内の俗論派締め出しに取り掛かった。

「すごいものだな」

もし、土佐勤王党を龍馬が率いていたら、その中で己も尽力せんと動いていたに違いないと、高杉を見ながら苦笑した。

「高杉さんていつもフラフラしてるから、なんか別人を見ている気分です」

「確かにな」

確実に忍び寄る影に怯えもせず、今何が出来るか何をすべきかと、限られた時間の中で最善の方法を選び、心に決めた志を貫こうとする男を羨ましく思った。

「うっしあ！」

いきなりの咆哮に、居合わせた者の視線が高杉へと注がれる。

「各自十分休養を取ってくれ！俺達に惚れたて来た挺身隊もいるんだ。鋭気を今のうちに養っておけよ！」

今朝早く、萩から女子一団が奇兵隊に守られるようにして到着した。

先の戦において、隊士の家族や領民の女達も何か出来る事は有ると隊を結成。怪我人の治療や看護、給仕等を本陣で行なっていた。そこかしこに、もんぺ姿で隊士の世話に駆け回る姿がある。

伊藤もまんざらではないのか、運ばれてくる食事を受け取り談笑していたし、和奈の周りにも数人の女子が群がっていた。

「華奢なお方ですのに、戦に出られるのですね」

「あら、桂様も華奢な殿方でいらっしゃいますのに、剣の腕は凄いと聞きますよ？」

「村木様もやはり、剣の達人なのですか？」

腰に差された剣に視線が集まる。

「いや・・・僕はあの・・・ごめん、また後で」

容赦ない質問攻めに堪えかねた和奈は、高杉の横へと逃げ出してしまった。

「おいおい、何うろたえてるんだ」

「だって、どう接していいのか困るじゃないですか」

「そんな事を言って俺の方に逃げて来るから、ほら見ろ。桂木さんが一番羨ましい状態になってるじゃないか」

振り返ると、女性達の矛先が武市に代わり、取り囲まれる状態になっていた。

「いい男だからな。女達も放っておけんのだろう。戦の後になって祝言をあげる奴もでるくらいだぞ」

中でも一際目立つ女性が武市の横に座り、持った膳を勧めている。「う・・・だってほら、一応僕は男なんだし・・・これ以上桂木さんを変態にできないし・・・」

「そうか、いいのか」

気分のいい光景ではない。だからと、止めて下さいと怒鳴り込む

訳にはいかない。

「たまには我俣も言わんと、壊れるぞ」

「へ？　壊れる、ですか？」

「阿呆が。そこまで鈍感だったか」

「気を張り詰めてないと、咄嗟の時動けないんですよ。皆のように
は行かないんだから仕方ないです」

「たあっ、と顔を手で覆い、指の間から桂木をちらっと覗く。

「見てみる」

和奈の腰に手を回してた高杉は、これ見よがしに自分の方へ引き
寄せた。

「これが進軍路だ。俗論派軍との衝突は山岳地帯になるから、おま
えも周りの地形を頭に入れておけ」

「地形ですか？」

紙には地名や、進行の為の線が引かれているが、地形をどう捉え
ていいのかさっぱり読み取れなかった。色分けされたり、高低差が
付けられている地図とはかなり違うのだ。

「これじゃあ解らないか」

「ええ、すいません。僕が知っている物と全然違うから」

「ほう。なら落ち着いたら教えてくれ」

「いいんですか？」

「そういう類ならな」

地名など書かなくても、高低差や道か山かを書く位なら問題ない
のだろう。

「あの、高杉さん。いい加減この手を退けてもらえませんか？」

身体が密着し、腰に回された手から温もりが伝わって来る。遠慮
はいらん、と言われても遠慮したかった。

「高杉さんも変態になりますよ？」

「言わせたい奴には言わせとけ」

「それはそれで問題と思います」

「女に戻りたくならんか？」

聞こえてしまわぬよう、耳元に口を近づけて囁く。

「・・・考えた事もなかった」

「たまには考えろ、馬鹿が」

男として居る事になんら不都合を感じた事がないので、改めて考えはしなかった。剣を振るう以上、女であるより男の方が都合が良かったのだ。

思案していると、後ろから伸びて来た手が和奈の右腕を掴んだ。

「え？」

力一杯横へと引っぱられると、もう一方の手が腰に回されている高杉の手を払い退けた。

「うあっ？」

「やっとお出ましか。心配ならちゃんと傍に置いとけてんだ」
払われた手を振りながら、和奈の後ろで鬼神のように立つ武市に顔を向ける。

「忠告、ありがたく頂いておこう」

「この阿呆は言わんと解らんぞ？」

「貴殿に案じられるまでもなく、承知している」

「へっ。とつとと朝雲暮雨の仲にだもなりやがれ。もたもたしてる
と俺が搔つ攫つまうぞ」

頬に赤みが差し、さらに目を高杉に向けた武市は、きょとんとしている和奈の腕を掴んだまま外へと歩き出した。

「夜風に当たりすぎるなよ！」

けたけたと笑う声が背中に届いた。

「桂木さん??」

無言のまま、和奈を引きずる様にして仏殿の横まで来た武市は足を止めると、困った顔で振り返った。

「高杉くんとは絶対二人きりになるな」

そう言う顔は明らかに怒っている。

「はっ!？」

高杉には、傍に置きたい一心で身請けした芸子が二人居る。

「女子に手が早い男だと言うのを、すっかり忘れていた!」

「って・・・え?」

武市の両手が和奈の頬を挟むように包む。

「解ったな!」

その剣幕に断る事も出来ず、和奈は解りましたと約束してしまつた。

武市は深いため息を一つついた。

「言わねばと思って居たが、言いそびれていた。俺は、おまえが女子だと言う事を最初から知っている」

「ええっ!」

「男の言葉を使い振舞つても、見る者が観れば判る事だからな」

「頑張つてゐるつもりなんですが・・・すいません、黙つてて」

「考えあつての事だろうから、気にしないでいい」

一体どんな顔をして和奈を見て居るのだろうと、武市は笑みを零す。

「だが、長州に戻った今、男で居る必要はないのではないか?」

「剣を捨てると、おっしゃるんですか?」

「戦は男がするものだ、それが道理だろう」

武市の言う事は最もだと思うのだが、はい、と答える事が出来なかった。何故なのかは和奈にも解らない。

言葉もなく俯いてしまった和奈を見下ろし、その頭に手を乗せる。

「剣を持ち続けると言うのは、更に人を殺める事に繋がるのだぞ?」

「それは・・・」

「わざわざ己を危険に晒す理由もあるまい」

「でも、女に戻ってどうすればいいんでしょうか」

「はっ? おまえ・・・村木家は桂家の遠縁だが上士の家系と聞いている。武家の女子ならいずれ興入れせねばなるまい」

「興入れ?」

あまり聞きなれない言葉に首を傾げた和奈は、それが嫁ぐ意味だ

と思い出し、慌てて首を振った。

「そ、そんなまだ早いです！」

「二十二にもなって早い訳がないだろう」

江戸時代、女子は十八歳ともなれば嫁ぐ者が多く、遅くても二十四歳までには嫁ぎ先が決まる。その多くは親が縁組をしたもので、恋愛結婚は殆んどない。その理由は、恋愛の果てに結婚するのはいい加減な行為だとされる風潮があったからである。

江戸末期になると結婚に対する考え方も和らぎ、恋愛結婚をする者も増えてはいたが、武家社会ではなかなか認められてもらえるものではなかった。

恋愛はして来たが、結婚を考えた事は一度もなかった。この時代に来ては尚更である。

（武家の女子なら・・・か）

変に考え込んでしまった和奈を見て、武市は少し後悔した。結婚の話を持ち出すつもりなど毛頭なかったのだ。ただ、剣を捨てる意志を持たせたかっただけなのである。

「女子が剣を持ち続けるのは駄目なんですか？」

「前例もないからな。剣術を続けたいなら、作法として薙刀もある。強いて危険に身を投じるようなまねなどせずとも良いではないのか？」

「じゃあ、僕が前例になるんだ」

「・・・・くっ・・・・くくく」

「桂木さん？」

「どうやら切り出すのが遅かった様だ」

護身術程度で止めておくべきだったと、武市は思う。

以蔵を制しかけた和奈の剣捌きについては、未だに何も掴めていない。しかしあれ以後、豹変を見ることはなかった。

眠ったままならば、あえて起こす必要などないが、剣を振ると言う行く以上その首を擡げるのは否めない。

「剣の達人が嫁と言うのも、それもまた一興だな」

「一興って」

「まあ、おまえより腕が立つならば問題あるまい」

「すぐく範囲が狭まりますよ、それ」

「ここに一人居るだろう？」

「えっ!？」

言葉の意味がすぐには理解できなかった。

「体が冷えてきたな。戻るぞ」

スタスタと歩き出した武市を追いかける。

前を歩いて行くその背中を、和奈はずっと見ていたいと思った。

敬親は、大宰府への移転報告をしたいと言う三條と三条西に、萩入りを拒否する書状を送った。萩藩庁に提示した降伏条件の実施を、長州が成しているか監察するため、特使が総督府より訪れたていたからである。

俗論派はその特使の来訪に危機感を募らせていた。

内乱が知れば、幕府介入の可能性は高まる。本をただせば恭順を示した結果だが、棕梨は藩を掌握する事によって介入を阻止しよう、正義派への武力討伐決定を下した。

三軍にて陣を構えた正規軍総兵数千九百名に対し、正義派の諸隊軍はわずか二百名足らず。

軍勢を持って制圧する狙いだったが、中軍毛利宣次郎の目標は全軍ではなく、あくまで軍艦を奪取して赤間関にいる遊撃隊である。

宣次郎はまず諸隊軍に対し、正規軍の侵攻を妨げず隊を解体せよ、との命令書を出した。

正規軍からの命令書を受け取った山縣は、佐世らを集めた。

「千九百とはな」

唸る佐世。

「数で来たか。まるで御門の変再現だな」

他人事の佐々木男也は、政務座見習兼蔵元役の藩士で、福原越後の隊に加わり上洛、禁門の変で敗戦となった後は長州へ戻らず京に潜伏。長州藩の復権の為に桂と共に鳥取藩へ助力を求めたが拒否されその後帰国。八重垣隊を結成したが南園隊と改め、今度の決起に参加して来ていた。

「もう、冗談が過ぎますよ」

二人の言葉に泣きそうになっている所。

「実力行使より策を講じた方がいいだろう。一旦命令を受諾し、油断を誘ってから討って出ようではないか」

山縣は三人を相手にせず、隊の方向付けをして行く。

中間身分だった山縣は、松下村塾への入塾を勧められて断った者の一人だ。文久三年に高杉が創設した奇兵隊に参加。高杉が先鋒隊と起こした事件の責任を問われ総督の任を解かれ、赤根武人が総督に就き山縣は軍監となったのだが、時をおかず赤根が出奔した事で次の総督となっていた。

「確かに、三軍に分かれてくれたのは、こちらとしても都合がいい」

「周囲を包囲される危険もあるぞ？」

一軍でも六百余り居るのだ。横槍を入れられてしまえば、全滅もあり得るのだ。

「そうさせない為に考えてるんだろうが」

山縣がそう佐々木を睨みつける。

「武装解除を進言し、どう出て来るか見るって訳か」

佐世の言葉に山縣は頷いた。

「奇襲は我らが得意とするところ。地の利も藩士より、庶民や農民が主な我らにある」

「正攻法しか知らん奴らにとって一驚だろうな」

反対の声は無しと、山縣は進出している奇兵隊の一部と、南園隊、膺懲隊と合流した後、松堂への奇襲を決定した。

「幕府が提示した降伏条件を飲んだのは藩意にあらず。寧ろ俗論政

府の独断と、我はここに再度宣す」

「異論はなし」

一月三日を期日に、武装解除の受諾と引渡しに応じる旨を伝える為、斥候を宣次郎の中軍へと走らせた。

其之三 掌握

元治二年一月元旦。

長府に戻った高杉は、正月もあつたもんじやないと忙しく動き回っていた。

大田に進軍した諸隊軍からは、斥候が逐一戦況を伝えに来る中、正規軍が会所を占拠したとの報告が入って来た。

「武器弾薬を持って来てくれたのは有り難いな」

「と言う事は」

「行くに決まってる！」

石川は、はいはいと答えると遊撃隊へ命令を伝えに行つた。

軍資金は狙えずとも、銃器を奪うには格好の的となった新地会所再占拠に、高杉の苛立ちが向けられたのだ。

「前回の様にはいかんだろうから、おまえも腹括って出ろよ」

腰を曲げ、支度を進めていた和奈に顔を突き出した。

「括ります括ります。だからそんなに顔を近づけないでください」

「お？　なんだ、照れてるのか！？」

「違います！」

これも二人きりの状況になるんだとかと、焦るのは和奈だけだった。

「何かあつたのか？」

高杉の言葉に、どきつと胸が鳴る。

「あつたんだな？」

「特別な事はなかつたです！」

「ほう。普通の事はあつた訳か、そうか」

ニタニタと笑う高杉に、和奈の動悸は一層大きくなった。

「からかうのはその位にして、高杉くんも自分の用意を整えろ」

背後から影が落ち、顔だけを後ろへ向けた高杉は、これまたニヤリと笑いを浮かべた。

「大方の予想はつくが、細かい心配などいらん」

「そうならば、こちらとしても安心だ」

二人の会話の意味するところを悟れず、ハラハラしながら二人を交互に見る。

「相手にも銃兵が居る」

「心得た」

もう一度和奈を見た高杉は、良かったな、と笑顔を見せた。

「何が良かったんだろう」

離れていく背中を見ながら呟いた和奈に、知らん、と武市はそっぽを向いた。

新地会所に着いた遊撃隊・勇力隊は、待つ事なく正規軍に戦闘を仕掛けた。

武市の後を取り、会所の中へ走り込んだ和奈は、勢いを止めず銃を構えようとした一団へ斬りかかった。

「先走るな！」

叱咤を受け、武市が来るのを待つ。

「殺さず手負いにしておけ」

地面に転がる体を見た武市がそう命令する。

「はい」

手負いにさせる事ほど容易いものでない。乱戦では相手の一挙一動が気になる一方で、加減を考えて剣を振るのは至難の業だ。

和奈は懷から手足を狙いを絞った。

八双から晴眼の構えを取り、打ちかかって来る相手の剣を流しながら、すれ違い様に脹脛へと剣を滑らせる。

武市の剣がなだらかに弧を描く。

重心の移動も少なく、片足を引き、半身で剣を避けてはその懷に柄を突き出し、崩れた背中に太刀を放つ。深手ではないが、戦意を喪失させるには十分な刀傷を付けて行く。

いつの間にか斬り合いの中心となっている二人を見つつ、石川と

伊藤は驚きながらも高杉の姿を捜した。

「高杉のやつ、何処行った!？」

立場に関係なく、この混乱の中を突っ走っているのは間違いないのだ。

「伊藤、外は任す！」

「はい！」

予想通り、平屋に圧し入った高杉は、降伏を叫びながら走り回っていた。

正規軍の一人が高杉の名を叫んだ。

「高杉晋作だ！」

視線が高杉へと向けられると、我先にと斬りかかって行く。

「そうとも、俺が高杉晋作だ！ 命の惜しい奴は退け！ いらん奴は遠慮なくかって来い！」

その声を聞きつけた石川は慌てて走り寄った。

「正気か、高杉！」

斬りかかって来る敵兵の剣を弾きながら、石川は高杉の背に背を着けて言った。

「俺はいつでも正気だ！」

反対側から入って来た和奈と、高杉に挟まれる形になった敵兵は、分が悪いと取ったのか、矛先を和奈に変えて走り出した。

「阿呆め。そいつが居るって事はだ」

和奈の後ろから出てた武市が、斬りかかって来た敵兵の剣を薙ぎ払った。

「俺より怖い奴が居るって事だ。よく覚えとけ！」

笑いながら、双方に向き直った敵兵に剣を振り下ろした。

高杉が降伏を口にしつつ駆け回っていた事もあり、劣勢を打破できないと見た正規軍は次第に投降し始めた。そこへ隊頭山脇勝五郎が残りの勇力隊を伴い加わった事で、白旗を掲げての完全降伏となり、新地会所は高杉達によって占拠された。

新地会所を勇力隊に任せた高杉は、押収できる武器などはすべて

奪取すると、遊撃軍を率いてその足を大田へと向けた。

「おまえの言った通りだが」

歩きながら、石川は後ろから付いて来る二人を一度振り返った。

「長州にあれほどの剣客が居たなど、聞いた事がないぞ？」

初めて会った時に抱いた疑問である。

「能ある鷹は爪を隠すって言葉があるだろうが。心配はいらん」

「心配している訳じゃない。あれほどの剣客ならば、一度くらい名を耳にしてもおかしくないと言ってるだけだ」

「正直、手合わせしたくない相手ですね」

「俺から言えるのは、おっきいのもちっこいのも怒らせるな、それだけだ」

「答えになってない」

高杉が側に置くなら間者の可能性は無いだろう。ただ、その存在が疑問なのだ。

石川も伊藤も剣については達者な方ではない。それでも太刀筋を見れば、武市が桂や高杉に並ぶ剣客であろうことは判る。和奈にしても、抜刀の速さと詰めの速さでは、そこらに居る剣士以上の腕と見て良かった。

疑念はどうしても沸いて来る。

「京へ出てみる。あんなのがうじゃうじゃ集まってるんだ」

「虫じゃないんだから」

「新撰組も兵揃いだ。二人位目にしたからと驚いてるんじゃない。

まあ、俺が一番怖いのは小五郎だがな」

うじゃうじゃと剣豪に出て来られるのも、桂が出て来るのも願ひ下げにしたいので、石川も伊藤もそこで詮索を止めた。

一月三日の武器引渡しの日を過ぎ六日になっても、正規軍からの指示は来なかった。

これを逃す手はないと、絵堂に陣を構える粟屋隊へ、山縣は闇夜

に紛れて奇襲をかけると決定した。

その数二百名。対する松堂陣は壱千近く。

眼前に前軍の陣が見えて来ると、隊を止めた山縣は、敵陣に斥候を走らせ戦線布告を唱えた。

書簡を届けた斥候が戻って来たのを合図に、砲撃を開始する中、一斉に栗屋陣へと雪崩れ込んだ。

夜襲に不慣れであつた栗屋達正規軍は、陣形を整える間もなく交戦となったが、右往左往するばかりでまともに戦う事が出来ず、その戦線を後退させ始めた。

剣戟けんげきの音と銃の音が混じり合い、敵味方双方とも負傷者が出始めた頃、中軍陣から別働隊を率いて来た財満が栗屋に合流して来た。

形勢の巻き返しを謀ろう奔走するが、浮き足立った正規軍の足並みを揃える事が叶わず、諸藩の狙撃兵が奔走している財満を撃つと、栗屋はこれまでと兵の撤収を余儀なくされた。

諸隊軍は死者二名を出したが、松堂の占拠に成功したのである。

伊佐から大田へ到着した佐世達が松堂へと到着した。

「地形が悪いぞ」

「今それを考えてた。大田で陣を敷いて構えるべきだと思う」

「異論はない」

攻めるよりも、守りに入つた場合地の利が悪い事は、栗屋との戦闘を見ても判ることだ。自分達の先方が奇襲を主としたものであるから、考えられる決断だった。

八日の朝。

大田金麗社に本陣を置いた山縣は隊を三つに分け、松堂へ続く本道の長登口へ八幡隊・膺懲隊を、長登に下る香水峠に南園隊・御楯隊を向かわせると、奇兵隊・干城隊を大田川沿いに進軍させた。

中軍と共に松堂へ到着した宣次郎は、長登口方面に先鋒隊を進軍させ、やって来た八幡隊・膺懲隊と衝突した。

程なくして、先鋒隊の別部隊二百名が諸軍右翼に攻撃を開始し、劣勢を強いられた八幡隊の堀は、大田方面の川上へと後退し始めた。隊を後退させ、地雷火を設置すると等間隔に伝令を置き、先鋒隊が来るのを待った。

やがて追撃して来る先鋒隊が見えると、木陰に潜んでいた伝令の一人が走り、次のに旗を振る。それを見た伝令が次の伝令へと走り、地雷火の上を通る頃合を計った太田は、導火線に火を付け、隊を配置させた。

しかし、先鋒隊は地雷火に見舞われることなく通り過ぎて来た。地雷火で戦局は変えようと目論んだ太田の策は失敗し、大田本陣まで迫られる事になってしまった。

本陣が崩れれば香水峠に進軍した隊が挟まれる事になると苦慮した山縣は、奇兵隊を二つに分けると一方を先鋒隊側面へ回した。

奇兵隊の攻撃を予測し得なかった宣次郎は、側面から攻め込まれた先鋒隊は混乱の中総崩れとなり、大田本陣を前にして退却させられてしまったのだ。

四日後の十二日。

諸隊軍の側面へと攻撃に出ようと、三隅より嘉万村へと進軍していた後軍は、逃れて来る児玉領農民から、情勢が当軍の劣勢である事を耳にした。

これを聞いた児玉はこのまま進軍すべきかどうか迷い、一旦秋吉宿まで軍を後退させた。

本陣へ戻り指示を仰ぐのがいいと判断した児玉は、運んでいた銃器などを嘉万村に置くと、三隅陣へと向かった。

入れ替わるように、遊撃軍が嘉万村へ到着した。

児玉軍が装備を置いて行った事を知った高杉は、大した土産だと言って置かれていた武器弾薬を奪取すると自軍へ運んでしまった。

「まるで山賊ですよ、これじゃ」

「何を言うか。使わない物を頂いているだけだ。これも兵法の一つ

！」

悪びれる様子もなく高杉は言う。

兵法と言われても、軍もなく、徴兵制度もなくなっていた世に生まれた和奈には、それが戦の方法だろうという位にしか理解できなかった。

諸外国との戦争を敗北で迎えた後の日本は、アメリカの監視下に置かれた。

復興を始めた日本に、色々西欧諸国の文化があふれ出した。代わりに、古き良き日本の風習や文化は徐々に無くなって行ったのである。

近代化の波を受け商業が盛んになり、経済が国の基盤となって行った。それから日本国民は、仕事に追われる時間との戦いを始め、政治家は汚職にまみれ、国家のためと謳いつつ私利私欲に帆走し、ゆとりが欠落した国民はただ不平を言うばかり。自ら行動しようとする者は、変わり者と称されてしまう嫌な世界に変貌を遂げている。道徳を失った母親は、教育こそが価値あるものと言わんばかりに学歴を優先させ、個人の精神的教育を置き捨てた事で、再び日本は迷走を始めたのだ。

礼儀を重んじ、人一人が国の未来を真剣に憂う国であった時代は、明治を境に終わりを告げた。

そして再び、幕末の混迷を昭和と言う時代から繰り返す事になる。

日本人の心に在った、大切なものが失われてしまった。

ふと和奈はそう思った。

「どうした、気になるのか？ 正規軍として立場が同じなら、置かれた装備をこれ幸いと喜んで持って行ってしまうぞ？」

「そういうものなんですか」

戦とはそう言うものだと言った武市は苦笑した。

十四日。

福岡藩の周旋で九州五藩に分移されるまで、筑前国大宰府延寿王院預かりとなった五卿達は、薩摩藩から警護に派遣された大目付の吉井仁左衛門、土佐藩浪士土方久元と共に長州を発っていた。

京から長州入りしていた中岡もこれに加わっている。

土方は七卿落ちと共に長州へ下った志士で、そのまま三條の許で色々な活動に手を貸していた。その為惨状からの信頼も厚く今回も三條の希望によって随行している。

中岡が三條らと接触が出来たのは、この土方の随行があったからだ。

「土方さんが居てくれて助かりました」

「役に立てて良かった。おんしにとつて都合のいい奴もおるしの」
そう言つて吉井の後姿を指差した。

吉井は西郷や大久保と共に精忠組を創り藩政に関わつて来た。二人とは幼少期からの親友で、禁門の変では土佐藩士乾市郎平、久留米藩士大塚敬介らと合議し、長州藩とは話し合いによる和解を意見書を朝廷に建白した一人でもある。

「都合良過ぎますよ」

薩摩と長州との同盟を前に、吉井が居るのは中岡にとっては有り難い事と言える。西郷と桂の会合だけでなく、薩摩藩の下からも同盟を盛り立ててくれる存在は必要と考えていたのだ。

長州へ行くと告げた時、助力を申し出てくれた大久保は、長州征伐において西郷が考えた妥協案を知っていたのだ。だから吉井を同行させ、三條との繋がりを得る事で、薩長の和解に波風が立たぬよう動ける場面を作ったに違いない。

「吉井さんも大久保さん寄りなんですか？」

「ああ。倒幕思想では意見を一致させちよると聞く」

土方は、確かに都合が良すぎる組み合わせだなと笑った。

「わしが何を知ちゅうのかって顔をしちゅうな」

「いえ・・・」

「三條殿は高杉くんと懇意の間柄だし、尊皇攘夷派だ。少なからず情報は入ってくる」

萩入りを拒否されて和奈達の動向も探れない中、高杉が拳兵したと土方から聞かされた中岡は、今自分に出来る事は戦へ赴く事ではなく、先を見据えて動く事だと考えた。

「土方さん、ご助力願います」

「そのつもりでおるき、心配しな」

雲が広がり始めた空を見上げた中岡は、動き出した時代の様だと思った。

同じ十四日。

松堂から退却した栗屋は軍を建て直すと、捲土重来を期して長登口から香水峠に布陣する諸隊軍へと進軍を開始した。

遊撃隊と共に大田へ着いた高杉は、各隊総監を集めると、それぞれから戦の経過を尋ねた。

「香水峠は苦戦したか」

「回収した地雷火を見たが、導火線の途中で水に浸ってた」

「川から侵食した水か」

雨は降っていない。ならば原因はそれしかなかった。

「山縣の機転でなんとか後退させられたが、すまんとしか言いようがない」

「結果が良ければ全て良しだ。大きな被害も出なかったんだ、そう気にするな」

伝令が栗屋隊の進軍を知らせに駆けつけて来た。

「おいでなすったな。奇兵隊は間道に、遊撃軍は峠東の山中に潜伏、交戦が始まったら側面から打って出る。残りの隊は正面から堂々と

正規軍の相手をしてやってくれ」

語られた戦法は、野山の地形に長けた者の多い諸隊側ならではの。功山寺で高杉に地形を覚えろと言われたのを和奈は思い出し、周囲の山々を見回した。

山縣は導火線の配置に気をつけながら、正規軍と戦闘になるだろう箇所に地雷火を仕掛けた。

正規軍の前衛が仕掛けかかると、爆発音を合図に諸隊が斬り込んで行き、潜伏していた二軍は予定通り両側面からの奇襲に出た。激戦となり、先鋒隊を二分されられ栗屋は、各個応戦を叫んでいる。

「命の惜しい奴はどけ！」

先陣を切って進む高杉の足は先鋒隊本体へ向かっている。

「だから無茶はやめろと・・・ああもう！」

伊藤は観念すると、隊に号令をかけ高杉を追いかけて行った。

銃声が飛び交い、地雷火が轟く中、戦場はさらに混乱を極めた。

「石川さん、何なんですかあの二人は！」

所が指差した先に、慌てふためくでもなく、敵兵を斬り伏せて行く武市と背後で剣を振るっている和奈の姿があった。

「俺に聞かれても困るんだが。桂さん並の剣客だと言えん」

剣を受け、鰐迫り合いになった和奈は、力で張り合うのは不利と力を抜いて刃を横に流して後ろへ間合いを取った。

その直後、右肩に痛みと熱さを感じた。

（斬られた？）

視線を後ろへ逸らした瞬間、体勢を立て直した兵が懷へと飛び込んできた。

「くっ！」

脇差を左手で抜き、身体を傾けて剣を防ぐと、焼けるように痛む

肩を下げ相手の足目掛けて右手を振り下ろした。

「あう！」

膝を付いた男の首筋が眼に映る。

その首元に突き刺さった剣を思い出した和奈は、一歩後ず去った。
「無理をするな！」

腕を垂れて立ち尽くして居る和奈に斬りかかった兵を一刀両断に
斬り捨てた武市は、その腕を取り上げた。

「肩を斬られたか？」

我に返った和奈は、痛みを感じる肩を見た。

血が滲んでいる。

ざわりとした気を感じ、慌てて首を振る。

「大丈夫です、傷は深くありません」

見ると、着物が裂けた合間から覗く皮膚は赤く染まっていた。が、
この状況では傷を心配して手当てにかかる暇などない。

「俺から離れるな。左側をおまえに任せる」

潰れた左目は視野を狭くし、死角となる範囲を増やしていた。正
直なところ、銃声や怒声のお陰で音を察し、人の動きを捉えるのは
至難の業となっている。

敵の間を縫うようにして、石川と所が二人のと所へと駆けつけて
来た。

「下がれ！」

敵兵をやり過す石川達の周りに味方が集まってくる。その中を和
奈と武市を連れ後方へと退いて行く。

「あんたら、無茶し過ぎだ」

そう言った石川は、負傷者の座る場所に二人を連れて来ると、近
くに居る兵に手当てを命じた。

「村木くんだったな。心意気は十分だが、周りを見て戦うのも重要
だ。乱戦では孤立が最大の危機と心されよ」

所が真剣な顔で和奈に言い捨てた。

「はい、申し訳ありません」

「助力忝い。俺の指導不足だ」

手当ては自分がすると兵から包帯を受け取った武市は、皆とは反対の方へ和奈を向かせ、片身を脱がせた。

赤い筋が右肩の端から肩甲骨へと伸びている。

「皮一枚程度で済んで良かった」

肉を深く斬られれば縫合が必要となる。男でも、用意のない縫合は激痛どころの話ではないのだ。いくら和奈が気丈だと言っても、それに堪えられるとは思えなかった。

「一瞬、気が乱れたな」

武市の胸中に嫌な予感が広がる。

「斬られて、焦りました」

「和太郎、やはりおまえは剣を」

「大丈夫です」

そう言いきった和奈に迷いは見えず、武市はその後の言葉を飲み込んでしまった。

戦局は、正義派が次第に栗屋を追い詰める形となって行った。

「農民の寄せ集めに、こうも圧され続けるとは、武士としてなんと情けない事か」

「しかし劣勢なのは確かであります。ここは本陣と合流するのが得策かと」

側面からの奇襲が栗屋にとって痛手となっていた。

野兵ごときに負けぬと言う自信が、そうならず翻弄され続けている局面を見て崩れかけていた。

武士の意地と、このまま戦を続行する事も考えたが、優勢に転じる策も兵もなくては、無謀と判断する外なかった。

「退却させよ！」

栗屋がそう叫ぶと、脇に待機していた伝令が戦場へと飛び出して行った。

そうして、正規軍は深追いしてくる諸軍を牽制しながら、本陣へ

と撤退したのである。

木立の脇に火を焚く周りで、その明かりを頼りに負傷者の手当てが行われている。

和奈も、応急処置で済む怪我人を探しては手当てし、また次をと隊士達の間を駆け回っている。

「何やってんだ」

「見たら判るじゃないですか、手当てです」

「おまえはこっちに来て大人しく座ってろ」

高杉はやれやれと言いたげに睨むと、陣の真ん中に焚かれた火の所へと和奈を引き連れて行く。

「桂木さんもどうか休んでいて下さい」

別の方向から来た所は、給仕を手伝っていた武市を見つけて連れて来たのだ。

「働いてくれるのは嬉しいが、それぞれ役回りがある。戦う奴が今する事は、疲れた身体を少しでも休める事だぞ」

真冬の野山は痛いほどの寒気に覆われている。その寒気も体力を奪って行く。無駄に動く余計に疲れが増すだけと、高杉は体を摩りながら言った。

「本営でも構えられれば、寒さもましになるんだがな」

それには莫大な費用が掛かり、宿営に使う部材を運ぶのにも人手が掛かる。軍資金が乏しい諸隊では、正規軍の様に設営できるものではないのだ。

「大田川沿いは迂回している上に蛇行が多いし、進軍するのも守るものも難しい。恐らく敵本陣は、長登から下の峠を行った赤村辺りで陣を取っているはずだ」

絵堂が初戦でもある、高杉は枝で地面に地形を書き出してばつ印を付けていく。

「こっちの負傷兵はかなり多いぞ。それとは反対に奴さんには後ろに無傷な軍が控えてる」

佐世は高杉の書いたばつ印の後方に二重のばつを付けた。

「奇襲に継ぐ奇襲で、阿呆な奴らも、さすがに警護を強化しているだろうしな」

佐々木が敵本陣の地形に、奇襲できるルートを書き込みながらそう言った。

「それなら堂々奇襲で行く」

はぁ、と石川と所は大きなため息を吐き、佐世はそっぽを向いてしまった。

「おいおい、おまえら」

「いいよいいよ、もう何も言いません」

堀も高杉に呆れ顔を見せると手を振ってそう言った。

堀真五郎は万延元年に中国諸藩を遊歴後江戸へ出で、高杉晋作らと共に品川御殿山のイギリス公使館を焼打ちに参加。翌年帰国し八幡隊を結成し自ら総監に就いた。

その四人とて無傷ではないし、高杉も足に包帯を巻いていた。戦況を優勢に保っているが、負傷と疲労困憊がすべての者の身体に押し掛かっている。

それでも誰一人、疲れたという言葉を口にしなかった。

「正念場だ。皆、すまんがもう暫く頑張ってくれ」

そう頭を下げる高杉に、佐世と佐々木が口の端を上げ、石川らも嬉しそうに頷いた。

翌日、斥候が敵陣の情報を持って戻って来た。

高杉が推察した通り、正規軍は赤村に留まり正岸寺に陣所を構えている。

負傷者で動けない者は、大田に残る指示を出し、残る諸隊を三軍に分けると、持ち場を伝える。

「火を焚くのは正面から向かう遊撃隊のみ。他の隊は左右から火を焚かず正岸寺へ向かってくれ。火を目印に、俺達が敵本陣に入ったら突入してくれ」

一人が二つの松明を持ち、こちらの数を二倍で在るかの様に見せ、正面から全軍で来たと敵を攪乱させる。それにより、奇襲を想定し配置している兵士を集め、側面から奇襲をかける策だった。

悪戯っ子が悪巧みをするように、高杉は楽し気な顔を見せた。

一月十六日深夜。

香水峠を後にした諸隊は、正岸寺に陣を構える正規軍を眼下に見据えた。

「行くぞ」

山間を駆け下りた高杉は、松明に火を灯し肩幅より外側へ掲げ、隊を前進させた。

高杉の思惑通り、正規軍は揺らめく火を見て諸隊全軍が攻めて来たと勘違いし、夜襲を警戒してい配備を解いて隊を集め始めた。

左右に潜伏していた諸隊軍は、松明の火が慌しく動いたのを確認して一気に右往左往する正規軍の中へ突入した。

伏兵を予期しながら裏をかかれた正規軍は、抵抗し切れず正岸寺から木間へ後退を始める。

「こうも攻められるものなのか！」

栗屋は中軍の陣がある明木へと撤退せざるを得なくなり、またしても敗退を記したのである。

度重なる勝利に諸隊軍の士気は高まっていた。

明木の中軍へ即座に攻め入り、萩へ進軍するべきと堀や石川が詰め寄ったが、高杉と武市、佐世の三人は難色を示した。

挙兵から一ヶ月余り経っている。諸隊軍は各地から集まってきた有志により、数を増やしたが、負傷兵の数もまた比例するように増えている。

士気高揚の中、突き進む事も戦においては欠かせぬものだが、明

木の中軍はまだ無傷な上に、秋吉から退却した後軍も加わっている。その全軍を相手に、負傷兵を抱えての進軍は、例え正攻法であろうと奇襲であろうと大きな犠牲を伴うと考えたのだ。

疲労と負傷者を抱えて進軍するよりは、山口、小郡、海軍局のある三田尻を拠点とし、地盤固めを行って萩へ向かうのが理に適うと判断し、高杉は撤退を決定したのである。

惨敗を記した正規派軍も、諸隊が進軍して来ないことを見取り、それ以上の進軍はせず萩へと撤退した。

しかし、正規軍の敗戦に敗戦を重ねるだけに終わった進軍は、藩全体に影響を及ぼす事になった。

二十七日になって徳川慶勝は、西郷の提示した妥協案を長州が受け入れ恭順を示したとの知らせを受け、正規軍の敗戦を知らされぬまま出兵諸軍を撤兵させた。

この撤兵により、長州征討は収束を迎える事となったが、長州の内乱は収まる所を見せなかった。

高杉は癸亥丸を萩冲向かわせ、昼夜問わず空砲を打ち鳴らさせた。諸隊が体勢を整え終えた頃、呼応し参戦してきた有志を加えて篠目口、佐々並口、西市口から進軍を開始した。

先鋒隊を含む正規軍の敗戦はさらに続く事になった。

藩庁内では有志による鎮静会議員の集団が組織され、山口、小郡、三田尻に拠点を構えた諸隊と提携を図り、藩論統一を唱えて動き出したのである。

この悪状況に業を煮やした棕梨は、これ以上鎮静会議員達と諸隊が繋がるのを恐れ、藩論が固まらぬ中、反対の態度に出た議員達の暗殺命令を出した。

だが、暗殺が漏れると俗論派は藩政を追われる形となり、棕梨らは萩を脱出し岩国へ亡命を図ったのである。

俗論派の逃亡により、正義派が藩政を掌握し漸く内乱は終息を迎えた。

敬親は沈静化した藩内の混乱を避ける為、まずは藩を静定するよう正義派に命を下し、命を受けた高杉は、潜伏してた桂に伝令を送り萩へと呼び戻した。

ため息と共に現れた桂を、満面の笑みを浮かべた高杉が出迎える。「藩の行く末を左右する戦だと言うのに、声もかからず仕舞いとは」切迫した情勢を杞憂しながら長州を発った。何事か起これば高杉に呼び戻されるだろうと安心していたのだ。そんな桂が内乱を知ったのは、撤退する幕軍の情報舞い込んだ後だった。

報せを貰い戻してみると正義派が陣頭し、解体となった正規軍は遊撃隊と干城隊に編入され、奇兵隊や御楯隊が長州陸軍の最たる隊となっていた。

狐に抓まれた様だと、笑顔を絶やさず座る友の傍らに腰を落ち着けた。

「桂木くんにもご助力頂いたとか。本当に、ありがとうございます」

恭しく手を付いて頭を下げる。

「この身はすでに長州の者です、どうか礼など無しに願いたい」

そう言ってもらえると心が楽になると桂は笑った。

「しかし、役に立てなかったのは本当に心苦しい限りだ」

「まあそう言うな小五郎。ぶっ壊すのは俺の最大の得意とするところだが、何かを作り上げてくつてのは大の苦手ときてる。だからだ、ここからがおまえの出番だ。お殿様から加判役として藩政に従事するようにとの仰せも出ている」

「それがいかに大変か、おまえには解っているのか？」

途方に暮れそうな問題を、目の前に積み上げられた気分だった。

「なあに、困った時は桂木さんに泣き付けばいいんだ。心許ないが、ちっこいのもいるんだなにも怖くは無いだろうが」

「ちっこいって！ てか、僕も入ってるんですか？」

「決まってるだろうが！ 薩摩との話し合いも止まったままだ。大久保さんに気に入られているおまえが手伝うのは当たり前だ」

気に入れられているとは思えないと否定したが、それでも問題はないと片付けられて終った。

「今一番頭を痛めているのはそれなのに、おまえだけ一人さっぱりした顔して」

剛と柔、明と暗。

そんな言葉が似合う二人だと、和奈は二人を見て思った。

お互いの信頼が確かなものでなければ、同じ方向を見据えて意見を合わせて行くのは難しい。表裏の対を成している二人だからこそ、お互いが居ること初めて一つとなれる。

「悪いな小五郎。後はおまえの好きにしてくれ、俺は疲れたから寝る！」

納得した顔で立ち上がった高杉は、桂の返事を聞く事なくさっさと出て行ってしまった。

「まったく」

困っていると言う顔は笑顔だった。

「ああ、坂本くんだが」

中岡がまず京を発ち、しばらくは藩邸で大人しくしていた龍馬も痺れをきらせたのか、京を出たと伝えた。

「じっと収まっている男ではないからね」

今度は武市が頭を抱える番となってしまった。

逃亡を図っていた棕梨は、津和野藩士によって岩国へと向かっている途中に捕縛され、長州へ送還されて来た。

萩に送り返された棕梨は、幕府軍との折衝について取調べを受けた。三家老の切腹と、周布の自刀を招いた責任を追及されたのである。

取調べが行われる中、棕梨は、すべては自分一人の罪であり、自分だけを罰するようにと鎮静会議員に懇願し、その要望どおり棕梨一人の処刑で済みますことで、内乱は完全に終息を向かえたのである。

其之四 憂愁

禁令

- 一、士道ニ背キ間敷事
 - 一、局ヲ脱スルヲ不許
 - 一、勝手ニ金策致不可
 - 一、勝手ニ訴訟取扱不可
- 右条々相背候者切腹申付べく候也

長州が内乱で荒れていた頃、京では新撰組が屯所の移転に頭を悩ませいてた。

一番隊に組み入れられた赤井は、京に潜伏する志士達の検挙、不逞浪士の取り締まり、町の治安活動などの任務の他、屯所での雑用に追われる毎日を過していた。

「せいが出ますね」

見廻りから戻って来た山南は、溜まった洗濯物を洗う赤井と隊士の山野八十八を見つけてそう声をかけた。

「お役に立てるのって、このくらいしかないので」

見廻りに出る様になったとは言え、入隊して間もない赤井が沖田達と乗り込む事はなく、外の見張りか他の隊への伝令が任される程度だった。

「人を斬らねば隊士ではないという事はありません。こういった雑務も立派な仕事です、頑張ってください」

「はい、ありがとうございます」

とは言え、十数人分の着物を洗うのは骨の折れる仕事だった。黙々と手を動かす山野を見る。

この男も新撰組に不釣り合いな容姿をしている。伏せめがちな目に

生える睫は長く、小さく整った唇、すらりとした顎から耳へ伸びる線。体つきも痩身で細い指先に泡が纏わり付いている。

「なんですか？」

じっと見られていた山野は、視線を感じたのか赤井の顔を見て訝しそう眼を細めた。

「いや、ごめん！　つい見惚れた」

「えっ!？」

山野が身体を逸らしたものだから、赤井は自分がとんでもない言葉を口にしたと慌てた。

「違う！　その、楠くんといい、山野さんといい、その」

「新撰組に似つかわしくないと言いたいんですか？」

「いや、そうじゃなくて・・・」

「容姿でそう判断されるのは心外です。屈強でなければ武士にならないなどと思わないで下さい」

「本当にごめん!」

泡まみれの手を膝に置き、頭を下げて謝った。

「解っていただければいいんです」

仕事は洗濯だけではないと、山野は自分の洗った着物を桶に入れると後ろの物干しへと立った。

ここ数日、夜になると土方の怒声が響く様になっていた。その声に紛れて山南の声も聞こえるので、隊士達は何事だと部屋から様子を伺うが、幹部の部屋へやって来る者はいない。

「俺達は幕府の下で仕事してんだよ!」

「それは私もよく解っています。何度同じことを口にすればいいんですか。もともと我々は、攘夷断行の助力を目的として京に残されたのです。それがどうです、攘夷に貢献するどころか、不逞浪士の取り締まりと称し、志士と見れば余裕なく斬り捨てる人斬り集団になり下がってしまったているじゃありませんか」

「攘夷？　それは精忠浪士組時代の話でしょうか!」

「おいおい土方。もう少し落ち着いて話ができんか」

こうも毎晩に渡って幹部が怒声を響かせていては、隊士達の不安を煽るばかりと、近藤は仲裁の役に徹していた。

「山南さんの言い分は十分解っている。だが、松平殿より町の治安と不逞浪士の取締りを仰せつかっているんだ。それに文句は言えんだろう？」

山南が語るのは、今の新撰組の在り方を否定するもので、近藤も賛同できたものではなかった。

「御命は承知している。ただ、闇雲に人を斬るだけが解決策ではないと言っているんです」

「あんたもくだいな！」

「土方！」

近藤に怒鳴られ、立てた足を戻して姿勢を正す。

「少し、失礼させて頂くよ」

伊東甲子太郎が、不快極まりないと言わんばかりの顔で部屋へと入って来た。

伊東は、門下生と共に上洛した折、同門である藤堂平助の仲介で松平と会い、その学識と剣の腕を買われ、参謀兼文学師範として新撰組へやって来た武士である。

人を見下す事もなく、物腰が柔らかく人柄も悪い方ではない。富貴の身分ではないが、気品ある容姿を持ち、面倒見も良く隊士からの評判も悪くなかった。

「すみません伊東さん、お騒がせしてしまって」

「私はいいのです。ですが、こう毎晩騒がれては、隊の士気に影響すると思ひまして伺わせて頂いた次第です」

不機嫌な顔を隠そうともせず、土方は伊東を睨みつけた。

「土方くんは副長でしょう。その副長ともあろう人が罵声を出してどうするんですか」

「元々こういう性格です」

伊東は呆れつつ、山南の横に腰を下ろした。

「意見の交換はとても大切だと思いますが、聞く限り、喧嘩にしか聞こえませんか？ 上の動揺は下にも伝わります。まずあなたは、新撰組副長である立場をもっと自覚して頂きたい」

「十分、自覚しております」

「なら、話し合いに罵声は無用。そうですね、近藤くん」

「近藤さんは関係ないだろうが！」

「まったく。近藤さんは局長ではありませんか。副長の言動を監督する役目もおありなのですよ？」

監督不行き届きをお許し下さいと、伊東に頭を下げる近藤に、土方はただ言葉を吞むしかなかった。

「山南さんも総長として、現状を危惧しておられる。参謀として、私も同じ気持ちであります。」

日常の任務に嫌気が差したからなのか、隊規が厳しいからなのかは不明だったが、脱退して行く隊士が増えている。

許可を取り付け脱退する者は多くなく、殆んどが土方や組長格の目を盗んでの脱走だ。自然と、屯所内の規律は乱れる。

「目下の課題は屯所移転の事です。互いの意見を吟味し如何にして受け入れるか、その一点に尽きます」

去るものも居れば来る者も居る。脱退者より入隊を希望する者が多くなり、隊士の人数は二百人を超える程に膨らんでいた。となれば問題となるのは宿所である。

前川邸がいくら広いと言っても、庭や蔵で寝かせる訳には行かない。となると、他に分宿させる場所を探す事が必要となる。一部屋を五、六人が使うという窮屈な状態を見かねた土方は、分宿ではなく屯所移転を考えたのである。

西本願寺が候補の一つに上がり、土方と山南の意見対立が表面化した。

京の町に知れ渡る西本願寺は、長州藩の毛利家と親密な関係もある事から、勤王色が濃い寺院として、長州藩士の隠れ蓑になっていると実しやかに囁かれていた。

その西本願寺を屯所とする事で、土方は志士らの活動拠点抑えようと考えたが、山南は反対を申し立てた。

論議は移転問題に終始せず、隊の在り方、とそもそも論になってしまっていた。

「折り合いをつけようと、こうして話してるんじゃないか」

「そうですか？ 私には己が意見を、一方的に押し付けているようにしか聞こえませんでしたけどね」

彼の中で土方は新撰組副長であり、隊の統率の一端を担う幹部でしかない。鬼の副長と、気にすることはしなかった。

「今夜はもうお開きにされる方が宜しいでしょう」

「私もこれで失礼させて頂きます」

伊東と山南が連れ立って部屋から出て行くと、近藤はやれやれと肩を揉みながら土方に苦笑した。

「これじゃ何時までたっても移転なんざできやしねえ」

「まあ、そう言うな歳三。俺も屯所の移転について譲る気はない。だが、伊東さんにああ出て来られては、意見を聞かぬ訳にもいかんだろう」

「追い出せばいいんだ、あんな奴」

それが出来るのなら苦労はしてないため息をつく。

「とにかく、会津藩への陳情は済ませんあるんだ、もう少し待て」

「我慢にも限度ある。どれだ隊士に窮屈な思いをさせたればいいんだ？」

「明日、会津藩へ行って来よう。松平殿の許可が下りれば、山南さんと反対だとは言えんだろうからな」

自室に戻った山南のところへ、沖田が姿を見せた。

「総司か、どうした？」

「・・・もう少し、近藤さん達と折り合いを付けて下さいませんか？」

「心配をかけてしまった様だね」

「粛清されたらどうするんです！」

沖田が心配する理由を山南も解っている。土方と対立し、粛清と斬られる者は一人ですまない。その執行に沖田が関わっている事も知っていた。

「おまえの心配はよく解る。私も、まだ死にたくななどないから、そんな顔をしないでくれ」

誠衛館に居た頃から沖田の面倒を見てきた。新撰組として京に住むようになってからも、我が事のように気をかけていた。若い時分に親元を離れた沖田も、そんな山南を兄のように慕っている。

だからと言って、土方の意見に反対の意志はない。山南の語る事の方が理想論に思えて仕方なかった。

「だが、攘夷を断行すべしとの意見を変えるつもりはない。長州であろうと志士であろうと、その意志を持つ者を敵と称し斬るのは、武士のやる事ではない」

新撰組の存在を否定し兼ねない言葉に、沖田の顔が青ざめた。

「！聞かなかったことにします！」

「そうか・・・」

淋しげに俯いた山南をそのままに部屋を出た沖田は、遣る瀬ない気分を抱きながら自室へと引き返して行った。

伊東が仲裁に入った夜以来、山南は体調が優れないとの理由で、部屋に籠もる様になった。

それはそれで、顔を合わせる機会が減りるだけで、土方にとって都合の悪い事ではなく、さして気にする事ではなかった。

ある夜。近藤は、屯所移転について松平容保から許可が下りる前に、賛成を取り付けておきたいと山南の自室へ足を向けた。

「体調は如何か」

「申し訳ない。屯所移転を早く決めなければならぬ時だと言うのに、この有様です」

布団から身を起こした山南に、その件でと話し始める。

「松平殿に西本願寺への移転許可を伝えた」

「……僧侶達はどのようにですか？」

「敷地を拝借するとなれば、別院に移って頂く事になるだろう」

「転居しろと申すのですか！？　なぜそうまでして西本願寺に拘るんです？　他にも候補地はあるでしょう！？」

「言っただろう。潜伏する志士の隠れ場の一つであると。勤王僧も多い寺だ、僧侶が加担しているのは間違いないと見ている」

「そんな……僧侶まで疑ってかかるとは、なんと卑劣で見苦しい事この上ない！」

「山南さん！」

それ以上続けるなど言わんばかりに声を荒げる。

「私は武力でこの国の安泰を図れるとは思っていません。今は良いでしょう、国の御為と剣を振るうのは。しかし、時代が変わった時、剣のみに生きて来た者をどすると言うのです？」

「武士の生きる場を失わせないために、日々の勤めがある」

「……っ」

「ここに集まる者は皆、武士を目指して剣を鍛えて来た者ばかり。沖田もその一人だ。幕府の命に従い、剣を振るのは我らが役目と心得ている。攘夷と駆け回るよりも、幕府に反抗する輩を取り締まるのが責務だ。そこをところを解ってほしいと土方も言ってるだけじゃないか」

山南は一瞬口元に笑みを浮かべた。

「武士の魂は剣だけにあらず」

「……」

「それで、松平殿は移転の許可を出されたのですか？」

「いや、おって沙汰を出すので待てと言われた」

「そうですか・・・」

「今夜はこれで。皆も心配している。早く体調を戻すよう、ゆっくり体を休めて下さい」

近藤は、戸口で立ち止まると山南を振り返った。

「近藤くん。それでも私は、西本願寺への移転には賛成できない」
何を言い返すでもなく、近藤は障子を閉めた。

近藤とて京に出て来た頃は攘夷の心を持っていた。だが攘夷を圧せば、医療の発展もなきものとなる。

そう考えるようになったのは、新撰組の健康管理を担っている松本良順から、沖田の病名を告げられからだ。

劳咳。今で言う肺結核だが、この時代では不治の病とされていた。西洋と比べ、日本の医療は何十年も遅れをとっている。攘夷を貫けばその差は更に開き、古来の施術や調薬で治す事のできない命は増えるばかりとなる。

医学の進歩を望んでいる近藤にとって、攘夷など最早重大ではなくなっていたのだ。

「近藤さん」

廊下の先で待っていた土方は、近藤の顔色から山南が移転を受け入れなかったと悟った。

「やはり同意はしてくれないか」

「山南さんとして、新撰組の将来を危惧してくれているんだ」

「それは判ってる。だが、ああ正面切って反対を連呼されたんじゃない」

闇の中に蠢く影がある、と土方は庭を見やった。

「なんだ、楠。こんな時間にどうした」

影が止まり、躊躇した様に見えたが、ゆっくりとした速さで廊下へと歩いて来た。

「寝付けなくて、散歩でもと。驚かせてしまつて申し訳ありません」
「・・・寝れなくても身体は休めてろ。それも仕事だ」

「はい。では戻ります」

楠はぺこりと頭を下げると、足早に井戸の横手へと消えて行つた。

「近藤さん」

「ああ」

土方は踵を返し、玄関の方へ走り出した。

（世話ねえな）

「うわ！」

玄関に出る角で、走つて来た土方に思いっきり打つかつてしまった赤井は、柱に手を伸ばして身体を支えた。

「手間が省けた、おまえも来い」

「えっ！？ ちよつと、待って下さい！」

駆け出していく土方の後を、訳も解らないまま赤井は追いかけた。

「どうしたんですか？」

しつと口に指を当て、屯所の入口で左右を確認する。

「土方さん」

非番で待機していた原田は、楠が屯所の勝手口から出で行くのを見つけた。その後を追う様に土方が駆けて行くのが見え、何かあったのだと追いかけて来たのだ。

「原田は右へ行け、赤井は俺と来い」

そう言い左へと走り出す。

「どうしたんですか？」

走りながら同じ質問をしたが、答えてはもらえなかった。

町が闇でひっそりと静まり返る中、土を蹴る足音だけが響く。

「こつちじゃねえか」

「ちよつ・・・土方さん・・・」

やっと止まった土方の後ろで、膝を押さえながら荒い息を整えようと深呼吸を繰り返す。

「なにか・・・あったんですか」

「ああ。原田が見つけてるといいが」

誰かを捜しに出て来たのだと、ようやく解った。

「あっちへ回ってみるか」

息が収まる間もなく再び走り出した土方の後を、赤井はまた必死でおいかける。

この時代の人間はみな足が速い。走るのも歩くのも、余所見をしていたら置いて行かれそうになる事もしばしばだった。

加えて動作も速い。特に剣を手にした時の立ち回りは、間合いが十歩あると瞬時にその間を詰めてしまうほどのものだ。

剣術に関しては、和奈も土方に劣らぬ動きを見せた。

武市を救出に向かった佐野藩の陣所で、対峙した相手までの五歩を一気に詰めた。多く見積もっても4メートルはあったはずだ。一瞬にして相手の懐へ入った時はすでに剣を振るっていた。

（くそっ）

許可を貰っていない和奈が、この時代では自分よりも腕が立つ。

赤井はそれがどうしても納得できなかった。

「止まれ」

手で赤井を制した土方の息は乱れていない。

その視線の先を見ると、原田の背中が見えた。そして原田が見ている先には、土手に立つ影がある。

「反対側に回るぞ」

そう言い、少し戻った路地へと入り角を左へ曲がり、また左へ曲がると土手が見え、そこに立っていた影は二つになっていた。

「やっぱりか」

赤井には人影だと判別する事しか出来なかったが、土方には影が誰なのか判ったらしい。

原田の顔がこちらを向き、頷いた土方は家の影から飛び出した。

「動くんじゃないぞ！」

その声に、二つの影が動いた。

「来い原田！」

二つの影は逃げもせずその場に立ってままだった。

さすがにこれだけ近くなると、赤井にもその影が誰なのか判別する事ができた。

「えっ？」

一人は楠、もう一人は女性だったが、見知った顔だったのである。

「こんな夜更けに逢引ったあ、随分立派になったもんだな、楠よ」

楠が女の手を取り、庇うように前へ出て振り向いた。

「いやだな。せっかくの逢瀬を邪魔しないで下さいよ」

「何言いやがる。こそそそとおまえが嗅ぎ回ってるのを、知らないと思ってたのか？」

楠は至って平然としている。

「女！」

土方は楠の後ろの影に叫んだ。

「ただの女じゃねえよな」

くすつと女が笑った。

ぞくりと背中に入った感覚に苛立つ。

「何もんだ、てめえ！」

「お酒を酌み交わしながら語らって、と言う訳にはいかないようです
すね」

「牢屋なら付き合ってやるぜ。女なら多少は加減してやるから、素直にお縄に付いたらどうだ？」

土方は腰から剣を抜き放った。

「それは遠慮したい。残念ですが、貴方とはまた別の機会に」

そう言い終えた瞬間、楠の腰から脇差を抜き取った女は土方目掛けて走り出した。

「邪魔だ」

土方の後ろへと回り込んだ女は、赤井の右腕を斬ってから土方の背後へと剣を振り下ろした。

「くっ！」

土方に袈裟斬りを交わされた女は、剣を戻しながら右薙ぎを払った。

「なっ!？」

体に届く寸前、土方は振られた剣を弾き返した。

「てめえ！」

女は一気に間合いを後ろへ取った。

「長引きそうですので、手合わせはまた、と言う事で」

そう笑う女に、土方は次の太刀を出せなかった。

立っているだけなのに、発せられる剣気に体が動かないばかりか、相手の体に打ち込む隙を見つけられなかった。もし動けたとし、殺られるのは自分なのだと即座に解った。

にっこり笑った女は、軸足で身体を反転させると楠と原田の方へと駆け出して行った。

「おい、おまえの相手は俺だろうが！」

視線が外れ、剣気の呪縛から快方された土方も走り出す。

楠を相手にしていた原田は、横から払われた剣を完全に避けきる事ができず、右腕を深く切り込まれてしまった。

「原田！」

背を向けている女までは三步もない。討って取ったと土方は思った。

「なに!？」

だが、突き出した剣は横へと動いた体から出た剣に右へと弾かれ、その反動で体勢を崩した横腹に女の蹴りが入った。

「ぐっ！」

腹を抱えて片膝を付いた土方を見下ろす。

「これで失礼しますね、土方くん」

くるりと背を向け、楠の体を抱えると川へと飛び込んだ。

「くそ！」

揺れる水面を暫く見下ろしていたが、見える範囲の水面に二人が上がって来る事はなかった。

負傷した原田と赤井を連れて屯所へ引き返した土方は、松本を呼べと近くの隊士に叫ぶと、近藤の部屋へと急いだ。

「おまえが逃がすとはなあ。」

「油断したのは確かだが、あの女、只者じゃない」
むううと眉間を狭める。

女の姿から芸者だと判ったが、遊郭や岡場所で隙のない女など会った覚えはなかった。

「見事な太刀筋だな。しかし、楠の腕は・・・ああ、隠していたか」
「修吾郎と手合わせさせたが、見た限り楠の方が腕はいい。赤井が言うところによると、立ち構えが神道無念流に似ていたそうだ」

近藤もこれには驚いた。となれば、長州の間者の線が濃くなる。

「まさか、とは思うがな。その女、もしかすると桂くんか。うーん、そう考えると歳三が手を出せなかったのも得心は行くんだが」

「桂？ 桂小五郎？ それほどの剣客なのか？」

「ああ。静謐な立ち姿から出る気迫は、相対した者しか判らんだろう。誠衛館で手合わせした事があるが、あの時ほど恐ろしいと感じた事はなかった。お陰で手も足も出なかったよ」

身のこなしといい、太刀の速さといい、まさにその通りだ。

「・・・桂くんの異名を知っているか？」

「逃げの小五郎・・・」

うん、と頷く。

「その云われの元となっているのは、変装の名人との噂だ」

「！ くそっ、大物を取り逃がしたってえのか」

「どれほどの情報が漏れたか判らないが、明日からの見廻り、注意しておくほうがいいな」

悔しさを抱え部屋に戻った土方は、まんじりともせず夜を明かす事になってしまった。

長州討伐に出た幕兵が撤兵して来たと、新撰組屯所に報せが届いたのは、二月に入った頃だった。

「長州討伐は終わったが、志士の検挙がなくなった訳じゃないぞ」
報せを受けた幹部らは、一様に複雑な面持ちで集まっていた。

「屯所移転については？」

屯所の悪環境を憂いているのは組長らも同じだった。

「松平殿からの音沙汰を待つ」

「何回そう聞いたんだかな」

新年も近いのに、もやもやした気分だけが広がるばかりの土方は、声を苛立たせる。

「仕方ないだろう。許可もなく乗り込む事はできん。見廻りについての変更ない。年の瀬で町も賑やかになるだろうから、皆気を緩めず気をつけて任にあたってくれ」

右手を斬られた赤井は、傷が治るまで屯所の守備に回された。

あの女は間違いなく桂だと、土方に話す事はできない。桂と、龍馬二人に約束したのだ。「腕はどうだ」

左手は動くと、稽古場の床を拭いていた手を止めた。

「幸い傷は深くありませんから、塞がったら仕事に戻れます・・・
すいませんでした、役に立たなくて」

「気にするな。桂が相手だ。おまえに腕があっても斬れてたさ」

一瞬、向けられた剣気に身体が竦み、払われた剣を避けられなかった。

「くそっ！」

思わず吐いた言葉に、土方は低い笑い声を投げた。

「強くなりたいなら、もっと稽古するこったな」

前にも、同じ言葉を口にしたなど、思いを巡らす。

「薩摩藩の女中と一緒にだった奴なんだが、おまえ、村木和太郎って知ってるか？」

赤井の雰囲気と、和奈の雰囲気は似ている。

和奈が初めて人を斬ったあの日、何処の武士だと隊士に後を付けさせていた。

「村木？」

突然出た名前に首を傾げる。和奈と土方が顔を会わせているのは、お京から聞いて知っていた。なぜ今、その名前が出るのかと、赤井は不思議に思ったのだ。

「ちと前に会った奴なんだが、そいつにも強くなれと言った覚えがある」と思い出したんだよ」

「僕が厄介になってた時は、村木なんて居ませんでした」

「そうか。とにかく、悔しいと思うなら人一倍剣の稽古をしろ。暇があったら俺も相手してやる」

「ありがとうございます」

床を鳴らす音が響き、二人の顔が動く。

「だめですよ土方さん。赤井くんは僕の隊なんですから、稽古ならちゃんと僕がつけます」

「こいつの身体に穴なんか作るなよ」

「穴って・・・」

沖田の得意技は三段突きだ。右に剣先を開き、刃を内側に向ける平晴眼の構えから突き出す剣で、一步踏み込む間に相手の喉仏へ三度の突きを放つ。

「穴は・・・遠慮したいですが、沖田さんの稽古には必ず参加します」

おっ、と土方が目丸くする。

「ですって。ほんと、赤井くんてば嬉しくなるほど真面目に稽古に出してくれるんです。僕だって真剣に教えますよ。ああ、勿論殺さないよう加減はしますから、ご心配なく」

「こ・・・ころ・・・」

「程々にしとけよ。隊士を稽古で潰したなんざあ、聞きたくねえかな」

一抹の不安を覚えたが、平隊士を相手の稽古で腕は上がらない。
傷が塞がり、土方の許可を得た赤井は、沖田ばかりでなく他の組
長からの稽古も受け始めたのである。

其之一 山桜

年が明けて元治二年元旦、京の町に雪が降った。

長州と幕府がいくら揉めていようと、町人や商人が気にする世情に至っておらず、各地から初詣目当てに入洛する者が増え、正月らしい雰囲気皆が浮かれていた。

最近姿を見せなくなっていた山南も、この日ばかりは広間に顔を出していた。

「起きて来ても大丈夫なんですか？」

顔色がすぐれない山南の元に、永倉が席を移してきた。

「心配をかけてすまないね、永倉くん。私の事はいいから楽しんできなさい」

「そうは行きません」

「では、一席付き合ってもらおうとしましょう」

永倉は斜め向かいに座ると、差し出された猪口を受取る。

「近藤さんと土方さんは横暴過ぎる」

注がれた酒をあおり、今度は自分で酒を注ぐ。

「山南さんの意見も取り入れるべきなんです。ここの総長はあなたなんだから」

新撰組は羽藩士清河八郎が建言して集められた者の烏合の衆と言える。同士とは言うが、誠の旗の下、幕府の御命を遂行しているだけで皆の結束が固い組織ではない。隊士同士の反目も珍しくなく諍いも多々起きている。

芹沢の暗殺以来、近藤は事あれば肅清と隊士を斬り、意に沿わぬ者は家来同然に扱うばかりか、夜な夜な遊郭に通っては女を懷に酒に溺れたりと、その横柄は日増しに酷くなっていた。

元治元年八月下旬。

これ以上近藤の我儘を許せば、新撰組は私設組織に成り下がると考えた永倉、副長助勤の斎藤一と原田左之助、伍長島田魁、尾関政一郎、葛山武八郎らと共に、切腹、脱退覚悟で会津藩へ建白書を提出した。

【これにあります五ヶ条について近藤が一つで申し開きできるのであれば、我ら六名は切腹も持しませぬ。故、近藤が申し開きできぬ場合は切腹を仰せられたく、会津候に然るべくお取次ぎ頂きたい所存にございます】

その訴状に驚いた松平容保は、事の次第を確認するため近藤に訴状の内容を問質した。どれも事実であり相違ないとの答えが返ってくると、そこで始めて永倉達が自刃覚悟で陳情して来たが、如何すべきものかと問いかけたのだ。これに驚いた近藤は、今後は態度を改め、お役目に尽力すると覚書を容保に出したのである。

近藤の陳謝もあって、新撰組に助力を惜しまんとする容保にこれ以上の迷惑は掛けれないと、他の五名も和解に賛成し事は収まった。しかし、永倉らの不信感を増長させる事態が起こる。

九月六日。近藤、武田観柳斎、尾形俊太郎と共に、將軍上洛要請と隊士募集のために永倉が東下していた時だった。土方がとして、葛山に切腹を命じたのだ。

建白提出は永倉、斎藤、原田による主導だと聞きいた土方は、三名を失うのは隊にとって痛手となると考え、近藤に最も不満を募らせていた葛山に上長批判の罪で切腹を命じたのである。一罰百戒の処分としたいと土方が願い出て、近藤が出立前に許可を出しての処分だった。

翌十月に江戸から京に戻った永倉は葛山の切腹を聞かされ、他の二名と共に謹慎処分を言い渡された。

壬生屯所を不在にしていた山南は、なぜ永倉達が謹慎となつていいのか不思議に思い、土方らに問質して初めて事件を知ったのである。自分の不在をいい事に勝手な処分を下したと二人を呼びつけ罵声を浴びせたのである。

いつも温厚である山南の激怒ぶりに、土方と近藤は処罰について伺いを立てなかったのを詫び、以後重要な課題については必ず話しを通すと誓った。

「移転は賛成なんだ。屯所が手狭になっているのは、私も苦慮するところだからね。ただ、移転先が西本願寺に絞られて話が進む事に、そうですかと納得できないだけなんだ」

「そりゃあ、俺だって長州志士の拠点を減らせれるならば、とは思いますが」

「・・・まだ松平殿から許可が下りた訳ではない。説得は続けるつもりだ」

隊士だけでなく屯所の周辺に住む者からも慕われるほど、山南は人柄の良い男だった。隊士達の争いも殆んど山南のお陰で大事にならずに済んでいる。だからか、規律で隊を纏め上げようとする近藤と土方とは、必然的に折り合いが悪くなるのだ。

「皆、新撰組を思う気持ちは一緒だと私にも解っている。近藤くんも土方くんも、少しばかり手法が荒いだけなんです」

「あなたって人は」

山南がもっと強引であれば、と永倉は思う。

「いけませんね。正月なのに暗い話をしては興が覚めてしまう。

さあ、君もそろそろ皆の所へ戻りなさい」

はい、と永倉は苦笑して席を立てて行った。

それは突然の事だった。

二月に入ったある日、手紙を残して山南が屯所から消えたのである。

「まさか、総長自ら脱走とは」

総長職にある自分の意見が反映されない事に遺憾を覚え、松平容保に直訴を申し出ると書かれた手紙を手に、土方は苦渋を隠せない。

「俺とて山南さんの意向を無碍にするつもりはなかったんだがな。西本願寺への移転は立地的に見ても良い場所だし、分宿してる隊士が移っても余りある広さだ。そこんことを判ってくればなあ」

「今更言っても仕方ないだろう。総長だろうと隊士だろうと、脱走は死罪だ」

考え込む近藤に土方は容赦なく言う。

「追っ手を出す。直訴に行くってんなら行き先は江戸に限られる。足を掴むのはすぐだ」

「伊東さんにも一応話してくれよ」

「また伊東か！ 近藤さん、あんた何時からそんな腑抜けになった！？」

「慎め歳三」

「伊東も尊王思想があるってえのは判ってるよな？」

「落ち着けと言っているぞ土方！」

手にした紙を投げ捨て、ぐっと拳を握り締める。

「追っ手を出す前に、参謀にも意見を聞かなければならん。いいな土方」

「くそっ！ なんでちゃんと断って行かねえんだ！」

「言えば邪魔をされると思い、止むに止まれず出たんだろう」

事情はどうあれ脱走は脱走、他の隊士への示しもあると、渋々伊東が承諾し追っ手は出される事となった。

山南の脱走は隊士の間にも動揺が走った。

沖田も、山南の行動を予測できなかった。反発はしても、屯所を無断で出るとは考えてなかったのだ。

「どうした沖田」

「僕を追ってとして出して下さい」

山南との親密な間柄を知っていただけに、この申し出に近藤は驚きを隠せない。

「しかな」

「説得して連れ帰ります。山南さんは脱走なんてする人じゃない」

「気持ちには判るが、その身体じゃー」

「他の者には譲りたくないんです！」

駄目だと突っぱねれば、無断で出て行くかも知れない。これ以上幹部の脱走が重なれば、規律が乱れるどころか追従する者が一段と増える危険性があると、沖田に追っ手として出る許可を下した。

赤井を連れた土方が、沖田の部屋へとやって来た。

「どうしたんです？」

「赤井も連れて行け」

「要りません、と沖田は即答する。」

「そんな身体で山南さんとやり合う事になったらどうする」

「大丈夫です！ 山南さんが・・・もう剣を握れないと・・・土方さんだって知っているじゃないですか！」

文久三年七月の事だった。

高麗橋傍の呉服商岩城升屋に、不逞浪士数名が押し入ったとの報告が入り、屯所に残っていた土方と山南が現場に駆けつけた。

この時の打ち合いで、愛刀【播州住人赤心冲光】の切っ先を折られた山南は左腕に深い傷を負い、剣を持つ事が儘ならなくなり、日常の生活に於いても左手を使う事ができなくなっていた。

武士として、剣を自在に操れなくなる悔しさは土方とて良く解かる。剣に執着する沖田は尚更であろう。

「いいか、これは副長命令だ。赤井を連れて行け」

「・・・解りました」

それから三日後、正式に追手の命を受けた赤井と沖田は、山南が向かったであろう大津へと出立した。

「近藤さん」

赤井と沖田が立った日の夕刻、永倉は部屋へ戻ろうとしていた近藤を掴まえた。

「もし山南さんが戻ったら・・・切腹ですか？」

「・・・・・・伊東さんとも話したが、まずは話を聞いてみる。それからだ」

「頼みがあります」

もうすぐ大津宿に着く。村木と再会した地であり、別れた地でもある。

あれから四ヶ月が過ぎた。

新撰組に入ってから何が変わったのだろうかと自問自答する。剣の腕は他の隊長格に退けを取らないと沖田からお墨付きを貰った。勿論、そう言う沖田に敵うものではない。斉藤然り、永倉然りだ。原田相手なら、互角とまでは行かないがそこそこ打ち合いは続けられるようになっていた。だが、信念とか志となると皆目検討が付かなくなる。

土方が話す新撰組としての心得なら規則として納得できはしても、それに命を懸けられるかとなると話しは違って来る。武士の志と言われても、武士になるために剣術を習っていたのではない。松平容保の庇護があって新撰組が成り立つと聞いても、会津藩に恩恵を感じる事もない。要するに、宙ぶらりんなまま根本的な思想は何も変わっていないのだ。

（情けない。村木に偉そうな口を叩けたもんじゃない）

「どうした？」

「いえ、少し考え事を」

「嫌な仕事だ、付いて来なくても良かったんだ」

「副長命令ですし、身体も心配でしたから」

「ふん。剣が握れなくなった訳じゃない。身体だってこの通り動く。

土方さんは氣を使い過ぎなんだ」

しかしここへ来るまで、沖田は数回激しく咳き込み、その内の一回は吐血している。

「こき使って下さい組長。そのために俺が居るんです」

沖田は悲しげな顔でそうするつもりだと微笑んだ。

大津宿に着くと、休む間もなく宿を当たりながら、山南の背格好を知らないかと町人に尋ねて回るが、皆首を振るばかりだった。

「ここで宿を取ってないのなら、近江から出てしまってるな」

宿場の外れの茶屋で手掛かりが得られなければ、次の宿場に向かうと沖田は言った。

少し落ち着こうと団子を注文し、焦る気持ちを隠せない沖田を席に座らせた。

「団子食ったら、俺もう一度聞いてきます」

「店も当たったんだ、もうここには居ないよ」

居たほうが良かったのか、それとも居なくて安心したのか。赤井は聞けなかった。

団子を持って来た男に聞いてみたが、やはり見たことはないと言を振られてしまった。

「追っ手が付くのは山南さんも承知しているんだ、先を急いだと考える方が道理に合う」

すっかり団子を食べ終えた頃、話を聞いた女が店の奥から出て来て、山南に似た武士が立ち寄ったと言った。

「優しい顔をなさったお侍さんでしたから、覚えていらっしゃるですよ」

「まだここを出てない」

沖田は立ち上がり、来た道を駆け出して行ってしまった。

「ありがとうございます!」

勘定を済ませ、後を追いかけて走り出す。

宿をもう一度回る中、小さな旅籠屋に入った沖田は、続くように入って来た気配に振り返った。

そこには、驚きもせず立っている山南の姿があった。

「山南さん！」

沖田に駆け寄られ、驚くでもなくその顔を見つめる。

「まさか総司が来るとは思わなかったよ」

追いついて来た赤井も姿を見せると、君も一緒か、と山南は笑う。

「ここではなんだ。部屋へ上がろうか」

そう言いながら、手にした酒を女将に渡し晩酌の用意を頼んだ。

落ち着いて座る山南の前に、沖田だけは姿勢を崩さず正座している。

「総司、なにも逃げたりしないからそんなに気張るのはやめなさい」

「何をしたか、解ってるんですか？」

「ああ、勿論。気が触れた訳でも、自暴自棄になった訳でもない。ただ、どうしても我慢できなかったんだ」

屯所移転の事かと尋ねると、それだけではないと山南は首を横に振った。

「尊皇攘夷の目的で集められたと言うのに、今の新撰組は不逞浪士の取り締まりに走り回る毎日。それがいけないとは私も思わない、会津藩から頂いた仕事だからね。だが、志を見失った者が何をもつて武士と言うのか。魂をなくして何をもって生きると言うのか。皆が今に囚われすぎ、考える事すら止めてしまっているを見て居られなくなった」

「武士として僕達は働いています」

「おまえは自分には剣しかない、そう思っているだろうが、剣がなくても武士は武士である事ができるんだよ？」

だん！ と畳を蹴って立ち上がった沖田の顔は怒りで真っ赤に染まっている。

「剣を振るえない僕は沖田総司ではない！ 剣を取り上げられた僕に何をしろと言うんですか！」

「時代は移り変わるものだ。いずれは剣を必要としない時代が来る。

そうした時、剣だけに頼って生きた者達が辿る末路は悲惨なものではない。だから私は、剣以外に生きる術を、皆に持ってもらいたかった。勿論、おまえにもだよ、総司」

「・・・解らない、解らないよ山南さん！」

立ち上がった沖田の手を取り、山南は静かに座らせた。

「会津公へ移転は許可を出さぬよう陳情したかったが・・・明日、屯所へ戻ろう。私は新撰組総長として、ちゃんと処罰を受ける事にするよ」

脱走は切腹。戻ったとして、山南に待つのはそれしかないと言田には解っていた。

「これも一つの運命なんだろうな」

山南の逃亡を図らないように、部屋の中には沖田が、外の廊下で赤井は見張りをしていた。

剣がなくても武士は武士であることができると言った山南、それが解らないと泣いた沖田。

同じ事を聞かれたら自分はどうか答えるだろうと考えてみる。

形式的に言うならば、剣を持たない武士など居ない。武士の魂も、剣を手を志を貫く事が出来て意味を成すものではないのだろうか。だが、山南は違うと言った。

武士とは何なのだろう。武士道は、主君の御為には死ぬことも厭わぬ覚悟をしなければならぬ。剣がなくとも主君に仕える事はできるだろうが、剣を持つ者から主君を守るためには、剣を持たなくてはならない。

武士道など、この時代に来るまで真剣に考えた事などなかった。いや、考える必要のない世界に生きていたのだ。剣など不要になった時代、武士の居なくなった昭和の世だ。

「はあゝっ。わかんね」

白いため息が目の前に広がった。

次の日、太陽が頂点に昇っても沖田は宿を発とうとはしなかった。山南は発つなら早い方がいいと言ったが、それでも何も言わず、膝を抱えたまま部屋で座り込んでいるばかりなのだ。

「沖田さん」

赤井は堪り兼ねて声を掛けた。

「戻らなくてはいけない」

弱い声が沖田の口から漏れた。

「・・・はい」

「戻らなくては・・・」

でも身体が動かないんだと、沖田は泣いた。

そんな姿に山南は笑みを浮かべると、明日の朝ここを発とうと告げた。

翌朝早く、山南と共に大津を出発し、道中殆んど会話もないまま、夜には屯所に着くことが出来た。

八木邸の屯所内に入ると、三人に気付いた隊士が我先にと顔を出して来た。

「おまえらは仕事に戻れ」

近藤は、後ろ手に縛られたまま玄関へ入って来た山南を出迎えた。

「お騒がせして申し訳ない」

「・・・手縄を外せ。逃げはしないだろう」

赤井は脇差を抜くと、山南の縄を切った。

「ここでは隊士が騒いでしまう、前川邸の奥座敷へ行って下さい」

永倉と六番隊組長井上源三郎に連れられ、分宿先の八木邸から通りを挟んですぐ東隣にある屯所の本陣となっている、前川莊司の屋敷へと連れられて行った。

近藤は伊東、土方と永倉、井上と見廻りに出いる谷、松原、井上を除く組長を集めた。

「脱走については私も遺憾を覚えるところです。が、松本先生から

伺っているように彼は精神を病んでいる。その原因をここで追求するつもりはございませんが、他の脱走者と同じように扱うのは如何と思うのですが」

「伊東さんが言いたい事はよく解る。だがな、どんな理由があったにせよ、脱走した事実には曲げられん」

土方はあくまで切腹を要求した。

「近藤さんも、同じ意見ですか？」

伊東はずっと黙っている近藤に尋ねた。

「病気の事は、私も聞いていた。脱走するまで追い詰められていたと気づかなかったのは、私の落ち度だ」

「隊のあり方と移転問題。土方くん、君はもっと総長である山南さんの意見を深く考えるべきだったのではありませんか？」

「どんなに考えても、俺と山南さんの考えは平行線を辿る一方だ。どこで折り合いをつけりゃいいって言うんだ」

「屯所の移転先を西本願寺だけではなく、別の候補地も挙げて討論していたならば、脱走など起こり得なかったと、考えられませんか？」

「俺は・・・」

「西本願寺移転については私も賛成だ。勿論、山南さんもその重要性について理解してくれていたと思う。しかし、反対を続けた」

ふう、と伊東は吐息をついた。

「ともかく、私は切腹以外の処罰で済ませたいと思っています」

「・・・」

「他の組長の意見は如何でしょうか？」

沖田はずっと下を向いたまま、話を聞いているのか居ないのか判らず、藤堂と原田も、顔を背けたまま口を開こうとしなかった。

「新撰組として考えるなら」

斉藤が口を開いた。

「切腹以外の方法はないと思います。しかし、他の奴の脱走とは内容が違う」

他の者も同じ気持ちで居るだろうと、伊東は考えて居る。

「新撰組を脱退したい為に屯所を出たのではない。移転問題について会津公へ嘆願しに出ただけでしょう？ 勿論、断りもせず出た山南さんに非がないわけではありませんが」

「・・・沖田も大津から戻ったばかりで疲れているだろう。話しの続きは明日と言う事で、今夜はここまでにしましょう」

近藤は決断を下す事なく、沖田達に部屋へ戻るように言った。

だが翌日になっても意見が纏まる事はなかった。隊士の脱走でなく、総長の脱走に、幹部以外から同情する声上がり出したのである。

「どうなるんでしょうか」

縁側に座る土方に呼び止められた赤井は、所在なげ横に座って居る。

「伊東は病気を理由に引き伸ばしているが・・・それがなくても俺だって頭を痛めてるんだ」

粛清は隊規を破った者には必ず下されなければならない。新撰組に於いて脱走は死の意味を持つ。

死を持って償うべき規則に赤井は納得できなかった。新撰組を抜きたいのなら理由を立ててればいいだけと土方は言ったが、間者という存在が実際に居る現状では、判ったと脱退を安易に容認できないのも頷けるのだ。

隊規もよく知らず、いともあっさりと入隊したものと、赤井は今更ながら思う。抜けようなどと考える事はなかったが、もしそうなる日が来たらと今から不安が広がるのも確かなのだ。

「土方」

近藤が廊下の角から声を出した。

「山南さんの所へ行く、おまえも来てくれ」

近藤の横には伊東の姿もあった。

「決めたんですか？」

「とにかく、向こうへ行こう」

三人は前川邸へと足を運んだ。

山南は奥の一室で静かに正座していた。

「音沙汰がないので気になっていました」

三人が座ると、少し経ってから座したまま身体を動かした。

「松本先生から病の事は聞きました。この度の脱走について、隊規を当てはめて処分を考慮するべきか否か、伊東さんとも――」

「近藤さん、私は病気ではありません。己の意思でここを発ったのです」

「！」

「脱走する者は如何なる理由があっても死罪とする。私の病気がどうであれ、それを曲げる事は今後の士気に影響します。だから隊規に従わさせて頂きたい」

「山南さん、あんた・・・」

「近藤くん、土方くん。最後の願いを聞き届けて頂きたい」

「・・・どのような・・・」

「介錯を総司に頼んでくれませんか？」

こうして山南の脱走は、切腹という形で取り決めとなった。

部屋に残った伊東と山南は無言で向かい合っていた。

そこに永倉が現われ、伊東から切腹の処分に決まったと聞かされる。

「山南さん、なにも自分から切腹を申し出なくても」

「もう決めた事です。永倉くんも仕事に戻りなさい」

はい、解りましたと出て行ける訳がなかった。

「お願いです。見張りは俺がなんとかしますから、ここから・・・逃げて下さい」

「君ほどの男をこのまま切腹させてしまうのは惜しい、私も助力させて頂く」

「何事に於いても引き際は肝心です。ですから、私は武士として潔く最後を迎えたい」

二人は顔を見合わせた。

これ以上なにをどう解いても山南の意志は変わらないと、二人は後ろ髪を引かれる気分のまま部屋を後にした。

山南の切腹は元治二年二月二十三日と決まった。

太陽が頂点へと達する頃、八木邸分宿に一人の女性が駆け込んで来た。

「どうか、山南様にお目通りをお願いします！」

「ここには居ない」

「どこに、山南様はどこに！」

庭に居た土方が、その声を聞きつけて玄関先へとやって来た。

「どうした」

「土方さん。どうもこうも、山南さんに合わせろとこの人が」

「あなたは？」

「明里と申します。報せを頂き参りました。どうか、山南様に会わせて下さい！」

野次馬がぞろぞろと庭先に集まって来る。

「おまえらは仕事に戻れ。赤井、この方を本陣に連れて行ってやってくれ」

「あ、はい」

赤井は女性を伴い、分宿を出ると屯所本陣へと入って行く。

「明里さん」

「永倉様・・・山南様が脱走したと言うのは本当なのでございますか？」

顔を曇らせた永倉を見て、明里は我慢していた涙を零した。

山南の脱走を知った永岡は最悪の事態を考え、明里に報せをだしてほしいと近藤に頼んでいた。その報せを受けて急いで来たのだろ

う。

間に合ったのが良かったのかどうか、永倉は複雑な心境で明里を見つめた。

「・・・こちらへ」

永倉は山南が居る部屋の裏へと明里を連れて行った。

「山南様」

しばらくして、格子窓がすつと開いた。

「明里・・・」

涙を目に一杯浮かべた明里に、山南は哀しげな目を向ける。

「どうしてこの様な事に」

「すまない、明里。あまり会いに行けず、淋しい想いをさせ続けてしまった」

「私は・・・山南様が生きておられるだけで、それだけで・・・」
格子戸を掴むその手に、山南の手が添えられた。

「私は隊の規律を乱してしまった。総長としてその責を取らねばならない。解ってくれるね？」

「・・・解りません、解りたくありません。私は、ずっとあなたの
お帰りをお待ちしていたのに！」

「明里。私はこれからずっとおまえの傍に居て、おまえの幸せだけ
を見守る。だからもう泣かないでくれ」

頭を振り、山南の手を両手で掴む。

「永倉くん、明里を連れて行ってくれないか」

「いいんですか？」

「嫌です。お傍に、お傍におります」

「永倉、頼む」

「山南様！」

「幸せになれ、明里」

赤井と永倉に連れられて行くその姿を、淋しそうに見つめていた。

程なくして、沐浴を済ませ髪を結い直して白い袴に着替えた山南が、部屋へと戻って来た。

介錯を務める沖田は、姿を見せた山南をしっかりと見据える。

「総司、恙無く務めを果たしてくれ」

「・・・はい」

隊士達の見守る中、山南は白絹の布が敷かれた場所へと座った。

その前へ、盃二組と湯漬け、香の物三切れに塩と味噌の肴、逆さ箸の添えられた膳が置かれる。

最後の食事を取り終え盃を手にすると、永倉が銚子を持ち酒を左酌にて注いだ。

山南は静かにそれを二回に分けて飲む。さらに注がれた酒をまた二回に分けて飲み干した。

盃が置かれ膳が下げられると、今度は短刀を乗せた三方が山南の前に置かれた。

これ以上見ていられなかった。

その場から立ち去ろうとした赤井の腕を土方が掴んだ。

「土方さん・・・」

その手は微かに震えていた。

「ちゃんと見ておけ」

小さな声でそう囁やかれ、赤井は腕を掴まれたまま座敷へと視線を戻した。

「沖田総司、介錯を務めさせて頂きます」

名前を告げ、山南の背後へ行き手にした剣に水を掛け清めてから、八双に構えた。

右腕を懷から出し、左手で三方に乘せられた短刀を取り上げ、白い奉書紙が巻かれた刃を右手で掴むと、山南は自分の腹へと突き刺した。

「ぐっ・・・」

力を込め、一気に左から右へと腕を動かして行く。

沖田は山南の腕が完全に右へと動いたのを見届けると、自分の顔面のやや右上げていた剣を振り下ろした。

全ての音が無くなってしまったかのように、屋敷中が静まり返っていた。

ずっと歩み出た近藤は、永倉達に山南の身体を丁寧に運んでくれと言葉を掛けた。

「沖田、ご苦労だった」

運ばれて行く山南に、泣きながら抱きついた一人の女性が居た。

「僕は・・・」

沖田はその姿に顔を歪めた。

「浅野内匠頭でも、こうは見事にあい果てはしまい。本当に見事な最後だった」

そう沖田に言葉を掛け後ろを振り返ると、拳を握ったまま縁側で肩を震わせている土方の姿が在った。

春風に吹き誘われて山桜 散りてぞ人に惜しまれるかな
吹く風にしばまんよりも山桜 散りてあとなき花ぞ勇まし

伊東甲子太郎

其之二 奔走

人を相手にせず、天を相手にせよ
天を相手にして、己れを尽くして人を咎めず
我が誠の足らざるを尋ぬべし

西郷隆盛

元治二年二月。

五公卿三條から京の情勢を調べるよう頼まれた中岡と土方は、護衛を終えて帰る吉井の好意で薩摩の蒸気船に乗り、大坂へ向かっていった。

途中寄港する赤間関で会いたい人が居ると、中岡は二人を連れ竹崎にある萬問屋を訪れていた。

「寄り道してて、ええがか？」

「機会があるのに逃す手はないと思って。まあ、損はないですから玄関へ出て来たのは、腰が低く愛想の良い初老の男だった。」

「私が白石正一郎にございますが、あなた様は？」

「お初に御目にかかります、私は石川清之助と申します。突然の訪問、誠に申し訳ございません。白石さんの事を聞き、無礼とは存じましたが一度お会いしておきたいと参りました」

丁寧で頭を下げると、白石も同じく頭を下げた挨拶を返した。

「土方楠左衛門と申します」

「薩摩の山科兵部です」

薩摩藩の者と聞いて白石は大層喜んだ。

「ここ最近、物騒な事ばかり起きて商いも暇になってましてねえ。ちょうど退屈しておったところなので大歓迎ですよ。さあさあ、ここではなんですからお上がり下さいませ」

長州藩商人の白石正一郎は、御用聞き問屋として古くから薩摩藩と交流を持っている人物である。

長州と薩摩が険悪になってからも、周辺の諸藩との商いに徹する事で幕府の目を欺き、その裏で薩長との間に立ち商いの橋渡しを続けていた。

白石は奇兵隊の創設に尽力しており、次弟である廉作と入隊して後も会計方務める一方、商人という立場で資金面から奇兵隊を支えている。

そんな白石の事を聞きつけた中岡は、長州と薩摩の和解を推し進めるため協力して貰えるよう話しをしに来たのだ。

「それは願ってもない申し出です」

一も二もなく白石は快諾してくれた。

「喜んで引き受けさせて頂きます。と言いますのも、夷人との戦闘や内乱によって長州軍にもかなりの損失が出てしまい、それを補えない現状なのです。私個人としても、長州藩と薩摩藩の関係が改善されるのなら嬉しい限りでございますから」

薩摩との貿易がなくなり、大きな痛手となっている今日。私利私欲だけでなく、奇兵隊の会計職という立場からも、中岡の齎した和解案に賛成しても白石に損はないのである。

「丁度良い時にいらっしゃいましたよ。紹介したい者が居りますので、是非とも会って行ってくださいませ。なに、そう時間はかかりませんから、少々ここでお待ちになって下さいませ」

愛想の良い顔がさらに明るくなると、三人の返事も待たずに部屋から急ぎ足で出て行ってしまった。

「問屋の主人っちゃあ、誰でもああ愛想がええがか？」

顎を摩りながら、土方は予想以上の待遇に目を細める。

「あの人は特にじゃないですか？」

商人という職柄に就く者の殆んどは誰もが愛想のいい顔を見せる。中岡の話しにいちいち頷き、ごもつともです、と頷く姿は心底人が良い男の様に伺えた。

「けんど、大久保さんはまっこと顔が広い人やき」

胡坐をかき、品良く整えられている部屋を見回す。

「でも本心が読み取れない人だから、下手な行動には出れませんよ」

「確かに。ああいう類の人間は絶対敵に回したらいかんぜよ」

「敵でも味方でも、大久保さんに対抗できる奴が居たら顔を拝みたいですよ」

「俺は弟子入りするね、その人に」

吉井がそう言うのと、それなら俺も弟子になって、一度でも言い負かしてやりたいと土方は袖を捲り上げた。

「そう言えば。大久保さんを知らずに噛み付いた奴が居たな」

中岡は天津での事を思い出した。

「ほう！ で、大久保さんその時どうしたちや。激怒したがが？」

「斬られる覚悟はあるのかって、剣を抜きましたよ」

「・・・わしは絶対あん人に反抗しやーせんと誓う」

「反抗なんかできるわけない。しかし、大久保さあが剣を抜くとはなあ。いや、是非見てみたかった」

雑談が大久保談義になり、それもネタが尽きて退屈を持て余しそうになった頃、白石が数人の男を連れて戻って来た。

白石の後ろからそれぞれ頭を下げた男達の中から、一人進み出た者が居た。

「土方やなかか！」

「お！ おんし、ここにおったんか」

出た来た男は名を黒岩直方と言う。土佐を脱藩しており、禁門の件の折に土方と共に三條ら七公卿と長州へ落ちた一人である。

「お知り合いましたか、それは良かった。私はここで退散させて頂きますので、何か御用がある時はご遠慮なくお申し付け下さい」

白石はそう言って、その場から立ち去っていった。

「石川もおるんか」

中岡は苦笑しながら手を上げた。

「とにかく中へ入りませんか？」

四人は部屋の中へ入ると、中岡達の前に腰を下ろした。

「初めまして、私は長州藩の春山花輔と申します」

春山と名乗った男は、長州藩大目付役井上聞多である。

「長府藩報国隊隊長の原田です」

二人はもう一度頭を下げた。

「山科さん、こちらは安芸守衛さん、我々と同郷の者です」

「ああ、失礼しました。訳あって長州に居座っております」

安芸守衛は黒岩の変名で、長州落ちした頃からこの名で通していた。

「薩摩の山科です」

薩摩と聞いて原田の目の色が変わった。

「なぜ薩摩の方がここに？」

疑いの眼差しは隠し切れない。

「大宰府に石川くん達と同行させて頂く機会を得て、色々と談義を重ねております」

「原田、そうなにも喧々囂々としなくてもいいだろう。長州の者は皆血気盛ん過ぎて、少々落ち着きに欠ける者が多くて困っております。無礼は私が後で咎めておきますゆえ、この場合は咎めずにおいてやって下さい」

井上は流暢な物言い、原田を諫めつつ吉井に詫びた。

「いえ、原田さんの疑念は解る所であります。こういう状況下ですし、薩摩で長州の者が居合わせたら、やはり同じように懸念を持った事でしょう。ただ、尊王倒幕を志す者として、薩長の和解を望む者の一人であるご理解頂きたい」

尊王倒幕の志し、と井上はそこで少し顔を緩めた。

井上は攘夷倒幕派であったが、高杉と上海を訪れた際、近代化した洋式の船や建築物を見て、攘夷から開国洋化へと思考を転換させていた。

「その和解だが。石川くんは、本気でできると考えておられるのですか？」

原田の矛先が中岡へと変わる。

「勿論。両藩もそれぞれの立場があり、割り切れない部分もあると十分承知しております。ですが、四国連合との諍いにて長州が孤立していたのは確かではありませんか？ この度の長州征伐についても然り。もはや一国を持って倒幕を進めるのは至難の業と考えています」

「それは私も同意するところだ。長府藩も薩摩との和解を推し進めて行きたいが、親藩である萩藩が藩論を倒幕に転換させたとは言っても、反対派すべてを排除した訳ではない。加えて幕府に恭順を示した妥協案の執行も、まだ問題として残っている。だからなのだ、その中で早急な和解は難しいとしか今は申し上げれん」

井上はそう説いた。

「いま直ぐ動く状況ではないのは石川も承知している。山科さんとして、それは同じでしょう。だが、動くとなった時、幹部だけで推し進めたものでは意味が無い。上下共に意見を揃えなければ、上だけが推進めた打開策と終り兼ねません」

黒岩が援護に回るが、井上と原田の表情は変わらず暗いままである。

「ふむ。しかし、なぜ石川くんはそこまで薩長の和解に拘る？」

原田が横槍を入れてきた。

それは井上とて同じ疑問だったのだろう、咎めるどころか中岡の返答を待つように視線を向けた。

「俺は長州藩の庇護を受けております。禁門の件でその恩に報いもできず、おめおめと生き残ってしまっている。受けた恩を返せるなら、死ぬ事になっても貫き通すのが俺の信念なんです」

「お二人の疑念は至極もつとものです。だが、石川はこういう奴なんです。思い立ったらまっしぐらというか、ただの馬鹿と言うか」

「馬鹿はないですよ」

「信用の置ける奴なのはわしが保証します。長州に身を寄せている他の土佐脱藩士達も同じ気持ちなのはご存知でしょう？」

中岡について言葉を搜している二人に、黒岩はそう太鼓判を捺した。

「安芸さんがそこまで言うなら・・・」

「心配せんで居とうせ。石川の馬鹿は坂本さん譲りじゃき」

また馬鹿とは酷いと、中岡が土方にくってかかる。

「坂本さんか。噂に聞いて、一度会って思っているが」

「まあ、あいつの事はおいといていい。会合で二人揃うのは、わしが困る」

それほどですか、なるほど。と原田は真剣な表情で訳のわからない相槌を打つ。

「こうして薩摩の方も居るんだ、強ち夢物語という訳ではないだろう。うちの大将も薩長の和解には同意しているし、桂さんもその方向で動くのは間違いない。で、山科さん、正直なところ、薩摩の意向はどうなんですか？」

「我が藩もすべての者が和解に同意かと言うと、否、としかお答えできません。事実、西郷さんは征伐に幕府として参加しておりますので。だが、和解に向け動き出す者が居るのも確かと申し上げておきます」

吉井が五公卿に同行したのは大久保の命だ。和解に賛成する者と繋がりを持たせようと画策したのは間違いないと中岡は確信している。

「それは長州も同じ。しかし、な。和解を進め成したとしても、俺は・・・」

原田はそう言い、後に続ける言葉を飲み込んだ。

「薩摩に対する怨恨は山科殿もよくお解かりになっているだろう。それを超えて事を成そうと言っておられるのだ。長州が得る利得を考えるなら、因縁を小さきものと成さねばならん。そう思えんか、

原田よ」

「この期に及んで何を言うかと思われるかも知れませんが・・・薩摩藩全ての者が、長州を京より退けたのを良しとしているわけでは

ない。なぜなら、幕府が諸藩に対し強気に出ているのは、薩長二強のうち長州が京都から追放され、幕府寄りである会津藩がその力を増しているからに他なりません。そんな事態となっている中、薩摩としても幕府寄りだと思われる現状を苦慮しております」

吉井の語る事を原田はじつと聞いている。

「土佐藩も藩論にて公武合体を掲げています。尊王攘夷へ藩論を固めようと動いていた土佐勤王党は弾圧を受け、多くの者が捕縛され断罪に処せられてしまいました。それが現状です。だからこそ、薩長和解の実現は欠かせないんです。両藩の和解は、土佐藩や、静観を執り中立の態度を貫く諸藩に対し、倒幕へ動かす原動力になると信じております」

「石川くんの意見も良く解るが」

「白石さんの所へ伺ったのは、薩摩と交流を持たれていると聞いたからに他なりません。それを斡旋してくれたのは薩摩なんです」

うーん、と中岡の言葉に二人が考え込む。

「逆賊となった長州を政権へ復帰させるのも、幕府に対し武力をもつて相対するにも、両国の協力がなくては難しいと存じます」

長州の内乱は収まりつつある。その後、幕府に恭順という形を示しつつ防備を固め、武装恭順で幕府に対抗したいのは長府も同じだ。藩論が統一したからと、一藩だけで幕府に相対し、朝廷に働きかけるには無理がある。原田も、薩摩との同盟は欠かせないとの意見を頭では解っているのだ。

「薩長の連携・・・白石さんもご助力して下さるなら、動いてみるのもいいだろう」

井上が結論を下すと、横にいた原田は、納得できないまでも、同意を示すように頷いた。

「薩摩の者として、和解へ繋がる事ならば私も動くとお約束致します」

中岡は、ほっ、と一息ついた。

幹部だけでなく下からも和解への足がかりを持てたのは、大きな

収獲と言えた。

頃合を見計らって、白石が部屋へ入って来た。

「硬い話しはお済になられたようですね。晩酌をお勧めしたいところですが、石川さん達はお急ぎとの事ゆえ、次の機会にお持て成しさせて頂くとしましょう」

白石はにニコニコと言いながら、女中に軽い食事を出させます、と去って行った。

「先の挙兵、俺も知っていたら参加したかったんですが」
足を崩した黒岩の元へ、四つん這いになった中岡が這って行く。

「五公卿の護衛も立派な参加じゃろ。それにほれ、あの桂木さんも居たらしいから、おんしが来んでもなんちゃーないき」

「やっぱり参加してたんだ」

武市は名前を変え、和奈や岡田と共に長州へ行ったと大久保からは聞いていた。

「びっくりする事ばかりで、身が持たんぜよ」

黒岩は桂木が武市だと知っているようだった。

「会ったんですか？」

「気になったがで、人相やらなんやら調べさせたら、みように一人は岡田やか。とくれば、付き従うのはあん人しかおらんやか」

小声で聞こえぬよう、中岡の耳元で黒岩はそう説明した。

「あの腕ですからね、噂になんない方が変か」

「桂木さんですか？ あの人なら、挙兵の時に俺も会ってますよ」

しまった、と原田の言葉に中岡は片目を瞑った。

「長州に縁ある人と聞いたが、あんな剣客が居たなんて今まで見たことも聞いた事もない。色々噂になっているが、高杉さんと桂さんが身元を保証してるんで、大きな問題とはなってない。しかし、突然出て来た得体の知れない人間を、疑問に思う者もおるのも事実」
桂木の名前が耳に届いたのか、井上も体を回して話しに加わって来た。

「大田での合戦の時一緒だったが、いや、大した腕ですよ。あの小

さい奴の腕もなかなか」

「おお、大将が言ってた奴か」

黒岩が話しを逸らしにかかったでくれたので、中岡は話しを蒸し返さないよう、それ以上話には加わらなかった。

「石川さんも伊藤も、偉く気に入っていたなあ」

疑いの念を持たれているが、他藩の者をあまり信用しない高杉が受けて入れている以上、周りの者が口を出す事はない。

ここから萩は近い。時間があれば行って話しを聞きたいとも思うが、三條の命を受けているのではそれは無理だと中岡は諦めた。

白石の用意してくれた膳をよばれ、井上らと和解に向けての結束を約束を交わした中岡らは、再び大坂への航路を上って行った。

長州討伐に参加命令が下っていたにも関わらず、幕軍が撤兵したため新撰組の討伐出陣は空振りとなっていた。

山南の脱走事件の後、近藤は屯所移転に多忙を極め、副長である土方が新撰組の行動を指揮している。

「調子はどうだ？」

山南の件があつてから沖田の病状は芳しくない。

本人は平気だと見廻りへ出ていたが、赤井からの報告でも咳き込む回数が増えているとあった。

「心配いりません。最近はかなり落ち着いてきましたから」

「嘘つけ」

「それより、屯所移転、どうなりました？」

「近藤さんが伺いに行ってる。決まれば忙しくなるんだ、おまえもそれまでは動かずじっとしてろ。副長としての命令だからな」

「都合のいいときだけ副長になるんだから」

稽古に出ている時から想像できないほど、沖田は弱々しく見えた。この男は剣を手にしていないと駄目だと知っていたが、今無理をさせる訳にはいかない。

屯所移転の問題と、伊東派の動きも気になっていた。

山南の切腹の後、今度は近藤と伊東が揉め出したのだ。隊の方針を統一化させるため、伊東は精忠浪士組時代の攘夷佐幕を断行する路線を勧めてきた。攘夷を貫いていては発展はないとする近藤は頑なにそれを突っぱねているが、いずれ双方の間で一悶着が起こるのは目に見えていた。

加え、志士の動きも活発となってきた。見廻り中の斬り合いも多く、隊士の負傷が相次ぎ、欠員補充にも頭を痛めなければならなくなっていた。

「嫌な時代になったもんだ」

今夜の当番を伝えてくると土方は部屋を出た。

「あ、土方さん」

伊東の用事で出かけていた戻って来た赤井は、沖田の部屋から出て来た土方を見つけて走り寄った。

「ご苦労だったな。で、伊東の用向きは何だったんだ？」

「あれ、聞いてないんですか？　いくつか上げられていた屯所移転先、それを見に行ってたんですよ。広さとか、家屋の部屋数とか」

伊東も、西本願寺への移転に反対を出しているのだ。

土方はぎりっと歯をすり合わせた。

「下っ端にでも任せてやればいいのに、おまえががするこっちゃねえよ。次は断つとけ。文句言われたら土方の命だからと言ってやれ」

「はあ」

本当に苛々する事ばかりだった。

「そうだ、土方さん。さっき斉藤さんが捜していましたよ」

「おう。で、斉藤はどこだ？」

「多分、自分の部屋に戻られてると思います」

「そうか。これから見廻りだったな、注意して行けよ。志士どもが過激になって来てるからな」

「はい」

土方を見送った赤井は急いで部屋に戻り羽織に手を通した。

数日前、近藤の許可が下りてこの羽織を貰ったのだ。もう、新撰

組の立派な一員、という証だった。

ため息が出た。

「俺、なにやってんだか」

土方も近藤も悪い人間には思えない。その志を貫こうとする気構えは、坂本や桂と変わらないのも解っている。だが、何かが違ふと心の中で別の自分が囁いてくるのだ。

自分の意志。毎晩床につくと、そればかり考えていた。突発的な事故で、この時代に来てしまい、帰れる宛などまったくない状況で、生きる道を探す羽目になっている自分が滑稽に思えた。

見廻りに出ると、隊士達は周りを注意深く見ながら歩き出す。

先日も隊士二名が、志士と路地の出逢い頭で斬られたばかりだ。

注意が増すのは当たり前である。

「怪しい奴を片っ端から捕まえたらいんだよ」

諸士調役兼監察に就いている大石鍬次郎がそう毒づく。

大石は池田屋事件の後、江戸にて隊士の募集をかけた時に入隊した。その腕は沖田も斉藤も認める剣客である。

「志士がそうそう怪しい素振りなんて見せます？」

一番隊で、沖田の次に大石の話しに入るのは、この塚本善之助と赤井だけだ。他の者は顔色を伺うだけで、話しかけようとすらしな

い。
大雑把で判りやすい性格の大石は、赤井を気に入ったのか何かと世話をやいている。

「だから不意打ちされるんだよ。志士の中には、どうぞ斬って下さい、って顔で睨む馬鹿も居るんだぞ？」

「そんなのどうせ下っ端でしょう？　坂本や武市あたりだと平気ですれ違って来ますよ」

二人の名前が出で、赤井は一瞬体を硬直させた。

土方や沖田に悟られないよう、名前が出ても挙動不審にならないようにと、自分に言い聞かせてはいるのだが、いまだに慣れないでいた。

「いちいち調べてたらきりが無いって言ってんだ。剣持った奴全部調べっちまえばいいんだよ」

「またそんな無茶な・・・呆れて返す言葉がないです。会津藩なんかしょつ引いたら、それこそ切腹もんですよ」

切腹で済めばいいが、と赤井は苦笑した。

「おいこら、おまえ今馬鹿にしろろう！」

「してませんしてません。大石さんらしいなと思ってただけです。だけど、塚本さんの言う事も一理あります。沖田さんが不在なんですから、厄介事だけは起こさないで下さいよ」

大石は赤井の言葉に目を見開いた。

「それを、おまえに言われるか！」

「塚本さんと俺以外、誰が言うんですか？」

「はいはい、大石さんの負け。さあ、ちゃんと見廻り済ませて帰りましょう。こう寒くつちゃあ、凍え死にますよ」

屯所から町の中心に出るまでにはかなり距離がある。移転候補となっている西本願寺が屯所になれば、見廻りの順路もこれまでより整然と纏められるいい機会なのだ。

屯所移転について、幹部達が揉めている訳だが、隊士にとっては、長州の拠点だ僧侶の移転だ、幕府だなどという諸事情など感心は然程ない。さっさと引っ越してしまえばいい、そう思っている隊士がほとんどだろう。

店先で喧嘩をしている店主と客の仲裁に入った他は、目だった出来事もなかった。

伏見薩摩藩邸が近くなり、まだ坂本はここに居るのだろうかと考えていた赤井は、目先に見知った顔を見つけた。

中岡慎太郎である。

（やばいんじゃないか？）

このままだと中岡とすれ違う事になる。

手配書には中岡も名を連ねていて、似てるとは思わない顔書きもある。

大石は気付くだろうかと赤井は不安になった。例え大石が気付かなかったとしても、誰かが気付くかも知れない。

言うべきなのだ、新撰組隊士となったのなら、中岡が居ると。

だが、薩摩藩邸を後にする時、何も語らないと坂本に告げた。その約束を違えなくなかったし、未だ倒幕派佐幕派という括りで人を見る事ができない。しかし中岡は違うだろう。新撰組に居るのを知られたら、きっと敵味方の線引きをするに違いない。

どうするべきか迷いながらも、顔を見られまいと大石の影に入る。顔を少し伏せたまま視線を斜め前へ向けると、中岡が立ち止って人垣の中からこちらを見ているのが見えた。

互いの距離はもうそれほど離れない。早鐘のような鼓動が耳の内側で騒ぎ立て、緊張を解くことができないまま赤井は足を進めた。大石や隊士たちも、手配書の人物が側に居るとは気付いていない。刻々と時間だけが過ぎて行き、長い時間をかけて中岡の前を通り過ぎたような感じがした。

「どうした？」

ほっと安堵した直後、大石が振り返った。

「え？」

「顔、真っ青だぞ？」

「えっ？」

手を額に当てると、大石の顔が覗き込んできた。

「ちゃんと飯、食ってるか！？」

「風邪でも引いたんじゃないか？」

そりゃ大変だと大石は大慌てとなった。

「大丈夫でっーうわっ！」

「おいてめえら、先を急ぐぞ！」

肩に担がれてしまった赤井が下してくれと懇願するのをそのままに、大石は塚本に後を任せると大急ぎで走り出して行った。

「あーあ・・・組長代理が先に帰ってどうすんだか」

塚本はやれやれと、残る隊士を急かし、通りを屯所へと急いだ。

新撰組が通り過ぎるのをじっと待ち、かなり距離が離れてから中岡は薩摩藩邸へ急いだ。

それぞれ散って情報を得るのがいいと、吉井と土方の二人と大坂で別れ、中岡は龍馬に長府での一件をまず伝えようと京へ入った。裏道を行こうかと迷い、不審を招いてはと大通りに足を進めたが、それが裏目に出て見廻りにかち合ってしまったのだ。

幸いだったのは土方や斉藤ではなかった事だ。土方は勘の鋭い男だと聞かされていたし、斉藤ならば間違はなく注意を向けられていた。事実、長州藩から寺田屋へ行く途中、運悪く斉藤に気付かれた事があり、撒くのにかなりの時間を費やしたのだ。ある意味、土方よりも厄介な相手と言えた。

「出で行ったああ!？」

藩邸に着いた中岡は、龍馬が大坂へ行くと、出て行つたと大久保から聞かされていた。

「吉之助はすぐに京へ戻って来ると言ったのだがな」

「入れ違いとか・・・もう、あれほど動くなって言ったのに」

肩を落とした中岡は、それは無理な命令だと大久保に言われさらに落ち込む。

「君も我慢しきれず出たではないか。坂本くんと言えた義理ではない」

確かにそうだったが、龍馬を一人で動かせたらとんでもない事をしそうで、いや絶対しそうだから帰るまで待たせておきたかったのだ。

「赤井くんに監視を頼んだのは失敗だったか。ちゃんと龍馬さんの手綱、執ってくれてるといいんだけど」

「そいつの事だがな、中岡くん」

いつもなら、必要な事を聞くとさっさと自室に戻って行く大久保が、困ったと言わんばかりの表情で腕を組んで座り込んだ。

「坂本くんと行動を共にはしておらぬ」

「はい？」

「新撰組へ行った」

「ええっー！？　どうして、なんでそんな事になってるんですか！
？　龍馬さんはなにやってたんですか！？　もうおおお！　どうしてそんな事になんってるんですか！？」

「五月蠅い奴だな、そう何度も捲くし立てるな。私とて、どういう理由でそうなったかなど知らん。突然、土方くんがやって来て、あの馬鹿の身柄を預かりたいと申し出てきたのだ」

頭を抱えて混乱してしまっている中岡に、大久保はどうでもいいという表情を浮かべて言った。

「止めなかったのか、龍馬さん」

「その様だな。生意気な小僧が何をとち狂ってそう決めたのか、わざわざ私が詮議するまでもなかったゆえ、私も止めずにやった。いずれ我々と刃を向ける事になろうが、決めたのはあ奴の意味だ。仕方ないと諦めたまえ」

大久保らしい、と中岡は笑う。だが、長州藩の人間が新撰組に入るなど予想もしていなかっただけに、その衝撃は大きかった。

「あ！　大久保さん！」

「なんだ」

「桂さんにはこの事を？」

「私が知らせるまでもなく、桂くんはすでに知っておる」

「たあっ。だとしたら和太郎にも伝わるか。ああもう、俺知らない！」

「私も、これ以上おまえには付き合う義理はない」

大久保は寝泊りが必要な好きな部屋を使えと言うと、立ち去ってしまった。

「龍馬さんてばもう。今度あったら拳骨の一つでも落とさんと、やってられん！」

今は潜伏する志士の間を回り、薩長和解への地盤固めをしなくてはならないのだ。しばらく薩摩邸へ逗留すると決め、赤井の事は龍

馬に合うまで置いておかなければならなかった。

其之三 屯所移転

長州に舞い戻った桂は、高杉と共に軍政改革と藩政改革に走り回っていた。

戻った時に諸隊の編成が行われたが、大雑把に分けられている名簿を見て、桂は再度編成し直すと高杉に伝えていた。

「おまえに任せる」

それだけ言った高杉はその編成に加わる事はせず、そう言うだろうと承知していたので参加を強要せず、御用所役についている大村益次郎を呼び寄せ、編成についての意見を聞くことにした。

大村は周防国の医師の子として生まれ、三田尻の梅田幽斎に蘭学、医学を学んだ後、二十三歳の時に大坂へ出ると緒方洪庵から適塾を学んだ。その後、江戸で幕府の講武所で教授を務め、敬親の命で帰藩していた。

今は鴻の峯の麓に在る普門寺で、歩兵・騎兵・砲兵を長州藩士に教えている男である。

正規軍を始め、奇兵隊など挙兵前から在る諸隊と、挙兵により各地で結成された諸隊を書き出したものを、二人が覗き込んでいる。

「数があれば戦に勝てるというものではない。要は質です。質が良ければ少数精鋭にて十分隊として機能します。それには縦を流れる命令を、横の繋がりへと広げる迅速さを求めなくてはなりません。加えて、各個独自で動く際の判断能力も必要不可欠となります。何時如何様な事で変わって行く戦況を見極め、臨機応変な対応をしなくてはなりませんからな」

「十分でしょう」

大村が書き出した諸隊一覧を持って、桂は高杉の元へと急いだ。

奇兵隊 総監 山縣有朋、隊士五百名。宿所、赤間関赤間神社。

膺懲隊 総監 赤川敬三、隊士四百名。宿所、徳地。

遊撃隊 総監 石川小五郎、隊士三百三十名。宿所、高森。

銳武隊 總監 堀真五郎、隊士二百八十名。宿所、小郡。

整武隊 總監 伊藤俊輔、隊士四百四十名。宿所、萩。

振武隊 總監 佐々木男也、隊士二百二十名。宿所、生雲。

干城隊 總監 佐世八十郎、隊士三百十名。宿所、萩。

斉武隊 總監 太田市之進、隊士四百名。宿所、三田尻。

浩武隊 隊長 品川弥二郎、隊士百名。宿所、周防国熊毛郡岩城山。

育英隊 隊長 所郁太郎、隊士七十五名。宿所、船木。

衝擊隊 總監 山田市之允、隊士二百名。宿所、須々萬。

市勇隊 隊長 檜崎新七、隊士百二十名。宿所、船木。

狙撃隊 總監 井上聞多、隊士三百三十五名。宿所、岩城山。

<長府藩>

報国隊 總監 原田順次、隊士二百五十名。

<徳山藩>

敬威隊 総督 寺田良輔、隊士約百名。

<編成>

南奇兵隊 銳武隊として再編成。

御楯隊・鴻城隊・勇力隊 整武隊として再編成。

南園隊・義昌隊一部 振武隊として再編成。

集義隊・八幡隊 銳武隊として再編成。

義昌隊・支藩徳山藩山崎隊 斉武軍として再編成。

<編入>

正名団 奇兵隊と銳武隊に編入。

精銳隊 干城隊に編入。

真武隊 銳武隊に編入。

浩武隊 奇兵隊へ編入。

酬恩隊 干城隊へ編入。

奇兵隊から六十名、膺懲隊から七十五名を狙撃隊へ編入。

<解散>

先鋒隊

金剛隊 隊士八十名。

屠勇隊 隊士百五十名。

小野隊（民兵隊） 兵員百五十名。

自力隊（民兵隊） 兵員約二百名。

エレキ隊（民兵隊） 兵員八十名。

東津隊（民兵隊） 兵員百五十名。

佐分利隊（民兵隊） 兵員二百五十名。

義勇隊（民兵隊） 隊士五十名。

良城隊（民兵隊） 兵員百三十名。

維新団（民兵隊） 兵員三百～四百名。

先の戦で諸隊と敵対した先鋒隊は、一部は主体へ編入されたものの、事実上解散とした。また、拳兵時に結成された農民などの民兵隊も、自主的に解散している隊もあるが、混乱期のものとして解散させる予定で大村とも合意していると高杉に説明した。

「和太郎達はどこへ入れるんだ？」

「馬鹿を言うな」

「石川達も腕は認めてるじゃないか。隊へ入れても問題ないだろうが」

「そう言う事を言っているんじゃない。編入には戦という前提がある。長州で預かった二人を戦場に出さねばならない理由などありはしないと云っているんだ」

「戦となれば、長州に居る以上出ると言うに決まってるだろう。なら先に隊へ組み入れ、隊士と慣れ親しませるのが良いに決まってるじゃないか」

高杉も断固として譲らない。

「百も承知しているよ。その時になって桂木くんに聞くさ。ここで隊に組み入れる事で、二人の行動を制限するのが僕は嫌なんだ」

そう言われてしまうと、これ以上の無理強いはできない。

「しかし変わったなあ」

嬉しそうに笑う友に、何かと訊ねる。

「損得で動いていた男が、得になる二人を外すなんぞ、以前のおま

えなら絶対にしないじゃないか」

「まったく。和太郎が本当の甥ならば隊に入れてるさ」

「ふん！ そう考えるってのはなあ、おまえが本気であいつを受け入れてないって事だ」

えっ？ と桂は顰めた顔を上げた。

「自分で言っただばかりだろうが、本当の甥ならと」

あっ、と気まずそうに高杉から視線を逸らした。

「そう言う事か・・・僕は、心のどこかで他人と位置づけているのか・・・いや・・・そんな事は・・・」

「二人を蚊帳の外に追い出したまま、ここで俺達が問答しても仕方がない。今すべきなのは、二人の意見もちゃんと聞くって事だ。違うか？」

「ああ、そうだね。二人にちゃんと聞こう」

なら早速行くぞと、木太刀の交わる音が響いてくる庭の一角へと二人は足を向けた。

真正面から打ちに掛かってくる和奈を見て、最初の頃より随分と上達したと武市は感心していた。岡田ともう一度真剣に手合わせさせたら、軽く一本取ってしまうのではと思うほどである。

「脇が甘い。剣を振り切った後すぐに腕を戻すようにしなければ、そこへ斬り込まれてしまうぞ」

これならば並みの剣士相手なら引けは取らないだろう。問題は剣豪を相手にした場合だ。

抜刀術は初撃が運を分けるといってもいい。初太刀をかわされたらよほどの手錬れでないと隙を突かれ二太刀目に転じる前に斬り込まれる。だから武市は抜刀術に頼らない剣術を教えなくてはならないと、稽古はもっぱら組太刀を用いていた。

「おまえら、そろそろ休憩にしろ！」

桂の腕を掴んでやって来る高杉の声に、二人は手を止めて振り返った。

「あれ、高杉さん、今日は奇兵隊に行ってるんじゃないかったですか？」

「小五郎が隊の編成でごちゃごちゃ煩いから、わざわざ戻ってやったんだ」

「酷い言われようだ。そもそも僕が戻る前に勝手に隊を変えてしまったのは誰なんだい？ お陰で余計面倒な事になっているんだ、少しは責任というものを」

「解ったからそのお小言をやめろ！」

いつも説教が始まると、高杉は話を途中で遮ってしまう。

「ほんと、羨ましいいほどお二人は仲がいいですね」

「いいもんですか。この男は最初に会った頃とちっとも変わらず僕の手を煩わせてばかりなんだよ？」

そして桂は、ああと二人が初めて会った頃の話しを始めた。

桂が二十歳の時である。身分は同じく中級藩士だったが、七つ年下である高杉と言葉を交わすような接点もなく、顔を合わせる事があったが年長であるという理由で挨拶をされるだけで、桂は特別感心を示すことは無かった。

「酷いと思わないか？」

「暴れまわる小僧が居ると聞いても、それがおまえだとは判るはずもないじゃないか。話す機会も殆んどなかっただろ？」

「小僧ってなんだ！ 小僧って！！」

「元服前の小僧を小僧と言わずして何というんだ」

「大人と子供ですね」

話を聞きながら想像を膨らませていた和奈は、つい言葉が出てしまってから、しまったと手を口に当てたが遅かった。

「おまえまで言うか！？」

「あはははっ。和太郎はよく解っているね。でも、あることがきっかけで僕は晋作を気にし始めたんだ」

「あること？」

「他藩と剣術の試合があつてね」

「あつ！　まて小五郎！　それは言うな！」

「いいじゃないか、別に恥ずかしい話をするわけではないんだ」
「嫌な思いもあるだろうが！」

「あ、はい。聞きたいです」

にこつと笑った和奈がそう言ったので、高杉は真剣に焦ってしまった。

「他藩から来た武士に長州の武士が総負けしてしまったんだよ。それもたった一人の相手にだ。それに怒りを見せたのが晋作だった。負けたのは腕の差だ。だが、晋作はそれを自分の腕の恥とせず、長州の恥辱だと受け取った。敵と斬り合った先に、自分の死があるとこの男は思っている。幼い頃から剣術一筋だった晋作らしい考え方だね。だからか人一倍負けを嫌う。その事があってさらに剣術の稽古に没頭するようになった」

「負けて武士の花が咲くものか！」

「まだ話は終ってないよ、晋作」

「そう言い楽しそうに首を傾げた。」

「僕は元々武士ではなくてね。父からはよく、武士たる者より人一倍稽古を積み、本当の武士になるよう粉骨精進せねばならぬと説かれたものだ。だが僕はどちらかと言うと学問の方に興味があった。それに晋作ほど剣へ打ち込むことへの意味も見出せなかった。それが、長州が総負けしたと聞いた時は腹が煮え返るほど腹が立ち、怒りに体が震えた。おかしいだろ？」

「小五郎も武士の端くれだったてことだな」

「そうかもね。で、その腹立たしきは僕が剣術にのめり込む要因となり、晋作の気持ちを理解する機会を作った。それから話す機会も増え、付き合いが始まった。八年後に晋作が免許皆伝を得る頃には、掛け替えのない友となっていた」

「喋りすぎだ！」

話し終るまで素直に突っ立っていた高杉は、最後の言葉で顔を真っ赤にしながら桂の首を絞めにかかった。が、伸ばされた腕は避け

られてしまい宙を描くだけに終ってしまう。

「避けるな！」

「首を絞められる覚えはないよ？ いいじゃないか、おまえの昔話は本当に楽しい事ばかりなんだから」

「だからってなあ！ なにもこんな時にそんな話をする必要はないだろうが！」

「もっと聞きたいくらいです」

くすくす笑う和奈に晋作が呆けた顔を向ける。そして、何か気付いたような顔をした後、桂を指差した。

「はん。小五郎も悪戯好きの悪童だったじゃないか」

にやりと笑みを浮かべた高杉は上得意の顔になっている。

「悪童！？ 小五郎さんが？」

「ほう」

これには武市も興味を示したようだ。

「額の傷、なんで付いたか知ってるか？」

傷？ そんなのあったつけ、と桂の額に視線が行く。

「ああ、これかい？」

和奈の方へ少し屈んで前髪をさらりと掻き揚げて見せる。そこには小さな三日月形の傷がうつすらと残っている。

「どしたんですか、これ？」

「誰でも小さい時は悪戯をするものだろう？」

「おまえのは半端ないだろ！ こいつはな、川を往来する船を転覆させては大喜びしてやがったんだ」

「転覆って、それ悪戯を通り越してますよ！」

「だろ？ それも船頭ごとだぞ？ まあ、大人も馬鹿じゃない。で、やられてなるものかと、小五郎が水面から顔出して、船縁に手をかけたところを櫂で殴った」

「殴ったって、死んじゃいますよ！」

「俺に怒るな！」

「役所の荷物なども運んでいたから、沈められたら怒るだろうね」

他人事のようにあつさりと桂はそう言う。

「岸に泳ぎ着いた小五郎は泣くどころか、額から血をたらしてニタニタ笑ってやがったんだとさ」

笑顔を浮かべて話を聞いている桂が、ニタニタ笑いを浮かべている顔など、和奈には想像できなかった。

「穎敏な方も、子供時分は変わらぬ、という事か」

愉快そうに武市の視線を受け、桂は、そうだよ、と返す。

「まったく。なぜ青空の下で長々と昔話などしなんのだ！」

「僕の話しを持ち出すから長くなっただんじゃないか」

「おまえが最初に持ち出したんだろうが！」

「そうだったか？」

次の言葉を言いかけた高杉をそのままに、桂は二人へと向き直る。

「稽古を中断させてすまなかったね。昔話をしに来た訳ではなく、二人に話があつて来たんだよ。おい晋作、そこで拳を握っているより君から伝えたらどうだい？」

「俺に振るならいらん事を喋るなってんだ！」

桂に勝てるはずもなく、握った拳をそのままに和奈の前に立ち腕を組んで頭を少し前へと屈めた。

「小五郎が隊を編成してるって言ったら？ おまえ達はどうする？」
直球だった。話しの筋道を考えて喋るのは、高杉にとって大の苦手とすることである。その、なんの前置きもない質問に武市は笑みを浮かべるしかない。

「俺と和太郎が、長州軍に参加するか、しないか、かな？」

「おう、それだ」

「俺が断ったとしても、和太郎は参加すると言い兼ねんな」
細めた目でちらりと睨むように和奈を見下ろす。

「う・・・その通りです」

桂も武市も、お互いにとって息を掛け合い、やはりと肩を落とした。何をどう言ってもここに居る以上、意見は変わらないだろう。

「そらみろ。俺は最初から隊に入れると言ったんだ。小五郎が変な

気を使うから昔話まで出す羽目になるんだろうが！」

「それはそれ、これはこれ。おまえも僕の話をしたじゃないか、お相手だよ。では、おまえも桂木くんもそれでいいんだね？」

「はい」

「断る理由はない・・・申し訳ないが、あれも一応追加しておいて頂けると手間が省ける」

武市が指差した方向に、駆け足で走って来る岡田の姿を見つける。

「厄介者がまた一人増えそうだが、いいだろうか？」

四人の側で息を整える岡田に、高杉は歓迎だと握ったままの拳を頭に振り下ろした。

「いったあ！　なんですか高杉さんいきなり！」

「五月蠅い、歓迎だと言ったんだ。有り難く思え！」

「そんな無茶苦茶な歓迎はないだろう。すまないね岩村くん。少々恥ずかしい話をされたもので、君に矛先が向いてしまったようだ」「恥ずかしい話？」

実はと、桂が先程の話を始めようとしたものだから、高杉は後から皆で来いと言い、その腕を掴んで慌てるように屋敷へと戻って行ってしまった。

「なんなんですか？」

「気にするな。それより、どうして戻った？」

「薩摩藩邸へ行ったら、慎太郎も龍馬も居なくなつたと・・・俺一人薩摩藩邸に厄介になる訳にもいかず、で、先生の所へ戻るほうがいいと」

「龍馬が動いたのは桂さんから聞いている。西郷さんと会うまで我慢できるかと心配していたが、こうなつては仕方があるまい。おまえも当分ここに厄介になるといい。いや、待て。京へ戻って所帯を持つ、という選択肢もあるぞ？」

「なぜそういう事になるんですか・・・」

「薩摩藩邸にはお京さんも居るんだ。龍馬が動かなければわざわざ戻って来たりはすまい」

岡田の顔が真っ赤に染まった。

「そう言えば、お京さんはどうしたんですか？」

「薩摩藩邸にちゃんと戻した！ 何もしてないぞ！」

「別に何かしたのかと聞いてはいまい。が、おまえが気に入った相手に手を出さんとはな、本気で惚れたか？」

口を魚のようにぱくぱくさせた岡田をそのままに、和奈に戻るぞと言ひ、武市は屋敷へと歩き出した。

「・・・桂木さんと小五郎さんて、やっぱり似てると思う」

会話で疲れてしまった岡田と共に、和奈は武市の後を追いかけた。

屯所を移転させる許可が松平から下りた元治二年三月十日、壬生から西本願寺への引越して新撰組は大騒ぎとなっていた。

「長い間、ありがとうございます」

大方の隊士が屯所から出た頃、近藤は八木邸の主源之丞の元を訪れていた。

「お忙しい中、ご丁寧にありがとうございます」

「とんでもありません。これまで本当にありがとうございました」

「幕府の御用達です、お氣になさらず」

「いえ。荒くれ者ばかりが集まり、昼夜問わずご迷惑をお掛けした事と思います。少しばかりですが、お納め願いたい」

座した八木の前に、懷から白い紙を取り出し置いた。

「いえいえ。何かとご入用の事でありましょう、お心だけ頂戴しておきます」

「本来でしたら、これ位の礼ではすまぬ所です。どうか、お受け取り頂きたく存じます」

八木はそれならばと、礼を受け取ると申し出た。

「京の町も本当にさらに物騒になっております。皆さんの活躍は、西本願寺へ移転されても期待をしていますよ」

八木に礼を述べた近藤は、引越しを手伝わねばと八木邸を後にした。

「やれやれ。これでここも静かになるだろう、すつとすると云うものだ」

そう言いながらも、礼として受け取った五両を使い、八木は西本願寺に酒を送る手配をした。

西本願寺を新撰組の本陣とするにあたり、境内北側に位置している北集会所を屯所とした。

北集会所は、畳三百畳もの広さがある講堂を、二段に作られている縁側が取り囲む建物であるが、そのまま使うのは不便だと引越しの前に大工に幾つもの小さな部屋に仕切らせていた。時を知らせる太鼓が設置された太鼓楼も、内部が三層に分かれており、隊士の寝泊りにも不便はなく、警戒にも便利と見張り台として使う事になっている。

荷物を運び込む姿を見ても、僧侶らは遠巻きに見るだけで誰一人手を貸そうというものは居なかった

西本願寺の僧侶の多くは尊王派である。

文久三年八月十二日、佐幕派浪士によった奉行の松井中務が暗殺された上、晒首にされた事で、新撰組を毛嫌いする者も多くいる。

禁門の変の時、逃げ込んできた長州藩の品川弥二郎と山田顕義らを匿っていた。

京から出る事は不可能と考えた品川らの切腹を止めたのが、浄土真宗の僧であり西本願寺の二十世 宗主廣如だ。廣如は坊官の下間頼和に、彼らを僧形にして逃がすよう指示し、長州藩士を京から出した。

そう言った長州志士の援護をするだけでなく、裏で資金を出しているのではという懸念を持たれている。僧侶の一人、大洲鉄然も長州藩出身の尊王僧だ。彼ばかりでなく僧には長州出身の者が多い。加担していると思われる要因はいくらでもあったのだ。

土方が山南や伊東の反対を退けてまで、西本願寺への屯所移転に拘った理由である。

「賑やかだよなあ」

他の宿所から移ってきた隊士を含め、大所帯となった。

赤井は大石と二人で一つの部屋を与えられていた。六畳に五人が寝起きしていた壬生を思えば、大石と二人でも居心地は良いと言える。

「おまえ、^{ぐふ}軒はかかんだろうな」

大した荷物もない二人は、早々に片づけを終え、新しい部屋で気兼ねなく寝そべっていた。

「かきません。そう言う大石さんはどうなんですか？」

背中で大石の躊躇を感じ取り、赤井は体勢を変えて大石を見た。

「かくんですか？」

「心配するな、そのうち慣れる」

慣れるほどの^{ぐふ}軒ならばいいがと、寝不足になる予感を感じた。

「引越したはいいが、こう大所帯になると返って居心地が悪いもんだな」

「知らない人も一杯だし、洗濯物も増えるんだろうなあ」

「そんなもん、おまえには関係ねえ事だ」

自分は下っ端だからと赤井は言った。

「馬鹿かおまえ。羽織着て一番隊に居るんだ。その意味が解ってるのか？」

「意味って、羽織なら皆持つてるじゃないですか。それに一番隊だからって俺が下っ端なのは変わりないですよ」

「やっぱ解ってねえなあ。沖田さんがおまえの腕を認めて、土方さんまでご執心とくれば、他の奴はおまえを下っ端とは見做さねえって言うてんだよ」

「は？ ご執心って、土方さんが俺を？」

「何かあるとおまえに用を言いつけてるじゃないか。それに、あの人が自分から話しかける相手は限られてんだぜ？ とくりゃあ、他の奴からは別格扱いされるってもんだろうが」

そんな事にいつなったのか、赤井には全く検討などつけない。

「雑用は当番じゃないですか」

「けっ。新しい当番表を見やがれ。雑用についちゃあ、おまえの名前は出てねえからよ」

「まじっすか？」

「あ？」

「いや、本当ですか？」

「西の縁側に張り出されてるから見ておけ」

赤井はそそくさと部屋を出ると縁側を歩き出した。

二段作りになった縁側は壬生屯所の三倍近い広さになっている。

よく磨かれた床に旅を履いた足元はよく滑る。

ぞくつとした感覚が足元から伝い身体を振るわせた。

角を曲がると人だかりが見えた。そこに当番表が張り出されているのだろう。

「赤井じゃないか、おまえも見に来たか」

塚本が山野と一緒に人だかりから出てきた。

「ええ。初っ端から遅刻できませんし、ちゃんと確認しとかないと」
そう言いながら、爪先立ちになって紙を覗き込もうとする。

「俺らは当番に割り振られてないぞ」

「あら。山野くんも？」

「隊固定の者は入ってない。他の宿所から来た奴らと持ち回りなんだろうよ。こんだけ居るんだ、屁でもねえって」

新撰組に入っただのは最近なのに、良いのだろうかと塚本に尋ねた。
「最近でも昔でも、能がありゃあ上へ行ける。気にするこっちゃない」

上へ行くなど考えていた訳ではないのに、勝手に周りがそういう判断をしている事に驚いた。

土方や沖田と関わりと持っているとは言いがたい。ほとんど一方的に用を押し付けられるのだし、幹部の会議に参加する身でもないのだ。

ふと、当番表と並んで貼られている紙に目が止まる。よく見ると

それは手配書だった。

（これって！）

その手配書には武市半平太と岡田以蔵の名が書かれており、朱色のぼつ印がつけられている。

「塚本さん、あの二人の手配はなくなっただんですか？」

聞かれて手配書を見た塚本は、死んだから不用になったただけだと教えてくれた。

（ほんととは生きてるんだけどなあ）

名前を変えて長州に居るのだから、なんとも不思議な気分だった。

「そう言やおまえ、桂小五郎と会ったんだってな」

楠と一緒に居た女が桂ならと赤井は答えた。

「女装かあ、そんなに綺麗な男か？」

「服でも脱がさないと一目じゃ男だと解りません」

最初に会った時も、しばらくは女だと思っていたのだ。

「かなりの腕前らしいな。こりゃあ怖くて女と言ってもおちおち近づけんよなあ」

話題を振られた山野は、嫌そうな顔で塚本を睨み返した。

この山野とて、化粧をして女の着物を着たらさぞ見栄えの良い女になる事は間違いない。と赤井も想像してしまった。

（いかんいかん）

「坂本でも見つけて首とりゃ一気に出世なんだが。相当の腕前らしいから望みは薄いよな」

「伊東さんと同じ、北辰一刀流ですよ」

「ああ。免許皆伝だって噂だ。剣を交えた奴はいないから、どこまで本当かは判らんがな」

桂に龍馬、それに武市とも皆伝の腕前だ。以蔵は人斬りという異名を持つ手錬であるし、中岡もそこの藩士より腕が立つと思える。皆、新撰組の組長格と同等に渡りえる剣客には違いない。

（あいつも、そこの隊士より腕がたつだろうなあ）

大津での立ち回りを見れば、組長格を相手にするのは無理として

も、他の者と遣り合うのに問題ないと見ていた。

師範級の剣士がごろごろいるのかと、赤井は深いため息をつかざるを得なかった。

「さてと、俺は部屋へ戻る。おまえらも早く休んだほうがいいぞ。とくに赤井、大石の鼾は壮大にして半端な音じゃないからさっさと寝ちまえよ」

「・・・今日はとっとと寝ます」

それが利口だと、塚本は反対側へ歩いて行った。

大部屋では、八木が引越し祝いと送ってくれた酒樽で隊士達は宴会を始めていた。飲んで行けと土方に進められだが赤井は断り部屋へと戻った。

大石はどうやら宴会に行っているらしく、部屋に姿はなかった。布団を敷いて潜り込むと睡魔は直ぐに思考を停止させてくれ、鼾に邪魔されることなくその夜は早々に寝る事ができた。

幕府は武力で勅命の引き出しに成功し、四大隊を率いて江戸から上洛していた。

長州藩主の父子を出府させ、五卿を江戸に差し立てる事と参勤交代の復活を行使する論議が始まると、大久保は薩摩に居る西郷にその内容を伝えた。

薩摩から京へと戻って来た西郷は、藩邸で大久保の前に座って出された茶を飲んでいる。

「どうする、吉之助」

長州が三條ら公卿を匿っていたのは、長州藩が尊王藩として働いてきた象徴だったからである。五卿の身の安全を保障し、大宰府へ移転させる事を長州に承諾させたのは尊王派だという理由ばかりでなく、今後薩長双方にとってその存在が有意義になり得ると考えたからだ。それを今になって勅命が下りたからと江戸に差し出す事はできない。

「応じられうものじゃなか」

「そう言うと思ったから、拒否する勅書を送っておいてやったぞ」
西郷は、なに？ と目を見開いた。

「ついでに、將軍を上洛させろと付け加えてやった」

「・・・一蔵、おまえ自分が何をしたか理解しじあのか？」

「あたりまえだ、解らずにやるのば馬鹿のすることだ。なんだ、この期に及んでもおまえは佐幕を通すと言うのか？ ならば呆れてもの言えぬぞ」

「そうじゃなか。事はそげんに簡単じゃなか」

「それはおまえの立場でだろう？ 私は尊王倒幕派だ、忘れるな。会津藩と手を結ぶ事によって京での勢力回復を目論んだのはいいが、八月十八日の政変で幕府側という立場になってしまった。それが逆効果だったのは今の情勢を見れば一目瞭然であろう？ 私だけではなく、我が藩も元々は尊王派なのを思い出してもらいたいものだ。佐幕派寄りという立場を返上し、藩論を統一させ、諸藩同士の諍いをなくさなくてはならん。そういう時に差し掛かっているのだ、いい加減にその頭を切り替えないか」

幕臣の自分を前にして、はつきり倒幕派だと断言してしまうのが大久保だ。その気性はよく理解していたが、性急に事を進めては上手く運ぶものも頓挫してしまう恐れがある。西郷にしては珍しく慎重な考えだった。

「いけんして臆さずにやって退けられうのか」

「ふん！ それは簡単な理由だ。吉之助、周りをよく観よ。幾数多の者が命を張って志を遂げようとしているではないか。だから私も今の立場を存分に利用させて貰うのだ、倒幕のためにな。討ちたければここで討て。さもないと、佐幕を通すと言うおまえをいずれこの手にかけるかも知れんぞ？」

端で第三者にそんな話しをしたら冗談では済まない。相手が西郷だから大久保は隠しもせずに自分の考えを口に出す。それは西郷にとっては有り難いわけだが、だからと藩論を変える事を急がせるとなると簡単に事を進められない。

「おまえの言いたかちゅうこつは、ゆうと解つとう。おいとて、こん状況が良かとは思っておらん」

「さてはてどうしたものか。立場がいつもと逆になるとは考えもしなかった事だぞ」

「いけんもこうも、おまえはおまえの考えた道を進めば良か。おやおいの考えでこれからを考ゆっただけだ」

この男は、と大久保は笑いを浮かべた。

ここで斬れば簡単に事は済むのだが、それをしない西郷とて、現状が幕府にとって悪いものになっているのは理解しているのだ。大久保が帰りを待たず、幕府からの勅命に返答を出したのは、退嬰的な西郷の尻を叩く意味も含まれている。

「長旅で疲れているだろう。この話しの続きはまた後日するとして、今日はゆると休まれるが良い」

「難題を吹っかけておいて、ゆっくい休むう訳がないだろ」

時代の流れが変わりつつある事を感じながら、西郷は奇策縦横なまでの大久保との今後に、頭を痛めて行く事になるのである。

其之四 宵春

さつきやみ あやめわかたぬ浮世の中に なくは私とほととぎす

桂小五郎

時は移り行き、季節は春。

今年は識緯^{しんい}による甲子の年は変乱の多い年に当たる。実際、禁門の変や情勢不安など、多くの災異が起こっていた。が、改元については災異がなくても行いう慣わしとなっていたため、協議は前年より始まっていた。

将軍徳川家茂は朝廷に対し、明天皇の意向に全て従うという意見書を提出し、幕府だけで朝廷に奏上する御所で行われる儀式を、家茂は江戸幕府始まって以来初めて諸藩代表に公開したのだ。諸藩に対し、幕府が朝廷を蔑ろにしている事を示す家茂の思惑も含まれていた。

そして元治二年四月七日、元号が慶応に改元された。

改元の日の日二日前、大坂から戻った龍馬は、西郷が上洛していると大久保から聞き、京にある吉井邸を訪れていた。

「初めまして。私は薩摩藩大目付吉井仁左衛門と申します」

「同じく薩摩藩、村田新八です」

「拙者は土佐藩の坂本龍馬と申します。今度西郷殿に対してお頼みしたい事があり、推参仕りました」

「坂本くんには似合わんから、そう堅苦しゆせじよか」

吉井の横に座る西郷は、畏まって挨拶を述べる龍馬が立派な武士に見えると思いつつ、声を掛けた。

「久しぶりやか西郷さん。それなら遠慮なくそうさせて頂きゆう。」

まっこと捕まらんお人やき、ようよう会う事ができちゅうよ」

「おいも色々と忙しか身だ。時間を作れずすまんと思つとう」

龍馬は吉井の傍らで、そわそわしている男に視線を向ける。

「なき土方まで、ここに居るがか？」

「手短に言うと、大宰府へ行った時に慎太が同行したいと来たぜよ。そんな時に吉井さんも居つてのう。まあ、ほがながなでここに厄介になつちゅう」

解りやすいのか難いのかと、龍馬は呆れてしまった。

「ほがな事を聞きに来たがかや？」

「ああ、そうじゃそうじゃ。是非とも聞いてもらいたい事があるがで、こうして馳せ参じた次第ぜよ」

「長州との和解の件ぜよ？」

土方の言葉に、ぽかんと口を開ける龍馬。

「おんし、なんでそれを知つちゅうんだ！？」

「頭ん中が壊れてしもうたちゃのか。さっき慎太と一緒にだったとゆうたばかりやか。わしと吉井さんで、西郷さんにその話をしよつた所じゃったが」

龍馬はそれなら話が早いと笑い声を上げてから、真剣な顔で西郷と吉井に再度薩長の和解について懇願した。

「一蔵からも聞いたう。で、坂本くんは本気でおいに長州との和解を進めろと言うんなあ？」

「本気も本気。このまま行けば、いずれこの国は夷人に乗っ取られてしまう。夷国にや日本にない沢山の物がある。武器にしたち、船にしたちじゃ。馬関に来ちよつた艦隊は凄いと聞いたぜよ。今ここで、藩政二代藩として在った両国が、犬猿の仲を通すのは国の一大事と思ひゆう」

龍馬の言いたい事は西郷とて解らぬものではなかった。大久保にも背中を叩かれ、吉井の家に避難して来たら、今度は土方と吉井にも長州との和解を切り出されていたのだ。そこにまた龍馬の登場である。

「おまえ達皆で、猾策しじあんほいならんのか？　こうも同じ日に、同じ話して詰め寄られうとは思ひもなかった」

「いやいや。ほりゃあ気の回しすぎぜよ。そればあみんな、両国の和解を願って止まないって事ぜよ」

そう龍馬が言った後、バタバタと駆け足の音が響いて障子が開くと、息を切らせた中岡が部屋に飛び込んで来たので、西郷の顔に疑いの色が浮かんだのは言うまでもない。

「おう、なにをそがーにほたえちゅうがか慎太郎は」

「西郷さん、失礼します！」

「もう失礼しちゅうやか」

「ほらみろ。やはい何か示し合わせてんと、こうも人が集まう訳んだろう。しかも皆、和解の件で動き回つとう奴ばかいほいならんか」西郷は半ば諦め気味で、中岡を加えた四人に屈託のない笑いを見せた。

【幾数多の者が、命を張って志を遂げようとしている】

大久保の言った言葉が脳裏に浮かんだ。まことその通りだと思つた。ここに集まる者以外にも、両国の和解を推し進めようと帆走している者も居るのだろう。

「おはんらの言いたい事はゆうと解つた。長州との話し合いの件、こん西郷受けてもよか」

その言葉に、四人の動きが一瞬止まった。

「しょうまつこと、受けて頂けるんなが！」

龍馬が姿勢を正すと、その後ろに中岡も座つた。

「男が一旦口に出したものは、曲げうわけにいかん。坂本くんの話しもゆうと解うとこいだ。長州と手を組むのは、薩摩にとつても攘夷を進むう上で欠かせなちゅうこつは、百も承知しじあ。それに、最近の幕府の動きも得心が行かん事ばつかいだ。京でも大坂でも新撰組が大手振って、幕府の御命と人を斬つとう。もし夷国に攻め込まれでもしたら、坂本くんの言うごと、こん国は潰れてしまふと懸念しじあ。長州が出て来うと言うのならば、坂本くんに任せう」

「ありがとうございます！」

畳に額を擦り付けるように、龍馬は頭を命一杯下げた。

「よし！」

声を張り上げて吉井が立ち上がった。

「何をいきない大声出して」

西郷も坂本も面食らっている。

「酒を持って来よう。酒盛りだ酒盛り！ 中岡、手伝え！」

「やっぱり俺なんですよね・・・」

吉井にごちゃごちゃ言うなと怒られながら、中岡は後を付いて行った。

「これで肩の荷が下りたぜよ」

こきこきと肩を鳴らす龍馬に、まだ終わっていないと西郷が笑みを向ける。

「坂本くんには、これからまだ働いてもらわなくてはならん。ここで肩の荷を下ろさすつ訳にな行かんぞ」

「あはははははっ。解ちゅうが。頼まれ事の一つが片付いたから、ちつくとくらしいの間は下ろさせてもらいたいやか」

吉井達が酒を運んで来ると、その夜は遅くまで宴会となってしまう。

散散飲み捲くした後、寺田屋に戻ろうとした龍馬に吉井が滞在を勧めてくれた。龍馬はこれを快く受けたが、寺田屋に荷物もあると一旦戻って行ってしまった。

西郷も勤めが残っていると帰ってしまったので、後に残された者は何も気兼ねする事もなくなり、吉井も進めるものだから更に酒をあおる事になってしまった。

「どうせお龍さんに会いに行っただよ」

ほろ酔いの中岡が恨めしそうに呟いた。

「お、坂本さんのこれか？」

村田が小指を立てる。

「そうそう、これこれ」

笑いながら中岡も小指を立てた。

「一段落したと思って、女子の尻追いかけちよるようでは、先行きが心配ぜよ」

追いかける尻があるのはいいと、中岡が淋しそうに肩を落とした。

「おんしはどうなんじゃ。誰ちゃあおりやあせんのか？」

「居たらここでくだ巻いてないで、出てってますよ」

女子の話しはもういいと、さらに酒を飲む中岡を、その後土方が快方する事となってしまうた。

会談の同意を得た龍馬は、西郷と家老小松帯刀と共に蒸気船で薩摩へと向かった。

小松が同行する目的は長州との会談もあったが、幕府が長州再征伐に動き出した際、出兵をさせないよう藩論の方針を統一させるためでもあった。

西郷が薩摩へ帰国するのを知り、龍馬に藩論決定の証人役も申し付けての同行である。西郷とて、本音は和解会談よりその事に重きを置いていた。

幕府機関である神戸海軍操練所の解散により、行き場を失くした塾生を勝の依頼で薩摩は庇護した。小松はその塾生が持つ航海に関する専門知識に目を付けたのだ。そして勝との繋がりがある龍馬に、表立っては貿易会社としての私設海軍を、薩摩が資金援助する形で創設させたのである。塾生をそのまま雲散霧消させてしまうより、手元に置いておきたいがための出資であった。

龍馬にとっても、その申し入れに損はなかく、塾生が路頭に迷わずに済む上、海外と折衝ができる舞台が持てると一石二鳥の含みもあり引き受けたのである。

この蒸気船にも、元塾生だった海援隊隊士らが乗り込んでいる。

「頭も切らるる上、行動力もある。まこと面白い士じゃ」

小松は龍馬の印象をそう言ったが、ただじつとできない男なだけですと、西郷は返した。

「そなたとは、質をば違える衆生であると、そう申す事であろう」五月一日に薩摩へ着いた西郷は、小松と共に藩庁へ向かうと、情勢を官僚に報告し、長州再征伐への出兵命令を拒否する方向で藩論を纏めてしまった。

龍馬は、西郷が手配した薩摩藩士の児玉直右衛門が案内役となり、十六日に龍馬は大宰府へと出立。薩摩街道を北上し、薩摩街道と長崎街道が合流する田代から黒崎へ着くと、唐津街道に入って松浦から伊万里へ向かって五月二十三日には無事大宰府に到着した。

児玉の紹介で、今度は五卿の警護を担当していた渋谷彦助に会うと、早速龍馬は五公卿との謁見を願い出た。その申し出を三條らは快く承諾したが、他にも謁見等が入っているため、日を改めて来るよう龍馬に告げたのである。

二日後、迎えに来た児玉と共に龍馬は五公卿の元を訪れた。

「拙者は土佐者、坂本龍馬と申します。こが度は、下者が拙者のお願いをば聞き届けて頂き、誠にありがとうございます」

「面を上げられよ。余は三條實美。こちらに居られるのは東久世通禧殿だ。後が三名は、用ありきにて無礼しめて頂いておる。そちが噂は、土方や吉井にて聞き及びて候。面白い士であると思い、ひとたび会ひて見たもうであると思うておった」

「重畳のお言葉、至極光栄に御座います」

「して、如何様な事にて参いられた」

「早々にて申し訳ございませぬが、こが度、薩摩と長州との和議をする場をば設けたい所存にて、公卿殿がご説を聞きたく参上仕りました。薩長が今日の如く隔離して居ては、とても大業を成することは叶いますまい。互いに是までの行掛りに拘ってばかりではなく、提携をして大に国事に尽さねばならぬと思っております。是につき

まして、三條殿、東久世殿はいかがお存念になられるか、恐れ多くも伺いたき所存にございまする」

三條は東久世と顔を合わせた。

「容易に和議であると申すが、そちの申した如く事は、過去に遡りて複雑極まりないもの。其れをば承知にて、和議をば図りたいと申すのか？」

「御意」

「確やに、説をば交わす事あるともせず、ただいがみ合ひて在るがは愚が骨頂であると云える。故に、難儀困難極まる和議となろうが、出来るならば叶えたし事であると思つておる」

「有り難きお言葉。坂本龍馬、こが身を賭けて両国が和議に所望たし旨、此処に三條殿と東久世殿にお契り申し上げまする」

「なれど、土佐が士が如何ほどにすれば、こが大事をば成そうと存念つくのか。のう、三條殿」

「まこと、いと面白い士だ。この世、いかが動くか楽しくなり申して参つた。隠匿いんとくに堕ちた身であるとは云え、使える処あるならば、この三條を使うがよいと申し付ける」

「何と仰るか、三條殿！」

三条の言葉に驚いたのは東久世の方だった。

「なんぞ腹に隠し持つ士より、この士が者の方が偉輩いはい也。眼を見らば判る。坂本殿に苦言を呈し致す、心してこれより掛からよ。敵は牙を隠し近くに潜んでおる故、努々それを忘るる事なかれ」

「三條殿にこうまで申させるとは。まこと、そなたは偉輩やも知れぬな。余も楽しみになり申もうした」

龍馬は改めて二人に感謝の意を込め、頭を下げた。

多忙な日々を送っていた桂の元に、龍馬が薩摩へ着いて後に出した手紙が届いた。

それに目を通し、会談日時を問う手紙だと高杉に見せた。

「やっとか」

「どうか。僕はまだ安心はしていない。前回も袖を振られているんだ。いくら坂本くんが同行して薩摩に着いたとは言え、一抹の不安は拭い去れるものではない」

「しかし行かない訳にはいくまい？」

「日時を決めるためだけに、大宰府まで行けるものか」

風呂から戻った和奈は、食事を取るため広間に戻って来た。すでにご飯を頬張っているはずの高杉が、珍しく箸も手にせず話し込んでいたので、どうしたのかと聞いた。

「ちようどいい役所が来たじゃないか」

その一言に、桂もそれは名案だと賛成した。

そこへ見廻りから戻って来た武市と以蔵も加わった。

桂は、毛利公へ武市と以蔵の身分付の嘆願をし、許可を得たと二人に伝える。

「身分など、この身にはもう不要なものです」

「そうはいかん。これで終りと、引込まれては困るからな。小五郎と相談してだ、首に縄を付けておくことにした」

自分の首の前で手を回す。

「なんて言い方をするんだ。すまないね桂木くん。だが、理屈としてはそう言うことだ。上士だった桂木くんには申し訳ないが、長州では本藩の中士に当たる大組遠近附士おちこしふしになる。これが精一杯だった。岩村くんは藩士として正式に許可を貰ったからさのつもりで居てほしい」

焦っている以蔵に、もう君は人斬りではないのだから諦めろと桂は言った。

一つ聞きたい事があると、武市は居住まいを正す。

「毛利殿に許可を頂いたと申されたが、いくら桂さんの陳情であろうと、無名の者をいきなり役職を与えるなどとは思えない。いかなる理由をもって嘆願されたのか、お教え願いたい」

「君が案ずる事ではないのだが。官位を剥奪はくだつされたとは言え長州藩

藩主。その立場の保証と藩の体制強化、戦術の転換を受け入れて頂いたついでに、君達の功績を晋作から伝えさせたまで。身元については一切問質する必要はないとも、申し上げてね」

「それで許可を出したのは毛利殿だし、身元の保証は藩庁の政務座最高責任者がしている。問題はない」

つまり、桂と高杉は藩主である毛利を脅したのだ。

「お二方は、やる事が大胆過ぎる」

武市はそれ以上、理由を聞く気が失せてしまった。基準で物事を考えていては、この先到底この二人と渡り合うことは不可能だと理解したのだ。

「それで早速だが、初仕事がある。大宰府に来ている坂本くんに会いに行ってもらいたい」

「龍馬が大宰府に？ では、西郷さんとの件か」

「ああ。会談の日時を知らせてほしいと言って来た。何分、僕も晋作も手が一杯でね。頼まれてくれるだろうか」

「承知した。桂さんはもはや藩の主導を執る立場、命令で結構と申し上げる」

「そう言って頂けると気が楽になる。では、和太郎もそれでいいね？」

なにがどうなっているのか、和奈にはさっぱり理解できなかった。「まったく状況が判らないので桂木さんに従います」

「いい子だ。僕は山口に移るから、晋作は後で来てくれ。同行は佐世くんと所くんを選んでおいた。僕の指定した日で良ければ知らせを寄越してほしい」

「解りました」

そうして、和奈と武市は大宰府へ向かう事になった。

「酒だ、酒持ってきて！」

障子を開けてそう叫ぶと、半刻も経たない内に目の前に膳と酒が並んだ。

上機嫌で晩酌を始めた高杉は鉾子二本を空け終わると、後ろの三

味線に手を伸ばした。

「高杉さん、三味線弾けるんですか？」

「あ？　そういや、聞かせた事なかったな」

「はい！」

「なら、よく聞いとけ」

音を調弦して、撥ばちを持つと一の玄を弾く。続いて心地よい三味の旋律が流れ出し、合わせて高杉の声が唄い出した。

） 逢うたその日の心になって 逢わぬその日も暮らしたい

恋に焦がれて啼なく蝉よりも 啼なかぬ螢が身を焦がす

三千世界の鴉を殺し 主と朝寝がしてみたい

酒に酔うては眠れるものを 恋に酔うては眠られぬ ）

「どうだ、解ったか？」

唄が終り、すごい、と感嘆しながら手を叩く和奈に聞いた。

「えっと、恋の歌かなと言うのは解りました」

いきなり大きな声で笑い始めた桂に、突っ込みを入れかけた高杉も、聞き入っていた武市も驚いてしまった。

「おまえ・・・和太郎がそれを解れば・・・桂木くんは・・・苦勞してないだろうに」

腹を抱えて笑いながら、桂はなんとか言葉を口に出した。

「都々逸ととえつの解釈はそう難しいと思わないが、私が書く絵の意味すら読み解けないんだ、無理もない」

「絵でもか・・・って、いつまで笑ってるんだ？」

「だって、晋作が悪い・・・もう、腹が振れて痛いよ」

せっかく唄ってやったのにと酒を煽る高杉を横目に、ようやく笑いを治めた桂は、三味線を高杉から取ると弾き始めた。

高音過ぎず低音すぎない柔らかい桂の声が、音に乗って行く。

　撥を持つ手に　今日火吹き竹　なれぬ勝手の忙しさ

　どうせ互いの身は錆び刀　切るに切られぬ　くされ縁

　面白いときやお前とふたり　苦勞するときやわしゃひとり

　苦勞する身は何いとわねど　苦勞し甲斐のあるように　

「だあああ！　おまえ唄まで小言になってるじゃないか！」

今度は桂木が笑う番になったが、やはり和奈にはなんとなくしか解らなかった。

「こいつに恋歌を悟れと言うのが無理なんだ。ですが、なぜ先生が苦勞するんですか？」

さっきから何か考え込んでいた以蔵が口を開いた。

「・・・ここにも、鈍い奴が居たな」

高杉はどうしたものかと武市を見る。

「どの道、俺はすでに変態扱いされているんだ、気にするまでもない」

「先生！？」

「そうは行かないだろう。岩村くんにもちゃんと伝えておくべきだと思うが？」

武市は少し考えた後、和奈を見やってから以蔵に向き直ると、こいつは女子だ、と告げた。

「は？」

「は、じゃない。和太郎は桂さんの配慮によって男として居た、と言っているんだ」

「はあ！？　女！？　こいつが！！？」

縮こまった和奈を前に、以蔵は大声を上げて驚いた。

「大きい声を出すな馬鹿者」

「ちよと待て！ 俺は女に一本取られかけたのか！？」

「どうやら、その事をずっと気にしていた様だ。」

「ああ、そう言う事になるな」

一転、今度は酷く落ち込んでしまう以蔵に武市は呆れるしかかなかつた。

「おまえと慎太郎以外は気付いていた。己の修行不足と思え」

「女にしちや腕が立つからな。岩村、これはここだけにしろ、奇兵隊に知れたら収集が付かんからな。石川なんか事ある度に和太郎の話を持ち出すんだ。女と知れてみる、桂木さんに斬られるのは間違いない。それだけは困る」

「……って、ええ！？ 先生、まさかこいつを？」

「おまえに報告する義務があるのか？」

「いえ……ありません」

「ならば聞くな」

「和太郎並に馬鹿だな」

高杉の頭に拳を振り下ろした桂は、そろそろお開きにしようと腰を上げた。

「明日も早いんだ、桂木くん達も休まさなければならぬだろう？」

こうして、一人いじける高杉を残し、四人は広間を出て部屋へと戻った。

翌日、夜も明きらぬうちに二人は所と佐世を伴い出立した。

以蔵は一緒に行くと言い張ったが、奇兵隊への参加も決まりやる事があると高杉に言われ、しぶしぶ見送る側になった。

春と言えど、まだ風は肌寒く感じられる。

萩から萩往環へ入った一行は、途中の宿所で食事を摂る以外は道草せず歩いたため、陽が落ちる頃には山口宿へ着くことができた。

「久しぶりだな、龍馬に会うのは。大津を発って以来だから半年に

なるか」

食事を済ませて、和奈は困り果てていた。

「はい・・・そうですね」

部屋の空気が二つしかなく、武市と同じ部屋になってしまつて、無意識に武市から距離を取つて座わっている。

「やれやれ。取つて食おうとは思っていないから、そんなに困つた顔をするな」

と言われても、やはり緊張してしまうのだから仕方がない。

「桂さんとは、楽しい夜を過ごしたのだろうが」

少し膨れっ面を見せる武市。そんな表情など今までになく、和奈はさらに困つてしまった。

「ち、違います。ただ普通に話しをして寝ただけです」

「身内とは言え、桂さんも男なんだがな。あの容姿では、まあ無理もないか」

桂と武市では、和奈の中の位置づけが違う。男性だと言われても、同じようには行かないのだ。

「すいません」

「ふむ。だが、このまま何もせずと言うのも、それはそれで勿体ない気がするのも確かだ」

そう言つた武市は、背筋を伸ばしてしまつた和奈の腕を取ると思いつ切り引き寄せた。

「た・・・武市さん」

「その名は使うな、馬鹿者が」

焦つて口走つてしまい、しまつたと手を口に当てる。

「しばらく、このままで」

腕の中に抱えられ、吐息が髪にかかる。

「初めて会ってからもうすぐ一年が経つ。早いものだ。所在なげにおろおろとしていたおまえが懐かしくもある。今は立派な剣客になっている、とは言え心許ないが」

「・・・立派ではありません。綾鷹を頂いた時から剣に頼る事でし

か、自分のすべき事を見出せませんでした。いえ、今も、はつきりとは解っていないのかも。ただ・・・」

「ただ？」

「生意気ですが、皆が目指すものを僕は守りたいと思った。それがどんなに危険なのか十分解っています。でも、そうしたいんです」
抱えられた腕に力が入った。

「困ったものだ。だが、俺達が望む事は簡単に成しえるものではない。辿りつく前に、誰かが死ぬかも知れぬ・・・俺が死ぬ事になるかも知れぬ」

俯いてたいた和奈の顔が上を向く。

「おまえが死ぬ事になるかも知れぬのだ。柱に括りつけてでも置いておきたいが、それではおまえの心を殺すことになる。さてはて、俺はどうすべきなのだろうな」

胸元を握り、小刻みに震えているその手を武市の手が優しく包んだ。

「二世も三世も添おうと言わぬ、この世で添えさえすればいい」

「桂木さん・・・」

「そろそろ、俺の名前も呼んで欲しいのだがな」

和奈の唇に、武市はそっと自分の唇を重ねた。

「今宵はここで我慢してやる」

固まったままの和奈の耳元で、武市は優しくそう呟いた。

「さあ、明日も歩き詰めになるんだ、体を休ませておけ」

並べられた布団の一つに潜り込んだが、武市の息遣いが聞こえ、眠れぬ夜になってしまった。

其之一 刹那

赤間関から門司^{もじ}へ渡った和奈達は、小倉から大宰府路へ入り、筑前内野宿で泊した後、大宰府へと入った。

筑紫大宰の名で日本書紀に現われる。大和朝廷は九州北部の支配を強めるため、官家（各地からの食料を保管する）を置く。中国や朝鮮との交流が始まると、百済との交易がより盛んとなり、国土を守る重要な役割を担う要地としての役割を担うことになる。

唐津、新羅と百済の戦争に於いて、敗北した百済に加勢した大和朝廷は大敗を記す。

百済に組した事で、両国が軍を送り込んでくるのではないかと危機感を抱いた朝廷は、官家^{みやけ}を五キロほど奥地へ移動させ、那の津の海に「水城の堤防」を築いた。

長州だけでなく、海路上異国船の往来がある薩摩や、大宰府を抱える筑前が異国に対して警戒心を持つのは、南西諸国古来の歴史ゆえとも言える。

龍馬が逗留している宿へ着くと、どてらを着込んだ龍馬が胡坐^{あぐら}をかいて、二人を出迎えた。

「まっこと、久しぶりやき。和太郎も元気にしよったか？ おんしは・・・相変わらず無愛想な男で安心したぜよ」

一気に喋った龍馬は、はやく入れと二人を促す。

「龍馬さんも元氣そうですね」

「ちつくと風邪をひいたみたいけど、この通り五体満足ちや」

「それでどてらを着込んで、達磨みたいに座っているのか」

確かに突けばコロンと倒れてしまいそうなほど、体を丸くしている。

「近寄るなよ和太郎。馬鹿も一緒にうつってもらっては手に負えぬ

からな」

いつものように、口の中でぶつぶつ言いながら口を尖らせる。

「桂さんの命で共に来た者がいるので呼んでくる。さっさと用事を済ませてしまおうぞ、龍馬」

「おんしはせっかちもんだ。久々の再会を、はやちつくと堪能できんが」

「堪能して、何か得があるならばそうもする」

そう言うのと、別の部屋で待たせいる佐世と所を呼びに立って行った。

「なんちゃーじゃ変わっちゃーせんな、あいつは。どうだ、厳しいのも相変わらずか？ 苛められちゃーせんじやろうのう」

「厳しいのはいつもの事ですし、苛められるのは、ないと思います」
「ほうかほうか。じゃったらいらん心配をしのうていいな」

丸めた体を和奈の方へ向け、指で鼻の下をこする。

「高杉くんの挙兵に参加したと聞いたがよ」

「はい」

「まっこと、おんしはなき、ほがな危険な所へ飛び込んで行くんだ？」

胡坐のまま擦り寄ってくると、よしよしと和奈の頭を撫でる。

「・・・何かというと直ぐ頭を撫でるんだから。子供じゃないんですよ？」

「阿呆ゆうがやない。これは特権ぜよ」

「なんのだ!？」

所と佐世を後ろに連れた武市が、龍馬を睨みながら部屋へ入って来る。

「失礼します」

遠路を来てくれた二人に礼を述べた龍馬は、才谷を名乗った。

「私は長州干城隊軍艦の佐世と申します」

「同じく遊撃軍軍艦の所と申します」

「早速だが、桂さんから書簡を預かっているゆえ、先に渡しておく」

書簡を受け取り、中を確認した龍馬は悄然とした表情を浮かべた。

「桂さんの懸念はなかえか拭えないようじゃの」

「一度肩透かしをくらっている相手だ、当然だろう」

「才谷さん。今回の和議については桂さんだけでなく、我々も一抹の不安を抱いているのが本音です。先日長府にて、大目付役の春山と石川殿と薩摩の方と席を共にし、会談への方向性は一致していると確認しましたが、それは藩の上方での一致ではない。下方がいくら和解を考えていたところで、肝心な人間が動かなければ無理な話しであります」

そう言う佐世だけでなく、長州藩の多くが同意見であるのは武市も承知している。ゆえに、中岡の根回しと、龍馬の根回しが上手く交差しないと、更に両国の亀裂が深まる危険性も孕む和議となる。

「西郷さんが実際に桂さんと膝を交えない事には、我々としても安心できるものではないのです」

「ほりゃあ、よう解っちゅうぜよ。両藩のこれまでを考えると、そんなに事が運ぶとは考えちゃーせん。じゃが、足踏みしちゅうだけでは何も始まらん。やき、わしは頭と足を使っちゅう」

「大久保さんにも再度頼みの手紙は出しておいたが、西郷さん本人が腰を上げない事には、ここで論議を重ねても仕方ないと言える」

「桂木さん、大久保さんとも知り合いなんですか？」

凄腕の剣客が現われたと思いきや、桂のお墨付きで遠近附士として召抱えられ、薩摩との会談の橋渡し役を務めている。加えて大久保と顔見知りであると聞かされては、佐世も桂木に対して疑念を抱かざるを得なかった。

「仲が良い、とは言えぬがな」

「宗次郎よりも、和太郎の方が気に入られちゅうな」

「えっ！ あれって、気に入られているんですか！？」

「村木もなのか・・・二人は一体何者なんだ？」

佐世はそう聞いたが、答えが返ってくるとは考えなかったので、横で呆けている所を肘で小突いてみる。

「俺に聞かれてもなあ」

「桂さんと高杉さんが京におった時やき、なんちゃあ不思議じゃないがよ」

「梅太郎、世間話はそこまでに。肝心の話しが進まないだろうが」
また口を尖らせてぶつぶつ文句を言う龍馬を諫め、桂から指定された日を告げた。

「宗次郎はすつと怒るでいかん。ほいたら閏五月二十一日に、西郷さんを長府に連れて来るよう清之助に伝えるき、桂さんにもそう伝えようせ」

「承知しました。では我らはこれにて」

龍馬が一日ほどゆっくりして行けば言いと勧めたが、すぐ戻るよう言われて居るからと、佐世と所萩に戻って行ってしまった。

「くっしゅん！」

ずるっ、と鼻の下を指で擦る龍馬。

「昨日裸で寝たのがいかなかったか」

「阿呆が・・・」

閏五月一日。

風邪気味ながら、なんとか五公卿や児玉へ挨拶に回り終えた龍馬と共に、和奈と武市は長府へと戻った。

「真剣に風邪だな」

「ですね」

だが長府へ到着するなり、無理が祟ったのか龍馬は熱を出し寝込んでしまっていた。

「桂さん達が到着するまでに、何としてでも治せ」

「うつせば治りも早いとゆうろう」

「誰にだ」

睨まれて不服そうに布団に潜り込み、その日から丸二日、龍馬は熱にうなされ、布団から出れなくなってしまうた。

三日目の朝になり、漸く熱が下がった龍馬は、茶だ、めしだと駄々を捏ねていた龍馬の頭に拳が落ちた。

「おんし、今、本気で殴ったろう！」

「無論。熱だとは言え、我儘を並べてたんだ、斬られなかっただけましだと思え」

そう凄む武市から、横で苦笑する和奈に悲しそうに視線を移す。

「貴様、懲りないのか」

「阿呆ゆうがやない！　のう和太郎、わしは病人じゃきのう？」

「はあ、一応は。でも、それだけ元気ならもう大丈夫ですよね」
にっこりと笑いながら、額に当てていた布を取り、桶に浸す。

「おう。まっこと、和太郎は優しい子じゃ。それに引き換え、この男は病人の扱いを心得ておらんぜよ」

「っ……今夜から気をつけて寝ろ。朝になって首と胴体が離れていても化けて出るな」

「おんし、それ真剣に言うちゅうやろ！」

「龍馬さん、まだ寝てないと……」

「俺はいつでも真剣だ」

「受けて立とうやか！」

布団を跳ね除け、枕元に置いてあった鞆に手を伸ばす。

「ったくもう！　また熱出たらどうするんですか！？　暴れないで大人しく寝て下さい！　桂木さんも喧嘩吹っかけずに隣の部屋へ行
く！」

とうとう和奈が切れてしまった。

怒鳴られた武市は阿然とし、龍馬もすごすごと布団の中に隠れる。

「……解った」

そう言い立ち上がった武市は、ぴしゃりと障子を閉めて出て行ってしまった。

「あいつに怒鳴るのは、大久保さんと桂さんだけと思うておったが」
布団から顔だけ出した龍馬が笑う。

「あ……勢いでつい……うわあ、どうしよう、やばいやば過ぎ

る」

後悔先に立たずとはこう言う事を言うのだ。

「機嫌を損ねた武市は手に負えんき」

龍馬の言葉通り、部屋に戻った武市は夕食も取らず、翌日の朝になっても部屋から出て来ず、和奈が困るっているのを見かねた龍馬が謝りに行き、漸く部屋から出てきたのである。

「どくれるのも大概にせんといかんぜよ」

「だれが拗ねた？」

また言い合いが始まりそうな雰囲気、和奈は困るしかない。

「失礼するが、いいかい？」

天使の声と、急いで立ち上がった和奈は障子を開けに駆け寄った。

「小五郎さん！」

半泣きに近い顔で出迎えられた桂は、大方の予想をつけたのか、きよっとんとした表情から真顔になって二人を見下ろした。

「君達、仲がいいのは結構だが、和太郎を困らせるのは止めて頂きたい」

頼み事や説教の場で桂が笑う時は、反論や抵抗を拒否させる気迫を放つ。半ば立ち上がりかけていた武市は座を正し、龍馬は頭を掻きながら席へ戻るしかなかった。

「いや、まっこと恥ずかしゅうていかん」

「面目ない。この馬鹿が何かと絡んでくるもので・・・大人気なかった」

「反省しているのなら結構。和太郎、すまないが僕の食事も頼んできてくれるかな？」

「はい！」

場が収まって安心した和奈は、足取りも軽く廊下へ消えて行った。

「桂さんだけで？」

「晋作は後から遅れて来る。あれも駄々を捏ねてくれたが、色々と片付ける事もあったので先に出て来た」

「新之助に、桂さんの護衛をしろと申しつけて出たのだが」

「なんじゃ、あいつも長州に来とったがか？」

「申し訳ないが、岩村くんには隊士達の稽古をお願いして来た」

「・・・無謀ぜよ桂さん」

「いや。荒さは目立つが、良い師に仕込まれただけはある。問題も不便もないよ」

「恐縮です」

白石という商人を紹介したいと、桂は食事を済ませた後、和奈達を連れ竹崎へ出向いた。

「お久しぶりです白石さん」

「これは桂様。ご無沙汰しております。ささ、どうぞ皆様も遠慮なく中へお入り下さい」

来訪を受けた白石は、中岡を出迎えた時のように満面に笑みを浮かべ奥へと入って行く。

「あなた様が坂本様ですか。お噂は色々と耳にしております」

「どんな噂か聞きたいね」

楽しそうな桂、眉間を狭める武市、うきうきとした表情の龍馬に、

和奈は必至で笑いを堪えなくてはならなかった。

「今晚はいかがなさいます？」

「近くに宿をとっておりますから、ご心配には及びません」

「それはいけません。折角御出で下さったというのに何の持て成しもできぬのでは・・・逗留先をここに変えては如何でしょうか？」

面白い者達が入りしますゆえ、退屈はしないと思います」

「この人数では返ってご迷惑と言うものです」

断りを入れる桂に、宿には連絡を入れておくのでと言い、さっさと出で行ってしまった。

「ある意味、龍馬と同じだな」

「こうと決めたら、他人の意見を聞かないところは特に」

「酷い言われ方やか」

白石の言ったとおり、程なくして大宰府に居た土方が姿を見せた。

「下から話しを推進めてくれるのは有り難い」

土方は、先日中岡達とこの白石邸にて和解につて談義した事を伝えると、龍馬は長崎や薩摩にて話しを進める手筈だから、長州との架け橋になればと土方に話した。

「海援隊？」

「おう。表向きは貿易会社じゃが、薩長を繋ぐ組織と考えてくれたら良か。ちょうど白石さんという心強いお人も出来たき、わしも張り合いが出るちゅうもんぜよ」

「君の腹案するところさっぱり解らないよ」

「なに。商売絡みで両藩の間を行き来する方が、話しも通りやすいと考えたんぜよ」

桂は海援隊の創設を疑問に思った。確かに商売での交流は、ただ話しを持って行くよりは取っ掛かりが出来るという点で納得するところだが、和議のために会社を組織する必要性は感じられなかったのだ。

閏五月九日、家茂は勅書を見せず、紀州藩主以下十六藩の兵約六万を率いて、西下を開始した事に憤った大久保は、すぐさま鹿児島へと伝令を走らせた。

中岡と共に鹿児島から佐賀関経由で長府へと向かっていた西郷は、船上の人となる前、大久保からこの報せ受取っていた。

「えええっ!？」

この何ヶ月の間、何度そう叫んだことだろうか。

出航後、西郷から長府へは向かわず、大坂へ行くと告げられた中岡は、その理由を尋ねて顔色を青くした。

「六万・・・」

「長州との対話も必要と思う。が、今はそれよか、幕府を止めなくてはならん」

二度目の長州征伐。先の征伐で、長州が幕府への恭順を示したも

関わらず、江戸から兵が出た事に西郷は怒りを覚えていた。

「だったら尚の事、長州との和解を得て、足回りを固める方が先決ではありませんか!？」

「今は征伐を止むう方が先だ。信服しての同行誠に忝いが急を要すう。一蔵も駆け回っとうだろうが、長府へ寄つとる時間はない。朝議が再征伐に傾く前に阻止せねばならぬ」

長州征伐を止めるからとは言え、西郷が来ない事を知った桂は激怒するだろう。龍馬が一緒だとしても、二度目の肩透かしに桂がどう出るか解ったものではない。必死に説き伏せようと試みたが、西郷が決定を覆す事はなかった。

佐賀関に寄港して船を下りた中岡は、陰鬱としたまま一宿すると、船を乗り継ぎ、二日後、長府へと着いた。

「元気ないですね」

迎えに来ていた和奈と共に、桂達の逗留する白石宅へと向かうその足は重い。

「俺、今度こそ本当に切腹させられるかも」

「切腹!？」

只ならぬ言葉に驚きながら、意気消沈の中岡になぜだと尋ねた。

「西郷さんが居ないんじゃ、切腹しかないよ」

「なんで西郷さんが居ないと、切腹になるんですか？」

はぁ、と俯いて前を歩く中岡から、大きなため息が聞こえた。

「和太郎は気楽でいいなあ」

暗い顔をし、和奈と共に中岡が入って来ると、西郷が居ない状況に桂は肩を落とした。

「申し訳ありません!」

土下座した中岡から事の次第を聞いた高杉は、おまえが謝る事ではない、と言ったが、桂は収まりが着けず立ち上がった。

「最初からこうなるのではないかと思って居たんだ。僕はこれで帰る!」

桂の劍幕に、高杉も慌ててその袖を掴む。

「俺は今日着いたばかりなんだぞ！」

「おまえは休んでおればいいだろう！」

龍馬と武市の言い争いより、怒った桂を止めるのはさすがに無理と、和奈も止めに入れずに居る。

「ちつくと待つとうせ桂さん。なにも西郷さんは和解が嫌で来なかった訳じゃないき。そこんとこをくよくよく考えてほしいやか」

「坂本さんの言う通りだろうが、少し落ち着け！」

「朝議が傾き、幕兵の進軍が始まれば和解どころの話ではない」

高杉と武市からも諫められ、仕方なくその場に座り直す。

「長州旗頭が二人も来ていると、西郷さんもうよう解ちゅうぜよ。

それを後にしてまで大坂へ行ったゆうのは、それだけ事態が悪いちゆう事やき」

「そんな事くらい僕も判っている」

「俺としても、このまま和議を進める気はないぞ？」

あら、つと高杉の発言に龍馬が目を向く。

「西郷さんが執った行動の理由は解った。しかしな、それで、そうですかと笑い返す事などできん。何かしら手土産一つでも持ってきてくれ」

手土産？ と一同の視線が高杉に集まる。

「それはいい。たまには良い事を言うじゃないか晋作」

何か思いついた桂は、憤怒の形相から一転して笑顔を浮かべると、龍馬に向かって口を開いた。

「恭順を示したとは言え、逆賊という立場は変わってはいない。その証拠に、幕府は我々の武器弾薬の取引について国内外に対し禁止令を出したままだ。尊王攘夷を掲げる長州が、大人しくその旗を降ろすと考えていない証拠だよ」

「小五郎の言う通りでな。白石さんを通して武器を仕入れたくても出来ないのが現状だ。そこでだ。海援隊とかの初仕事に、動いてみる気はないか？」

「つまり、武器を手土産にと、そう言うのか？」

「どう取って頂いても結構」

ふむ。と龍馬は顎に手をやる。

「じゃが、和議を蹴ったちゅうだけでは、薩摩に武器を手土産させるのはずるうない。薩摩にも何かしらの手土産は必要ぜよ」

「なら、この話しはこれまでに。中岡くんにも切腹してもらって、事を済ませるまでだ」

「やっぱりそうだった」

ほらな、と苦笑いを和奈に見せる。

「はやちつくと話しを聞いとおせ。まっこときおうでいかん。何もできんとは言うちゃあせんぜよ」

「なら、何をすると言うんだ？」

「今、薩摩は兵糧米の調達に苦慮しちゅうぜよ。薩摩名義で武器を調達させる代わりに、長州は薩摩へ米を回送してやればええがよ。白石さんにも一肌脱いでもらう事にはなるが、橋渡しはわしら海援隊がするき。ほき手を打ってはくれやーせんか？」

桂と顔を見合わせ、口元に笑いを浮かべた高杉は、手を龍馬に向けてとその手の平に反対の指二本を当てた。

「仕入れるのは、銃七千。それでどうだ」

それだけの銃が手に入るのならば、全ての隊に回すことが出来る。「七千と来たがか」

「江戸から来る幕兵の数を考えたら、多い数とは言えん」

西郷が大坂へ戻り朝議に掛け合っても、征伐が無くなるという保証はないための策、高杉はそう言いたいのだ。

「承知したぜよ」

橋渡しをする事で、中岡が切腹せずに済むのなら、仕方がないと笑った。

閏五月二十三日。

大坂へ着いた西郷は、兵を駐屯させるとその足で京都へと入った。家茂が朝廷に参内し長州再征を奏上したのには、長州に対する処分が甘いと、幕府内から声が出始めていたからである。未だ降伏条件の全てを実施しておらず、幕府に対して恭順を示すだけで、なんら事は進んでいないとの批判も相次いだ。

六万の兵を上洛させたのは、朝廷に対し武力で持って、二度目の征伐地勅許を得ようという幕府の思惑があつての事だった。しかし、京と大坂に幕兵が滞在する事となつても、朝廷は勅許を下さなかつた。

幕軍を目の前にして勅許を下さないのは、再征伐は断固断るべしと西郷から伝えられた大久保が、朝廷への裏工作に奔走していたからだった。

ここで勅許が下れば、再び幕軍は長州を目指すだろう。大久保も、今回の征伐に対して幕府に義を見出しではない。幕臣達が身の保身のため、幕府政権の回復確保に走っているとしか受取れなかったのだ。

和奈は八ヶ月ぶりに京の土を踏んでいた。

「なんか、懐かしいです」

昭和から江戸時代に来てしまつて、もう一年になろうとしている。

「あまりきよろきよろするな。新撰組に目を留められたらどうする」

「おんしはこうもつと、柔らかい頭にならんがか？」

肩を窄めて和奈と顔を合わせて、のう、と呟く。

「五月蠅い」

武市の手配書は無くなっているし、別人の様になっているのだからそう心配するなと龍馬は言う。

「だからおまえは馬鹿だと言うんだ。顔を見知った奴ならば、例えば片目であつてもすぐに判る」

「そんな時はそんな時ぜよ。おんしは和太郎を抱えて逃げればいい」

何を言つても堂々巡りになると解っていたので、武市はそれ以上

言い返さずにおいた。

「岩村さん、じっと待っててくれますかね」

京に武市が向かったと知れば、岡田の事だ、長州を無断で飛び出して来かねない。そうなれば、藩籍を貰っている藩士の身分では、脱藩罪に問われ獄送りとなる。

「それならなんちゃーがやない。側にゃ桂さんと高杉くんが居てるんやき、動きとうても動けんぜよ」

二本松藩邸が近くなってから、和菓子を買に行きたいと和奈は二人に手を合わせて頼んだ。

「大久保さんへの土産か？」

「はい。いつもお世話になりっぱなしだし、お茶には甘いものが必要だと思うんです」

拳を握り締め、うんうんと頷く。

「・・・・・・」

無言で拒否を示す武市を見て、龍馬は苦笑する。

「顔を知られちゃうとゆうたち、まだわしらとの繋がりまで知られちゃーせんからなんちゃーがやないろう。めっそう縄をきつくし過ぎると、嫌われるぜよ」

「だれが縄を絞めている」

「道の真ん中で堂々と喧嘩する方が危ないです」

うっ、と二人は辺りを見回す。

「先に行っている」

お互いに、お前が悪いと言いながら、二人は藩邸へと歩いて行った。

「仲がいいんだか、悪いんだか」

二人を見送り、滞在中に用事で出かけた茶屋へと足を向ける。その横に並んで甘味屋が在ったのを覚えていたのだ。

「すいません」

暖簾に顔を突っ込んで、中に居る女中に声を掛けると、四人分の団子を持ち帰りたいと頼む。

「少しお待ちになっておくれやす」

外に戻り、店先に置かれている椅子へと腰を下す。

賑わいは以前より少なくなっていたが、やはり京の中心だけあって人通りは多かった。

「あれ？ 君は確か」

どこかで聞いた声だと、横へ顔を向ける。

「！」

その顔も、全身に感じた剣気も忘れた事はない。

「ああ、やっぱり。あの時の」

沖田総司が目の前で笑っていた。

一瞬氷を踏んだ様に足元からぞくぞくと背筋に冷たいものが走る。

「へえ、君も甘いもの好きなんだ」

「いえ、届け物にと。確か、沖田さん、でしたよね？」

「おや、覚えてくれていたんだ。ああ、そうか。あんな事があったんじゃない、忘れたくても忘れられないよね」

沖田は出て来た女中に団子二皿を注文する。

「一人じゃつまらないし、一緒に食べよう」

断りたいのに、理由が思いつかない。

「君、薩摩藩の人だよね」

「え・・・」

なぜ知っているのだろうと考え、あの時後をつけられたのだと気付く。

「一応それも仕事だからね」

心を見透かしたように沖田が言う。

「おまっとうさん」

和奈の頼んだ団子よりも早く、女中は沖田の注文した団子が持つて来た。

（早く団子をくれないかな・・・）

本当に困る状態だった。

「遠慮しないでいいよ、僕のおごりだし」

諦めた和奈は席に座ると、差し出された団子に手を伸ばした。

「剣が変わっているね？」

どきっ、と胸がなる。

「頂き物です。前に使っていた剣は・・・ぼろぼろになってしまったので」

「まさか、稽古で真剣を？」

「いえ！」

「ふーん。じゃあ、人を斬ったのか」

答えられなかった。

「あ、ごめん。なんか質問ばかりになってしまったね。女子相手なら、もっと洒落た言葉が出るんだけどなあ」

「女子・・・」

「と言っても、僕は興味ないんだけど」

「え？ 女子にですか？」

「どうも苦手なんだ、女子の扱いは。剣なら慣れているから不自由しないけど」

沖田は新撰組で一番の腕を持つと桂は言っていた。

「ん？ もしかして」

ここで武市らと関わりが有ると知られることはできない。もし斬り合う事になってしまったとしても、到底自分では齒が立たないのは解っている。

言葉が上手く出て来なかった。

「・・・」

「僕、まずいこと言った？」

「と、とんでもないです。ただ・・・その」

「ああ、君もか」

「僕も？」

「新撰組に居るとどうしても嫌われるんだよ。とくにほら、僕は沖田だし」

「嫌いというか、そんなんじゃないです」

早くここから逃げたいだけですとは、言えなかった。

「お侍さま。えろうお待たせして、申し訳おまへん」

やっと女中が団子を持って来てくれた。

「あの、今日はご馳走さまでした」

立ち上がり頭を下げて礼を言う和奈に、沖田はどう致しましてと笑顔で返した。

「沖田さん！」

横を向いたその目に、新撰組の羽織を来た赤井が映る。

赤井の視線も、沖田から和奈へと向けられた。

「・・・・・・・・」

「どうした？」

はっ、と視線を戻す赤井。

「土方さんが至急呼んで来いと。会津藩から使いが来て、土方さんも近藤さんも大慌てになってるんです」

「解った、すぐ戻る。えっと・・・そう、村木くんだったよね？」

「あ、はい」

「付き合ってくれてありがとう」

「こちらこそ、ありがとうございました」

沖田が駆け出すとその後を追いかけるように駆け出し、一度も振り返る事なく赤井は走り去って行った。

手に団子をぶらりと持ち、和奈は心ここに在らずと藩邸にやって来た。

「何か、あったのか？」

部屋に入って来ても、ただぼうっとしているだけで返事もしない。

「小僧、久しぶりだというのに挨拶はないのか？」

部屋の奥の上座から大久保がそう言うが、反応はない。

「おい、こら」

武市の手が軽く頬を叩いた。

「おんし、なんちゃーじゃ殴らのうてもかまんわんじゃろ」

頬に手を当てて、ようやく和奈は顔を上げた。

「赤井くんが居たんです。新撰組の・・・羽織を着て」

「なに？」

龍馬が膝を叩いた。

「こりゃあー参ったぜよ。桂さんから聞いてなかったがか？」

「そう言う坂本くんも、話してなかったのか？」

「知っていたのか龍馬？ 大久保さんも？」

「ああ」

「すまん！」

ぺこりと頭を下げて、赤井が新撰組へ行った日の事を語った。

「私にも止める理由はなかったのな」

「・・・・・・沖田さんにも、会いました」

「！」

「！？」

三人はどういう事かと訪ねる。

「甘味屋で会ったんです。そこに赤井くんが来て・・・・・・なんで新撰組なんか・・・・」

「その理由を問うて、おまえはどうすると言う」

武市の声は冷たかった。

「どうする？ どうするって、新撰組ですよ？ 僕達と・・・・・・敵になるんですよね？ なんで、そんな事になったんですか！？」

赤井は自分のせいでここに来てしまった。その赤井が敵として今、新撰組に居る。どういう理由があったとしても、このまま放っておく訳にはいかないように思えた。

「愚か者めが」

「大久保さん」

「坂本くんは黙っている。いいか小僧。己の意志で決めた事を、他人のおまえが口を出すものではない。それこそいらぬ世話と思え。例え新撰組から連れ出そうとおまえ一人が躍起になったところで、相手にその意志がなければ無駄な努力だと知れ」

「敵となると解った上で出て行っただろう。おまえはそれを受け入れなければならん」

「・・・だけど、放っておけないです!」

「武市くん、もう少しこいつの驕をちゃんとしておきたまえ。これではこやつが命が幾つあっても足りぬぞ」

もう泣き出さんばかりに肩を震わせている和奈を、武市は部屋から連れ出して行っただ。

「まったく!」

「そう怒らきやっとおせ。あの子は自分のせいと思うちゅうんぜよ」
「別にあやつが何かしたのではないだろう? 勝手に出て行っただのはあの男ではないか」

大久保にも和奈が桂の親類などてばなく、別の時代から来たと伝えておくべきか迷った。

だが未来から来たと知れば、政にかかわる大久保がこれから起こる事を知る二人を知って巻き込む可能性もある。そう思う反面、今後自分達の身に起こった時に和奈を任せられるのも大久保しかいないと思うのだ。伝えておく方が得策に思えたが、桂の意見を聞いていない。が、聞いたとて反対されるのは必至だろう。

「ふん! 含むところが有る様だが?」

大久保に下手な言い訳は出来ない。

「まっこと、わしも未だに信じられんのじゃが。和太郎は・・・未来から来たんぜよ」

「・・・? 今、何と言った?」

大久保の気が抜けたこんな顔が見れるのは、この時一度限りだろうと龍馬は苦笑する。

「未来から、と言ったぜよ」

「坂本くん。とうとうおかしくなったか?」

「いや、正気ちや」

そうして桂が和奈を見つけて来た時の話しをした。

「・・・桂くんは、それを信じたのか?」

あの日、桂に龍馬がした問いだった。

「どうじゃろう。同じ事を聞いたが、答えは貰っちゃーせんよ」

「まさかあの男もなのか？ と、聞くまでもないな」

「こん事は、桂さん高杉くんとわし以外にゃ知らん。武市にすら教えておらん。大久保さんやき話した。たがこればあは覚えておいて欲しいぜよ。もし、未来の事を聞こうかとしたり、あの子を利用してようなどと考えようもんなら、わしもそんな時は黙ってはおらんぜよ」
「ほう。この私を斬るか？」

カチャリ。

龍馬が鞘に手を掛ける。

「本気、か。それはそれで面白い事になりそうだがやめておけ。この私を見縊^{みぐひ}ってもらっては困るぞ。そんな器量の小さい男と思われていたと言うのも心外だ。どこぞの官僚風情ならいざ知らず、相手は馬鹿娘ではないか。そんな奴が持ち得る情報など、それ程重要かつ膨大ではあるまい」

「失礼仕りました」

鞘から手を放し、土下座して後もう一度念を押す。

「こん事はどうか、わしと大久保さんの内に納めて頂きたい。武市や和太郎にも言わんでほしいやか。勿論、西郷さんにもじゃ」

「心得た、と言っておこう。それより、赤井とか言う男の方はどうなのだ？」

「ここを出る時、なんちゃーじゃ語らんと約束しちゅうぜよ」

「呆れた男だ。人を信用し過ぎては、何れ寝首を掻かれる事になるぞ」

「よう解っちゅうがよ」

部屋を連れ出したはいいものの、座り込んで庭にある池を見つめたまま、いくら声を掛けても返事もしない和奈に、武市は弱り果てていた。

「いい加減、こっちを見てくれないか？」

すくつと、いきなり立ち上がった和奈に、思わず体を反らす。

「桂木さんと大久保さんの言う事、解ります」

「あ、ああ」

「自分で選んだんです。僕と同じく」

「そうだな」

「なら、仕方ないです・・・よね」

少し悲しそうに目を細める。

「そう言うことだ」

「それが赤井くんの志と言うのなら、僕も僕の志を貫く」
ふっ、と笑い和奈の頬に手を当てる。

「叩いてすまなかった」

「いえ、僕が悪いんですから」

「おまえは一人ではない。この俺が居る事を忘れるな？」

「はい」

では戻るぞ、と部屋の方へと戻って行く。

そこには真面目に見詰め合っている二人が居た。

「男同士で見詰め合うのは、如何かと思うが」

「お。どうだ、ちくたあ落ち着いたか？」

「ああ。大久保さん、お騒がせ致し申し訳ありません」

「納得したか、小僧？」

こりと頷く和奈に、早く団子を出せと大久保は笑った。

「いらん事に時間をかけてしまったな。本題に入るぞ。桂木くんまで来たと言う事は、西郷の件なのだろう？」

「大久保さんは、まだ和解を行う意志はありますか？」

「無論だ。吉之助が長府へ行かずに帰って来た時は驚いたが、場合が場合なだけに止むを得まいと思っている。長州征伐は私も望む所ではない。吉之助からも、再征伐は断固として断れと伝言を受けている」

「長州も和解を進める意向です」

「それは良かった。と、笑って済むとは思えぬが？」

含み笑いを浮かべ、ちらりと龍馬を見る。

「怖いお人やき」

長州が欲っしている銃七千挺を薩摩名義で購入してもらう事、対して薩摩には不足している米を長州から回す事を条件で、今回の件を納めたいと龍馬は伝えた。

「そう来たか。が、損のない申し出ではある。いいだろう、その話に乗ってやる。銃七千三百挺だ。そう伝えてくれ桂木くん。銃の購入先は私が手配しておく。ついでに、海援隊には軍艦をくれてやるから有り難く思え」

「軍艦!？」

三人は揃って声を上げた。

「物を運ぶ物があるだろう? その後は坂本くんが好きに使いたまえ」

「太っ腹すぎるぜよ」

これにより、海援隊は初仕事を軍艦で行う事になり、大久保が出兵を拒否する意向だと長州に告げるよう託された。

そうして大久保は西郷に宛て【至当の筋を得、天下万人御尤もと存じ奉り候てこそ、勅命と申すべく候得ば、非義勅命は勅命に有らず候故、奉るべからず所以に御坐候】との書簡を送った。

適正な筋を得て、世の中の人が道理に適うと納得してこそ勅命と言うのであり、その道理から外れた勅命は勅命ではないのだから、従う必要はないと念押しした形となった。

龍馬達に四条通りに在る錦小路藩邸での逗留を許可した大久保は、自室へと戻って来た。

「居るか? 新兵衛」

「これに」

障子の向こうで声が答えた。

「新撰組に居る赤井修吾郎、こやつを消せ」

「御意」

大久保は、未来の情報が新撰組に渡るのを懸念し、龍馬には内密で命を下した。

其之二 陸援隊

「天下の大患は、其の大患ため所以を知らざるに在り」

吉田松陰

潜伏先の寺田屋に居た中岡は、同士で土佐藩谷干城の来訪を受けて、加茂川を越えた百万遍横にある土佐藩邸へとやって来ていた。

座敷に通されると、その奥に座る男に頭を下げた。

「佐幕派どもは出払わせているから、気兼ねすることはないよ中岡くん。さあ座りたまえ」

ぞわっ、と背筋に嫌なものが走り、来たのは間違いだったかと後悔する。

「何事にて、俺を呼んだんですか？」

「いきなり本題に入るのかい？ まあ、それも致し方ないか」

低姿勢のまま、いつでも剣を抜く体勢を保ち男の一挙一動に気を配る。

「京において君達が潜伏の身で、武力倒幕をせんと動いているのは私も承知している」

その言葉につい鞆に手が伸びてしまう。

「待て待て。話しは最後まで聞くものだ。本当に君も武市も気が短くていけな・・・ああ、武市は、もう居ないんだったね」

哀愁を漂わせた男の顔が、一瞬曇に落とされた。

「あ奴の死を見てないから未だ信じられないんだよ。後藤の策略がなければ、止めていたのにと今でも悔やまれる」

「乾さん、手短に願えませんか」

一刻でも早くこの場から立ち去りたいと、想いに耽りかけた男に言い放つ。

「はあゝっ。一言で済ませるのは容易いが、今の君では反論しか思いつかないだろう？　少しは聞く耳を持ちたまえ中岡くん」

乾退助。

土佐藩主山内容堂の側近を経て大監察であり、そしてこの京の土佐藩邸を取り仕切っている男だ。また、江戸において騎兵術や蘭式兵学も学んでおり、武市が発足した土佐勤王党に理解を示していた一人でもある。

乾は武市らの処分を知らされず、その死を京で聞いたらしい。そして武市達を捕縛させたのが後藤であり、山内を説得し土佐勤王党に強硬な弾圧を行ったのだ。

それに怒りを感じた乾は、公武合体を退け、武力倒幕の意志を固めたと語った。

「乾さんが倒幕を？　しかし、土佐藩は幕府寄りを崩していません。京での立場を考えると、その言葉を素直に信じられないのが本音です」

尊王寄りの考えを持つ乾が、公武合体派の後藤と対立してるのは知っていた。武市の死がきっかけらしいが、倒幕へと思想を一気に変えてしまうとは考え難い事だった。

「山内公を倒幕に転換させる心積もりだが、後藤くんが何かと邪魔をして来てねえ。土佐勤王党の事もあるし、なかなか表立って動くことができないんだ。せいぜい、こうして愚か者の裏を搔くくらいしか今は手がないんだよ」

「弾圧が行われた時、なぜ乾さんは後藤の好きにさせたのですか！？」

「言い訳はすまい。あの時点では、動けるだけの枝を張り切れていなかったんだ」

済んでしまった事だ、なんとも理由をつけて言い逃れ出来る。

「藩内の動きを探り、少しづつ山内公へ働きかけ始めようとした矢

先、幕府からの出兵命令が届いた。山内公は拒否も参加も即座には出さなかったが、後藤くんの推しが強い。いずれ幕府に従う事は必至だね。だが私は出兵について反対意見しか持っていない」

「阻止されると？」

「冗談を言わないでほしいな。後藤くんが山内公の側に居る限り、私の発言はもみ消されてしまうさ。届いていれば、武市をむぎむぎ殺せたりなどするものか」

土佐藩邸において、こんな話しを聞くなどと露ほども思っていなかった。呼び出された時に乾を斬る覚悟を決めてはいたが、すでにその覚悟は和らぎつつある。

「君を呼んだのは他でもない。佐々木高行くんは知っているな？ 彼とは土佐藩を倒幕体勢に傾ける方向で同意している。まず手始めに後藤くんを抑える力が必要だと考えた。だからね、私設部隊を創ろうと言う事になったんだよ」

「私設部隊、ですか？」

佐々木高行と言えば、土佐勤王党と足並みを揃えていた上士で乾と同じ職にある。龍馬との交流は以前からあり、脱藩した当今でもそれは絶えていない。

「武力倒幕を掲げるからには、同じ意志を持つ兵も要るだろう？ 個々の力は弱くても、束ねれば大きな力となるじゃないか。京に潜伏する脱藩士らを集めてそれを君が先導するんだよ。土佐藩に限らず、倒幕で意志を共にする者達全てだ。ただし、隊士にする人間の選別には、細心の注意が必要だよ？」

「俺がですか！？」

いきなり軍を創るからその指導的立場になれと言われて、驚かない方が無理だろう。

「なにを考えて、俺なんですか？」

「君は思慮が深く、様々な状況判断にも長け、武力倒幕派だ。加えて京市中だけでなく色々な所に人脈を広げている」

意味ありげな目線が、当惑しきった自分に向られた。

この男は、長州や薩摩藩との繋がりも恐らく知っているのだろう。「坂本くんも候補に上がったけどね。武力倒幕と言えば二の足を踏む男だ。私達とは意見が異なるんだよ。周りを見渡しても魂のなくなった武士ばかり、そう思案に暮れていたら朗報が舞い込んでね。いや、これは吉報と言うべきだね。先の禁門の変に、君も参加して居たそうじゃないか。もう、佐々木くんに問うまでもなく適任者は君しか居ない。と、言うのが理由なんだよ、解ったかい？」

久坂らと行動を共にしたと知るのであれば、長州にも乾の耳が居る事は間違いない。この男は何時の間に薩摩や長州にまで枝を張り巡らせていたのか。

「資金は心配いらいないよ。我らがすでに用意しているからね」

お膳立ては全て整っている、と言う事らしい。

「部隊の先導と言っても、そう簡単ではありません」

「君とて、このまま個人で動き続けられるとは考えていないだろう？だからなんだよ、中岡くん。私や佐々木で、パタパタと飛びまわる訳にもいかないしね」

「パタパタって・・・」

「万が一、幕府が兵を進軍させた時は、薩長と連携を執れるじゃないか」

やはり、とため息をついた。

「薩長・・・ですか」

「ふふふ。こう見えても私も顔は広いんだよ。禁門の変の出所は君の良く知る人物だから、案ずるなど言っておくね」

長州ではない？ まさか、と脳裏に浮かんだ顔に眉を顰めた。が、それ以外思い当たる人物は出てこない。

「さて。話も纏まった事だし、堅い話はこれくらいで終わろう」

「乾さん！ まだ受けるとは言ってません！」

「おいおい中岡くん。君に断る選択肢は与えられていないんだよ？」

「そこ、重要でしょう！ 最初に言っして下さいよ！」

「出来ない相談なら端からしていないよ。だからそう怒らないでく

れるかな。それとも、この話が嫌だと言うのかい？」

「嫌とは言ってません」

「ほら、決定しているも同然じゃないか。酒で祝杯と行きたい所だが、ここではねえ。まあ、茶の一杯くらいは飲んで行きたまえ」

乾は楽しそうに腰を上げると、廊下の奥に向かって茶を頼んだ。

「いやあ、こんな良い日はないね。本当に良い日だ、そう思わないかい？」

「俺はその部隊の事で夕暮れ気分ですよ」

もう諦めるしかなかった。乾の申し出はたしかに有り難い。断る理由もないのだから、ここは受け入れておくほうが行動の幅が広がるのは確かなのだ。

「嫌だなあ、そんなに重く感じる事はないじゃないか。君を選んだ我らの気持ちも、少しは汲んで欲しいものだね」

話しを聞く事が承諾になるのなら、乾が持ちかける今後の話には十分注意が必要だった。

「失礼いたします」

障子が開くと、淡い緑の着物を纏った女中が入って来た。

「すまないね」

乾にまずお茶を出した女性は、中岡にお辞儀をして目の前に湯のみ茶碗を置いた。

微かだが水仙の香りがした。

「中岡くん？」

細面で小さな口に、白い肌をしている。その頬には薄っすらと紅が差している。

「これは予想外だねえ。とうとう君にも春到来かい？」

「はい・・・は？ えっ!？」

「なかなか目が高いねえ。いい子だよ。気立ても良いし、美人だから私も気に入っているんだけど。ああ、いい事を思い付いたよ中岡くん！ 就任祝いに私が二人の仲を取り持ってあげようじゃないか」

「い、い、乾さん!？」

「なにをそんなに焦る必要があるのやら。若者なんだから青春も謳歌しなければいけないよ？ まさか、一度も女性を相手にした事がないのかい？ それは不憫極まりない。ますますこの話を勧めたくなったよ。君が気に入ったのなら、喜んで祝言まで世話をするよ！」

一人で、いいねいいね、と楽しそうに茶を啜る乾。

「ちよっと！　なんで勝手にそんな所まで進展させるんですか！」

「ああ、これは失礼。少し先を急ぎ過ぎたかな？　野暮をしてすまないね。恋は焦らず急かさず、と言うのを、この私としたことがすっかり忘れていたよ。ならせめて挙動不審にならず、名の一つでも聞いたらどうだい」

「あ、いや、それは」

「お佳代、と申します」

ひたすらうろたえていると、お佳代は手を付いて少し頭を下げ名を口にした。

「先を越されるとは、不甲斐ない男だ」

確かにその通りと、と肩を落とす。

「あの、俺、中岡慎太郎と言います。その、お茶、ありがとうございます」

くすつと笑みを返して頷く仕草に、どきりと胸が鳴る。

「えっと、その」

「私はこれで失礼致します。中岡様、またお越し下さいませ」

お佳代は乾にも一礼すると、部屋を出て行った。

「ほう。お佳代もまんざらではないようだねえ。この私にすら、あんな笑顔は見せないと言うのに。いいねえ青春というのは、なあ中岡くん！」

疲れる人だった。

桂や大久保とはまた一線を引く偏った性格の男。土佐に居る頃からそれは十分承知していたはずなのに、すっかり乾の調子に乗せられてしまった。他の事で手玉に取られるなら我慢もできるが、色恋

沙汰だけは絶対に手を出されたくない男だった。

「それじゃ、話しは進めておくからね。谷くんには先刻、話しをつけてある。二人で色々相談して決めてくれたまえ。ただ、これだけは忘れないでくれ。この創設の意図はあくまで土佐における倒幕派の統一だ」

「はい。それに異論はありません」

乾と話しを終え、藩邸の人間が戻ってくる前に裏口から出ると、二本松藩邸の方にとぼとぼ歩き出す。

お佳代さんかあ。

部隊の事を考えていたのに、いつのまにかお佳代の事を考えてしまっていた。

「い、いかんいかん！」

パシッ！ と顔を叩くと、考えを振り切るように走り出す。

これまで色恋沙汰がなかったとは言わない。龍馬に連れられ、岡場所などへ行く事もあった。だが、倒幕を志としてから、恋に縁遠くなっていたのは嘘ではない。脱藩して潜伏する日々では、出会いなど無いに等しかったし、いつ死ぬか判らない身の上で、恋をするなどできなかった。

「女子の一人も守れのうて、国を守る事はできんぜよ」

龍馬の声が耳に届いて、いつの間にか藩邸に戻って来ていたのだと気付く。

「なんなんですかいきなり！」

やって来たと思ったら真っ直ぐ縁側に行き、どしんと座り込み連続するため息をつき始めてしまったのだ。これを龍馬が見過ごすはずもなかった。

「なんもこうも、入って来たかと思うたら挨拶も上の空じゃし、大きなため息で鳥は逃げちよるし、こりゃあ、好きな人でもできたが

やろと思うぜよ」

「鳥って！ どこに逃げた鳥がいるんですか！？ で、なんで好きな人が居るって判るんですか！」

「ほう、やっぱりそうなんか」

ニタニタと笑う龍馬に、しまったと顔を抑える。まんまと釣られてしまった。

「へえ。意外と中岡さんも隅に置けないんですね」

興味心身と、和奈まで武市の横から寄って来る。

「慎太郎に好きな女子か。で、それはどこの女子なんだ？」

「今日・・・いやいや！ だめだめ！」

両腕を武市の方へ向けて前に突き出し、手をぶんぶん振りながら笑っている和奈を睨む。

「んで、おんし今日は何しに來たがか？」

猿の様に縁側へ座り込み、首を突き出す。

「ああ、そうだった。寺田屋に谷が來たんですよ。用があるからって、土佐藩邸に連れて行かれました」

「なに！？」

からかい気味だった龍馬と武市から笑みが消えた。

「で！？」

部隊の事と、乾と佐々木が協力し倒幕で動き出していると中岡が説明した。

「乾さんが動き出したが。佐々木さんもとなると、これは土佐でも一揉あるかも知れんな」

「だが、倒幕に向いてくれるのは有り難い」

後藤を抑えつけられるのなら、武市にとってその行動は否めるものではないのだろう。

「ええ。乾さんは土佐の倒幕運動を根本に、武力を行使できる部隊を創ると言いました」

「その部隊をおんしに任すため呼んだちゅう事か」

「裏で大久保さんも絡んでいそうなんだけど、はっきり言われた訳

じゃないんで、そこんところは不明なんですけど」

そして長州とも必ず渡りをつけている。

「ほき、引き受けたかえ？」

「だって、話を聞いたらもう拒否権はないって・・・俺としても、断る理由はありませんし、やってみようと思います」

「しかしのう」

武力倒幕には乗り気でないのは、乾に言われるまでもなく良く知っている。武市との口論も何度聞いたことか知れないのだ。

武市の考えは龍馬の語る未来図よりもしっくり馴染んだ。だからこそ門下に入り土佐勤王党にも入ったのだ。今は慎重に事態を見極めていく武市だったが、武力倒幕を掲げている点は今も変わっていない。

「谷も一緒に動きます。乾さんはともかく、佐々木さんも立つと言うならこれはもうやるしかないですよ！」

「そう決めたんなら、わしはなんちゃあ言わん。おんしが武力倒幕に肩入れしちよるのはよう知つとるからのう。で、土佐藩にいた女子の名はなんと言うんだ？」

「お佳代さんです」

「阿呆め、結局喋らされているじゃないか」

武市に言われて気付いた所で、もう後の祭りだった。

「龍馬さんずるい！」

「ほがー怒るな慎太郎！」

龍馬の首を持って、前後に揺さぶり出す。

「本当に、みんな仲がいいですね」

追い回す龍馬が和奈の背後に隠れると、武市も自然と騒ぎに加わって来てしまった。

「僕も会ってみたいなあ、お佳代さん」

龍馬が影に隠れるものだから、和奈に詰め寄る形になってしまっ

ている。

「おい、和太郎！ おまえ殴られたいのか！？」

「遠慮しときます」

いつもの喧騒が、心地よい時間を作っていた。

「その部隊、海援隊と連携させる手もあるのう」

騒ぎまくって疲れた龍馬が座り、そう呟いた。

「でしょう！？ 俺のほうは陸になるから、陸援隊てのはどうですか！？」

一気に元気を取り戻し、意気揚々と言う。

「いいのう！ それは良か名ぜよ。海援隊と陸援隊、水陸両用じゃ」

「そんなに簡単に決めていいのか？」

もう何を注意したところで、盛り上がり出した二人には意味がない。

「いいんじゃないですか、俺に任すって言ったのは乾さんだし。明日、早速行って来ます！」

「お佳代さんにも、会えるしな」

「僕もやっぱり付いて行こうかな」

いつもは端っこに座っている和奈まで、楽しそうに輪に入ってきている。もう観念するしかなかった。

「和太郎は駄目だ」

きつ、と武市が和奈を睨んだ。

「乾さんの事やき、女子みたいなおんしが行ったらめっそ事になり兼ねよらん。そうなたらこの男の事やき、後先考えず殴り込むじやろう？ 死んだもんが出て来たら、吃驚して昇天しかねよらんぜよ」

乾の性格上、絶対に根掘り葉掘り聞くに決まっている。気に入られでもして土佐藩に置くとも言い出したから、武市だけではなく桂まで出て来るだろう。そうなたらもう収拾をつけるどころの騒ぎではなくなってしまう。

「それはやめて下さい。そんな事になったら、陸援隊の話しがなく

なります！」

「ほうじゃの、慎太郎が滅入るじやろうから、やはり和太郎はお留守番ぜよ」

「そんなに、大変な人なんですか？」

「大変と言うより、変人だ。だが、頭は切れる。道理もちゃんと弁え俺とも意見は合う。合うのだが、あのクセだけは理解できん」

武市と乾はどうやら政以外では意見を違える相手らしい。

「乾さんは美術品に目がなくてのう。和紙から家屋に留まらず、人にまで美を求めるクセがあるぜよ。本人は長身で美男子じゃき、集めなくても色んな女が押しかけてくるんじゃが。まあ、眺めるだけやき、いいぜよ」

「あの収集ぐせが良いものか！」

「俺、すつごく不安になってきた・・・」

お佳代さんは、無事で毎日過ごして居るんだろうか。

「心配しのうていいよ。分別は持ちちゅう人やき、辺り構わず手を出したりはしやーせん」

乾がどういう人物であれ、土佐出資で陸援隊が創設されるならば、個人の趣味に文句をつけれない。これで長州と薩摩が和解すれば、土佐への働きかけの足がかりになるのだ。

「乾さん、武市さんが亡くなった時、酷く悲しそうにしました。生きてると、知らせなくていいですか？」

「・・・今は無用だ。いずれ時がきたら知らせる。今は、同士と共に墓に眠る男でいい」

同じ時を駆けた者達は、すでにもうこの世にはいない。和奈に言えた義理ではないと思いつつ、武市はしばし遠い望郷の地に思いを馳せた。

其之三 刺客

勅命がまだ下りていないにも関わらず、新撰組にも長州再征伐への参加命令が下り、近藤は隊士達にその報告を行っていた。

「既に幕府は兵をこの京と大坂に駐屯させている。我々も会津藩と共に参加する事になったので、皆そのつもりで居てくれ」

北集会所の中央に設けられた広間で、近藤は声を大にしてそう告げた。

「今度は退散なんかないだろうな」

先の征伐では京すら出れなかった。永倉の言葉は誰もが抱いている懸念だ。

「本腰を入れて朝廷に勅許を出すよう迫っている。長州が降伏条件を全て実行しない限り、戦争になることは間違いない。皆も命令が下りると思って気を引き締めておいてくれ」

大きな掛け声と共に、隊士の間に活力が戻って行く。

武士を目指し新撰組に入って来た者にとって、治安の取り締まりと、志士の搜索だけの毎日は単調過ぎていた。

「武士のあり方は、戦争に出ると言う事ではないんだがなあ」

部屋に戻った近藤は、目の前に座る土方に苦笑した。

「しかたねえさ。元々武家出の奴なんざ限られてる。ああなりたい、こうなりたいと集まって来た奴らに、忠義だ礼儀だと言っても聞きやしねえよ。それより、坂本が京に入ったって情報がある」

「奴さんも動いてるか。で、潜伏先は割り出せたのか？」

「いや。今捜させているところだ」

「そうか。出兵前に首でも取れたら、さらに士気が上がるってもんだが」

「その出兵だが、沖田の奴はどうするつもりなんだ？」

「行くと言うなら連れて行く。あれも、そうしたいだろう」

「あんたがそう言うなら俺は何も言わねえ。じゃ、ちよと沖田の所に顔出してその旨伝えてくる」

「ああ。それまで無理はせず体を休めとけと伝えてくれ」

ここ最近、見廻りにも出ていないからか、血色は良くなり咳は収まっている様だった。食欲も戻っているが、完治したのではない。

「総司、入るぞ」

沖田は三色団子を片手に、壁に背をもたれて座って居た。

「おまえ、そんだけ甘いもん食ったら胃がもたれるだろうが」
脇に置かれた三皿を見つけ、呆れ気味に座り込む。

「そんな事ないですよ。頭を動かすには甘いものが一番。あれ？前にも言いませんでしたっけ？」

「うるさい」

最後の一個を食べ終わると、脇の更に串を置く。

「今度はおまえも来ていいとき。ちゃんと近藤さんから許可は貰った」

「置いて行かれるんじゃないかと、はらはらしてました」

本当に嬉しそうな笑顔をすると、土方は苦笑した。この男も武士なのだ。前線に出ていけないのは辛いだろう。

「薩摩も動向も気になるところへ、坂本の京入り。やっぱ繋がってるとみていいか」

「証拠があつたら入れるんですけどね。あ、薩摩で思い出した。ほら、土方さんが気になってる村木って奴、先日会いましたよ」

「村木？ ああ、あいつか。で、何処で会った？」

「甘味屋です」

嬉しそうに沖田は言った。

「彼も甘いものが好きみたいです。僕も暇だったから、二人で団子食べてたんです」

「おまえなあ。てか、この一年近く一度も姿見てねえのに、この状況で登場か？ こりゃあ、なんかあるな」

「やっぱりそう思います？ 僕も考えてたんですよ」

壁から離れて足を組み直す。

「何で後付けなかった？」

「付けようと思っていたら、土方さんに呼び戻されました」

ちっ、と舌打ちする。

「剣も変わっていたな。僕を見て少し剣気出したんです、直ぐ消しちゃいましたけどね。坂本と繋がりがある線、ほぼ間違いないと思いますよ」

「ほう。ちったあ腕が立つ様になってるといいんだがな。斬るならある程度手ごたえのある奴がいいからな」

「もう、土方さんの獲物になってますね。駄目そうなら、遠慮なく僕に譲って下さい。岡田とやってみたかったのに、恋しい相手はもう墓の中なんですから」

たった一年で俺に敵うかと怒鳴りながら、土方は出て行った。

「……ごぼっ！ ごぼっ！」

気付かれないように布で口を塞ぎ、胸を押さえて蹲る。

「くっそっ！」

口から外した布に、うつすらと血が染み付いていた。

赤井にとって夜中の見廻りは楽ではなかった。随分暗闇にも慣れたつもりなのだが、一々暗がりになり、気配を読む事を忘れ顔を向けてしまう。

「落ち着きがない奴だなあ」

そう大石に何度言われたことか。

今日は三日月。

月の無い夜よりはまだ楽に歩けるが、心許ないのは変わらない。三条通りから誓願寺の裏を回り、高瀬川沿いを四条方面へ進んで行くその後ろを、一つの影が追っていた。

田中新兵衛は至難に暮れていた。相手は八人。多い数ではないが

相手は新撰組だ。沖田の姿がなくても、同じく人斬りとして名を連ねる大石の存在は厄介なのだ。標的とする赤井は隊の中央で、一気に飛び込めない難しい位置に居る。

橋の側まで来た時、細い路地から頭巾を被った男達がいきなり新撰組の前に飛び出した。

「!？」

隊士がばらけ、赤井の背中が見える。

「貴様ら何者だ！ 新撰組と知っての狼藉だろうな！」

大石が叫んで、赤井も間を取ると剣を構えた。

男達もそれに習うように全員が剣を抜く。

突然の来客に驚きながらも、状況の好転に隙を伺う。頭巾の男達は十人。自分一人が紛れたとしても、怪しまれることなく赤井に近づける。

懷から頭巾を取り出して被ると、斬り合いが始まった中へと身を躍らせた。

後ろに回り込んで来た男に向け、赤井は横薙を払った。

飛び散る血肉が顔面にびしゃりと張り付き、嫌な臭いとともに、どろりとした液体が頬を滑り落ちていく。

「ぼやっとしてるんじゃないっ！」

大石の声に足元へ視線を落とすが、倒れているはずの男が居なくなっている。

「横だ！」

言われて横を向くと、腹を押さえた男の右腕が左から伸びて来た。ギン！

脇差を抜いて剣を止めると、右肘を後ろに命一杯引いてから相手の懷へ突き出した。

「あぐっ！」

男は赤井の肩を掴むと、苦痛に歪んだ表情でずるずると下へずり落ちて行く。

手足が震えてるのが解った。

初めて人を斬った時、和奈もこんな気持ちだったのだろうか、場にはそぐわない事を考えた。

赤井の周りに空間が出来ている。飛び込んで行くのは今と走り出しかけた新兵衛は、路地から別の影が飛び出して来たのに気付き、足を止めた。その影は迷う事なく赤井に向かっていたのだ。

相手の数が少なくなり、再度近づけば新撰組も自分に気付いて刃を向け来るだろう。突然の来客は新兵衛にとって厄介者になってしまった。

(ちっ！)

新兵衛は、気配を消しながら近くの物陰に身を隠した。

新撰組は三人の隊士が地面に伏している。相手も同数が殺られているため、数の差は変わらない。

「くそがっ！」

間合いの取り方、太刀捌きからして手練れの剣客だ。思うように剣を振るえず、大石が次第に苛立ちを膨らませていくのが解る。

「なんなんだ、こいつら！」

隊士を確認しようと顔を振った先で、赤井へと走り寄る男を見つけたのだろう。大石が体の向きを変えた。

「赤井、後ろだ！」

発せられるその声と同時に、男は赤井の肩から脇腹へと剣を走らせた。

「ぐっー！」

痛みで力が一気に抜け、手元から剣がずり落ちかけている。が、赤井は足を踏ん張り、柄を握して男へと視線を向けた。

剣を上段に構え直した男は、反撃する力を失った赤井の右肩へと振り下ろした。

「がっ！」

手から剣が離れ、赤井がその場へ倒れて行く。男はさらに剣を突き立てようと手を上げた。

「待て、この野郎！」

建物の影から幾人かその場に駆け込んできた。

別の隊が剣戟の音を聞きつけて来たに違いない。これではもう動くことは不可能と、新兵衛は状況の行く末を見るしなくなってしまう。

長身の男が走り寄り、赤井に斬りかかろうとしていた男の背後を切り裂く。

「ぐっ！」

「原田さん！」

十番隊か。原田に大石では尚更分が悪い。

背中を斬られた男し剣を杖にして、よろよとした足取りで体を回すと原田へと剣を向けた。

「このくそ野郎が！」

だが、原田相手に傷を負った身では太刀打ちすることはできない。そして原田が躊躇なく、男に二度三度と剣を振り下ろした。

「何がどうなってる、大石！」

「俺に聞かないでくれ！」

十番隊の到着でなんとか相手を切り伏せた大石は、倒れた赤井の所へと駆け寄って行く。

「くそ！ 赤井！ しっかりしろ！」

倒れている赤井の耳元で、肩を揺らしながら大石が生死を確認するよう叫ぶ。

「お……いし……さん……」

赤井の手が動くのが見えた。どうやら息はあるようだ。抱き起こされた肩からは出血が酷く、羽織の半分が黒く見えた。最初に斬ら

れた胸より、それは酷いように思えた。

止血しようと大石が羽織を脱ぎ、体を抱えたその肩口に羽織を巻いていく。

「誰か運ぶのを手伝え！」

一応の処置を済ませた大石は、後ろに居た隊士に赤井を任せた。そして側に来た原田に現状を説明している。

もう、この場所に留まるのは危険と、新兵衛は気配を悟られぬよう、路地の闇へと姿を溶け込ませて行った。

「不意打ちを喰らった」

悔しそうに顔を歪める大石は、沖田のかわりに一番隊を纏めている立場だ。不意打ちとは言え、出した死人の数は責任の数と思えた。

「誰なんだ、こいつらは」

「だから俺に聞かんでくれ！」

相手を全部殺したとは言っても、こちらにも四人の犠牲が出てしまい、赤井を含む数名が重軽傷という最悪の状況になってしまっている。

原田が大石の肩を一度叩き、うつ伏せで息絶えている男の体をひっくり返して頭巾を剥いだ。

「おい、大石。こいつを見てしろ！」

二人の背後から、塚本もその場を覗き込んで啞然とした。

「楠!？」

「冗談じゃねえぞ! 脱走した奴から斬られるなんざあ! てめえら、そっちはどうだ!？」

慌てるように他の男の頭巾を取り、顔を確認していく。

「他はどれも知らん顔だ!」

大石は悔しそうに倒れている男の腹を蹴った。

「首を晒しとけ。こいつ以外、どうせ雇われた浪人だろうがな」

使い古した着物に、不似合いな真新しい頭巾。原田にはどう見ても、使い捨てに集められた者にしか見えなかった。

「土方さんにどやされるな、これじゃ」

「闇討ちにこの人数だ。仕方ないがな。大方、見廻りの経路は楠が教えたんだろう」

「しかしよう。浪人風情にしちゃ腕が立ち過ぎるぜ。そんな奴らを楠個人が集められるか？ 長州が、金に糸目をつけず集めたと思えねえ」

息絶えた隊士の体を持ち上げながら、大石は悪態をつき続けた。

「こんな大立ち回りをやらかして長州に何の得がある？ 楠が桂と一緒に居た所を見たが、あの女が桂って確証はまだ無いんだ」

「土方さんはそう見てるがな。原田さんも見たんだろう？」

「暗闇だ、判別なぞできん」

確かにあの女の剣捌きは並の腕じゃない。脇差一本だけ土方を抑えたのだ、桂だと言われたほうがしっくりとくる。

「とにかく、長州でなかったとしても、そいつが絡んでる確率は高けえ」

よっこらせと、二人目の遺体を脇に抱え、大石はその場から歩いて行った。

「もう一人居たようだが、消えたか」

楠を斬った時、一瞬背後に視線を感じたが、すでにその主はここから消えてしまったようだ。

「とにかく、この場を片付けて帰るぞ」

原田は隊士に指示を出し、騒ぎに集まり始めた町人達を追い払うと、倒れている楠の首を切り落とした。

赤井の生死を確認してから引き上げたかったが、援軍が加わってはなす術はない。あの様子だと相当深手に思えるが、止めを刺すまでに至らなかったのでは助かる確率は増える。

辺りに気を配りつつ、大久保の元へと戻った新兵衛は、赤井の殺害に失敗した事を告げた。

「長州だと？ 意外な横槍だな、それは」

楠と言う男が、桂が新撰組に潜り込ませていた長州の間者であるのは、すでに調べを付けてあった。

「桂くんの指示だとすると、同じ懸念を持った。そういう事になるな」

「生死を見届けられず、申し訳ありません」

声は低くかった。命じられた任務を遂行できなかったのだ、それが一番悔やまれるのだろう。

「まあいい。だが、見廻り中を狙うとはおまえらしくないな」

「はっ。新撰組に警戒感が増しており、事を焦りました」

「どうやら幕府は、新撰組にも長州再征伐への命令を出したようだからな、仕方あるまい。新兵衛、いまは様子を見ろ、当分手出しはならん。西本願寺にでも潜り込む手もあるが、それではこちらの危険も増す。あやつがそのまま死んでくれるかも知んしな。それが一番楽なのだが」

「新しい屯所の間取りを、もう少し詳しく調べておきます」

「調査に動くのはいいが、早まって事を起こすな。おまえが死んでは元も子もないぞ？」

「心得ております」

新兵衛の気配が消えると、大久保は手にした玉露を口に運んだ。

「抜け目無い男だ。長州と手を結んでおくのは、裏でも動き易いと言う事か」

桂とは策を講じる手段も似通っていると、微笑を浮かべた。

其之四 長崎

和奈と武市は、大久保から紹介されたグラバー商会を訪ねる龍馬に同行し、長崎へと足を運んで居た。

「和太郎にゃ、一役かって貰いたいんけんど。宗次郎、いいか？」

「交渉になんでこいつが要る？」

「相手は夷人さんやきな。色々と準備がいるぜよ」

「おまえはろくでもない考えしか思いつかん。もしそうだったら、躊躇わずその手を叩き斬るからな」

肩に手を回しそうとした龍馬が、その手を慌てて引っ込めた。

宿を取ると、二刻したら山手側の町外れまで来てくれと武市に言い、しぶしぶ顔の武市を残して和奈は龍馬と長崎の町へ出た。

「海風が気持ちいいですね」

「そうだな。京と違って洋式の建物も多いし、わくわくするぜよ」
ほんとうにわくわくしているのだろう、足取りが軽く進んでいる。

「おう、在った在った」

ん？ と玄関の屋根に掲げられている看板を見上げる。

「ここで、何するんですか・・・」

「気にしやーせんと、はよう中へ入るぜよ」

港に広がる町並みを山手に歩くと、欄干が連なった細い道がある。蛇行しながら頂上へと続くその道を登ると、開かれた門の奥に白い洋館が建っている。

二刻経って、龍馬に言われた場所で待っていると二人がやって来た。

「・・・・・・」

武市はおもわず絶句して、龍馬の横に経つ和奈を見つめた。

「おんしが見惚れるのも仕方ないのう。わしも、出て来た時は吃驚したぜよ」

濃い紫の地に天の川のような銀色の流れが、肩から裾まで斜めに染められ、沿うよう大小の時計草の蔦が花を咲かせた着物に着替えていた。髪も下ろし片側の肩で一つに括られ、胸へと流れている。

「今から和太郎ではなく、和奈じゃ。おい、聞いておるんか？」
無理も無い、と龍馬は思う。

少し焼けているとは言え、白い肌に紫の着物はよく映える。白粉を乗せた目尻にも紫色の色が薄っすらと引かれ、赤い紅を塗っている和奈はどこから見ても町の女性だった。

「呆けた男は置いて行くぜよ」

龍馬に手を取られ、坂になった細い道を登り始める。

「手まで握る必要はあるまい！」

やっと我に返った武市がそう叫んだ。

「おんしが動かんと和奈も動かんじゃろ？　ここからはもう敵陣ぜよ。おんしには悪いが、ぼでいーがーどになってくれ」

武市にボディガードとは護衛をする人間をそう呼ぶと説明する。

「和奈はわしのいい人、といー」

殺気を感じて龍馬は言葉を止めた。

「解ったき、その面構えはよしとうせ。和奈はわしの妹にしておくぜよ。ほんに冗談の通じん奴じゃ」

「えっと、僕は何をしたらいいんですか？」

「僕はいかん僕は。今は女子じゃ、私でいい。おんしは何もせんていい、ただにこにこ笑っていたらいいぜよ」

「一役って、それだけですか？」

「着物姿の女性がおるばあで、夷人さんとゆうものは喜ぶもんなちや」

「見世物にするつもりか！？」

「おんしは言葉が言葉がわりいでいかん」

ちらりと後ろを振り返り、これは宿に帰ったらまた喧嘩になるな

と、武市の顔を見てため息をついた。

グラバーは、ジャーディン・マセソン商会長崎代理店の代理人として、グラバー商会を設立したスコットランド出身の商人である。拠点が長崎であるため必然に薩摩との繋がりが深くなって行き、薩摩藩士のイギリス留学に渡航手引きなども行うようになっていた。設立当初に取り扱っていたのは生糸や茶など武器以外の商品だったが、政治的に必要である武器弾薬の取引に手を出し始めたのだ。その商売先は薩摩だけでなく、土佐や長州などにも及び、互いに悟られぬよう裏で武器を流している。武器取引は居留地以外の商売を制限されてるグラバーにとって、利益が莫大な良い商売だったのだ。

「Welcome it waited.」
「ようこそ、お待ちしておりました」

「Thank you for purposely meeting it.」
「わざわざ出迎えて頂き、ありがとうございます」
龍馬が英語を勉強していたのは、最初に会った日に知っていたが、まさか流暢に喋る程とは思って居なかったので、和奈は驚くばかりである。

（は・・・恥ずかしいよね、私・・・）

外国との交流もほとんどないこの時代で、英語を話せる人間はほんの僅かだろう。和奈も授業で英語は習っていたが、所詮日本人の英語である。本場と授業での英語とは全然違い、全部を聞き取り理解するのは無理だった。

「奥へどうぞ。皆さんが来られると、お茶を用意させていただいております」

中央の広い階段を上り、右手へ進んだ正面の部屋へとグラバーは案内してくれた。

「改めて自己紹介させていただきます。私がトーマス・ブレイク・グラ

バーです」

「坂本龍馬と言います。この度はお時間を頂き、誠にありがとうございます」

グラバーに促され、龍馬と和奈は給仕に引かれた椅子へ腰をかけ、武市は扉の横へと立った。

「遠路はるばる長崎迄来て頂いて、申し訳ありません」

「どんでもない。長崎に知り合いが居まして、そちらへも顔を出せるので苦勞とは思っていません」

「それは良かった。お話しは大久保さんから伺っています。銃がご入用とか」

いきさつなど詳しい話しをせず、今後の日本のために必要な物と、龍馬は語るだけにした。

「ここは武士の国。心の中に秘められているものは、様々にして難しい問題だという事は熟慮しているつもりです」

「では、ご協力頂けるのですね？」

「ええ。ハリー・スミス・パークスという男を紹介させて頂きますよ。ただ、彼は今出かけていまして、必要な物と数だけお伝えさせて頂く。引渡し等の詳細は後日連絡さし上げたい。それで宜しいでしょうか？」

「パークス殿？ 駐日英国公使のですか？」

「名前はご存知でしたか。先の下関砲撃について英国政府は快く思っており、その責任を取り前任が解雇されて、その後任に就いた男です」

「兵庫開港に力を入れられている方、としか聞いていませんが。その方が今度の取引をして下さると？」

「Yes！」

会話に付いて行けず、かと言って出された紅茶に手を伸ばす事も出来ず、和奈は後ろに立つ武市の気配を探るしかなかった。その気で、この外国人が何かすれば即座に斬り出すつもりでいる事は龍馬にも判っているだろう。

「日本政府にはフランスが絡んでいる。レオン・ロッシュ公使が政府への武器調達を行っているのです。英国としては、フランスにこの国での主導権を執らせたくは無い。この点でパークスと私は利害が一致しているのです。ご心配には及びません」

つまり、幕府も近代武器を仕入れていると言う事だ。

「今パークスがお出しできるのは、ミニエー銃四千三百挺とゲベール銃三千挺でしょう。これを用意させ、薩摩藩名義で購入してお渡しする。それで宜しいですね？」

「注文を付ける立場ではございません、グラバー殿にお任せいたします」

「結構。それでは、今後ともよろしくお願い致しますよ、坂本さん」
グラバーは立ち上がり、手を差し出してきた。

「あまり頼る事にならず、自国のゴタゴタを治めるのがいいのですが」

そう言いつつ、差し出された手を握り返す。

「あははは。それはどこの国も同じですよ。この美しい国を大砲などで壊してしまうのは、私も嫌なのです。ですが、時代は常に流れ続ける。どうか良き未来のために頑張って頂きたい」

グラバーは手を放すと、改めて龍馬の横に座る和奈に視線を向けた。

「とても綺麗な女性をお連れになっていたのに、紳士たるものが放っておく無粋な真似をしてしまった」

多分、自分に話しかけているのだらうと思うのだが、にっこりと笑うしか和奈には出来なかった。

「彼女は私の妹で、和奈といいます」

「Nice to meet you Miss Kazuna.
和奈さん、初めまして」

挨拶くらいなら、なんとか和奈にも聞き取る事ができた。

「Nice to meet you to Mr Glover
「お目にかかれて光栄です。グラバーさん」」

「貴方も英語を話せるのですか？　これは驚きました」

「いえ、挨拶程度です」

グラバーは席を立ち、和奈の横に膝を付い片手を差し出した。確か、手を乗せればいいのはずだと、和奈は差し出される手の上に自分の手を重ねた。

「天和撫子にお会いするのは、私にとって光栄な事の一つです」
手を取ったグラバーが甲に軽く口付けしたものだから、和奈は慌てて出した手を引っ込めてしまった。

「っ！」

龍馬は腕を出し武市を制止する。

「申し訳ないが、異国の流儀に慣れていないのです」

「これは、また失礼をした。つい本国のクセが出てしまいました。

和奈さん、申し訳ございません」

「英国流の挨拶じゃ。驚かせてしまったと謝っとる」

武市への説明も含め、そう言った。

「すっかりお茶が冷めてしまいましたね。今取り替えさせますから、お待ち下さい」

その後、とりとめのない会話が続き、和奈はようやく出されたカステラを口にすることができた。

口の中に広がる懐かしい味に、おもわず涙腺が緩みそうになった。

引渡し準備が整ったら海援隊へ連絡を入れてもらう事で商談を終え、和奈達はグラバー邸を後にした。

前に行く龍馬と、後ろから歩いて来る武市の間で、和奈は生きた心地がしないまま坂を下りて行く。

「幕府にフランスが付いたとなると、厄介な事になるかも知れんな」
「そうなんですか？」

「これで長州にも銃が渡る。薩摩のこの介添えで今後も商談が進めば、大砲でも引っ張りだしかねんぜよ高杉くんは」

「大砲ですか」

「それよりも、その気をどうかしてくれんか？ 落ち着かんかい」

武市が苛立っているのは判っていた。剣を抜かなかったのは武市だからだ。あの場に居たのが以蔵だったらグラバーに斬りかかっていただろう。

「おまえに一太刀入れれば収まる」

「和奈が居たのはわしにとって有り難い事じゃき、斬らせてやりたいが、ちつくと先にしてもらえんかのう」

坂を下りきった所で、龍馬は海援隊に顔を出さねばいかんと町へは入らず、別の道へと小走りに駆け出して行ってしまった。

「あの・・・」

ずっと不機嫌な顔のまま、龍馬の向かった方向を睨んでいる。

「やっぱり、これは不味かったでしょうか？」

そのお陰でグラバーには手に口付けされるし、武市は怒ってしまいうしと落胆する。

「荷物を呉服屋さんに預けたままなので、取りに行つて来ます」
背を向けて歩き出す和奈の手を慌てて取る。

「・・・そうそう女子で居るのを、見れるもんじゃないな」

やっと笑みが浮かび、ほっと胸を撫で下ろす。

「和奈・・・が本当の名か？」

「あ、はい」

「そうか・・・くそっ、龍馬め」

目の前には、武士ではなく女子の姿の和奈が立っているのだ。自分で決めた自制心が、脆くも揺らいでしまいそうになるのを必死で堪える。

「必要だったんですよね？ その、この格好。だから、その、喧嘩はしないで下さいね？」

「ああ、約束しよう」

武市は再び仮面を付け直し、和洋折衷が見せる町の不思議さの中、しばし男女で歩く気分を味わう事にした。

グラバーとパークスは薩長の間に入り武器を横流しすることで、幕府を後押しするフランス政府の排除を目論んでいた。よって、今回の商談はそういう思惑があった両者にとって関係作りをする上で好都合なものであり、パークスはすぐ伝令を出し英国より銃を取り寄せたのである。

ハリー・パークス公使から銃を仕入れた龍馬は、薩摩名義で購入された英国製蒸気軍艦ユニオン号を使い、長府で高杉の元へと引き渡した。

その際、入港という一つの難問にぶつかった。ユニオン号の運営と所有は海援隊にあるが、薩摩の船で長州に入る事ができなかったのだ。

苦慮した挙句に、薩摩に寄港する時は薩摩藩の桜島丸とし、長州へ寄港する際は高杉が付けた長州藩の乙丑丸とする事で、長州との取決めを交わしたのだ。

それから一ヵ月後の慶応元年九月になって、パークスは兵庫沖に英仏蘭米の四国連合艦隊を進め、兵庫開港か条約勅許を求めたのである。

安政条約に明記されていた兵庫開港を巡っては、未だ朝廷からの許可が下りていなかった。

兵庫港開港については、は安政五年に締結された日米修好通商条約及び他諸国との条約、安政五カ国条約により文久三年から開港が予定されていた。しかし夷国人嫌いである孝明天皇は、京に近い兵庫開港に断固反対を通していた。

薩摩の依頼で長州に武器を渡した時点で、両藩が主でだって攘夷政策に乗り出さないと考えてのパークスの行動である。幕府に対し

ても両藩が攘夷策へは介入しないと言い切れたのも、龍馬との交渉成立が影にある。

〔兵庫開港の許否について確答を得られないのなら、今の幕府に条約遂行能力がないと考えねばならない。そうなれば英国は幕府とも以上の交渉は行わないでしょう。私が直接京都御所に参内して、孝明天皇と直接交渉するまでです〕

そう主張してみたが、それでも幕府からの答えがない事に、パークスは関税の引き下げという譲歩案を提示してきた。

幕府老中は、これ以上の引き伸ばしは無理であり、要求を吞まざるを得ないとして開港方針を決めた。

たが一橋慶喜としてはこれには黙って居られない。朝廷の許可が下りてもいないのに、幕府の独断だけで外交を進めようとする老中に難色を示したのだ。朝廷との連携を重視する慶喜は、朝廷へこの独断専行とも取れる決定を伝えた。

これにより、開港を推し進めた老中阿部正外と松前崇広に、罷免の令が出される事態となる。

この朝廷による実際の幕政介入に、慶喜と幕臣の間に溝が生まれる事となり、家茂が將軍職を辞職すると言い出し、さらに混迷を極めることになる。

長州への再征伐を前にして、家茂の將軍辞職だけは避けなければならず、慶喜はその説得に当たるとともに、在京している諸藩を召集し、朝廷に条約勅許だけ認めさせるよう提言すべしと働きかけたのだ。

押し切られるように、朝廷は慶喜と諸藩からの進言を飲んだのである。

開港については、幕府が開市開港延期交渉使節を派遣、英国とロンドン覚書を交わし、開港の日程を慶応四年の一月一日となった。兵庫開港許可は先送りになったが、条約勅許と関税の改正の両方を

認めさせたパークスは、四国連合艦隊を兵庫沖から撤収させた。

パークスとしては、英国が目的としていた関税改作の改税約書を手に入れば、武力を推してまで早急に神戸開港を求めるつもりなど最初から考えていない。

他の三夷国にしても、開港に関する覚書と関税改正があれば、無理強いしてまで開港を求める必要性はなかったのだ。なぜなら、幕府も各藩もすでに黒船を購入しており、いずれは開港の方向に向かう算段をつけていたのである。

慶応元年九月二十一日。武力を盾にし長州再征伐の許可を求めた幕府に、朝廷はどうとう勅許を下したのである。

これを聞いた西郷は憤りを覚え、改めて薩摩藩と小松に対し働きかけた。

西郷の、長州再征は幕府と長州の私闘である、とする意見は小松も同じ思いであり、藩論を出兵拒否に纏めたのである。

其之一 決意

目が覚めると高い天井が広がっていた。

体を動かす事もままならないのに気付いて、辺りを見渡し自分の部屋だと知る。

全身に行き渡る倦怠感、胸の痛みと重石を乗せられたように動かない右腕に、斬られののだと思いつく。そして人の体を斬った感触も思い出した。

「ぐふっ！」

胸の不快感で嗚咽が止まらず、布団に嘔吐物を吐き出した。

「がはっ！」

起き上がろうと右腕に力を入れた瞬間、激痛が肩から四方へ広がり、呼吸が一瞬止まりそうになる。

「くっ……はぁ……痛いなぁ……」

吐いたお陰で嗚咽が止まり、気分が少しましになった。

天上を見上げる目から涙が毀れた。

斬られる覚悟などなかった自分に現実が押し掛かる。剣を持つと言う事は相手を斬るばかりでなく、自分も斬られるのだ。その結果がこれだ。

襖の開く音が聞こえ、視線を向けると大石が顔を覗かせていた。

「気が付いたか？」

声に安堵の響きが混じり、大石は布団を見ると苦笑を漏らして赤井の枕元に座った。

「ちっと痛い、我慢してくれよ」

首の下に腕を通し、ゆっくりと赤井の上半身を抱き起こす。

「っっ！」

「悪いな。今布団を替えてやるから」

掛け布団をそのままに、赤井を抱きかかえて体をずらした。

「すみません」

「気にすんなって」

新しい敷布団に取替えてもらうと、赤井は再び布団の主に戻った。

「目が覚めて腹でも空かせてるかと思ったんだが、まだちいと無理のようだな」

「どのくらい寝てました？」

「二日だ」

「そんなに・・・？」

「おまえ、何やらかした？」

意味が判らず、眉を顰めた赤井に真剣な顔で言う。

「脱走した奴が徒党を組んで奇襲しに来るなんぞ、今まであったこっちゃねえ。それに楠が狙ったのはおまえだ。何か知ってなきや命張ってきやしねえだろう」

「何って・・・言われても困るんですけど。楠くんとは一度しか手合わせした事ないし、次に会ったのはあの女と一緒にの所だったし」

「俺もそう言ったんだけどな。沖田さんは桂に狙われるだけの事情があるって言ってるさあ」

桂に狙われる理由ならすぐに思いついた。龍馬達と薩摩、長州の繋がりを知っているからだろう。

「取り合えず目が覚めたって報告してくっから、もう少し寝てな」

また一人となった部屋で天井を見つめる。

龍馬には何も告げないと出て来たが、桂にすればそんな口約束では、信用に値するものではないのだろう。

「入って宜しいですか？」

その声は伊東だった。

「どうぞ」

武士という言葉からは逸脱している男、の一人だと赤井は思う。腰に剣を帯びているが、北辰一刀流の免許皆伝を持つなどとは露ほ

どもにも思えない。

「大変な事になりましたね。まさか新撰組が襲われるとは、私とて考えていませんでしたよ」

「はあ」

「大石くんの話しでは、狙われたのはあなただろうと言う事ですが、本当ですか？」

そこが肝心なのだ。

薩摩出身の人間が長州の間者である楠に狙われた。

犬猿の仲である両藩は反目し合っており、いざこざも耐えない。今に始まった訳ではないが、見廻り中を狙って襲って来るなど、これまでにはなかった事なのだ。

死を覚悟して殺すに足りる理由があるはず、そう土方や沖田が懸念を抱いても無理はない。

「それが解ってたら、大石さんに言ってます」

「ふむ。心当たりは、ないんですね？」

「はい」

「そうですか。しかし、土方くんはそれで収まらないでしょう」

「え？」

「あの人の性格ですから、そうか、と終らないと言っているんですよ」

伊東が何を言いたいのかすらも解らない。

「でも・・・本当に何も知らないんです」

「恐らく彼は、あなたと志士との繋がりを疑っている。表立って聞いてくる事はないでしょうが、気をつけておくといい。彼の性格は表と裏では全く違うんです、見掛けに惑わされないように」

薩摩と長州ではなく、志士との繋がりだと言う。なぜそこに辿りついたのか赤井には分からなかった。

「まずは傷を治す事です」

伊東はそれだけ言うのと部屋から出て行ってしまった。

薩摩藩邸に來た時、龍馬が居たのを土方は知っていたのだろうか。ならば薩摩と龍馬の繋がりに気付いてもおかしくない。それで泳がせていたのかと考えたが、これまでの土方の言葉や行動からはそこへ繋がる要素はない。

沖田でさえ、稽古は真剣に付き合ってくれている。問者だと疑う者にそこまではしないと思うのだが、身内をまず欺く、という手段もある。

何人かの足音が段々近づいて来ると、影の一つが障子を開けた。

「気が付いたか」

土方に沖田、大石と、その後ろには原田が立っていた。

「ご迷惑をかけました」

入って來た土方は、真面目な顔で心当たりはと聞く。

「ありません」

「楠と居た女は桂だ。その線は近藤さんも納得している。桂と繋がりが在る奴がおまえを斬りに來たか、その理由が知りてえんだ」

「薩摩だからですか？」

「馬鹿言うんじゃないよ。そんだけの理由で不逞浪士集めて茶番劇する道理がねえ。長州には、おまえを消さなきゃならん理由があるってこったろ？」

伊東の言う通り、知らぬ存ぜぬで済む相手じゃない。

「ったく！ おい、村木って男の事を知らないって言ってたな？」

そこだったかと、伊東が志士との繋がりを口にした理由に行き当たる。

「はい」

「あいつは志士どもと関係があると俺は睨んでる。坂本が京入りしのご登場だ、それは間違いない。奴は以前、薩摩に居た。ってことは坂本も薩摩と関わりがあるってえことだろ。薩摩というより大久保とか」

心から笑っていない大久保の冷淡な顔が浮かんだ。

大津で見た大久保は、武市の救出に出来る限りの手を尽くした。しかし自分が新撰組へ行く時は、たった一言で認めてしまった男だ。武市と自分では扱い方に違いがあるのは当然だったが、それでも理由くらいは聞くのが普通と思えた。

「大久保と坂本が繋がってる。それが俺達にばれたら困る。で、それを知るおまえを桂が消しに掛かった。それ以外の根拠が俺には見つけられねえんだよ」

土方の顔色は変わらない。裏と表の性格が違うという伊東の言葉が頭の中に反芻して行く。

「喋った方が身のためだと思うけど」

静かに座っていた沖田が優しく言った。

「俺が喋ってるんだ、口出しすんな」

「はいはい。僕だって隊士から間者なんて出したくないんですからね」

「間者？　俺がですか？」

「こいつが来てから薩摩や志士と渡りを付けた事は一度もねんだぞ」やはり最初から見張られていたのだ。土方は疑いの域を出ていない様だが、沖田はそう思っているんだろう。

「町で村木を見た時、一瞬顔色が変わったよね？」

「沖田！　なんでそれを俺に言わねえんだ！」

「様子を見てからと思ったんです。必要なら僕が斬ろうともね。隊士の反逆は組長である僕の責任ですから」

矛先が沖田に向けられたのも束の間、先ほどとは打って違って冷たい表情を土方が見せた。

「奴を知らないと言ったなら、なんに驚いたってえんだ？」

「その、女に見えたんで」

「はっ!？」

「なに、それ・・・」

「沖田さん、嬉しそうな顔して仲良く喋ってたし・・・その、男の格好だってんですけど、つい変な想像が浮かんで」

「あのさあ、今は女に興味を持てないだけ！ 男に興味なんて・・・絶対願い下げだ！」

嫌悪感を浮かべて震わせている手を見つめた後、腕を摩り出す。

「そうですね・・・すみません」

「たあ！ これじゃ阿呆の集まりだ」

土方がいつもの雰囲気に戻ったのが解った。

「とにかく。おまえが狙われた理由が判るまでは屯所から一步も出さねえ。部屋からもな。大石、こいつの面倒見とけよ」

一先ずは殺されずに済んだらしい。だが、疑いの念は晴れた訳ではない。と言って晴らせる証拠もなにもない。

土方に誘われ新撰組に来了。そうしたのは土方の考えている事に興味を持ったからだ。自分は志の意味するものさえ未だ解ってない。何を目指して生きようかと考えた事もない。ただ生きている、それだけしかなかった。死を覚悟する志とやらも持ち合わせては居なかった。

（あいつはどうしてここに残るって決めたんだろう）

もっと話を聞いておくべきだったと後悔しても時はすでに遅い。今は新撰組と倒幕派で道を別れてしまっているのだから。

海援隊が下ろした荷物を引き取り萩へ運ぶため、長府に山縣と石川がやって来た。

龍馬は仕事はまだあると言って長崎へ戻ってしまったので、和奈と武市は山縣達一行の護衛を引き受け、一緒に萩へ向かうことになり山道を歩いている。

「ほんと龍馬さんて、一所に落ち着いていないですよ」

「今に始まったことじゃない」

優しい人。それが龍馬を初めて見た時の印象だ。それは今も変わ

らなかったが、何を考えているのか今一掴めない人だった。

「桂木さん」

前方を警護する石川が行った道に戻って来る。

「この先の村で野営するんですが、見張りの振り分けにお二方を入れてもいいですか？」

「ああ、無論だ。運んでいる物が物だからな」

「ありがとうございます」

横の荷車の中には銃が詰まっている。

銃。と和奈はこの時代に不似合いなそれから視線を外す。剣も武器の一つだが、それよりも持つてはいけない凶器に見えた。

銃七千三百挺を運ぶのは大変な労働だった。一つの荷車に詰めるのは精々百挺〜百五十挺。全隊で運搬に当たっても、かなりの大仕事となっている。

山間を抜け、田畑の広がる一角に出ると、二十軒ほどの家屋が密集している小さな村が在った。

一行は、空き地を見つけて荷車を集めると野営の準備に取り掛かる。

兵士達が到着しても、誰も様子を伺いに家から出て来ない。それどころか、畑に出ていた人影が慌てて家へと入って行ってしまった。村人から、嫌われているのだろうか？

野営の準備が整い、暖を取って火を囲んだ時に聞いてみた。

「農民にしたら、藩に仕える俺達は役人と同じだからな」

「はあ・・・だから嫌われるんですか？」

「毎日汗水たらして働いて得た物を、年貢だと全部持って行かれたらどう思う？」

「そりゃあ、嫌です」

「誰だっという気はしない。決められた分を納められないと、不足した分を補うのに子供を奉公に出さなくてはならん。これから働き手となる子供を奪われるんだ、恨まれても仕方ないでことだ」

「でも、石川さんは何もしてないんでしょ？」

「・・・おまえ、本当になんも知らんのだな」

「藩に仕えるってだけで、皆同類に見えるんだ。今になって藩が年貢を緩和したって、そう簡単に俺達への対応が変わる訳じゃない。過去はそう簡単に消えないって事さ」

考えてみもしなかった現実を目の当たりにした気分だった。京に居た時も萩に居た時も、その生活が当たり前だと思っていたのだ。それがどうだ、普通の生活を送れない人達が目の前に居る。

「村木は藩士だ」

「はあ、一応」

「藩士はちゃんと身分を証明できる家柄がある。武士以下の足軽や中間、小者は殆んど農家の出だから家柄なんて無いにも等しい。食いつぶちを求めて仕えに来る奴も居たら、年貢の代わりに差し出される奴も居る。理由はどっちあれ里から嫌われちまう。そんな思いしたって武士になれる訳じゃないんだがな。功績を上げたところで、せいぜい郷士に取り立てられるのが関の山だ」

身分といえば武市は上士と桂が言ってた。

「才谷さんも武士なんですよね？」

「ああ。だが下士だ。武士の中にも階級がある」

以蔵は小者だった。騒ぐ三人は仲良しだと言った時、同郷で幼馴染なんだと中岡が言っていた。その時は身分なんて考えもしなかった。龍馬が武市に諂うところなどなかったし、武市も龍馬には普通に接している。以蔵は子弟関係で武市には礼儀正しいが、龍馬相手だと遠慮なく食って掛かる。

「武士の階級って家柄なんですか？」

「は！？」　　おいおい、何処の殿様だよおまえ。生まれた家の格付けで違うのは当たり前だろ？」

そうなんだ。なら武市達は幼馴染ではあるが、置かれている立場は全然違うと言う事になる。

「学不足は桂さんにも指摘されている。つまりぬ質問をさせて申し

訳ない」

「いえ、桂木さんが謝ることないですよ」

「弟子の至らなさは師である私の落ち度だからな」

そう言われて、石川は焦って困ってしまった。

「武士は白米を当たり前の様に食べるが、農民の主食は山の幸や小魚、稗粟が出ればいい方だ。白米が全く食べれないという事はないが、年貢の税が高い藩などでは一生の内に一度たりとも白米を口にせず死ぬ者も居る」

ご飯が普通に食べれない国。それが今の日本なんだ。

「これでも昔よりは随分良くなって来てはいるのだが、まだまだ農民への圧力は酷いと言える」

「だからだ、高杉は幕府をぶっ壊すんだよ」

「農民のために？」

「皆のためだな。あいつは武士だろうが農民だろうが身分で人を見る奴じゃない。俺も同じように身分に拘った事はない。その良い例が奇兵隊だ。上士も居れば農民も居る。普通なら、肩ならべて飯食えない奴らが一緒くたになって食べる。無論仕事も同じだ。やれる奴がやる、目付けだろうが小者だろうが関係ない。だが誰も文句を言わない。すごいだろう？ だから俺達は高杉に付いて行けるんだ」

武士も農民も身分に関係がない奇兵隊。

そこに山縣がやって来た。

「村の長には渡しておいた」

「あ、手伝わなかった・・・」

「その気が出たら言ってくれ」

山縣は和奈達に一礼して、火の前に座った。

「先の拳兵ではお世話になりました」

「軍監のあなたが、その様に頭を下げるものではない」

「役職はそうですが、目上の方への礼儀は弁えております」

武市の視線が鋭くなり、石川の表情も堅くなった。

「他意はありません。どうか気分を悪くされずに」

「こいつは昔からこうですから」

山縣の気分は石川とて解らないでもなかった。いきなり現れた男が役職を与えられ、桂や高杉の邸宅に出入りしているのだ。変に思う人間は出てくる。武市と高杉の会話を聞く限りでは、武市が上の身分であるのは間違いない。それはつまり、武市が長州の人間ではない、という肯定にも繋がるのだ。

「何を渡したんですか？」

場の雰囲気为重々しくなり、和奈は取り合えず話しを変えようと質問した。

「米だよ」

「米？ 村に米を？」

「ああ。高杉流の礼だな。さっきも言ったろ？ 農家は年貢として丹精込めて作った米を献上するって。自分の分を確保できる所と出来ん所がある。ましてこんな山ん中じゃ平地より米の収穫は少ない。野営の土地を拝借する礼に米を分けるんだ」

「なるほど」

「倒幕は容易い事ではない。が、やらねば皆が平等に暮らす日など来ない。だから、犠牲を伴おうと、自分が死ぬ事になろうと遂げなくてはならぬ」

そう言う武市の顔には、堅くそう決めた男の笑みがあつた。

「人が平等に暮らすため」

龍馬も桂も皆、その為に切磋琢磨しているのだ。

皆を守りたいと言ったのは嘘ではない。だが、それでは駄目なのだ。守るのではなくこの人達と共に在ろうとしなくては、不公平に感じた今の思いを取り除く事は出来ないだろう。

揺ら揺らとしていた自分の心が、今漸く一つの意志に落ち着いた様に感じた。

「僕にも、前が見えてきました」

「それは何より」

ポンと頭に手を乗せる。

「何かを気付けるというのはとても大切な事だ。しかし、おまえは何かと突っ走る傾向がある。くれぐれも私の目の届かない処へは行くな。ああ、もう一つ、勝手な振舞をせぬよう、いいな？」

「あ・・・はい」

「ふーん。桂木さんて、そっちの趣味だったんだ」

ここにもまた一人増えてしまった。

「だから、その趣味は違うって！」

和奈がどうこう言っても、石川はもうその線で片付けてしまったらしい。武市も諦めてしまっているのか、何も言い返えさなかった。

「男ばかりの軍じゃ、まあそういう間柄になる奴も出てくる」

「えええっ！？ 冗談じゃなく！？」

「冗談ではないな」

山縣がしらっと相槌をうつ。

「うわっ・・・」

想像したら気持ちが悪くなってしまった。

「心配はいらん！ 大半は女子にしか興味ないからな！」

それが普通なんですってば。

「恋愛の定義など有って無いようなものだ。男女であれ男同士であれ、当人同士が納得してるなら部外者は何も言えまい」

「山縣って、達観してるよな」

「いやだから、そこで片付けないで下さいってば」

後で石川から聞かされた事だが、山縣も武士でなく中間の位に生まれた人らしい。人より学問や剣術に長けており、高杉の信頼も厚いのだそうだ。城で踏ん反り返って武士だと言う奴よりよっぽど武士らしい、と石川は笑っていた。

道中何事もなく荷物を萩へ運び終えるた山縣と石川は、それぞれの隊が宿所としている所へと戻って行った。

「ご苦労だったね」

桂が戻った二人を出迎えに来てくれていた。

「お茶を入れるから着替えて広間においで」

「はい」

高杉は奇兵隊のいる赤間関へ行っているらしく不在だった。以蔵がそれに同行していると聞き、武市は近況を尋ねる。

「よく働いてくれるよ」

「荒くれ者なので気になったいたが、それを聞いて安心した」

「よく手放す気になったね」

「あれには、これまで過酷な事ばかりを命じて来た。岡田以蔵が死んで良い機会と思った。もう、十分だと」

「そう、か。確かに以前の岩村くんの影は見えないね。剣の腕は変わらないが、そこに込められる思いが変わっていたから驚いたのだけれど。恐らく、君が袂から離れた事と守りたい者が出来たせいなのだろうね」

「もっと早くそうすべきだったと、後悔が増すばかりだ」

「人は過ちを犯す生き物だ。大切な事は、その過ちをどう受け止めに繋げるかなんだ。繋げぬ者は何度でも同じことを繰り返す。それでは、生きているだけ無駄というものだ」

「桂さんは相変わらず手厳しい事を言う」

「そうかい？ 僕はただ、無駄に時間を費やすだけの人生など、命に限りがある者に対して無礼だと思っているだけだ」

命に限りがある者。それは、と問いかけようとしたが、障子が開いてその話はそこで終りとなった。

「そうそう。萩の郊外に一軒家を用意させてもらった。桂木くんが萩に帰郷した際は、次からそこを使ってほしい」

「私に家ですか？」

「君の身分なら無くてはおかしいだろう？ 何かと不審がる者が居るからね」

山縣あたりだろうと、武市は苦笑した。

「おや、心辺りがあるようだね」

「悟る者は悟るでしょう。御配意を賜り、忝く存知じます」

「和太郎も使うのだから、面倒をかけるのではないよ？」

「え！？ 僕が桂木さんの家を！？」

「ここに居てもいいが、僕も晋作も行ったり来たりの暮らしだ。一人では何かと心配だし、桂木くんとならば安心できるしね」

一緒になって、それってつまりわ一つ屋根の下に住む、ということになるわけで。

「それで長崎はどうだった？」

和奈の当惑を他所に、桂はグラバーがどんな人物だったのかと聞いた。

「腹は読み難いが、恐らく薩摩だけでなく他藩にも武器を調達している、と見ていだろう。仏蘭西が幕府へ肩入れをしているのでそちらへの横流しはないと思う。だが安心は出来ない。夷人にとって幕府だろうが倒幕派だろうが、自分の懐が暖まるのなら何処へ売ろうと関係ないのだ」

「桂木さん、英語解るんですか！？」

「そう言うおまえはどうなんだい？」

「うっ・・・」

文字でなら読み解いて行けそうだが、辞書もないこの世界ではそれも心許ない。会話はとなると、挨拶以外はほとんど解らないと断言できる。

「桂木くんには色々とお願いをしてあるからね。おまえも、もう少し学を磨きなさい。剣だけで生きて行ける時代は遅かれ早かれ無くなってしまうだろうから」

「反省しておきます」

「いい子だ。それで、長州から単独で交渉に当たれそうかな？」

「今は模索までに留めておくべきだ。薩長との和解を前に動くのは得策ではない」

「ああ、承知している」

これまた不思議な関係が出来ていると、和奈は二人を見比べた。龍馬と居る時の武市とはまた別の顔つきになっている。どちらかと

言え、今の武市の方が楽しそうであるのだが。

「僕はいい参謀を手に入れたみたいだ。そう思わないか？」

「参謀がどういう役回りなのかはよく解らないんですが。物の考え方が僕みたいに直線的ではなく、全体の表裏を見て意見を出してると言うか・・・なんかこう、計画に参加しながら自分の思うように手玉に取ってる？　って感じはします。小五郎さんも同じなんだから・・・」

返答が聞けるとは思って居なかった桂は、自然と人を監察している和奈に驚いた。

「これは意外だね。人をちゃんと見れるのに、なぜ都々逸が解らないのか凄く不思議でならないよ」

「都々逸ですか！？」

「得手不得手があるとは言え、これからも大変だね桂木くん」

「大丈夫です。僕も目指すものが判ったんで、迷惑をあまりかけないで済む？　と思います！」

自分の力強く切り出した言葉に首を傾げながら和奈は言う。

大変さに対する答えとは全く異なっているが、それはそれで気になる事ではあった。

「ここへ来る途中、村で野営をしたのだが、そこで何か悟ったらしい」

「で、何を悟ったんだい？」

桂は笑いながら困り顔をして見せた。

「悟ったのかな。僕は今まで、幕府が在り続けるの人々にとって幸せな事ではない、と言う理由が解らなかつたんです。だって僕が過去にして来た日々では食事に困るなんて無かつたんです。当たり前のように出された物を、当たり前のように食べてました。でも、ここにはそうじゃない人が居る。一日中苦勞して働いているのに、豊かになる所か食べる物に困る。それは不自然な事です。その不自然さを、幕府という体制を作り出しているのなら、その間違いは正すべきです」

幕府を覆し、人が平等に生きれる場所を作り上げるための倒幕なのだ。

「僕達の大義を理解してくれるのは嬉しい事だが」

「僕は皆を守りたいと言いました。だけど、守るのではなく皆と一緒に戦って行く、そう決心したんです」

戦うという言葉に絶句し、桂の動きが止まってしまった。

「でも、僕にできる事なんて大した事じゃないと思うので、護衛とかその辺りで出来る事を、でお願いします」

沈黙の後、桂が笑い声を上げる。

「くっくくっ。まったおまえと言う子は。驚いた後に笑わせられるのは結構辛いんだよ？ それにお願いされて動くのでは意味がないだろうに」

「あ、そうか」

やれやれと吐息をはいた武市は嬉しそうだった。その肩に手を置いた桂は頭をくっつけて笑い続けている。

「最近、よく笑うようになったと晋作に言われたけれど、おまえのお陰だろうね」

「また・・・変な事いいましたか？」

「いや、そうじゃないよ。ただね、ここで戦うというのはその剣を使う事と同義だ。それは解っているんだね？」

「はい。でも、できるなら使いたくはありませんが」

よろしい。と桂は目を伏せた。

竹林で見つけた和奈が一つ一つ、この世界に馴染んで行くのに戸惑いを感じながら、その身を案じてきた。いずれ元の場所へ帰ってしまうかも知れないのに、この世界を受け入れさすのは酷な事だとそう憂惧していたのだ。が、それこそいらぬ心配だったらしい。

「解っているならもう何も言わない。桂木くんも異存はないようだからね」

はい、と静かに言う男が少し羨ましく思えた。

「和太郎、長崎で買って来た物があつたんじゃないのか？」

「そうでした！」

急いで部屋に戻り小さな風呂敷包みを持って来ると桂に手渡した。

「長崎の福砂屋で買ったんです」

膝の上に乗せた包みを解いてカステーラだねと喜んでくれた。

「グラバー邸で食べたのが気に入ったようです」

「はい。紅茶も頂きました」

「紅茶か、それは僕も同席したかったね。日本茶とはまた違う味わいだが、結構気に入っているんだよ」

買って来れば良かったと後悔する和奈に、長府へ行けば手に入るからと教える。

「晋作にもあげたいけど、戻るまで待ってたら腐ってしまうから食べてしまおう」

運びこまれた銃の数を確認し、その管理を徹底させるために細かい布に数を入れて括り付け、門と鍵がある蔵へと運び込む。

高杉は運ばれて行く銃の一つを取り上げて構えた。

「本当に撃つなよ」

「弾入れてないだろうが！それに、試し撃ちを誰でするかは俺の勝手だ」

「人で試さないでくれ」

「山縣、施条砲の性能を調べてくれ。条溝（内側の溝）が入ってるが程度がわからん」

「照尺も付いているし、施条砲より銃口も小さい。装弾は滑腔砲のゲベルより手間がかからんだろう・・・高杉、人が説明しているのに口をあけて馬鹿になるな」

ムツと口を閉じて腕を組む。

「後は飛距離を調べるだけだ。滑腔砲より倍は飛ぶと見積もっているが、試してみない事にはなんともな」

「おまえ、以外と勉強家だったんだな」

「武器を仕入れるのに必要な事だ。わかっているか？」

「うるさい！ 俺は使えたらそれでー！」

くると背を向けて銃を山縣に突き出した高杉は、急いで建物の影へと走って行く。

「うっ……ごほっ！ ごほごほっ！」

壁に手をつき、口に手を当てて咳き込み続ける。

「おい……高杉？」

山縣の声だ。

「し……んぱい、いらん」

咳を続ける高杉に駆け寄り、大丈夫かと声をかけた山縣の顔が蒼白になる。

「おまえ、それ……まさか……」

「けっ！ なに死人みたいな顔してんだ。心配ないと言っただろうが」

口を抑えていた手には血がべったりと付いている。

「桂さんは、知っているのか？」

「……ああ。だから心配いらん」

また咳き込み始めた高杉の背中を慌てて摩る。

「いつからだ？ 医者には見せたのか？」

「ごほっ……ああ。黙ってるよ。大将が労咳なんて、笑っちゃうからな」

咳が収まったのか、立ち上がった高杉は懷から布を取り手を拭いた。

「治せないのか？」

「知ってるくせに、言うな」

「そうか……解った。何も俺は見えてない。それでいいんだな？」

「恩に着る」

胸を張って歩いて行くその後姿が、山縣にはやけに小さく見えた。

其之二 薩長同盟

薩長同盟六か条

一、戦いと相成候時は、すぐさま二千余の兵を急速差登し、只今在京の兵と合し浪華へも一千程は差置き、京阪両所相固め候事

一、戦、自然も我が勝利と相成り候氣鋒相見え候とき、其節朝廷へ申上げきつと尽力の次第これあり候との事

一、万一敗色に相成り候とも、一年や半年に決して潰滅致し候と申す事はこれなき事に付き其間には必ず尽力の次第これあり候との事

一、是なりにて幕兵東歸せし時は、きつと朝廷へ申上げすぐさま冤罪は朝廷より御免に相成り候都合にきつと尽力との事

一、兵士をも上国の上、橋、会、桑も只今の如き次第にて、勿体なくも朝廷を擁し奉り、正義を抗し、周旋尽力の道を相遮り候時は、終に決戦に及ぶほかこれなくとの事

一、冤罪も御免の上は、双方とも誠心を以て相合し、皇国の御為に碎身尽力仕り候事は申すに及ばず、いづれの道にしても、今日より双方皇国の御為め皇威相輝き、御回復に立ち至り候を目途に誠しを尽くして尽力して致すべくとの事なり

肩の傷も塞がり、胸の傷の痛みもすっかりなくなっていたが、赤井が部屋から出ることはなかった。時々大石が氣にして障子を開けてくれるが、外に出たいという思いが欠落してしまっていた。

「大石さん、退屈でしょう？」

「そうだなあ」

監視のためにと、土方から命令されて見廻りにも出ていないのだ。

「俺のせいで迷惑かけてしまってますいません」

何回謝ったか。沖田の体調がすぐれず一番隊を任されていたのに、

こうして時間を無駄に使わせてしまっている事が申し訳なかった。

「楠との線がなくなったらなあ」

大石はもう赤井が間者などではないと確信している。理由はと聞かれても、ただ直感だとしか言えないので、沖田もそれでは納得できないと未だ疑惑は晴れていない。

「やっぱり大石さんも、武士になりたくて新撰組に入ったんですか？」

「んー。まあそうだな。俺の父親は一橋徳川家の近番衆だから、武士っちゃあ武士なんだが。ちよいとこ揉め事起こしてよ脱藩してるから武士じゃないな。脱藩てか、家出だな」

「家出え!？」

「おうよ。んで、食わねえと死んじまうから大工んところへ転がり込んだ。その棟梁の息子が剣術の稽古にと、日野宿の出稽古用道場へ通っててな。ちいと出向いたわけよ。そしたら土方さんや沖田が居たんだ。池田屋の件があって不足した隊士の募集をしてるから来ないかと、土方さんから誘われたんだ。俺も大工してるより、剣術のが性に合ってると思い始めてたからな、その誘いに乗ったんだ」

武士になりたいと、皆が新撰組に入って来るものとばかり思っていた赤井にとっては、まさに寝耳に水だった。

「だから俺には土方さんや沖田みたいに武士に拘る事がねえ。ってか、剣を持ってるのが武士、と思ってたからな」

「違うんですか？」

「ああ。近藤さんは、帯刀なんざ誰でも出来る。武士とは忠義を持つて仕える者に尽くし、戦いの中に死ぬ場を見付る者の事だ、って言ってるけどな」

「忠義・・・」

「あの人の君主はは会津藩の松平殿とか幕府の將軍なんだろうけど、土方さんの場合は近藤さんなんだ。人によって主君は変わっても気持ちは同じなんだろうよ」

ああ、だから土方さんは近藤さんの事を考えて行動するんだ。

近藤のためなら、土方は命も顧みず危険に身を投じて行くのだらう。それが武士であると言う事。忠義をもって、忠誠を持って仕えると言う事なのか。

「じゃあ俺の主君は土方さんか」

大石に対しての言ったのではなく、思った事をぽつりと呟いてしまっただけだった。

「やっぱおまえは間者じゃない、俺は信じるぜ」

「信じてくれるのは嬉しいんですけど、証明するのは難しいですよ。沖田さんは完全に疑ってるし、楠くんが狙ってたのは俺に間違いなさそうだし・・・はあー。どうしていいのかもうさっぱりです」

外が騒がしくなった。見廻りに出ていた隊士が戻って来たのだらう。

「見廻り・・・そうか！　おい、おめえの嫌疑、晴らせるかも知れねえ！」

大石は障子を開けると、戻って来た隊士に土方さんと呼べと大声で叫んだ。

「なんでそこんどこに気付かなかったんだ！」

どこだかさっぱり判らない赤井は、首を傾げるしかない。

やがて土方がいつものしかめっ面でやって来た。

「俺を呼びつけるなんざ百年はえよ」

「見廻りですよ、見廻り！」

「・・・赤井に頭でも殴られたか？」

「殴られる前に斬ってます」

「そうだったな。で、見廻りがどうした？」

「楠が一番隊が担当する見廻りの順路を知っていた。だが、あの晩からの順路は俺しか知らねえ」

「おめえ、隊士に順路教えねえでどうするよ」

呆れて物も言えないはずだが、土方は呆れて物を言う性格だった。「忘れて出ちまっもんは仕方ねえ。だからだ、赤井が楠に伝えるのはできねえんだ」

「大石よお、それが何を意味すんのか、判ってんだろぅな？」

「だから、赤井じゃねえって・・・あ・・・」

ふうーっと息を吐いて、土方は部屋に入ると障子を閉めた。

「こいつが間者とは俺も考えてねえ。だが、それを裏づけするもんが見つからんとどうしようもない。あれこれ考えあぐねてたつてえのに、余計厄介な問題出すんじゃねえ」

見廻りがかち合わない様、市中の順路を組長が集り事前に取決めを行う。つまり、大石が隊士に順路を伝えていなければ、知るはその晩担当に当たっている組長の誰か、という事になるのだ。

「あの晩は一番隊と三番隊、八番隊と十番隊だったな」

「それが、八番隊と四番隊が交代してる。藤堂は伊東さんの用事でどうしても抜けねえって、非番だった松原さんが変わったんだ」

「伊東の野郎、俺に断りもなく隊士使うなとあれ程言ってたのに！」

「なんで、俺も含めて四人が情報を流せる立場にある」

とんだ事になってしまった。今度は大石が疑われる番になってしまっている。

「大石さんは違いますよ！」

「んな事たあ、てめえに言われなくても判ってる！」

土方の苛立ちは、組長の中に裏切り者が居るためなのだ。

「まっさきに駆け付けたのは原田だったな・・・」

桂と楠を逃がした時に原田も居た。そして赤井を斬った男を仕留めたのも原田だ。

「そりゃあねえぜ・・・原田さんが、まさか・・・」

「確認するまでだ。二人とも斉藤呼んで近藤さんの部屋へ来い」

疑いが晴れそうだったが、代わりに見張りをしていた大石がその立場になり原田が疑われている。今生きて居られるのは原田が駆けつけてくれたからだ。だが、楠が捕まって、情報を漏らしたとばれるのを恐れて口封じに殺したと考えると、つじつまが合ってしまう。

「そんな顔すんじゃねえよ馬鹿野郎」

安心しろと言わんばかりに、大石は笑顔を浮かべてくれた。

渋面の近藤を前に、土方、沖田が戸口に座り、斉藤と原田、松原と大石が向き合っている。赤井は戸口に近い隅に居場所を作った。

「土方から話しは聞いた。赤井くんが狙われたのはほぼ間違いとも思う。問題は、一番隊が組んだ順路についてだ」

「当日、大石の馬鹿が隊士らに順路を教えてねえから、赤井から楠に漏れる可能性は消える」

「それで俺達に矛先が向いたのか」

斉藤は組長格が集められた意味が判ったらしい。

「俺だって疑って呼んだんじゃないやねえ。だが、眼前の不可能を取り除くと、それしか残っちゃくれなかったんだな」

近藤は原田達から当日の行動を聞き出す。

組長参加の見廻りは、昼と夜の二回に分けて四隊が出る。維新志士の夜襲を警戒するため、順路は定期的に変更していた。昼なら朝夜なら夕方の食事後に決められ、隊士に伝えられる。隊の数も、長州征伐前は三隊だけだったが、禁門の変の後から志士達の行動が活発になり、組長らからの申し入れて一隊を増やしていた。それ以外の見廻りは、各隊隊士らが当番で担当する決まりとなっている。

変更された順路が決定した後、斉藤は時間まで隊士の稽古にで居た。隊士から聞けばその時の行動が判るだろう。原田は一人で部屋に、松原は太鼓楼で見張りをしていた四番隊に、交代を伝えに行った以外は何かしていない。大石も赤井と部屋に居ただけらしい。

「原田、大石、赤井が部屋にずっと居たという確証はない。原田は現場にまっさきに駆けつけているし、楠を殺った本人だ。証拠隠滅に動いたって言われても仕方ねえよな？」

「まあ、そうだ。前回取り逃がした時も俺が居たし、疑われても仕方がない」

「斉藤は、まず外の人間と接触はできねえ。隊士の居る間者を連絡係にしてたら話しは別だが」

否定もせず、うんと頷く。

暫く重い沈黙が流れた。

息遣いがやけに耳に届くと、赤井は唾を飲み込んだ。

「松原。てめえ、なんで八番隊との交代の件、俺に知らせなかった？」

大石が横を向いた。

「太鼓楼へ行く暇があるんだったら、先に俺か近藤さんどこへ来てもおかしくねえよな？」

「外部と一番連絡を付けやすい・・・か」

握られた手が小刻みに震え、その顔からは血の気が引いている。

「池田屋ん時、戦功を挙げたてめえが、なんでだ？」

当初から新撰組としてやって来た仲間の裏切り。土方はそれがまだ信じられなかった。

「なんか言ったらどうだ!!」

立ち上がって松原の前へ行くと、その胸倉を掴み上げる。

「言い訳くらい用意してんだろうがよ！」

土方は誰も疑いたくはないのだ。山南の脱走についても影で苦渋を飲んでいた。加えて組長の反逆行為に怒りを通り越して悔しさしかないのだろう。

「松原、おまえとは精忠浪士組からの付き合いだ。是まで新撰組の一員として、懸命に尽くしてくれたのは私も土方も十分解っている。誤解なら、ちゃんと説明してくれんか？」

手を離れた土方は、その場に座り込んだ。

「・・・楠は・・・俺の息子なんだ・・・」

「なにっ!？」

その場に居た者全員が聞く耳を疑った。

「ちつよと待て、息子って何時ん時のだよ!」

松原は今三十一歳だ、どう逆算しても元服（十五歳）前に出来た子と言う事になる。大石はなぜ密偵をしたかより、その疑問に突っ込んでしまっていた。

「播磨を出てから京に来るまで、俺だって知らなかったさ。播磨にいた時、奉公に出て来ていた女と恋仲になって、多分そんな時だと思う。目鼻立ちがよく似ていたから、楠から声をかけられた時すぐあの女だと解った」

「で・・・息子可愛さに、仲間を売ったてえのか？」

「そんな馬鹿な事はせんさ！ 前の日の事だ。相談したい事があるから会いたいと連絡が来た。ほら、俺に文が届いただろ？」

「あれか・・・」

差出人は女で、内容にもおかしな処はなかったので別段気にも止めなかった。

「脱走した身だからな、夜の見廻りの時にと思ったんだ。だが数日は昼担当だ、いつにするか考えてたら八番隊が出れないと・・・丁度いいと思った。あんたに知らせなかったのは、楠が絡んでたからあえて知らせなかった。見廻りの後でいいと、思ってた」

「だからって、なんで一番隊の順路まで伝えなきゃならねえんだ！」

「それは俺が悪い。一番隊は出るのかと酷く怯えてたから、沖田は居ないし、高瀬川沿いを四条方面へ抜けるから四番隊とはかち合わない・・・あいつが赤井を狙っていて、情報を聞き出すために文を超越したと知ってたら伝えてないさ！」

土方は顔を押さえた。詳しい順路を口にせずとも、闇討ちするならそれだけで十分な情報と言えるのだ。

「赤井くんを狙うとは知らなくても、見廻り中に会うのは危険と考えなかったのか？」

近藤も当惑を隠せないようである。

「・・・女の格好で来ると」

またそれかと、土方はいい加減にうんざりとして来た。

「見廻り中に逢引くらいじゃ、俺に怒鳴られこそすれ、切腹まで行くこっちゃあないからな」

「ああ・・・だが、あんな事になるとは・・・本当にすまん！！」

後ろへ下がると、松原は両手を付いて頭を下げた。

「すまんが事が済めば楽なんだが、隊士が四人殺されているんだ」
近藤とて、八月十八日の政変の御所門警備の時も、臆することなく任務を遂行した松原が、裏切るつもりでした事ではないと解っている。が、策略に嵌ってしまったとは言え、隊に被害が出てしまっているのだ。

「こういう理由があれば、脱走した奴の事を黙ってんじゃねえよ馬鹿が！」

「脱走は死罪だ！ だから俺はあいつを・・・国許の女んどこへ帰してやりたかったんだ」

父親の情というやつだ。見廻り中に会って帰れと伝えたかったのだろう。だが、結果として逃がしてやりたかった息子の首は晒される事になっている。

「脱走者の隠蔽と、情報の漏洩。もう、言い逃れできんぞ」

「ああ。覚悟はしてた、あいつの首を見た時にな。直ぐに申し出たかったが、国許で女が不自由しないよう知人に頼んでからと思ってな。赤井、すまん、俺のせいで怪我させちゃって」

「松原さんのせいじゃないです。俺がもっとちゃんとしてたら・・・」

それ以上は何を言っているのかも解らず、ただ顔を伏せるしかなかった。

楠の闇討ちについては後味が悪いまま、松原の切腹で幕が下ろされた。

赤井が間者ではないと疑いは晴れたが、なぜ狙われたのはまでは判明していない。しかし土方は見廻りに戻しても問題ないと、近藤の許可を得て戻すと決めた。沖田は不服そうだったが、手元に置いて見張ればいいという土方に、とりあえず納得したのだった。

楠に命令したのは恐らく桂のぼすだ。あの夜、桂が居たのだから繋がりとは明白。そして、自分を殺そうとした。考えられる理由は村木の事だろうか、それとも未来の情報を漏らされると考えたからだ

ろうか。どちらも当たっている気がした。なら新撰組に來た時にどうして動かなかったのだろう。

関係のない者を巻き込んで命を狙って來たことに腹立さを感じた。幕府転覆を狙って動いている維新志士、幕府の命で京の治安を維持しようと日々駆け回っている新撰組。

今ならはつきりと言える。

「俺は、新撰組だ」

合わせた手に力を入れ、赤井は額を押し当てて言った。

慶応元年十月十五日。

西郷は薩摩へ取って返すと、小松らと共に兵を率いて上京を開始した。幕府に対する兵力に、大坂に駐屯している数では不足と考えたのだ。

十一月中旬に摂津へ着いた西郷は、兵の半分を大坂に置き京へと入っていた。

「またもや会談を欠席するとは言わないだろうな」

大久保の前で胡坐を組み、到着してからずっと西郷はだんまりを決め込んでいた。

「筋は通す。おはんは気苦労好きでいけん」

漸く口を開き、恨めしそうに大久保へと視線を投げる。

「それならいいのだが。何分、気に掛かる事が多様で少々疲れ気味なんだ。そこへ來ての上京の知らせだ。これで薩摩は幕府関係から耳目を集める事になる。本当に動きづらくしてくれたものだ」

「おはんの行動を配慮しては、幕府の馬鹿どもに先を越されていまう」

はいはい、と大久保は西郷に茶を入れて進めた。

「桂くん達が到着するのは年明けになりそうだ。それまで済ませたい事が山積みなのだが、吉之助さあが気掛かりでおちおち出歩けやしない」

「ここから動かんと約束すうから、おはんは好きに動けばよか」

「それは嬉しい申し出だ。会談に関しては私は動かんのだから、上手く話を勧めてくれよ？」

「なぜ、一蔵さあも来ん？」

「本気で言っているのか？ 倒幕派の私で事足りるのなら、すでに同盟は締結しているではないか。桂くんと幕臣のおまえが和議を行う事に意義があるんだ。私の出る幕はあるまい」

「高見の見物か」

「ああ、そうさせてもらう。せいぜいその首落とされんように頑張ってくれたまえ」

今年ももうすぐ終るのだと、和奈は空を見上げた。

長州に戻ってすぐ、京から報せが入って落ち着く間もないまま萩を出て居た。

経路は瀬戸内海に面した西国街道に行く。

「今度こそ、話し合いができますよね？」

舞いを生業とする桂に同行という形で、高杉が舞の奏者、世話役に御楯隊から品川弥二郎、護衛で和奈と武市、以蔵は今回桂の亭主という役になり京への道を進んでいた。

足軽品川弥市右衛門の嫡子として萩に生まれた弥二郎は松下村塾の門下生の一人だ。高杉らと共に、イギリス公使館焼き討ちを実行し、禁門の変では八幡隊隊長として参加。その後太田市之進らと御楯隊を組織している。

「行ってもらわんと困る！」

桂の亭主役となった以蔵は、そう告げられた晩からずっと不機嫌になっている。

警護なら俺がするから、亭主役は武市でいいだろうと懇願したが、高杉の面白いからいいの一言で却下されたのだ。

「予行演習と思え」

「なに！？　おい、その話を詳しく聞かせろ！」

これに高杉が食いついた。

「高杉さんの前で余計な事を言わないで下さい！」

「いずれ京に着けば知れる事だろう。それとも、本人の前で喋ってほしいと言うのか？」

以蔵はぶんぶん顔と顔を振るだけで、なんだと問い詰める高杉を追い払う余裕すらなくなってしまった。

「あんまり岩村さんを苛めちゃだめです」

以蔵の顔が真っ赤に染まっているのを見て、桂は横を歩く以蔵の腕に手を通して言った。

「僕では役不足だろうけど、岩村くんのためなら一肌脱ぐよ？」

「だああああ！　頼みます、それだけは勘弁して下さい！」

「いかん。この一行、面白すぎる」

品川は参加するより、皆の掛け合いを見る方に回った。

桂の舞いも興味あるが、四人の掛け合いを芝居に見立てる方が面白かった。

「楽しむな弥二郎！」

剣術を教えてほしいと部屋を訪れた時の以蔵とは、仕草も言葉遣いも柔らかくなっていると和奈は思った。それはお京と出会ったからか、それとも岡田以蔵の名前を脱いだからなのかは解らないが。

播磨から摂津に入った一行は、能勢街道との結節点である瀬川で二度目の正月を迎えることになった。

紅葉の時期だと良かったのに、と桂は残念がっている。

雪が降り出していた。この分だと明日には雪景色になるかも知れない。

「寒くないか？」

桂の護衛のため、廊下で見張りをしている和奈の所に以蔵がやって来た。

「死にそうです」

「替わってやるから中へ入ってろ。熱でも出されたらたまらんから

な」

「岩村さんも薄着じゃないですか」

「鍛え方がおまえと違う。ほら、とっとと中行って寝ろ」

本当はもう限界だった。手足の感覚は寒さでなくなり、唇はガタガタと震え出していたのだ。

「ありがとうございます」

部屋に入ると、気配で起きた武市に詫びつつ布団へと潜り込もうとする。

「こっちへ入れ」

寝ていた布団を空け、横の布団に移ってくれた。照れつつ武市の布団に入ると、武市の居た温もりが体を包んでくれるようで、直ぐ睡魔は訪れてくれた。

翌朝、薄っすら積もった雪の町を京へ向けて出発した。

寒さは和らがず、時々振る雪の中を急ぎ足で進み、桂川、木津川、宇治川が合流する山崎を抜け、西国街道の基点である東寺口へと出た。

東寺は、新撰組の屯所となっている西本願寺とは目と鼻の先に在る。屯所横の通りを北に進めば目的地へは直線距離となるが、そんな危険は冒せない。

南北に伸びる千本通に入り、二条城を超えて中立売通を東へと曲がる。堀川を渡るとすぐ筑前藩の黒田家邸があり、その横に薩摩家老小松帯刀の寓居があった。

文久元年、島津久光の側近となった小松は大久保と共に藩政改革に取り組み、文久二年の久光上洛に随行した後家老職に就いた。京にて朝廷や幕府に留まらず諸藩との連絡や交渉役を務め、参与会議等にも陪席した経緯を持つ重鎮である。禁門の変では、幕府の出兵要請に懸念を示したものの、勅命が下されと薩摩藩兵を率いて幕府側で長州を迎え討った。イギリスから帰国した井上聞多と伊藤俊輔を、高杉が挙兵に出る前々で長崎にある薩摩藩邸に匿っていた。

「遠路が上洛、大義であったな」

小松は一行を迎えると邸宅の中へと案内した。

回廊から見える中庭を見ながら、和奈は加茂川館の庭を思い出した。ここの造りは似過ぎている。

「どうした？」

足の止まった和奈に、武市が気付いて声を掛けた。

「いえ、なんでもありません」

皆の後を追いつ、一室に通されると桂がまず挨拶を述べた。

「本来なら西郷が出迎えねばならぬ処、会談が前に済ましめる所要有りにて姿をば見せぬ事、許してやって頂きたい」

「お心使い、ありがたき事にございます」

「まずは、御身をば休められるが良い。部屋をば用意させておるから、そちらへ案内させよう」

この小松邸には、池田屋事件で新撰組に捕まった古高も出入りをしていて。長州の間者を纏め薩摩藩だけではなく熊本藩や鳥取藩の同志と連絡を付けたりする中、小松とも接点ができたのだ。

それを知っていた桂は、感慨深げに部屋を見回したため息をついた。

翌日には小松邸での逗留が始まり、大久保も久しぶりに顔を見せた。

「私の邸宅では手狭だったので茶室もある小松殿にお願いした。むさ苦しい男どもに囲まれるならば、桂くんは茶の一つでもと考えた訳だ」

「むさ苦しいのは西郷だけであろう」

小松も容赦がなかった。

「お茶とあらば喜んで」

「新撰組の動きが活発化していると言うのに、吉之助が兵を率いてきたから余計にうっとおしくなっている。さっさと会談を済ませてもらい、人心地着きたいものだ。なあ桂くん」

「今度はそうしたいと心から願って止みませんよ」

「で、小僧。少しは成長したか？」

急に話しを振られた和奈は、取り合えずはいと答えた。

「・・・成長していないではないか」

「そうでもないですよ。ちゃんと育っていますからご心配なく」

桂の笑顔にふんと鼻を鳴らした大久保は、会談が終るまではもう来ないと告げ部屋を後にした。

「何しに来たんだ・・・」

以蔵は足を崩しながらぼやいた。

「彼なりの気苦労があるんだろうね」

大久保がどんな気苦労をしているのか、和奈はこの先も解らないだろうなと思った。

桂が到着してから四日後、西郷が小松邸に姿を見せると、続くように吉井仁左衛門も駆けつけて来た。

だが、茶室で向かい会っている西郷と桂は、どれだけ時間が過ぎても口を開く事はなく、時間も遅いと小松が入って来たので、結局なんの話もなく顔を合わせるだけで終ってしまった。

茶室から出て来た桂の雰囲気、和奈も声をかけられなかったし、武市も何も聞こうとはしない。吉井もほとほと困ったという顔で小松と共に部屋へ戻って行った。

数日おきに何度か顔を合わせていただが、初日と同じ繰り返しで話しは一向に進む気配はなかった。

長崎から京入りした龍馬は、大久保から会談の結果を聞きに来ていた。

「で、小松殿も困っているのだ。見合いよろしく、お互いを見つめ合うだけでなんの進展もなく、どうしたものかと」

「何をやっちゅうんだ二人とも」

「私に聞いてくれるな。言い出した本人は君だ、なんとかしたまえ」
大久保とてこのまま会談が進まず終るのは本意ではない。この先、

どう考えても長州とは手を結んでおかねばならないのだ。

「ちつくと行ってくるぜよ」

「半次郎を護衛に付ける。気をつけてな」

龍馬は今出川の太久保邸を出ると堀川通へと向かう。

まさか会談が進行していないとは、龍馬も面食らっていた。

小松邸に着くと、和奈との再会を喜ぶ間もなく、背中を向けて座って居る桂の後ろへと座った。

「なんで話しが進んどらせんのじゃ桂さん」

「僕から持ち出せと？ 冗談ではない。これ以上薩摩に頭をさげられるものか！」

「俺も何度か言ったんだがな。石頭のこいつはそればかりで困ってる」

高杉はもう勝手にしろと桂に言い放った。

「桂さんの気持ちも解るがのう。じゃが、わしも中岡や他のもんも皆、この日のために駆け回った。長州と薩摩が手を握るのは両藩のためだけじゃないき。これからのこの国のためじゃ。それはよう解ってくれてると思うちよったが」

「そんな事、僕だって解っている！ だがしかし、僕から同盟の話を切り出すのは長州が薩摩に助けを求めているようで、武士としてそれが我慢ならないんだ！」

「そこで武士を出してどうするか。わざわざ京まで来て、西郷さんの面眺めるだけで帰るのか？」

ようやく桂は向けていた背中を返した。

「同盟が成らず、長州がこのまま幕府の手で滅びても、薩摩が倒幕の意志を継ぐのであれば顔を合わせるだけに終っても構わない！」

「こら小五郎！ 縁起でもない事言うな！」

「そうですよ小五郎さん！」

ずっと不機嫌な桂に、苛々している高杉を見て頭を痛めていた。だからと、国を動かす立場の桂の代わりなどできるはずもない。品川と以蔵も警護に当たる他は術がなく、武市と高杉も説得に当たる

しかない。桂が決めなければ事は進展しないのだ。

「高杉くんはどう考えちやる？」

「どうもこうも、小五郎がこれではな。俺が切り出してもこいつは納得せん」

桂を説得しようがないと思った龍馬は、その足で大久保邸に戻った。桂が無理ならば西郷を説き伏せるしか手立てが見つからなかったのだ。

「まっこと、困ったぜよ西郷さん」

「長州が和議をしたかと申したのなら、先方よい言葉をかけうのが筋だろう」

「西郷さんもこの国の事をよお考えちゅうじゃろ？ 桂さんはわしに言うたぜよ。長州が減きも、薩摩がその後を継いでくれれば本望やき、と。長州から頭を下げられんがは、西郷さんもよお解っちゅうはずだ。これから先を憂いとる二人がいがみ合い続けるのは、この国のためにならんぜよ」

「おいから頭を下げろと言うのか」

「面子の張り合いをしちゅう時じゃーないが。幕府は既に動いちゅう、いつ兵が長州に向かうか解らん。しょうまっことこの国から長州が消えても良いと言ううがかえ？」

長州の戦争における熟練度は西郷にとっても失いがたき事である。長州が崩れれば、追従していた諸藩の足並みも乱れ、静観している藩は幕府へ付くかも知れない。

「西郷さん、ここはこの国の先を考えて、薩摩から長州藩に同盟を申し入れてくれんか？ どうかこの通りじゃ」

龍馬が頭を下げる。

「おはんがここで頭を下げてもしよがなかだろう。もう解ったから頭を上げてくれんか」

「じゃー、話ししてくれるがかえ？」

「ああ。わしからから同盟の話しをしもんそ」

西郷は明日もう一度小松邸に行くと約束してくれた。

そして慶応二年一月二十二日。龍馬が立会人として隣席し、薩摩藩と長州藩は政治と軍事面において六つの条件を記し同盟の密約を交わしたのである。

言葉では足りぬと密約締結後も不信感を抱く桂は、この条約に龍馬の盟約履行の裏書を申し出た。

「わしの署名で桂さんが安心するならさせてもらうぜよ」

「立役者は坂本くんだ。晋作もこれでいいね？」

「おい、俺の意見なんかひとつも聞いてないくせに今更聞くな！」

「龍馬の保証など、俺にとっては不安しかないが」

武市の言葉に、そうかも知れないね、と桂は笑った。

「だが、坂本くんならば、薩摩がこれを破ったとしても、なんとか策を考える男だと見込んでいるんだよ」

それだけ桂の薩摩に対する不信感は根強いものだったのだろう。

二回も直前で肩透かしをくらっている、簡単には消せないのだ。

「大船に乗ったつもりで居とうせ。そんな時はこの体を張って何らあするき」

「また沈まなければいいがな」

それは困ると高杉が突っ込み、小船ではないから安心しろと桂が補う。

「さあ、今夜は是くらいで休むとしよう」

一安心したと、龍馬は伏見の寺田屋へと戻って行き、和奈達もそれぞれ部屋へ引き上げて行った。

品川はこのまま小松の家に厄介になることになった。

「人質・・・」

「そんな言い方をしないでほしいな」

「ふん」

「品川くんは監禁される訳ではない。京へ立ち入りを禁じられている以上、行動に制限はつくが、小松殿は大久保さんよりは温和な方。不当な扱いはなさらないよ」

それでも不満だという顔を桂に向ける。

「僕たちもこれからが、大変なんだ」

「解ってる。まあ、小五郎なら大丈夫だ。桂木さんやチビもいるし安心してるさ」

自分の背を棚に上げるのかと桂が笑う。

「五月蠅い！」

「しかし珍しい事もあるものだ。俺が、とは言わないんだな」

「阿呆が」

今こそ元気にしているが、いずれこの男は立ち上がる事もできなくなり、口を開くこともままならなくなってしまうだろう。そうなる前に高杉の念願を叶えたいのが、桂の今の願いだった。

其之三 因果

安政五年。江戸幕府大老井伊直弼が日米修好通商条約の調印を無勅許で行い、徳川家茂を將軍継嗣に決定した。

これを受けて、水戸老公は尾張藩主、福井藩主と連合体制を執る形で無勅許調印は不敬と、不時登城（定式登城日以外の登城）し詰問に訪れた。

これが井伊にとっては良い口実となり、不時登城をして御政道を乱した罪は重いとして、彼らを隠居謹慎の処分を下したのである。

攘夷論者である自分の考えを無視するように、朝廷の許可もなく締結した事に激怒した孝明天皇は、水戸藩に対して井伊を糾弾するよう勅令を下す。

井伊はこの勅命が関白の裁可を経ずの下賜であると知り、勅許が下されないのは尊攘派の工作によるものだとして、十月十八日、水戸藩士の打首を皮切りに尊王攘夷派（主に長州藩の尊攘派）、一橋派大名や公卿、志士に対し弾圧を始めたのである。

捕縛された志士は江戸へ送くられ詮議を受けた後、切腹または死罪の酷刑に処せられ、幕府の閣僚内でも、非門閥の幕臣などが謹慎等に処罰の対象となった。

安政七年三月、水戸藩と薩摩藩の脱藩浪士達が、桜田門外において彦根藩の行列を襲撃、井伊を討った。

安政の大獄は、言いの死と共に幕を下した。

京へ来た桂達を訪問した後、大久保は洛北の岩倉村を訪れていた。「かような処へ、そなたが直に来ようとは思ってもよらなんだ」

小ぶりの初老の男が大久保を出迎えた。

「岩倉卿におかれましては、ご健勝で在られます事、なによりと存じます」

「近頃、世俗が騒がしゅうて蟄居ちつきよの身ではあるが、気になり申して

おった処じゃ」

「禁門の変にて攘夷強行派は一掃、岩倉殿の冤罪が明らやに成り申しますに、赦免も下りず洛中への帰参許可も有りませぬとは、遺憾をば覚えて止みませぬ」

安政の大獄が皇室や公家にまで及ぶと危惧し、そうなれば更に朝幕関係の悪化を招いてしまうと、京都所司代や伏見奉行などを周り、双方の対立が如何にこの国にとって大過であるかを解いたのが岩倉具視である。

「ただに、かような事を言いに参加したのではあるまい？」

西郷と共に薩摩藩の実権を掌握していると言っているいい男が、自分の身を案じて行動するとは岩倉には思えなかった。

「此処へ参る薩人が増えておる故、そろそろと思うておった処じゃ」大久保がにこりと笑みを浮かべた。

「ここよりは失礼仕り、建前御口上無しにてお話ししたい所存、宜しゅうございますか岩倉殿」

「もとより其のつもりで、貴殿に手紙を出した。遠慮はいらぬと申し上げる」

「卿が、政局と薩長の動向を探っておられたのは承知致しております」

「ならば話し易いと云うものよ。今世は混乱に充ち、京市中に居る市井の臣達が先を憂いておる。確固不拔にして天下の人心を収攬するには、施政の大綱を起す前に諸藩主を京に召集し、沿海五カ国である薩摩・長州・土佐・仙台・佐賀を五大老として、政に参与さすべしであろう」

朝敵である長州との和解を、薩摩から動いて成せと言っているのだ。

長州が三條を抱き込むというのであれば、岩倉を抱き込み朝廷への関与を図るのが、今自分のすべき事と大久保は考えたのだ。

「公のご想察の深さ、感服致します」

「動くか、大久保よ」

「は。僭越至極ながら、今が天命の時と思いますれば」

「政が決定は朝廷、執行は幕府が当たる体裁をば構築すべき也と思うておった。其れ無くして、洛中へ戻っても致し方ない事である。だが、もはや幕府は独走を始めておる。このまま大患を煩っている、国家転覆の危地に陥りかねぬ」

「公武合体の意を持っておられた卿が、倒幕を、と申されるのですか？」

「皆まで言わせるか。そなたら薩人が動くのであれば、意を違える必要はあるまい」

倒幕に傾くとの言葉を岩倉から引き出した大久保は、西郷が兵を上洛させた事を告げると共に、長州との連携についても推進める事を約束した。

朝敵とされた長州。

戦国時代（十五世紀末から十六世紀末）、毛利元就が一代にして国人領土から戦国大名へと成長した。

最盛期には安芸・周防・長門・備中半国・備後・伯耆半国・出雲・石見・隠岐、北九州の一部を領国に置いていた。

しかし、豊臣秀吉に仕えていた毛利輝元の時代、一族が東軍（関ヶ原の合戦で西軍の総大将として出陣）に内通していることが露見し、輝元の戦争責任が問われ所領安堵を反故し、毛利家は減封処分になってしまう。

輝元は隠居し、毛利秀就には周防・長門の二国が与えられ、大国としての時を終える。

領土を四分の一にまで減らされながらも、検地によって五十三万九千二百六十八石余もの結果を出す。しかし幕閣は、敗軍となった西軍の総大将となった毛利五十万石の分限を過ぎる上、御前帳の石高から急増も理にそぐわないと考え高石高を命じた。

これにより幕府は高石高は毛利家の因果を考え、高普請役負担を強いられても仕方がないと、七割の三十六万九千四百十一石のみ表

高しか認めなかった。

その裏で、新田開発など八十一万石にまでのぼり百万石を超える石高をはじき出した長州は勢いを付けた。

さらに新しい居城地を築くため、防府・山口・萩の三つに絞り幕府に提示した。だがここでも防府・山口についてはその分限ではなく、萩に居城を置くことを幕府は命令したのだ。

度重なる幕府からの仕打ちに、長州は国是を倒幕へと推進めていったのである。

薩摩は領土の多くがシラス台地という土壌であるため土地は貧しかった。加えて台風や火山活動などの天災も多く、財政は藩政初期から窮迫状態だった。

追討ちをかけるように、幕府は御手伝普請を申し付け、木曾三川改修工事を命ぜられ莫大な出費を被った藩財政は危地に瀕してしまふ。

家老平田鞆負は、幕府の命令とは言え、この工事で多くの犠牲を出した上、藩財政を疲弊させたとその責任を感じて工事完了後に自宅で自害してしまう。

八代目藩主島津重豪はこれらの苦境に屈することなく、藩政の改革を推進め幕府との繋がりを強固にしようと奔走した。

三女の茂姫を十一代将軍徳川家斉へ嫁がせ、嘉永四年には十三代目となる徳川家定に篤姫を嫁がせることで、薩摩藩の政治的影響力を拡大させて行ったのである。

また琉球との貿易や藩債整理に着手、砂糖専売制を打ち出し財政は好転を記し、公武合体派として幕政にさらなる影響力を持つようになり、第十一代藩主島津斉彬は、下士だった西郷隆盛と大久保一蔵を政に加え、朝廷へも関わりを持つとした。

藩政とは逆に、幕府からの圧力を良しとしない尊攘派は後を経たず、やがて藩論を尊攘派志士らが台頭し始めた。

井伊直政により本領を安堵されたが、直弼が行った安政の大獄に

より多くの薩摩藩士が捕縛・処分されてしまった。

直弼と將軍継嗣問題で対立していた斉彬は、井伊のこの所業は幕府の弾圧であると反感を持ち、兵を率いて上洛を決意。だが出兵前に斉彬が急死することになり、藩政を斉彬の父斉興が握る事になってしまい、藩論は覆され出兵は頓挫することになってしまった。

大獄最後の処刑者は長州尊攘派吉田松陰となり、井伊を薩摩の者が討った。

「似て似ぬ者だが心は同じ、小ならんことを欲し、胆は大ならん事を欲すものだ」

長州と薩摩の歴史は違うものの、幕府に対する憤りは一つの道へ繋がり出している。と、大久保は長州との間に垂れた繋属する長久の鏈に、因縁の深さを感じざるを得なかった。

薩摩との密約が締結した翌日の朝、新撰組が龍馬の足取りを必死で追いかけていた。

「幕府の連中に先越されるんじゃねえぞ！」

見廻りに入っていない隊が搜索に当たる事になった一番隊、三番隊と八番隊は土方の怒声と共に屯所を出た。無論、見廻り組みも情報を抑えれば知らせる事になっている。

「こうちよくちよく京に出て来るったあな」

沖田はどうしても行くといい張り、仕方なく土方が同行する事で近藤は許可を出した。

「寝てりゃいいのに」

久々の羽織姿だった沖田は、こんな時に寝てたら武士の名折れだと言う。

龍馬だけではなく、薩摩藩の動きも気になっていた土方は、見張りを伏見と二本松の両藩邸に隊士を数名向かわせていた。

「どっちで釣れるか、幕府が先に坂本を見つけるか」

「必死ですもんねえ、奴さん」

「だろうな。長州には出した手を噛み付かれて、薩摩まで足並みを乱したんだ。そりゃあ躍起になるさ」

後ろを小走りについて行く赤井は、必死で記憶を探っていた。

（慶応二年？ 坂本龍馬が暗殺されたのはいつだった？ 寺田屋。そう、寺田屋だ。いや、違う。暗殺はまだ先だったよな？）

「どうした赤井？ まだ傷が痛むってんじゃないだろうな？」

足が遅くなっていたのか、土方が遅れている赤井に声をかける。

「いえ、もう大丈夫です」

寺田屋の名前を出す訳にはいかなかった。龍馬に約束したからではなく、寺田屋を名指しできる根拠がないからだ。疑いが完全に晴れない身で潜伏先を告げたら最後、間者扱いは必至だ。とは言え、新撰組隊士として黙っているべきかと心で葛藤を繰り返した。「やっぱり何か隠してますよね」

沖田は土方の肩越しにそう言った。

「まだ言ってるのか」

「だって、あの顔ですよ？ 女恋しさに思案に暮れてると思えませんか」

「自分の隊士ぐらい、少しは信じてやったらどうだ？」

「そうしたいのは山々なんですよ」

狐と狸の化かし合い。

屯所に間者が居ると同じく、新撰組も町人や商人に身を変え各藩の同行を探っているが、薩摩や長州、会津などの大きな藩になると警戒が厳しく欲しい情報の収集に追いついていない。だから藩と繋がりがあある宿所や庄屋、問屋界限に潜ませ、志士の動きを監察している。

「こっちの動きが漏れ過ぎるのが気に入らねえ」

定期的に見廻りの順路を変えても、間者を警戒して身元を調べても、藩の正式な後押しがある者の入隊をすべて防ぎ切るのは難題だった。

「伏見奉行所に行きましようか？」

「それができてたら苦労してないぞ」

会津藩の後ろ盾があると言うだけで、幕府の役人と同じ待遇を与えられている訳ではないのだ。

「とにかく足使うしか今ところは手立てがないんだ」

土方は進める足を早めた。

小松から滞在を許可された桂の処へと、中岡が陸援隊の報告をしにやって来た。

結成した陸援隊に高杉は驚いたが、桂は土佐藩の乾が動いたという方に驚嘆する。

「よもや土佐がこの時期に動くとは・・・信じられないな」

「俺も吃驚です。裏で誰かが糸引いた感じですけど、実際に名指しで言われた訳じゃないんで、なんとも言えません」

「それが誰かなんて察しが付きすぎるよ。京から追い出されたのは本当に痛手だ」

政策の裏を縫うのは京に居なくても可能だが、直接関与できる事は限られてくる。

今回の陸援隊創設も、土佐を巻き込みたい薩摩の動きが在ると考えていい。幕府寄りの土佐がこちらへ付けば、一気に形勢は倒幕派に傾くのだ。

「小五郎さん」

茶室に顔を出した和奈は、そこに居た中岡にどうしたのかと聞いた。

「土佐藩詰めじゃなかったんですか？」

そう含み笑いをしながら意味深な顔の和奈に、中岡は片目を瞑って胸の前で片手を立てた。

高杉がが疑問を持てば、龍馬以上に根掘り葉掘り聞かれるのは解っている。まして桂にまでばれたら、乾と同じく勝手に話を進めてしまいそうな予感がしたのだ。

「奇兵隊との連携が面白そうだが、中岡個人の問題も面白そうだな」

中岡の懇願も徒労に終り、すぐに何事か察した高杉の手が背中を叩く。

「駄目だよ晋作。おまえが首を突っ込むと碌な事にならないんだ。中岡くんが可哀想だから詮索はなしだ」

和奈もその話題にはそれ以上触れないでおいた。以蔵の件で高杉がどれだけ追及されたか、ここへ来る途中に確認済みなのだ。

「寺田屋へ行ってきました。龍馬さんが祝いをするから来いって。桂木さんと岩村さんも行きますが、皆さんどうされますか？」

「僕達は遠慮しておくよ。中岡くんは行ったらどうだい？」

「いえ。まだやる事があるんで土佐藩に戻ります。和太郎、龍馬さんにはそう言っというて」

「はい、解りました。じゃあ、行ってきます」

「ああ、楽しんでおいで」

小松邸から伏見までは二里（約八キロ）の距離がある。

新撰組が多く出ていると新兵衛が知らせに訪れ、そのまま護衛をすると一行に加わってくれた。

見廻りの順路を事前に調べてあるのだろう。新兵衛は躊躇いもせず路地や小通りを蛇行しながら進んで行く。

以蔵と新兵衛の背を、距離を開けて和奈と武市が追い掛ける。

「もし、あの男にまた会ったらどうする？」

「赤井くんですか？」

「ああ。おまえは・・・斬れるのか？」

酷な質問だと解っている。だが、もし剣を交える事になったらと武市は不安になっていた。斬らなければ和奈が斬られる事になるかも知れないのだ。

「そうですね。剣を抜いたら、僕も抜きます」

少し躊躇った様だったが、後の言葉はしっかりした口調になっていた。

「それならいい。左はおまえに任せているんだ、迷うなよ」

「はい」

幕府の動きが慌しいとの報告で、大久保は二本松藩邸から寺田屋に近い伏見藩邸へと移って来た。

西郷が京に滞在する間は、どちらかが伏見に来る必要がある。まだ事実上佐幕の西郷と居を共にしては、要らぬ注意を幕府に与える事になるのだ。

「坂本くんの情報が知れているか」

「恐らく。居場所を特定しているかは不明ですが」

「小松邸に入ったのを知られてなければいいがな。まったく、吉之助がさっさと話しを終えていたら厄介は増えなかったというのに」

「私はどうしましょう」

新兵衛は小松邸にやっている。半次郎を動かして寺田屋を見張らせるか、それとも幕府の動きを探らせるか大久保は一瞬迷った。

「新兵衛は武市くん達と寺田屋に向かう、としておこう。おまえは幕府の動きを探れ。もし、坂本くんの居場所が知れていると解つたらすぐ知らせろ」

「御意」

新撰組の方も気になっていた。

幕府の騒ぎはおのずと伝わるだろう。そうならばあの土方も動く。

「桂くん達が京を出るまでに、なんとかせねばな」

小松邸に居る間は良しとしても、その後が問題となる。

万が一龍馬が捕縛されたら武市が動く、となると和奈も動く。それは桂と高杉が動くも同然なのだ。

「やれやれ。本当に気が休まる間もない」

大久保はそれでも、何か楽しんでる様に微笑んだ。

会津藩から使いが来たのは、一番隊が見廻りから戻ったのとはほぼ同時だった。

伏見奉行所で捕縛の用意が行われているとのことだった。

「先こされちゃいましたね」

「すぐ出るぞ。伏見が動くなら範囲は狭くなる」

こうなれば伏見にある宿所を片っ端から回るしかない。

「後手後手ですね」

沖田の言葉に睨み返す。

「役人と連携が取れるなんて思っちゃいないが、報せの一本もないのはさすがに腹が立つ」

「ええ」

伏見奉行所より捕方が出た頃、市中を駆け回っている新撰組のどの隊もまだ龍馬達の居所をつかめずにいた。

「南に行くぞ。あとは伏見奉行所の近辺だけだ」

陽がすっかり暮れてしまった頃、寺田屋へと着いた。

大久保の紹介により、龍馬が定宿としていた寺田屋は、尊王派や過激派志士達が謀議を行う場所として利用していた旅籠屋だ。

新兵衛はここで脇の道へと消え、和奈達は女将の案内で龍馬の部屋に顔を出した。

「おう、よう来たな。遠慮しやーせんと入れ入れ」

女性を傍らに、既にいい気分の龍馬が手招きをする。

「和太郎は初めてじゃったな。お龍って言てのう、わしのいい人じやき」

日本髪を結び、薄化粧の綺麗な人が恥ずかしそうに笑う。

「お龍と言います、よろしゅうに。桂木はんはお久しぶりどすなあ」

「ご無沙汰してます。馬鹿を相手に、いつもご苦勞が耐えないと思います。元氣そうでなにより」

以蔵もぺこりと頭を下げ部屋に入る。

「村木和太郎と言います」

お龍は寺田屋の女将、お登勢の娘だと武市が教えてくる。

「初めまして。龍はんからお話はよお聞いとりますんよ。岡田はん

に負けへん腕を持ってるって、そら自慢気に話しはるさかい、一度会ってみたいと思ってたんどす」

「とんでもないです、まだまだです」

頬笑んでいるのだが、なにか違和感を和奈は覚えた。桂の笑顔も数種類意味を持つが、このお龍の笑みの下にははまた違うものを感じたのだ。

「寒いから鍋にしたぜよ。寒い時は軍鶏が一番やき」

確かに部屋は火鉢の熱と鍋の湯気で暖かった。

剣を抜いて左に置くと、龍馬が猪口を差し出してきた。

「ほれほれ、今日は無礼講やき、和太郎も遠慮せずに飲みいーや」

「いつも無礼講だろう」

なぜおまえはいつも一言多いんだと、口を尖らせる。

「和太郎さんはどこの生まれおすの？」

お龍に銚子を差し出され、仕方なく猪口を持った手を上げる。

「萩という処です」

「えろう遠い処から来はったんおすなあ」

京都弁に加茂川館の女将を思い出した。いつもは記憶の底に静んでいる思い出を掘り起こされているようで、落ち着かない気分になる。

「せやけど、これだけいい殿方に囲まれるのも悪くあらへんおすなあ」

ころころとよく笑う人だ。

「おんし浮気はいかんぜよ」

「なんをいきなり言いはるんやろ、この人は」

「特に和太郎にゃ手を出したらいかんぜよ。おんしでも斬るという奴がおるき」

「手を出すって・・・」

この女性が自分に？

「放っておけ。酒に酔い出した龍馬を相手にするだけ疲れるぞ」

「はあ」

龍馬とお龍を他所に、以蔵は酒には手を出さず鍋をつついて、武市は手酌で酒を飲んでいる。

「うち、そろそろ湯を頂てきますさかい、皆はんはゆっくり食べておくれやす」

五月蠅かった龍馬はお龍がいなくなると急に静かになり、とろんとした目で鍋に箸を運んだ。

「解り易いですね、龍馬さんて」

「んー？ いいんじゃないじゃ。わしは淋しく一人で鍋を食べちゆうから、おんしらは楽しゆう喋っちよったらええき」

「いじけた・・・」

そう言う姿を見ると、本当にこの人が時代を動かしたあの坂本龍馬なのだろうか、和奈は疑心を抱いてしまう。

「で、これからおまえはどうする？」

「ほうじゃのう。薩長が手を組んだき、後は幕府の動き次第ぜよ。

このまま西郷さんが抑えてくれたらえいんけんど」

「そうだな。俺達は明日、桂さんと長州へ戻る」

「ほうか。そんならわしは長崎へ行くき、また何事かあったら知らせとおせ」

「早く京を出ろ。新撰組も躍起になっておまえを捜しているだろうからな」

「あの・・・」

ん？ と二人が顔を向ける。

「新撰組が皆を狙うのは、倒幕をしようとしているからですよね？」

「ああ。幕府に反旗を翻す志士は排除の対象だからな。だが龍馬は少し違う。以蔵が人斬りだったのは知っているだろう？」

「はい」

「新撰組に捕縛されかけた以蔵を、龍馬が助けに入った事があるんだ。その頃はまだ新撰組はそれが龍馬だとは知らず、手配書にも名を連ねてなかった」

江戸で黒船を見るまで龍馬にはまだ、確固たる倒幕の意志などは

なかった。

だが夷国の文化を知ることによって日本の幕藩体制がいかに封鎖的であるか、また開国が国にもたらす利益がどれだけ大きいかを痛感し、倒幕思想を抱くようになったのだ。

ここが武力倒幕を掲げる武市達勤王党との論点の違いである。

それが故、一旦は加盟した土佐勤王党からも脱け、土佐藩を脱藩し単独で長州や薩摩との交流を始めるようになった。

長州も薩摩も武力倒幕を目指していたが、桂の幕政改革に共通点を見出し、大久保ともその点では意見を一致させていた。

この両藩に同盟を組ませるという事は、幕府に対して再び協力的な圧力をかけれると言う事であり、それにより諸藩の追従があると龍馬は踏んだのだ。

そして富国強兵（国家経済を発展させ軍事力増強を促す政策）を敷き、夷国の圧力を退ける力を国に持たせること、それが龍馬の倒幕の礎となって行った。

こうして京で暗躍し続ける龍馬を、幕府体制下の新撰組が黙って活動させるはずもなかった。

新撰組は坂本龍馬という存在を突き止め、裏づけはないものの、朝敵となった長州と深い関係を築いていると当たりをつけて、幕府に仇なす者と捕縛対象としたのだ。

「現にこうして長州と薩摩は密約を交わしている」

「裏で動かれたら困る、って事か」

「そうだな。密約が組まれたのはまだ知られてないが、長州再征伐に薩摩は出兵を拒否している。京で龍馬がうろうろして居れば、新撰組とて関連性を持つのは必至だろう」

「心配せんでええき。近藤さんも話せば判る人やと思うとる」

「阿呆が。本当にそうならば彼らと肩並べ酒でも飲んでいるだろうが」

「きつとそういう日が来るぜよ」

本気で龍馬はそう思っているらしい。顔が嬉しそうにきらきらと

輝いている。

「無駄な努力だ、と言わせてもらう」

「おんしは相変わらず夢がないのう」

「現実主義と言ってくれ」

そんな日がくれば、また赤井と話せるのだろうか。

「ほら見ろ、和太郎が沈んでもうたやか」

「いえ！ 沈んだわけじゃないです。誰も剣を抜くことがない日を、龍馬さんは創りたいんですね？」

「そうぜよ」

そんな楽しそうに言われても。

和奈には龍馬の描く倒幕が絵空事のように思えた。

武力倒幕を龍馬が好まないのは、後に残る怨恨を危惧するからなのだろう。

幕府は必ず武力で圧して来る。長州での内乱がいい例なのだ。そして、武士が起こす戦争で巻き添えを食うのは力ない人達だ。

あまつさえ過酷な労働の日々の中で、役人から人間以下の扱いを受け、先の戦により家を失い今を生きるのが精一杯な彼らに、幕府は救いの手を伸べず再度の征伐を行おうとしている。それは困窮を極めている生活をさらに苦にするという事なのだ。そんな幕府を倒幕なくして倒せるとは思えなかった。

「そんな日が、本当に来るんでしょうか？」

ついそう聞いてしまった。

「そのためにわしは駆けつりまわっちゅう。下げて済むなら、なんぼでもこの頭を下げる。全部この国のためだと思っちゅう」

和奈の疑問に龍馬は真顔でそう答えた。

「おまえの頭で済むなら安いものだ」

「そうじゃろそうじゃろ」

その時、焦燥感が胸のあたりに走った。

りいーん。

「えっ？」

和奈は忘れていた音を耳にした。

其之四 寺田屋事件

鈴の音。

あの月夜の日を最後に聞くことのなかった音。

「和太郎？」

なぜ、今聞こえたのだろうか。

「いえ・・・なんでもありません」

あの時と同じく、鈴の音の元はどこを見てもなかったし、武市らには聞こえなかったようだ。

そこにドタドタと駆けてくる足音が聞こえた。

「誰じゃ、ほたえとうのは」

いきなり障子が開き、お龍が袷一枚の姿で飛び込んできた。

「なにんちゆうかつこで入ってくるのか」

「龍さん！ 役人が外に！」

その言葉で武市は脇に置いていた剣を腰に差し、龍馬は行灯の火を消すとお龍の手を取り後ろへやった。

「足を掴まれたか」

そつと障子を少し開けると、伏見奉行と書かれたいくつもの提灯が見えた。

「まずいな」

幾つもの足音が部屋へと近づいて来る。

「ああ、まずいのう」

「暢気に構えるな！」

以蔵の言葉に和奈も鞘に手をやった。

開いた障子がさらに大きく開け放たれ、捕方が戸口に立ち中を見回した。

「伏見奉行所である。坂本龍馬だな？ 幕府への不逞行為によりおまえ達を召捕る！」

捕方が足を動かした瞬間、武市の剣が一閃し、相手の体に食い込

んで赤い線を刻んだ。

「下がれ！」

間髪入れず出した右腕を返し、左へと薙ぎ払う。

「こやつ！」

戸の影から一人が上段に構えて武市へと斬りかかる。

「くっ！」

その腰から肩へと和奈の剣が振り上げられた。

「退かねば斬って捨てる！」

武市の怒声に数人が階段を転げ落ちて行くが、そこにはまだ十数人の捕方が居る。

多勢に四人では突破して階段を下りるのは難しい。たとえ降りれたとしても上下で挟まれれば退路を絶たれる。

一斉に捕方が動き、部屋へと雪崩れこんで来た。

以蔵は先頭に出ると必至で捕方を押さえに掛かる。

和奈も対峙する相手を斬りながら、なんとか部屋から追い出そうと足を進める。その横で武市は罅迫り合いをしていた捕方の腹を蹴った。

ガァーン！

いきなり耳を聳^{ろう}する音が寺田屋全ての物音を消した。

「こりゃあたまげたぜよ」

後ろを見ると、手に小さな銃を持った龍馬が耳に指を入れていた。「なぜそんな物を持ってる！」

武市が怒鳴り、進み出て来た龍馬は和奈との間をゆっくりと出て行くと、以蔵を後ろへ押しやった。

「わしはこれの扱いになれちゃーせんから、どこに当たるか解らんき。怪我しとうなかつたら、ここを通してくれんか？」

だが捕方達は我を取り戻し、止まった動きを再開させた。

「出るな龍馬！」

以蔵はその肩を掴んで引き戻そうとしたが、龍馬はもう一発、階段に向けていた銃の引き金を引いた。

「うわぁ！」

体には当たらなかったものの、闘志を損なわずには十分だった。

「耳が壊れるから止める！」

左手で耳を塞ぐ以蔵。

武市は止まっている捕方の腕を切り落としながら、龍馬の背に自分の背をくっつけた。

「そんなもん役にたつか！」

連射できない手銃では、せいぜい数名を殺れるだけだ。弾がなくなれば事態は元に戻ってしまう。

それは捕方達も解ったのか、包囲する距離を詰め始めた。

「いらん事をゆうがやないぜよ」

一度は階段近くまで進めたが、気を取り戻した捕方に再び部屋へと押し戻される。

「ここは一旦退く！」

「おう！ それしかないみたいぜよ」

ザクッ！

視線を一瞬そらした龍馬に、捕方の振った剣が下ろされる。

「！」

「阿呆が！」

咄嗟の事に、龍馬は剣でなく手にしていた銃で受け止めたのだ。

「龍馬さん！」

和奈は背後から捕方の背中に剣を振るい、手を抑えている龍馬の前に立つ。

「ここから下へ行け！」

武市が部屋の隅の壁を蹴り飛ばすと、黒い空間が現れた。

「急げ！」

以蔵は壁に出来た穴を背に捕方へと剣を向ける。

「ここは俺が食い止める！ さっさとその馬鹿を連れて下へ行け！」
手から血を滴らせている龍馬を抱えるように、まずお龍が穴へと入って行く。

「おまえも来い！」

和奈の手を握り、無理矢理に穴へと連れ込む。

「行ってくれ！」

以蔵は穴の入口で出て来る捕方を斬り捨てて行く。

階段を急いで下りた武市は上を見上げた。

「来い！」

武市の声で、剣を薙ぎに払った以蔵が階段へと滑り降りて来た。

「落とせ！」

以蔵の声と同時に、武市は階段の一段目へと足を思いっきり踏み下ろし、階段が蛇腹の様に落ちた。

巻き込まれた数名の捕方が地面へと落ちて来た。その腹に剣を突き差した以蔵は、崩れた階段を脇へやると、引き戸を閉めて門を下ろした。

「下へ！」

座り込んだ武市が地面に置かれた木の板を持ち上げると、ぽっかり地面に穴が開いているのが見えた。

そこへ龍馬とお龍が滑り込む。

「俺はここから外に出て奴らを引き付けます」

「頼む」

「一人で!？」

「問答する気はないぞ！」

半ば落とされるように背中を押された和奈の後を、武市が降りて行く。

以蔵は板を戻すと上に土を被せ、寺田屋の裏へ出る戸から外へと踊り出した。

穴を降りると、人一人が通れる空間が横にずっと続いていた。

「ここから川の欄干下に出る。小船が在るから、お龍さんはそれに龍馬を乗せて行け。濠川と合流したら左へ上らねばならんが、權はつかえるか？」

「使えずとも、やります」

穴の出口の簾を潜ると真上に欄干が在った。目の前に縄で手結われた小船が流れに揺れていた。

「流れはきつくはないはずだ。伏見藩邸の横に着いたら大久保さんに庇護を頼め」

二人が乗り込むと、そこに寝かせて上から莫座いざを掛け、紐を解いて足で押し出した。

「行くぞ」

欄干は寺田屋から一軒ほど離れた処に在った。

土手を西へと進み、一つ目の通りの処で登ると右手に視線をやる。まだ幾人かの捕方が見えたが、まだこちらには気付いていない。

「岩村さん大丈夫でしょうか？」

「今はその心配より、早くここから離れるのが先決だ」

路地へと走った処で、目の前に人影が現れ武市が足を止めた。

薄っすらと月の光りで顔が浮かび上がる。

「田中さん？」

くいっ、と首を振り走り出す新兵衛の後を、二人は急いで追いかけた。

「なぜ？」

「戻ったら幕府が動いているからと監視を頼まれました。まさか奉行所がこんな早く出てくるとは思わず、先手を打てず申し訳ない」

「いや、俺達も注意を怠った。手を煩わせて済まぬのはこちらだ。

我々より龍馬を頼みたい」

「舟には半次郎が付きましたからご心配なく」

油掛通に突き当って左へと折れ濠川に出ると、橋を渡り右へと方向を変えた。

「ちっ！」

武市は腕を上げて和奈を止めた。

その腕から前を見た先に、水浅葱色の羽織が在った。

向こうもこちらに気付いたらしく、歩みを進めて来る。

「こんな時に厄介な相手と出くわすとは」

「一番隊だ」

見知った顔が三つ。土方と沖田、それに赤井が居る。

「こんな夜更けにどうした？」

腕を組んで居るが、いつでも斬り込める気迫を土方は漂わせていた。

「なに、道に迷うてしまっただけです」

さらりと返答した武市に目を細める。

「ほう。山道でもない京で道に迷うとは、また珍しい人間も居たものだ。なあ、村木よ」

武市の横に居るた和奈を見て、自分の推測は当たっていたと笑いを浮かべた。

「お久しぶりです土方さん。いつぞやは、ありがとうございました」

「ちゃんと礼が言えるようになったか、大したもんだ。で、少しは腕も上げたのか？」

沖田が土方の横に出て来る。

「残念だけど、甘味屋仲間が減っちゃいますね」

隊士は五人。土方と沖田だけならばなんとか逃げ切れる数だが、隊士の内一人は人斬りと異名を持つ大石だ。すんなりと通してはくれないだろう。

「他の奴はどうでもいい。沖田は俺が、新兵衛さん、申し訳ないが大石を頼みます。和太郎は土方、できるか？」

小声で武市は言った。

「はい」

できる、とは思えなかったがやるしかない。

「賢明な振り当てだが、沖田の三段突きにはご注意を」

「承知している」

土方が利き足を出して半身になる。

「こそこそ逃げる算段かい？」

「さて、なんの事やら」

「おいおい。返り血浴びた格好でなにを寝惚けてやがる」

「さしずめ、寝込みを奉行所に襲われて逃げて来た、ってところですかね」

「おまえ、誰だ？」

手配書の人相書きに片目の男は居ない。横に立つ男も見知らぬ奴だった。発する剣気は並ではない。

「通してもらえぬなら、無理を強いて通るまで」

和奈はまた、土方と沖田の放つ剣気に当てられていた。

一呼吸ついて腰の剣に意識を向ける。

ここで臆する訳にはいかない、なんとしても無事に藩邸へ戻らなくてはならないのだから。

鞘に手を当て、剣に心を重ねる。

「下がってろ、邪魔すんじゃないぞおまえら」

土方が後ろの隊士に言うと、顔を見合わせながら隊士達は遠巻きに距離を取った。

「！」

その瞬間、和奈の足が地面を蹴り、振り向いた土方の懷に飛び込んでいた。

「なっ！」

脇差を抜いて和奈の剣を止める。

「おまえ・・・」

見下ろした和奈の目にぞくりとする。

和奈が出たと同時に、武市も沖田との間合いを詰めていた。

「得意の突きも間合いがなければ出せまい」

顔の前で剣を受けた沖田の顔が歪んだ。

キン！

新兵衛も大石と打ち合いになっている。

幾つもの剣戟音が辺りに響き渡る。

時間を費やせば捕方に見つかる可能性は増えてしまう。そうなれば形勢は不利となり、ますますこの場から逃げおおせる機会が無く

なる。

土方は平突きを和奈の胸に向けて出すが、紙一重で交わされ背後を取られた。

「ちっ！」

たった一年でか？

人を斬って震えていた男とはまるで別人になっているその姿に、土方は驚愕を隠せなかった。

「なんの冗談だ？」

振り向き様に受けた剣越しに、土方は呟いた。

「この俺がてめえなんざに後ろ取られるとはよ！」

振り上げた手を即座に振り下ろす。

「くっ！」

上体を反り交わすと、後ろに出した足から重心を前に移し、剣を鞘に納めて間合いを取った土方に飛び出した。

平突きの構えを取って、迫って来る和奈に狙いを定めて突き出すが、その剣は姿勢を低く取った和奈の髪の毛を掠っただけに終わった。

「ぐあっ！」

抜刀と同時に土方が後ろへ飛び退いた。

「土方さん！」

赤井の声が聞こえ、座り込んでいる土方との間に立った赤井を睨む。

「つたく！　なんだってんだ！」

土方は利き足の脛を斬られ、覚束ない足で剣先を地面に刺し立ち上がった。

「出てくんじゃねえって言っただろ！」

赤井に怒鳴りつける。

「その足じゃ無理です！」

剣を抜いて構えると、和奈を睨みつけた。

「どけ」

発せられた声はいつもの和奈の声ではない。

「どかないなら、斬る」

大津で見た、あの時の和奈だと赤井は悟る。

次の瞬間、和奈の顔が目の前に在った。

「赤井！」

腕を引っ張り、土方は和奈の横薙ぎを止めた。

「てめえにや無理だ！」

「土方さん！」

腕を払われて体がよろけ、上げた視線の先に膝を付いて座り込んでいる沖田が見えた。その前には武市が立っている。

「ちくしょう！」

走り出す足に力が入らない。

和奈に恐怖したのではなく、その場を包んでいるいくつもの剣気を感じ取り、体が萎縮し始めているのだ。

「沖田さん！」

傍らに駆け寄り、ただ立っているだけなのに斬り出す隙がない武市に、振るえる手で持った剣を構えた。

武市は赤井に感心を向けることなく、蹲った沖田に聞いた。

「その咳、労咳か？」

「！」

沖田は、口の周りにべつとりと血の付いた顔を武市に向けた。

「なんだその目は・・・なにが言いたいんだ！」

赤井を横へ突き飛ばし、立ち上がり様に武市へと斬りかかる掛かる沖田。

「僕はまだ戦える！ 戦えるんだ！」

何度も打ちに掛かる沖田から、普段の冷静さは失われていた。

「剣で戦う事だけが武士ではあるまい」

鏢を交えていた沖田の顔が驚き、剣を振る手が止まる。

【剣がなくても、武士は武士である事ができるんだよ】

山南の声が耳元で聞こえた気がした。

「五月蠅い！！」

なぜ山南さんもこの男もそんな事を僕に言うんだ！

「がはっ！」

一瞬できた隙を見て、武市の左手が沖田の胸を打った。

「ごふっ！ ごほっ、ごほごほっ！」

胸を抑えてその場に座り込み、激しい咳を繰り返す。その手の間から血が地面に滴り落ちた。

「沖田！」

それを見た大石は、新兵衛の剣を避けながら近寄って来ると、肩を抱かかえて武市から離す。

「しっかりしろ！」

注意が逸れた瞬間を逃さず、武市は新兵衛の腕を叩くと土方と対峙している和奈へと駆け寄った。

ギン！

土方は、利き足を斬られているせいで思うように動いていない。

二人が距離を取ったところに、武市が割って入った。

「和太郎、退け」

左手で和奈の体を後ろへ押す。

「邪魔すんじゃねえ！」

立っている土方の足には血が付いている。

「土方くん。その足では十分に戦えぬだろう」

「余計な心配なんざいらねえよ」

足元に流れ落ちた血が溜まっている。強がっているが、傷は深そうだ。

「すまないが、我々もゆっくりしておられぬのだ」

そう言った武市は、利き足を使えない土方の懐へ入ると剣の柄で突いた。

「ぐっ！」

腹を押さえて土方が座り込むと、和奈の腕を取って武市は路地へ駆け込んで行く。

大石と対峙していた新兵衛も、間合いを一気に空けてから、別の

路地へと駆け込んで行った。

「待て！」

「お・・・いし！ 追わなくていい！」

息も絶え絶えに、土方がそれを制止する。

「死に急ぐ必要はねえ」

追わせたところで、返り討ちにされ死体になることはあっても、あの三人を大石が一人で止めきれるとは思わなかった。

「俺がこの様か・・・」

和奈の抜刀の早さは並ではなかった。一年やそこら稽古しただけで、あれほどの剣速を出せるとは信じ難い事ではあった。

「沖田は？」

胸の打撲と咳のせいで気を失っている、と大石が言う。

「坂本も見つけられず手負いにされるとは、土方って男も情けないな」

腹立たしそうに土方は言い捨てた。

「あの二人、かなりの剣客だ」

「馬鹿野郎、三人だ」

病を押して出て来た沖田を責めるつもりは無かったが、常人であつたなら捕縛は出来ていたはずだ。

土方は拳を握り締める赤井を見た。

「まだまだ稽古はいるよな？」

「は・・・い」

弁解できない言葉だった。太刀打ちするどころか、なにも出来なかったのだから。

「戻るぞ」

足の傷を縛り、土方は大石に沖田を担がせると屯所へと戻って行った。

半次郎によって藩邸へと担ぎ込まれた龍馬は、西郷が派遣した医者の治療を受けていた。

「もう少しで指がなくなるところだったぞ」

布団に寝かされた龍馬は、出血のために意識を失っている。

「ありがとうございます、大久保様」

お龍が手を付き頭を下げる。

「礼などいらん。半次郎、木戸殿に事を報せて来い。この大久保が責任を持つから動くなと添えてな」

「はっ」

新兵衛を和奈達に付けたのは正解だったらしい。ただ新撰組とか言えば、新兵衛の顔を知られる事になるのだが。

「そうになると、薩摩に戻さねばならんな」

手ごまが減るのは痛い、ここで和奈達を斬らせる訳には行かなかった。

それから半刻（一時間）後、和奈達は藩邸へと着いた。さらに半刻経って後、以蔵も無事に姿を見せた。

「皆、無事でなによりだ」

武市は横に眠る龍馬の具合を聞き、一命を取り留めたことを聞かされ安堵に肩を下ろした。

「しかし時間がかかったな、新兵衛」

新撰組に出くわし、念のため迂回して来たので時間がかかったと説明した。

「そうか。一番隊に土方くんとは、運が悪かったな」

「伏見奉行の動きに合わせていたのでしょう」

「だろ。先に掴んでいたら、君達は寺田屋で死体になってたやも知れぬからな」

血に塗れている和奈の前に座り、にっと口元を上げる。

「おまえは私の忠告をちゃんと聞いていたのだな」

「忠告？」

大久保は腰にある剣を指差した。

「あ、あれですか」

「他に忠告なぞした覚えはない」

「まだまだ心もとないが、自分なりに解釈したようです」

武市が代わりに答えた。

「ふん。君や木戸くんの助力も大きかろう。いずれにせよ、私の言葉をちゃんと聞く子には褒美を出さねばならんな」

「はい？」

「風呂を沸かさせているから、とっとと行って着替えて来ぬか。ついでに着物も用意させた、有り難く思え」

はい！ と答えて慌てて飛び出した。

「何から何まで忝い」

「気にするな。で、桂木くん。赤井という男、どうだった？」

「今のところは何も喋ってはおりませんまい。私を見ても何も口にしませんでした。ただ、今回の件でどう動くかは予想だにしておりません」

「斬らなかったのか」

「相手が土方と沖田では、私とてそう容易くは斬れません」

斬る機会があったが、とそれは言わないでおいた。

質問の意味を説明するまでもなく答える男を見て、やはり先の襲撃には桂が絡んでいたと確信を得た。

「そうか」

これでまた手を打たねばならない。

「一先ず、君も風呂場へ行き、その格好をなんとかしたまえ。ああ、岩村くん、もちろん君もだ」

しっしっ、と手を振り二人を追い出すと、大久保は寝息を立てている龍馬に視線を落とした。

布団の上で、土方は薩摩藩邸に出してた密偵の死亡を聞いた。

「今日の朝、宇治川に浮かんでいたそうです」

赤井は近藤に命ぜられて土方の看護に付いていた。

「二本松の方は？」

「未だ連絡はありません。近藤さんは、賀茂川か高野川にでも上が

るんじゃないかと言っていました」

怪我をした右足を摩っていた形相が、般若の如く変わる。

「で、捕方の連中は？」

「それが、藩籍不明の浪士四十人と斬り合いになり、追跡してた男を逃がしてます」

「なんだそれは！」

「戦鬪があつた場所に八番隊が到着した時には、すでに捕方の大半は斬られてたそうです。藤堂くんが言うには、統制された一団だったって」

「統制？　おい、藤堂を呼んで来てくれ」

浪士四十人が夜中に徘徊し、役人相手に乱闘などこれまでに無かつた事だ。統制されたというのも気になった。

藤堂が部屋へ来ると、早速話しを聞き出した。

「捕方相手に、扇状の陣形を幾列も構えてました。そこらへんの浪士なら、俺達を見たら斬りかかって来るでしょう？」

「力量も測れない馬鹿が多いからな」

「なのに動じもせず、俺達に加わろうと駆け出したら、後ろに居た一人の号令であつという間に逃げられた。引き際を心得てるってか、あれはただの浪士じゃないっすよ」

「・・・薩摩」

「うわっ、それありっすか？」

薩摩なら伏見奉行の動きくらい手に入れるのは容易だろう。

「てか、なんで薩摩が坂本のために動く必要がある？」

いや、村木か？

「で、薩摩藩邸には誰が付いてる？」

「それが、近藤さんは出したいって言ったらしいっすけど、これ以上の犠牲は出したくないって、伊東さんが近藤さんに噛み付いて仕方なく同意して誰も出てないっすよ」

「また伊東かよ！」

うろろうと動き回る男に腸が煮えくり返る。

「捕方を襲ったのが薩摩という根拠がないって。それ言われたら、近藤さんは何も言えないっすよ」

確かに根拠も確証もなかった。だからと言って、監視させない手はないのだ。

「すみません。俺、伊東さんの腕を買って新撰組に紹介したのに、土方さんの邪魔する羽目になって申し訳ないっす」

「おまえのせいじゃない。いらんこと気にすんな。それより、伊東を説き伏せて見張りつけねえと、坂本に逃げられるぞ」

もう手遅れかも知れない。

「ああ、坂本ですが、負傷したらしいっす」

「手負いか」

「はい。両手斬られたみたいっすね。寺田屋を改めた役人は、血量からかなりの重症と見てます」

「部屋まで押し込んで逃がすたあな」

「坂本含め、たった四人だけだったらしいっすから、面目丸つぶれでしょう」

「俺達に報せとけば、今頃河原に坂本の首が乗ってたってえのに・・・ちよつとまで、四人だと？」

昨夜の三人と坂本で四人。そして捕方が逃した男。

「ええ。捕方が確認してます。三人の志士と坂本の女らしいのが居たって」

「数が合わねえ。逃走を手引きした奴が捕方を曳きつけたか、あの三人の誰かがそうなのか、か」

そこに意外な事を告げに沖田が現れた。

「なんだ、手配書じゃないか。どした？」

差し出された紙を見て訝しむ。

「岡田以蔵ですよ」

「んなこたあ解ってる！」

「奉行所が寺田屋に居た奴の似顔絵を作ったんです」
もう一枚の紙を畳に置く。

「髪型と服装は変わってますが、間違いないですよこれ」

ばつ印のついた手配書を横に並べる。書き手は違うが、特徴は確かに一致していた。

「岡田が居たなら、捕方十数人くらいだと逃げられても仕方ないです
すね」

「土佐で打首獄門になったんじゃないかなかったか？」

「ええ、ちゃんと首も晒されてます」

煮えたぎらない湯のように苛々が募っていく。

「土佐まで絡んでるってか！」

「それは無くなりました、一応。奉行所が土佐藩邸に確認に行つて
ます」

「で？」

「岡田以蔵の斬首は藩主山内殿も確認しており、紛う事なき事実、
と突っぱねられたそうです」

「くそっ！　ここまでくりゃ、西国の諸藩は敵だろと考えるしかね
えな」

「そんな強引な・・・九州五藩も四国四藩も幕軍に付いてますし、
浜田藩藩主は慶喜殿の実弟、松平武聰殿が藩主なんですよ？　滅多
なこと言わないで下さい」

「薩摩は違うだろう」

「ただ出兵を拒否しているってだけです。今のところは」

手詰まりだった。とにかく、伊東を解いて薩摩に監視の目を置か
なければと、土方は痛む足で伊東の処へと向かった。

昼を過ぎて目を覚ました龍馬の処に、大久保を始め和奈達が集ま
っていた。

「大久保さんには迷惑を掛けてしもうて、まっことすまん事この上
ない」

起き上がる体力がないので、布団の中で頭だけを動かす。

「心からそう思っているなら、銃なんぞで剣を受けるな」

呆れた表情を浮かべるしかない大久保に、もって言ってやってほしいと武市が言う。

「しかし医者を用意をしとったちゅうのは驚いたぜよ」

「まあ、いろいろとな。木戸くんにはちゃんと伝えてあるから、桂木くんも心配なきよう」

大久保が桂を木戸と呼んだことに、龍馬はお龍を見て声をかけた。

「お龍、すまんけど喉が乾いてしもうたから、茶を頼めるかのう。ああ、腹も空いたぜよ」

「へえ、よろしおす。お粥でも作ってきますさかい」

お龍が出て行くと龍馬が大久保に視線を戻した。

「ほがーに心配しのうていいぜよ」

「私は、君ほど簡単に他人を信用なぞせん。軽々しく桂くんの名など口にできるか」

「木戸さんって、桂さんなんだ」

その名を使ったのは、お龍が居たからだなのだろう。

「木戸考允、桂さんの本名だ。あまり知られていないからな」

武市が小さく耳打ちする。

「医者を用意したの私ではなく、吉之助が寄越したものだ。捕方に横槍を入れたのも、あいつが抱える一個小隊だ」

「通りで展開が速いわけだ」

以蔵は突然出で来た浪士に驚きつつ、どさくさに紛れて身を隠したのだ。

「伏見の動向を知っての事だろう。二本松から吉之助は動いてないから、奉行所の目も向いてない」

「さすがじゃのう。機動力と情報力、いやまっこと薩摩は手際が良いいぜよ」

「馬鹿を言いたまえ。長州の機動力は薩摩とて油断ならぬものなんだぞ？ 京に居るから情報を掴めているだけで、長州が洛中より追放されていなければ、動いていたのは長州が先だ」

「機動力は高杉くんで、情報力は桂さんか、上手いこと言うのう大

久保さんは」

大久保が西郷と長州を近づけたのも、その軍事力だけではなく情報収集力にも目を付けていたからであるのは間違いない。

「赤井という男だが、どうするのだ？」

武市が徐に切り出した。おもむろ

「どうするもこうするもないぜよ」

ちらりと和奈を見る。

「僕のことは気にしないで下さい」

赤井はすでに新撰組の人間になっている。対峙した時に向けられた眼差しから、もう、進むべき道を違えていると知る事ができたのだ。

「迷う剣を手に、これからの世生きて行くのは至難の業だぞ」

剣を向けて来た手は震えおり、躊躇が一瞬垣間見えた。あれでは、いずれ自分から身を滅ぼすことになる。

「それに、俺達との関係も少なからずあるんだ、解っているのか？」

「心配いらんぜよ。あれも男やき、あれやこれやと悩んで生きておるんじやろう」

「本当に君は物事を軽く考える男だな。危険があると武市くんは言っているのだぞ？」

「大久保さんを気に掛けさせちゅうとは、大した男やか」

嬉しそうに龍馬が笑うものだから、大久保の眉が吊りあがり冷淡な顔が浮かび上がってしまう。

「冗談は程々にしたまえ坂本くん。私が気に掛けているのはあやつ自体ではあらぬ。それを十分承知していてくれなければ困る」

「大久保さん！」

和奈は気にしないでくれと言ったが、大久保が何を考えているのか悟った龍馬は、その後に続くだろう言葉を止められずにはいられなかった。

「目的を達成するためには、人対人のうじうじした関係に沈みこん

でいたら物事は進まんだ」

大久保が冷徹に徹するのは、自分が志す目的のためなのだ。

「わしは議論はしやせん。ここで議論に勝っても、人の生き方は変えられん。人の世に道は一つと言うことはないき。道は百も千も万もあるがよ。その一つを選び取って誠と走るならば、わしはいいと思っちゅう」

「ならば私は、そういうものを振り切って前に進むだけ、と言っておくぞ」

しゅんと肩を窄^{すば}ませてでも大久保には通用しない。

「ふん！　ともかく、坂本くんは小松殿の処へ移れ。落ち着いたら薩摩へ行ってもらう。桂木くん達は直ぐ京を発て」

「なにか？」

武市が問うと、以蔵の手配書が再度交付されたと答えた。

「岩村くんは岡田以蔵とばれている。あと新兵衛に片目の男、その小僧もあるぞ」

バン！　と手配書を畳に置く。

「僕、載っちゃったんですか・・・」

土方と出くわしたのだ、手配されない訳がない。その証拠にちゃんと名前まで入っている。

「田中さんまで載ることになり、申し訳ない」

「護衛に付けた時に諦めていた。長州まで同行させたらそのまま薩摩に戻す」

「となると、関所を通るのは無理じゃのう」

手配書が出回って直ぐだと、京から出るだけでも一苦勞となる。

「ああ。だから骨を折ってやるのだ。京を出たら大坂へ向かえ、蒸気船で長府まで送らせる」

「何から何まで忝い」

「いずれ借りは返してもらう。おまえもだぞ、小僧」

「覚えておきます」

手配書を手にした武市は、自分の名前が【片目の男】なのに苦笑

した。

「和太郎が載ったのなら、新撰組がここへ聞きに来るのも時間の問題だな」

武市の心配を他所に、大久保は腕を組んで言った。

「薩摩者かどうか判らん者の不始末など、私の知った事ではない」
きつとそのまま新撰組にそう答えるのだろう。

お龍が人数分のお茶と、龍馬のお粥を手持って戻って来る。

大久保は話しをそこで終え、龍馬の腹ごしらえが終りお龍と共に小松邸へと移し、和奈達に新兵衛を付き添わせて京から出した。

道中、すでに京を出ている桂達とは大坂で合流すると、新兵衛から教えられた。

其之一 四番隊

近藤が、一番隊と三番隊を連れて伏見藩邸へやって来たのは、和奈達が出た数刻後の事だった。

和奈の事を訪ねられた大久保は、一字一句違えず武市に答えたままの言葉を口にし、藩邸の検分を済ませた土方らに何を言うでもなく、無言で藩邸を追い出したのである。

「相変わらず嫌な奴だ、あの久保って野郎」
赤井も同感だった。

応対に直接出て来た大久保は、顔色も変えず焦ることも終始しなかった。口を開いたのも、近藤への返答と検分を申し出た時の、好きにしたまえ、のたった二回だけだった。

「土方、野郎はなしだ。幕府だけでなく朝廷にも顔が聞く人間だ。新撰組の態度一つで、会津藩に迷惑が及んでは困る」

「解ってるさ！ だから大人しく引き下がって来たんじゃないか！」
片足を引きずりながら歩く土方は、押さえ切れない怒りをどこにどう向けていいのか判らないようだった。

「薩摩藩邸の検分を許可してもらっただけでも、良しとしなければならん」

「この分じゃ、二本松の方も空振りだろうな」

西郷が逗留してるとの事で、検分が出来るかどうか怪しかった。

「例の浪士集団、薩摩じゃねえかって俺は確信してる」

「推測で動くなよ、歳三。相手が相手だなんだ。浪士に当たると同じ方法取ったら、その首刎ねられるぞ」

百も承知していた。だからだ、なにか証拠になるものを探さなくてはならないのに、一々伊東の邪魔が入って来るのだ。薩摩藩邸への見張りの件も近藤と同じく突っ撥ねられていた。

「気に入らねえ」

回りくどいのは好きではなかったが、幕臣を抱える薩摩相手では

頭を使うしかないのである。

慶応二年二月に入り、大坂城入りしていた將軍徳川家茂は、第二次長州征伐を発令。大目付永井尚志を訊問使として長州に派遣し、その返答により処分案を確定させ、老中小笠原長行に内容を伝達した後最後通牒を行うと決めた。

その発令により、会津藩から新撰組へも長州再征伐参加の命が届いており、近藤はすぐに屯所に居た組長らを集めた。

「我々紀州藩と共に芸州口から長州へ進軍する。あくまで別働隊として、紀州藩の補佐をせよとの命だ」

土方達は、眼光炯炯とした双眸を近藤に向け、きつと口を結んだ。

「出立は五月。土方、それまでに同行させる隊士を選抜しておいてくれ。あと、伊東さんもこれに同行する」

「なに言ってやがる！」

土方の我慢は限界に近いように思えた。が、近藤は松平公の命によるものだからと、いきり立った男を収めにかかる。

「武力執行の前に、大目付である永井主水正尚志殿が訊問使として向かう。これに伊東さんと私、監察方篠原が随行する。それに合わせて新撰組も芸州入りとなる」

「あんたは解るが、なんで伊東までだ！」

「俺に聞かんでくれ。松平殿が直々に指名してこられたのだ、仕方あるまい」

最近、伊東の名前が出る度に土方は切れてしまっていた。

「会津藩直々なんて、一体どんな手使ったんだ？」

原田はそこが気になったらしい。

「水戸藩にも精通していると聞く。道場主だった頃から交流を持っていたらしい」

会津に水戸。たかが道場主というだけで、交流は持っても政策の一端にまで関与できるものではない。伊東はなんらかの策を講じて、

官僚に渡りをつけているとしか考えられなかった。

「これは決定なんだ、いいな土方」

松平の命とあっては、さすがの土方もそれ以上の藩論はできなかった。

「承知！」

何時間竹刀を振っているのだろうか。

肩はもう悲鳴を上げていた。振り下ろした腕は震え、上段に戻すのにも痛みが腕に肩に走る。

入って来た土方に止められ、赤井は手から竹刀を落とした。

「そんな無茶して上手くなりゃ、隊士全員にさせているってのに」
言われるまでもなく解っている事だが、胸のもやもやに居ても立ってもいられなかったのだ。

「俺、土方さんから見て、どんくらいの腕なんすかね」

稽古場の端に座り、そう聞いてみる。

「並みの隊士よりは腕が立つ、今はそんなところか。筋は良いし才もある。けど、一つ足りないもんがおまえにはある」

「足りない？ 気迫、とかですか？」

「気迫か。気迫だけであんだだけの剣を振るえるもんじゃない。よっぽどいい師範に出くわしたか・・・おい、村木の太刀筋、神道無念流か？」

「楠くんと同じかって問いなら、違うと思います。ちゃんと見てなかったのなんとも」

心形刀流でもなかった。

「葉丸自顕流でも、ないか」

だとしたら薩摩との関連が一つ消える。

「長州征伐に参加する隊士を選出しなくてはならん」

「いよいよですか」

「おまえ、来るか？」

「え？ 戦争・・・ですか？」

「怖いならやめとけ。びびって剣も持てないようじゃ、長州の奴らに斬られて死ぬのがおちだ」

長州。桂がいる国。

「まだ時間はある。行くつもりなら大石に稽古を頼め。あいつは沖田や斉藤と張り合える、いい稽古になるだろさ」

人斬りなのだ、相当の腕前ということは判っていた。

立ち上がった土方は、稽古場に掛けられている【誠】の旗を見や
った。

「おまえに足りないものは志だ。心に決めた目的を信じ、己の誠を貫き通す。それがおまえには無い。だから剣に違いが出る・・・今のおまえは村木の足元にも及んでねえ」

そう言って土方は稽古場から出て行った。

心に決めた目的、か。あいつは、皆を守るのが己の誠と考えたのかな。

「あ、居た居た」

稽古場にひっきり顔をだした塚本は、竹刀を抱えて座り込んで
いる赤井の横へとやって来た。

「なんですか？」

「ほら、おまえに手紙だ」

「は？ 俺に？」

「悪いが中身は調べさせてもらってある。ああ、おまえのだけじゃないぞ。屯所に来る手紙は全部近藤さんか土方さんが見る」

差し出された手紙を受け取り、裏を見る。

才谷梅太郎、とそこには書かれていた。

（て、おい！ いくら偽名でも危ないじゃないか！）

つくづく龍馬と言う人間が解らなくなってきた。

手紙を開け中に目を通す。

【何でも思い切ってやってみることだ。どっちに転んだって人間、野辺の石ころ同様、骨となって一生を終えるのだから、何の志も無く、ぐずぐずして日を送るは大馬鹿者のすることだ】

両手を斬られた龍馬からの手紙。代筆だろうが、今の自分の状況を近くで見えていたような言葉に、目頭が熱くなり手で目を覆った。

「おいおい、そんなに感激する手紙か!？」

「なんか、背中押されたようで・・・俺・・・」

敵対という言葉は恐らく龍馬の心にはないのだろう。敵であれ仲間であれ、恩情を持って接するのが坂本龍馬なのだ。

赤井は立ち上がると稽古場から駆け出した。

「お、おい!？」

ぐずぐずして日を送るのは大馬鹿者のすること。確かに、そうだ。何のために新撰組に来た。土方の言葉に納得したのではないのか。

【俺達は政に携わっている人間としてこの町の、国の未来を守るために命を賭けている】

土方はそう言った。

【わしらが正しく、新撰組が正しくないとは言わん。どちらも皆何かを守るために必死になっちゅうき信じた道を進めばええ】

龍馬もそう言った!

「土方さん!」

断りもなく障子を開けながら飛び込んで来た赤井に、土方は机の上から視線を上げて振り返った。

「征伐隊に入れて下さい。それまでに、もっと稽古積んどくんで!」
頭を下げて懇願する赤井に驚く。

「いきなりどうしたってんだ?」

「お願いします!」

手に文を握り締め、命一杯言葉に力を込めて頭を下げる男に土方は苦笑を漏らした。

「面、上げろ。男がそう易々と頭下げるもんじゃない」

「いえ。俺が頭を下げるのは今なんです、そう思います」

「やれやれ。で、なんで腹括ったんだ?」

赤井は手にした手紙を差し出した。

「・・・なんか言われたか」

受け取った手紙に目を通す。

「ほう。大馬鹿者になりたくなかった訳か」

「はい」

「だがな、人に言われたから動くんじゃ、意味ねえぞ？」

「言われたからではありません。俺、もっとちゃんと考えるべきだったんです自分のこと。それなのに他人ばかり気にして・・・悔いて・・・悔いてばかりで・・・だから、思ったまま行動しようって決めたんです、新撰組の一人として！」

「んで、腹括って戦場へ行くってか？」

「俺は、多分、土方歳三に惚れてここへ来た」

「気色の悪いことを言うな！」

「あ、いや・・・男として、です。そっちの気はありません絶対に！」

「あつたりめえだ！ そっちなんぞ言われたら本気で追い出すぞ！」
女ならいざ知らず、男から惚れたなんて言葉は聞きたくないと土方は首筋を摩った。

「おまえが目的見つけたってんなら、隊には加えてやる。せいぜい殺されんよう腕を磨いておけ」

「はい！」

松原が切腹になった時、決意を固めたはずなのに気づかない内にまた迷っていた。それを龍馬に見透かされた思いだった。

戻れるのか、どうしたらいいのかと不安で足を竦めているより、新撰組の土方という男と共に進めばいい。行き詰ったらまた悩んで、その時に進むべき道を選びとって行けばいい、後悔しないために。

赤井はその足で大石の居る自室へと向かった。

三月に入り、鹿児島入りする前に西郷の勧めもあって、小松邸において龍馬はお龍との祝言を上げた。

質素な式ではあったが、西郷が仲人となり、大久保、小松、吉井が列席し、恙無く終った。

「吉之助も酔狂なものだ」

縁側で寄り添う二人の背中を見ながら、酒を口に行っている西郷に大久保は言った。

「こげん時世じゃつでだ、利通。こげん時世じゃつで、選り取らねばならん。生に赴くか、死に赴くか」

「ふん。坂本くんの奔放さなんぞ、相方を作るときで止められるものか」

「命もいらず、名もいらず、官位も金もいらぬ者は始末に困う。こゝん始末に困う人ならでは、艱難かんなんを共にして国家の大業は成し得られぬ」

「結局、己のためか。まあ、それも良かろう。ひと時の幸せ、存分に噛み締めてもらおうではないか」

陸海軍の拡張を進言する目的と龍馬の負傷治療のため、小松、西郷、吉井は京を出て大坂から鹿児島へと出立した。

屯所の稽古場は血気盛んな隊士で溢れていた。

征伐隊の選出が行われるせいもあるが、松原を欠いた四番隊組長の選別もあって、選ばれたいと競う者が多いのだ。

「あんたが変なことまで持ち出すから」

「いいじゃないか。士気向上にもなるし、隊士の腕を一律に上げる機会はそうないんだ」

「そりゃあ、そうだろうがな」

「それに歳三の眼鏡に適った奴の腕も、驚くほど上がったじゃないか」

征伐隊に志願したあの日から、確かに赤井の太刀筋が変わっていた。無謀な稽古をしている訳でもなく、本来持っている資質を大石が上手く引き出した、という感じだった。

「もともと筋は悪くない。ふらふらとしてた分、剣に迷いが生じてただけだろうよ」

「どうだ、ここらで組長格とやらせてみては？」

「・・・あんだ、まさか奴に四番隊の頭張らせるつもりか？」

「松原の事もあるだろう。自分が原因で切腹沙汰になった、と赤井くんは思っているようだし、その後釜に付かせれば、十分責任を果たしてくれると思うんだがなあ」

「原田を四番に回せばいいだろうが」

「それがな、俺は十番隊だと言ってあっさり断られたよ」

当初精忠浪士組に居た者が組長として振り分けられたが、腕の差は関係なかった。新撰組として名を改めた時、近藤は隊に格付けを行おうとしたが、沖田と斉藤は思い入れがあると言って隊を動かなかったため、現在も格付けはされていない。

「ったく」

困るはずなのに、土方の顔には笑みが浮かんでいた。

「それじゃあ進めてくれるか、歳三」

「結局俺がするんだよな」

「頼りにしているさ」

ポン！ と肩を叩いて近藤は稽古場を出て行った。

「仕方ないな。おい！ おまえら！」

土方は、四番隊組長選抜のため稽古試合を行うと隊士達に告げ、夜から見廻りに出る隊も含め稽古場へと集められた。

【誠】の旗を背に、沖田ら組長が立った。

「我はと思う奴は進み出ろ」

いざそう言われると、互いに顔を見合わせたり、肘で隣の隊士をこづいたり、自ら進み出る隊士は居なかった。

「おめえら、さっきまでの勢いはどいったんだ！」

「土方さん、これじゃ埒が明かないよ。こっちから指名してみたら？」

藤堂は楽しそうだったが、手を上げて進み出て来た男の登場で、笑っていられなくなってしまった。

「で、一つ聞いていいか？ なんで参謀のあんだが手を上げるんだ！」

「参謀と言えど、組長になる資格はあると思ったまでです」

「俺はいいぜ」

鼻の下を擦りながら永倉が出て来る。

「・・・好きにしろ、ったく」

伊東の北辰刀流道場主の肩書きは伊達ではなかった。沖田と斉藤から一本取れずとも、永倉相手に同等の力を見せ、後の組長達からはあっけなく一本を取ってしまったのだ。土方も実力を認めざるを得ない。

「では、私が四番隊組長でいいんですよね？」

両手をパンと叩いてから、伊東は稽古場の端に座り込んだ。

土方はまだだと言って、赤井を呼んだ。

「俺、組長にならなくていいですよ！」

「ほう、ならなくて、か」

「あ、いや、そう言うことじゃなくて」

「ごちゃごちゃ言ってねえで、とっとと行ってこい！」

土方に背中を目一杯の力で押され、稽古場の中央に躍り出る。

「じゃあ、ここは僕が」

そう出て来たのは沖田だった。

「それ、無理ですって」

竹刀を合わせる前から結果は見えている。

「土方さん、僕と斉藤くん、永倉さんの三人でいいんじゃないですか？」

「沖田さん！ それ俺に死ねって言ってます！？」

新撰組最強と言われる剣士四人の内、三人を相手にするのは無理を通り越して無謀と言えるのだ。

「ご希望なら」

にっこりと沖田は笑うが、冗談では済みそうになかった。組長になりたいわけじゃないのに、殺されるなんてたまったものではない。

「沖田、てめえはすっこんでろ。斉藤！」

「なんで僕じゃ駄目なんですか！」

「赤井は稽古でおまえの太刀を見てるからな。伊東さんが一本取れなかった斉藤に、少しでも竹刀掠らせたなら四番隊をおまえに任せる。いいですね、伊東さん」

「勿論！ それだけ有能なら、志士の剣客相手にも引けはとらぬでしょうし、文句はありませんよ」

沖田はぶつくさ言いながら後ろへと下がった。

「永倉もいいか？」

「俺はどっちでも」

「他に異論ある奴はいねえな！？」

土方に異を唱える度胸なんて、隊士にはないですよと沖田が呆れて言う。

「うっせえよ。んじゃ決まりだな。初めていいぞ！」

斉藤から一本でも取れたら、桂にも気負いせず立ち向かえるかも知れない。

伊東の言葉だけが頭一杯に広がった。

ぐっ、と竹刀を握る。剣気に飲まれたらそこで終わりだ、一瞬の隙は自分の死に繋がるのだ。

斉藤は平突き of 構えを取った。

新撰組隊士はすべて中段から平突き of 構えになる。一撃必殺を考えたものだが、万が一交わされても、そのまま横薙ぎ of 攻撃に転じれる二段構えになり、新撰組特有のものだった。

赤井が中段に構えたのを見て斉藤が床を蹴り、両手で突き出した竹刀を片手で更に伸ばして来た。

ガシューッ！

立てた竹刀を斉藤の竹刀の内側へと滑らせ、外へ思いっきり弾く。そのまま左へ弾いた反動を殺すことなく、体を合わせて回転させ斉藤の脇腹へと打ち込んだ。

斉藤は左足に全体重を乗せて後ろへ避けたが、少し遅れた利き足目掛けて右から竹刀が振られて来る。

当たったと思ったが、斉藤の右足は左へと逃れ、赤井の竹刀が空

を斬った。

「くそつたれ！」

後ろへ下がる訳にはいかない、突きの間合いを与えてはだめだ。突きには突き、と赤井は体勢を立て直す前に腹へ竹刀ごと突っ込んだ。

だが斉藤は体を半身ずらしただけでそれを交わし、赤井の背中に竹刀を振り下ろした。

「ぐはっ！」

激痛とともに床へ叩きつけられる。

「やっぱり無理だったかあ」

胡坐をかいて座る藤堂が残念そうに言う。

「あっけなかったな」

原田が当然だという顔をしつつ、横に居る沖田を見た。

「何言ってるんだ。結構頑張ったじゃないか、赤井くんは」

沖田は真顔で稽古場の真ん中を見ていた。

「どう思う？ 斉藤」

咳をしながら四つん這いになっている赤井の腕を掴み、斉藤は立たせてやる。

「真剣での斬り合いは、敵がこう来たらそれをこうして、という技は出来るものではなく、夢中になって斬り合うだけだ。それをこいつは解ってる」

赤井から離れると、斉藤は利き足の袴をたくり寄せた。

「当たらずとも、剣気でここまでできるなら大したものかと思いますが」

足の脛すねから脰脛ふくらはぎにかけて、赤く薄っすらとした筋が残っている。「なんとか、って程度だな」

永倉は拗ねている沖田の横で言った。

「おい赤井！ おまえ今日から四番隊の頭張れよ！ 他の奴もそれでいいな！？」

「はい」

興味なさ気に沖田と永倉が手をあげ、藤堂はうんうんと頷き、ほかの組長も片手を上げた。

「と言うことだ。さっきも確認したが、伊東さん、異論はないよな？」

「ええ、感服しました。赤井くんの修練の賜物ですもの、異論などあろうはずがございません」

勝手に話が纏まって行くのを見て、赤井が割って入る。

「大石さんとか、他に適役いるじゃないですか！」

「おまえでいいんだよ、阿呆。剣が長けてるってだけで、簡単に頭張れるんならこんな苦労してねえ。それによ、四番隊は松原が居た隊だ、解るよな？」

「あ・・・」

おまえには責任があるんだと、言われた気分だった。

「他の組長格も入れ替える！ 二番隊組長永倉から伊東甲子太郎、五番隊組長武田から尾形俊太郎、九番隊組長鈴木から永倉新八、他は変更なし！ 武田と鈴木は伍長格でそのままの隊に所属とする！ 異論、もしくは俺こそって奴が居るなら俺に言って来い！ 以上、解散！」

頃合を見計らったのか、近藤が稽古場へと戻って来た。

「気合が入ってるなあ歳三」

目を閉じて拳を握る土方。

「近藤さん、一発殴っていいか？」

「いやいや、それは勘弁してくれ。俺が言うより、おまえが言う方が効き目あるだろう？」

「確かに、鬼の副長に逆らおうって隊士は居ませんもんね」

沖田はやはり面白くないようだった。赤井と遣りたかったのだらう。

「機嫌直せ。おまえに相手させたら、本気で殺しちまいそうだったからな」

「よく解ってますね」

まだ赤井への疑念は捨てきれないらしい沖田は、殺すまで行かなくても喉骨の一つは折るだろう。斉藤にしたのは、太刀筋を見られているという理由よりも、そっちの理由の方が大きかったのだ。

どっと疲れてしまった赤井は、部屋に戻ると大の字になって寝っ転がった。そこへ大石が入ってくる。

「聞いたぜ修吾郎！ おめえ出世したんだってな！」

自分の事のように大石は喜んでいた。

「どこ行ってたんですか。それに出世って……松原さんの隊とあっちゃ、引き受けない訳にいきませんよ」

「そうか。おまえなりのけじめ、ってどこか」

「けじめと言うか。あんな事になってなかったら、新撰組のためにこれからずっと頑張ってた方です。だから、松原さんの分も、俺、頑張ってみようかって」

大石は寝ている赤井の脇腹をくすぐり出す。

「あはははははっ……ひゃめて……もう……あはははははっ」

ひとしきり楽しんだ大石は、腹を抱えたまま息を切ってる赤井の頭をガシッと掴んだ。

「斉藤に掠り傷つけただけでも褒めてやる。俺としちゃあ、おまえが居なくって見廻りが淋しくなるがな。稽古はこれまで通りつけてやるから、まあ頑張れや」

そう言いながら掴んだ頭を押して赤井を倒すと、大石が赤井の荷物を集め始めた。

「なにすんですか！」

「阿呆、組長格は個室だろうが！ 松原さんの使ってた部屋へ移りやがれ」

「ここでいいです！」

「いい訳ないだろう」

新撰組幹部の幹部は、局長・副長・副長助勤・監察方・勘定方である。組長は、副長助勤の通称として使われている。

土方と近藤に部屋は大石とでいいと頼みに行ったが、馬鹿かと言われて許可を貰えず、結局松原が使っていた部屋へと移されてしまった。

「か・・・幹部って・・・」

平隊士から行き成り組長になって幹部扱いされた赤井は、とにかく暫くの間はうろたえるだけとなった。

そんな赤井を見かねた近藤は、自室に呼んで一振りの刀を差し出した。

「松原が使っていた【加州住藤島友重】だ。刃毀れは直させているから、使ってやってくれないか」

「遺品ですよ？ 国許に送らなくていいんですか？」

「播磨國小野藩の藩士とまでは判っているんだが、脱藩していて身内が特定できんのだ」

「そう・・・なんですか・・・」

死の知らせさえ届けられない身の上だった松原。最後にすまんと言いながら見せた笑みを思い出す。

「預からせて頂きます、松原さんの想いと一緒に」

「うん。そうしてやってくれ。それから、隊士が何を言おうと、君の組長昇格は土方の独断ではなく、伊東さんや他の組長も認めるものだ。そのつもりで隊士達を引っ張って行ってくれると助かる」

「俺なりに、努力してみます」

置かれた剣を取り、赤井は一礼して近藤の部屋を後にした。

四月一日。

長州征伐のための軍行録が回廊に貼り出された。

組長近藤、副長土方、軍奉行伊東、小銃頭沖田と永倉と伍長四人、大銃頭藤堂、赤井と伍長一人、槍頭斉藤、井上と伍長三人、小荷駄奉行原田と伍長一人、そして志願した平隊士百七十三名の名前が書かれている。

「赤井さん藤堂さんとかあ」

四番隊の林慎太郎が赤井の肩越しに顔を覗かせた。

「おい！ 吃驚するだろそんなところから！」

「へへっ」

照れ笑いしつつ、肩に顎を乗せる。

赤井より二つ下だったが、剣の腕は確かだった。長州の間者、荒木田左馬之助を肅清した経歴も持っている。

「そりゃ、俺達の組長さんだ、名連ねてもおかしくないよな？」

同じく四番隊の伊藤鉄五郎が、反対の肩に顎を乗せてきた。

「それ、わざとやってませんか、鉄さん」

「赤井くんもその敬語やめてくれたらな。たった一つ年上ってだけで、あんたは俺達の組長だからさあ、こうもつと威張ってりゃいいんだよ」

組長に就任して直ぐ、近藤は全隊の隊士入れ替えを行い、赤井の四番隊には近い年齢の隊士を集めてくれていた。そのまま残る事を希望した隊士もあり、その一人が伊藤だった。

「・・・無理っす」

「なら文句言わないの」

なんだかんだで、赤井はいつもこの二人と馬鹿騒ぎをするようになっていた。

「馴染んでるじゃないか」

その様子を近藤が嬉しそうに見ていた。

「あんたがいらん配慮したお陰だろうが」

「歳三も反対しなかったじゃないか」

「ちっ！ それよか、谷が怒鳴り込んで来たって？」

「あれを貼りだしてすぐな。えらい剣幕で入って来たよ。弟の万太郎が名を連ねているのに、自分の名前がなく、なぜ新参者の赤井は出ているんだとな」

「あんたが周平を養子なんざするから、力もないくせに威張り散らすんじゃないか」

「それを言ってくれるなよ」

「斉藤が激怒した時、止めるのにどんだけ苦労したか、忘れてねえよな？」

近藤が遊郭に隊士達を連れて行った時、新選組には見かけほど強い隊士が居ないから、いつも自分が先頭に立たされると谷が愚痴を漏らし、それを後日隊士から聞いた斉藤が谷に斬り掛かろうとしたのを止めた事があるのだ。

その後も、斉藤といざこざを起こし、谷が近藤に噛み付いた事があった。

隊士の切腹に谷が介錯人となった時の事である。谷が何度も仕損じるのを見かね、検視役で添っていた斉藤がその首を落としたのだ。それが不服だと、近藤に難癖をつけて来たのである。

切腹する者に余計な苦痛を与えないため、介錯を務める者には剣の腕が求められる。その腕がなかったからと土方は怒鳴ったが、斉藤が邪魔をしたと譲らない谷との間で揉め事になったのだ。それ以来、斉藤、土方と谷は一触即発の状態を保っている。

「斉藤は正しい判断をしたと思うぜ、俺は」

「ああ。それは解っている。検視役と介錯を交代させるべきだったと反省してる」

「あんたが反省なんざするな」

土方は貼り紙を見ている谷の姿を、赤井の後ろに見つける。

「ちと用事思い出したから、行ってくる」

「・・・だがな」

「俺は俺のやり方を通してもらう、新撰組のためにな」

土方はそう言うのと、振り出した雨を見上げた。

近藤はふう、とため息をついて隊士の処へと歩いて行く。

「あ、局長！」

一団が二手に分かれて、近藤が通れる間を作った。

「志願してくれた皆には心から感謝する。勿論、残って京の警備に当たる者にも同じだ。あと一ヶ月、それぞれ仕事と稽古に励んでくれ」

はい！ と一声が上がる中、谷の姿はいつの間になくなり、土方の姿も消えていた。

雨が次第にきつくなり、視界がぼやける程になっている。

「本降りだな」

近藤は自室の戸を開けたまま、外を眺めていた。

しばらくして、雨音の中に喧囂けんごうが聞こえた。隊士達の騒ぎに、近藤は肩を落として部屋を出た。

「なにを騒いでいるんだ」

姿を見せた近藤の処へ一人の隊士が駆け寄った。

「局長！ 祇園社で、遺体が見つかったと報告が！」

「辻斬りでも出たか？」

「新撰組の人間と言う事なんです！」

「・・・土方はどうした？」

響動めきが怒る中、人ごみを掻き分けて土方が出て来た。

「ここに居る。篠原！ 行って確かめて来い！ 他のもんはがたがた騒がず部屋に行つてろ！」

篠原が踵を返し走り出して行く。

「歳三」

「雨だ・・・近藤さんは出るなよ」

そう言い、土方は両袖に手を入れ、雨に煙る境内を見やった。

西本願寺の門を出た処で、篠原はずぶ濡れになって帰って来た斉藤と出くわした。

「斉藤さん！」

「どうした？」

「隊士が斬られたと！」

「・・・俺も行く」

二人は御前通を東本願寺まで進み、左に折れて四条通を右へ真っ直ぐ走って行く。

やがて綾小路薩摩郎が見え、それを横目に四条大橋を超えると祇園社が見えて来た。近づく人ばかりが見え、篠原は町人らを突き飛ばしその中へ駆け込んだ。

「！ 谷さん！」

見廻りの当番でもない谷が、羽織を着て血溜まの中に倒れていた。「谷さん！」

上半身を抱えて息を確かめるが、すでに谷はなんの反応も示さなかった。

「抜刀すらしてないとは」

剣は抜かれることなく主の腰に収まっているのを見て、篠原は怪訝そうに眉を顰めた。

斉藤は動揺するでももなく、町人達にその場から立ち去れと言葉をかけて回っている。

「胸を一突きか・・・」

左肋骨と鳩尾の間から、雨を受けて血が地面へと流れている。

「屯所へ運びます」

「かなりの手練の仕業だ。しかもこの傷口は左突きのもの・・・・斉藤くんと同じだが？」

ずぶ濡れで屯所へ帰って来た斉藤。正確に突き刺されたであろう谷の胸の傷。

「やめて下さい、同じと言うのは」

その言葉の裏に込められた殺気に、篠原はそれ以上なにも言葉を発せられなかった。

谷を抱えた篠原と斉藤が屯所へと戻って来ると、弟の周平と万太郎が亡骸の側に駆け寄り、泣きながら膝を崩した。

「すまねえな、篠原。おい、谷さんを奥へ運べ。原田は隊連れて聞き込みに行け」

弟二人が谷を抱えて回廊から中へと入って行き、原田は隊士に号令をかけると屯所を出て行く。

「土方さん」

横に立った篠原に詳細を問質すでもなく、ただご苦労だったと言声を掛け、顔を合わせることなく奥へと入って行った。

土方は知っているのだと、篠原はただその場に立ち尽くすしかなかった。

谷の死について【七番組頭谷三十郎儀、祇園石段下に於て頓死相遂げ候】と、近藤は会津藩に報告を上げた。

士の道は義より大なるはなし。義は勇に因りて行われ、勇は義に因りて長ず。

「士規七

則」 吉田松陰

其之二 氣配

「留魂録」

心なることの種々かき置きぬ思い残せることなかりけり
呼び出しの声まつ外に今の世に待つべき事のなかりけるかな
討たれたる吾れをあはれと見ん人は君を崇めて夷払へよ
愚かなる吾れをも友とめづ人はわがとも友とめでよ人々
七たびも生きかへりつつ夷をぞ攘はんこころ吾れ忘れめや

吉田松陰

大坂で桂と高杉に合流した和奈達は、薩摩の蒸気船に乗り一路長府を目指していた。

潮風に当たりたくて、和奈は甲板へと出て来た。

「龍馬さん、大人しくしてゐるかなあ」

両手の親指付け根を斬られ、特に右手の傷はかなり深いらしく、下手をすれば無くなっていたらしい。

「赤井くん・・・」

羽織を着て立ちはだかった赤井は、敵意とも取れる眼差しを向けてきた。

「心配か？」

どきっ、として振り返ると、新兵衛が立っていた。

「驚いた」

「あ、すまん。ついくせでな」

この時代の人は、氣配を元々持っていないのではないかと思う。

「くせでも、必要なんですよね。僕、今頃死んでますよね。新兵衛さんじゃなく、新撰組だったら」

「習慣にしておくのはいい事だ」

「心休まる、って事は有るんですか？」

「あのな。いくらなんでも四六時中気を張ってるわけじゃない。気配を消すのとは別ものだ」

「そうなんだ。なら、僕はまだまだなんだなあ」

あの夜、土方を相手に、対等で剣を捌いた人間とは到底思えない、と新兵衛は思った。垣間見た剣速、あれは訓練したからと出来る技ではない。武の才がこの男には在るのだろう。

「土方相手にあれだけ立ち回れば、大したものだな」

「必至でしたよ。今は一遍に色んな事があって、頭ん中がぐるぐるなんです」

「ぐるぐるか」

「赤井くんは僕の知り合いで・・・京に来たんですけど、知らない間に新撰組に行ってるし、ちゃっかり羽織なんか着てるし。責任感じるんだけど、大久保さんも桂木さんもそれは赤井くんの意志だからって言うし。それは解るんです。僕もそうして、ここに居るんだから。でも・・・」

「うじうじうじ考えてても仕方が無い」

和奈は新兵衛を見上げた。

「大久保さんみたいだ」

「あははっ。口癖だからな大久保卿の。剣を振るう時もそうだが、一々考えていては先には進めん。思うまま、感じたまま行けば良いんじゃないか？」

「はい。桂木さんにもそう言われました」

「人が抱える悩み事を簡単に解決できるなら、こんな世の中になっ
てはいまい」

武市の声だった。

「田中くんにも随分と迷惑をかけてしまった。京を離れるのは忍び
なかっただろう？」

「仕方ありません。卿が考えた事ですから、私はそれに従うだけです」

ここにも岡田以蔵が居ると、武市は苦笑せずには居られなかった。

「その大久保さんから、これを預かっている」

武市は文を差し出した。

「あと少しで長府だそうだ。和太郎、中へ戻るぞ」

「はい」

二人が船内へ入って行くと、渡された文に目を通す。

新兵衛は口元に笑みを浮かべ、読んだ文を細かく千切ると海へと捨てた。

慶応二年一月の事。朝廷に参内した幕軍方老中小笠原長行は、長州藩の処分を奏請した。

そして二月二十二日と三月二十六の二回、幕府は小笠原らを全権大使として芸州に派遣した。しかし長州藩と支藩は、芸州への出頭命令に対し、病氣、不在の理由をつけ従わなかったのである。

幕兵進軍に合わせて芸州入りし、三回目の出頭命令を出す予定だった。しかし、同行する大目付永井尚志の意向で進軍前に芸州へ入る事となり、随行する新撰組も一足早く京を出る事となった。

四月十日、軍行録に記された一軍が、水浅葱の羽織をまとうて通りを進んで行く。

その数百八十九名。

「うーっ、武者震いして来た」

大銃頭の後ろに居る林が両手を持ち上げた。

「京を出るまでは静かにしてろ」

赤井にそう言われ、脇にぴしっと腕を付ける。

「いいんじゃない？ 前を見てれば」

藤堂もどこか楽しそうにしている。

「駄目だよ。土方さんにでも聞こえてみろー」

赤井が言い切る前、土方の顔が後ろを向いたので口を閉じた。

「土方さんの耳、絶対俺達の三倍は集音力あるって」

林は懲りずに小さな声でそう言った。

京御所にて家老小笠原、大目付永井らと合流し京を出た新撰組と全權大使一行は、四月二十日に芸州入りした。

国泰寺を中心に宿所を取り、小笠原は岩国領当主吉川経幹、長州藩家老穴戸親基、長州藩家老毛利元亮三名を招聘したが、またもや病気であると称し、穴戸を代理とするという事で応じなかったのである。

穴戸親基は、先の禁門の変の長州藩邸没収時に拘禁されて居たが、小笠原の後任に就いた本庄松平家九代目丹後宮津藩主本莊宗秀に、長州が懷柔を図った事によって釈放となり、家老小田村素太郎と共に長州に滞在していた。

長府で蒸気船を降りた和奈達は、その足で桂の居る萩へと足を向けた。

「なぜ新兵衛殿と一緒に来られる？」

長府で自分達を下ろした後、薩摩へ戻るものと思っていたのに、共に行く和新兵衛が申し出て来たのである。

「薩摩へ戻ってもやる事がありませんし、この腕が役立てばと」

だからと言って来る必要はない、と武市は一旦断ったのだが、大久保の許可も下りていると聞き、同行を認めたのだ。

「あの文か」

何が書かれていたか知る由も無いが、大久保が何らかの示唆をしたのは間違いない。

「卿の手足となれぬ身なら、思ったように行動すべきと思いました。それを許可頂いただけです」

武市の横顔に、新兵衛はそう言った。

「よもやご自分の意志とは・・・大久保さんが何か手を講じたのかと思ったが」

「行く先を、見てみたいと思ったのです」

首を傾げた武市に、視線でその理由を示した。

「・・・・・・・・」

「ご心配には及びません。剣を持つ者として、興味を覚えたまでです」

前を行っていた和奈と以蔵が振り向き、足を止めて居る。

「大久保さんも、見てみたいと仰っていました」

動けぬ自分の代わりに、新兵衛を好きにさせた、という事らしい。

「くそ狸め」

「狸、ですか」

笑った新兵衛は、どちらかと言うと狐では、と返した。

「狐は桂さんの方だと思うが」

「ああ、それならば諒解致すところ。狐と狸の両方に好かれる者は、そう居りますまい」

「その様だな。赤井くんの件もある。動かれていたのは、新兵衛殿とお見受けしたが」

「さて、如何様な理由でそう思われたのか、拙者には解りかねますが」

沖田が咳き込んで蹲った時、駆け寄って来た大石を追った新兵衛が、一瞬だが赤井に殺気を走らせた。それを武市は見過ごさなかったのだ。

「狐と狸の腹は同じ、という事にしておこう」

武市はそこで話し止めた。

一向に歩き出さない二人を見て、何事かと思ったのだろう、和奈が戻ったのだ。

「さあ、先を急ごう」

「止まっていたのは二人じゃないですか」

すまんと笑って、武市が歩き出し、男の話しだと新兵衛も歩き出しので、ええっ！とその後ろ姿に叫んでしまった。

「うう・・・どれだけの人にばれてるんだろう」

「馬鹿以外には判るだろう」

「それって、中岡さんも馬鹿って事になりますよ」

「も、とはなんだ、も、とは！ 俺は馬鹿ではない！」

問題ない、と武市が言い捨てると、以蔵は中岡と一緒にされたと落ち込んでしまった。

「俺からばらす事はないが、頑張って男らしく振舞うんだな」

だから男らしくが解らないんだってば！

最初、桂からそう言われてからこの方、一度として男らしいのが
どういう振舞なのか、解ったためしがないのだ。

「そうだな。萩に着いたら岡場所にも行ってみるか？」

それだけは遠慮しとおきますと言う和奈に、武市はそんな処へ行く必要などないと言った後、新兵衛にいらぬ事を吹き込むと怒った。

内政が落ち着いた長州は、藩主毛利敬親が周防に戻った事で、藩
庁を周防の山口城に置いた。

海が近くの萩がいいと、桂と高杉は山口へは移らず、城下町の平
屋が連なる一角に住んでいた。

江戸屋横丁にある桂の自宅にやって来た高杉は、藩庁へ登庁する
前をの桂を捕まえ、諸処に商売、という名目で漁船の往来手形を発
行を頼んだ。

「一体何をするんだい？」

「まあ見てろって」

「見てろって、漁師があちこちに出かけて商売するなんて、聞いた
事がないよ」

「だからおまえは頭が堅いって言われるんだよ」

高杉が何か動く時は、それなりの理由がある事くらい桂にも解っ
ていた。今回の手形もその一つなのだろうが、裏に働く意図を掴め
ないのだ。

「解ったよ。手形を発行すればいいんだろう？」

「ああ。そうだな、二十人分くらい頼む」

やれやれと腰を上げ、桂は部屋から出て行った。

「ぐふっ！」

胸を押さえ、喉の奥から込み上げる咳に顔を歪ませる。

「かばっ！　ごほっこぼっ！」

手に付いた血を急いで拭き取る。

最近吐血を伴う咳が多くなっていた。桂の前では絶対にこんな姿を見せられない。もし自分が倒れでしたら桂の事だ、政に携わらず療養しろと言うのは目に見えていた。

「ったく、時間がねえって言うのに」

幕府軍はもう動き出しているのだ、こんな処で倒れている訳には行かない。

高杉は自宅へ戻る為、桂の家を後にした。

萩城東の城下町。

三本小路の手前、白い壁が連なる菊屋横丁の細い道を行くと、高杉の家が見えてきた。桂の自宅が在る江戸屋横丁とは一本隔てた通りに在る。

門を潜り、平屋の右手奥へと続く石畳を入って行くと、家の妻側にある掃き出し口の障子が開けら、そこに高杉が足を放り出して座って居た。

「お、来たか！」

高杉は和奈の姿を見ると、中へ入れと促した。

「こ、ここからでいいんですか！？」

「入れたら何処だって構わん」

草履をそのままに部屋へ上がると、奥座敷へと入って行く高杉を追いかけた。

床の間を横手に座わった高杉は、桂が居ないから茶を入れて来いと、和奈に台所の場所を教える。

「警護も置いてないのか？」

「ん？　俺の家と知って入って来るなら、大した野郎だと褒めてや

る」

「そういう事ではない、と武市が怒る。

「常に誰かは居るから、そう怒るな！」

奇兵隊が持ち回りで泊り込みに来ていると、高杉は説明する。

「小五郎は周防へ出かけたから、今日はここへ泊まるといい」

「そう高杉が言うのと、武市は家を用意してもらっているから、夜はそちらへ移ると言った。」

「そんなもん、俺が居ない時に使え！」

言い出したら聞かないと十分承知していたので、武市もそれ以上断りを入れなかった。

湯呑みを持って戻って来た和奈は、最後に座敷の端に座る新兵衛に茶を渡した。

「で、そっちの旦那は誰だ？」

正座したままり新兵衛は、両手をつくと頭を下げ名を名乗った。

「小松邸に迎えに来てくれた時から、新撰組との一件まで一緒だった」

「ほう。で、なんでここに来たんだ？」

武市に視線を戻し、手配書の件を話す。

「中村さんの他にも、人斬りを抱えてたとはな」

「同行は断ったのだが。大久保さんが許可を出したのだ、後は高杉くん達の采配に任せるしかない、と、連れて来た」

「いいんじゃないか？ 手練れが増えるのは構わん。だが、薩州者という事は伏せておくぞ」

「異存あるまい。密約と言っても、幹部同士の話した。いらぬ噂は立てぬ方がいい」

じつと武市を見る。

「・・・何か？」

「段々と桂に似てきやがったな、と思っただけだ」

「あ、それ、解ります」

和奈の同意を得た高杉は、桂の字が付く人間はもう増やさんと腕

を組んだ。

「字が一つ同じなだけじゃないですか」

「それが問題だと言ってるんだ！」

和奈の首根っこを抱え、頭に拳を当てるとぐりぐりと回す。

「だから！ それいい加減に止めて下さいってば！」

「騒がしいと思ったら・・・」

呆れ顔の井上多聞が、廊下で腕組をしていた。

「お騒がせしています」

そう言い、顔を向けた武市の顔を見て、井上は声もなく佇んでしまった。

「なに突っ立てるんだ。座れ座れ」

「立ってる・・・て、え？ 武市さん！？ どうして貴方がここに居るんですか！」

和奈一人がこれに慌てた。

「ひ、人間違いです！」

それを言うのが精一杯だった。次の瞬間、高杉は大笑いを始め、当の本人は慌てるでもなく、井上に、ご無沙汰をしていた、と頭下げた。

武市の横へと座った井上は、こいつが桂木という男だ、と高杉から聞かされる。

「石川から、腕の立つ男が来たと聞いてはいたが、まさか貴方だったとは。これで得心が行った」

桂や、天王山にて自害した真木和泉らは、西本願寺の別邸である翠紅館によく集まり、他藩の志士達と会合を行っていた。文久三年一月二十七日。京に久坂玄瑞と入った井上は、翠紅館を訪れた際、会合の席で武市と顔を合わせていた。

「狙撃隊の振り分けに忙しいと断ったのに、どうしてもと呼ばれた訳が解った。以蔵くんも無事でなによりだ」

以蔵は無言で会釈した。

「表向きは斬首された人間だ、心得てくれ井上さん」

「承知している。名などは関係あるまい、目の前に両足の付いた男が居るのだからな」

和奈の心配はあっさり片付いた様だった。

それより、と井上は、幕府の全権大使が芸州に入った事を告げた。
「随行で新撰組も芸州入りしている」

新撰組づくしだなと、高杉は愉快と言わんばかりの笑顔を浮かべて言った。

「軽く言うな。総勢百八十名の隊士が同行しているんだ。このまま幕府が進軍を開始すれば、新撰組も芸州で暴れ捲くる事になるんだぞ」

「因縁とは奇妙な物、と言う事だ」

武市も心なしか嬉しそうである。

「・・・あんた達の気が知れん」

京で立ち回った四人が此処に集まっており、新撰組が芸州へと入っている。武市の言うように、因縁としか思えなかった。

「来ちまったもんは仕方が無い。俺は明日、伊藤と薩摩へ行く。後の事は小五郎に聞いてくれ」

「薩摩へ？」

井上は何事だと聞く。

「ああ。ちよつと買い物をしにな」

にかつと歯を見せた高杉は、次の瞬間、手について顔を伏せた。

「高杉さん？」

肩が震え出し、何かを我慢している様に拳が握られる。

「高杉さん!？」

様子が変と、和奈は高杉の前に座り顔を覗き込んだ。

「ゴホッ!」

「えっ・・・」

顔と、膝の上に落ちた赤くドロツとした液体に、和奈は動きを止

めた。

「ゲホッ、ゲホッ！」

止まらない咳と共に吐き出される血。

口を押さえながら、手を付いていた腕が折れ、体が前屈みに倒れ込む。

「高杉！！！」

井上が体を起こしに掛かる。

「あ………」

吐血で口の周りが赤く染まり、畳に血の固まりが落ちている。

「おまえ、まさか！」

「し……んぱい……いら……ん」

そのまま高杉は意識を失った。

次の日の夜、報せを受けた桂が、山縣を伴って山口から慌てて戻って来た。

「晋作！」

襖を開け放って飛び込んで来た桂は、布団の中から自分を見上げている友の側に座った。

「報せるなど言ったのに」

「馬鹿か！ そんな事を言ってる場合じゃないだろう！」

「大した事はない。おまえも仕事放り出して戻って来るんじゃない」
上半身を起こし、手を合わせて背伸びをする。

「大丈夫なのか？」

山縣は、青白い顔で笑っている高杉の顔を覗き込んだ。

「ああ、心配はいらん。薬を飲み忘れただけだ」

ほっ、と一息を吐くと、桂は後ろを振り返った。

そこには心配そうにしている和奈と、武市が座って居る。

「着いたばかりだと言うのに、迷惑をかけたね」

「井上さんがお医者様を呼んでくれました。二三日は安静にしてる
ようにと……」

「大袈裟なんだ、あのやぶ医者」

「晋作！」

大丈夫だと、高杉は布団を跳ねのけて胡坐を組み、庭へと視線を向けた。

普賢象桜が白い花を咲かせている。

「・・・春だな」

唐突な言葉に、その場に居た全員が首を傾げる。

「倒れた時に頭でも打ったのかい？」

桂は高杉の肩に羽織を被せた。

「満開となれば、やがて花は落ちる。太陽は南中すれば、やがて陰りはじめる。人間も年をとって、やがては老いて行くもんだ」

桂の悲壮な顔が、その言葉の意味を語っていた。

和奈の手が、膝の上で震えているのに気付いた武市は、その手に自分の手を重ねた。

高杉の言葉と、桂の表情から悟ったのだろう、目の前に座る男の寿命が、限り在るものと言う事を。

「だから俺は、必死で己がやるべき事をする。ゆつたりと寛いでる暇などないんだ」

「狂え・・・か」

山縣も顔を庭に向ける。

「思想を維持する精神は、狂気でなければならぬ」

りいーん。

和奈の耳元でまたあの鈴の音が響いた。

なに？ この感じは・・・私は・・・？

「松陰先生は言われたな」

桂が懐かしそうに呟いた。

「乱世を迎えるであろう我々に、狂喜の本質たるものは、純真に変革に望もうとする精神でなければならぬ。故に、諸君、狂いたまえ、

と」

ガタガタと震え出した和奈に、手を重ねていた武市が驚く。

「和太郎？」

武市の声に桂が振り向き、高杉も山縣も視線を向けた。

「あ・・・」

顔面に大粒の汗を浮かべ、両目を見開いて唇を震わせている。

「和太郎!？」

和奈に駆け寄り、両腕を抱えて覗き込む桂の耳に小さな声が届いた。

「・・・たびも・・・生きかへりつつ・・・こころ吾れ忘れめや」
「!！」

そして和奈は桂の腕へと堕ちた。

其之三 転の理

慶応二年五月一日。

小笠原は、毛利親子と岩国領当主吉川に芸州へ出向くよう報せを送り、穴戸が代理として国泰寺を訪れた。

「私は、毛利公に出向かれよと申したのだ。貴公を呼んだのではない！」

「只今申し上げました通り、敬親公は心労が重なり床に伏せっております。故、家臣である拙者が参りました旨、何卒是認頂^{ぜにん}けぬでし
ようか」

「出来ぬこと故、帰られるが良ろかう！」

どう言葉を並べても、小笠原の立腹を納める事ができずに居た。

「長州も必至か」

場の言い合いを、広間の一番下手で見ていた近藤は、隣に座って居る土方に呟いた。

「時間稼ぎなのは明らかだ。何か企んでるとしか思えん」

それは近藤として思った事だ。こう何度も体調を崩したという理由で、詰問を回避できるものではないのだ。

「とっとと先陣出だせばいいんだ」

「それが出来ていたら、既に幕軍は長州に攻め入っている。諸藩の不信が広がっている以上、小笠原殿も手順を踏まざるを得ないんだ」
小笠原の声が更に大きくなった。

「三度に渡る出頭拒否！ もはや我慢の糸は断たれておる！」

小笠原は、後ろに居た土方らに穴戸を捕らえろと叫んだ。

「お待ち下さい小笠原殿！」

近藤と土方に体を抑えられた穴戸は、座敷から去ろうと立ち上がった小笠原の背に叫んだ。

「小笠原殿！」

しかしその歩みは止まる事なく、穴戸は土方の手を振り解こうと

もがきながら、襖の向こうに消えた小笠原の名を叫び続けた。

縄手にされた穴戸は、綱乗り物に命令書と共に乗せられた後、新田藩藩主浅野長訓へと引き渡された。

穴戸に同行していた萩藩八組士河北一は、国泰寺での顛末を報せるべく、家老吉川一経幹の元へと駆け戻った。

吉川一は疎遠であった本家長州藩と、岩国領の融和を図って両藩の間を取り持った家老である。

前回の征伐時、禁門の変の責任者として、三家老の首を差し出し恭順するように動き、幕府方の派兵の延期を取り付け事なきを得ようとした男である。敬親からの信頼も厚いが、高杉や桂は、宗家である長州藩への背信行為と見なし嫌っている。

一度は幕府へ恭順する姿勢をみせた吉川だが、今回の出兵に対して幕府に義はないとし出兵拒否を貫いていた。

「これが、穴戸殿の体ら括り付けられた書にございます」

それを河北から受け取った吉川は、中身を見る事なく破り捨ててしまった。

「敬親公代理をに蠅はいを懸けたる以上、我が幕府への信義も最早これ迄である！」

長州藩主名代を、重罪人として扱った事に激怒した吉川は、河北に長州へ戻るよう命令し、決戦の意志を固めたのである。

そして山口へと戻った河北は、毛利親子に謁見すると芸州での事を報告した。

「この度の所業、立腹どころではあらぬ。然らば、開戦の外はあるまい」

敬親は事を長府藩、周防藩へ通告せよと命じた。

京から大坂へ入った中岡は、土佐藩が手配した薩摩行きの蒸気船

に乗っていた。

「間に合えばいいけど」

新撰組の出立を聞いた中岡は、京と大坂に居る陸援隊を陸路、海路に分散させ、長州行きを決めた。

もう一つ、薩摩で乾と西郷を引き会わせる予定もあった。谷は先に陸援隊隊士達と合流し、中岡は会談を終えたあと合流する事になっている。

「早馬を走らせたが、長州に撃たれる事にならんじやろうな」
さつきから谷はそればかりを気にしている。

「一応、目印としてこの印を報せたけど。全隊に行き届かせる時間が無いのは確かだ」

「わしが撃たれて死んでもうたら、化けて出ちやるき。覚悟しておいとおせ」

「言葉は言霊。口から出た言葉は真になると言うだろう！ 縁起の悪い！」

「そう怒らのうてもかまんじゃろ」

「駄目！」

手にしている腕章に視線を落とす。

白地の布に、赤色の円内に鶴の模様が入っていた。腕章と旗に中岡が描かせたものだ。

「聞きたかったがやけど、なき鶴なんぜよ」

「へへ。桂さんの剣、鶴丸だから。それに縁起もいい」

「か・・・簡単すぎるき・・・」

「他に思いつかなかったんだ」

「そういう事はからっきり苦手ときちゅうからな、おんしは」
「ほっというて！」

谷は船内に降りる入口を見る。

「けんど、乾さんと西郷さんを会わせて、どうするがだ」
客室には乾が居るのだ。

「土佐藩を倒幕に傾けるためには、両藩の密約も必要だろう？」

聞こえないよう、ちいさな声で説明する。

「そういう事になると、先の先を考えて行動こたう頭を持ちゅうがやき、どうして芸術になると駄目なんだか解らん」

「芸術って、これ芸術!？」

谷はそうだそうだ、立派な芸術だと言って譲らない。

「いいよう、好きに言っというて」

幕軍は京をすでに出立している。乾の情報では、新撰組も参戦すると言う。

中岡は海面に視線を向け、腕章を握り締めた。

萩に居た桂と高杉にも、この報せが届けられた。

「猶予はもうない。俺は今から薩摩へ行って来る。戻るまで敬親公を抑えておいてくれ」

「しかし・・・」

体が心配だとは、口にしなかった。

「どんな時でも、どんな事があっても、苦しいという言葉だけは、言わずにおく! それが長州男児だ!」

諦める他はなかった。

「解ったよ」

「すまん、小五郎」

労咳は不治の病。

そう頭では割り切っているはずなのに、心は悲鳴を上げている。どうしてこの男が死なねばならぬのだと。

高杉を見送った桂は、その足を和太郎の寝る部屋へと向けた。

「桂さん」

武市は一睡もせず付き添っていたのだろう、目元には疲れが浮かんでいた。

「まだ目を覚まさないかい？」

「ああ・・・どこが悪いと言う訳ではないと、医者は言っていたが」
消え入りそうな声で、倒れる前に和奈が囁いた言葉を思い出す。

（あれは、松陰先生の残された言葉だ）

未来から来た者が、書として残されているだろう言葉を知っている。でも不思議ではない。

【物事には必ず理由がある。必然はあっても偶然はない】

初めて和奈に会った時、自分で口にした言葉が脳裏に浮かんだ。

桂は和奈の抜刀の太刀筋を思い返す。

心形刀流を習っていたと和奈は言っていた。武市の鏡心明智流の影響があったものの、稽古を見る限り確かに心形刀流だった。だが、大津で見た時の太刀筋は、全く別物だったではないか。

（・・・まさか）

山鹿流剣術・・・か？

それは山鹿素行が兵法として確立させた剣術で、赤穂藩国家老大石内蔵助が、元禄赤穂事件を起こした事より、後世にて実戦的な軍学と謳われている。

桂と高杉の師吉田松陰が継いだ吉田家も、代々山鹿流師範家である。松陰自身も師範であり、敬親に武教全書戦法偏三の講義を執った事がある。

しかし、和奈は山鹿流の事など口にしていない。

桂は自分の考えに驚愕した。

「一らさん！ 桂さん！」

はっ、と我に返って武市を見る。

「どうした？」

「いや、なんでもない。私はこれから藩庁へ戻らねばならない。和太郎が目覚ましたら、周防へ来てほしい」

敬親から届いた通告書の内容を武市に語った。

「重罪人とは・・・高杉くんが発ったようだが、それでか」

「ああ。買物と言っていたが、恐らくは薩摩で軍艦を手に入れるつもりだろう。私もそれを踏まえて動かなくてはならない」

「グラバーと接触を？」

「だろうね。敬親公も、吉川殿も開戦の意を固めてしまった。なん

とか戦を回避するため動いていたのだが。小笠原殿がああ出ては、もう晋作を止められない」

また多くの血が流れる事になるが、と桂は言う。

「承知した。和太郎が動けそうなら、すぐに向かおう」

「うん。無理をさせたくないが。戦になってしまったら、君もじつとして居てはくれないだろうからね」

話し声が聞こえる。誰かが近くで喋っているんだ。

やがて足音がし、遠ざかって行った。

追い掛けないと。でも、体が宙に浮いた感じで、動かない・・・何か聞こえる。ああ、鈴の音だ。

和奈はようやく目を覚ました。

「あれ、ここは？」

顔を動かして部屋を見回す。

「えっと・・・」

赤い血。

高杉の吐血を思い出し、和奈は慌てて飛び起きた。

「高杉さん！」

横の襖を開けるが、見覚えのない部屋が在るばかりで誰の姿もない。

「あら、目が覚めたようですね」

女の声に振り返る。

「貴女は？」

「松子と申します。起きて大丈夫ですか？」

「え？」

「昨日、小五郎様に抱えられて来たんですよ？ それはもう慌てられて。あんな小五郎様を見たのはいつ以来かと、驚いたぐらいです」
抱えられて来た？ 高杉さんではなく、私が？

「あの、高杉さんは！？」

「さき程見えられておりましたが、薩摩へ行きました。小五郎様も今藩庁へ戻られると言って出かけましたよ」

薩摩!?

「だって、あんなに・・・」
血を吐いたのに。

「起きたか?」

桂を見送りに行っていた武市は、松子の横を通り入って来る。

「あの、なんで小五郎さんの家に居るんですか? 高杉さんは大丈夫なんですか?」

「二つ一度に聞くな。とにかく座れ」

「お茶をお持ちしますね」

くすくす笑いながら松子は障子を閉めた。

「倒れた事を、覚えてないのか?」

「倒れた? 僕が?」

「ああ」

「・・・高杉さんが吐血して、小五郎さんが来て、庭を見ながら喋ってた所までは覚えてるんですけど」

「そうか」

桂の様子から、和奈が倒れた理由の心当たりを見つけたのでは、考えていた。

「具合は?」

「平気です。あの一」

「ならば出立の用意をしよう。今行けば桂さんに追いつける、行けるか?」

「え、はい。行けます」

心当たりが在るならば、聞かなくてはならなかった。

松子にお茶の断りを入れると、和奈達四人は家を出ると桂の後を追った。

薩摩に渡った高杉は、長崎に入ると商人トーマス・ブレイク・グラバーと接触した。

伊藤と共に交渉にあたり、藩の了承もなく蒸気船丙寅丸を三万六

千両（十四億四千万円）で購入してしまった。

「グラバーは、好きになれん類の人間ですよ。こっちの価格を蹴って、値段を提示した時のにこに顔ときたら！」

グラバー邸を出た伊藤は、後ろの白い洋館を振り返りながら言った。

「足元見られるのは仕方ないだろう。時期が時期だしな」

「薩摩から情報が入っているんじゃないですか？」

「入ったおかげで軍艦一隻買えたんだ、文句は言うまい」

「敬親公に知れたら、絶対腰抜かす」

「あはははっ。小五郎が遣り繰りしてくれるさ」

悪びれる事なく高杉は言うが、幕府軍の再征伐が発令されてから米の相場は高騰しているのだ。

長州藩が百万石を超える石高をはじき出しているとは言え、年間賃金一万六千人分、年間米消費量二億人分を一気に使い切ってしまったのだ、笑い事ではない。

「高杉さんの尻拭いをする桂さんが、段々と可哀想になってきた」

だが、敬親にどんな理由を並べ、三万六千両の使い込みを無しにするか、見てみたいものではあった。

「敬親公が怒ってる隙を見計らって、承諾させるだろうな」

笑みを浮かべながら、敬親に詰め寄る姿が想像できた。

「さあ、丙寅丸を連れて帰るぞ。小五郎がてんでこ舞いしてそうだからな」

「そうさせてるの、高杉さんだって気付いています！？」

知らん！　と一言で終らせ、港へと二人は歩いて行った。

桂に追いついた和奈は、心配そうに顔を見つめられていた。

「本当に、なんともないんだね？」

「です。倒れたって言うのが不思議なくらいです」

それでも無茶は禁物と、桂は乗っていた馬から降り、和奈を代わりに乗せてしまった。

「山縣くんの処から前には行かないように」

「はい」

和奈が先頭に行く山縣の処へ馬を進めてから、武市は桂に疑問をぶつけた。

「和太郎を見て、物思いに耽っていたが」

「なんでもないよ。晋作と通告の事で頭が一杯だったただけだ」

「驚いた顔を一瞬した。それだけとは思えないが」

「君も食えぬ男だと言う事を、忘れていたよ」

和奈の太刀筋を思い返してみても、山鹿流ではないかと思った、と観念して言った。

「山鹿流か。長州で和太郎がそれを習って居たと？」

「それは……僕にも解らないが、教わって居るのは確かだろうね」

そう言ったが、あれは短期間で教われるものではない。元々身に付いていた、と考える方がずっと纏まるのだ。

「和太郎の親族は今どこに？」

そこに来たか。

「こんな状態だからね、身の安全が第一と、津和野に逃れている。」
「そうか」

その答えに疑問は持たれなかったらしい。村木家に養子のお話を出したのは正解だった。

「吉田家が代々師範を務めている流派だから、山鹿流を習っているも別段不思議はない」

「実戦兵法を、女子が？」

本当に痛い所を付いてくる。

「だから驕にと、預かったんだよ。はちきん？　と言うのかい？」

「気が強い女子か」

そうすると、苦笑する。

確かに和奈は普通の女子よりかなり気丈だった。

「なぜ太刀筋を思い返す事になったのか、その理由を教え頂けない

か？」

「・・・和太郎の事となると、君の頭は普段以上に回る様だね」

「褒め言葉、と受取っておこう」

「どう言い回しを変えても、武市は疑問となる核心部分に話しを戻してしまうだろう。」

「倒れる直前にね」

和奈は長州の人間だと言う事になってる、それは武市も疑ってはいない。

「松陰先生の言葉を、和太郎が囁いたんだよ」

「？」

「身はたとえ武蔵の野辺に朽ぬとも、留置まし大和魂。全文ではなく所々だったけど、ほら、丁度晋作が花の話しをしていただろう？だからそれだと思ったんだ」

本当は、七たびも生きかえりつつ、夷をぞ攘はんこころ吾れ忘れめや、だったが、桂はそれを告げなかった。

「それで太刀筋を。だが、なぜ倒れたのか、その理由が見当たらない」

「うん。それは思ったんだが。僕達のやり取りを聞いて、あの子は晋作の寿命がもう幾許も無いと知ったはずだ」

「そのせいで、倒れたか」

「他に原因があるなら、僕が知りたいよ」

道理はある。桂が嘘を並べて立てる理由も考えられなかった。

「ありがとうございます」

「ん？」

「俺はどうも、あいつの事となると見境を失ってしまう・・・無礼を致した」

「本当に、以前の君から全く考えられないね」

恐縮している男を横目に、自分の想像した現象が本当に正しければ、その時はこの男にも話すべきだと思った。まずは、それを確かめる術を見つけないければならない。

「まったく、色々な事が一度に起きるものだから、逃げ出したい衝動に駆られてしまうよ」

「私で片付く事があれば、どうか遠慮なく」

「ああ、勿論さ。その為に、僕と晋作は君の身柄を預かったのだから」

にこっと笑う桂は、やはり狐だった。

幕府は小笠原からの連絡を受け、近隣の藩に出兵要請を出した。

しかし薩摩藩は独断で海禁政策を放棄し、兵庫開港条約を締結したのも承認できる事ではないとし、今回の長州再征は、幕府と長州の私闘であると付け加えた上で、出兵を拒否した。

芸州、石州なども出兵要請を拒否。隣藩である津和野藩は、芸州での一件を知り長州藩と同盟を締結し幕府への抗戦姿勢を執った。その他諸藩は出兵も長州へも加勢はしないと、形勢静観を決定したのである。

「やっぱり薩摩は動かないか」

旅籠屋の一室で、土方ら幹部らが膝を合わせていた。

「難癖を付けて来ているが、長州との繋がりがあつての拒否と思つていいだろうな」

土方はどうしても両藩を繋げたいらしい。

「芸州まで出兵拒否し、他の連中も手を出さないととなるとな」

近藤とて、その件に反対をしている訳ではない。が、自分達の推論を簡単に上にへ出す訳には行かない。

「そうだ」

篠原と富山が居なくなっていると沖田が伝えると、眉を吊り上げ近藤に聞いた。

「なんで伊東の野郎も居ねえんだ？」

「小笠原殿の処へ行っている。大方、胡麻でも搗ってるんじゃないか？」

「ちっ！ 俺達はこのまま長州に行けるんだろうな？」

「参加せよと命が下りているじゃないか」

幕兵との出陣ではなく、小笠原に随行という形に土方は納得できないのだろう。

「伊東が余計な真似をしなきゃいいがな」

「いくら伊東さんでも、幕府からの正式な命令は覆せないさ」

「その幕府の偉いさんに会いに行ってるんだろうが！」

「落ちて着け歳三。まったくおまえときたら、最近怒鳴ってばかりじゃないか」

そんな事はないと、引き下がるしかない土方はだんまりを決め込んでしまった。

「長州への進軍は有ると考え、皆も沙汰があるまで鋭気を養ってくれ」

鋭氣と来たら！ と藤堂が立ち上がる。

「行く場所は決まってるよな！」

そうして、藤堂、永倉、原田の三人は意気揚々として出で行ってしまった。

斉藤と永倉は寝ますと部屋へ戻ってしまったので、赤井も腰を上げた。

五方面からの進軍を計画していた家茂だが、薩摩藩が出兵を拒んだ事で萩口からの進軍を諦めざるを得なくなり、芸州口・小瀬川口・石州口・小倉口の四方面からの攻め込む事を余儀なくされた。

そして六月。幕府は十五万の兵力を用い、第二次長州征伐を開始した。

其之四 兵達との再会

山口へ入った桂は、和奈達を普門寺へと連れて来た。

「諸隊に兵学を教えている方で大村さんと言う。これからの事もあるから一度会っておいてほしい」

征伐を踏まえ、仕官教育もそこで行っている、と桂は言った。

「誰が言い出したのか定かではないが、歩兵・騎兵・砲兵を教える事から三兵塾と呼ぶようになってね。今じゃ普門寺よりそちらの名の方が有名なんだよ」

江戸で鳩居堂という塾を開いた大村益次郎は、蘭学・兵学・医学などを教える傍ら、本業の医者として過ごして居た。

桂が大村と出会ったのは、吉田松陰の遺体を受取るため江戸小塚原の回向院に行った時だった。そこで死体解剖を行っていた大村を見て、知った顔だなと思ったらしい。

「気になったので、近くに居た者に名を尋ねたら蘭方医の大村先生だと言う。そう言えば、同郷でそんな名の医者がいたなと声を掛けたんだ」

桂が、松陰の亡骸を引き取りに来たのだと告げると、大村も惜しい方を失ったと悲しんだそうだ。

それから江戸を訪れては大村と話す機会を作り、やがて医者である彼が兵学にも精通している事を知る。来訪を重ねる内に、大村も徐々に培ってきた兵学について語るようになる。

桂はこれほど兵学に知悉している人物はそう居ないと、帰国しては敬親に大村の話しするようになった。

「藩庁が山口へ移った時、軍務に付けたいと江戸から呼び戻してもらったんだ」

桂から大村がどういう人物なのか聞き及んでいた敬親は、一も二もなく許可を出し、藩命で大村を江戸から呼び戻したのだ。

帰国した大村が謁見を賜った際、防長二州一和と軍政について敬親に熱く語り、これに甚く感動した敬親は、御用所役として軍政に専任するよう命を下したと言う。

久坂さんとも懇意にして居たんだよ、と淋しげな表情で桂は言った。

「桂木くんは知らなかったかい？」

「ええ。江戸にはいい思い出がありませんから、足を向ける事も少なかったのだ」

小さな門を潜って行くと白壁が途切れ、和奈達は小さな階段を上って行く。すぐ目の前に見える家屋で、大村は講義を行っている。

「ここへ来るのは久しぶりだ」

正面入口から中へ入ると、桂達に気付いた大村が講義を中断し駆け寄って来た。

「随分と早いお戻りで」

「これからの事を大村さんと相談せねばなりませんし、敬親公からの通達も届いたので戻りました」

「光栄な事です。老士ではありますが、出来うる限りの尽力はさせていただきます」

浮かべた笑顔から、人の良さそうな初老の男である事が判る。

「諸隊編成案を見て頂いていたのは正解ですね」

「有る程度の基盤ができて居たのは助かりましたよ」

内乱沈静後に諸隊を統合整理した桂は、長門国の諸隊配備について大村に相談をしていた。

編成案を見た大村は、諸隊の配備は征長軍侵攻を想定し行う事と、歩兵・騎兵・砲兵の戦術訓練を徹底させる必要性があると述べた。同意した高杉は、駆け回る自分達の代わりにと指導を大村に一任したのである。

「また忙しくなりますが、よろしく願います」

「覚悟はどうにしております」

佐世と石川も、和奈達の姿を見て駆け寄って来た。

「桂木さんじゃないですか」

桂に一礼してから、和奈に久しぶりだと嬉しそうに石川は笑い掛ける。

「お元気そうですね石川さん」

「おう！　そういうお前も元気そうだな」

「君が居てくれて良かった。石川くんの隊で、この四人を引き受けてくれないかな？」

四人？　と以蔵の横に立っている男に視線を向ける。

「俺は構いませんが、奇兵隊の方がいいのではありませんか？」

「桂木くん達の要望で、芸州へ参加する隊に入りたいんだ」

その芸州に新撰組が入っているんだよ、とその言葉で石川の顔から笑みが消えた。

「大揉めになりそうな予感がする」

大村も新撰組の噂を知っていたらしく、だから隊の配置を変えたのです、と呟いた。

「大村さんに任せて申し訳ないが、晋作が戻るまでに有る程度の配置は決めて頂きたい。細部はその後と言う事で」

「ええ、承知しております。隊士の入れ替えを先に行ったのはまずかった。指揮官の指令系統作りだけでいいと一息ついたところなのに」

配置を一から考えて練らないと、もう大村の頭の中はその事で一杯になっている様だった。

「あまり邪魔をしては悪い。私はこれで失礼させていただきます。桂木くん達は大村さんの講義を受けるといい」

「講義ですか・・・」

「おまえも少し兵学を学んでおきな。ああ、医学も教えてもらえよ？」

「二つも無理です」

兵学、医学と言われ、大学の講義に参加する気分になる。

「では大村さん、後はよろしく願います」

桂が出て行くと、考え込んでいる大村をそのままに、佐世と石川は四人を各隊の頭取に紹介して回り始めた。

それを咎める事もせず、正面の席に戻った大村は講義もそっこのけで、何にやら書き始めている。

「その人は？」

ずっと気になっていた見慣れぬ男を見ながら、石川は切り出した。

「京に居た私の同士だ。手配が付いてしまったので連れて来た」
新兵衛は無言で頭を下げた。

「・・・手配されるなら、それなりの腕、って事ですか？」

佐世の言葉に、武市はただにっこりと笑みを浮かべただけだった。
「段々と桂さんに似て来てないか？」

石川は小声で和奈にそう囁く。

「それ、高杉さんも言っていました」

桂さんが二人も居たらたまらんと、石川は泣きそう顔をした。

「ところで、桂木さん達も隊に入るんですよね？ 何処の隊に所属か決まっているんですか？」

所が気になると乗り出して来る。

「俺の隊だ」

石川がふふん、と笑うと所は慌ててしまった。

「それ、ずるいですよ！」

「なに言ってる。おまえの持ち場には大村さんの隊がいるだろうが」
「それはそうです」

拳兵で参戦した二人の腕を見ているだけに、できるなら自分の隊に入りたいと思ったのだ。

「芸州に、恋しい相手が居るらしい」

井上の言葉に、女か！？ と同時に声上がる。

「井上さんの揶揄だ、本気に取りらないでくれまいか」

「新撰組が芸州に居るんだとさ」

そう言った石川の表情は堅い。

「新撰組！？　なんで京の治安組織が芸州に？」

鷹懲隊頭取赤川敬三が、所の頭を押し退けながら聞いてきた。

「訊問にと、幕府のお偉いさんが芸州入りしてる。その護衛だろうと思うが」

井上もその推測の域から出れないでいた。征伐の為と参戦せずそのまま京へ帰ってくれば有り難いが、そうならない可能性は捨てきれないのだ。

「それで芸州組みか」

なら自分の隊に参加は無理だなど、所は残念そうに言った。

「大村さんも隊を率いて参戦されるのか？」

武市の感心はどうやら新撰組より、そちらに向いていたらしい。

「ええ。頭取として振武隊を任されています。凄い方ですよ大村さんは」

井上はちらりと大村に視線を流したが、一向にこちらへ注意を払わない様子なので、今日の講義はもう無いだろうと内心笑ってしまった。

「高杉さんと大村さんが揃うと、もう大変なんですから」

どう大変なのかと和奈が聞く。

「起きてから寝るまでずっと講義に訓練！」

「・・・確かに大変だ」

訓練ならまだしも、講義に参加したいと益々思わなくなってしまう。

「ほら、見てみる」

石川が大村の居る方に顎を突き出した。

「指揮系統をどうするか考えているんだろうけど、ああなったら俺達が居ようが居まいが、案が出来上がる迄もう動かない」

「講義は？」

「ない！」

どんな講義をされるか興味があったのに、と武市は残念そうだった。

た。

「もう講義はないんだし、場所を変えるか」

戦略構想に没頭してしまった大村は、佐世達が戸を開けても注意を払わず、ただぶつぶつと言いながら首を傾げたり腕を組んだりを繰り返している。これでは何時終るか知れないと、名残おしそうに武市も出て行った。

「ほら、行った行った」

所に背中を押され、和奈はわいわいと歩いている一団に加わろうと追いかけた。

石川達は、亀山東麓にある明倫館と呼ばれる藩校に和奈達を案内した。ここには練兵場が備わっているため、子供だけでなく兵士も訓練に通って来る。

萩城内にも明倫館は在ったが、藩庁が移った際、私塾だった山口講堂を改称し山口の明倫館として開校させたのだ。萩・山口両校は水戸藩の弘道館、岡山藩の閑谷^{しずたにこう}と並んで、今やこの国の三大藩校の一つとなっている。

高杉や桂も萩の明倫館を出ており、二人が師と仰ぐ吉田松陰もこの藩校の出身者だと石川が説明した。

「小五郎さん達が通ってた姿を想像できない」

和奈が真剣に想像しようとしているのを見て、所も赤川も確かに同意を示した。

校内では至る処で寝そべっている男達の姿が在った。

各地から三兵塾に出向いて来る者の多くは、旅籠を利用せずこの明倫館に寝泊りしているのだと言う。旅籠に泊まる賃金を考えると、寝心地は悪くてもただで寝泊り出きるこの場所の方がいいのだ。

「隊所属になると士分扱いされて金三分（約十五万円）が支給されるが、それ以外は給金を貰えないからな。少しでも安上がりになればと、ここを開放してるんだ」

それでも講義を聞くため、遠くからやって来る人が多いと言う。

「みんな雑魚寝になるがな！」

（修学旅行みたいだ・・・）

なんだかわくわくして来た。家族旅行とは違い、友人との旅行は親の目がない分楽しみが増える。そういった懐かしい思い出が、学校というみの場所だからなのかふと蘇る。

どこからか酒が運ばれ、つまみも並ぶと結局宴会になるのがこの時代の男達の習慣のようだった。

「ところで、村木はこの流派を習ったんだ？」

話が朱子学と徂徠学そらいの難しい話しに及ぶと、話しに付いていけんと酒を片手に所が抜け出して来る。

「山鹿流だ」

心形刀流と答えようとした和奈より先に、武市がそう口にした。

「山鹿流！？　えらく古風な流派を選んだんだなあ」

と言われても、和奈にはその流派に聞き覚えがないので何とも言い返せず、武市へ視線を向けるしかなかった。

武市としては余計な詮索をされないために、長州出身の和奈が江戸の四大流派の一つである心形刀流を習っていた事を伏せたのだ。

「流派がどこであれ、剣を学ぶ時に大切なものは変わらぬだろう」

「で、なんで桂木さんが答えるんですか？」

「やばな事を聞くんじゃない」

「なにになに？」

石川の一言で、難しい顔をしていた者までもが、放置してはおけないと話しに加わって来る。

「やば？」

と佐世が眉間を狭めて意味深な顔を石川に向ける。

「やば？」

そして和奈もつい復唱してしまった。

「え？　と言う事は・・・」

所が恐る恐る武市を見る。

「えええー！？」

叫んだ所が武市から少し後ずさりした。

「頼むから、話をややこしい方向に持って行かないでくれまいか」

「そうだ。一々先生の趣向に口を挟むな」

以蔵の一言が決め手となり、男である和奈と武市の不条理な関係、という図式が出来上がってしまったようだった。

「またそれか・・・」

反論しても、きっとこの男達は納得しないだろう。下手に言い訳をするより、話を聞き流す方がいいように思えたので、和奈は何も言わず酒を飲み干した。

「新之助、解っているだろうな？」

武市が凄んでも、酒の入った以蔵には効かなくなっている。それどころか、もう諦めて下さいと念を押してしまったのだ。

「確かに村木は優男だしな。そうなくても仕方ないか」

赤川はにやけ顔で所の脇腹を小突き、新兵衛は後ろで声を殺して笑っている。

突然足音が響いたて来たと思ったら、斉武隊の太田市之進が血相を変えて飛び込んで来た。

「伝令！！！！」

その緊迫した叫び声に、皆の顔つきが変わる。

「征長軍が芸州に入った！」

「陸からか！？」

「西国街道と山陰街道両方だ！ 諸隊はすぐ各方面に配置しろとの命だ！」

その言葉が終らぬうちに、赤川と所が飛び出して行く。

「海路は？」

「今判らん！ 俺は大村さんの処へ行く、後は頼む！」

太田が大急ぎで出て行くと、石川はその場にいた隊士らに声を掛けて行く。

「馬がある、我らも急ぐぞ」

さっきまでの和氣藹々とした雰囲気はもう無くなってしまい、ま

た戦が始まるのだ、と和奈は思いつつ夜の街道に馬を走らせた。

諸隊が動き出すのに合わせ、伝令が届いた三田尻の海軍局でも、要である下関の防衛を強化させるため軍艦を出航させた。周防南端沖に在る屋代島の方角へと、富士山丸を先頭に翔鶴丸・旭日丸・雲丸・大江丸を含む幕艦二十二隻が、瀬戸内海の波を掻き分け進んで来ていた。

そして慶応二年六月七日、四国松山藩を含む幕府海軍は、屋代島への砲撃を開始したのである。

其之一 屋代島の戦い

幕艦の進行を知った芸州は急遽長州へ報せを出し、下関に戻っていた高杉の元にも届けられた。

「二十二か。報告より多いな」

山縣は机に地図を広げて、とんとんと島の上を叩く。

「門司で挟み撃ちを考えての航路と取っていいと思うが、芸州勢への加勢、門司での挟み撃ち。どちらも避けたいものになる」

周防と芸州の藩境にて戦闘になるのを見越し、海から歩兵部隊を投入してくる可能性もある。

「隊の配置はこのままでいいだろう。今は戦力分散を避けるしかない」

その言葉に山縣は唸るしかない。

既に芸州と石州にはそれぞれ隊が陣を構えている。高杉に隊を動かす気がないのは、編成を考え直し、それを隊に伝えて動かす時間がないからだ。それは山縣も良く解っているのだが。

「防衛を地元民兵で固めたのは早計だったな」

芸州、石州、下関本土での戦闘を重視した為の采配だった。進行中の海軍が万が一、屋代島へと攻撃を開始しても、弾薬の消費を考え長期戦にはならないと踏んだのだ。だが二十二隻が来ているとなると、一、二隻を投じて屋代島へ攻め込んでも大きな消費には結びつかない。そうなった時、民兵で組織された兵では、訓練された幕兵に対応し切れるものではない。

「今言ったところで始まらない。柳井に駐留してる大野に伝達をしてくれ、屋代島へ渡れと。俺も丙寅丸で出る」

「は！？ おい、高杉。一隻で幕府海軍を相手にする気じゃないだろうな？」

そう聞きつつ、きっとこの男はそうだと言うに決まっていると、山縣は半ば諦めながら聞いてみた。

「そうだ！」

「やっぱり・・・」

「丙寅丸の機動力と、最新の砲塔の威力を測っておきたい」

「まったく。何もこんな時に調べに行く必要はないだろうが」

「高杉さんの無茶は今に始まった事じゃないですよ」

報国隊の原田が話しに加わって来た。

「俺達も向かいますか？」

「いや、ここの数は減らしたくない。死に行くわけじゃないから心配するな」

「死ぬつもり、と言ったらその柱に縄で括りつけてやれたのに」

山縣は本気の様だ。

「なにい！？」

「もういいから、行きたいならとつと行つて来い」

「すまん山縣。しばらく留守を頼む！」

「ああ、任せてくれ」

こうして高杉は、手に入れた丙寅丸にて下関から屋代島へと出航して行った。

島への上陸は、屋代島北東部にある久賀岸壁からだった。

海上からの砲撃があった後、上陸した洋式歩兵部隊は、応戦に出た民兵隊を難なく退け圧制のまま進軍を進めていた。

逃れてきた民兵は、歩兵部隊を鎮圧せんと、東三浦にて急遽結成された集義隊により救出された。

頭取桜井慎平は、集まった百二十名隊士を二分させた。一つを北海岸沿いから久賀へ向かわせ、残り六十名で西海岸回りで南部から北上、征長軍を挟む形の作戦に出た。

しかし、上陸して来た征長軍の数は桜井達の予想を遥かに上回っており、久賀へ先に到着した隊は、戦闘を開始して間もなく苦戦を強いられる事になる。南部から回っている援軍が到着したとて、到底巻き返す事などできそうになもなかった。

「どんだけ居るんだ！」

久賀村から続々と出て来る幕兵を見て、兵士の士気が落ち始めている。

「上陸してくる兵数が予測できんぞ！」

「予測できたとしても、蟻の大群を止めるにはこちらの数が少な過ぎる」

このままでは全滅も余儀なくされると、桜井は民兵に久賀から東三浦へ下がれと命令を出した。集義隊は民兵の盾として陣取り、幕兵を相手に死闘を繰り広げている。

「防ぎきれん！」

それは桜井とて解り切っていた。

「民兵は！？」

「足並みなんか揃うものか！」

「止むを得まいか。我々も一旦退くと全員に通達してくれ」

桜井は民兵や庶民を集め、久賀より撤退を開始した。

一方、南下して来た集義隊は、島の南東にある安下庄から上陸した松山藩兵と交戦になっていた。その数二千余り。対する六十名の集義隊では戦闘にすらならず、これを撤退させた。

だが松山藩兵は久賀の征長軍へと向うことなく、近隣の集落へ雪崩れ込んだのだ。

村に入った兵士達は、戦に参加していない庶民に対し剣を振り上げる。

「手向かう者は全て斬れ！」

逃げ惑う者を捕まえてはその懷に剣を突き刺し、女子と見ると家屋へ連れ込み暴行を加えた後、首を刎ねた。その後物資を略奪すると、その足を別の村へと向け同じ所業を繰り返して行く。それは戦闘と言うより、虐殺と呼べる行為に他ならなかった。

松山藩の無差別とも言える襲撃を知った桜井は、報せを芸州へ急遽走らせた。このまま見過ごすなどできなかったのだ。

「好き放題しやがって!!」
民兵をそのまま後退させると、隊士を連れて桜井は安下庄へと下った。

屋代島占拠の報せは久賀と安下庄両方から、周防国と芸州国の藩境で陣を構える山田市之允の隊へと届けられた。

海上からの攻撃に加え、歩兵隊上陸を聞きどうするべきかと石川に問い尋ねる。

「独断だが、鋭武隊と浩武隊を屋代島へ向かわせる。民兵が参加しているんだ、高杉が居たら同じ指示を出す。伝令をすぐ高杉へ出せ」
「展開してる部隊と合流し、征長軍を追い返せばいいんだがな」

武市は地面に島の簡単な地図を書くと、久賀での全隊防衛を説く。軍艦は久賀沖に集中しており、上陸の中心となっている。ならば海岸に征長軍を集められれば軍艦からの砲撃は止む。味方に当たれば戦力を欠く事になるからだ。

「その後は堀くん達の戦術に任せるしかない」

「果たして、四百で戦局を変えられるのか疑問だが、ここはやるしかない!」

堀は抱えていた腕を解く。

「市勇隊も行く。数でなんとかしようと言うよりも、地を見て作戦を考えるだけだ。それが我ら長州軍だからな」

佐々木はそう言うと言を返し走り出して行った。

「さすが長州の兵揃いだ。^{つわもの}高杉くんが居なくともちゃんと何を成すべきか理解している」

「負けてられんからな!」

そう言って、出るぞ、と堀が立ち上がり品川も自分の隊へと戻って行った。

「陸が手薄となるが・・・石州隊に連絡して、伊藤の部隊をこっちへ回してもらおうとするか」

「進軍してくる数さえ判れば、石川くんと山田くんの隊だけで戦術

を考えられるのだが」

「京を出たのは十万、途中諸藩が加わり高杉の予想ではその数十万から十六万。小倉へ集まる征長軍が一番多いと考えているが、三等分したとしても一方五万強の計算になる。その内どれだけが屋代島に回ったかだが」

「長州の強みは過去の戦争経験が有るという事だ。征長軍の武器も大半が旧式銃かゲベール、こちらはミニエーがある。それらを統合して考えれば、例え五万が相手だろうと戦術如何では勝ちに転じる」

芸州入りしたとて、ここに幕兵が到達するまではまだ日がある。三隊千名と火力の使い方で攻防は可能だと武市は続けた。

「戦術の組み立てに、手馴れていますね」

一度は土佐勤王党の頭として倒幕を志したのだ、戦術論の一つや二つは持ち合わせている。とは言えなかったので、苦笑を見せるしかない。

「まずは征長軍が屋代島で行った非道を、近隣国へと伝えさせよう」
いつの間にか各隊の指示と戦術を練って行く武市を見て、和奈はこれまで知らなかった武市の一面を垣間見ると共に、参謀になぜ桂が武市を抱え込んだのかその理由を知る事ができた。

「石州、芸州が動いてくれれば願ったりなんですが」

「それは運に任せるしかあるまい。動かずとも、この進軍はもはや私闘以外の何者でもない」と吹聴できる」

そうする事で、幕府が掲げる大義名分を崩しに掛かれるのだ。

「なにが義か仁かも知らん奴らの好きにはさせん」

あるだけの馬を使い、鋭武隊・市勇隊・浩武隊は小瀬川から南下し、神代に着くと筆崎へ渡る経路で屋代島へと入って行った。

高杉から命令を受け、屋代島に最も近い柳井に駐留していた奇兵隊大野隊は、筆崎から上陸して海岸沿いを南へと下っていた。

進軍していた集義隊にその報告が届くと、桜井は隊を止めて援軍

が到着するのを待つ事にした。ここで足を進めても、被害が拡大するのは目に見えている。それならば奇兵隊と合流する方がまだ勝機はあると考えたのだ。

幕兵を警戒しながら野営していた集義隊の元へ、黒づくめの一団が現れた。

桜井達は一瞬迎撃の態勢に入ったが、大野が名乗りを上げたので味方と解り、安堵の息を漏らしながら出迎えに走った。

「伝令を筆崎と田ノ尻鼻へやってくれ。援軍が到着したら久賀へ行ってくれと伝えさせるんだ。俺達はこのまま安下庄の松山兵を叩く」
「承知した」

洋装部隊を見回し、桜井は驚嘆の色を浮かべている。笠から靴の先、金具に至るまでで全て黒で統一されていたのだ。異様に見えるのは仕方がない。

大野は持参していたミニエー銃、ゲベール銃を扱える者に手渡しに行く。

「屋代島を征長軍から奪還するぞ！」

その叫び声と共に、奇兵隊を先頭に進軍が開始され、大野は安下庄湾に停泊している幕艦を奪取しようと、奇兵隊の一部をそちらへ向かわせた。

突如、闇に銃声が響き渡る。

これに驚いたのは松山藩兵の方だった。

二回目の銃声を合図に、木立の中から黒い集団が現れたかと思うと、火を囲んでいた松山藩兵に発砲を繰り返したのだ。

敵兵が闇討ちを仕掛けて来たのだと知った時には、すでに奇兵隊が斬り込んで来ており、応戦する間も与えられず撤退を強いられたのである。

「くそが！」

幕兵が撤退した後、村を歩き回り生存者を確認していた大野は、その悲惨なまでの光景を目にてしそう吐き捨てた。

木に吊り下げられた幾つもの死体には、剣が突き刺さったまま放置され、暴行を受けた殺されたであろう女子が、全裸で無造作に置き捨てられている。

「これが人間のする事かっ！」

「酷いってもんじゃない」

そう言い、桜井は生存者が居ない事を大野に告げた。

「子供も老人も皆・・・容赦なく全員殺されています」

死体となっている者は兵士でもなく、民兵のように剣を向けた者でもない。皆ただの農民

なのだ。大野でなくともその惨状を見れば怒りを覚えていただろう。

「人を人として見ず物扱いにする所業に反吐がでる！ 人の上に立つ者のする事とは思えん！」

大野は木から死体を下ろさせて他の死体と共に集めさせると、人目に晒されぬよう筵むしろを被せさせた。

「こうなったら皆殺しだ！ 人道から外れた輩どもから我らが土地を取り戻す！」

大野の声は、村に響き渡るのではないかという程大きなものだった。

安下庄湾へ向かった奇兵隊は、乗り込んだ漁船の灯を消して幕艦へと接近していた。

艦からの砲撃は止んでおり、甲板に行き来する幕兵の姿がちらちらと見え隠れしている。今縄梯子を取り付けたとしても、上から狙い撃ちにされるのは必至である。

どう乗り込むか思案していると、幕兵が慌てて剣を抜いて反対側へ消えたのが見えた。続いて奇声が起けると剣戟が聞こえて来る。

奇兵隊は意を決し、真鍮の手すりに縄梯子の先端を放り投げると乗艦を開始した。

手すりから甲板を覗き込んだ先では、すでにどこかの隊と幕兵の戦闘が始まっている。見慣れない洋服姿の男達が幕兵へと斬り掛か

っている中、一人が奇兵隊に気付いて欄干へと駆け寄って来た。

「どこの隊だ!？」

「我らは長軍と共に征長軍を討つため、馳せ参じて来た!」

「味方ではないのか!？」

「俺は石川清之助。加勢に來たと言った! 詳しい説明はあと!

とにかく、この艦を奪取する。ご助力願いたい!」

そう叫んで斬り合う中へ戻って行く中岡の背中を見て、状況を掴み切れないまま、梯子を登った奇兵隊もその中へと飛び込んで行く。

「指揮官を探せ!」

中岡の号令で、奇兵隊も陸援隊と共に動き出す。

そして一刻も経たない頃、船内に居たこの艦の指揮官が連れて来られると、奇兵隊によってその首を落とされた。

艦を占拠した中岡は、生き残った幕兵を乗って来た船に移し終えると、法師岬を回る海路で田ノ尻沖へと向かえと命令を出した。

「あまりにもあっけなかったな」

谷はそう言うが、その全身は血まみれになっている。

「奇兵隊が来てくれて有利となったんだ。俺達だけではまだ落とせず時間も掛かっているさ」

中岡は、改めて奇兵隊の動きに感服を覚えた。指揮が行き届かないまでも、個々の役割をちゃんと認識して動いている。志願して来た者ばかりを集めた隊だけはある。

陸援隊隊士に征長軍の旗印を下ろさせた中岡は、にこにこ顔でそこに長州の旗印を掲げた。

「これで長州から攻撃される事はないだろうな」

「しかし征長軍に艦奪取がばれるぞ?」

谷は風にはためく旗を見上げた。

「ようは長州と合流できるまで見つからなければいいの!」

「はあ。そこまでしか考えてなかった、という事だよな?」

「艦を持って行けば、誰かしら使う人が居るじゃないか。長州海軍は多分下関に集結してるだろうし、余分が有って困る事はないに決

まってる！」

中岡らは、薩摩へ向かう途中の航路で幕艦の進軍を知り、乗り合わせていた陸援隊を屋代島南部の平郡島近くで降ろしてもらうい、そこから漁船で屋代島へ向かった。その途中、この艦が停泊しているのを見つけたのだ。一隻だけだし、どうせ参戦するなら奪い取っておこうかと、闇に乗じて攻め込んだのだ。

「これで当分乾さんの話を聞かなくて済む」

蒸気船から降りた中岡が、心底嬉しそうに呟いたのを思い出して谷は噴出してしまった。確かに、あの調子で一日中側に居られたらたまったものではない。

「さあて、こっからがいよいよ本番だ」

「奇兵隊が居るから、間違っても撃たれたりせんよな？」

谷は蒸気船で言った事を繰り返した。

集義隊と合流した佐々木達は、桜井が寄越した伝令から戦況を聞いていた。

「沖に停泊してるのは二十一隻。艦からの砲撃はそう多くありません」

「味方を避けて撃てる砲手なんておらん」

堀は、確かにそんな奴が居たら神だ、と笑って品川の背中を叩いた。

「一万五千は推定か？」

「展開している幕兵を見積もっただけで、確認した訳ではありませんん」

「未確定要素だな。安下庄から久賀を目指していた松山藩は？」

「二千と言ったところかと。私も実際見て来たわけではないので、正確な数は不明です」

「沖合いに居る艦隊から、歩兵部隊がすべて降りているのは確かだろうな」

「銃兵も居りますが、すべて旧式か良くてゲベールのままです」

「報告ご苦労だった」

まず休憩しろと、堀は男を自隊に連れて行くと、食事を用意を頼んで戻って来た。

「柳井の奇兵隊はそのまま南から来ると見ていいな」

「ああ。桜井が考えていた挟み撃ちができそうだ」

地面に書いた島に武市が示した進路を書き、それに大野隊の進路を書き加えると久賀海岸にばつ印を付け、堀は一度確認する様に一同を見渡した。

「じゃあ南下している隊には、そのまま進軍せよと伝令を出すぞ？」

「頼む。大野隊の参戦があるなら心強い」

「問題はその後だが、まずはそこまで局面を持って行く」

「その後の事は堀さんに任せた！」

品川の言葉に堀は戸惑いを隠せなかったが、自分達の強みは臨機応変に動ける事だ。それが征長軍との違いでもある。ならば、と立ち上がった堀は、目下の課題へ向け全隊に号令を出した。

下関から丙寅丸で屋代島を目指していた高杉は、屋代島北西に在る笠佐島沖で一隻の幕艦と遭遇した。一瞬緊張が艦全体に走ったが、帆柱の先端に長州藩の旗印が掲げられている事に気き、臨戦態勢のまま接近させた。近づくに甲板で旗を振る中岡を見つけ、丙寅丸を平行させたのである。

中岡が丙寅丸やって来ると、高杉は大笑いしながらそれを出迎えた。

「まさか、軍艦一隻手土産にして来るとは思わなかったぞ！」

「成り行きでこうなって。同じ目的で来てた奇兵隊が来たお陰で、損害は出さずに持ってこれました」

「しかし、なんでまたそんな所にいたんだ？」

「新撰組が京から出立したと聞いて居ても立ってもいられず、陸海に分けて参加すべく動いたんです。俺達は薩摩行きの蒸気船に乗って来たんですが、幕艦を沖合いに見つけてつい降りちゃいました」

へへっ、と笑う中岡。海上でつい降りる奴はお前しかおらん、と思いつき受けている高杉。何も突っ込めない谷。そしてそれを取り巻いている隊士達。

「でも本当に助かりました。どうやって参戦するか悩んでたんですよ」

「すまん。印の事は聞いていたが、周知させるには時間がなかった」「いいえ！ それは覚悟してました。で、俺はこのまま参戦しているですよね？」

「一向に構わん。軍艦が手土産だ、追い返す訳にもいくまい？ だが陸の方はどうするんだ？」

「報せが長州軍に届いている、と祈っておきます」

「そうか。陣を構えるのは石川達だ。間に合わずとも状況は把握してくれるはずだ」

「そうであってほしいと心から願う。」

「船速を上げるぞ」

奇兵隊から屋代島の詳細を聞き、安下庄のところで高杉の目の色が変わった。無論、中岡も顔を顰めるしかない。

「陸は三隊に任せ、俺達は海上の軍艦に的を絞る。石川は旗を征長軍の物に戻して先行しろ。その影に 丙寅丸が隠れる形で幕艦に接近し攻撃を開始する。戦闘が始まったらちゃんと旗を取り替えろよ」「って、俺が指揮執るんですか！？」

「阿呆、お前が最初に軍艦に乗り込んだんだろが。それに航海戦術くらい習ってるだろう！」

「それ海援隊ですよ高杉さん・・・」

「どっちだっていい！ 舵取りせんでも指揮はできる！」

「解りました！ だから怒鳴らないで下さい！」

「お前も怒鳴るな！」

「いいから作戦に入ろう」

呆れ顔の谷が二人に静かに言うと、ばつが悪そうに高杉が頭を掻いた。

「最大船速を維持したまま二手に分かれ、左右から一隻につき三発づつ機関動力部を狙って撃つ。止まらずに次の艦にも同じく攻撃を掛けていく。おい、砲手に狙い外したら戦が終わるまで飯抜きだと伝えて来い！」

近くの隊士にそう命令すると、隊士は慌てて船内に駆け足で飛び込んで行った。

「飯抜きは辛そう」

相変わらず無茶を言う中岡は思ったが、そんな高杉だからこそこれまで戦果を上げて来たのだ。隊士をどう鼓舞し動かすかその術を心得ている男なのである。

「丙寅丸の機動力、存分に味わってもらおう」

安下庄から久賀へ回ってきた長州軍と、田ノ尻鼻から回ってきた長州軍に挟まれる形となった征長軍は、すでに逃げ場所を失っていた。沖に停泊する幕艦からの砲撃も止んでいる。

「さて、ここからが問題だ」

そう言った矢先、佐々木は沖から聞こえる砲撃音に気付いた。

「なんだ？」

沖を見ると、幕艦から火の手が上がっている。そしてまた砲撃音が鳴り響き、別の艦からも火の手上がるのが見えた。

「援軍か！？」

「援軍って・・・門司が手薄になるだろうが！」

次々と火の手が上がって行くのを見ながら、海上の軍艦を気にしなくていいのならば、陸地だけに専念できると堀は言った。

その砲撃は幕兵にも大きな動揺を与えたらしく、やがて怒声が聞こえてきた。

「行くか」

堀が言う。

「行くべきだな」

佐々木がやりと返す。

「三隊に分かれ三方へ進軍する。銃兵は隊から外れて同様に三隊へ分かれる。射程距離まで来たら停止し、固まってる幕兵に的を絞って銃撃を開始。味方撃つんじゃないぞ！」

「こりゃあ敗戦に持ち込めんな！」

堀の言葉に、佐々木はその頭へ拳を振り下ろした。

「当たり前だ！」

殴られた堀は痛さを堪えながら合図を出した。それを受けて剣を手にした者達が山の斜面を駆け下りて行く。

銃兵は有る程度の位置まで来ると隊列を組み、味方の援護をしつつ、幕兵に狙いを定め一斉掃射を開始した。

大野隊も、堀の部隊に圧されて後退して来る幕兵に銃を掃射させ、銃から逃れようと走り出す幕兵を隊士が追撃して行く。

銃での攻撃と機動力に物を言わせた長州兵の前に、すでに数の差は問題では無くなりつつあった。戦術の転換とそれに伴う個々の動きの速さは、これまでに幾度もの戦争を経験して来た長州ならではのものだ。幕兵との違いは戦術だけではなく、使用している武器の性能にも有る。旧式の火縄銃やゲベルの銃弾装填は遅く、一発を込める間にミニエーは三発の装填が可能なのだ。機動力を左右する武器の違いも幕兵が遅れを取る要因となっている。身軽な洋式軍服で動き回れる長州兵に対し、幕兵は動きづらい甲冑なのだ。それに加えて昔ながらの兵法しか知らぬでは、到底今の長州軍に太刀打ちできるものではなかった。

幕艦からの援護もなく挟み撃ちとなった幕兵は、沖合いで炎上する艦へ帰還する術を失い、次第に降伏を始めて行ったのである。

高杉と中岡の駆る艦二隻の奇襲によって、二十一隻の征長海軍は壊滅へと追い込まれていた。まさかたった二隻で夜襲を掛けられるとは思っておらず、艦隊の間を縫うように進んで来る丙寅丸を見つけて砲撃を加えても、不慣れた砲手は狙いを定め切れなかった。

一隻、一隻と後部の機関部に砲弾を受け、離脱する事も不可能と

なった艦はただの鉄の固まりへと変貌したのである。

そんな中、被弾しながらも直撃を免れた富士山丸は、敵砲を掻い潜り安芸灘から離脱に成功すると、四国方面へ迂回する航路から小倉に集結しつつある自軍を目指したのである。

総勢二万の幕府海軍は、民兵を含めた僅か千程の長州軍を相手に敗走した。

島内陸に逃げ散った征長軍残党の掃討を行いたいと、大野率いる隊は奪還後の屋代島に残った。

芸州から援軍に來た三隊と丙寅丸は、それぞれの持ち場へと引き返して行った。

其之二 芸州口の戦い・前編

一年以上過ぎて、征伐戦を開始した徳川——家茂であったが、屋代島の敗退は予想外のものとなった。

前回の征伐とは打って変り、戦端を担うはずの諸藩からは反対の意見が続出し、征長軍との意見一致が困難となりつつあったのである。

援軍を要請した安芸浅野藩からも、友誼^{ゆうぎ}関係にある長門国との戦争には参加せずと出兵を拒否されていた。

第二次長州征伐軍総督徳川茂承（前和歌山藩藩主）、彦根藩、高田・与板藩・紀州藩・大垣藩・宮津藩と旗本軍の総勢五万からなる征長軍は、大竹口に彦根藩を正面からの追手（敵の正面を攻撃する軍勢）として置き、小方へは高田・与板藩を背面からの攻撃を行う搦め手（陣地などの後ろ側）として配置させた。

岩国港には、長州軍の侵攻を威嚇攻撃するための幕艦三隻を停泊させている。

だが、芸州へ進軍した征長軍は、岩国領の強固な防衛陣の前に、長州への侵攻を阻まれていた。

岩国領当主吉川経幹は、長州藩名代として参じた家老穴戸親基に対する小笠原の仕打ちと、屋代島と安下庄での松山藩の所業を聞き、親藩（萩藩）に対し全力で征長軍と交戦をする事を誓うと親書を送っていた。

「よもや、吉川殿が参戦下さるとは思ひも寄りませなんだ」

瀬田口に到着した石川ら長州軍は、本陣を籌勝院^{ちゆうしょういん}に置くと、吉川の元を訪れた。

「前回の征伐回避に関して、私の行動がそなたらの反感を買っているのは知っておる。しかし、此度の征伐は幕府に義などあらぬ所業と、穴戸殿への仕打ちでそれを知れた。よって、敬親公へは参戦を

持し、死を持して征長軍と相対する旨誓っておる故、どうか怨恨なく共に征長軍を退けたい所存であると申す」

「吉川殿のご決意は既に承知しております」

「総指揮はそなたに任す。我が岩国領を好きに動かして見せい」

「はっ。そう言って頂けるならば、我らは臆する事無く戦場へと赴きましょう」

籌勝院に戻った石川らは、休む時間も取らず作戦会議を開いた。

「岩国領兵が関戸へ至る小瀬峠の関門に重柵を作っている。ここだ。その内側に大砲が配置され、征長軍を足止めしてくれている」

「岩国領は軍の主力を集めているのか」

石川は広げた地図を指差しながら、征長軍と岩国領軍の現況を説明して行く。

「小瀬川下流の土橋はすでに落とされ、渡河を困難にしている。妙見山・寺ヶ原村・八幡山、この三箇所にも大砲が設置されていて、地雷火も進軍経路に埋めてあるそうだ」

「これはこれは。吉川殿のお怒りは相当と見えますね」

徹底抗戦を踏まえた布陣に、品川は苦笑を隠せない。

「第一次征伐の時は、斬り殺してやろうと思っていたがな」

伊藤がそれを真剣に考えていたのは堀も知っていた。三家老の切腹で事をすませようとしたのが吉川なのだ、石川達が憤慨するのも仕方が無かった。

「情勢を見てどちらに義があるか、それで行動されるのが吉川殿だと言う事だ」

そう言ったのは佐々木である。

「それは解るが。やはり今回手を貸して来たからと、すんなり納得はできません」

「一つ言える事は」

後ろからそう声を上げた武市に皆の視線が向けられる。

「大なるか小なるかの違いだけで、薩摩と長州の関係と同じと言う

事だ。過去を引きづり大局を見定める眼を曇らせると、この戦に勝ちは無いら

言葉詰まらせた石川に、武市は笑いを浮かべた。

「使えるものがあるならば、敵でも上手く使い分けねばならん」

「確かに桂木さんの言う通りだ。伊藤も私怨はしばし捨て置いてくれ」

「ああ。石川さんに言われるまでもない、心得ているつもりだ」

「新撰組も出で来るだろうな？」

それに即座に反応したのは新兵衛だった。

「京に引き返したと言う情報は入ってない。可能性は大いに在る」

石川が怪訝そうに新兵衛を見る。情報を得ていると言う事は、裏で新兵衛が何かしらの動きを取っていたと言う事に繋がるのだ。

「情報収集は俺の得意とするところ。ご心配には及びません」

心情を悟ったのか、新兵衛は事も無げに言った。

「その若さで気苦労ばかりしていると、顔に皺ばかりでき女子に持てなくなるぞ」

武市の一言でそれは困ると顔に手をやる石川。

「桂木さんが保証するなら、俺としては言う事は無い。新撰組の方は征長軍本体と行動していると見ていいか」

石川は再び地図を見下ろし言った。

「ああ。会津藩からの命で動いている。ならば本陣に居ると考えるのが妥当だ」

この戦の規模を知ってもなお武市は動揺していない。この新兵衛と言う男とて同じだった。

「奴らは統制された軍ではない。その動きは新撰組独自のものと念頭においてくれ」

武市の顰められた顔から、幕兵を想像して交戦するのはままたぬものだど理解する。

「独自？」

「台頭するのは近藤勇だが、隊への実質的な指示は副長の土方歳三

が出すだろう。土方を筆頭に、正義と決めたら人を斬る事になんの躊躇も示さん。命を賭して勝ちに走る奴らは手ごわいぞ」

伊藤は高杉の言葉を思い出した。

「桂木さんが、うじゃうじゃ集まってるんだ・・・それが新撰組だ」
「はい??」

品川が突然何を言い出すのかと伊藤を見る。山田も大丈夫かと、その額に手を当てるものだから、伊藤は五月蠅そうに手払いした。

「以前に高杉さんに言われたんだよ。品川。桂木さんと村木みたいなのが二百も居たら、どうする?」

「二人が二百!?! ごめん。俺、死んでも絶対そっちには行かない!」

「そう言う事だ。ま、死んだら行きたくとも行んだろうがな」

二人の太刀捌きを知る者にはそれで十分な説明だった。

「二百は大げさだ。各隊の組長格と伍長格に数名手練れがいると言うだけで、他は幕兵の腕と大差はない」

そして新撰組を見つけたら知らせて欲しいと付け加えた。

「恋しい相手か。厄介な連中を相手にしたもんだな」

「色々と因縁があつてな。向こうも我々が居ると知れば、こちらへ来ると見ている」

「手合わせして見たい気もするんだが、戦争だからな。すまんが、そちらは桂木さんに任せる」

「そうしてくれ」

赤井も居るだろうか、と話を聞いていた和奈は思った。今からちゃんと覚悟をしておかないと、いざという時動けなくなる。

「これ、村木のな」

石川がそう言いながら、考え込んだ和奈の処へ大きな風呂敷を抱えて持って来た。

「なんですか?」

「服! 桂さんに礼を言っとけよ、士官位の品なんだからな」

「服ですか?」

「さっさと着替えて来い。袴なんぞ履いて出て、撃たれたくはないだろう?」

受取った風呂敷を開いて見る。そこには薄手のフロックコートにシャツ、ズボン、革ベルト、靴紐のないサイドゴアの短靴が入っていた。

(うわぁ。なんか現代っぽい・・・)

「村木は銃兵じゃないから、剣ベルトに垂直差ししておけ」

士官以外は筒袖の上着と立付袴になり、銃兵は剣を横差しにしできるよう銃剣差しがベルトに付けられていた。腰にある大きい鞆は早合(葉莢)入れて、小さい力鞆は管打ち(雷管)入れになっている。

「で、全部真っ黒なんだ」

「阿呆。夜襲奇襲やるのに白や赤なんか着れるか」

ああ、なるほど。と和奈が納得すると、俺はおまえがよく解らんと石川に言われてしまった。

(赤井くんにも言われたっけ)

「すぐ支度してこいってば! 　いつ号令が出るかわからんのだからな」

「あ、はい!」

「あ、村木」

部屋を出ようとした和奈を、にやけ顔の山田が呼び止めた。

「着方が解らんかったら、桂木さんに手伝ってもらえよ」

「え!」

よく解ってますとも言えないし、桂木は慌てる事もなく座って居るし、皆はどんな返事が返ってくるのかと言う顔で見てるし。

「ならば手間を省くでしょう」

返答に困っていると武市がそう出たものだから、山田はそれ以上突っ込めなくなり、視線を向けられた石川達もそそくさと顔を逸らせてしまった。

「行くぞ」

和奈の腕を掴んだ武市は部屋を出て行った。

「・・・はあ。市之允、変な事振るな！」

「いや、すまん。まさか桂木さんがあ出るとは思わなかったから」

「とにかく、着替えて戻って来るまでは絶対行くな！」

「行けと言われても断らせてもらう！」

ちよっかいを出しに行つて、見てはいけない場面になっていたら絶対斬られると、品川が補足する。

「その位にしとけ。あまり二人をからかうな」

堀は真剣にそう言った。

「山田達は直接見てないから解らんだろうが、桂木さんの腕は桂さんにも引けをとらん。優男となめてたら痛い目見るぞ」

加えて今回は得体の知れない新兵衛まで居るのだ。まだ太刀振舞を見たわけではないが、かなりの腕前だと言う事は身のこなしで判る。以蔵とて同じだ。剣道場で稽古をつけていた時には出さなかった気を、出陣してからというものの常に体に纏わせている。

「うじゃうじゃ二百か」

大揉めになるところの話ではないないと石川は思った。

六月十四日未明。小瀬川河口付近で砲撃戦が始まった。

石川は隊を三つに分けると、各隊に指示を出して行く。

「右隊は中津原から小瀬から川の対岸を進んで大竹へ入れ。中・左隊は山陽道沿いに立戸へ向かい、途中で左隊が立石山を越え、敵の側面へと出る。中隊はそのまま苦ノ坂を直進し、小方から高田藩後方へ出て奇襲を掛ける」

左隊指揮は石川・伊藤が、中隊指揮は堀・品川、右隊指揮は佐々木・山田が指揮を執る。

「高田藩を抜けたら彦根藩に討って出る。隊の進退は逐一伝令を走らせるから、各隊も伝令を出すのを絶対に怠るなよ」

「岩国領兵は？」

「瀬田ではそのまま防戦してもらうつもりだ。右隊が立戸へ向かっ

たら状況をみて加勢に回れ。落ち着いたら油見村へ回り、左・中隊と合流する。その際、岩国領の砲台は生きたままで、最低限で小瀬川渡河を防ぐよう伝えてくれ」

「解った」

海を壁にして逃げ場を失くす、屋代島でも執った方法だ。

「沖に停泊する幕艦も、まさか自軍に砲撃はするまい」

地の利はやはり我らにあると、堀達は受け持ちの隊へと向かった。

「征長軍は玖波に本陣を置いている。桂木さんら四人は右隊に加わってくれ」

「承知した」

洋装の武市は一つ束ねていた髪を斬り、隻眼を隠していた前髪も短くし革の眼帯を付けていた。

「やっぱ色男ですよね、桂木さん」

品川がこそつと堀に耳打ちする。

「惚れるなよ」

「ないない、それはない！」

「五月蠅い！」

佐々木に怒鳴られ、ほれ、と堀に小突かれた品川は黙って頭を下げた。

「進軍したら各個それぞれに指揮は任す。皆、死ぬなよ」

互いに頷き合うと隊を引き連れ、籌勝院を出立した。

関戸から小瀬川を超えた中津原で右隊と左・中隊の二手に分かれるた。さらに木野村の枝村に着くと左隊は中隊から離れ、山間部へと足を進めた。

「山を越える間休憩を取らん。そのつもで付いて来てくれ」

石川は足を進めながら、後ろから来る和奈達に言った。

「はい」

山の夜は足元から寒気が体を伝い上って来る。洋装に着替えたとは言え、シャツの中にもう一枚着込むんだったと和奈は後悔した。

「なぜ洋装なんですか？」

「こんな山人中、袴なんぞで動き回れると思うか？」

「地形に合わせてか」

「それだけじゃない。戦闘中に指揮官の位置を把握しながら兵士は動く、フロックコートは指揮官を識別させる為だ。それに、甲冑なんぞ着てたら走り回れん。あの派手な陣羽織もそうだ。どうぞ狙って下さいと、自分からの的になりに行くようなもんだ」

「なるほど。でも、僕は指揮官じゃないですよ？」

「陣頭で指揮を執る俺が死んだら、桂木さんに隊の指揮を執ってもらうつもりだ。おまえはいつも桂木さんの近くに居るから目印になるんだよ」

「目印い！？ 僕目印役なんだ・・・って、それは置いといて、縁起でもない事言わないで下さい！」

「縁起もなにも、それが戦だ。銃を持っているのは征長軍だって同じなんだぞ？ いつ何処から狙い撃ちされるか解らんだろうが。不測の事態で指揮官を欠いた隊はじきに崩れる。その為の予防策だと思ってくれ」

戦術を論じて見せた武市は、一度でも隊の指揮を執った事が有るはずだ。以蔵と新兵衛の二人とも連携を取りながら動ける男だと石川は考えたのだ。

「そうならん事を祈っておいてくれ」

不安気になっている和奈の頭をポンと叩いた。

苦の坂峠へと進み、小方村へと出た中隊は、大小砲を配置させ、銃撃隊を本隊から離して高台へと向かわせた。

配置完了の合図が届くと、堀の号令で、高田藩軍陣の背後へと攻撃が開始された。

高地と小方の兵地に配置した山砲も、征長軍目掛けて挟撃を始める。銃撃隊は本隊が交戦に入ると両脇樹間より一斉射撃に移った。

高田藩軍は、足回りの速い長州軍に翻弄される形となった。歩兵からの攻撃と、頭上から降り注ぐ銃弾になす術もなかった。

石川の言った通りだった。甲冑を来た兵士と、筒袖の上着に立付袴という軽装の長州軍では、立ち回る速さが違う。道がなくとも林間を駆け巡るのも容易ならば、乱戦となった戦場を縫うように駆け回るのも容易なのだ。おかげで幕兵は攻め込まれる方角を定められず、高田藩は応戦とごろの騒ぎではなくなっていた。

麓と海辺での戦闘に苦戦を強いられた高田藩軍は、退窮まり陣を守備するどころか、戦意を喪失し始めると、戦況を劣勢と取って本陣への撤退を決定した。だが後退するのも命からがらであり、小方から玖波へと敗走した時には、無傷の者が誰一人として居なかったという状況だったのである。

こうして、中隊の戦闘はあっけなく長州軍に軍配が上がってしまった。

高田藩の敗走の原因の一つは、幕艦からの援護が無かった事だ。征長軍艦隊は海上より砲撃を行い、歩兵部隊を上陸させる手筈となっていた。しかし、その砲塔は一度も火を吹く事は無く歩兵部隊の上陸も行われず、援軍を欠いての撤退となってしまったのである。

「えへへ」

中岡は甲板で満円の笑みを浮かべながら、戦火が見える陸地を眺めていた。

「三隻くらいなら、この艦一隻でも十分奇襲は可能だ！」

高杉から、奪取した幕艦の指揮を任された中岡はその進路を長州軍に合わせ、岩国領を望める海域へと入っていた。萩本藩と岩国領の離間工作を征長軍が行っていると、間者からの知らせが中岡の元に届き、その不意を付かれ攻撃された幕府艦隊は陸地への援護を逸したのだ。

「まっこと、こけばあっけなく行くと怖いものがあるなあ」

谷も信じられないと言った顔で視線を中岡に合わせている。

「頭の古い征長軍には、俺達の行動なんて予測すら立てられないだ

ろうな」

「おんしも凄いが、たった千やそこらの軍勢で、数万の幕兵を相手にするっちゅう長州軍のが凄いでよ」

「倒幕のために戦の一字があるのみ。ここで負ける訳には行かないんだ、長州も俺達も」

中岡は動ける幕艦への砲撃を再び命じた。

右隊が目指す大竹では、小瀬川を渡らせまいと岩国領隊が彦根藩軍と攻防を展開していた。

佐々木が川沿いに岩国領軍が戦鬪を展開する一帯にやってくる、すでに地獄絵図と化していた戦場が広がっていたのである。

地雷火が所々で爆音を轟かせ黒煙を上げる中、数百人という人間が煙に咽せながら烈火から逃れようと右往左往して居る。

通る地面には、腕を失った者や足を無くした者が、呻き声を上げながらのた打ち回っていた。

設置された地雷火の位置は、すでに岩国領軍から来た伝令によって把握している。味方が巻き込まれる事はないが、注意は怠れない。

この地雷火の設置は、岩国城下にて徴募された農商兵神機団が敷設を担っていた。吉川の怒りはそれほど大きいもののだと、佐々木は眉を顰めるしかない。

身の毛もよだつとはこの事だと、山田は嗚咽を堪えた。

「佐々木さん！ 降伏して来る者が居るんだが、どうしたらいい！？」

いつもは優しい表情をしている品川も、今はその顔を強張らせている。

「無闇に殺すな。捕虜として捕らえるだけにしろ。但し、戦に駆り出された諸藩の兵士だけだ。幕兵に容赦はいらん」

全隊へ、降伏してきた敵兵は殺さず捕虜にしろと伝え、負傷者は自軍の陣に誘導して手当てを行えと付け加えた。

岩国領軍の援軍に加わった右隊は僅か三百四十名。その三十名が銃隊だ。

右隊は側面から彦根藩軍へと前進しながら、五十名をその場に置き残りは前進する。そしてまた一定間隔の位置で五十名を置は進む。それを五回続け最後の五十名を置くと、残り六十名が突撃する。四刻半経つと先陣を切った隊は最後尾へと戻り、次の隊が配置に付く。それを繰り返しながら戦線を上げて行ったのである。

側面から右隊の奇襲を受けると彦根藩軍勢は乱れ始めた。

大竹村に在る千もの家屋から火の手が上り、その中を逃げ惑う様に彦根藩軍勢が新開へと逃れ始めた。

勢い付いた長州・岩国領軍の追撃は止まなかった。

逃げ切れないと判断した兵は、陸地の撤退を諦め船で海へ逃げようと海岸へ殺到する。だが、我先にと船に乗り込み、定員を超えた船は次々と転覆してしまった。

逃げ場を無くし、地雷火を避けようと海に飛び込む者や、火で熱くなった甲冑を脱ぎ捨て山へと逃れる敵兵の姿も在った。

大竹口での戦闘は凄惨を極める中、征長軍が敗北を喫した。

木野村から立戸に入った左隊は、小方から油見村の彦根藩へ逃れて来た高田藩と交戦になった。

敵を分断するつもりで隊を二つに分けたのだが、石川が思っていたより戦線が小方よりになっているらしい。

「中隊は上手く後方に付けたようだな」

右隊側には岩国領軍が居る。未だ小瀬川を敵兵が越えたという伝令は来ていない。持ち堪えている以上、このまま進んでも問題は無いと隊を進める。

「固まらず、三十名ずつで進め。先発は無理せず駄目だと思ったら後退しろ」

堀が執ったのと同じ戦法である。ここが平地と山岳という立地な

らば、散開戦術の方が地の利に適う。

和奈は先の挙兵の時よりも壮絶な光景を見て、やっとの思い出喉の奥に唾を飲み込んだ。もう喉はからからに乾ききっている。血の匂いと硝煙で、目も耳も利かなくなっていた。

「気を散らすな。相手も銃は持っているからな」

「解ってます」

声がかさつき、枯れ声になっている。

「石川さん！ 敵兵が小方へ後退します！」

後退して行く先には堀の中隊が居る。そしてその先には征長軍の本陣が在る。

「石川、幕兵の姿が見当たらないぞ」

武市が辺りを見回し、そう石川に告げる。

「藩兵に任せっきりで、高見の見物か」

「堀隊と合流する事を勧める。幕兵まだ無傷だ」

石川は伝令をすぐさま中隊へと走らせた。

足を進めて行く道や、その脇の木立にはおびただしい数の甲冑が脱ぎ捨てられている。そればかりか大砲もそのまま置き捨てられ、小銃や槍も散乱していた。なりふり構わず逃げ出した様子がありありと残っている。

陣を構えていた場所では兵糧も残されていたが、石川は手を付けさせず歩兵に回収を命じた。

中隊と合流した左隊は、征長軍の本陣がある小方の先の玖波へと入り陣地を構えた。

後から大竹口より右隊・岩国領軍が到着すると、作戦を練るため石川は各隊の頭を集めた。

竹筒に入ったわずかな水と握飯が一つ、皆に配られている。

「幕艦からの砲撃や動きが無いのが気になるが」

佐々木は疲れた顔を火に向けたまま言った。

「海からの砲撃は無謀だと解ってるんだろうさ」

自軍を巻き込み兼ねないのだ。本当に馬鹿でもない限り、それはないだろうと堀が笑う。

「だろうな。今そっちの様子を探らせている。伝令から届く報告如何では、さらに幕兵が増えると覚悟しておいてくれ」

後は銃隊の配置だな、と色々な方向を検討して行く石川達を、和奈は座って眺めていた。

戦の知識も戦術も無いのだ、武市の様にその輪へ加わって行く勇氣など沸くはずもなかった。

だから大人しく手にした握飯を口に運んだ。お腹は空いてなかったが、桂の言葉を思い出して口に詰め込んでいるのだ。

【無理してでも、食べれる時にはちゃんと食べておきなさい】

あの時は食べる事を放棄したが、今はそな事をしている場合ではない。体はそれを解っているようで、握飯を手にした手が自然に口へと動く。

「疲れたか？」

側に戻って来た武市が心配そうに顔を覗き込んだ。

「平気・・・とは言えませんが、平気です」

「おかしな事を言う。食べれているならば、心配いらぬな」

以蔵と新兵衛も輪から抜け、二人の所へとやって来た。

「おまえは桂木さんから離れるな。新撰組を見つけても、絶対一人で飛び出すな」

そう釘を刺す以蔵に、おまえもだと武市が言う。

「いえ。この四人、です」

そう言って苦笑する新兵衛に、武市も苦笑を返す。

「幕兵は長州軍と岩国領軍に任せる。我らは新撰組隊長格を捜す。

一班の隊士はさして問題とはならぬだろうから相手にしなくていい」

「言いますね」

「大方、土方くんもそう思っているさ」

だが土方とて、自分達がこの戦闘に加わっているとは知らないはずだ。長州軍に習い、不意を仕掛ける為にはこちらから見つけねば

ならない。

「それが出来れば、ですが」

数万の軍勢の中で、数人の人間を探し出すのは至極至難であろう。
「いや、すぐ見つかる。奴らは羽織を着ているだろうからな」

「こんな時までですか？」

「こんな時だからこそだ」

そういうものなのか？ と和奈は不思議に思った。

「誰が居るか解ればよいのだが。土方くんの事だ。事後を考え組長格を全員つれて来ず、数人は京に残しているだろう。各組頭中で出て来るならば・・・土方には和太郎、沖田には私、新之助は永倉、田中さんは齊藤を頼む」

「人斬りの方はどうしますか？」

「四人のうち誰かが相手を仕留められれば」

それも困難だろうがと、考え込む。

「今言った四人の内、誰かが欠けていればその時また指示を出す」
「はい」

「いい子だ。飯を食べたら少しでも寝ておけ。いつ戦闘になるかわからんのだからな」

ごろんとその場に寝転ぶ以蔵、それもそうだと新兵衛も体を横にする。

「野生児だ・・・」

「おまえな！」

寝転んだ以蔵が上半身を上げたが、武市に一瞥されてしまい、ぶつぶつ言いながら自分の腕を枕に背を向けてしまう。

剣を抱え、近くの木の下に場所を確保すると和奈は目を閉じた。

京から大津へ行った時も、こうして木の根元で寝たなど過去を振り返る。

（過去？）

一年以上も前の事を過去だと振り返る自分に、今更ながら驚いた。なぜ家族が恋しいと思わないのか。その理由は和奈自身にも解ら

な
か
つ
た。
。

其之三 芸州口の戦い・後編

玖波に敷かれた征長軍本陣で、赤井が忙しそうに走り回る兵の姿をほんやりと眺めていた。

「心配してるだろうなあお袋」

巻き込まれて幕末へ来る事になったが、和奈に恨みは感じなかった。むしろ、いい経験をしているとさえ思っている。

人を斬る事に躊躇いはあったが、新撰組で四番隊の頭を貼る以上、避けては通れない道だと覚悟は決めて居る。

「俺も馬鹿じゃないか」

赤井の中にも、帰りたいと言う思いはなかった。帰る術が見つかったとしても、帰る気がない事もよく解っている。

「やっぱ、おかしいよな。もしかして気が狂っちゃってるのかな」

和奈もそうなのだろうか、とその太刀を思い出す。

剣術の腕には格段の差が出来ている。水を得た魚のように剣を振るう和奈が、生き生きとして見えたのも事実だ。

（今の俺で、あいつの剣を止められるのか？）

「おい、少しでも寝とけよ」

水浅葱色の羽織が歩いて来た。

「土方さんも昨日から全然寝てないじゃないすか」

近藤の代わりに征長軍の軍儀に参加したり、残った隊士達の世話などに回り一睡も取っていないのだ。

征長軍と合流する前、老中小笠原は小倉城に向かうと、海路で小倉へと向かってしまった。土方は、京へ戻って欲しいと近藤に願い出た。近藤は渋ったが、局長を失う事態になったら新撰組はどうなるんだと言われては、受け入れるしかない。

「俺も残ります」

斉藤がそう言って来たが、護衛にはお前が一番だと土方は譲らず、

斉藤も渋々承知してくれ、槍頭隊・小荷駄奉行隊と共に京へと戻って行った。

「阿呆、俺とおまえじゃ鍛え方が月とスッポンなんだ。偉そうに他人を心配する前に、てめえの心配でもしとけ」

こういう時の土方は容赦が無い。

「ご命令とあらば」

「・・・命令だ！」

ゴッン！ と拳が頭に振り落とされ、赤井は小さな悲鳴と共に頭を抱え込んでしまった。

「加減ないなあ、もう！」

けらけらと笑いながら、土方は幕兵の中へと消えて行った。

「何しに来たんだよ」

きつと心配して来てくれたに違いないのは、赤井にも良く解っていた。素直じゃないのが土方なんだと、最近ようやく解ったのだ。

石川の声で目を覚ました和奈は、大きく息を吸い込んでゆつくりと吐き出した。仮眠は少しできたが、体が鉛の様に重たく感じられる。下手に寝たのが悪かったのかと後悔した。

「各隊の割り振りだ。銃撃隊は左山岳と右沿岸に分かれ、砲台を持って行ける場所に設置してくれ。山田隊は銃撃隊と共に山間部へ入れ。本隊が交戦に入る前に砲塔と銃にて一斉掃射を開始、本隊が交戦に入ったら砲塔は捨て、銃撃を単発に切り替えろ。但し、同じ場所で撃ち続けるなよ。それと、くれぐれも味方に当てないように頼む！」

「山田隊は銃撃が単発に切り替わったら側面から奇襲を掛ける」

山田は自隊に注釈を入れた。

「本隊は岩国領兵と共に正面から突っ込む。陣は三百名づつ前・中・後に分ける。前の頭は俺、中は佐々木、後は堀。乱戦になるんだ、

頭の位置はちゃんと確認しとけ！、すまんが時間は設けない。状況を見て堀は前へ出る。堀が出たら俺は下がる。佐々木が出たら堀が下がる。その繰り返しだ」

石川の指示は人伝で後ろへと伝えられて行く。

「残りの百名は、下がった隊に被害が出たら代わってやってくれ。この戦の正念場はこれからだ！　いいか、高杉晋作って言う男の受け売りだ！　皆、命を粗末にするな！　生きてこそ活路は見出せる！　無様でも生き延びる事を考えろ！」

石川の言葉が終ると共に、喊声かんせいが上げられて行く。

「各陣配置に就け！！」

銃撃隊と山田隊が陣地から出て行くと、岩国領兵の代表が先陣を切りたいと申し出て来た。

「有り難いが、我ら長州も譲れぬ！」

堀がそう答えると、石川と佐々木が進み出て来た。

「吉川殿の意気込みは我らも承服している。岩州だ長州だと言っている場合ではないのだが、ここはどうか、この通り！」

そう頭を下げた石川と佐々木に、岩国領兵は確かに承ったと笑顔を見せ、では共に戦線へと進みます、と言いつ残し戻って行った。

「主君に似て引込まない奴らだなあ」

「なに、それは我らとて同じ事だ。さあ、時間が勿体ない。山間と沿岸へ向かった隊を援護しなくてはならん。進軍を開始するぞ」

山田隊と銃撃隊を除く約千名と、岩国領兵は玖波へ向けて進軍を開始した。

六月だと言うのに今夜は冷えると、土方は腕を摩った。

「ちっ、氣にくわねえ」

さっきから全身を包む空気でちりちりと肌が痛むのだ。戦に参戦するのは初めてだったが、気後れしているつもりはない。これが戦場の空気かと、落ち着かない自分に腹が立っていた。

空を見げると太陽の光りが空を白く染め始めている。

「土方さん」

永倉が配置について聞いて来た。

「指示はもらってねえから、自由に動かせてもらうさ。始まったら敵の要を探し出せ。寄せ集めの農民が多いんだ、頭がなきゃ烏合の衆になる」

「承知」

ちらりと座る沖田に目をやる。今日は咳き込む処を一度も見えない。

（こいつも戦の雰囲気を感じてるか）

見廻りの様にはいかないのだ。咳き込んで蹲れば格好の的となる、それは沖田自身もよく解っているはずだろう。

その時、本陣内が騒然とした。

「伝令!!」

土方が騒ぎの元となっている固まりへ走って行くのが見えた。

（なんだかなあ）

戦に参加しているのに、その騒ぎが他人事のように見えた。

「彦根・高田藩が劣勢！ 援護を乞う！」

両藩が壊滅に近い状態で悲惨を極め、本陣への合流もほぼ無理な状況となり、長州・岩国領軍の勢いを止める事が叶わず、目と鼻の先まで進軍して来て居ると伝令が報せに来たのだ。

征長軍は全隊に攻撃態勢を取るよう命令を下した。

動き出した征長軍に合わせ、新撰組も移動を開始する。

「両藩合わせて数万の軍勢だぞ？」

永倉がおかしいよなと藤堂を振り返る。

「禁門の変とか参加してるし、戦には慣れているんじゃないかった？」

「俺に聞くなよ」

「無駄口たたいてんじゃないやねえ」

その一声で二人とも静かになる。

剣戟音を裂くように銃声が鳴り響いた。

「なんだ!？」

驚いたのは幕兵だけではなく土方もだった。

規則正しい間隔で銃撃を受けた征長軍は前進を阻まれている。

「どれだけ銃撃兵が居やがるんだ!？」

この戦で長州軍が使用しているのは装填の速いミニエー銃だ。征長軍の使う旧式のヤーゲル銃や和銃がとは撃てる弾数が倍以上も違うのである。

新式の銃を知らない土方が銃兵の数を気にしたとて不思議ではなかった。

「散開しろ!」

叫んだ土方の命令に従う幕兵はいなかった。

「馬鹿野郎が! 死にたきゃ勝手に殺られとけ!」

固まって砲弾の的になってやる必要はないと、土方は隊士達に振り返って叫んだ。

「俺達は側面から海岸沿いに出る!」

水浅葱の羽織の一団が戦場を駆け出して行く。

砲塔が敵陣へ着弾するのが見えると、続いて銃撃音が響いて来た。「動くなよ! 敵が来るのをもう少し待て!」

地の利がこちらにあるのは、征長軍の陣を見れば一目瞭然だった。山手側からの奇襲を警戒するならば、本陣の設置は平地にするべきなのだ。だが征長軍は堂々と山と海に挟まれた陣地に固まっている。

「重い甲冑なんざ役に立たんと言うのに」

敵の大半は動きの取り難い甲冑だ。剣での斬り合いならともかく、銃撃戦には不向きな武装なのである。

武士の誉れなど、下士や農兵が中心の長州軍にはない。しかも甲

胄陣羽織を着こんで戦に参加するのは、指揮官が誰か直ぐに判断できる材料にしかない。

武装や武器だけでなく、実戦経験の有無も優劣を分けている。

高田藩は天誅組との抗争や禁門の変で、戦闘を経験して銃撃戦には慣れてはいたが、大群となる戦の資的要素にはならない。地形や戦況を見て指揮官が迅速な命令を出さなければ、一度や二度集団戦を経験しただけでは、大戦の局面で役には立たないのだ。

逆に長州軍は幾度も戦争で得た教訓を元に、軍事力改編に取り組み洋式銃隊化を図って来た。

近代武器のみならず、甲冑や目立つ色の陣羽織など、旧態依然の軍装を踏襲せず、黒い筒袖の上着に立付袴という軽装が全諸隊に支給された。指揮官の区別はフロックコートを用いる事で、戦場での混乱を回避させていた。

無論、洋装の軍装は幕府の歩兵部隊にも取り入れられている。しかし、その数は一部の歩兵に限られているのが現状だった。甲冑を身に着ける事で地位の確立と、誇りを維持しようとする士官が多かった。

「長州の力、思う存分味わってみろってんだ」

前方から視線を逸らさず、品川がからかい口調で漏らした。

「山谷を走り回るは我らが十八番。味わえるだけでも喜んでもらわないとな」

伊藤が話しに乗ってきたのが珍しいのか、品川がぱちくりと目を瞬かせた。

「和銃を未だに使ってくれているのは有り難い」

和銃・旧式ヤーゲルとミニエー銃では、射程距離・命中精度に格段の差がある。銃の撃ち合いとなれば、有利になるのは長州軍の方だった。

敵陣から、ときの声となる法螺貝の音が上がった。

「そろそろおいでになるぞ」

銃兵が一斉掃射から単発へと変えた事で、征長軍の足が動いたのだ。

「後は味方に撃たれない事を祈れ！」

臨戦態勢を取らせるため、石川が後ろの隊へ伝わるように剣を頭上に掲げた。

「それ自体無茶だよな」

「阿呆！ そのための射撃訓練だったんだろうが！」

百名ずつ配置させた隊列は、石川が前進する事で戦線を上げ始めた。

隊列が動き出すと、側面に居た武市達は山側へと動いた。視線を高く取る事で、標的を見つけ易くできると思ったのだ。

「判るか？」

自問自答だったのだろうが、この声に新兵衛が答えた。

「沿岸側に、淡い色の一団が居ますね」

「どんな視力してんだ？」

以蔵も見逃すまいと目を凝らす。

「指揮は土方くんだろう。銃兵からの狙撃を避け、海岸沿いを進んでいるのだろう」

しかし銃兵は山側だけでなく沿岸側にも居る。

「行くぞ。海岸側の銃兵が見つかれば、両側からの銃狙撃陣が崩れる」

頷きあった四人は、歩を進める兵士の間を縫うようにして反対側へと出て行く。

その姿は後隊の堀にも見えていた。

「奴さん達、標的を見つけたか」

新撰組。と堀はその三文字を思い浮かべた。京で恐れられる人斬り集団が、大きな戦でどう立ち回るのか見たい気になった。たった

四人で討ちに行くと言う武市達の戦いぶりにも興味が沸いた。

しかし、今は戦。己の満足を満たしている暇はない。

体を隠すものが無いと言うのに、躊躇いもせず新撰組の一団が突き進んで来る。

「相変わらず恐れを知らん奴らだな」

銃で隊士の数人が倒れて行く中、その先頭に居た男が後ろを振り返って叫んでいる。

「土方くんか」

あの男が隊の後ろなどに居るはずもない。

「止まれ」

制止されて止まった四人は身を低くした。

「石川くんには申し訳ないが、ここから味方に紛れる。新撰組の近くまで行ったら飛び出すぞ」

前隊に居た石川にもやつと新撰組の羽織が認識できていた。

「海岸沿いへは出るな！ 新撰組がこっちへ来るのを待て！」

むざむざ殺されに行つてやる必要はない。

目の隅で、黒い影がいくつか動いた。武市達も新撰組を見つけたのだろう。

「目ざといこった」

ならば自分は敵軍に集中するべしと、石川はにやりと口元を上げた。

敵味方が入り乱れている合間には、どうぞ見つけて下さいと誇張するかの様に、ちらちらと水浅葱の羽織が動いている。

ざっと顔を確認した武市は、そこに斉藤が居ない事を見てとる。

「田中くんは大石を」

沖田、永倉の姿はある。そして陣頭で動いている赤井の姿もそこに在った。

「どうやら己の進むべき道を探し当てたか」

武市の言葉に和奈の視線が泳ぎ、羽織を着て剣を振るう赤井の姿を捉えた。

「よし、行くぞ」

和奈達は一斉に地面を蹴った。

長州軍を蹴散らすように剣を薙払って行く。だが、敵を一人斬る度に、味方は三人、四人と銃に倒れて行く。

「くそっ！」

長州軍が銃兵の数を揃えて来たのではなく、最新の洋式銃を携えている事によりやく土方は気付いていた。

「一次征伐で攻めてりゃいいもんを」

だが、もし一次征伐が執行されていたとしても、この機動力に勝る動きはできないだろうと否むしかない。

海岸沿いにも敵の銃兵が配置されている。

山と海の両側から狙い撃ちされていては、被害が拡大する一方だと、矛先を潜伏する銃兵に向けようとした時、背後から剣戟の音と沖田の声が聞こえて来る。

「土方さん！ 奴らだ！」

奴ら？

視線を向けると、そこにはあの夜取り逃がした三人と以蔵の姿が在った。

「おいおい。冗談は一回にしてくれねえか！」

踵を返し、つま先で地面を蹴る。

ギン！

武市に剣が届く寸前、土方の突き出した剣が弾かれた。

「ほう。あん時の続きがしてえってか？」

和奈が右八相の構えを取る。

「てか、てめえらがなんでこんな処に居やがるんだ！？」

「答えてやる義理はない」

嘲笑と共に武市が言い捨てる。

ぎりっ、と齒を食い縛って和奈へと視線を戻す。

「手加減なんざしてやらねえから、死ぬ気で来い」

平突きで剣を顔の横に構えると、八相のまま切っ先を少し前に落とした和奈へと踏み出す。

突き出された剣を横から左外へと薙ぎ払い、そのまま右薙ぎへと転じる。が、土方も並みの剣士ではない。間髪入れずに切り返された剣は事も無げに払い退けられた。

「その構え、自顕流だよな村木。薩摩のおまえが長州に肩入れして理由を教えちゃくれねえか？」

「残念ですが、僕は長州藩士です土方さん」

これだ、この眼だ。

「苛つくんだよ！」

打ち込まれる剣は重い。多く剣を交える程、体力を消耗するのは自分の方だ。

打ち込んで行く剣を下段から上へ擦り上げられ、永倉は開いた懷に狙いを定めて下へと斬り下ろして来る。

「新撰組で沖田が一番と聞いていたが、おまえの方が一段上手か」

「褒めても手加減はせん」

休む事なく向かって来る奴ほど厄介な者はない。

永倉と打ち合って行くうち、その太刀筋から永倉の剣術が神道無念流だという事に気付いた。ならば、攻めに転じるためには。

上段に構え出したその一瞬について、横薙ぎが永倉の胴へと入った。

「ぐはっ！」

並みの相手なら、体の半分まで斬り裂かれているはずの太刀は、皮膚を裂き肉を斬っただけに終る。

「だが！」

腹を押さえていては両手が使えないと、以蔵は容赦なく袈裟斬り

に転じた。

人斬り同士の斬り合い程、隙が生じれば命取りになる。

「おまえ、俺と同じ人斬りかい」

剣を上段から天に向かって上げ、腰を低く落として対峙する新兵衛の太刀筋に、大石は自分と同じ人斬りの匂いを感じ取っていた。

「しかも薬丸自顕流たあ、薩摩と長州の繋がりも、まんざら嘘じゃねえみたいだな」

土方の推測は、当たらずと雖も遠からずと言う訳だ。

「さて？」

剣に曇りがない、と大石は齒噛みした。しかも顔色一つ変えずに太刀をかわされる。余裕が無くなってきているのは自分の方だ。

一瞬の隙。

それを見逃す事無く、大石の横腹から脇へと剣を振り上げた。

「胸の具合はいいのか？」

その言葉に沖田の目が細められる。

「あなたに心配させる謂れはありません」

間合いを取らせてもらえない。この男は自分の太刀を良く知っているのだ。

「貴方、誰なんですか？ 死んだはずの岡田以蔵もここに居るなんて・・・まさか・・・」

武市は浮かべた笑みを消すと、狼狽した沖田の胸元へ滑り込んだ。

「くっ・・・」

一瞬の剣気に圧されてしまった。

「私がこうして使う剣も、いずれ無用の物となる」

「！」

「武士の魂だ、誇りなどは口で語るほど容易く持てるものではない。沖田くん。武士とは、志を貫く事ができる者だ。剣が無くとも、立てた志に背く事無く生きる者の事を言うのだ」

二歩後ろに下がった武市は、沖田の腹部へと足を蹴り出した。

「ぐあっ！」

体が飛び、地面に背中を思いっきり打ちつけた拍子に胸へと激痛が走る。

「ごほっ！」

「病を患っている君には剣など無用、胸を一蹴りするだけでいいのだ」

芸州に入ってから落ち着いていた発作が起こり、体を起こし剣先を地面に付きたて膝を付いて咳き込む。

こんな体でなければ！

自分の体が恨めしく、憎く思える。なぜ、僕が！ と。

和奈と対峙する視線の先に沖田の姿が入った。

「ちっ！」

こんな時に発作か。

「すまねえな、ちっと用事ができちゃった」

受けた太刀を命一杯押し返し、唐竹斬りで和奈に間合いを取らせた土方は、左へ走り出しながら障害となる兵士を斬って行く。

「待て！」

後を追いかけ様とした和奈の背中に声が飛んで来た。

征長軍は、山間からの狙撃を防ぐ手段を見出せぬまま、次第に兵士の足並みを崩しつつあった。縦横無尽に走り回る敵兵に翻弄されている。指揮が末端まで行き届いていないのも、兵の乱立を招く原因となっていた。

逆に、長州軍と岩国領兵の統率は乱れることを知らず、豪勇無双の立ち振る舞いを見せている。

山に入った銃兵も、石川の指示通り一所には居座らず、敵兵の動きを見ながら頃合を計り移動して行く。征長軍の銃撃兵が山間へと銃弾を打ち込んで行くものの、照準を合わせきれるものではない。

反対に狙撃されている始末だった。

優勢だと見た石川は波状陣形を解き、自軍と岩国領軍に征長軍を包囲する半形態勢を取らせた。

太陽の光りが眼に刺さる。

「土方さんは追わせない」

太陽の光りを背に、赤井が立って居た。

「邪魔をするならば、斬る」

「俺とおまえが斬り合う理由なんて・・・本当なら有り得ないんだけどな」

そうをわざわざ口にされなくても解っている。だが、新撰組へ行くと赤井が決めた時から道を違えてしまっているのだ。いつかはこうなっても不思議はない。

「帰らないと言ったおまえを、俺は馬鹿にした」

赤井は平突き of 構えを取った。

「その馬鹿に俺もなっちまった。新撰組四番隊組長、赤井修吾郎、参る！」

突きの速度は速かった。一步半身を取る動作が遅れていたら、胸元に突き刺さっていただろう。

距離を取り、避けた自分の胸元をちらりと見る。

「謝罪の言葉は、いらない・・・か」

どこでどう間違ってしまったのだろうと、和奈は思った。赤井が新撰組へ行ってしまった事で龍馬を責めるつもりは毛頭なかった。それは、敵として立つ男が決めた事なのだから。

「ごめん」

「謝罪は言わないんじゃないのか？」

「いや、その命を私が奪う事になるかも知れないから」

「舐めんなよ！」

重なり合う剣を挟んで互いの視線が絡み合う。

「幕府に楯突いて、こんだけの人数相手に戦争やってなんになる

！」

「赤井くんは、何も解ってない」

「おまえよりはましだと思っけどな！」

大石にしごかれ、沖田にも稽古をつけてもらったと言うのに、和奈はいとも簡単に剣をかわして行く。

「こんな戦争、気が狂った奴がやる事だろ！」

その言葉に和奈の目が見開かれた。

赤井は背筋に走る悪寒を感じて咄嗟に和奈から飛び退いた。和奈の気が変わったのだ。

「組長！」

四番隊の林が駆け寄って来る。

「来るな！！」

赤井が叫んだ時にはすでに遅く、和奈の払った剣が一閃を描き林の首元に走っていた。

「林！」

和奈は一瞥をくれると赤井から矛先を、新撰組隊士達と長州軍とが戦う先へと変えた。

「おい、林！」

倒れた体を抱き起こしたが、すでにその体は息絶えていた。

なんだ、なにが起こった？

顔を上げると、慌てるでもなく隊士の体を切り裂いて進む和奈が見える。

沖田の前で土方と打ち合っていた武市は、異質な気を感じ取った。
「！？」

土方も感じたのだろう。両者が鏖迫り合いのまま、視線を戦闘の激しい方へと向けた。

「和太郎？」

「おい・・・何だありゃあ」

舞いを舞う様に迫り来る剣を、体中に眼が付いているかの様に全

ての剣をかわし、相手の体へ一太刀、もう一太刀と剣先を走らせている。

武市はその場から駆け出した。

呆氣にとられていた土方は我に返りその後を追おうとしたが、沖田をこのままにしては行けないと足を止めた。

「掴まれ総司。ここから退くぞ」

もう征長軍の劣勢は火を見るより明らかだった。数万の軍勢が、千にも満たない農兵の軍勢相手に手も足も出ていないのだ。

永倉が腹部に手を当て、隊士に支えられながら土方の方へとやって来た。その後から、憤怒の顔を崩さない大石がやって来た。

手傷を負わされた二人の内、永倉の傷が一番酷い。

「後退する。隊士に号令を出せ。あんなのを相手にさせたら、命がいくらあっても足りん」

新撰組だからではなく、切り掛かって来る全ての者へと致命傷となる剣を振るっていた。

和奈の様子は尋常ではない。その気を感じ、既に以蔵と棚かも駆けつけていた。

「和太郎!？」

以蔵の声に顔だけが後ろを向いた。

「おまえ・・・」

その眼に正気の色はなく、白い歯を見せた口元だけが笑っている。

「何をしている!」

背後から駆けて来た武市は、立ち止まる事なく和奈の方へ走って行く。

ガァン!

一発の銃声が響いた途端、和奈の体が後ろへと振り返った。

「和奈!」

膝から崩れ落ちるその体を、地面に倒れる寸前に抱き止める。

「!」

何処だ、何処を撃たれた!?

よく見ると、左肩の少しに生地が外へと飛び出ている。そこに手を当てると、ぬるっとした感触が武市の手には張り付いた。

「肩か」

急いで体を抱き上げ、狙い撃ちされないよう態勢を低く取るとその場から急いで離れる。

「追撃させるな」

すれ違い様、以蔵にそう言った。

「承知!」

影となるものが見当たらない。

「くそっ!」

早く止血しなければ、出血で命を落としかねない。

武市は味方の後方へと方向を変えた。

「撃たれたのか!？」

和奈を抱えた武市の姿を認めた品川が走りながら側へ付く。

「陣地へ戻ってくれ」

「すまん」

「負傷者の手当てが優先だ」

足を止め、品川は再び戦場へと取って返して行った。

一刻も経たないうちに、征長軍の法螺貝が細い音から太い音へ吹き鳴らされた。撤退を報せる合図である。

その音で退却を始めた征長軍を長州・岩国領兵が追撃し、山間と海岸側からも伏兵が戦場に雪崩れ込んで出来たため、征長軍は三方から挟撃される事となってしまった。

玖波村の半数にも上る家屋が焼失し、長州・岩国領軍は大野まで征長軍を追撃したが、勝機を失った征長軍からついに和を乞う伝令が届き、休戦となったのである。

太陽が頂点に差し掛かる頃、長州・岩国領軍は玖波を落とした。敵陣にて回収確保した兵糧は、この戦で罹災した村々へと分配さ

れる事になった。

生け捕りとなった彦根・高田藩兵も、この戦に対して諸藩兵に責任はないと、酒や食事もちゃんと支給され、路銀500疋びきを与えて国境で解放された。

長州軍の捕虜に対する待遇は決して悪いものではなく、【中々以て敵対すべからず、彼国の武威凛乎りんこ、武備充実、軍令行届きたる事は、異口同音に是を賞歎す】と、彦根藩の敗北については語られずとも、敵軍である長州軍に対しては異口同音に賛美する声が彦根城下に広がる事となったのである。

芸州と周防境での戦闘で征長軍が大敗を喫した報せは、瞬く間に巷説によって日本国中へと広がって行った。

其之四 松陰の魂

闇が軀に纏わり付く。

そう感じただけで体を認識する事ができない。立っているのか座っているのか、それすら【形】がないので判断できない。左右上下という立体的な空間がそこにあるのかすらも判らず、ただ意識だけが、漂っている、そんな奇妙な感覚だけだった。

やがて、何もなかった黒い空間に小さな白い点が見え始めた。

徐々に大きくなると色ではなく光なのだと解った。

光は色を持ち出し、段々濃くなり曖昧だった境界を分けながら輪郭を象り始める。

ここは何処なんだろう。

さわつ、と軟らかな風が駆け抜けた。

映画館のスクリーンに映し出される映像の様に、光りの中の景色が動く。と同時に、諦め。悲しみ。怒り。不安などが一つの感情となって、和奈の心に流れ込んで来た。

【人は人の心あり、己は己の心あり。各々其の心を心として以って相交わる】

静かで落ち着きの在る深い声色が聞こえた。いや、正確には頭の中で聞こえたのだ。

ああ、この想いを私は知っている。

【天照大御神に願う。森羅万象、八百万の神々に願う。心はもと活きたり、活きたるものには必ず機あり、機なるものは蝕に従いて発し、感に遇^あひて動くものであれと】

「七たびも生きかへる心を荒魂と共に、今世に持つべき事の意味に

従ひて動くもの也」

頭の中に居る者は驚いた様だった。が、すぐ何かに満足したように安堵の感情を漂わせる。

【暢夫の夫れ死生命あり。人生倏忽、夢の如く幻の如し。其の中に就き、一箇不朽なめものを成就すれば足りることなり。挫するなかれ、折くるなかれ。継ぐ志の道、友の傍らに吾心あらんことを】

その言葉が終ると、和奈は再び意識を閉じた。

六月十六日。

長州軍は、清末藩主毛利元純が陣頭指揮を執った。

布陣を展開させているのは浜田・福山・紀州・因州・松江藩総勢三万の軍勢だ。進軍する長州軍はわずか千名である。

中立の立場を敷いた津和野藩を通り、大村率いる振武隊と鷹懲隊を小川関門から扇原関門へ、佐世率いる干城隊、太田の率いる斉武隊を仏坂関門から高津へと、徳川慶喜実弟・松平武聰が藩主である浜田藩へと進撃させた。

石州において戦の火蓋が切って落とされたのは扇原関門であった。大村は隊を止めると、敵の配置を探ろうと木立の合間に入って関門へと近づいていた。

木門の奥に一人、さらにその奥には火縄銃を持った農兵五名が居た。

「六名とはな」

進軍を阻止するには少なすぎる数である。少ないというよりも、殆んど守備を成さない人数である。

恐らく本隊は関門を超えた益田に陣を構えている。門を守る者が斥候として関門へ使わされたのか、本当にたった六名でここを守れと命令されたのかは、大村さえも知る由もない事だった。

自隊に取って返し、大村は隊を関門へと進めた。

木門の手前に立っていたのは、浜田藩関守の岸静江国治である。岸は山間に漂う気配に気付いていた。気配の数が数十人ではすまないと言う事も。

「徳山藩へ伝令をば走らせろ。長州相手に農兵五名では関を守り切る事は敵わぬとな」

岸の言葉を受け、一人が背後へ消えて行った。

「何としても、ここを通す訳にはいかぬ」

そして岸は、十字長鎧を手に関の木門の下に立った。

やがてお互いの姿が確認できている処まで大村隊やって来た。それを見ても木門に立つ男は動く気配を見せない。

「大村さん」

育英隊頭取の所が困窮しつつ、前に居る大村へ話しかけた。

「兵と言っても、あれは農兵ばかりですよ」

「たった六人で守り切れるものでないと解っているだろうに」

すでに援軍の要請は出ていると見ていいだろうが、一番近い益田まで報せて援軍が到着するまでには距離があり過ぎる。

「農兵だからと、退く訳には行かぬ」

幕兵相手ならば如何様な手を使ってでも強行突破を断行できるのだが、農兵である上、たった六名で進軍を阻もうとする相手にできたものではない。

「狙撃兵を数名選べ。相手が六名で来ると言うのなら、我らもその志に答えようではないか」

大村はそう言って白い歯を見せた。

岸は動き出した長州軍に眉を顰める。

進んで来たはこちらと同等数の兵士だったのだ。

「同じ農兵同士でござるか」

岸は細く笑んだ。

浜田藩と津和野藩の領界を示す標柱が街道を挟んで立っている辺りで大村は足を止めた。

「我は長門国進発、振武隊隊長、大村益次郎！ 貴殿の名を伺いたい！」

そう言われ、岸は木門の外へと歩みを進める。

「某は浜田藩、関守岸静江と申す！」

初老の男と三人の銃兵と槍を手にした農兵。

長州軍の大半は農民や足輕の者だと聞く。己の志を通すためにここまで進発して来たに違いない。

岸は進み出て来た大村を見据える。

「無駄な争いは避けたい。ここを通しては頂けぬか、岸殿」

「出来ぬ相談でござる。拙者は命ある限り貴軍を阻止致す！」

後ろに居た農兵が、銃を構えようと岸の横へと飛び出して来た。

「これ以上出る事は許さぬ！ 貴様達は関所より早々に退避致せ！」

呆氣にとられた農兵が、口をあけたまま岸を見上げた。

「それはできません、岸様」

「こが戦に義はあらぬ。なれど君主に背く事は武士として出来ぬ事。此処にて長州をば止めるは、御為を受けた拙者一人で良い」

「ならば我らも共に戦ってみせましょう」

岸はそれでもいらぬと言い張った。

その遣り取りを見ていた大村は、岸の態度に感心せざるを得なかった。まだこの世に、この様な男が残っていた事に喜ぶと共に、その相手と戦わなくてはならない切なさを感じた。

「貴殿の武士としての志、この大村確かに承った」

戦とはいつの時代も人の道の理から離れているものである。それは大村とて良く解っている。だからと言って、長州のこれからを担う戦から引き下がる訳にはいかない。

「では、参る！」

大村が地面を蹴って飛び出すと、双方の銃兵が片膝を付き銃を構えた。

鎧を相手に剣で向かって行くのは、間合いの違いから容易いものではない。振り回す為の空間が在れば在るほど有利となるのは鎧の方なのだ。

鎧捌きのなんと見事な男か。

目の前を穂（剣）が掠めて行く中、大村はそう感嘆する。

所達は動かなかった。相手の農兵も二人の戦いを前に、足が竦んだように動けないでいる。

四刻半、半刻と時間が過ぎて行く。

「と・・・所さん」

命令も出ず、困惑した兵が声を上げる。

「両者とも退かんあ」

さすがに半刻の間、剣を振るい合っていては体の方も疲れが出る頃だ。

どうしたものかと考えあぐねていると、二人の体が地面へと落ちるのが見えた。

「お主、大した男だ。若いのになかなかの腕であるな」

四十を超えようかという体に圧し掛かる疲労は半端ではない。

「若いと申しても三十にござる。拙者よりも、大村殿の方が大したお方でござるよ」

「思う存分剣を振り続けられる相手に巡りあうというのは、そう有る事ではない」

「嬉しい事を言ってお下さる。だが、拙者も存分と戦えた」

征伐がなければ武芸においては良き相手となった事だろうと、大村は苦笑いを零す。

「しかし、ここで退く訳には」

「参りませぬな」

そう岸も笑顔を浮かべた。

「拙者どもは見捨てられた様でござる。援軍も無しでは貴軍を一人

にて止める事は叶いますまい。と申しても、退く事はできないでござるが」

「ここで足止めを食っているわけには行かぬ・・・岸殿、ご勘弁下され」

もう二人の腕には余力など残っていない。

「お互い、魂に決めた志をば貫くため、辛くとも通さねばならぬ時がある。唯今がその時、その時が唯今なり。お分かりになりますか？ 大村殿」

大村は立ち上がり、岸との間合いを大きく取る。

岸は後ろに居た農兵に退却を命じた。

「主らは撤退致せ！」

銃兵が岸へ向けて銃を構えた。

それを見た農兵が走り出して行くのを確認すると、岸は口元に浮かべた笑みを消し、顔を前へと戻し叫んだ。

「貴軍をここより先には通さぬ！」

武士としての言葉を受け、大村は上げた手を振り下ろした。

「撃て！！」

大村の一声で、銃を構えていた兵が引き金にかかる指に力を込めた。

三発の銃弾が、鎗を手に仁王立ちしている岸の体へとめり込んだ。

「ぐふっ・・・」

銃で体を撃ち抜かれる痛みの違いは半端ではないと言うのに、岸は両足を地面にしっかりと付け、眼前に立つ長州軍を睨み返した。

幕府が起こした戦に、幕兵が出なくてなんとするのか！

立ったままの岸は微動だにしない。

ゆっくりと歩みを進めた大村の息が一瞬止まった。

「なんと見事な死に様であろうか。決して無駄な死などではない」

仁王立のまま目を見開いている岸の息は、既に事切れていた。

死してもなお行く手を阻もうとする岸のその姿に、己の誠を貫き通した雄々しき死に様に、大村は苦渋とともに涙を流した。

「まこと、これが武士と言うものなり」

岸の体を丁寧に横たえた大村は、農兵が戻って来た時に埋葬できるようにと、その体を関門の中へと運ばせた。

福山藩はこの戦に加わる戦意が始めから薄く、岸から援軍を要請されたものの派兵をしなかったのである。万が一、派兵が行われていれば、関門を通過しようとする長州軍の足止めが叶ったかも知れず、また岸が一人死ぬ事にはならなかっただろう。

大村は怒りと共に、益田へとさらに足を進めた。

負傷した和奈は応急手当を受けると、早馬で周防の三田尻海軍局へと搬送されていた。

「ありがとうございます」

「弾が貫通してくれていて良かった。心配だった失血も、思ったより軽く済んでいる。後は感染が気になる処ですが、幸い熱は出ていません。暫くは投薬で様子を看させて頂きます」

麻酔も無いこの時代、体内に残った銃弾を摘出するためには、大の男でも失神するほどの激痛を伴う。その痛みは死ぬほうがましと思える程のものであり、事実、痛さに絶えかねで自刃に走る者も居るくらいだった。

「しばらくは安静が必要です」

憂いを秘めた笑顔を見せ、武市にそう言ったのは松島剛蔵である。松島は、世子毛利元徳の侍医として務める藩医である。長崎に赴任した時に勝海舟らとも交流を持ち、長崎海軍伝習所にてオランダ人から航海術も学んでいる。

倒幕運動派の志士として活動していた松島は、第一長州征伐の折、長州藩の主導権を取った俗論党によって萩の野山獄に捕らえられたが、藩医を失う事を嫌った大村によって救出され、難を逃れていた。

「松島先生、頼みが一つあるのですが」

病室を出て行こうとした松島を呼び止める。

「和太郎が女子だという事を皆には伏せて頂きたい」

「事情があつて、男子の身なりをしている。と仰られるのでしょうか？ ご安心下さい。病の種類は勿論、患者の素性などの漏らさぬのも医者勤めですから」

「忝い」

松島が出て行つた病室で、まだ目が覚めない和奈の側に腰を下ろす。

あれは何だと言うのだ？

人を殺しながら狂笑を浮かべていた和奈の顔が頭から離れない。

「山鹿流と関係があるのか？」

山鹿流にたどり着いた他の理由がまだ有り、それを桂は解っているのではないのか。勿論、高杉の家で倒れた理由も。

良く考えれば、なぜ自我を失う事で剣をあの抜刀術が使えるのかも首を捻る事だった。北辰一刀流を習っていたとは言え、技に特化している訳でも刺客を育むための流派でもない。

芸州でやって見せた立ち回りは凄腕の剣客を超えている。何十回、何百回と死線を掻い潜つた者でも、おいそれと身につけ得る技ではない。

和奈の顔が動いた。

「！」

死んでいる者に見えていた顔に赤みが差している。動かなかった筋肉が、意識を取り戻した事でようやく動き始め、瞼が少し開けられた。

「気がついたか？」

武市の声が届いたのだろう。

だるそうに首を横へと動かすと、今度はしっかりと目を開けた。

「桂木さん・・・？」

「気分はどうだ？」

「・・・体が、重いです」

「撃たれたのを覚えているか？」

えっ？　　つと不思議そうに首を傾げる。

「撃たれたんですか？」

「俺が駆けつけた時、肩を撃ち抜かれた。覚えてないのか？」

「・・・はい・・・えっと、何処かへ行った記憶はあるんですけど」

「？ 撃たれてからずっと意識を失っていたんだ、何処へも行けまい」

「夢、見てたのかな・・・誰かと話をした気がするんですけど、誰だったんだろう」

自問自答の様な言葉に、武市は答えを出してやれなかった。

「あれ？ 赤井くんが飛び出して来て・・・確か斬り合いになって・・・」

ふう、と困ったように息を吐き、武市は和奈の額に手を当てた。

「熱も出ていないし、とりあえず安心と言う事にしておこう。数日は動くなと先生から言われている。無理をしようなどと思うなよ」

痛みを感じ、左肩に手を置くと和奈は顔を顰めた。

「痛みを和らげる薬は飲ませた。しばらくはましだろうが、切れたら今以上に辛いと思え」

「覚悟しておきます」

そう言いながら視線だけを動かし、部屋を見回す。

白い壁にガラスの窓。戸口近くに背もたれの無い椅子が一客置かれていた。他は、とくに何も置かれていない部屋だ。

「ここは？」

「三田尻だ。海軍局に併設されている医療棟に居る」

「三田尻・・・あ！」

「なんだ!？」

「戦はどうなったんですか!？ 皆は!？ 新撰組は!？」

「驚かすな馬鹿者が。安心しろ。休戦を申し出て来た幕兵も新撰組も芸州から撤退している。赤井も無事だ。石川くん達は事後処理でまだ芸州に残っているがな」

「そうですか・・・無事だったんだ、皆。でも、他はまだ戦の最中です。ここに居てもいいんですか？」

「……ったく。おまえはまずその傷を治すことに専念しろ。いか、絶対ここから出ようなどと考えるなよ」

そう睨まれ、ずれた布団を被せ直されてしまった。

「大人しくしておきます」

と顔の半分まで布団を引き上げる。

「……何も覚えていないのか？」

「？」

「撃たれた反動で、記憶が欠落しているか。当たり所が良かったのは運だな。これに懲りて、剣を持つのを諦めてくれると嬉しいのだが」

そうならない事は武市も解っている。なぜか和奈は自ら進んで戦へと歩みを進めているのだ。その理由を、今一度桂に確かめなければと思った。

「自分でも不思議なんです。人を……殺めているのに……それはいけない事だと解っているのに、剣を捨てる気が沸いて来ない」
それもまた、おまえの進めべき道なのだろうと言い、武市は泣きそうな顔の和奈の頭に手を置いた。

龍馬の手と同じく、暖かい手だった。

其之一 石州口の戦い

扇原関門から多田川沿いを益田へ入った大村は、稲積山と万葉山の間に位置する机崎神社で止まると隊を集めた。兵士の体を休め、作戦を練るためである。

「まずは敵の様子を見てくる。私が戻るまで皆は体を休めていてくれ」

「一人では危険です」

所も共に行くと行ったが、指揮を執る者が欠けてはと断られてしまった。

「まだ若い者には負けぬさ」

関門では負傷者が出るどころが、敵となるべき相手が一人であり全員無傷だった。これから攻めに入る為には好都合であるが、体力の回復も考えなければ長期戦を生き抜く事ができない。

益田に陣を置く浜田藩が炊く火の色が眼下にある。格好の目印となる火の位置を確かめると稲積山山頂から戻ると、山陰街道から進軍してくる佐世に伝令を走らせた。

机崎神社の更さらに先にある妙義寺へ本陣を敷いた大村は、振武隊・膺懲隊ようけうを札の辻から大橋を渡り進ませ、育英隊七十五名と八十五名の狙撃隊を、万福寺に近い堀川橋対岸に待機させた。

山陰街道から進んでくる干城隊と斉武隊は、北側の勝達寺方面より敵陣に入る手筈となっていた。

南北から攻め込み、退路を福山藩屯所へ取れるよう開けさせたのである。

「寄せ集めの藩兵だ。訓練された指揮系統など持っていないだろう。ここは、我らに分がある」

「分があるって言っても、兵の数は段違いですよ」

「だからこそ、戦略、と言うものがあるんだ」

この大村の策は功を奏した。

長州軍がいきなり攻め込んで来たのもあるが、大村の推測した通り指揮系統はまったく機能しておらず、挟まれる形となった敵陣が包囲の薄い福山藩屯所方面へと押しやられたのである。

逃れて来た浜田・福山藩が堀川橋を超えると、伏兵となっていた狙撃隊と育英隊が攻撃を仕掛けた。そこへ大村と佐世らの追撃が加わり、両藩は十分な戦いを繰り広げる事無く壊滅に追い込まれたのである。

その勢いのまま、益田城を陥落させた長州軍は、浜田城下へと足を進めた。

西国街道を、京へと向かう一団が居た。

「くそっ！」

新撰組である。

芸州口での戦闘で、敗北に近い撤退を強いられた征長軍は休戦を申し出て、一時休戦となった。それにより、新撰組にも京への帰国命令が下ったのである。

「今更だが、撤兵の条件執行をもっと強制してたら、軍政改革なんざできなかつたろうに」

武力恭順を掲げ、密かに戦争を見越した軍政が行われているのは確かだ。でなければ最新の銃器を揃える事などできない。

加えて西洋式の戦術と、地の利を生かした長州ならではの展開。そして過去の四国連合との戦と内乱の経験。これまでに幕府が経験した事のない状況を、長州は逆手に取り自分達の力として組み入れたのだ。どうあがいても、旧兵法を宝の様に守り続ける今の幕軍では勝ち目の無い戦だった。

身内の不出来を今嘆いたところで遅い。

幕兵の在り片に対する苛立ちより、一番の苛立ちは和奈達が居たと言うことだ。薩摩との繋がりがあると疑っていたが、まさか長州軍と共に居ると思いきや思わなかったのだ。

（長州藩士だと言いやがった）

薩摩藩へと戻って行った者が長州藩士だった。それはもう一年以上もまえから、両藩が何かしら裏で動いていたと言う事になるのである。

「ちっ！ 氣にいらねえ」

「そう、かりかりしないで下さいよ」

沖田は発作も今は治まり、顔色は悪いものの、旅をする分には支障が無い体力なら取り戻していた。

「斉藤を帰したのは失敗だったな。おまえと永倉、斉藤が居りゃあもうちっとましな戦いができたってのに」

「あの四人が居ると判っていれば、の話ですよ、それ」

「いちいち頭に来る奴だな！」

手負いとなったのは新撰組で、和奈が銃弾に倒れたと言っても、他の三人には傷さえ与えていない。それが土方にとっては腹立たしいのだろう。

「しかし、あれは何だったってんだ？」

「それは僕も考えてました」

明らかに和奈の様子はおかしかった。

狂気を超えた人間など存在するのか？

「土方さん」

二人の所へ赤井が後ろから駆け寄って来た。

「どうした」

「永倉さんの容態が悪過ぎます。どこかで宿をとった方がいいですよ」

芸州を出てからろくな所で夜を明かしていない。深手を負った永倉にとっては辛いどころの話ではないだろう。

備後に入った土方は三原宿で宿をとり、医者を探させ、傷がひどい者を運ばせた。

その夜。

旅籠屋二階の窓から外を眺めていた土方の所へ、島田魁がやって

来た。

「永倉は？」

「はい。傷の手当てをしてもらって部屋に運びました。でも熱が高くて、直ぐに動かすのは無理かと」

「仕方ねえな。島田、悪いが永倉とここに残ってくれ。あと、藤堂を呼んで来てくれねえか？」

島田は承知しましたと部屋を出て行き、しばらくたって呼ばれた藤堂が姿を見せる。

「近藤さんに伝えといってくれ。俺は芸州へ戻る」

「はっ！？ ちょっと土方さん。まさか副長自ら脱走宣言すか！？」

「馬鹿言うんじゃない！ 誰が脱走するって言ったよ！？ 今近藤さんに伝えろと言ったばかりだろうが！」

怒鳴られても藤堂は引き下がらない。京へ戻れと命を受けているのだ。その命に背いて芸州に戻る事は命令を破ると言う事なのである。

「命？ 会津藩からの命なんざ俺達は受けちゃいねえ。紀州藩の奴が出した命令なんざ聞く必要はねえんだよ」

「いくらなんでも無茶言い過ぎっすよ」

「うるせい。近藤さんには会津へ掛け合うよう頼んでくれ。名目は・・・国事探訪とでもしておけ。目的はと聞かれたら、長州と薩摩の繋がりでなくても言え。両藩と維新志士どもの繋がりが解れば、一気に薩摩へ乗り込める」

「やっぱ、その線が濃いすっか？」

「寺田屋襲撃で捕り逃がした志士四名が長州に居たんだ。それに長州は最新の銃を持ってやがった。国外との貿易の禁止に武器も入っている中、そんな代物を手に入れるなんざ、どっかが手引きでもしないと無理だろうが」

そのどっかが、薩摩なのだ。

「でも幕臣には西郷が居るんすよ？」

「その幕臣様は、今回出兵を拒否したじゃねえか」

ガリつと親指の爪を噛む。

「あ……まさか、あの乱入してきた浪士って、薩摩の兵っすか！？」

「てめえが見たんだろうが。統制されてたって言ったのもおまえだよな」

「そりゃそうっすけど……解りました。近藤さんにはそう伝えます。けど、後の事は責任もてませんよ、俺」

「おまえに切腹なんざさせねえから、余計な心配すんな」

「せ……切腹って」

「ぐたぐだ言っただとつと組長連中に伝えて来い。隊士に余計な心配をさせんようにな」

「もう何も言いませんよ。じゃ、すぐ伝えてきます」

部屋を出かけた藤堂は、戸口で一旦止まると半身を返した。

「土方さん」

「まだなんかあんのか？」

「死なんじゃ駄目っすよ」

「……この俺がそう簡単にくだばってたまるかよ」

「あの変なのが居るんです、心配ぐらいさせて下さい」

そう言うと、藤堂はぴしゃりと襖を閉めてしまった。

「変な奴か」

あの日、初めて会った時からなぜか気になっている相手だ。まさか一年足らずで自分と互角に剣を交えるまでに腕を磨くとは、今でも信じきれない。さらに変貌を見せたあの太刀捌き。

「奴は一体何者なんだ？」

この時土方は気付かなかった。赤井にも、同じをもの感じて声を掛けたと言う事に。

翌日。

島田は永倉は付き添い、熱が下がるまで逗留する事になり、他の隊士は京へ戻るため三原宿を発った。

上洛組みと別れ、新撰組の羽織を脱いだ四人が来た道に戻って行っていた。

「なんで、てめえまで来るんだよ」

「嫌だなあ。この僕を置いて行くつもりだったんですか？」

「大人しく帰ってりゃあいいのに」

動ける間は沖田の我儘を許してやるほかはない。

この男の体はや病魔に蝕まれ、本人の意思とは関係なくその体からすべての力を奪ってしまうだろう。そうなれば、嫌でもその手から剣を放さなければなくなる。そうなった時に沖田がどうなってしまうのか、土方には予想がついていたのだ。ならば、悔いが残らぬよう、今は動かしてやるしかない。

「副長に一番隊と四番隊の組長に監察片。これだけ居れば、脱走なんて馬鹿な事を伊東さんも言わないでしょう？」

「その名なんざ口にするな！ くそつ。伊東ってつく奴全部斬りたくなっちゃう」

これは京に戻ったら一騒動起こるなど、横に居た大石と目が合った赤井は苦笑い見せた。

山が多い石見国浜田に城と城下が造られたのは、江戸初期になってからであった。

幕府はこの城を築く事により、外様藩に対する最前線の牙城としたのである。

その浜田城下に、長州軍が迫っていた。

二十五歳になる武聰は、鏡山と高尾山に陣を置き、両軍を連携させて進軍して来る長州軍へ攻撃を仕掛ける算段を執っていた。

その布陣が解っていたのか、大村は隊を分断させず、一方へ攻め込む策を執り高尾山へと向かっていた。

「なんでここで正攻法なんですか？」

佐世は先頭に立ち、前を見据えたまま進む大村の背中に問いかけた。

「浜田藩主は松平公だ。奇襲で攻め入るよりも、堂々と正面から攻めて勝つ事にここでの戦に意義が生まれる」

ほう、と感嘆の声を漏らす。

「武士のなんとかってやつですか」

「武士の心意気があるならば、負けても私は潔しとする」

「ちょっと大村さん！ なに戦う前から不吉な事言ってるんですか！」

井上もこれには参ったようである。

「あはははっ。すまんすまん」

「すまんで済みませんよ」

「そう言うな。覚悟を口にしたまでだ。味方に損害を出させるわけには行かぬだろう？ 益田よりも兵数が多いこの地で、隊を分散させて叩くよりも、一丸となつて一個づつ叩いて行く方が良いのだよ」
高尾山に布陣している浜田藩の位置を偵察させた大村は、その陣を半円に取り囲むように砲台を配置させた。

「さあ、行くぞ」

「おう！！」

大村の合図と共に砲塔が火を吹き、長州軍は一気に高尾山の敵陣へと雪崩れ込んだ。

これに驚いたのは浜田藩兵である。

山間を縦横無尽に走り回る長州軍に翻弄され、銃撃と砲撃が加わり戦意を奮い立たせるどころか、退却を始めてしまったのである。

「時代錯誤の兵法なんか、おれ達に通用するもんじゃないと知れ！」

逃げ惑う者と向かってくる者が入り乱れる中、長州軍は敵兵を少しづつ追い上げて行った。

高尾山を逃げ出した浜田藩兵は、もう一つの陣がある鏡山へと逃げたのである。大村が執った一つずつ撃破の策を、敵自らが動いて進めてくれたのである。

「このまま一気に鏡山へ行くぞ」

勢いに乗った兵士の戦意を此処で殺がさせないため、鏡山の陣形

を整えさす間を与えないため、大村はそのまま敵陣へと向かった。

鏡山の陣へと逃れて来た藩兵の報告を聞き、作戦を立てる暇もなく砲弾が頭上へと落ちて来た。

陣のところかしこに砲を撃ち込まれる中、突入してきた長州軍と乱戦となったのだが、これまた指揮が各人に行き届く前に崩されてしまった。

砲撃が収まると、銃撃が取って代わり、弾丸を掻い潜るように長州軍が動き回り敵兵へと刃を振り下ろして行く。

「手向かう者は容赦せん！」

芸州での戦と同じく、重い甲冑の武士では、足軽な長州軍の動きには付いていけない。連続して撃ち込まれる銃撃に浮き足だし、敵兵を狙撃するにも、浜田藩兵の銃では対応しきれるものではなかった。

反対に、長州各隊の連携は途切れることが無い。伝令が戦場を走り、戦況を読む大村に逐一集められて行く。そしてその都度新しい指示が出されるのだ。

浜田藩兵は、その予測のとれない動きに対応する術を持たなかった。得意とする山間での戦いと言う事もあったが、銃器の差や情報伝達の差も両者に大きな差を生じさせている。

退却の声が上がったのは、長州軍が攻め込んで一刻も経たずの事だった。

病臥中だと言う事もあり戦に参戦できなかった武聰は、高尾山に続いて、鏡山での敗戦ほ聞き、紆余曲折の末、自ら城に火を放ったのである。

そして、燃える城を後に、武聰は松江城（島根県松江市殿町）へと逃れた。

「雲州からの援軍がきになるところですね」

佐世は、炎に包まれる浜田城を見上げでそう呟いた。

「なに、決して雲州や他の藩から無闇に応援などが来るものではな

い。この戦の元となった事情を知るならば、援軍など許すはずもなかろう」

六月十八日。

こうして長州軍は益田城を落とした後、浜田城をも陥落させた。

石州口で交戦が始まった頃、傷が癒えた龍馬の乗るユニオン号が赤間関へと寄港した。

小倉口での戦を前に、作戦会議を開いている高杉の所へ龍馬が現れる。

「傷はもういいのか？」

京での襲撃後、坂本達の状況は人伝でしか聞いていなかった。

「なんともないきね。この通りぴんぴん元気に生きちゅうがよ」

そう屈託なく笑う龍馬に、高杉も白い歯を見せて笑いを返す。

「そのまま大久保さんの処へ居座るのかと思っていたが、いい艦ものと一緒に来てくれたもんだ」

「ユニオン号か？ おまさん、何を考えちゅうんなが？」

「聞きたいか！？」

にやりと笑う高杉の顔を見て、龍馬は口を尖らせ言った。

「・・・嫌な予感しかしやーせん」

「あはははっ。坂本さんの感もなかなかのもんだな！ 率直に言う。ユニオン号で参戦してくれ！」

「やっぱりそう来たがか」

「ふん！ このくそ忙しい時に軍艦に乗って来たってことは、少しはその気があったって事だろう？」

「いや、まっこと高杉くんには参るぜよ」

「貸しを作ったのはその為だ。まさかその貸しで、手負いとなるとは思っていなかったがな。まあ、それはそれ、これはこれだ」

高杉の言う貸しとは、龍馬の持っていた銃の事である。

上海に渡った時、高杉は1854年にウィンチエスター社のウェッソンが開発し製造された【スミス・アンド・ウェッソン・レボルバー】32口径の銃を何丁か手に入れた。

その一つを京に出向いた際、龍馬に見せた高杉は、興味津々の龍馬に土産だと手渡していたのだ。

その使いどころが寺田屋での騒動で、剣を受ける事に使われるとは考えて居なかったのだが。

「其の件はさておき。坂本さんにも加わってもらうぞ、作戦会議！」
バンバンと背中を叩くと、肩に手を回して逃げれんぞとばかりに龍馬を皆の処と連れて行った。

芸州に続く石州での長州軍の勝利に、幕府は大慌ての事態となった。後が無くなった幕府は、百隻からなる艦隊を小倉へと集結させたのである。

其之二 死の影

芸州から小倉城へと戻った小笠原長行は、海岸各所に設置されている砲台へ緊急の命を伝えさせた。

「小笠原殿」

城に帰って来たかと思ったら、慌てて各地へ伝令を走らせた小笠原の様子を見て、怪訝に思った島村志津摩が声を掛けた。

島村は、今回の長州征伐において小倉藩軍の一番備大将の任に付いている家老である。

嘉永五年に家老となった島村は、佐幕攘夷派として藩政改革に着手していた。

小倉という土地柄もあり、夷国の最新船の往来を見る機会も多く、夷国の脅威に懸念を抱いていた所へ、先の馬関戦争である。

四夷国連合艦隊の長州との戦で改めてその脅威を感じ取った島村は、武備増強に腐心すると共に攘夷は成すべきと進言して来た。しかし、その意見に耳を貸す者も理解を示す者も少なく、藩政に反映させる事ができなかった。

そして二度目の長州征伐発令である。

同じ国同士が争っている場合ではないと痛感するも、藩命、幕府の命には逆らえない。

「島村殿か。如何致した？」

「それはこちらの台詞にございます。いきなり帰城なされたかと思えば、伝令を走らせ焦慮しやうりょされおられるご様子。何事かと危惧を抱くのも当然にございましょう」

「長州だ」

「はっ？」

其の言葉を口にした小笠原の体が小刻みに震え出す。

「長州の奴らがこの城へ来るのじゃ」

今は長州征伐中であり、小倉藩もその為に兵を展開させ九州諸藩

にも出兵を要請しているのだ。今更そんな事を口にされなくても、周知なのである。

「落ち着かれよ、小笠原殿。唯今その為に兵を田野浦、門司、大里などに兵を敷いているではありませんか。諸藩の指揮を執られる総大将殿が、人目も憚らずその様に慌てられては今後の士気に係わりますぞ」

小倉藩は、小倉城主として播磨国明石藩より小笠原忠真が入封し豊前北部十七万石を領し成った藩である。

代々に渡り九州玄関口を攻守しながら、九州探題の役目を担い、西国の名外様大名の監視を行って来た。

非常時となった時には小倉藩が九州に在する藩を束ね、その指揮を執る。そうなれば必然的に軍の総大将には、小倉城主である小笠原が就く事になる。

「そちは長州を知らぬから、その様な涼しい顔をしておられるのじゃ」

その物言いは尋常ではない。

小さな顔が余計に小さく見え、子供の様に怯える男に島村は内心でため息を吐いた。

（軍の総大将がこれでは先が思いやられる）

その心配は、その後の小笠原の言動に現われ、さらに混迷を来たす事になるのだが。

「九州の征長軍（九州諸藩連合軍）は五万。加え幕府海軍も参戦しております。これから長州へ攻め入ろうと言う時に、総大将が腰を据えなくてどうなされますか」

五万。そう、五万だ。

だが、幕艦二十二隻が、たった二隻の長州艦に全滅させられたのを小笠原は知っている。屋代島に上陸した兵も千程の農兵に敗走している。

今回、幕府は四方面から長州へ侵攻している。その中でも一番の激戦になると考えていたのが関門海峡である。

長州を攻め落とすには、この関門海峡の制海権を制圧し、周防と長門の両国へ攻め込む必要がある。その為、幕府は他の三方よりも小倉口を最重要視し、小倉城は長州攻撃の本営となった。故に、海岸の防備は強固となっているのだ。小笠原とて、それを知らぬ筈はない。

「貴様は長州を知らぬからそうして、平然と立っていられるのだ」
「ならば此方から討ってでるべきでございます。すでに門司には二百の船を用意しております。これにて赤間関へ攻め込み、長州の首元に刃を立てて見せましょうぞ」

だが小笠原はこれを渋った。

長州の艦隊は少数と言えど侮れない。幕府艦隊が集結を終えていないのに、小倉藩兵だけで戦を始める事に、英断すべき勝因を見つけられなかったのだ。

「小笠原殿！」

「開戦は幕府艦隊の到着と、諸藩の兵の集結が終ってからである」
これ以上食い下がっても、小笠原の小心を振るい立たせる事ではできないだろう。

そう取った島村は、その場を後にした。

（あれが総大将と言うのか）

母の国と戦になる自分の身にもなれと、叫び出したい衝動が沸き起こる。

島村の母親は、長府藩家老迫田伊勢之助の娘である。母も島村氏へ嫁いで来た時には、まさか祖国と戦になろうとは思わなかったに違いない。

これが戦なのだ。

自分の祖国は長門国ではなく豊前国だ。
城を後にする島村の拳は固く握られた。

そして心新たに、小笠原にではなく、背後に聳え立つ城に、この国に忠義を誓ったのである。

小倉藩へ攻める高杉達は、守る拠点もない事から、赤間関にある白石邸に集まっていた。

「漁船とは、面白い事を考えたものやき」

一人、また一人と、高杉の所へやって来る漁師に扮した長州兵を見て龍馬はそう笑った。

「敵さんも、まさか漁船が敵情視察をしてると思っていなかっただろうな。お陰で砲塔の位置、幕艦の位置は我が手中だ」

そう視線を落とした先には、測量図が広げられている。

「正確な距離を測ったがかえ」

「丙寅丸へいしんまると言えど、敵の位置が判らんでは当たるものも当てられんからな」

測量図の横には地図が置かれている。

「この田野浦に、奴らはこちら側への上陸用に船艇を集めている。まずはこれをぶっ潰す」

覗き込んでいるのは山縣、赤川、長府報国隊の原田である。

「奇兵隊、膺懲隊、報国隊を二つに分ける。一つは丙寅丸へいしんまる、癸亥丸きがいまる

と丙辰丸へいしんまるの三隻で内海方面からと、もう一つは庚申丸こうしんまると乙丑丸いつちゆうまるで外海方面から上陸させる。大隊の指揮は山縣と原田に任す、頼んだぞ」

艦が進行して行く海路を指でなぞる。

「で、何時決行だ？」

山縣が顔を上げると、腕組をしたまま人差し指を動かしている高杉に尋ねた。

「そう焦るな狂介。万策を尽くしてるんだ、得る物を得てから動くのが筋ってもんだろうが」

「ほう、珍しい事もあるもんだ。猪突猛進のおまえが、待つ、と言うとはな」

「おい、まて！ 誰が猪だ！」

「あははははっ！ こりゃあーいい。猪とは、しょうまっこといい表現をするもんぜよ」

山縣は先ほどから口も出さず、じつと話を聞いていた男に視線を向けた。

「おいおい。人を勝手に猪で片付けてくれるな」

「ほきも、例えは悪くないじゃろう。そこが高杉くんのいい所なんやき」

「たあー！ 褒められてるのか貶されてるのか判らんだろうが！」
両手を突っぱねて龍馬にずいっと顔を近づけると、龍馬は首をすぼめて上半身を後ろへ逸らす。

「時に高杉。その御仁は誰なんだ？」

山縣のその一言で、赤川と原田の目が龍馬を捉え、ん？ と高杉と龍馬の顔が山縣を取られる。

「ふん！ こいつはな、大政奉還をすると大法螺を吹いてる男だ」
腰に手を当て、もう片他方の腕を上げて龍馬を指差した。

「大政奉還！？」

本当に長州の男達は一挙一様である。三人が同時に叫んだものだから、周りに居た者達までもが視線を一斉に向けて来た。

「大法螺でもなんちゃーないきね。わしはそれが出来ると思っているがで」

原田が何か思い当たった様な顔で、赤川を押し退けて身を乗り出す。

「まさか、坂本龍馬！？」

「こりゃたまげたぜよ。わしはそればあ有名人なんなが？」

これに驚いたのは龍馬だけである。

「有名人もなんも、そんだけ土佐弁を隠さんで堂々と喋られたら誰でも判ると思うんだが・・・」

「むう。有名人じゃーないがか」

「そこが落ち込むところなんだ・・・」

口を尖らせて肩を丸めてしまった龍馬を見て、赤川も原田も呆れるばかりである。

「坂本さんにも参戦してもらおう。軍義には出てくれよ？」

「難しい話は苦手なんやけど、言われた通りの事をするまでやか」
「・・・よし。皆を休ませてやってくれ。動き出したら当分休めんからな。俺は部屋に戻るが、狂介、赤川、原田も来てくれ。もちろん坂本さんもだ」

そう言った高杉は足早に広間を出て行ってしまった。

その後姿を慌てて追いかける山縣。

龍馬もひよこひよこ後に付いて行き、赤川は兵には俺からと原田を先に行かせる。

「指示が有るまで各個待機していてくれ」

最低限やらねばならない事を言い残し、赤川も四人の後を追って行った。

部屋に入った山縣は、感じた不安が的中していた事に歯を食い縛るしかなかった。

高杉は片手で口を押さえ、止まらぬ咳と共に座布団の上に血を吐いていたのだ。

「無理をするな晋作」

近寄ろうとする山縣をもう片方の手で制する。

「こほっこほっ・・・」

続いて入って来た原田も、その光景を見て愕然と立ち尽くしてしまっている。

「高杉くん」

「・・・来るな・・・」

その言葉が聞こえなかったかの様に、龍馬はゆっくりと歩みを進め、高杉の後ろに回り腰を下ろすとその背中を摩り始める。

「無理はいかんぜよ」

「・・・無理は承知だ。だが、俺はこんなところで止まっている訳にはいかないんだ」

遅れてやって来た赤川は、立ったままの山縣と原田を見て首を傾げる。

「どうしたんですか？」

そう視線を部屋の中央へ移した赤川は、重く漂う空気の原因を知った。

「高杉さん!？」

「大声を出すな馬鹿が。他の者に聞こえたらどうする」
静かな声で山縣が諫める。

「これは我々だけに留めておく。絶対に漏らすな」

「し、しかし」

「赤川」

そう言われては、もう何も言えない。

「解りました・・・」

「原田も、頼むぞ」

こくりと頷くだけの原田とて、高杉の体を蝕んでいるモノの正体くらい解った。

労咳は、今では予防接種で防ぐ事の可能な病気だが、この時代では不治の病である。一度発症すると治癒の可能性は零に等しい。この難病は免疫力の低い宿主にほど発症率が高くなり、咳、くしゃみ、唾などで二次感染を引き起こしてしまう。

咳が収まり、呼吸が楽になった所を見計らい、山縣は血に濡れた座布団を手にする。

「遷るからやめろ」

「このままにはして置けんだろう」

そう言って座布団を抱え、すたすたと出て行ってしまふ。

口の周りに付いた血を拭った高杉は一同を見回す。

「幕府にこれまでの借りを返す時だ。長州が受けた屈辱の数々、砲弾に込めてそのまま返してやる」

「だが高杉さん、あんたその体で」

「先が短いなら短いなりに俺は面白く時を行きたい。花火と一緒にだ、

赤川。夜空に咲く大きな花火を打ち上げ、消えて行く・・・おまえらが花火を見る度、高杉晋作という男が居たのだと思い出すくらいにな」

その笑顔に堪らず赤川は顔を背けた。背けられずには居られなかったのだ。

その肩に原田の手が置かれた。

「なら一つ、今生最大の花火を打ち上げてもらおうじゃないか」

何をどう周りが言ったところで、命を永らえる為に大人しく静養などする男ではない。ならば、共に花火を造り上げて打ち上げるしか、この男と共に歩く術はないのだ。

「高杉くんは、いい男に囲まれちゅうのう」

「！男に囲まれて嬉しいものか！ どうせなら女を連れて来い！」

「・・・おのうさんに会えないから欲求不満なんだよ」

ぼそつと原田に呟いた赤川の声は高杉の耳に届いていた。

「おまえ！ 言ったな！ 今、おのうって言ったな！？」

「うへっ！」

「よおし！ 赤川、ここへおのうを連れて来い！」

そんな無茶なと困る赤川に、戻って来た山縣も、いらんことを言うなと困った顔になる。

やいのやいのと口喧嘩を始めてしまった一同は、征長軍の動きを知らせに来た密偵が走りこんで来るまで、一時戦を忘れて友との団欒を過ごした。

知らせを受けた桂の指示で三田尻の海軍局を出た和奈と武市は、萩往還を上り山口へとやって来ていた。

芸州にて、石川達の応援に駆け回っていた以蔵と新兵衛も呼び戻されており、二人が着いた時には既に桂と共に座っていた。

「動かして悪かったね。傷は痛まないかい？」

「大丈夫です」

自分の事よりも桂の方が気になった。優しく微笑む顔には陰りが出来ており、明らかに疲労の色が出ていたのだ。

「高杉さんは？」

「晋作達は白石さんの処へ厄介になっているよ」

桂は山口で各地から送られて来る伝令からの戦況を聞き、逐一高杉に報告をしていた。

「芸州に新撰組が来るのは予想していたが、桂木くんが居るなら心配ないと、高を括り過ぎたようだね」

そう言われては、桂木は何も返す言葉が無い。

「それが戦です。石川さんや、桂木さんが撃たれていてもおかしくない状況でした。僕が標的になったのは、誰のせいでもありません」
だが和奈は、割り切った言葉を桂に発した。

「・・・承知で出したつもりだったが・・・桂木くん、失言を詫びるよ」

桂の言葉に無言で頷く桂木は、背筋をピンと伸ばして横に座る和奈に視線を落とした。

「小倉の戦はまだ始まっていないが、近く動くだろう。おまえ達三人は良しとして、田中くんはどうする？」

「芸州の戦は休戦となっています。石州の戦に増援が必要となれば、石川さん達が動くでしょう。ならば私は桂木さんと共に小倉へ参戦させて頂きたい」

「いや、そう言う事を聞いたのではないんだが」

桂は、薩摩に帰るか京の大久保の元へ帰るか聞きたかったのだ。

「ああ。桂さんには伝えてなかったが、田中くんが動いているのは個人の意思だ。それは大久保さんも承知している」

「よくあの人が君を自由にしたね」

「京では手配者となりました故、薩摩に戻れとの仰せを頂きました。が、薩摩に戻っても、私が成せる事など今は無いと申し上げると、好きにして良いとの許を下さいました」

手放した訳ではない、という事だ。

「やれやれ。こちらの内情視察も兼ねていると、僕は取っていいんだろうね？」

「それは命の内にございませんが、聞かれれば答える、とだけ申し上げておきます」

「高杉くんにも伝えてある」

高杉も承知して芸州に参戦させたのだ。

「解った。一人でも力となる者が増えるのは助かる。桂木くんと同行してくれ。で、おまえは傷が言えるまで留守番だよ？」

そう言われる事は、呼ばれた時から解っていた。だが、ここでじっとして居てはいけないと、和奈は思うのだ。

「左肩だけでも剣は持てます。僕も、行きます」

「冗談ではない。両手の相手が振るう剣を甘く見るな。しかもおまえは――」

後に続く言葉を桂は飲み込んだ。新兵衛が居ては、女子たからと言えはしない。

「両手ですら女子の力は弱いんだから」

武市が代わりに言葉を紡いだものだから、桂の冷淡な目が向けられる。その顔に感情を顕わにして。

「ここに居る者はすべて和太郎が女子と知っている」

ぱっ、と視線を移した桂に、新兵衛は頷き返した。

桂は、ふう、と肩を落とした。

「見る者が観れば判る事です」

「僕一人、蚊帳の外にやられた気分だよ。で、君は和太郎が行くと言うのを・・・許したんだね」

武市が反論しないのだ、それは聞くまでもない事だった。

「・・・岩村くん、田中くん。申し訳ないが、武市くんと和太郎の三人だけにしてくれないか？」

はい、と以蔵は腰を上げ、新兵衛も続くように部屋を出て行った。さて、と向き直った桂にどう言う事かと聞かれ、武市は語りだした。

其之三 鈴の音

病室で桂からの伝言を受取った武市は、傷もまだ塞がっていない事を理由に、山口行きできないと返事を書くつもりでいた。

「行きます」

そう言うだろうと解っていたが、今回は和奈を推し留めねばならない。

「裂傷が悪化すれば、その腕切り落とす事にもなり兼ねん。承諾はできん」

「行かないと駄目なんです」

「なぜだ？」

「え・・・と、どうしても、そうしなければならぬんです。僕がここに來た意味を知るために」

これには武市も首を捻った。

「ここに來た？」

「・・・理由は、小五郎さんの処へ着いたら話します。だから、お願いです。山口へ行かせて下さい」

だからと、了解できるものではない。

「止められても、行きます」

「・・・足を斬ってでも止める。と、言ったら？」

「這ってでも行きます」

「なぜ、そこまでして・・・薩摩はこの度の戦に参戦しておらぬし、芸州も優勢のまま落ち着きつつある。石州口からの伝令がここに來ていないところを見ると、援軍が必要な状態ではない・・・小倉は要だ、それが氣になるか？」

俯いていていた和奈の顔が上げられ、その双眸が武市を捉えた。

ぞくり、と武市の背筋に冷たいものが走る。

ほんの今し方まで人の感情を顔に浮かべていた和奈の顔は、あの戦場で見た人なるモノに近い面立ちとなっている。

「暢夫の夫れ死生命あり」

「なにっ？」

「見届けねばならぬ、守らなければならぬ」

「和太郎？」

「それが吾に与えられた使命なれば、何者も行く手を阻む事は叶わぬ」

枕元に置かれた綾鷹へと、手が伸びて行く。

「和太郎！」

武市の怒声に手が止まる。

「行つてどうすると言う？ また、戦にでるのか？」

「各々と心を心として以つて相交わつた吾が戦に出るのは理なり。」

八百万の神々の采配によりて死した心は活きたり、活きる心は機を求める。機を求める心は動くもの也」

「八百万の神？ なんだ？ 何を言っている？」

「問うが良い、吾が心の片割れに。聞くが良い、吾が何者なるかを」
りいーん。

鈴の音が武市の耳に聞こえた。

「鈴？」

だが、病室の何処にも鈴の音の元になるものなぞ無い。

「武市さん」

いつもの声色だった。

「解っているのか？ 今、おまえが何を口にしたのか」

「・・・眠っている時に見た夢を何度も観るんです。夢と、思っていた。でも私は確かにあの人に逢った」

「あの人？」

「山口へ、行きます」

訳が解らないところではない。

「桂さんに会ったら、話してくれるのだな？」

「はい」

そうして、二人は直ぐに三田尻を発ち、山口へとやって来たのだ。

「心の片割れ？」

武市の話を聞いても思い当たる節など一つもない。

「桂さん」

武市が聞きたいだろう事をもっと早くに、そう、あの京で龍馬に和奈を任せた時に話しておくべきだったのだと後悔の念に顔を歪めた。

「僕だって、本当だとは今でも信じていない。自然の摂理を超えたものだ、それは・・・だから、考えないようにして居た。和太郎は僕の家族だと、ずっと、そうこの先もそう思いたかったんだ」

「それでは、まるで要領を得ていない。和太郎は桂さんの親戚では・・・ない・・・？」

「あの日、池田屋に遅れたのは、和太郎を見つけたからだ」

「見つけた？」

桂は、竹林で和奈に会った時の事を語った。

「今でも信じれるものではない。だが、彼女の語る世界はどれも聞いた事のないモノばかりだった。身元を調査してみても、痕跡が一つも無いんだ。和太郎がこの世界の何処で生まれ、生きて来たのか・・・何一つ掴めなかった」

時を越えて来るなど、武市とて到底信じきれる内容ではない。

「貴方ほどの方が、この私に謀り事を？」

「君を謀って、僕になんの得があるんだい？」

桂は和奈に視線を投げた。

「本当に、この時代の人間ではないんです。もっともつと後の日本で生まれました。どうやって来たのかも解りません。左も右も判らない私を、小五郎さんは受け入れてくれたんです」

「本当に不思議に思うよ。普段の僕なら、頭のいかれた者の世迷言、それで片付けていただろう。だが、僕はそうしなかった」

「待て、待ってくれ」

頭が混乱し、桂の言葉が頭の中で形を成さなくなり、武市はそう

制した。

（何を言っている？ 和太郎は何を口にしたのだ？）

「武市さん……」

「君の混乱はよく判る。僕もそうだったからね」

ぐるぐると回る言葉の羅列を一旦追い払うことで、武市はなんとか自制心を取り戻した。

「それを……龍馬も知っているのか？」

ああ、と短く桂は答えた。

「あの野郎……」

知っていて黙ってた共に腹が立った。最初から知っていれば、和奈に剣を持たせる事もなかったのだ。

「拳骨一つでは済まぬぞ」

「初めから話していればと、悔やむばかりだ」

「済んだ事を悔いるのは止めて頂きたい」

そう、これからが大事なのだ。既に和奈は剣を手に入人を殺めてしまっている。

「これは、桂さんに会えば解ると言った」

そして武市は、芸州での戦場での和奈の事を語った。

勿論、当の本人も知らない事だ。だが、真実を聞かされた以上話さなくてはならないと武市は考えた。

「どう言う事なんだ？ さっき心の片割れと、おまえは言ったね？」

あの人とは誰なんだ？」

「私が長州藩邸で、なぜか落ち着くと言った事を覚えていますか？」

「ああ……動揺するでもなく、不安に泣くでもなく平然としているおまえを訝しんだ。だから、間者ではないかと、疑った」

「七たびも生きかえりつつ、夷をぞ攘はんこころ吾れ忘れめや」

「！」

「理とは夢の如く幻の如し。継ぐ志の道は友の傍らに、吾の心あらん事を」

「桂さん？」

目を見開いて和奈を見ている桂に、武市の声は届かなかった。

「・・・和太郎の太刀筋に山鹿流を見たのは・・・そうか・・・だからなのか？ まさか！ そんな事があるはずもない！」

伶俐冷徹を通す桂が、人前で動揺を見せる事は多々あるものではない。そうさせるほど、和奈の言葉が心を揺さぶったのだ。

「死する運命さだめにある人の願いが、月の夜に響いたんです」

夢を見るようになってから、その音が鈴の音なのだと、和奈は知る事が出来たのだ。

武市には会話の意味するところが理解できなかった。

和奈が未来から来た事を、桂同様信じれたものではない。本人がそう言っても、世迷言にしか聞こえないのだ。もう限界だった。

「あの人とは？」

「僕の友であり、晋作が一番と慕った師、吉田松陰だよ」

「なっ!？」

松陰が明倫館で山鹿流兵学の講義を始めた嘉永二年、桂はその兵学を学ぶため松陰の下を訪れた。これが松陰との出会いである。

松陰を師と仰ぐ高杉と違うのは、桂は松下塾の塾生ではなく、明倫館で兵学を学ぶ先生と学生の関係であるという点だ。

この出会いを境に、松陰はよく桂の処へ出向くようになった。

江戸へ松陰が出向いた時は、斎藤道場に居る桂を訪ねては頼み事をしたり、話し相手になってもらったりしていた。

桂は人の世話をするのが好きな性質だったので、やって来る松陰を疎んじる事も、毛嫌いする事もせず、よく世話を焼いた。

世間の俗事や習慣に長けた桂にとって、そんな松陰は子供じみた男であり、やがて放っておけない男となって行ったのである。

そして、安政の大獄が起こり、松陰は斬首された。

その遺体を引き取りに行った桂だったが叶わず、松陰は小塚原回向院に埋葬された。なんとか忠烈の士として埋葬したいと言う高杉達門下生が動き回り、やっとの事で遺髪を大夫山に埋葬する事が叶

った。

その松陰の魂を持つ者が居る。

「生まれ変わり？　それを僕に信じろと？　はっ！　冗談も大概にしてくれ」

「そうですと、言う事ができません。でも、夢の中でその心に触れたと感じたんです。私が勝手に観た夢だと言われれば、確かだと言いつける理由はありませんけど」

「……」

「小五郎さんは、私がここに来た理由が必ずあると言いました。偶然などではなく、必然であると」

「それは……確かにそう言った」

「あの夢がただの夢なのか、それとも誰かの記憶なのか知りたいんです……どうしてこの手で、沢山の人を平気で殺める事になったかも」

その口は小刻みに震え、今にも泣き出しそうな和奈の目が、脇に置かれている剣に落とされる。

そつと、手が頭に伸びてくると、暖かい胸に抱え込まれた。

「帰る事は、考えなかったのか？」

「……皆と居たい、そう思って」

「そこは、皆ではなく、俺と、だと嬉しいところなんだがな」

震える体を抱く手に力が入る。

「どうする？　桂さん？」

「どうするもこうするも、和太郎に言える状況ではない」

未来から来たと言われた拳句に、松陰の生まれ変わりだと言われたのだ。桂の動揺は武市のそれよりも大きいのだろう。

【心を迷わせてはいけないよ。剣を振るう身になったとしても、決して心を惑わすな。己の信じた想いを捨ててはいけない】

朔月の声が聞こえた気がした。

「私が聞いた鈴の音は、その松陰さんて人の心ではないかと思うん

です」

「鈴の音・・・俺にも聞こえたが」

「えっ？」

「病室で・・・一瞬だったから空耳かと思った。あの音がおまえをここへ連れて来たと、そう言いたいのか？」

「武市くんは信じたのか？」

龍馬がしたと同じ問いかけだった。

「信じられるものではない。かと、言って、こいつが嘘を並べ立てているとは思えない。現に、何度かあの太刀を振るっているんだ。最後は・・・惨殺に近いものだったがな。何の理か知らぬが、俺の側にこいつは居る。それも理の一部ならば・・・俺の役目はそれを止める事だ」

武市も桂同様、この事象を自然と受け入れてしまっている事に気づいてはいない。

「でも・・・帰るべきなんですよね？」

帰る方法があればの話しなのだが。

「っ！」

「帰れるなら、それに越した事は無い」

言い放った桂の声は冷たく和奈の心に響いた。

「私の存在がおかしいのは解っています。自然の摂理から飛び出してしまっているんですから！ 桂さんが疑問に思うのも当然です。なのに、勝手に観た夢かも知れないのに・・・言うべきじゃなかったんです・・・早く、帰るべきだったんです！」

しゃくり上げながら泣いている和奈に、武市は掛ける言葉を見つけれなかった。

「帰れる方法があるなら・・・帰ろうと思います」

それが一番自然な事なのだろうと、和奈は今頃になって気付いた自分を馬鹿だと思った。赤井に怒鳴られたように、剣士になったつもりで、桂と本当の家族になれたつもりで居た自分が、酷く恥ずかしくなった。

「一番辛い思いでいるのは、こいつだと思いませんか？」

はっ、として桂は身を引き、肩を震わせている背中を見て顔を歪めた。

「未来から来たなどと、すんなり受け入れる度量など俺にはない。それを証明して見せる事もままならん。だが、確かにこいつは今ここに居る。それは事実ではないのか？」

「それは・・・そうだ」

「俺が今ここに在るのは、失うはずだった命を助けられた。ならば、己が進むべき道を行くと言う和太郎を守ってやる事はできる。桂さんも、守ってやりたいと思ったから、手を差し伸べたのではないのか？」

ああ、と小さく桂は言った。

【そう考えてるってのはなあ、あいつを本当に受け入れてないって事じゃないか】

また高杉に怒鳴られてしまうと桂は苦笑する。前にそう高杉に言われ、家族として側に置くと決めたのに、今の自分の動揺した無様な姿はどうだ。

動揺するなら、知らぬ世界に来てしまったばかりではなく、松陰の影に不安を感じている和奈自身だろう。

「和太郎」

きっと自分を信じて、和奈は話してくれたのだ。

「家族だと、言ってくれたのにね」

武市から奪うように、和奈の腕を引き寄せた桂は、まだ震えている和奈の髪を撫でた。

「本当に、すまない。おまえを受け入れると言ったのはこの僕自身なのに・・・それが運命とも感じた・・・一瞬でもおまえを拒もうとした自分が恥ずかしいよ」

腕の中で泣く体のなんと細い事か。

「武市くんも居る。僕も側に居るから・・・だから共に探そう。おまえが帰る道ではなく、ここに居るべき理由を」

作戦を一通り組めた高杉は、「待ちくたびれでいるので、そろそろ攻めて来たらどうですか」という、挑発的な内容を書き記した文を小倉へと送っていた。

あくまで攻めはせず、迎撃姿勢であると誇示したのである。

「新田藩、安志藩に長州へ上陸が命をば出しやれ！」

先日とは打って違って、意気揚々とした小笠原は、集まっていた各隊の指揮官にそう告げた。

「識衛隊と一番備は、大里に急行して、船にて対岸が壇の浦より上陸し、一気に赤間関を攻め落とす。小倉湾に駐留する艦隊へも、大筒にて援護を伝え願いたもうぞ！」

「これほどの強気を見せているのです、何かしらの策を講じているのは間違いありません。まずは敵情視察をする事を提言致しまする」

島村の意見に、二番備大将渋田見も同意を見せる。

「先手必勝じゃ！ 芸州にての戦も数にて先に押し込みておらば、負け戦になどならなかったのだ！」

「・・・承知致しました。新田藩、安志藩に伝令を走らせるよう言いつけて参ります」

こうして激怒した小笠原は、長州へ攻める日を六月十八日と決めたのだった。

高杉が桂に頼んで発行させた漁船の往来手形は、漁師に身をやつした奇兵隊員に手渡されていた。この手形を使って漁船で海に出ていた奇兵隊隊士達は、対岸に集まりつつある征長軍の動向を探るべく、海、陸双方で情報の収集活動を二ヶ月間行い、征長軍の行動は筒抜けとなっていた。

密偵から征長軍攻撃の日を聞いた高杉は、全員に出撃の命を出した。

「戦いというものは、一日早ければ一日の利がある」

「策は手はず通りに、だな。失敗した後の事は？」

「今は気にするな！　まずは飛びだす事だけだ。あれこれと思案するのはその後でもいい」

「動けば雷電の如く、発すれば風雨のごとし」

山縣の言葉に高杉はふん、と鼻を鳴らす。

「猪の次は雷に雨ときたか」

「根に持つなよ・・・」

そこに一人の男が駆け込んできた。

「中岡やか。どうしておんしこがな所におるんだ？」

「龍馬さん??」

芸州で征長軍艦へ攻撃を加えた中岡は、長府にとって返した後、高杉の指示を待つまでもなく弾薬を補充して戻って来たのである。

「って、聞きたいのはこっちですよ！　なんで龍馬さんがさも当然の様にいるんですか！？　手は？　養生はどうしたんです!？」

「ああもう！　中岡は本当に五月蠅い奴だな！」

「高杉さんには負けますよ！」

そして山縣が間に入る羽目になる。

「戦艦一隻持って来た所を、高杉が捕まえて参戦、という運びになった」

「あれをですか!？」

「おお。ちくたあ役に立つと思いうう」

「はあゝ。龍馬さん開戦術を勉強したのいつなんですか、ったく」
勝の所で一通りの訓練は受けているだろうが、付け焼刃で参戦できるものではないと中岡は思ったのだが、高杉からの要請だと言うので、その件は突っ込まないことにした。

「芸州からやけに遅かったな」

「薩摩からの横流しだから時間がかかって」

小さな声で高杉と龍馬にそう言う。

「征長軍の艦をぶんどったがか？　なんとゆう無茶をするがだ」

「それが、成り行きでそうなったんですよ」

へへっと頭の後ろを掻く中岡。

「それと、乾さんが薩摩に入りました」

耳打ちすると、龍馬の顔色が変わった。

「向こうは向こうで今後の事を考えちゅう、とゆう訳か。桂さんは知っちゅうかえ？」

「はい。京を発つ時に報せは出しています」

「そうか。いずれ動こうとは思っちゃったが。けんど乾さんが動いたとなると、後藤さんの事もこはよう手を打たないといかん」

「それは後ですよ。まずは征長軍をなんとかする方が先です。と言う事で、高杉さん、俺達はどこへ加わればいいですか？」

「海は坂本さんに任せたからな、陸へ回ってくれ。陸援隊の働き、見せてもらうぞ」

龍馬は複雑な気持ちで二人を見ていた。

中岡は武市と同じく武力倒幕派だ。武力を持って事を成すのに躊躇はない。事実、禁門の変でも久坂の処へ馳せ参じている。

話し合いで片付けようと薩摩は出兵を拒み、諸藩も不満の声を上げたにも関わらず開戦を唱えたのは幕府だ。

薩摩と長州の連合を成すのに尽力した龍馬が意味するものは兵を挙げての武力倒幕ではなく、朝廷からの勅許を得て、徳川幕府に政権を返上させる倒幕に重きを置いている。ここで長州に倒れられては、倒幕が遠のいてしまうと、その助力をしているだけなのだ。

武力で勝ち取った新時代に、未来などないと考える、龍馬の腹の内だった。

其之四 桜の理

慶応二年六月十七日早朝。

朝靄の煙る中、壇ノ浦の海岸から、二手に分かれて長州軍艦五艦が出航した。

征長軍の長州上陸を阻止するためには、田野浦に用意されている船艇をすべて破壊する必要がある。

高杉の指示通り、丙寅丸へいしんまる、癸亥丸きがいまる、丙辰丸へいしんまるは左手へ回り、門司田野浦へ砲撃を開始した。

それに合わせて赤間関の砲塔も一斉に火を吹く。続いて右手から庚申丸こうしんまると乙丑丸いっちゅうまるの砲門も開いた。

小笠原から伝令が届き、新田・安志藩が長州上陸の為に用意されていた船艇へと向かう中、島村率いる一番備隊と小笠原織衛の六番備隊が到着した。

停泊していた船艇に乗り込む寸前、高杉率いる艦隊と赤間関からの砲撃が、田野浦へ向けて開始されたのである。

正確な砲撃で、船艇が次々と撃沈されて行く。陸地に着弾する正確さにも驚くものがある。

島村は直ちに設置された砲台へ応戦するよう伝令を走らせた。

「だから言ったのだ、必ずや策を講じていると!」

島村の怒りは収まらない。

びくびくと震えていたかと思うと、手の平を返したように攻撃的になる。厄介なのは、どちらの小笠原でも、こちらの意見を聞く耳など持ち合わせていないと言う事だった。

「全砲門を使い!」

だが、長州からの砲撃は確実に命中しているのに対し、こちらの砲撃は一発として当たらないのである。

「くそっ、長州め!」

正確な砲撃は、正確な距離を知らなくては行えない。

島村は、この奇襲が突然のものではなく、下準備がなされた計画的なものであると理解した。

「一枚も二枚も向こうが上手か！」

小笠原なんぞに任せているからこう言う事になる。

長州艦隊は馬関からの砲撃が続く中、古城山と清滝の海岸から奇兵隊、報国隊、膺懲隊ようちやうたいを上陸させた。

砲撃の援護を受け、各隊はまず幕軍の砲台、火薬庫に攻め入った。丙寅丸三隻はその進路を田野浦海岸に向け再び砲撃を開始し、反対側に回った庚申丸と乙丑丸も清滝へ向け砲撃を続けている。

「くそっ！」

島村はこの場での不利を悟り、各軍に大里だいりへの撤退を命令した。

安志藩軍は砲撃の方向から大里へは向かえず加喰峠へ、島村隊・小笠原隊は鳴竹から大里へ、一番の被害を出した新田藩軍は後退する術を失い、上陸した奇兵隊らと斬り合いとなっていた。

渋田見新の三番備隊と銃兵隊も応戦しながら小森江へと退却を始めている。

山縣は、逃げずに向かってくる新田藩軍に奇兵隊を当てる。

「このお！」

死に物狂いで向かって来る相手とはやりにくいが、取る動作は読み易い。

突っ込んで来た敵兵を交わし、その背中に剣を振り下ろす。

「ぐふっ」

そしてそのまま背中から胸へと突き刺した。

辺りを見回しながら、解隊してしまった軍の脆さを其の目に焼き付ける。

「死にたい奴は来い！」

高杉ではなかったが、きっとあの男がここに立って居たら同じ事を叫んだに違いないと、山縣は笑いを浮かべ、向かって来る兵士へと薙ぎを払った。

圧勝とも言える田野浦占拠に、長州軍の士気はさらに高まった。二百隻もの敵軍艦を撃沈させ、赤間関と五隻の艦からの砲撃の援護もあり、長州軍は陣幕と旗印を奪ったのである。

田野浦に三隊を置き、赤間関からと奪取した砲台を鳴竹・清滝に配置させた。

白石邸へと引き返した高杉は、着くなり熱を出して倒れてしまっていた。

「桂様には使いを出しておきました」

龍馬と中岡に挟まれるよう、布団の主となっていた高杉は桂の名前に反応して目を開けた。

「わしが伝えてくれと頼んだき、白石さんを責めたらいかんぜよ」

「幕府が進軍を開始してこの方、ろくに休養も取られず案じておりましたので、頼まれずとも出しておりました」

俺の周りはお節介が多いと、いつになく弱い調子で高杉は文句を零した。

「走るのはいい。けど、腹が減っては走り続ける事もできはしやーせん。走ったら走った分ばあ飯を食べやー。そして、また走ればえいがやか」

「いい事を言ってるんですけど、なんで飯に例えるのかなあ」

「それが坂本さんだからだろ」

傍目から見ても高熱なのが伺える。赤らんだ顔には汗が浮き上がり、呼吸も荒い。白石が医者を呼び、頓服を処方してもらったが、まだ効き目は現われていなかった。

免疫力の落ちた体は、ただの風邪にでも酷く反応する。潮風に何時間も当たるのは本来避けねばならないのだが、山縣達は止めなかった。

「家茂公が幕軍を連れ、大坂を出て来るのも間近じゃろ」

「芸州と石州は押さえた。津和野藩は同盟後、幕軍の進軍が本格化した折には出兵する。岩国も同様だ。俺達は俺達の戦いをするのみ」

それでもまだ小倉にも兵力は残っているし、港には富士山丸が居るのである。五万の軍勢に大坂からさらに数万の兵が加われれば、岩国・津和野が参戦したところで戦局を長州連合に傾けるのは難しい。龍馬はそう考えた。

「わしは薩摩へいぬる」

「西郷さんは動かんぞ？」

そんな事は十分承知している。なにも、兵を出すだけが戦ではないと、龍馬は笑って見せた。

「わしにゃ、わしの戦い方があるき」

「膝つき合わせて仲良くお話ししましょうなんて、まさか考えていないよな？」

「おお。ほがな方法もあったやか」

熱でだるいの疲れさすなど、高杉は背を向けると布団の中へ潜ってしまった。

「病人相手になにやってんですか・・・」

軽やかな足音が響いて来るのが聞こえた。

高杉は布団をかぶったまま、龍馬と中岡は膝に手を置いて身を乗り出して、障子の方へと顔をやった。

勢い良く障子が開け放たれ、息せき切ったままの和奈が高杉の枕元へと滑り込んで来る。

「騒がしい奴だな！」

「高杉さん！」

「な・・・なんだ・・・」

「熱って！　どうなんですか！？　なんで無茶ばかりするんですか！」

和奈のその勢いに、五月蠅い奴だと言いながらまた布団の中へと頭を隠す高杉。

「そんなに大声で病人に食ってかかるな」

「あ・・・すいません・・・つい」

和奈が開け放った障子を静かに閉め、武市は龍馬の横へと腰を下

ろし、続いて現われた以蔵と新兵衛も一礼をしてその後ろへと座した。

「芸州から来たのか？」

「いや。一旦は山口へ・・・参戦の許可をもらって来た」

「そうか・・・」

ひやりとした手が高杉の額に当てられる。

「冷たいなあ」

「まだかなり熱が高いんですよ。ほんとうに無茶ばかりして、小五郎さんを困らせてばかりで・・・」

「分かったから泣くな！ 泣くなよ！？」

と言っても止まるものではない。ぽろぽろと、涙を流し出した和奈に困り果て、高杉は武市に救いの目を向けた。

「薬だと思って我慢することだ」

「くっ！」

「いいのう。わしも熱を出したいぜよ」

ゴン！

容赦ない武市の拳が龍馬の脳天を捉えた。

「なにをするがだおんしは！」

「ふざけるお前が悪い」

なにを、と片膝を龍馬が立てたものだから、中岡が仲裁に加わり、慌てて和奈も目元を拭いた。

「おまえら・・・人の頭の周りで騒ぐな！」

土佐者はどいつもこいつも五月蠅い奴ばかりだと、病人を放置で騒ぎ始めた龍馬達に愚痴る。

「僕、水を替えてきます。いいですか、龍馬さんも桂木さんも喧嘩しないでくださいね！」

原因を作った本人にそう念を押されてしまった二人は、こほん、と息を整え姿勢を正した。

「なぜおまえがここに居る？」

中岡が陸援隊を連れて来て居たのは聞いていたが、龍馬が赤間関

に居るとは桂からも聞いていなかったのだ。

「ちつくと足があったとき、立ち寄ったまでだ。しかし田中さんまで居ちゅうとは驚いたぜよ」

そんな理由で居る男ではないと武市は知っているが、あえてそれ以上は聞かなかった。

「おまえに話があったから丁度いい」

「？」

「顔を貸せ」

武市は龍馬だけ連れて部屋を出てると、庭へと下りて行く。

初夏の風が、二人の間に生ぬるい空気を運んで来た。

「おんしのほがな顔を見るのは、久しぶりやか」

禁門の変で戦死した久坂玄瑞が語った、師・吉田松陰の「草莽そふもうへ崛起つき」の思想に共感を覚えた。

【竟に諸候侍むに足らず、公卿侍むに足らず、草莽志士糾合義挙の他にはとても策これ無き事】

在野の民に立ち上がれと説いたこの論を礎に、大石弥太郎の起草による盟約書を以って、身分の低い郷士や下士、庄屋、上士二名からなる土佐勤王党を立ち上げた。

政敵と見なす相手が入れば、以蔵に暗殺を命じ、それは長州が政変によって京より追われる迄続けられたのだ。

だが、容堂の信任を得た吉田東洋が藩政に復帰した事で、土佐勤王党は混迷を始める。

東洋配下の新おこぜ組が政の主導を執ると、台頭していた勤王党は次第に政局から弾き出され、動きを封じられてしまうのである。

このまま土佐に居ては何もできないと、龍馬が脱藩してしまうと、それに続こうと土佐を発つ勤王黨員も多く出た。

黨員が龍馬の後を追って行く中でも、武市はひたすら容堂の尊王思想を信じ続け、東洋には一藩尊王を論じ続けたのだが受け入れられる事はなかった。もはや東洋を討たずべくして藩の未来はないと

考えた間崎達は、武市の許しを得て東洋の暗殺を実行したのだ。

しかし、東洋の後に付いた後藤象二郎によって、打開策に暗殺を選んだ勤王党の思惑は外れてしまう。

土佐藩の政権転換は不可能と考えた武市は、程なくして土佐から京へと身を移した。

潜伏する色々な志士達との交流で、荒々しかった武市から角が取れ、温和な顔をするようになったと喜んでいた龍馬の前に、土佐に居た頃の面立ちで立っている。

「何かあったが、武市」

武市は一連の出来事を龍馬に語り出した。

水をかえた桶を片手に、庭では武市と龍馬が話しているのが見えた。

（龍馬さんに・・・説明してるんだろうなあ）

そんな事を思いながら部屋へ入った和奈は、以蔵と新兵衛の姿がなくなっている事に気付いた。

「岡田さん達は？」

「白石さんが用意した部屋に引き上げた」

「相変わらずだなあ」

枕元に桶を置き、浸した布をきつく絞って高杉の額に乗せる。

「何かあったのか？」

両手を膝の上に置き、真剣な表情で自分を見下ろす和奈にそう問いかけた。

「熱が下がってからにします」

「遠慮はいらん、話してみろ。この先があるとは限らんのだからな」
「縁起でもない事言わないで下さい！」

それが冗談でない事を和奈は知っている。

「何から話せばいいのか、まとまってないんです」

「うん」

高杉は急かすでもなく、ただ静かに和奈が口を開くのを待った。

「桜が、咲いてました」

夢に見た風景の中で、桜が花を咲かせていた。その桜を眺めるようにして顔のない人影が縁台に座って居た。

⌈
•
•
•
•
•
⌋

芸州での出来事と、夢の内容を聞いた高杉の顔は強張っている。

「おまえは……先生に会ったのか？」

「すいません。夢の中の人が皆の言う吉田松陰と言う人なのかは分からないんです。僕に判るのは、小五郎さんや高杉さんにとって大切な人だった、それだけなんです」

「いつもの優しい小五郎さんじゃなかった」

焦燥と困惑、そして嫌悪。誰だって死した者が蘇るなど信じられないものではない。まして、自分に近い者となおさらだろう。

「願掛け、ですか？」

「十分と寝たのに体の疲れが抜けず、夜中に寝汗で目を覚ますようになった。胸もな、時々こう、息がしづらい痛みがでやがるんだ・
・労咳ではと、考えるようになったのもその頃だ」

「俺は小さい頃から病弱でな。なにかにつけ、よく熱を出した。剣術を習うと言った時、母上は反対したが、強い体を、病気なんぞに負けない体が欲しくて人一倍剣の稽古に励んだ。」

「天然痘にかかったが、一命は取り留めた。病に負けぬ体を手に入れたと、それが俺の自信になった」

初めて会った頃の高杉は、既に病魔に冒されて居たとは思えないほど活発な青年に見えた。

「だがもし、本当に労咳だったらどうする？　俺が壊した世の中を立て直すのは小五郎だ。あいつにしかできん。それは俺が一番良く知ってる！　俺が居なくなったら、あいつは一人で薩摩や幕府と渡り合う事になる・・・山縣達も居る、井上も大村さんも居る。だが！　だれが小五郎の支えとなる？　誰が本当のあいつを解ってやれる？」

心の悲鳴でもある言葉に、耐え切れず耳を塞ぎそうになるのを和奈は必死で堪える。聞かなくてはならない、高杉が初めて弱さを自分に曝け出しているのだから。

「それを考えると無性に自分に腹が立った。なぜ俺なんだと、なぜ死なねばならないのだと・・・今でも時々、狂うほどに喚きちらしたい衝動に駆られる」

これでもかと握られた手に食い込む爪の辺りが、赤く滲んでいる。「誰か小五郎を助けてくれと、俺は散る桜に願った」

りいーん。

鈴の音色が響いた。

「ひらひらと俺の膝元に舞い降りた花びらを見て、桜が答えた気がした。そう感じたんだ。そしておまえがやって来た」

高杉は目を覆っていた腕を退けると、そう笑顔を見せて言った。

「和太郎？」

傍らに座る和奈は和奈ではなかった。その姿に高杉が息を飲む。

「案ずる事は多様にして、解くは少ない。身を修めた吾は天命を待ち、己を竭して天に聴くは友の声。まこと、万物の理とは摩訶不思議なもの」

「せ・・・先生？」

その声は震えている。

目を閉じ、再び開いたその顔はいつもの和奈のものだった。

「小五郎が怒鳴るのも頷ける」

きっ、と睨む高杉の目を、和奈は逸らす事なく受けとめた。

「それで、おまえはこれからどうする？」

「理によつて私が振るう剣が狂気となる理由を、夢の中の人がなぜ私の心の内にあるのか、知りたいと思います」

桜の咲くあの京で、友の安否を思つて高杉は願いをかけた。

桜の咲くあの萩で、狂気の言葉に和奈は意識を失った。

結びつきのない二つの事象が、一つに繋がろうとしている。

「狂気・・・か。狂つてでもなければ、こんな馬鹿げた事など信じれたものじゃない」

「私は、小五郎さんや高杉さんの、武市さんの側に居ていいんですよ？」

「阿呆が。逃げ出したらその首根っこ押さえて、逃げれんよう殴つてやる」

「・・・地獄まで、追いかけて来てくれるんですよね？」

高杉はその言葉に、小さく笑い声を上げた。

「わしを斬るとゆうのか？」

「おまえを斬つて、夢だと笑えるならばそうもする！」

自分が口にした出来事を、龍馬ですら信じられぬ気持ちなのは解っている。目をぎらつかせたその双眸がそう語っている。

「黙っていた。それが、悔しくてならん」

「語る必要などないと思つちよつたが、あの時は。まさか和太郎がほがなおかしな事になると知つちよつたら、犬でも猫でも蛙でもなんちゃー在るつたけの頭を揃えて考えたき」

「蛙はいらん！」

本当に龍馬は蛙でもなんでも連れて来るだろう。

「和太郎もちゃんと知っちゅうんだな」

「ああ・・・芸州での件も伝えた。それをあいつなりに受けて止め、道を探すと言った」

「桂さんも、それでええとゆうちゅうがか？」

「だからここに来ている」

「ほうか」

後ろを振り返ると、高杉の横で話しこんでいる姿が見える。

「わしは・・・何をしてやれるがやろか」

「知るか！」

そっぽを向いたその背中に、龍馬は額を寄せた。

「おんしに謝らんといかん事をしたがやき、よお話してくれたなあ、
武市」

「腐ってもおまえは生涯変わらぬ友だからな」

「すまん、武市」

甘くなつたものと、武市は口元に笑みを浮かべた。

其之一 再会

初夏と言えど、野山の夜は地から這い上がる冷氣が体か力を奪って行く。

関所を通れない土方達は、傷の癒えてない体に鞭打ち、芸州を抜け周防へと入っていた。

「朝になるまで我慢しろよ」

征長軍が芸州・石州で敗退したとは言え、長州兵はまだ陣を解かず関所や宿所に兵を置いている。そればかりか、関所超えを警戒して山岳地帯にも足輕を放っているのだ。おかげで火を炊く事ができず、陽が登ってから交代で睡眠を取りながら進まなければならなかった。

土方は一番後ろからついてくる沖田の体が気掛かりだった。

健康な体でも辛い夜間の移動なのだ、寒気は労咳を抱えた体にはさらに辛いものとなっているはずだ。できるなら、少しでも暖を取り休息したいのが本音である。

「どこか宿所に入らんと、もちませんよ」

そんな沖田を氣遣って、大石も小さな声で前に行く土方に言う。

もう直ぐ二十二番目の宿所、船木だ。赤間関へはあと二つ超えれば着く。

「仕方ねえな」

船木は長門国東端の本宿であり、勘場も置かれ宿役人も居る採炭業で栄えている宿場町だ。

町並みは袖壁の妻入りと、平入りが入り混じっているが、大半を妻入り造りが占めている。その多くは二階建て、その壁には虫籠窓ではなく角型の窓が複数並んでいる。

こんな時に客が来るとは思って居なかった旅籠屋の主は、怪訝そうな顔付きで土方達を部屋に通した。

「石炭ですか」

「若松へ行く途中なんだが、戦はどうなんだ？」

「筑前へ行きなさるのは無理ですなあ。なんせ肝心の赤間関と門司が使えやしません」

長州が大挙して赤間関につめ駆けている上に、小倉藩が九州諸藩を門司に兵を置いていると、主が言う。

「ありがとよ」

背中が曲がった主は、もう土方らに関心がなくなってしまったように、へえと気の抜けた返事を返すと、さっさと部屋から出て行ってしまった。

「となると、案外すんなりと下関へ入れるかも知れんな」

長州一藩と諸藩を引きこんだ幕軍の人数差は、今さら言うまでもない。が、少数だからと油断して芸州では敗退を記し、吉川率いる岩国藩と長州隊が街道を抑えている。長州とて四方面からの進軍に対し細心の計画を練り、兵隊を置いているはずであるが、今更大坂や京から密偵を送り込む必要性もないため、周防へ入ってしまったえば警戒の手も幾分は薄いだろうと踏んだ。

「油断できませんよ。長州の幕頭はあの桂小五郎なんですから」

その名前に土方だけでなく、赤井もぴくりと肩を反応させた。

「裂く人数がありやあな」

実際、一人二人の密偵にかまけている余裕など長州にも桂にもなかった。

「今日はゆっくり寝ろ」

連日の強行は体かなりの負担を与えていたのだろう。その夜は騒ぐ事もなく、四人は少しばかりの酒を飲み、早々に布団の主となった。

翌日。陽が頂点から傾き出した頃、吉田宿場か小月宿場まで出向いてみると、主に礼を述べた四人は船木を出た。

暫くは街道を歩いたが、夜になって山沿いへと身を隠した。

「近藤さん、上手く会津を説得してくれてますかね」

大丈夫だ、と土方は何一つ心配は要らないと笑う。

長府へ入るまえ、土方は来ていた着物に土をかけ汚した。あまり身綺麗にして敵陣へ入るわけには行かない。

赤間関へ着くと宿場町の様子ががらりと変わった。人の多さが幸いし、四人は紛れるように町中へと潜り込めた。

土方達が着いたのは、高杉が熱を出して白石邸へと戻って来た翌日の事で、和奈達が奇兵隊に参加すべく白石邸を出た時なのである。

「奴さん達ですよ」

沖田の静かな声が後ろから漂って来る。

「運がいいらしいな」

四人はその後を付けるように歩き出した。

龍馬は白石と話しを終え、高杉の部屋へと戻って来た。

「用は済んだのか？」

「ああ。しかっと」

「それで、坂本さんはどうする？」

高かった熱も幾分ましになり、布団の上で身を起こして意味ありげな笑みを浮かべる龍馬にそう聞く。

「長崎へ戻るがで。みょうに土佐も重い腰を上げて来たき」

その裏で、大久保と西郷が動いているのは高杉も桂も知っている。大手を振って長州と仲良くなりましたとは言えない薩摩は、武器等の斡旋を始めとして資金面の融通もつけている。これは会津や幕府とて薄々は察している事なのではあるが、幕府にしてみればここで薩摩を完全に敵へと回すわけには行かない。

問題は会津藩だ。

逼迫した財政面を^{ひっばく}おしてこれまで幕府に肩入れして来た。禁門の変でも薩摩と手を組む形で長州を京より払いのけたのだが、今になってその薩摩はだんまりを決め込み、影で長州に力添えをしているのが伺えるのだ。藩主松平容保にとって、腹立たしい、では済まな

い裏切りである。

勤王を抱えた薩摩が、一時でも幕府側に付いたのは、なにも幕府のためなどではない。幕府を倒し、政権を朝廷に返すのが本音なのだ。

そこへ来て土佐藩が動き出した。

陸援隊を中岡に作らせた乾が薩摩入りした。ずっと幕府寄りを貫いてきた土佐藩を倒幕へと方向転換させる目的である。

頑なに乾と衝突して来た後藤象二郎も、政権を制御しきれなくなつた幕府に、見切りをつける頃合だと考えるようになって来ていた。

長州と手を組み、倒幕へと傾き始めた薩摩藩の動きも耳に入ってくる。となると、公武合体を貫いて幕府に肩入れするよりも、同じく肩を並べて倒幕へと組み入らなければ、政権への参加を失うことになってしまう。そう考えたのだ。

後藤は事あるごとに、藩主山内容堂を説き伏せにかかっていた。

土佐勤王党を弾圧した頃と今では、すでに情勢がごろりと変化している。それも、何十年の話ではなく、ここ数年のうちに、である。

「また近いうちに来るき、高杉くんも体によ十分気をつけとおせ」

「俺を誰だと思ってる？ 天下の高杉晋作様だぞ？」

「そればあ元氣なら心配いらんやき」

劳咳の事を龍馬とて知らないわけではない。無論、高杉の命が短いとも知っている。だからと、布団の中でじっと収まっているとは口が裂けても言う事はできない。高杉晋作という男は自分のためと、布団で寝ていられる男ではないのだ。

「和太郎も無茶はしな。おんしの抱える問題はわしらにやどうしちやることも出来んが、武市も、桂さんも高杉くんもおるのやき、血気に逸ってはいかんちや」

「はい。よく判っています、龍馬さん」

「うん、いい子だ。そしたらわしはこれでお暇させてもらうき」

いつもの調子で、ひよこひよここと龍馬は部屋を出て行った。

桂からの伝令も逐一やって来る中、半刻（一時間）も経たないうちに、山縣や原田らが作戦を練りに訪れ、熱も下がりきらないまま、布団の中にうもれたままの作戦会議となった。

敵軍艦隊が集結しきつていないのであれば、大里を攻める前に、要であろう富士山丸にも先手を掛けるべきだと、高杉は考えた。

「沈められない艦ふねに、なんで攻撃をしかける必要がある」

「戦は、武器だけでするもんじゃない。武器や兵士をどれだけ集めようと、そいつらの心構えが崩れたら軍隊なんて機能なんぞせん」鋼鉄船相手に、丙寅丸へいいんまるの砲塔でも太刀打ちできないのは良く解っている。高杉は心理作戦を講じて、相手に動揺を与えようと言うのである。

「奴らの位置なんぞ、こっちはすでにお見通しだと、奴らに教えてやるのも一興だろうが」

高杉がこれまでに、多様な策をあれやこれや練っていたのは山縣も承知している。

測量を始めると言い出した時も、兵士を漁師として漁船で出すと言った時も、その奇抜な発想に驚いたものだ。だから、和船を改造しろと指示を出しても、戦に使う道具なのだろうという認識で、山縣はその命令を実行していたのである。

「見事と言うか、よくもまあこれだけの事を短期間でできたものだ」高杉という男の戦に対する発想の多様性に、武市も驚くばかりである。

吉田松陰や久坂玄瑞、真木和泉、大村益次郎など、長州には逸材が多く生まれている。その者ら

と京に潜み倒幕のためと駆け回るばかりでなく、世情というものをちゃんと把握し策を練る。すぐ近くに桂小五郎という策士がいるせいもあるのだろうが、多くの事を吸収し、それを活用する術を、高杉は培ってきている。

脱藩して逃げ回る事もしばしばだった。同じ長州藩士からも暗殺

の標的にされたこともある。潜伏先で捕まり長州に送還された後、野山獄へ入れられたために同士の決起に参加できず苦渋を舐めもした。

ただ我武者羅に進んできただけではなく、辛さや悔しさを涙と共に飲み込んできた。そんな高杉を推進おしすすめる原動力は、時代を変えるという一点なのだ。

「じゃあ俺は隊に戻り、和船を予定どりの刻に出航させた後、田野浦へ渡る」

「頼む。俺も後から行く」

「・・・ああ」

「桂木さんも山縣と行くのか？」

「そうするつもりだ」

山縣達と共に白石邸を出た武市は、背後に漂う殺気に気付いた。新兵衛と以蔵の足も一瞬とまったのが判った。二人も気付いたようである。

今ここで斬り合いとなるわけにはいかない。

「山縣くん、すまんが先に行ってくれ」

振り向いた山縣が首をひねった。

「・・・上陸時に我々が来ていなければ、そのまま行ってくれ」

そう言いながら下げた首を少し後ろへやった武市を見て、山縣は事を飲み込んだ。

「もてるのも考えものだな」

「そうだな」

何度も感じた殺気だ。それが誰のものなのか、和奈以外はすでに判っていた。

「諦めるという言葉を知らない連中だ」

山縣と原田を見送った武市は、通りから道を逸れると邪魔の入らないよう場所を探しながら進んで行った。

「桂木さん、これ・・・」

最初はどこへ行くのかと思った和奈も、前に行く三人の様子と、後ろからついて来る気配に神経を尖らせていた。

「しっ。向こうもここで斬り合いになぞなりたくはないだろう」

敵の懐の中だ。新撰組と知れば、そこかしこに居る兵士が集まってくるのは必至である。

武市もそれだけは避けたかった。長州兵は小倉藩へ戦を仕掛ける二手目に入っている。余計な事でその足並みを乱したくないのだ。町から少し出て、人気のない木立の脇にさしかかった所で、武市は足を止めると躊躇なく振り返った。

「そろそろ出てきてもいいだろう？」

そう、闇の中へと言葉を発する。

そろりと、四つの影が動いた。

「ご丁寧に人気のない場所へ案内してくれるったあな。やっと斬られる気になったか？」

虚勢ではない。

土方は腰に差した和泉守兼定をすらりと抜いた。

「わざわざ敵陣にまで来るとは、よほどの馬鹿か？」

「うるせえ。あんだけ隊士斬られたんだ、一つでも首くら取らせろ」
「断る」

武市が腰に差した剣を抜き放つと、合わせるように和奈も綾鷹の柄に手をやり、以蔵と新兵衛も間合いを取り離れて行く。

赤井がぎらぎらとした目を和奈に向けた。

どういう理由でこんな事になってしまったのか二人にも解らない。同じ道場に通い、和奈が幕末へ来る羽目になった時、赤井はただ巻き込まれただけだ。

（でも、それだけの理由なのかな）

物事に偶然はなく、あるのは必然だけ。

桂の言葉が頭から離れない。

もしそれが誠の摂理ならば、赤井が幕末へと来た事にも必ず理由があるはずだ。

それぞれが地面を蹴った。

組するのは芸州で剣を交えた相手である。

土方は和奈に詰め寄りながら右薙ぎを払う。

抜刀しつつその剣を受け流し、和奈は間合いを詰める。土方に間合いをとらせる余裕を与えてはならない。

「ちっ！」

剣気は変わらない。芸州で見たあの狂気は影を潜めているが、いつ顔を出すか知れたものではない。その前に一太刀でも浴びせておかねば、斬られるのは己の方だろう。

「てめえ、何者だ？」

鰐つばを揺り合わせながら顔を近づけた土方は呟いた。

「前にも・・・言いました。長州藩士、村木和太郎だと」

「ふざけんじゃねえ、よ！」

一気に剣を押し出し、後方へ飛び退くと同時に再び前へと地面を蹴る。

ギン！

力の競り合いでは土方に分がある。所詮は男と女。腕の力に差が生まれるのは当然だった。

（くっ！）

剣の押し合いでは、いずれ腕の力を殺がれるのは自分の方だ。

「てめえ、長州と言いなながらその太刀筋、心刀形流じゃねえか！」

赤井の太刀を見てきただけあって、悟るのが早い。

そして土方も、なぜ赤井と和奈が同じ流派を使うのか、この時初めて疑問を抱いた。

同じ匂いがしたと、感じて赤井に声を掛けた。そして同じ薩摩藩邸に出入りをしていた。

（なんだ、この偶然はよ！）

ただ違うのは、狂乱した時の和奈の剣術は、心形刀流のそれでは

ない、と言う事だけだ。

振り下ろされる剣は重い。体格自体、土方と和奈では倍近く違うのだ。武市がいくら体力をつけさせようと頑張ったところで、その差を埋めることは不可能である。

納刀した和奈は一気に躍り出た。

「たあ！」

抜刀は左薙ぎに繰り出す。しかも低位置から払った剣は土方の膝へと狙いを定めている。

「くっ！」

縦に下ろした兼定で膝への一撃を防いだ土方だったが、すぐさま右薙ぎに転じて振られた剣に、袴が裂ける。

以蔵をも制しかけた太刀筋だ。

後ろへ飛び退く間もなく、皮膚が裂けた。

「てめえの得意は抜刀術か」

ならば剣を納刀させなければいい。

間合いを取ろうとしていた土方が、今度は反対に詰め寄って来たため、和奈はとっさの対応を取れなかった。

「ぐあっ！」

銃弾を受けた左肩に、土方が手の平を打ち込んだ。

「これで隻腕になったわけだ。さあ、どうするよ、村木？」

片腕で土方とやりあえるはずもない。

武市がその二人を見て、駆けつけようとするのを沖田の剣が邪魔をする。

「行かせてあげるわけには、いかないんですよ！」

間合いを取らせてしまった事を後悔するまもなく、突き出された剣先が武市の喉を捉える。

「くっ」

反射的に後ろへ身を引いたが、完全には避けきれなかった。

「先生！」

大石も並みの剣士ではない、そう易々と以蔵を逃しはしない。
新兵衛が走った。

「てめえ！」

赤井の脚力では、新兵衛の足には追いつけない。

「くそお！」

後を追いかけてようとした赤井は、背中に鈍い痛みを感じた。

「えっ？」

背後から切られたと気付くのに時間はかからなかった。

「！」

まだ、誰か居たのか？

いや、四人だけだった。

「双方、剣を納めよ！」

怒声が飛んだ。

上段から剣を振り下ろそうとした土方の手が止まり、武市と沖田の間に割って入った新兵衛も剣を止める。

「なんで・・・」

この威圧、この剣気。

土方は暗闇から、剣を納めながら現われた武士に舌打ちした。

桂小五郎。長州藩の策士であり、近藤から手を出すと言われて
いる剣客。

「よもや自分の懐に新撰組が入ってくるなど、あろうはずもないと
考えもしなかった」

もう不要だと言わんばかりに、剣から手を放した桂がゆっくりと
歩み寄って来る。

「このまま引き下がるならば、ここは見逃そう」
にっこりと桂は笑った。

「やっぱあん時の女はてめえか、桂小五郎」

「さて、何のことやら」

「しらじらしい事言ってんじゃねえよ」

くすつと笑う桂に、土方は剣を上げることが出来ない。

「申し訳ないが人を呼ばせてもらった。捕縛されて会津藩へ差し出される方がいいか、それとも、私と一太刀交える方がいいか選ぶといい」

帯刀している鶴丸に手を添える。そして、その視線を地面に蹲った赤井へと下ろす。

「！」

斬られる。と、土方は思った。

赤井は一度、楠に命を狙われているのである。その楠は、桂が放った間者だと言う事は推測ではなく、事実として土方の中にあった。「待ちやがれ！」

剣気に飲まれている訳ではない。ただ、太刀を出す隙が桂の体のどこにもないのだ。

「大人しく退散するならば手出しはしない」

人の声が聞こえてきた。桂が呼んだと言う長州兵だろう。

「くっ！」

ここで捕まり、会津藩になど突き出され、紀州藩の命に背いて長州へ入ったと知れば、近藤の立場はおろか新撰組の立場も危ういものとなる。まして副長自ら命に背いているのだ。切腹は間違いなく沖田や大石にも下されるだろう。

「この男は置いて行くといい。この傷では足手まといになるだけだ」
土方は桂の足元で喘いでいる赤井に視線を投げた。

「はい、そうですかと引き下されるか！」

「土方さん！」

沖田の手が、走り出した土方を掴もうと伸ばされたが、間に合うことはなかった。

赤井の腕を取り、背中の傷を確かめる。深手であるのは確かだが、致命傷にはなっていない。

「てめえ、なんで赤井を狙う？」

「ふう。そんな覚えなどないんだけどね。どうしても連れて行くのかい？」

「あたりめえだ！ こいつは新撰組だ、死体になっても連れて帰る！」

やれやれ、と桂は二人から距離を取った。

「君」

桂は赤井に言葉を投げかける。

「いい男に巡り会ったようだね。大切にするといい」

「その・・・つもりです・・・」

大石が後ろから赤井の体を担ぐように持ち上げると、肩の上に乗せた。

「痛いだろうが我慢しろよ」

人の気配に気をやりながら、土方は辺りを見回すと木立の中へと顔を振った。

「いつか必ずてめえの首を取らせてもらおう」

「その時は邪魔など入れず、お相手させて頂こう」

舌打ちとと共に身を翻した土方は、先に走り出した沖田達の後を追って走り出した。

武市の喉元の傷から血が流れているが、深手ではなさそうに見えた。

応急にとその喉の止血をした桂は、白石邸へ武市を運ぶようにと以蔵へ言い、肩口を押さえて座って居る和奈の元へと腰を下ろした。「言ったはずだよ、片腕で剣を握るものではないと」

よっこらせと、和奈の体を抱え上げる。

「あ、の！ 歩けます！」

か細い体つきだと言うのに、桂はこともなげに和奈を抱えて歩き出す。

「無茶をしたお仕置きだ。大人しく抱えられていなさい」

白石邸へと取って返して来た一同を見て驚いたのは高杉だった。おまけに桂まで居る。

「医者を呼んでもらった、しばらく辛抱してくれ」

武市は喉を押さえながら頷いた。

「おいおい、その傷の位置・・・沖田か？」

「船木から斥候が報せに来たんだよ。こんな時だと言うのに、石炭を買いに来た不審な四人組が居たとね」

その報せを受け、桂は馬を走らせてやって来た。

山縣と原田達を見送った所に着いた桂は、無論背後にいる土方らに気付いた。

武市達も知っているのか、人気のない場所へと進んで行くので、その足で手錬な剣士を陣所から選り、半刻後に来るよう命を出して後を追いかけていたのである。

「で、新撰組は？」

桂は逃がしたと笑って答えた。

「阿呆が」

桂が無用な殺生をしない事は十分高杉も承知している。が、相手が相手なのだ。今後の事を考えるなら、その場で捕縛でも切り刻むでもしておけと言いたかった。

「なにもおまえが来る必要ないじゃないか」

「なんだい、友の顔を見れて、喜んでくれるものとばかり思っていたのに」

「ふん！ おまえの顔なんて、飽きるほど見てるじゃないか！」

高杉が熱を出した報せも届いていたので、心配になり桂自身がやって来たのだ。

「酷い男だ」

「こっちに出向いてる暇なんてないだろう？」

「病人に心配されるほどではないよ。さあ、おまえはもう少し体を休めろ。どうせ止めても、戦に出るんだろう？」

「あたりまえだ」

「なら、今は言う事を聞いてくれ」

白石が呼んだ医者は、武市の喉の傷を見て顔を歪めはしたものの、

大事はないと太鼓判を押してくれた。幸いにも、喉骨に剣先が当たった事で肉を突き刺されただけで済んだようである。

和奈も、再び出血した左肩を別室で手当てしたもらったが、戦への参戦は桂によって禁止されてしまった。

「俺達は山縣さんを追いかけます」

そう言って、以蔵も新兵衛も白石邸を飛び出して行った。

翌日、白石邸に一人の女性が訪ねて来た。

「来るなど言っただろうが」

白石に伴われて入って来た女性は、にっこりと笑うと高杉の傍へと座った。

「身の回りの世話をしようと思い、参りました」

ちらりと、部屋の端にすわる和奈に視線を向ける。

「ちっ・・・」

なんだかやけに高杉が大人しい、と小首を傾げながら、和奈は視線を向けてきた女性と目を合わす。

「お初に御目にかかります。私、おのうと申します」

「あ、村木和太郎です」

両手について頭を下げられたものだから、和奈も慌てて頭を下げた。

「旦那様がちっとも大人しくしていないと、白石様が困っておられましたよ？」

高杉に視線を戻したおのうは、少し叱る口調でそう言った。

「旦那様ああ？」

おのうの言葉に、驚いたせいで変な声が口から出てしまった。

「高杉さんの、奥さん？」

ちよっと困った顔をおのうが見せる。

高杉にはちゃんとした正妻が居たが、奇兵隊創設時に訪れた下関遊郭堺屋で、高杉は此の糸の名で芸妓をしていたおのうと出会った。

芸妓にしては大人しく真面目で、人の意見をはいいいと聞くおのうに高杉が惚れ、さっさと身請けをしてしまったのだ。

和奈は複雑な心境になる。

現代では所謂【愛人】^{いわゆる}と言う事なのだ。この時代の愛人と現代の愛人とはまた種が異なるのだが、それでもちゃんとした正妻が居ることには変わりない。

奥で寝ていた武市も、そろりと顔を出したものだから、余計に高杉はそわそわとしてしまう。

「借りてきた猫を見ているようで、面白いものだな」

「五月蠅い！」

何を言われても嬉しいのだろう、怒鳴る口元には隠しきれない笑みが浮かんでいるし、帰れの一言も出てこない。

そう言えば、萩にある桂の自宅で会った松子を、和奈は思い出した。

「小五郎め、京から呼び寄せたな」

松子も、幾松と言う名で芸妓をしていたんだと高杉は言う。

京に居た時、幾松に一目惚れした桂は、身請けが決まっていた幾松を搔っ攫うようにして、相手から身請けを横取りしたらしい。

「あいつの事だ。色々裏からやったに決まってる」

この時代のそういう事情や結婚制度など全くわからない和奈は、ただただ驚くばかりである。

「温厚で物静かな男に見えるが、一度こうと決めたら梃子^{てこ}でも動かない、意志を貫き通す、それが小五郎だ。おれより性質^{たち}が悪い！」

どっちもどっちだと武市は笑った。

それから毎日、片時も離れずおのうは高杉の身の回りの世話や看病と、武市の傷の手当てなどをしてくれるようになった。

其之二 英吉利

人は人 吾は吾なり 山の奥に棲みてこそ知れ 世の浮沈

高杉晋作

和奈達が新撰組と対峙した五日後の六月二十四日の事、体調も幾分ましになった高杉の所へ、龍馬や中岡らと共に薩長同盟を西郷に説いた一人、薩摩藩の村田新八と伊藤が姿を見せた。

合わせる様に再び桂も山口から駆けつけている。

高杉はそれまで浮かべていた笑みを消し、村田から視線を外さずに言った。

「なんで薩人が今時分ここに来る？」

薩摩が今回の征伐に参加していないとは言え、表立ってはまだ幕府寄りなのだ。しかも長州はその幕府と戦の最中なのである。

高杉の懸念は武市の懸念でもあった。

「じつはお会いして頂きたい人が居り、桂さんに無理を申し参った次第です。ここへは白石さんと伊藤さんの助力を得て渡ってきました」

なにと、高杉の目が桂に向けられる。

「この事は大久保卿もご存知です」

無言で責めるような目を向けられても、桂はしれっとしている。

「誰に会えと？」

村田がこくりとうなづくと、伊藤が障子へ顔を向け声を発した。

「Please walk into a room.」
「お入り下さい」

「なんだあ!？」

伊藤の声を受け障子を開いたのは、イギリス公使ハリー・パークスだった。

パークスはかねてより幕府に対して兵庫開港を迫っている人物であり、薩摩の介添えを得てミニエー銃などを仕入れるためグラバーより紹介されたイギリス人だ。

現在両国は、フランス駐日公使レオン・ロッシユが幕府を支持しているのに対し、パークスはあくまで中立の立場を取るという、微妙な均衡を保っている。

薩英戦争、四国艦隊の赤間関攻撃の後、観を決め込んだ幕府の対応に、イギリス政府は見切りをつけ外交政策を変えた。そして薩摩藩や長州藩だけでなく、土佐藩にも接触を図り情報収集を行うようになっていた。

そうしたイギリスの政策転換の起因となったのは、薩英戦争であり、その要因となったのが、薩摩藩主島津久光の行列をイギリス人が騎乗したまま横断した事だ。

大名行列を横断するのは禁忌である。夷人だろうが日本人であろうがその行為を無礼とした薩摩藩士が横断したイギリス人を斬ってしまった。

これに怒ったイギリス政府は、殺害犯を差し出す事と、遺族への賠償金支払いを幕府に突きつけてきたのである。

幕府は、賠償金など支払う金がないと言う薩摩藩の肩代わりをし、この賠償金を支払ったが、もう一つの要求である殺害犯差出しについては、久光が「脱藩した浪士がどこで誰を斬ろうと関係がない事である」と突っぱねてしまった。

困窮を強いられた幕府は、殺害犯の引渡しを拒否すれば薩摩を攻撃するというイギリスに対して、「どうぞ、薩摩を攻撃して下さい」と出たのである。

薩摩がイギリスから攻撃を受け痛手となれば、大人しくなるだろう踏んだのだ。

ところがこの判断が後々幕府にとって大きな痛手となってしまった。薩摩が幕府を仲介しての折衝を嫌がっているだけで、イギリスと

友好条約を結ぶつもりがあるとの情報をイギリスは掴んでおり、戦争後に会談を持って薩摩と秘密裏に盟約を結んだのである。

両国が手を結んだお陰で、薩長同盟の前に長州へと銃が渡る事にもなった。

「Nice to meet you by Mr. Takasugi. I visited your name from Mr. Ohkubo of Satsuma Domain.」〔初めまして、高杉さん。貴方の事は大久保さんより伺ってありました〕
伊藤が通訳を務める。

「銃の斡旋に尽力頂いた事に対し、まずは礼を言わせてもらおう」

高杉は、決してへつらうなどという態度には出ない。

〔礼には及びません。グラバーから紹介を受け、我が国にとって利益となる事をしたままです〕

「英吉利公使が直々にお出ましとは、どんな理由があるのか聞かせてもらいたいな」

パークスは、この度の来訪の目的は長州との交友を深めるためであり、商業において条約を結ぶためだ。そう言ったのである。

〔この度の戦争に、我々は遺憾を感じております。下関は我が国の交易にとって重要な位置にある。戦を経て、下関の海峡が日本政府の手に委ねられる事になるのを見過ごせないのです。よって、我々は長門国に対し出来る限りの協力をさせようつもりであります〕
村田からの要請を受けた桂が、パークスの入国許可を出したのはそういう理由からなのだと高杉は理解した。

今後の事を考えれば、武器調達などイギリスと仲良く手を繋いでいた方が何かと有利であると、桂は判断したのだろう。それに、この話が纏まれば薩摩を介さずとも、長州が直接交渉に当たれるようになるのである。

「武器でも提供してくれるって言うのか？」

〔すでに用意はさせております。必要とあらば兵をお貸しする事も

可能です」

武器取引には応諾したが、出兵については即座に拒否した。

上海へ渡った折、清国がイギリスとの戦でどうなったかその目で見て来た高杉は、清国の二の舞を自国に味合わせたくなかったのだ。イギリスが行ったアヘンの密輸を林則徐は強固なまでに取り締まった。そして林が貿易を禁止したため、激怒したイギリスは戦の火蓋を切って落とした。阿片戦争である。

二年に渡る長い戦の後、清英両国は江寧（南京）条約に調印、阿片戦争は終結した。

しかしこの条約によって清国は多額の賠償金を要求され、香港の割譲と広東、上海など七つの港の開港を余儀なくされた。

その翌年に締結された虎門寨追加条約では、治外法権と関税自主権の放棄という不平等条約を締結された上、最恵国待遇条項の承認を強いられたのである。

阿片戦争が終ってもイギリスは清国に居残り続けた。

そんな清国へ渡った高杉は、町中の至るところに青い目の夷人が徘徊し、清国の人間がそれ怯えながら暮らしている様を日本に置き換えたのだ。

イギリスは先の四国連合艦隊との講和においても、彦島租借を申し出て来ている。そう簡単に、イギリス人に日本の地を踏ます事はできないのだ。

この申し出を高杉と伊藤が強固に退けていなければ、香港と同じく彦浜も植民地として今日まで支配下に置かれていたかもしれない。「俺達は自分の力で喧嘩をやってるんだ。武器の斡旋は有り難いが、兵はいらん」

「クーパ提督が言っていたとおりの人だ」

パークスは笑みを浮かべながら、少しも態度を崩さない高杉にそう言った。

講和交渉の場に出席し四国連合の代表クーパから、戦争に負けた国の人間とは思えないほど、高杉の態度は鬼気としていたと聞いて

いたのである。

〔我が国は日本政府に見切りをつけています。なぜなら、これからこの国の柱となるのは薩摩や、貴方方の長州のような力強い国であると考えたからです。我が国が長門国と手を結びたい理由は、そういった見解を持つての事なのです〕

「ただそれを伝えるために、戦の最中に来たのか」

〔先ほども言ったように、長州を潰してしまうのは我が国にとっても不益となります。それを私は避けたい。無論、これは女王陛下より賜った勅命でもあるのです〕

幕府の裏にはフランスが居る。このまま幕府が長州を潰しフランスとの交易を大々的に許可すれば、イギリスにとって交易上宜しくないどころか、参入さえ危ぶまれる事態となるのだ。

パークスが日本での交易を広げるため、薩摩や長州と手を結ぼうと考えている事は高杉も桂も承知していた。それを堂々とークスは言つてのけたのである。

〔私はこれから下関から小倉へ渡ります〕

これには桂も首を捻った。

パークスは、すでにフランスがこの戦の影で動き出していると伝えた。

ちりちりと肌に痛みが走るのを和奈はじっと堪えていた。

（なんなんだろう）

目の前に正座で座るパークスを見てからずっと、全身の毛が逆立っている。

その気配を武市も悟っており、和奈の横に在ってなお神経を尖らせていた。

吉田松陰の魂を持っているとしたら、夷人を前にして殺気に似た気を放つのは仕方ないと思えるのだが、武市としては気分のいいものではない。

桂と高杉も、和奈の様子にはすでに気付いていた。

「最後に念を押す。武器の調達はありがたいが、英吉利の兵を借り

て戦争するつもりはない。この戦は自分のこの手で片を付けさせてもらう。それで良ければこの話に乗る準備をさせる」

「ええ、私としてもグラバーよりその旨は聞いております。兵の件は必要であれば、とだけ今は申し上げておきましょう。この機会によって、良い関係作りができるものと信じております」

「そう言い終えたパークスは、立ち上がると胸に手をあて軽く会釈した。

「お送りして来ます」

パークスの前へ立ち、伊藤と村田が先導するように部屋を出て行った。

「ふう」

そう吐息を漏らしたのは桂である。

「おまえの考えも解らんでもないが、時と場合を選べんのか？」

「そう言われるの承知していたよ。だが、仏蘭西が動き出しているんだ。ここは村田くんの申し出を受けるべきと考えたまでだよ」

「仏蘭西が小倉藩に肩入れしてくる、と？」

「陣頭指揮を執っている小笠原殿は譜代大名だ。しかもこの戦は幕府が起こしたものだ。芸州、石州双方で敗退を記した小笠原殿が、仏蘭西を頼る可能性があると思わないかい？」

「それで英吉利にも腰を上げさせたって訳か？」

「まさか。僕はなにもしていないよ。今回の訪問はあくまで薩摩からの依頼を受けたものだ」

面白くないと、高杉は鼻息を荒くする。

「商売で付き合うだけなら文句は言わん。が、英吉利が軍を推して来るなら打って出るぞ」

とは言え、長州一国でイギリスと戦争する兵力も武器も、また資金もすでにない。高杉は今回の戦争で、藩が蓄えていた密資金も武器調達にと使っているのだ。

「おまえの考えは解っている。それに僕も長州に夷人を入れるつもりはない」

桂とて、海外に渡りその近代的な文化を見てきている。その強大さも身にしみて感じているのだが、軍事大国であるアメリカと、占領下に置かれた清国とでは、国民のあり方も都市の様相も異なる。その差が、二人の夷国に対する認識をずれさせているのも事実である。

「俺、これから山縣さんの所へ行ってきます」

ずっと沈黙を守っていた中岡が突然そう切り出した。

「お？」

「英吉利の動きを、そう気にすることは無いと思うが」

「念には念を入れろ、です。パークスが九州へ渡ると言ったのも気になりますし、陸援隊と谷も置いたまま来ちゃったんで、そろそろ戻らないとまた拗ねられますから」

二人の返答も聞かずに、そのまま村田も送って行きますからと、中岡は部屋を出で行ってしまった。

「いつも忙しい奴だ」

それが中岡なのだろう。龍馬と同じくじっとしているタイプではない。

「和太郎」

四人になった所で桂が膝を和奈に向けた。

「殺気が出でいたよ？」

「ひやひやするほどな」

高杉も真面目な顔でそう添えた。

「桂木くんも動ける態勢になっていた程だ。さて、どうしたのか教えてくれるかい？」

夢の話をした時の桂の面影は全くなかった。以前と同じく、優しい笑みを向けてくれている。

「解りません、としか言えません。ずっと落ち着かなくなって。殺気、出してたんだ、私」

「・・・いつから落ち着かなくなった？」

「パークスって人が入って来てからです」

二人は互いの顔を見やった。

「さてはて。当人にも理由が解らないのでは、僕達がいくら聞いたところで答えは出ないね」

「すいません」

「おい、和太郎。おまえ、まだ戦に出る度胸はあるか？」

「晋作！？」

「え？ はい。出ろと言うならですが。でも小五郎さんからは禁止と言われましたし、許可がなければ桂木さんも駄目と言います」
ちらりと武市を見る。

「晋作、どう言うことなんだい？」

和奈を他所に、桂は怒りの混じった声を高杉に向けた。

「小五郎は阿呆だ。こいつの身が心配になるのは判るが、俺は戦に出さなくてはこの気がしてならん。なぜだと聞くなよ？ これは直感だ」

直感で怪我人を戦に送り込むなと桂が怒る。

「この時代に来たのは理由があるからだと言ったのはおまえだ。都合のいい事に剣を振るえる腕を持ってだ。こいつが先生の生まれ変わりなんぞ、到底信じきれたもんじゃない。いや、信じる信じないなどこの際関係ない。和太郎は、ここで自分がやるべき事を見出さなくてはならん」

「それが戦へ出す理由だ、などと言わないでくれ」

「だから阿呆と言ったんだ。いいか、小五郎。こいつはいつも戦に出たがっているじゃないか」

えっ？ つと桂は乗り出した身を沈めた。

「京で人を切り、武市さんを無謀にも助けに行く。それだけじゃない、新撰組とやりあったばかりでなく、長州へ来て拳兵に参戦もする。そして今度の戦だ。これが普通の女子の考えることか？ 馬鹿言え、こいつはそうじゃないだろうが。自分から戦いに巻き込まれてんだよ」

自分から？

和奈にそんな意識は全くなかった。もちろん、好きで戦に出たいと考えた事すらない。

「なんて・・・おまえは無茶苦茶な推論を立てるんだ」

そう言った桂も、それが全く見当はずれではないと感じている。

高杉の言うように、和奈はなんの抵抗もなく剣を振るい、戦に出でいる。しかもあの太刀筋は稽古したからと言って女子が振るえるものではない。

タイムスリップという現実離れた事象を、今でも桂は信じるに足りる確証を持っては居ない。そこへ、吉田松陰の心音を語り出す始末なのである。

松陰の生まれ変わりなどではなく、彼が残した書物を和奈が読み、知識として無意識に引用したと解釈することの方が自然に思えるのだ。

「こいつは俺が連れて行く。武市さんにも納得してもらわねばならん」

和奈が行くのならば武市も無論ついて来るだろう。

「俺が拒否したとしても、諦めてくれる様子ではないな。致し方あるまい」

高杉の意見に同意した、そう言うことだ。

「おまえ達・・・」

最後まで桂だけは納得した顔を見せずに、その夜はそこでお開きとなった。

パークスが白石邸を訪れた二日後、小倉湾にフランス公使レオン・ロッシュの乗った軍艦が寄港した。

謁見をしたいとの報せを受けた小笠原は慌てて城を出ると、ロッシュを紫川の台場にある常盤橋近くの客館へと招いた。

洋装に、顎鬚を蓄えた長身の男が部屋の真ん中に座り、上座には顔も体も小ぶりな小笠原が座った。

日本式に頭を下げたロッシュは、この度来訪した理由はただ一つ、

長州藩主に降伏勧告を行うためだと告げたのである。

これには小笠原も目の色を変えた。

「講和を説く前に、幕府海軍による小倉、下関の制海権を確保する必要があります」

柔らかい口調だが、しっかりとした声色だ。

「先の長州の攻撃で、我が軍は二百隻もの船艇を失った。小倉湾に停泊しているのは幕艦五隻のみ。これをもってして制海権の確保などではせぬ」

こういうところはちゃんと状況を判断できるのだ。

「フランス海軍も助力は惜しみません。そのために軍艦で来たのです。まずは制海権を確保し彦島を制圧します。ここを拠点とし、長州へ渡る武器などの輸入ルートを潰すのです」

確かに戦が長引けば自軍だけでなく、長州も弾薬等の補給が必要になってくる。そうなるとう不足した物資を仕入れなければならない。その補給経路を断ってしまおうと言うのだ。

補給経路が断たれれば長州とて戦争を続ける事は困難となり、乗り込んで来たロッシュの講和に耳を傾けざるを得なくなる。

小笠原はこの申し出に、島村の意見も聞く事なく飛びついた。

「門司もじでの戦で、我が軍が抱えていた武器弾薬を長州に奪取されいる。その補給をしたいが、江戸に早馬を走らせも時がかかる。ここは貴公に武器購入先の斡旋を願いたい」

「喜んでお引き受けいたします」

フランスがわざわざ出向いて来て、今回の戦に力添えをしようのだ。小笠原は好機が巡って来たと内心笑い声を上げた。

だが、次の日。今度はパークスが小倉へとやって来た。

小笠原は客観にて再び夷人を相手に座することになった。

フランスとイギリス両国が日本での商業拠点の確立を目論んでいることは、幕府家老という立場から小笠原も知り得ていた。だが、イギリスから幕府は幾度も辛酸をなめさせられている。幕府の懐具合が厳しいものとなっているのは、外国から再三要求された賠償金

ゆえだ。

「ここで通商航行を出されるか」

パークスは単刀直入に小笠原に意見を述べた。

この度の戦は往来する諸外国にとって極めて危険な事であり、万が一戦によって航海中する外国船に損害が出た場合には、国際的に大きな問題に発展すると言いつつたのである。

〔兵庫と同じく下関は我々にとって重要な通商海路である。慶応四年一月の兵庫開港が約束どおり行われれば、下関は更に重要な海路となる。イギリスとしては交易の要となるこの海峡で戦争が激化するのを、黙って見過ごすことは出来ないのである〕

一喜したのもつかの間、イギリス軍の介入はなんとしても止めなくてはならないと、小笠原は一憂に暮れた。

フランスが彦島を占拠すれば、イギリスも黙ってはいないだろう。そうなれば内輪もどころか両国の商戦争いの舞台になってしまう。そうなればもはや幕府と長州という括りで納める事は困難となる。

〔申し上げたいことはもう一つ。この戦争は日本政府が私怨を抱き、同じ国民である長州へ戦争を仕掛けたものだとは私に考えている〕

「私怨など！ これは我が国の問題であり、他国が口を出すべきものではない！」

〔確かに、英国政府が日本政府の執権に口を出す権利はない。だが長州国が戦に出た言い分はよく理解できるものです。ここは日本内々で事を納めるしかないと思います〕

小倉湾にはフランスの軍艦が停泊しているのだ。すでに小笠原とロッシュが会談を開き、何らかの談義を行った事をパークスなりに解釈し、そう言ったのだろう。

〔私は女王陛下より命を賜って来ている。フランスの介入を認め、我らの介入を認めないのであれば、それ相応の手段を執らせて頂きます〕

フランスは幕府寄りを示したが、イギリスは長州を擁護する姿勢を見せたのだ。

これは小笠原にとって厄介な問題となったのである。

九州においてはフランスよりも、イギリスと商談取引を行っている諸藩が多い。ことに薩摩は先の薩英戦争以降、その度合いを深めている。ここでイギリスが長州について動き始めれば、沈黙している薩摩がどう出て来るのか、小笠原としてその位の推測はできる。

苦渋の選択を迫られ、パークスが客館を後にしてからも小笠原はしばらく動けず、ただ呆然と座っていた。

現在小笠原の支持で全軍は待機している状態だ。ロッシュに依頼した軍艦・武器などの到着を待っているのである。だが、パークスの来訪により、彦島を拠点として輸送路を断つ計画は頓挫してしまった。

其之三 小倉口の戦い・前編

慶応二年七月三日早朝。

鉄製二十四ポンド加農砲カノンほうを搭載し、石炭運搬船に偽装した三隻の和船はが朝霧の煙る中壇ノ浦より出航し、満潮の流れに乗って小倉沖に停泊する富士山丸へと接近していた。

富士山丸は、中央に百四十ポンド砲と前後に三十五ポンド砲計八門が備えられた最新の鋼鉄船だ。先の大島口でも、二隻からの攻撃を難なく凌ぎ、小倉へと寄港している。

和船を甲板上から見つけたのは、船員の顔が判別できる距離まで接近してからだった。朝霧で視界がきかず、発見が遅れたのである。欄干に身を乗り出し、船を確認すると甲板に居る他の兵士に声を掛けた。

「どこの馬鹿だ、こんな夜に海に船を出すなど」

少しずつ近づいてくる船に向かって、兵士は大声で叫んだ。

「どこの船であるか!!」

「石炭を積み込みに、若松へ向かうところでさあ、旦那!」

今や船体が確認できる距離にまで接近していた船は、何処から見ても石炭を輸送する船だった。

呼ばれた兵士も目を凝らして和船を観察したが、それが長州の作った偽装船であるとは考えるに及ばず、その判断が警戒心を解き、和船に乗り込んで調べる事はおろか、船員の「石炭を積みに行く」という言葉を鵜呑みにしてしまったのだ。

気付かれなかったと判断した長州兵は、急いで砲の支度に取りかかった。

「潮の流れが変わる。富士山丸から離れるぞ」

長州兵は大急ぎで舵を取り、流され始めた船の位置を富士山丸と平行に保つ。

「舟を下ろしとけ」

一つの船に乗船しているのは六名。そのうちの二名が船に結わい付けられた小舟を下ろし、残りは砲撃準備を進めて行く。

「よし、いいぞ」

残りの四名は、加農砲に実体弾を詰め込んだ。

「あのでかぶつに、これで穴一つでも開けられたら万々歳なんだがなあ」

それこそやってみないと解らない。が、鋼鉄の船体に普通の砲弾で穴が開くとは思って居ない。

「装填完了！」

「いっちゃれ！」

ドォーン！

号令を合図に大きな音が霧の中へと反響し、衝撃で砲塔に被せていた布がめくれ上がる。

砲弾は弧を描く事なく富士山丸の左舷鋼鉄版に命中する。もう二隻も、砲塔の角度を最大限まで上げ、蒸気釜のある後部を狙って砲撃した。

二度の砲撃音がこだまする。

「そーれそれ、退却だー！」

兵士達は下ろした小舟に乗り移ると、結わえてあった綱を切り舟を漕ぎ出す。

潮の流れはすでに変わっており、それに乗れば富士山丸から勢い良く離れていくことが出来る。

念密に計算された退路に乗った舟は、富士山丸で騒ぎが起ころ中、霧の中へと消えていった。

深手の赤井を抱えた土方達は、小郡こしおりから山陰街道へ入っていたが、このまま進むと石州で長州とかち合うため、津和野から街道を外れて岩州を出る経路をとることにした。

大石はこのまま帰るのはどうしても気が進まないと、長居はせず、すぐに後を追うからと長府に残ってしまった。

落ち合うのは津和野。一日待って姿を見せなければ下手をうって捕まったか、殺されたかどちらだと判断し、京に発つと土方は大石に念を押していた。

土方の背に追われている赤井は、背中の痛みを堪えるのが精一杯で、追っ手を警戒しながら進む土方達に気を使う余裕はない。

「あそこで桂が出で来るったあな」

戦の最中である。旗頭の桂が藩庁を離れて下関へ来るなど思いもしなかった。

「しかし、噂通りですね、あの剣気」

ただ立っているだけなのに、太刀を出させない威圧。剣を納めているのに、斬られるのは己だと判る剣気。

「近藤さんも手が出せなかったと言ってた」

神道無念流は居合しんどうむねんりゅういも含めて剣術を教えているが、実際に居合術を修得する剣士は少ない。免許皆伝を受けた者ですら、その大半が剣術のみしか修得していない。

桂が出していた気合は居合術のものだ。「力の剣法」と言うだけあり、略打を使うことはない。「真を打つ」渾身の一撃が神道無念流の流儀である。

永倉も同じ神道無念流であるが、居合術の有無の差なのか、桂の特質なのか剣気がまるで違う。精忠浪士組時代の芹沢鴨とて、あれほどの剣気を出した事はない。桂と同じであるなら、肅清などされず新撰組局長のまま居座っていただろうが。

何の気配も悟らせず桂は赤井を斬った。自分ばかりでなく、和奈達ですら桂の気配が解らなかったようだ。

「なんでてめえを殺さなかったんだ？」

答えは赤井にも出せない。

楠の一件があるのだ。殺そうと思えば出来たはずだが、桂は手負いにしただけで命までは奪わなかった。

ちりちりと肌が痛んだ。静電気が纏わりつくあの感覚が全身を覆っている。

「無駄骨折っただけで、なんの情報も掴めず京へ帰る方が僕は気かりです」

沖田の悩みは土方の悩みでもある。近藤は会津藩へ事の次第を報告しているだろう。桂に邪魔され、追い返されましたと言いつらい。

「みんなで仲良く切腹でもしますか」

「てめえだけ腹かつさばいとけ」

宿場町についた一行は、町外れの小さな旅籠屋に宿を取った。

津和野藩は今回中立の立場にあるので、周防や長州ほど旅人に警戒心を抱かないのが幸いだった。

運のいい事に、蘭医学を学んでいる医者が宿を取っていると宿主から聞いた土方は、さっそくその医者の泊まる旅籠屋に出向き、頼み込んで半ば強引に自分達の旅籠屋へと連れて来てしまった。

「これはひどい」

背中傷を看た医者はそう呟いた。

「先生も旅の途中と聞きましたが、こいつをこのままにはしておけないんです。どうかお願いできませんか」

土方に頭を下げられているのは、三田尻で和奈を手当てした松島剛蔵だった。松島は石州にいる大村の下へ向かう途中、この津和野で宿を取っていたのだ。

「心配なさらず。私は医者です、手負いの方を放ってはおけません」
そう言い、詳しい事情など聞かず、必要な道具を取りに一旦宿に

帰った松島は、しばらくして大きな木の箱を抱えて戻って来た。

「湯を沸かして持ってきて頂けますか」

自分の手を湯で洗い、大麦のカスと汁で作った気付けを赤井の口から流し込む。これにはカンジシンという成分が含まれており、血圧を上げる効果と呼吸・心拍数を抑制する効果がある。

「手拭をこの人の口へ」

激痛で舌を噛まれては、治療する意味がない。

土方が赤井の口をあけ、固く絞った手拭を真横にして押し込んだ。

火で燂^{はんしん}鍼を熱した松島は、血を拭き取った傷口をじつと見つめたあと、針をゆっくりと刺した。

火で針を熱するのは、排膿と皮膚内部の消毒を同時に行うため、この時代の縫合手段の一つだった。

丁寧^{ていねい}に針を通しては、針に三回糸を巻きつけ括り玉作り糸を切る。また括り玉を作って針を通し、括り玉を作って切る。こうすることで、傷が癒えた後の抜糸が楽になるのだ。

縫合か済むと、松島は傷口に人油と天利膏^{てんりこう}を塗って行く。

処置を終えた松島を自分の部屋に招いた土方は、熱い茶を差し出した。

「ほんとうに有難うございました」

「医者を務めただけです、礼には及びません。傷がかなり深いので、数日は動かさぬ方が良いでしょう。あとで熱さましを用意しますから、忘れないよう飲ませてあげてください」

「あまり長居はできないのです」

「一人の命は決して軽いものではありません。何処へ向かわれるのかは問いませんが、町もない道中で傷口が開けばどうなるか、貴方には判るではありませんか？」

「追々気をつけては行くつもりです」

松島は悲壮を浮かべるしかなかった。

「明日までこの宿場町におります。出立されるまでは患者を看させて頂きます」

「先生の住まいを教えて頂きたい。治療にかかる路銀を今持ち合わせていないんです」

「結構。たまたま居合わせただけです、気にしないで頂きたい」

松島も何か感じたらしく、相手の素性を問わない代わりに、自分の素性を明かすのを止めたのだ。

それは土方にとっても好都合だった。互いの事情があるとは言え、多額であろう治療代をあっさりいらな^いと言^い切^{った}松島にそれ以

上食い下がることはせず、お茶を飲んだ松島を逗留先の宿まで送り届けた。

頭がぼうとする。熱が出ているのは解っていた。その熱よりも、背中の痛みが辛くてならない。

背中を斬られたのはこれで二度目だった。前も桂がらみで斬られ、今度はその当事者に斬られてしまった。

土方の背中で感じた違和感は、影を潜めるどころか益々大きくなっている。

（桂さんを殺らなきゃ、いずれは俺が殺られる）

だが本当に自分の手で桂を殺せるのか？

沖田も凄腕の剣客だが、その気合の差が大きく離れているのは否めない事実だ。

幕府は倒幕志士によって衰退の一途を辿る歴史を持っている。新撰組の末路も赤井は知っていた。だからだ、だからなんとかその道筋を変える一手がないものかと、考えるようになっていた。

薩摩と長州は既に手を結んでいる。それが徳川幕府に終焉をもたらす切っ掛けとなる。

何が必要だ？

幕府の力を取り戻すには、会津藩や紀州藩だけでは荷が重い。水戸藩に至っては藩内部の乱争により幕政に参加する力を持ってはいない。

（薩長の要を倒す以外に手はない）

桂と大久保を欠くことが出来れば自体は変わるかもしれない。幕臣である西郷だけでは、諸藩を従えての倒幕は時間がかかる事となるだろう。

やはり桂を殺さなければならぬ。

夢うつつでたどり着いたその答えは、次に目を覚ました赤井の意識には留まっていなかった。

へいんまる

丙寅丸に乗り込んだ高杉の後ろには、和奈と武市の姿があった。腕を組み、海に向こうにある小倉へと視線を向けたまま、四刻半も高杉は動いていない。

「熱、下がったばかりなのに海風に当たりっぱなしで大丈夫なのかな」

「誰がどう言っても船内には戻らん男だ」

丙寅丸へ乗り込む前、白石邸で再び高杉は血を吐いた。和奈はまだ無理だと止めたのだが、おのうは何も言わず高杉の血を拭い、愛しい眼差しでその背中を暫くさすっていた。

きつと止めたいに違いない。

「一里行けば一里の忠、二里行けば二里の忠を尽くす。この命が続く限り、俺はこの国のため、出来ることならなんでもする」

この時高杉が口にした「この国」とは長州を指したものでではなく、日本全体を指していたと後になって和奈は知った。

「和太郎！」

振り向いた高杉の笑顔は、これまでに見たどの笑顔よりも嬉しそうに見えた。

「いいか、何があっても立ち止まるな。おまえが肌で心で感じた路を迷わず進め」

「高杉さん」

「阿呆！ そんな顔をするな。俺はまだ死なん！ こんなところでくたばる俺様じゃない！」

龍馬にも同じ事を言っていた。だが、それは自分に向けられた言葉ではなく、高杉が自分自身を鼓舞するためではないのかと和奈は思う。

「僕より先にくたばったら、地獄まで追いかけて行って一発殴りますから、よく覚えといて下さい！」

「あああ？ おい、こら。それは俺がおまえに言ったんじゃないか！」

「お返しです」

ふん、と横を向いて、武市の所へスタスタと戻って行く後姿を唾然と見つめる。

「けっ、偉そうな口がたたけるようになったじゃないか」

そして再び小倉へと視線を戻した。

「全艦を小倉へ向けて出せ!!」

丙寅丸艦長、河野又十郎が高杉の命令と共に、他の三隻へ伝達するため甲板から旗を振らせた。

「河野!」

「はい!？」

「門司^{もじ}へ着いたら俺達も陸へ上がる。後の指揮は任す。作戦どおり幕艦を頼む!」

「承知!」

「やれやれ、と言いたところだね」

もう何日待ったことだろう。

「場合が場合なだけに、申し訳ないと言えませんが」

「それはよく承知しているよ、西郷くん。だが、私は遊びに来たわけではないんだ。一刻も早く話しをするだけして、京へ戻りたいんだよ」

西郷は部屋の中央で笑顔でいる男の前へと座った。

「乾さあがこん度、薩摩へ来られたのは、土佐の意向だと思って宜しかでしようか」

中岡と共に薩摩に渡るはずだった乾は、幕府の攻撃が開始されたと知った中岡が途中で船和おりてしまい、一人で薩摩の地を踏むこととなった。

それは危険な行為である。

土佐は公武合体を軸として幕府についている。一方薩摩は幕府に見切りをつけてしまい、長州と手を結んだ。その状況下、いくら倒幕を掲げていると乾が口にしたところで、端の者から見れば今薩摩

に入れるべき人間ではないのである。

「未だ山内公に倒幕の意志はない。それを後押しして来た後藤象二郎が、漸く手の平を返したところである、とだけ言っておこう」

「後藤殿は、勤王を掲げう志士の弾圧を行った本人ではあいもはんか。そんな方がいきなり倒幕に衣替えすうと言うのは、いけんも納得しかねう事なです」

西郷もかなりの情報を大久保から得ているようだ。

「これは大久保くんにも伝えてあることだ。その大久保くんが君に会えと言ってきたんだから、仕方ないではないか。でなければ、なにが楽しくてこんな危険なまねしてまで、私が薩摩まで来なければならぬんだい？」

「一蔵の考ゆつこたあ、おいになゆうと解いせんが。倒幕に向けて薩摩と長州ばっかいじゃのして、土佐の力も必要と考えたのだろうと言う事は解いもす。そんな上で、乾殿とおいを引き合わせう事を考えたんでしよう」

薩長に土佐が加われれば一気に倒幕路線を駆け上がれる。

土佐にしても維新を成した後を考えるならば、今の幕府に付いてこの両国を退けるより、薩長と肩を並べて幕府を相手にするほうが利口なのだと乾は考えている。

乾にとっての倒幕は世の平定を望むが故の手段である。それに、このまま幕府が政権を取り続ければ、いつまた何時、第二の安政の安獄が起こるか知れたものではない。

井伊直弼が居ない今、大獄を断行するだけの陣頭が幕府に揃っていない事は解っているが、誰がどの首を擡げ出すか判らないのが今の世なのである。

今日正論だったものが、翌日には曲論だと言う事になりかねないのである。事実、これまでに多くの者がそれで命を落としてきている。

「残念なのは、今回の征伐に土佐も出ている事なんだ。この戦が終って、さあ今日からは君達と同じく倒幕派ですよと、笑って肩など並べたものではない。本当に頭の痛い事だらけだよ」

「そや薩摩とて同じんそ。長州とはこん間まで敵味方の間柄じゃった。そいを倒幕ちゆう点で乗い越えたに過ぎません。土佐も我が薩摩も、佐幕派で意見を二分させとうのが現状。そいをなんとか一つに纏むう事に成功すれば、先は見ゆつと言うものです」

「嬉しい事を言ってくれるじゃないか、西郷くん。うん、実に嬉しいよ」

乾の態度は中岡の前だろうと誰の前だろうと変わることはないらしい。

引き気味の西郷を大久保がこの場で見ていたら、きっと大声を上げて笑い出していたに違いない。

「では、乾殿ばっかいじゃのして後藤殿も倒幕に動き出した、いや、土佐がと受取って良かですな」

「だから私がこうして動いているのだよ」

「解いもした。まずは、藩政堅めに入らなくてはんもはん。倒幕を国是とし、藩主を立てた上で、薩長に土佐も加えて再度話し合いの場を設けたいと考えもす」

「この乾退助、命を賭して倒幕を国是となす所存であると、斯様に申し上げる」

静かに頭を下げた乾はそう西郷に断言した。

慶応二年七月二十四日。

京では、岩倉より使わされた早馬が、京都薩摩藩邸にいる大久保に書簡を届けるために着いていた。

「何・・・？」

茫然自失する他はなかった大久保は、手にした紙をへ目を落としたまま暫く動かなかった。

「こんなことがあろうとは・・・」

やっと我を取り戻した大久保は、受取った文を火にくべた。

その内容は到底信じれたものではない。が、この期に及んで倒幕へ傾いた岩倉が奸計を働くとは考え難い。

「吉之助に知らせねばならぬ」

桂を、とも考えたが、まずはしつかりとした情報を掴むのが先と考え、大久保は薩摩にだけ早馬を走らせたのである。

そして大久保と同じ内容を伝える火急の報せが小倉城にも届いていた。

「もう一度・・・申してみよ・・・」

伝令が伝えた内容に、小笠原は力なくそう命じた。

「大坂城にて家茂公が、脚氣衝心かっけしやうしんにより、薨去されました！」

二つ三つ後ず去った小笠原は、腰の力が抜けたかの様にその場に崩れ落ちた。

其之四 小倉口の戦い・後編

丙寅丸・癸亥丸・丙辰丸・庚申丸が門司の海岸へと到着した。沖には砲台を搭載している和船二十隻の姿がある。

山縣達と合流した高杉の前には、奇兵隊二個中隊、膺懲隊二個中隊、報国隊中隊と長府藩から四個小隊、陸援隊小隊の約千名が集まった。

和奈と武市は先に来ていた以蔵と新兵衛と共に奇兵隊に加わった。中岡は陸援隊と共に報国隊に加わっている。

「奇兵二個中隊を二つに分ける。一方は海岸線を進む報国隊と、もう一方は膺懲隊と一緒に峠を越えて大里へ向かってくれ」

高杉を中心に円となり、簡単な地形を地面に書き、そこに各隊の進路を加えて行く。

これまでに何度も開かれた地面会議である。重要な作戦会議を行っているなどとは、端から見ただけでは判らない。悪がきが集まっ
てなにやら話し込んでいる、そんな様子である。

「俺達報国隊と一緒にいいんですよね？」

円陣の中にいる中岡がそう言うのと、ん？ と考えた高杉は笑顔を浮かべた。

「峠超えしたきや行ってもいいぞ？」

「・・・作戦あるんだかないんだか、判らないじゃないですか、それ！」

「有るに決まってる！」

トントンと中岡を宥めるように赤川が背中を叩く。

「小倉沖には幕艦五隻がいるが」

山縣は完璧にその遣り取りを無視していた。ここで自分まで加われば収集が付けられないと考えたのだ。

「幕艦は同じ軍艦に任せてある。赤間関へおびき出せばこっちの

もんだ」

「そんな簡単に釣れるか？」

「釣れる！」

「魚じゃないんだから・・・」

原田はがくりと首を落とす。

「艦は艦と戦うのが本分だ。敵艦が接近して来たら、やれ急げと追撃命令を出すに決まってるだろうが」

「まあ、それはそうだが」

「二刻後、四隻は門司を離れる。和船と合流したら大里へ攻撃が入る。俺達はそれを合図に敵陣へ突っ込めばいい」

「やるしかないな。ああ、高杉。おまえはここで指揮を執ってくれ」
赤川も原田も山縣の言葉に頷く。

「伝令は逐一走らせる。幕艦へ向かった艦隊と、陸戦隊への指示は頼んだぞ」

「置いてきぼりか、俺は」

「大将が堂々と先陣切ってどうする、馬鹿が」

高杉の体調を考えての事だった。赤間関でじっとしてほしかったのが本音だが、今更帰れとは言えないし、言ったところで素直に引き上げる男ではないと解っている。山縣なりの気遣いなのだ。

「判った」

「膺懲隊から一分隊を置いていきます。伝令でもなんでも使って下さい」

「行くぞ！！」

高杉は悲しげな目で、駆け出て行く奇兵隊・報国隊・膺懲隊と、中岡の陸援隊は仲間の後ろ姿をしばらく見つめていた。

長州軍が進軍を開始した二刻後、丙寅丸四隻は岸を離れると、沖合いにいた和船と合流した。

「福原、桂と山田に合図を出せ！」

河野が大きな声で指示を飛ばす。その三人は、癸亥丸艦長の福原

清介、丙辰丸艦長の桂右衛門、庚申丸艦長の山田鴻二郎らである。
丙辰丸初代館長は、あの松島剛蔵だ。医者としての腕をかわれ、艦長を辞職し藩抱えとなったため、後任として桂右衛門が就いていた。
そして各艦の砲塔が開いた後、彦島砲台からも大里^{だいり}へ向けて一斉に砲撃が開始された。

田野浦より撤退した一番備・六番備対は富野の手前で海岸と藤松の二手に分かれ陣を構えていた。

小倉城手前にある馬借には征長軍が布陣を敷き、小倉沖には富士山丸を含む五隻の艦隊が停泊しているが、富士山丸は夜襲を受けて陸に近い所まで後退している。

海岸沿いには、総指揮を執る小倉藩を始め、九州諸藩が、幕府千人隊と共に守りを固めていた。

だが、諸藩は必ずしもこの戦いに対して積極的に兵を出して来た訳ではない。

要とも言える薩摩藩が幕府からの命に対して出兵を拒否を示し、参戦していないのである

大島口での松山藩による非道行為も九州にまで伝わって来ている。武士にそぐわぬ行為と、眉を顰める者も少なくはなく、戦意を奮い立たせるどころか、自然と諸藩の足並みが不揃いになってしまった。

島村とて醜聞を知らぬ訳でない。だからと長州に屈するのもまた、できない行為なのだ。

「渋田見殿と中野殿への伝令は欠かすな」

砲撃隊との連携を上手く取る事ができれば、たかだか数百の歩兵になど負けはしない。敵が緻密に策を練ってくるのであれば、自分達も同じ事をすればいい、島村はそう考えた。

ゆえに、六番備の小笠原織衛との連絡も密にしなくてはならない。
「死に早ってはならぬ」

島村は兵達にそう告げた。

小倉本陣は、小笠原の命により待機を命じられていたため、即座に動ける状態ではない。ロッシュから送られてくる武器はまだ届いていないのだ。

長州軍に対応しなければならなくなったのは、九州諸藩と一番から六番備の小倉藩だけとなっていた。

数万の軍勢だが、敵を侮ることはできない。これまでの戦果がそう示している。

「気を引き締めんとな」

口を開いた直後、大きな爆音が轟き渡った。

「なんだ!？」

驚いたのは島村ばかりではない。周りに居た兵士も何事かと視線を巡らせている。

「敵襲!!」

誰かがそう叫んだ。

「配置へつけ!」

突然の砲撃に右往左往しつつ、島村の命で兵士達は陣内を駆け回っていく。

「砲撃始め!!」

島村は野戦砲の一斉砲撃を命じた。

一番備へ突撃したところへ砲弾が着弾し、山縣は隊を止めざるを得なかった。砲弾が降り注いでは隊を前進させる事ができないのである。

「相手は旧式の野戦砲だ。次の砲撃までにはまだ間がある。詰めるぞ!」

この判断は武器に精通する山縣であるから出せたものだ。

旧式の大砲は、一度撃つと次に弾を込める迄時間がかかる。筒内を掃除して、推進力を生み出す薬包（火薬袋）を詰めて、その上から砲弾を筒内へと装填しなくてはならない。それが終わっても今度は狙いを定める作業があるのだ。

その合間に隊をこつこつと前進させては、また砲撃を凌ぐ。砲撃が止めばまた進む。それを何度も繰り返す地道な進軍となった。

徐々に前線を上げてくる長州軍に、島村も目を見張るしかない。

「怯むな！ 敵はたかだか一個中隊！」

自軍を壊滅させては意味がない、よって沖からの砲撃はそうないと島村は判断した。

だが時間のかかる野戦砲では、完全に奇兵隊の足を止める事はできない。

そこへ報国隊が加わり戦況が変わった。ミニエー銃を構えた銃兵が、一番備へと銃撃を開始したのである。

これには島村も血相を変えた。弾の装填速度が和銃の比ではないのだ。

落ち着いて構えた銃を撃っていく長州軍により、一人、また一人と小倉兵が倒れていく。

その合間を縫うように、剣を手にした歩兵が斬り込んだ。

「砲撃手から行くぞ」

武市の声で、二分隊ほどが野戦砲を構える小倉兵へと走り出す。

砲塔を押さえれば、後続できた報国隊も前へと出れる。

小倉兵とて、そう易々と武市達を砲台へは近寄らせてくれない。

「退け！」

片手で薙ぎに払った剣を、両手で持ち直しながら和奈は小倉兵に叫んだ。高杉が新地会所でやって見せた事だ。退かなければ斬るしかない。

「あの馬鹿！」

突っ込んでいく和奈の後ろを以蔵が追う。

「くっ！」

敵兵に阻まれ、武市と新兵衛はそれを見るだけとなっている。

「銃兵を前進させろ！」

山縣が叫んだ。

隊列を一行に取った銃兵が一斉に銃を構え、敵兵へ狙いを定めて引き金を引いて行く。

引く素振りを見せない島村は、六番備へ伝令を走らせ連携を執る事も失念していない。だが、長州兵は一向に怯む事なく向かって来る。

「数の差など考えぬか」

味方の砲台も一つずつ沈黙を始めている。ましてここは楯となる障害物が少ない。猛進してくる敵兵に、一番備は次第に防戦一方となっていた。

「これまでか・・・全員に伝えよ！ 六番備と合流する！」

六番備と共に陣を構えた方が良かったのではと、島村は隊を分けたことを後悔した。だが、長州軍の勢いがこれほどであるとは、知らなかったのだ。今更後悔しても始まらない。

一番備が陣を崩し、海岸から藤坂へと後退すると、山縣は隊を集めた。

「膺懲隊へ伝令を飛ばせ」

「間に合いますかね」

息が荒いまま原田が言った。

「あの甲冑だ、進む速さは我らの方が上だ」

ここでも身軽な長州軍に利がある。

「負傷兵を集めたら楠原村へ後退させろ」

「挟み撃ちにしないでいいのか？」

「手負いを抱えているんだ。赤川達でなんとかなるだろう」

まずは高杉に伝令を送り、負傷兵は後退する方が先決と山縣は言った。

「あっちも揉めているようだしな」

視線を向けた先では、和奈に食って掛かっている以蔵の姿があった。

「馬鹿か！」

「馬鹿じゃありません！」

「なら阿呆だ！」

以蔵の顔がくっつきそうなところまで近寄ってきた。

「新之助が怒鳴るのも無理はないがな」

その襟首を武市が後ろへ引っ張った。

「った！ 先生？」

「落ち着け。こいつの独走は今に始まったことじゃない。乱戦となればなおさらだ」

「京の町で浪士相手に斬り合うのとは違うんですよ！？」

そんなこと、和奈も判っていると武市は言った。

「どういう心境の変化ですか？」

新兵衛も突っ込まざるを得なかった。

「桂さんが戦に出さぬと言ったのに、それを推して出したのは高杉くんだ。色々と事情がある。が、新之助の心配は当然だぞ、和太郎」

「・・・すいません」

はあく。つとため息を漏らす以蔵は、その場に座り込んでしまった。

「そんなに死にたいなら好きにしろ」

「死ぬつもりなんて、ないですよ」

その前に和奈もドタツつと腰を下ろす。

「心配かけて、すみません」

「ふん・・・そう思うならもっと自重しろ、馬鹿が」

ゴンッ！ と以蔵の頭に武市の拳が落ちた。

「っう！」

「馬鹿馬鹿と、連呼すればいいと言うものではない」

「先生はこいつに甘すぎる」

「そうだな」

笑った武市に、以蔵も仕方なく笑みを浮かべた。

山縣達と別れた赤川の膺懲隊も、小笠原織衛の六番備と交戦を開始していた。

「伝令！」

山間を駆けて来た奇兵隊隊士が、隊の真ん中にいる赤川へと走り寄る。

「追われてくるか」

「はっ」

赤川は一番備に対応させるべく二分隊分け、溜池土堤を小楯に見立て銃兵を配置させた。

六番備の陣地は彦島からの砲撃によって、町の至るところに火の手が上がっていた。まだ大砲の音も轟いて砲撃は止んでいない。町を覆うように黒烟こくえん天を焦がす勢いで立蔽たちおほい、強風に煽られて火も四方へと燃え広がり始めていた。

この煙は小笠原にとって厄介となった。

「視界が・・・」

小笠原の前には白黒、灰色の入り混じった煙が立ち込めている。

「なぜ奴らはこの中で戦える！」

浮き足立った六番備へ、島村の一番備がようやくの事で合流を果たしたが、見て取る状況は良いものではない。

「島村殿！」

姿を認めた小笠原が駆け寄って来る。

「これでは戦になりませぬ！」

「沖の幕艦も動いておらではな。小笠原殿、ここは大谷口へ退き二番・四番備と合流致しましょう」

大谷口には九州最強と謳われる肥後細川藩が八門の砲台を構えて

いる。この八門のうち四門までが後装式百十ポンドのアームストロング砲であり、持つ銃は長州と同じくミニエー銃だった。

合流すれば自軍の数も増す。長州軍に薄氷^{はくひょう}を履ませようと島村は考えた。

持ちえる戦術を、今の戦に当てはめることができないと悟った小笠原も、島村の意見に同意した。

応援の兵もなく、味方である幕艦隊が彦島砲台を黙らせることもないではどうしようもない。

「兵を集めよ！ 応戦しつつ大谷峠まで退却する！」

島村を後退させた山縣は一気に小倉城まで攻め込もうと、赤坂口へと向かった。

だが、低い山を越えた赤坂口では二番備大将^{しづたみ とねり}渋田見舎人と、四番備大将中野一学、八門の大砲に足を止められ、小倉城を前にして長州軍は肥後藩の猛撃により硬直状態となった。

長州軍と交戦しているのは肥後細川藩と小倉藩だけとなっている。動かない征長軍と、戦時下にあるというのに待機命令が出されたまま未だなんの音沙汰も届かない事に、小笠原への不信感を抱いた九州諸隊は傍観の態度をとってしまった。

島村達を追いかけて来た膺懲隊と陸援隊も加わったが戦況は変わらない。

「アームストロングか」

「なんですか、それ！」

中岡が聞きなれない言葉にそう叫んだ。

「野戦砲など足元に及ばん英吉利の大砲だ。弾の装填速度は十分の一に短縮されてる」

げっ、と蛙の様な声を上げてしまう。

「あれを黙らせんと、ここから進めんぞ」

味方にも次第に被害が広がっている。大里でとった作戦は功を奏

するどころか、実行する間がない。

「斬り込むしかないな」

ぼそりと原田が呟いた声が耳に届く。

周りを見回した和奈の目には、増えていく死体だけが映った。
ざわりと気が揺れる。

（駄目だ・・・駄目・・・）

同じ事を繰り返してはいけない。

そう考えた直後、【思考】という脳の働きが止まった。

「村木!？」

原田の声に、武市が、以蔵が振り返る。

「和太郎!」

和奈は低姿勢のまま敵軍へと駆け出してしまっていた。

「追う!」

武市が即座に動き、以蔵と新兵衛もその後に続いて走り出した。

「何をしようって言うんだ!？」

赤川も驚愕したまま前を見つめている。

「援護射撃をせんか!」

山縣が怒鳴り声を上げると、銃兵が隊列を整え援護に入り、砲台が前へ押しやられて来ると敵砲台へ向けて砲撃が開始された。

「なんで無茶ばっかする奴らが多いんだ!!」

そう山縣は怒鳴らずには居られなかった。

「間を作らず砲撃は交互に行え! 全軍前進!」

一番・六番備は、急に戦線を上げた出した長州軍の勢いに圧される形で、二番・四番備まで後退した。

狙撃隊の銃兵がそこへ砲撃を加え、膠着していた局面が動き出した。

「こうも士気を上げるものなのか!」

劣勢となり始めた形勢に舌を打ったその目に、アームストロング

砲の周りで舞う剣閃が映る。

「馬鹿な・・・」

双方の銃弾が飛び交っているというのに弾にも当たらず、一手ごと確実に剣をかわしている。

「島村殿！」

渋田見が島村の袖を引っ張った。

「なにか！」

声をなくし、血相を変えてしまっている渋田見の視線を辿った島村は、そこに信じられない光景を見た。

「なぜ・・・だ・・・」

守らねばならぬはずの小倉城が、赤く染まっていた。

芸州の時と同じだった。剣を振るう和奈には、人を斬る時の躊躇が全く見えない。

敵兵は進み来る和奈に剣を振るうが、どの太刀もその体に当たる事なく、反対に首や手足を切り落とされて行く。

「ひいい！」

動揺と恐怖がその場を支配した。

「何なんだ一体！」

原田は、これまでに見たどの剣客にも感じ取れなかった恐怖に、背筋を凍らせた。

「その馬鹿を連れて早く退いて下さい！」

以蔵が和奈と敵兵の間に入り、前を向いたまま叫んだ。

「それが、できれば！」

和奈はするりと身を交わし、砲塔のある方へと走り出してしまった。

駆けつけた中岡らの陸援隊と報国隊一個中隊は後方から援護を受けつつ敵陣の真ん中に斬り込んでいた。

アームストロング砲の傍らで全身血に塗れ、下げた剣を見下ろす

和奈に追いついた武市は、周りの敵兵を薙ぎ払いつつその背に自分の背を付ける。

「正気か！」

返事はない。

「くそっ！」

武市が和奈の両肩を掴み、前後に揺さぶる。

「おい！ 確りしろ！」

ゆるりと和奈の虚ろな双眸が武市を捉えた。

「心して聞かれよ。こが者が魂には、狂気が混じる」
以蔵と新兵衛の気配が近づいて来る。

「貴方は・・・吉田松陰殿・・・なのか？」

「こが者が魂の一つ、彼が者が想魂に導かれし吾の想。想は片や狂気、片や信念と相成りし。心得肝に命じよ。悪しき路辿りし吾が想止める為其の魂救われしと」

「何ゆえ、この者に？」

「理が違った故。多く語る事あれど、吾にもこが魂にも時は残されておらず」

喧騒がいつのまにか途絶えていると、気付いた以蔵は視線を後ろへ向けた。

「先生！ 敵兵が後退を！」

和奈が腕を上げて一点を指差した。

「小倉城が・・・燃えている・・・」

小笠原によって小倉城自焼が決定されたと知った島村は、呼野方面にある金辺峠きべを拠点とし、長州軍から郷土を守る、その一点を掲げ反撃に出るため農兵を集めた。

「わが藩は連戦連敗して来た。しかも昨日の城自焼はわが藩始まって以来の屈辱である。今、われらは堪えねばならぬ。敗因は小笠原であり、他藩の助力を願ったことに在る。だがここに我は宣言致す。戦を勝ち取るのは他人の力ではなく己自身の力だ。祖国を守るという心だ」

もはや幕府の命で動いているのではない。島村の語る言葉強く響いた。

「皆も我も、長州と同じ姿、形をした人間である。一人一人の力は弱い。が、一人が十人に、十人が百人になればその力は強大となる。それは長州を見れば自ずと判ろう。五万の兵を千の兵を持って退けたのは、まさに一丸となった者の力である。我らもここで負けてはおられぬ。今こそ皆の力を一つとし、祖先が眠るこの地を、藩を長州より取り戻すため最後の一人となろうとも戦い抜いて見せるのだ！」

その言葉通り限界まで戦ったが、長州軍の進軍を退ける事ができず、島村は金辺峠から退いた。

小倉口での戦いは薩摩藩が仲介に入り、小倉藩と長州藩間で停戦協定が締結された。

白石邸に尼僧が訪ねて来た。名を野村望東尼と言い、勤皇家であり志士を匿ったり、その密会の場所などを提供していた尼僧だ。

慶応元年十月、尊王攘派を匿ったとして姫島へ島流しとなっていたが、高杉の命を受けた福岡脱藩志士藤四郎と多田莊藏らが手引きし、脱出後した足で赤間関へとやって来たのである。

「また会えて嬉しい限りにでございます」

「本当に無茶をなさること」

「それが俺です、望東尼様」

布団の中から覗く笑顔に、望東尼も微笑を見せた。

「白石殿がしばらく住まいを貸してくれるそうです」

「一つ、頼みが出来ました。どうか聞き届けて頂きたい」

望東尼は、快く引き受けさせて頂きましよう、高杉の話を聞き始めた。

其之一 変転

小倉城が火に包まれた日より時は遡る。

長府下関から大石が津和野の宿場町に着いたのは、松島が発ったその夜の事だった。

「仏蘭西の軍艦？」

もつと詳しく調べようと小倉へ渡ることを考えたが、戦時下である。往来する船一隻たりとも見つける事ができなかった。

「奴らにとってはいい稼ぎ時ってことか」

「それは難しいでしょう、仏蘭西と手を繋いでるのは幕府ですよ？九州はもっぱら英吉利と仲がいい国柄です。肥後藩がいい例じゃないっすか」

「あの小笠原だ、何を考えるか解ったもんじゃねえ」

もしフランス軍に助力を申し出てたら、必ずイギリスも出て来る。下関で起こる戦禍の拡大は予想を超えるものとなるだろう。

「それだけは避けなきゃならねえってのに、あの馬鹿家老が」

「ここだけにしてくださいよ、その馬鹿ってのは。それにまだ小笠原が援軍を頼んだとは決まってる」

「可能性はある」

「それはそうですがね。ああ、それより面白い事があります」

大石がにやりと笑い、坂本龍馬ですよ、と言った。

「坂本だと？」

「ねたでもないかと、酒を肴に町人と飲んでたらいい気分になったんですかね、饒舌になりだして、土佐弁を使う浪人が下関の庄屋に出入りしていると言いだしたんでさ」

「奴は馬鹿か？」

聞く者によつては、土佐弁を堂々と使う、それだけで坂本龍馬ではないかと疑ってかかる。

「西郷伊三郎と名乗ってますが、特徴は一致するし土佐弁だし、ほぼ坂本に間違いないと思います」

「西郷ねえ」

大石の推論は当たっているだろう。

「ただ、確たる証拠はありません」

「十分だ」

「あ・・・」

気の抜けた声を出した沖田は、天井を仰いだまま固まっている。虫でも見つけたのかと二人も顔を上げる。

「武市半平太」

「幽霊でも見えたか？」

「隻眼の男です・・・あれ、武市ですよ」

以蔵の次は武市かと、なぜそう思ったのか土方が聞く。

「京で手合わせしたのが最初です。なのに、僕の太刀筋を知っていた」

間合いを取らせてもらえず、芸州でもそうだったのだ。

「芸州ではご丁寧に僕の名前まで呼んだ。岡田が生きているなら、武市が生きていてもおかしくないでしょう？」

「土佐はそれを知ってる」

「だと思えます。別人の首が晒され、公で死者となれば幕府からの追っ手はなくなる」

「裏で動かすには都合がいいか」

藩ぐるみで偽証に走られれば、幕府とて嘘偽りだと責め立てる事はない。手配が解かれれば当人への監視も緩む。

「何を狙ってるかだな」

長州と薩摩が繋がり、そこへ土佐が加われば静観している諸藩のいくつかは動くだろう。

「それが解れば苦労しませんよ」

確たる証拠が要る。と土方は思った。大石の言う坂本も推論、沖田が語る武市にしてもその域を出ていないのだ。

「伊東さんの動きも気になるところですしね」

大目付の永井尚志は、小笠原が穴戸に訊問する数日前、長州二家老らを招聘しに長州へ入り、両家老が病のため代理である穴戸と共に芸州へと舞い戻った。

その後は小笠原の独断場となり出る幕がなく、戦が始まって小笠原が小倉へ行ったと同時に、伊東を伴って京に帰ってしまっている。

「なんで伊東の野郎が大目付と一緒に仲良くやってるのか」

「こっちも裏がありますよ」

ともかく推測じゃなにもできないと、土方は不満を顔に浮かべたまま横に眠る赤井に視線を落とした。

「大石、すまんがしばらくここで赤井を看てやってくれ」

「京に戻るんですか？」

「ああ。帰って近藤さんを安心させたいからな」

「承知。赤井が動けるようになったら戻ります。ちゃんと説明して下さいよ。戻るなり切腹沙汰になるのは勘弁ですから」

翌日の早朝、土方は沖田を連れて津和野を発って行った。

「おまえとこうして二人になるのは久しぶりだよなあ」

四番隊組長を引き受け、幹部扱いされた赤井が大石とゆっくり会うのは、個室をあてがわれから稽古以外ではなくなっていた。

「なんか、俺が怪我すると大石さんが看病する羽目になってますよね」

そう言われたらそうだなと、嬉しそうに笑う。

「仕方ないだろう。万が一刺客なんざやって来てすぐ対処できる人間なんぞ、隊にはそういねえんだ」

「刺客、ですか」

「そーいやあ、なんで桂はおめえを殺さなかったんだろーな」
それはこっちが聞きたい。

「楠は桂の命令で動いておまえを狙った、これはほぼ間違いない。」

土方さんもそれは覆してない。いい場面だったってえのに、首も落とさず背中を斬りやがった・・・そうか、動けなくするためか」

「？」

「あの状況じゃ、足手まといになるおまえは必然的に見捨てられる。そう踏んだ。まあ、相手が土方さんだからな、当てが外れたんだろう」

「つまり、土方さんが居なきゃ俺は今頃長州に居た、ってことか」

「だろうな。ほんとになんも心当たりがないのか？」

「あつたら言ってますって。俺だって自分の命はおいしいですから」
「だよなあ。と、顎に手を当てて考える大石だが、結局なにも浮かんで来なかったらしく、ごろんと赤井の横に寝っ転がってしまった。」

「あの長州のちび」

ちび？

「ありゃあ、なんなんだ」

それを一番聞きたいのは赤井だった。

芸州で見せた豹変を一番驚いたのも赤井だろう。現代にいた頃の和奈とは全く異なる剣捌き。その片鱗すら露ほども見せた事がない。
(いや、一度あつたじゃないか)

錬兵館で一度、和奈の剣に驚いたことがある。あの時、朔月がなにかしら和奈に囁き、太刀筋が変わったのを思い出す。

(なんだ？ 何を言った？)

赤井はある事に気付いた。

(朔月さん、桂さんに似てないか？)

物腰といい話し方といい、雰囲気がよく似ている。顔こそ違うが、シルエットだけ見ると見間違うかも知れない。

【剣を振るう身になったとしても、決して心を惑わすな。己の信じたい想いを捨ててはいけない】

(まさか!?)

朔月は、和奈が時代を超えて幕末に来る事を知っていた？

仮説はいくらでも立てられる。仮説、と言っても実際に時を越えてしまった以上、仮説が現実のものとなる可能性は大いに有る。

あの時、桂の許に残るべきだったと、赤井はため息を天井へ向けた。

京では諸藩の動きが慌しくなっていた。

安芸国広島藩主浅野長訓や備前国岡山藩主池田茂政、阿波国徳島藩主蜂須賀斉裕などが、征長軍解体の建白書を孝明天皇に提出したのである。

池田は水戸藩主徳川斉昭の九男であり、兄弟に慶喜が居る。また蜂須賀も、外様藩主の養子になったとは言え、徳川家斉の二十二男だ。

水戸藩縁の者と徳川縁のものが挙^{こぞ}って解隊の建白書を出してきたのだ、悩みの種となるのは仕方がなかった。

建白提出には孝明天皇も頭を痛めた。

朝廷では孝明天皇を始め、賀陽宮朝彦親王、二条斉敬が征長軍の続行を主張していたのだ。

追討ちをかけるように、薩摩藩からも解隊の建白書が出された。

大久保は薩摩に居る西郷と緻密な連絡を取り合い、久光が漸く同意を示し、この運びとなった。

藩意が確定し、建白書を出した大久保は、洛北に在る岩村の許を訪れていた。

「愚たる所業に呆れてものも言えぬ」

大久保を前に、岩倉はそう吐き捨てた。

岩倉は諸藩と同じく長州藩との和解と征長軍の解体に賛同していた。

「逆賊となったとは言え、長州は勤王を掲げていた藩ではないか。禁門の変はまこと遺憾だが、事情を汲めば寛大な処置も必要であろう」

「暴虎馮河の兵たるのが、あの頃の長州でしたゆえ。しかし、事を逸るばかりが術ではないと悟った者もおります」

俗論派討伐以降は桂が藩政に大きく関わるようになり、国是を倒幕へと傾けてからは、毛利敬親も慎重な動きを見せている。

「家茂公が薨去された事はまだ公にはなっておらぬが、いずれは知れる事也。そうなれば幕府内外問わず更に問題も出てこよう」

「そろそろお戻りになられる時かと存じます」

「言うのは容易いがな、大久保よ」

「時期を逸するのもまた否めませぬ」

「然もありなん、賀陽宮らの行いは承伏できぬ。賀陽宮のみならず一橋や松平の言葉をも孝明天皇は鵜呑みにされている始末なのじゃ」

「では、動かれると？」

「中御門経之殿もすでに賛同し、孝明天皇への働きかけを行うと申してくれた」

「しかし中御門公は倒幕派、二条様や賀陽宮様が孝明天皇への目通りを、そうすんなりと適えられるとは思いませぬ」

「何事も表だけでは、上手く運ぶものも潰れると言うものよ」

何かしらの工作を既に岩倉が取っている、そう大久保は判断した。

家茂の薨去後、一番大変だったのは幕府である。

将軍後継に一橋慶喜が推されたが、田安亀之助（後の徳川家達）を推す大奥が中心となっている反慶喜勢力の存在と、水戸藩からの反感もあると将軍職を固辞したのである。

ただし、徳川宗家の相統は受け入れたので、朝廷からの勅許は降りていた。

老中らは毎日の様に將軍職に就いてくれる様に足を運んでいたが、慶喜の気持ちを変える事はなかなか出来ずにいた。

ごたごたとした中、諸藩から征長軍解体の建白書が送られて来たのだ、老中達が苦難を極めたのは仕方のないことである。

混乱の中、將軍職を固辞していたにも関わらず慶喜はどういう心境となったのか、勅許を得ると親征を示した上で、長州大討伐出征を宣言したのである。

松平春嶽はこの大討伐に反対論したが、長州を屈服せねばならないという一念で、慶喜は反対論を退けてしまった。

だが時はすでに遅く、長州での惨敗の影響がすでに出ていた。そこへ慶喜自ら出陣すると報せが届いたとしても、そう簡単に征長軍の士気が上がる事はない。加えて小倉での劣勢が伝わって来たのだ。益々士気は沮喪する。頼みの綱とも言える諸藩からの出兵も出ないという有様だった。

そこに家茂の薨去の報せである。慶喜は手の平を返すように大征伐の延期を決定してしまったのだ。

慶喜に天盃と節刀まで賜った孝明天皇は、延期に対して怒りを顕わにし、慶喜に味方した関白の二条斉敬や公家達は、西国と九州の劣勢を説き必死に宥めに掛かる日々となった。

そんな事を知ってか知らずか、もはや幕府の威信は失墜していると悶々とかる日々の中、小倉城炎上の報が舞い込んだ。

家茂薨去と小倉炎上の報告で懊惱おうのうとした時を半日は過ごしたある日、慶喜は一人の男を呼んだ。

「某に長州へ行けと仰せになるのです？」

慶喜の前に座したのは、勝海舟である。

「小倉城が堕ちた。外様藩らは出兵を拒否。となれば止戦しかあるまい」

先日まで長州大討伐と口にしていただろうにと、勝は内心呆れた。そもそも慶喜とは馬が合わない。政に口を出そうにも、慶喜は勝

の言う事に耳を貸さないと判っていたし、何よりも勝は家茂の方に好意を持っていたのだ。自然とそりが合わなくなるのも当然と言えば当然な事だった。

「これ以上の戦は幕府にとって損となっても益とはならぬ。家茂亡き後、世の平定が要諦であろう」

ならば端から長州征伐などしないでいいではないか。とは、勝も流石に言えたものではない。

「上意にございますならば、お引き受け致します」

「そなたとは死するまで馬が合わぬな」

將軍職についていない慶喜からの命を、あえて勝は上意ならと口にしたのだ。

静観を決め込んでいたとは言え、勝とてこのまま戦が長引く事になるのは本意ではなかった。自国で揉めている場合ではないのである。

すでにこの戦の影ではイギリス、フランスといった外国勢力が暗躍している。内政の混乱はそういった諸外国からの干渉を受け安い態勢を作ってしまうのだ。

大坂城を後にした勝は、その足を寓居している専稱寺せんしょうじへと向けた。

「やだねえ」

何回そう呟いただろう。

「徳川もこれまでだなあ」

聞き捨てならない事も勝は平気で口にする。家持が亡くなった時も、「徳川家、今日滅ぶ」と日記に書いていたくらいだ。

もはや幕府は諸藩の統率を欠いてしまっている。長州との戦を終らせるにはいい機会と思えた。

空を見上げると青く晴れたいい天気だ。雲も風に乗り形を変えながら流れて行く。

「お天とうさんと同じだ。止まってくれないのが世の流れだねえ」

気乗りはしなかったが、数日後には長州へ向けて大坂を発った。

山陽道へ入り、小田川沿いに在る十八番目の宿場町、矢掛へ入った勝は、そこで意外な男を見つけた。

「確かおまえさん、梅太郎と居たね」

宿を探していたのか、覚束ない足取りで道を進んできた赤井に目が止まり、勝はそう声を掛けた。

「お久しぶりです」

頭を下げたその仕草が、どこかぎこちないのを勝は見逃さなかった。

その二人の所へ大石が小走り駆けて来た。

「宿は空いてねえな」

その言葉に勝が、おっ、と言う表情を見せる。

「宿を探してるのかい？」

「え、はい」

「運がいいよおまえさん達。ほら、ついて来な」

歩き出した勝の後を追いかける赤井に、大石は誰だと問いかける。

「勝安房守殿」

「はっ!？」

その声に勝が振り返る。

「往来で話せない事もあるだろうから、後でゆっくりすりゃいい」
大石は面食らったまま、歩き出した赤井の後ろを追いかけた。

其之二 孤城落日

勝が足を進めたのは矢掛にある本陣である。

庄屋だった石井家に寛永十二年本陣職が命ぜられて以来、世襲となつて石井家が務めていた。

天璋院の名で、家茂の正室和宮とともに大奥を取り仕切っている篤姫も、嘉永六年に、家定へと嫁ぐため薩摩を出て江戸出府の途にこの本陣に宿泊した事があるのだと勝は言つた。

御成門を潜り中へ入ると、門の両脇に宿札が掛けられた。

本陣に大名や幕府役人等が宿泊すると、誰が宿泊しているのかを知らせるため、名前の入った宿札が掛けられるのだ。

「足は崩しな。傷を抱えたままじゃ辛いだろう」

奥座敷に入ると、勝はやれやれといわんばかりに胡坐をかいて座り込んだ。

「どうして勝さんがこの宿場に？」

「役人だからねえ、勤めはちゃんと果たさないとイケねえだろ？」

うまい具合にはぐらかされてしまう。こういうところはしっかり紐を縛るっておくのが勝なのだろう。

「この時分にその体ってえことは、戦に出たのかい？」

薩摩藩邸で龍馬と一緒に居たので、長州側で参戦したのかとも考えたが、周防国を越えて備中国に居るのはおかしい。

「紀州藩と共に長州へ向かったんですが、手酷くやられました」

長州に潜り込み、桂に斬られた事は伏せた。この勝は龍馬と懇意の仲だ。桂の事も勿論知っているだろう。大石がいる席で余計な事を口走って、龍馬との繋がりを知られる訳には行かない。

「紀州と？ おまえさん、新撰組に居るのかい」

「はい。四番隊の組長やらせてもらってます。こちらは一番隊の大石鍬次郎です」

紹介され、そそくさと手を付いた大石が頭を下げる。

勝海舟と言えば幕府の大物だ。今は軍艦奉行に復歸し、孝明天皇や家茂とも懇意の間柄と聞く。

その勝が今日の前に座って居るのを驚くよりも、赤井が知り合いだったと言う事の方が大石には驚きだった。

「ほう、新撰組で隊頭はってるのかい。いや、こりゃあたいしたものだ」

太股をパン！と叩いた勝は大きな笑い声を上げた。

「大石さんとやら、ちよつくら台所へ行って晩酌を頼んで来てくれねえかね？　こう、目の前に何もなかったのは淋しくていけねえ」

まだ太陽は地平線に沈んではいないが、気にするでもなくクイツと飲む仕草をして勝は言った。

「ついでに飯の用意も頼んで来てくれると助かる」

背中にそう言って、勝は赤井に視線を戻した。

「で、おまえさんが新撰組に居るの事は、梅太郎も知ってるのかい？」

「はい」

それで大石に席を立たせたのか。

「そうか。おいらはてつきり長州かと思ったんだが。色々事情もありそうだなあ」

「ややこしいんで、簡単にお話しすることができません」

「・・・おいらはこれからその長州に行く用事があるんだよ」

「長州へ？　戦に出られるんですか？」

「あはははっ。戦は苦手なんだ、参戦しても真っ先に殺されちゃうさ。口外できねえ内容だからおまえさんにも語れないんだが・・・」

大石が戻って来たので、その話はそこまでとなった。

本膳と共に酒が運ばれてくると、勝はご飯より先に銚子に手をの

ばし猪口へと注ぎ入れた。

ここは酒屋も営んでいるから、遠慮しないで酒を飲めと言われた大石は、本当に遠慮せず次から次へと銚子を開けて行く。勝が大徳利で持つて来てくれと言うほどである。

「こんだけ気持ち良く飲まれると、何も言えんねえ」

含み笑いを零し、泥酔してしまった大石を見ながら勝はそう笑った。

このままでは風邪をひくと、屋敷の人間を呼んで酔っ払った大石を、脇本陣である高草家へと運ばせた。

「酒がのめねえ体なのに、すまないねえ」

「いえ」

二人になったところで、袖に腕を入れた勝は畏まっている赤井に顔をずいっと出す。

「込み入った話ってえのを、おいらに聞かせちゃくれねえかい？」

赤井は戸惑った。詳しい話しをするためには、自分の素性を勝に放す必要があると思ったからだ。

「梅太郎が手元に置いてたおまえさんを悪いようにはしないさ。話したくないんだったら話さなくてもいい」

「話しをしても、信じてもらえるかどうか・・・」

龍馬の素性や同行を内密にしている勝だ。ここでタイムスリップして来たと話しても、それを他人に話す人物ではないだろうが、まず、語る内容を信じてもらえるかが疑問だった。

腹を括った赤井は、まず自分がこの時代に來た経緯から話し始めた。

大久保がそうであったように、話しを聞き終えた勝も、語られた内容に呆けるというより茫然自失してしまっていた。

「信じられないですよね」

「・・・おまえさんが語った内容を、この時代の人間が考えつくとは思えない。あの木戸さんですら受け入れちまってるんだろ？ 世

迷言で片付く話じゃあない事は確かだろうさ。なるほどねえ、梅太郎が興味を持ったのも判るってもんだ・・・あいつは何一つ、結果を聞いてないんだな？」

「はい。村木にも聞いてないと思います」

聞いたとしても、歴史を詳しく知らない和奈では返答のしようがないだろう。知っていたとしたら、寺田屋でむぎむぎ龍馬の手を斬らせてはいないはずだ。

「ここへやって来た理由がある筈だ」

「理由って、俺は巻き込まれただけです。あるなら村木のほうだと思っんですが」

「いや。偶然なんてないよ。この世にあるのは必然だけだ」

「必然・・・」

「物事ってのは一つの事が次の事へと繋がって行くもんだ。人の人生も同じ。歩く道筋は途中で幾重にも分かれ、進んでは分岐に差し掛かり、どの道へ行くか選ばなくちゃいけない。勿論、自分一人じゃなく、その道中は他人の干渉も受けちまう。おまえさんの身に起きたことも、その村木って人間が干渉したためだろうが、関わりがなきゃ干渉される事はないんだよ」

「俺も、こっちへ来る理由があったと？」

「言っただろ？ 偶然なんてもんはない。出来事は在るべくして起こるもんだ。おいらが辿って来た道とおまえさんが辿って来た道、梅太郎が辿って来た道。それぞれが違う方向から一点へと繋がっていた、ただそれだけだよ。人はそんな出会いを運命、なんて言葉で飾ってるがね」

「運命・・・」

「ああ、いけねえいけねえ。簡単に片付けるところだった。いいかい。自然の摂理には逆らえないのも確かだが、運命だと諦める人間になってはいけないよ。良くも悪くも選り取るのは自分だ。だからおまえさんは理由を探さなくちゃならねえ、ここへ来た理由をな」

「はあ・・・途方に暮れるしかないんですけど」

「眼を閉じず確り周りを見るこった。細かい事に気付ける人間にならねえといけないよ」

「難しいことです」

「おまえさんは本を読むかい？」

「はい、多少は」

「知識は大事だ。多くの知識を得るためには多くの本を読むこった。ああ、人の話を聞くも然り。何事についても学ぶ事をしない人間はそれまでだ。一を知るより十を、十よりも百を、百よりも千の事を知る奴のほうが物事を多様に考えられるってもんだ。ちっぽけな自分の知識で大を語る奴も居るが、おいらからしたらそいつらは馬鹿としか言えないよ。相手にする価値もないさ」

「歴史書とかですか？」

「この本だと括る事はできねえよ。色んな本を手取ることだ。知識が多ければ多いほど裏表が見えてくる、奥も知れる。表だけしか見ないで、偉そうに批判する人間ほど哀れなものはない」

おっ、と勝は手にした猪口を口の前で止めた。

「すまないね、話が逸れちゃった」

そして一気に猪口の酒を飲み干すと、赤井の顔を暫くじっと見てから口を開いた。

「どうだい、おいらの護衛を試してみねえか？」

「はっ!？」

「一人で長州へ出向くってのも怖いじゃないか。四番隊組頭のおまえさんが護衛なら、心強いってもんだ」

いきなり何を言い出すのかと、赤井は眉間に皺を寄せるしかない。

「手負いの人間を護衛につける役人なんて居ないですよ」

「おっと、それもそうだ」

そう笑う姿から勝の意図は汲み取れない。

龍馬と同じく、何を考えているか判らない人間の部類だった。だが、道筋をちゃんと立てれば理解してくれるのは間違いないだろう。「その、勝さんは俺が未来から来たってこと、信じたんですか？」

「残念だが、信じる要素なんてなんもないよ。おいらは人を見て、言葉を聞いて判断するだけだ。おいらは長州へ行くに行っただけで、まだその内容を口にしちゃいねえ。おまえさんがおいらに嘘八百並べ立てる必要はないじゃないか。いや、ちつとまてくれ。連れて行くと言うところまで計算できる男だったとしたら、これは当てはまらないねえ」

「そんな計算ができてたら、とっくに桂さんを斬ってますよ」
ついそう口に出してしまつて、赤井は後悔した。

「そうかい。それがおまえさんの目的か」

「いえ・・・その・・・」

「心配はいらねえよ。だからと言って牢に放り込むなんてしやしねえから。命を狙われたか・・・今の時期を考えると、長州がおまえさんを狙うのも道理がある。修吾郎だったな、やつぱり一緒に来い事を多面から見て、それでも斬る必要が有るとおまえさんが思ったならそうすりゃあいい。犬死覚悟になるだろうけどよ」

「犬死は避けたいです」

「あはははっ。よし、じゃあ話しは決まりだな。よろしく頼むよ」
結局、どう足掻いても勝の護衛として長州へ行くことになってしまふだろうし、残ればよかったと後悔したのだ。脱走する事なく戻れる機会を目の前にぶら下げられて、食いつかない手ではないと、赤井は同行を承諾した。

「大石さんに言伝を京へ持つてもらおう。新撰組は会津藩抱えだ。身内も同じ幕府方の頼みなら、処罰も加えないだろう」

翌日の朝餉の席で、勝は赤井を連れて行くと大石に告げた。

「え？　は？　こいつを軍艦奉行である勝安房守殿がお連れになるのですか？」

「その奉行ってのはやめてくんねえかい。どうも座り心地が悪くなつていけねえ」

そう言われても態度を変える事は出来ない。なにしろ、幕府海軍

を統率しているのが、この勝なのだ。

「単身こっちへ来てみたものの、やっぱりいけねえ。今から京へ使いを出すより、こいつを連れて行く方が手っ取り早いだろ？」

「ですが、御奉行殿に随行するならば、やはりそれ相応の者を召される方がいいと思いますが」

「堅苦しい役人を連れて旅なんかしたくねえって。考えあぐねてたら、ちょうどいい所に修吾郎が居たんで、連れて行くってだけだ」

「差し出がましい事をお伺い致しますが、赤井とは？」

「なに、旧知の仲だと言っとくよ。もっと早く新撰組に入った事を知ってたら、挨拶に伺ったんだが、便りを寄越さねえのがこいつの悪いとこだ。総長にあんたから宜しく伝えといてくんねえかい」

「はあ・・・」

「会津藩へは報せを書いておいた」

そう言って封書を畳に置くと、大石の方へと差し出した。

「ちゃんと報せておかねえと、帰って切腹を申し付けられましたじや、おいらの立つ瀬がないからねえ」

これ以上は何をどう言っても仕方がないと、大石はその封書を手にし、確かに預かりましたと懷へ丁寧にしまった。

「急ぐ旅じゃないから、京に戻る頃にはこいつの傷も癒えているだろうさ。お暇をさせちまって悪いと思うが、どうせ今帰っても役に立たないよ」

「それ、すごく辛い言われ方なんですけど・・・」

「辛抱しろ。そう言われたくなかったら、背後を取られるなんざ、相手にさせるんじゃないやねえよ」

「う・・・」

そう出られると返す言葉がない。

「ちつとばかりだが、これを持って行きな」

勝は懷から一両取り出すと、懷紙に包んで大石に渡した。

「こんな大金を頂く訳には参りません！」

大慌てになった大石だが、一度出したものを引っ込める訳には行

かないと、強引にも袂へ入れられてしまった。

「さあて、そろそろ発つとするかい」

こうして赤井は再び長州へ向かう事となり、狐に摘まれたままの大石は京への道を急ぐ事となったのである。

野村望東尼が白石邸を訪れた次の日。

「高杉様」

白石が血相を変えて部屋へ飛び込んで来たので、望東尼は、高杉の汗を拭いていたその手を止めた。

「どうなされたのですか、白石殿」

白石は答えもせず、部屋を横断すると障子を開け放った。

「小倉城が燃えているのです」

体を起こした高杉は、望東尼に抱えられるようにして立ち上がると、夜空が朱へと染まっているのをその目で捉えた。

小倉口の戦いが始まって五日後の事だった。

「よく、燃えてるじゃないか」

恐らく、あの場所に自分も立って居たかったのだろうと、望東尼はその横顔を見つめつつ思った。

「これからが大変になります」

布団へと戻った高杉に、望東尼はそう呟いた。

「後の事、頼みます」

この若い志士の命は幾許の時も残していないだろう。それを高杉も解っているのだと、悲哀の影に涙腺が緩む。

「泣かれますな・・・これから辛い思いをするのは俺ではありません。この国と、それを支えて行かねばならぬ小五郎なのです」

「ええ、よく解っておりますとも。高杉様の頼みはちゃんとこの望東尼が聞き届けました故、あとは養生を重ねて下さいますようお願い申し上げます」

それから数日後、小倉から報告のために、和奈を連れた武市と原田が白石邸へとやって来た。

布団は片付けられ、幾分血色が戻った顔に笑みを浮かべた高杉が皆を出迎えた。

「小倉城を自焼せしめたのは小笠原だとの事です。奇兵隊・膺懲隊・報国隊は、逃れた兵を追い呼野の金辺峠へ向かいました。手ごわいですよ、小倉の島村殿は」

原田が淡々と小倉での経緯を説明し、最後にそう括り終えた。

「ご苦労だった。ゆっくり休め、と言いたところだが、どうせすぐ戻るんだろう？」

「はい。山縣さんが居るので心配はないですが」

長府藩の頭が戦中に休んでいたとあっては、藩主毛利元敏に顔向けできぬと、原田は戦場へと戻って行った。

「武市さんのそんな顔を見るのは、ここへ来て何度目だ？」

「そう言ってくれるな」

和奈が原因なのは聞くまでもない。

「会わせたい方居る」

高杉がそう言うのと、隣の部屋との境にある襖が静かに開いた。そこにはたおやかな笑みを浮かべた尼僧が座っていた。

「お初に御目にかかります。私は野村望東尼と申す尼僧にございます、以後お見知りおきくださいませ」

小首を少し傾げた後、静かに頭を下げた。

「志士達の母上の様な方だ」
おれ

「まあ、嬉しい事を仰ってくれるではありませんか、高杉様」

安政六年、夫を亡くした望東尼は受戒をし、勤皇家として数多の志士をその懷へ匿って来た。高杉も勿論その一人である。京都成就院の住職であり、薩摩の西郷とも懇意である勤王僧月照上人なども、この望東尼の許へ隠れ隠れ有る住んでいた時期があったほど、藩に

関わらず多くの志士達の拠り所となった女性である。

「望東尼様は歌人でもあられる」

望東尼と居る時の高杉は年相応の青年に見える。言葉遣いもいつもの高杉らしくない、低めだが響きのいい声色だ。

「私は長州藩遠近おちこちふし附士桂木宗次郎と申します。これに居るのは藩士の村木和太郎です」

「よろしくお願い致します、望東尼様」

母上の様な方、と言った高杉の気持ち解る気がした。ただ座って居るだけなのに、この部屋を穏やかな空気が包み、心地よい空間を作り出している。

先ほどまでそわそわしていた心が落ち着いていくのを、和奈ははつきりと感じ取っていた。

「和太郎」

「はい？」

「戦はどうだった？」

どきり、と胸が鳴る。

それを察した高杉の深い吐息が耳に響いた。

語らずとも、武市の様子である程度は察しがついていた上に、動揺を見て取られてしまっている。

「おまえは暫くここで暮らせ」

「でも」

「でももへったくれない！俺がそう決めたんだ、四の五の言わずここに居ろ！」

何かしら含む思いがあるのだろうか、武市はあえて口を挟まなかった。ただ猛進するだけでなく、多くの物事を吸収しそれを活かす術を心得ているのが高杉晋作と謂う男なのだ。

「ここは従うが良いだろう。白石殿には私からも頼んでおく」

武市にもそう言われてしまったのでは、もう反論しても結果は変わらないと諦めるしかない。

和奈の視線がちらりと向いたので、望東尼は目を閉じてゆつくりと頷き返した。

「・・・こほっ・・・こほっ」

咳に顔を歪め、握った拳で口を塞ぐ。

「さあ、まだ高杉様は多忙な身、休める時がありますならば、体をお休めになられる事です」

望東尼と共に部屋を出た和奈は別室へと案内され、武市は小倉へと戻ると告げ、そのまま白石邸を後にした。

其之三 寺田屋騒動（前書き）

其之三 寺田屋騒動

賊を滅ぼし正を興すは我が功に非ず 幸い驥尾に従いてこの身を全うす

豊公の事業君怪しむことなかれ 一片の機心今古同じ遊撃軍の諸君を訪うて即吟す

東洋一狂生東行

小倉城炎上の後、大宰府へ戦況実見の報告に戻っていた中岡は、その足を長州へと向けていた。

共に行くのは薩摩の伊集院直右衛門である。

寺田屋騒動で謹慎となっていた伊集院は赦免を言い渡された後、薩英戦争へ参加。西郷の帰藩後は、志を胸に閉まったまま、他藩の志士と交流を重ねて続いていた。

「しかし、土佐が今動くとは、まだ信るにたりんのだが」

土佐において倒幕志士がどんな弾圧を受けたのか、中岡から聞き及んでいた伊集院の危惧は深い。

「信じるものにも、こうして長州へ来ることになってるじゃないですか」

乾の話を聞いた西郷は、桂への報告もあると伊集院を呼んで共に行けと言ったのだ。西郷が同行させようと思いついたのは、彼が大久保と自分が結成した精忠組の一人であり、活動する場所を伊集院が探していたと知るからだ、中岡は考えている。

「俺とて、薩摩が幕府寄りだと思われているのは気が良いものではない」

ここへ来て土佐が動き始めた。

薩摩と長州が手を組んだのは、旗頭である桂と西郷との間でのことで、実際に両藩が表立って手を結びましたとは、まだ公表されていない。が、この三藩が大挙して倒幕に動くとなれば、流布した幕府寄りという名札を薩摩藩から取り除く機会となる。伊集院が喜ぶのも当然と言えば当然のことだ。

「長州はすごいなあ」

伊集院は時折そう口にする。

たった四千という人数で幕府に抵抗しただけでなく、連戦を上げ、ついに小倉を陥落させるに至ったのだ。伊集院でなくとも感服する者は多いはずだ。

「背水の陣すら構えられなかったこの身だが、やっと死ぬべき場所へ出て行ける」

出立の日、伊集院は明るい笑顔でそう言っていた。

藩兵千名を持って上洛した頃の久光には、倒幕の意志などなかった。公武合体を敷き、事を順序立てて行うのが優先だと考えていたのだ。

大久保もまた、いずれ倒幕に藩政を傾けるため、久光の唱える公武合体を成してからのおち、意のままに動く側近で久光の周りを固めつもりでいた。そうしておいて、西郷に重きを置き、倒幕へと掛かるつもりであった。

しかし当時は、公武合体はもはや時代遅れだという風潮が、顕著に出始めていた時でもある。

長州藩長井雅歌が【航海遠略策】を唱えると、薩摩や長州ら志士達はこれに反発した。

公武一和献策と言われるが、中身を明かせば開国論である。尊王攘夷を掲げる志士にとって、良しと領けるものではなかったのだ。

そして文久二年四月二十三日、薩摩藩尊皇派が薩摩藩の主父島津久光によって鎮撫された事件が起こった。

久光が千名の兵をもって上洛するとの報せが京へ届いた。開国論を退けたい志士や公卿達が、とうとう久光が立ち上がった、と喜んだのは言うまでもない。

志士達は久光の上洛に合わせ、これを擁立して拳兵し、王政復古を実現させようと集まっていた。

薩摩藩士有馬新七ら薩摩藩士達と、真木和泉らは手始めにと、関白九条尚忠・京都所司代酒井忠義邸を襲撃する計画を立てたが、志士達と久光のすれ違いが露見する事件が起こる。

襲撃計画を知った久光は、志士達を扇動したとして京に居た西郷を更迭、有馬達を伏見藩邸へと軟禁した。

動くなと言われても収まりのつかない有馬達は、藩邸を脱走してしまった。

久光の怒りは大久保へと向けられ、志士達の説得に当たるが失敗、久光は鎮撫隊を寺田屋へと向かわせた。

鎮撫隊として寺田屋に向かったのは剣豪の大山綱良、奈良原繁、道島五郎兵衛、山口金之進ら九名である。

寺田屋へ入った大山らは、有馬を探し、一階の部屋から顔を見せた有馬を見て入って行く。

話を切り出したのは奈良原で、久光の胸の内が如何なるものであるのかを説き、藩邸へ戻るように言った。

「徐々に殿様のお考えが、京に受け入れられつつあった、ここは一つ、同志を連れて藩に戻ってくれんか？」

「こん計画はもう止まれぬとこいまできとっと。薩摩だけじゃなか、他藩の者もいうのだ。薩摩だけがまた止むうわけにんかんのだ」

有馬らは、青蓮院宮からの命もすでに受けているから、それを終えてから帰ると答えた。

藩主代理として上洛した久光の命を受けて来ているだけに、奈良原はその答えを受け入れる訳にはいかなかった。無論、奈良原にも尊王の意志はある。が、藩主の父である久光の命よりも、朝廷の命

に従うと言った有馬の意志は解らない。

「聞いてもらわなにゃ、切腹でござすぞ」

それでも有馬は青蓮院宮の命が先だと言う。

「いけんしても聞けぬと申すのか」

「聞けぬ」

「殿様の命にござすぞ!？」

このやり取りに腹を立てたのは奈良原ではなく、その後ろに居た道島だった。

「いけんしても命にな従えんと言うのか!」

「くどい! 宮の命があうといっておいもす! そんな命が先だとゆておいもす!」

有馬の横に居た田中謙助がそう叫び返した。

それを聞いた道島は剣を抜き放った

「上意である!」

そう叫んでから、顔を乗り出していた謙助の頭から下へと、剣を振り下ろした。

上意討ちの口火はそうして切られた。

部屋へと入った山口は、その経緯を知らずしてその場を見たため、双方が斬り合いとなったと、目の前に座っていただけの柴山を背後から斬った。

それを見た有馬も剣を抜き、道島と斬り合いになったが、何度か剣を重ねた時に有馬の小刀が折れた。

一度火がついたら、なかなか自分では消せないのが薩摩の男である。有馬は対峙していた道島の体を抱えると、思いつきり壁へと突進した。

助太刀にと、側まで来ていた橋口吉之丞を見つけた有馬は叫んだ。

「おいごと刺せ! おいごと刺せ!」

有馬の気迫に推されたのか、吉之丞は言われるままに道島を抱えた有馬の背中へと、剣を突き刺してしまった。

有馬の背中から道島の体を貫通した剣は、壁に食い込み、そのまま息絶えた。

奈良原は必死に二階にいるだろう他の同士へ、久光が我等と同じ意志を持っていること、すでに策は敷かれつつあることを説いていた。

刀を置いた奈良原は、斬るつもりはない事を強調するが、反応は返ってこない。

そんな事になっているとは知らず、出かけていた伊集院は寺田屋へと戻り、目前に広がる光景に絶句した。

少し出ただけなのに、現場は壮絶な状況と化していたと言う。「奈良原さんが必死に説明してくれた。話しを聞いた俺はここで抵抗しても仕方なしと、従って藩邸に戻った」

他の志士は、いつまで待ってみても下りて来る様子を見せない。

これではまた同士打ちになると、一階奥座敷に居た真木和泉らに事を説明し、同志を説得してほしいと頼んだ。

奥の茶室に居て、玄関先の騒動に気付かなかった真木は、奈良原の話しと現状を見て愕然となった。

幸か不幸か、斬り合いになっていた時、牛車が大きな音を立てて通り過ぎて居たため、喧騒に気づかなかったのである。

有馬達は君命に背いたため討ち取った事、皆を殺すために来たのではなく、説得しにやって来たと聞き、今回の計画が失敗に終わったのと思った真木は、奈良原の申し出を受け入れた。

こうして二階に残っていた薩摩藩士達は真木の説得で投降し、他藩の者もそれぞれ国許へと帰され、伊集院も謹慎処分となった。

悲劇だったのは、討手を受けた者も、討手となった者もみな西郷や大久保と同じく精忠組に所属していた者達であったという事だ。

この寺田屋騒動で、上意討ちされたのは有馬や柴山愛次郎・橋口伝蔵と壮助ら六名、二人が重傷を負っただけで助かったが、翌日に君命に背いた罪で切腹を申し渡された。

鎮撫隊側は道島が即死し、奈良原と山口金之進が負傷したが、残りの者は無傷で事件は終わった。

「壮助が介錯についた奈良原さんにこう言ったそうだ。おい達が死んでん、おはんらがおう。こん先の事は、おはんらに頼む。」と

志を最後まで貫けなかった無念の言葉に、奈良原は泣きながら介錯を務めたと、伊集院は言った。

「あの頃は京の情勢がころころと変わっていった。京と薩摩とでは距離があり過ぎたのも、あの惨劇を生む原因だった」

伊集院の話では久光と公武合体を目指していたはずなのだ。それが最後と対立する形で倒幕のためと、色々と力添えをしていくという。

中岡には大久保の真意が判らなかった。

「それは大久保さんだからだ」

伊集院は言う。

「西郷さんも大久保さんも、俺達と同じ様に貧困の時期を経験している。二人が進めようとしている物は同じなんだが、二人が取る手法が違うだけだ。と言う俺も、後々になって解ったんだがな」

西郷は先の藩主島津斉彬のお気に入り、藩士からの信望も厚いが、大久保にはその様なものはない。だから一から駆け上がって行くしかなかった。

京へ初めて出たのも、久光が藩主となった忠義の後見人となつて、その傍らに座するようになってからだと言う。

そのせいで、久光が嫌いな西郷とも何度か折り合いが悪くなりはしたが、二人は本来良き友である。心音を語ればお互いを理解できた。

遮二無二走る西郷の身を案じ、一番帆走したのは大久保であろう。そんな大久保を、西郷も良き理解者であり一番の友としている。久光に取り入ったのもすべては倒幕へと、藩政を動かす下準備であったのだと、西郷が解ったのはその事件よりもまだ随分後の事だった。

冷徹と呼ばれる大久保にも、西郷と同じ熱い志があったのだ。

「俺の知る大久保さんとは随分違うなあ。意外としか言いようがありませんよ」

「残念なのは、信望が西郷さんほどない、と言う事だ」

楽しくない話しをしてしまったと、伊集院は笑ったが、中岡にとっては良い話しでもあり、居た堪れない話しとなった。

朝から竹刀を振るのは何時以来だろうと、白石邸の庭先で素振りをしながら和奈は過去に思いを馳せた。

幕末へとやって来た頃は、自分の立つ場所が定まらず、ただ周りに流されて動いていた。時間の経過とともに、少しずつ自分の進むべき道を見定め始めている。今では、現代で過ごした時間の方が夢なのではないのか、そう思う時さえあった。

自分の魂は、桂と高杉に縁が深い吉田松陰という人のものである。はつきりとそう断言などできない。夢に出で来る男が名を名乗ったのではなく、桂達が松陰ではないかと言うだけなのだ。だが、違うと否定することが和奈にはできなかった。

「和太郎さん」

響きのいい声に、竹刀を振る手を止めて振り返る。

「望東尼様」

縁側に立ち、両手を前に揃えた尼僧が軽く頭を下げた。

汗を拭き、竹刀を小脇に抱えて縁側へと駆け寄る。

「熱心にございますね」

「竹刀を振っていると、不思議と心が落ち着くんです」

「良き事でありましょう。どうでしょう、お茶をご一緒頂けませぬか？」

着替えをしてきますと、和奈は部屋へ戻って行った。

体調が良くなったと言う高杉は、今は岩国へ出かけいる。桂に代わって岩国藩主吉川と戦の後始を相談しに行ったらしい。

「本当に、じつとなさってはおられない方です」

望東尼は、我が子を語る母のような面差しでそう言った。

「小五郎さんは大変だと言うのに、ちっとも聞き分けてくれなくて」「そう見えますか？」

「え・・・はい」

「あの方は誰よりも一番に桂様を案じられております。我儘を通してでも成す事は、桂様を困らせる事はあっても、藩のためになると考えられてのもの。それを桂様もちゃんと理解してさしあげておいんです。お二人が進むべき道は多少違えど、目指す方向は同じなのです」

「望東尼様は、高杉さんとお付き合いが長いのですか？」

「いえ。長いとは言えませぬ。高杉様と始めてお会いしたのは、拳兵される少し前です。高杉様を亡き者と考える者達から身を隠すため、私の所へ参られたのです。それからです」

望東尼よりも前に高杉と会っている自分とは違い、ここまで高杉を深く理解しているのかと驚くしかなかった。

「僕はまだまだです」

はあゝっ、とため息をついた和奈に、望東尼は諭すように語る。

「多くの事を一度に理解しようとするのは、才のある者でも難しいのです。無い者にとれば無理と言えましょう。一つを知り、それはどうしてかと考える。さすれば次に知るべき事が見えて参りましょう？」

「なんとなくは、解ります」

くすりと、望東尼は笑う。

「なぜ鳥は空を飛ぶのだろうと疑問に思った時、その理を知るには鳥という生き物を知らねなりません。鳥は翼があるゆえ、空を飛べるのだと知る事ができます。あとは翼を広げて飛ぶ方向を見定める事だけ」

「飛ぶ方向・・・」

桂と高杉の飛び方は違っても、翼を羽ばたかせて行く方向は同じなのだ。

（私は高杉さんの志に導かれてここへ来た）

それが真実なのかは解らない。だが、要因であるのは間違いないと思えた。

「貴女もまた同じなのです」

えっ？ と顔を上げて望東尼を見る。

「己を知る事で、己を理解するのです」

和奈の顔が引きつった。

高杉はこの女性に狂気の事を話したのだ。だから残れと言ったのだ。

「難しい事です」

「ええ、そうでしょう。そう言う私とて、未だ己の全てを知るには至っておりません。色々な自分に気付かされる毎日なのです。ですが、気付ける者は幸いだと思っております。良い面だけではなく、悪い面に気付くことができれば尚更です。直してゆく事ができますゆえ」

「自分を知る・・・」

「貴女にはお話しておくべきですね」

「なにを、ですか？」

聞きたくない言葉を望東尼は口にしようとしているのではないか、そんな不安が心を過ぎる。

「高杉様の余命はもう幾許も残ってはおりません」
やはり、と和奈は目を閉じる。

「貴女には責任がございます」

閉じた目を見開き、望東尼を見つめる。

「高杉晋作という一人の男の人生に少なからず関わったのです、最後まであの方の人生に関わる責任があります。確りと正面を向いて目を背ける事なく、あの方を見てあげて下さいませ」

人生に関わる責任。

「高杉様も、そう望んでおられます」

「・・・・・・」

「それは、桂様の事を貴女に託したいという心からですよ？」

「え・・・・」

高杉の言葉が蘇ってくる。

【俺が壊した世の中を立て直すのは小五郎だ。俺が居なくなったら、だれが小五郎の支えとなる？ 本当のあいつを誰が解ってやれる？

だから、誰か小五郎を助けてやってくれと、散る桜に願った】

その切ない言葉を思い出し、涙が伝い落ちた。

その強い願いを叶えるため、高杉晋作という一人の人生を看取るため、そして後に残される桂小五郎の支えとなるために自分は時を超えたのか。

「貴女は、自分の内にある狂気の理を知らねばなりません」

「は・・・・い」

「その理を知るまで側に居れぬ故、貴女の力になってやてほしいと高杉様は私に頼まれたのです。貴方には支えとなる方が居られるとお聞きし、一度は断ったのですが、一人でも多いほうが宜しいと言われるので受けさせて頂きました」

死が鎌を振り上げててもなお、他人を気遣うのが高杉の性分なのだろう。

「望東尼様、私は――」

「案じなさいますな、すべて最初からお話しは伺っておりますゆえ」
時を超えた事も話したのだ。それは高杉が望東尼に対し、全幅の信頼を寄せているからに他ならなかった。

「信じられたのですか？」

「世には人智の及ばぬ事象があります。貴女の事もその内の一つにございましょう。信じるか否かというより、私はすべてを受け入れる、ただそれだけです」

誰も彼も生きる事に必死であり、死に対しても志を掲げる中で受け入れている。勿論、全ての人間が同じとは言えないだろうが、自分の周りに居る人は皆がそうだと思えた。

皆、何かを成そうと志を立て命を懸けて貫く。現代には少なくともしまった感情だろうが、この時代には大勢の人がその思いを胸に生きている。

「皆さんと居られて・・・ほんとうに良かったと・・・」

「我慢なさいますな」

一緒に生きて行ける事を良かったと、皆と会えて良かったと、顔を望東尼の膝の上で泣いた。

長州入りした中岡と伊集院は山口城下へ入った。

伺いの伝令は出してあったので、関所に迎えだと斉武隊の太田が来てくれていた。

「わざわざありがとうございます」

「なに、気にする必要はないですよ」

関所を出た三人は、桂の待つ屋敷へと足を進めた。

「後で下関へ行くつもりです」

高杉の容態が気になっていたので、太田の口から、当の本人は駆け回っているから居るかどうかわからないと聞かされる。

「はあ！？　なんだって高杉さんはじっとしてないの！」

「俺に聞かないで下さい」

龍馬といい、行動に予測を付けない人多すぎると怒る中岡だったが、自分もそうなのだとはいないらしい。

幕府が軍隊を進行させ、石州口と芸州口では、戦禍の対応に各藩

と長州の主だった人物が当たっているが、一番被害の大きい小倉口では、山縣率いる奇兵隊が駐屯したまま対応しているとの事だった。「総監だった自分が行かなくてどうするって、各方面へ走ってますよ」

「たあ！　ほんとにもう！」

「落ち着きがないのは慎之介と同じだな」

伊集院がそうとどめを差した。

「！」

「あははははっ！　確かに石川さんもじっとしてない」

笑い転げてしまった太田を無視し、膨れっ面の中岡は急ぎ足で道を急いだ。

其之四 嚴島

矢掛を出た赤井と勝は、早籠で西国街道を備後国から安芸国廿日市宿へと向かっていた。

この辺りの西国街道は山が海岸へと大きくせり出しているため湾曲しており、海岸を通ることが出来ず山間の峠を越えなくてはならない。

芸州口へ征長軍が進行した道であり、地形的に戦略的に重要な地であったのだが、玖波まで後退した軍は、この地形を利用して巻き返しを図る事はせず、休戦を申し出ていた。

芸州口に待機していた遊撃隊の石川は、宿場に幕臣が来ているとの報告を受けて廿日市宿場へとやって来ると、勝に面会した。

「残念ですが、長州へお連れすることはできません」

勝と赤井を前にして、石川はそう告げた。

止戦について談義をするため、一橋慶喜の内命を受けて来たのだと言っても、長州へ入るのは容易ではない。まして大勢を連れて来ては警戒されるばかりで、話しどころではないだろうと、勝は一人で大坂を発ったのだ。

「今藩は大事にて藩主共々多忙を極めております。申し訳ございませんが、日を改めては頂けませんか」

「某が幕府代表としてこちらへ来ると、報せは出しておいたよ」

勝は襖の向こうに居る気配に気付いた。

「今回の戦はおいらも良しとはしてねえ。が、おまえさん達に非がない訳じゃない」

石川の顔色が変わる。

「幕府も長州もこのままいがみ合ってる時じゃないのは、よく解っているさだろう？」

勝は石川へではなく、置くに隠れている人物にそう言った。

「石川」

声が動いた。

「少し失礼します」

石川は襖ではなく、廊下側から出て行った。

襖の向こうに居る人物が誰なのかは解らなかったが、応対に出て来た石川が常に横を気にしていたのは確かだ。となれば、それ相応の役職に就いている人間だろうとの推測は立つ。だから、その人物に話しかけたのだ。

（解ってくれたらしいが、どう出るかねえ）

直ぐに戻って来た石川は、勝にいつへしま厳島へ渡ってくれるように言った。

「急ぎ旅じゃない、そうさせてもらうよ」

石川が部屋を後にすると、勝は脇で怪訝な顔付きのまま座っている赤井を見て笑った。

「それじゃあ、戦が起こるのも無理はないねえ」

その言葉の意味が赤井には解らない。

「話しの出来る人間が、襖の向こうに居たんですよ」

解ってたさ、と勝は言った。

「引っ張り出したらいいじゃないですか」

「おまえさんは何も解っちゃいねえ。そんな事をしてみな、長州はおいらの話しに耳なんざ傾けねえで、剣を抜くよ」

そんな事になったら来た意味がないと、勝は険しい顔を見せた。

「こちらが動けば剣を抜く用意で戻って来た、と言う事はあの人にとったら大事な人だろう。直に話しができる相手なんだろうが、そうだと襖を開ける訳にはいかねえ。それじゃあ話しに来た意味がないってもんよ」

だからおまえさんはもっと多くを学ばなければだめだと、また勝は言った。

その夜、勝はなかなか寝付けないため、縁側に座っていた。

「多くの血が流れちまった」

カサリ、と草が揺れた。

「本意ではありません」

「そうだろうよ。本意だなんて言われたら、おいらも本腰を上げておまえさん達を叩きにかからねえといけなくなる」

月の光りを背にして、男が現われた。

「多くの友の志を背負い、それが志の支えとなっております。後悔はしておりませぬ」

「・・・おまえさんは、どこへ行きなさると言うんだい？」

「幕府に信義を見れぬ以上、このまま進む所存にございます」

「いつからだろうねえ、こんな頼りねえ国になっちまったのは・・・
おいらは幕臣だ。幕府には恩義がある身だから、おまえさんの志を受け入れても、その立場は変わらねえ。そこを解ってくれると助かる」

「・・・」

「名を聞かせちゃくんねえかい？」

「谷梅之助と申します」

「ありがとよ」

その男が高杉晋作だと、勝には解った。勿論、龍馬と高杉の間柄も知っている。

「あいつとおんなじ目をしてるね、おまえさん」

あいつ？ と高杉が首を傾げる。

「おいらを斬りに来た時とおんなじ目だ」

その言葉で、誰のことなのか解った。

「生き急いだらいけねえよ。生きてこそその命だ、粗末に使ったらお天とうさんに顔向けできねえ」

「・・・心しておきます」

勝は知らなかった。劳咳という病に高杉が冒され、余命少ないものだと。

「いい月じゃないか」

高杉が消えた後、勝はそう言って夜空を見上げた。

翌日、勝と赤井は用意された船で厳島へと渡った。

厳島は【安芸の宮島】とも呼ばれる廿日市の沖に浮かぶ小島で、松島・天橋立と並んで日本三景の一つであり、海上に浮かぶ朱の厳島神社大鳥居でよく知られている。厳島神社は、平安時代末期に平清盛が厚く庇護したことでも有名である。

松岡文右衛門の料亭遠翠楼えんすいろうに宿を取ると、長州側の代表を待った。

夕刻になると夏の日差しが幾分和らぎ、開け放たれた部屋へと涼風が通る。

「待たせてしまったね」

屋敷に着いて半刻ほど経った頃、桂が姿を見せた。

「忙しいのに申し訳ありません」

「いや、薩摩からの客人だ、時間を割くのを憚る訳にはいかないじゃないか」

伊集院は丁寧に自分の名前を告げると、早速話しを切り出した。

「京都詰めの大目付一人が動いただけに過ぎず、まだ土佐藩総意での申し出てではないと、大久保さんは土佐の動きに懸念を示しておいでです」

それは桂も抱く疑問だった。

何しろ乾の後ろに居るのはあの後藤象二郎である。公武合体を推進め、山内容堂を拝して土佐勤王党への弾圧を行った張本人とも言える人物なのだ。その男が、乾に説得されて倒幕へと鞍替えしたなど、そう簡単に受け入れられるものではない。

「西郷さんは納得してしまい、土佐が動く乾殿が確約したと言って、四侯会議の実現に動き出してしまっています」

伊集院は書面を畳に開いて置いた。

「これがその四侯です」

松平春嶽、島津久光、山内容堂、伊達宗城の名が記されている。

「幕府からは一橋慶喜公をを列席させます」

「ここまでお膳立てができていたとは、驚き以外にないね」

と言うが、啞然とするでもなく、驚くでもなく、へえ、と言い出しそうな顔で紙を覗き込んでいる。

「しかし、見れば見るほど膝を付き合わせたくない面々だね」

そう笑いながら桂が言う。

「笑えないと思うですんけど・・・」

中岡が笑えないのも無理はない。容堂を除く三名と慶喜の因縁は深いのだ。

島津久光は、尊王攘夷を掲げ井伊直弼を失脚させるため上洛しようとし頓挫し、藩内において同士討ちとなる事件を起こしている。

山内容堂は公武合体を持って幕府寄りを進め、後藤と共に藩内の志士の弾圧を経て来た。

伊達宗城は、藩政に及ぼす影響が強く、安政の大獄で隠居を余儀なくされた身でありながら西欧化を推し進め、長州の大村を招いて富国強兵政策を取っている。

松平春嶽は龍馬に勝を紹介した人物で、徳川家定の死去により將軍跡継ぎに慶喜をと推進めたが、井伊の策略で頓挫、不登城の罪で隠居せられていた。だが井伊暗殺によって幕府政策が転換したため、再び幕政へ参加していた。

八月十八日の政変後、参預会議体制を敷いたものの、参預諸侯間で意見の不一致が多く、それに危惧した朝廷側は賀陽宮に事態の打開を申し渡した。

賀陽宮は参預諸侯を自邸に招いて一席設けた。だがこの席で泥酔した慶喜は、島津・松平・伊達に対して、「天下の大愚物・大奸物であり、この三名と後見職である自分とを一緒にしないでほしい」と言い放ったのだ。

これにより久光は参預会議を見限ってしまい、慌てた春嶽と薩摩

藩家老の小松帯刀は慶喜との関係修復を計る中、ついに容堂も呆れてしまい京を退去する事態となってしまう。

対立を招いた慶喜自身も、参預を辞任してしまったので、参預会議は体制が機能する以前に崩壊してしまったのだ。

「この面子を考えたのは西郷さんじゃなくて、大久保さんですよ」
その顔から笑みが途絶える事がない、どうやら桂は楽しくて仕方がないらしい。

「これで本当に四侯会議が功を奏すなら、大したものだよ」

「桂さん、それ本気で言ってます？」

「おや？」と、中岡を見た桂は満笑を浮かべて、勿論、と言った。

「残念なのは、この席に僕が立ち会えない事だよ」

やっと笑みが消え、今度は本当に残念だと言わんばかりに眉間を狭めた。

「長州はまだ朝敵のままですから・・・」

「ん？ ああ、長州の列席がないのを残念だと言った訳ではないよ。是非とも、この五人の会談を見たい。さぞかし面白い会議となるだろうからね。多分、大久保さんも同じ気持ちでいるんじゃないかな？」

伊集院へ視線を向けると、その顔が頷いて、同じことを言われた、と答えた。

「・・・俺、絶対桂さんにも楯突かない」

「あははっ。それは結構。そうして頂くと、僕も色々やり易くなるよ」

しまったと、言った後に後悔しても始まらなかった。

話しが途切れた頃合を見計らったのか、和奈と武市が姿を見せた。
「白石さんの所に世話になると、晋作から聞いていたが？」

小倉から戻った武市は、高杉が芸州に出かけた事と、中岡が薩摩の者と長州入りの事を聞き、望東尼の許可を得て和奈を連れ急いで来たと言った。

「岩村くん達は？」

「山縣くんの手伝いをするに残った」

「それは助かる」

「おまえがなぜ薩摩の者とここへ？」

中岡に問いかけ、土佐が動くと言えられた武市の表情は堅くなる。

「山内公が・・・」

「思うところはあると思うが、土佐が倒幕へと動くなら僕は反対するべきではないと考えている」

細部は違えど、敵対とした薩摩を手を取り合った経緯があるのだ、武市の心情は桂もよく解る。

「勿論、私とて馬鹿ではない。が、心から喜べるものではないのは確かだ」

多くの同士が志半ばで死した。その原因を作ったのは己の手腕の至らぬせいだと、武市は今も悔いている。

「土佐が動くのであれば、俺は表に出ない方がいいだろう」

片目となったとは言え、身近な者が見れば武市半平太と言わずとも判ってしまう。

「君はすでにこの長州の人間。それだけは覚えておいてほしい」

「承知している」

で、と和奈を見る。

「晋作には僕から言伝を出しておこう。戻った晋作が怒り出すのは明白だからね」

「ですよね・・・後が怖くなってきた・・・」

伊集院は水を差してはと、用意してもらった部屋へと下がってしまったので、その夜、久しぶりに伴食の席を広間で過ごすことができた。

「そう、望東尼様がそんな事を」

桂と武市に白石邸での会話を伝えたが、自分に関わる内容だけに留めた。

「狂気の理、か」

中岡は一切の事情を知らないの、三人の話しに疑問符を浮かべるしかない。

武市は掻い摘んで、和奈の身に起きたことを話して聞かせた。

「なんなんですかそれ!？」

「聞きたいのは俺の方だから、怒鳴るな」

「すまないね、中岡くん。伝えるべきだと思ったんだが、なかなか機会が得られなくてね」

「それはいいんですけど、和太郎がややこしい事になってるのに、龍馬さんは何やってんだか」

「あいつは頼りにならんから、放っておけ」

「そんな事ないです! 龍馬さんは優しいですし、判らない事を沢山教えてくれました。頼りになる人ですよ」

ぶんぶんと顔を振り、そう弁護する。

「それはおまえが女子だからだ。くそっ 龍馬め」

そしてこの時初めて、中岡は和奈が女性なのだと知ったのだ。

「は・・・？」

あんぐりと口を開いたまま、和奈を見る。

「あ・・・」

「そうか、中岡くんだけだったね、和太郎が女子だと知らなかったのは」

これはしまったと思いつつも、この後のやり取りが想像できたので、苦笑せずにはいられなかった。

「はあぁっ!？ 皆知ってたんですか!？ いつから!？」

「本当に五月蠅い奴だなおまえは。始めからに決まっているだろう」

「酷いですよ武市さん。以蔵くんも知ってたんすよね？ うわ、なんか俺一人だけ蚊帳の外に置かれた気分だ」

その名を使うなど、頭に拳が落ちる。

「たっあ! もう! 俺飲みます!」

置かれた銚子をそのまま口にする、ぐいっと一気に飲み干してしまった。

「もっとお酒が要りそうだね、これは」

「そう言い、桂は自分の分を中岡に差し出した。

「黙っててすみません」

「いいよいいよ、謝らなくて。事情があったのは分かるし、和太郎と一緒に居る時間も少なかったんだ、仕方ないさ」

「あっ、と中岡が背筋を伸ばした。

「てことは！？　ちよっと！　俺が和太郎を長州に連れて帰るって言って怒ったの、それですか！？」

「武市に睨まれてしまったので、それ以上の詮索は中止となった。

「桂木くん、急で申し訳ないが、明日厳島へ一緒に行ってくれないか」

「厳島？」

「ああ。実は幕府から和議交渉に勝安房守殿が来ているんだよ」

「勝さんが？」

「中岡の顔が明るくなる。

「君は残念ながら留守番だね」

「ですよね、と肩を落として調子に手を伸ばす。

「勝海舟殿か」

「勝と言えば家茂公のお気に入りだ。その勝が和議交渉に出て来た。

「何かあるか」

「土佐が動き出した事といい、勝が動く事といい、ただ長州征伐で幕府が連敗した理由だけではないと思えた。

「おまえも来るんだよ？」

「僕も？」

「面白い人物がいるらしいからね」

「高杉から、赤井が勝に同行しているとの言伝が来ていた。和奈と同じく、赤井もなにかの理によってこの時代へと来たのなら、二人を会わせる機会を多く作る方がいいと、桂は考えたのだ。そして翌朝早く、和奈達は勝に会うべく厳島へと渡った。

其之一 止戦協定

厳島に着いたが、すぐ交渉とはならなかった。

数日たつても知らせが来ず、遠翠楼で退屈な日を過ごしていたのだが、この二日ばかり、料亭の周りを、長州兵ではないかと思われる男達がうろつき始めた。

お陰で赤井はなかなか眠れず、外を警戒しながら二回目の夜を明かしていた。

「落ち着くこつた。向こうさんも、殺る気で来てるならとつくに襲つて来てるだろうからよ」

勝は暢気のんきにも、料亭の老婆に毎日髪を結ってもらっている。

三日目となったこの日、大慈院を借りて止戦交渉を行うと、報せが届いた。

「やっときなすつたか。修吾郎、おまえさんも付いてきな」

「和議交渉って、重要な話し合いですよね。俺なんかが行ってもいいんですか？」

「相手さんも三人だそうだし、いいんじゃないかい？」

いざって時は守ってくれよと、勝は大きな笑い声を上げた。

「三人って、無理です」

一度言い出したら引かないのが勝だと判ってきたので、素直に従う事にした。

「髪結ってる場合じゃないと思うんですが」

「おいらの首なんざ何時斬られてもおかしくないんだ。死に恥をかかないように、整えとくんだよ」

その言葉に驚いた老婆は手を止めた。その手は震えてしまっている。

「ああ、すまんね、つまんねえこと言っちゃまった」

勝はいつ何時も慌てる事はせず、落ち着いて行動する。そんな勝が、斬られる覚悟でこの厳島に来ている事を、その時初めて赤井は

知った。

「ほんと、縁起でもないですよ。勝さんが首取られるって事は、俺もう死んでるじゃないですか」

追討ちを掛けてしまったらしく、老婆は結った髪を確かめもせずそそくさと部屋を駆け出して行ってしまった。

用意が終って遠翠楼を出た二人は、ゆっくりと景色を見物しながら大慈院へと足を運んだ。

直接交渉に当たるのは井上多聞と広沢兵助の二人だ。広沢兵助は桂の同僚であり、事前に桂と交渉の内容について話し合っている。武市と和奈は桂と共に隣室で話しを聞くだけとなる。が、勝の話の内容如何では動くつもりでいた。

勝が書院の一室に入ると誰も座っておらず、障子の開いた縁側で井上と広沢の二人が座しているを見つけた。

「なんでい、そんなところに座ってないで、こっちへ入っておくんなせえ」

「いえ、我らは陪臣の身ゆえ、ここにて失礼させて頂きます」

これには勝も困った。

勝は負けた幕府の代表として、止戦交渉をするためにこの場に来ており、縁側に座すのは勝者となった長州の代表なのだ。このまま話しをする訳にもいかなかった。

「そんなとこじゃ難しい話しもできないだろ？ おいらは腹を割って話しに来たんだ、遠慮なんざいらねえよ」

「同席は恐れ入りますゆえ」

どうしても二人は座敷へ入る気はないようである。

「そうかい。じゃあ、ちっと失礼させて頂くよ」

そう言った勝は、足早に縁側へと出て行くと、井上と広沢の間にドンっと腰を下ろしてしまった。

面喰らったのは井上と広沢だけでなく、赤井でもある。

どうしたものかと思うが、ここは勝の行動を見守るしかない。長州の二人が動けば、斬れる位置にだけは近寄った。

「おいらはあんた達に命令しに来た訳じゃない。話しをしに来たんだ。座敷が嫌だというなら、ここで庭でも見ながら話すのもいいさ」「これは困った」

そう笑ったのは井上だった。

「春山さん、ここは中へ入ったほうがいいんじゃないですか？」

広沢の声にも笑いが混じっている。

「では、失礼させて頂きます」

無表情で縁側に座っていた二人は、一瞬にして表情を緩め座敷へと入ると勝と対峙して座りなおした。

隣室に居た桂も驚いた。

まさかこういう手で出てくるとは考えていなかったのだ。

「そうだ、確かあんたはあん時のお人だね」

片眉を上げた勝は、座った二人の内の井上を見て考え込んだ。

「ああ、そうだ」

「その節は突然の訪問にも関わらず、しじゅん諮詢を受けて頂きました」

「そうそう、そうだった」

アメリカへ渡米した際その海軍を目の当たりにして来た勝の持論は納得いく事ばかりで、勝の持つ知識の素晴らしさに感嘆したものだ、井上は当時の様子を思い出した。

家茂が上洛した折、井上は海軍塾生が集っていた大坂北鍋屋町の専称寺で勝に会った事がある。

幕臣であり開国論を唱える勝が、誰と構わず訪問する者に接し、海軍の必要性を説いているとの風潮を耳にして話を聞きいてみたいと訪ねたのである。

兵庫警衛についていた長州に、今は兵庫に長州兵を割いている場

合ではなく、夷国船が往来する国許下関の守りを強化すべしと説いた。また、ロシアやフランス、イギリスがその港を狙っている対州についても同じだと言った。

「長州は自国の守りに徹しなさるほうが、今後を考えるなにいいにきまってやね。公儀に兵庫での御役御免を奏上し、下関と対馬が置かれてゐる危険性を説いていると、おいらが言つてた申し上げればいい」

兵庫はどうするのかと聞かれたら、摂海防衛については海軍局を創り、それに必要な造船所などの施設も創るなどの策を講じるべし、と朝廷へ申し出てほしい。そう勝は井上に頼んだのである。

井上は固く約束して専称寺を後にした。

赤井は縁側よりで、勝の背中が見える位置に腰を落ち着けた。

「横に居ますのは広沢藤右衛門であります」

「某は勝海舟と申します。後ろにゐるのは随行の赤井修吾郎です」

その名前に和奈と武市が顔を見合わせた。

桂が言っていた面白い人物とは、赤井だったのだと知る。

「さて、早速だがおいらがここへ来た目的を遂げさせて頂くよ」

「この度の戦の止戦を締結したいとの事は聞き及んでおります」

「それなら話しは早い。止戦条件の一つ、幕府は小倉、芸州、石州から征長軍を撤退させる」

「それについては異存ありません」

「撤退の際、長州軍は追撃せず兵を引いて頂きたい」

ここまでは桂も想定した内容だ。双方が兵を引けば自ずと戦は終る。

「兵を引く代わりに、浜田など、長州が占拠した領地を返還して頂きたい」

これには井上も広沢も、桂の意見を聞くまでもなく難色を示した。

「諸藩は幕府の命に従って征伐に参加しただけだ。命とあっちゃ、動かない訳にはいくまい？　長州とて、無闇に諸藩の反感は買いたくないだろう？」

「その事については、私共の一存で返答できる内容ではありません」
「お二方は長州代表としてこの場に居なさるのだと、おいらは思つて話しをしてるんだがね。違ふと言うなら、話しの出来る人間をこへ連れて来てくれねえかい」

「そう言い、勝は左手の襖に目をやった。

桂がそこに居るのを、勝は知っているのだと井上は思った。

「おいらはね、いつまでも同じ国の中でいがみ合う時期はもう終わりだと、そう思つてるんだよ。列強国と対等に膝を付き合わせるには、各藩に勝手な行動を取らせず、合議制の実現を取り付けた上で、封建的分割を廃止して日本と言う国を一つしなくちゃならねえ。そちらはそう思いなさらんか？」

その言葉は明らかに桂に向けられている。

「幕臣である勝殿が、あえて幕政批判ですか？」

「批判じゃないよ。いや、批判になるのか。まあどっちでもいいさ。さっきも言ったが、おいらは腹を割つて話しがしたいと思つてる。そちらさんも、そのつもりで聞き耳立ててくれるなら嬉しいんだがね」

すつ、と襖が開いた。

勿論、桂が出るなど井上も武市も思つていなかった。話しの流れによつては、井上が席を外す手はずとなつていたのだ。

赤井も桂が出て来たので目を丸くしている。そしてその目が、後ろにいる和奈と武市を捉えた。

桂は静かに歩いて行くと、井上の横へと座った。

「やつと出てくんなすったかい」

「お久しぶりにございます、勝殿。この様な形で拝謁賜ります事、

お許し頂きたく申し上げます」

「気にする事はないよ。立場が立場だろう？ すんなり出てもらえ
るとはおいらも考えてなかったさ」

「しかし、非礼は非礼、その旨お詫び致したいと存じます」

桂は手を付いて少し頭を下げた。

井上が勝の所を訪れた翌日、桂と山縣が専称寺へとやって来た。
二人にも井上に話したと同じく海軍の必要性を説く姿に、幕臣には
ない思慮深さを持っているのに驚いた。

開国論を唱える傍ら、夷国に対する準備は絶対不可欠だと説く。
内を堅め、外敵からの攻撃にも屈しない力をつけなければならぬ。
「今夷国艦隊に攻撃でもされてみな、沿岸に設置されている砲台で
は、とてもじゃないが太刀打ちできたもんじゃねえ」

夷国が攻撃などして来ても、数万の歩兵がいるのだから大事ない
と何もせずに居れば、攻め込まれる。内事に力を入れ、海軍の増強
を図り絶対防戦を敷けば、清国のように攻入むことは日本に於いて
は出来難いと攻めあぐねる。力には力に対抗し、同位の立場で今後
の折衝を行わなければ、確実に日本という国はなくなってしまう。

「だから言って、奴さんの持つ技術は捨て置けるもんじゃねえ」

アメリカやヨーロッパに下僕のように従うのではなく、対外との
交易で益を生ませ、武器や航海術、軍艦の新技术の修得しそこに日
本に培われてきた兵法を取り組み一大共有の海局を創らねばならぬ
い。

出遅れている医術についても、蘭学・蘭方医学はもちろんの事、
洋学・西洋医学も学び国学をもっと発展させる必要が有る。そのた
めの開国を望んでいるのだと語る内容に桂も同意を覚えた。

そしてさらに後日、桂の話しを聞き、尊攘公卿として名を馳せて
いた姉小路公知が、勝の話しを聞いて兵庫を巡視したいとやって来
た。

尊皇攘夷派だけでなく、家茂もまた、実際に蒸気船へ乗り航海す

る中、勝の話す海軍必須を痛感し、摂州神戸村に海軍局創設の許を下していた。

家茂の全面的許可を得て創設神戸海軍操練所は、禁門の変後、保守派から疎んじられていた勝は軍艦奉行を罷免され蟄居ちつきよの身になると、閉鎖へと追い込まれてしまっていた。

「話しは聞いていなすったろ？」

「はい。しかし、浜田藩と小倉藩で我が軍が占拠した領地については、現段階ではまだ返還できない、とお答えするしかありません」

「深意は解らないこともないが」

「勝殿はさき程、合議制の実現、と仰った。ならば両藩の領地返還はその実現を持ってお約束するものとしたい」

抜け目がないと感嘆を感じずには居られなかった。

大久保だけではない、この桂もまたこれからの日本を背負って立つて行く男なのだと、そう思えた。

「なら、もう重ねて言う必要はないね」

「では、双方の撤退を持って止戦、それで宜しいでしょうか」

「ああ、責任をもってさせるよ。ああ、そうだ。捕虜になった幕兵だが」

「そちらも撤退に合わせお引渡しさせて頂きます」

「一手も二手も良く考えられていなさる」

「それは勝殿とて同じでありましょう。この度の会談、まさかあのようを始められるとは、私も考えてはおりませんでした」

ちりちりとした殺気が体に纏わりつく、と桂は少し口元に笑みを浮かべた。

その殺気で、和奈と武市も動ける状態には居たが、桂までの距離が遠い。

「修吾郎、おまえさんはじっとしてなよ」

釘を刺した勝は、正座していた足を崩し胡坐を組んだ。

「書付を用意するかい？ 桂さん」

「できればそう願いたい。勝殿を信用していない訳ではありませんが、この場に居ない者には、口約束だけでは納得し兼ねるでしょうから」

赤井、和奈、武市が神経を尖らせる中、勝と桂は幕軍と長州軍の双方撤兵を止戦条件として書留め、それぞれが朱印を押すことにより、この日をもって第二次長州征伐の止戦協定が締結された。

其之二 遠翠楼の夜

『廟堂原野評論を解く、勇功と智名とを称歎す、勝ち易きに勝つは孫呉の術、秋豪名月は是れ精兵』

高杉晋作

「出できてもらって助かったよ」

止戦締結を約束した書状を、丁寧に懷へ仕舞い込んだ桂は、その言葉ににっこりと笑みを返した。

「えいびん穎敏の才をお持ちである方に対して、襖越しに隠れたまま、というのは無礼と思ったまでです」

そんな大層な男じゃないよと勝も笑う。

「どうだい、一席」

酒を飲むまねをして見せた勝に、井上がずっと膝を前に出した。

「駄目ですよ、桂さん」

理由があつて桂を引き止めようとしていると、井上は桂に注意を促しのだ。

止戦協定を結んだとは言え、まだ幕府は兵を引いていないのに、それでは仲良く酒を飲むには至らない。今回の戦争が終ったとしても、幕府対長州の図式は変わりはない。

「おいらも数日後には戻らないといけない身だし、そちらさんもゆつくりしておられんのは判っているんだがね。帰りが一日延びたところで、日本がひっくり返る訳じゃないだろう？」

「有り難くお受けさせて致します」

龍馬が勝に赤井の素性を話したのではないか。そう疑念を抱いている。

もし勝が、龍馬から未来から来たと聞いて、何かしら思惑があり、京へ帰ったはずの赤井を連れて来たのだとしたら、その意図を知る

必要があると、勝の誘いに乗る事にしたのだ。

「桂さん！」

腰を浮かし、半分怒った口調で井上が叫ぶ。

「桂木くんが居るから心配はないだろう？」

「ですが・・・」

桂木の腕も、桂の腕前も井上は十二分に知っている。が、幕臣がたった一人で敵陣に乗り込んで来るなど、到底考えられるものではない。だから井上は数日前から、山縣に頼んで奇兵隊数名を先行させ、桂の逗留する料亭の周囲を見張らせて居たのだ。結果、幕兵が随行している様子はなかったが、念には念を入れるに越したことはないと考えている。

「この二人も一緒に宜しければ、同行させて頂きます」

縁側に近い場所で殺気を放つ赤井に、緊張を崩せず座って居た和奈と武市の方へと、顔を傾げる。

「断る理由はないさ」

渋る井上と広沢に先に戻るよう言い、和奈達は勝の逗留する遠翠楼へと場を移した。

厳島には、潮が満ちると社殿下部が海水に浸かる厳島神社が在り、台地から隔絶されたその光景は、最も幻想的なものとなる。

平安時代に建てられた厳島神社は、平清盛の援助を受け、かなりの信仰を集めていた。戦国時代に、厳島の合戦で毛利元就が勝利を手中に納めた時から、この島は長門・周防国の宝となった。

厳島の合戦でも、長州が少数でも戦へと赴く歴史を伺う事が出来る。

防長両国大名を暗殺した家臣、陶晴賢配下の兵三万名対し、元就は五千名の兵を持って知策を巡らし、最後には勝利を得た。

農兵こそ参加していないが、彼らの原動力が兵の数ではなく、その胸に抱く信念であるのは否定できない。集団指導体制を敷いた元

就の手腕が、今日に受け継がれ、独裁体制を敷く藩との違いとなっていた。

桂と勝は、背後でそれぞれの想いを持って座る和奈と赤井の気配を知りつつも、緊迫した空気の中、平然と酒に手を伸ばしている。

「落ち着かねえから、いい加減にその気をなんとかしたどうだい」

「和太郎も、出された物はちゃんと食べなさい」

出された膳に一つも箸を付けていないのは二人だけである。

「この状況では無理があるだろう」

武市はそう苦笑する。

「やれやれ。話しをする前からこれでは、その内鞘の中身を抜きかねないね」

そう言われても、桂に向けて殺気を放っている赤井を前にして、頂きますと箸を持てたものではない。

「あはははっ。こりゃあ飲むより先に話しちまった方が楽かも知れないねえ」

勝は二本目の銚子に手を伸ばした。

「その様ですね」

「何とお呼びしたらいいかな」

「江戸孝助で結構です」

江戸は桂の変名の一つである。この他にも、臼田幸助や新堀松輔といった名を十種以上使い分けている。

「江戸さん、だね。色々忙しい方の様だが、ここでその話しはやめとこうかい」

「ご配慮、痛み入ります」

国内とは言え、今は長州藩筆頭として藩政に携わる身だ。その桂が幕臣と仲良く酒を共にしていたなどと噂が流れては、今後の藩政にも影響がでるだろう。桂の名前は口に出来ないと勝は思ったのだ。

「さて、何から話したらいいかねえ」

「話しの前に、一つ確かめておきたい事があります。勝殿は今、幕

臣の身でここに居られるのですか？」

「そっちの用は済んだんだ、おいらは勝海舟として話していると言つとくよ」

それを受けて、桂は二人の事をどこまで知っているのかと問うた。
「修吾郎から聞いた話しは全部じゃないだろうが、ここへやって来て新撰組に入った経緯だけさ」

龍馬ではなく、赤井本人が口にした。と、桂は自分が抱いていた不安が、現実のものとなっている事に悲哀を覚えた。

(やはりこのまま幕府側に置くのはまずい)

そう改めて思ったのも無理はない。

「なぜ勝殿とその男が一緒に？」

「修吾郎とは梅太郎を介してね。ここへ来る途中、京へ帰るこいつを捕まえたんだよ。話しを聞き始めたら何か様子がおかしい。だから話してみるかい、と聞いたんだ。なにせ、おいらはあいつから預かったただけ聞いたただけで、複雑な身の上話しなんざ聞いちゃいなかったからね。正直、驚いたよ。ここは一つ、連れて行くがいと、来たわけだ」

「それだけの理由で？」

「そう言うが、おまえさんはどうしてなんだい？」

そっちもだろう、と勝の目が和奈を捉えたが、そう返されても桂は答えられない。

やりにくい相手なのは確かだった。

「含んでちゃあ、先に進まないよ」

「本当に、貴方には適いません」

単身で敵国へ乗り込んでくるだけの度量も、知才も持ち合わせている。

「おまえさん、こいつを狙ったんだろ？」

論点を変えられた桂は表情を強張らせた。和奈には刺客を差し向けたとは話していないのだ。

「狙った？」

和奈が口を開いて桂を見たので、急ぎすぎたと勝は笑みを消した。
「今、俺は四番隊組長の任に就かせて頂いてます」

赤井の声に視線が集まる。

「俺がそれを受けたのは、前組長が切腹となったからです。その原因となったのは、楠という長州の間者が、貴方の命令で俺の命を狙った事です」

楠が松原の息子であり、我が子が赤井を狙って、新撰組内部の情報を聞き出し、見廻り中に襲撃して来たからだと告げる。

自分のせいで仲間が切腹となってしまった。だから赤井はその責任を感じ、桂に対していつでも斬る覚悟のまま、殺気を放っているのだろう。

「赤井くんを・・・狙った・・・」

桂を知る和奈には信じられない事だった。

「長州だけが懸念を抱いているのではない」

補足、という形で武市が言う。

「他にもいると？」

この武市の発言には桂も驚いた。

勝だけではなく、他にも知る人物が居る、と武市は言ったも同然なのだ。

「まさかとは思いが・・・」

それが誰なのかは、安易に推測できる。そしてその者に話した人物も。

「桂木さんも知ってたんですか？」

「・・・ああ」

知らされなかった事への悲しみは強いが、それが桂と武市なりの思いやりだとよく判る。

「世知辛い世の中だ。暗殺なんぞ京では至極当たり前の行動になっちゃいるが、それを良しとする風潮は否めたもんじゃない」

「そう想ったからこそ、これまで自らの剣を抜くまいとして来ました。無論、他人にそれを命ずるのも、同じです。だが、この件は違

う、事が大きすぎる」

「信じたんだね、時を超えて来た」と

「・・・そんなものの、信じるに堪えません。ですが万が一、二人の語る事が事実ならば、世の中が大きく変わる事になりかねない。良くとも悪くとも、それは自然の成り行きではないのです」

「だがあんたは、そこのお嬢さんを巻き込んでいるじゃないか」

痛いところを突かれ、あまり表情を崩さない桂の顔が苦悶に歪む。
「和太郎の持つ情報というものが、どれ程のものかは判りません。

が、この子は話さない、そう信じています」

一度は疑った。なじりもした。が、今はその言葉に嘘偽りなどない。

「この世で私達と生きて行くと決めたこの子を、ただ受け入れているに過ぎません」

狂気については口にしなかった。話したとて、勝もその理の意味するところを説明できない、と思ったからだ。

「修吾郎は話す、そう考えなさった」

「はい」

肯定したのだ、赤井の命を狙った事を。

「だから俺は、あんたを斬る！」

赤井の体が動き、勝の脇を走り、抜いた剣を振り下ろした。

「っ！」

その剣を止めたのは、抜刀した和奈だ。

「おまえ・・・」

「手を、出すな！」

ぎりぎりど鎧迫り合いしたまま、二人は立ち上がる。

「剣を引け、修吾郎」

「できません！」

腕をつっぱり、赤井から離れた和奈は逆袈裟斬りで打ちかかり、袈裟返しで赤井はその剣を止める。

再び間合いを取り、打ちかかろうとした二人を止めたのは、勝と

武市の剣だった。

「勝さん！」

赤井は手を思い切り打ち下ろされ、持った剣を畳に落とした。

「人を斬らせるために連れて来たんじゃない」

落ちた剣を拾い上げた勝は、すっと柄を赤井に差し出す。

「じっとしてろと言ったはずだぜ？」

「おまえも下がれ、和太郎」

諭された和奈は、綾鷹を鞘へと戻した。

「おまえも聞き分けな」

友重の柄を持ち、きつ、と視線を桂に向けつつ、鞘へと納める。

「若いもんは、すぐ血気に逸っていけねえ」

「その心も解らぬではありません」

新撰組でどのような生活を経て、赤井がその志にどこまで染まったのかは計る由もない。が、ただ命を狙われたからの暴挙とは考えがたい。

先ほど赤井の口から出た前四番隊組長の切腹と、なんらか関係があるのだろうと桂は推測した。でなければ、楠の話しだけで良いはずなのだ。

「人生、生きてりゃ理不尽な事に多々直面するもんだ。だが、その度に剣を抜いて片付けようとするのは、馬鹿者のするこった。まずはちゃんと話しをしてからにしろ」

【それでも斬る必要が有ると思ったなら、そうすりゃいい】

「だが、おいらの居るここではさせねえよ」

「なぜですか！」

「言ったら？ おいらは個人としてここに居るんだ、話をただするため。だのに斬り合いなんざさせたとあっちゃあ、後生の恥とやらあね」

「君が僕を斬りたい、そう言うのなら、止めてくれとは言わない。君にはそれを貫く理由があるのだろうからね。だが、勝殿の言われた事も至極最も。互いに居るべき場所に戻ってからにしてはどうか

な？」

「許可してどうするんです！」

和奈が真剣に叫ぶ。

「もし、奴が広戸さんか谷くんを斬ったら、お前はどうする？ 仇討ちと、駆け出してしまっただろう？」

武市はきっぱりと言い切った。

「・・・はい・・・そうだと思います」

「嬉しい言葉だが、僕としては仇討ちなど本意ではない。いいね、絶対にしてはいけないよ」

はい、とは答えられない。

「殺されるつもりなんかない。覚悟を受取るだけだから、心配なく。おまえに黙って、彼を狙ったのは事実だしね」

はつきりそう言葉にされた赤井は、ギリッと歯を噛み締めた。

「だが、途中から気が変わった。だから、彼を手負いにし、長州へ・・・おまえの所へ連れ帰ろうと考えた」

それで首を落とさず、背中を斬ったのだ。

「そちらさんも、何か事情があるようだねえ」

「・・・ええ。かなり困っています。話したところで解決できる事ではないと思う故、控えさせて頂きますが」

狂気について赤井は何も知らないだろう。話せばなにか糸口が見つかると考えたが、勝にこれ以上、和奈の事を知られるのは良くないと思った。

武市の顔が襖に向き、桂と勝の視線も同じ方向を向いた。

其之三 死の足音

「軍艦奉行がこの時期に大坂を出たか」

大石から話を聞いた土方は、勝が赤井を連れて行った事よりも、矢掛まで来ていたことを訝しんだ。

小倉が落ちたとは言っても、まだ幕軍と長州の戦が終わった訳ではない。その中で奉行の遠方行きなど、重要な理由がなければ認められるものではない。

「なんで赤井の奴は話さなかった？」

これまで、軍艦奉行ほどの地位を持つ者と知り合いなどと、少しも口にしたためしがない。疑われた時ですら、勝の名前を出さなかった。それを口にしておけば、身元の保証は約束されたも同然であり、長日の軟禁とはならなかったのだ。

長州に狙われた原因は、そこにあるのか、とも考えてみるが、勝と知り合いだからという理由では納得できない。

「会津藩へは届けを出したから、戻っても脱走扱いにはなにもせんね」

涼しげな顔で、土方と大石のやり取りを眺めていた沖田が言った。

「残念だったな、総司」

「やだなあ、僕は別に、赤井くんを斬れない、なんて思ってませんよ？」

「思ってるじゃねえか」

だが、背後に勝が居るとなると、沖田とてそう易々と手を出す事は出来ない。出したが最後、新撰組が取り潰しになる事態となるのは目に見えている。

「今更どうのこうの言っても後の祭りだ。幕臣が連れてったなら仕方ねえだろう」

「そうですね。それより、まず目先の問題をなんとかしないと」

赤井のことに感いている場合ではない。

「何かあったんですか？」

「最近、伊東さんの動きが妙なんだ。隊内でなにやら動いているみたいなんだけど、はっきり、これ、と言った情報がつかめなくてね」

「伊東さんが？」

「斉藤を付けてる。何か掴んだら報せにくるだろうから、総司、おまえは変な横槍入れるなよ」

「分かってます」

参謀職に付き、二番隊組長を兼務している伊東は、自分の意に応ずる者を隊士として配属させるようになった。無論、土方は反対したのだが、近藤は参謀の申し出だし、反対する理由がないと押し切られてしまっている。

「こそこそ動き回るのが好きな奴ですよ」

新撰組内の風紀が乱れると、隊士の暮らしにまで口を出すようになる。

「後ろ盾ができましたよ、って言ってるも同じでしょう、あれ」

家老 永井尚志ながい なおむねとの接触がいい礼である。芸州から京へ戻った伊東は、なにかしらと、永井のところへ出向くようになっていたのだ。

かつての新撰組の影が揺らぎ始めている。煮え湯を飲まされる相手ではないが、それだに腹立たしさは一層強くなる。

「近藤さんのところへ行ってくる」

険しい顔のまま、土方は立ち上がった。

「なぜ・・・」

桂の発せられた声は、それまでどうって変わって弱わく響いた。

「失礼します」

そう言っつて襖を開けたのが高杉だったからだ。

「おまえさんかい」

えっ、と高杉を見る桂。

「先だっては、夜分遅くに失礼致しました」

そう頭を下げた高杉に眉間を寄せた。

「どう言うことだい？」

勝と赤井が来ていると、高杉から報告を受けてはいたが、会ったとは聞いていなかったのだ。

「なに、思うところがあっただけだ、気にするな」

「そんな勝手なことを！」

「ああ、もう！ おまえは一つ一つ細かすぎる！」

「まあまあ。折角来てくんすったんだ、喧嘩はなしにしましょうや」
「ごめん、と頭を下げ、高杉は桂と和奈の間に胡坐をかいて座った。
「すまん、話しは大方聞かせてもらった」

そうして、赤井の顔を見る。

「こいつは俺と違って、多様な事を捉え、何が必要で不要かを考え策を講じる。時にはそれが冷たい行動だと周りには映る。確かに我儘は俺より格段上だし、妬みも僻みもちやんと持つ普通の男なんだが」

「なんだい、その説明の仕方は」

「友人の事をよく理解しなすっていなさる」

勝はすごく嬉しそうだった。友情、という心の交わりが勝は好きなのだ。

「ええ。こいつは俺にとって掛け替えのない友ですから」

顎を引いた桂の頬が赤く染まる。

「こりゃあいい。いい相方をお持ちになったね、広戸さん」

「手に負えない気苦労を、勝殿は解っていらっしやらないから、そう言えるんですよ」

「おまえ、いい事を言った俺に、それか！？」

「はいはい。感激で涙がでそうだよ」

皮肉たつぷりだが、あながち嘘ではない。涙を浮かべた顔を見られないよう、目を閉じた桂はしばらく顔を逸らした。

「出て来る気はなかった、と思ったんだが？」

「そのつもりでしたが、そうも言っておれなくなりましたので」

恐らく、和奈の事に話が及んだからだろうと、桂はため息を吐く。
「こいつが赤井をと、思ったのはただ一つ、国の安泰を遅らせまいと考えたからと、俺は考えています」

「広戸さんは、修吾郎が未来の事を新撰組の誰ぞに話すのではないかと、そう思った」

「・・・ええ。それが幕府に流れれば、我が長州に対し、それ相応の対策を事前に取りれますから」

「口外しないと、約束しました」

「だが事実、君は勝殿に話した。これは間違いない」

そう言われれば、反論は出来ない。勝の手柄を考えてと言っても、桂にしてみれば言い訳にしか聞こえないだろう。

「勝さんだからです。新撰組の誰にも、この話はしてませんし、今後もするつもりはありません」

「おまえさんがそうしたように、こいつもおいらを信じてくれただけさね」

「人を見る眼はあったと、そこは認めましょう」

「どうだい。修吾郎はここで他には口外しないと言ったんだ。勝海舟の名に免じて、以後の追伐は無しに願えないかい？」

「しかし、幕臣として幕府の今後を考えるならば、勝殿のお心が変わらないと言う保証はございません」

「よしてくんな。おいらはおまえさん方と約束すると言ったんだぜ？ 例え修吾郎が幕府の存亡に有利な情報を持っていたとして、それを聞き出して献上するなんぞ、そんな恥さらしな真似はできないよ」

龍馬がこの男に対して、並々ならぬ敬意を抱いている理由がなんとなく判る。幕臣には珍しい人物だ。

「考えが変わったと、先ほど申し上げました。その言葉どおり、何かしらの手を講じる事はありません」

「そうかい。なら安心しておくよ。おい、修吾郎。おまえさんも一旦は引きな。納められねえ想いもあるだろうが、それはおまえさん

だけじゃない、ここに居る皆、そうなんだからよ」

だからと、簡単には納得は出来ない。新撰組の先を考えると、桂と大久保は少なくとも生きていてもらっては困るのだ。

「そうですかと、志を変えられるものではありません」

「駄目だねえ。だからおまえさんはもつと勉強が必要なんだ。この件はおいらが預かる。いいな、修吾郎」

赤井の後ろに勝が付く事を喜べたものではないが、それで危惧していた事態を回避できるなら仕方ないと、桂は方の力を抜いた。

「こっちは片付いた。あとはそちらさんだけが、良かったら理由を聞かせてくれねえかい？」

「勝殿を煩わせる問題ではありません」

様子を見守っていた高杉が手を膝に打ち付けた。

「こいつは頭が堅くて、自分一人で事を片付けようと奔走する性質です」

負担を少しでも取り除こうと、望東尼ぼうとうにに和奈の話をしたのも、その一端だ。

「だめだよ」

「おまえは黙っとけって。勝殿は個人としてここに座って居る、そうさつき明言されたんだ。それなら、俺達も個人として勝殿に話しを聞いてもらって、なにかしらの光明を見つけ出す術もあるんじゃないか？」

「しかし・・・」

「お判りの様に、一のり問題を十に膨らませて悩むのです。それがいい所でもあるのですが、俺としては安心できるものではありません」

ああ、まただ。高杉は桂の事を考えて、友の反感を買おうとも、その立場が楽なればと想い動いている。

吉田松陰の話しを交え、高杉は和奈の身の上に起こっている不思議な現象を、解り易く勝に語って聞かせた。

狂気？ あの戦場で見た村木は、確かに人には見えなかったが。赤井も驚くばかりだ。村木の魂に吉田松陰の魂が住むなどと、まして、そんな事態になっているなどと知る機会もなかった。

ならば、と、赤井は自分の抱いた疑問に、その話を重ねてみた。錬兵館で、和奈に哀しげな顔で迷うなといった朔月に、桂の魂が住んでいたとしたら？ それなら、和奈が幕末に飛ばされる事を知っていたとしても不思議はなくなる。

そうに違いないと、赤井は確信した。

「おいらに聞かせてくれたのは感謝するんだが、広戸さんが言うように、こうだと解決してしまえる内容じゃないな」

そうでしょう、と、高杉を睨みつつ桂は言った。

「そう、怒るな」

「怒ってはいないよ。おまえの短絡的な言動は、今に始まった事ではないじゃないからね」

「短絡的！？ おい、それはつまり、俺が馬鹿だって事だろうが！」

「言い直さなくても、その通りなんだからそっと胸にしまってくださいと助かる」

武市が噴出し、和奈も笑うまいと必死にこらえるものだから、高杉は頬を膨らませてそっぽを向いてしまった。

「心の中に仕舞っておくよ。力になれなくて申し訳ない。だが、一つ」

勝は和奈の方を向くと、にっこりと笑った。

その笑みを見て、龍馬に似ている人だと和奈は思った。

「自分の心と真剣に向き合ってみな。まずはそこからだと思うよ。理なんぞ探ったところで、自分の心音すら解らないんじゃない、いつまで経っても答えなんかでやしない」

その言葉に相好を崩す高杉。

「似たようなことを、言われました。自分を知ることと自分を理解しなければならぬ」と

「ほう。おまえさんは、いい人と会う事に恵まれていなさるようだねえ」

「はい、そう思います。ですが、自分の内にある狂気が、周りの人に刃を向けないかと・・・そればかり考えてしまふんです」

一度、大津で和奈はその刃を桂に向けてしまっている。

「守るべき人を傷つけてしまう恐れは、狂気のあるなしに関係はないよ」

「あります！　僕のは、違うんです！」

「そう思うなら、自分を恐れる前に自分を知るこった。それができねえなんぞ言わずにおくんだよ？　誰しも皆、心の中で様様な事に葛藤し続けて生きているんだ。そこから逃げ出してはいけねえよ」
膝の上に置かれた手が握り締められる。

「修吾郎とて同じ、いや、おいら達もだ、そうだよねえ広戸さん」

「ええ・・・そうですね」

「人生ってもんは難しいんだ。難しいから必死に生きなくっちゃあならねえ。放り出すのは簡単だ、考えるのを止めたら済む話しかだらね。それで良しとする者になるか、ならねえかは自分次第なんだよ」

悔いのない人生を送るためではなく、死という人生の最後にたどり着くまでに、悔いのない時を送るためなのだと、勝は言う。

その言葉に肩を反応させたのは、高杉一人だった。

「さて、冷めちまったが、膳の上のものを片付けるとするかい」

「折角酒が出るのに、飲まずに居るのはもったいないぞ」

おっ、と笑った勝が高杉に猪口を差し出し、受取った高杉が注がれる酒を口へと運ぶ。

「沈んだり浮いたりだがー」

酒を飲み干した高杉の動きが止まったのを見て、桂も言葉を止めた。

「晋作？」

その手から猪口が落ちた。

這うようにして部屋の隅へ行った高杉は、壁に手をくと激しい咳に体を曲げた。

「晋作！」

「高杉さん！」

走り寄った桂は背中を摩り、和奈は懷から手拭いを出して高杉の口を押さえる。

「おまえさん……肺を……」

この時になってようやく、高杉が労咳を患う身なのだとは知った。

「肺？」

赤井も、その咳の仕方は知っていた。そう、沖田と同じ咳なのだ。肺って……」

結核。

その言葉が赤井の脳裏に浮かぶ。

「無茶をし過ぎなんだ！」

怒鳴る桂に反論すら出来ず、大量の吐血と共に高杉はその場へと倒れた。

其之四 歸京

京へ戻る前、勝は嚴島神社へと立ち寄った。

「奉行だと言えば良かったじゃないですか」

長州との止戦協定を取りまとめた祝だと言って、勝は帶刀していた短刀を奉納したいと申し出たのだが、そんな事とは知らない宮司はこれを断った。

どこの馬との骨とも知れない者からの奉刀など、と言いだけな目つきだったが、十両を添えて再度勝が差し出した途端、態度が代わり短刀を受取ったのだ。

「奉行だ奉行だと触れ回ってたら、良い事なんぞねえに決まってるよ」

そう言って笑う勝の後姿を見て、赤井は昨日の事を思い出した。

「晋作！」

悲鳴にも似た桂の声が部屋に響く。

「和太郎、水を汲んで来い！」

「は、はい！」

飛ぶように出て行った和奈の後を、赤井の目が追いかける。

「おまえさん、肺を病んでいなさるのかい」

いつもよりも激しい咳に、その背中を摩る桂の顔からは血の気が引いてしまっている。

「・・・れ・・・」

「！？ なんだい？ 晋作？」

「・・・なれ・・・ろ」

離れろと言いたいのだろうが、咳でちゃんとした言葉になっていない。

「馬鹿を言うな！」

手や足が真っ赤な血で染まり、横に居る桂の着物まで広がっていた。

竹筒に水を入れて持ってきた和奈は、桂にそれを差し出した。

「これを飲め」

いつも持ち歩いている薬を取り出し、高杉の口へ無理矢理入れると竹筒の水を含ませた。

ごくりと水を飲み込み、もう一口、ごくりと飲む。

「・・・もういい」

だが桂は離れようとはしない。

「これに懲りて、もう飛び回る無茶などするな」

「動けるうちは花。萎れた花など・・・誰が見向きするものか」

「よしてくれ」

手拭で口の周りについた血を拭いながら、震える声で桂が言う。

「枯れようとも萎れようとも、俺はいつでもおまえの傍に居るさ」

「らしくないぞ、小五郎」

「五月蠅い」

呼吸の落ち着いた高杉は着替えさせられ、赤井が用意した布団へと寝かされた。

「申し訳ありません、勝殿」

「おいら達の事は気にしないでいい。それより、あんたの方が心配だよ」

会談の席についていた男の様相はすでになく、動揺をまだ隠せない桂の顔をみながらそう言った。その手が小さく震えていたのだ。

「私は・・・大丈夫です」

「おまえさんも、あまり無茶はしなさん方がいい」

咳と吐血から、高杉の病状が末期に近いところまで進んでいるのが解った。

「やるべき事をやっておかねば、気が済まぬ性分なんです。度を越えてしまうのが、頭の痛いところなのです」

そう言い、着物を変えて来ると桂は席を立った。

「勝殿は仰った。人生を捨てるのは簡単だと。俺もそう思います。だから、国のため、あいつのため、そして自分のために俺はまだこの命を使い続ける」

「しまったねえ。おいらは後押しししまったわけだ」

表情は後ろに居る赤井からは見えなかったが、勝の背中が震えていのは判った。

「まだくたばりません。幕府が兵を引いたとしても、肝心な要はこれからですから」

「おまえさんの手助けに、少しでもなったならいいが」
兵を撤退させたからと言って、それで長州の今後が安泰となるわけではない。

望東尼が語った高杉の余命は、もうそれほど残されてないのではないかと、高杉を見て和奈は思った。

ざわり。

「！」

気が乱れるのが判り、和奈は自分の体を抱え込んだ。

（駄目だ駄目・・・）

必死に自分を落着けようと、高杉の事を考えないようにする。

「あ・・・」

暖かい温もりが背中を包んだ。

「大丈夫だ」

武市の声と体の温もりに、ざわざわとした気が静まって行くのを感じる。

高杉の悲しそうな表情が見えた。勝も何事だと顔を向け、赤井は半ば立ちあがりかけた状態で、やはり和奈を見ていた。

「おまえさんが言ってたのは、これかい」

勝も気付いたのだろう、殺気の混じった奇妙な気を。

「講じれる手立てはつけてあります」

「おいらに話してくれたのも、その一手ということか」

「申し訳ありません」

「いや。だが、おいらに出来る事は少くねえよ。なにせ幕臣の身だ」
「よく存じております。勝殿がその男と一緒に来てたが故、話すべきと考えただけです」

勝の視線が和奈から赤井へと移る。

「まさか、修吾郎にも同じことが起こると？」

「さあ・・・それは判りません。ですが、同じ様にしてここへ来たのです、無いとは言い切れません。違いますか？」

赤井にとつては寝耳に水だった。これまで和奈の身に起こった様な事を、自分が感じた事は一度としてないのだ。

「これは困った」

何かしらあつた時に連絡を付けたかったが、お互い時勢がそれを許してくれる立場ではない。

「仕方ありません」

「そうさな。じゃあ修吾郎の方はおいらに任せてくんな、悪いようにはしねえからよ」

「その男は長州から出て行つた身です、勝殿のお好きなように」

戻つて来た桂は冷たい言葉を放ちながら、武市の腕の中に居る和奈の頭に手を乗せた。

「桂木くんの手をあまり煩わせていけないよ」

そう言つと、高杉の横へと座つた。

「すぐ発てそうかい？」

「ああ、大丈夫だ」

ではと、勝に向いて頭を下げた桂は、これで失礼すると述べ、高杉を支えながら和奈達と共に遠翠楼えんすいろうを後にしたのである。

高杉が肺の病に掛かつてる事も驚いたが、和奈の身の上に起きて

いる事にも驚いた。

「俺にも、そんなものがあるんでしょか」

狂気、とは口にしなかった。訳の分からないものが自分の内にあるかもなど、赤井は考えなくなかったのである。

「さあどうかねえ。あのお嬢さんとおまえでは、立場が違うんだ、
どうとは言えねえよ」

「立場？」

「おまえさんはどうして新撰組に入った？」

「え・・・」

今は新撰組隊士の一人として、この幕末を生きる覚悟は出来ているが、最初は成り行きだったのだ。どうしても入りたいと新撰組へ出かけたのではない。

「答えられないのが、違いだよ」

「はあ・・・」

談判において、合議制実現を条件とし長州の説得に成功した勝は、その足を大坂へと向けた。

大坂では勝の予想にしていけない事態が、一橋慶喜によって進められていた。

勝が芸州へ入った次の日のこと。

万策が尽きて幕軍の勝利を確信できなくなった慶喜は朝廷に参内すると、戦況を報告した後、家茂の薨去による解兵を願いでたのである。

朝廷も理由が理由だけに飲まざるを得なくなり、一時休戦の勅命を下したのだ。

その話しは、厳島での件を伝えようと、黒書院へ上がった勝に初めて告げられた。

「なんですと!？」

「今申した通りだ」

「某に長州へ行けと仰せになったのは、一橋殿ではありますまいか？」

「勅許が下りたゆえ、長州へ勅書を出したまで。解兵も申し渡しておる」

つまり、勅許を得る間の場繋ぎに、勝は利用されたことになる。

「それならば、その旨であると、なぜ出立の前に仰せになられなかった！」

「もう勅命は下りておる。今更ここでそなと論議するのは詮無き事、もう下るが良い」

將軍の如き身なりで上座へと座る慶喜に一瞥をくれた後、勝は両手を畳につけた。

「なれば、拙者が致す事はもうございません。これにて御役御免を願ひ奉りたく、謹んで申し上げます」

長州と合議制実現の上で和議を取り付けた。無論、その心積もりで勝は動くつもりであった。だがここに来て勅命が下り一時休戦の勅書が送られたとなれば、その和議は正式なものでは無くなり、勝が勝手に長州へ乗り込んで取り付けた和議と言う事になってしまったのだ。

長州との約束を守れないのでは、辞表を出すしか術はなかった。

「そこまでしなくとも良い。此度の経緯はどうであれ、結果は同じ。そう心苦しく思わぬでも良い」

「拙者の長州行きは謹んで内密であるものと約束させて頂きます故、このまま江戸に戻らせて頂きます」

慶喜も強引に引きとめる程、勝を頼りにしていた訳ではない。そうまで言われては、それを受けざるを得ず、認めたのである。

老中ばかりでなく、側近にも多くの強硬派が慶喜の周りを固めていた。一時休戦としたものの、いつまた考えが変わり、征伐だと乗り出すか知れたものではないのだ。しかし、すでに勝の心からは、慶喜を置いての幕政改革をする策はすでに消えてしまっていた。

専稱寺せんしょうじへと戻った勝は、待たせておいた赤井にこの次第を報告してやった。

「じゃあ、広戸さんと約束したあの内容はどうなるんです？」

「おいらの独断で片付けられちまうさ。今頃、慶喜殿が出した勅書が長州へ届いているだろうよ」

桂の怒った顔を容易に想像できた勝は、くしやりと顔を歪めた。

「でも御役御免で、そこまですなくても・・・」

「相した者に対して申し述べたことを反故にするほど、まだ落ちぶれちゃいねえよ」

それに、家茂の喪に服す時間も出来るからと、勝は気にする風でもなく言った。

「おいらは江戸へけるから、おまえさんもついて来な」

「はっ!？」 いや、それは出来ません。屯所だってかなり留守にしていますし、そんな事したら土方さんにどやされますよ」

「なら、ちっと挨拶に伺うとしようじゃないか」

「えっ!？ 屯所へ行くんですか!？」

「言っただけ、おまえさんの事はおいらが預かると。和議を台無しにされた上、その約束まで果たさないとあっちゃ、広戸さんに顔向けできねえじゃねえか」

そのやり取りの中、赤井は薩摩藩邸へ土方が出向くと言った時の事を思い出した。

「なんか俺、いつも誰かに居場所を作られてる気がする」

そう思っても仕方が無かった。事実、そうなのだから。

幕府は正式に徳川家茂の薨去を公表した。

慶応二年九月二日、武蔵国貝塚ぞうじょうじ（千代田区麴町）にある増上寺に埋葬するため、徳川家茂の棺は大坂から江戸へと船で運ばれる事となり、その送り出し時には勝も許しを得て参列し、慶喜らと共に焼香して見送ったのである。

同じ日、長州藩と幕府が休戦協定を結び、第二場長州征伐は終戦を迎えた。

京へ入った赤井と勝は、その足で西本願寺へと向かった。

「本当に、行くんですか？」

「なんだいここまで来て。いい加減諦めねえか」

「俺、新撰組で、土方さんの側で剣を握るって決めたんです」

「ほう。だが少し我慢してくんな。何も一生おいらの側に居ろって言ってるんじゃないんだからよ」

やはり勝の意志は曲げられないようだ。

「分かりました、勝さんに任せます」

「そうしてくんな」

だからおまえは何も喋るなど、勝は西本願寺の正門を潜りながら念を押した。

会議が開かれる広間に通された勝は、変わり果てた寺の内部を見てため息を吐いた。

「長州藩の息が掛かってるってだけで、神仏様のおわす寺に乗り込まなくてもいいだろうに」

隊士の誰かに聞かれて、土方の耳に入ったらそれこそ無事でここを出て行けなくなると赤井は慌てた。

「よして下さいよ」

「気が小せえ男は、女に嫌われるもんだと覚えておきな」

口を開いた時、襖が開いたので、何も反論できずに赤井は姿勢を正した。

「お待た致しまして、申し訳ございません」

上座に座る勝の前に、近藤、伊東、土方が座った。

「忙しいところを申し訳ないね」

「勝安房守殿がわざわざ来られておられるのです。何事も据え置く

のは当然にございます」

伊東は事の外嬉しそうにそう言った。

「あんたは伊東さんだったね。永井殿から名前は聞いてるよ」

この勝の言葉はさらに伊東を喜ばせた。

気に入らないのは土方である。参謀が、局長である近藤を差し置いて先に発言するなど、新撰組内部に纏まりがないと露呈させた様なものである。

「この局長さんは、そちらさんだね？」

近藤に視線を向けた勝は、顔を前に出して聞いた。

「はっ。新撰組局長を務めさせて頂いております、近藤勇と申します」

「修吾郎がこちらに厄介になってると、先日初めて聞いたもんでね。挨拶が遅れちまって申し訳なかったと思ってるよ」

「とんでもございません。こちらよりご報告に上がるのが筋と言うものです」

またも伊東が返事をするものだから、土方の顔は勝の前ながら陰しいものになっている。

「随分と手間をかけたんじゃないかい？」

「いえ。赤井くんはよくやってくれております。今では四番隊組長の任にもつき、隊士からの信頼も厚く、私としましては手間どころか、随分と助かっております」

「彼の鍛錬のたまものでございます」

一々と伊東が口を挟むものだから、土方の陰相な面構えは勝にまで判るくらいになっていた。

「それを聞いて安心した。で、そちらが名高い副長さんだね」

「土方歳三と申します」

「土方さんが修吾郎をここへ誘ったとか」

「はっ・・・」

「肝っ玉が据わらねえ男を、よく誘う気になりなされたな。いや、褒めてるんだよ。詳しい事情はさておいて、一端の武士にしてくれ

たこと、心から礼を言わせて貰うよ」

そう勝は頭を下げた。

「！」

奉行職にある身で躊躇いもせず頭を下げる勝に、土方は驚くしかない。

「おいらが伺ったのは、修吾郎の今後について相談があるからなんだ」

「と、仰られますと？」

「公方様くぼうが薨去くわうなされた事はすでに存じているだろう？ おいらはこれから江戸へ戻り、公方様の葬儀に出なくちゃならねえんだ。ついでと言う訳じゃないが、この修吾郎も連れて行こうと思ってね」

これに土方が眉を顰めた。

江戸に連れて行くと言う事は新撰組を脱退させる、という事に繋がるのだ。

「会津の松平殿にはおいらからも事情を申し上げるつもりだが、まず厄介になった方々へ直接話しをするのが礼儀だと思ってね。近藤さん、新撰組の隊規とやらは修吾郎から聞いて承知しているんだが、どうだろ、修吾郎の脱退を認めちゃくれねえかい？」

勝のお墨付きで、しかも家茂の葬儀まで持ち出されては、いくら土方が反対したところで無駄と言うものなのだが、近藤は斜め後ろに座る土方に視線を投げてしまった。

土方にしても同じだ。まして薩摩出身の赤井がなぜ勝と懇意なのか、その疑問を拭い去れてはいない。これまで赤井が勝の名を口にしなかった事に、納得がいかないのである。

土方は率直にそれを聞いてみた。が、答えはあっさりと返ってきた。

「なに、天璋院殿てんしょういんに縁のある者を、おいらが知ってたとしてもおかしくないだろう？ 修吾郎がおいらの名を口にしなかったのは、後ろ盾があると振り翳す馬鹿はしたくなかったんだろうさ」

その場に座っていた近藤達のみならず、赤井までもが固まってし

まった。

天璋院は、島津本家島津斉彬の養女となり、五摂家筆頭近衛家の娘として薩摩から江戸幕府第十三代將軍徳川家定の御台所となった篤姫である。家定が急死し、同じ月に養父である斉彬までもがこの世を去ることとなり、今は髪を下ろして落飾^{らくしよく}し、戒名を天璋院殿從三位敬順貞静大姉と名乗っている。

「天璋院様の・・・」

近藤は何を口にしていいのかすら分からない様だった。それはそうだろう、勝が出てきたばかりでなく、その口からとんでもない人の名前が出たのだ。これでは土方も何も言うことはできない。薩摩人である赤井と勝のつながりは確実なものとなってしまうのだ。

「それでは、認めざるを得ません。いえ、天璋院様に縁のある者を屯所へ置いておく訳には参りません。松平殿に申し上げるまでもなく、許可させて頂きます」

「勘違いなさらずにくだないよ。新撰組は幕府機関じゃないか、困る事はない。修吾郎が自分の身をどう振るかはその人の意志なんだ。それに、事が済んだら戻りたいと修吾郎は言ってる。置いておけないって言われちゃうと、おいらが困るのさ」

「勝殿がお許しになられるのでしたら、当方としては異存ございませんが」

「良かったな修吾郎。これでおまえも気兼ねなく江戸に発てるだろう？」

「はい、まあ」

「なんだい、そのしけた面は」

「ここまでぶちまけられたんです、堂々と戻ってくる勇氣なんて沸いて来ませんよ」

「おいおい、土方さんに惚れたと言ったのはおまえだろ？」

えっ、と視線が土方へ向けられる。

「いや！ その、それは！」

「てめえ、まさか本当に――」

以前、赤井の口から、惚れた、と直に聞いている土方の血相は青いどころの話ではなかった。

「ああ、すまねえすまねえ、言葉が足りなかった。男としての生き様に、だったな」

近藤と伊東の肩から力が抜け、ついにその口から笑いがこぼれたので、土方は怒りのやり場を睨みつけるという方法で視線を赤井へ向けるしかなかった。

戻って来た時、土方からどのようなお説教をされるのかと、赤井は不安になった。

「近藤さんと伊東さんも、こいつがどこの誰だろうと、これまでと変わりなく扱ってやってほしい」

「承知しました。勝殿がそう仰るなら、そうさせて頂きます」

「ありがとう」

帰る間際、伊東には聞こえないように勝は、近藤と土方に宿泊している亀屋へ来いと耳打ちした。

其之一 三条制札事件

亀屋へとやって来た土方と近藤に、町で嫌な噂を聞いたと勝は切り出した。

第二次長州征伐の敗退は京にも届けられ、幕府が一藩に敗退したという噂が瞬く間に広まっていた暑い夏の日の事。三条大橋の西詰に立てられている制札が何者かによって引きぬかれ、加茂川へ捨てられていた。

「新撰組が警護に当たる訳か」

「はい。会津藩より警護の任を仰せつかりました」

ふむ。と勝は片手を顎に置いた。

「で、相手の検討はついてるのかい？」

「目下全力で調べております」

足が掴めないのは、ただの浪人じゃないと勝は言った。その制札には禁門の変後、朝敵となった長州藩の罪状が書かれていたのだ。長州かそれに組する志士の可能性は高くなる。

勝の推察は土方も近藤に告げていた。

「潜伏する長州志士の仕業かと搜索を続けましたが、足取りが追えぬのを考えると、その線は薄いと考えました」

「朝敵とされた長州に肩入れする藩は少くない」

桂と取り付けた合議制の実現をもって、諸藩の矛先を幕府から幕政へと転換させるつもりだった勝だが、慶喜の独断専行により頓挫させられた。止戦という結果は同じだが、その後に続く展開が大きく変わってくる。静観している西国緒藩がどう動くかも、薩摩藩次第という状況に追いやられたのだ。

「加えて、二度に渡る征伐失敗で幕府の權威はがた落ちときた。諸藩が台頭せんと動くのも道理なつこた。まったく、情けねえ」

新撰組の二人を前に堂々と幕政批判してしまった勝に、土方と近藤は顔をちらりと見合わせた。それを見て、赤井はまたかと肩を落

とすしかない。

「徳川家のため、おまえさん達新撰組には頑張ってもらわなくっちゃなあ」

將軍職を継ぐであろう一橋慶喜ではなく、徳川家とあえて勝はそこを強調した。

「心得ております」

複雑な心境のまま、近藤はそう答えた。

「さて、お役目で大変だろうが、今夜はおいらに付き合っておくれよ」

そう言つて銚子を近藤に差し出す。

「堅苦しいのは、抜きで頼むよ」

江戸を発つ前、仕事の区切りとして、勝は赤井を制札警護に就けてくれるよう土方に頼んだ。勝から言われてはと、土方もこれを承諾した。

久々に屯所へと戻つて来た赤井は、羽織に袖を通して大石の所へ顔を出した。

「元氣にしたか修吾郎！」

入つて来た赤井を、大石は嬉しそうに羽交い絞めにする。

「元氣ですよ。背中傷はまだ少し痛むんですから、乱暴しないでくださいよ！」

「そうかそうか！ とにかく戻つて来て良かった！」

大石のその言葉で、この警護が終つたら江戸に向かうと口に出れなくなつてしまった。

「行くぞ！」

土方の大声が響き、三条大橋へ再び制札が立てられるその警護を行なうため、羽織をまとつた一団が西本願寺を出て行った。

制札警備を命じられた新選組は、最初に制札が引き抜かれた日から、三条大橋を中心として三方にそれぞれ隊士を昼夜配置させてい

たが、その警護も空しく二度も警護の合間を抜かれて制札が引き抜かれてしまった。さすがに失態を繰り返すことはできない。とは言え、市中見廻りを欠かす訳にも行かない現状で、更に人員を警備に割く余裕もなく、よって隊士の疲労は日を追うごとに積み重なっていた。

一日も早い解決をと、土方や近藤ら幹部が躍起になるのも仕方がない。

制札を立て直した当日と翌日は、誰も制札場へ近づこうとはしなかった。町人や噂を聞いた旅人も、いらぬ嫌疑がかかつてはと高札場のある場所をあえて避けて通るほどだった。

三日後の九月十二日。

土方は大橋の東にある長屋の一つに、大石達十名を、高瀬川東の酒屋に諸士調役兼監察の新井忠雄ら十二名を潜伏させ、原田が率いる十二名を三条会所に配置させた。

物見役として物乞いに扮し、橋の袂に座わる事になったのは二名。伍長橋本皆助は新井へ、諸士調役兼監察浅野薫は一番遠い場所に潜伏する大石へ報せに走る事になった。

「来ますかね」

ぼそりと赤井が呟く。

「さあなあ」

まんじりともせず、大石達は長屋の一つに待機している。

（困ったなあ）

なにかと面倒を見てくれた大石には事情を話しておきたかったのだが、切り出す切欠を掴みあぐねていた。

河原町通りを橋に向かって歩いてくる影が在った。その数八名。深夜に集団となってやって来るのだ、橋本も、まさかと思わざるを得ない。もし札を抜くために来たのならと、生唾を飲んで伏せ目がちに様子を伺う。

男達が高札場のところで足を止め、辺りを伺うように見回した。

間違いないと、橋本は腰を上げると気付かれないように角の宿屋の影に入り、裏手を回って新井達の居る方へと大急ぎで走った。

浅野もその男達の姿は見つけていた。だが、大石に知らせに橋を渡るとなれば、見つかる可能性もある。八人が相手では一人で防げるものではないと、橋を渡らず加茂川沿いに足を進めると、一気に北へ向かって走り出した。

会所は高札場に一番近い場所に在るが、そこからは直接大橋を見れないため、交代で三条通りを見に出ていた。

器に残っていた酒を一気に飲み干した原田は、腰を上げて外へと出た。

見張りの途中で酒を飲んでいたのは原田ばかりではない。制札を立て直してから二日、なんの騒ぎも起こらなかった事と、深夜となつて気が緩んだのもあり、隊士の殆んどが酒を喉の奥へと流し込んでいた。

(ん?)

原田の視界に、橋の方へと歩いて行く男達の姿が入って来た。

建物の影に身を潜めた原田は、男達が通り過ぎるのを待ち、そつと通りへ顔を出した。

(来たか)

立ち止まった男達がきよろきよると辺りを伺っているのを見て、

原田は会所に取って返した。

「出るぞ!」

その言葉に、まったりとしていた隊士達が立ち上がり、各々腰に剣を収め飛び出して行く。

酒屋に居た連中も、原田達と同じく酒をあおっていた。中でも新井は無類の酒好きときており、隊士に止められたにも関わらず、すでに半升近を飲み干してしまっている。

そこへ血相を変えた橋本が飛び込んで来た。

「新井さん！ 奴らです！」

泥酔に近い新井の側に行き、橋本はこれでもかというくらい大きな声を上げた。

とろんとしていた眼が焦点を定め、覚束ない足下で腰に剣を差すと、橋本は隊士達と共に酒屋を飛び出した。

高札場へ来たのは、土佐を脱藩していた宮川助五郎、藤崎吉五郎、沢田甚兵衛、松島和助、岡山禎六、早川安太郎、中山謙太郎と土佐藩邸詰めの安藤謙治である。

土佐藩上士の身分で土佐勤王党に入った者が三名が居たが、その内の一人はこの宮川だ。勤皇派旗本である長州藩が朝敵となると、尊王攘夷派の監視の目が一層きつくなった。主でだって動いては捕縛される危険もあり、脱藩の身でその様な事になって土佐へ送還となれば死罪は免れない。それは宮川だけでなく他の者もよく解っている。が、酒の力が宮川達を大胆にしまった。連日の制札事件に話しが及ぶと、幕府権威失墜をもっと市中に知らしめてやろうと、逗留先の瓢屋ひさしやから安藤達と共に三条大橋へやって来たのだ。

藤崎は制札を抜こうと近寄った安藤を呼び止めた。

「ちっくと待て」

そう言って辺りを見回す。

「そう心配せんでもよか。辺りに気配が無いのはわかつちゅうき」

「馬鹿か。新撰組が警護に当たっているんだ。どこに隠れているとも知れんのだぞ」

「そう言っておったら抜くもんも抜けん」

宮川が安藤の肩に手をやり、ニヤリと笑って促した。

「幕府が政を台頭する時代は終わったがだ。新撰組も同じつちゅうことだ」

「じゃあ、さっさと抜いて引き上げましょう」

安藤が制札に手を掛けようとした時、背後から足音が響いて来た。「てめえら、動くんじゃねえぞ！」

振り返った宮川は、抜刀しながら走ってくる新撰組の羽織を見て取った。

「ちっ！」

宮川達も一斉に剣を抜き放った。

「手向かうなら、容赦なく斬る！」

原田は一番外側に立って居た藤崎へと斬りかかった。

「くっ！」

藤崎は横に居た宮川に逃げろと叫ぶ。

「他のもん連れて行ってくれ！」

「逃がすか！」

西側へと駆け出した松島達は、橋本から報せを受けて駆けつけて来た新井に行く手を阻まれてしまった。

「わしが引きつけちゃる！ 逃げれるもんは逃げろ！」

宮川はそう言うと言と新井に向き直り、中段から斬り込んだ。

「安藤、逃げろ！」

そう叫んだ宮川は、安藤の奥で奮闘していた藤崎の体に原田の剣閃が走るのを見た。

「藤崎！」

その隙を逃さず、新井は宮川の肩から左腕へと剣を振り下ろした。

「宮川さん！」

安藤の体にもすでに無数の斬跡があり、相手の剣をなんとか防いでいる状態だった。

「に・・・げろ！」

宮川の体が崩れ落ちるのを見た安藤は、踵を返すと一気に走り出した。

追いかけてようと走り出した隊士達だったが、酒の回った体は迅速に動いてはくれず、何本かの通りを過ぎた所で安藤を見失ってしまった。

大石が現場へとやって来たのは、安藤達がすでに逃げ去った後だ。で、転がる死体と重傷を負った宮川を見れば、出遅れて捕縛に失敗

したと言う事は明白だった。

高札場で、制札を引き抜こうとした土佐藩士八名の内、藤崎は即死。宮川は深手を負って捕まり屯所へと連行され、松島和助、沢田甚兵衛、岡山？六、早川安太郎、中山謙太郎らは、何度か匿ってくられた薩摩の屋敷の一つに逃げ込んでいたが、安藤は五人と共に行かず土佐藩邸へと戻って行った。

屯所へ戻った大石は、縁側で片膝を揺らし座って居る。

「大石さん」

「ああ？ 修吾郎か」

「元気ないですよ」

「そりゃそうだろうが。ここぞって時に何もできなかったんだ、腹の虫が騒いで仕方ねえんだよ」

大石に報せに走る浅野が遠回りした事によって、現場への到着が遅れたのである。そのせいで、新撰組は六名を取り逃がしてしまったのだ。

「くそがつ！」

足を思いつきり踏み下ろした。

江戸行きを話すのは無理だなど、大石をそのままに自室へと引き上げた赤井は、荷物を纏めるべきか否か、部屋中央に座って考えてる事にした。

「居るか？」

土方の声だった。

「はい」

「邪魔するぞ」

気まづかった。それは土方も同じらしく、赤井の前へと座ったはいいが言葉を見つけあぐね、畳へと視線を落としてしまっている。

「あの、すみませんでした」
まずは謝るしかない。

「ん？ ああ、あれは浅野が出遅れたせいだ、気にするな」

「いえ、それじゃなくて、その、勝さんの方なんですけど」

「！ ああ・・・そうか」

「黙ってたのは、別にまずいとかそんなじゃなくて、必要ないと思っただけで・・・」

上手く言葉が出てこない。

「ったく。勝安房守だけでも驚きだってえのに、天璋院まで出されたんじゃあな」

「あの、戻って来ていいですよ、俺」

「その気はあるんだろ？ 勝殿も許可したんだ。いいだろうよ」

「ありがとうございます！ あ、でも、この間の事は、お三方だけに留めてもらえませんか？」

「そのつもりだ。あんな名を言い振り回されて居座られたんじゃ、たまらんからな」

帰る許可はもらえたのだ、なら荷物を置いておく方がいいだろう。

「隅っこでいいんで、戻るまで頼みます」

「部屋はこのままにしておく。会津藩の命で江戸に上がった、と言うことにしといてやるから、ちゃんと戻って来いよ」

「はい！」

近藤は土佐藩へ使者を走らせると、その足を宮川が監禁されている部屋へと向けていた。土方も赤井の所に寄った後に姿を見せた。

「今、土佐藩へ使いを出した」

松本の治療を受けたとは言え、傷で体が痛むはずなのに正座で宮川は座っていた。

「なぜ制札を抜いた？」

「間違えてもらっては困る。我らは制札など抜いてはおらぬ」

「斬り合いをやらかしたのに、今更言い逃れか？」

「先に剣を抜いて来たのはその方ではないか。我らは身を守るため剣を抜いたまでだ」

ちっ、と土方の舌打ちが響く。

確かに制札が地面から抜かれようとした形跡は残っていなかった。安藤がただ制札に手を伸ばしただけなのである。これが、近藤と土方にとって宮川の処遇に困る事態となっていた。引き抜いた所を押さえていれば、奉行所に下手人と突き出す事ができたのだが、未遂で、しかも大立ち回りの原因が新撰組からとあっては、下手に奉行所へ引き渡す事が出来ないのだ。

身柄の引渡しについて土佐藩へ問い合わせたのも、そんな経緯があったからである。

「脱藩した身と言えど我は武士だ。武士たる者が生け捕りの屈辱を受け、あまつさえ土佐藩へ引き渡されて恥など晒すわけにはいかぬ！ 直ちに我が首を刎ねよ！」

武士として屈辱を晒してまで生き延びるつもりはない、その言葉に土方までもが絶句した。

先の三件の制札引き抜き事件には関与しておらず、酒に酔って通りかかったところへ、新撰組が斬りかかって来た。という宮川の供述通り奉行所に報告された。

二日後の十四日。

制札が抜かれる事もなく幕府の面目も立ったと、新撰組に二百両の報奨金が出る事となった。

宮川の処遇について、土佐藩が出した返答は、脱藩した者の所業であるとし、引き渡されても困るので斬首にでもなんでもすればいい、というものだった。

この返答に近藤は困った。

「だからと、斬首にするわけにもいかん。脱藩前は土佐藩上士の身分だったと言うしな」

土方を前にして苦慮する近藤は、どうしたものかため息ばかり吐いている。

「奉行所も引き渡せとは言ってきてないんだ、もう一度土佐藩に使

者を出すしかないだろう」

「それはそうなんだが・・・」

「俺が土佐藩へ行って来る」

土方はそう言って部屋を出て行った。

「やれやれ」

土方を見送った近藤は、原田と新井の二人を部屋へと呼んだ。

「今回はご苦労だった。会津藩からも報奨金が出るそうだ。各自へ報奨金を手渡すが、その場にいたのは・・・原田の隊と新井の隊でいいんだな？」

「その報奨金、見張りについてた者も含め、皆に分けては頂けませんか？」

ん？ と近藤は原田を見やった。

「六名も取り逃がしてます。俺も酒を飲んで、逃走する奴らを追えませんでした」

「それならば、私事です。いや、本当にすみませんでは済まない」
「そうか。おまえ達が言うならそうしよう」

全員に報奨金が分配されると聞いて怒ったのは大石だった。

「俺達は何もしてねえよ、原田さん！」

「だから酒飲んでた俺達も悪いって言ってるだろう。素面なら、あんな奴ら取り逃がす醜態なんかしなかったんだしな」

「なら、浅野は外してくれ！」

見つからないように遠回りをした結果、大石達が遅れることとなり、宮川達を完全に包囲する事ができなかったのだ。原田と新井がいくら酔っていたとはいえ、包囲さえ出来ていれば残りの六人をみすみす逃さず取り押さえられていたと、大石は食って掛かった。

「だが、報せには走っただろう？ 逃げた訳じゃないぞ、大石」

「それでは俺の気がすまん！」

「だったら近藤さんに直訴して来い。俺が決める事じゃない」

浅野が執った行動は、すでに隊内にも伝わり、影で誹り合う声も

多くなり始めている。そこへ大石が顔を真っ赤にして来たものだから、近藤も待てと場を凌げなくなったのだ。

「確かに浅野の行いは新撰組として見るならば、臆病者と罵られても仕方ないが」

「これが大物だったら新撰組の面子は丸潰れです！」

「解ったから、そう怒鳴るな」

近藤は、浅野を新撰組にそぐわない者として追放すると決定した。勿論、会津藩から出た報奨金の分け前も分配される事は無かった。そして五日後の十九日。

土佐藩から祇園社近くにある^{とかのうてい}榎尾亭に招きたいと、土佐藩邸留守居役の荒尾騰作からの文が届いた。

宮川の身柄については乾退助と会津藩の諏訪常吉の間で、土佐藩への引渡しを取り決められから、招きを出した。

乾としては宮川を町奉行に手渡すより、中岡の陸援隊に匿う意向だった。

「しかし、中岡の所へと言うのは考えものですぞ」

中岡も新撰組の手配書に載っている。制札事件に関わった宮川をその側に置くのは危険と、荒尾は注進した。

「会津も此度の件については納得してるんだよ。札を抜いたわけではないし、宮川くん達が先に手を出したわけでもない。元上士である彼を町奉行に手渡す義理などありはしないじゃないか」

「大殿に知れたら如何致すのですか」

「なに、それはそれ、これはこれ。心配には及ばぬ」

そう乾が強気に出れるのは、後藤象二郎が側に付いているからである。宮川一人の身柄を匿ったとて、後藤の説得があれば容堂も事を荒立てる事はない。

「私は表に出ぬゆえ、恙無く事を進めてくれたまえ」

「まったく、乾殿には適いませぬ」

荒尾は、乾から指示された通り事を進めると約束し、藩邸を後に

して祇園へと足を運んだ。

梅尾亭にて饗応きやうおうを受けるのは近藤と土方、伊東と諸士取扱役兼監察方の吉村貫一郎である。吉村は監察として同席を求められていた。「遠慮なく奥へお座りになって下さい」

荒尾は近藤達を座敷の中へと招き入れると、上座へと勧めた。

「とんでもございません。こちらは荒尾殿が座るべき場所、我らはこちらへ座らせて頂きます」

やはりここでも伊東は口を出さずには居られない様だった。

荒尾は、それでは、と上座に座り、近藤達が座るのを待ってから口を開いた。

「此度の件、土佐藩としても遺憾を覚えておる次第と、まず申し伝えておきます」

そう言いながら、顔に苦渋の色を浮かべる。

「脱藩したとは言え、宮川は元上士。それ相応の対応をして頂いていると、会津藩の諏訪殿より聞いてもおります」

言葉は丁寧だったが、すでに土佐は会津と連絡を取っている。そう念押しされた形である。

「宮川の引渡しは一両日中にも行わせて頂くとして、まずは皆様に此度の謝罪と労いも兼ね、お招きさせて頂いた」

「出たのは我々ではなく、隊士です」

こら、と言わんばかりに伊東が土方を睨みつける。

「それは十分承知しております。本来でしたら隊士の皆さんを招きたいのが本音。だが、事が事だけに、局長である近藤殿にご無理を願ひ、参謀方と副長である土方殿をお招きしたのです」

「口が過ぎる男ゆえ、無礼が多いかと存じますが」

「なに、気になされず。酒の席です、ここは堅苦しい事は言わぬようにと、私も仰せつかって来ております」

それならば、と土方は逃走した六名についてどうなったのか、荒尾に問いかけた。

「事件のあった夜、安藤鎌次が土佐藩邸へと戻って参りました。事情を聞くと、酒に酔って高札場を通りかかり、新撰組の方々と斬り合いになってしまったと。事情はどうあれ、制札事件の事は安藤も承知していたはず。それを酔ったからと近寄ったあげく、斬り合うとは以っての外。脱藩していた者達も一緒だったとの事にて、後日、切腹を申し渡しました。あとの五名について、まだ潜伏先などは解っておりません。ああ勿論、土佐藩としても行方を追っております」つまり、安藤は身内によって口を封じられる形となったのだ。他の五名にしても、居場所を知らないと言うも、納得できるものではなかった。

「潜伏先が解るようでしたら、それ相応の処罰を致します。諏訪殿にもその旨、町奉行に伝えて頂くよう申し述べております」

会津を巻き込んだの対応では、宮川を責立て自白させる事も叶わない。

「荒尾殿も色々と手を尽くして下さった事ですし、この件はこれで終結、と言う事でよろしいんじゃないでしょうか？」

「参謀殿もこう言うんだ、異論はないでしょう」

怒気の籠った土方の声に、近藤は、ああ、と答えた。

伊東の言葉を受け、荒尾は今回の事件の話しをこれまでとした。

そして、悶々としたままの土方を後ろに、近藤は落ち着かない酒を、夜更けまで飲むことになった。

宮川の身柄引き渡しについて会津藩から報せを受けた町奉行は、老中の板倉勝静に報告を上げた。

しかし板倉は、いくら札を抜いていないとはいえ、下手人の手掛かりとなるかも知れない人物を引き渡す事はできないと、新撰組に拘留されていた宮川を町奉行所へ移してしまった。

宮川を京から連れ出す為に戻っていた中岡は、引渡しを拒否された事で肩透かしを食う事になり、暫くの間、土佐藩邸での滞在を余

儀なくされたのである。

其之二 朝顔の花一時

白石邸へと戻った高杉は外出を桂から禁止され、おのうと二人座敷で何をするでもなく過ごしていた。

「大体、小五郎は五月蠅過ぎるんだ」

何度そう口にしたか判らない。

おのうは頷くでもなく、ただ笑って高杉の髪を撫でている。

そこへ望東尼が入って来て、桂からの文だと畳に置いた。

「今度はなんだ、小五郎の奴」

起き上がり、文を開け目を通して行くその手が微かに震え始めた。

「ちくしょうが！」

藩庁が、藩命を持って高杉の役を取り上げ、療養を命じる旨が書かれていたのだ。

そう仕向けたのは桂だと分かっている。身を案じての策なのだろうが、藩政に関与する術を事実上取り上げられた事は、高杉としては面白いはずがない。

「山口へ行く！」

今にも飛び出しそうな姿に、叱咤で以って止めたのは望東尼だった。

「いい加減になさいませ、高杉様！ 敬親殿に陳情してまで療養させたいと願った桂様のお心も汲んで差し上げず、どうなさると言うのですか！」

望東尼とて高杉の心は十二分に解っている。しかし、立ち上がったその体は、自由に動き回れるほどの体力を残していないのだ。

「動かずとも、桂様のお力になる事はできましょう？ 例えお役が無くなったとしても、皆、高杉様のお言葉を大切にされる方々ばかりではございませぬか。ならば、志を少しでも多く皆に伝えるのも、お役であると思えますよ」

怒りと悲しみの混じった顔に、行き場のない感情が心に伝わって

来る。

「高杉様がその様に事を荒げては、庭に居る者も落ち着かぬと言うものでありましょう」

和奈の事を出されては強引に出て行けぬと、おのうの前へ座りその膝の上に頭を乗せ、背を向けてしまった。

「望東尼様は痛い所を突いて来る」

小さな声で笑い、頼まれたからだと言葉を返した。

竹刀を振る姿からは、時折見せる異質な気を感じる事はできない。だが、これまでを振り返ると、何か切欠があり狂気が頭を擡もたげているのは間違いないと思える。

最初は以蔵との稽古だ。二人のやり取りを聞くとその中に【死】という言葉が出てきている。二度目は高杉の家。山縣が言った【狂気】か、桂が言った【狂え】このどちらかに反応したと思える。そして三度目、芸州で新撰組と剣を交えた時。赤井と斬り合う中でその気が変化した。

赤井が口にしたのは、死か狂気か？

（何を言われた？）

巖島で高杉が倒れた時も、気を乱した。

高杉の吐血を伴った席は日を追うごとに酷くなって居ると傍目からでもわかる。その様子から、命の灯火が消え逝く恐怖を感じたのではないか。覚えていない本人からそれを探ることは不可能と言える。

また、和奈の変貌も武市にとっては捨て置けぬ事象だった。

（雲を掴むが如く、だな）

狂気と変貌。その二つは、これまでの話から一人の人物に行き当たる。高杉の心に、死してなお住み続けている師、吉田松陰である。

ふう、と武市は息を吐いた。

いくら考えを巡らせたところで、簡単に答えなど出るはずもなかった。そこへ辿りつくには、もっと和奈の内面を探らなくてはならないと思えた。

「そんな暗い顔をなさって、如何致しました桂木殿」
望東尼がいつの間にか武市の後ろに立っていた。

「これは望東尼殿」

「悩み多き顔にございましたよ？」

「いえ、少々考えに耽っていただけです」

静かに武市の横へ座し、庭へと顔を向ける。

「貴方様にお話があり、探しておりました」

「私に？」

「ええ。私がここへ伺った夜の事についてでございます」

そう言いながら、優しい眼差しを和奈へ向ける。

「高杉様が、和太郎殿のお心の中に生起する大事について、話し下さいました」

語り出したその横顔は静かだった。

「それは・・・」

「事をお聞きし、世俗を離れた身みと言えど、当惑したのは言うまでもございませぬ。事が事ですゆえ」

「そうでありましょう。この目で見た私とて、未だに信じる事を躊躇っております」

武市の言葉に苦衷くちゆうを察した望東尼は、庭から視線を戻し微笑を浮かべた。

「高杉様は私に焦眉しょうびの急と、願いの筋を申されました」

「・・・如何様なことを？」

「自らの命が尽きた時に起こるであろう、禍患かかんについてでございます」

「・・・身内に近き存在であり過ぎるのです、お二人は」

労咳は確実に死を招く。その日が訪れぬようと一番に願っているのは桂だと、高杉にも判っているだろう。

「いえ。高杉様が案じられたのは、己が心を解らずしてその日を迎える和太郎殿の方です。きっとその心を壊してしまうと、高杉様は仰られました」

「心を・・・壊す・・・」

「桂様のことは大丈夫、とお笑いになりましたけど、気にかけて居られるのは見ていて十分伝わって来ます」

信頼という一言では語り尽くせぬものだという望東尼は、この上なく羨ましそうだった。

「もし和太郎殿が狂に取り憑かれら、哀惜の念に堪えぬ中、桂様の抱える心労は更に増すばかりでございましょう」

「そうさせぬ努力を致します」

柔らかな笑みを浮かべ、こくりと頷いた。

「私に何が出来るか、未知なるものゆえにこうとは申せませんが、どうかお一人で抱えられませぬようお願い申し上げたいと存じます」

酢の醸造を生業とする豪商奈良屋の主人入江和作から、赤間関稲荷村にある茶室を借り受ける事になった高杉は、用意が整ったとの連絡を受けて、白石邸から移る用意を整えていた。

入江は白石と同じく奇兵隊の活動を物心両面から支えている一人である。高杉の健康を考えた白石が、空気の良い入江宅への転居を勧めたのである。

高杉が転居を決めた数日後の九月十二日。

奇兵隊士で侍医でもある李家文厚（りのいえぶんこう）の診察を受けた高杉は、直ぐに白石邸を出ると和奈達に告げた。

「俺達に所用があれば、いつでも言伝を出してくれ」

「そのつもりだ。用がなくても呼び出すがな」

名残惜しそうに一度部屋を見回してからそう笑うと、またな、と明るい笑顔でおのうを伴って白石邸を後にした。

桂の所へと龍馬が姿を見せたのは、和奈達が萩へ戻った同じ日の事だった。

「後藤殿が公武合体から非佐幕へと転じた事、本当に驚いたよ」

乾退助が薩摩を訪れたと中岡から聞いても、暗躍を始めた男に桂は疑心を隠し切れないでした。

「薩長が密約を交わしたとゆう事はまだ乾さんにも話しちゃーせんが、いずれ必要となるがは目に見えちゅう。やき、ここで乾さんにも話しを持って行き、薩長に土佐を加える策を練らんとならんと考えちゅうが」

しかし、と桂は視線を落とす。

「西郷さんの前で、乾さんはしっかと国是を倒幕に向けると約束したがやか」

「動くと言うのなら、それを利用しない手はない」

苦渋の色を浮かべ、誰を見るでもなく視線を畳に落としたまま武市は呟いた。

「だが桂さんの心配も捨て置く事はできん」

「薩長と土佐の協力なくして、幕府に政権を返上させるのは難しいろう」

「言う事は容易い。後藤が動いたからと、我々の思惑通り簡単に事が運ぶというものではない」

「やき、乾さんも最大限の努力をするとゆうちゅうんだ。そのつもりがあるから、陸援隊を組織し、中岡に手渡したがだとわしは思っちゅう」

両肩に入っていた力が落ち、和奈をちらりと見た武市は困ったと言ふ顔で小さく笑った。

「いずれにせよ、乾殿が薩摩と接触したのは事実。この後は土佐の動きに注意しながら事を進めなければならぬ」

「その上で三藩の同盟締結に動くつもりでおる。おんしもそのつもりで桂さんの力になってくれ」

武市は、諦めたように息を吐くと、分かっていると答えた。

「げに、高杉くんが療養に入ったと和太郎から聞いたんやけど、ほかーに容態がわりいがかえ？」

「・・・静養しろと、敬親公からの御達しがあつてね。僕がいくら静養しろと言っても聞く耳など持つてくれなかったが、藩主の命ならば晋作も従わない訳にはいかないだろうね」

眉を顰めながらそう説明した。

そう仕向けたのは友を思う彼なりの、今出来る唯一の労わりだと龍馬は思った。

「ほうか。それなら歸りにちつくと顔を出して行くかえ。きつと退屈で体中に虫が沸いちゅうろうから」

「虫っ!？」

和奈が気持ち悪いと言わんばかりに体を摩った。

「気持ちの悪い例えを口にするな!」

「本当にやめてほしいな」

桂も虫の沸いた高杉を想像してしまったのか、肩を窄めてその腕を摩っている。

三人から責める様な眼を向けられた龍馬は、申し訳なさそうに首をすばめた。

「今日はゆっくりして行けるのかい？」

「ああ、ちつくと足を休めてから大坂へ行こうと思っちゅう」

「大坂？」

「勝先生が江戸から出て来ちゅうと海援隊のもんに聞いたき」

その勝と和議を整えるため厳島で会って来たと、手短に会談の内容を伝えた。

「ほうか、勝先生が来られたのか。となると、大坂へ行つたとしたち先生にゃ会えんじやろうな」

「大阪から来たんじゃないんですか？」

「先生は江戸から大坂に出て来ちゅうばあちや。それに他の馬鹿な幕臣とは違うちや。自分が利用されたと判つて、そうながと、その

まま職に就いちゅう人がやないぜよ。今頃江戸に向かつちゅうかも知れんな」

「思い切りがいいんですね」

敵対と、敵意を剥き出して幕臣には見えなかった。そもそも幕府の人間が龍馬や桂と知り合いであり、交流を持っている事自体が和奈には不思議に思えた。

以前、桂は同じ藩でも意見を違える者は居ると言っていた。幕府も同じ様に、人それぞれの意見があり、対立していると言う事なのだろう。

「話しの通じる幕臣が減るのは残念だけど、勝殿ならそうし兼ねないね。だが、合議制に漕ぎ着ける良い切欠になると、止戦協定を受け入れたが、慶喜殿の腹の内はどうやら違ったようだ」

厳島から戻ると、幕府から一時時休戦の勅書が届いていた。

家茂の薨去による休戦の勅命であり、止戦協定に出向いて来た勝の功労は、一切反映されていない内容となっていた。

「勝殿は利用された、それは間違いない」

龍馬もその意見に賛成だった。

「これで諸藩による合議制の実現は遠退く事になる。だからではないが、土佐が動き出してくれたのは、都合の悪いものではないんだよ」

桂が動くとなっても、武市は反論せず受け入れるだろう。後藤が関わっているようにいがいがが、容堂への足掛かりが出来たら、過去の怨恨に拘る訳には行かない。長州と薩摩が和議を立て、密約を締結させた裏にも怨恨はあったのだ。ここは武市に我慢してもらうしかないのである。

そして叶うならば、桂は武市の生存を伝えたいと考えていた。

「龍馬。あの男が勝殿と一緒に居たが、おまえ、何か画策したのか？」

あの男？ と龍馬は聞き返した。

「赤井くんと一緒に居たんです」

武市が答えるより早く、和奈の口が動いていた。

「勝先生と修吾郎が！？　どうして二人が一緒に厳島へ来るんなが」
「解らんから聞いた」

「そうじゃった・・・」

遠翠楼えんすいろうの件を龍馬に伝えたと、薩摩藩邸に勝が尋ねて来て、赤井を紹介したと龍馬は言った。

「新撰組に行ってから会ったとゆう事はないと思う。勝先生も江戸に居たんやき、二人が会う事はないと思うんけど」

龍馬は首を傾げる。

「勝殿が会津藩と繋がっている、と考えれば容易いが」

「阿呆な事をゆうがやない」

「開国論を唱え、幕臣でありながら幕政批判を堂々やってのける勝殿が、幕府の恩ために動く会津と繋がる道理はない」

「判っちゅうならゆうな」

「推論したまでだ」

桂は困惑顔を浮べ二人の間に割って入った。

「ともかく、新撰組隊士が勝殿と一緒にだった事実は消えない。それを確かめようとも思ったんだが・・・晋作が体調を崩して、それどころではなくなってしまった」

恐らく龍馬には判っているだろうが、吐血の事は伏せた。

「修吾郎は、なんちゃーじゃ喋っていなかったがだろ？」

「馬鹿を言わないでくれないか？　勝殿には洗いざらい喋っているよ？」

「まっことか！？」

「嘘を付いて何になる」

「まさか、土方くんにもかえ？」

それはない、と断言した桂に驚いたのは武市だ。懸念を抱くならまだしも、赤井を信じているからこそ出た言葉なのだ。

「もし喋っていたら、その場でその首を刎ねている」

人を剣で殺める事を良しと思わない桂の言葉は、重く龍馬の心に響いた。

「桂さんを・・・斬ろうとしたんです」

「え？ おんしがか？」

「赤井だ」

「なぜ桂さんを斬ろうとしたがだ」

桂が、赤井の口封じの為に刺客を放っていたと聞いた龍馬の顔色が一変しする。

「もう刺客を送るつもりはないから、安心してくれていいよ」

刺客を送ったのは、長州と薩摩の立場が危険になると判断したからだ。

赤井がどれほど幕末の歴史を知り得ているのかは推察するしかなく、例え小さな事柄であったとしても、やがて大きな波紋となり、障害となればこれまでの苦労が水の泡に帰す事になる。そう桂は考えたのだ。

「僕の他にも、危惧を抱いている人物が居るようだけど」

桂の鋭い眼差しが向けられ、武市は目を逸らした。

「そちらが動かないと、僕には断言できないよ」

その人物を知っているのは、顔を背けた武市である事は龍馬にも解った。

「大久保さんか」

「・・・坂本くん。まさかとは思うが」

後ろへ下がった龍馬は、両手を突くと畳に頭をつけた。

「謝って済む事じゃないがと思ちゆうが、しようまつこと申し訳ない！」

「どうやら、口を封じておくべきは君だったようだね、坂本くん」

桂の体の周りに冷やりとした空気が漂う。

「喋ったがは事実やき、言い訳はしやーせん。けんど、必要が有ると思つての事ながは、解つとおせ」

「まったく。君と言う男は、どこまで寛大に他人を信用すれば気が済むんだい？」

殺気が消え、中腰のまま居た和奈は、緊張が解きながら腰を下

ろした。

「桂さんに殺気を向けられたのは、士学館以来やき」

安政五年、他流試合が盛んになり始めた頃の事である。

僅か一年で錬兵館の塾頭となり、免許皆伝を受けた桂は、大検使として江戸藩邸詰めを命じられていたが、単調な事務仕事に追われている時間が惜しいと、あろう事か”怠けて”お役御免となったのだ。

多忙で通えなくなって居た錬兵館にも行けると喜んだのもつかの間、帰国命令が下ってしまった。一度帰藩すると、江戸に出て来れる可能性は極端に低くなる。錬兵館の塾頭も辞めざるを得なかった。そして錬兵館塾頭として最後に参加する事になったのが”撃剣大集会”である。

各道場主が、門下の内一番の腕とする者を連れて集まってくる。

斉藤弥九郎は剣士の桧舞台ともなるこの大会に、桂ら三名の高弟を伴って参加した。

手合わせはしなかったが、一通り試合が終った後で龍馬が桂の所へやって来た。

「おまんが錬兵館の桂小五郎さんなが。わしは土佐の坂本龍馬とゆうもんやか」

「お名前だけは存じ上げております」

龍馬は手合わせをしてほしいと桂に頼みに来たのだ。

「私も、と申し上げたいが、帰藩間近なのでお受けできかねます」
なおも龍馬は食い下がった。

以前から知り合いの様に接してくる龍馬は、屈託ない笑みを浮かべ、桂が江戸に居る間、士学館で行われる撃剣会に是非参加してほしいと誘った。

「解りました。参加できる、とは断言できませんが、藩邸に伺いを立て許可が下りたら、という事でよろしいですか？」

「ほりゃあ嬉しい限りやか。じゃー、士学館でまた会えるがを樂し

みにしておるがで」

その時の士学館の塾頭が武市であるが、撃剣会で武市の太刀を見る事は叶わなかった。

藩用もなく、斉藤の許可を得た桂は士学館を訪れた。

ここでは五人抜き試合となる。

四人までを倒した桂の前に、五人目として龍馬が名を呼ばれて出て来た。

ここで来るかと、桂は笑った。

「士学館塾頭直々の命やき、悪く思わんでいとおせ」

ほう、と桂は笑みを消した。龍馬を当てたのは武市なのだと言ったのだ。

ちらりと横を見ると、腕組をしたまま立っている武市の姿があった。

（自信たっぷり、と言う事か）

武市が龍馬を最後に当てた理由を、この後の試合で桂は悟る事になった。

相打ちが延々と続くと思われた試合だが、十本目の打ち合いで、桂は上段から一気に龍馬の面を目掛けて振り下ろし、龍馬は中段から剣先を桂の喉へと突き出した。

結果は、桂の負けだった。

「いやな事を、よく覚えてるものだ」

歯を見せて笑う龍馬に、微笑んでいる武市。

「桂木さんとは試合しなかったんだ」

「ずるいだろう？　だが、坂本くんとの手合わせは十分満足している。本当に、いい試合だった」

「しょうまつこといい試合じゃった」

「だが、それはそれ。大久保さんに知られたのは、僕としては痛いところか、不安材料でしかないよ」

桂は、再び平伏して謝る龍馬に、お仕置きだと言わんばかりに、

暫くの間お小言を続けたのである。

其之三 波乱の前触れ

一君万民

臣下の間にことさらに階級差を設けるは陛下の慈愛を下々まで行き渡らす妨げとなること諸人自覚せよ。

慶応二年九月二十三日。家茂の葬儀が行われ、増上寺に埋葬されたが慶喜が大阪を出ることはなかった。

葬儀に参列し、墓前に花を手向けた勝は赤井を連れ、江戸城西ノ丸に移った天璋院を訪ねた。幕府の威厳失墜は、大奥内でも実しやかに囁かれるようになり、頭を悩ませていた天璋院は勝の来訪を喜んで迎えた。

勝が大奥に出入りを始めたのは、十二代将軍徳川家慶の五男初之丞の学友として江戸城詰めとなった七歳の時だ。旗本小普請組で無役だった勝家としては、願ってもない召抱えとなる。しかし一橋家六代目を継ぐはずだった初之丞が、元服し慶昌と名を改めた翌年に急死する。これにより一橋家へ出仕が決まっていた勝の昇進も立ち消えとなった。勝が十六歳、初之丞が十四歳の時の事だった。

初之丞に代わって一橋家を継いだのは、慶喜である。

大奥への出入りも断たれ、元の貧乏な生活を余儀なくされた勝だったが、大奥との繋がりはずいぶん消えず、今日に至るまで天璋院との関係も時勢を語るまでに深まっている。

諸大名からの陳情が増えているが、家老や臣達は一体何をやっているのだと、やって来た勝に膝を詰めて問質した。

「薩州からお小言があったんですかい？」

「幕府は諸藩の意を聞こし召さぬのかとのたまうばかりに、御年寄

も困っておる」

会津と肩を並べ幕政に関わっていた薩摩が既に幕府を見限り、裏で暗躍し始めていると勝も知っている。いずれ長州と連なり、幕府に対して如何様な態度で出て来るのか推察もできたが、勝の意見を取り上げる幕臣は少ない。かろうじて幕府目付大久保一翁だけは勝の意見を聞き入れる寛容さを持っていたが、腑抜けな雁首を揃える家老を動かせはしなかった。

「おいらが何を言っても、小笠原殿や板倉殿は腰を上げようともしない。小倉城の落城は甚だ遺憾を覚えるが、古い体質を払拭できねえ重鎮らは、身の保身が第一だ。京や大阪の情勢を、城の中で聞くだけじゃ、なーにもできやしないと言うのが判らんのか」

容赦ない言葉が、建前向上でないことを天璋院は知っている。心音を語れる相手だからこそ、勝を慇懃無礼と咎めず笑って話を聞けるのだ。

「家茂殿がお亡くなりあそばされ、和宮殿も打ち沈んでおられるというのを、家老どもの慌てぶるときせば目も当てられざるものはない」

文久二年、家茂の正室として和宮が大奥へ入る事が決まると、薩摩藩は天璋院に帰藩を申し出た。しかし、家定に嫁いだ時より徳川家の者であるから、帰藩はしないと断っていた。

正室となった二年後に家定を亡くした天璋院と同じく、和宮も越入れからわずか三年で家茂を亡くした。

御所から徳川家へ下った和宮と、武家出の天璋院との確執は大奥でも有名となっていた。

家定の薨去の後、一橋家の家督を継いだ慶喜を十四代將軍に推した天璋院と和宮だが、大奥に口を出すようになった慶喜を快くは思っていないかった。徳川家安泰を願う心に相違はなく、大奥の改革を行おうとした慶喜に反対の意見を連名で申し立てている。

「慶喜殿の所業に立腹するばかりの毎日に、そなたの来訪を嬉しく

思う」

「勿体なきお言葉にございます」

畏まった勝を見て、天璋院が身を正した。

「御膳様にお頼み申し上げたし由があり、本日お伺い奉りました」

「さて、如何様な事を私に申すのか？」

後ろの部屋に控えさせていた赤井を目通りさせたいと承諾を取った勝は、襖を開けて西本願寺での一件を天璋院に語って聞かせた。

しばし沈黙し、赤井を注視していた天璋院が高らかに笑い声を上げる。

「勝殿が嘘事を陳べ、其の者を匿う道理は如何とするものであろうか」

「世の理の不思議な逢瀬、と言いましうか。おいらも未だ首を捻るばかりなんだが、成り行きでそうなっちまった」

「先見の明があるそなたが成り行きで嘘とは、その方が不思議に思えますぞ？」

本当に楽しそうな様子で勝をからかっている。

「しかし、素性が判らぬでは、縁りある者とは言えませぬ」

龍馬の名と赤井の素性は伏せ、薩摩藩邸に厄介になっていたとだけ口にした。

「薩摩と繋がると懸念されるより、私との縁を出す方が得策と考えられたか」

「咄嗟とは言え、御前様に断りなく御名を頂いたお詫びは申し上げねばなりません。新撰組で国の役に立ち立ちと思ってるこいつを、おいらは気に入っちゃった、それだけでございます」

「赤井とやら」

眼を向けられても、赤井は畏まるしかない。

「勝安房守殿からの頼み、しかとこの天璋院が聞き届けたゆえ、会津藩より尋ねられた際は相違ないと答えるが良い」

「あ・・・ありがとうございます」

この女性が征夷大將軍の正妻であったという事実だけでも畏怖を

感じていた。勝と渡り合える人間は数少ないとも実感するところで、終始笑顔を絶やさず、勝の腹の内を察する聡明さに赤井は畏敬の念を抱いていた。

「頼んでおいて言うのも憚られますが、本当に宜しいので？」

「思慮浅はかき者の言葉とは違おう？ それに御国に仕えたいと申すは、徳川家に仕えたいと申すのと同じであろう」

「そうここにお約束致します」

ついと、赤井の口から言葉が漏れた。

「頼もしい限りではないか、のう、勝殿」

「まだまだ修行が必要な若輩者ですが」

それは勝の腕次第だと笑う。

「さて、時勢でも語りたいのですが、長居したとあっては要らぬ噂がまた立つやも知れませぬ。某らはこれにて下がらせて頂きます」

「・・・勝安房守殿。徳川家の御為、どうか力添えを頼みます」

家茂薨去のショックから立ち直れない和宮を抱え、長州征伐で更に悪化した幕府の財政難、跡継ぎ問題で慶喜が將軍職を辞退し続けている現状に、神経をすり減らしているのは聞かずとも知れた。

「承知しております」

西ノ丸を後にした勝は、赤坂本氷川坂下にある屋敷へ戻る間中、ずっとため息を吐き続けていた。

三条制札事件で捕まった宮川を、京外に連れ出すため土佐藩邸に出向いた中岡は、老中板倉勝静の横槍が入り、町奉行に身柄を移されたと聞かされた。

しばらく様子を見ると乾に言われ数日待ったが、宮川が開放される事はなかった。

土佐藩邸に居座るのは危険を伴うと辞去した中岡は、長州へ戻る前に二本松藩邸へ顔を出す事にした。

「まさか家茂公の薨去を知って、小笠原が江戸に戻ったとは思いませんでした」

「幕府の恩為より、己が保身を優先した結果だ。上様の薨去で慶喜殿の意気も冷め、勝安房守殿を長州へ出向かせたそうだが、それとは別に休戦の勅許が下り、長州に書簡を送ったと聞いている」

「ええっ!?　じゃあ勝安房守殿が長州に行った意味がないじゃないですか!」

「私に怒鳴っても仕方あるまい」

「それは、そうです」

呆れ顔で肩を上げた大久保は、戦の報告だけをしに来たのかと尋ねた。

「土佐が動きます」

その言葉に驚く素振りもなく、静かに眼を閉じる。

「君に私設部隊を一任するからには、それ相応の覚悟を以って当たったと言う事だろう。それはいいとして、私が懸念するところは土佐の大殿だ」

「・・・やっぱり大久保さんか」

ん?　と開いた眼で中岡を見る。

「乾さんに喋ったの、大久保さんですよ」

「一体何のことだ」

「御門への参戦ですよ」

「ん・・・さて、そんな事があったかな」

こう出られると同じ質問をしても肯定などされないと知っている中岡は、もういいです、と膨れっ面を作るしかない。

「長州も、朝廷からの勅許では、受けざるを得ませんね」

「そう言うことだ」

大久保にとってこの休戦は有り難かった。大坂城に留まっていた家茂自ら長州に下るとなれば、薩長同盟の密約に従って、出兵拒否を貫いている薩摩も動かざるを得なくなり、静観を決め込んでいる諸藩も動き出すことになる。そうなれば戦火は拡大し、裏で動くイ

ギリスとフランスが表へ出て来る自体を招く事になる。大久保にとっても、長州にいる桂にとっても望んだ展開ではなくなってしまふのだ。

「この過渡期に幕府がどう動くか・・・ああ、一つ面白い事を教えてやろう」

「大久保さんの面白いって、すごく嫌な予感しかしないんですが」

「失敬な。まあ、当たらずとも遠からずというところだ。新撰組が荒れるぞ」

「え？」

「とある筋からの情報だが、確かだ」

「荒れるって・・・」

「あちらにも色々不和の種がある、とだけ言っておこう」

語られた意味を理解するに至ってない中岡に、大久保は微笑みを浮かべた。

「まさか、赤井くんを新撰組に出したのって・・・」

「馬鹿を言い給え。あんな小僧を頼らねばならぬ道理などない」

頼るところか、大久保は刺客を差し向けているが、中岡はその事をまだ知らなかった。

屯所を移してからも隊士の数が増え続けたため、伍長以上の隊士は屯所近くに家を借り受け休息所とし、宿直勤以外の日はそこから西本願寺へと通うようになっていた。

醒ヶ井木津屋橋下に休息所を設けた近藤の所へ、伊東が姿を見せた。

「どうしました、こんな夜更けに」

「お伺いしたき事があり、無礼とは思いましたが訪ねさせて頂きました」

畏まって頭を下げる伊東を追い返す訳にもいかず、近藤は中へと招き入れた。

「それで、相談とは？」

「近藤くんが新撰組を立てられた真は何処にありますか？」

唐突な質問に、近藤は即座に言葉を返す事が出来なかった。

「そもそも、新撰組は尊王攘夷の志を持ち、尽忠報国を目的として結成された。そう私はお聞きしている」

「・・・・・・」

「誤解なさらないで頂きたい。私は今一度、そのお心を確認したくお聞きしているだけです」

伊東が何を考えて来たのか、その真意を測りかねた。

「公武合体に基づく攘夷断行を行うのが目的だったのは確かです」

「だった・・・では、攘夷断行はもはやない、そう解釈してよろしいか？」

「会津藩預かりとなって、京都守護職配下に置かれた我々の任務は、幕府転覆を目論む志士達の検挙、市中の治安維持です」

「尊王攘夷を掲げる諸藩の志士達とは違う、そう仰りたい」

「そうです。だが、君主に忠義を尽くすは新撰組の心得であります。それは御国に報いる事にもなると信じております」

伊東はその場に手を付くと、近藤に頭を下げた。

「それを聞けて安心致しました」

「伊東さん」

「土方くん抜きで、お聞きしたかった。ああ、聞かれたら困るというのではなく、話しの腰を折られたくなかった、それだけです」

「土方は・・・ずっとこの私に付いてきてくれた男です。他の隊士よりも新撰組を思う心が強いゆえ、時には走りすぎてしまうのです」「よく存じております。しかし、強硬な手段に出るばかりが隊の為ではございません。土方くんの性質はよく理解しているつもりですが、もう少し副長として落ち着いて頂きたいというのが私の本音です」

「私のせいでもありますな」

「局長として、抑えるところはちゃんと抑えられているではありません」

せんか。私はただ、脱退者が後を絶たない現状を危惧しているのです。土方くんには剣の力ではなく、内面的な強さを以って隊を引っ張ってほしい、そう願っているだけです」

結局、こういう腹積もりで来訪したのか探れないまま、外で待っていた篠原泰之進と富山弥兵衛と共に伊東は夜更けの町へと消えて行った。

長州へ向かうつもりだった中岡は、長崎へ向かう薩摩の蒸気船に乗っていた。

欄干に持たれかかり、何度かため息を吐くその手には大久保から託された書簡が握られている。

後藤象二郎が長崎へ入ると知った大久保が一計を案じ、土佐藩主山内容堂に手渡させると差し出したものである。

「だけどなあ」

後藤本人には絶対見せてはならぬときつく言われていたが、土佐帰る途中に読まれる危険性があり、そのまま容堂の手に渡らない可能性もあるのだ。

「なんでいつも無理難題を押し付けて来るんだか」

頭を抱えて長崎へ向かう中岡の心中は、龍馬と再会しても落ち着かなくなるのだが、今はまだ知る由もなかった。

中岡が海上の人となっていた頃、龍馬と共に、長崎へ向かう和奈達の姿が在った。

「しょうまつこと一緒に行くがかえ？」

「・・・何回同じ問答をすれば気が済む」

片目を吊り上げた武市を見るたび、龍馬は同じ事を口にするのである。

「おんしのその顔を見てるこっちの身にもなっとおせ」

「五月蠅い！　がたがた言わずに歩け」

いつもの様に口を尖らせ、出し損ねた言葉を口の中でブツブツと呟く。

「僕も居るんだから、そう心配はないと思うけど？」

一番後ろを歩いているのは、女装した桂である。

「桂さんと武市の馬鹿が一緒やき、わしはこうして気苦労を重ねちゆうんぜよ」

「その名を口にするなど、あれほど」

武市の手が即座に柄にかかったものだから、いつもの事でも焦るしかない。

「判っちゅうから、直ぐ剣を抜こうとするがやめとおせ！」

「僕の名も然り。いくら坂本くんに腕があるとは言え、二人ががりは辛いだろう？」

辛いどころか、抵抗する間もなく切り伏せられるのは目に見えていたので、以後気をつけますと、真面目な顔で二人に頭を下げる。

「龍馬さんが真面目になる時って、真剣みないですよね」

「なっ！」

「それを言ったら駄目だよ……」

「言わずにいるのも親切なんだが」

武市と桂が後ろを振り向き、龍馬は呆然と立ち止まったまま、以蔵は笑いを堪えて龍馬を追い越す。

「ちつくと待たんか！」

我に返った龍馬は、走り出して最後尾を歩く以蔵の尻を蹴り上げた。

「貴様！　俺は何もしてないだろうが！」

「和太郎の尻を蹴る事はできやーせん！」

やいのやいのと喧嘩を始めた二人におろおろとする和奈の手を取り歩き出す桂。

「と、止めなくていいんですか？」

「ほっとけ」

「いい機会だと来たが、後藤殿の出方で長州の立場が微妙なものとなるのも、これまた事実。坂本くんが心配する道理も解っているんだけどね」

桂も意に介さず話を戻しにかかる。

「やき、わし一人で長崎に行つて後藤さんと話して来きゆうよ」

表だつて後藤が倒幕に動と断言している状況ではない。乾がそう口にし、倒幕へ動き出したと告げたに過ぎない中、長州筆頭の桂と、既に死人となった武市と以蔵を伴って行くのだ。後藤がどう出るか、龍馬にすら予測できないのである。

「ここまで来て悩んでも仕方ないだろう、いい加減諦めろ」

武市の顔は困惑も不安の色なく、反対に楽しそうな笑みを浮かべている。

「分かったが。はや好きにしとおせ、どうなつても知りやーせんよ」

長崎に入つた一行は、油屋町にある油問屋大浦屋へと向かつた。背が低く、美人ではないが整った顔立ちのお慶が、三十六歳にしては風格のある物腰で、店に入つて来た龍馬を出迎えた。

嘉永六年。大浦太平次の娘であるお慶は、天保十四年十月に起きた大火事によって大きな被害を受けた店を建て直すため、肥前嬉野茶を海外に輸出しようと考え、出島に在留中だったオランダ人の協力を得て、イギリス、アメリカへの輸出に成功し巨額の富をなしていた。

「またご厄介になるがで」

「どうぞどうぞ。お客さんの方はもうお着きになられて、二階で待つて頂いておりますよ」

「そうながかえ？　ここに着くのは夕刻と聞いちよつたががやき、ゆつくり来たんやけど」

「ええ、そう申されておりました。ちゃんと御持て成しはしております

ますからご心配なく」

和奈はお茶の香りが充満する店内を見回した。

「そちらはお連れさんですか？」

「そうやか」

「お世話になります」

挨拶を交わした後、龍馬が先ず一人で行くと二階へ上がって行ったので、お慶は一服と和奈達に淹れたてのお茶を振舞ってくれた。

「美味しい」

「本当に美味しい」

「一番の褒め言葉ですよ」

お茶好きの大久保が居たら喜ぶに違いないと、和奈は久々に顔を思い出した。

「お慶さんにはうちの梅之助が大変お世話になったと、此方を伺う前に聞きました」

梅之助？ と首を傾げたお慶は、ああ、と笑みを浮かべた。

「綺麗な女性がご一緒だと言うのに、連れずに上へ行かれたので、おかしいとは思っておりましたが、谷様がご自慢にされていた方でしたか」

「どんな自慢話をしたのか興味をそそられるところですが、それはまたの機会にお聞きする事にいたしましょう」

しばらくして、二階から龍馬が下りてくる。

「どうした？」

どうも困ったとだけ言うと、お盆に残っていた湯呑みを持ってぐいっと飲む。

「あっちちちっ」

「・・・どうしておまえはそう馬鹿な真似ばかりするんだ」

口を開けて手でパタパタと仰ぐ龍馬は、後藤と一緒に中岡が居るんだと言った。

「慎太が？」

「どうして？」

和奈と武市に同時に聞かれ、知るわけがないと答える。

「彼が居ようが居まいが、然程問題はないかと思うよ」

中岡と後藤が居る部屋に行くのは桂と龍馬だけになり、和奈と武市、以蔵の三人は隣室で待つ事となった。

其之四 悪縁契り深し

後ろに女性を従えて部屋に戻って来た龍馬に、後藤は何だと眉を顰めた。

「えっ・・・ええ!？」

やはり驚くのは中岡一人である。

「な・・・なんで・・・」

「いいから、おんしはちつくと黙っとおせ」

腰を下した龍馬は、怪訝そうな顔で桂を見ている後藤に手を付いた。

「どうしてもお引き合わせしておきたい方が居たがやき、ここにお連れ致しました」

「坂本。まさかおまえ、女をあてがってこの私を謀ろうと言うつもりか？」

「滅相もございません、此方は一」

すっ、と桂が両手を付いて後藤を見据えながら頭を少し下げると、射すくめられる様な眼差しを受けた後藤はごくりと喉を鳴らした。

「私は長州藩加判役の木戸準一郎と申します。後藤殿が土佐より御出でになると聞き、僭越ながらご意見を賜りたく国許より参りました」

身分に煩い土佐藩の人間に対し、役職を口上するのは対等な立場を維持するのに不可欠である。顔色を変えた後藤を見れば、その読みが正しいと知れる。

「どういう事だ、坂本」

「と、わしに言われても困るんですが」

「坂本くん到他意はないと申し上げておきます」

長州藩加判役と言えば藩主直下の役職であり、側役である。すなわち、目の前に座る桂は、立場的に自分よりも上格になるのだ。その相手から、長崎に来た理由を聞かれているのだから、龍馬が困る

より、後藤の方が困った立場になってしまっている。

「・・・長州の方が私に何をお聞きになりたいと申すのか」

「この度後藤殿が土佐を出られたのは、藩主山内公のご意向があったの事にございましょうか」

「・・・」

「正直に申し上げますれば、私も藩主の許可を得て出て参ったのはございません」

「それに同じく、と申し上げる」

「では」

にっこりと微笑んだ桂は、下げていた頭を上げた。

「ここよりは、国を憂う者としてお話し致したいと存じますが、如何でありますよう？」

「・・・異存はない」

「有難うございます」

龍馬のため息が、襖を隔てて座る和奈の耳にも届き、ちらりと武市を見る。

「・・・」

視線を感じた武市は、口に手を当てて笑いを堪えた。

「しょうまつこと冷や冷やさせてくれるお二人ぜよ」

「俺が一番冷や冷やしてますって」

女装している桂から感じる気迫は並みの武士ではないと、後藤にも判っていた。長州で女装をする者と言えば、京で名高い剣客桂小五郎であるが、目の前に座る人間が同一人物なのかどうか、後藤に判断する材料はなかった。もし、桂小五郎ならば、下手には出れない。剣客としての名声も然ることながら、知略策謀家としても名を馳せているのだ。

「木戸殿がわざわざ長崎へ出て参られたのは、長州征伐に於いて我が藩が、幕府と足並みを揃え、討伐にと兵を上げた真意を問うため

であるか」

「土佐が公武合体を国是としているのは長州も承知しております。幕府からの命に従い兵を出すのは、それに倣った対応ではありませんか？」

「うむ・・・」

「私は後藤殿に恨み辛みを申し立てに参った訳ではございません。家茂殿が薨去し、徳川幕府は混迷を記すと推し量れる時にあたって、土佐藩が国是とした公武合体をどの様に捉えているのかお聞かせ頂きたいだけです」

長崎で龍馬に会えと言ってきたのは乾である。そう薦めたのは、薩摩と長州が密約を交わし倒幕へと動き出している背景を慮ったことだ。それは後藤も承知している。ここで薩長と足並みを揃えられれば、弱体化した幕府に大政を放棄させ、諸藩による新しい政治体制の中枢に土佐も加われるのである。

非公式とは言え、長州重鎮がこうして出向いて来るのは、後藤にとって都合が良いものだが、容堂からは三藩連立で動く許可を取り付けておらず、即座に桂の質問に答える事ができなかった。

「どうやら、先走ってしまった様ですね」

心を見透かされての言葉に後藤は顔が熱くなるのを感じた。

「過去に於いて、後藤殿は尊王攘夷を掲げた土佐勤王党を弾圧された」

桂の言葉は、武市だけでなく隣に座る龍馬の顔色をも変えさせた。

「な・・・今、ここで、それを持ち出されるか」

「長州も尊王攘夷を掲げ、御国のため多くの命を失って参りました」
勤王党の弾圧は、同じ志を持つ長州にとっても他人事で済む話ではない。

「それは薩摩に於いても同じにございます」

もはや後藤は、桂の真意を探る余裕などなかった。

「貴殿は、何を仰りたいのか！」

「過去の因縁を捨て去る度量が、後藤殿にはございますか？」

「何を・・・」

「ご存知の通り、我が長州も、薩摩の策略によって京から追放を受け、禁門の変以降朝敵となりました。しかし、大事を前に捨て置かねばならぬ事もあると、苦渋を飲み今日に至っております」

「過去の因縁とは・・・」

「あなたの命によって死した者達の怨念は、まだ生きております」

桂は立ち上がると背を向けて、襖に手を掛けた。

「ちっくとまっとうせ！」

龍馬の制止も空しく、桂は襖を開け放ってしまった。

「なっ！」

後藤の驚愕した顔が武市の視界に入ってきた。

「た・・・武市・・・」

片目を失ってはいたが、忘れられる顔ではなかった。その斜め後ろに座る武士の顔もまた、同じであった。

「薩摩と土佐が繋がる前に、過去の因縁を取り除く必要があると考えました」

殺気を帯びた武市の気が後藤に向けられたので、龍馬は双方の間に入り中腰に身構えた。

「武市・・・なのか・・・？」

大津で捕縛した土佐者の中に武市と岡田の名前が在ったが、送還されて来たのは間崎達三名だけだった。

後藤は二人が逃走を図ったと追討を願い出たが、容堂はこれを拒否し、背格好の似た収監者二名を切腹とする事で勤王党への断罪を終らせたのだ。

後藤の視線が桂へと向けられる。

ひやりとした眼差しを受け、龍馬が庇うように目の前に座っている事で、そこに立つ者が桂小五郎本人であると後藤は確信した。

まだ信じられないと言いたげに、武市へと視線を戻す。

「生きて・・・いたのか・・・」

「後藤殿」

武市の静かな声が響く。

「私は恨みを申すため、ここに座って居るのではありません」

「な・・・ならばなぜ」

「土佐にとって、私はまだ邪魔者でしかありませんか？」

「邪魔など、始めから思うてはおらぬ」

「ならばなぜ土佐勤皇党を断罪に処せられました！」

「あれは！ あの時は・・・おまえ達を押し留めるには力を持っただけはなかった。叔父が暗殺された時、私にはそれしか見出せなかった。先に力に出たのはその方達ではないか！」

「私一人を見せしめとして処罰すれば良かったのでありますまいか！」

「馬鹿を言うな！ そんな事をしてみろ、おまえを慕う黨員共が血気に逸るのは目に見えているではないか！」

「そうと判っているなら、何故我々の話しに耳を傾けてくれなかった！」

「それは・・・」

「上土であろうと、郷土であろうと同じ人間だ。貧困に喘ぎながらも、土佐御国のためと思う者達を、東洋は・・・虫けらとあざ笑った！」

東洋が土佐の中枢に居ては、身分のない者に未来はなく、また土佐の未来もないと、武市は暗殺を決心したのだ。

「土佐が、薩摩や長州に遅れている事を私は嘆いた。容堂公も尊王攘夷の志を持っておられた方だ。嘆願を続けられれば何れ判って頂けると信じていた。決して、力で屈服させようなどと考えていた訳ではない。朝廷からの勅許を以って容堂公がお立ちになられれば、薩摩長州と肩を並べる事ができる。それが土佐の為だと思えばこそ、私は・・・」

武市の悲しみが痛いほど和奈の心に伝わって来る。

（武市さんが、泣いてる・・・）

大津で捕らえられていた人達は、武市にとって大切な人だったのだ。

あの光りの中で感じた時と同じく、ここにも悲しみが充満している。

「おまえに信念があるように、私にも信念はある。容堂公も公武合体には反対されなかった。尊王のお心を捨てられた訳ではない。攘夷に対する見解が変わられたただけだ。それを判ってくれば良かったのだ」

「是非の心、人各々之にあり、何ぞ必ずしも人の異を強いて之を己に同じうせんや」

「！」

和奈の剣を止めたのは龍馬だった。

「武市！」

武市と桂は同時に動いた。

「な・・・」

突然目の前に剣の煌きが見えた後藤は、その場に力なくへたり込んでしまった。

「っ！」

武市の拳が和奈の鳩尾に入り、その手にしていた剣を桂が？ぎ取った。

「なんとたとゆうんだ！？」

「前に言っただろうが！」

龍馬が武市を気にして後藤の前に座っていなければ、その懷に和奈の剣が食い込んでいたのは間違いなかった。

和奈を抱えた武市は、後ろの部屋の隅へと座り込んだ。

「一体、何が」

桂は後藤の前に座ると両手を付いて頭を下げた。

「ご無礼の程、申し訳ございません。ですが、これが怨恨が続く理なのです。命を殺めれば、それを大事とする者もまた命を殺めに走

る。その連鎖があるゆえ、私は剣を振り力で抑えるのを良しとは致しませぬ。然しながら、多くの者は剣に明日を託している。それが今の世と嘆かぬ為に、立たねばならぬ時期に来ているのです」

「・・・何も私は、自己の為に国是を公武合体へと推したのではない。朝廷に尽くし攘夷を払うその思想は良く判っていた。だが、幕府なくして国は成り立たぬ。徳川家が三百近くに渡り世を平定させて来たのは事実であろう!？」

「その幕府にとって、もはや朝廷は邪魔者でしかないので。慶喜殿はまだ朝廷を立てるお志をお持ちだが、幕府に威勢を放てるお方ではない。家老によって運営される政権の危険性は、安政の大獄を見れば後藤殿にも判る事でありましょう」

日本の混乱は、安政の大獄から始まったのだ。

「私が後藤殿にお聞きしたかったのは、過去の因縁に囚われず倒幕へと足並みを揃えるお覚悟があるか、その一点に尽きるのです」

「私が許したとしても・・・武市は・・・許してはくれまい」

「それはあなた次第ではありませんか？」

「っ!」

「心に蟠っていた想いを口にできたのだ、もう何も望む事はない」

先ほどの激情ぶりとは打って変わり、穏やかな笑みを湛えている武市は、言葉通り満足している様に見えた。

「・・・」

立ち上がった後藤は、ゆっくりと武市の元へ歩き寄った。

「武市」

「恨みがないと言えは嘘になる。しかし、私は死して行った同志達の魂に報いる為、これから生きねばならぬのです」

和奈を抱え、その顔に落としてた視線を後藤へと向けると、武市は目を閉じた。

「後藤殿、身分に拘らず土佐の御為と働く者達の声にも、どうか耳を傾けて頂きたい」

後藤の目に映る武市は、もはや自分の知る武市瑞山ではなかった。

「すまん、武市！ 本当に、すまんかった！」

頭を畳につけてそう謝った後藤に一瞬驚いた顔を見せたが、武市は笑みを浮かべると、もういいと言だけ呟いた。

後藤との正式な会見は後日改める事になり、武市は意識を失った和奈を連れて大浦屋を後にした。

「けんど和太郎にゃたまげた」

「俺も」

一階に下りて来た二人は、お慶が出してくれたお茶を啜っている。「これで後藤さんが斬られちゃったら、わしは切腹せんとならんかった」

「切腹で済めばいいですよ。長崎で土佐者が斬られてたら、今後の薩摩と土佐、長州の関係がどうなっていたか」

そこで中岡は思い出した。

「ああっ！」

「いきなり大声を上げるものがやない。吃驚するやか」

「これこれ！」

懷から手紙を取り出し、龍馬の目の前で振る。

「なんぜよ？」

「大久保さんから頼まれてたんだった」

耳元で容堂に手渡すように言われたのだと囁いた。

「どうして大久保さんが容堂公に？」

「知りませんよ。俺だって中に何が書いてあるのか知らないんですから」

かしてみると、中岡の手から手紙を奪い取る。

「ちよっと、龍馬さん！ 駄目ですよ！」

肘で中岡を突付きながら、龍馬は手紙をばらばらと開けてしまった。

「ああ、もう！」

「……こりゃあ……おんし、たまげたぜよ」

実は中岡も中身が気になっていたので、開けてしまったものは仕方ないと、龍馬の肩越しに文面に目を通す。

【乍恐一筆致啓上候 運を以て徳を不得致間敷候 民衆兵士有之改革無之処ニ君主と被申しか 酔わば勤皇覚めば佐幕と揶揄され候へば虚実の段ニ於てハ難量候 唯ケ様の一説なども有之迄の心得尤ニ候程察申 事は世が良君ノ御名を残被遊相願候 不脚してゐらば国が基盤を構築致すか選取可被成下候 然ニ死セざる者ニ於て寛大成る振舞を申上候】

「うわ・・・大久保さん、容堂公に喧嘩ふっかけてる」

「いや、違うぜよ。しまいの一節を見てみいーや」

「遠回しに、桂木さんを許してやれってことか」

丁寧到手紙を直し、中岡に返した龍馬は腕を組んで首を捻った。

「とゆう事はだ、木戸さんが宗次郎を連れてここに来ると大久保さんは知っちゃったが」

「なわけありませんよ」

「むう・・・」

「あれですよ。狐と狸の考えは似てるって事です」

狐と狸？ と、龍馬は笑い転げてしまった。

「僕達を放っておいて、何をしているかと来て見れば」

二階から下りてきた桂は、店の中だと言うのに遠慮もなくはしゃいでいる龍馬の側へと立った。

「こりゃあー申し訳ないがで」

「僕の用件は終わったから、後は坂本くんに任せるよ。和太郎の事も心配だからね」

和奈がなぜ後藤を斬ろうとしたのか、龍馬は判るかと桂に尋ねた。「残念だが、僕にもそれは判らない」

和奈が口にした言葉に付いてはどうかと聞く。

「あれは・・・吉田先生が書かれた要駕策主意の一節だよ」

「ほう。和太郎は吉田先生の教えを勉強しゆうがかよ」

「・・・近くに晋作も居るしね。桂木くんも、久坂くんから吉田先

生の教えを聞いていた一人だ。和太郎が興味を持ったとしてもおかしくはないだろう？」

そのはずがないと、桂は内心で声を荒げた。高杉にもそんな時間などない、武市とて松陰の書を全て聞かされている訳ではないのだ。

「後藤さんにゃ痛い一言じゃったろう」

「頑なな心を解くには、良い一手だったのは確かだね」

それを意図して内なる者が発現したのだとしても、剣を抜く事の意味が掴めなかった。

暗闇の中、微かに漂う武市の匂いに気付いた。

（武市さんだ）

体を感じる温もりを感じたが、和奈の意識はそこで途切れてしまった。

「？」

一瞬動いたと、武市は和奈の顔を覗き込む。

「まったく、人の気も知らずに」

和奈は笑っていたのだ。

「しかし、龍馬が居てくれて助かった」

土佐の動向が定まっていなかった今、後藤が死すれば容堂の反発を招くどころか、長州や薩摩に対する敵対心を抱かせる要因となっていただろう。

「皆は、俺を許してくれるだろうか」

後藤との確執がこれで完全に無くなった訳ではないが、留まっていた時間が少し前へと動き出したのは確かと思えた。

これから長州側で動いて行く上で、後藤との接触は容堂への足がかりとなった。

土佐勤王党の汚名を返上し、同志の墓碑に花を手向けられれば、無念の内に死して逝った者への供養にもなるのではないか。

「和太郎？」

抱えている体が少し軽くなったと、抱える体を見た武市の顔色が変わった。

「なっ!？」

和奈の体を通り越し、自分の膝が透けて見えたのだ。

「なんだこれは!？」

まだ体の感触はある。重さも温もりも感じ取る事ができる。

「おい、目を覚ませ!」

揺さぶっても和奈は反応しない。

武市の脳裏に、山口で聞いた言葉が蘇って来た。

【この時代の人間ではないんです】

「ま・・・待て!」

抱えた体を抱き寄せる。

【帰れる方法があるなら・・・帰ろうと思います】

「駄目だ・・・帰るな!」

そう叫んだ瞬間、和奈の重みが消えた。

「和奈!」

其之一 招魂

猛烈奇兵何所志 要將一死報邦家 可欣名遂功成後 共作招魂場上花
弔む羅和留人尔入るべき身なり志士尔 弔む羅宇人となるそは津か志
後れても後れてもまた君たちに誓し言をあとに忘れめや

謹弔

靈魂

故奇兵隊士東行狂生

大久保から託された手紙を後藤に差し出した中岡は、容堂へ手渡して欲しいと頭を下げた。

「長州筆頭の次は、薩摩とは。一体これは何の仕打ちだ」

「後藤さんの気持ちはよく解ります」

おまえに解ってもらって気が晴れるものではないと、困惑したまま畳の上の手紙に視線を落とす。

「手紙は預かろう。だが、大殿様がこれに目を通すかどうか判らぬと申し伝えておく」

表書きには、「上」と言う一文字が書かれていた。

「中岡、そなたは京へ戻っておれ。脱藩の事は、私から大殿様に赦免を願い出てやろう」

「はっ!？」

「乾からも頼まれておった。薩摩と今後交渉するに当たり、必要だとな」

「それは、願ってもない事ですが、武市さんと以蔵くんはどうなさるおつもりですか？」

「・・・既に死した者だ。幕府にもその旨申し伝えておる。今更、生きてましたと公にできるものではあるまい」

「容堂公には？」

「内密に申し伝える。それで私が切腹となれば、それも身から出た錆と諦めてやろう」

「後藤さん」

「今の私に出来るのは、それくらいしかあるまい」

薩摩との会談日時は師走までに沙汰を出す。と龍馬に告げた後藤は、書状を携え長崎を後にし、それを見送った中岡はその足で京へ戻って行った。

「やれやれじゃのう」

大浦屋の一階で、またお茶を飲んでいた龍馬の所に、桂が息せき切らせて駆け込んで来たのは、二人を見送った夜の事だった。

「どうしたのだ桂さん」

「いいから来てくれ」

ただならぬ様子ではない桂に訳を問う間もなく、旅籠三島屋の二階へと連れられて来た龍馬は、部屋の窓際で外を眺めて武市の側に座らされてしまった。

「和太郎がいやーせんが、どこへ行ったが？」

「僕もそれを聞いたんだが、心ここに在らずでね。何を問いかけても答えてくれないんだ」

龍馬は武市に歩み寄ると、肩を掴んで体を揺らした。

「おい、武市。しっかとしとおせ！ 和太郎をどうしたのだ！？」

力が抜けた顔を上げた武市は、龍馬かと小さな声で言った。

「武市、すまん！」

龍馬は片手を上げると、武市の頬を平手で思い切り打った。

「痛っ！」

「阿呆面してないで、ちゃんと説明しやーせんか！ 和太郎は何処へ行ったのだ」

「……………あれは……帰ってしまった」

龍馬の後ろから覗き込んだ桂は、何処へだと問いかける。

「長州へか？ おんし、まさか叱ったがやないろうな？」

「叱る？ 何を、叱ると言うんだ。後藤を斬ろうとした事か？」

「それしかないろう！？」

「叱ってなどおらん。消えてしまったんだ……この腕から」

「和太郎が？」

広げた手を握り締め、額に当てる。

「そうだ。歩いて出て行っただのでもなく、追い出したわけでもない」

桂と龍馬が顔を見合わせ、二人の手が同時に武市の体を掴んだ。

「どういう事なんだい！？」

「なき幽霊みたいに消えるんなが！」

「時を越えて来たと、言っただけではないか」

二人は武市から身を引いた。

「帰ったって……元の時代に、そう言う事か？」

「それ以外に、居なくなる理由があるなら俺が聞きたい」

「あっ……」

腰の力が抜け、ペタンと座り込んだ桂の手は武市の袖を掴んだままだった。

陽の当たらない畳の饅えた臭いが漂い、雑音が耳に届くと共に、散漫だった感覚が一点へと集約した。

一人の男が狭い部屋で胡坐を組み、ぶつぶつといいながら、半紙を四つ折にした小さな紙に、びっしりと文字を書き込んでいるのが見える。

かきつけ終りて後

心なること種々かき置きぬ思ひ残せることなかりけり
呼びだしの声まつ外に今の世に待つべき事のなかりけるかな
討たれたる吾をあはれと見ん人は君を崇めて夷払へよ
愚かなる吾をも友とめづ人はわがとも友とめでよ人々

七たびも生きかへりつつ夷をぞ攘はんころ忘れめや

十月二十六日黄昏書す

二十

一回猛子

背中を見せて座る男が、高杉の師である吉田松陰だと判った瞬間、景色が歪み、辺りは白一色へと変化した。

ざわざわと人の声だけが聞こえて来る。

周りに何も無い空間に、ゆったりとした足取りで高手小手に縛られた松陰が現われると、ぼんやりと浮んだくぐり戸へ向かって歩き出した。

「吾今国の為に死す。死して君親にそむかず、悠々たれ天地の事、鑑照明神にあり」

叫声でもなく、気を荒立てた声でもなく、しっかりとした音色で松陰は朗々と句を読みながらくぐり戸を潜って行った。

嗚咽が喉を突き、心臓の鼓動が張り裂けんばかりに速くなる。

棺桶がぽつんと置かれていて、何人か、人の気配が感じられたのだが姿は見当たらなかった。

意識が散漫になり始め、蓋の開けられた棺桶が映し出される。その中に、衣服を剥ぎ取られた胴が在り、首がその上に置かれてた。流れる血が体を伝い、頭部にべつとりと黒い血が張り付いている。閉じられた瞼を伝って方に伸びる血はまるで涙を流した後の様だった。

草の匂いが鼻を擽った。

「！」

目を開けると、緑色の細長い草が見えた。

飛び起きた和奈は、自分が竹藪の中に居る事を知った。

「また竹藪・・・」

眼下には、こじんまりとした家が一つ建っていたが、人の姿はなかった。

「あの人が・・・吉田松陰なんだ」

胴から離れた首を鮮明に思い出し、嗚咽が込み上げ来て、我慢しきれず胃の中に残っていた物を吐き出した。

「・・・誰か捜して、ここが何処だか聞かないと」

嗚咽が収まるのを待って、竹藪を駆け下りて玄関を捜して歩き出す。

「あら」

後ろから女性の声がして、和奈は振り返る。

「え、おのうさん!？」

野菜の乗せられた桶を小脇に抱えたおのうは、暫く吃驚した表情で和奈を見ていたが、ふふっ、と笑うと和奈に桶を差し出した。

「旦那様が喜ばれます。さあ、どうぞこちらへ」

渡された桶を抱え、おのうの後に続いて垣根に沿って歩いて行く和奈は、なぜ赤間関に來たのかと首を捻った。

「ぶっ!」

おのうの後から入って來た和奈を見た高杉は、飲んでいたお茶を噴出してしまった。

「なんでおまえが入ってくるんだ!？」

驚く声は元気だったが、布団から除く四肢は以前より痩せており、病状が進んでいるのは疑う余地もなかった。

「なんでって聞かれても・・・」

おのうが台所へと立つと、長崎で土佐の後藤に会いに行ったと高杉に話した。

「今頃、小五郎の奴大慌てになってるぞ」

「どうしよう高杉さん」

半泣き顔で真剣に詰め寄られた高杉は、言伝書を二通書き、おの

うを呼んで桜山の調練場に居る隊士へ届けてくれと手渡した。

「長崎と山口の両方に出しておく」

「僕が行きます！」

「道、知ってるのか？」

うっ、と言葉につまり、おのうは大丈夫ですよとクスクス笑いながら使いに出てくれた。

「話を戻すが、長崎からここへはどうやって来たんだ？」

「気が付いたら、竹藪に倒れてたんです」

また竹藪かと、高杉は笑う。

「不思議な奴だな、おまえは」

「奇妙、の間違いだと思っんですけど」

「あはははははっ。自分で奇妙か。まあ、いい」

笑っていた顔を歪め、胸に手をあてた高杉が咳き込んだ。

「た」

手で和奈を制し、枕元にあった湯呑みを取って中の液体を喉へ流し込む。

「この薬湯が、まずくてな」

口元を甲で拭い、大きく息を吸い込んでゆっくりと吐き出した高杉は、ずいっと顔を突き出した。

「で、それだけか？」

「それだっけて？」

「武市さんが怒鳴って、意識が無くなって、裏の竹藪に倒れてた、それだけかと聞いてるんだよ」

和奈の顔色が変わり、口に手を当てて嗚咽を堪えるのを見た高杉は、何か観たんだなと聞いた。

「話してみろ」

「部屋に、男の人が座ってました」

「うん」

「小さい紙に一杯字が書いてありました・・・それを見てたら辺りが真っ白くなって、その人が歩いて行くのが見えたんです。歩きな

がら、吾今国の為に死す。死して君親にそむかず・・・かな、声を上げられて」

「・・・吾今国の為に死す。死して君親にそむかず、悠々たれ天地の事、鑑照明神にあり」

「それです」

「・・・で？」

「大きな桶の蓋が開いて」

和奈の脳裏に残る顔が、カッと眼を見開いた。

「！」

両腕を抱えて前のめりになった和奈の背中に、高杉の手が添えられる。

「見たのか、中を」

こくりと頷く。

安政六年十月二十七日夕刻。

評定所から小伝馬町の牢へと移された松陰は、牢内にある斬り場へと連れて行かれると直ぐ、首を打たれた。

「動揺されもせず、至極落ち着いておられました。本当に、立派な最期でした」

評定所で立ち会った長州藩の公用人小幡高政が、藩邸へ姿を見せ、桂に涙ながらにそう言った。

松陰が刑に処せられた翌日。桂は伊藤俊輔を連れ、江戸の麻布下屋敷から小伝馬町の牢へ松陰の遺体を引き取りに向った。しかし、牢役人から遺体の取下げ許可は出してもらえなかった。

牢役人への賄賂が必要だと助言を得た桂は、下屋敷へ戻ると金銭を工面に走り、五両を揃え再び小伝馬町へ足を運ぶと、遺体の引き取りが出来るよう牢役人に金子を渡して頼み込んだ。

「小塚原の回向院で明日引き渡す」

約束を取り付けた翌日二十九日。

回向院へ出向いた桂、松陰の弟子の伊藤俊輔、尾寺新之丞は、遺

体の安置されている場所へ案内された。

「あれだ」

粗末な木で組まれた棺桶らしきものが、ぼつんと無造作に置かれていた。

蓋を開けると、衣服を剥がれ、首と胴が離れた松陰の遺体が、詰め込まれる形で納められていた。

「こんなっ・・・」

死罪となった者が着ていた物は、小屋者と呼ばれる者の達の手から剥ぎ取られるのが慣わしとなっていた。桂もそれを知らぬわけではなかったが、実際に目にしては憤りを覚えるしかなかった。

尾寺が変わり果てた師を見て崩れ落ちる。

苦悶の表情もなく、ただ静かに眼を閉じている松陰は、眠っている様にも見えた。

尾寺が首を取り上げ、涙を見せながら血に塗れた顔を拭き、肢体を桶から出した桂も伊藤と共に体を丁寧に拭うと、桂は襦袢を脱いでその体に着せ、伊藤が帯解いて巻きつけた。

首と胴を繋ごうとしたが、役人は検分があるかも知れぬのでやめて欲しいと押し止めた。

遺体を納めた甕を運び出し、回向院の墓地へ向かうと、先に死罪となつ橋本左内の墓の横へ穴を掘ると、そこへ埋葬した。

藩の命で江戸を発っていた高杉は、萩に着いてから叔父の玉木文之進からその死を聞かされたのである。

高杉には和奈が時を越えて松陰の死を見たとは思えなかった。その魂に少なからず松陰の魂が在るのであれば、和奈の意識下に残っている記憶の断片を垣間見ただけでも知れないからだ。

「気分が悪いなら、横の部屋を使え」

自分のその手で、武市を助ける為に男の首を落とした。その時の光景は今でも覚えている。思い出しはしても、棺桶の中を見た耐え難い苦痛は感じなかった。

「高杉さん」

「ん？」

「あの人が、吉田松陰さんなんですか？」

この問いに高杉は答えず、重くなった体で立ち上がると縁側の障子を開けた。

「おまえは答えを出せたのか？」

「答え、ですか？」

振り返った高杉は楽しそうに笑っている。

「振るう剣が狂気となる理由を知りたいと言った。なぜ心の内に先生の魂があるのか知りたいとおまえは言った。その答えは掴めたのか？」

「・・・まだ漠然としたままです。はっきりこうだと、語る言葉もありません。でも、志士の一人として、皆と共に生きるのがここへ来た理由であるように思えるんです」

「自分を知ること・・・か」

「はい」

「そうか」

疲れた様に和奈の前にどかりと腰を落とした高杉は、その頭に手を乗せると瞳を覗き込んだ。

「おまえには、俺の想いを受取る覚悟をしてもらう」

「高杉さんの、想い？」

「この高杉晋作様が直々に言うんだ。断ったり投げ出したりしたら、拳骨の一つではすまんぞ！」

「き、斬られる、とか？」

「阿呆！ そんな事したら成仏する前に小五郎に斬られるだろうが！」

小五郎だけでなく、武市にも斬られるぞ、と真剣に困っている。

「じよ、成仏なんてしないでください」

「あっ！？ それ、酷くないか？」

「あ・・・いや、違う。成仏はしないと駄目なんだけど、とにかく」

駄目です！」

「俺はまだ死なんから、そんな顔をするな。いいか和太郎、俺はおまえに志を託す」

「志？」

「長州を、小五郎を頼む」

何も言い返せなかった。そこで、はい、と答えてしまえば、明日にでも高杉がこの世から去ってしまう、そんな不安に駆られたのだ。

「俺の言葉、ちゃんとそこに刻んでおけよ」

和奈の胸元を指差し、顔をひくつかせた和奈の心情を読み取った高杉は、そう笑い飛ばした。

「旦那様」

おのうが帰って来ると、和奈は少し外の空気を吸って来たいと席を立つ。

「桜山がいい」

そう言って道を説明すると、玄関先でおのうが竹筒と握飯二つを持たせてくれた。

「桜山・・・近いんだ」

道を知っているのかと聞かれたが、これなら迷わず来れたのにと、長い石段を登って行く。

桜山招魂社は、文久三年に高杉が建言し、白石正一郎の資金援助を受け創建された、日本で最初の招魂社だ。

元治元年五月十九日に招魂墓が並ぶ招魂場が完成し、遺品などが埋葬された。翌年慶応元年八月六日に社殿が落成すると、吉田松陰の招魂祭が行われた。最初の宮司となったのは白石正一郎である。

桜山招魂社は奇兵隊の招魂場であるが、各隊も有志が資金を出し合い招魂場を創設している。

御楯隊（鴻城隊と合併になった整武隊）は調練場にもなってい

た防府桑山に、報国隊は下関の豊町旭山に、集義隊は小郡山手に招魂場を建て同志を祀った。

桜の木が葉を落とした社殿に参拝してから、その後ろへ回る。そこにはまだ新しい木碑の建ち並ぶ招魂場があった。

吉田松陰先生神霊と刻まれた木碑の横に、和奈は高杉の名が刻まれた碑を見つけた。ここは、殉死した者と、これから死を覚悟して赴くもく者の魂が入り混じっている場所なのだ。

涙が出そうになるのを堪える。

「誰か、大切な方がこの中に居るのかな？」

いつの間にか、墓碑を見つめる男が横に立っていた。少し細長い顔に細い目、高杉と同じ二十五、六くらいに見える。

どこかで会った覚えがあるのだが、思い出せなかった。

「いえ・・・はい」

「それではどちらか判らぬな」
男は笑った。

「大切な人は・・・います」

「それは良い事だね」

「でも、病気で・・・もう、残された時間はないと・・・言われました」

「その人も、それを知っている？」

「・・・はい」

「そうか。で、その人は病の床で、自分の人生を嘆いているのだろうか」

「いえ。体調も悪いのに、ほんとに寝てなきゃいけないのに、駆け回ってばかりいるんです」

「この世に生まれた命には、それぞれ寿命と言うものが定まっているものだ。十年で死ぬ者もいれば、七十年生きる者もいる。寿命というものはそう言うものだ。自分の死が近いからと嘆く者ほど、僕は哀れと思う」

「病気で死ぬのも、寿命なんですか？」

「病に死するの、斬られて死するの、天命を全うするのも是みな寿命だ。だからこそ人は、毎日が無駄とせず生きねばならない」

「……」

「悔いのない人生を送ろうとするのではなく、死ぬ間際になって悔いがなかったと思うよう生きる事こそ大切なんだよ」

だから高杉は苦しくても弱音を吐かず、皆のため、桂のために残りの命を削っているのだろうか。

「その人はそれを解っているのだ。嘆くばかりが優しさではない。笑って見送れるのもまた、優しさだと思う」

「笑える……でしょうか」

頬を伝う涙を、骨ばった細い指が拭った。

「悔わず旅立つと言うのであれば、何を悲しむ事があるのか」

「難しい……です」

「志を遂げられる者を羨ましいと思う。だから僕も自分の意志に背かず、暗い部屋の中で明日を憂う」

一陣の冷たい風が吹き抜ける。

「うわっ」

桜の匂いが僅かにした。

「凄い風ですね」

そう視線を横に向けたが、男はすでに居なくなっていた。

其之二 薩摩と長州

岩倉が水面下で動き出したのに合わせ、大久保は薩摩藩主島津久光に対して長州との連合締結を建言した。

土佐の動きは、幕府に対して圧力を掛ける側にしてみれば、歓迎すべき進展と言えた。しかし、公武合体を貫いて来た土佐に対する懸念は、そう簡単に拭い去れるものではない。武力倒幕を目指す長州薩摩両藩とは歩んできた道が違うのだ。自ずと意見の食い違いは出ると考えた大久保は、薩長の同盟密約を確かものとしておきたかった。

この同盟締結については、久光が難色を示した場合は説き伏せるとの事で西郷も了承している。

頼まれた書簡を託したと報告しに薩摩藩邸を訪れていた中岡は、龍馬から預かった手紙を大久保に渡した。

「それにしても、中岡くん」

「はい？」

「何が哀しくて、通飛脚みたいなまねをしているんだ？」

「最初に頼んだの、大久保さんじゃないですか」

「坂本くんから言伝を受けて来いとは言っておらぬ」

「後藤さんから京へ戻れと言われたし、龍馬さんは長崎に居座っちゃうし、京に戻るついでだと言われたら、受けない訳にはいきませんよ」

大久保はぶつぶつ文句を言う中岡を見ながら、何やら思い出したようにポンッと手を打った。

「長崎には小僧も来て居たのだろう？」

「小僧？」

「武市くんご執心の、あの小僧だ」

ニツコリと首を横へ傾ける。

「・・・和太郎ですか・・・小僧じゃわかんないすよ」

「あ奴を使えば良かったではないか」

「それ、本気で言ってます？」

「この私が冗談など言うものか」

今度は真剣な顔で眉間に皺を寄せる。

「茶菓子もあるゆえ、茶を飲みながらゆるりと時勢を論じてやれたものを」

「茶菓子って・・・まったくもう」

京から長崎へ急ぎ、後藤と桂、武市の対峙に疲れた足で戻り、一息つきたい気分なのに、大久保を相手に更に気疲れを覚えた中岡は、すいません、と断りを入れてから足を崩した。

「和太郎は手配書に乗ってるんだから、京なんか来れないですよ」
君とて同じだろうと返される。

「それは、そうなんですが、ほら、あれだし・・・」

女性だと知ったからには、そんな無茶をさせられたものではない。
「ふん！ 誰も志士として来いとは言ってはおらん。着飾った小僧を相手に、茶を飲むのも一興と思ったまでだ」

口をぱくぱくさせながら、大久保を見上げる。

「君は鯉か？」

「大久保さんも知ってたんだ・・・酷い、酷すぎる」

山口で大酒を飲んだ時の様に、その場で酒を飲み干し、大久保にグチを吐きたい気分になる。

「気付かぬ者が悪い」

この次は是非和太郎を寄越してくれと、大久保は楽しそうに念を押した。

「そんな事したら、武市さんに切腹しろって言われますよ、俺」

「ほう。そんな仲になったのか？」

「知りません！」

顔を真っ赤にしてしまった中岡に、男女の仲を知らぬ者ほど手に負えぬものはないと、困って見せる。

「け、経験くらいありますってば！」

「ああ・・・お佳代さんだったか」

絶句した中岡は、次の瞬間、土佐藩邸へ行くと立ち上がった。

「乾さんたら、何から何まで喋るんだから！　じゃなくて！　そんな間柄じゃないです！」

「さて。君をからかうのはこの位でやめておこう」

「！」

いいから座れと畳を指さされ、大きなため息と共にどかっと胡坐を組んで座りなおす。そこにおみつが茶と菓子を持って入って来たので、やっと一息つけると喜んだ中岡は、真剣な顔で龍馬の手紙を読む大久保に難事かと尋ねた。

「いや。給金の催促状だ」

「大久保さんに！？」

「海援隊を創設させたのは小松殿ゆえ、この書状を出すのも然もあらんが。なぜ私に催促してくるのだあの男は」

「あははは・・・はあゝ」

心底疲れてしまって、突っ込む気力など沸いてこなかった。

「長州と正式に事を運ぶ前に、幣摩が間に立ち、肥後藩との和議調停を執り行う」

「あれ、成立したんじゃないんですか？」

「一時凌ぎだ。まだ三藩にて締結に至ってはおらぬ。それを済ませってから、長州との二藩連合を取り付けて後、土佐へ打診する手筈となっているから、君もそのつもりで動いてくれたまえ」

「解りました。後藤さんも薩摩と手を結ぶ以上、長州との会談も必要になると考えていらっしゃいます。乾さんにもその旨で報告しようと思います」

「薩摩と長州が連立しているとなれば、山内公も真剣にならざるを得まい。君も、苦労を重ねた甲斐があると言うものだな」

「まだ前途多難ですよ」

桂と後藤が謁見したとは言え、それは正式な会見ではない。乾と

連携して後藤を介し、藩主山内容堂を倒幕へと傾けたい思いであるが、後藤の藩政転換がどう功を奏すのか未だ解らずと言った状況である。不透明な状態の中、手探りで進むしかないのだ。

「では、俺はこれで失礼させて頂きます」

「乾くんには、くれぐれも宜しくと伝えておいてくれたまえ」

長州との同盟締結について、大久保、小松、西郷の連名によって提出された建白書を受取った島津久光は、正式にこれを認め、黒田新太郎を正使として長州に派遣する事を決めた。

黒田は前藩主藩主島津斉彬の目に止まり、西郷とも親交のある薩摩藩士だ。久光の決定を受けた西郷が、正使に適任と推して、今回の長州派遣となった。

桜山招魂社へ続く長い石段を登り、拝殿に一礼し招魂場へ足向けると、碑の前に座り酒を飲んでいる高杉が居た。

「やれやれ」

わざと足音を立てながら、丸めた背中へと立つ。

「おのうさんが心配してましたよ？」

「お？　なんだ、おまえか」

振り仰いだ高杉の顔は赤く染まっている。

「僕ですみませんね」

傍らに座わると、絶え間なく酒を口に運ぶ高杉の手から、持っていた銚子を取り上げた。

「こら！」

「こらじゃありません。そろそろ戻らないと風邪、ひきますよ！」
風はもうかなり冷たくなっている。いくら着こんでいても、今の高杉には大きな負担となる。酒でいくらか体は温まるだろうが、不摂生を過ぎれば毒にしかない。

立ち上がって足がもつれ、思わず和奈の肩を掴んだ高杉は、しま

ったと言わんばかりの顔を向けた。

「そんな体で、よくあの階段を登れたもんですよ」

「いいか、俺はた一」

「はいはい、高杉晋作様ですよ。わかりましたから、ほら、ちゃんと歩いて下さい」

「・・・おまえ、本当に似てきたな」

「小言、まだ言われたいですか？」

にっこりと笑う顔には暗い影はない。

（何か悟ったか、それとも）

松陰の碑を一度振り返った高杉は、片腕を担がれたまま草庵へと戻った。

「お帰りなさいませ」

「おのう、こいつに俺の居場所を教えるな」

それは無理ですと、手渡された銚子を受取り、そそくさと台所へ引っ込んでしまった。

「あいつの弱みでも握ったのか!？」

「そんな訳ないでしょう。さあ、部屋へ行った行った」

「お、おい、分かったから押すな!」

半ば連行に近い状態で部屋へ押し込まれ、不機嫌な顔で布団へと潜り込む。

「・・・子供ですよね」

「五月蠅い」

枕を抱え、庭を眺められるよううつ伏せになると、側に座った和奈に問いかける。

「なあ、そろそろ女に戻ってもいいんじゃないのか？」

「へ? どうしたんですか、いきなり」

「それだけの腕があれば、女とばれても困らんだろうと言うちよるんじゃ」

「言うちよる? 高杉さんが長州弁使うなんて、熱が出たんじゃな

いんですか!?!」

「出でない! くそっ、全部おまえが悪い」

「人のせいにしないでください」

「もとい、だ」

「いいですよ、このままです。別に困る事ないし、今更って感じもするし」

「今更って言うな。大体おまえは」

和奈に詰め寄ろうと体を起こしたところへ、大きな足音が聞こえ来ると障子が勢いよく開け放たれた。

「小五郎さん!」

「居た・・・」

和奈に駆け寄り、その肩を掴んで引き寄せる。

「おい、こら小五郎! いきなりなんで抱くんだ!」

「五月蠅い、黙ってろ」

睨まれて押し黙った高杉は、不服そうな顔で起き上がり胡坐を組んだ。

「無事で良かった」

小さな声が耳元に響いた。

「ご心配かけました」

腕を放し、眉を上げて和奈の顔をじっと見入り、桂は笑顔を浮かべて肩を叩いた。

「もう一人も着いたようだね」

再びバタバタと足音が聞こえ、今度は武市が駆け込んで来た。

「和太郎!」

止まる事無く、和奈の傍らに座すと腕を掴んで引き寄せる。

「ちょっと待ておまえら! 揃いも揃って抱きつくとはなんだ!

俺だって」

「おまえは駄目だ!」

真剣な表情で怒鳴る桂に、ずるいぞと、高杉はふて腐れてしまう。
「僕は甥の無事を確かめただけだ」

「何が甥だこの野郎！ 『今夜は和太郎と過させてもらおう』とかなんとか、ここぞとばかりに自分だけいい思いをしゃがって！」

「いい思いつてなんだ！？ 大体、なぜそんな昔の事を今持ち出されなくてはならない！ もう少し和太郎がここへ来た理由を真剣に考えてもいいんじゃないのかおまえは！」

「息継ぎして喋らんと、窒息するぞ？」

「！」

「掛け合い漫才は後に願おう」

「漫才じゃない！！」

同時に叫んだ二人は顔を見合わせた後、桂の方がふいっと顔を背けた。

「何をそんなに慌ててるか知らんが、少し落ち着け」

「おまえ、話しはちゃんと聞いたんだろ？」

顔を戻し、そう高杉に詰め寄った桂は次の言葉を待った。

「ああ。面白い奴だぞ、こいつ」

「面白いで片付けるな！」

「大事はないから安心しろと言ってるんだ」

「なんの根拠があって、そう断言するのか説明してくれ」

桂ばかりでなく、武市からも睨まれ詰め寄られる格好となった高杉子は、仕方ないと、和奈から聞いた話を手短に話した。

話を聞いたものの、一瞬で何十里もの距離を移動した事をどう考えればいいのか検討がつかず、武市と桂は答えを求めるように高杉を見下した。

「意見が聞きたいって顔だな」

「あるならな」

「時を越えて来たなら、場所を移動してもおかしくないだろう」

「真剣に言っているのか、それ」

「・・・こいつが時を越えたのは、俺のせいだ」

「どういう事だ？」

今度は武市と桂が同時に声を上げた。

「武市さん達が萩へ来ると、おまえが知らせに來た日を覚えてるか？」

「ああ。あれは・・・春だ。そう、おまえが入口で寝ていて」

「そうそう。あの日、俺は桜に願いをかけたんだ。それで、桜が答えた気がした」

満開だった普賢象桜を、真剣な面持ちで眺めていた姿を思い出す。
「ちょっと待て晋作。それで和太郎が來たと言うんじゃないだろうな」

「こいつは突然現われたじゃないか。しかも、大事を前にした小五郎くんがなぜか人助けに走り、和太郎を助けた。偶然とは考えにくいんじゃないか？ 必然があったから、おまえは助けに入り、俺達の所へ連れて來た。それ以来、こいつは不思議に思う事なく剣を振るっている。俺達と共に居るからじゃない、自分で選り取り、なるべくしてなっているんだ。これが必然でないなら、なんなんだ？」

前にも一度似た話をした事があったが、高杉が桜の話を持ち出したのは今回が初めてだ。語る言葉に声を失った二人は、横に座る和奈へと視線を移した。

「おい和太郎。桜だが、何か思い当たる節はないか？」

「桜、ですか・・・そう言えば、ここへ来る前、景色がぼやけた時に白いものが見えました。はっきりとした形じゃなかったんで、確かに桜だったとは言えません・・・あれ、桜だったのかな」

鍊兵館からこの時代へ来る事になったあの夜にみた白く大きな影が揺らいでいたと思い起こす。

「桜に願っただけで時を越えられるなら、是非僕も越えたいものだ」

「さすが小五郎、一筋縄ではいかな。だがな、少しは頭を柔軟にするの必要だぞ」

「無理を言うな」

「こいつが先生の言葉を語る理由なぞ俺にも判らん。が、ここへ來たのは、俺達に会う為だ、そう信じてる。その橋渡しをしたのが桜だ」

「柔軟どころか、おまえの場合脳が溶けているだけじゃないか。そう言いきれぬ自信は一体なんだ？」

「直感だ！」

呆れ顔で武市を見やった桂は、何やら考え込んで俯いている男の顔を覗き込んだ。

「武市くん？」

しかし武市は、かけられた声に反応しなかった。

「まさか、君まで心当たりがある、とか言わないだろうね」

強い口調で我に返った武市は、はっ、顔を上げる。

「え・・・いや・・・」

「あるのか」

否定しなかった武市に対し高杉が呟いた。

「ある、とは言えんが。土佐に戻っていた時の事だ」

誰かに呼ばれた気がして庭に下りたが、誰も居らず、代わりにどこからか舞って来た桜がひらひらと手の平に舞い降りて来た。人恋しいと感じていたから、風の音が人の声に聞こえたのだろうと、さして気にする事もなく記憶の底に沈んでいたのだ。

「桜に竹林ね・・・だが、それだけでは理由にならない」

「確かに」

「何度も言わせるな。必然はあっても偶然はない、これはおまえの十八番だろう？」

高杉の言葉に一瞬身を引いた桂は、やれやれと肩を揺らした。

「本当におまえは嫌な男だ」

「ともかく、和太郎は無事だった。今はそれでいい！」

申し訳なさそうに武市の横で縮こまってしまっている和奈を見て、桂は詮索ま手を一旦止め、その頭に手を置いた。

「とりあえずは、だ。でも、本当に無事で良かったよ」

桂が長州へ戻った数日後、高杉からの手紙を手に、すぐさま三島

屋へと走った龍馬は、武市にすぐ発てと用意をさせた。

「おまえは来ないのか？」

「わしいけん」

プロイセン（ドイツ帝国・第二ドイツ帝国中心都市）の商人チヨルチーニとの商談を整えており、今は長崎を離れられないと説明する。

「相分った。また知らせを出す」

そうして武市と以蔵が長崎を離れた二日後、龍馬は西郷の前に笑顔で座わる事になった。

「一蔵から話しは聞いたとう。薩摩が保証ひといなうのは良かとして、いけんして帆船が必要なのか聞かせてほしか」

海援隊名義で帆船の購入するため、その保証を薩摩にして欲しいと頼まれた小松が、京に向かう途中のついでと、西郷を大浦屋へ使わしたのだ。

「長州への輸送も増えたがやき、一隻じゃー事足りのおなったからやか」

四境戦争後、桂が海援隊にミニエー銃の大量注文を出し、その輸送にユニオン号を当てた。

この頃から、土佐藩も武器弾薬などを調達を始め、乾の依頼を受けた陸援隊から要請で、その輸送に迫られるようになり、一隻で長州、土佐、薩摩間を賄うのが無理と考えた龍馬は、帆船の購入を決めたのである。

「長州と薩摩は正式に同盟を組んだ訳じゃーないがきね、ふとい声で薩摩の船を貸せとも、長州に貸してくれとも言えないろーう」

「脱藩した身じあっしながら、土佐いも渡いをつけとうと聞く。肝っ玉が据わつとうのか、何も考えておらんのか解らんと小松殿も申していた」

小松の名前を出した西郷は、そうそう、と懷から書付を出して龍馬に手渡した。

「京に居う自分に給金の催促をすうなど、一蔵が怒っていたぞ。そ

け書かれとう給金については、小松殿から支払うとの事じゃつで、後で宿へ行くとよか」

書付を受取り礼を述べると、西郷と共に小松が居る昇平丸へと向かった。

和奈と武市を赤間関へ残し山口に戻った桂は、筆密の命を受けて長州へ赴いた黒田を出迎えるため、山口政事堂に出向いていた。

薩摩藩と肥後藩が調停を取り持ち、門司^{もじ}に於いて小倉藩と止戦条約を結んだ長州に対し、久光が正式に同盟締結へ動くと言われる。「土佐の前に我が藩とかい？」

「深意はございません。薩長の密約は私も存じ上げております。その密約を正式なものとし、薩長の関係を確固のものにすべしと、久光公もお考えになられた。それだけです」

「言うは容易いが」

「木戸殿のご心中はお察し致しますが、正直、我が藩は土佐藩を信用しておりません」

「大久保殿も」

「如何にも」

敬親に黒田と会えと斡旋したのは桂ではない。

二回の長州征伐を経て、単独で幕府と対抗するのは無理至極と考えていた敬親のところへ、薩摩から同盟締結を示唆する書状が届いた。敬親も思案に暮れていた時期でもある、この締結に桂も賛成の意思を申し述べ、正使として来る黒田との謁見を許可したのだ。

「どちらにせよ、土佐が倒幕へと動くなら、それに越した事はない。多様な問題も多いだろうが、我が藩としても貴藩が旗を揚げるならば、足並みを揃える準備はできていると申し上げる」

「謁見の許可を頂いた事で、大久保殿からも恙無く話しを進める様にと仰せつかって来ております。土佐と手を組むより、長州と並んでこれからを考える方が得策と考えますれば、先ずは足固めを確実

にしておきたいのは事実でありましょう」

「西郷さんは如何かな？」

「実直なお方ですが、時勢を見分ける眼はお持ちです」

それゆえ、先の征伐では大久保に対し出兵拒否を貫くよう念を押している、黒田は言った。

「お二方と一度、酒の席を持ちたいものだ」

「それは喜ばれるでしょう。ああ、川長楼の再現だけはお控え下さるようお願いですが」

「・・・ここでそれを言うか」

「いや。実のところを言いますと、見てみたかったですよ。あの大久保殿が、ですから」

「確かに・・・見応えがあっただろうね」

周布政之助から聞いた話を思い出した桂は、思わず噴出してしまった。

文久二年の事。江戸に滞在していた毛利敬親は、薩摩から勅使大原重徳に追従して江戸に出向いて来た島津久光と入れ替わるように、京へ発ってしまった。

薩摩と幕政改革を推進めたいと考えていた周布は、事が荒立たぬよう、大久保と堀小太郎を江戸柳橋の料亭川長楼へと招いた。薩摩藩と親睦を深めるのが目的だった。

長州側から参加したのは周布の他に来島又兵衛と小幡彦七である。大久保を前にした周布は、長州が私利私欲のために政治に関わっているのではなく、また主君の行動も久光を軽んじて取った行動ではないと必死に説いた。だが、大久保達の懸念をなかなか拭い去る事が出来ない。

このままでは薩摩長州の関係修復はできぬと考えた周布は、他意のない事を示そうと脇差に手を置きつつ、二人に向かって決意を語った。

「違背した場合には、この周布政之助が腹を切って見せましょう」

これを聞いて反応したのが、不愉快と言わんばかりの顔で大久保の横に座って酒をあおっていた堀だ。

「面白いじゃなかか。それならここで腹を切ってもらおう。おいがちゃんと検分してあげもそや」

さあどうぞと、周布に向かって手を差し出す。

「やめんか！」

それまで黙って座していた大久保は、周布の方を見た後そう一喝する声を上げた。いくら両藩の仲がこじれているとは言え、その行動は長州を挑発するものだ。

「周布殿は決意を申し述べられたのだ。それを煽るとは何事であるか！」

酒が手伝っていたのか、大久保に睨まれても堀は態度を崩さなかった。雰囲気はますます悪くなる一方だ。

（この馬鹿者めが）

そう思っても、久光の寵愛を受けている堀は権力を笠に着て、傍若無人な態度に出続けている。この時の大久保の立場はまだ低く、どれだけ嗜めても、堀は一向に聞く耳を持つとうとしない。次第に周布の顔色が変わっていくの見て、大久保は思案に暮れた。

周布とて、ここで揉め事を起こしては宴を開いて親睦を図った意味がなくなってしまうと、我慢に我慢を重ねていた。左右に座る来島と小幡の顔からも、宴が始まった時の笑みは消えてしまっている。「長井殿の航海遠略策を退けたのに、公武合体を掲げう我が藩に並んで幕政改革を行んたいとは、やはい何か腹に秘むうもんがあつとではあいもはんか？」

「先ほども拙者が申し上げた通り、他意はござらん！」

堀の言葉に恫喝したのは来島だった。それを見た周布は、堀を斬ろうと考えてしまった。

「双方それまでに。ここは一つ、拙者が余興をお見せ致しましょう」そう言って立ち上がった周布は剣を抜き、舞を踊り始めると、突然の余興に、さっきまでの雰囲気はどこへやら、堀も手を打ちなが

ら笑い声を上げた。

気が気でなくなったのは小幡もで、周布が徐々に堀へと近づいていくのを見て取り、斬るつもりだと焦った。事態を収めたいと来島へ視線を向けたが、舞いの意味を悟ったらしい来島も、脇に置いていた剣を引き寄せて堀を睥睨している。

（まずい。ここで薩摩藩士を斬ったとなれば、長州にとって大事となる）

何としてもそれだけは避けねばにらぬと、自らも剣を抜いて立ち上がり、同じ様に剣舞いを踊りながら、周布と堀の間に割って入った。

舞いという趣ある芸の雰囲気など、もうすでに周布にも小幡にもない。堀もようやく斬られると気付いたのか、剣に手を伸ばしてしまふ。

一食触発となった場を窮した大久保は、無言で立ち上がり、周布と堀の間に立った。

双方を睨み付けた大久保はその場に蹲る。

「薩摩の畳踊りをお目にかけん！」

そう言い放ち畳をめくり上げ、手の平に載せて頭上に掲げると、クルクルと回し始めたのだ。

呆氣にとられたのは堀でもある。まさか大久保がそんな行動に出るとは予想もしていなかったのだから、驚く以外にない。

「一蔵どん・・・」

緊迫した状況を打開するためとは言え、いつも冷静に物事に対応する大久保が畳を回したのだ。堀もこれでは上げた拳を下ろさずには居られなかった。

大久保は幼い頃より虚弱体質であり、それを補うため武芸よりも柔術を熱心に習っていた。薩摩藩の古流柔術には、畳を潜ったり、四、五〇枚の畳をひっぺがして一箇所に積み上げる技などがあったため、とっさに畳を回すことを思いついたのかも知れない。その判断がなければ、恐らく周布と堀は斬り合いとなり、薩長の関係は政

変前に劣悪なものとなっていただろう。

「その話を聞いた時は、周布さんの冗談だと皆で笑ったものだが」「薩摩でも有名になりましたよ。堀殿が真剣な顔で語ったらしいですが、真偽の程を本人に聞く事はできません。結局、皆で西郷さんに聞いてもらいたいと頼み込んで、事実だと」

「大久保さんと酒を酌み交わす機会が訪れたら、私も畳を回してみるとしよう」

「・・・冗談だけにして下さい、頼みます」

湯田御殿へ近くなり、世間話はここまでと笑いを殺した桂は、敬親に黒田を引見させるべく広間へと入って行った。

其之三 流れの中

慶応二年十一月。

帰藩した後藤の命を受け、土佐藩士溝渕広之丞が龍馬を尋ね長崎へとやって来た。

「土佐は戦でも始めるとゆうがかな？」

溝渕が来訪したのは小銃の購入の為である。その斡旋を海援隊に頼みたいと、渋々顔の龍馬を前に真剣な溝渕が土佐の実情を語った。「長州征伐後、薩摩が長州に肩入れし武器や軍艦の購入を行なっちゆうじゃろ。両藩が蓄えておるんだ、陸援隊に武器を配備させ、土佐も追従せねばと乾殿が考えるのも無理はないろう」

溝渕はそう言うが、一橋派に組したとして安政の大獄に於いて謹慎の身となつてから、容堂は幕府寄りを貫いてきたのだ。乾と後藤、佐々木も藩政の転換に乗り出ただけで、正面切つて侯武論を退けた訳ではない。

「それがよお解らんき。もし乾殿が失脚となれば、藩政転換そのものがのうなる。そうなれば、回した銃が薩長に向けられる危険も出てくるがやないかね。幕府が強気に出て、薩長相手に戦でも射掛ける事になれば、イギリス、フランスも介入して来る恐れがある。そうなったら日本は終りぜよ」

「おまさんの言いたい事はよく解ちゆう。けれど、土佐勤王党が壊滅し、厳しい執政下に置かれた郷土達の不満は溜まる一方やか。薩摩はあでなく長州との関係を修復せんと動かす事で、乾殿は内乱勃発を避けようと考えちゆう。長州の様に挙兵を成功させるにゃ経験が足りん。知識も足りん。やき、両藩と交流のある陸援隊を軸に強兵を敷く必要があるんやか」

「内乱を避ける事は賛成やか。けれど、銃がいる事なんなが？ 後藤殿が出たんだ。容堂公を説き伏せ、いずれ薩長と肩を並べる日も近いと考えちゆうが、強兵して土佐も幕府に喧嘩を売ろうちゆうつ

もりなんなが」

武力による倒幕に消極的であるにも関わらず、薩長に対して武器の輸送を行なっているのは溝渕も知っている。

「おんし、長州にも武器を手配してやっちゅうんろう。土佐へ回すのが駄目とはゆわせやーせん！」

そこを突かれては、追求をのりくらりと交わしてしまう龍馬と言えど反論のしようがなかった。

「むさ苦しい顔をほがーに近づけるな。銃の幹旋、引き受けるから、ほきかまんろう」

説得に成功したと見た溝渕は、乗り出した身を下げると膝を一つ叩いた。

「ほれと合わせてな、乾殿は洋式兵団を土佐に作るつもりでおるぜよ」

「洋式兵団！？ それみろ。やはり土佐は戦をするつもりながやないが」

「阿呆を言え。薩摩も長州も精鋭部隊を抱えちゅうやか。土佐にもいると乾殿が考えてもおかしくはないろーう。」

「現に藩もその方向で動いちゅう。驚け龍馬。これについて側役の福岡殿が是要ると容堂公に注進したがだ」

「福岡殿がか！？ こりゃあーたまげた！ 今日長崎に雪が降るがで」

福岡藤次は吉田東洋に師事し、参政として復帰すると大監察となった男である。

東洋が暗殺されるとお役御免を願い出て藩政かん離れていたが、武市の失脚により復帰すると、容堂の側役として藩政に従事していた。その男が藩内でも過激派とされる乾に同調を示したのだ、龍馬が驚くのも無理はなかった。

その福岡は、藩命を受け小笠原唯八と共に情勢探索のため上洛している。

「ほき公はどうしたがだ？」

「許可したちや。そればあがやない。おんしと中岡の脱藩赦免について、後藤殿と走りまいゆうとの事だ」

「慎太郎が復藩となるがはいいやか、わしはこのままでも不自由はないき必要ないぜよ」

「ほがなもん、わしにゆうな。とにかく、銃購入については正式に依頼書を書きゆうから、手配の方を宜しく頼むぜよ」

わずかに二年が過ぎただけなのに、剣術の試合で京都を訪れたのがもう何十年も昔の事の様に思えた。

縁側に腰掛け、赤井はどうしているんだろうかと、厳島で会った顔を思い出す。

大津で別れてから、龍馬の所で過ごして居るものとはばかり思っていたのに、新撰組に入ったと知った時は本当に驚いた。

羽織を着て目の前に現われた時の赤井は、どこか落ち着かなく迷いが有る様に見えた。しかし、第二次長州征伐において芸州口で再会した時の顔には、一片の曇りも見受けられなかった。

赤井なりに考え、志というものを見つけたのかも知れない。

志はなんだと聞かれても、和奈にはこうだと確り答えられる言葉があるわけではない。ただ、この国の未来を変えようと言う人達の役に立ちたい、そう答える事は出来る。

だから、赤井を本気で斬るつもりでいた。多分、その思いは赤井も同じだろう。剣を交えた時に見た眼差しがそう語っていたのだ。

そして桂が赤井を殺すために刺客を送った事を知った。驚きはしたが、桂に憎しみや怨みを抱くことは無かった。心に沸きあがったのは、新撰組へ行ってしまった赤井に対する憤りだけだったのだ。どうしてこうなってしまったのか、和奈には解らなかった。

「どうした？」

肩膝を立てた上に腕を組み、そんな事を考えていた背中に武市の声が届いた。

振り返り、ちょっと困った顔を見せてから、

「空、綺麗だなあと思って」

と、答えた。

「地面を見ていて、空の様子が判るのか？」

どうやら考えに耽っていたのを見られていたらしい。

「そろそろ、ここを発つ」

「用意はもうできてます」

「手早いな」

「さっき、高杉さんから早く帰れって言われたところなんです」

「邪魔者は早々に退散しろと言う事だ」

高杉に許された時間はもうない。

招魂場で男性が語った言葉を幾度も繰り返し、志半ばで去らねばならない者に自分を重ねてみた。自分なら運命を呪うかも知れない。なぜ自分だと泣く毎日を過すかも知れない。しかし高杉はいつも最大限の努力を積み重ねて来た。死ぬ間際になって、悔いのない人生を送れたと笑って逝けるようにと、無意識に心の中で望んでいる。そう思えて来た。

そうして、高杉の死を受け入れている自分に気が付いた時、あの男性は松陰なのではないかと考えた。もしそうなら幽霊を見た訳だが、避けて通れない道を前に、一步を踏み出すきっかけをくれた事に感謝しなければならぬ。

「桜が咲く頃、また来たいな」

「桜か」

苦笑しながら、また春に来ようと武市は言った。

「じゃあ、高杉さんに花見の約束をさせとかないと」

側に居て、その時が来るまで一緒に居たいとも思うが、その役目はおのうものだ。邪魔をする権利は和奈に無い。

無意識に、腰に差した剣の絵に手をかける。その異物を見下ろし、上げかけた体を元の位置に戻して武市を見る。

「これから先も、この剣を振るって行こうと決めました」

武市は眉を顰めながら隣に腰を下し、剣を手にした和奈に、そうか、と答えた。

「何かを悟ったか？」

「そんな大袈裟な事じゃないです。長州の、小五郎さんの役に立ちたいだけです。ほら、僕は長州藩士ですから」

「無茶をしでかす前に止めなければならぬ俺の身も、少しは考えてくれると有り難いがな」

「う・・・はい。気をつけます」

「頼む」

愉快そうに笑みを浮かべた武市は、ああ、と言葉を続けた。

「ここへ来る前、白石さんの所へ伺った。望東尼殿がおまえに会いたいと仰っておられた」

「萩へ戻る前にでも、白石さんの所へ寄ってもいいですか？」

「萩には戻らん。桂さんより、そこで待てと言われている」

「そうなんだ。良かった」

武市は、以前よりも肩肘を張らず自然な態度を見せる姿に、変わったなと感じた。

高杉に対する態度も変わっていた。これまでは笑顔を作って接していたのが伺えたが、今を見る限り、腫れ物を触るような気遣いはなくなっている。自分が来るまでに、二人の間で何事があったのかは確かと思えたが、あえて聞きはしなかった。必要ならばどちらかが持ち出すだろう。言わないのであれば、知る必要はないと言う事なのだ。

「おかしなものだな」

和奈の顔が武市へと向く。

「帰らずにいてくれたと嬉しく思う心と、帰った方が良かったのではと思う心が、ここで喧嘩をしている」

トントントンと、武市は自分の胸を突いた。

武市の気遣いが、桂が見せる気遣いと違う事は、和奈にもさすがに判るようになっていた。

「ここに居て良かったと、私も思っています」

「帰るのが本来の筋、と言うものなんだが」

「人を殺めた私が、その罪を償わないまま帰ってしまうのは、その人の死を無駄にする事と同じです。戻っていたとしても、どう生きて行けばいいのか解りません」

「生きる術を見出すのは言うより容易いものではない。だが、どんな時代に在ろうと、十の内八つは辛さや苦しみだ。残りの二つに幸せと喜びを見出し生きる活力を得なくてはならぬのが人生と言うものだ。ここで経たものは、おまえが言う通り一生消える事は無い。何人たりとも、自分に課せられた罪から逃れられぬ。ゆえに、悩む輩となり生きて行かねばならぬ」

「悩む輩・・・か」

「どんなに惨めな境遇であろうと、死にも等しい辛さを味わおうと、生きる努力を惜しまず立ち上がって前を見続けなければならぬ。それが、人を死に追いやった事への供養ともなるう」

儚げに笑いながら紡いだ言葉は、自らを諭しているのだろうか。

「話しは尽きぬが、そろそろ高杉くんに挨拶をして来い」

「はい！」

謁見を終えた三日後、敬親は薩摩に答礼使を贈ると決定し桂に命が下った。

それを受けて桂は二つ、願いを敬親に申し出た。その返答の是非を聞いてから、薩摩行きを承諾したいと添えて。

渋りも、思案に暮れもせず、敬親はいつものように「そうせい」と一言で許可を出した。

赤間関行きの用意を整えていた桂の所へ、広沢兵助が尋ねて来た。

「敬親公はご許可くださいましたか？」

薩摩藩と同盟を組むに当たり芸州とも連携を図りたいと相談を持ちかけられ、桂も必要で有ると考えた。

敬親に申請した願いの一つは、芸州との同盟に動く許可だった。

「そうせい、と仰せられた」

「有り難い。では早速出立の用意をします。桂さんも、道中お氣をつけて」

広沢の危惧は、長州藩士の危惧である。

裏で密約を取れ交わしているとは言え、気の荒い薩摩藩士だ。桂と知られば事情を良く知らず、太刀を抜かぬとも限らないのである。

「それは心配ない。ちゃんと護衛は連れて行く」

桂小五郎に護衛ですか、と笑う広沢には、誰が護衛に付くのかはすぐに解った。

長州諸藩の間で、和奈と武市の存在は暗黙の内に広まっていた。奇兵隊の山縣を始め、各隊の総監に一目置かれ、桂や高杉の所へも頻繁に出入りしている。その存在を疑問視する者は多く居たが、役職を与えられた武市の事を問質する者は居なかった。

小倉口での戦以後、剣術指南役として藩に仕えている以蔵と新兵衛についても同様である。

間者の可能性が皆無ならば、あえてその素性を調べる必要もないと広沢も思っている。

「では、某はここで」

広沢を見送り、脚絆で四肢を固めた桂は、紺手甲をはめた手で被り笠を持ち、空を振り仰いだ。

よく晴れた、雲ひとつ無い空が広がっている。

「薩摩か」

感慨深いものがあるのは確かだった。

長州が京より追われた頃、敵となった相手と手を取り合い、倒幕へ歩みを進める事になろうと 誰が予想し得ただろうか。

無念に消えた命の重さは、桂とて十分に感じている。その死を無駄にしてはならないと思うからこそ、恨みを飲み込んで、明日

を切り開いて行く必要があるのだ。

ふと、高杉の事を思い出した。

笑ってはいたが、痩せ細った体で、立つ事もままならなくなった男を見た時、泣きそうになったのを必死で堪えた。高杉が自分の死を受けていているのなら、自分が泣く事は許されない。

「おまえの生があるうちに、幕府を潰してみせる」

その一念が、桂にとっての原動力だった。

暮れも押し迫った十二月五日。

この日、昨年八月に徳川宗家を相続したが、將軍職就任は頑なに拒み続けていた慶喜が、江戸幕府第十五代征夷大將軍へと就いた。

「圧されて就いたか、それとも何か心に秘めるものが有るゆえか」
大久保はいつもより増した冷淡な眼差しで、庭に落ちる月の陰を見下ろした。

長州との正式な同盟締結は目前となっている。薩長の軍を強いて幕府に対抗する姿勢を見せ付ければ、江戸幕府の瓦解は早まるものとの算段をつけていた。

問題は土佐藩の動きだ。

後藤が、龍馬の仲介で長州筆頭である桂と密かに会見を行い、公武合体であった藩政の転換に乗り出した。しかし、藩主山内容堂の考えは掴めていない。

この後、倒幕を推進める上で土佐の存在は如何様にも転ぶ。懸案となる前に、有る程度想定を立てて置かなければならないと、大久保は心中穏やかではなかった。これについては桂も同意見であるとも見ている。

「悩むよい、先ず長州の件を片付けうのが先決だ」

西郷が後ろから声を掛けてきた。

縁側に立ち、何事か思索している友の後姿を見ながら酒を飲んで

いる。

「片付けるも何も、桂くん達は数日後にここへ来るではないか」

「そげん事は判つとう。同盟後の事をゆとうんだ」

「それについては悩むところではない。吉之助、土佐だよ、問題は」
西郷も馬鹿ではない。

大久保が懸念している土佐の動向は同じく気になるところなのである。だが、因縁の深い長州との間を公にする事は、藩の反応にも気を配らなければならない大事なのだ。

「下の者は良か。問題は上だ」

「案ずる事はあるまい。おまえが一言申せば良いだけだ」

西郷の人望は家臣の間でも大きなものだ。大久保が藩主の側役であろうと、薩摩藩の精鋭を御する力は無い。その事は大久保自身もよく解っている。だから西郷の言葉は絶対に欠かせないものなのである。

「時代が動くぞ、吉之助」

「そう仕向けたのは、おはんじゃなかか。何を悩む事もあうまい」

縁側から室内に戻り、西郷の前に座った大久保は、西郷の手から盃を取り上げ突き出した。

「長かったな」

注がれた酒を見下ろし、口端に笑みを浮かべて一気に盃を空ける。

「酒は今宵限りだ。私は、維新を成し終えるまで一滴たちりとも酒は口にせん」

心に決めた志を新たに、大久保は友の前でそう断言した。

その日から四日後、長州を発っていた桂が、答礼使として薩摩へと入った。

其之四 狐と狸の逢瀬

時は少し遡り、慶応二年十一月。

幕府は講武所を閉鎖し、陸軍所に吸収し砲術訓練所とした。

ペリー来航二回目のあった嘉永七年、幕臣男谷精一郎が改革の一環として操練場創設を行い、安政三年に講武所と名称が改められ、武芸の講習所となっていた。

この講武所には、教授方として勝海舟も就いた事があり、現在は長州へ帰藩している大村益次郎も江戸滞在の時に教授方として務めていた幕府機関である。

「幕臣以外の人間は習いたくとも習えなくなっちゃった」

足を崩したまま縁側を眺めていた勝にお茶を差し出した赤井は、その悲哀を帯びた横顔にどう声をかければいいのか迷った。

「剣術流派や道場と言った枠に囚われず、誰もが自由に稽古できる場をと、水戸の斉昭公が労を尽くし御創りになったのに、幕臣どもは目先の事だけしか考えねえ馬鹿だよ」

赤井も何度か勝に連れられ、講武所に稽古へ行った事がある。新撰組とも、志士達の稽古ともまた違った場感があり、一番身の引き締まる稽古場と思っている。

「そろそろ京へ戻りたくなったんじゃないか？」

「武士、という在り方がまだ掴めていません。俺の生まれた所では、武士のなんたるか、なんて親から教わる事ありませんでしたし」

「道場はどうだった？」

「剣術は確かに武道だと思います。でも、この時代の武とは根本的に心構えが違うんです」

「そうかい。で、おまえさんは武士になるつもりで居るのかい？」

「そのつもりです。武士とは何かを探してる段階なんですけど」

「難しいこった。武家出のもんが抱える志なんざ、主君に忠義を尽くす事に他ならねえ。だが、忠義を尽くすに足りる主君がいつも陣

頭に立つとは限らないのが世の常だ。そう言うところから見れば、新撰組も志士もこの梓からは離れてる」

「勝さんの主君は慶喜公ですよね？」

少し目を大きく開いて、真顔で赤井を見やる。

「そうさな。おいらの主君は徳川家だ。それは変わっちゃいないよ」
個人を指さぬ所に、勝の真意がある事など、今の赤井には知る由もない。

「西国諸藩の動きが気になるが、今はまだ江戸から動けねえ。おまえさんもそのつもりで居てくれると助かる」

新撰組に戻りたいのは山々だったし、和奈の事も気になったままでいる。

狂気。

その言葉を聞いたのは厳島でだった。

桂を斬ろうとした己に、迷いも見せず剣を抜いてきた和奈に恐怖と言う旋律を覚えた。

芸州口での太刀振る舞いにしても、常軌を逸脱していた。あれが狂気のなせる業ならば、なぜ和奈が取り憑かれる羽目になっているのだろうか。

事の繋がりが見えてこない。

和奈と組み手をしたのは錬兵館が初めてではない。稽古で何度も竹刀を合わせている。にも関わらず、一度たりと恐怖など感じた事はなかったのだ。

「俺がここへ来た事にも、理由がある」

ぼそりと呟いた赤井から、勝は視線を逸らした

「偶然などはなく、必然である、か」

赤井は脇に置いてある友重に目を向けた。

自分の存在が新撰組に在ったせいで、四番隊を指揮していた松原が切腹となった。この剣は言わば形見だ。松原の無念を赤井はその背中に背負っている。

「俺は新撰組隊士として、志士を斬る」

「そう思う道理があるのなら、おいらは何も言わねえ。だが、一つ忘れちゃならねえ事がある」

なんだと問いかける赤井に、

「おまえさんは、この時代の人間じゃない、って事さ」

「よく解ってます」

「解ってねえから、覚えておけと言ったんだ」

なにが解ってないのかと食い下がる赤井に、勝は笑って、答えを見つけるのはおまえ自身だと、それ以上の言葉を口にしなかった。

時は戻り十二月十日

薩摩国鹿児島城下千石町の南、高麗町の一角に大久保一蔵の家がある。

鹿児島城下を貫くように流れる甲突川下流域は下級武士の家が多く集まる居住地で、下加治屋町方限、上加治屋町方限に分かれていたが、元禄十六年、勝目殿屋敷から出火した火は、大久保や西郷が生まれた下町まで延焼し、土屋敷二百四十八所千六件、町屋敷三百八十五所七百九十軒、南林寺及び脇寺十二所五十一軒、門前九十所百七十軒を焼失する大火事になった。

ほうぎり方眼とは、四く五町四方を単位とする集落の事である。

この火災により、下加治屋町方限七十軒ばかりの集落にあった大久保と西郷の家も焼失し、現在の高麗町に住居を移していた。

「もっとすごい御殿に住んでるのかと思いました」

茅葺の屋根に五つ程の部屋と土間、外道と家を隔てているのは長州にない玉石垣であり、その上には茶の木やイヌマキなどの生垣が生い茂り、隣の家とを隔てる屋敷割りも兼ねている。

座敷に通された和奈は、意外すぎるほど質素な家に驚いていた。

「和太郎の内の大久保さんが、大体想像できたよ」

と桂は笑うばかりである。

薩摩藩邸に加え、大久保のあの態度からは想像付き難いので、仕方がない。

「薩摩の町は、それそのものが要塞の様なものだ」

古来、薩摩は城を以って守りとするのではなく、人を以って守りとなす風習がある。

薩摩藩は薩摩と大隈の二国領を有していたが、堅固な城郭を築き城を守るのではなく、幕府から一国一城令が出されているにも関わらず、領内に百近くの外城を築き武士を配置している。

外城に住む武士達は郷士と呼ばれ、城下に住む武士の城下士の下身分である。農耕で生計を立ててはいるが、緊急時には外城全体が一個の軍隊となり戦わなくてはならないため、藩が定めた訓練には定期的でなくてはならない。

薩摩藩はこの外城を以って、国の防御としているのだ。

「他にはない兵法で、見事と言いたい、一国一城の命を薩摩が無視している方が私には驚きだ」

「普段は農民と同じ暮らしだと聞くんが、それほど財政に圧迫している様に見えるのも不思議だな」

「琉球だよ」

「琉球？」

加賀百万石に継いで、七十七万石の石高を誇る薩摩藩だが、石高を玄米高に直すと四十万石にも満たない。総人口の四分の一が武士である薩摩にとって、この益では財政的に逼迫を意味し、京や江戸の中核で政権を担えるはずもないのだ。

シラス台地で、農作物の収穫も安定的でないこの地で、薩摩が執った政策は琉球王朝との交流である。

琉球は中国とも交流があり、薩摩藩歴代藩主はこれに注目し、富国強兵を計るとともに殖産興業の発展に力を注ぎ、貿易にて財を得て来た。

和奈が驚いたのは、大久保の家だけではない。

薩摩には水力による発電所があったのだ。この時代に発電という

仕組みが存在していた事実は意外だった。

西洋式の火薬製造所、造船所などを各地に造り、最新鋭のライフル銃や蒸気船が国内で製造されている。港に於いては、外敵となる船の進路を阻む水雷が設置されていた。

嘉永五年頃には、大砲を鑄造するための反射炉や溶鋳炉、ガラス工場も集成所とよばれる工業地帯にあり、薩英戦争で使用した海岸の大砲はすべて此処で創られた国産品だった。

薩摩はこの薩英戦争が転機となり、鎖国から開国論へと反論が大きく変わった。それほど、イギリス海軍が誇る最新のアームストロング砲の威力が絶大だった。敗戦で終わった戦であったが、薩摩人は負けず嫌いな気質を持つ。終始士気が下がる事戦い抜いた薩摩をに対し、イギリスは親交政治を執る方針を決定し、以来、蒸気船や武器などの輸入に尽力し、藩士のイギリス留学を斡旋するようになった。

イギリスは薩摩だけではなく、長州の底力にも目を付けていた事もあり、薩長の密約後には薩摩の以来を受け、武器の斡旋しているのだが、すべては薩摩との交流があつての事と言えるだろう。

「大したものだ」

「笑えた事ではないよ。この貧弱な土地で生き抜いてきた薩摩の底力は侮れたものではない。完全に敵に回していたらと、その力の差を痛感するばかりだ」

長州とて陸戦では負けぬという自負はあるが、海軍戦ともなれば、そこに力を注いでいる薩摩相手に同等の戦いを展開する事が出来るかどうか危ぶまれるのである。

「熱血漢が多いのも、薩人の厄介な所だ」

「確かに」

笑う武市の後ろで、新兵衛も笑みを零している。

すつ、と障子が開くと、いつもの如くニコリともしない大久保が部屋へと入って来た。

「久方ぶりだな、桂くん。それに」

その後ろに座る武市と和奈に一瞥を投げる。

「小僧もだ」

「また小僧って・・・これでも二十を越えています・・・」

「ほう。どうやら精神の齢と言うものは見た目にも出るらしいな」

「それって、中身が育ってないって事ですよね」

「言い換えればそうだな」

と言い終わると高らかに笑い声を上げ、上座へと進んで行く。

「息災でなによりだな、新兵衛」

座りながら、一番下手に座っていた男に目を向ける。

「はっ」

「さて。なにがどうなって、君までここに居るのか聞きたいものだ」
最後に白羽の矢が立ったのは武市である。

「護衛護衛と、周りが五月蠅いので来てもらったまでです」

「懸命な判断だ。注意は怠ってはおらぬが、密約が成っていると
は言え水面下のもの。粗暴者が出れるとも知れぬからな」

「それは長州に來た黒田くんとして同じです。正式に長州入りとなつ
たとは言え、薩人と知られば血氣に逸る者が出る危険がある」

「護衛もなしかと訝しんだが、田中殿が居たゆえ單身にて使わせた
と思いますが？」

武市が後ろをちらりと見やる。

「新兵衛と岡田くんがおるのだ、何を心配する事もあるまい」

桂と武市が、二人を護衛に付けるだろうと承知での单身なのだ。

「身なりからして、一介の藩士風情には見えぬゆえ、先ほどの問い
をしたのだがな」

交わしたつもりだったが、大久保に誤魔化しが通用するものでは
ない。

「失礼致しました。この者は記録所役支配表番頭の桂木宗次郎と申
します。藩主の許可を得ての同行にございます」

「承知した。小僧はおまけ、と言う事でいいのだな？」

「一応、小五郎さんの小姓役として来ています」

「随分と出世したものだな。まあいい。君達の来訪、心から歓迎する」

まずは落ち着きたまえと、運ばれて来たお茶がそれぞれの前に置かれ、大久保は一口喉の奥にお茶を流し込んだ。

「お茶は宇治に限る」

お茶に対する大久保の拘りは、桂もよく知って居る。出されたお茶も、わざわざ京から持ち帰った物だろう。

土佐参政の小笠原唯八が、同じく参政である福岡孝弟と上洛する一ヶ月前、容堂の使者として薩摩へ来たと、一服した大久保が口を開いた。

（意外な事は続くものらしい）

と、武市は内心苦笑せざるを得なかった。

小笠原は土佐城下馬廻格であつた小笠原弥八郎の嫡男としてこの世に生を受けた。容堂の目に留まつた小笠原は側物頭加役に召抱えられた後、大監察兼軍備御用役に就くが、土佐勤王党の取締りを命ぜられ仕置役に就く。

上士でありながら、元々は尊王攘夷論者であつたにも関わらず、同じ尊王を唱えていた土佐勤王党を弾圧する側の立場となった。江戸詰だった頃の乾退助が、藩邸に尊攘派浪士らを匿っていたのとは反対に、土佐勤王党の活動自体に批判的であつたため、大津で捕縛された間崎哲馬ら三名の断罪を執行した。

「中岡くんと乾殿の説得も大きかろう」

「小笠原殿は元来尊攘論者だ。時勢を考え倒幕に転んだとしてもおかしくはない」

だが、武市にとって小笠原は仇敵の一人である。勤王党への弾圧に加担していた事実を消す事は出来ない。

中岡との怨恨もある。

八月十八日の政変後、土佐勤王党の弾圧が容堂の命によって強ま

る中、清岡道之助率いる二十三名を引き連れ、捕らえられている勤王党員の解放と藩政改革を訴えるため、岩佐番所に武装集結した。容堂はこれを反乱と見なし、小笠原は藩兵を伴い鎮圧に乗り出すが、清岡らは剣を交える事なく阿波国へと逃れた。だが阿波藩により捕縛され土佐へと送還され、田野奉行所に突き出された二十三名は、何の取調べを受ける事もなく奈半利川河原において全員斬首となった。

その二十三名の中に、中岡の姉縫が嫁いだ岩佐関の関所役人川島総次が居た。

土佐の藩論転換のためと、乾と共に画策して小笠原への工作に走った中岡の心中は穏やかではなかっただろうと武市は思う。

小笠原は仇討ちの相手なのだ。憎しみに駆られ殺す事もできたはずであるが、それをしなかったのは中岡がただ単に忍耐に優れていただけではなく、時勢を見極める目と思想があったからに他ならない。

「明日、二の丸へご同行願う」

「仰せの通りに」

畏まった桂の前に、大久保は組んでいた腕を解く。

「貴殿は長州藩主より命を受けて来た使である上、加判役ともなれば私よりも上格だ。そう畏まらないでもいいものだがな」

「意にもない事を仰せにならぬよう、大久保殿」

「ふん。一時はどうなるものだと思いはしたが、万事とは言えぬまでも、今後を考えると君が長州筆頭席に就いた事実は、私にとって嬉ぶべきものだ。しかも、土佐におれば我らと肩を並べて倒幕に動いていたであろう、党首を片腕にしている。これほど心強いものはあるまい」

「過大評価し過ぎです」

「馬鹿を言いたまえ。後藤殿が藩士らを扇動し動かす力は容堂公の力有ってのものではないか。心に訴え響く言葉など有ろうはずもなからう。その点、君には信望を集める弁才と行動力がある。長州に

桂くん、高杉くんの双璧に、土佐に武市くん、坂本くん、中岡くん、我が薩摩に於いては私と吉之助。この三藩で倒幕の狼煙を上げられておればと、幾度惜しんだ事か」

「坂本くんの奔放さだけが頭痛の種となりそうだけどね」

大久保は、それもそうだと言うと、武市と中岡の二人にしておくべきだなと訂正してしまった。

「残念ながら、倒幕の意志はあると言っても、坂本くんには武力による倒幕を望んでいない。問題とするのはその点だ」

「それは私も同意する所。幕臣と懇意であるのは懸念材料にしか成りえない」

「勝安房守殿の存在は無視できたものではないからな」

二人の言葉に武市の顔が曇る。

「家茂公が薨去なされた後、勝殿への風当たりは強い。容易に動ける立場ではないと言え、我ら前に立ちほだかるのは必至であろう」

「問題は山積みでありましょうが、今ここで憂いても詮なき事。出方を見据えながら我らも動くしかありません」

そうそう、と、桂は赤井が勝と共に厳島へ来たと告げた。

「はっ？ なんの冗談だ？」

「冗談などではありません。どういう経緯で勝殿があつた男を擁護する事になったかは存じませんが、後ろについたのは確かですよ」

「厄介だな」

幕臣と幕府機関とが接点を持っていたとしても、不自然ではないが、よりにもよって赤井が勝と懇意になっている状況を良しとできないのは、大久保も同じだった。

「おい、小僧」

「はい！？」

「己の立場は弁えておろうな？」

「え？」

呆けた顔で座る和奈に視線が集まる。

「桂木くん、確りとこの馬鹿に説明しておきたまえ」

「ご心配には及びません。状況を見る目は持っております」

武市が援護に回るが、当の本人は何の事を言われて居るのかさっぱり検討がついていない。

「その顔を見る限り、この場の空気すら読めておらぬと思うのは私だけか？」

言いながら桂に視線を送る。

「あの男の存在に揺らぐ心はない、と申し上げておく」

桂が刺客を送った事について、和奈は驚きを見せたが追求はしなかった。芸州での戦でも赤井と斬り合い、厳島でもその剣を止めている。しかもその時に感じた剣気に殺気も混じっていたのだ。

和奈は迷わず赤井を斬るだろうと言う事は、桂も判っている。

「ここに来るまで如何様な経験をしたのかは聞くまい。あの男が新撰組に行ったと知った時のこ奴しか知らぬゆえ、疑心となるのは承知してもらいたい」

「僕が小五郎さんや武市さんと共に歩むと決めた時とおなじく、赤井くんが新撰組に行ったのは自分の意思だと思っています。その時点ですでに志を違えている相手です。必要なら、斬って捨てる覚悟はできています」

きよとん、とした表情になった大久保に、つい武市は笑いを零してしまった。

「・・・っ」

慌てて腕を組みなおした大久保は、ならば良い、とだけ言う口端を上げた。

「己が剣を見極めたか？」

「いえ、それはまだです」

「なんだ。成長したかと喜んだのは早々過ぎたようだな」

「側に桂木くんも居るゆえ、心配は要りません」

言葉に含まれる意味を図りかねた大久保だが、この場で聞き尋ねる事はなかった。

「そう納得しておこう。さて、吉之助もそろそろ来る頃だろう。酒

の用意をさせるとしよう」

黒田との会話を思い出した桂は、大久保が部屋を出て行った後しばらくして、腹を抱えて笑い出してしまった。

翌日、島津久光との謁見において、長州と薩摩の同盟が藩主の合意に基づいて締結される運びとなり、約款を交わす事で両藩主の認可を受け、正式に薩長同盟が成立した。

一方、芸州藩との同盟締結に走った広沢真臣は、藩主浅野との謁見が叶い、目通りを許されていた。

第二次長州征伐において最前線ともなった芸州は、長州征伐には反対の意向を示し、幕府と長州の仲介に入ろうと長征の先鋒役を辞退した。

岩国領の吉川と同じく、征伐に際して幕府に義はないと考えた浅野は、長州藩と足並みを揃えたいと正式な書簡を持って来た広沢を歓待し、同盟締結の約束をしたのである。

「余も土佐藩の動きには留意しておる。内情が如何知れぬが、長征において出兵も辞さなかった藩である。桂殿が危惧されるのも致し方在るまい」

書状を受取った後、浅野は酒の席を用意し、広沢を自室に招いていた。

「しかし長州には多くの土佐藩士がおります。脱藩しているとは言え、倒幕に向け駆け回っている者もおります。問題は上部にあるものと、某は考えております」

「そこなのだ、問題とするのは。後藤殿と言えば公武合体の推進を推進めて来た第一人者ではないか。土佐参政の福岡殿と小笠原殿も然り。征伐が失敗し、幕府の権威が揺らぎ出しての倒幕転換に、余は懸念を抱かざるを得ぬ」

「ご心中お察しいたします。それについては、加判役桂殿も承知致

すところ。まずは貴藩との同盟締結を成し、いずれ薩摩との三藩合意にて同盟を成すが先決と思えますれば、土佐に於いてはその後にとご容赦願ひ申し上げます」

「相解った。敬親公には、此度の申し出につき、拝謁賜りお受けするのがゆえ、近日中に謁見に伺う旨、お伝え願おう」

「御意」

親書を携えた広沢は、次の日の朝早々に芸州を後にした。

其之一 杞憂に暮れし者達

京の土佐藩邸に入った参政福岡孝弟は、乾退助を前に苦渋の面持ちを浮かべていた。

「何も小難しい事を述べているのではないのだが」

長い沈黙の後、口を開いたのは乾だった。

「斯様に申すが、容堂公が公武合体を全面的に否定したわけではござらぬ」

大目付小笠原唯八は、ただじつと乾の顔を見つめている。

「後藤殿が動かれ、佐々木殿のご意向も吾となんら変わらぬ。なれば大殿様も何れや腰を上げられよう」

「利用できるものは利用すれば良い、と言われるか」

乾が二人に告げたのは、龍馬と中岡の脱藩罪が赦免となった後、二人の抱える海援隊と陸援隊を土佐公認の組織として容堂に認めさせる、と言うものだ。

二人の脱藩罪赦免について、福岡も異論はなかった。だが、倒幕に走り回る二人が台頭している隊を藩に加えるのは難題と言うよりも、無理に等しいのではないかと思うのだ。

乾としては、薩長に劣らぬ軍を土佐で創り上げ、両藩と対等な立場で、朝廷を立てた倒幕へ赴きたいのだ。

「薩長が軍事同盟を締結するに至れば、必ずや幕府に対し威圧にかかるのは必至。両藩の動きは、静観を決め込んでいる西国諸藩を動かすものとなる。これまで幕府よりを貫き、長征にまで出兵してしまった我が藩を、敵対と見なすかも知れぬ。両藩相手に、戦で勝つ力が今の土佐にあると思われるのか？」

「今のままでは潰されるであろう。そう考えたゆえ、洋式兵団の件については了承致したのだ」

「藩に力を蓄える事は、幕府にとっては面白い事ではない。いずれ圧力を掛けて来るのを見越しているからこそ、大殿様の同意も必要

なのだ」

土佐の三頭である後藤と乾、佐々木が動けば、確かに容堂の思想を揺らがせる事も可能かも知れない。だが、と一抹の不安は隠せない。

「心中察するところだが、あの後藤殿が動き、長州筆頭席である木戸殿とも会っておるのだ、何を危惧する事があるうか」

「！」

「誠か！？」

福原は信じられないと行った様子だったが、小笠原は息を飲んだだけで、顔色を変える事は無かった。

「私は嘘は言わぬ」

くすつと笑った乾は、次は薩摩だと言だけ添えると、驚愕のまま言葉を探す二人からし戦を外し、庭へと顔を向けた。

「大久保という男、どう見た？」

「一筋縄で論破できぬ相手と見ますれば、事を慎重に進めねば潰されるのは我らでありましょう」

福岡の见解はそのまま小笠原の见解でもある。

「解り申した。薩摩藩との協議、ご協力させて頂こう」

福岡は折れた。

こうして、後藤と乾、佐々木の三名に、福岡と小笠原が加わり、薩摩藩との会合を開くよう提言した。

容堂とて時勢を見る眼は兼ね備えていた。

日に日に高まる幕府への失意の声も耳に届くようになり、このまま公武合体を強いて幕府寄りを貫けば、共倒れとなり兼ねない。それだけは何としても避ける必要があると考え、会合の許可を下した。そして福岡と小笠原は、容堂の命で使者として薩摩を訪れたのである。

久光は、来訪した桂達を、大久保の家から鶴丸城の西に在る小松

帯刀の屋敷へ移す様、大久保に命じた。

逗留の用意がされた後、小松邸の一室に通された桂達は、共に来た大久保と談義を初めていた。

「四侯会議の開催は現実のものとなるうが、土佐が我らと同じ足並みであるかは、疑問とするところだ」

この大久保の意見に、武市も同意を示すように頷く。土佐勤王党の弾圧を許可した男が、はい、そうですかと倒幕に傾くとは考えられないのだ。

「薩長土同盟の締結は必要とも思うが、容堂公の真意が解らぬのは、腹の底から歓迎し得るものではない、と言うのが私の意見だ」

「右に同じ、と申し上げておく。しかし、土佐が足並みを揃えたいと出るのなら、拒む道理もこれまた有りはしますまい」

大久保とは微妙な相違ではあるが、懸念材料となる、その点だけは合致していた。

「長州征伐軍に、土佐藩も出兵していたと高杉さんから聞きました」
これまでならば、桂達の話しに首を突っ込まずただ座しているだけだったのに、珍しく言葉を発したものだから、皆の視線が同時に戸口に座る和奈に集まった。

「土佐藩主である、山内さんは幕府の味方をしていたのでしょう？」

「まあ、そうなるね」

涼しげな顔の桂が、いつになく嬉しそうに答える。

和奈はちらりと武市を見てから、膝を少し前へと動かした。

「薩摩藩と長州藩が目指すところは同じ様に見えます。でも、龍馬さんや武市さん達を、言い方は悪いかも知れませんが、蔑ろにして来た藩です。僕のような下っ端がとやかく言えた事ではないと思いますが、同盟には賛成できません」

顎を引いて、目を大きく開いている大久保の前に、にこにこしている桂、その横では、眉間を狭めて半ば口を開きかけている武市の顔がある。

「何を学んだかは知らぬが、これはまた一興と呼ぶに値する出来事

だな」

同意を求めるように顔を桂へと向ける。

「一興って・・・酷いですよ大久保さん」

「私の小姓役を務める才を培ってきた、と言う事です」

「いや、甘やかしては始末に悪い」

そう言うのは武市だった。

「くくくくつ、面白い。いや、揶揄ではない、真面目に面白いことだ」

「もう。真剣に意見したのに」

「おまえの心配は良く判るが、私も桂くんも承知の上で同盟を成そうと言うのだ。考える心があるならば、表に見える事象だけでなく、根底に動く人の心理、時勢の流れも見極める心を培ってみよ。そうでなくては、見えているものも見えずに終始するぞ」

「見えているものが見えない、ですか」

「その一つがおまえの剣だろう」

武市の指が綾鷹を指し示す。

「あ・・・なるほど」

「まったくもって退屈せんな」

「それはどうも・・・」

「ともあれ、土佐の件らについては後日吉之助が動く手筈となっております」

「西郷殿が？　またそれは如何なる由か」

「土佐が来たと伝えただろう。議の席にて、参政である福岡殿が吉之助に土佐へ来て欲しいと嘆願した。向こうから来てくれというのだ、この期は逃せまい」

「容堂公に四候会議の是を説き、上洛を提言すると？」

「然り」

「これについて、大目付である小笠原殿は了承している」

福岡には話していないと、言葉の裏を読み取った桂と武市は、眼だけを交し合った。

「ここに薩長が手を結んだ以上、もはや足を止める事は叶わぬ。今後については連絡を密に取って行かねばならん」

「それについて異存はない」

結構だと、大久保は満足した笑みを浮かべ、組んでいた腕を解いた。

「新兵衛は長州に預けておく。薩摩に戻しても、これに納得させれる待遇などしてやれぬのでな」

微動だにせず、部屋の隅でじっと座っていた新兵衛に笑いかける。

「今消えられても困る。彼は岡田くんと並ぶ剣客として、隊の間では人気者になってしまったからね」

「ほう」

「いえ、その様な事は」

「気にするな新兵衛。間者扱いされてはいまいかと気掛かりではあったが、これで心置きなく床に着く事が出来る」

新兵衛は無言のまま頭を下げた。

「では、ゆるりと休まれるがいい。明日は吉之助が尋ねて来ようかな」

人の気配が消えたのを確かめた桂は、座る顔を一度見回すため息を零した。

「多々多様にして複雑極まりない」

と、苦笑いを見せる武市に、そうだね、と短く桂は答えた。

「桂木さんは平気なんですか？」

そう言葉を口にしてしまったから、そんなはずもない、と和奈は内心自分を叱咤する。

「平気とは？」

「薩摩も同盟については、両手を広げて歓迎してないんでしょう？それは長州も同じなのだ。」

「そうだな。平気だとは言えぬが、同盟の件が出た時に心は決めて

いる。何を憂う事もあるまい」

容堂が土佐勤王党の弾圧を容認した時、武市の中にあった藩主への期待は崩れ去っている。心を尽くして説けば必ずや容堂に誠意が伝わると、信を貫いた結果が招いたのは、同志達の悲惨な最期だったのだ。

「だからと言って、土佐を敵とはしておらぬ。共に立つと容堂公が動くのなら、時勢の流れと受け入れるだけだ」

諦めでもなく、妥協でもなく、ただ純粹に理解を示した武市の思いを、和奈はそうかと納得できなかった。

そんな和奈を見て、桂は胸のざわつきを覚えた。

（なんだ？　なにを不安に思うのだ？）

これまで、政の話しに自ら進んで首を突っ込んで来た事のない和奈が、ここに来て何かを考えねような顔で入って来た。

（まさか、な）

松陰が如き様相を現したのは、剣を振るう時と高杉が側に居た時ぐらいだ。

小倉口の戦い以降、和奈が豹変した覚えもなければ、武市からもそんな事があったとは聞いていない。先ほども今も、別段変わった様子もない。

「もし、土佐が裏切ったら・・・」

武市と桂の息を飲む音が耳に届いた。

「色々な結果があるのは確かだ。だから僕達は不測の事態を幾つも考え、その時にすべき策を考える。今からあれこれと悩むは愚かなり。一つの結果に囚われ杞憂するよりも、眼前に置かれた事態にどう対処すべしか、それを考えて行かなくてはならない」

桂の言うところは最もだとも思う。思うのだが、しつくりと心に落ち着いてはくれなかった。

「なにか気になるところでもあるのか？」

「いえ・・・」

続く言葉を探しているのだろうが、当の本人にもそれ以上何を言

いたいのか解らないのだと悟った武市は、やはり部屋の隅で黙したままの新兵衛に茶を持って来てもらいたいと頼んだ。

「おまえの内から、語るものがあるのか？」

新兵衛が部屋から出た後、そう問いかけた。

「僕も一瞬、それを考えた」

松陰は兵学者でもある。藩に留まらず日本という大きな国の未来を憂い、然るべき事をなさねばとその生涯を懸けて生きた士である。長州と薩摩が手を取り合い、幕府に対して義とはなんたるかを問う動き始めた矢先に、和奈が政へ少なからずの干渉を見せた。

「・・・孟子は云われた。管仲かんちゅうの桓公かんこうを助くる、王道を知らずして覇術を行ふと云へり、と」

孟子？

武市と桂ははっ、として顔を見合わせた。

「管仲が桓公を助けた道理は、王道を知らずして覇道を行なったことにあります。王道は格物・致知・誠意・正心・修身・齐家より、治国・平天下に至るもので、この順序を見失ってはならぬものでしょう。一方、霸道はこれと反対のもの。彼の豊臣秀吉も、修身と齊家を忘れたために、後継ぎである秀頼の辿った命運も、二人の如くとなったではありませんか」

「何が言いたい？」

「長州は、王道を忘れずして、関が原の合戦より今日まで義を尽くして来た。それは毛利元就公以後、大義を重んじ、家臣や民に心を砕いたからこそそのもの。ゆえに、今日の長州があると僕は思います。領土を削られ、長門・周防の二国となっても、藩祖の築いた基盤は少しも揺らぐ事はなかった。僭越至極ながら、豊臣公と比較しても、その優劣は知るが如きものでありましょう」

「故家、即ち旧臣の家なり。遺俗、即ち古来の風俗なり。流風、即ち風俗風習なり。これ即ち善き政なり」

久坂玄瑞より、松陰の講和のいくつを聞き及んでいた武市は、記憶の底にあった言葉を引き出しから抜き出した。

和奈はこりと頷く。

「国家がゆるぎなく治まり続けるために必要な四つだ。これを違えれた者は国賊となる」

高杉がよく口にしていたものであり、彼の師が心に定めんと書き記した書物の一片にあるものと、桂はも思い起こしていた。

「土佐との同盟は避けて通れないものであると、僕も理解はしています。しかし、長州藩の為とするならば、土台となる志を揺らぎあるものに変えてはなりません」

「まさか、おまえに諭される身になるとは」

「あ……すみません、出すぎた事を言いました」

和奈には変化の片鱗も見られない。だとしたら、語った言葉は己の心から出たものだろうか。

否。

その心には松陰が居るはずだ。そもそも、これまで講和に近い意見など一度だりとも和奈は口にしなかった。

「それで、おまえは何をすると言う？」

聞きたかった問いを、動揺も見せず武市が言っただけ。

「……義を覆す者がいるならば、僕はその者を斬る」

「！」

「強いて剣を握る必要はあるまい」

「言葉で片付くなら、多くの命が散る事はありませんでした。違いますか？」

そう言われては返す言葉を見つけられなかった。事実、武市は天誅と称し、岡田に人斬りを命じて来たのだ。

「それで解決するものでもあるまい」

自己の経験がそう語らせているのは、和奈も桂も十分に知っている。

「覚悟を、言っただけです」

下関から帰ってきてからと言うものの、いつも和奈なのだが、どこかが違うと感じていた桂は、高杉と会った時に何かあったのかを尋

ねた。

「・・・何も。桜が咲く頃、皆で花見をしたいと話ただけです」
それだけではない、と武市は高杉の家での事を思う。二人の間に何事かがあったのは言うまでもないだろう。問わずにおいたのは、和奈がそれを話すまで待とうと考えたからだ。

だが桂は問いかけた。予想していた通り、和奈は話しをはぐらかした。

「ふう。まったく、おまえという子は。いいだろう。政に関わりた
いと言うならば、その眼でしかと現実を見据えるがいい」

「桂さん！」

武市はできるならそれを避けたかった。

「どう止めても、戦場へ出ると言い出した時の様に、この子は首を
突っ込んで来るに相違ない。ならば半端に関わるより、間違った道
を選ばぬよう全てに関わらせるに越した事はない」

和奈の突出が松陰の導き手によるものなのか、桂は知りたいのだ。
「こうなると解っていて、小姓役に就けたのか？」

「先見の明に長けている訳ではないよ。今日を見て、答えを出した
までだ」

「謙遜か？ 食えぬ人だ」

「君も、然りだろう？」

「あ、あの、困らせようとしたんじゃないんですけが」

ピリピリとした空気を感じ取った和奈は、慌てて二人の間に割り
込んだ。

「やれやれ。喧嘩などするつもりは毛頭ないから、そんな顔をしな
いでくれ」

「議論の何たるかすら解らぬのに、よくも政理事を口にしたものだ」
こんどは二人に呆れ果てられてしまい、出した首を引っ込めなく
てはならなくなってしまった。

「まあいい。論を議したいと言うなら、何時でも相手になろう。そ
れこそ、一晩でも付き合ってやるぞ」

楽しいと言わんばかりの顔を和奈に突き出す武市。

「いえ！ それは遠慮しておきます」

外に気配を感じた桂が、

「そろそろ入って来てもいいよ」

と言葉を発すると、そろりと障子が開けられた。

新兵衛がお茶の催促を受け、部屋を出ていたとすっかり忘れていた三人は、申し訳なさそうに入って来た新兵衛に、すまない、と謝り、運んできてくれたお茶に手を伸ばした。

翌日、西郷を伴った大久保が訪れ、福岡が京から戻るのに合わせ、土佐入りすると桂に告げた。

其之二 年の暮れ

和奈達が薩摩へ渡った慶応二年十二月九日。家茂の正室であった和宮が薙髪し、号を静寛院宮と称した。

江戸の暮らしは、赤井にとって退屈極まりない日々となっていた。薩摩藩邸で、西郷からの連絡を、今か今かと待っていた龍馬の気持ちが痛いほど解る。

「学べと言われても、どうすりゃいいのか解らん！」

畳に体を投げ出した赤井は、天上を見つめたまま長いため息を吐いた。

とぼっちりで時を越えて来たとは言え、生きて行くためには江戸末期に沿った生活が必要だった。最初の頃は、和奈と袂を別つなど考えもせず、ただ流れに身を任せていただけだった。それが、土方との出会いで新撰組に入る事になり、必然と敵対関係になってしまった。

和奈に対する恨みは持っていない。その側に居る桂の行動が赤井には気に入らないのだ。

志士。

その言葉の意味すら十分に判らず、国という大きな存在の影で蠢く意志の数々すら赤井には解らない。

武士になりたい。今、心に浮ぶのはそれだけだ。

（新撰組は時代の流れに乗って明治の世を迎える事は叶わない。だが、大久保と桂、この二人が居なければ、流れは変わる）
なのに自分は江戸に居る。

「皆、元気かなあ」

大石の豪快な笑い声と、土方の怒声が懐かしかった。

「時化した顔で何を呆けてるんだ？」

はっ、と身を起こすと、顔を歪めて笑いを堪えている勝の姿が眼

に飛び込んで来た。

「あ、お帰りなさい」

「おう。で、質問の答えは？」

「いや、その。京にはいつ帰れるのかな、と」

「おまえさんもか」

「え？」

部屋の真ん中に、どんっ、と座った勝が二度肩を鳴らした。

「まだ広戸さんを斬るつもりでいるのかい？」

「はい」

淀みの無い声色に、勝の顔が少し曇る。

「広戸さんは私利私欲で動く人じゃない」

「私利私欲でないなら、人を道具の様に使っているんですか？ そんな理由、俺には納得できません」

「もつともだ」

「だったらー」

「おまえさんの言いたい事はよく判る。駄目だと説いて頷く奴も居れば、志のためと首を振る奴も居るんだよ」

ふと、勝の脳裏に薄汚れた男の顔が浮かんだ。眼をぎらつかせ、人を斬る事で人を守ると言い切った男の顔だ。

「ある時、才谷がおいらに護衛とつけた男が居た」

そう、あれは雨の振る夜だった。

京での事だ。夜更けとなり、帰ると腰を上げた勝に、龍馬が護衛をつけると言って連れて来た男が居た。

背の高いがっしりとした体格と、人を射る様な眼つきの男には、血の臭いが纏わり付いていたのを覚えている。

土佐脱藩の浪士、岡田以蔵。

それが京を騒がす人斬りに数えられている男であるのは、勝もよく知っていた。

以蔵は勝を見て幕臣と判ったのか、すぐさま殺気を漂わせたが、龍馬が一言、頼む、と言うと苦虫を噛み潰したような顔で目を閉じ

た。

一頻り振った雨は、旅籠屋を出る頃には上がり、提灯を片手に先導する小僧の後を勝がゆったりと足を進め、その後ろをとぼとぼと以蔵が付いて行く。

寺町通　りに入るやいなや、以蔵の足が速くなった。

勝も気配に気付いて組んでいた腕を解く。

暗がりから三人の男が飛び出したのはその直後だった。が、息を飲むまもなく、剣閃が走ると、一人が体を半分ほどまで斬られ地面に突っ伏していた。

「死にたい奴は来い！」

下げた刀の刃を上に向け、状況が飲み込めず立ち尽くしている後の二人に怒鳴る。

ザツつと一歩、以蔵が足を踏み出した瞬間、我に返った男は踵を返して暗い路地へと走り込んで行った。

「何も殺すこったあねえだろ。人を殺すのを楽とするのはいけねえよ。ちったあその血気を治める術も身につけな」

「・・・俺が出なければ、ここに転がっていたのはあんたの体だ」

勝の顔を見ようとせず、刀を払い鞘へと納める。

地面に死体となって転がる軀を見て、首を振りながら勝は止めた足を前へと踏み出した。

人を守るために人を斬る。

「そうしなければ、守れない国なんぞ、本来あってはいけねえんだ」
「だから土方さん達は治安を守るために徘徊する不逞浪士や、幕府の人間を狙う志士達を取り締まっているんじゃないですか」

「新撰組とて、同じじゃないのかい？　幕府のためと、御用改めに押し入り、問答無用で志士を斬る。斬られる側は守るために刀を抜く。新撰組が悪いって訳じゃねえ。幕吏だって人を斬る。皆、それぞれ守りたいもののために刀を抜くんだ。本当に、嫌な世の中だよ」
「桂さんや大久保さんの頭があれば、人の命を奪わずに、幕府を変えられる手立てくらい思いつくでしょう」

「つたく。しょうがねえな。この国に一体どれだけの人間が住んでいると思ってる。藩主の命があっても、抱えてる藩士に歯止めをきかすなんざできねえから、佐幕だ倒幕だともめるんじゃないか。右へ習えで思想が一致するなら、揉め事なんざ起こりやしねえさ」

「・・・結局堂々巡りになる」

「そうだな」

昭和でさえ、国会内部で派閥同士の反目があり、お互いを蹴落とし政治の筆頭に立とうとあの手この手を使う。だがそこに、刀という解決方法は存在しない。

明治維新後になってこそ、国民が政治家を選ぶ時代となったが、それでも国の運営すべてに意志が反映される訳ではない。政治家と公務員、国民はそれぞれ別々に歩いているのが現状だ。

「何が正しいかなんて、今を生きる人間には判らねえ。後々の世になって、あの武将が正しい、この武将が正しいと評論されて善悪が決められる」

「くそっ！」

「おっ!？」

赤井は畳の上に腕を大にして体を投げ出した。

「判んねえ！」

「おめえに判ってりゃ、おいらはもつと良い手段を思いついてるさ」
勝のその言葉は最もだと赤井は思った。

赤間関の小さな草庵に、桂が姿を見せたのは陽が沈み、空が紫に染まり始めた頃だった。

「大丈夫か、晋作？」

部屋の中央に敷かれた布団の上に、細長いものが横たわっている。それが高杉の体の線なのだと判るまでそう時間はかからなかった。

桂の顔が一瞬、悲痛なまでに歪んだのを、高杉はその呼吸で感じ取った。

「ちよっと倒れただけだ。おまえが飛んでくる必要はない」

こんなに弱々しく言葉を発する男だったのだろうか。

「どうせまた無茶をして、おうのさんを困らせたんだろう？」

ここ最近、朝から出かけては松陰の墓碑の前で酒を飲み、止めても聞いてくれないのだと、文には困り果てているおのうの様子が伺えた。何度か嗜める文を送ったが、返事が来ることはなかった。

そして一昨日、大量の吐血と共に倒れ、意識が戻らないとの知らせを受けてやって来たのだ。

「薩摩と、正式な同盟の締結になったよ」

高杉は答えない。

「これからが厄介だ。土佐も動き出し、幕府は沈黙を守っている様に静かだ。おい、聞いているのか、晋作？」

布団の縁から、太い棒のようだと見紛う位に細くなった腕が出ると、障子を指差した。

「開けるのか？」

言いながら立ち上がり、両手で障子を左右に開け放つ。

「風は冷たいよ」

振り返った桂は、嬉しそうに微笑む晋作の眼に庭が映るよう体をずらした。

「なあ、小五郎」

「なんだ？」

「桜が咲いたら、ここで花見をするんだとさ」

首を傾げ、高杉の足元へと座を戻す。

「ああ、和太郎かい？」

「花見、するぞ」

「・・・なら、色々と用意が要るね」

「酒も大量に用意してくれ」

「つたく、おまえは」

その体が春まで持つとは思えないほど、高杉は衰弱しきっている。食事も一日に採る量が減り、今では粥をさらにお湯で溶いたものを何とか胃に納めている、という状態だと、ここに着いた時におのう

から聞かされている。

「・・・その和太郎だがな」

「ん？」

「松陰先生の心があいつの内にある。だが、同じ魂とは限らん」

「どういう事だ？」

「違うんだよ、俺の知る先生とあいつは」

「そんなの、当たり前じゃないか。和太郎は・・・」

ずっと先の時代からここへ来たのだから。と、桂は続く言葉を飲み込んだ。

受け入れる訳にはいかない。桂の性格からして、その事実を素直に取り込めないでいる。否定しきれる理由も、認められる理由のどちらもない。

「不思議な子だ」

「おまえを動かした奴だ。将来は大物になるかも知れんな」

俯いた桂に、どうしたと問う。

話すべきだろうか、和太郎が薩摩で語った言葉を。

「また、なんかやらかしたか」

「いや・・・あの子がね、政に関わってきたんだよ。それも孟子の論を持ち出してね」

ずっと輪の外に居て、加わる素振りを見せなかったのにと肩を落とす桂に、

「側におまえや武市さんが居る。なんの不思議もなからう」

と事も無げに言う。

雰囲気が変わったと感じたのは、長崎からここへ来た後だ。ならば、ここで何かあったはずだと桂は高杉に聞いた。

「なにも・・・ただ桜の話しをただけだ」

息を飲む音が聞こえた。

「そう。和太郎も同じ答えを僕にしたんだ」

花見をすと言っていたのだ、確かに桜の話しはしている。だがそれだけで、和太郎が変わる切欠にはなりえない。

「どうして、吉田先生と違うと？」

「狂気の種が違うと思わんか？」

「おい、晋作。はっきり言え」

「先生の口にした狂気は、尋常ならざる心構えを指したものだ」
本当に狂ってしまったっては意味がない。

「普通、人を初めて斬った奴は、刀を持つ手に恐れがでる。何度か繰り返す内に、恐れは慣れへと変わり、そこで二つの道ができる。人斬りとなるか、殺さずにして刀を振るうか」

「和太郎が人斬りになっていると？」

「違う。あいつは最初が欠けている。刀に恐れを抱くどころか、自分から進んで振るう場に出で行っている」

「まわりくどいな」

「・・・ここで人をその手にかかるよりも以前に、あいつは人を何度か斬った事があるはずだ」

「何を馬鹿な！」

「もしくは、人を斬った記憶が生まれ変わっても、意識の奥底に残っているのかも知れん」

「・・・おまえ、一体何を言っている」

「松陰先生の思想を、最も正確に受け継いでいた男が居た」

「初期の松下村塾の門下生ならば、皆そうだろう？ 久坂くん然り、

吉田さん然り。おまえもその一人じゃないか」

「その中でだ」

「？」

「あの人は・・・俺や久坂とは違う」

喋るのが辛くなってきたのか、吐く息に音階がついたように響く声は掠れ、その言葉は桂の耳に届かなかった。

「そろそろ休め」

そう言ったのは、寝ているにも関わらず荒い息になり出した男を心配したからだ。

「魂の一部は先生かも知れんが、もう一人、別の魂があいつの内に

ある」

今度は桂の耳にも聞き取れる声となっていたが、あえて問い返さなかった。

「・・・疲れているんだ。僕が居る間は禁酒だ。いいな、晋作」

ちゃんと話を聞けば良かったと後々後悔する事になるのだが、これ以上話を続けても高杉の体力を消耗するだけの空論になると思い、あえて話を打ち切ってしまったのである。

師走独特の慌しさが漂う町を歩いていると、もう今年も終わってしまうのだという実感が沸いてくる。

「買うものはこれだけでしたっけ」

正月の用意にと、もち米、昆布の干し物や里芋など雑煮を作るのに必要な野菜と、祝い酒となる日本酒の入った大徳利二つを買いに出て来ていた。荷物で両手が塞がったまま、武市が前を歩いている。「不足してる物があれば、また来ればいい」

馬を使つてと石川達に言われたのだが、歩いて行くと和奈を連れて出たのだ。

「重くないか？」

野菜を抱えているだけの和奈は頭を振る。重さのあるもち米と大徳利は武市が持っているのだ、重いはずがない。

「一つ持ちます」

両手が塞がっているのは、何かしらあった時に刀をすぐには抜けない。そう思っただけののだが、案ずるなど断られてしまっていた。

「聞くのを忘れていたが」

「はい？」

「いつ、孟子を学んだ？」

「いつ、って・・・」

思い当たる節がない。

なのに薩摩で孟子の言葉を口にした。

「あながち、世迷言と片付けられぬな」

「え？」

「おまえの内にある魂が、吉田殿のものかも知れぬ、という事だ」
そうでなければ説明が付けられない、和奈も武市も。

「ならば、何をしに来たのだろうか、おまえは」

「・・・」

偶然などはない、あるのは必然だけだ。

「成すべき時がくれば自ずと判る事だと思います」
まただ。

「そうか」

「・・・桂さんが居たので言えませんでしたけど、桂木さんには、
話しておきます」

「高杉くんと何かあったのだな？」

「あった、というより、言われたと言う方が正しいです。夕餉が済
んだら、菊が浜に来て頂けますか？」

「よからう」

ざわつく心を抑え、後ろを付いて来る気配を確かめながら、武市
は諸隊長らが集まっている屋敷への道を急いだ。

其之三 波乱の幕開け

御所内侍所に於いて行なわれた国風歌舞（雅楽）に不調ながら出席した孝明天皇が、その夜から体調を崩し、翌日になって高熱を発し倒れてしまったのである。

慌てたのは朝廷だけではない。

第二次長州征伐で長州に大敗を記した幕府も、天皇の罹病りびょうの報せに血相を変え、急遽御所へ駆けつける騒ぎとなった。

「このような事態になって、長州どころではあらしまへん」

御機嫌伺いと出向いてきた慶喜、松平容保を前に、二条斉敬は額を押さえた。

藤原北家摂関家の二条家当主 である斉敬は、国事扶助として孝明天皇の補佐を行なっている公卿である。岩倉具視らとは敵対する位置におり、長州の処分問題を期に政務を取り仕切り、徳川宗家の相続に尽力するなど、親幕派公卿の筆頭ともいえる人物だ。

「ご心中お察します」

「余の事はええ。問題は噂や」

診察を行なった侍医は、発熱の原因は未だ不明だが、体に出だした発疹の広がりが高く、熱もそれに伴い高熱となっていると告げた。

「発疹、にございますか」

「宮内至る処で、不遜な噂がまことしやかに囁かれていると、ここへ来る途中耳にしました」

「ほんまに難儀な事だな。病床にお臥せにならばった御門の耳に届いてあかんと、侍医と信頼のおける女官だけしか配してまへんけど、悪い噂ゆうもんはすぐに広がってしまいます」

ストレスを溜めていたのか、斉敬はその夜遅くまで二人を前に愚痴を零し捲くったのである。

夜が明け、噂が駆け巡る中、再度の往診を行なった侍医は、数日前から腰痛や頭痛を訴えていた事と、雅楽に出席した時にも微熱を

伴っていた事実から、孝明天皇が罹った病を疱瘡（天然痘）と診断した。

回復の兆しを見せ、朝廷幕府が安堵したのもつかの間、慶応二年十二月二十五日、在位二十一年、三十六歳の若さで急死した。

慶喜だけでなく、斉敬もこの訃報に耳を疑った。処方された薬で病状は落ち着いており、投薬を続ければ痘痕は残るが命には別状無いと侍医は告げていたのだ。

言葉通り、熱も下がり始めた矢先の崩御に、毒殺でないかとの疑いが持ち上がり、食事を毒見した者すべてが取調べを受けたが確たる証拠は出て来なかった。噂だけが確かなものとして、公卿や幕臣らの口々を伝い広まって行った。

噂は噂でしかなく、これ以上の混乱は無用と、崩御から四日後の二十九日、朝廷は大喪の礼を發した。

慶応三年元旦の深夜。天皇崩御により暗い空気となっていた京の町に雪が降った。

縁側に座り、肌を刺す寒気に白い吐息を吐き出した伊東甲子太郎は、雪が降り積もって行く庭を眺めていた。

「凍死でもする気ですか？」

座敷の奥から声をかけたのは斉藤一である。

「困ったものですね。君には風流と言うものが全く解っていない」

日本人にしては彫が深い面貌を持つ伊東は、美丈夫という言葉が似合う男の一人である。

常陸志筑藩の藩士の子として生まれ、十三歳で水戸遊学に出た。

そこで水戸藩士の金子健四郎より神道無念流を学ぶ傍ら、藩独特の水戸学に浸り勤王へと思想を傾倒させて行く。

水戸から遊学期間を終え帰郷した伊東はその思想を持って江戸へ入と、深川佐賀町に在る、北辰一刀流伊東道場の門を叩いた。

場主は伊東精一と言い、伊東はここで剣の才覚を現し免許皆伝を得るに至った。

精一が没すると、遺言により伊東は娘婿として迎え入れられ、名実ともに伊東道場の道場主となった。

道場を継いだ伊東の門下として通っていたのが、藤堂平助である。その藤堂からの誘いで新撰組へと入ったが、勤王派である伊東にとってそのあり方が頭痛の種となって来ていた。

「斉藤くんは」

黒い丹後縮緬の羽織の肩越しに、顔だけ振り返らせた伊東は、新撰組みつての暗殺者を涼しげな目元で捉えた。

「人を斬るだけの人生に、己の生涯を費やせますか？」

斉藤は動じもせず、剣士に似つかわしくない容貌の男を見つめ返した。

明石藩で足輕の身分にあった斉藤の父山口祐助は、江戸の旗本の足輕として仕えた後、御家人の身分を金で買った。それ以来斉藤家は江戸に住んでいる。

武士が元服するのは十五歳。斉藤も十五歳になる頃には大小を帯び、人並みの剣術を納めていた。その運が変わったのは十九歳になった時だ。旗本の一人を口論の末、斬る騒ぎを起こしたのである。息子の身を案じた祐助は、京で道場を開く友垣の吉田勝見に匿ってもらえるよう頼み込み、斉藤は江戸を離れた。この時より、山口一から斉藤一を名乗る。

隠れ住み家となった吉田道場で、斉藤は剣術の腕を磨く事になった。元々運動神経は良い。教えればそれも教えた以上の事を修得する斉藤の腕を買った勝見は、道場の師範代に据えた。一刀技法や薙刀等の剣術に留まらず、軍法も吸収して行った斉藤は、江戸に戻り土方達と出会う事になる。

「俺には、剣の腕にしか頼るものがありません」

ふっ、と柔らかな伊東の顔が更に緩む。

「君ならば、剣以外に生きる術も掴めるだろうに」

斉藤はよく喋る男ではない。口は災いと呼ぶ種になると知っているのだ。

「いずれ武士が刀を振るう時代は終る」

ピクリと斉藤の眉尻が動く。

「西洋列国を見たまえ。腰に差すサーベルは儀礼的な代物へと成り下がり、動かずとも相手を殺傷できる銃を幾万もの兵が手にしている。英吉利や露西亜は周辺諸国を植民地化し、その精気を吸い尽くし、魂までも蹂躪し文化を変えている。日本を日本として在らしめるには、藩だ幕府だと言う小さな囲いの中で、同属同士がいがみ合っ

って居る場合ではないのだよ」
伊東が勤王思想を持っている事は斉藤も知っていた。新撰組内で、近藤を慕う派と、伊東を慕う派が二分し始めている事実もある。新撰組当初からの隊士であるならば、新参者の伊東より近藤をとるべきであるのだが。

（尽忠報国の志あつての新撰組であるはずだ）

君主に忠義を尽くして国家に報いる。国家とはすなわち日本であり、その日本の君主は会津藩主でも將軍でもなく、天皇である。

だが、と斉藤は内心呟く。

（今の

新撰組は闇雲に人を斬る）
その相手の殆んどは幕府転覆を目論む志士である。

「君にも想う所があるようだね」

俯いてしまった斉藤の顔から、伊東は瞬時に当惑を読み取ったのだ。

「一つだけ心得ていてほしい。私は何も新撰組が悪いと言っているのではない。その在り方に少し疑問を抱いているだけなんだ」

「在り方・・・」

「京守護職守松平殿の庇護を受け、新撰組は幕府の組織として成り立っている。徳川家に仕える会津藩が主である以上、新撰組が京の治安維持にと駆け回るのは至極当然の事。何故芹沢くんを肅清せねばならなかったのか、考えてもみたまえ。会津藩に捨てられれば、脱藩者や農民の身分である者達は路頭に迷う事になる。それを恐れ、狼藉の限りを尽くしていた芹沢くんの肅清であつたはずだ。それが

どうだい。今の新撰組は、芹沢くんそのものではないかね？」

「お言葉が過ぎる様に思います」

「おいおい。先程も申した通り、在り方について憂いているだけなんだよ。そこを取り間違えないでくれたまえ」

「・・・何故俺に？」

そんな話しをするのか。

「剣のみに生きる末路は悲惨だからね。才ありと思えばこそ、君には多くを見、多くを知る術を学んでほしいんだよ」

剣客としての斉藤一ではなく、一個の人間として接してくる伊東に、斉藤は言いようのない不安を覚えた。

「さて、と。明日も早い。今宵は是までとしよう」

伊東は明日から、西国を巡る遊説に出る。

第二次長州征伐後、薩摩と長州が不穏な動きを見せる中、偵察という名目で近藤が会津藩に届けを出し、許可されていた。

しかし伊東の腹のうちはこれだけではない。

このまま佐幕を貫く新撰組と袂を同じにしている、身を滅ぼすのではないかという危惧を抱き始めている。また、伊東の根本には勤王思想がある。会津藩預かりであるにも関わらず日々志士狩りに明け暮れている近藤らに、失墜の念も感じている。

（所詮は烏合の衆に他ならない）

武士たる者と、そうでない者とは士道の捉え方が異なるのだと伊東は思っている。

武士道は、「武士道といふは、死ぬ事と見付けたり」と言われるように、忠義の為ならば死をも厭わない覚悟を持つことであり、士道は、いつ死ぬ解らないと覚悟して一時一時を懸命に生きる覚悟を持つことである。

戦国時代の武士は、まさに前者の如く戦場を駆け抜けた。が、徳川が天下を取り乱世の世が終ると、山鹿素行により朱子学の儒教的な道德観・倫理が武士には必要とされるようになった。仁・義・忠・孝の士道が主流となり、剣術のみならず、様々な学問の知識修得も

欠かせなくなったのである。

士道を重んずる伊東が、士道と武士道を取り違えている近藤や土方に相違を見るのは仕方のない事と言えた。

「では、これで」

結局、何故呼ばれたのか解らないまま、寒気を体に纏わりつけ庭を眺める伊東をそのままに、斉藤は部屋を後にした。

薩摩から帰国してからというものの、和奈は時間があれば書物を手にして縁側に居座る事が多くなっていた。

朝の稽古を終え、朝食をさっさと平らげると自室にとって返し、桂から借りた本を手に一階へと下りてくる。そして武市が声をかけるまで、一心不乱に本へ目を走らせるのが日課となっていた。

その姿を廊下の影から見つめていた武市は、背後に気配を感じて振り返った。

剣豪の名にそぐわない仕草で歩み寄ってきた桂に、軽く頭を下げた。

顔色が心なしか悪いように見える。

「少しは体を休めては如何か」

薩摩から戻って来て以来、桂は多忙な仕事の合間を見つけては、菊が浜にある武市の家に惜しげもなく通って来ていた。

「氣遣ってくれるのは嬉しいんだが、色々ね」

「何かあれば直ぐに知らせる」

肩越しに縁側を見た桂が言わんとする事を悟った武市も、ついと和奈へ顔を向ける。

「どうやら心配事は一緒のようだね」

視線を戻した先で桂の目と合い、心の動揺を知られまいと、背を丸くして本を読みふける和奈の方へとまた顔を戻した。

「何の書物を読んでいるんだい？」

「山鹿素行の武教全書だ」

「孟子の次は山鹿素行か」

桂の重いため息が耳に届く。

【君には責任があるな】

大久保の声が脳裏に蘇る。

確かに剣術の技を磨かせたのは自分である。そのせいで和奈が狂気を発する事になったとの自覚もある。だからと、何かができたわけではない。それが自分を苛立たせるようになってどの位経ったのだろうか。

「和太郎に字の手解きをしたのか？」

「いや」

大津で手形を覗き込んできた和奈は、字は苦手だと首を引つ込めた。和歌や詩などの文字とは違い、楷書書きに近いそれすら読めなかった。

字を読み解けなければ学問に携われないと、時々ではあったが、自分の読む書物を教材に読み方を説いた事がある。が、和奈の根気は半刻ともたなかった。

読めるようになった理由は判っているだろうにと思いながら、武士も桂も沈黙しつつ、お互いの氣を探り合う。

ふいに和奈が顔を上げて、二人の方へ顔を向けた。

「小五郎さん」

開いた書物に、笹で作った葉を挟んだ和奈は、バタバタと音を立てて駆けて来た。

「随分と熱心だね」

「佐世さんが、山鹿流なら山鹿素行だと、この本を貸してくれたんです」

和奈は忙しく書の初頁を捲り、二人に差し出して見せる。

（余計な事を）

表紙の左上に「武教全書」と書かれているのを見て、桂は泣き出した。衝動に駆られた。

内題にも武教全書とあり、次ぎの行に「自序」と二文字の副題、「孫子曰兵者國大事死生之地存亡之道也不可不察也是千歲不易之格

言也（孫子曰く、兵は国の大事にして死生の地存亡の道、察せざるべからず。この格言は永遠のものなり）」との書き出しで本文が続く。

和奈が手にするのは安政五年に写本されたものを、さらに写本した複製品だ。紙も新しく字体が崩れていないため読むのには苦労はなかった。

「山鹿流は兵法だ。軍師でもないおまえが読み解く必要はない」

素行は、九歳の頃から朱子学を学んでいたが、他の学問に触れるにあたり、朱子学に対し厳しい見解を示すようになった。その言動により、朱子学批判者として会津藩から締め出されるに至り、赤穂藩預かりになった。ここで素行は赤穂藩士達に山鹿流を教えている。山鹿流兵法が実戦兵法と呼ばれるようになったのは、山鹿流を学んだ赤穂藩士達と家老大石内蔵助良雄らによる、吉良上野介襲撃事件からだ。主君浅野内匠頭長矩の仇と討ち入った事件である。

「面白いのかい？」

この問いに和奈は眉を顰めて返答に詰まった。

「兵学におけるいわば教本だ。面白いと笑顔を見せられても困るんだけどね」

「どちらかと言えば、吉田先生の講義された物が好きです。あの、獄で書かれたあれです」

松陰が獄中に在った時、囚人達を門下として講じ書いた「講孟余話」を言っているのだろう。

筆まめ。その一言に尽きるほど、松陰は何でもかんでも書き留める癖があった。家に居ようが旅に出ようがその癖は収まらず、自分の抱いた感動や些細な事柄を丹念に記していた。

「文学に興味を持つのは良いと思うが、本来のおまえが身に付けないてはならない教養もあるんじゃないか？」

どういう意味かと首を傾げてしまう和奈から、桂は本を取り上げる。

「ねえ、桂木くん？」

そうして意味深な笑みを浮かべ、本を差し出した。

「私に振られても困る。和太郎に刀を渡したのは他でもない、貴方ではないか」

「反論はしないよ」

和奈が狂に狂うと解っていたら、刀など持たせるものか。

和奈が剣術を学んでいた。それが桂の見解を見誤らせたのは確かだ。

「ともあれ、おまえには女子としての教養も必要不可欠だ。書物ばかり読んでいないで、茶道の一つでも身につけなさい」

と言われても、「女子としての教養」である、茶道や花道といったものが苦手なのだ。武市も無理強いすることはなかったので、自ら進んでやろうと考えないまま今日に至っている。

「やれやれ、困った。津和野から村木殿が戻られるというのに、さて、どうしたものか」

「あ・・・」

落ち着いたら津和野に連れて行くと、以前言われた事があると思ひ出す。

「御船倉の近くに空き家があり、そこへ戻られると便りが来た」

御船倉は藩主の御座船を格納した倉で、毛利家所有となっており、他に三槽の水軍船倉も並んで建てられている。松本川に面しているので、船の出し入れには難儀がない。

倉の他、廻船問屋や船主の屋敷が立ち並んでいるこの一角は、河口と海が接する立地というのもあって、魚市場も多く、京さながらの賑わいを見せている。

「粗相をせぬよう」

礼儀作法は剣術同様に必要だと武市から仕込まれているが、自信など端からない和奈にとっては、その言葉が恐怖となった。

「どうしましょう、桂木さん」

半泣きの形相で詰め寄られても、武市にはどうしてやる事もできないのだが。

「四日後に伺うから、それまでにそんな顔をしないで済むようにしておきなさい」

桂の指示通り、それから三日の間、松子の元に預けられた和奈は袴を脱ぎ、立ち振る舞いや武士の子としての礼儀作法を教え込まれることになった。

松子は、小浜藩町奉行の右筆木崎市兵衛の次女として、若狭の町に生まれていたが、藩で起こった事件に巻き込まれ閉門の処罰を受けた。その後、後撰家の一つ一条家の次男難波恒次郎養女となる。だが、難波家の家計は逼迫しており、加えて母と姉弟も養わなければならぬ松子を、三本木吉田屋から舞妓として出す事に決めた。難波の妻が元芸妓であったのも、芸妓への道へ進ませると決心させた要因だったかも知れない。

京の町で有名な芸妓となった幾松は、桂と出会う。暫くは芸妓を続けたが、桂の懇願もあり土手町にある桂の別邸に、留守居役として母姉妹と共に移り住んだ。

「旦那さまは、あなたの事が心配でならないんですよ」

大小の刀を袖の上から持ち、刀掛へと納める。

「人には得手不得手があるんです」

歩きにくい。胸の下辺りが窮屈である。なによりも帯刀できない。頬を膨らませて何度そう愚痴ったか知れない。その度に松子に笑われたが、叱られはしなかった。

「やっぱり、袴で行きます」

「そしたら、私が叱られますね」

「松子さんは悪くないです。聞かなかったことにして下さい」

慌てたのは和奈だけだ。松子は多少の事で動じはしない。新撰組から付狙われていた桂を匿った事もしばしばあり、抜刀した近藤を相手に啖呵を切れる度胸も持っている。

「桂木さまも、きっとそちらの方がお気に召されると思いますよ」

その言葉に閉口してしまった和奈は、赤くなった顔を見られまいと顔を背けた。

そして四日目の朝、菊が浜へと戻って来た和奈を、桂は洗面で見つめていた。その後ろで武市はやはりという顔付きで座って居る。

「こっちのほうが僕らしいと思うんです」

自信満々と言う和奈に悪気はなかった。

「言い出したらきかぬ性質だ」

「まったく、おまえには敵わないよ」

「良いのではないか？ 和太郎はすでに男として皆の前に出ている。村木殿が萩へ戻ってこられた以上、遅かれ早かれその耳に届く」

「段取り、というものがあるだろう？ 養子の話しを持ちかけたのは晋作が拳兵する前なんだから」

村木家当主栄太郎には、藩籍を剥奪された摂州の武家の息女で、養子縁組を受け入れてくれる家を探して欲しいと知人から頼まれた、としか伝えていない。京から出たら男装をさせる必要もなくなると考え、あえて告げなかった。まさか高杉が挙げた戦に参加する事になるなど予想できなかったのだから仕方がない。

どう説明すればいいかと、着くまでの道で桂は悩むことになった。

村木家の家は、建華寺、龍昌院など寺社が点在する寺町の東、下五間町に在る。武市の住む塩屋町とは同じ通りで行き来できる距離である。

「わざわざお越しいただいて申し訳ありません」

客室で和奈達を出迎えた村木栄太郎は、加判役支配船手組士で役高三六石の藩士である。長州が内乱で騒然となっている中、妻を津和野の実家に戻し、御船倉の警護と管理に当たっていた。

袴姿で現れた武士が、養女となる和奈と聞かされた栄太郎は、別段驚くでもなく、そうですかと笑った。

「失礼致します」

栄太郎の妻、妙は入ってくると、皆にお茶を差し出し、主人の右手より下に座った。

「妻の妙です」

何も言わず、微かな笑みを浮かべ、妙は手を付いて頭を下げた。

まず桂は和奈の男装について詫びを述べた。

「桂殿が謝られる事はございません。高杉殿より事情はお聞きしておりますので」

「晋作から？」

初耳だった。

「お聞きになっておられませんか」

「ええ・・・申し訳ありません」

栄太郎は、妙との間に生まれた嫡子を幼子で亡くしている。それ以後、子宝に恵まれる事はなく、家督を継ぐ養子をと考えていたところに、和奈の養子縁組が舞い込んできた。

「家督を継ぐのは、なにも息子でなければならぬとは思っておりません。婿でも良いのです。ですからお断りせずお受け致しました。妻も、息子と娘が一度にできたと喜んでくれております」

呆氣にとられ言葉を失っている桂の顔を、和奈は一生忘れる事ができないだろう。

「そう言って頂けると助かります。和太郎は小姓役を頂いておりますゆえ、村木殿も寄組から手廻頭支配の役について頂きます。沙汰はおつて届けさせます」

慌てて気を取り戻した桂は、儀礼的な言葉で誤魔化した。

小姓役には役高百五十石が支給される。いわば昇進である。それに伴い、武市の家から村木家へ移り住む事になった。

「あなたが桂木殿ですか」

話しが纏まり、たわいもない談笑の途中、栄太郎は隻眼の男に問いかけた。

「ご挨拶が遅れました。記録所役支配表番頭を務めさせて頂いております、桂木宗次郎と申します」

そう名乗ったのはこれで二回目だと、内心おかしくなる。

白札だった頃の自分はもうどこにも居ない。

「文武、どちらの才もある方と、佐世殿よりお聞きしております」
また佐世かと苦笑するしかない。

村木と佐世が既知であるのは、屋敷に近いせいもあるのだろうが、桂としては訝しまずにはいられなかった。

「今後も宜しくお願い致します」

栄太郎は深く頭を下げた。

「元氣そうだな」

布団の中から、そう笑う高杉の顔はやせ細り、豪快な面影はなくなっていた。

（ここまでとは・・・）

心中を察したのか、高杉の顔から笑みが消えた。

「そんな顔するな、馬鹿が」

「高杉さん！」

「お、おう！？」

眉を上げて半分起こり気味の中岡に焦る。

「高杉晋作ともあろう人が、何やってんですか！」

「何って・・・寝てる」

「見れば解ります！」

「おまえ、なんでそんなに怒ってるんだ！？」

怒りは高杉に向かってはいない。高杉の体に巢食い、命を削っている病魔に向けられたものだ。

「怒りたくもなりますよ、まったく。お役御免になったって聞いて、暴れもせずこんな山中に引っ込んでるなんて、高杉さんらしくありませんよ」

「無茶言うな」

十分無茶な事だと中岡にも解っている。いるのだが、どうしても我慢ならなかった。

「中岡」

「なんですか！？」

「・・・怒るなって」

「怒ってません！」

「一々怒鳴るな！ 相変わらず五月蠅い奴だな、おまえは！」

互いに怒り顔で睨みあっていたが、どちらともなく噴出し大声で笑い出す。

「俺の事なんぞ気にしなくていい。暴れたいだけ暴れさせてもらったからな。後はだ」

片肘をついて上半身を起こした高杉は、中岡の鼻先を指差した。

「おまえが頑張れ」

「……」

「これから大変となるのは俺じゃない、小五郎だ。武市さんが居ると言っても、おまけがくつついていては、あいつの気苦労も堪えんだろうしな」

「おまけて……」

「それで十分だ。いいか、土佐の出方次第で時局は変わる。変転の鍵は坂本さんだ。あの人は俺たちと違って武力倒幕に必ずしも賛成ではない」

言われるまでもなく、龍馬が平和的解決を模索しているのは知っている。幕府を見限っている点では同じだったが、根本にある志は違う。

龍馬は幕府という檻を壊し、開国をなして日本を強くするための策を常に考えている。その新しい舞台で海外に目を向けようしているのも、海援隊の創設から伺い知れる。

桂や大久保達とは、富国強兵という点で龍馬と意見を一致させているが、幕府の在り方については意見のすれ違いがある。薩長が望むのは、幕府を解体し、朝廷を頂点とした諸藩連立による新政の樹立である。

「俺も小五郎も、徳川家とその家臣らの参政はないものと考えている。が、坂本さんは違う。あの人にとって薩長同盟は、ただ単に幕府の崩壊に必要なことから手を貸したに過ぎん。それ以上は望んでないだろう。そこが問題となる」

「承知してます。俺としても、幕府を討つのは必要と考えてます。」

しかし、龍馬さんが語る未来図もまた、納得できるんです」

やはり中岡は土佐人なのである。長州や薩摩が、戦国の世の終わりから耐え忍んできた歴史があると知ってはいるが、高杉や桂、大久保と西郷とでは根本的に異なるにのだ。

「だから頑張れと言った。坂本さんが敵に回れば、小五郎や大久保さんはそれを良しと見過ごす事はせんだろうからな」

中岡の頬が引きつった。

「和太郎が居る居ないは別として、武市さんも小五郎と同じ方向へと進むのは間違いない」

「難題です」

「俺は中岡慎太郎という男を信頼してる。薩摩との同盟が成ったのも、おまえが存分に駆け回ったお陰でもある。ならば、最後まで駆け回ってみろ」

「高杉さん・・・」

「そんな顔をするな。俺は十分暴れたと言ってるだろうが。ここに至って悔いはない」

あるとすれば、桂の側で支えてゆけない不甲斐なさだけだ。

「先生は言われた。人の生死には、十年には十年の、三十年には三十年の四季がある。人は、生を受ければいずれ死する定めにある。だから短い命と嘆くのではなく、その時が何時来ても悔いがないよう一瞬一瞬を懸命に生きる覚悟と、いつでも死ねる覚悟を持ったねばならんと。俺はその言葉通りに生きてきたんだ、何を悔いることがあるものか」

聖人君子であるはずもなく、辛い想いであるには違いないのだ。だが語る言葉には躊躇の欠片も感じられない。ここが高杉と言う男の凄さなのかも知れない。

「敵わないなあ」

「この高杉晋作さまを越えようなんぞ、十年早い！」

「百年でも無理そうです」

「おまっ・・・ったく」

珍しく照れた様子で視線を外した高杉が、胸を押さえた。

「・・・っ」

「！」

片手を突き出し中岡を制する。次の瞬間、激しい咳が口を出て来た。

「た、高杉さん！」

呼吸も出来ないのではと思える姿に齒を食い縛りながら、後へ回るとその背中を摩り始めた。

「・・・っる」

「え？」

「すぐ・・・収まる・・・」

中岡の目に、布団に落ちた赤い点が映り、背中を摩っている手に力がこもる。

咳が収まりだすと、枕元にあった薬湯に手を伸ばし、こぼさないよう喉の奥へと流し込んだ高杉は、見られまいと口を拭った後、後ろにいた中岡を手で遠ざけた。

「この薬が不味くてな」

その言葉を和奈にも言った事があると、高杉は口端を上げて薄ら笑いを見せた。

「おまえに頼みがある」

長い吐息の後、いつになく真剣な顔が中岡を捉えた。

孝明天皇の崩御を受け、徳川慶喜が征長軍の解兵を朝廷に奏請した。解兵を決めたのは、長州に対する処罰を速やかにし、占拠された領地を解放させよと評議の場で詰め寄られたためである。

敗戦によって徳川幕府の権威は失墜し、負けたのだから長州軍門に下るべきだとの意見まで出る始末であった。各藩からの批判は相次ぐ一方で、結論を先延ばしにしていた慶喜は、喪に服すためとの理由をつけて解兵を奏請したのである。

同じ頃、会津藩主松平容保が辞職したいと幕府に申し出て、これ

も騒ぎになった。容保が京守護職の解任を願ったのには、大火によって会津城下の半分を焼失した上、例年がない凶作で飢饉に民が喘いでいる。そんな状態で藩主が不在を続ければ、如何なる事態が起るか判らぬという危機感を抱いたからであつた。

容保が辞職を申し出たと、顔面蒼白となつた近藤が土方に告げに来ていた。

血の気を失うのも無理はないだろう。新撰組は会津藩預かりの組織であり、正式な幕府の組織としては認められていない。容保が辞職すれば、後に就く守護職がどう新撰組を扱うのか判らないのだ。

「見廻組は幕臣で作られた治安組織だ。守護職に誰が就こうと進退を憂う事もない」

新撰組を取り潰して困る事はない。その分だけ幕臣の数を増やせばいいだけの話なのである。しかも、京市中においての評判は新撰組よりも良い。騒動を嫌う幕府が自分達を切り捨ててるだろう事は目に見えている。

「なんとしても容保殿には現職に在って頂かねばならん」

「だからと、どうするって言うんだ」

土方は半ば投げやり気味に返す。

「おまえは心配にならんのか？」

「何をだ？ 隊士の保身か？ 武士の身分を奪われることか？」

「ここが取り壊しとなつてみる、隊士の殆んどは職を失うばかりか、路頭に迷う。そんな事はさせられん」

ふん、と鼻を鳴らした土方は、この世の終わりだとも言わんばかりに暗い顔で座る近藤に刀を突き出した。

「俺は副長だ。局長が無理難題を通すと言うなら止める権利がある」「なにも無理難題を言ってる訳じゃないだろう」

「大方、容保殿の屋敷に出向き、辞職を止めるために腹を斬るとでも言うつもりだろうか」

近藤は黙るしかない。まさに言われる通りの事をしようと考えていたのだ。

「馬鹿な考えで出向く前に、頭を使うんだよ」

「と、言うത്？」

「その為に伊東がいるんだろうが」

ああ、と近藤の顔が明るく輝いた。

「まさかおまえが伊東さんを頼りにするとはなあ」

「冗談言わんでくれ。俺は、利用できるんなら仇でもなんでも使え
と言ってるだけだ」

しかし便りとなる伊東は西国遊説にと京を離れている。

「辞職を申し出たと言うだけで、幕府がそれを認めた訳じゃない。
この混乱だ、幕府が容認するとは考えにくい」

土方の言う通り、天皇崩御と幕軍解体に騒然となる中での辞職は、
朝廷にとっても幕府にとってもそうですかと首を縦に触れるもので
はなく、よって容保の辞職願いは議論されぬまま破却となったので
ある。

近藤は胸を撫で下ろし、土方も伊東に頼らずに済んだと喜ぶ。

「しかし、なんでまた西国なんざ出かける必要があるんだ？」

「伊東さんの話しでは、薩摩の動向が今後鍵となってくる。幕府に
とって薩摩の反乱は大きな痛手だからな。その視察を目的として、
容保公も許可を出されたんだ、文句は言えまい」

「面白くねえ」

伊東が色々な方面で顔売り、公卿の中にまで入り込んでいる。

新撰組を語る時の席に、局長である近藤の姿はない。参謀の位置で
ありながら、土方はその態度が気に入らない。

「伊東さんも新撰組を思って行動しているんだ。そう躍起になるな」

「・・・やっぱりあんたは甘いよ」

だから自分が縄を締めなければならない。ここを守るために、近
藤を守るために。

「赤井くんは元気でやってるのかなあ」

人の気も知らずにと、土方は、どうだろうかと答えた。

その赤井は、孝明天皇の葬儀に出席する勝に同行し、京の地を踏んでいた。

「すぐにでも西本願寺へ行かせてやりたいが、もうしばらくおいらに付き合ってもらおうよ」

「俺が居てもできる事はないと思うんですが」

けらけらと勝は笑う。江戸の男は笑う時も爽快である。

「おまえさんを預かると言ったんだ、それなりの箔はつけてやらねえとな」

「箔、ですか？」

「多くの人と知り合うのは、多くの学問を習うのと同義だ。政に関われる相手と、既知になるのも必要なこった。おまえさんには、その両方をもって先を見定める力を養ってもらいてえのよ」

先を見定める。その言葉には桂の事も含まれているのだろう。

「荒れるな」

京の青い空を見上げて、勝は悲哀の籠った声で呟いた。

其之四 慟哭の刻

太陽が地平線へと沈み、紫に染まり始めた空が広がっている。

想いを託す相手を間違えてはいないか。障子を背に敷居の上へ腰を下ろし、その事を考えてかれこれ半刻は過ぎていた。

高杉の想いとは志に他ならない。貫徹できない人生を託す相手は、覚悟を決め生きてきた者などではなく、時を越えてきたと言った和奈なのだ。

酷だろうと思う。思うのだが、狂に狂ってしまう恐れがある以上、現実には繋ぎとめておく楔が要る。武市の存在もその一つだろうが、歯止めにならないのは幕府との戦いで明らかとなっている。

「ゴフツ！」

激しい胸の痛みと共に、血の塊がベチャリと手に張り付く。

「桜か・・・」

普賢象桜が満開となった夜、風に散る花びらに一つの願いを込め祈った。長州の行末が、この国の行く末が自らが望んだものとなるように。

「どうした？」

気配を感じ、顔をむけることなく高杉は問いかけた。

「中へお入り下さい。夜風は体に悪うございます」

衣桁に掛けてある羽織を手にし、高杉の側へとおのうが膝をついた。

「すまん」

「旦那さまらしくありませんね」

羽織を被せようと腰を浮かせたおのうの腰を抱え込み、その膝に頭を乗せた。

「柔らかいなあ」

さらさらとした髪を撫でながら、おのうが笑う。

「ああ、しまった」

「旦那さま？」

腰に回した右腕を離し、目の前へ翳し見る。

「着物を汚した」

「洗えばいいだけですから」

「そうか・・・なら、いいか」

高杉はもう一度右手を腰の後ろへ回すと、おのうを強く引き寄せた。

「高杉」

障子のむこうから遠慮気味に声を出し、少し間をおいてから男が顔を覗かせた。

赤間関の白石宅へ逗留を頼みに来た中岡は、玄関先で龍馬と顔を見合わせていた。

「こがな所で何をやっておるんなが」

「何って、龍馬さんこそ」

戸が開いたまま、暖簾の向こう側に立つ中岡と龍馬を見つけた白石は、何時もと同じく笑顔で中へ招き入れると、快く部屋を用意してくれた。

二人が部屋で落ち着いた頃、簡単な夜食と、女中が膳を運んで来た。

チラチラと揺れる行灯の灯が壁に影を作る。

「どうじゃった、高杉くんの容態は」

雄雄しく咲いていた男の精気が弱々しく感じられた。それが堪らなく辛かったと、中岡は涙を滲ませて声を絞り出した。

「ほがーにわりいのか」

「新鮮な空気がいいって、寒いにも関わらず家中の戸が開いてました」

新鮮な空気と日光。おのうが高杉のためにと出来るのは、それくらいしかないのだろう。

「で、龍馬さんはなんでここに？」

「新撰組幹部がこっちへ向かっちゅうらしくてな、何か判ればと来てみたがやか」

寒そうに体を丸めて、串で小さな鍋を突いていた龍馬は、見つけた鶏をニコニコ顔で刺すと中岡に差し出した。

「はっ？ 新撰組が京を離れて？ なんで？」

「知らない」と龍馬の手を押し返し、代わりに顔を突き出す。

「ほがな事、わしに判るはずがないろう」

「そりゃ、そうですね」

「ほれと、会津の大殿さんが辞職を願ひ出たらしい」

「あらま。あ、だから新撰組が？」

「大騒ぎとなっちゅうらしいが、幹部の動向が、必ずしも辞職と結びつくものとは思えやーせん」

京の守護に当たる新撰組幹部が、そんな騒ぎの中でわざわざ西国へ出て来るのには、それなりの理由があると思えない。

「あ・・・」

薩摩藩邸で、新撰組が荒れるぞと言った大久保の言葉を思い出す。

「どうかしたがか」

「いやあ、まだはつきりとは・・・様子を見る必要はありますね」

「ほうじゃの」

親指の爪を噛み、なにやら物思いに耽ってしまった中岡を横目に、龍馬は小鍋をまた突き始めた。

伊東が西国へ立つ。

そう近藤が隊士に告げたのは二日前だった。

「最初の目的地は大宰府だそうだ」

「大宰府？」

そこには京を追われ、長州へと落ちた七公卿が居る。その内の三條実美は長州と深い繋がりのある公卿である。薩摩の動向が気になる中、長州びいきの公卿に会いに行く裏には必ずなにかあると、土方は追跡の許可を近藤に出していた。

「だがなあ」

近藤はひたすら洩るばかりで、要領の得ない返事を先ほどから何度となく繰り返すばかりだ。

「局長であるあんたが、伊東に肩入れてどうするよ」

「べつに肩入れなどしてはおらんさ。今回の遊説は、松平殿が許可を出されたんだ。脱退した訳ではないのだから」

「その松平殿は辞職を申し出てんだろうが！」

「しっ！ 声がでかいぞ、歳」

隊士に動揺を与えるわけには行かない。

辞職を取り下げてほしいと直訴へ出向いた時、近藤を幕臣へ取り立ててもらおうよう働きかけると松平が申し出た。新撰組を抱え、京の守護を自分が京都守護職を辞しても、近藤が幕臣となれば新撰組の進退を危ぶむ恐れはなくなる。

「伊東さんの目的は西国の情勢を探る事だ。新撰組幹部が何かしらの情報を掴んだとあれば、幕府も功績を認めてくれると言うもんじやないか」

「そんなに甘くねえと思うけどな」

土方の伊東嫌いは筋金いりで、近藤としては困る事が多い。会津藩へ伺い出るようになってから、近藤の顔は他の藩にも知られるようになった。夜、酒の席で時世を語る事もしばじばとなり、学問に傾倒した事のない近藤にとっては、伊東という学者肌の幹部の存在は迷惑どころか歓迎すべきものになっていたのである。

「歳よ。おまえももっと学問を習うべきだ。いいぞ、学問は。私も色々な方と論じる機会も増え、これまで知らなかった局面を見る事ができるようになってきた。伊東さんの学識があればこそ、私も堂々と出向いていけるんだ。そこをもう少し配慮してくれると助かる」
(なにが学問だ)

武士には両腕があればいい。学問で志士が斬れるか。土方だけでなく、そう思っているのは沖田も同じだろう。その考えは山南を追い詰めるまでに至り、伊東を毛嫌いする動機ともなっている。

「あんた、いつから武士を辞めた？」

「辞めてなどおらん。今の武士には学問も必要なんだ、おい、歳、まて！」

ピシヤリと障子を閉めて出ていってしまった土方に、ため息をつく。

「あいつに、柔軟のかけらでもあればいいんだがな」

翌日、土方の西国行きの許しを得た近藤は、護衛として伊東の後を追う許可を出した。

京へ舞い戻った赤井は、勝が出歩いている隙を見て西本願寺の屯所へと足を運んだ。無論、勝の承諾はない。

「あれ、土方さん？」

もうすぐ屯所というところで、旅装束となった土方を見つけ急いで駆け寄った。

「赤井？ おまえ、戻って来たのか？」

「いや、その。勝さんのお供で・・・それより、どこへ行くんですか？」

「西へちよつとな」

服装から、京の西、というのではなく、西国だと踏んだ赤井は同行を申し出た。

「勝殿と一緒になんだろう？」

「崩御だってあちこち走り回ってますよ。俺が居たってなんもできないし、勝さんだって西の情報は欲しいでしょうから」

「それはてめえの道理だろ。唐街道の山崎に東屋って旅籠屋ある、そこで朝まで待っててやるから、ちゃんと勝殿の許可を取って来い」それを過ぎれば置いて行く。そうは言わなかったが、朝までと口にしたからには、宿場が開くと同時に発ってしまうだろう。

急いで勝の所へ駆け戻ったが、許可を取る相手はまだ帰宅していなかった。

「すいません、勝さん」

急いで旅支度を整えた赤井は、置手紙を書いて勝の部屋の障子の隙間から中へ落とした。

山崎宿は摂津国と山城国の境に位置し、南北一五町ほどに、中小の旅籠屋が八軒ほどしかない。丹波街道の基点ともなっていて、東寺口から向かう道と、伏見宿から向かう道の二つがある。京から山崎宿までの道を唐街道と呼び、ここから西間宿までの九里二町を山崎街道と呼ぶ。

正確に西国街道と称されるのは、尼ヶ崎を第一宿場とし、西宮を経て大里^{だいら}へ至る道五十一次、百二十五里十八町（約489km）である。

山崎宿の構え口で東屋の位置を尋ねた赤井が、土方の居る部屋へと入ったのは日が落ちてからのことだった。

「案外はやかったな」

にやりと笑って口をでた声には棘がある。

「その顔じゃ、どうせ勝殿に内緒にして来たんだろうが、おまえ、手形あるのか？」

「あっ！」

「馬鹿が」

「まずいっすよね」

「これを使え」

土方は懷から手形を一枚取り出すと、畳へ放り投げた。

「げっ」

「連れてく予定だったが、熱があつてな」

その熱が労咳によるものかどうかは不明だが、体調が芳しくないのは土方の顔を見れば聞かずとも知ることができる。

「今からおまえは沖田総司だ」

うへっ、と声にならない声を発した赤井に、飲めと酒を差し出した。

上洛し、乾との謁見を終えた小笠原は、福岡と行動を別にし、薩摩藩邸を訪れると大久保に面会を申し出ていた。

「あいにく、大久保様は所用にて藩邸を留守にされております」

戻るのは何時かと尋ねたが、答えてはくれなかった。

（仕方あるまい）

幕府の命に従わず長州征伐に参加しなかったあの時以来、土佐の者が表立って薩摩藩邸を訪れる事はない。倒幕にと駆け回る志士達の他は、であるが。

「日を改めて参ります」

しかし、小笠原が以後訪れる事はなかった。

薩摩を訪れた福岡によって、志すものが長州や薩摩の抱く思想に近いものであると容堂に注進され、小笠原は職を解かれてしまった。薩摩来訪の前に、上役に就く者が倒幕などに傾倒していると知られては、土佐に巣くう志士達を煽る羽目になる、そう考えての処置だった。

また、龍馬と中岡の赦免を申し出てきた福岡は、その理由を「海援隊と陸援隊を土佐に取り込み利用する」とし、薩長に引けをとらない軍作りができるとした。容堂もそれ相応の力は必要だと考えていると知っての提案だった。たった二人の赦免で自軍の増強と、志士の暴動回避ができるのなら益はあれど損はないと、脱藩罪恩赦の命が下った。

数日後、「郷土御用人権平之弟坂本龍馬 北川郷大庄屋源平之倅中岡慎太郎之脱藩ニ於赦免申付」との報せが、周旋方の役に就けとの沙汰と共に届けられた。

【桂木さんには話しておきます】

和奈から、高杉が告げた言葉を聞いた武市は、「志を受取る覚悟」の意味を、独りとなった家で考えていた。

高杉の志は倒幕だ。無論、長州と薩摩の目的と同じである。それを和奈に受ける覚悟をしろと言った。つまり、意志を継げと言う事

に繋がる。

だが、と武市は苦渋を作る。

（今の世に生まれたのでないのならば、その必要などありはしない）
それだけでは片付けられない。何しろ、和奈の魂は吉田松陰の魂
かも知れないのである。それが真実ならば、どう説得しても言われ
たままに受けて入れてしまいそうな予感がする。

（だめだ。それは、絶対にさせられぬ）

高杉が何と言おうと、刀を捨てさせ、女子としての人生を村木家
で歩ませるより他に無い。

武市の出した結論である。

「それが、あいつのためになる」

行灯の明かりに照らされた室内がやけに寒く感じられた。

京で和奈と出会い、剣術の指南を始め、大津から長州に逃れて来
て数年。いつも近くに感じた気配が無い。

「先生」

襖の向こうで畏まっているだろう以蔵を思い浮かべながら、武市
は顔だけを向けた。

「田中さんから報せがきました」

「何と？」

「新撰組が京を発ち、小郡へ入りました」

「新撰組がか？」

今頃なんの理由で。

「そのまま街道を西に向かうようですが」

「・・・それで、誰が出た」

「参謀の伊東甲子太郎と、諸士調役兼監察の新井忠雄の二名」
どちらの名にも聞き覚えはなかった。

幹部職に在る者が今の期、なにゆえ西国へと発つ必要があるのか。

「あと、その二人の後を追う様に、土方と沖田が京を出ています」

「なに？」

おもむろに立ち上がった武市は、ゆっくりと襖を開けた。

「確かか？」

「はい」

何かある、と思つてみたところで、その理由を知るには情報が少な過ぎる。

「田中さんが調べるてみると、先ほど萩を發ちました」

自分は、と問いかける眼差しが武市を捉える。

「まずは桂さんに知らせて来い。おまえを出すかはそれからだ」

頷いた以蔵は、師が背中を見せたと同時に襖を閉めると、足音もなくその場から消えた。

土方が京を離れた。しかも沖田も一緒と来ては、騒ぐ心を落ち着けられはしない。

「村木殿に頼んでおくか」

和奈が事を知る前に、足止めをしておかなくてはならない。

キリキリと傷む胃の辺りを気にしながら、村木家へと出向いた武市は、出迎えてくれた栄太郎から和奈の不在を告げられた。

「佐世様がお見えになり、急な用にて和太郎を連れて行くので、桂殿が貴方様が来たらこれを渡してくれと」

「佐世くんが！？」

差し出された紙を受取った武市の顔色が変わった。

「桂木殿？」

武市の様子から、ただ事ではないと悟った栄太郎の顔色が変わる。急ぎ礼を述べ、不安そうな栄太郎をそのままに、慌てる素振りを見せず玄関から木門を潜り出る。

（くそっ！）

門を曲がった武市の足は、次第に駆け足となつて行つた。

怒り心頭と立ったまま拳を握る桂の足元で、おのうが泣き顔を隠して肩を震わせていた。

「井上様が火急の用と来られて、夕餉の材料を整えようと出ている間に・・・」

「あんな体で何処へ行つたんだ、阿呆が！」

普段は動揺しない松子も、今ばかりはおのうの肩を抱いて、怒りに顔を染めている主を見上げている。

申し訳ありませんと泣く女性に、これ以上罵声を発しても意味がない。

握った拳から力を抜くと、桂は長い息を吐き出し、松子に頷いてからおのうの側へと座った。

今、高杉の身を一番案じているのはおのうなのだ。

「声を荒げてすまなかった。おのうさんは家へ戻っておいで。ふらりと戻って来るかも知れない。その時あなたが居ないと、晋作はまた家を飛び出すだろうからね」

「私もご一緒致します」

駕籠を呼び、おのうと松子を長府へ送り出した桂の所へ、今度は以蔵が姿を見せ、新撰組の一件を告げた。

「次から次へと、何の騒ぎなんだ？」

「俺に聞かれても困ります」

「その伊東とやらが、長州に入ったのは確かなのか？」

「はい」

どうするべきか。

「田中くんは今どこに？」

「すでに小郡へ入り、伊東に張り付いているかと」

「そうか・・・」

新兵衛が動いているなら、いずれ大久保の耳にも入る。

（岡田くんを出すべきか）

腕は認めているが、大久保の忠臣を一人で嗅ぎ回らせるておくのはまずい。新兵衛が、得た情報を全てこちらに渡すとも思えない。

「君も向かってくれ。桂木くんには？」

「伝えてあります」

「解った」

以蔵はペコリと頭を下げ、くるりと背を向け走り出して行った。

「まさか、これを知って出たんじゃないだろうな」

新撰組の件を聞いたとしても、一人で自由に動ける体ではない。
井上が手伝う以外に外へ出る事は叶わない。

おのうには気休めを言ったが、ふらりと戻って来るはずなどなかった。

「桂さん！」

部屋の中へ戻ろうと踵を返した所へ、血相を変えた武市が飛び込んで来た。

「今日は厄日なのか？」

以蔵を出した事の苦情かと眉を顰めたが、それでいて息咳切って飛び込んでくる男ではない。咄嗟に何事かあったのだと判断した桂は、肩で息をする武市の元へと降り立った。

「なにかあったのか？」

「和太郎が・・・」

「え？」

「佐世くんと発った」

「はっ？ 発ったって、なぜ佐世くんと？」

また佐世かと、桂は奥歯を噛み締める。

「馬を、借りたい」

そう言いながら、栄太郎から受取った紙を差し出す。

鼓動の音が耳の内側に鳴り響いている。

渡された紙に目を通した桂は、一瞬目の前が白くなり足元をふらつかせた。

「危ないっ！」

崩れそうに鳴った体を武市に支えられた、腕を掴んだその手に力を込めた。

「まったく！」

玄関の床に腰を落ち着かせ、頭を抱え込む桂の前に屈む。見るからに疲労が蓄積しているのが判る。

「新撰組の一件を知って出たのか？」

「私もそれを考えたが・・・晋作は動ける体ではないと知っているだろうに！」

今すぐにも飛び出して行きたいのだろうが、自分の立場を弁えている桂にそれは出来なかった。例えそれが友の生死に関わる事だとしても、感情を制するクセはおいそれと代えようがない。それがストレスという反動を呼び、体力と気力をそぎ落として行く。

「ともかく、桂さんは動かず、体を休めていてくれ」

普段から青白い顔が、より一層青く見えた。

「二人を・・・頼む」

「承知している。新撰組の意図は掴めていないが、念のため、堀くんか佐々木くんの隊を山中宿で待機させておいてくれまいか」

「ああ、手配しておくよ」

その言葉を聞き武市が駆け出して行くと、開けた離れたままの木門を、桂はしばしばんやりと眺めていた。

おのうの元から姿を消した高杉は、白石邸から小郡の草庵に居を移した望東尼の所へ行きたいと、なかば威し気味で訪ねて来た井上に頼んだ。

「今生最後の頼みだ。聞いてもらわねばこの場で腹を切る」

そう笑顔で言われてしまった井上には、断る言葉など浮んでこない。

「ほんとに無茶な男だ」

仕方ないと苦笑した井上は、半日を過ぎたら桂とおのうに連絡を入れる。そう了承させてから、馬の用意をと出たその足で桜山の調練場に寄り、萩に宿所を置く干城隊の佐世へ伝言を出した。佐世から報せをもらった桂が早馬を出しても、高杉の元に着くまでにたっぷりと時間がかかる。半日を過ぎたら知らせると言う約束を、違える事にはならないと考えた。そして言われたとおり高杉を通り連れ出したのだ。

「黙って出てこられるとは、困ったお方です。今頃、皆が大騒ぎし

ておりますよ」

「駄目なんです」

望東尼は首を傾け、辛そうな顔で俯いている高杉の横顔に、何かと問いかけた。

「あいつの傍に居ると、俺はどうしても不甲斐ない男になってしまいます」

「つい、弱音を吐きたくなってしまうのでありませんか？」

「これは・・・あなたには敵いません」

微笑を浮かべた尼僧は、井上から手渡された薬湯を溶いている。

「望東尼様、それはもうよい」

「なりません。無茶をなさった上、投薬もせなんだとあっては、桂殿に顔向けできません」

しとしとと、一刻前から外は雨となっている。

「・・・・皆が、普通に俺を訪ねて来てくれます。小五郎でさえ、いつもと変わりなく、政の話しをしに来てくれる」

「良き事ではありませんか」

「ええ。だが、嬉しい反面、悔しい想いも募るばかりで・・・・あいつの笑顔を見ていると、どうしようもない想いが湧き出て堪らなくなります」

何を言うでもなく、望東尼は薬を溶いた湯を高杉に差し出す。

母親を前にした子供の様に、高杉は受取った湯飲みを見下ろし一気に喉の奥へと流し込んだ。

「さあ、少しお休みになって下さいませ」

「その前に、その荷物から筆を取っては頂けませんか」

指し示された荷物を振り返り、手許に引き寄せると中から道具箱を取り出し蓋を開ける。

「墨を磨りましょう」

硯箱を取り出し、竹筒にはいった水を”海”に注ぎ入れると、ゆっくりと墨を磨り出す。

「この赤間硯は、ほんに良い品でございますね」

墨を磨る手がなだらかに上下している。

「お気に召されたのなら、差し上げます」

「いいえ、結構です。まだお使いになられましょう」

その言葉に対する答えは返ってこなかった。

磨って行く墨が、水と交わり海の黒をさらに濃い黒へと染めて行く。

「不思議なものです」

「この世に不思議などございません」

「それこそ異な事です」

そうでしょうか、と望東尼は笑った。

筆の用意をし、床についた高杉に向き直るとその体を支え、ゆっくりと体を起こしてやった。

（随分と軽くなれたこと）

剛毅盛んに駆け回っていた頃の凜々しさはすでになく、わずかに感じる重みがその生を確かなものと感じさせるばかりになっている。

「お手を煩わせます」

硯の海から墨を筆に含ませ、陸で均すと、高杉は短冊の白い空間をしばし見つめた。

「真っ白な紙は、生まれたての赤子と同じです。如何様にも染められる」

「良き者たちと染め上げた人生です・・・何を迷うこともないのですが」

ふと、師である松陰の言葉が声になり耳に聞こえた気がした。

三十歳になる私の中には、四季がすでに備わり、花を咲かせ、実をつけていると信じている。それが単なる籾殻であるのか、成熟し終えた栗の実かは私の知る理ではない。

もし、同志諸君の中に、私のささやかな真心を憐んで、受け継ごうという者が居たならば、蒔かれた種が絶えることなく、穀物へ実って行くのと同じく、収穫となった年に恥じない事であろうと想う。

昨年末、白石邸で書いた上の句で、下の句が出てこないとそのままにしてあったのを思い出し、高杉は静かに筆を走らせた。

【おもしろき こともなき世に おもしろく】

ふう、っと吐息を一つつき、高杉は短冊と筆を望東尼に手渡す。

「ずっと下の句を考えておりました」

「見つかりましたか？」

「いえ。しかし、我が志を託した者が、下の句を紡いでくれましよう」

「ならばそれまで、下の句は私が詠ませて頂いてもよろしゅうございますか？」

「構いませんと。いや、嬉しい事です」

高杉が書いた上の句に続けて、望東尼は短冊に筆を走らせた。

【すみなすものは 心なりけり】

人の時に生きる者すべて、心の在りようで面白くも辛くもなる。

「これはきつい」

そう笑う高杉の顔は、望東尼のよく知る高杉晋作の顔だった。

「何事も心次第にございます」

「私は、この国の未来がどうなっていくのかと考えるのが楽しみでなりませんでした。現実は大変だというのに、です」

過去形で一息ついた男は、穏やかな表情で望東尼を見返した。

「ええ。私も楽しみにしております」

苦笑を浮かべ、困ったと頭を掻く。

「おや？」

二人は口を閉じて耳をそばだてた。人の声がかすかに聞こえた気がしたのだ。

「誰がおられませんか！」

二人は顔を見合わせた。

「まさか、井上の奴、もう知らせたのか」

「それにしては、早くありませぬか？」

望東尼は腰を上げると、廊下を静かに歩き玄関へと出て行く。

「どちら様にございましょう？」

二人の男が、出てきた望東尼を見て頭を下げた。怪我をしているのか、片方の男は抱えられた状態で立っている。

「申し訳ありません。この辺りで民家らしき建物がこちらしかなく、不躰とは存じますが、休息させて頂けないでしょうか？」

「そちらの方、怪我をなさっておいでなのでは？」

「はい。雨を避けようと街道から脇へ入ったんですが、道に迷ってしまつて。どこかに民家はと、探す途中で小さな崖に気付かず、足を踏み外してしまつたんです」

「それはお困りでしょう。一室をお貸し致しますゆえ、そちらで休まれると良いでしょう」

「ありがとうございます！」

「この家には病人が寝ておりますゆえ、この部屋からは出られぬようお願いします」

「あ、申し訳ありません」

「何をおっしゃいます、困った時はお互い様でありましょう。今手桶を用意して参りますので、お待ち下さい」

佐世の駆る馬を目の前に、和奈は武市に無断で出て来た事をあれこれ考えていた。

（やっぱ、まずいよあ）

桂にどやされる、で済めばいい方だろうと佐世は馬を走らせながら、戻った後の心配をしていた。

「なんでじつとしてないんだか！」

「あっ！？　なんか言ったか！？」

風が勢い良く後ろへ流れていくせいで、前に行く佐世には和奈の声がちゃんと届いていない。

「なんでもありません！」

井上から報せを受けた佐世は、急いで桂に伝えなくてはと屋敷を出たのだが、武市の家へ向かつていた和奈とばったり出会い、どう

したのかと聞かれて、つい高杉の事を喋ってしまったのだ。

「桂さんは疲れてるんです、僕が行きます!」

「つても、桂さんに伝えんとまずいだろ」

「善は急げって言葉があるでしょう! 高杉さんは何処へ行っただですか!」

そう迫られ小郡だと言うと、行くと走り出した和奈を一旦引き止め、共にかけけるとだけ栄太郎に伝えて萩を出た。

(桂さんに伝えるべきだったよな)

後ろから付いてくる和奈を気にしながら、栄太郎が桂か武市へ知らせしてくれる事を祈るしかなかった。

雨雲が空を覆い始め、やがて小雨が地面をぬらし始めた。後から、桂の家を出た武市が追いかけて来ているとも知らず、二人は休む事なく馬を走らせた

足の手当てを済ませた望東尼は、体が温まると生姜湯を二人に差し出した。

「このような辺鄙な場所に迷い込まれる方も、珍しゅうございます」

「不慣れな道と言うのに、先を急いで注意を怠りました」

淡々といった土方の言葉に、江戸なまりを感じた望東尼は、どちらからと尋ねた。

「京より参りました」

「京から・・・お言葉から江戸の方かと思いましたが」

「生まれは武蔵国です」

赤井はちらりと土方を見てから、望東尼に視線を戻した。

「しばらく痛むと思いますが、歩くのに差し支えはないでしょう。

雨が止みましたら、この近くの村までご案内させて頂きます」

「いえ、道を教えて頂くだけで十分です」

「では、その様に」

望東尼が部屋から出て行くと、土方は湯気の立つ湯飲みに手を伸ばした。

「なんで殺気を出したんです？」

「どんな反応をするか、見たいと思ってな」

「試したんですか？」

「尼僧が殺気に気付くなんざねえと思ったんだが・・・あの尼僧、只者じゃねえな」

土方の殺気を受けて動揺どころか、眉一つ動かさなかった。

「気にし過ぎじゃないですか？ 本当に解らなかつたんですよ」

「いや・・・病人が居ると言ってたが、俺が殺気を出したた途端、向こうから気配が伝わってきた。だからあの尼僧は質問を止めて出てったんだ」

気の一つでそこまで推測を立てられるものなのかと、赤井は驚くしかない。

「長州に入ってるんです。道に迷ったなんて、警戒されてもおかしくないですよ」

「本気で迷ったんだがな」

癪に障ると顔を顰める。

「このまま大人しく出ていくべきか、それとも・・・」

部屋の奥に居るといふ病人が気になって仕方がない。

「駄目ですよ、その足なんです。もし・・・」

桂が居たら。と、赤井は続けそうになった。

（あの人なら気配を殺して、こちらの様子を伺うなんか朝飯前だろうな）

万に一つの可能性であるが、怪我をしている土方では到底隊討ちなどできたものではない。無論、赤井は桂が居るなら討ちに出るつもりだった。桂も人間だ、一矢報いる隙は必ずあるはずである。

廊下の向こうを気にしつつ、障子をしめた望東尼は、布団の上で胡坐を組んで座って居る高杉を見て、駄目ですと肩に手を置いた。

「こちらへは通しませぬゆえ」

「この距離で俺に気付く程の男です。望東尼様では敵いますまい」

「剣ばかりが武器ではございませんよ？」

高杉の意識は二部屋隔てた先へと跳んでいる。

一つの気に覚えがあった。

（この気は厳島で・・・）

勝ではない。とすれば、残るは赤井しか居ない。

死を目前にした必然の巡り合わせならば、隠された意図を探す必要がある。

「会うてみたい」

「いけませぬ」

半着に紋はなかったが、大小を帯びているなら武士に違いない。それにあの身も凍るような殺気を放つ男は危険だと、望東尼の直感
は判断している。

「返して下さらぬか」

高杉の大小を袖に包んで抱え込んでいる望東尼に手を差し出す。

「なりませぬ」

刀を持ったまま立ち上がった望東尼が、部屋を出ようと背中を見
せる。

「戻って」

高杉の声と同時に襖が開けられた。

「！」

目の前に大きな胸があり、望東尼はゆっくりと上へと顔を上げる。

「邪魔をする」

「奥へは来られぬよう申し上げたはずです！」

望東尼を押しのかた土方は、片足を引き摺るようにして中へと入
る。その後ろから顔を出した赤井は、布団の上で座る男を見て息を
飲んだ。

（高杉さん・・・だよな？）

骨と皮ばかりとなった男は紛れもなく、高杉晋作だ。間違うはず
がないのだが、その変貌振りに驚愕するしかない。

「無礼を、まずお詫び致します」

形式上の言葉に、高杉が口端を上げて鼻を鳴らした。

「他人の家を勝手に歩きまわっておいて、無礼を詫びるもないだろう」

病人とは思えない気迫を纏う男に興味を覚えた土方は、刀を腰から抜くとその場へ座り、刃を内側にして右手へと置いた。

「改めて、無礼をお詫びしたい」

手を付いて頭を下げるその後ろに、赤井も腰を落ち着ける。

「望東尼様。その様に立っておられず、座れるといい」

「しかし、谷様」

首を振った高杉にため息を零す。

「ほんに困ったお方です」

ただ座って居るのも辛いはずなのに、そんなことはおくびにも見せず、まっすぐ自分を見据える土方を笑みを浮かべ見つめている。

「俺は谷梅之助だ。あんたは誰だ？」

「土方歳三と申す」

「ちよっと！」

変名でなく、実の名を口にした土方に赤井が慌てた。

この小郡を含む周防国は毛利家の両国である。萩往還も近くに縦断しており、長門と周防の国境ということもあり、諸隊による警備の目も厳しくなっている所だ。いわば敵陣のど真ん中に、たった二人で乗り込んでいる形であり、そこで名を晒すと言う事は危険極まりない行為と言える。

「あんたが土方か、変わった奴だな」

奇想天外な行動を看板にしている男に、変わっていると言われたくもないだろうが、土方はまだ目の前の男が高杉だとは気付いていない。

ただ、高杉の後ろにすわる望東尼だけは、その名を聞いて顔色を変えていた。

「で、これから何処へ？」

「それは申し上げられん」

「京都を守護する新撰組がお家を出てきたんだ。それ相応の事があるんじゃないのか？」

（高杉さん、何考えてんだよ）

職務質問じみたやり取りに、肝をひやひやさせているのは、自分と高杉の後ろに居る尼僧の二人だけらしいのは、当事者二人の落ち着き払った態度を見ればわかる。

「俺も随分と有名になったもんだ」

「謙遜はいらん。あれだけ京で空き放題人を斬っている集団だ。しかも、芸州では幕府側で暴れてくれたんだ。嫌でも覚えるだろう」
「そう言う貴方は、誰なんだ？ 谷梅之助って名も、どうせ変名だろう？」

「悪いが、答えてやる義理はない」

膝を一つ叩き、破顔一笑する男に、土方は不思議と怒りを覚えなかった。それよりも、豪胆にして豪快な態度に半ば呆れ返ってしまった。

「まあいい。足は崩せ、怪我をしてたんじゃあ、正座は辛いだろう。そこの後ろに座ってるおまえも、ここで取って食おうと考えてないんだ、気を楽にしとけ」

「谷様、後生ですから」

「望東尼様も、抱えている物を刀掛けへ」

「しかし・・・」

土方の右手には太刀がある。

「怪我の手当てをして頂いた恩もあります、ここでこれを抜く事はありません」

望東尼は諦めたように吐息を吐き、床の間に置かれている刀掛けへと大小を乗せた。

「では、私は軽い食事でも拵えてまいりましょう」

「ならば、酒も少し」

嬉しそうに、クイツと飲むまねをしてみせる高杉に、それはダメですと真顔で答え、望東尼はくすくすと笑いながら部屋を出て行っ

た。

「やれやれ。酒の一つも自由に飲ませてもらえん」

「病、と聞いたが」

「ああ。見ての通り、食事もままならん体だ」

縁側から入る風は冷たい。降る雨のしぶきも廊下を塗らしていると言うのに、雨戸を閉めてもいない。

土方の脳裏に沖田の顔が浮かぶ。

「労咳を患っているのか」

新鮮な空気とたっぷりの栄養。この時代、労咳を患ったものに良しとされている療法だ。

高杉はただ笑っているだけで、答えない。

「寝てた方がいいですよ」

厳島で咳に苦しむ高杉の姿を思い起こし、つい赤井はそう言ってしまった。

怪訝そうに顔を向けた土方は、赤井と視線が合うと眉を寄せた。

「てめえ」

「実は、その谷さんとは厳島で・・・」

なに？ と顔を戻す土方。

「勝殿がおまえを護衛と連れて行ったってのは、厳島か」

「ええ、まあ」

「・・・勝安房守殿と面識がある・・・才谷梅太郎に、谷梅之助ね・・・どうやら俺は、敵陣の大將を前に胡坐をかいてるらしいな」

チリツと肌に殺気を感じた赤井は、自分の迂闊さを叱咤した。ここに居るのが桂なら、土方が刀を抜いたとしても止めはしないが、高杉となれば話は変わる。

「幕府はもうすぐぶっ潰れる」

いきなりの言葉に、土方の殺気がさらに強まった。

「おまえら新撰組も、命を懸けて幕府を守ろうなんて思っではおらんだろう」

「俺が守るのは新撰組だ」

「ならとつとと田舎へ引っ込め。武士が武士たる時代は戦国の世で終わっている。この時代に”侍”は不要だ」

「まだ終わっちゃあいねえよ。刀を持つ手がある限り、俺は俺の武士道を貫くまでだ。あんたも、己の志を捨てろといわれたら、できねえと答えるんだろうがよ」

「ああ、その通り！」

（ほんと無茶苦茶な人だよなあ、高杉さんて）

「俺は御国の為に」

言葉の途中で口を押さえた高杉は、片手をつき、肩を振るわせ始めた。

「高杉さん！」

腰を上げて一歩踏み出した赤井は、しまったと手で口を塞いだ。「やっぱり、あんたが高杉晋作か」

見るうちに咳が酷くなり、ぼとりと赤い塊が布団の上に落ちた。枕元に湯飲みと急須を見つけた赤井は、それに駆け寄ると白湯を注ぎ、高杉の肩を抱き起こし口へと湯飲みを近づける。

「飲んでください！」

「ゴフツ・・・」

だが、咳の勢いが激しすぎて白湯を飲む事もままならず、咳と一緒に吐き出された血が湯飲みとそれを握る赤井の手を染めた。

「ど・・・け・・・」

高杉の手が赤井を押しつけた。

収まりを見せない咳に、土方もどう対処すべきか思案に暮れた。沖田が労咳だと言っても、ここまで悪化している訳ではない。

吐き出される血が着物や布団を染めていく。

「このままじゃ・・・あの人を呼んで来ます！」

望東尼なら、この状況をどうすればいいのか判るはずだと立ち上がった。

その時、襖がいきなり開け放たれた。

「！」

「!？」

開けたままの格好で立っているのは和奈だった。

「てめえ」

和奈は現状が解らず、赤井とその後ろで憤怒の表情を見せる土方を交互に見た。

「なんで赤井くんがここに・・・」

そう言いながら土方に視線を戻した和奈の眼に、布団の上に倒れている高杉の体が映った。「た・・・かすぎ・・・さん？」

血が布団を染めている。

後ず去った赤井の動きに誘われ、その視線が血に染まった赤井の手を捉える。

「貴様あ！」

ざわりつと、気が揺れた所で和奈は己の意識を手放した。

抜刀と同時に赤井の体が不自然な形で後方へと流れた。和奈の殺気を感じた直後、土方が赤井の背中を掴み思いっきり引き戻したのだ。

「落ち着きやがれ！」

ゆらりと体を揺らした和奈には、土方の怒声は届いていない。

「ちいっ！」

刀に手を伸ばそうとした土方の足に激痛が走った。

「ぐあっ！」

和奈の足が、土方の痛んでいる足首を力いっぱい踏んだのだ。

「くっ・・・そ」

刀を両手で持ちなおし、庭へと逃れた赤井の方へ一步一步と足を進めて行く。

「おい！ ちょっと待て！」

あの時と同じだと、背筋が凍る思いで歩いてくる和奈を見据える。

「またかよ！」

腰の刀を抜き、晴眼の構えを取る。

「よせ、赤井！」

そう叫んだ背中に波形を感じ、土方は振り向く。

「なんだ？」

馬を繋いでいたため、遅れて入って来た佐世は、状況を把握できず立ち尽す。その背後から、騒ぎを聞きつけた望東尼が入って来た。

「これは・・・なんとした事にごい、ます？」

「止めろ！」

「え？」

「村木を止めろっつってんだ！」

その直後、刃のぶつかり合う音が響いた。

「ちっ！」

土方は刀を手を取ったが、踏まれた足首は動かそうにも言う事を聞かない。

「高杉！？」

目の端で動いた影に目を向けた佐世は、それが高杉だと判り慌てて側に寄った。

「佐世・・・止めてくれ・・・」

目を庭へと戻す。

「冗談だろう・・・あれを止めるなんて・・・」

俺には出来ない。

太刀捌きもそうだが、なによりこの殺気を放つ相手の懐に飛び込み、その剣を止める技など、佐世にはなかった。

室内の動揺に我を取り戻すこともなく、和奈はただひたすら刀を振り続けている。

「こっ・・・」

止めるのが精一杯だった。

強くなりたいと、稽古を欠かした日はない。沖田を相手に、斉藤を相手にしてきたと言うのに、玖波で刀を交えた時とやら変わっていない。

足捌きが数段速くなった。それに合わせて振られてくる刀の切り返しも速くなっている。

「冗談だろ!？」

顔面に振り下ろされた刀を受け止め、鏢迫り合いとなって対峙する先に、なんの感情も浮かべていない和奈の顔がある。

(なんだ?)

あの時とは様子が少し違う。赤井はそう感じた。

「佐世!」

高杉が渾身の力を込め、立ち上がろうとその腕を掴む。その反対側から望東尼が高杉の体を支えた。

「無理だ、高杉!」

この時、止めてでも桂に報せに走るべきだったと佐世は後悔した。いつ栄太郎に託した伝言が桂の所へ届くか知れたものではない。となれば、和奈を止める手立ては自分にも高杉にもない。

「あんた・・・動けないか」

足を抑えていた土方は、刀を杖に立ち上がった。

「無茶を言ってくれる。この足で、村木を止めるなんぞ、この俺でも難題としか言えねえ」

「誰も居ないのか!」

佐世が和奈だけを連れて来てしまっているなら、その問いは無意味に終る。

再び咳き込み始めた高杉は、掴んでいた手から力を失い、その場へ倒れこんだ。

「高杉!」

体を抱え込んだ佐世の耳に、大きな足音が聞こえた。

「!」

振り返ると、隻眼の男が戸口に立っていた。

「桂木さん!」

駆けつけてきた武市は、我が目を疑った。

なぜ和奈が庭で赤井と斬りあって居るのか。そして、なぜ新撰組の副長がこの場に居るのか。ただ読み取れるのは、どんな経緯でこうなっているのか、問質す余裕はないということだけだった。

「村木を止めて下さい！」

佐世の言葉で我に返った武市は、縁側へと走った。

和奈の肩越しに、武市の姿を見つけた赤井は、一瞬、和奈の存在を忘れてしまった。

「馬鹿！ 気を殺ぐな！」

土方の声が耳に届くと共に、左腕に熱さを感じる。

「赤井っ！」

よろけた赤井の体に、刀を振りおろさんとする和奈の姿が、やけに大きく見えた。

（斬られる）

死を覚悟した瞬間、黒い影が飛び込んできた。

「あぐっ！」

苦悶のうめき声と共に、和奈の体は武市の腕に沈んだ。

九死に一生を得るとはこの事だと安堵した赤井は、熱さと傷みで疼く左肩へと顔を向けた。

「な・・・なんで・・・」

上げた腕に付いていたはずの腕は上腕だけとなり、肘から下の腕がごっそり無くなってしまっていた。

「う・・・うがあああああ！」

刀を落とし、左腕を抑える赤井は、激痛に耐えかね地面へと転がり体をくねらせた。

「布を！」

庭先に飛び降りた土方は、赤井の上に馬乗りになり、痛みで暴れる体を押さえ込む。

「早く！」

部屋の片隅に置かれた船筆筒へと望東尼が走る。

左肘で赤井の右肩を抑えその顎を掴むと、懷から出した手拭を丸めて押し込んだ。

「湯を持ってまいります」

庭へと下りて来た望東尼からさらしを受取った土方は、肩口に巻

き、一度強く引き絞ってから何度も巻きつけた。

「気を確り持てよ！」

上半身を抱き起こし、腕を心臓より上へと持ち上げる。

幕医である松本良順から、隊士が負傷した時の応急処置にと教え込まれていたのが、役に立った。

かまど 竈にかけてあったお湯を運んできた望東尼は、斬られた赤井の腕へとゆっくり掛けた。

「うぐっ！」

「我慢しろ、男だろうが！」

血を止めても、傷口を殺菌しなければそこから膿み、やがで組織が壊死を起こす。そうなれば人体そのものにも影響が及び死に至る。

「無名異と蒲を混ぜた血止め薬です」

小さな壺から手に取った膏薬を、傷口へと塗りこみ、さらしで包み再び縛った。

「近くに医者はいない？」

「俺の馬を使え。小郡宿へ行けば医者がある」

「小郡へは？」

「前の道を右に進めば街道に出る。それを左へ走ればいい」

無駄だと思ったが、切り落とされた赤井の腕をもう一枚のさらしに包み、体を担ぎ上げた土方は、庭から玄関へと体を向けた。

「待て、忘れ物だ」

武市が置きっ放しとなっていた土方の大小を持って、背後に立った。

「その首、ここで落とされたくなければとっとと失せろ」

「馬の札だけは、言わせて貰う」

片足を引きずりながら、土方は建物の影へと消えた。

「首とるって・・・えっ？」

「佐世くんが馬を貸したのは、新撰組副長だ」

「えっ・・・えええっ!？」

武市は振り返り、気を失ったまま縁側で横になって居る和奈と、

大量の吐血で意識を失っている高杉を交互に見てから、佐世の肩を叩いき、家の中へと入って行った。

其之一 第三の狐

慶応三年二月。

京を発った伊東は、水戸藩宇田兵衛の名を使い道中を進み、赤間関を経て九州へ渡ると、大宰府天満宮の参道沿いに建てられた松屋へ入った。

この松屋は薩摩藩の勤王志士や浪士達の定宿となっており、三條らと会う際には主人松屋孫兵衛が仲立ちとなり、双方の伝達を引き受けていた。

松屋は醤油醸造をする傍ら宿を営み、五卿が大宰府へ移される際の宿ともなり、薩摩落ちした月照上人もこの松屋に身を置き、「ことの葉の花があるじに旅ねする この松かげを千代も忘れじ」の和歌を残している。

薩摩藩が鼯鼠とする松屋と軒を連ねて建つ大野屋は、長州藩士の定宿である。薩長が犬猿となつてからも、五卿の元へ訪れる志士達はこの両家に逗留し、桂や大久保ら幹部の意思とは関わりなく時世を論じる場所として使っていた。

龍馬と白石邸に逗留していた中岡も、伊東が大宰府へ渡るとの情報を白石から得て、一度会い真意を確かめたいとこの大野屋に入り、三條の許を訪れていた。

「今この時期に新撰組幹部が動こうとはのう」

「薩摩より、新撰組の動きに変化があるとは聞いていました。長州征伐によって幕府の権威回復へ動くかとも思ったんですが」

「会津藩主松平殿の辞職申し出で、立場を危惧しての西下でもあるまい」

「ええ。ついでには僭越ながら、この中岡慎太郎にも同席する許可を頂きたく拝謁をお願いした次第で」

三條は一も二もなくこの申し出を許可した。

「ありがたい」

「岩倉卿も倒幕の意向を固めたと聞く。無論、その裏で薩摩が動いておるは確かであろう。して、土佐はどうするのじゃ？」

「参政である後藤殿と、すでに倒幕をと旗揚げしている乾殿と佐々木殿が動かれております。同じく参政の福岡孝弟殿の要請を受け、薩摩の西郷さんが土佐へ渡られます」

ほう、と、扇子持った手で口元を隠した三條は、なにやら思い悩む顔で視線を落とした。

「土佐の大殿は、一筋縄では説得し切れぬお方ではないか？」

「・・・それについては、否、とは申し上げられません」

中岡の危惧はそこなのである。

「中岡、そちを前に言うのも心苦しいが、土佐の動向、今後注意を怠るでないぞ」

「心得ております」

返事を今か今かと待ちわびていた伊東は、引見の知らせが届くと、すぐさま袴と羽織袴に着替え延寿王院へと足を運んだ。

聖人君子たる容貌を兼ね備えた伊東と、中岡が始めて会ったのはこの時である。

「引見を賜り、心より恐悦至極と存じます」

三條の下手に座る中岡を見た伊東は、内密に陳情しい事があるので人払いをしてほしいと願い出た。

「これに控えるは余の随臣じゃ。他は下がらせておるゆえ、気兼ねは無用と申し伝える」

上げられた伊東の顔が、下段の端に座す中岡へ向く。

一瞬、怪訝そうな表情を浮かべた伊東だったが、一転して笑みを浮かべると朗々とした声で語り始めた。

「恐れながら申し上げます。私は勤王の志を芯とし、朝廷の今後を憂いこの地へ参りました」

宇田兵衛は変名で、新撰組参謀伊東甲子太郎である事。新撰組に入るに至った経緯を説明し、近藤たちとは攘夷という点で結びつきがあるものの、勤王派である自分とは意を違える相手であると、新撰組における自分との矛盾点を説いた。

「新撰組と申せば、市中警護の勤めは納得すれど、洛中に於いて志士らを狩る集団ではないか。斯様な者らを束ねる参謀職にあるそなたが、何ゆえ大宰府へと来られた」

「京の守護に就いておりますとは言え、闇雲に幕府の敵と志士を斬る所業に、私は納得して居らぬ所存と申し上げます。本来、京に残留する事となりました折、公武合体に基いて攘夷断行の助力をする目的を掲げたはず。それが今日、その攘夷もままならず、京守護職の庇護の下に、不逞浪士ばかりでなく攘夷を志とする者達を問答無用と斬り捨てて居るのは事実。しかし、新撰組と名を掲げる者すべてが、現状を良しとはしておりませぬ。ゆえに私は、隊内の風紀、思想を変革すべく尽力して参りましたが、力及ばず今日に至っております」

「参謀の力をもってしても、新撰組の意向を替えられぬと申すか」
「局長はさておき、厄介となりますのが副長職に就いております土方歳三と申す者にございます。例え局長をこちら側へ引き込む事に成功しても、必ずやこの土方が邪魔にと出てまいりましょう」

会津藩だけでなく、膝を交える各藩の要人と相席し、意見を交わすうちに近藤の態度が変化し始めた。煽てられれば煽てられただけその氣に名なってしまうのが近藤の短所であり、長所であるのを、伊東は見逃さなかった。論をだせば嬉々として話しに乗ってくる。論を以って説けば動く男というのは、市中を駆け回るより、幕臣達との時勢を語る方を優先させている近藤を見れば確かと言えた。

思案に暮れていたところに、松平容保の辞職願いである。これを好機と捉えた伊東は、新撰組の制圧に動こうかと考えたのだが、土方がいてはどんな理由を出されて切腹を切り出されるか知れたものではないと、二の足を踏んでいた。

そして伊東は、一つの賭けに出たのである。

「不逞浪士の狼藉が後を絶たぬのは確か。京の守護は必要でありましょう。ならば」

と、伊東は膝を一つ突き出した。

「それとは別に、勤王を掲げる同志を以って、朝廷の御守護に就きたい所存にございます」

「朝廷の守護とな？」

意外な言葉に、三條は思わず中岡へついと視線を向けた。無論、中岡本人も、伊東の言葉に驚いている。

「はっ。御所周辺の警備は見廻り組が付いておりますが、これとて幕府配下の組織であります。朝廷からの命と、幕府を無視して動く道理を持ち合わせてはおりませぬ」

「ふむ」

「今の私の理念とするのは、一和同心、国内皆兵、開国による強国樹立にございます。公議による朝廷中心の政体を作り、日本を強国となす。ゆえに、勅命で動ける組織の設立は必要不可欠と考えました」

新撰組が荒れるぞと言った大久保の言葉の真意を、中岡はこの時漸く知る事となった。

薩摩とこの伊東は、なんらかの接点を持っている。でなければ薩摩藩の定宿に、新撰組幹部が入れるはずもない。松屋主人が逗留を拒んでいないのは、それ相応の手引きあったからに他ならないのだ。（新撰組幹部に食い入るなんて、大久保さん、やる事が大胆すぎるでしょ）

間者ならば薩摩だけでなく、長州や芸州、土佐も潜り込ませているが、幹部となると話しは別になる。まして薩摩藩はまだ幕府寄りなのだ。幹部に接触し、事が露見すれば薩摩も朝敵と、会津藩によって政界から締め出される危険性がある。

「ここへ参ったのは、斯様な事をわざわざ述べるためではなからう？」

「御陵を守護し、幕府の命ではなく朝廷の命によって動く組織を作り上げるため、御陵警護の勅命を賜るよう、お力添えを頂きたい所存ゆえ参りました」

京を追われた三條に、裏工作を頼みに来た、と伊東は堂々と言い放ったのだ。

しかし、と中岡は伊東を疑心の目で見ざるを得ない。朝廷への裏工作ならば、在京している反佐幕派の公卿に渡りを付けるほうが早いと思える。それをわざわざ大宰府まで足を伸ばし、蟄居の身となっている三條へ頼みに来た。

「そちの言い分は、余もよく解った。だが、良しとここで手を差し出す事は叶わぬ。論議を経て後、追って沙汰を出すゆえ、暫く大宰府にて羽を伸ばすが良かろう」

新撰組幹部が幕府に背を向け、朝廷に組したいなどと、これまでになかった事である。三條は即断を下すのは得策でないと考えた。

「はっ。私も色々な者と論議を交わしたいと思っておりました。そちらの随臣の方ともこれ然り」

にっこりと笑みを浮かべた伊東に、ある人物と同じ臭いを感じた中岡は、内心大きなため息を吐いた。

意識を失ったままの高杉を動かすわけにもゆかぬと、望東尼に看護を頼み、佐世を桂の元へ走らせた武市は、別室で眠る和奈の傍に座っていた。

なぜ赤井と斬り合うことになったのか、その場に居なかったので望東尼も佐世も解らないと言った。

「しかし、沖田の名で来るとはな」

偽名でなく沖田として赤井が来たのは、本人が手形を使えなかったからだと判る。沖田の容態もまた、悪いとみえた。

あの咳。と、武市は労咳の症状の一つであるそれを思い起こす。沖田も高杉と同じ病を患っている。

「あの様子では、刀をもてなくなった時、どうなることやら」

今は沖田の心配をしている場合ではない。

和奈が土方らを見て”変貌”したのなら、目を覚まして問質しても記憶に残っていない可能性がある。当事者となった赤井か土方に聞きたくとも、追い出した後ではそれも出来なかった。

「もっと早くに、刀を取り上げておくべきだった」

そう言っても後の祭りにしかない。しかも、和奈は赤井の腕を斬り落としてしまっている。その事実を知れば、割り切っていると口にしても、どんな反応を見せるか解ったものではないのだ。加えて高杉の様態の悪さがある。

（あれだけ吐血しては・・・）

このまま意識が戻らず、この世を去る可能性とて皆無ではない。幕府の征伐が失敗に終り、薩長が連なり動き出そうという時期になって、高杉という人材を失った後の危機感が武市の脳裏を掠める。高杉もそれを十分理解しており、和奈に志を託すと言ったのではないか。

（馬鹿な）

それは有りえない。いくら松陰の魂が宿っているかも知れないと言っても、他の者が納得するはずもない。反対に、松陰に対する冒涇だと騒ぎ出す者がでる恐れがある。

「くくっ」

笑いともならない声が出た。

剣術の事は武市が責任もって考える。そう龍馬達に言った自分を呆れるしかない。考えても考えても答えなど出で来ない。理が武市の知る常識から逸してしまっている。

「ん・・・」

布団の中で和奈の体が動いた。

「気がついたか？」

ゆっくりと開かれた眼を覗き込む。

「あれ・・・桂木さん？」

「なぜ居るのか、か？ 佐世くんが村木殿に伝言を託していた。それを俺が受取ったからだ」

佐世と馬を駆り、小郡へとやって来た。それから……。

「赤井くんが居て、土方さんも居て……」

布団が真っ赤な血に染まり、その中に倒れていた高杉の姿が目の前に浮ぶ。

「高杉さんは！？」

「望東尼殿が看ておられる。起きれるか？」

「じゃあ、無事なんですね！？」

「ああ。斬られたわけじゃない。刀傷はどこにもなかった」

「赤井くんが……斬ったんじゃない……そう、なんだ……なんで、赤井くん達がここに……」

「道に迷い、ここへ来たのは偶然だったとしか解らん」

「二人は？」

「目的が高杉くんではなさそうだったのでな、すぐに追い出した」
そうですか。と答える和奈は少し俯くと、布団の上に乗せた手を固く握り締めた。

「己を制し力を己の物と成せ。大久保さんはそう言いました。なのに、自分の力を制するどころか、我を忘れて刀を振るっている……私は……赤井くんの腕を……っ！」

両手で顔を覆い、肩を震わせ嗚咽を堪える和奈の背中を、武市は胸へと抱え込んだ。

「覚えていたか」

こくりと首だけが動く。

変貌したのではない。血に塗れた高杉を見て、和奈は赤井が斬ったとそう判断し、赤井に向けて刀を抜いたのだ。

「新撰組と俺達の関係を考えれば、おまえの取った行動は仕方がないと言えよう」

「でも……腕が……」

「刀を手にした時から、斬るか斬られるかの狭間を生きる事になる。」

腕や足だけでなく、己が首を斬られる覚悟をしておかなければならん。今回は奴の腕だったが、この次はおまえの腕がなくなるかも知れん。あの男も、それは十分承知しているはずだ」

それでも、剣士にとっての腕は命とも言える。片腕で刀を扱うのは容易いことではないと、和奈にもよく解っていた。

「袂を分かっている相手だと、仕方ないと受け入れてくれ」

優しく語りかけるように耳元で囁いた武市は、その首筋に顔を埋めると今一度、和奈の体を強く抱きしめた。

小郡宿に着いた土方は、医者を求めて駆け回り、やっと一件の町医者の家を聞き出し駆け込んでいた。

「残念ながら、お持ちになられた腕をつける医術は、私にはございません」

さらに包まれた腕を差し出された土方は、悔しそうに半分血に染まったそれを受取った。

「止血と、傷口の化膿を抑える薬を塗っておきました。応急処置をされていたのは良かった。もし斬ったままの状態で来られていたら、肩口から腕を斬り落とす事になりましたよ」

痛み止めを処方すると、頭を下げた土方の肩を叩いた後、部屋から出で行った。

座敷の上で、額に脂汗を浮べ、時々苦悶の声を上げる赤井の側へと座る。

「巡り合わせが悪かったな」

因縁という言葉で繋がれた間柄である、笑うしかない。

こうなっては伊東を追うどころの話ではない。

「くそっ、村木さえ来なけりゃな」

恐らく高杉とは、話をするだけに終わっていたらとうとう土方は思う。今回の目的は志士ではなく伊東だ。それに高杉を捕縛しても突き出す先が長州領では、返って己の身が危険となる。長州を出たとして

も、芸州だ。長州についた藩だけにそこも無理となれば、あとは四国へ渡るか、兵庫あたりまで連れて行くしか術は無いのだ。

「当分ここから動けねえか」

持っている路銀も治療代を払うほどの余裕はない。となれば金銭を工面する必要がある。

脇差を抜き、刀の柄を外してから鐔を外した土方は、赤井の事を頼むついでに、鋸り職の居る簀屋がないかと医者に尋ねた。

「三原屋まで行けば、あった記憶が。ああ、でも確りと在るとは申せませんが」

「ここは津市じゃないのか」

本陣は三原屋がある下郷津市で、ここは脇本陣となっている茶屋の在る東津町だと医者は説明した。

文久三年八月十九日の事。

長州が赤間関において、米国所属の商船を砲撃する事件が起り、幕府はこの砲撃の責任を詰問するため、幕臣中根市之丞ら門責使として赤間関へ使わせた。

門責使の来訪を知った緒隊士に属する者達が、三原屋に停泊していた中根らを急襲し、留守にしていた中根は難を逃れ、随行していた鈴木八五郎ら三名は刃に倒れた。襲撃を知った中根は、海路を使って江戸へ戻る事を考え中ノ関へと逃げたが、二日後になって隊士達に見つかり暗殺されしまった。

後に起こる第一次長州征伐の要因の一つとなった事件である。

「簀屋と申されると、ああ、その手の物を？」

握られた鐔を目ざとく見つけたのだ。

「医者にかかろうとは思ってなかったんでな、持ち合わせが無い。これを売れば足しになるかと思ったんだが」

「ならば、わざわざ津市へ行かれることはありません。それを御代として頂いておきますよ」

「なんの価値もつかねえ鍰かも知れんのか？」

「その時は運が悪かったと、今後の教訓に致しますよ」

この申し出に、桂に赤井が斬られた後、治療代も請求しなかった医者の事を思い出した。あの医者が長州人なら、この国の医者は気前良しでお人よしばかりだと、土方は持っていた鍰を医者へと差出した。

腕を組み、涼しげな顔の伊東は、落ち着かない様子で座る中岡の前に座していた。

「やれやれ。そう気張られてしまったら、できる話しもできないでしょう？」

「・・・・・・」

目の前に座るのは新撰組幹部なのだ。いくら土方達と思想が相異なると言っても、その事実は無くならないのである。

「私はね、今の新撰組を良しとは考えてはいないですよ。御門がおられる京の都の治安を守るのは大義。新撰組がその大義の下で京を守るのならばなにを憂う事もないのだが、実情は君の知って居る様に、尊攘を掲げた志士達の捕縛だ」

「新撰組幹部であるあなたが、この度大宰府へ来た由はわかりました。ですが、これまでを考えると、そうですか、ではお話しを伺いますとは申し上げられません」

「君の言いたい事は重々承知している。だが、私がここに居る事実を少しは考えてもらいたいねえ」

松屋に居る事実。

（もう、大久保さんてば、一言でもいいから教えておいてくんなかったのかなあ）

伊東と渡りをつけているなどと、例え中岡が相手だとしても大久保にとっては腹を割って話すわけには行かないだろう。中岡の口から桂に漏れる事になれば、ややこしいどころか、長州から反感を招

きかねない事態になるのだ。

「私は水戸出身でね。敬天愛人の想いは心の奥底に染みこんでいる」
中岡は言葉の意味を測りかねた。

「幕府は朝廷があつてのもの。君達もそう思っているだろう？　だからなんだよ、私が新撰組という組織にほとほと困っているのは。

ああ、いや、幹部には、だね」

「あなたの真意が俺にはわかりません」

「んー、困ったねえ」

それは中岡も同じ気持ちだった。

「私が述べた言葉に偽りは無い。新撰組が会津藩と共に幕府存亡の片棒を担ぐのであれば、志を曲げてされに追従する義理などないと
言っているんだけどね」

「ぶっちゃけましたね・・・」

「ああ、そうだね。うん。これは困った」

にっこりと笑う伊東を見て、絶対に困ってなどいないと中岡は呆れるしかない。

「だから、私は三條公を頼りに京を出て来た。すでに意志を変えた新撰組と共に心中する気など有りはしない。土方くんと君達を比べれば、重きは君達にある。しかし、武力に訴える術を良しと受け入れてはしない」

武力を以ってと望む中岡にすれば、伊東はやはり異を違える人間であるのだ。

「然りと雖も、時にはこれまた必要でもあると思う所存ゆえ、そう難しい顔はなしにしたまえ」

「はぁ・・・」

「このまま幕府が力を保つのは無理至極であろう。時局の変転を悟りきれず、幕府の命と人を斬る所業に落ちるは愚の骨頂と言うもの。武士でない者に国事を考えよと説いても無駄と私は悟った。武士が偉いと言うのではないよ？　掃溜めに蹴落としてやりたい者もいるからね」

「掃溜めって・・・」

「政に関わるのであれば、時を見る才も必要だ。町人にも百姓にも勿論そういった才ある者もいる。が、その者達が国事に意見を申し述べる世ではないのも、これまた現の理」

「伊東さんが考えるところは、つまり」

「ふふっ。皆まで言わずとも、私の腹を読める男であると、聞き及んでいるんだよ、中岡くん」

（大久保さんったら！）

「誰にですか、とは怖くて聞きたくもありませんが、伊東さんがそのつもりで動かれるのであれば、三條殿と共に尽力させて頂きます」
「物分りが良くて助かるよ。あの男に君の爪の垢でも煎じて飲ませてたい気分だ」

絶対に土方は飲むまいと苦笑せざるを得ない。

「では、漏れぬよう細心を払って周旋にご助力させて頂きます」

「これは三條公と君だけに留めておいてくれたまえ」

「承知しました」

松屋に留まり、大宰府に滞在しているほかの志士達とも国事を論じ、朝廷への根回しについて、力を尽くすとの言葉を三條より引き出した伊東は、晴れ晴れとした顔で京へと戻って行った。

其之二 御陵衛士

福岡孝弟と小笠原唯八の招きに応じ土佐へと入った西郷は、前藩主山内容堂との謁見の席で、京にて雄藩四侯会議を開き、長州藩の今後と兵庫開港を巡る問題を中心とした国事を議する必要があると説いた。

福岡だけでなく、後藤からもすでに四侯会議は是必要と注進を受けていた容堂は、薩摩藩藩父島津久光、前越前藩松平春嶽、前宇和島藩伊達宗城が上洛するのであれば、自分も上洛して良いと西郷に確約したのである。

西郷の土佐入りを受け、小松帯刀と京に戻った大久保も松平春嶽へ会議への出席を説き、許諾を得ていた。伊達宗城も、薩摩の藩父島津久光が上洛するのであればとこれを快諾している。

大宰府を後にした伊東は、大宰府の他を周る事なく筑前（福岡県）を後に小郡へ着くと、本陣のある津市ではなく、参勤交代の折に使われる脇本陣に宿を取った。

その後ろを追って来た影が二つ。

一つは新兵衛と、もう一つは以蔵だが、二人とも肩を並べての尾行ではない。

（さて、どうする？）

このまま新兵衛に悟らぬよう付けて回るか、それとも姿を見せて反応を見るべきか。

新兵衛の足が止まった。

（気付かれたか？）

左右に首を振り、何かを探しているようにも見える。

物陰に身を潜め、気配を悟られぬよう、目だけで新兵衛を追う。

新兵衛が路地へと消えた。

「！」

見失うまいと飛び出した以蔵は、新兵衛が消えた薄暗い路地へと駆け込んだ。

「っ！」

暗闇に気配を感じ、足を止める。

「付けられる覚えなどないんだが」

（ちっ！）

「腕が落ちたな、岡田くん」

「その名を口にするな」

「ああ、これは失礼。君が萩を出て来ていると言う事は、桂殿の指示か、それとも桂木殿かな？」

「俺の独断だ」

しっ、と新兵衛は口元に指を立てると、静かに以蔵の横へと立った。

「この街に土方が居る。ついでに言えば、沖田の名を使った赤井という男もな」

「なに？」

くいつと顎をしゃくり、表通りを見ろと促す。

羽織こそ纏っていないが、その顔は見紛うことなく土方だ。

「伊東と待ち合わせか？」

「それは無い」

即答した新兵衛は、後で説明すると小声で言い、通りを歩いて行く土方を視線で追った。

嫌な気が纏わり付いてくると、土方は気を苛立たせた。

まさか村木が、とも思ったが、それならばすでに出てきているはずだろう。小郡に居るのを知る者はあの場所に居た者だけだ。片目の男の様子から、尾行はないと考えられるし、もう一人の男もそれだけの技量を持っているとは考えにくい。

「気にしすぎか」

そう呟いた土方は、前から歩いて来る男の姿を見て、さらに苛立ちを増した。

相手もどうやら自分に気付いたらしく、一瞬止まった足を前へと出して歩み寄って来た。

「まさか、ここで君と会うとは思っていませんでしたよ」

「あんたの護衛を、近藤さんに頼まれてな」

「ほう。それで副長である君がわざわざ来てくれたのですか？」

疑う素振りも見せず、嬉しそうに両手を合わせた伊東は、土方を自分の宿所となる旅籠屋へ誘った。

「嬉しい誘いだが、怪我人を抱えてるんで遠慮させてもらう」

「怪我人？ 隊士ですか？」

「赤井だ」

「赤井くんが？ それはまたどうして」

街道を進む途中に出くわした長州人に、土方だと知られ斬り合いになったと、和奈や高杉達の名を伏せて事情を話した。

「ならばなおの事、私達の旅籠屋へ来た方がいい。帰るにしても君一人では大変でしょう？」

「まだ動かせる状態じゃない。俺達の事はいいから、あんたはさっさと京に戻ってくれ」

「そうは参りません。私は参謀ですよ？ 隊士が怪我をしていると言うのに、放ってなど帰れるものですか。いいですか、土方くん。これは参謀としての命です」

それにと、帯に差してある刀を見下ろし、

「どうやら帰りの路銀にも困っているようですしね」

と、意味ありげに笑った。

斬りかかりたい衝動を押さえ、伊東の宿泊する旅籠屋へ赤井を移した土方は、窓から通りを眺めている伊東の背後へと座った。

「いけませんねえ」

背中に向けて殺気を放っている土方に、顔を戻すことなく伊東は喋り始めた。

「一つお聞きしたい。赤井くんは勝安房守殿の許しを得て、新撰組に復帰し、君と同行して来たのですか？」

この問いに、土方はすぐさま返答する事ができなかった。

「君が私の護衛にと、京を出た。これは、良し、としましょう。だが、新撰組を脱退し、勝殿の預かりとなっている彼を連れて来たのは、悪い、としか言えませんよ。しかも、彼は手負いの身となってしまった。加えるなら、武士の命ともいえる腕を失ってね」

どんな言葉を伊東に向けたとしても、それは言い訳になる。だから土方はあえて答えなかった。

「勝殿もさぞやご心配なさっているでしょう。急ぐ旅ではありませんが、明日の朝ここを発ち、次の宮市宿で、医術の心得がある者を雇います」

「あんた、それ本気って言ってるのか？」

「え？ ええ。大真面目ですが、なにか問題でも？」

なぜ怒り顔になるのか解らないとでも言う様に、伊東は首を傾げて見せた。

「宮市天満宮内にある九社の一つは、長州藩鋭武隊の宿所の一つだ。それを知ってて言ってるのか？」

変名で水戸藩から手形を交付されている伊東はともかく、土方と沖田は名も変えず会津藩が出した手形で京を発っている。いくら休戦協定を結んでいるとは言え、新撰組と知れば一騒動起こるのは間違いない。赤井を抱えての大立ち回りなど、さすがの土方でもおいそれとできたものではない。

「なにも脇本陣へ泊まろうと言うものではありませんし、私が医者を探すのですから問題はありませんよ」

水戸藩は尊王攘夷を掲げ、井伊直弼を暗殺した浪人を生んでいる。その水戸藩ならば、会津藩よりも詮索される危険は低くなる。

伊東としては、ここで土方に恩の一つでも売っておきたい腹がある。

「医者雇えたら、海路で大坂へ上ります。北前船に乗れるよう手

配致しますね」

北前船の寄港する三田尻の中ノ関港には長州海軍局があると、土方は頭を抱え込みたい気分に襲われた。

翌朝、伊東の得意げな顔を我慢しつつ、赤井を抱えた土方は小郡宿を出立した。

宮市宿で医者を見つけ、三田尻へ出ると北前船の一つと交渉した伊東は、朝と変わらぬ満足気な顔で土方の前へと戻って来た。

「ほらね。何を危惧するものでもありませんよ。さあ、赤井くんも辛いでしょから、さっさと船に乗ってしましましょう」

そうして土方達は無事、海路で大坂への帰路についた。

船を見送るように、港が見える海岸の崖に立っていた以蔵は、後ろに立つ新兵衛を振り返った。

「君は相変わらずだな」

「なにがだ？」

「大方、俺が大久保卿の命を受け、伊東らの動向を探っていたと思つての尾行だったんだろ？」

「違うのか？」

くくっ、と新兵衛は笑う。

「俺の主は今でも大久保卿、それに変わらない」

以蔵の手が柄にかかる。

「桂殿と武市殿が心配するのも解るところなんだが、長州に身を寄せているのは俺の意志だ。庇護を受けている以上、役に立たねばならん」

「・・・で？」

「命を出すのは、なにも桂殿だけではあるまい」

「なに？」

「俺が動いたのは高杉殿の意向によるものだ。貴殿が案ずることはない」

「高杉さんが？」

「目と耳となるのは俺の得意とするところ。その腕を買ってもらった、そう言うことだ」

それでも以蔵の目には殺気が宿ったままだ。

「やれやれ。いつまで経ってもそれではいずれ、死ぬことになるぞ」
「命を永らえようなどとは思ってはおらん」

武市のためと死ぬるのであれば、以蔵にとってそれ以上の恩返しはない。

「武市殿がおまえを袂から離れた意味を、もう少し足りないその頭で考えてみる」

「足りないだど!？」

鯉口を切った以蔵に背を向けた新兵衛は、ふりふりと手を振りながら松林の中へと歩き出す。

「おまえは萩へ戻るんだろ？ 俺は赤間関に戻らねばならんから、ここで斬り合いをしている時間はない」

「くそっ！」

柄を鞘へと押し、収まらない怒りを抱えたまま、松林の中へと走り出した。

伊東より遅れて大宰府を出た中岡は、陸路を使って京へと入っていた。

目的は公卿土御門晴雄つちみかど はるおと正親町三条実愛おおぎまち さんじょうさねなるに、三條からの密書を届けるためである。

嘉元元年に、従三位参議として公卿に列した正親町三条実愛は、日米修好通商条約締結の勅許阻止を実現させた廷臣八十八卿列参事件に加わった。薩摩藩の掲げる公武合体を支持し、尊王攘夷派により失脚となっていたが、八月十八日の政変で復帰を果たすと、再び薩摩藩と接触するようになる。大久保や岩倉具視らに加担する公卿の一人である。

土御門晴雄は、徳川家康によって朝廷への復帰を許された土御門家陰陽道の当主で、元治元年に従三位となり、正親町三条実愛を通じて、倒幕派公卿に接近している公卿である。土御門家は改暦の権限を巡り、幕府の天文方と対立していた経緯を持つ。現在、改暦の権限は幕府から土御門家に移り、土御門家は陰陽師頭として朝廷の主要な位置に座している。

土御門家は、新撰組の屯所となっている西本願寺の西側、七条大通を越えた梅小路 に大きな邸宅を構えている。

土御門晴雄に謁見が叶った中岡は、三條の書いた親書を差し出していた。

「ふむ」

書簡に目を通した土御門は御簾を潜り、様子を伺う目つきで座る中岡の前へと下りて来た。

「三條公の申し出はよお解った。私とて朝廷が政権を担うのは本意とするところ。過去のいざこざもあるさかいなあ」

「それでは」

「中岡はん、そう急ぎなはん」

土御門はさらに膝を中岡の方へと近づけて来た。

「正親町三条殿は以前、薩摩と繋がってはった。その薩摩は幕臣を抱える身や。それは解ってはるんやろ？」

声を小さくし、扇子で口を隠したまま、中岡の左耳へと囁いた。

「・・・・・・」

何もかも知ってますと言わんばかりの眼差しを向けられ、中岡はごくりと喉を鳴らした。

「あかんなあ。私がこうして御簾を出たんやで？」

顔を戻した土御門は、扇子を畳み、二三度手の平へと打ち付けた。

「・・・・私から言えるのは、薩摩も現状を良しとしてはいない、と言う事だけです」

「せやから岩倉殿も、影でうろちよろしとりはりますんやろ？」

「うろちよろって・・・」

「吉凶を占い、天の意志を伝える事だけが陰陽師やおまへん。時の流れを見定める眼も持たなやっていけまへんのや」

「土御門公のお人柄は、三條卿よりお聞きしております」

「一緒に座り込みした仲やしなあ」

けたけたと笑う土御門を、中岡は困り果てた顔で見上げた。

「薩摩が動き、長州も何かしら思う所ありて力を蓄えてるようやし、なにやら奇妙な星も二つ降とるし。それらの行く末も見とうなった」

「奇妙な星？ 厄災とかですか!？」

これでもかと言うくらい大きな吐息をついた土御門は、中岡から座る距離を取った。

「厄災となるかどうかは、まだ私にもわからへんのや。まあ、とりあえず今は目先のことを片付けなあかん」

「はあ」

「三條殿の申されたこの件、この土御門晴雄が受けさせて頂くよって」

「あ、ありがとうございます」

何か納得しきれないのだが、こちら側で動いてくれるとの言葉に、中岡はとりあえず胸を撫で下ろした。

「そないな顔せんでもええ。私に助力をと申し出てくれたのは正解やで。なんせ、私は陰陽師やし」

「えっ・・・？」

「思惑通りに事が運ばんようなら、奥の手を出すさかい、安心しなはれ」

「奥の手え!？」

血相を変えた中岡を見て、土御門の笑いは更に高くなった。

「冗談が通じんお人やなあ。夭折を目的に呪詛など、平安の世ならいざしらず、できる思うてはりますのんか？」

「陰陽師頭に就く人の言葉です。って、平安ならできたんですか!？」

「奇特なお人やなあ」

「ううっ、遊ばれてる感じがする」

「ほなら、正親町三条殿の所へ行きましょか」

「は？」

立ち上がった土御門は、閉じた扇子を開くと口を隠し目を細めた。
「なんや、中岡はん。まさか、つてもなく正親町三条殿にお会い出るきるなんて、思っておりましたんか？」

「えっと、その三條公からの親書もありますから」

「もう少しは三條殿の采配するところを考えなはれ。先にこの私へと中岡はんは命じたんは、親書だけでは正親町三条殿への目通りなど叶わぬと考えられたからやおまへんか」

「あ・・・」

くすくすと楽しそうに笑う背中を、中岡は呆然と見上げた。

「いけすかん男なら、この私がわざわざ骨を折ることもあらへんけど、中岡はんは面白い人や。気に入ったさかい、一緒に伺わさせて頂きましょ」

「そ、それはありがとうございます。あ、でも、いきなり出向いても宜しいのですか？」

「なに、すでに使いは出してあるし、心配いりまへん」

「いつ出したんですか!？」

親書を手にしてから、土御門は一度も席を立っていない。人を呼んで使いを出せとも言っていないのだ。

「中岡はんは陰陽師の前に座っていらしますのやろ？」

「あれ？ えっ？」

混乱をきたした中岡は、土御門の言葉を考え纏めることなどできなかった。

「やはり奇特なお人や」

土御門の中岡に対する人物像は以後も、奇特な人、のままとなった。
「狸のように呆けた顔はやめて、さっさと用事を済ませてしまいま

しょ」

楽しげに歩いて行く土御門の後を、狸は酷いと、中岡は肩を落としたまま追いかけた。

正親町三条の邸宅は、堺町御門前を東に折れ、鷹司殿の壁伝いに寺町通りに面した三條西殿の一つ手前にある。通りを一つ南に隔てたところには、蟄居となっている岩倉の屋敷だ。

「遠路ご苦勞であつたな。余が正親町三条実愛である」

平伏する中岡を後ろにした土御門は、優雅な動きで前に手をついて頭を下げた。

「卒爾な謁見の申し出にお許し頂き、誠にありがたき所存にございます」

「して、余に用というのは？」

「は。後ろに控えますは、京より追放の身となつた三條実美公の随臣にございます」

「三條殿の？」

中岡は顔を上げないまま、さらに頭を下げた。

「三條殿は 如何なる由があり、余の元にその者を遣わせたのだ？」
土御門は御簾の前に親書である書簡を置きに、膝を這わせて前へと進み出た。

「これに由が書かれておりまする」

そう言うのと、前を向いたまま元の位置へと下がった。

側仕えの者が脇から進み出ると、書簡を取りそつと御簾の下から中へと滑り込ませる。

カサカサと、紙の音だけが響く。

「・・・むう」

沈黙のまま書簡に目を通していた正親町三条は、側仕えの者に下がるようにと命を出した。

「よもや、このような事に相なろうとはのう」

「如何にございましょう？」

「土御門、そなたがここにおると言う事は、この親書の内容を受け入れたからに他ならぬのだろう？」

「御意」

ふむ、っと正親町三条は御簾の奥で声を出した。

「時局を見誤るは、今後の朝廷にとってよろしゅうとは言えませぬ」
「占いで、退けるは凶とでも出たのか？」

「それに頼る必要はございません。正親町三条殿も、時勢を見据えられておられるのではございませんか？」

土御門の言葉の裏に言わんとする意図を悟り、気配が動いた。

「洛北の御仁に、京落ちた御仁と来たか」

ほう、と土御門が吐息に似た声を出す。

御簾の下から扇子の先が出てくると、正親町三条がそれを潜り二人の前へと姿を見せた。

「近こう」

扇子を持った手で、土御門とその後ろに居る中岡を招く。

「土御門家も、幕府との因縁は多き事と承知している」

「左様。徳川幕府が栄華を誇っていた時代は、とうに失われております」

「言うのう」

「今の幕府は徳川の名を守り、権威を維持するために右往左往するばかり。その様な武家の集まりにこの国を任せてはおけませぬ」

「然り。その上で問う。そなたの発言、信じるに足る確証は何処に？」

「ございません」

あっさりと笑った土御門の前に、中岡だけでなく正親町三条までもが目を開いて首を後ろへ下げた。

「公卿の中には、幕府に対し遺憾の意を持つ者が多くおります。これらの者の意志を取り纏める必要もございますれば、手始めにこの件で動くのは道理と思った次第。それ以外、私の意を示すものはありません」

気が気でないのは中岡である。

「余が一言、否、と言えば土御門の立場は危ういものとなろう」

「ああ、そうでございますね」

今気付いた風で、土御門が眉間を狭める。

「まったく、しれっとしおって。わかった。そなたも同意しておるのであれば、朝廷のため、尽力致そうではないか」

その正親町三条の言葉で、中岡はつい安堵の息を漏してしまった。「くつくく。そなたの顔、なかなか見ものであったぞ。気苦労をかけた様ゆえ、この土御門がそなたを持成し致すと申しておる。甘んじて受けられるがよろかろう」

「いやですよ、正親町三条殿。それではまるで私がこの者を困らせていたみたいじゃありませんか」

「似たようなものであろう。ああ、そうそう。そなたの名を聞きそびれておったな。遠慮はいらぬがゆえ、名を置いて土御門の邸宅へ参られるがよい」

親書には三條の随臣として赴く中岡の名が記されていたのだが、それでも正親町三条は直に名を聞き、納得した後、二人を送り出した。

土御門と正親町三条は、中岡が辞去した翌日に朝議の場で御所守護の必要性を説き、反幕府の意ほ持つ者たちの賛同を得て、幕府側に立つ公卿達への説得を成功させた。そして京へ伊東が入るよりも早く、朝廷は御所を守護する組織として、御陵衛士設立の沙汰書を下したのである。

伊東が清華家西園寺家の猶子、戒光寺住職堪然と既知の間からと知った正親町三条は、沙汰書を戒光寺へと届けさせた。

清華家は最上位摂家に次いで大臣家の上に位置する家格で、三条家もこの清華家である。

伊東と一緒に気分が悪い上に、船酔いに悩まされた土方は、陸地に足を下しても、体が揺っている感覚から逃れられないで居た。

「やはり京の町はいいですねえ」

そんな土方の心中を知ってか知らずか、伊東はうきうきとした足取りで洛中を歩いている。

「ところで赤井くん」

すがすがしい顔で振り返った伊東は、勝の逗留先はどこかと尋ねた。

「亀屋という旅籠屋です」

三田尻から船に乗ったその夜、漸く目を覚ました赤井は、土方から伊東がなぜ一緒に居るのか、小郡を出た経緯を聞かされる中、無くなった腕がもう二度と戻らない事も知った。

「このような事になったお詫びを申し上げに参らねばなりませんし、近藤くんに事情を話した後、私が伺おうと思うのですが、如何でしょう？」

後ろを歩いている赤井からは、土方の顔は見えなかった。が、その肩が一瞬緊張したのだけは見逃さなかった。

「俺も同行する。こうなった原因を作ったのはあんたじゃない、この俺だからな」

「ええ、勿論そのつもりでありますとも」

西本願寺の山門を潜ると、土方達の姿を見つけた藤堂と原田が駆け足で近寄ってきた。

「帰りなさい！」

元気のいい声で出迎えた藤堂は、伊東の手荷物を受取ると、土方に抱えられるようにして立っている赤井に手を振った。

直後、その顔が強張る。

「近藤さんはいるか？」

「・・・・・・」

「平助！」

「あ！ はい、居ます！」

「原田、赤井を頼む」

「承知」

原田は赤井の腕を取り、うろたえている藤堂をそのままに屯所内へと入って行った。

伊東が居てはと、土方は近藤にも和奈や高杉の名を伏せ、事の経緯を説明した。

「困った事になったなあ」

勝の預かりで新撰組を離れた赤井が、無断で土方に随行し、片腕を失って戻ったのだ。

「赤井くんを連れて行くなら行くで、なんで俺に知らせなかった」

「弁解の余地も無い」

「済んでしまった事を今更責めても仕方ありません。近藤さん、勝殿の所へは私と土方くんでご説明に上がりますので、ご許可頂けますか？」

苦渋顔の近藤は、自分が出向くと言った。

「私では役不足と？」

「いや、そうではありません。伊東さんには、他に出向いてもらわねばならん所があるのです」

戒光寺の堪然より、折り入って相談したい事があるから、京に戻ったらずくに寄越して欲しいと、連絡が入っていると告げた。

「堪然殿が私に？」

「ですので、勝殿の所へは私と土方で参ります。そもそも、伊東さんが頭を下げに行かれることはありませんし」

近藤の言葉に、伊東が姿勢を正した。

「頭を下げるものにも、隊の者が起こした不始末に対し、参謀である私も頭を下げるに行くのは当然の事。それとも、近藤くんは私を名ばかりの参謀職だと言われるか？」

温和な態度を常としている伊東が、口調厳しく、その形相を一変させたものだから、近藤は冷や汗を浮かべ慌てた。

「いや、そういう意味ではありません。土方の浅はかな行動は私の責任でもあります。それに、局長である私が出向く方が、勝殿に対しても礼を欠く事はないと思っただけです」

「俺の不始末に、あんたも頭なんぞ下げたくはないだろう？」

「土方！」

「誤解してもらっては困ります。土方くんとは思想の点で違える所は多々ありますが、共に京の治安を守護する仲間と私は思っているんです。必要であればいくらでもこの頭を下げに駆け回りますよ」

「伊東さんもこう仰っているんだ。言葉を改めろ、土方」

感激屋でもある近藤が、伊東の言葉で少し潤んだ目になってしまっているのを、土方は横目に見ながら、わかったと口にした。

「伊東さんのお心は十分わかりました。しかし堪然殿からは火急の用と聞いておりますので、今回は私と土方に任せては貰えませんか」
「ふう。解りました。局長がそう仰るのでしたら、私は戒光寺へ伺う事に致します。勝殿にはくれぐれも宜しくお伝え下さい」

「ええ、それはもちろん」

伊東が部屋を出た後、膝を崩し不満げな顔で睨んでくる土方に、近藤はやれやれと肩を落とした。

翌日。赤井を伴い、土方と近藤は亀屋を訪ねた。

「まったく、とんでもねえ馬鹿野郎だ」

片腕となった赤井を前に、勝は険しい顔を振った。

「おまえさんはどうして物事をもっと深く考えねえんだ？」

「赤井くんのせいだけではございません。本来であれば、脱退している赤井くんを伴って行くなど、言語道断。新撰組副長としての思慮が足りなかったのは否めません」

「腕を斬られたのは、土方さんのせいじゃないです」

「そんなこったあ解ってる。だが道理は違う。俺の許可も局長の許可もなく、土方さんはおまえさんを連れていっちゃまった。これが問題だと言ってるんだよ」

正座で座る近藤と土方を見た赤井は言葉をなくした。

「すまない、土方さん。馬鹿な奴のために恥かかせるような真似させちまって。こいつの馬鹿はおいらの責任だ。どうか許してやってもらえないかい」

頭を下げに来たのに、反対に勝に頭を下げられては堪らない。

「勝殿に謝罪申し上げなければならぬのは我らの方。その様に勝殿に頭を下げさせたとあつては、天璋院様にも申し開きが立ちません。どうか、お顔を上げて頂ける様お願い致します」

「いや、指導の至らなさゆえ、おまえさん方に迷惑をかけることになっちまったんだ。頭を下げねえと気がすまん。天璋院様へはおいらからちゃんと説明しておくんで、そっちは気にしないでいい」

そう言うやいなや、左前に座って縮こまっている赤井の頭に勝の拳骨が落ちた。

「つてえ！」

「痛いと感じるのはおまえに命があるからだ、有り難く思え」

「はい・・・」

「近藤さん、土方さん。修吾郎が腕をなくしたのは、自分の行動をよくよく考えなかったからだ。この度の件についての謝罪は、これで終りとしてくれ」

「しかしそう申されましても、けじめを付ける必要はございます」

「仕方ねえなあ・・・おまえさん達にも立てなけりゃならねえ義がある。おいらにもある。どっちもが頭を下げあつてたんじゃ話しは終らねえ。けじめを付けたいと言いなさるんなら、修吾郎の新撰組復帰はなかったものとする。それでどうだい」

「勝さん！」

「おまえは黙ってろ。そもその原因はてめえが作ったんだ。局長と副長が揃って謝罪に来てる意味をもっと考えろ」

勝の言い分が解らない訳ではない。勝に許可もとらずに無断で出たのは事実だ。腕をなくしたのも、和奈の太刀を捌けなかったからだ。

「しかし赤井くんは四番隊の隊士からも信頼を得ております。復帰が駄目とあれば、彼らも酷く残念がるに違いない」

「片腕となったこいつに、組長格は務まらねえと思うよ」

「剣術ばかりが組長の資質ではございません」

「だが、けじめを付けたいと言ったのは近藤さん、あんたじゃないのかい？」

「それは・・・」

ちらりと横を見るが、土方は姿勢を崩ずじっと勝を見ているだけだった。

「わかりました。残念ではありますが、新撰組への復帰はなかった事とさせて頂きます」

近藤の言葉に、赤井はぎゅっと唇を結んだ。

「助かるよ。それじゃ、今回の件はこれまでだ。わざわざ出向いて来てくれてありがとうよ」

「それでは、これにて失礼仕ります」

近藤が腰を上げ、続いて立ち上がった土方は、赤井を見ないまま廊下へでると、静かに襖を閉めた。

土方と近藤を見送った伊東は、西本願寺から九条通りへ下ると、加茂川を越えた先の東下に在る戒光寺を訪ねていた。

「正親町三条様よりお話を伺った時は、それは驚きました。まさか伊東様が朝廷にも顔が広いとは思っておりませんでしたから」

「私ごとき者が公卿様とお知り合いなどと、とんでもない。堪然殿が西園寺家の方々にお引き合わせ下さり、勤王のお心を語り合えたからこそその賜物でありましょう」

「なるほど。西園寺家の誰ぞが、交流のあった三条家の者に話したのかも知れませんね」

「私のような者が、御陵守護を拝命できるとは光栄の至り。謹んでお受けさせて頂くと、正親町三条様にお伝え下さい」

「ええ、ええ、お伝えさせて頂きますとも」

戒光寺を出た伊東は、青空に輝く太陽を眩しげに見上げ、口元に薄く笑いを浮かべ、西本願寺へと戻った。

玄関へ入ろうとしていた伊東は、近づいてくる足音に背後を振り返った。

「勝殿はおられましたか？」

「ええ。それについて、ご報告したいと思いますが？」

「結構ですよ、お伺いします。私も近藤さんにお話しすることがございますし」

伊東の横を通り過ぎた土方に、君もと言われた土方は、遠慮させてもらおうと言うと、返事をまつこともなく奥へと消えて行った。

「なにかあったのですか？」

「ええ、まあ。ともかく、中へ」

前川邸の奥座敷に入ると、近藤は勝との話を説明し、赤井の復帰はなくなったと告げた。

「勝殿のご心中も理解できるところ。致し方ありませんね」

「ええ」

「これを教訓に、もう少し柔軟な姿勢で隊士の面倒を見てくれるようになると思います」

「あいつはあいつになり、責任を感じています。だから勝殿の申し出にも反対しなかった」

こくりと伊東は頷いた。

「で、伊東さんの話しと言うのは？」

「ああ、そうでした。実は、朝廷より私に沙汰書が下り、孝明天皇の御陵警護の拝命を賜ったのです」

「ちょ、朝廷から拝命を？」

「ええ。戒光寺住職の堪然殿からその沙汰書を頂いてきております。懐から書簡を出した伊東は、丁寧に開くと畳みの上へ置いた。

「しかし、なぜ伊東さんに」

「京の治安守護に当たっている新撰組ならば、不逞な族から御陵を

守れると、そう判断されたのではないでしょうか。勤王の心を持つ隊士も居ると、堪然殿にお話しした事がございますので、それだと思いますが」

沙汰書をじっと見下ろす近藤の手は震えている。

「山陵奉行、戸田大和守忠至殿の配下となり、薩長の動向を探索する任も承っております」

戸田大和守忠至は下野国《しもつけのくに》宇都宮藩の重臣で、慶応二年に宇都宮藩藩主戸田忠友より一万石を分与され、高德藩初代藩主に就いた。

「山陵奉行の」

土方を呼び止めておくべきだったと、近藤は後悔した。後でこの話を聞いた土方が、伊東に食ってかかるのは間違いないと思えたのだ。

「新撰組から御陵警護の任に就く者が出たとあれば、町民の見方も変わります。ならば私は喜んでこの任に就かせて頂きたいと思っています。ご了承願えますか？」

「それは、もちろんです。こんな名誉はないでしょう。ああ、会津藩へは私からその旨を届けておきましょう」

「それには及びません。松平様には、正親町三条様より通達が行くとの事」

「なるほど、その方が話しも早いでしょうな」

「ええ。では明日、私と共に任に就きたいという者を募りたいと思います」

「わかりました。しかし、我が新撰組が朝廷より拝命を頂くとは、これほど嬉しいことはありません」

ええ、と笑った伊東は、祝い酒でもと誘われ、皆が寝静まるまで嬉々とした近藤を前に、酒の味を堪能した。

翌朝、近藤の別宅へ土方が怒鳴り込んで来た。

「朝から何んの騒ぎだ、歳」

「御陵警護に就きたい者は名乗り出ると、伊東が隊士を集めてんだよ！」

「ああ、その件か。うん、昨日伊東さんから話しを聞いて許可を出した。歳、この新撰組に、朝廷からお声が掛かったんだ。すばらしいと思わないか？」

「その寝ぼけた頭をなんとかしろ！ 幕府の下にいる俺達が、なんで朝廷の命を受けなくちゃならねえんだ？」

布団から抜け出した近藤は、乱れた着物を治すと畳みに座りなおした。

「馬鹿をいっちゃあいかん。この度の拝命は会津藩も承知しているんだ。俺達がとやかく言うことじゃないだろう」

ちっ、と土方の舌打ちが響く。

「大宰府に行ったのは、その拝命とやらが下るよう、尊王攘夷派の公卿に頼みために違いない。朝廷のお墨付きとなれば、切腹せずに脱退できるじゃねえか。違うってんなら、なんで大宰府に行つて終りなんだ？ おかしいじだろうがよ」

「勘ぐりすぎだぞ、それは。考えてもみろ。伊東さんが京へ戻るよりも早く朝廷からは沙汰書が出ているんだ。大宰府に居る公卿に渡りをつけ、京の公卿へ根回しを頼んだとしても、追放となった公卿からの依頼を、朝廷がすんなり受け入れると考えにくいだろう」

確かに、近藤の言う事には一理ある。だが、反幕府派の公卿達がこぞって足並みを揃えれば、不可能ではない事のようにも思える。

「とにかく、伊東さんは自分から警護をしたいと申し出た訳ではない。ちゃんと命あつての御陵警護だ。警護の他にも、薩摩と長州の動向を探るという任も帯びて居る。幕府にとっても俺達にとっても損はないだろう」

「薩長の？」

「ああ。御陵警護はともかく、両藩の動向なら、会津藩としても欲しいところだろう。おまえが腹を立てる道理はない。それから、隊士の引き抜きは今日一度限りだ。今後、新撰組と御陵警護に就く者

との交流は禁止すると言う事で話しはつけてある」

近藤は采配は尽くしたと、本当に嬉しそうに笑いながら、怒りで肩を吊り上げた土方の背中をポンツと一つ叩いた。

伊東の呼びかけにより、三番隊組長斎藤一、同じく三番隊伍長中西昇、八番隊組長藤堂平助、諸士調役兼監察方篠原泰之進、諸士調役兼監察新井忠雄、伍長橋本皆助、砲術師範清原清、伊東の実弟で九番隊伍長鈴木三樹三郎、隊士からは富山弥兵衛、阿部十郎、内海次郎、服部三郎兵衛、加納道之助、毛内有之助らが手を上げた。伊東を含め十五名は、東山にある月真院を禁裏御陵衛士の屯所と掲げた。

其之三 桜舞い散る夜

おもしろき こともなき世に おもしろく

高杉晋作

慶応三年三月二十五日。

薩摩藩父島津久光は、陸軍一番小隊から六番小隊の精鋭と海軍を伴い、薩摩を出立した。

六畳ほどの座敷に敷かれた布団の中で眠る高杉の枕元で、じっとその顔を見下ろしていた和奈は顔を上げた。

「その様に根を詰められていては、和太郎殿も倒れてしまいますよ？」

入って来た望東尼は、手にした盆を和奈の横へと置いた。

「僕は大丈夫です。高杉さんは、いつ・・・目を覚ますんでしょうか」

「それは、私にも解りませぬ。しかし、口に入れた粥は飲まれておりますゆえ、そう案じなさいますな」

「赤井くんと道を違えた時、どちらかが死ぬことになる知れないと、そう覚悟しました」

足を痛めた土方を休ませるためと、偶然見つけたこの草庵に足を向けただけで、高杉の命を狙ってやって来たのではない。それなのに、倒れている高杉の姿と赤井の手の血を見て、斬ったのだと誤解し刀を抜いてしまった。

「望東尼様にも、大久保さんにも言われたのに、自分を理解するどころか、我を忘れて・・・赤井くんの腕を斬って・・・」

「和太郎殿が彼の者を斬った、それは事実にございます。だからと

ご自分を責めるものではありません」

「しかし！」

「先ほど、覚悟をされたと仰った。あなたのご友人も同じ思いでありましょう。刀を手にするということは、そういうことでございます。悔いるのなら、刀をお捨てになることです。ですが、和太郎殿が人を斬った事実は消えませぬ。それゆえ、あなたはその罪の重さを背負ってゆかねばなりません」

「罪の重さ」

「皆、この世を憂い、己が志を遂げるために辛苦に耐え生きております。それをお忘れなく」

「望東尼様・・・」

「知恵多き者でも、自分を知るのは難題にございます。ですが、諦めなさいますな。常に己と向き合って生きて行く、それが人の生にございます」

「高杉さんがあなたを慕っている理由が、よくわかる」

「和太郎殿？」

高杉へと顔を戻した和奈が、口元で少し笑ったように見えた。

油屋町にある大浦屋へ戻った龍馬は、来客の前に不機嫌極まりないと言う顔で座っていた。

「そんな顔をするな」

「そうゆわれてものう、こればあは嬉しい顔でお受けできやーせん」
龍馬がふて腐れているのは、訪ねてきた後藤と福岡から、海援隊と陸援隊を、新設される土佐藩の翔天隊の両翼とすると告げられたからだ。

「おまえと中岡が脱藩赦免となったのを受け、士分も戻してある。よっておまえは藩士として土佐に仕えなければならんだ。受けるもなにもないだろう」

「やき、中岡だけでええとゆうたぜよ」

「馬鹿を申すな。脱藩したままのおまえと藩の外で会っていると大殿様に知れてみる、切腹を申しつけられるわ」

福岡は真剣にそれを心配していたのだ。

「切腹は痛いき、ほりゃあいかん」

「おまえ・・・真剣に考える頭はあるのか？」

福岡は頭を押さえてしまった。

「大殿様が決定を下しておるのだ、違える事はできぬ。中岡にもちやんとこの事を伝えろ、いいな」

龍馬は肥前嬉野茶をすすりながら、はあ、と曖昧な返事を返した。

「それと、慶喜公が朝廷に、兵庫開港をと上奏なさった」

「確かなんが！？」

「ああ。朝廷は慶喜公の上奏に対し、意見具申せよと二十五藩に対し上洛の勅命を下した。それにより、薩摩藩からの要請を受けての上洛ではなく、勅命による上洛とあいなる」

「兵庫の開港について、先帝は最後まで勅許を下さなかったのだ。

いくら慶喜公が上奏したと言っても、そう簡単に勅許は下りまい」

京に近い兵庫が開港となれば、外国の軍艦や商船が入り、昼夜問わず停泊することになる。、朝廷もたまったものではないだろう。

開港を許し、足元に居座られては、その次にどんな要求をされるかわかったものではない。

「ともかく、海援隊と陸援隊を翔天隊の両翼として据える。異存は申すなよ」

「我らはこのまま土佐へ戻り、上洛の準備をする」

暗い顔で二人を見送った龍馬は、晴れ晴れとした青空を暗い顔で見上げた。

萩から桂がやって来たのは、高杉が意識を取り戻した夕刻の事だった。

「大量の吐血をしたと聞いた時は、心臓が止まるかと思った」

心配する言葉とは裏腹に、桂の顔には怒りが混じっている。

「井上は威されて仕方なく運んだんだ。お説教は短くしてやってくれ」

ニツと笑う高杉に、今回ばかりはそうもいかないと言わす。

「浅はかにも程がある。おまえばかりでなく、和太郎の件もある。付け加えるなら、土方くん達の件も、だ」

「皆が、良かれと思い動いた結果だ」

疲れた様子でため息をつく高杉に、困った奴だと桂は笑った。

「その結果、二人の人間の心に消せないものを植えつけたんだ。わかつているのか？」

「ああ、もう。見舞いに来たのか、小言を言いに来たのかどっちなんだ？」

声の勢いばかりか、顔に浮かべる表情までもが弱々しくなっていると、友を見る目を伏せた。

「桜が咲いたな」

「ああ、まだ七分咲きだけどね」

「花見だ、小五郎」

「・・・うん。そう、花見だな。おまえの体調が良い時を選んで帰ろう」

「今からでもいいぞ」

「俺は着いたばかりなんだ、少しは休ませろ」

「ふん・・・小五郎くんらしくないな」

コツツと額を小突いた桂は、和奈と話してくると、席を立った。

閉めた襖の前で、桂は肩を震わせた。

（もう・・・時間がないと知っているのか）

医者からは、春を迎えるのは無理だと言われていた。正直、よくここまで持ったものだと思う。

辛さや苦しさを見せず、自分の信じた道を生きて来た男だ。だから、自分から生を手放して欲しくなかった。

生きたいと願う心が、命を繋げているのだと桂は思いたかった。

「小五郎さん」

小さな声のした方を見ると、廊下の奥の柱の影から和奈が顔を出している。

側へと歩いて行くと、和奈は不安そうな表情を浮かべた。

「晋作が、花見をしたいと言っていた」

叱られるものと覚悟していた和奈は、返す言葉がすぐに出て来なかった。

「約束したんだろう？ 花見をするよ」

「あ、はい」

「体調も良さそうだし、明日にでも長府へ連れて戻ろうと思う」

「動かしてもいいんですか？」

今ならば、と、桂は心で答えた。

「詳しい話しは、向こうへ着いてからゆっくり聞かせてもらうよ」

翌朝早く、桂は医者の手配をした。

高杉の体に負担がかからないようにと、三田尻から荷物を運ぶために作られた水路を使い、和奈達は夜中近くになって桜山へと着いた。

「これなら、駕籠のがましだ」

酔ったじゃないかと、桜山の麓の草庵着くなりそう文句を言った。

「おのうは？」

「薬を取りに、白石殿の所へ行っている」

「そうか」

「怒らないのか？」

「葉なら、仕方ない」

「うん、そう言ってもらえると助かるよ」

抱えていた体を布団の上へ降ろし、体を冷やさぬようにとその上に夜着を被せた。

「今夜は僕が添寝する」

「げっ」

「げっ、とはなんだ、げっ、とは」

「隣で寝てくれ、隣で」

「たまにはいいじゃないか。男が嫌だと言うなら、女装してやってもいいぞ?」

「わがまま言うな」

「参ったね。わがまま小僧からわがままと言われるとは」

「頼むから」

「・・・解ったよ」

「時々様子を見に来るから、大人しく寝ていろ」

「ああ」

言葉数が日を追うごとに少なくなってきた。

「明日、晴れたら花見をしよう」

「うん」

「・・・お休み」

移動で疲れてたのか、桂が一度振り返った時には、すでに寝息を立て始めていた。

薩摩の島津が発った報せは、桂の耳にも届いていた。

加え、伊集院直右衛門が見せた他の三公も足並みを揃えている。

だが、と桂は顔を曇らせる。

（四公の足並みが揃わなければ、この会議は無駄に終る）

土佐山内容堂と前越松平春嶽の二人と、島津久光と交流のある宇和島伊達宗城の二人が利害なくして意見を一致させるとは考えられない。

雄藩が京に雁首を揃え、徳川慶喜をやり込められるかどうかは、周旋した大久保も気掛かりとしている所だろう。

「島津斉彬殿がご存命であれば、懸念も少しは和らぐというものが」

その懸念があるからこそ、大久保は久光の懐へ入り智策を重ねて来たのだ。

「用意、できましたよ」

「ああ、今行く」

湯呑みの乗ったお盆を抱えて歩くその後ろに立った桂は、ちょっと待てと和奈からお盆を取り上げた。

「これは僕が持っていく。おまえはちよつとここで待っていないさい」
「はあ」

桂が廊下を曲がって行って少し経ってから、松子がやって来た。

「こちらへ」

「あ、でも小五郎さんが待てって」

「ええ、旦那さまから頼まりました」

招魂場の桜はほぼ満開となっていた。

莫塵が敷かれた端に、布団が敷かれ、夜着を肩から着せられた高杉が横になっている。

「家からも桜は見えるだろう」

武市の言葉に、高杉は花見だからなと答えた。

「おのうさんも大変だな」

「旦那さまが喜ばれるなら、仕方ありません」

「おやおや」

「まあ、良いではありませんか。この様に見事な桜を見逃す手はございません」

「望東尼殿は高杉くんに甘い」

「左様。望東尼様はいつでも俺の味方だ」

「困ったやんちゃ坊主にございますが、それはそれで高杉様の良い所と思うておりますゆえ」

うっ、と言葉に詰まる姿は、歳相応の青年だと武市の眼には映った。

「待たせてすまない」

桂は莫塵の真ん中へ、手にしていた団子と酒瓶を置いた。

「酒だ、酒」

「待てよ晋作。ものには順序と言うものが一」

「花見に順序なんぞない」

「まったく、趣を感じずして何が花見なんだ」

「酒を飲まずして何が花見だ」

そこまでにと、割って入った武市は、桂の後ろから出て来た和奈を見て表情を固まらせてしまった。

「おまえも早く座りなさい」

「おっ」

高杉の顔が輝く。

「今日は花見だからね。愛でるものは大いに越したことないだろう？」

「粹ってもんが解ってるな」

「失礼な。おまえよりは粹を知っているに決まっているだろう」

和奈は、長州藩邸で初めて武市達と会った時の様に、落ち着かない様子で松子の横にちょこんと腰を下した。

「晋作の相手をさせてすまなかったね。支度にと、時間がかかってしまった」

「いや・・・」

袴を脱ぎ、淡い緑色の着物を纏って座る和奈を武市は呆けた顔で見ている。

「おい、酒だ」

「解ったから、そう急かさないでくれるか？」

高杉の側へと立った桂は、松子が差し出した幅の広い板を莫蔭の縁に突き刺した。

「もっと深くがいいが」

「あ、手伝います」

立ち上がろうとした和奈を、待てと桂が制する。

「武市くんが手伝うから、おまえは座っていなさい」

「えっと、でも」

「言われた通り、座っている。ここは男の出番だ」

板を二人がかりで土へと押し込む。

「男の出番ね」

小さく笑う桂。

「他意は—」

「無いと言わせないよ」

「ほんとに、あなたには敵わん」

少し斜めに差した板の根元に、倒れてしまわないようつつかえ棒を差し、布団ごと高杉の上半身を板へと引き上げる。

「夜着は被っている」

背中が冷えないよう夜着の端を織り込む。

「よし、これでいいだろう。おのうさん、この阿呆に酒を注いでやってくれるかな？」

「はい」

「阿呆は余計だろうが」

風も遠慮しているのか、いつもほど強くは吹いていない。

「ん、旨い」

久々に酒を喉に流し込んだ高杉は、嬉しそうな笑顔を見せた。

「植物はすごいもんだ。冷たい風に負ける事なく冬を耐えしのぎ、実をつけるために花を咲かせる」

「ああ、そうだな」

「次の花をさかせるために、実はやがて地へと落ちる。人生もこれと同じだ」

「うん」

「おい、和太郎。俺に酒を注げ」

「は、はい」

「晋作、和太郎では変じゃないか？」

「むっ」

「い、いいですいいです、和太郎でいいです」

「いいことない。よし、やり直す。和奈、酒を注げ」

「うっ・・・言い直さなくてもいいですってば」

震える手の中の猪口へゆっくり流し入れられた酒を、クイツと一

気に飲み干す。

「格別に旨い」

「同じお酒です」

「くくくつ。あいかわらずおまえと言う子は」

振り返ると武市も苦笑を浮かべて居る。

「都々逸がわからん奴だからな」

「また、都々逸ですか」

「ほら、武市さんにも注いで来い」

しっしつと追い払われた和奈は、口を尖らせ武市の横へと戻って行く。

「旨い酒と、いい花が見れた」

「・・・ああ」

おのうが三味線を手に取り曲を奏で出すと、松子がそれに合わせ
て舞いを始めた。

一節を踊り終えた松子は、座って居る和奈の手を取り舞に加える。

「ほう」

「舞いを覚えさせたのが正解だった」

覚束ない手足を間違えないようにと動かす姿は、お世辞にも上手
いとは言い難い。

「まだまだ練習がいるようだけどね」

「なに。三匹の蝶が花に舞っているんだ、艶やかには違いない」

「一匹は、羽ばたき始めたばかりで心許ないが」

猪口を手に、居場所を見つけられなくなった武市が二人の側へと
寄ってきた。

「そばで舞を楽しめばいいものを。何をそんなにうろたえているの
やら」

「あなたが余計な事をしでかしてくれるからだ」

「あははっ。君だけでなく、晋作も見たいだろうと思ってね」

「おう。武市さんに渡したのはおいしい気がする」

「あとでおのうさんに告げ口しておく」

一人増えた所で、おのうの他にも見受けした女がいるから心配いらん、と高杉が笑う。

「僕は一人だけどね」

「ぬっ。おまえ、ほんとに嫌な奴だな」

三味線の音色が桜に乗って響き、優しい風に吹かれて桜の花びらが宙に舞う。

「すまん、小五郎」

「ん？」

「後は頼んだ」

「……引き受けた」

武市は無言のまま、視線を二人から和奈達へと移した。

二日後の朝、萩から両親と正妻のお雅が駆けつけて来たため、桂の頼みで望東尼はおのうを伴い白石邸へと移った。

その夜、高杉の容態が急変した。

「少しはお休みになって下さい」

桂は再び吐血して倒れてから、高杉の側でずっと座っている。

「いえ。構いませんから、どうかこのまま」

高杉の主治医になっていた李家文厚りのいえ ぶんこうは、その後姿にそれ以上声をかけることも出来ず、そっと部屋から出で行った。

身内でない和奈と武市は見舞うこともできず、李家の話を聞くことしかできなかった。

大丈夫ですよね。

その言葉を和奈は口にしなかった。武市にそう聞いても、大丈夫だと言われると解っている。

「花見、できて良かったな」

「ああ」

高杉は約束を守ってくれた。ならば、それに答える努力をしなくてはならない。

辛いのは自分ではなく、家族や桂なのだ。

「そろそろ寝るといい」

武市に布団を指差され、和奈は素直に布団へと潜り込んだ。

満天の星を従え夜空に浮ぶ大きな月の下で、普賢象桜が枝一杯に花を咲かせている。

「呆けた顔でなにやってるんだ、和太郎」

横を向くと、腰に手をあて、口で笑っている高杉が立っていた。

「起きて、大丈夫なんですか？」

「俺の心配より、自分の心配でもしてろ」

「そっくりそのまま返します」

「・・・一つ聞いていいか？」

「ん？」

横へと座った高杉の横顔を見る。

「あんたは何が目的で、そこに居るんだ？」

「・・・」

ふん、と高杉が鼻を鳴らす。

「俺はてつきり、自分の願いが叶った、そう思っていた」

高杉から視線を外した和奈は、庭の普賢象桜へと向けた。

「先生はこの世の行く末を見ずして生を終えられた。俺も、久坂も、長州のためこの国のためと志を一つに走ってきた。撒かれた種はやがて芽を出し、花を咲かせまた種をつける。その理から外れて、あんたは何をしようって言うんだ？」

「この者の魂に、懐かしい想いがあると感じたのは、生を終えようとしていた時だった」

「・・・」

「誓った志を遂げられるのであれば、神でもなんにでもすがってやる、そう思い願った」

「阿呆が」

「高杉」

「言い訳はいらん」

「この世の理とは、摩訶不思議と思わんか？ 消えるはずの魂はこうして生きている。おまえになんと言われようと、俺は最後まで見届ける」

「それはあんたの勝手だ。他人を巻き込んでいい道理はない」

「巻き込んではいない。受け入れられた、それだけだ」

「ったく、人の理を無視して、なんでもかんでも背負っちゃまう奴だな」

くくつと和奈が笑う。

「そういうおまえも、人の理から外れているじゃないか」

ふん、と顔を背ける。

「もう、その手で人を殺めるな」

「それを決めるのは、この者の心だ」

高杉の顔が悲痛に歪む。

「この心が不要となった時には、おまえと盃を交わしたいものだな」
和奈の手が、クイツと酒をあおるように動く。

「できたらな」

「人の思いは種となり人の心に再び芽吹く。この世に四季があるように、想いもまた巡り移り変わっていく。それは魂が幾度巡ろうとも、変わるものではない」

儂げな笑顔を浮かべた高杉は、風に散る桜へと手を伸ばした。

飛び起きた和奈は、鼓動が早鐘を打ち続けているのをそのままに、布団から抜け出て障子を開ける。

月の光りに照らし出された桜が風にそよぎ、花びらが空へと舞い上がって行った。

虚ろな眼差しで、動かすのも辛いだろう顔を障子へと動かす。

「面白いのう」

「晋作？」

布団から微かに出た手が障子を指差した後、静かに落ちた。

「・・・・・・桜を・・・・見たいのか？」

滲む視界をそのままに立ちあがった桂は、そっと障子を開けた。

「月が沈むまで・・・・・・ゆっくり・・・・見てるといい」

月の浮ぶ夜空を仰いだ桂の頬に、一筋の光りが伝って落ちた。

慶応三年四月十四日未明、桜山の草庵に於いて、高杉晋作は慷慨忠直、剛毅果敢なその人生の幕を閉じた。享年二十九歳。

其之四 周旋の時

高杉の遺骸は翌日の朝、奇兵隊隊士達によって吉田の庄屋末富家へ運び込まれた。葬儀を夜半に執り行くと報せを受けた諸隊士達も、それぞれの方面から駆けつけて来ていた。

吉田には奇兵隊陣屋がある。創設者である高杉の葬儀を神式で行ないたいと、奇兵隊の山縣達が白石に要望した。

自害し果てた隊士木原亀之進の葬儀を奇兵隊が神式で行った。それが高杉の葬儀を神式にてという理由だった。文久三年、奇兵隊の本陣が三田尻に置かれた頃の事である。白石も奇兵隊に所属する身であり、招魂社の宮司という立場もあって、神式での葬儀を承諾したのだ。

神事は、宿となった末富家で到着した夜から始まった。

榊の葉に水をつけ、眠るように横たえられている高杉の口を浸し、新しい白布が顔に被せられる。枕元に枕屏風を立て、八足案（白木の台）に洗米と水塩を供え、守り刀と守り鏡が置かれると枕直しの儀は終わり、棺が持ち込まれた。禊祓、三種祓を唱えて後、高杉の体を棺に納めて納棺の儀の終りとなる。

二本の大松明を持った者を先頭に、箒持ち二人、その後から棺持ちが続ぎ、松明を掲げた者達がその後に従って清水山へと向かった。道中、死去を聞いた士分以下の者や民等が続々と行列の後に続き、清水山へ続く道は提灯と松明の灯で埋め尽くされた。

すすり泣く声や無念の声が入り混じり、行列の始めから終わりで騒然とした空気が辺りを包んだ。

佐世と石川の顔が並んで前を向くその後ろに、和奈と武市が無言で足を進めている。

哀しいと泣けばいいのか、笑って別れの言葉を唱えるべきなのか、

そのどちら로도できないほどに、和奈の心から言葉や感情が消えてしまっていた。

「ご生前の遺徳を偲び、その一生の功績をお称え申し上げます」

清水山の麓、棺を納める場所に着くと、祭主白石によって誄詞の祝詞が始まった。

「一和魂波殿乃命乃近守神止仕奉 荒御魂波御軍乃先鋒乎仕 四方之仇浪寄来奴輩乎 科戸乃風乃天之八重雲吹放事之如久（和魂は殿の近守神として仕え奉り 荒御魂は御軍^{みいくさ}に仕へ 四方の仇波^{あだなみ}より来たる奴輩を 科戸の風の天の八重雲を吹き放つ事のごとく）」

最後のその祝詞を聞き、和奈の肩がピクリと動く。

「辛いなら後ろへ」

「いいえ、ここで・・・」

それ以上は言葉にならなかった。

「逝く先を神にまかせて帰る霊 道暗からぬ 黄泉津根の国」

笏の拍子を打ちながら誄歌を歌い終った白石が、手にした祝詞を棺の上へと貼り付けた。

親族、参列者の列がずっと途切れる事なく後ろへと続いている。

「無理して我慢する必要はない」

心配した武市がそう声を掛け、肩を引き寄せた和奈の体は寒気で十分に冷えていた。

花見の席で楽しみに酒を飲んだ数日後の訃報となってしまうのだ。笑って見送ると言っても、現実を前にして本当に笑える人間は数少ないだろう。

（無理もあるまい）

動かした視線の先に、肩を落としてうな垂れている桂の姿があった。

桂も、高杉が死んだ実感をもてずにいた。笑っている男の姿が目には焼きついて離れてくれず、今にも木立の中から、「俺の葬儀か！」と高笑いしながら出て来るのではないかと期待しつつ、闇に目を向けてしまう始末なのだ。

（出て来てくれたら、どんなに・・・）

高杉に頼むと言われ引き受けたのだ。泣き言を言うわけにはいかない。

（今だけ・・・今だけだから、許せ晋作）

目頭を押さえた桂は武市の視線に気付いたが、恐らくは和奈の事で手一杯だろうと素知らぬふりをした。

焼香が終わり、棺が静かに土の中へと納められる頃には、星がまだ瞬く薄闇の空の東端から、薄っすらと明るくなり始めていた。

和奈を桂の側へと連れて来た武市は、二人に宿へ戻ろうと勧めた。「ああ・・・そうだな。随分と体も冷えてしまった。風邪をひかぬうちに戻ろう」

白石より、各々帰宿の時には一同一揖して静かに辞去するべしと言われていたのもあり、和奈達もその通りに手を合わせ、一礼を送ってから清水山を後にした。

第二次長州征伐発令後、幕府から手配者^{てはいもの}とされた高杉は、高杉家より廃嫡され育扱いとなっていた。

高杉が亡くなる半月前の三月二十九日、藩主毛利敬親は高杉春風から谷潜蔵と改名させ、谷家を立たせると禄百石を与えた。死後、藩が正式に谷潜蔵として戸籍に記した事により、高杉は谷家初代当主となった。

長崎で高杉の死を知らされた龍馬は、追悼の意を香花料金十両と共に送っている。

京で忙しく駆け回っていた中岡は、土御門の紹介で板倉筑前介の屋敷を訪ねた。

板倉は豪族で儒医下坂篁斎の嫡子で、安政四年に、清華家七家に加えられた新家の一つで、五摂家一条家の分家である醍醐家に仕え

る家臣だ。従六位の筑前介の任を命ぜられ、板倉の姓を賜った後より板倉筑前介と名を改めている。変名を下坂文作と言う。齢は四十五歳。武市や中岡とも懇意の間柄で、陸援隊に資金援助をしていた。部屋へ入って来た中岡を見て、田中顕助は驚いて腰を浮かせた。

「なんだおんし、こがなとこでなにをうそうそしちゅうんなが」

田中は武市の作った土佐勤王党に参加していたが、元治元年に仲間を集めて脱藩してしまった。土佐から長崎へ行く途中、高杉と赤間関で知り合いそのまま弟子入りしてしまう。長州藩の庇護を受けていたが、中岡が陸援隊を作ったと聞きつけると、すぐさま上洛し、そのまま陸援隊に参加してしまった。今は、谷と共に中岡不在の陸援隊を切り盛りしている。

「うろろうしてないってば。色々やる事があるんだよ」

「帰っておるならおるで、一言知らせとおせ」

「あ、ごめん。伝えるの忘れてた」

「ひどい男やか」

「肝の潰れる思いしたんだから、そこは多めに見て」

両手を合わせて拝んだ中岡は、土御門家訪問の話しを板倉と田中に話して聞かせた。

「陰陽師とは、それば凄いのか」

「凄いのかどうか。大体どこまで本当の話しなんだか、もうさっぱりで」

「土御門殿は式神を使える陰陽師や」

板倉の言葉に二人が素早く反応した。

「式神って、あのぼわっと出るあれですか!？」

「あれだな!」

「とかなんとか言う者も居るが、今世でそんなもんが使えるなら、幕府と対立した時によけ死人がでとるわ」

「・・・・・・」

二人の呆けた顔を見た板倉は嬉しそうに笑い声を上げた。

「公家さんのゆう事は話し半分で聞いちゃーせんと、気が持ちやー」

せんな」

中岡が周旋に走っているのは、伊東が三條に申し出た裏工作の為ばかりでなく倒幕を掲げ始めた緒藩結集がある。とは言え、倒幕思想を予てより持つ鷺尾隆聚と接触する機会が得られたのは、正親町三条の伝であるが、元を辿ればその伊東のお陰とも言えた。

「俺、鷺尾家へ行くのが段々怖くなってきた」

鷺尾家当主鷺尾隆聚は近衛権中将隆賢の第二子で、文久二年より今日まで上洛して来る尊攘派志士を糾合し、鷺尾家と縁の深い寺院などに匿^{たかあつ}って居る公卿だ。

「隆聚殿は若いが普通の方。だが、朝譴^{ちようけん}を蒙り差控の身となつておるゆえ、今会うは得策ではないと申しておく」

「朝譴^{ちようけん}って、やっぱり尊王攘夷派を匿^{たかあつ}った咎ですか？」

「それもある。他の公家よりも何事も旺盛過ぎる所はあるからのう。まあ、激論家という点を除けば、癖のある方ではない」

「激論家・・・それ、普通の方って言わないんじゃないやありませんか？」

「土御門殿との謁見で疲れているようなのでな、少しでも気が休まればと心配致したのだ」

「鷺尾卿はおんしより四つ下やき、激論となつても話は合うがやないかね」

「若っ！」

「すまぬな、老いぼれで」

「なにも板倉殿が老けてるなんて言つてませんよ」

「ここは一つ、土御門殿に若返りの祝詞でも頼んでみるか」

「そんな事でできるんですか!？」

「阿呆、話し半分で聞けと言つたやか」

あつ、と言葉を発した中岡は、笑いを堪えて顔を背けている板倉に、その手の冗談はなしにしてほしいと頼み込んだ。

翌日。安芸藩士達が水面下で動き出していると知った中岡は、船越洋之助と、神機隊を組織した小林柔吉に会に行き、広沢兵助の仲

介で安芸藩と長州藩の同盟締結が成功している今、緒藩結集に動くことは異を唱えるものではないと合意を得ることができた。

二人と再度の会う約束をし、談義を終えた中岡は、その足を西郷と吉井の下へと向けた。

「元気そうでなによりでござすな、中岡くん」

「その節は色々ありがとうございます」

「西郷さんに色々としてやられたから、感慨深いもんがあるだろ」

「吉井さあ、そいを言ったら駄目だ」

困って照れた顔で後頭部を抑えた西郷は、両手を膝の上に揃えてから中岡に頭を下げた。

「気苦労ばかい掛けたと反省しておいもす」

「頭あげて下さい。西郷さんに頭下げられたら、俺どうしたらいいか」

「気にするな中岡。長州の件は、おまえが懲りずに西郷さんに食い下がって成ったようなものだ。胸をはっとけ、胸を」

「だから無理ですよ」

ともかく酒だと、吉井が嬉しそうに女中に用意を頼みに出て行った。

「脱藩の赦免が下いたと聞きもしたが、土佐へ戻らなくてよかですか」

「乾さんの手配で、在京許可を頂いてます」

「坂本さあも赦免が下いたでしょう、あん男は京に来ておらんのですか」

「長崎で土佐の二家老と謁見した、ところまでは聞いているんですけど、それ以後は皆目わからない状況です」

「あん男の考ゆっ事はゆうとわからん。一蔵さあも困う事こん上ないとゆておいもした」

ガチャガチャと音を立てながら、膳を手にした吉井が部屋へ戻って来た。

「坂本くんの頭ん中なんぞ考えてたらきりがない」

「それは、正論ですね」

「中岡が苦勞して駆け回つると言うのに。貿易だとかなんとか言つて、薩摩だけでなく他の藩にも出入りしとるらしいじゃないか」

「倒幕に向け、足並みを揃えられる藩がないか見定めるつて。でも、海援隊が土佐藩の軍に編入されて、前の様に好き勝手は往来するのは無理となっております」

「それで長崎でふて腐れとうのか」

「へそ曲げたら性質悪いんですよ、ある意味厄介な男になります」
湯呑みに注がれた酒を一口流し込み、ほうつと息をもらす。

「坂本さあの事はさておき、岩倉殿が中岡くんに会いたいとゆておいもした」

「岩倉卿が？」

「会って来い」

吉井が手酌で酒を胃の中へ流し込みながら、損はない、と付け足した。

ここで岩倉と三條の関係を修復できれば、薩長にとっても今後の動きを考える上でも確かに損ではない。それは西郷と吉井だけでなく、大久保も願っている事である。

「それでは、宜しく願ひします」

「承った」

吉井の手配で岩倉との面会が叶うと、三條の意とするところを述べた後、土佐藩が倒幕の旗を掲げ、参政三名が事実行動を始めている旨を岩倉に説いた。

「土佐藩が倒幕へと動いたのは良しとして、問題は四候が揃って慶喜殿を押さえ込めるか、それに尽きる」

「危惧であるのは確かと言えましょう。そのため、動ける者にて談義を重ね、大久保殿も家老小松殿と共に四藩の足並み揃えに尽力いたしております」

「うむ。それが経緯は聞き及んでおる。文久の時、長州公が正親町三

条殿を通じ朝廷に航海遠略策を示し、家茂公が公武周旋役を任せる内定を下したのは知っておるな」

中岡は頷いた。

「開港を成し、交易で産まれた益を用いて富国強兵を敷く、その思想は今でこそ通じるものであるが、長州の攘夷派は長井雅楽殿が提唱した航海遠略策を良しとはしなかった。徳川幕府から再三にも及ぶ不当な処遇を受け、触らぬ神に祟り無しと幕府に従順を示していた時代の終りが、長州を朝敵とさせる顛末を招いたのも事実であろう。若き者が至らなかつたと言う訳ではない、時勢がそうであつただけと憂慮しておる」

「土佐藩も同じと」

「如何にも。余が懸念とするところは、土佐公の心情が如何なるものかなのだ。酔えば攘夷、醒めれば佐幕と意見を違えおる。肝心とするのは土佐参政の結束だ。一人でも欠ければ、土佐は敵に回ろう」

その一人を後藤と名指ししなかつたのは、中岡への配慮だった。大久保からも後藤については要注意と言われている。土佐勤王党が以前の勢力を保持できなかった今日、下からの嘆願が取り上げられるか否かは、後藤の腹次第になるのが、土佐の現状と岩倉は見えていた。

「正親町三条殿から便りも届いたのでな、中山忠能殿、中御門経之殿らに四候と慶喜殿の議について尽力を致すよう頼んである」

「有りがたきご配慮、心から御礼申し上げます」

「三條殿とも、いずれ相まみえ、議を交わす事になるやも知れぬ」

「それでは！」

「逸るでない。小事を急げば大事を仕損じる事にも成りかねぬ。今後の雲行き次第と、その心内に留め置かれよ」

「御意」

謁見を重ねる在京の公卿達、薩摩の後ろに居る岩倉、長州の後ろに居る三條とを結び付けられれば、倒幕の勅命を賜る近道となる。中岡は岩倉の入洛許可についても公卿達に働きかけると岩倉に約束

し、洛北の地を後にした。

大和十津川郷士前田雅楽と逢った後、再び西郷を訪ね、岩倉との謁見について報告した

「十津川郷士は剣術に長けた士と聞いておいます。今後とも十津川郷士との会談は必要とおいも思っておいます」

「同意するところです。四候が揃ったら、長州藩の進退を如何に進めるか、是非とも良しなに対処頂ける様お願い致します」

「四候の内、松平殿と伊達殿はすでに入洛しじあ。長州の件については一蔵さあ和小松殿が尽力致すであらうから、そう心配しなくてもよか」

「それを聞いて安心しました」

「今日はこれでゆつくと休むとよか。小松殿からもそうさせろと言われとう」

西郷の申し出に甘え、中岡は久しぶりに薩摩藩邸で夜を明かした。

高杉の遺骸が埋葬された近くの無隣庵を、山縣はおのうの居宅として譲り渡した。

葬儀から一週間後、無隣庵の門の前で和奈は首を捻っていた。見上げる木門には、無隣庵ではなく東行庵とうぎょうあんと書かれた懸板が取り付けられていたのだ。

「どうした？」

「無隣庵じゃないです・・・」

「谷東行大人と、祝詞と霊璽に書いてあっただろう？」

「はい」

「だから名前を東行庵と変えたのだらう」

「あれ、戒名なんだ」

「いや、戒名ではない。谷東行大人は神道で霊号と言う。神と親から与えられた名は大切とされ、死後名前の後ろ男うしなら大人、女なら

刀白が付けられる」

「萩での葬儀は仏式でしたよね」

「ああ。そちらでは全義院東行暢夫居士という戒名が付いている」

「二つも……。なんか、めんどくさいから東行だけでいい！　つて、高杉さん怒って出て来そうだ」

「確かに、あの男なら出てきかねんな」

二人の声を聞きつけたのか、戸口が開くと中から一人の尼僧が出て来た。

「ああ、やはり和太郎さんだった」

「おのうさん！？」

ここではと中へ通された和奈は、尼僧姿になっているおのうにどうしたのかと聞いた。

ここに移った日の夜、高杉の墓を守るために剃髪して欲しいと、訪ねて来た伊藤と井上に説得され、谷梅処と名を改め髪を落としたのだと、おのうは言った。

「女性に髪を切れだなんてー」

和奈の言葉を、武市の手が止めた。

「梅処尼殿か。良い名だ」

「ありがとうございます」

おのうはそう言って儂げに笑った。

桜の咲く頃、また訪ねると約束し、二人は早々に東行庵を出た。

「伊藤さんと井上さんって、女心が解ってませんよ！」

「剃髪して生涯独身を通し、他の男に尽くさぬようにと女子は髪を落とす」

「そんな意味があったんですか」

「自ら進んで剃髪する者が居れば、悪さをして剃髪となる者も居る。髪を落とすというのは、はじめをつけると言ったところだな」

それでも、説得してまでさせる事はないのにと怒りながら歩く姿は、高杉の生前のものと同じである。

和奈を心配した桂は、村木家の許可を取り再び武市の下へ預けて

いた。二人の心配を他所に、和奈は取り乱すでも落ち込むわけでもなく、葬儀の夜に見せた苦痛の表情を最後に、元の生活を送っている。

このまま変わらずにいてくれと、武市はただ願う事しか出来なかった。

其之一 薩長芸土への路

慶応三年五月朔日。

すがすがしい五月晴れとなったこの日、山内容堂が入洛し四候が揃った。

右往左往を繰り返して京を走り回っていた中岡は、二本松の薩摩藩邸で高杉の死去を聞かされていた。

「・・・・・・・・」

大久保はやれやれと言った面持ちで、言葉を失い畳を見つめる中岡の前に座った。

「中岡くん」

ゆっくりと中岡は顔を上げ、いつもと同じく腕を組んで座る大久保を真正面に捉える。

「君の心中が如何ばかりのものか、私にも判るところではある。が、そう落ち込んでいても仕方あるまい」

「最後に会った時・・・覚悟はしていたんですが。実際に聞くと・・・すいません」

「明後日、越前藩邸に四候が入られる。それまでに、その締まりのない顔をなんとかしておきたまえ」

「中岡くんと長との関係を考えれば、そんな動揺は大きいもんじゃ。もうちつと気を使ってもよかじゃなかか」

大きな体軀の影が中岡の体の上に落ちた後、西郷が部屋の中へと入って来た。

「何を言うか。今の中岡くんに必要なのは、慰めの言葉でも同情の言葉でもない。足を止めず前へ進むに必要な言葉だ」

「一蔵さあの言う事もわからんじゃなか。ただ故人を思い、弔いの気持ちを捧げう時間も必要だとわしいっとう」

「だから時間はやると言っているではないか」

大久保の冷めた視線が西郷に向けられるが、西郷は一向に気にもせず、肩を落として座る中岡の肩を叩いた。

「った！」

「お、加減したつものじゃったんだが、申し訳なか」

「なぐさめに来たのか、いじめに来たのかどっちなんだ？」

「なぐさめにきたに決まっとう。一蔵さあは遠回しな言い方しかでけんが、中岡くんと同じ様に訃報に心を痛めとう。そこを理解してやってほしか」

西郷の言葉に、ふん、とそっぽを向いた大久保の顔が少し赤らんで見えたので、中岡は含み笑いを零した。

「こほん！」

慌てて姿勢を正した中岡は、

「明日、小松殿の屋敷へ伺う予定になっています。それまでしばしお時間を頂きます」

そう言いながら大久保の視線を受け流した。

「気にせずゆっくりいすうとよか」

「それから」

と大久保は、土方と赤井が周防へ入り伊東と合流し共にし帰京した事、赤井が腕を失った事を告げた。

「なんで腕を？」

「詳細は一切書かれていなかった。桂木くんが来たら聞いてみるといい」

「上洛して来るんですか？ 和太郎も？」

桂の指示があったからか、新撰組の一件があつての上洛かは判らないが、武市が来るのであれば和奈と岡田も一緒と思えた。

「桂木くんご執心の相手だ。ならば一緒と考えるのが道理だな」

「またご執心で・・・絶対からかわないで下さいよ。来てみたら、大久保さんの首が胴から離れてた、なんて場面に遭遇したくないですから」

私はいつも本気で話している。と言われた中岡は、さらに深い
め息を吐いた。

「ともあれ、今問題とするのは、後藤殿が土佐公を説得しきれるか
だ」

今年の三月、龍馬の斡旋もあり、安芸藩で桂達と会合したと話し
始めた。

島津久光が兵を率い、薩摩を出る前、安芸藩と伊予藩の中間に点
在する下大崎群島の一つ、大崎下島に、長州、薩摩、芸州、土佐の
主だった者が集まった。

御手洗は島の東端に位置し、路が網目状に巡る町中に、船乗り達
みたらを目当てとした茶屋、船廻問屋が営む船宿、庄屋、なまこ壁（壁塗
りの様式）をあしらった豪邸や町屋が混在して建つ小さな町だ。北
前船等の商船が、潮待ち風待ちのために寄港する港町でもある。

三月十八日。会合場所となっている大長村の本徳寺に入った。

大長村は御手洗から十五町（一・五キロ）離れた村で、本徳寺は
新谷道太郎という男の実父が住職を務める寺である。

新谷は弘化三年に大長村に生まれたが、僧侶になるのを嫌って江
戸に出ると、勝海舟の若党（従者）になり伴侍務めた。その折、龍
馬と知り会っている。

今回の周旋は、安芸藩が静観していた態度を変え、動き始めた事
を知った龍馬が考えた。

「なぜ坂本くんが御手洗を選んだのか、聞くまでもないな」

不服だと言わんばかりにしかめっ面の大久保は、にこにこして居
る龍馬を見て目を細めた。

「ほがな怖い顔は止めとおせ。下心らあちつくともないきね」

「では、夜は大人しくここで寝るんだね？」

桂の言葉で、背筋を伸ばした龍馬の顔は焦っている。

「龍馬さんが選んだ訳ってなんですか？」

和奈に問われたくない問いをされた龍馬は、更に顔色を変えた。

「ここに、西国一の茶屋が在るからだ」

「茶屋？ お茶好きの大久保さんを考えての事、ってことですか？」

「馬鹿を言いたまえ。私が好んで足を運ぶのは葉茶屋だ」

「違うんですか!？」

大久保と桂が同時に龍馬を見た。

「返事にめえることばあ、わしに振るのは止めとおせ」

「困る必要もあるまい」

武市が最後の後押しをする。

「おんし、わしに恨みがあるんなが」

「心当たりが多すぎて、これとは口にできんな」

ブツブツと口の中で文句を言った龍馬の顔が、一瞬で笑顔に変わる。

「あとで連れて行くがやき、それまで待っとおせ」

「冗談ではない!」

武市と桂が同時に腰を浮かせ、和奈に近づこうと膝を出した龍馬の襟元に手を伸ばした。

「ちょ・・・っ。おまんら、わしを殺す気なんなが!」

「その方が今後ためかもしれないね」

他人事のようにお茶を啜っていた大久保が、突然笑い声を上げた。

「大久保さんが壊れた」

「桂くんまで、道化の輪に加わると思ってもいなかったのな。失礼した」

そう言われた桂は、しまったと思いながら姿勢をただし、元の位置へと座りなおした。

「失礼致します」

笑いを堪えた様な声が聞こえ、口をぎゅっと結んだ男が障子を開いて頭を下げてから入って来た。

「ようこそおいで下さいました。某は船越洋之助と申します。家老辻維岳がこちらに伺うのが道理でございますが、都合がつかず某が

代役と参りました」

それぞれ名を告げると、部屋に昼餉が運ばれてきた。

「遠路に船旅でお疲れになっていらっしやるでしょう。今日はご挨拶のみとさせて頂き、詰める話は明日にと言う事で宜しいでしょうか」

「お気遣い申し訳ない。そうして頂けると有り難い」

それではと、船越は早々に部屋を出て行った。

「うーん」

和奈が声を上げた。

腕を組み、真剣に考え込んでいる姿に、どうしたのかと武市が尋ねる。

「茶屋と葉茶屋の違いって？」

「まだ考えていたのか。まったく。茶屋は茶葉を売る店ではない。

遊郭の事だ」

「遊郭！？ あのお姉さんが一杯いる？」

「ああ。ここ御手洗には、藩が認めている茶屋が四件ある」

わかえびすや
若胡屋、藤屋、堺屋、海老屋のがあり、中でも最大の茶屋が若

胡屋だ。

「それでかと思われても仕方あるまい」

「阿呆いいなや」

和奈の視線が龍馬に向く。

「龍馬さん」

「な・・・なぜよ・・・」

「奥さんいるのに浮気はだめ！」

和奈が産まれた社会では一夫一妻制が原則だ。無論今でも浮気に走る男女は少くないが、一般的に許されるものではないのだ。

「う、浮気じゃないがで！ ただちつくと、話を聞いて酒を飲むばあやか」

「それならここでもできるでしょ！」

そう和奈に言われては、堂々と寺を出て行けたものではない。

「これ以上付き合ってられんゆえ、私はこれで失礼させて頂く」

「お騒がせして申し訳ない」

桂は苦笑し、立ち上がった大久保の後ろへ頭を下げる。

「小僧。私に茶を持っ来い」

「は？」

「私が茶屋について話を聞かせてやろう」

これに武市が要らぬ世話だと噛み付いた。

「坂本くんが居ては、できる話しもできまいと思っただが、まあいい」

大久保が部屋を出て行くと、武市は怒りの矛先を龍馬に変え、その頭に拳骨を落とすことで発散した。

「本気で殴るな！」

桂は何を言うでもなく静かに茶を口に出している。

「おまえも茶屋に行くぐらいで騒ぐな」

「行くくらいって、桂木さんも行くつもりだったんですか!？」

「っ！　なんでそう言うことになる！」

「武市の阿呆は一途やき、おんしを置いて出かけたりはしやーせんから心配しな」

「龍馬っ！」

また武市が拳を握ったものだから、龍馬はもう沢山と桂の側へ避難した。

「僕を巻き込まないでくれ」

結局、その夜龍馬は寺を出るに出れず、武市のお小言を聞きながら夜を明かした。

翌日の朝、船越が再び寺へとやって来た。

「ご存知かと思いますが、芸州と長州はすでに藩主了解のもと、不戦協約を組むに至っております」

第二次長州征伐について、安芸藩は最前線となった。征伐が始まる前、藩主浅野長訓は停戦を主張し、阿波国徳島藩と備前国岡山藩

の両藩主と連署で幕府と朝廷に征長の非と解兵を請願したが、聞き入れなかった。征伐に義はないと先鋒役を断り、中立の立場を取っていた。

薩摩、長州、土佐から兵を送るには海路が重要となる。だが、長州藩はこれまでの度重なる戦争で疲弊しており、土佐藩も軍備強化に乗りだしたばかりの中、国力を温存している安芸藩を相手に戦えるのは薩摩藩の海軍のみと言っても過言ではない。もし安芸藩が幕府側につけば、容易に海路を押さえられてしまう予想ではなく現実のものなのだ。

長州だけでなく、薩摩も土佐もこれを一番の問題とし、芸州との同盟を必要と考えていた。だから芸州を引き入れる手立てを、同じ危惧を抱いた龍馬が斡旋したのだ。

「幕府に刃を向けても良い、と言われるか？」

大久保を前に動じるでもなく、船越はニヤリと顔を歪めた。

「安政の黒船来航依頼、幕府の失策は目に余るばかり。その中での長州征伐は、幕府が自分の喉許を締める結果に終わった。色々な過程を踏み、安芸藩は藩主の下、幕府に政権を返上させる方向で藩論を統一しております」

長州薩摩両藩と軍事的協定を結び、武力をかざし幕府に政権返上の建白書を三藩連盟で出す。船越はそう括った。

「三藩の同盟の件は辻殿より弊藩の小松帯刀に話が来ている。協議を重ね、藩主もこれは必要であろうと言われた。木戸くんにも話しを通し意見を一致させている」

「願っても無いお言葉にございます」

「そこに土佐藩も組み入りたいんぜよ」

龍馬がそう切り出してきた。

土佐藩の同盟は大久保や桂にとって危惧するところはあるが、足並みを揃えると約束するのであれば願ってもない事だ。土佐が加われば、安芸と共に停戦を主張した伊予も、それならばと近寄ってくる可能性も出るのだ。だが、西国の大半が武力をもって進軍すれば、

幕府が強硬手段に及ぶ危険性はある。穏便に事を解決できるのなら、双方にとっても害は少ない。

「土佐が本気で我々と？」

船越は怪訝そうな顔で龍馬に尋ねる。

「倒幕にと動き出しちゅう家老も少なくはないがで」

「しかし、土佐藩は公武合体を崩してはおらぬではありませんか」

「土佐にゃ、後藤象二郎とゆうこわーい男がおる。大殿様もこの男のゆう事なら耳を貸すに違いないき」

「尊攘派の言葉には耳を貸しませんでしたけどね」

つい和奈は言ってしまった。

「おんしも容赦がのうなってきたのう・・・」

「村木殿は土佐公がお嫌いに見える」

船越も苦笑せざるを得ない。土佐の尊攘派弾圧は周知の事実なのだ。長州藩士が毛嫌いするのも解らないではない。

「土佐藩が三藩に加わりたいたいと言うなら、それ相応の約束をさせる必要があります」

和奈は真面目な顔でそう言った。

（またか・・・）

動揺したのは武市と桂である。

「それは確かに。どのような条件を提示するかは辻殿に聞いてから、それでよろしいでしょうか？」

その条件を土佐が飲むのであれば、同盟に加えると言う事で意見は一致した。

「しかし、時が経つ事に面白い奴になっているな」

船越が辞去した後、大久保がそう笑った。

「土佐が最後まで薩長芸と足並みをそれえるか、それを危惧しただけです。薩摩や長州の藩主殿とは違い、山内殿は一筋縄で行かぬお方ですから」

「ほう」

大久保がちらりと桂を見た。

「僕達の話しを側で聞いている。和太郎もそれなりに色々考えるところがある、と言う事です」

「それでけとは思えぬが、まあいいだろう。船越殿から辻殿の意向を聞いた後、小松殿より土佐に話しを持っていく。それでいいか、桂くん」

「ええ」

翌日、船越は京への出兵を土佐参加の条件として提示した。

土佐藩を加え、秋までに同盟を締結し建白書を徳川慶喜に出すことで、大崎下島での会談は一応の区切りをつけた。

京に戻った大久保は、早速小松に会談の内容を伝えた。

小松より、武力を背景に徳川幕府に政権を奉還させる、と持ちかけられた後藤はこの話しに飛びついた。

「辻殿より書簡を預かっておる」

小松は懷からその書簡を取り出すと、後藤の前へと置いた。

「京への出兵を約束するなら、薩摩、安芸、土佐の三藩で建白書を提出しても良いと言わておる。如何かな？」

「約束いたします」

「次の会談には貴殿も参加されると約束して頂こう。その席で相違ないと確認した上で、正式に同盟の締結を致す」

「承知致しました」

容堂にも西国一致で動く許可を取り付けなければならない。容堂への説得をしながら、後藤は精力的に動き回った。

「で、龍馬さんは？」

「今頃船の上の人となっているのではないか？」

「なんで!？」

「一々叫ぶな。後藤殿が同意したと小松殿から聞き、安芸へ行ったらしい。その折、土佐に銃を運ぶ船がないと、安芸藩から震天丸を

貸してもらったからだ」

「いろは丸の事故で困ってたからなあ」

「困るものにも、あれは坂本くんが何かしら考えての事故ではないかと、私は見ている。相手は紀州藩の軍艦だ。色々な推論が立てられよう」

「・・・その推論怖いですよ」

「月明かりの中、霧も出ておらず嵐でもないのにどうやって衝突できる。仮に、霧が出ていたとしても、衝突を避けるために右舵を取るのが普通だ。訓練の航海でもあるまいに、いろは丸は左舵を取った」

大久保は意味ありげに口元に笑みを浮かべた。

中岡も当時の状況を詳しく知っているわけではないので、絶対に違うとは言い切れず、また龍馬の性格から考えて、あくまで事故だったとも言えなかった。

「理由はさておき、三万両もする蒸気船を沈めたのだ、大洲藩がまたあの男に船を貸すはずもない。となれば銃の輸送は海路で行なえぬ。土佐が同盟に加わるのであれば、武力の増強は必須となる」

「だから安芸藩が船を貸し出した」

そう言うことだと、大久保は煙管に火をつけた。

「いつから煙草吸い出したんですか!？」

質問するたびに怒鳴るなど、紫煙をくゆらせる。

「私の嗜好を詮索される道理はない」

それはそうだが、酒も最近絶っているようだし、煙管を持つ大久保をみたのは今回が初めてなのだ、驚くしかないのである。

「長州は朝敵となっているゆえ、建白書の提出は三藩だが、軍事行動については薩長土芸での同盟締結となる。それまでに後藤殿が土佐公を動かせるといいのだが」

「今回の会議の結果次第じゃないかと、俺は思うんですが・・・」

中岡の顔は暗い。高杉の死を悼む思いと、各藩の急速な動きに周旋を合わせる気苦労が、影を落す要因であるのは間違いないだろう。

「土佐を加えて四藩の同盟締結が済めば、建白書をつきつけられる。もう少し頑張ってくれ」

「もう。だったらもう少し情報を下さい。大宰府では、ほんと疲れたんですから」

「なにかあったのか？」

ぐっ、と中岡は言葉を飲み込んだ。大久保は伊東の件を語らなかったのは、知る必要がないと言う事なのだ。

「さて、夜も更けてきたので、私はこれで失礼させてもらう。ああ、仕方がないから、武市くん達の到着は知らせてやる。安心して土佐藩で待ってるといい」

「な、な、なんで土佐藩なんですか!？」

「違うのか？ 脱藩が赦免されたのだ、大手を振って例の女子に――」

「違います！ ちゃんと旅籠屋使ってます！」

「中岡くんのよか人ですか。そや興味をそそられもすな」

「！ 大久保さんが変なこと言うから！」

矛先を大久保にむけても、相手にせずお茶に手を出したので、西郷から詰め寄られた中岡は、困り果て逃げるように藩邸を飛び出して行った。

其之二 伊庭の小天狗

水と交じり合った手土が泥となり足元に飛び跳ねる。足袋の中はもうぐしょぐしょで気持ち悪いことこのうえない。

早く草鞋を脱いで足を洗いたい。前に行く背中を見ながら、赤井はそんなことを考えていた。

「どうした？」

耳に心地よい良いトーンの声が前から聞こえてくる。

「凄い雨だなと思って」

「梅雨だし、仕方ないな」

体に纏わり突く空気も湿気を含んでいて、部屋の中であってもベタベタとして一日中気持ちの悪い日が続いている。

（京都も雨かなあ）

「急ぐよ。遅れたら高橋さんにまたどやされる」

振り返った伊庭八郎は赤井を急かした。

伊庭は心形刀流八代目宗家伊庭軍兵衛の嫡男で、元治元年に大御番衆として登用されてすぐ奥詰となり、講武所では教授方を務めた。今は遊撃隊の第三部隊の隊長となっている。

遊撃隊は洋式軍隊として、講武所の剣槍方と奥詰めが改編統合された軍隊で、この旅の将軍上洛に伴い、江戸から上洛して来ていた。「どやされるのは俺です。高橋さんは伊庭さんに甘いんだから」

そんなことはないかと振り返った伊庭は、泥が跳ね上がるのも気にせず歩調を速めた。

新撰組復帰を断たれた翌日、赤井は勝と共に大坂へ下ると、玉造の臨時講武所へ立ち寄り高橋に引き合わせた。遊撃隊頭取で、改変される前の講武所では槍術教授方を務めていた。

この臨時講武所には、同じく警護で上洛してきた士学館の桃井春蔵も剣術師範として詰めている。

「見事に斬られたもんだなあ」

腕を無くした顛末を聞いた高橋は、顎を摩りながら感心するように言った。

「下手にぶら下っているよりましってもんだ。痛いらしいぞ、半端に斬れた腕を切り落とすのは」

その言葉で全身に鳥肌が立った赤井は腕を摩った。

「威してもらうためにこいつを連れて来たんじゃないんだがねえ」

勝は左手首を摩りながら、何用で来たのかと訪ねる高橋に、遊撃隊に入れて欲しいんだと答えた。

「片腕じゃ簡単に銃など扱えんぞ？」

「その腕を使えるようにしてやってほしいのさ。洋式化したって言っても、接近戦になりゃ刀も役に立つだろう？」

それはそうだがと、困った表情を浮かべる。

「これまで片腕の奴を指南したことがない。それに、遊撃隊には元奥詰めも居る。格式に拘る連中が多い中、元新撰組の男が入れば一揉めあるかも知れん」

「そう言や、農家の出っことで講武所入りを断られたんだったな局長さんは。だが、格式なら立派なもんを持ってるから問題ないよん？」と赤井から視線を外す。

「こいつは天璋院様縁の男だ。疑うなら問い合わせてくれてもいい」「ほう。しかしなんでそんな男が新撰組に？」

「土方歳三の男気に惚れたんだとき。修吾郎が入隊したことについては天璋院様も承知して下さってるから心配ない」

「男気に惚れた挙句、長州に斬られて隻腕か。新撰組幹部はさぞかし慌てただろうな。まあ、あんたと天璋院様の知り合いなら、文句言う奴は出ないだろう。引き受けさせて頂く」

「有り難い。それから、指南なんだが、伊庭くんに頼めるかい？」

「小天狗を？　まだどうして」

「こいつの流派は心形刀流なんだ。桃井殿より伊庭くんの方が適任だし、歳も近いから馬も合うだろうと思ったんだよ」

「そういうことなら話してみよう」

「助かるよ。礼と言っちゃあなんだが、またこいつでも一緒してくれ」

酒を飲む仕草をした勝に喜んだ高橋は、今晚にでも早速と都合も聞かずに決めてしまった。

翌日、酒の臭いが残る勝と高橋に連れられ、赤井は伊庭の所へと対面した。

「初めまして、伊庭八郎です」

白い肌の眉目秀麗な青年。小天狗の異名を持つ剣客には見えない。それが赤井だけでなく伊庭を見た人が持つ第一印象だった。

「心形刀流門下生とあっては断るわけにいきませんね。僕でお役に立てるかわかりませんが、尽力致します」

「宜しく願います」

そうして赤井は伊庭の下に付き、片腕での稽古を始めることになった。

臨時講武所へ着いた赤井と伊庭は、汚れた着物を替えて稽古場へと足を運んだ。

片手で鋼作りの刀を扱うのは容易ではない。両手で振る時よりも腕にかかる負担は倍以上である。

「真正面から受けることを考えるな。かわして相手の懐へ斬り込むことを考えろ」

言うのは容易いが、手錬れとなれば難易度は増すばかり。相手の太刀筋を完全に見極めるだけでも至難の業だ。

伊庭が振り下ろす太刀を左へかわし、残った右足を瞬時に後ろへ引くと重心を移し、懐へ切り込む。

「うん。足捌きはかなり良くなった。一太刀入れたら間合いを保ちながら移動しろ。絶対に一所に留まるな」

息が続かない。右腕が重い上に、重しを付けられた左腕も痺れ始めている。

（くっそ。土方さんより容赦ないな）

右腕の筋力と足の筋肉の強化に加え、左腕の筋力も必要だと、その腕に小石を詰めた袋を巻きつけさせている。重さは大体二キロ程だか、動き回る時間が長ければ疲れも溜まる。

「左腕に期待するなよ。あくまで打ち合いをしない方法で相手とやり合う。それを忘れるな」

二ヶ月間、毎日伊庭と打ち合っているのに、未だ木太刀をその体に打ち込む事ができない。

（教授方につくだけあるよなあ）

一瞬の隙をつかれ、左脇に伊庭の木太刀が食い込んだ。

「ぐっ！」

「余計な事を考えるとそうなる」

「すいません」

「少し休もう」

二人が互いに挨拶を交わした所へ、高橋がやって来た。

「これから京へ行ってくれ」

「京へ？」

「二条城の警護だよ」

「桃井殿が付いているのでは？」

「將軍の警護入洛後、勤王派の動きが活発になっっている。何事かあってからでは遅いと、会津藩が新撰組を護衛にと申し出たらしいが、我らが大坂に居るのだ、わざわざ手を借りるまでもあるまいと桃井殿から要請が来た」

「そう言うことならば。赤井くんも連れて行きたいんですが、宜しいですか？」

「奴は君に預けている。好きにしてくれていい」

「承知。では直ぐに発ちます」

乾いた服に着替えられたというのに、また雨の中に出て行かなければならないのかと赤井は肩を落とした。

「京に着いたら岡場所に連れてってやるから」

「！いいですよ」

「健全な男子が顔を赤くして何を言うのやら」

女性経験がない訳じゃないだろうとからかう伊庭に、あたりまえですと答えながら、赤井は出立の用意をすると稽古場から逃げるように出て行ってしまった。

一刻後、伊庭に選ばれた十五名の隊士は、雨の中京へと発った。

慶応三年五月六日、四候は摂政二条斉敬邸に集り、最初に議題として上げたのは議奏の問題だった。

朝廷では王政復古を望む公卿の台頭により、公武合体を薦めた議奏くぜみつぎしこ久世通熙、広橋胤保ひろはしたねやす、六条有容ろくじょうありおさ、武家伝奏に就いていた野宮定功ののみやさだいさが解任されていた。この四人の解任により欠員となった議奏の補充についてである。

始まって間もなく、島津久光と二条斉敬の間で、就任させる人物を誰にするかで激論となってしまうた。

久光が推薦したのは大原重徳と中御門経之なかつかどつねゆきの二人だ。それに対し

二条は長谷信篤ながたにのぶあつと正親町三条実愛を推して来た。

「先帝は尊攘派の公卿を嫌われておった。そのお二方をこの度議奏に就任させることは、先帝のご意志に背くことゆえ、承諾しかねる」

二条は大原と中御門の推薦を突っぱねた。

「先帝の勸慮えいりょに従うと言われるのであれば、上様が上奏した兵庫開港も拒否なさるのでありましような」

孝明天皇の意向を汲むという態度に出た二条に対し、久光も同じ手で出たのだ。

「余は兵庫開港についてではなく、議奏について論じておる」

「先帝のご意向を出されたのは二条殿ではございますまいか」

「それは暴論であろう！」

「暴論とはいかなる趣意であらせられるか！ 二条殿でもお言葉が過ぎよう！」

緊迫した空気が漂い、このままでは水掛け論で終わってしまうと危惧した春嶽は、二人の間に割って入った。

「長谷殿も正親町三条殿も、幕府が独断で締結した日米修好通商条約締結について、条約案撤回を求め抗議した公卿である。公武合体を推し進めた公卿達が解任となった代わりとしては、このお二方を推しても問題ないと思われるが、如何か」

八十八人の公卿が座り込み、勅許を下さぬよう抗議した事件である。この抗議により、孝明天皇は条約締結反対の立場を明らかにし、勅許を下さなかった。これを持ち出されては、久光とて否と通すことはできず、渋々ながら二条の提示した二公卿の議奏就任を承諾したのである。

船越と小林柔吉の二人が、祇園にある梅尾亭とがのおていに逗留している中岡を尋ねていた。

「島の件、聞きましたよ。ご苦労様でした」

「いやいや、なんのなんの。なかなか面白い面々が集ってくれて楽しかった」

「面白い？ 卿も一緒だったんですね？」

「ああ」

「それで、誰が何をやらかしたんですか？」

龍馬だろうなどの予想は付く。

「いや、何もしてない。というか、出来なかったみたいだ」

船越は聞こえて来た会話の内容を中岡に話して聞かせた。

「木戸さんまで・・・」

「策士と名高いお方だから、どんな堅物が出で来るのかと思って身構えてたが、ぜんぜん。どこが策士で、どこが凄腕の剣客なのかと訝しんだほどだ」

「あはは・・・もう、才谷さんがいると絶対可笑しな事になるんだよなあ」

それは判る気がする」と船越は相槌を打った。

「俺も行けば良かったなあ」

小林が至極残念そうに肩を落とす。

「まあ、機会はあるさ。それより、土の具合はどうだ？」

「いま必至で肥料を撒いてる所です。下地を上手く整えておかないと、芽がでるものも出ませんから」

「確かに」

公卿にも渡りを付け、十津川郷士の面々とも談義を重ねていると説明する。

「暫く肥料を撒く手伝いができる。薩摩芋の種まきも、もっとやっておきたいからな」

「農場主の許可は？」

「ちゃんと取ってある」

だから安心して滞在できると、船越は酒を注ぎ足した。

「吉は招くより手繰り寄せろってことで、方角は北東なんです、明日行ってみますか？」

船越と小林は顔を見合わせ、小さく頷いた。

「願っても無い申し出だ。ぜひ頼む」

大雨となった十日の夜、和奈達は薩摩藩の二本松藩邸へと入った。

「奇兵隊の山縣狂介と申します」

出迎えにと出て来た大久保に、菅笠と蓑すげがさを取った山縣が頭を下げる。

「はじめとした中、よく参られた。大久保一蔵と申す」

しかし、と大久保は武市に向き直った。

「番傘くらい差して来たらどうなんだ？」

「そんな贅沢はできません」

菅笠を取った武市は冗談もきついと大久保に言う。高値の番傘を三本も買っては顔を覚えられる危険があるのだ。

江戸時代と言ってもちゃんと傘は作られている。竹骨に分厚目の和紙を張った番傘、傘の中央部と縁に青い土佐紙を張りその間に白紙を張った蛇の目傘、公卿や高僧といった身分の高い者が、後ろの従者に持たせる柄の長い端折傘^{つまおれがさ}だ。だがどれも価格が高い。一番安い番傘でも二百文（約五千円）と値が張り、蛇の目傘ともなると小奇麗な長屋の家賃とほぼ同じ二朱（約一万二千円）の値がつく。雨が降ったからとそんな物を買って耳目を集める必要はない。

下級武士や町人達の殆んどは、四十文（約千円）と価格の安い菅笠を使うのが一般的となっている。農業や旅に欠かせない代物だ。ちなみに戦闘などで使われるのは、漆が塗られた黒い陣笠だ。身体の防具という事で作りは頑丈になっている。

菅笠も陣笠も安いと言う理由だけで武士が好んで使うのではない。両手が開く、その利点があるからに他ならない。

「まずは、その格好をなんとかしてこい」

三人分の菅笠と蓑を建物の裏手に在る井戸の方へ持って行き壁に掛け、武市達が湯場を使った後でじっとりと濡れた体を洗い流した和奈は、半刻後、用意してくれた新しい着物に着替えて大部屋へ入り、不服そうな顔で大久保の前へと座った。

「大久保さん・・・なんで僕だけ着物なんですか？」

着物の袖を広げながら、茶をすすっている大久保に聞く。

「愚問だな。裸で出て来るつもりだったのか？」

「頼まれたってそんな事しません！」

「貧相な体など、頼んでまで見たいと思わん」

「だって、誰が貧相なんです！ まさか、覗いたんですか!？」

「覗きに向くほど相手に困ってもおらん」

「ぐっ・・・」

横から武市の押し殺した笑い声が耳に届く。

「桂木さん!」

「いや、すまん・・・だが・・・」

堪えきれず、腹を押さえて笑い出したのは山縣でもある。

「酷い！」

「まあまあ、落ち着け。挑発に乗ったおまえも悪い」

と言いながらも笑いを納められず、山縣は口に手を当てて顔を背けた。

「もういいです」

女物を用意してくれたのは、大久保も女子だと知っていると言う事で、和奈はそれにうろたえたのだ。

「危険を冒して来た身を案じてやったのだ。その姿ならば、いくらかは誤魔化しもできよう。なあ、桂木くん」

「ご配慮頂き忝い」

「君達だけと言う事は、木戸くんは出られなかったか」

「出ると言われてもお引き止め致しました」

「なるほど。直に伝えたかったのだが、致し方あるまい。谷潜蔵殿の逝去、心からお悔やみ申し上げるとお伝え願いたい」

和奈は顔を落とし、山縣は確かに承りましたと頭を深く下げた。
「入洛した緒公の談義は始まっていると思いますが、進行は如何に？」

初日は朝廷に於ける議奏人事についておおまかな流れを説明した大久保は、武市へ視線を投げた。

「一筋縄では行かぬか」

「土佐公は最初の対談に出席されたが、次の対談は病気を理由に欠席している」

「欠席した理由を如何にお考えか」

「この期に及んで仮病かとも思ったが、本当に体調を崩されたようだ。四日後、四候は慶喜殿と対談致すが、これに土佐公が出られるか、中岡くんに聞かねばならん」

「慎太郎は土佐藩ですか」

「いや。藩邸にはおらぬ。君達が来たと使いを出した。直ぐにでも飛んで来るだろう」

大久保はじっと話を聞いていた和奈の前へと膝を向けた。

「そうしていると、武家のご息女に見えなくもないな」

「どうせ似合っていないんですし、無理して褒めて頂かなくて結構です」

「だれも斯様にはいっておらぬではないか。これでは、桂木さんの苦勞も耐えぬな」

「それはそれで、楽しいと思う事もあります」

「ふむ。岡村くんの事といい、こ奴の事といい、変われば変わるものだな」

「痛い目をみれば、考え方も変わります」

土佐勤王党への処罰が、武市に抱えて余りある罪を背をわせているのは間違いない。

（歯止めが小僧か）

絶え間なく降り続く雨の音が一際大きくなった。もう梅雨の時期かと、和奈は雨音に耳を傾けた。

「土佐公の真意が未だもってわからぬ。小僧の言った通り、一筋縄ではいかん男だ」

四候会議が始まり、島津久光にとって懸念となったのは、山内容堂が幕府擁護の姿勢を少なからず見せたことだ。議奏の問題でも、容堂はどちらともつかない態度しか見せなかったのだ。大久保が苛立つのも無理は無い。

「安芸藩より船越殿が入京している。土佐の動き如何では、坂本くんが何と言おうと薩長芸の三藩で政権返上へもって行くぞ」

「致し方ありますまい」

「安芸国がこの時期に倒幕に傾いた理由ってなんですか？」

着物が変わっても、中身は変らんなど大久保は笑った。

「征伐時、芸州は長州への進軍の途上で重要な位置にある。一度目は石州と協力し長州への処罰を最小限に抑え、二度目に石州が長州に付いたことで、芸州は戦を回避させようと、解兵を進言した。だが、幕府は出向いて来た安芸国家老の辻殿と野村殿のお二方をその場で拘束、謹慎してしまったのだ。その処遇を不服とした芸州は出

兵を拒否し、中立の立場に立たれた」

「石見国と安芸藩は、領地が接している事もあり結びつきが強い。恭順を示した藩への二度目の征伐に加え、芸州家老の幽囚で、芸州が幕府に見切りをつけたとしても不思議はない」

大久保の言葉に難しい顔となった和奈に、武市が簡潔に括った。

「話し合いでの解決はできないと考えたからか」

「そういうことだ」

安芸国は、端だけとは言え領土が戦場となったのだ。幕府に義はないと判断を下したのも、当然と言えば当然の事だろう。

「なら、土佐が幕府側につくと予想した上で、土佐排除で事を進めるのが得策ではありませんか？」

「言うのは容易いがな、小僧。藩は個人ではなく一つの国だ。そこには多くの民が住んでいる。言い換えれば彼らは国力だ。敵に回わすより引き込む方が、我々にとって都合がいいのだ」

「ですが、容堂さんは足並みを揃えていないのでしょうか？　いくら下の者が一つの意見で合致しているとは言え、最終的に判断を下すのは藩主ではありませんか」

目を少し見開いた大久保の顔が武市に向けられる。

「私に聞かないで頂きたい」

質問する前にそう答えられては、大久保も言葉を飲み込むしかなかった。

「言われずとも、ある程度の予想は立てている」

「あ・・・そうですよね・・・すみません」

「小さい頭で良く考えたと褒めておこう。それより、待たせたな、そろそろ声を掛けても良いぞ」

大久保は縁側の方へ向かって言葉をかけた。

「盗み聞きするつもりはなかったのですが、申し訳ありません」

開かれた障子の向こうから姿を見せたのは中岡だった。

「中岡さん！」

「久しぶりだな、和太郎。って・・・なんでそんな格好してるの！

？」

「無粋な男だな」

「こういう奴です」

「酷いですよお二方とも。和太郎が女装してるの初めて見たんですから驚きますって」

「元々こいつは女子だ。女装は変だろう」

女子が女物の着物を着るのは当たり前だが、男と思っていたのだから女装になるんじゃないのかと考えながら、和奈に手を合わせた中岡はごめんと謝った。

「失礼致します」

笑いまじりで中岡の後ろから出てきた船越と小林は、縁側で最敬礼した後、中へと促され下座に座した。

「先達てはご苦勞だった」

「いえ。薩長と連携がとれるのです、苦勞とも思いません。後ろに居るのは神機隊の総督を務めております小林柔吉と申します」

「お初に御目にかかります」

「こちらが薩摩の大久保殿と、そちらが長州表番頭の桂木殿・・・その横の方は、村木殿だ」

大長村へ来たのは男装した和奈だ。たった今、女性と判っては困った顔で小林に紹介するしかない。

「女装の趣味がおりとは思いませんでした」

「えっと、これはそのですね・・・」

言い訳に困った和奈は、ちらりと武市を見た。

「込み入った事情でややこしい事になっておりますが、長州藩士には違いない、それでご了承願いたい」

「考えてもなかった事だったので、つい。お役目があるのは承知しているのでご安心を。で、そちらの方は初めてですが」

「長州藩奇兵隊総督、山縣狂介と申します」

奇兵隊の名前に二人の顔が明るくなる。

「訪ねさせて頂いた甲斐がありました。内政鎮圧と征伐戦、ご活躍

の程はお聞きしております」

恐縮です、と頭を掻く山縣に小林が目を輝かせている。軍を率いるものとしては、同じ場所に身を置き、功績を上げた者に羨望の感情を抱くのはどこの軍隊でも同じだろう。

咳払いした船越が、今回の会議の進行状況を大久保に尋ね、その内容に眉を顰めた。

「後藤殿は、御藩家老小松殿に兵の上洛を約束した。だが未だ藩主はそれを認めていないと言う事か」

否定する意見は中岡からも出なかった。

「坂本さんには土佐へ銃を運ぶようお願いしてありますが、時期早々だったようですね」

「今の段階では、まだ何とも答えられぬな」

幕府の出方如何では武力行使に出るのも有り得ると断った上で、薩土同盟を持ちかけ、容堂はこれを納得している。もし土佐が幕府擁護を貫く姿勢を見せたとしても、敵に廻る可能性は低いと言えるが、可能性が無いわけではない。もし土佐を討つとなれば、薩長芸だけでなく、岩国、津和野も戦に参戦してくるだろう。徳島藩と岡山藩も説得次第では味方に転じるかも知れない。そうなれば、征伐で敗退した幕府も、確たる勝算が無い限り土佐に援軍を出すことはしないだろう。万が一出すと決めたとしても、着く頃には勝敗がついている。その自信が薩摩にはあった。征伐に於いても武器の新旧と兵法の違いが優劣を分けたのだ。

「ともあれ、慶喜殿と四侯がどのような会談をするか、見守る以外にあるまい」

大久保の言葉に一同が頷いた。

「土佐公のご病状は？」

「体調は回復しておいのですので、二条城へ登営して頂くよう、乾さんと福岡さんから説得して頂きます」

「乾殿も上洛しているのか」

畳みに落ちた視線をそのままに、武市が呟いた。

「新撰組の警戒に加え、將軍護衛で遊撃隊が京と大坂に分かれ様子を伺っております」

「苦労な事だと、涼しげな顔の大久保は話を中断し、昼餉の用意をさせると部屋を出て行った。

「おまえはどこに逗留している？」

「陸援隊の中には脱藩を赦免されなかった者も居るので、色々なところを点々としてます」

土佐藩邸に容堂が居たのでは、隊士から話を聞くどころか切腹を言い渡されかねない。無論、脱藩者がいるのは後藤や乾から聞いているだろうが、暗黙の了承となっている以上、中岡も影で動かないのだ。

「乾さんに、会われますか？」

中岡の問いに、武市は目を伏せた。

「その件はまた後日。それより、お佳代さんは元気であるのか？」

「そりゃあもう。毎日元気に走り回ってますよ」

ほう、と武市が笑う。

「毎日藩邸に通うのも大変だな」

「あっ・・・」

「中岡くんのコレ、ですか？」

船越が小指を立てる。

「その様だ」

「ちおつとまったあ！　なんですかコレって！　そんなんじゃないですよ」

顔を赤く染めた中岡は、武市と船越の間でうろたえた。

「小林。土佐藩にも挨拶へ出向いてみるか」

真剣な面持ちで船越が腕を組む。

「そうですね。藩邸の方と懇意になっておくのは、今後のためにも良いでしょうから」

「懇意！？　小林さん、何考えてんですか！」

「え、芸州と土佐の親睦だが、困るのか？」

「こ……困りません。どっちかって言えばそうなった方がいいんですけど……あれ？」

「周旋には長けているのに、それ以外となるとからっきし下手な男になるな」

噴出した和奈を睨みつけた中岡は、余計な事を皆の前で言わないで下さいと武市に怒鳴り、背を向けてしまった。

「桂木殿も色々とお苦勞なさっているとお見受け致しましたが、土佐に一手を出せるのなら、我々としては動いて頂きたい所存であると申し上げておきます」

話を逸らしたつもりだったが、船越はそれを流しはしなかった。「船越殿がご推察した事を留めて置いて頂けるのなら、私に出来る事はするつもりで居ると申し伝えておく」

「はっ。私としても済んだ事をかき回したくはありませんゆえ、ご心配は無用と申し上げます」

食えぬ男がまた増えてしまったと、焦りから顔色を変えた中岡に、阿呆がと一言言い放った。

大久保が用意された膳が運び込まれ、話しに区切りをつけた武市は、なにやら考え込んでしまっている和奈に眼を細めた。

其之三 薩土密約

中岡の泊まる梅尾亭へと場所を移した和奈は、窓際に座り一向に止まない雨空をぼんやり眺めていた。

「新撰組が長州へ・・・」

武市から小郡草庵での顛末を聞いた中岡は、話しに加わらずに居る和奈をちらりと見た。

「俺も、同じ事をしたと思います」

それでも和奈は顔を動かさない。

「聞かれたから答えただけだ。問題とするのは土方くんがなぜ京を出て長州に来たか」

伊東の大宰府入りと何か関係があるのではないかと中岡は考えたが、御陵衛士の件で出て来た伊東と土方の繋がりが今一見えてこない。一方は勤王を貫くと言い、一方は非公式でも幕府に属する組織だ。大久保は一揉あると言った。繋がりがあると言うよりも、動向探索のために土方が京を出た。そう考えた方が自然である。

懷から紙と矢立を取りだし、御陵衛士創設の経緯を簡単にか書き纏めると武市に差し出した。

「この士の事は新之助からも聞いているが、まさか寝返ったのか？」

「話した限りでは、愛想が尽きたって感じてした」

「会ったのか」

火鉢の中で、チリチリと燃える紙が煙を立ち上らせる。焼けた臭いと、湿気を含んでカビたような畳の臭いが混ざり合う。

「新撰組内で伊東に賛同した隊士はすでに隊を抜けてます。近藤は会津や尾張などを周り、新撰組を幕臣に取り立ててもらおうよう周旋に忙しいらしいですよ。副長の土方は、伊東の脱退後、従来の新撰組に戻すのに必死となっています」

和奈は物思いから自分を現実へと戻し、中岡の顔をみやった。

鳩尾あたりがそわそわと落ち着かない。

「勤王派である伊東殿が、ただ御陵を警護するために動いたとは思えんな」

「裏で薩摩が動いているんです。何かしらありますよ」

小声で喋る中岡に頷き返した武市は、和奈の視線に気付いて顔を横へと動かした。

「どうした」

「いえ・・・なんか、落ち着かなくて」

風邪でもひいたのかと中岡も心配そうに問いかけてくる。

「そうなのかな」

「どれ」

側へやって来た武市の手が和奈の額を触る。

「熱はないようだが、今日は早く休め」

そうしますと答え、和奈は用意された部屋へ移り布団を敷き、その上に寝転がった。

夜着を被り、その中に顔を埋める。

（憎しみ？ 誰に？）

そう思うと同時に見知らぬ男の顔が浮かんできた。雰囲気が多々違うので、松陰でないことは確かだ。

（誰なんだろう）

きつとどこかで見たはずなのだが、何処で会ったのか、眠りに落ちるまで思い出すことはできなかった。

五月十四日。二条城の徳川慶喜の前に四候が顔を揃えた。

そもそも大久保らがこの四候会議開催に動いたのは、朝廷より兵庫開港をしてはならぬと通達を受けていたにも関わらず、今年三月に幕府がイギリス、フランス、アメリカ、オランダに対し、十二月に兵庫開港を行なうと確約した事に端を発する。勅許が下りていない開港確約と、二度に亘る征伐失敗の責任追及を行なえば、將軍辞職に追い込む事が出来る算段をつけていた。

慶喜の辞職は、雄藩連合の共和政体を造り上げるための布石である。薩長芸土が連盟で建白し徳川幕府に政権を返上させた後、雄藩による政治主導の礎を築く事が、大久保や桂の狙いであり、同調した薩長芸藩主の目的である。

縦長の顔に整った目鼻立ちを備えた慶喜は、並んで座る四人を見ながら開いていた扇子を閉じた。

「兵庫開港について」

そう慶喜が言葉を発した後、島津久光は恐れながらと手を前に付いた。

「長州藩への寛典について、朝廷からは寛大な処置をと望む声がございますれば、藩主毛利敬親公が世子広封公へ家督を譲り、十万石の削封を撤回した上で、官位を復帰させては如何にございましょうや」

言葉を遮られた慶喜は、あからさまに嫌な表情を浮かべた。

「余は兵庫開港について話しをしておる」

「長州藩への処遇が先決でありましょう。夷国からこの国を護るために、長州藩の参政は欠かせぬものにございます」

兵庫開港と長州の問題のどちらを先に議題とするかで、慶喜は頑なに兵庫開港が先だと言い張り、久光と宗城はそのためにも長州問題が先であると真っ向から対立してしまった。

結局、この日はろくな話し合いなどできず、五人揃っての写真撮影をするだけに終った。

十九日の議に、持病の歯痛が悪化したとして容堂は会議を欠席し、十四日とかわらぬ議論に終始し二日後の二十一日。容堂を除く三候が二条城に登城し、会議を始めたがまたもやどちらを先にするかで口論となった。

「薩摩藩と長州藩は夷国と戦をした経験を持っております。両藩が戦で得た経験を、夷国対策に用いるには、長州藩への寛典はなくてはならぬものと思います」

久光に合わせ、伊達宗城もまずは長州問題と推して出た。

「兵庫開港には期日があるゆえ、長州は後でも良からう」

「なんと仰られるか」

「四夷国に対し、幕府は十二月に開港を確約しておる。朝廷より勅許を下して頂くよう説得せねばならぬゆえ、第一の議とする」

さすがにこれを受け入れる事はできない。慶喜の思惑で事が流れれば、最終的に自分達も朝廷に対し勅許を下すよう働きかけなければならなくなる。

「そもそも兵庫開港は、幕府が独断で緒外国と約束したものではございませんまいか」

「確約を破棄致し、欧米列国と戦にあいなった時に、そちたちはこれを防げると申すのだな」

一国相手に敗戦した過去がある久光は、慶喜の問いに答える事が出来なかった。仮に全藩が足並みを揃えて四夷国を相手にしたとしても、今の日本の兵力を以ってしても防ぎきれるものではないとよく判っている。

「兵庫開港は行なうべからずとの先帝のお言葉を無視なさり、勝手に条約を締結したのは幕府の責任ではありませんまいか！ ならばその責を負うのは幕府にございましょう！」

「余は今後の事を話しておる。すでに締結した条約の是非を問う議ではなからう」

すでに日本は兵庫を除く越後国の新潟、備前国の長崎、武蔵国の神奈川、松前藩が警備を担っている蝦夷地の箱館を条約通り開港してしまっている。残る兵庫の開港も文久二年に開港となるはずだったが、孝明天皇はついに勅許を下さず、英国と交渉の末に五年後に先延ばししてもらった。その期日は半年後の十二月七日で、慶喜としてはそれまでに是非とも朝廷の勅許を得なくてはならないのだ。

「二度に亘る上奏で、朝廷が許しを下さないのを何と心得られておられるか」

久光も食い下がるしかない。

「京に近い兵庫の開港を、先帝が危惧なされていたのは余も十分承

知しておる。だが、破約となれば、その危惧は現実のものとなろう。どちらの道を選ぶのが最たる判断であるか、そちらにもよう判っておろう」

これでは慶喜に辞職を勧告するどころの話ではない。宗城も久光も互いに顔を見合わせた。

「そちらも兵庫開港に異論はないな」

口端に笑みを浮かべたけ慶喜は、否とも可とも答えられない四候を前に朝廷へ再度上奏すると告げた。

四候会議の結果を受けた大久保は、手にした書簡を握りつぶした。「やはり一筋縄では屈服させられぬか」

十九日と二十一日の二回、容堂が病気を理由に登城しなかった事も、大久保の怒りを増大させた原因だ。長州を再び政の場に引き戻し、日本一国を以って兵庫問題に当たろうとした目論見も薄い影となりつつある。重要な政策についての最終的決断を諸侯会議によって行なう試みも同じだった。土佐が足並みを揃えない以上、慶喜をやりこむのは難しい。春嶽も慶喜と久光、宗城の仲裁に入るだけで、事実上どちらにも付かない姿勢を見せる結果に終わった。

外様大名の三名と違い、春嶽の越前藩は親藩だ。慶喜に立てつく事も出来ず、三名の敵に回る事もできなかったのだろう。一貫して長州征伐に反対したのだが、結局押し切られ寛典ではなく征伐で押し切られてしまった。

久光らと共に慶喜を説得するはずの容堂も身を引いてしまった。これは薩長芸土の盟約を成す上で支障となるばかりか、悪くすれば土佐が外れる事になりかねない事態だ。

「後藤殿や乾殿が動いたとは言え、土佐公をこちら側に引き込むのは至難の業か」

「諸藩によう共和制がでけんのなら、もはや取う道は一つしかあいもはん」

西郷の眼光が鋭さを増す。

「ここでもまた長州征伐など、どれほど国益を無駄な戦につき込めば気が済むのだ、あの男は。もはや慶喜殿を取り巻く会津藩桑名藩を相手に、討幕以外にあの男を政権から引き摺り下ろすしか手段はない」

国が内乱で揉め続けければ、幕府に肩入れしているフランスが内政干渉に乗り出してくるのは必至であると薩長芸は見ている。そうなれば清国の二の舞となり、日本と言う国は名ばかりの国となってしまう。

「そげなこっじあなあ」

「吉之助、やってくれるか」

「もとよいそんつもいで居ました。一蔵さあ、共に新しか時代の為に進みもそや」

西郷の同意を得た大久保は、すぐさま久光の元へ走った。藩父の同意を得て、長州と芸州にも討幕の必要性を説き、土佐とも同盟を締結させなくてはならない。その後で大政奉還を建白し、勅命を得て徳川慶喜の幕府を討つのである。

乾退助は四候会議の結果を中岡から聞き、その眉間に皺を寄せたまま片足を踏み鳴らした。

「後藤殿は何をやっておるのだ」

会議の結果を受けた容堂は、御暇願いを出して土佐へ帰る支度をして居ると言う。

「小笠原殿がお役御免となったのは痛いですよ」

「派手に動きすぎた結果だ。真っ向から向かって説ける相手なら、すでに私と佐々木殿、後藤殿でやっておると言うのに」

「後藤さんが上手く説得しきれたらいいんですが・・・」

「もし、大殿が幕府を見限らない場合、御殿の命で藩論を統一させるしかないのだが」

乾の言う御殿とは現藩主である山内豊範だ。藩主にも関わらず、容堂の影響が強く、蟄居の身となってからも藩政を取り仕切っているのは容堂なのである。それは家老と中老職につく者の大半が山内家家臣からなっている事も大きな要因だが、豊範は長州に逃れた三条実美の従弟である事も影響している。

「大殿に取って代わるには御殿はまだお若い。歯痛が悪化でもしない限り、望みは薄いと言えよう」

「い、乾さん。藩邸で怖い事言うのはよしてください」

中岡が血相を変えても、乾の顔色は一つも変わらない。

「これまでの事は御耳に入れてあるが、実権が大殿にある限り、我らが望む土佐を実現させるのは難しいな」

「・・・乾さん」

真剣な面持ちで姿勢を正した中岡に、乾はなんと膝を折り座った。

「西郷さんと大久保さんに会っては頂けませんか」

「それから？」

「大殿さまの欠席に次ぐ欠席で、恐らく薩摩は土佐への不審を募らせているはず。後藤殿が大殿さまの同意を得た時、薩長芸と遺恨なく事を進めるには、密約をしておく必要があると思います」

「確かに。よし、中岡くん。すぐに行こうじゃないか」

「はっ？ いや、ちょっと待って！ いらっしゃるか確認をしてからにしては頂けませんか」

キッと中岡を睨みつけた乾は、不在でもいずれは帰ってくるのだから行って来いと怒鳴った。

「ですが・・・」

薩摩藩邸には武市が居る恐れもある。後藤が乾にその事実を告げたかどうか、武市の名が出てこないの知っているのか居ないのか判らない。

（居たら乾さんが来るって言えるか）

会う会わないの判断は武市に任せるしかない。大久保も居るのだ、

なんとかなるだろうと中岡は土佐藩邸を出た。

「雨、やまないですね」

薩摩藩邸へ続くぬかるんだ道を歩く和奈は、菅笠から染み出た雨水を拭った。

「小ぶりになって空も明るい。夕刻には止むだろう」

笠の端を持ち上げ、空を仰ぐ。

「その頃には山縣さんも二日酔いから醒めてるかな」

どうして長州の男は酒を飲んで騒ぐのが好きなんだろうと、首を傾げるしかない。昨夜も中岡に連れられ、土佐藩士毛利荒次郎が泊まる産寧坂にある明保野亭で、空が白み始めるまで飲んでいたのだ。「土佐の男も酒好きが多いがな」

毛利荒次郎と武市は、麻田勘七の門下で剣術を学んでいた頃から既知の仲だ。死んだはずの武市が堂々と姿を見せた時、荒次郎は真っ青な顔で念仏を唱えうろたえていた。事情を説明され、落ち着いた途端、飲めや飲めやになってしまったのだ。

「柳川さんは下戸なのに・・・」

くっ、と息を飲む音が耳に届く。

「飲めぬわけではない」

だが山縣や中岡らほど飲める訳でもない。

「上等な酒は、馬鹿飲みするものではない。それがあいつらには解らんのだ」

和奈も大量に飲むほうではないので、その意見には同意することができた。

「酒好きに女好きな男ほど、性質が悪いもんはないですよ」

「そこまで言うか」

途中、山縣と毛利が席を外し、しばらく還って来なかった。後で中岡から高くついたと聞かされ、何故かと聞くと女性と一緒にいたからだと言われた。

「一人に絞れっちゅうの」

真剣に起こっている和奈を見て、武市は顔をほころばせた。
(そのまま、そのまままで居てくれ)

「あれ？」

和奈が小首を傾げて通りの先を指差す。

「石川か」

中岡も二人を見つけたらしく、片手を上げて小走りで近寄って来た。

「やっぱり柳川さんだった」

「おまえも二本松か？」

「はい。ああ、ここで会えて丁度良かった」

中岡は乾が大久保達との謁見を望んでいると伝える。

「乾さんが」

「ここではなんですから、とにかく藩邸へ急ぎましょう」

辺りを素早く見回した中岡は、先導するように歩き出した。

二条城は、寛永元年に尾張藩や紀伊藩などの親藩や譜代大名らが石垣の普請を担当し、後水尾天皇の行幸を迎えるための大改築が行なわれた後、将軍上洛時の宿所として使用されて来た平城だ。

東の堀川通に西の美福通、北の竹屋町通と南の押小路通に囲まれた二条城の呼称は幕府が使うもので、将軍の常駐がないこの城を朝廷は”亭”を用い二条亭と呼んでいる。

東の大手門を入った右手の番所で届出を済ませた伊庭と赤井は、正面の塀を右手に折れ、奥に在る雑舎と連なる詰所へ隊士を連れて入った。

「来たか」

入って来た伊庭に目を留めた桃井は、腰を上げて入って来た隊士らを出迎えた。

桃井春蔵。旧名を田中直正と言う。十四歳の時に駿河国沼津藩よ

り江戸に出て、士学館の門を叩いた三年後に初伝目録を得ると三代目桃井春蔵に腕を見込まれ婿養子となる。二十五歳で皆伝を受け、その二年後の嘉永五年に四代目を継いだ。安政三年に江戸へ出て来た武市の人柄と剣術の腕を見込み皆伝を伝授すると、塾頭に据えた男である。

「物々しいですね」

「まあ、そう言わんでくれ。將軍の上洛ばかりでなく、雄藩を含む二十一藩が上洛している。薩摩藩は兵を引き連れての上洛なんだ。家老連中が慌てるのも無理はなからう」

桃井が凄腕の剣客であると、赤井にも一目見ただけで判った。毅然とした態度と濁りの無い眼。鍛えられた身体はその辺に居る剣士のそれではない。

（この人に見込まれたのが武市半平太か）

塾頭にまでなった武市は、長州で生きており桂と共に藩政に関わっている。それがもしバレたら、武市はどうなるのだろうか。

（確か、土佐藩も上洛してんだよな）

朝敵となっている長州は上洛できない。よって武市がこの時期に京へ出て来る事はない。出ないのであればその身边に危険が及ぶ事はない。それは共に居る和奈にも当てはまる。

腕を斬られた事に怨恨を抱いてはいない。あの状況なら、恐らく自分も刀を抜いただろうと思う。腕を失くしたのは、勝の言うように己に力量がなかったからだ。

（俺っていい奴だよなあ）

桂に対しては恨みがあるが、武市や龍馬らには特別な感情はない。できれば刀を抜いて対峙したくない相手だ。

「どうした、早く来い」

もう話は終わっていたらしく、詰所の奥へ歩き出していた伊庭が後ろを振り返って手招きしていた。

「すいません」

桃井に頭を下げ、伊庭の後ろへ駆け寄る。

「窮屈どころじゃないな、これ」

旅籠屋の方がいいなと、部屋を見回しながら空いている場所を探す。

「仕方ないですよ、護衛なんだから」

むすっとした顔の伊庭に額を小突かれる。

「桃井さんに相談して、隊ごとに纏めてもらうしかないか」

他の隊との連携を考えるなら、その方が迅速に命令を伝達できる。

「皆は休んでいてくれ。護衛に付く順番も決めてくるよ」

荷物を脇に置き、赤井はとりあえず人心地つこうとその場に座りこんだ。

乾とは小松の屋敷で会うと承諾を得て、中岡はすぐに知らせて来ると土佐藩邸へ戻って行っていた。

「後藤殿はどうやら土佐公の説得に失敗したらしいな」

「乾殿と佐々木殿に後藤殿も加わっているというのに、容堂公を抑えられぬか」

独裁的政治を行なってきた容堂が小笠原を帰国させたのは、事実上の更迭であり、薩長寄りの意見を進言し続ければ、三人も同じく帰国させられるのは目に見えている。

「土佐を省き、薩芸両藩での建白を行なう。伊予藩や宇和島藩にも協力を要請するつもりではある。幕府に政権を返上させた後、朝廷より勅許を得て京の守護に就く。その時に土佐が幕府へ付かないよう、下地を固めて置く必要がある」

「その為の陸援隊創設でしょう」

「だろうな」

政権を返上させてしまえば、いかに容堂といえど軽はずみな行動には出ないだろう。幕府に肩入れしようにも、その幕府自体が無くなるのだ。問題はその後だ。薩長芸は倒幕から討幕に方針を変えた。長州に赦免が下りれば、長州の精鋭も京に入る。会津桑名と土佐が

手を結んだとしても十分に勝算はある。

「ただ、幕臣にも少なからず頭の切れる者がいる。その人物がどう動くかで局面が変わる可能性も否定できない」

腕を組んでいた右手を上げて顎をさする大久保の横顔に、武市は勝海舟と呟いた。

「永井殿も捨てた人物ではない。今回の会議で仲裁に徹した春嶽殿も同じ。まあ、安政の大獄以後、馬鹿な幕臣が増えた。それを上手く利用出来れば、勝殿とて単独では動けまい」

勝の下には龍馬が居る。

「龍馬にも気を配っておく必要があるかと」

龍馬は幕府を潰す手段として討幕を望んではない。多方面に顔が利く以上、その動向を薩長が気にしたとしてもおかしくはないのだ。

「君からそれを聞くとはな。同郷とは言え、根本的思想は相容れぬか」

「そもそもあいつは自分から我々に組して来たのではない。中岡が誘い、私の遠縁だったから勤王派に説得されただけ。それも、勝殿に弟子入りするまでの話し。大久保さんや桂さん、私とは最初から抱える志が違う」

「油断できん男だな・・・吉之助からも、あ奴には注意するよう言われている」

「西郷殿が？　それこそ意外です」

「そうか？　吉之助は私情で事を運ぶ男ではない。私以上にな」

「安心しました」

「君が土佐で、我らと同じ立場であつたらと、惜しまずにはいられない」

「執政にしくじった男です。ご勘弁を」

武市は龍馬より人の上に立ち先導して行ける才がある。でなければ土佐勤王党を作り上げ、一時とは言え藩政を掌握することなど不可能だっただろう。人望と政の才を両方兼ね備えているだけに、一

旦道を誤ってしまえば修正をかけずらい。長州と薩摩がここまでこれたのは、明暗を担う者がそれぞれが居たからだ。

反対に、龍馬は単独で動く事に才を持つ。政に長け、人を見る目が備わっている点は勝や松平春嶽が一目置くほどのものだ。また、中岡と同じく人と人を繋いでゆく素質がある。

「乾殿が来られたらどうする？」

どうすべきか、乾の話を聞いてから考えると武市は答えた。

「わかった。隣の部屋で聞いているといい。それと、小僧も連れて行くが、別室で大人しくしてもらうぞ。長崎と同じ二の舞をしでかしてもらっては困るゆえな」

「承知」

長崎で、和奈が後藤を斬ろうとした事を、中岡から聞いているのだろう。長州よりの中岡だから不利となる情報を出すことはないと思うのだが、一応の注意はしておかなくてはならないと思えた。

中村半次郎を護衛に付かせた大久保は、二人を伴って小松帯刀の屋敷へと出向いた。

「小松殿、こ奴に部屋をお願いしたい」

「向こうの部屋が空いておる。好きに使うと良い」

ここへ来る途中に話しには加われないと聞いていた和奈は、大人しく対面にある部屋に行き、武市は皆が集る部屋の隣りへ入ると静かに座した。

「失礼する」

障子を開けると、吉井仁左衛門が西郷と並んで乾の前に座っていた。

「よく参られた」

「急で申し訳ない。だが、まったりとしておれなかったゆえ、ご無理を申しました」

「構いますまい。こちらもその方が今後を考え易い」

コトンツと獅子脅しの音が響く。

大久保は西郷の横へ座ると、その脇腹を小突いた。話しを西郷に

進めろと言うのだ。

「乾殿も会議の内容は聞かれとうだろう」

「ええ。西郷殿が土佐にお出でになり、四候会議の趣旨を説明し納得しての上洛だと某も信じておりましたが、期待を裏切られました」

「文久の参預会議と面子がほぼ同じ面子から、慶喜殿と当藩主が激論となるのはある程度予測をつけてはいたが」

腕を組んだ大久保の顔が陰しくなる。

「参預会議の瓦解を避けたいと、土佐公にな直々にお問い合わせが上がったが、御公は幕府をいけんしても見限う事は出来ん人のようなあ」

「それでは時勢に追いつけぬと判っておられぬのです」

郷土と上士の身分差が生む劣悪は、西国一と詰られても仕方が無かった。現藩主は傀儡となり果て、藩政に口を出す事もできない始末だ。それで致し方なしと見れたのは、幕府が長州に敗北する前までだと乾は考えていた。

「慶喜殿は自分の意見を通すだけの弁舌を持っている。それゆえ、長州寛典は如何ともし難い結果となってしまった」

「兵庫開港と長州再征伐に勅許が下るよう粘るのは必至。かくなる上は、大政奉還の建白書を提出した後、幕府を瓦解させ長州の恩赦を取り付ける意外に術は無いでしょう」

「それで、土佐公を抑えられもすか」

「私の心配するところもそこです。幕府が政権を返上した後、土佐は幕府寄りと薩長芸の敵となるのは避けたい」

「乾殿はあくまで我らに組したいと言われるか」

「もとよりそのつもりで動いて参りました。後藤も時勢が雄藩に傾き出したと知ったからこそ、薩摩と手を結ぶのが得策と考えられている。朝廷にも幕府にも逆らわずでは土佐の未来はありませんゆえ」

乾はそう言い終えた後、両手を畳へつけて西郷と大久保を見上げた。

「もはや武力なくして幕府は倒せぬと至った上で、薩長芸が兵を挙げる時、土佐も足並みを揃えたい所存であると申し上げます。お二

方とは違い、私は藩を代表する身分にはありませぬが、後藤と共に家老職の説得にあたっておりますゆえ、正式な場を設ける用意をお願いできますまいか」

「土佐が加わるのはもとより歓迎すべき事ゆえ、弊藩としても望むところである」

「有り難い」

「長州と芸州にもその旨は伝えおこう。乾殿の手腕、見せて頂くとしよう」

「中岡もおりますし、万事上手く行く手筈となっております」

「ええええっ!？」

「いい加減、その五月蠅い性格をなんとかしたまえ」

耳の穴を指で塞いだ大久保は顔を顰めた。

「そや無理と言うものんそ。中岡くんにな中岡くんの良か所があう。五月蠅いと思っても我慢してあげもそや」

「さ、西郷さんまで・・・」

「わははははっ! 中岡、西郷の許可が出たんだ、そう落ち込むな!」

「申し訳ない、当方にも五月蠅い男が居たのを失念しておりました」大久保にそう言われた吉井は、肩を窄めて中岡の肩に自分の肩を寄せた。

「似たもの同志は仲良く大人しくしてくれると助かるのだが」

それも無理だろうと西郷が豪快に笑い声を上げた。

「さて。話しも纏まったようだし、私はこれで失礼させて頂くでしょう」

「おいもまだ片付けう事があいもんで、これで失礼させて頂きもす飲んで行かないのかと吉井が手を振る。

「乾くんとはまた別の機会に」

「ええ。私も隣に居る者とゆっくり語り合いゆえ、これで辞去致します」

その言葉に、立ち上がりかけた大久保の動きが止まった。

「気付いておられたか」
ふふっと笑った乾は、部屋を隔てる襖へと視線を投げかけた。

其之四 邂逅の地

二十二日の暮五つ（午後八時）、降り続いた雨は久しぶりに止んでいた。

御所の西南、下立売通にある京都守護職邸へ出向き、新撰組を警護に就かせてほしいと嘆願に出かけて来たが、二条城のある区域は御定番組が担当しており、加えて遊撃隊もいるからと門前払いを受けた。

「遊撃隊って、江戸の治安隊ですか？」

近藤に随行しているのは、谷三十郎の実弟の谷周平だ。近藤の養子となっていたが、三十郎の死後、養子縁組を解き名前を谷に戻していた。諸士取調役を務めている。

「いや、奥詰の槍術隊と講武所詰が合併して出来た銃隊だ」

「へえ」

その中には心形刀流九代目を継ぐであろう伊庭八郎と、鏡新明智流四代目桃井春蔵が居る。

その二人と肩を並べて將軍守護に就けば、新撰組の立場も幕臣に認められるところとな。そう考えての嘆願だった。

「局長、道が違いますよ」

屯所へ戻るなら丸太町を西に折れ東堀川通りを下るのだが、近藤は東へ曲がったのだ。

「祇園に、ちよつとな」

へへっ、と周平は鼻の下を擦り、提灯を手に近藤の前を歩き出した。

小松邸を出た和奈と武市は、梅尾亭へ戻るため、隣を歩く武市の顔をそっと見上げる。

「雨、上がりましたね」

「ああ、そうだな」

「乾さん、嬉しそうでしたね」

そうか？ と苦笑する武市。

「ほら、中岡さんが言ってたじゃないですか。武市さんが死んで、ひどく淋しそうな顔をしてたって」

「よく覚えていたな」

武市を罪人として死者にした事への罪を感じて居るのか、自分が行なった非道に対する罪を悔いているのかは判らなかったが、乾は確かに後悔しつつ、懐かしい思いで武市を見つめていた。

西郷と大久保が先に邸宅を出た後、乾は一人で部屋に留まった。会合が終ったと小松から聞いた和奈が武市の部屋へ入って直ぐ、二人を隔てる襖が開いた。

乾は驚く素振りもなく、静かに入ってくると武市の前へ座った。

「よもや、こうしてまた君と会うことができるなど、考えてもいなかったよ」

「そのお顔ですと、後藤殿よりお聞きになっておられましたか」

「長崎から戻ったその足で私の所へ来た。見せたかったねえ、あの慌てぶりを。そりゃあもうこの世の終りがそこまで来てるようにうるたえて、何事かあったのかと尋ねると君が長州に召抱えられ、上士となって生きていると言うじゃないか。後藤くんが血相を変えても仕方がないね」

乾は用意してあった回答を暗記していたかの様にスラスラと言葉を紡いだ後、懷から大久保が容堂宛てに出した書簡を取り出し武市に差し出した。

「狸殿が大殿へと後藤くんに託したらしいが、君の命に関わることに、私の判断で預かった。後藤くんはこの書簡の事を大殿には伝えるなど念押ししてある」

「そこまで武市は嫌われておりますか」

「大津から送還されて来るはずの君と岡田が居ないと、後藤くんが

大騒ぎしてね。足取りを追わせ捕縛したいと大殿に願い出たのだが、
どういう由からか、公は追伐をお認めにならなかった」

「えっ？」

「代わりに死罪が確定している者を、君と岡田くんに仕立て幕府に
二人を処罰したと伝えた。後藤くんは最後まで納得しなかったけど
ね。時勢が変転を見せ始めると、態度がころっと変わり、君が長州
で生きているなら、それを上手く利用できないかと相談に来る始末。
本当にあの人には参るよ」

捕縛された土佐勤王党への尋問に、自分も加わっていたのだが、
と乾は呟いた。

「今日まで正しかった論が明日には悪とされる世の中です。乾さん
も後藤さんもその時に合わせ考え方を変えられる方、そういうこと
と納得しております」

「変わったねえ、武市」

「乾さん、その名はすでにこの世の者ではない。控えて頂くようお
願い申し上げます」

「ああ、そうだった。すまない」

淋しそうな表情を一瞬浮かべた乾は、小さく笑うと武市に茶をと
勧めた。

「藩主に対する意見陳情はこの藩でも命がけだ。否と言われて無
事で住むのは、そうだね、長州藩くらいじゃないかい？」

長州は若者に甘い。藩主は特に有能な人材に対しては寛大となる。
だがほんくら藩主なのではない。ちゃんと時を見る目をもっている
からこそ、士分に無い者にまで藩命を下す。「そうせい公」といわ
れる毛利敬親が、「そうせい」と言わなかった事がある。高杉が攻
山寺にて決起した時、棕梨は敬親に高杉ら緒隊への討伐許可を願
い出た。だが敬親は「沈静すべし」と討伐を拒否したのだ。

幕府に対し恭順を示したくなかったからか、それとも藩内で起こ
った戦を良しとしなかったからなのかはわからないが、毛利敬親も
名君として名を残す藩主には違いない。

「長州は教育に重きを置き、学者と名の付く者への配慮や、門下生には寛容であった。薩摩も土佐と同じく独裁政だが、大殿とのそれとは違う。薩摩公も辿れば勤王派。巨頭が動けばたちまち藩論は統一される。ここで薩摩が動き、越前公と宇和島公も上洛するとなつて、漸く時勢が変わり始めたのを知つたのだ。だからと、薩長芸とも足並みを揃えるには至っておらぬが」

そこなのです、と武市が返す。

「君達の危惧は重々承知している。あの後藤くんが走り回ってはいるが、所詮同じ穴の貉^{むじな}。三藩が望まぬ展開になる可能性は大きかった」

そうなつてしまった状況に近い。

「大政奉還を否と拒否された後、土佐も朝廷側で動く？」

「幕府にこれ以上肩入れして何の得がある？ 大殿もそこは承知なさっているはずだ。でなければ、後藤くんや私はすでに切腹を申し付けられているだろう？」

「幕府を敵に回さず、朝廷の後ろ盾を得ている薩長芸とも手を取り合いたい」

「それが最善策と思つておられるだろうね」

「まったく」

薩摩と芸州は新政権に慶喜も幕臣も組み入れる気など毛頭なく、長州も会津藩を退けたい思惑がある。その両藩が手を組んでいる以上、どっちつかずの姿勢を取る土佐が受け入れられるはずもない。

「朝廷が兵庫開港と長州征伐に対し許可を出せば、時は大きく動く」
「.....」

「君は、長州と共に生きるのだろうか？ その身は大切にしまえ」
「お心遣い・・・痛み入ります」

不安そうな顔が目の前に見えた。

「大丈夫ですか？」

物思いに耽り過ぎただけだと笑いかける。

「でも、乾さんって、柳川さんが言うほど変人に見えませんでしたけど」

以前、武市が乾の事をそう言っていたのだ。

「収集家で変人。それがあれば、軍隊創設と武器調達の資金隠しをしているなど、誰も考えまい」

「隠れ蓑ってことか」

乾は収集していた美術品や刀などをすべて売り払い、陸援隊創設資金に当てていた。周りに知られる事を恐れての策だったと、中岡から聞いた武市は驚いたものだ。

「みんな必死なんだ」

周りに居る人達はこの国のためと力を注いでいる。無論、私利私欲に走る者もいるのは確かだ。いつの時代になってもそれは変わる事はない。

だが、昭和に生きる人とは違う。桂達が目指した未来はあの世界にはなかった。

（赤井くんは、この時代の歴史を私よりも知っているはずだ）

だから新撰組に行ったのか。

「回り道をする」

「え？」

武市の顎が前を見ると動く。

「黒い羽織？ 新撰組ですか？ あ、黒いし見廻組ですかね？」

「この辺りは京都所司代の管轄だ。見廻組でも新撰組でもない」

慶応二年に、市中の警備は以下の七つに分けられていた。

南は下立売通から北へ、東の堀川通から西の紙屋川（天神川）の区域と、北の蛸薬師通から南へ五条通、東は高瀬川から西の千本通を越えた所迄と、この二つの区域が見廻組の担当で、北の鞍馬口通から南の下立売通り、西の堀川から東の寺町通の区域、いま和奈達がいる所が京都所司代の担当。西本願寺を含み、北の五条通から鴨川迄、東の西洞院川から西の農地迄と、北は四条通から南の七条通、東の山岳地帯から鴨川迄の二つが新撰組。東本願寺を含み、北の五

条通から南の七条通、東の鴨川から西の西洞院川迄が所司代組の担当となっている。

京都所司代が町奉行を使い治安に当たっていたが、京都守護職が出来る^てと新撰組と見廻組がその管轄下となったため、複雑な担当区域になってしまっていた。

「所司代とは言え、幕府の組織だ。警戒しても無駄にはならん」

そう言った後、武市が右手の路地へと向きを変えたので、和奈もその後が続いて入って行った。

ちりちりと胃の辺りが傷む。

（前にもあったなあ）

胃痛とも違う感覚に首を捻るしかない。

「先を急ぐぞ」

「はい」

こういう時に雨が降っていればと、星が瞬く空を憎憎しく見上げる。

通りを越え、細い河原町通を南へと下って行き、もう少しで三条通だと言う所で武市の足が止まった。その先に、黒い着物を纏った男が斬り込める間合いを外して立っている。出で立ちから所司代の手の者かどうか判別しづらい。

「この道に行くのは止したほうがいい」

後ろを一度振り向いた男は、訝しむ武市を他所に和奈達の方へゆつたりと歩いて来る。

「二条城に慶喜公が居て、市中の警戒が増している。君の顔は、^{はいもの}配者の中にまだ残っているのだから、うろうろと動き回るものではないよ」

武市と和奈の手が、腰に差した刀に伸びると、男の足が止まった。「安心したまえ。私は君達を捕らえようとは思っていない。中岡くんから聞いていないか？」

和奈は体を固くして前を疑視している武市と、半身をこちらに向けている男を交互に見る。

「御陵衛士の方か？」

伸びてきた武市の左腕が、和奈を後ろへと押しやった。

「ここで問答を重ねては、遅かれ早かれ見つかることになるのだが」「貴方が消えれば問答せずにすむ」

袖に腕を差し入れた伊東は、和奈へと視線をずらした。

「仕方ない。君達とは別の機会ということで、ここは退こう。祇園へ下るなら、この道から左に逸れて真っ直ぐ鴨川沿いに行くといい。今なら見廻りとかち合うことはないからね」

そう言い、ニコニコ顔のまま伊東は来た道に戻って行った。

「わざわざ知らせに来てくれたんでしょうか」

「そんなはずはない。最初から付けられていた、そう考えるほうが道理にかなう」

伊東の言葉を信じて道を進むべきかどうか、武市は迷った。

祇園まではまだかなりの距離がある。見廻組も御定番組がも新撰組より厄介ではない。

りいーん。

「!？」

鈴の音の音が聞こえた和奈は、もう一度耳を澄ませた。

（前は何時だった？）

そう、寺田屋だ。幕吏がなだれ込んで来る前に聞こえたんだ。

「柳川さん、急いで」

「和太郎？」

見下ろした和奈の顔は強張っている。

「鈴の音が、聞こえたんです。ここから早く移動しないと――」

伊東が立っていた路地を見た和奈の目に、横切って行く影が映る。
「!」

あれは、あの顔は。どこかで見た事がある。

「おい、和太郎？」

眉間を寄せ、目を吊り上げている和奈の肩を揺さぶる武市の胸中に、嫌な予感が広がる。

「あいつ・・・だ」

「？」

そう、忘れもしない。仲間を斬ったあの男だ。

次の瞬間、和奈は影を追わねばと地面を蹴っていた。

「和奈！」

通りを飛び出し左に顔を向け、小さくなった影を見つける駆け出した。

（なんなんだ！）

躊躇って出遅れたせいで距離をとられてしまい、前を走る和奈には追いつけそうもない。

「誰を追いかけている！」

走り出しながら鯉口を切り鍰元を握り締める。

駆け寄る気配を感じた影が和奈へと体を振り返らせ、一人が前へ進み出で刀を抜き放ち構えた。

「何奴！」

「邪魔だ」

抜刀しながら飛び込んできた和奈の太刀を避けようとした男は、足をもつれさせてよろけるとその場に尻餅をついた。

「周平！」

刀を抜いて立つ近藤の目の前で、和奈は足を止めた。

「新撰組局長、近藤勇殿とお見受け致す」

「如何にも」

「某は長州藩士吉田稔麿と申す。池田屋にて新撰組に討ち取られた同志の仇討ちに参上仕った。尋常に勝負されたし！」

「吉田・・・稔麿？　おい、なんの冗談かは知らんが、吉田稔麿はすでに」

「いざ、参る！」

言葉を遮り刀を振り下ろした和奈をかわし、背後に回る。

「待て！」

振り向き様に間合いを詰められ、打ち下ろされた刀を受け止める。

「貴様・・・何者だ？」

どう見ても吉田稔麿ではない相手に、近藤は尋ねた。

「宮部さんを、仲おまえ達新撰組は仲間を殺した！」

「！」

腕を突っ張り、和奈から間合いを取った近藤は、通りの左側には池田屋が在ったと思い出す。

「市中を火の海にしようと企んでいたのを、我らは阻止したに過ぎん！」

「なんの取り調べもせずにか！」

「手向かい致したから斬ったまで！」

「このお！」

一度二度と刀を打ちつける和奈に押され、後ろへと下がっていく近藤の足に周平の体が当たる。

「起きろ、周平！」

立ち上がった周平が、和奈に斬りかかろうと刀を薙ぎへ払う。

「ぐあっ！」

後ろから背中を鞘で突かれた周平の体が再び地面に落ちる。

「貴様は・・・」

隻眼の男。寺田屋で逃した志士の一人ではと更に間合いを取る。

二人が相手では、いかに剣の腕が確かな近藤でも対応し切れるものではない。だが間合いを取ったにも関わらず、和奈は一瞬でその差を詰め、近藤のわき腹へと刀を滑り込ませていた。

「くっ！」

もう一度と足を踏み出した和奈の腰に、武市の腕が巻きつく。

「いい加減にしろ！」

そう怒鳴った直後、和奈の体を抱え池田屋脇の路地へと走り込んだ。

祇園を出た赤井は、ご機嫌となった伊庭の傍らを歩きながら、沢山の灯が灯る華やかな町並みを振り返った。

「いい子でもできたのかい？」

「嬉しいそうに伊庭が聞いてくる。」

「そんなじゃありませんよ」

「そえか。もし、いい女が居て口説きたいと思ったら、中身がある女かどうか見ろよ」

「中身？」

「そう。色恋沙汰ばかり考える女は自分勝手に始末に困る。だが、分を弁えている女は学も教養も身につけているから、男の都合もちゃんと考えてくれる」

男の都合ねえ。と赤井はその都合とやらを考えてみた。

「都合って、どういう都合なんですか？」

「好きな女に、仕事と私とどちらが大切なんだと聞かれたらどうする？」

「そりゃあ、仕事しないと生きていけないし、困る選択っすよね」

「だから、そんな問いをしない女を選べってことさ。但し、その分ちゃんと女を愛してやるのが男の甲斐性だというのも忘れちゃダメだよ」

当分そんな相手はいらないと、赤井はぶんぶん顔を振る。

「お互いこの歳で一人身だから、余計な心配をしなくてすむけど、時々無性に人肌が恋しくなる」

だから祇園に通うのかと、頭を抑える。

「やけに黒装束の侍が目立ちますね」

女の話して終始しそうな予感を覚えた赤井は話題を変えた。

「新撰組か」

水浅葱の羽織だったはずと、人の合間に見え隠れする羽織を確かめる。

袖口のダンダラが見えた。あの模様は新撰組しか使わないものだ。という事は、自分が居なくなった後に黒羽織に変わったのだろう。

「闇夜に目立つ羽織を着ていたら志士から逃げられると、ようやく判ったんじゃないか？」

「それじゃ新撰組が馬鹿の集りみたいじゃないですか」

ああ、君も新撰組にいたんだっけと、伊庭は可笑しそうに笑う。

「中には不逞浪士紛いの隊士も居ると聞く。幕臣とはいえ、あまりいい気がしないのは確かだ」

「だから土方さんが頑張ってるんじゃないですか」

「へえ。えらく気に入っているんだ、鬼の副長さんを」

「そりゃあ、伊庭さんの言うように粗暴な隊士もいますけど、あの人は別格ですっ」

力んで喋る姿が面白いと、伊庭が更に笑い声を上げた。

「ぜったい酔っ払ってる」

四条大橋を渡ると高瀬川を越えて北へ曲がった。

「ここからは見廻組の管轄だ。新撰組は入って来れない」
「嫌ってます？」

「んー。今まで新撰組の人間と会った事はないからね。嫌いかと聞かれても困るんだが、市中で噂になっている人斬り集団というのが本当なら、嫌いな部類に入るさ」

人気の少なくなった町を見回しながら、鼻歌を歌い出した伊庭はそうそうと赤井に顔を向けた。

「この先に禁門の変で焼けた長州藩邸があったんだよね」

「この辺の地理に詳しくなくて・・・」

京都市役所があった辺りで、この時代では本能寺と天性寺がその位置にある。

そしてと、三条通を左へ曲がった伊庭は、あそこが池田屋かと足を止めた。

「あれ」

赤井が上半身を前屈みにさせて、伊庭の横から前方を見る。

「ちょっと、あれって!」

止める間もなく駆け出した赤井の後を、伊庭は慌てることなく歩いて追いかけて行く。

一人、地面に倒れている男が居る。その傍らに座りこんで居るのは。

「近藤さん!？」

紛れも泣く見知った顔だ。

「赤井くんじゃないか、どうしてここに」

「その、今遊撃隊に居るんです。大坂から京にきたんですが・・・じゃなくて、そんな事よりどうしたんですか？」

見ると近藤の右手は脇腹を抱えるように抑えている。

「斬られたんですか!？」

「大した事はない。周平も当身を食らっただけだ」

ほっと息を漏らす。

「新撰組の局長さん？」

後ろから伊庭の声が聞こえ、見上げた近藤がそうだと答える。

「辻斬りにでもあったんですか？」

「いや、なんと説明すればいいか」

「では事情は後ほどと言う事で、とりあえずこの場から離れましょう。屯所までお送り致します」

「忝い」

周囲を警戒しつつ、四人は三条通から寺町通を下り西本願寺へと下って行った。

其之一 失われた魂

祇園会所西側に在る茶屋竹屋の一室。

あんどん暗澹とした表情で、少し開けたられた窓の隙間間から提灯が並ぶ通りを山縣はちらりと覗き見た。

「君が危惧しているところは承知しているから、そう怒らないでくれるかな」

振り返った先の薄闇で、静かにお茶を啜っている桂を見てため息を漏らす。

「どういう状況下にあるか、よくご存知ならば、なぜ入京されました」

「広沢くんがちゃんと留守を守ってくれているから大丈夫だよ」

ですが、と身を乗り出した山縣は、近づいてくる足音に気付いて口を閉じた。

「橋本です」

部屋で座る二人の顔が頷き合う。

「入れ」

促され襖を開けて入って来たのは、浩武隊隊長品川弥二郎だった。

「お久しぶりです、木戸さん、山縣さん」

入口で座した品川が丁寧な頭を下げる。

「長き在京、本当にご苦労だった」

「京の情勢を藩に伝える重要な役目を果たされたのです、文句はいいませんよ」

「帰藩許可ももらってきてある。私が広沢くんに入れ替わりに戻る時、随行してくれ」

「はっ」

「広沢殿が京へ？」

「僕がと頼んだんだが、大殿がそうせいと仰ってくれず、代わりに広沢くんが薩摩との交渉に就く」

珍しい事もあるものだ、と、山縣は笑った。

「滞在は数日だ。四候会議の決裂はすでに聞き及んでいるが、今後の対策をどうするか直に話しておく必要があるのですね」

「それでの上洛ですか」

「芸州の船越殿と小林殿も入京なさっております。土佐の中岡殿が薩摩との仲介役になり、すでに談義は終えております」

「乾殿も？」

「然り」

「そうか」

二人は会ったのだろうか、と、武市の顔が一瞬脳裏に浮かんできた。後藤にばらした以上、乾にも伝えられていると考えて間違いないだろう。

「ともかく、これからの一手一手は確実に打っていかねばならない。土佐の出方と、残る西国緒藩の動向にも注意が必要となるな」

突然、ドタバタとした足音が近づいてくると、置いた刀を取り、桂と品川は部屋の端に身を寄せ、山縣は行灯の火を吹き消した。

「石川です」

そう大きくない声で名乗った中岡は、返事を聞く間もなく襖を開け放った。

「どうした？」

只ならぬ様子で人膝分中へ入って来た中岡は、三条に在る小川亭に至急来て欲しいと桂に向けて言った。

「事情は後で説明しますので、ご同行をお願いできませんか？」

これには山縣が難色を示した。

「俺も行く」

「ご心配には及びません。警護は俺が就きます。ともかく、和太郎の事で」

桂が腰を上げる気配を感じ、品川の体も動く。

「小川亭は肥後藩の定宿ですよ？ 幕府の監視が緩んでいない以上、行く事は避けて下さい」

長州は逆賊の汚名を返上していないばかりか、桂は手配者の中に名を連ねている身だ。山縣と品川が良しとしないのも中岡には理解できるところだ。

「薩摩からも人手を借りています。寺田屋の二の舞にはさせません」
「山縣くんたちはここで待っていてくれ。二刻ほどで戻る」

「しかし・・・」

「僕の腕も、まだ捨てたものではないと自負している。桂木くんも和太郎もいる。心配には及ばん」

そんな事を一々言われなくても二人には十分解っている。だが、何事かあってからでは、責任を追及されるのは中岡ではなく自分達なのだ。

「急ぐよ」

二人が躊躇している間に、桂は区やら身となった廊下へと走り出て行ってしまった。

「品川、念のため後をつけろ」

「いいんですか？」

「構わん」

すぐごと二人の後を追って品川が出て行くと、消された行灯に再び火を灯した。

屯所の入口では、負傷した近藤と共に入って来た伊庭と隊士の間でひと悶着が起こっていた。

新撰組は幕府の遊撃隊に良い感情を持っていない。返せば、遊撃隊でもある。將軍護衛の任を断られ、再度嘆願に出向いた近藤が斬られ、遊撃隊の隊士と共に戻って来たのだ。愚念を抱かずにはいられない。

「赤井、どう言うこったこれは」

人だかりの中から大石がその巨体を現し、前へ出て来た。

「途中、刺客に襲われた近藤さんを見つけたんです。負傷していた

し、何かあつては伊庭さんと護衛を兼ねて」

「んなこったあ聞いて解ってる。刺客ってなんだって事だ」

「それは近藤さんに聞いて下さい。俺達が二人を見つけたときには誰も居なかったんですから」

がやがやとした喧騒が収まり、隊士が道を空ける真ん中を土方が歩いてきた。

「面倒かけてすまなかったな、赤井」

「いえ。近藤さんは大丈夫なんですか？」

「ああ。幸い皮膚が裂けただけだ」

ちらりと伊庭に視線を送る。

「あ、この方は」

「心形刀流の後継者、伊庭八郎殿」

不敵な笑いを口元に浮べた土方は、伊庭の前へ出ると少し頭を下げた。

「面倒をお掛けして、申し訳ない」

「同じ幕府の者です。当然の義務と思っていますから、お気になされず」

「改めて御礼に伺いたい。良ければ宿所をお教え願えませんか」

「宿所は城内なのです。お礼もここで頂きましたから、改めて来て頂く必要はありません」

ムツとした空気が隊士の間に広がって行く。

「うちの近藤は律儀な性格でして、それではいと承諾しない」

「そうですか」

ニッコリと笑顔を浮かべた伊庭は、祇園にある料亭の名を告げた。

「祇園ねえ・・・」

くすつと土方は笑うが、後ろではさらに陰悪な空気が濃くなっている。

「宿所なしですし、京で知って居る店はそこしかないですよ。ああ、鼻屑にしている妓がいるのも理由ですけどね」

「承知した。明日にでも一席設けたいが」

「では夕刻、赤井くんを使い、に寄越します」

「俺え？」

「文句は言わない」

ブツブツと口を尖らせる赤井に背を向け、伊庭は敬礼を土方に送ると赤井を連れて西本願寺を後にした。

小川亭の裏口から桂が入った後、中岡は戸口を締めて建物の周りをぐるりと見廻ってから、妻側の別の戸口から中へ入った。

小川亭は山縣が口にした通り肥後藩御用達の旅籠屋で、女将ていが勤王家ということから志士達の間で会合に使われる場所の一つとなっていた。桂も何度か訪れた事があり、宮部鼎蔵や松田重助、河上彦斎等もここに世話になっていた事がある。宮部鼎蔵の下僕だった忠蔵が新撰組に捕らえられ、三門楼上に幾日も生き晒しにされた時も、宮部を探すなどの助力に走っている。見張りに立っていた大隊士に者に金子を渡し忠蔵を助けたのだが、関わりがあると睨まれ後を付けられていた。その線から宮部の所在を探し出すために、新撰組はわざと忠蔵を解放しているが、足取りを掴むことはできなかった。

襖をあけた先に、対峙して座る和奈と武市の姿が在った。

「やれやれ。一体何事なんだ？」

武市は困りきっている顔を、穏やかな顔で座った桂に向けた。

「慎太郎から、貴方が来ていると聞き、危険を承知で呼びに行かせた」

「うん」

「・・・一刻ほど前、三条大橋の袂で・・・近藤に斬りかかった」

「近藤？　新撰組の？」

「ああ」

自分を見ている和奈の眼は正気だ。

「さて、どうして？」

「仇を討たなくてはと、思ったんです」

「仇？」

「宮部さんや、望月さんを、あいつらは殺しました」

「えっ……？」

「我々はただ会合を行なっていただけです。幕府が掲げる計画が無謀な事は、貴方に説得されずとも解っていました。実行に移す意志はもうすでにないと、あの日皆で貴方に告げるつもりでいたんです」

「何を……言ってるんだ」

「しかし新撰組は古高さんを捕縛し、奉行所での取調べもなく無慈悲な拷問を加えた。古高さんが口を割る筈もない。そう言っているのは新撰組だけです。違いますか？」

「和太郎、その話をどこで？」

黙っていた武市が、そうではないと話しに割って入って来た。

「近藤に切りかかる前、ある者の名を名乗った」

眼を細めて首を傾げた桂の面目が大きく見開いた。

「また吉田先生が？」

「いや。信じられんとは思うが、吉田稔麿と」

頭を再び和奈に向ける。

「なんの冗談なんだ!？」

和奈は驚きもせず困った顔もせず、反対に焦っている桂を静かに見つめている。

（晋作はなんと言った？）

【松陰先生の心があいつの内にある。だが、同じ魂とは限らん】

（それから……）

【違うんだよ、俺の知る先生とあいつは】

（誰だと言った？）

【松陰先生の思想を、最も正確に受け継いでいた男が居た＞あの人は……俺や久坂とは違う】

膝の上に置いた手がきつく握り締められる。

（なぜ晋作の話しをちゃんと聞かなかったんだ!）

体が気掛かりで、何か思い至った事を話そうとしたのを遮り、結局高杉が何を考えていたのか、その死で永遠に聞けなくなってしまう。愚かな事をしたと悔いても、もう時間は後戻りしてくれない。

「君は・・・本当に稔曆なのか？」

武市が今度は眼を見開く。

ふっ、と和奈が笑った。

「そうだと思います。自分でもよく解らない。はっきりしないんです。でも、心に沸きあがる想いは偽りではない。それだけは確かです」

「和太郎・・・でもない？」

語りかける桂の声には怒りも、また戸惑いもない。

「いえ、違うとは言い切れません」

「つまり、今の君は稔曆であり和太郎だと言うのか？」

「それも違うような気がします。先生は言われた。体は朽ちても魂は留まり続けると。その言葉はずっとここにある。だから魂だけは本物です」

和奈はそう言って自分の胸を指差した。

「・・・和奈は何処だ」

武市だけが憤怒の形相で和奈ではない者を睨み据えている。

「共にあります」

「共にある必要などあるまい。今すぐ和奈の心から出て行ってくれ」

「武市くん」

「たった今すぐ！」

片膝を立てて拳を握る武市が、和奈に殴りかかるのではないかと思っただろう、桂は二人の間に身を移し、和奈を背に武市の握られた手に手を重ねた。

「落ち着け。まずはこうなった原因を探し出さなくてはならないだろう？」

「あなたはあれを見ていないからそんな落ち着いていられるんだ。あの時の和奈は・・・まったくの別人だったんだ！」

今にも泣きそうな顔で、桂の手を振り払う。

（晋作！　なぜ今ここにおまえは居てくれないんだ！）

叫び出したい衝動を抑え、武市の両肩を抑えて座らせると、くると後ろに向き直る。

「僕の用事が終わったら、一緒に長州へ戻ろう。いいね？」

「・・・いいえ」

「近藤くんを斬っても、起きた事実は変わらない。それは君にも判っているだろう」

判っていますと辛そうな顔で俯いた和奈は、それでも桂に視線を戻した。

「長州には帰れない」

【人をその手にかけるよりも以前に、あいつは人を何度か斬った事がある】

高杉のその言葉を、今漸く桂は理解することができた。

（恐れもなく刀を手に行けるはずだ）

稔麿の魂が和奈の心に入り込んだとすれば、池田屋襲撃があったあの日しかない。松陰の魂を持ってこの時代に紛れ込み、第一の弟子である稔麿の魂が和奈に入り込んだ。

だから和奈は藩邸を懐かしいと言ったのだ。

「まだ近藤くんを狙うつもりでいるのか、それだけ聞かせてくれ」

「わかりません・・・でも今は斬る気などありません。でも、もしまた会う事があれば、その時どうするのか・・・私には判らないんです」

「斬らせるものか」

これ以上その手を血に染めさすわけにはいかない。それでなくとも、和奈は女子の身でありながら人を斬りすぎているのだ。

「無理矢理連れ帰っても、この子は京に戻ろうと脱藩するかも知れない。そうなれば追伐は藩からも出る。武市くん、危険を承知の上で君に頼りたい」

「言われずとも側を離れるつもりはない」

観念するしかない。京を離れられないのであれば、和奈の事を考えながら時勢を見るしかない。

「ありがとう」

自由に動けなくなった身では、和奈の事だけに時間を割くのは無理がある。それでなくとも土佐の動きによって、薩摩も芸州も神経を尖らせて居る状況なのだ。今後どう土佐が動くかによって、長州も含めた三藩で綱渡りをしなくてはならなくなる。

「くれぐれも、短気は起こすなよ」

武市にそう念を押した桂は、立ち上がると戸口に歩み寄り襖を両手で開いた。

「あ・・・すみません」

申し訳なさそうに頭の後ろを掻いた中岡の顔も強張っている。

「他言は無用に願う」

「承知してます」

大体の事情を知っていた中岡ではあるが、和奈の身の上におきていることは話しに聞いただけで現実として実感する場面に立ち会っていたわけではない。実際にその耳で聞いた事に対し驚くのは当然で、武市や桂と同様に困惑するしかなかった。

「数日おきに宿を変えるように。私はこれから竹屋に戻って事後の指示を出してくる」

護衛にと中岡が連れ立って行くと、しんとした空気が薄暗い部屋を満たした。

伊庭の所へ出かけてくると、自室で布団の主となっていた近藤に告げた土方は、屯所を出る前に沖田の所へ顔を出していた。

「どうだ、具合は」

ここ数日、沖田の体調が芳しくない。以前よりも体重が落ちているのは、痩せ始めた手首や首下を見れば一目瞭然だった。

「土方さんの薬に団子で、幾分気が軽くなりましたよ」

「おまえの甘党は死んでも治らねえよな」

枕元には串だけを残した皿が積み上げられている。

「赤井くんが遊撃隊に居たって、本当ですか？」

「ああ。勝殿が手配したんだろうさ。幸いあいつは……」

ついと出かかった言葉を、土方は喉の奥に引込めた。

「根性があるのはおまえも認めてるだろう。隻腕になったからと、腐って終る奴じゃない」

へえっと以外そうな顔になる。

「えらく気に入ったもんですね。これじゃあ僕はいつまでたっても赤井くんを斬れないなあ」

「てめえが言うのと冗談に聞こえねえからやろめ」

小さな声で可笑しそうに笑う沖田は、

「隻腕でも、動く体が残っているんです、なんの不都合もありやしないですよ」

と宙に眼を向けながら呟いた。

「……さて、ちっと出てくる。あんまり団子ばっか食うんじゃねえぞ」

余計なお世話ですとふて腐れた沖田は、枕元の皿を取ると土方に突き出した。

「隊士思いの副長を嬉しく思いますよ」

ふんっ、と鼻を鳴らして沖田の手から皿を受取り、大人しく寝てろよと指差してから障子を閉めた。

山門を潜ると、路地の暗がりから赤井が小走りに駆け寄ってきた。

「てめえ、もう一本の腕を斬り落とされなくなかったら、暗闇からいきなり走り出して来るな」

「土方さんなら大丈夫だと思ったんですよ」

袴姿ではない赤井の姿をさっと一瞥し、案内しろと祇園の方角へと歩き出す。

「で、どうだ。腕の方は」

「随分慣れました。幸い利き腕は残ってますし、然程不便は感じません」

「ほう。刀の扱いはどうなんだ？」

それは苦勞が耐えないと肩を落とす。

「一つ聞きたい事がある」

声を抑えた土方は、和奈の剣術は心形刀流だと口にした。

「あの時、奴は昔からの馴染みに会ったように、おまえを呼んだ」
心臓が早鐘を打ち出す。

「同じ臭いがするんだよ、奴とおまえは。そこに来て流派が同じ・・いや、まったく同じと言うわけじゃないか。奴は示現流も使ったばかりか、芸州では・・あれは山鹿流だった。一体何なんだ奴は」

「俺が一番知りたいですよ」

厳島で聞いた話も信じがたいものはあるが、肯定すると昭和での和奈の太刀と、ここへ着てからの太刀との違いを上手く理由付ける事ができてしまう。

(俺にも狂気があるかも知れない)

だが片鱗すら見えてこない。

「で、本当のところ、どうなんだ？ てめえを疑うつもりはないが、こう符合する点があっちゃあ、疑ってかかりたくもなるってもんだ」
「と言われても、俺にはさっぱり」

本心からの言葉だった。だから土方もそれ以上は何も問い詰めなかった。

「復帰の件、すまなかったな」

「えっ？」

「あそこで勝殿に食ってかかるのは道理にあわねえと、俺には何も言えなかった」

「いえ・・大丈夫ですよ。ちゃんとこの腕で刀を振れるようになったら、必ず戻ります」

横を歩く赤井の顔を見下ろす。

「いい心がけだ」

伊庭が酔って寝てしまわないうちに行かねばと急かされた土方は、進める足を速めた。

五月二十四日。参内した徳川慶喜は、薩摩、宇和島、土佐、越前からも了承を得ていると兵庫開港と長州征伐の勅許を下すように、朝議の場の上奏し、跳ね除けたものの引かぬ慶喜に押し切られる形で、朝廷はその夜「止む無し」との朝令を出した。

其之二 無逸という志士

止んでいた雨が再び降り出したのは、大久保と小松が百万遍に在る土佐藩邸へ入ったすぐ後だった。

「やれやれ、濡れずにすんだようじゃな」

庭先を濡らし始めた雨が次第に音を増して行く。

「お二方はすでにお見えになっておられます」

玄関に出迎えに出て来た谷守部は挨拶を述べると二人を奥へと誘った。

月の照らさぬ庭を横目に、大久保と小松の二人は灯りの灯った部屋の前で一旦立ち止まり、中の様子を伺ってから声を発した。

「失礼致します」

座して障子を少し開け、さらに膝半分まで開いて顔を見せてから、残りの障子を押し開けた。

「薩摩藩家老、小松帯刀と申します。これに居りますのは大久保一蔵と申し、御小納戸頭取兼務する御側役にございます」

上座に座す二人の男に頭を下げてから部屋へ入った二人は、ゆっくりとその場に腰を落ち着けた。

正面に座しているのは松平春嶽、伊達宗城の両名で、その顔はこの天気と同様に曇ったものとなっている。

昨日、摂政の二条斉敬、尹宮朝彦親王、山階宮晃親王、前関白鷹司輔熙、内大臣近衛忠房、権大納言一条実良、同九条道孝、同鷹司輔政、議奏に復帰した正親町三条実愛、長谷信篤が朝廷側から、徳川慶喜、京都所司代桑名藩主松平定敬、老中板倉勝静、同じく老中の稲葉正邦、若年寄で大多喜藩主の大河内正質と、先に慶喜と会議を行なった四候の内、容堂と久光は欠席し、松平春嶽と伊達宗城だけが朝議に参内し始まった朝議は、夜半を越え朝ももう間近という頃になってようやく、兵庫開港と長州寛典についての朝令が下り幕を閉じた。

事は簡単ではなかったと、宗城が朝議の経緯を話し始めた。

「防長の件については、摂政二条殿より、上京しておる諸藩や我ら四公からも寛大な所置をと望む声が多く、慶喜殿からも同様の言上があったと、朝議にて寛典のお沙汰書を下されるよう進言なされた。兵庫開港については、先帝が止め置かれていた議案ではあるが、慶喜殿はすでに議論の余儀なき時勢だと言上し、諸藩の建白書ばかりか、四候の意見も同様に申し上げられ、天皇はこれを止むなしとし、御差し許しに相成った次第である」

朝議が休憩に入ると慶喜は春嶽を呼び出し、今日の奏上について、幾日かかるとも決定しないのであれば退朝する気はないと、脅しにかかった。それがただの虚勢でないことは春嶽にも解った。かと言って、久光や宗城の敵に回りたいくもない。親藩としての立場もある。一番苦難を強いられたのは春嶽かも知れない。

そして翌日未明にまでもつれこんだ会議に辟易したのか、二条は散会を申し立てた。

「二条殿は幕府より申し立たる、長防を寛大に処し兵庫開港をすべしとの趣意を、御同意と思っていらっしゃるなら、会議を続けるべきだと思います」

顔を鷹司輔政へと向けた二条は、その後居並ぶ者の顔を見回した。
「えいりよ叡慮もこれを可と仰せであられる。二条殿も抛なき事と思っておられるのなら、速やかに勅命を下して然るべきでありましょう。大樹公の是非、願いを納れられずは因循となり、そのために大樹公が職掌を勤め兼ねると辞職ともなれば、天下は直ちに動乱に及び朝廷も恐ながら今日限りと存じます」

「なんとたる不心得であるか。朝廷がこれ限りとは、口が過ぎようぞ！」

輔政の父である輔熙が息子の出すぎた暴言を嗜める。

「いや、誠に其の通りである。二条殿が此度の件を納めるおつもりがないと責められても、致し方ないではありませんまいか」

出揃った公卿らにまで非難の矛先を向けられた二条は、空が白み

始めだした頃、漸く折れて兵庫開港と長州寛典を奏請することとなり、十五才の若さで踐祚せんその義を行なった睦仁天皇に勅許を得る事で議会は終結した。

翌日にまで及んだ朝議の内容を宗城が語り終えると、大久保は膝の上に置いた両手を固くし握り絞めた。

「よもやこうも四候のご意見が揃わず。慶喜殿の思惑通りに進められるとは」

「言うな。余とて齒痒いことこの上ないばかりじゃ。土佐公が欠席を続けられ、春嶽殿には仲裁に入られてしもうては手など打てようものか」

宗城が責めるように春嶽へ視線を流す。

「余が二公と意見を同じくしたとて、慶喜殿のご意見は変わらぬであらう。そう見て取っただけじゃ。それに長州藩への寛典は取り付けられた。征伐にならなかつただけでも良しとせい」

欠席したとは言え久光は納得した訳ではない。土佐藩邸へ出なかったのは、西郷を使って事前に容堂の意志を確認したにも関わらず、この様な結果となった事に対し気分を害しての事なのは明白だった。庭に落ちる雨を忌々しげに見ていた大久保は、腕を組んで同じく庭へと視線を向けている小松の横顔に視線を戻した。

（正面から慶喜殿を屈服させられぬのであれば、手を変えねばなるまい）

このまま幕府が政の座に付いていては、何れ西欧列国がこの日本に流れ込んでくるのは必至と見ている。そうなれば、内部の体制が一本化していないこの国では推し留めるどころか、さらに不平等な条約を締結してしまいかねない。現に幕府は押し切られているのだから。

（この国を夷狄の好きなようにさす訳にはゆかん）

「長州征伐を、よくぞ引き下げられましたな」

「慶喜殿も馬鹿ではない。兵庫開港の勅許を取り付けられるのであれば、雄藩を敵に回してまで征伐なぞしようとはお考えめされまい」

久光がこの度幕府に腹を立てて居るのは、勅許も得られてないにも関わらず、兵庫開港の実施を日本に在中する各国公使に公約した事にある。

朝廷からは二十二藩に対し、慶喜の上奏について意見具申するよう上洛の命を下していた。にも関わらず、慶喜は上洛して来た諸藩が意見具申する会議を開かせもせず公使に公約してしまったのだ。四候が今日に集った時にはすでに手遅れだったと言う事であり、初めから慶喜には四候のみならず緒藩の意見など聞くつもりはなかったと言う事になる。

「あの方が水戸藩のご出身であるとは、どうしても思われぬ」

水戸藩は尊王の志が秀でて強い藩だ。光圀公の姿勢から「幕府より朝廷尊奉に重きを置く」のが家訓ともなっている藩である。その家訓があったからこそ、水戸藩士たちは藩に迷惑が及ばぬよう脱藩し、井伊を討ったのだ。

「しかし慶喜殿と幕府との折り合いは決して良いものではない。どちらかと言えば幕臣に睨まれているお方だ。今度の兵庫開港についても、大老井伊らが強硬した政の後始末に過ぎん。内々はそれで済むが、諸外国へはこの道理を押し通すことは至極難しい問題であると解ってるがゆえ、開港について余は致し方なしと考えておる」

春嶽が心根を語るが、大久保の心には残らない言葉だ。

（国の基盤がままならぬうちに、異国からの干渉を受ける開港を認めては、今後の日本はない）

その思いだけが一番強い。現に開港された港では異人が徘徊し、藩の決めた条例を無視する言動もある。

先に起こった生麦事件が良い例である。

藩主の行列を横切る事はご法度。その仕来りを在中する公使にも伝えてあったのだが、イギリス人は騎乗したまま行列を横切ってしまった。無礼と、薩摩藩士が斬りかかって咎める藩などありはしない。慌てたのは幕府だけだった。

「今ここで過ぎた事を詮議しても仕方なからう」

「じゃが経緯も大切であろう。朝廷は我ら緒藩に対し意見を述べよと御命じになられたのだ。それを愚弄する所業に出たのは慶喜殿ではあるまいか」

春嶽は出す言葉を失い、宗城は会話に参加せず座っていた容堂に対し、四候連名で抗議すべしと説いた。

その様子を反対側の部屋から眺めていた谷守部は、頬杖をついたまま問いかけた。

「あれが薩摩の大久保公ですか」
福岡と乾は互いに顔を見合わせ、振り向いた谷に頷く。

上土の家系に生まれた谷は、江戸で飢肥藩おびの儒学者安井順作の門下に入り、帰藩後に藩校である致道館の史学助教授に就いた。武市とも既知であり、一時は尊攘運動で思想を同じくしていたが、長崎を訪れた際、夷国の文化を目の当たりにし攘夷は不可能と悟り、中岡が起こした陸援隊に加入を希望。以後は薩長のみならず他藩の志士らと倒幕のための周旋に駆け回っていた。

「お側におられるのは家老の小松殿だ。こちらもなかなか、捨てた人物ではない」

乾の声が楽しそうに響く。

「朝廷への伺上書を出すって事ですが、我が藩は薩摩や宇和島、越前と事を進める気があるんですか？」

「あるからこうして集り、ない知恵を搾り出そうとしているのではないか」

「乾殿は容赦がないのう」

福岡は笑うが、乾は至って真剣にそう思っている。

「容堂公は数日後に京を発たれる。それまでに土佐の同意も取り付けておきたいのだろうが、未だ大殿は首を縦に振られぬときだ。困る以外の言葉など出んのは、私も大久保公も一緒だ」

「西郷殿からの要請は飲まれたと言うのに、四候会議では欠席続き。薩摩のご機嫌を伺えとは言いませんが、今後薩摩との交渉がやれず

らくなるのは必至でありましょう」

「わざわざ老公お二方と、薩摩の重鎮が顔をそろえて居るのじゃ。土佐なくてはと思うところがあるからじやろう。そう心配せんでも良い」

しかし、と乾は遠目に見える大久保の姿を捉えた。

（このまま指を銜えて見ているほど、大人しい方ではあるまい）

だから乾は念を押しに出かけたのだ。薩長芸に土佐を銜えておきたいと考えたのは、薩摩が何かしらの策を講じた後では遅いと思っただからだ。

「慶喜殿が四候を押し切った以上、京に留まっている由もない。帰り支度は整えておきたまえ、谷くん」

「私ですか？」

「残りたいと言うのであれば、それ相応の理由付けを考えたまえ。容堂公は影でそこそ動かれるのが嫌いなお方だからね」

はあ、と氣のない返事を返した谷は、中岡もかと尋ねた。

「彼には色々と動き回ってもらわねばならんゆえ、容堂公には京の情勢は必要であろうと許可を得ている」

「それに私も加えて下さい。ああ、なんなら、陸援隊の統率に必要とでも」

「陸援隊を出されては、嫌とは言えませんが、乾殿」

「私より福岡殿から大殿に進言して下さいませ。その方が通日も早いでしょうし」

藪蛇だとしかめっ面になった福岡は、谷の背中を小突いて立ち上がった。

「しかと聞き届けた。貸しはちゃんと返せよ」

にやりと笑った福岡は、肩を揺らしながら障子の向こうへと消えて行った。

五月二十六日。容堂が御暇乞いを申し立て、幕府がこれを承認し

たことにより土佐藩邸は帰り支度の忙しさとなり、容堂と共に福岡も土佐に帰藩するようにとの命が下った。そして翌日の二十七日。四候連盟で慶喜に対して抗議の建白を提出した後、事は終わったばかりに容堂は京を後にした。

容堂と福岡を見送った中岡は西郷のもとを訪れ、土佐藩小目付の毛利恭輔、谷や乾と議論を交わし、薩摩との盟約について賛同したと告げた。

「まだ油断は出来ません。参政のお三方と小目付役、中岡くん率いう陸援隊が賛同したに過ぎません。まだまだ安心でけんちゅうのがおいの意見でござす」

肝心の容堂の賛成を取り付けたわけではないのだ、西郷の心配もよく判るところである。

「長の志士も京に入って居うと聞いておいます。そん者達と談義を重ね、武力倒幕への意思確認をせなんもはん」

武力倒幕。大久保がすでに幕府を見限り、四候会議の失敗を経てそこにたどり着いているのは予想の範囲でしかなかった。だが西郷自らその言葉を口にすると言う事は、大政奉還が失敗する前提で動き出しているということに繋がる。

「やはり西郷さんも、慶喜殿が大政奉還を退けるものとお考えですか？」

「万が一を考えてでござす。一蔵さもおいも、そうなると決めとう訳ではあいもはん」

大政奉還以外に、幕府に政権を返上させる手立てがあるなら、武力を以って敵対するつもりはないと西郷は付け足した。

「そいどん慶喜殿が素直に政権を返上すうとは考えられません。でくう事は長州や芸州と意見を合わせうのが必要と考えておいます。中岡くんもおいもいでも動いて欲しかと思っておいもす」

「勿論、助力は致します。在京する薩長藩士も、討幕決行の議を決定しています」

ほお、と西郷の顔に笑みが広がる。

「さすがは中岡くん。やう事に卒があいもはんな」

「これは乾さんも同意している事です」

「土佐藩も一枚岩じゃなか、と言うこっじあなあ」

「残念ながら。薩摩や長州のようにはいかないんですよ」

「だから気苦労が絶えないのだと、中岡は肩を窄めた。」

「列侯会議で幕府を抑えれんごつであれば、打つ手は限られてきもす。一蔵さあもそんなもいで動くに違いあいもはん」

西郷も同じ考えであるのかと中岡は尋ねた。

「幕府に義を見つけれん以上、進むべき道は一つと考えておいもす」

これはおちおちとして居られない。大久保がすでになんらかの工作を始めたのが明白である以上、船越らとも再度談義を重ねる必要があると焦りを感じ、時間を割いてくれた西郷に礼を述べた中岡は、薩摩藩邸を辞去するとその足を祇園へと向けた。

なにが哀しいのかと聞かれても、今の和奈にはその理由を説明する言葉が見つけれず、部屋の片隅で、沈黙したままの武市を横目に落ち着かない時をすでに一刻は過ごしている。

「・・・・・・」

言葉を口にしようと思うのだが、何を話しかければいいのか検討もつかない。

「一人にしてやりたいが」

和奈の困惑を感じ取ったのか、武市が口を開いた。

「今のおまえを人にはできん」

「はい・・・あの、聞いていいですか？」

いまの和奈は和奈なのだろうか、視線を移した武市は探るような目を向けた。

「なんだ？」

「吉田稔麿さんって、桂木さんもご存知なんですか？」

「・・・池田屋事件は知っているな？」

「私がここへ来た時の事ですよね」

逃れてきた者達が門外で自決し、藩邸の門を閉ざした事で桂は乃美を責めていた。

「吉田くん個人と親しかった訳ではない。久坂くんや井上くん、桂さんらと会合を重ねてはいたが、表立った場所に出て来ることはなかった吉田くんと、話しをしたことはない」

しばしの沈黙が流れ、和奈は一度天井を仰ぎ見た後、武市に顔を向けた。

「久坂は頭の切れる男だから、意志を同じくする者に時勢を説いて回ったが、家の事情で国を出遅れた後ろめたさもあったし、出た頃には久坂が尊攘派の上に立つ立場になっていたから、緒藩の方々と論じる機会はなかった。弁舌をふるうのが苦手な高杉も、自ら行動することで自分の意志を皆に示した。だが私は何をしたんだろう。」

松陰先生の死も救えず、同志たちも救えなかった」

武市の顔が引きつっている。目の前に座るのは、松陰から「無逸」の字を与えられた吉田稔麿、その男であると確信できたのだ。

「武市さんも同じ思いでいらっしゃるのは、これまでを見てよく判っています」

「同じでは・・・ない。私は土佐という国で事を成し遂げたかった。義を以って藩に仕えるのが私の志でもあったからな。脱藩を勧められ、長州に亡命しろと言われても、あの頃の私はまだ容堂公を信じていた。その過信が多くの中間を死に追いやるとも考えずに」

唇を噛み締めた武市は、まっすぐに向けられる目から視線を外した。

「脱藩して意志を貫くのが正道であると思いません。藩論を統一し、時勢の並に国を乗せようとしたあなたの志は立派だと思います」

「・・・今更、過ぎたことを語るために、和奈の心に残っているのではあるまい？」

「大切なことです。井伊直弼の起こした安政の大獄からすべては始

まった。いえ、ペリー率いる黒船が日本に來航したときより始まっていたのかも知れませんが。我が師はその眼で黒船を見た。そして国の存亡を危惧されたのです。あの頃の先生は、幕府を見限ってはいなかった。至誠を以ってすれば、富国強兵の道を幕府も歩むと信じていたのです。土佐勤王党を作った時のあなたの様に」

「俺と一緒にされては、松陰殿も浮ばれまい」

「・・・勅許もなく幕府が締結した不平等な条約を先生は憤慨なされた。そして幕府に義はなしと、長州一国を強くするために藩に働きかけたのです。しかし、至誠を貫いて成した言動のために、先生の名は井伊の耳に届くところとなった。周布さんも、大殿も先生の身を案じて投獄さなされたが、井伊の手は執拗に伸びてきた」

そして松陰は江戸に送られ、幾度もの詮議をうけ、ここでも至誠を尽くしたばかりに斬首という結末を迎えるに至った。

「井伊が造り上げた幕府の汚点を拭わなくてはなりません」

「まさか・・・きみがそれを成そうと言うのではあるまいな？」

そんな力があれば、自刃していいと和奈は笑みを浮かべた。

「ならば・・・その体より出てはくれまいか」

一度は懇願した事だ。すんなりと聞き届けてくれないと知りつつ、武市はどうしてもそう言わずに居られなかった。

「この者が望めば・・・いや、私が望むべきなのかも知れない。しかし、今はその時ではない」

ダン！ と足を踏み鳴らして立ち上がった武市は、和奈のそばに歩み寄るとその両肩を掴んで顔を覗き込んだ。

「これ以上、和奈に負担を強いるな！ もう十分だろう！」

困った顔で薄っすらと笑みを浮かべた和奈は、そっと武市の手に自分の手を重ねた。

「私は・・・誰なんでしょう」

「！」

「思いが自分のものなのか、松陰と言う人のものなのか、それとも吉田さんという人のものなのか・・・境界線が曖昧になって・・・」

・自分でもよく解らないんです」

手の上に乗る和奈の手は小刻みに震えている。

「っ！」

両手を放し、和奈の背中に回し引き寄せる。

「しっかりしろ。今のおまえは桂さんの甥、和太郎だろう？」

「桂さんの甥・・・」

「長州に戻ろう。村木殿もさぞ心配なさっておられよう・・・戻ったら、おまえは刀を捨てるんだ」

「でも」

「捨てて・・・女として生きてくれぬか」

「女として・・・ですか？」

そもそもが女子なのだからと、武市は困惑する和奈に苦笑を浮かべるしかない。当の本人が女としての性別を意識していないというのも、これまた不思議なことなのだが、松陰の魂だ吉田稔麿の魂だと性格を豹変させてしまうのだから仕方がないとも思えた。

「上士身分をもらった身ではあるが、村木家から嫁いでくるのに不相応な家柄ではない。戻ったら、正式に村木殿へ話しを通す」

「えっ!？」

驚く顔は自分のよく知る和奈のものだった。

「長州に庇護されることになってから、ずっと考えていた事だ。おまえはもう刀を持つべきではない」

はい、と素直に聞き入れるとは考えていない。無理強いをしてでも刀を取り上げておくべきだったと後悔したから、今出した答えを引っ込めはしないと武市はすでに心を決めている。

「これについては、桂さんの了承も得ている」

「そんな！」

「俺では不服か？」

「不服とか、そう言うことじゃないです」

ブンブンと顔と両手を振る。

「ならば文句は聞かぬ。すでにおまえは武士の娘となっている。時

として理不尽な命令にも従わねばならん時があるものと思って諦めてくれ」

意地悪そうに口端を挙げて笑う武市を、和奈はキツと睨み挙げた。「怨んでくれても結構。もう決めた事だ、違えぬと覚悟としておけ」困り果てる和奈からは、もう稔麿の気配は感じ取れなかった。それに武市は一つの確信を得た。政から身を遠ざければ、和奈が和奈で居ることができると言う事を。

和奈を連れて小川亭を出た武市は、その足を桂が逗留する吉田屋へと足を向けた。

吉田稔麿、と桂は遠い記憶の底へと意識を沈めていた。

吉田松陰から宜しく頼むとの文をもらったのは、稔麿が三度目の東下となった時だ。江戸長州屋敷で相對してみれば、自分の意見をしっかりと持ち、時勢の流れを鋭敏に感じ取る才覚を持ち合わせている。その稔麿を、この頃の桂は抱えておくべき手駒の一人として一目置くようになった。

安政七年、井伊直弼が桜田門外で暗殺されると、尊攘派の支持は水戸藩と薩摩藩に流れ、長州藩はころころと変わる藩政のおかげで志士達からは見放されつつあった。長州藩で尊攘派として頭角を現していた久坂も、巻き返しを図ろうと稔麿の情報収集に期待を寄せていた。

桂と久坂の案により、稔麿を兵庫警護に参加させた後、兵庫で脱藩させ西国の情勢探索に向かわせたのもその一貫だった。百姓一揆の原動力を、京にも波及できないかと目論んだのである。約半年に渡って稔麿はコメの相場や百姓らの情勢を調べ続けた稔麿は文久元年、備前藩の陪臣である岡元某と共に東下し、備前屋敷に匿われの身となった。それだけなら良かったのだが、岡元が藩に仕えてはとうだと強く切望していると知り、桂と久坂は慌てた。なんとかせねばと、幕吏になりたいと言い出した稔麿を、長州藩邸に出入りしてい

た柴田東五郎に頼み込み柴田家へと移すことに成功した。柴田は旗本田中市郎右衛門の用人だから幕府に伝手がある。その策が功を奏し、知行五百石の旗本で幕府の奥右筆を務める妻木伝蔵に取り付くことができた。稔麿はここで監察を任され、その繋がりから妻木は長州に好意をもつ幕臣となるのだが、目付役に就いた妻木が幕府に対し長幕調停の具申をしたことにより失脚、隠居の身となり、稔麿の幕府介入は夢と消えた。

しかし稔麿も桂たちも落胆はしなかった。時勢は日を追うごとに激変している。この頃になると幕吏になったからとて、内部から変えて行くのは至極無理と誰もが判る状況になっていたのだ。

江戸では安藤対馬守が老中を退き、薩摩の島津久光が兵を伴い上洛して来た。沸きに沸いたのは尊攘派の志士達である。在京の志士たちは薩摩が立ったと誰もが疑わなかった。しかし久光には倒幕など念頭になく、側役となっていた大久保も公武合体を強いた後の倒幕しかないと考えていた。自然、志士たちとの間に摩擦が生じる。そして寺田屋騒動と呼ばれる薩摩藩士による薩摩藩士の鎮撫事件が起きた。

伏見藩邸に滞在していた藩主毛利定広が朝廷へ伺候に出向く途中を狙い、帰参を願い出た稔麿は大罪を詫びると、帰参して罪を償いたいと上書を差し出した。

安政二年十月の大地震があった時、江戸の藩邸で定広と稔麿は一度顔を合わせている。大地震だったにも関わらず、人命救助にと揺れを恐れもせず、崩れた屋敷から下敷きになった者を担ぎ出していた稔麿は定広の目に止まるところとなり、名を知られる事となった。

長州は藩士に寛大な藩である。学問に剣術にと精魂尽くす者や、有能な者には特に寛大となる。それは吉田松陰への待遇や、何度も脱藩を繰り返した高杉晋作を、いざという時には要職に据える事からも窺い知れる。言い方を帰れば、若者に甘い藩風なのである。

無論、稔麿にもその寛大な処遇は適用された。

「おまえが言いたかったのはこれなのかい？」

宙を見つめる桂は、在りもしない幻影をそこに描き出していた。

「おまえの気苦労の種の一つでも取ってやりたがったが、すまん。俺はこの通り死した人間となった。あとは何とかしてくれ、小五郎ならできるだろ？」

「いつも無理難題を言ってくれる・・・」

「だが、いつもその難題をどうにかしてくれただじゃないか。あいつの事もどうにかできると信じてる」

「まったく・・・こんな大事な時に・・・どうして、おまえは側に居てくれないのか・・・」

「阿呆が。小五郎くんがそんな弱音を吐いてどうする。一番大変なのは和太郎だろうが」

病魔に冒される前の元気な高杉の顔がにやりと笑う。

「因果・・・とは言いたくないが、それ以外に何を以って説明すればいいのか解らん」

「一人じゃないだろ？　そう気張るな。おまえにはやらねばならん事が山ほどあるんだ。一つくらい他人様に頼っても損はないぞ？」

武市の事を言っているのだろうと判った。

「和太郎には俺の心根を伝えてある。と言う事はだ。稔磨にもちゃんと伝わっていると俺は信じる。だから小五郎、おまえも信じてくれ心根？　それはなんだと問いかけようとした桂は、いつの間にか転寝をしていた自分に気付いて顔を上げた。

「・・・本当に嫌な奴だな」

自分が望んだ想いで高杉が夢にと出てきたのか、それとも本当に高杉が語りかけてきたのか、桂には解らなかった。

足音が廊下から響いて来た。

「失礼する」

声の主は少し襖を開けて顔を覗かせた。

「どうした？」

武市の後ろから和奈も顔を覗かせる。

「入りなさい」

着物の裾をただし、膝を揃えて座った先に二人が腰を落ち着けた。

「長州へ共に帰っても差し支えはないか？」

返事を口にする前に、桂は和奈をちらりと見やった。不服そうな顔が畳みに視線を落としている。武市に何か言われ、渋々顔になっているのは間違いないと見えた。

「山縣くんと弥二郎が京に滞在することになるから、君達を無理に引き止めておく必要はないよ」

「有り難い。同行して共に長州に戻る」

「和太郎も、だな？」

武市は無言で頷いたが、和奈は納得しきっていない様子だ。

「君の判断を良しとするよ。和太郎、おまえも思うところはあるだろうが、ここは私と桂木くんに従ってくれ」

「はい・・・」

「いい子だ」

近藤が狙いならば京に留めておくのは危険だ。付き添っていたのが一人で、腕がたたなかつたからこそ武市が割って入り、その場から逃れる事ができたのだ。これが土方や斉藤といった腕利き相手なら、どうなっていたか知れたものではない。

桂にまで釘をさされて諦めたのか、食事となる頃には和奈も笑みを浮かべて話しをするようになっていた。

稔麿が経験したすべてを和奈が知っているわけではない。武市はホッと胸を撫で下ろしたい衝動に駆られた。

（話した事はないと言ったが・・・）

稔麿と会う事も度々あり、話すどころか天誅に及ぶ時に行動を共にして居る。

長井雅楽が唱えた公武一和に基づく「航海遠略策」を採用し、公武合体を藩論とすると、久坂は十二箇条の弾劾書を藩に提出した。藩が勢力争いで二分されるような事態になればそれこそ大事と、毛利敬親は長井に帰国を命じた。その一方で久坂は朝廷にも働きかけ、公卿正親町三条実愛に長井が提出した建白書の中に朝廷を誹謗する

内容があると進言。これを受けた朝廷は、上洛していた藩主定広に
対し「朝廷御処置聊謗詞に似寄候儀も有之」と遺憾の意を伝えると、
長州藩は朝廷に対し陳謝の意を述べ、長井には中老職のお役御免を
申しつけた。

帰国した長井を、久坂と伊藤俊輔が暗殺のために追廻した結果、
久坂は謹慎を言い渡されてしまう。

波紋は幕府と朝廷にも及び、航海遠略策を支持したとして下総国
関宿藩主久世広周が老中を罷免され、正親町三条実愛も権大納言と
議奏辞職に追い込まれた。

毛利敬親は重臣らと意見を交わし、破約攘夷を藩論とすることに
決定し、これによって長井は藩を乱したとして切腹を申し付けられ、
長州は攘夷路線を進み始めた。

薩摩がイギリス人を斬った生麦事件をかわきりに、京でも尊攘派
の活動が活発になり出していた。井伊直弼の下で尊攘派の弾圧に関
わった者への天誅が毎晩のように行なわれ、その首が竹やりに刺さ
れ晒される光景も、京の市中に不穏な空気を漂わせる原因となった。
丁度土佐勤王党が頭角を見せ始め出した頃である。

謹慎が解かれた久坂に、武市はすぐさま接触を試みた。長州藩の
尊攘派のリーダー的存在で、在京の藩士からも名高い評価を得てい
る。会っておいて損はないと考えての事だった。

付き合いが始まった久坂から、吉田松陰の説く「草莽崛起」の思
想を聞いた武市は、松陰のこの思想に共鳴を覚えた。土佐藩上士が
動かないのであれば、下の者が動いて藩を動かせばいい。そうすれ
ば、時勢を考え藩主容堂も動くだろうと信じたのである。

「すでに緒候に頼むには及びません。草莽の志士を糾合し、義挙す
る他に策はないと、同志の中でも申し合せております。失礼とは
存じますが、尊藩も滅亡しても大義が成れば苦とはならぬでありま
しょう。両藩が共存しなくても、恐れ多くも皇統綿々、万乗の君の
御叡慮が相貫き申さずては、神州に衣食する甲斐はこれ無きかと存
じます」

長州にも薩摩にも、土佐は尊攘運動において遅れを取っている。その焦りが武市を暗殺という手段に走らせた。

長井を糾弾し藩論を攘夷へと転換させた久坂。公武合体路線を強硬に貫こうとした土佐を尊攘派主導の藩政に転換させた武市。二人が巡り合ったのも時の運ではなかっただろうか。

同志と共に京を発った武市、久坂らは、東海道を下り石部宿に入った。総勢二十名余り。土佐十数人の中に岡田以蔵もあり、薩摩藩田中新兵衛の姿もある。

石部宿へ入ったのは、安政の大獄で志士探索から捕縛に至って功績を上げた京の東町と西町奉行所与力の四名で、武市と久坂はこの四名に天誅を下すべく京から付けて来たのだ。

それぞれ打ち合わせどおりに別々の宿屋に入り、夜半になって四人の止まる旅籠屋を襲撃する手はずとなっていた。闇にまぎれて動く影の中に吉田稔麿の姿もあり、この天誅で冷静かつ武士として弁えた行動を取った人物として、同志の間でも評判の上がる事となった。

（人を斬って臆すはずもない）

稔麿が刀を振るっていたとは思えないまでも、その感覚は和奈も共有しているに違いない。でなければ、落ち着き払った状態でそう簡単に日常に戻るものではない。以蔵でさえ、初めて人を手に掛けた時は手の震えを止められなかったと言っていたのだ。

桂も男装させた事を悔いている。松陰に稔麿の二人の魂が本当に和奈の心に宿っているとは今でも信じがたいことではあったが、知るはずのない事柄を口に出している以上、絶対に違うと言い切れたものではないのだ。頭痛の種は減るどころか増すばかりなのである。

「帰ると決まったら、すぐに発つ方がいい。中岡くんに、薩摩への連絡を頼むとして」

桂は廊下と部屋を隔てる襖に顔を向けた。

「山縣くん。君たちにはすまないが、しばらく薩摩の庇護を受けてくれ」

気配を消して近づいたつもりだったのにと、頭を搔きながら山縣と品川が姿を見せる。

「さて、どうしたものか。君たち間者まがいの行動に出なければならぬような真似を僕はしたのかな？」

「とんでもない。身を案じての事です。ここは京ですよ。見廻組も最近是新撰組に負けず劣らずと志士の捕縛に力を入れているんです。加えて將軍の上洛で幕臣の銃部隊までもが大坂から京に入っている。落ち着いていると言われる方が無理ですよ」

「気苦労をかけてすまない。が、私も桂木くんもおいそれと幕府に捕まる間抜けではないよ」

腕は承知していると山縣は畳みに手を付いた。

「京には薩摩芸州だけでなく、幕府よりの親藩藩士も多く入っております。木戸さんはまだ手配者として名を連ねているんですし、長は朝敵のに汚名を被ったまま。自分らだけならまだしも、筆頭である木戸さんに何かあっては、高杉に申し開きが立ちませんから」

「うん。幽霊になって殴りに出て来そうだな」

お化けは勘弁だと、寒気を感じたのか品川が自分の腕を摩った。

「ともあれ、京を出るまでは護衛に付きます」

「在京する君たちの安全の方がこれからは大事だ。自重してくれると助かるんだが・・・」

自重していると言っても聞く様子でない二人に、ため息を漏らした桂は伏見までならと警護の申し出を受けた。

翌日の朝、知らせを受けた中岡は、数名の陸援隊隊士を伴い吉田屋へとやって来た。

「土佐藩なら京を出るまで堂々と市中を歩けます。山縣さんたちには申し訳ありませんが、別に手配した宿に移って頂きます。後日、薩摩藩で鼯鼠にしている旅籠屋に移れるよう手立てはつけてありますので、ここはどうか我らにお任せ頂きたい」

土佐藩からの申し出を断るわけにはいかないと、桂も中岡の好意を受けると言い、山縣と品川もそれならばと護衛に付くのを断念

した。

「桂木さんの顔を知らぬ者ばかり集めましたから」
中岡がそつと武市に耳打ちする。

「おまえが思慮深い男で助かる」

へへつと照れるように笑った中岡は、部屋をでると顔を引き締め
て隊士たちに細心の注意を払うよう念を押した。

朝の賑わいが市中に活気をもたらす頃、和奈は桂と武市と共に京
を後にした。

其之三 新撰組と御陵衛士

慶応三年六月。

幕府は京において功績を上げている新撰組に対し、格式を挙げてその功を称える必要があると、会津藩に対し命を下し、新撰組は見廻組格へと昇進することとなった。

不機嫌な顔の土方に反して、上座に座る近藤の顔は晴天のように晴れやかな笑顔を浮かべていた。その二人を見つめる幹部や隊士達の顔も様々なものとなっている。

「この度新撰組は見廻組格として、幕臣に取り立てられるとのご内示を頂いた。土方歳三は、見廻組肝煎格七十俵五人扶持。見廻組格七十俵三人扶持となるのは沖田総司、永倉新八、井上源三郎、原田左之助、山崎烝、尾形俊太郎の六名。見廻組並四十俵、谷周平、大石鉄次郎、安富才輔、吉村貫一郎、岸島芳太郎、安藤勇次郎、茨木司、村上清の八名。その他の隊士についても見廻組御雇十人扶持が与えられる事になる」

手にした書状を読み上げる近藤を横目に、永倉が原田の脇腹を小突く。

「七十俵だってさ」

七十俵五人扶持とは俸禄のことで、知行取りと蔵米取りに分かれる。知行取りは知行地を持っており、その地から収穫される米の収入を得ている事であり、蔵米取りは、現物支給される米の収入を得ているという事だ。一俵の値打ちは米の相場によって変動するが、約四万程。一人扶持は一日の食費で、一人扶持なら一日に米五合、五人扶持なら一日二十五合が支給される。この当時一年は三百六十日しかなく、二十五合掛ける三百六十日で九千合、つまり九石が俵に加算される。現金に換算すると、七十俵五人扶持で凡そ年俸七百六十五万円の収入となる。

「えらく出世したもんだな、俺たち」

「近藤さんは三百俵の見廻組与頭格だとさ」

「三百俵！？　おいおい、そりゃあ・・・」

格式が上がって喜んでいるのは間違いないだろうが、俸禄でしまりのない顔になっているのも間違いないように二人には思えた。

「それに將軍に御目見得えできるんだとさ」

「近藤さんが將軍に！？」

「うるせえぞ、そこ！」

土方の怒声が響き、永倉と原田は肩をすぼめて口を閉じた。

「京都所司代と奉行所は京都守護職傘下だが、新撰組は非公式な組織だったからな。これまでおまえらには片身の狭い思いをさせてきた。が、見廻組格となれば、見廻組とも同格になる。もう見廻組の連中に氣遣いなど不要になるってことだ」

「歳、氣遣い無用はいい過ぎだ。揉め事を起こしては松平殿に申し訳が立たんではないか。が、しかし。氣遣いは必要ではあるが、頭を下げる必要はない。そう思ってくれていい」

「どっちも似たようなもんじゃねえか」

「そうか？」

至極嬉しそうな近藤に苦笑を漏らした土方は、今一度並んで座る隊士たちに、幕臣になったからには、これまで以上に気を引き締め任務に当たれと檄を飛ばした。

「幕臣、ねえ」

部屋に帰る途中の廊下で、沖田はそう呟いた。

「病人になってから俸禄もらえるなんて、幸せ者ですよね」

それは嫌味かと土方も困るしかない。

「いい薬も買えるんだ、そこは喜んでおけよ」

「はいはい。あ、そうだ。今夜も行くんでしょ？」

「・・・ん」

「毎晩毎晩、よく飽きませんね。もしかして、遊撃隊に取り入ろうって算段だったりして」

「馬鹿言うんじゃないよ。馬鹿な武士どもの中で刀なんざ振り回し

たくもねえ」

じゃあ赤井に会いに行っているのかと聞いた後、沖田は小さく咳をする。

「大人しく部屋で寝てろ。ここぞって時に寝込まれてたんじゃあ、たまらんからな」

「わかってます」

幕医の松本良順がはっきりと沖田の病状を労咳だと診断したわけではない。その可能性があると言う事だけだ。これまで数回吐血しているのは、胃の病気の可能性が強いとの診断だった。

（しかし、この咳。胃の病気なんかじゃねえ）

高杉が激しい咳を繰り返し吐血する姿を目の当たりにしている土方には、どうしても沖田が労咳を患ってしまっていると思えなかった。

「なんかあったら知らせを寄越してくれ」

「なーんにもなかったら邪魔しに来るなってことですね」

「嫌な言い方すんじゃないよ」

沖田を部屋に送り届けた土方は、その足を祇園へと向けた。

窓から眺める景色が次第に慣れたものになってくると、自分の心にわだかまる悶々とした気持ちに苛々するようになり、赤井は何度となく祇園に来るのを拒んでいた。

「じっとしてられない気持ちはよく判るんだが」

「そう思うなら、城に置いて下さい」

「そうもいかないと伊庭は笑う。」

「私一人で飲んでて、刺客に襲われたらどうするんだ？」

「隻腕の護衛なんていらんでしょう」

「だから、そう自分を卑下するな。今のおまえの腕なら、そこらに居る剣客よりは腕が立つんだ」

伊庭から太鼓判をもらっても、そう言う当人にまだ一太刀すら入

れることすらできないのだ。褒められても素直に喜ぶ事はできなかった。

赤井は膳に置かれた猪口に手を伸ばす。

「なんだかんだ言って飲むんだから」

「他に何をしろと？」

「赤井くんたら、金猫でも相手にしてればいいのに」

「お金だして女を買いたくないだけです」

「だったら芸妓の一人でも」

「もう、それはいいですって！」

金猫とは回向院の近くで商いをしていた下級遊女の呼称で、揚げ代が金一步かかることからそう呼ばれる。また二朱（金一分の半額）の遊女は銀猫と呼ばれ、江戸では下町の町人がよく使う言葉だが、京ではあまり使われない隠語だ。

芸妓と遊女は異なる。

芸妓は「芸を売って場を取り仕切るのを生業としており、舞踊や音曲・鳴物で宴席に興を添える。身持ちは硬く旦那以外の男とは床を共にしない。芸妓は置屋に籍を置き、茶屋を通して旅籠や船宿等から指名がつくと出向いて芸を披露するが、指名の大半は遊郭で、遊女が来るまでの場つなぎとして呼ばれることが多かった。

遊女は「客を遊ばせる」のを生業としているため、金を支払えば自分の好みの相手と床を共にできる。遊女にも位が在り「太夫」と呼ばれる遊女が最高位で、格子・散茶・梅茶女郎と続いていく。見習いは「新造」と呼ばれ、水揚げした遊女の付き人・身の回りくるわの世話などを任されている。高級遊女の大半は幼い頃から廓で育て上げられる女子や、遊女が妊娠して生んだ女子が遊女として育てられた女子がなることが多い。

二人がやいのやいのと騒いでいると静かに襖が開き、土方の不機嫌そうな顔が暗闇から部屋の中をのぞき込んだ。

「やあ」

声もかけられずに襖を開けたのだから、本来なら無礼と怒鳴られ

るのだが、伊庭は一向に気にする様子もなく、土方を中へと誘った。
「ずいぶんと暗い顔ですね」

「幕臣のあんたなら、その理由を知ってるんじゃないかねえのか？」

「新撰組の昇格ですか。喜ぶべき事だろうに、世の終焉だと言わんばかりの顔で登場する事はないでしょう」

冗談じゃないと、入って来た土方は伊庭の前に腰を下した。

「文句が？」

「ある、って言ったらいいのか？」

「その顔を見ればね」

くくつと笑う伊庭の膳から猪口を取り上げた土方は、その手を赤井に差し出した。

「飲むんだ」

「いいから注げ」

大きなため息を吐いた赤井は、差し出された猪口に酒を注ぐ。

「で、あんたは毎日ここで金子を使いまくって、何やってんだ？」

「色々だね。君も気になる事があるから、好きでもない相手と酒を飲みに来ているんじゃないんですか？」

ちっ、と舌を打つ音が響く。

「緒藩と雄藩が大樹公の奏上を後押しする形をとったことで、幕府は一応平静を保っています。しかし、薩摩と土佐の動きが気になるんですよ」

「土佐公は幕府寄りじゃなかったのか？」

「容堂公はそうですが、藩士たちの動きが活発となっています。見廻組も警戒と監視の目を光らせていますし、何かしら情報を得ておくのは今後のためにもなるでしょう」

伊庭がそう断言するのなら、そのなにかしらの一つでも掴んでいる可能性があると言う事だ。

「で？」

先を促すように目を向けると、伊庭は両肩を上げて酒を飲み干した。

「御陵衛士の動きですが・・・」

「伊東が何か？」

「朝廷から警護を拝命したと聞いていますが」

「ああ」

「・・・最近の薩摩は必要以上に公卿に接触しています。影に見え隠れする長州藩の志士たちも然り。どう思います？」

腕を組み、顎に手をやった土方は思案に暮れる。

「こう言っっては失礼ですが、御陵の警護についた彼らのはぶりの良さは目に余るものがある」

顎に当てた手を放した土方は、目を細めた。

「それ相応の資金を提供する者が影にいる」

「それが薩摩藩、ってことか？」

「確証はありません。薩摩藩士が御陵衛士に接触を図ったところを見た訳じゃありませんし。ただ、可能性として挙げるなら、ない、とは言えないかと」

伊東はがちがちの勤王派だ。水戸藩との繋がりもあるから、朝廷への伝手を取り付け易い。だからと言って、そこに薩摩が介入してくる意図が汲み取れない。

「推測の域を出ていませんから、新撰組として動かれては困ります」
「解ってるよ」

「新撰組隊士と御陵衛士の接触は？」

「伊東が脱退する時に禁止すると確約してる。隊士の引き抜きもだ。これまで双方が接触した気配はない」

自分の知る限りはである。新参者が増え、隊士の監察も徹底させているものの、斉藤と藤堂を欠いた余波は少なからず隊に影響しているのが現状だ。完全とまでは行かないのである。

「勅許が下れば、大樹公と揉めた薩摩も大人しくするほかはないでしょう」

薩摩には大久保一蔵がいる。と、土方は薩摩藩邸で見た顔を思い出す。

（大人しくしているたまには見えないがな）

会津藩と手を組み、長州を京から追いやった藩ではあるが、長州征伐に関しては反対の意見を建白して来ている。影で長州と繋がっているのではないかと睨む土方は、チラチラと見え隠れする坂本龍馬や、片目の男、長州藩士だと言い切った和奈の存在を捨てきれない。それに、大宰府へ遊説に出向いた伊東の行動も腑に落ちない。近藤に語った通り、蟄居の身となっている公卿に接触し、御陵警護の勅命を下させたと考える方が道理に合う気がするのだ。

「私たち遊撃隊は近々大坂に戻るので、祇園散策もそれまでとなります」

「將軍警護はどうすんだ？」

「もともと援軍でしたし、西国の雄藩が京を出れば、大坂へ引っ込んで差支えないだろうと、上からの御達しでね」

土方は黙って座って居る赤井に視線を向ける。

「勝殿は元気か？」

「江戸に帰ってます」

「そうか・・・もう一度会いたかったんだがな」

「赤井くんの新撰組復帰かな？」

伊庭がくすくすと笑いを零し、赤井が頭を掻く。

「あんたに相談でもしたか」

「土方くんに惚れているらしくてね、どうか戻れないものかと相談を受けたんだ」

「惚れっ・・・おまえなあ、それいい加減に言うのやめねえか！誤解されるだろうが！」

「まあまあ。その気持ち解らないでもないから、骨は折ってみるつもりだ」

真顔の顔が伊庭を捉える。

「気風がね・・・赤井くんには似合わないですよ」

「遊撃隊の？」

「ええ。型破りというか、礼儀しらずと言うか。武士として務める

者たちの間では不人気で、新撰組の悪口を聞こうものなら、相手構わず食ってかかるんだ」

赤井を睨みつける土方の目は、どこかしら優しいものがあつた。「隊規を乱されては、私としても処置に困る。多分、克殿も見越していたと思うよ」

隻腕となつた赤井の復帰を取りやめにと申し出たのは勝だ。あの時はそうする他、謝罪に出向いた近藤の立場を組む方法はなかったのだろう。

「てめえが戻りたいってんなら、ちゃんと正攻法で戻って来い」
「そのつもりです」

赤井の言葉に迷いは無かつた。

「残念だな。おまえなら遊撃隊幹部に昇進できる手腕もあるのに」
「買い被りですよ」

「そうかい？ 現に新撰組では組長格だったんだろ？」

そうなつた理由があるだけだ。斉藤に剣術で勝つて、実力になつた訳ではない。近藤は腕だけではないと言うが、大半の隊士たちが組長に望むものは力だ。だから四番隊は編成し直され、組長を張れる面子を集めたのだ。

「まあ、小難しい話はここまでとしよう。改めて新撰組の昇格に、おめでとうを言わせてもらおう」

「見廻組と同格になるのは確かに嬉しいことだ。そこんこだけ、礼をもらつておく」

高台寺塔中にある月真院は、元和二年（一六一六年）北政所の従弟久林玄昌によって亀井豊前守の保護の下建立された寺院だ。臨濟禅宗建仁寺派に属している。御陵衛士を賜った伊東ら一五名は、この月真院を屯所として「禁裏御陵衛士屯所」の札を掲げていた。

新撰組が幕臣に取立てられたと報告に来た篠原泰之進は血相を変えていたが、伊東は動じもせず茶を啜っていた。

「伊東さん、なにを暢気に構えて居るんですか」

「おかしな事を言いますね。私からすれば、そんなに慌てて居る君の方が不思議に思えますよ」

「しかし、新撰組には茨木たちがおります。幕臣ともなれば、新撰組から離脱するのは困難となるのですよ？」

御陵衛士として分離する際、伊東は志を同じくする者を数名残してきている。新撰組の内情探索が名目で、時々だが報せが届いている。

「幕臣になったと言っても、俸禄を頂き、これまでと同じ様に京の守護に当たるだけです。別に困る事ではないでしょう？」

「ですが・・・」

「それより、斉藤くんの行動が気になります。私たちと共に新撰組を抜けた彼の真意がまだ測りかねない。ここで新撰組の事とやかく論議するのは得策ではないですよ」

「藤堂は？」

「彼には彼なりの志がある。新撰組に願える事はありませんから、心配ないように。それと、茨木くんたちには自重するよう伝えてくれませんか。彼らの事だから、幕臣取立てに不服を申し立てかねませんから」

御陵衛士として分離してきた隊士たち全てが、勤王派の真骨頂を持っていない。土方たち幹部を始めとする初期からの隊士たちが、京の治安維持という名目の裏で、志士だけでなく疑いがあるとして町人や商人までも切り捨てる所業に納得できず、伊東と共に分離して来た者も居る。ただ、誰もが御陵衛士としての誇りを抱いている。この点のみが、隊士たちの結束を促していると言える。

「もはや幕府に担がれても得などありはしないと言うのに、近藤くんは両手を振って喜んでいるんでしょうね」

伊東は決して新撰組を毛嫌いしている訳ではない。京の治安維持のための組織であるならば、それはそれで必要な存在なのだ。ただ、時勢に流されず、会津藩や幕府に就く事に懸念を抱いている。

「会津藩が捨て駒として新撰組を抱えるならば、朝廷もそれに沿った組織が必要」

伊東はその意見を聞き、共感を覚えた。朝廷に仕えると言う事は自分の抱いている尊王の志にも沿う。武力を持たない朝廷に、武力を。その魅力は捨て難いものだった。

「斉藤が間者としてこちら側に入り込んでいる可能性もあるのです」「だからですよ。今ここで騒ぎ立てても得はないでしょう？ それより、近藤さんに祝辞の一つでも贈ってあげねばならないでしょう」

「祝辞、ですか」

篠原が苦笑する。

「新撰組が幕臣となった事は、御陵衛士を拝命した我らにとっても喜ばしいこと。それを忘れずに添えておいて下さいね」

伊東は庭へと目だけを動かしした。

（こそそと鼠のように）

気配が動くのを感じるが、こちらの話しが聞こえる位置ではない。恐らくは斉藤だろうと、篠原が部屋に入って来てからずっと、伊東は殺気に近い気を出して威嚇している。斉藤もそれを感じてこの部屋に近づけに居るのは、距離をつめて来ない所から間違いないと思われた。

斉藤の、聖徳太子流剣術道場師範代になった腕前は現在も健在で、伊東はその腕が欲しかった。それだけでなく、新撰組のあり方に疑問を抱いていると伊東は見た。分離前に斉藤を説得しに訪ねた時も、思うところがある風だった。

（演技とも言えるが）

人と言う者は眼だけは嘘がつかない。どんなに隠そうとしても、眼は正直なまでに人の心を映し出す。それを読み取る才があれば、語る言葉が虚偽か真実かを見極められる。伊東はその才がある人物の一人だと自負している。ゆえに、斉藤を信じきれないのである。

「さあ、今宵は此処までに。屯所での言動、外との接触には以後も細心の注意を怠るな。線を辿られれば我らだけでなく、相手にも火

が移ってしまう。それは絶対に避けなければならん」

「承知しております」

篠原が退出して行くと、外にあった気配もしばらく後に消えた。障子を開け、雨の降り出した空を仰ぎ見る。

「どう転んでいくか、楽しみと言うものだな」

將軍慶喜が京に入り、新撰組が幕臣に取り立てられ、薩長芸土の動きも活発となってきた。御陵衛士として、朝廷側でなにが出来るか、伊東は思案を巡らせ始めた。

伊東の懸念は的中し、幕臣取立てに不服を唱えるものが新撰組内
部から出た。

諸士取調役兼監察方浪士調役の茨木司、平隊士佐野七五三之助、
中村五郎、富川十郎らを主に、中井三弥、高野良右衛門、松本俊蔵、
木幡勝之進、岡田克己、松本主税の十名は、幕臣になるのは、会津
藩と幕府二つの主君を頂く事になり、それは武士として面目が立た
ないと近藤に直訴した。しかし近藤は茨木たちの反対を取り合わな
かった。

茨木は月真院に出向き、御陵衛士への加盟を要請するが、新撰組
と御陵衛士との間に移籍を禁止する約定が結ばれているため、伊東は
その要請を断わったのだ。

「会津藩へ出向きます」

伊東を前に、茨木は真剣な面持ちでそう告げた。

「いや、それは待て。君たちが近藤くんに異議を申し立てている以
上、土方くんが何らかの工作を計っている可能性は大きい。会津藩
へ出向けば、何かしらお咎めを受ける事になるかも知れない」

「しかし、このまま幕臣として新撰組に居る事は出来かねます」

薩摩藩に匿ってもらうか、とも考えたが、脱退した者を大した理
由もなく引き受けてくれるとは思えない。

困った表情で茨木を見る伊東は、脱退できる策を考えるので、そ

れまで我慢するように告げ、茨木を歸し、あらゆる方向から茨木たちの身柄を匿う術を考えねばと思っていたのだが、翌日の六月十三日、茨木たちは下売町の京都守護職屋敷に行き、新選組脱退の嘆願書を会津藩に提出してしまった。

出頭した茨木たちに困ったのは会津藩でもある。至急新撰組に知らせが走り、近藤と土方、諸士取調役兼監察方浪士調役山崎烝、文学師範尾形俊太郎、撃剣師範吉村貫一郎の五人が守護職屋敷に駆けつけた。

用意された別室で、茨木らは入って来た土方たちを見上げた。

「馬鹿な真似して、会津藩に迷惑かけんじゃねえよ」

「局長が脱退を認めて下されば、このような事は致しませんでした」
脱退は如何なる理由があってもご法度が隊規だ。だが正当な理由や、会津藩が認めれば脱退も可能となっている。二つの主君は武士にとってあるまじきこと、それを茨木は強く説いた。

「幕臣として京の治安維持だけでなく、將軍の護衛の任にも就ける俸禄も役職に見合った分が支給されるんだ。今までより楽になるだろう？」

「俸禄が欲しいわけではありません。主君に仕える、それが武士の道とこれまでやって来たのです。局長、どうか我々の願いを聞き届けてくれませんか」

そう膝を突き出して声に出したのは佐野だった。

「おまえらの意見を通せば、後々同じ様に脱退を申し出て来る奴が出る。隊規が乱れる原因ともなる。すまねえが、ここは我慢してくれ」

怒鳴る立場でる土方も、場所を弁えて居るのか落ち着いた口調で茨木たちを諭しかかってきた。

「どうあっても脱退はさせて頂けないと？」

「二つの主君と、おまえらは言うが、会津藩は親藩として幕府に仕えている。会津藩士からしたら、主君は二つなわけだ。それとどう違うってんだ？」

この言葉に茨木たちは言葉を失う。

「解ったら、発った胃の剣は諦めてくれ」

「……いえ、やはり納得は出来ません。脱退を認めて貰えるよう、再度守護職上方に嘆願します」

双方の意見は平行線を辿り、守護職屋敷で夜を明かした土方たちは脱退を認めず、対応に出た守護職の御用取次ぎも茨木たちの処遇に困り果てる始末となった。

どうあっても脱退できない。昼を過ぎる頃、茨木、佐野、中村、富川の四名はそう結論に至った。

「武士としての新年を曲げるわけにはいかん」

領いた四名は、近藤と土方の居る部屋に出向くと、自分たちは幕臣として新撰組に残るが、他の隊士たちについては脱退を認めてやって欲しいと譲歩する姿勢を見せた。

「うむう……」

近藤は土方を横目で見る。

「このまま突っぱねても、会津藩に迷惑がかかるだけだ。この四人の他は平隊士だし、条件を飲んでやってもいいんじゃないか？」

「そうか、そうだな。解った。それで手を打とう」

茨木は念書を書いて欲しいと、懷から矢立てと懷紙を取り出し、近藤に差し出した。

「会津藩にも、その旨は伝える。念書は」

「信用していいのではなく、他の者たちを安心させてやりたいのです。どうか、この通り」

佐野も茨木も頭を下げる。

「仕方ないな」

懷紙に隊士脱退の許可を書き、日付と署名の下に印を置くと、近藤は茨木にそれを手渡した。

「ありがとうございます」

守護職に解決の旨を告げた近藤たちと共に屯所へ戻った茨木は、中井たち六人に念書を渡し、すぐに屯所からでるよう促した。

「茨木さんたちを置いては・・・」

「大丈夫。我々のことは気にするな。屯所を出たらそれぞれ国許にでも帰れ、いいな」

わずかばかりの金子を手渡し、渋々と受取った中井らは簡単な身支度をして西本願寺を後にした。

「さて、我々の番だ」

にいつと笑った佐野に、茨木と富川、中村がああ、と頷いた。

夕刻になっても顔を見せない茨木たちを呼びに、諸士取調役兼監察方浪士調役の島田魁が部屋へと足を向けた。

「茨木さん、おりますか？」

中からの返事はない。

「そろそろ夕餉の時間です。見廻りの編成もあるので、ご同行願えませんか」

しかしいつまでたっても人の動く気配がない。

「ん？」

嫌な匂いがツンッと鼻をつく。

「まさか！」

襖を開け放った先に島田が見たものは、切腹して事切れている四人の姿だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7031p/>

幕末奇譚 『志士 狂桜の宴』

2011年11月29日01時48分発行